岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　93

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査 2

中山西遺跡
城山東遺跡
下郷原和田遺跡
下郷原田代遺跡
木谷古墳群
中原古墳群

（本　文）

1995・3

日本道路公団広島建設局津山工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　93

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査 2

中山西遺跡
城山東遺跡
下郷原和田遺跡
下郷原田代遺跡
木谷古墳群
中原古墳群

（本　文）

1995・3

日本道路公団広島建設局津山工事事務所
岡山県教育委員会

序

日本道路公団広島建設局が建設を進めております中国横断自動車道岡山～米子線は、岡山市を起点とし中国山脈を横断し、中国地方最高峰大山の麓に至る総延長124kmの高速道路であります。このうち津山工事事務所は、落合ＪＣＴ～蒜山Ｉ・Ｃ間（米子自動車道）延長30.2kmの建設を担当いたしました。本道は、平成４年12月18日に落合町から米子市までの全線66.7kmが開通し早２ヶ年が経過いたします。現在の交通量は、１日当り約7000台と当初の予想を上廻る方々が利用されております。

本米子自動車道敷地内の埋蔵文化財の発掘調査につきましては、岡山県教育委員会と協議を重ね、昭和62年度川上村内での一次調査を皮切りに平成３年の久世町中原古墳群の発掘調査まで５年間の長期に亘っております。この間蒜山Ｉ・Ｃ内の縄文、弥生、奈良と三時代の遺構の発掘、落合町の中原・木谷古墳群の鉄剣、弥生時代の竪穴住居跡の検出、土師器の発掘等々、後世に残すべき貴重な文化財が数多く発見されております。本書は、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91（1994. 3）に引き続き残りの川上村、久世町に於ける遺跡について詳細に記録されたものであり、先祖の生活や文化様式を時代をこえて現代によみがえらせてくれる貴重な記録であります。また、ここに本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深める資料となることとともに郷土考古学の教育、学術のために広く活用されることを期待するものであります。

最後に、本道路の文化財発掘調査に御尽力いただいた岡山県教育委員会の先生方並びに本書の編集にたずさわれていただいた関係各位に深甚なる謝意を表わすものであります。

平成７年３月

日本道路公団広島建設局
津山工事事務所
所長 飯尾廣美

序

中国横断自動車道は、中国地方を南北に結ぶ山陽と山陰の交通の要となるものです。平成4年12月18日の川上～落合間の供用開始からの交通量の増大は、この道が果たす経済的・文化的波及効果を物語るものです。

岡山県教育委員会では、この中国横断自動車道（川上～落合間）の建設に先立ち、その予定地内に所在する埋蔵文化財の保護・保存について関係各機関と度重なる協議と調整をはかってきましたが、やむなく記録保存を講じなければならない遺跡については昭和62年から発掘調査を実施してきました。

当報告書は、平成6年3月に刊行した「中国横断自動車道建設に伴う発掘調査1」に続くものです。収載した遺跡は、真庭郡久世町及び川上村に所在するものです。このうち、久世町の中原古墳群では、県下で調査例のほとんどない5世紀代の方墳を主体とする古墳群が調査されました。また、同町の木谷古墳群においては、6世紀から7世紀にわたる横穴式石室が9基調査され、中原古墳群とともに山間部における古墳時代の墓制の様相を明らかにする成果を得ることができました。さらに、蒜山高原にある川上村の遺跡では、岩宿器時代の石器・落し穴、縄文時代の竪穴住居・落し穴、弥生時代から古墳時代にかけての玉造関係の集落及び奈良時代の建物が調査されました。その結果、蒜山地域における原始・古代の一端を明らかにすることができました。

この報告書が今後の地域史を明らかにしていく上での一資料として、また文化財保護の一助として活用されることを希望します。

今回の発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、中国横断自動車道（川上～落合間）建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の各先生から種々の御教示と御指導をいただき、また、日本道路公団及び地元関係各位から多大の御協力・御援助を賜りました。ここに、記して厚くお礼申しあげます。

平成7年3月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　言

1　本書は、中国横断自動車道建設に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した報告書の第２分冊である。なお、第１分冊は、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91として刊行している。

2　収載した遺跡は、中山西遺跡・城山東遺跡・下郷原和田遺跡・下郷原田代遺跡No１地点・下郷原田代遺跡No２地点・木谷遺跡・木谷墳群・中原古墳群である。

3　発掘調査および報告書作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な指導と助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

鎌木　義昌	岡山理科大学
水内　昌康	岡山県文化財保護審議会委員
近藤　義郎	岡山大学名誉教授
舩津　昭雄	久世町文化財保護委員
土居　　徹	津山市立北小学校
宗森　英之	岡山県立津山高等学校
白石　　純	岡山理科大学蒜山研究所
安川　豊史	津山市教育委員会

4　各専門分野における鑑定、分析等については、下記の方々および機関から有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記して感謝を表す。

人骨鑑定	池田　次郎（九州国際大学）川中　健二（岡山理科大学）
石材産地分析	藁科　哲夫　東村　武信（京都大学原子炉実験所）
赤色顔料	安田　博幸　森　真由美（武庫川女子大学）
鉛同定	平尾　良光　瀬川冨美子（東京国立文化財研究所）
石材同定	妹尾　　護（吉備国際大学）
〃	白石　　純（岡山理科大学）

5　出土遺物については、岡山大学教授　稲田　孝司から指導と助言を受けた。また、京都府京都文化博物館　山下　秀樹、山田　邦和、細川　康晴の教示を得たことを記して謝意を表す。

6　発掘調査の担当は、以下の通りである。

昭和63年度　下澤　公明　大智　　浩

平成元年度　下澤　公明　山磨　康平　福田　正継　松岡浩太郎　大智　　浩　池上　　博

平成２年度　　山磨　康平　福田　正継　松岡浩太郎　池上　　博

平成３年度　　福田　正継　松岡浩太郎　安井　　悟　氏平　昭則

7　報告書の作成は、下澤　公明　山磨　康平　福田　正継　松岡浩太郎が行なった。

8　報告書で用いる高度値は、海抜高であり、方位は第二章第３図と第三章第１図を除き磁北である。

9　報告書に掲載した第二章第３図と第三章第１図は、建設省国土地理院発行のものを使用した。

10　報告書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うため文化史区分と世紀を併用した。

11　報告書に記載した遺構・遺物の縮尺は共通し、個々に表示した。

12　第一章及び第二章の石器と第一章の遺物は、調査時の取り上げ番号を用いた。

13　本文の執筆は、担当者が分担し文責は第一章、第二章、第三章一節は下澤、第三章第二節は福田、第三節は福田、山磨が行い、文末に記した。また第四章の１は下澤、２は福田が行なった。

14　本書の編集は、下澤が担当した。

15　報告書に関係する遺物・写真・実測図・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

本文目次

第一章　序説……1
　第一節　調査概要……1
　第二節　調査組織……5
　第三節　日誌抄……7
第二章　蒜山地域の調査……9
　第一節　地理的・歴史的環境……9
　　1　地理的環境……9
　　2　歴史的環境……10
　第二節　中山西遺跡の調査……12
　　1　中山西遺跡Ⅰ区……16
　　2　中山西遺跡Ⅱ区……33
　第三節　城山東遺跡の調査……35
　　1　城山東遺跡Ⅰ区……35
　　2　城山東遺跡Ⅱ区……36
　　3　城山東遺跡Ⅲ区……37
　　4　城山東遺跡Ⅳ区……43
　　5　城山東遺跡Ⅴ区……59
　　6　城山東遺跡Ⅵ区……67
　第四節　下郷原和田遺跡の調査……80
　　下郷原和田遺跡……80
　第五節　下郷原田代遺跡の調査……114
　　1　下郷原田代遺跡No.1地点……114
　　2　下郷原田代遺跡No.2地点……125
第三章　久世地域の調査……151
　第一節　地理的・歴史的環境……151
　　1　地理的環境……151
　　2　歴史的環境……152
　第二節　木谷古墳群……154
　　1　古墳時代の遺構と遺物……154

2　弥生時代の遺構と遺物…… 227
第三節　中原古墳群…… 287
1　古墳時代の遺構と遺物…… 287
2　弥生時代の遺構と遺物…… 401
第四章　結　語…… 413
1　蒜山地区の調査…… 413
2　久世地区の調査…… 421
報告書抄録…… 423
第五章　附　編…… 425
中国横断道関係遺跡出土のサヌカイト・黒曜石製遺物の原材産分析
…… 藁科　哲夫　東村　武信……427
中国横断道関係遺跡出土の玉類、玉材石片の産地分析…… 藁科　哲夫　東村　武信……441
下郷原和田遺跡No39住居跡出土須恵器の胎土分析…… 白石　純……461
岡山県中原古墳群出土の人骨付・元定遺跡近世土壙墓出土の埋葬人骨
…… 池田　次郎　川中　健二……463
中原古墳群中の数基の古墳の箱式石棺の石材等に付着の赤色顔料物質の微量化学分析
…… 安田　博幸　森　真由美……475
岡山県久世町中原25号墳から出土した耳環の自然科学的研究
…… 平尾　良光　瀬川富美子……477
中原古墳群の箱式石棺に使用されている石材について…… 白石　純……487

挿図目次

序　　説

第１図　調査遺跡位置図（１／250,000）　2

第２図　蒜山インターチェンジ調査遺跡位置図（１／5,000）……4

第二章　蒜山地域の調査

第３図　路線付近の遺跡分布図（１／75,000）……9

中山西遺跡の調査

第４図　基本土層柱状図（１／60）……12

第５図　西－東土層断面図（１／80）……13

第６図　南－北土層断面図－１（１／80）14

第７図　南－北土層断面図－２（１／80）14

第８図　グリット調査土層断面図（１／100）……14

第９図　土層関連図……15

第10図　花崗岩風化土分布図（１／10,000）……15

第11図　白色粘質土分布図（１／10,000）15

第12図　調査位置図（１／1,000）……17

第13図　調査区設定図……17

第14図　石器・炭化粒分布図（１／200）　18

第15図　石器分布図（１／200）……19

第16図　石器分布図（１／200）……20

第17図　炭化粒分布図（１／200）……21

第18図　出土遺物(1)（１／２）……22

第19図　出土遺物(2)（１／２）……23

第20図　遺構位置図（１／1,000）……24

第21図　No.４－竪穴住居（１／40）……25

第22図　No.４－出土遺物（１／３）……26

第23図　No.５－竪穴住居（１／40）……27

第24図　No.５－出土遺物（１／３・１／１）……28

第25図　No.６－竪穴住居（１／40）・出土遺物（１／３）……29

第26図　No.７－竪穴住居（１／40）・出土遺物（１／３・１／１）……30

第27図　No.１－落し穴（１／40）……31

第28図　No.２－落し穴（１／40）……31

第29図　No.３－落し穴（１／40）……32

第30図　No.８－落し穴（１／40）……32

第31図　No.12－落し穴（１／40）……32

第32図　No.10－落し穴（１／40）……32

第33図　No.11－落し穴（１／40）……32

第34図　中山西遺跡Ⅱ区遺構配置図（１／400）……33

第35図　No.４－落し穴（１／40）……34

第36図　No.１－土壙墓（１／40）……34

第37図　No.２－土壙墓（１／40）……34

第38図　No.３－土壙墓（１／40）……34

城山東遺跡の調査

第39図　城山東遺跡Ⅰ区遺構配置図（１／200）……35

第40図　No.１－落し穴（１／40）……35

第41図　No.２－落し穴（１／40）……35

第42図　城山東遺跡Ⅱ区遺構配置図（１／600）……36

第43図　No.1－土壙（1／40）……36
第44図　No.4－土壙（1／40）……36
第45図　No.5－土壙（1／40）……36
第46図　No.6－落し穴（1／40）……36
第47図　東－西土層断面図（1／80）……37
第48図　南－北土層断面図（1／80）……38
第49図　石器・炭化粒分布図（1／200）　39
第50図　石器分布図（1／150）……40
第51図　製品と接合資料分布図（1／200）……40
第52図　出土遺物（1／2）……41
第53図　溝位置図（1／200）……42
第54図　城山東遺跡Ⅳ区遺構配置図（1／600）……43
第55図　No.10－落し穴（1／40）……44
第56図　No.11－落し穴（1／40）……44
第57図　No.12－落し穴（1／40）……44
第58図　No.13－落し穴（1／40）……45
第59図　No.16－落し穴（1／40）……45
第60図　No.17－落し穴（1／40）……45
第61図　No.18－落し穴（1／40）……45
第62図　No.19－落し穴（1／40）……45
第63図　No.20－落し穴（1／40）……45
第64図　No.1－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／2）……47
第65図　No.2－竪穴住居（1／100）……48
第66図　No.2-竪穴住居土層断面図（1／80）……49
第67図　No.2－出土遺物（1／2・1／4）……49
第68図　No.35－土壙（1／40）・出土遺物（1／4）……50
第69図　No.3－建物（1／80）……51
第70図　No.4－建物（1／80）……52
第71図　No.5－建物（1／80）……53
第72図　No.6－建物（1／80）……54
第73図　No.7－建物（1／80）……55
第74図　No.9－建物（1／80）……56
第75図　炉跡周辺遺構配置図（1／80）…56
第76図　No.25－出土遺物（1／4）……57
第77図　No.14－鍛冶炉（1／30）……57
第78図　No.15－出土遺物（1／2・1／4）……57
第79図　No.33・34－溝（1／80）……58
第80図　No.33－出土遺物（1／4）……58
第81図　No.8－井戸（1／40）……59
第82図　城山東遺跡Ⅴ区遺構配置図（1／500）……60
第83図　No.1・2竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）……61
第84図　No.5－土壙（1／30）・出土遺物（1／4）……62
第85図　No.10－出土遺物（1／4）……62
第86図　No.12－出土遺物（1／4）……62
第87図　No.3－竪穴住居（1／80）……64
第88図　No.3－出土遺物（1／4）……65
第89図　No.4－井戸（1／80）……66
第90図　No.6－出土遺物（1／4）……66
第91図　城山東遺跡Ⅵ区遺構配置図（1／600）……67
第92図　No.2－落し穴（1／40）……68
第93図　No.3－落し穴（1／40）……68
第94図　No.4－落し穴（1／40）……68
第95図　No.5－落し穴（1／40）……68

第96図　No.6－落し穴（1／40）……69
第97図　No.8－落し穴（1／40）……69
第98図　No.9－落し穴（1／40）……69
第99図　No.10－落し穴（1／40）……69
第100図　No.11－落し穴（1／40）……70
第101図　No.12－落し穴（1／40）……70
第102図　No.13－落し穴（1／40）……70
第103図　No.14－落し穴（1／40）……70
第104図　No.15－落し穴（1／40）……71
第105図　No.16－落し穴（1／40）……71
第106図　No.17－落し穴（1／40）……71
第107図　No.20－落し穴（1／40）……71
第108図　No.21－落し穴（1／40）……72
第109図　No.22・23－落し穴（1／40）…72
第110図　No.29－落し穴（1／40）……73
第111図　No.30－落し穴（1／40）……73
第112図　No.7－建物（1／80）……74
第113図　No.18－建物（1／80）……74
第114図　No.19－建物（1／80）……75
第115図　No.24－建物（1／80）……75
第116図　No.26－建物（1／80）……76
第117図　No.27－建物（1／80）……76
第118図　No.28－建物（1／80）……76
第119図　中山西遺跡Ⅰ区出土遺物接合関係図 …… 78

下郷原和田遺跡の調査

第120図　調査位置図（1／4,000）……80
第121図　遺構配置図（1／500）……81
第122図　No.45－柱穴（1／40）・出土遺物（1／4）…… 82
第123図　No.9－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 83
第124図　No.11－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 84
第125図　No.14－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 85
第126図　No.20－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 86
第127図　No.22－1出土遺物（1／4）…87
第128図　No.25－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 87
第129図　No.33・34・36－竪穴住居（1／80）、No.34・36－出土遺物（1／4） 88
第130図　No.37－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 89
第131図　No.40－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 90
第132図　No.42－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／1）…… 91
第133図　No.43－土壙（1／30）・出土遺物（1／4）…… 92
第134図　No.44－土壙（1／40）・出土遺物（1／4・1／1）…… 92
第135図　No.16－溝（1／30）・出土遺物（1／4）…… 93
第136図　No.15・16－出土遺物（1／4）93
第137図　No.3－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／1・1／4）…… 94
第138図　No.5－竪穴住居（1／80）……94
第139図　No.5－出土遺物（1／4）……95
第140図　No.6－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）…… 96
第141図　No.17－竪穴住居（1／80）……96

第142図　No.21・22－1～22－4－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）97
第143図　No.30・32－竪穴住居（1／80）98
第144図　No.31－竪穴住居（1／80）……99
第145図　No.31－出土遺物（1／4）… 100
第146図　No.35－1・2－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）……101
第147図　No.38－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）……102
第148図　No.39－竪穴住居（1／80）… 103
第149図　No.39－出土遺物（1／4・1／1）……104
第150図　No.41－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／3）……105
第151図　No.46－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）……105
第152図　No.47－竪穴住居（1／80）… 106
第153図　No.2－土壙（1／40）…… 106
第154図　No.2－出土遺物（1／4）… 107
第155図　No.7－ピット（1／40）・出土遺物（1／4）……107
第156図　No.48－ピット（1／50）・出土遺物（1／4）……108
第157図　No.49・50・51－落し穴（1／40）……108
第158図　No.52－落し穴（1／40）・出土遺物（1／4）……109
第159図　No.1－出土遺物（1／4・1／1）……110
第160図　No.1・2－出土遺物（1／4）……111
第161図　No.18－出土遺物（1／4）… 111
第162図　包含層出土遺物（1／4）… 112
第163図　排土中出土遺物（1／4）… 112

下郷原田代遺跡の調査

第164図　下郷原田代遺跡No.1・No.2地点位置図（1／5,000）……114
第165図　下郷原田代遺跡No.1地点遺構配置図（1／800）……115
第166図　No.6－落し穴（1／40）…… 115
第167図　No.7－落し穴（1／40）…… 116
第168図　No.8－落し穴（1／40）…… 116
第169図　No.9－落し穴（1／40）…… 116
第170図　No.10－落し穴（1／40）…… 116
第171図　No.11－落し穴（1／40）…… 117
第172図　No.12－落し穴（1／40）…… 117
第173図　No.13－落し穴（1／40）…… 117
第174図　No.1－竪穴住居（1／80）… 118
第175図　No.1－出土遺物（1／4・1／2・1／1）……119
第176図　No.2－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／3・1／1）……120
第177図　No.3－建物（1／80）…… 121
第178図　No.4・5－建物（1／80）… 121
第179図　No.14－建物（1／80）…… 122
第180図　No.15－建物（1／80）…… 122
第181図　No.16－建物（1／80）…… 123
第182図　No.17－建物（1／80）…… 123
第183図　No.18－土壙（1／60）…… 124
第184図　包含層出土遺物（1／3・1／1）……124
第185図　土層柱状図（1／60）…… 125

第186図　グリット設定図（1／1,000）　125
第187図　黒ボコ直下地形測量図（1／500）
……126
第188図　ＡＴ直下地形測量図（1／500）
……126
第189図　石器・炭化粒分布図（1／500）
……127
第190図　石器分布図（1／500）…… 128
第191図　炭化粒分布図（1／500）…… 129
第192図　Ａブロック製品・接合資料分布図
（1／200）……130
第193図　Ａブロック出土遺物（1／2）131
第194図　Ｂブロック製品・接合資料分布図
（1／200）……132
第195図　Ｂブロック出土遺物(1)(1／4)132
第196図　Ｂブロック出土遺物(2)(1／2)133
第197図　Ｃブロック製品分布図（1／200）
……134
第198図　Ｃブロック出土遺物（1／2）134
第199図　遺構配置図（1／500）…… 136
第200図　No.1－落し穴（1／40）…… 137
第201図　No.2－落し穴（1／40）…… 137
第202図　No.3－落し穴（1／40）…… 137
第203図　No.4－落し穴（1／40）…… 137
第204図　No.5－落し穴（1／40）…… 138
第205図　No.6－落し穴（1／40）…… 138
第206図　No.7－落し穴（1／40）…… 138
第207図　No.8－落し穴（1／40）…… 138
第208図　No.9－落し穴（1／40）…… 139
第209図　No.10－落し穴（1／40）…… 139
第210図　No.11－落し穴（1／40）…… 139
第211図　No.12－落し穴（1／40）…… 139
第212図　No.13－落し穴（1／40）…… 140
第213図　No.14－落し穴（1／40）…… 140
第214図　No.15－落し穴（1／40）…… 140
第215図　No.16－落し穴（1／40）…… 140
第216図　No.17－落し穴（1／40）…… 141
第217図　No.18－落し穴（1／40）…… 141
第218図　No.19－落し穴（1／40）…… 141
第219図　No.20－落し穴（1／40）…… 142
第220図　No.21－落し穴（1／40）…… 142
第221図　No.22－落し穴（1／40）…… 142
第222図　No.23－落し穴（1／40）…… 142
第223図　No.24－落し穴（1／40）…… 143
第224図　No.25－落し穴（1／40）…… 143
第225図　No.26－落し穴（1／40）…… 143
第226図　No.27－Ａ・Ｂ－落し穴（1／40）
……143
第227図　No.28－Ａ・Ｂ－落し穴（1／40）
……145
第228図　No.29－落し穴（1／40）…… 145
第229図　No.30－落し穴（1／40）…… 145
第230図　No.31－落し穴（1／40）…… 145
第231図　No.32－落し穴（1／40）…… 146
第232図　No.33－落し穴（1／40）…… 146
第233図　No.34－Ａ・Ｂ－落し穴（1／40）
……146
第234図　No.35－落し穴（1／40）…… 147
第235図　No.36－落し穴（1／40）…… 147
第236図　No.37－落し穴（1／40）…… 147
第237図　No.38－落し穴（1／40）…… 147
第238図　No.39－落し穴（1／40）…… 148
第239図　No.40－落し穴（1／40）…… 148

第１図　路線附近の遺跡分布図（１/75,000）……151

木谷古墳群

第２図　木谷古墳群全体測量図（１／300）……155･156
第３図　木谷古墳群周辺地形測量図（１／2,000）……157
第４図　木谷６号墳周辺地形測量図（１／200）……158
第５図　木谷６号墳石室実測図(1)（１／50）……159･160
第６図　木谷６号墳石室実測図(2)（１／50）……161
第７図　木谷６号墳遺物出土状況（１／40）……162
第８図　木谷６号墳出土遺物(1)（１／４）……163
第９図　木谷６号墳出土遺物(2)（１／４）……164
第10図　木谷６号墳出土遺物(3)（１／４）……165
第11図　木谷６号墳出土遺物(4)（１／４）……166
第12図　木谷６号墳出土遺物(5)（１／４）……168
第13図　木谷６号墳出土遺物(6)（１／３）……169
第14図　木谷６号墳出土遺物(7)（１／３）……170
第15図　木谷６号墳出土遺物(8)（１／２）……171
第16図　木谷７号墳周辺地形測量図（１／200）……172
第17図　木谷７号墳遺物出土状況および石室実測図（１／40）……173
第18図　木谷７号墳出土遺物(1)（１／４）……175
第19図　木谷７号墳出土遺物(2)（１／３）……176
第20図　木谷８号墳調査前周辺地形測量図（１／150）……177
第21図　木谷８号墳調査後周辺地形測量図（１／150）……178
第22図　木谷８号墳石室実測図（１／50）……179･180
第23図　木谷８号墳墳丘断面実測図（１／50）……181･182
第24図　木谷８号墳石室上位平面図（１／50）……183
第25図　木谷８号墳遺物出土状況（１／40）……184
第26図　木谷８号墳出土遺物(1)（１／４）……187
第27図　木谷８号墳出土遺物(2)（１／４）……188
第28図　木谷８号墳出土遺物(3)（１／４）……189
第29図　木谷８号墳出土遺物(4)（１／３）……191
第30図　木谷８号墳出土遺物(5)（１／２）……192
第31図　木谷９号墳周辺地形測量図（１／200）……193

第32図　木谷９号墳石室実測図（１／50）…… 193
第33図　木谷10号墳周辺地形測量図（１／200）…… 194
第34図　木谷10号墳遺物出土状況（１／40）…… 194
第35図　木谷10号墳石室実測図（１／50）…… 196
第36図　木谷10号墳出土遺物(1)（１／４）…… 197
第37図　木谷10号墳出土遺物(2)（１／３）…… 198
第38図　木谷10号墳出土遺物(3)（１／２）…… 199
第39図　木谷11号墳周辺地形測量図（１／200）…… 200
第40図　木谷11号墳石室実測図（１／50）…… 201・202
第41図　木谷11号墳遺物出土状況（１／40）…… 203
第42図　木谷11号墳出土遺物(1)（１／４）…… 206
第43図　木谷11号墳出土遺物(2)（１／４）…… 207
第44図　木谷11号墳出土遺物(3)（１／４）…… 208
第45図　木谷11号墳出土遺物(4)（１／４）…… 209
第46図　木谷11号墳出土遺物(5)（１／４）…… 212
第47図　木谷11号墳出土遺物(6)（１／３）…… 213
第48図　木谷11号墳出土遺物(7)（１／３）…… 214
第49図　木谷11号墳出土遺物(8)（１／２）…… 214
第50図　木谷12号墳周辺地形測量図（１／200）…… 217
第51図　木谷12号墳実測図（１／50）… 217
第52図　木谷13号墳周辺地形測量図（１／200）…… 218
第53図　木谷13号墳実測図（１／50）… 219
第54図　木谷14号墳周辺地形測量図（１／200）…… 220
第55図　木谷14号墳石室実測図（１／50）…… 221
第56図　木谷14号墳遺物出土状況（１／40）…… 222
第57図　木谷14号墳出土遺物(1)（１／４）…… 223
第58図　木谷14号墳出土遺物(2)（１／２）…… 224
第59図　No.66土壙墓（１／30）と出土遺物（１／４）…… 225
第60図　No.８壺棺（１／30）…… 225
第61図　No.８壺棺に使われていた土器（１／４）…… 226
第62図　No.１・３段状遺構（１／60）… 227
第63図　No.１段状遺構出土遺物（１／４）…… 228
第64図　No.２段状遺構（１／60）と出土遺物（１／４）…… 229
第65図　No.４住居址（１／60）…… 230
第66図　No.４住居址出土遺物（１／４）

…… 231
第67図　No. 7 ・39・40住居址(1)（1／60）
…… 232
第68図　No. 7 ・39・40住居址(2)（1／60）
…… 233
第69図　No. 7 ・39・40住居址出土遺物（1／4）…… 234
第70図　No.23・28住居址(1)（1／60）
…… 235
第71図　No.23・28住居址(2)（1／60）
…… 236
第72図　No.23・28住居址出土遺物（1／4）
…… 236
第73図　No.24住居址（1／60）…… 237
第74図　No.24住居址出土遺物（1／4）
…… 237
第75図　No.25住居址（1／60）…… 238
第76図　No.37段状遺構、No.38・74・75住居址(1)（1／60）…… 241
第77図　No.37段状遺構、No.38・74・75住居址(2)（1／60）…… 242
第78図　No.38・74・75住居址出土遺物（1／4）…… 243
第79図　No.37段状遺構出土遺物（1／3）
…… 244
第80図　No.65住居址(1)（1／60）…… 245
第81図　No.65住居址(2)（1／60）…… 246
第82図　No.65住居址出土遺物（1／4）
…… 247
第83図　No.67住居址（1／60）…… 248
第84図　No.67住居址出土遺物(1)（1／4）
…… 249
第85図　No.67住居址出土遺物(2)（1／4）
…… 250
第86図　No.67住居址出土遺物(3)（1／4）
…… 251
第87図　No.68・72住居址(1)（1／60）
…… 252
第88図　No.68・72住居址(2)（1／60）
…… 253
第89図　No.68住居址出土遺物（1／4）
…… 253
第90図　No.78住居址（1／60）…… 255
第91図　No.79住居址（1／60）…… 256
第92図　No.79住居址出土遺物（1／4）
…… 256
第93図　No. 5 土壙（1／30）…… 257
第94図　No. 5 土壙出土遺物（1／4）…257
第95図　No. 6 土壙（1／30）…… 258
第96図　No.29土壙（1／30）…… 259
第97図　No.30土壙（1／30）…… 259
第98図　No.69土壙（1／30）…… 259
第99図　No.70土壙（1／30）…… 259
第100図　No.69土壙出土遺物（1／4）
…… 260
第101図　No.70土壙出土遺物（1／4）
…… 262
第102図　No.71土壙出土遺物（1／4）
…… 262
第103図　No71土壙（1／30）…… 262
第104図　No.73土壙（1／30）…… 262
第105図　No.76土壙（1／30）…… 263
第106図　No.76土壙出土遺物（1／4）…263
第107図　No.77土壙（1／30）…… 263

第108図　No.77土壙出土遺物（1／4）……263
第109図　No.80土壙（1／30）……264
第110図　No.80土壙出土遺物（1／4）……264
第111図　住居址および包含層出土石包丁（1／3）……266
第112図　中近世土壙墓(1)（1／40）…268
第113図　中近世土壙墓(2)（1／40）…269
第114図　中近世土壙墓(3)（1／40）…270
第115図　中近世土壙墓(4)（1／40）…271
第116図　中近世土壙墓(5)（1／40）…272
第117図　中近世土壙墓(6)（1／40）…273
第118図　中近世土壙墓(7)（1／40）…274
第119図　中近世土壙墓(8)（1／40）…275
第120図　中近世土壙墓(9)（1／40）…276
第121図　中近世土壙墓(10)（1／40）…277
第122図　中近世土壙墓周辺出土遺物(1)（1／4）……278
第123図　中近世土壙墓周辺出土遺物(2)（1／4）……279

中原古墳群の調査

第124図　中原古墳群全体図（1／2000）……285・286
第125図　2号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……287
第126図　2号墳主体部実測図(1／50)‥288
第127図　3号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……289
第128図　3号墳葺石側面図（1／150）　290
第129図　3号墳人骨・遺物出土状況（1／40）……290
第130図　3号墳主体部実測図（1／50）……291
第131図　4号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……292
第132図　4号墳主体部実測図（1／50）……293
第133図　5号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……294
第134図　5号墳主体部実測図(1／50)‥295
第135図　7号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……296
第136図　7号墳第1主体部実測図（1／50）……297
第137図　7号墳第2主体部人骨出土状況（1／40）……297
第138図　7号墳第2主体部実測図（1／50）……298
第139図　30号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……299
第140図　30号墳主体部上面集石（1／40）……300
第141図　30号墳主体部実測図（1／50）……301
第142図　8号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……302
第143図　8号墳第1主体部実測図（1／50）……303
第144図　8号墳第2主体部実測図（1／50）……304
第145図　9号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……305

第146図　9号墳主体部実測図（1／50）……306
第147図　10号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……307
第148図　10号墳主体部実測図　（1／50）……308
第149図　11号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……309
第150図　11号墳主体部実測図（1／50）……310
第151図　11号墳出土遺物（1／1）… 311
第152図　12号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……311
第153図　12号墳人骨出土状況（1／40）……312
第154図　12号墳主体部実測図（1／50）……313
第155図　13号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……314
第156図　13号墳主体部実測図（1／50）……315
第157図　2～9号墳出土遺物（1／5）……316
第158図　4～13号墳出土遺物（1／3）……317
第159図　31号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……318
第160図　31号墳主体部実測図（1／50）……319
第161図　32号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……320
第162図　33号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……321
第163図　33号墳遺物出土状況（1／40）……321
第164図　33号墳出土遺物（1／4）… 321
第165図　33号墳主体部実測図（1／50）……322
第166図　16号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……323
第167図　16号墳主体部実測図（1／50）……324
第168図　15号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……325
第169図　15号墳出土遺物（1／4）… 325
第170図　15号墳人骨出土状況（1／40）……325
第171図　15号墳主体部実測図（1／50）……326
第172図　23～29号墳調査前測量図（1／600）……327
第173図　23・24・27～29号墳墳丘測量図（1／300）……328
第174図　23号墳墳丘測量図（1／150）…329
第175図　23号墳墳丘断面図（1／100）…330
第176図　23号墳第1主体部実測図(1)（1／50）……331
第177図　23号墳第1主体部実測図(2)（1／50）……331
第178図　23号墳第1主体部出土遺物(1)（1／1）……332
第179図　23号墳第1主体部出土遺物(2)（1／1）……333
第180図　23号墳第1主体部出土遺物(3)（1

／1）……334
第181図　23号墳第1主体部出土遺物(4)（1／1）……335
第182図　23号墳第1主体部出土遺物(5)（1／2）……335
第183図　23号墳第2主体部実測図(1)（1／50）……335
第184図　23号墳第2主体部実測図(2)（1／50）……337
第185図　23号第3主体部実測図（1／50）……338
第186図　23号墳第3主体部遺物出土状況（1／20）……338
第187図　23号墳第3主体部出土遺物（1／3、1／2）……339
第188図　24号墳墳丘測量図（1／200）‥340
第189図　24号墳墳丘断面図（1／100）‥341
第190図　24号墳第1主体部実測図（1／50）……342
第191図　24号墳第1主体部遺物出土状況（1／20）……343
第192図　24号墳第1主体部出土遺物(1)（1／2）……344
第193図　24号墳第1主体部出土遺物(2)（1／4）……345
第194図　24号墳第1主体部出土遺物(3)（1／3）……345
第195図　24号墳第2主体部実測図(1)（1／50）……345
第196図　24号墳第2主体部実測図(2)（1／50）……345
第197図　24号墳周溝出土遺物（1／4）……346
第198図　27号墳墳丘測量図および墳丘下竪穴住居（1／150）……347
第199図　27号墳墳丘断面図（1／100）‥348
第200図　27号墳主体部実測図（1／50）……348
第201図　28・29号墳墳丘測量図（1／150）……349
第202図　28号墳墳丘測量図および上面石材出土状況（1／150）……350
第203図　28・29号墳墳丘断面図（1／100）……351
第204図　29号墳墳丘断面図（1／80）‥ 351
第205図　28号墳周溝出土遺物（1／4）……352
第206図　28号墳主体部実測図(1)（1／50）……352
第207図　28号墳主体部実測図(2)（1／50）……353
第208図　28号墳墓壙出土遺物(1)（1／4）……354
第209図　28号墳墓壙出土遺物(2)（1／3）……355
第210図　29号墳主体部実測図（1／50）……356
第211図　29号墳主体部遺物出土状況（1／20）……356
第212図　29号墳主体部出土遺物（1／2）……356
第213図　25・26号墳調査前測量図（1／300）……357
第214図　25・26号墳墳丘測量図（1／200）

……358
第215図　25号墳石室実測図（1／60）… 359
第216図　25号墳墳丘断面図（1／80）… 360
第217図　25号墳石室平断面図（1／60）
……361
第218図　25号墳遺物出土状況（1／40）
……362
第219図　25号墳出土遺物(1)（1／4）… 363
第220図　25号墳出土遺物(2)（1／4）… 364
第221図　25号墳出土遺物(3)（1／4）… 365
第222図　25号墳出土遺物(4)（1／3）… 366
第223図　25号墳出土遺物(5)（1／3）… 367
第224図　25号墳出土遺物(6)（1／2）… 367
第225図　26号墳石室実測図（1／60）… 368
第226図　26号墳墳丘断面図（1／80）… 369
第227図　26号墳遺物出土状況（左：土器床、右：礫床）（1／40）……370
第228図　26号墳出土遺物(1)（1／4）… 371
第229図　26号墳出土遺物(2)（1／8）… 372
第230図　26号墳出土遺物(3)（1／3）… 372
第231図　26号墳出土遺物(4)（1／2）… 373
第232図　34・35号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……374
第233図　34号墳主体部実測図（1／50）
……375
第234図　34号墳周溝内出土遺物（1／4）
……376
第235図　35号墳主体部実測図（1／40）
……376
第236図　17号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……377
第237図　17号墳第1主体部実測図（1／50）
……378
第238図　17号墳第2主体部実測図（1／50）
……378
第239図　17号墳第3主体部実測図（1／50）
……379
第240図　17号墳第4主体部実測図（1／30）
……379
第241図　18～20号墳調査前測量図（1／300）……380
第242図　19・20号墳墳丘測量図（1／150）
……381
第243図　19号墳墳丘断面図（1／100）‥382
第244図　19号墳第1主体部実測図(1)（1／50）……383
第245図　19号墳第1主体部実測図(2)（1／50）……383
第246図　19号墳第2主体部実測図（1／50）
……384
第247図　19号墳第2主体部遺物出土状況（1／6）……384
第248図　19号墳第2主体部出土遺物(1)（1／3）……385
第249図　19号墳第2主体部出土遺物(2)（1／2）……385
第250図　20号墳墳丘断面図（1／100）‥386
第251図　20号墳主体部（1／50）…… 386
第252図　21号墳主体部実測図（1／50）
…… 387・388
第253図　21号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……389
第254図　22号墳調査後周辺地形測量図（1／200）……390

第255図　22号墳第１主体部遺物出土状況（１／40）……391
第256図　22号墳第１主体部実測図（１／50）……391
第257図　22号墳第１主体部出土遺物（１／３、１／１）……391
第258図　22号墳第２主体部実測図（１／50）……392
第259図　36号墳調査後周辺地形測量図（１／200）……393
第260図　36号墳遺物出土状況（１／40）……394
第261図　36号墳主体部実測図（１／50）……394
第262図　37号墳調査後周辺地形測量図（１／200）……395
第263図　37号墳玉類出土状況（１／40）……396
第264図　37号墳主体部実測図（１／50）……396
第265図　37号墳出土遺物（１／１）… 397
第266図　38・39号墳調査後周辺地形測量図（１／200）……398
第267図　39号墳遺物出土状況（１／40）……399
第268図　39号墳主体部実測図（１／50）……399
第269図　31～39号墳出土遺物（１／５、１／３）……400
第270図　竪穴住居・段状遺構位置図（１／500）……401
第271図　竪穴住居実測図（１／80）… 402
第272図　竪穴住居出土遺物（１／４）… 402
第273図　段状遺構１（１／80）…… 403
第274図　段状遺構２（１／60）…… 403
第275図　段状遺構１出土遺物（１／４）……403
第276図　40号墓（１／30）…… 404
第277図　40号墓出土遺物（１／４）…… 404
第278図　41号墓（１／30）…… 405
第279図　41号墓出土遺物（１／４）…… 405
第280図　42号墓（１／30）…… 406
第281図　43号石列（１／50）…… 407
第282図　44号墓調査後周辺地形測量図（１／200）……408
第283図　44号墓（１／50）…… 409
第284図　44号墓出土遺物（１／４、１／３）……410
第285図　45号土壙（１／30）…… 410
第286図　46号土壙（１／30）…… 410

第四章　結　　語

第１図　分類表…… 416
第２図　弥生時代後期中頃…… 418
第３図　弥生時代後期後半…… 418
第４図　古墳時代須恵器伴出前…… 419
第５図　古墳時代須恵器伴出以降…… 419

図版目次

中山西遺跡

図版１－１　中山西遺跡Ⅰ区全景(北西から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区土層断面(南から)
図版２－１　中山西遺跡Ⅰ区ＡＴ下石器群(北から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区ＡＴ下石器群(西から)
図版３－１　中山西遺跡Ⅰ区No.12落し穴(西から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区竪穴住居全景(北東から)
図版４－１　中山西遺跡Ⅰ区No.４竪穴住居土層断面(北東から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.４竪穴住居(北東から)
図版５－１　中山西遺跡Ⅰ区No.５竪穴住居土層断面(南から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.５竪穴住居(南から)
図版６－１　中山西遺跡Ⅰ区No.６竪穴住居土層断面(南から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.６竪穴住居(南から)
図版７－１　中山西遺跡Ⅰ区No.７竪穴住居土層断面(東から)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.７竪穴住居(東から)
図版８－１　中山西遺跡Ⅰ区ＡＴ下石器(表・１／２)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区ＡＴ下石器(裏・１／２)
図版９－１　中山西遺跡Ⅰ区ＡＴ下石器(表・１／２)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区ＡＴ下石器(裏・１／２)
図版10－１　中山西遺跡Ⅰ区No.４竪穴住居出遺物(表・１／２)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.４竪穴住居出遺物(裏・１／２)
図版11－１　中山西遺跡Ⅰ区No.５竪穴住居出遺物(表・１／２)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.５竪穴住居出遺物(裏・１／２)
図版12－１　中山西遺跡Ⅰ区No.６竪穴住居出遺物(表・１／２)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.７竪穴住居出遺物(裏・１／２)
図版13－１　中山西遺跡Ⅰ区No.７竪穴住居出遺物(表・１／２)
　　2　中山西遺跡Ⅰ区No.７竪穴住居出遺物(裏・１／２)
図版14－１　中山西遺跡Ⅱ区全景(東から)

城山東遺跡

　　2　城山東遺跡Ⅰ区全景(北から)
図版15－１　城山東遺跡Ⅱ区全景(北から)
　　2　城山東遺跡Ⅲ区ＡＴ下石器群

(西から)
図版16－1　城山東遺跡Ⅲ区ＡＴ下石器(表・1／2)
2　城山東遺跡Ⅲ区ＡＴ下石器(裏・1／2)
図版17　城山東遺跡Ⅳ区全景・検出遺構
図版18－1　城山東遺跡Ⅴ区全景(南西から)
2　城山東遺跡Ⅴ区No.3竪穴住居(東から)
図版19　城山東遺跡Ⅵ区全景・検出遺構
図版20　城山東遺跡Ⅳ・Ⅴ区出土遺物(1／4)
図版21　城山東遺跡Ⅴ区・下郷原和田遺跡出土遺物(1／4)

下郷原和田遺跡
図版22　下郷原和田遺跡全景・検出遺構
図版23　下郷原和田遺跡検出遺構
図版24　下郷原和田遺跡出土遺物(1／4)
図版25　下郷原和田遺跡出土遺物(1／4)
図版26　下郷原和田遺跡・下郷原田代遺跡No.1地点出土遺物(1/4・1/1)

下郷原田代遺跡
図版27　下郷原田代遺跡No.1地点検出遺構
図版28　下郷原田代遺跡No.2地点全景・検出遺構
図版29－1　下郷原田代遺跡No.2地点土層断面(南東から)
2　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器Ａブロック(南西から)
図版30－1　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器Ｂブロック(南から)
2　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器Ｃブロック(南東から)
図版31－1　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(表・1／2)
2　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(裏・1／2)
3　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(表・1／2)
4　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(裏・1／2)
5　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(表裏・1／2)
図版32－1　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(表・1／2)
2　下郷原田代遺跡No.2地点ＡＴ下石器(裏・1／2)

木谷古墳群
図版33－1　木谷古墳群遠景(北から)
2　木谷古墳群全景(南から)
図版34－1　木谷6号墳調査前状況(西から)
2　木谷6号墳石室内遺物出土状況(西から)
図版35－1　木谷6号墳奥壁部分遺物出土状況(西から)
2　木谷6号墳奥壁部分遺物出土状況(西から)
図版36－1　木谷7号墳石室残存状況(北西から)
2　木谷7号墳奥壁部分遺物出土状況(北から)

3　木谷７号墳石室入口部分遺物出土状況（北西から）
図版37－１　木谷８号墳調査前墳丘全景（西から）
2　木谷８号墳墳丘全景（北から）
図版38－１　木谷８号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）
2　木谷８号墳石室入口部分（西から）
3　木谷８号墳天井石上面石組状況（西から）
図版39－１　木谷８号墳石室内奥壁石組状況（西から）
2　木谷８号墳石室内玄室入口部分石組状況（東から）
図版40－１　木谷８号墳石室外側石組状況（北から）
2　木谷９号墳石室残存状況（西から）
図版41－１　木谷10号墳石室内遺物出土状況（西から）
2　木谷10号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）
図版42－１　木谷11号墳石室内遺物出土状況（西から）
2　木谷11号墳石室内遺物出土状況（北から）
図版43－１　木谷11号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）
2　木谷11号墳奥壁部分遺物出土状況（北から）
図版44－１　木谷13号墳全景（西から）
2　木谷13号墳石室石組状況（西から）
図版45－１　木谷14号墳石室全景（北から）
2　木谷14号墳石室内遺物出土状況（北から）
図版46－１　No.66土壙墓遺物出土状況（北から）
2　No.８壺棺検出状況（東から）
図版47－１　No.１・３段状遺構（北から）
2　No.２段状遺構（北から）
3　No.４住居址（北西から）
図版48－１　No.37段状遺構、No.38・74・75住居址（西から）
2　No.65・67・68・72住居址（北から）
図版49－１　No.65住居址（西から）
2　No.67住居址（西から）
図版50－１　No.68住居址炭化物検出状況（北から）
2　No.68・72住居址（北から）
図版51－１　No.５土壙（北から）
2　No.６土壙（北から）
図版52－１　中近世土壙墓群検出状況（西から）
2　中近世土壙墓群検出状況（北から）
図版53－１　No.19土壙墓（南西から）
2　No.26土壙墓（西から）
図版54－１　木谷８号墳墳丘盛土除去作業風景（東から）
2　木谷11号墳周辺作業風景（北から）

図版55　木谷古墳群出土遺物(1)
図版56　木谷古墳群出土遺物(2)
図版57　木谷古墳群出土遺物(3)
図版58　木谷古墳群出土遺物(4)
図版59　木谷古墳群出土遺物(5)
図版60　木谷古墳群出土遺物(6)
図版61　木谷古墳群出土遺物(7)
図版62　木谷古墳群出土遺物(8)
図版63　木谷古墳群出土遺物(9)
図版64　木谷6号墳出土鉄器(1)
図版65－1　木谷6号墳出土鉄器(2)
2　No.37段状遺構出土鉄器
図版66－1　木谷7号墳出土鉄器
2　木谷8号墳出土鉄器(1)
図版67－1　木谷8号墳出土鉄器(2)
2　木谷10号墳出土鉄器
図版68　木谷11号墳出土鉄器(1)
図版69　木谷11号墳出土鉄器(2)
図版70－1　木谷6号墳出土装身具
2　木谷8号墳出土装身具
図版71－1　木谷10号墳出土装身具
2　木谷11号墳出土装身具
3　木谷14号墳出土装身具
図版72　住居址および包含層出土石包丁

中原古墳群

図版73－1　中原中原8号墳より西側に存在する古墳の調査前状況（東から）
2　中原22号墳より東側に存在する古墳の調査前状況（西から）
図版74－1　中原2号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）
2　中原2号墳主体部外遺物出土状況（北東から）
図版75－1　中原2号墳主体部調査後全景（北東から）
2　中原2号墳主体部枕石検出状況（北西から）
図版76－1　中原3号墳丘・葺石検出状況（南から）
2　中原3号墳主体部検出状況（南から）
図版77－1　中原3号墳主体部上面粘土検出状況（北から）
2　中原3号墳主体部粘土除去後天井石検出状況（北から）
3　中原3号墳主体部内人骨・遺物検出状況（北から）
図版78－1　中原3号墳主体部天井石・小口部分検出状況（西から）
2　中原3号墳主体部内人骨・遺物検出状況（西から）
図版79－1　中原3号墳主体部枕石検出状況（西から）
2　中原3号墳主体部西側小口部分（東から）
図版80－1　中原4号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）
2　中原4号墳主体部天井石と遺物出土状況（北東から）
図版81－1　中原4号墳主体部内検出状況（北東から）
2　中原4号墳主体部掘り方検出状況（北東から）

図版82－1　中原5号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）
2　中原5号墳主体部上面集石検出状況（北東から）
図版83－1　中原5号墳主体部天井石上面粘土検出状況（北東から）
2　中原5号墳主体部天井石検出状況（北東から）
3　中原5号墳主体部内検出状況（北東から）
図版84－1　中原7号墳主体部天井石検出状況（北西から）
2　中原7号墳主体部内検出状況（北西から）
図版85－1　中原7号墳第1主体部内検出状況（北東から）
2　中原7号墳第1主体部枕石検出状況（北西から）
図版86－1　中原7号墳墓第2主体部内検出状況（南西から）
2　中原7号墳第2主体部内人骨・枕石検出状況（南東から）
図版87－1　中原30号墳主体部上面集石検出状況（西から）
2　中原30号墳の墳丘と主体部検出状況（東から）
図版88－1　中原30号墳主体部天井石検出状況（南から）
2　中原30号墳主体部内検出状況（北から）
3　中原30号墳主体部掘り方検出状況（西から）
図版89－1　中原8・9号墳の墳丘と主体部検出状況（西から）
2　中原8号墳の墳丘と主体部検出状況（東から）
図版90－1　中原8号墳主体部天井石検出状況（東から）
2　中原8号墳主体部内検出状況（東から）
図版91－1　中原8号墳主体部調査後全景（東から）
2　中原8号墳主体部掘り方検出状況（東から）
図版92－1　中原8号墳第1主体部内検出状況（南から）
2　中原8号墳第1主体部内検出状況（北から）
3　中原8号墳第1主体部枕石検出状況（南から）
図版93－1　中原8号墳第2主体部内検出状況（南から）
2　中原8号墳第2主体部内検出状況（東から）
3　中原8号墳第2主体部内検出状況（西から）
図版94－1　中原8号墳第2主体部西側枕石検出状況（東から）
2　中原8号墳第2主体部東側枕石検出状況（西から）
図版95－1　中原9号墳主体部検出状況（北から）
2　中原9号墳主体部内検出状況（南から）

3　中原中原９号墳主体部内遺物出土状況（西から）
図版96－１　中原10号墳の墳丘と主体部内検出状況（北西から）
2　中原10号墳主体部天井石検出状況（北東から）
図版97－１　中原10号墳主体部内検出状況（北東から）
2　中原10号墳主体部内検出状況（北西から）
3　中原10号墳主体部内検出状況（南東から）
図版98－１　中原10号墳主体部南東側枕石検出状況（北西から）
2　中原10号墳主体部北西側枕石検出状況（南東から）
図版99－１　中原11・12・13号墳の墳丘と主体部検出状況（北東から）
2　中原11号墳主体部天井石検出状況（北から）
図版100－１　中原11号墳主体部内検出状況（北から）
2　中原11号墳主体部内検出状況（東から）
3　中原11号墳主体部内検出状況（西から）
図版101－１　中原11号墳主体部東側枕石検出状況（西から）
2　中原11号墳主体部西側枕石検出状況（東から）
図版102－１　中原12号墳の墳丘と主体部検出状況（西から）
2　中原12号墳主体部天井石検出状況（北から）
図版103－１　中原12号墳主体部内検出状況（北から）
2　中原12号墳主体部内人骨検出状況（南から）
図版104－１　中原12号墳主体部内人骨検出状況（西から）
2　中原12号墳主体部内人骨検出状況（東から）
図版105－１　中原12号墳主体部調査後全景（北から）
2　中原12号墳主体部掘り方検出状況（北から）
図版106－１　中原13号墳の墳丘と主体部検出状況（西から）
2　中原13号墳主体部天井石検出状況（東から）
図版107－１　中原13号墳主体部内検出状況（東から）
2　中原13号墳主体部枕石検出状況（北から）
図版108　中原２～９号墳出土遺物
図版109　中原４～13号墳出土遺物
図版110－１　中原15・31・32・33号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）
2　中原31号墳主体部内検出状況（北西から）
3　中原31号墳主体部内検出状況（南東から）
図版111－１　中原33号墳主体部・周溝検出状況（北東から）

2　中原33号墳天井石除去後内部検出状況（北東から）
図版112－1　中原33号墳主体部内遺物出土状況（南東から）
2　中原33号墳主体部南東側小口部分石組状況（北西から）
図版113－1　中原16号墳の墳丘と主体部検出状況（南から）
2　中原16号墳主体部天井石検出状況（南から）
3　中原16号墳主体部内検出状況（南から）
図版114－1　中原16号墳主体部枕石検出状況（西から）
2　中原16号墳主体部調査後全景（南から）
図版115－1　中原15号墳調査前墳丘全景（東から）
2　中原15号墳の墳丘と主体部内検出状況（南から）
図版116－1　中原15号墳主体部天井石検出状況（北東から）
2　中原15号墳主体部内検出状況（北東から）
図版117－1　中原15号墳主体部内人骨検出状況（北東から）
2　中原15号墳主体部内人骨検出状況（北西から）
図版118－1　中原23・24号墳全景（東から）
2　中原23号墳全景（南東から）
図版119－1　中原23号墳第1～3主体部検出状況（南から）
2　中原23号墳第1～3主体部内検出状況（北から）
図版120－1　中原23号墳第1主体部内検出状況（北から）
2　中原23号墳第1主体部内遺物出土状況（北から）
図版121－1　中原23号墳第2主体部天井石検出状況（南から）
2　中原23号墳第2主体部内検出状況（南から）
図版122－1　中原23号墳第3主体部内出土状況（東から）
2　中原23号墳第1・3主体部内検出遺物
図版123－1　中原24号墳全景（北から）
2　中原23・24号墳間周溝土層断面（東から）
図版124－1　中原24号墳第1・2主体部検出状況（南東から）
2　中原24号墳第2主体部内検出状況（北西から）
図版125－1　中原24号墳第1主体部内人骨・遺物検出状況（南から）
2　中原24号墳第1主体部内人骨・遺物検出状況（南から）
図版126　中原24号墳出土遺物
図版127－1　中原27号墳全景（南から）
2　中原27号墳主体部検出状況（南から）
図版128－1　中原28号墳全景（東から）
2　中原28号墳墓壙・主体部内検出状況（東から）

図版129－1　中原28号墳主体部天井石・遺物検出状況（南から）
2　中原28号墳出土遺物
図版130－1　中原29号墳全景（北から）
2　中原29号墳主体部天井石検出状況（南東から）
図版131－1　中原29号墳主体部内検出状況（西から）
2　中原29号墳主体部内遺物出土状況（西から）
3　中原29号墳出土遺物
図版132－1　中原25号墳調査前全景（西から）
2　中原25・26号墳全景（西から）
図版133－1　中原25号墳全景（南東から）
2　中原25号墳南北墳丘土層断面（西から）
図版134－1　中原25号墳石室天井石検出状況（北から）
2　中原25号墳石室内奥壁（西から）
図版135－1　中原25号墳南側周溝土層断面（西から）
2　中原25号墳石室内遺物出土状況(1)（北から）
3　中原25号墳石室内遺物出土状況(2)（北から）
図版136　中原25号墳出土遺物(1)
図版137　中原25号墳出土遺物(2)
図版138－1　中原26号墳全景（南東から）
2　中原26号墳全景（西から）
図版139－1　中原26号墳土器床検出状況（西から）
2　中原26号墳礫床検出状況（西から）
図版140　中原26号墳出土遺物
図版141－1　中原34号墳の墳丘と主体部検出状況（北東から）
2　中原34号墳周溝内遺物出土状況（北東から）
図版142－1　中原34号墳主体部天井石検出状況（北東から）
2　中原34号墳主体部内検出状況（北東から）
図版143－1　中原35号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）
2　中原35号墳主体部残存状況（北から）
3　中原35号墳墳端部分遺物出土状況（南から）
図版144－1　中原17号墳墳丘・葺石・第3主体部検出状況（南から）
2　中原17号墳第1主体部・第2主体部検出状況（北東から）
図版145－1　中原17号墳第1主体部残存状況（南東から）
2　中原17号墳第2主体部残存状況（南東から）
図版146－1　中原17号墳第3主体部天井石検出状況（南西から）
2　中原17号墳第3主体部内検出状況（南西から）
3　中原17号墳第4主体部検出状況（南西から）

図版147－1　中原19・20号墳全景（北東から）
2　中原19号墳第1主体部内検出状況（南西から）
図版148－1　中原19号墳第2主体部検出状況（南東から）
2　中原19号墳第2主体部内遺物出土状況（北東から）
図版149－1　中原20号墳主体部検出状況（東から）
2　中原19号墳第2主体部出土遺物
図版150－1　中原21号墳の墳丘と主体部検出状況（北から）
2　中原21号墳主体部天井石検出状況（東から）
図版151－1　中原21号墳主体部内検出状況（東から）
2　中原21号墳主体部枕石検出状況（北から）
図版152－1　中原21号墳主体部調査後全景（東から）
2　中原21号墳主体部掘り方検出状況（東から）
図版153－1　中原22号墳墳丘・主体部・葺石検出状況（西から）
2　中原22号墳葺石検出状況（北から）
図版154－1　中原22号墳主体部検出状況（南東から）
2　中原22号墳主体部内検出状況（南東から）
図版155－1　中原22号墳主体部調査後全景（南東から）
2　中原22号墳主体部掘り方検出状況（南東から）
図版156－1　中原22号墳第1主体部内検出状況（北東から）
2　中原22号墳第1主体部内遺物出土状況（南東から）
3　中原22号墳第1主体部枕石検出状況（北西から）
図版157－1　中原22号墳第2主体部内検出状況（北西から）
2　中原22号墳第2主体部南東側枕石検出状況（北西から）
3　中原22号墳第2主体部北西側枕石検出状況（南東から）
図版158－1　中原36号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）
2　中原36号墳主体部天井石検出状況（北東から）
図版159－1　中原36号墳主体部内遺物出土状況(1)（北東から）
2　中原36号墳主体部内遺物出土状況(2)（南西から）
3　中原36号墳主体部内遺物出土状況(3)（南西から）
図版160－1　中原36号墳主体部内検出状況（北東から）
2　中原36号墳主体部枕石検出状況（北西から）
3　中原36号墳主体部掘り方検出状況（北東から）

図版161－1　中原37号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）
2　中原37号墳主体部内検出状況（南西から）
図版162－1　中原37号墳出土遺物
2　中原11号墳出土遺物
3　中原22号墳第1主体部出土遺物
図版163－1　中原38号墳墳丘検出状況（南東から）
2　中原39号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）
図版164－1　中原39号墳主体部内検出状況（南西から）
2　中原39号墳主体部内遺物出土状況（南東から）
図版165　中原31～39号墳出土遺物
図版166－1　中原27号墳墳丘下竪穴住居検出状況（南から）
2　中原24号墳墳丘下段状遺構1検出状況（南から）
図版167－1　中原42号墓検出状況（北から）
2　中原44号墓集石検出状況（南西から）
図版168－1　中原34号墳出土遺物
2　中原33号墳出土遺物
3　中原41号墓出土遺物
4　中原44号墓出土遺物

中国横断自動車道に伴う
発掘調査報告　2

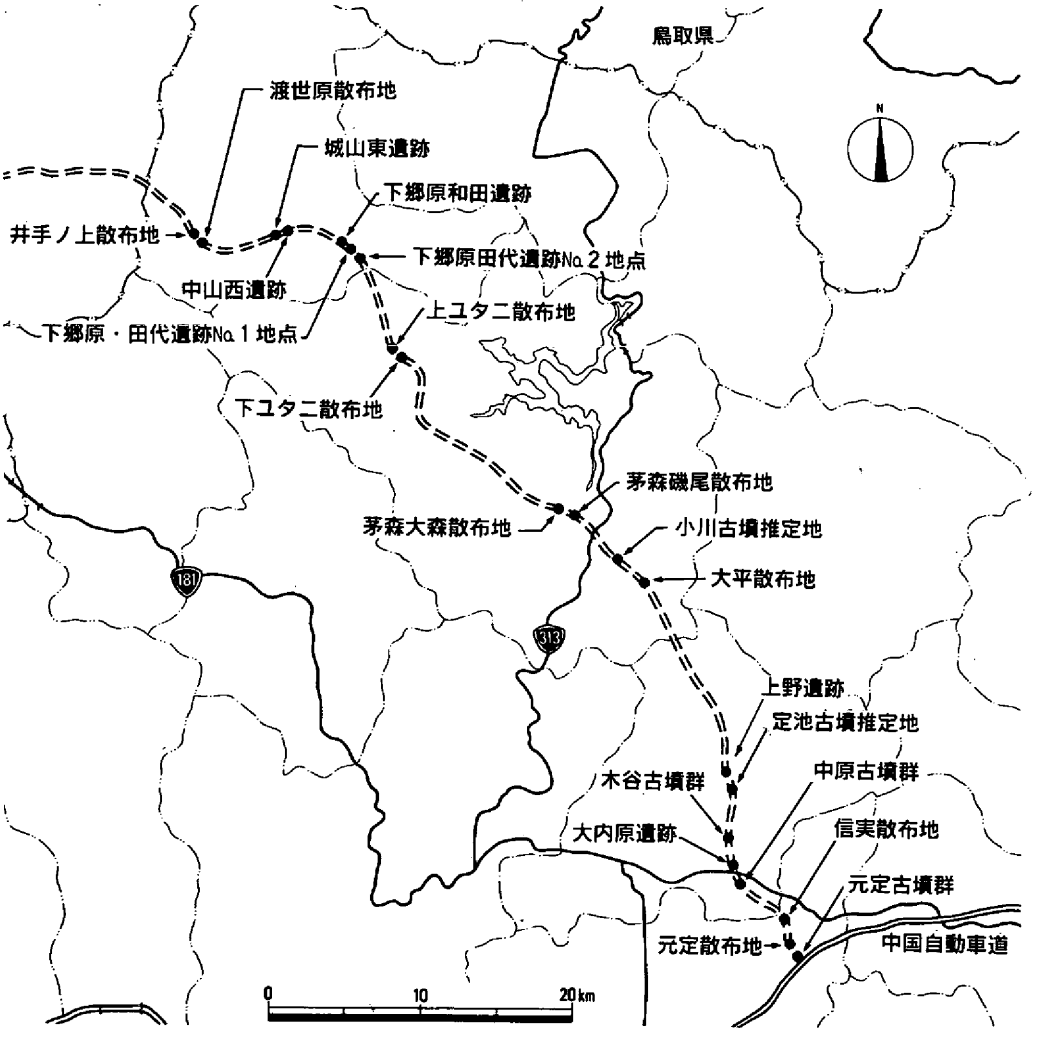
第一章　序　　説

第一節　調査概要

年度・調査担当者・面積一覧表

年　度	遺　跡　名	調査担当者	遺跡番号	面積(㎡)
昭和63年度	真庭郡川上村西茅部中山西遺跡Ⅰ区	下澤公明・大智浩	第3図－2	2,700
	〃　城山東遺跡Ⅰ区	〃	〃　－4	150
	〃　〃　Ⅱ区	〃	〃　－5	620
	〃　〃　Ⅲ区	〃	〃　－3	260
	〃　〃　Ⅳ区	〃	〃　－7	4,400
	〃　〃　Ⅴ区	〃	〃　－6	1,300
昭和64年度	真庭郡川上村西茅部中山西遺跡Ⅱ区	下澤公明・大智浩	第3図－1	700
平成元年度	〃　城山東遺跡Ⅵ区	〃	〃　－8	2,100
	〃　〃　Ⅲ区	〃		400
	〃　下郷原和田遺跡	〃	〃　－9	2,800
	〃　田代遺跡　No.1地点	〃	〃　－10	3,100
	〃　〃　No.2地点	〃	〃　－11	1,850
	真庭郡久世町上野遺跡	山磨康平・池上博		6,731
	〃　木谷古墳群	福田正継・松岡浩太郎	〃　－1	3,100
	〃　中原古墳群	山磨康平・池上博	〃　－3	250
平成2年度	真庭郡久世町木谷古墳群	福田正継・松岡浩太郎	第1図－1	800
	〃　中原古墳群	山磨康平・池上博	〃　－3	10,265
平成3年度	真庭郡久世町中原古墳群	福田正継・松岡浩太郎・安井悟・氏平昭則	第1図－3	4,700

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査は、昭和62年度から一部において実施され、平成３年９月迄行なわれた。発掘調査された遺跡のうち一次調査と上野遺跡・元定古墳群・大内原遺跡については、第１分冊として岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91に収載している。当報告書に報告している遺跡は、蒜山地区と久世地区の上記以外の遺跡（第１図）である。昭和63年度発掘調査は、工事工程上最も工事対象面積の大きい川上インターチェンジ（後に蒜山インターチェンジに名称変更）について、調査員２名で実施することとなった。当インターチェンジ内における遺跡内容の把握状況については、昨年度の一次調査で中山西散布地から縄文時代早期の土器片の検出と城山東散布地の岩宿時代の石器が認められた２か所だけである。このようなこと



第１図　調査遺跡位置図（１/250,000）

から、調査の進行に伴い当インターチェンジ内の遺跡の広がりについても平行して調査（第２図）を実施したのである。この結果、中山西遺跡Ⅱ区と城山東遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅵについて新たに確認することができたのである。

蒜山地区の発掘調査は、当地域の気候条件特に冬期の積雪による調査の継続が極めて困難な条件となるため、１月から３月の調査は中断を余儀なくされたのである。

平成元年度は、調査員６名で蒜山地区と久世地区分について調査を実施した。前者は、昨年度に引き続き２名で残された６遺跡を前述した状況から今年内終了をめざして調査を再開した。しかしながら、下郷原和田遺跡の遺構密集度及び下郷原田代遺跡No.２地点においては、表土下１～２ｍの岩宿時代の遺跡を想定していたが、表土の黒ボコを排土した段階で予想外にも縄文時代早期前後と考えられる落とし穴が多数確認されたのである。このような状況から調査の進捗ははかばかしくなかった。しかし、この地域の火山活動の影響を受けた土層であるため、表土が黒ボコと呼ばれる黒色土が20～30cmほど堆積し、その下層には色調が明黄褐色のローム層が認められる。このことは、明瞭なる土色差をもたらし遺構の埋土が比較的容易に識別することが可能であったため当初の目的を達することができたのである。

久世地区には、上野遺跡に２名が入り、他の２名は湯原地区の一次調査を実施した。前者の調査は、はじめ予想していた遺構密度より濃くかつ遺跡の広がりも予定調査区より大幅に拡大した。この間、中原古墳群の調査開始にあたって公団との協議結果、立ち木の伐採や排土などの条件整備が整い上野遺跡が終了する２月から調査に入ることになった。

湯原地区担当の２名は、対象遺跡が全て一次調査で終了したため、９月から木谷古墳群の調査に入った。木谷古墳群は、当初古墳３基を対象としていたが、調査が終わった時には古墳９・竪穴住居址17・袋状土壙11・近世土壙67など多くの遺構が検出された。したがって、調査期間は、翌年度の平成２年５月までかからざるを得なかったのである。

平成２年度は、調査員４名で久世と落合両地区について調査を実施した。久世地区の調査は、昨年度から継続している中原古墳群と木谷古墳群である。前者は、用地・立ち木の伐採などの条件整備が整えられ調査が本格的に軌道にのったのである。また、元定古墳群については用地上の条件整備が10月末に解決の見通しとなったため、早急な対応が必要となった。当遺跡は、当初段階で古墳１基と認識されていたことから中原古墳群の２名をあて、短期間での処理を計ったのである。しかし、その地形的条件から周辺への確認調査の結果、複数の古墳と弥生時代の遺構が存在していることが明らかとなったのである。これにより、その調査対象面積が7,500㎡と大きくなったことからして翌年度にわたらざるを得なかった。調査が終わったときには、古墳12、竪穴住居22、建物６など予想をうわまわる成果を得ることができた。

平成３年度は、横断道関係の唯一残された中原古墳群について、調査員４名で今年中の終了

をめざして調査を実施した。調査は、担当調査員及び作業員の方々による大変な努力により当初の予定である今年末ではなく、９月末において中国横断道落合インターチェンジ以北の調査を終了したのである。

第２図　赤山インターチェンジ調査位置図（１/5,000）

第二節　調査の組織

発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが、日本道路公団の委託を受け、昭和63年～平成３年にわたって実施した中国横断自動車道建設に伴うものである。

調査体制は、以下の通りである。

昭和63年度

所　長	水田　稔	
総務課長	佐々木　清	
総務主幹	藤本　信康	
主　任	花本　静夫	
〃	岡田　祥司	
調査第一課長	河本　清	
課長補佐	井上　弘	
（第一係長）		
文化財保護主幹	下澤　公明	（調査担当）
主　事	大智　浩	（調査担当）

平成元年度

所　長	長瀬日出男	
総務課長	竹原　成信	
課長補佐	藤本　信康	
（総務係長）		
主　任	岡田　祥司	
〃	平松　郁夫	
〃	片山　淳司	
次　長	河本　清	
（調査第一課長）		
課長補佐	下澤　公明	（調査担当）
（第二係長）		
文化財保護主査	山磨　康平	（調査担当）
〃	福田　正継	（調査担当）
文化財保護主事	大智　浩	（調査担当）
〃	松岡浩太郎	（調査担当）
主　事	池上　博	（調査担当）

平成２年度

所　長	長瀬日出男	
総務課長	竹原　成信	
課長補佐	藤本　信康	
（総務係長）		
主　任	岡田　祥司	
〃	平松　郁夫	
〃	片山　淳司	
次　長	河本　清	
（調査第一課長）		
課長補佐	下澤　公明	
（第二係長）		
文化財保護主査	山磨　康平	（調査担当）
〃	福田　正継	（調査担当）
文化財保護主事	松岡浩太郎	（調査担当）
主　事	池上　博	（調査担当）

平成３年度

所　長	横山　常實	
総務課長	竹原　成信	
課長補佐	小西　親男	
（総務係長）		
主　査	平松　郁夫	

主　任	坂本　英幸	課長補佐	小西　親男
次　長	河本　清	（総務係長）	
調査第三課長	伊藤　晃	主　査	石井　茂
第二係長	福田　正継（調査担当）	次　長	河本　清
文化財保護主事	松岡浩太郎（調査担当）	平成５年度	
〃	安井　悟（調査担当）	所　長	横山　常實
主　事	氏平　昭則（調査担当）	総務課長	北原　求
平成４年度		課長補佐	小西　親男
所　長	横山　常實	（総務係長）	
総務課長	北原　求	主　査	石井　茂
文化財保護参事	葛原　克人	〃	石井　善晴
調査第二課長	正岡　睦夫	次　長	葛原　克人
課長補佐	山磨　康平（報告書担当）	調査第二課長	伊藤　晃
（第三係長）		文化財保護主幹	下澤　公明（報告書担当）

発掘調査を行なうにあたり、日本道路公団米子工事事務所、同津山工事事務所から種々のご援助をいただき、厚くお礼申し上げる。

また、発掘調査及び報告書発行にいたるまでにおいては、下記の方々のお世話をいただいた。記して、お礼の意を表す。

小椋房郎　田辺悟　田辺太地郎　花本茂　池田良夫　宮本繁夫　内藤広巳　立田豊明　小松薫明　真田泰生　池田正親　入沢泰良　小谷勉　角田義五　富田尚　富田文男　小野君夫　大西政治　浜子薫　樋口清　石原豊　水島隆司　西畝和吉　妹島平治　三村晴男　笠原啓　仁木康治　谷本彰良　森本茂樹　樋口宏志　笠原敏治　西岡正　村岡慶一　金田彦太郎　新後卓見　中室敏之　大倉数男　二宗武正　山崎正夫　横山貞雄　横山俊雄　中野順三　稲岡昭一　猪頭浩　松本正美　横山太郎　渡辺重定　長尾志郎　浜竹久世　亀山小百合　進美枝　長尾愛子　長尾千恵子　長尾末子　小椋孝江　藤原千世　亀田重子　田文千里　角田正子　筒井さつこ　福原民子　大西敏子　樋口梅子　吉田智恵子　小林等子　和田とみ恵　和田富子　滝本幸子　滝本満子　西田正子　牧幸子　池田美栄子　植木恵利子　中江智子　菱川サユリ　九城嘉子　雄龍陸津野　三村豊子　柴田節子　木村房江　高見公香　入江元江　中尾喜美子　広政マスヱ　三村悦子

遺物実測－阿部典子　東秀巳　尾上元規、遺構・遺物トレース－田中淑子、遺物写真－江尻泰幸

第三節　調査日誌抄

昭和63年度

4月1日～4月30日

中山西遺跡Ⅰ区から調査開始。

5月2日～5月31日

縄文時代早期竪穴住居跡掘り下げ。岩宿時代の遺物確認のためグリット掘り下げ。

6月1日～6月30日

竪穴住居跡の遺物取り上げと実測。

7月1日～7月30日

岩宿時代の遺物の検出と実測。

8月1日～8月31日

岩宿時代の遺物の取り上げ。

中山西遺跡及び城山東遺跡の範囲確認のグリット掘り下げ。

9月1日～9月30日

中山西遺跡Ⅰ区、城山東遺跡Ⅰ区・Ⅱ区調査終了。城山東遺跡Ⅳ区表土排土。

10月1日～10月31日

城山東遺跡Ⅳ区の遺構検出と実測。同Ⅴ区表土排土。

11月1日～11月30日

Ⅳ区実測とⅤ区遺構検出と掘り下げ。

12月1日～12月28日

Ⅳ区とⅤ区の遺構実測。

平成元年度

4月1日～4月28日

城山東遺跡Ⅲ区調査再開。中山西遺跡Ⅱ区調査終了。上野遺跡調査開始。

5月1日～5月31日

城山東遺跡調査終了。下郷原和田遺跡調査開始。上野遺跡の遺構掘り下げと実測。

6月1日～6月30日

下郷原和田遺跡の遺構掘り下げ実測。上野遺跡の遺構掘り下げ。

7月1日～7月31日

下郷原和田遺跡の遺構掘り下げ実測。下郷原田代遺跡No.1地点調査開始。上野遺跡の遺構掘り下げ実測。

8月1日～8月31日

下郷原和田遺跡調査終了。下郷原田代遺跡No.1地点の遺構掘り下げ実測。同No.2地点の調査開始。上野遺跡遺構掘り下げ実測。

9月1日～9月30日

下郷原田代遺跡No.1地点調査終了。同No.2地点の遺構掘り下げ実測。上野遺跡の遺構掘り下げ実測。木谷古墳群調査開始。

10月2日～10月31日

No.2地点の遺物検出。城山東遺跡Ⅵ区調査開始－終了。上野遺跡遺構掘り下げ実測。木谷8号墳の排土。

11月1日～11月30日

No.2地点の遺物検出及び実測、取り上げ。上野遺跡遺構検出と掘り下げ実測。木谷8号の実測。

12月1日～12月27日

No.2地点調査終了。上野遺跡の遺構掘り下げ実測。木谷7号墳、近世墓の掘り下げ。

平成2年1月8日～1月31日

上野遺跡遺構掘り下げ実測。木谷７・10・11号の掘り下げ実測と中近世墓の掘り下げ。

２月１日～２月28日

上野遺跡１・２号の実測。木谷７・10・11号墳と中近世墓の実測掘り下げ。中原古墳群の調査開始。

３月１日～３月31日

木谷10・11号の実測と墳丘下の住居址掘り下げ。中原25・18号墳の掘り下げ実測。

平成２年度

４月２日～４月27日

木谷６・13・14号墳の石室掘り下げ。中原19・20・25・26号墳の掘り下げ。

５月１日～５月31日

木谷６・13・14号墳の実測と中近世墓の掘り下げ実測。中原19・20・25・26号墳の掘り下げ実測。

６月１日～６月30日

中原24・25・26号墳の掘り下げ実測。

７月２日～７月31日

中原１・２・24・25号墳の掘り下げ実測。

８月１日～８月31日

中原１・２・23・24号墳主体部検出と実測。

９月１日～９月29日

中原３～７・23・24・Ⅰ・Ａ号墳主体部検出と実測。

10月１日～10月31日

中原３～５・Ｂ・Ｃ号墳主体部検出と実測。

11月１日～11月30日

中原６・７号墳主体部検出と実測。元定古墳群調査開始。

12月１日～12月27日

中原Ｄ号墳主体部検出と実測。元定２・３号墳掘り下げ。

１月７日～１月31日

中原Ｅ・Ｋ号墳主体部検出と実測。元定２・３・５・６号墳主体部検出。

２月１日～２月28日

中原Ｇ・Ｈ号墳主体部検出と実測。元定古墳群下の住居跡の検出と掘り下げ。

３月１日～３月31日

中原Ｍ・Ｎ号墳主体部検出と実測。

平成３年度

４月１日～４月30日

中原17・21・22・Ｌ・Ｏ号墳の測量。元定古墳群墳丘下の遺構掘り下げ実測。

５月１日～５月31日

中原15・17・21・22・Ｌ・Ｏ号墳の主体部検出と掘り下げ。

６月１日～６月29日

中原８～13・15～17・21・22・Ｐ・Ｓ号墳の主体部検出と掘り下げ。

７月１日～７月31日

中原10～13・15～17・22・Ｐ～Ｒ・Ｔ・Ｕ号墳の主体部検出と掘り下げ。

８月１日～８月31日

中原８～13・11～13・15～17・21・22・Ｑ・Ｒ号墳の主体部検出と掘り下げ。

９月１日～９月30日

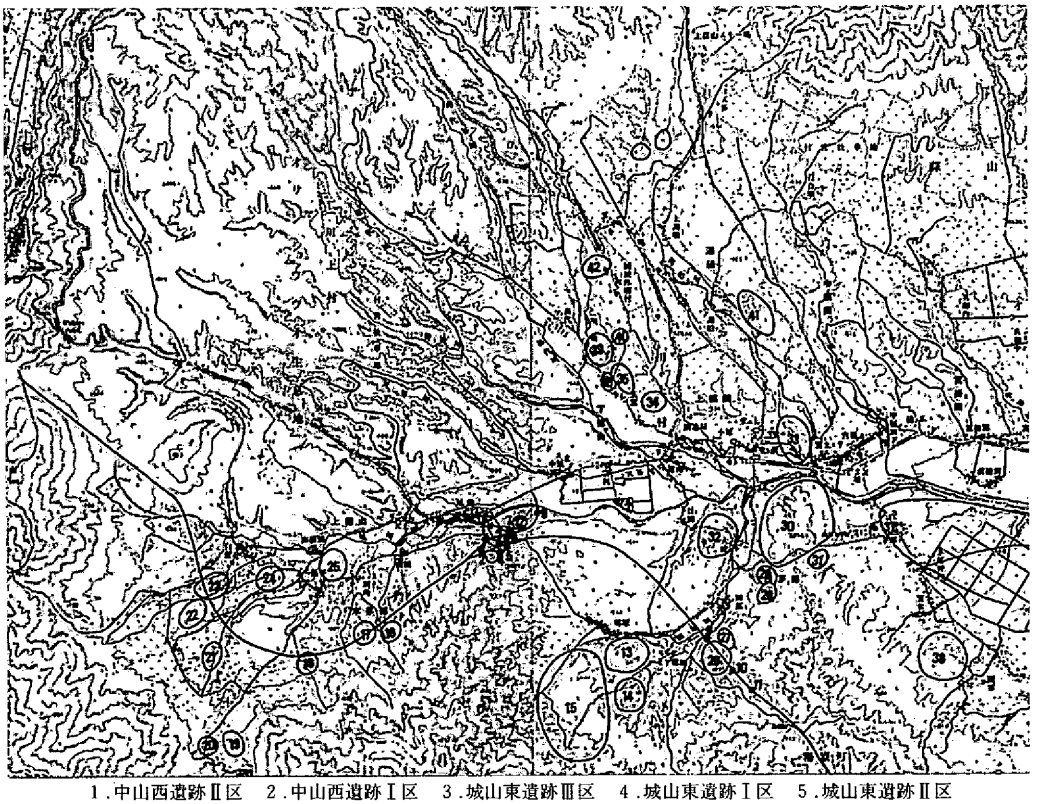
８号の主体部実測。

第二章　蒜山地域の調査

第一節　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

蒜山原あるいは蒜山高原と呼ばれているのは、行政的には八束村と川上村にまたがって広がっている。位置的には、岡山県の北部にあたり、北は鳥取県日野郡に接している。その県境をなす下蒜山（1101ｍ）・中蒜山（1122ｍ）・上蒜山（1200ｍ）・皆ケ山（1559ｍ）・擬宝珠



1.中山西遺跡Ⅱ区　2.中山西遺跡Ⅰ区　3.城山東遺跡Ⅲ区　4.城山東遺跡Ⅰ区　5.城山東遺跡Ⅱ区
6.城山東遺跡Ⅴ区　7.城山東遺跡Ⅳ区　8.城山東遺跡Ⅵ区　9.下郷原和田遺跡
10.下郷原田代遺跡No.1地点　11.下郷原田代遺跡No.2地点　12.散布地　13.散布地　15.大谷遺跡
16.製鉄遺跡　17.製鉄遺跡　18.散布地　19.散布地　20.製鉄遺跡　21～26.散布地　27.山根田古墳群
28.祭祀跡　29.エゾウ谷古墳群　30.石済山古墳群　31.バンノ木古墳群　32.野田原遺跡
33.頓崎古墳群　34～35.散布地　36.堂坂古墳群　37～39.散布地　40.正富狐塚古墳群
41～42.散布地　43～44.散布地　45.平林古墳群　46.栃木の古墳　47.三本松古墳

第3図　路線附近の遺跡分布図（1/75,000）

山（1110m）と東南東－西北西に連なっている。これらの蒜山山地は、火山噴出物により構成され、これら先きに伯耆富士とよばれる大山（1729m）がそびえ立っている。この蒜山山地と中国山地に挟まれた盆地が広義の蒜山原と呼ばれる。

現在における交通は、国道313号線を勝山町・湯原町・中和村を通って入る山陽側からと、八束村上長田から犬挟峠を越えて関金町から倉吉市と川上村徳山から県道江府・中和・用瀬線があるが、前者が山陰側への主要なルートになっているのである。山陰側と山陽側との距離関係を見てみると、前者の主要な地へ出るには20kmを越えないが、後者は何れも20kmを越えるのであり、かつまた比較的交通の困難を極める箇所が少なくないことからも、日常生活の往来は彼の地との関係が太いのである。

夏期は、岡山南部との年平均気温が4度低く、この高原性から比較的過ごし易い地である。しかし、冬期は季節風の影響にともない積雪が多く、その根雪期間は約90日と長いのである。したがって、この期においては他地域との交通が疎とならざるを得ず、さらに戸外での農作業などがほとんどできなくなるのである。

このような蒜山盆地の南西部を中国横断自動車道が走るのである。横断道は、湯原町境である鳥居峠をトンネルで抜けるとこの地に入り、正面に大山を望み蒜山盆地を東流する旭川の支流である田部川を跨ぎ旭川の右岸に沿い蒜山インターチェンジに達する。ここが蒜山原の入口になる。インターチェンジからは、北東よりに蒜山三座が間近に望むことができる。ここからさらに西に行くと別所そして白髪を通り三平山のトンネルに入ると岡山県を抜けるのである。

2　歴史的環境

蒜山盆地は、周辺に存在する火山群からもたらされる火山灰による影響が著しく、また広域火山灰である姶良丹沢火山灰（以降、ＡＴとする）が比較的良好な状態での堆積が広範囲に認められるのである。このことは、ＡＴ下層には大山下部火山灰層が、それよりも上層は大山上部火山灰層が堆積して安定した層序を形成させている。蒜山の地では、このＡＴ直下から岩宿時代の遺物が出土している。この時期の遺跡は、岡山理科大学蒜山研究所の堀川純氏の精力的活動においてもたらされた成果により、今回調査地点を含め14か所[(1)]にのぼっている。このうち、岡山理科大学により調査されている戸谷遺跡第５地点では、ＡＴ火山灰層下に堆積する第Ⅹ層から縦長ナイフ形石器、掻器、削器、局部磨製石斧などが出土している。岩宿時代の終末期に近いとされるソフトローム層の上面あるいは漸移層からは、牧野東遺跡[(2)]や下郷原田代遺跡No１地点からは細石刃や石核が出土している。

縄文時代に入ると遺跡の数は、40か所[(3)]確認されている。時期的は、早期・前期・後期の遺物が多く採取されている。これら縄文時代の土器の採取された地点は、蒜山盆地に広く分布する

傾向を示し、前段階と比してより安定した生活域を形成していたものと思考されるのである。しかし、中期の土器がほとんど認められないことが注意される。この段階、特に前葉から中葉にかけては、かなりの広い分布圏の形成が認められるのに対し前述した如く、この時期の希薄から考慮されるのである。何れにしても、この段階に何らかの自然環境の関与を考えるのが妥当ではないかと推測されるのである。

弥生時代は、集落としてまとまった調査は、今回の横断道関係の4遺跡のうち城山東遺跡Ⅳ区・下郷原和田遺跡・下郷原田代遺跡No1地点である。この他に、この時期と考える遺物が何点か採取、報告[4]されている。このような少ない調査例ながら、県南部や中北部に見られるような大規模な集落を形成するというような傾向はみられない。

古墳時代は、1952年に近藤義郎氏によって四つ塚古墳群の調査が実施されている。この調査の報告は、「蒜山原[5]」によってなされている。その報告文中には、古墳群の項として蒜山地域の古墳の分布調査を実施した結果をすぐれた分析とともに論述されている。このようなことからして、これ以上の多言を必要としないであろう。

古代に入ると、和銅6年備前国から分かれて美作国が分国する。律令下のこの地域は、真島郡・大庭郡に属し「和名抄」に見える布施郷に比定されている。この期に関わると考えられるのが、城山東遺跡Ⅳ区であり建物が検出されている。これ以外にこの期の内容を知る手掛かりはあまり見出されていない。中世は、上長田と下長田をふくむ一帯は布施荘と考えられ、南北朝期に入ると粟住城・波作利城などが築かれるのである。

註

（1）堀川　純「岡山県八束村牧野遺跡第5地点及び東遺跡採集の旧石器」蒜山研究所研究報告第10号　岡山理科大学　昭和59年12月

（2）註1に同じ
堀川　純「岡山県八束村上長田牧野遺跡第1・4地点採集の旧石器」蒜山研究所研究報告第9号　岡山理科大学　昭和59年1月

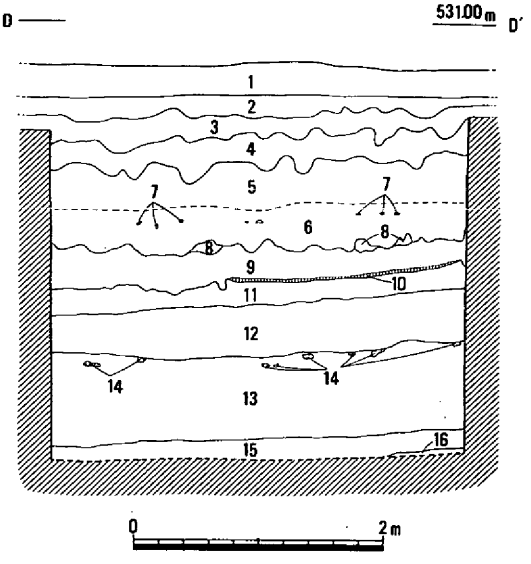
（3）堀川　純「蒜山原採集の縄文時代遺物」蒜山研究所研究報告第6号　岡山理科大学　昭和56年3月
堀川　純「蒜山原採集の縄文時代遺物」蒜山研究所研究報告第7号　岡山理科大学　昭和57年3月

（4）近藤義郎　蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）　岡山県八束村　1992年3月

（5）近藤義郎　蒜山原…その考古学的調査…第1回　昭和29年2月

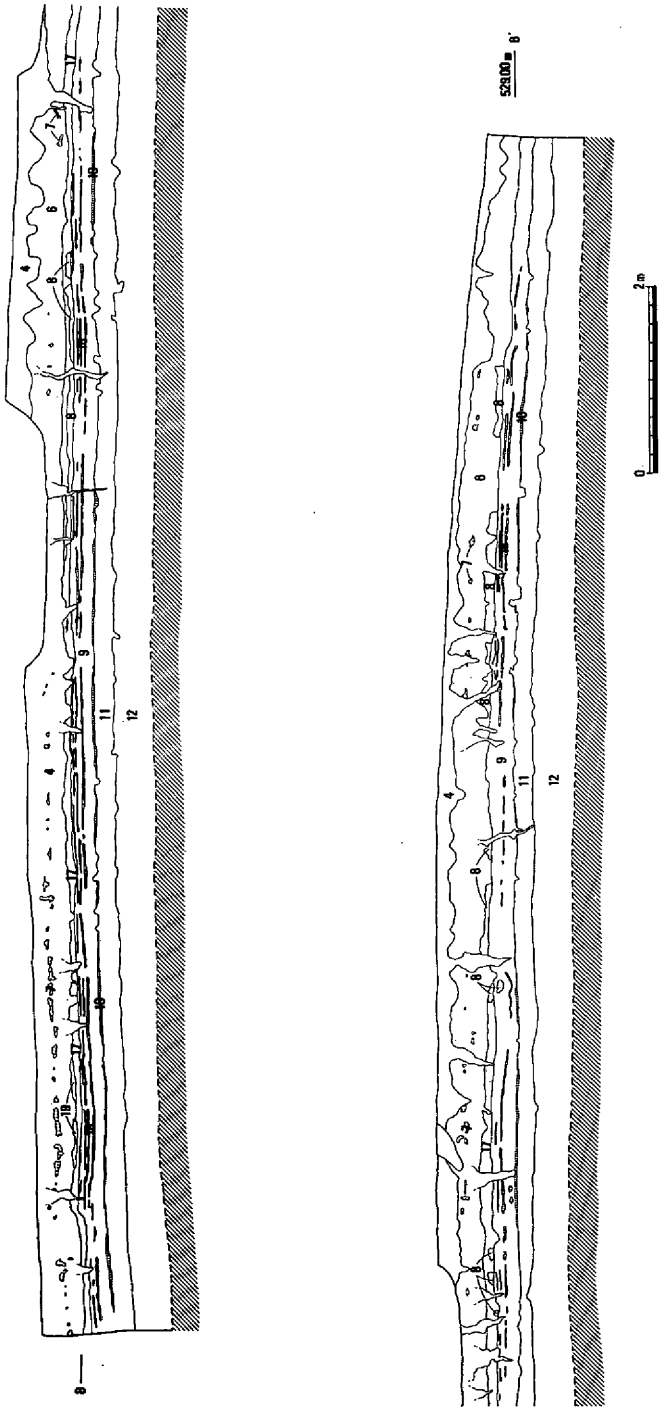
第二節　中山西遺跡の調査

遺跡の個々の説明に入る前に、基本となるこの地区での土層関係を他地点とともに述べておくことにする。第４図は、中山西遺跡Ⅰ区における基本土層図である。耕作土とされるのは、県北一帯に分布する黒ボコと呼ばれる黒色土である。黒ボコは、耕作の影響を受けない部分の２層からなる。この層は、第８図のように低い平坦地及び谷部において厚く堆積していることが観察されるのである。第３層は、漸移層としたもので、黒ボコが脱色気味に薄くなるもので第４層のソフトロームに近くなるに従い、その下層の色調にちかくなる。第４層は、ソフトローム層であり前述したようにこの面において、遺構の検出が可能になる。遺構検出については、上層の漸移層でも可能と考えられるが、やはりプラン等の検出については明確化にかけるのである。第５層は、明黄褐色硬質火山灰土で、一般的にハードロームとされているものである。この層中には、オドリ層に含まれている軽石が認められている。第６層は、淡灰褐色火山灰土で粘質を有し、白・黄・灰の三色の３～８㎜大の軽石を多く含む層で、オドリと呼ばれているものである。第７・８層は、ブロック状ではあるが灰色火山灰土である。第９層は、淡茶灰色火山灰土でありＡＴ直上に堆積している。第10層は、５㎜前後の軽石で薄く堆積するが、均一に認められていない。第11層は、ＡＴであり平均的な堆積の厚さは20㎝を超えることはない。第12～16層は、色調が異なる火山灰土であるが、いずれも粘質をもち緻密な火山灰土である。なお、第14層は、灰色火山灰土で第７層と同じ内容を示すものであり下の下ホーキとされるものである。

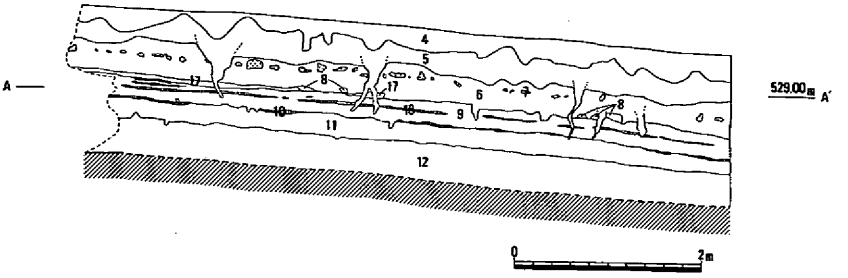


1 黒ボコ（耕作土）
2 黒ボコ
3 漸移層
4 明黄褐色軟質火山灰土（ソフトローム）
5 明黄褐色硬質火山灰土（ハードローム・オドリ層の軽石含）
6 淡灰褐色火山灰土（やや粘質をもつ、白・黄・灰の３～４㎝と３～８㎜の軽石を多く含む、オドリ層）
7 灰色（微粒）火山灰土（上のホーキ）
8 ７層と同じ
9 淡茶灰色（細粒）火山灰土
10 ５㎜前後の軽石
11 アイラ（ＡＴ）
12 淡黄赤色粘質火山灰土
13 淡暗黄赤色粘質火山灰土
14 ７層と同じ（下の下のホーキ）
15 明赤褐色粘質火山灰土
16 淡明黄褐色粘質火山灰土

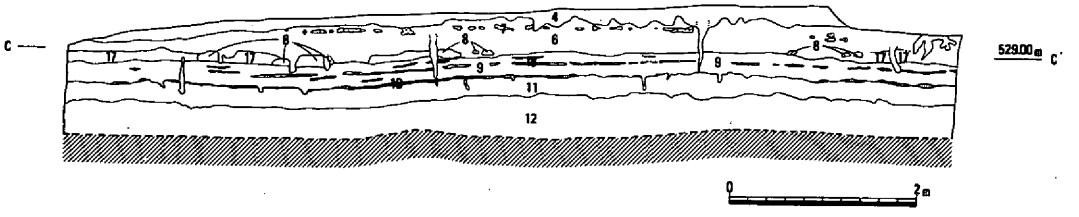
第４図　基本土層柱状図（1/60）



第５図　西－東土層断面図（1/80）



第６図　南－北土層断面図－１（1/80）

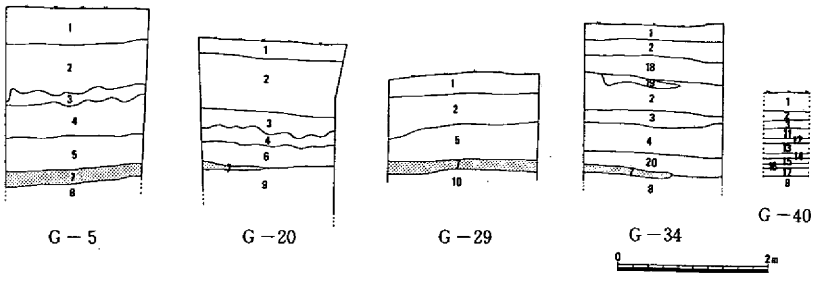


第７図　南－北土層断面図－２（1/80）

大山火山灰層においては、ＡＴ層から上層に堆積しているのを大山上部火山灰とし、それ以下の層を大山中部火山灰あるいは大山下部火山灰[1]と呼んでいる。

遺物が認められるのは、12層で、その出土深度は12層直下からなかほどまでであり下位については検出をみていないのである。

第５・６図は、調査区の東－西と南－北方向の土層断面である。この断面においては、オドリや下のホーキなどが安定した形での堆積が認められている。このことは、先の第４図の作図

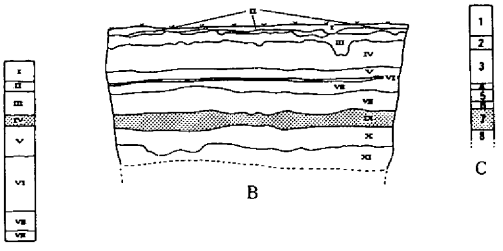


1 黒ボコ（耕作土）　2 黒ボコ　3 漸移層　4 明黄褐色硬質火郎灰土（ハードローム）
5 下のホーキ　6 オドリ　7 ＡＴ　8 淡黄色粘質火山灰土　9 石灰粘質火山灰土
10 花崗岩風化土を多く含む　11 ソフトローム　12 黄褐色粘質土（花崗岩粒含む）　13 淡褐色粘質土
14 明褐色粘質土　15 14に花崗岩粒を多く含む　16 褐色粘質土（花崗岩粒を多く含む）
17 淡褐色粘質土　18 黒ボコ（ロームブロック混入）　19 ロームブロック　20 淡明黄褐色火山灰土

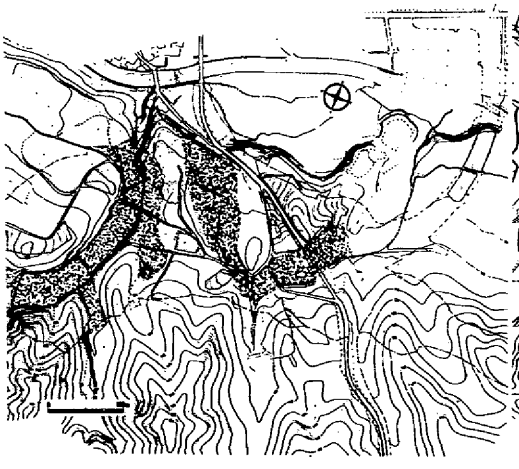
第８図　グリッド調査土層断面図（1/100）

地点から北に向かって下がりはじめている部分であることから、その影響を受けたものと思考されるのである。

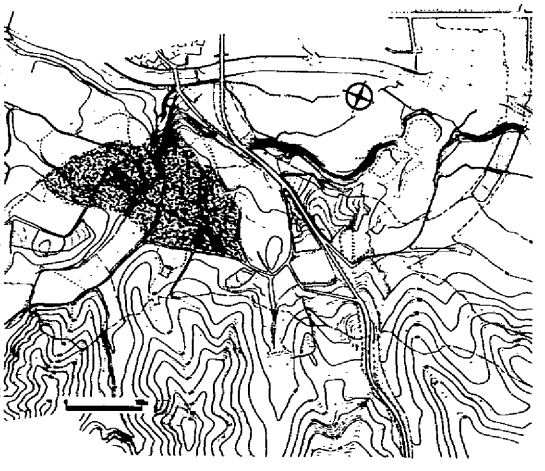
次に、この土層堆積については先に調査概要で述べた如く蒜山インターチェンジ内において、55か所にわたって実施したグリット調査で得られた結果を合わせて、この地の古地形を復元して行きたい。第８図の土層断面は、先に述べた丘陵頂部付近の様子とはかなり異なっていることが観察されるのである。この土層では、Ｇ－40を除いて何れもＡＴが認められている。このうち、Ｇ－34の２層から上に堆積するものは造成土である。したがって、ＡＴから上の堆積層は、基本的には変化が無いことが言えよう。ここで明瞭なる変化が認められるのは、ＡＴ直下の堆積層である。丘陵頂部付近におけるＡＴ直下には、淡黄赤色粘質火山灰土があり、この層とほぼ同じと考えられるのがＧ－８・34で認められている淡黄色粘質土である以外は、異なる層の堆積が認められるのである。特に、Ｇ－20とＧ－40においては、その直下に９層の白灰色粘質火山灰土が認められ、先の地点では全く認められていない層である。この９層については、現地での調査段階で若干の粘質を有するもので火山灰に起因するものとは考えていなかったのである。しかし、そのサンプルを整理時に顕微鏡観察の結果、多量の火山ガラスが含まれていることが確認され、それが火山灰による堆積であることが判断されたのである。この白灰色粘質火山灰土は、広島県の三瓶火山からもたらされた飯南火山灰（Ｉ１）または、池田軽石層（Ｉ２）とされるもの[2]と推測される。



第９図　土層関連図



第10図　花崗岩風化土分布図（1/10,000）



第11図　白色粘質土分布図（1/10,000）

蒜山インターチェンジにおけるこのような堆積と他の調査地点との土層関係は、どのようなものであろうか。この関係を示したのが第９図であり、Ａ－神郷町早風Ａ地点[3]・Ｂ－八束村戸谷遺跡[4]・Ｃ－上斎原村恩原遺跡[5]のものである。Ｂの戸谷遺跡が直線距離で７kmほどで最も近く、同じ蒜山原地内にある。当遺跡においては、ＡＴ直下に石器の包含するＸ層が存在し、その下層にこの層が認められている。一方、蒜山インターチェンジ内においては、前述した如くその直下に認められている。このことは、地形ないしその後の自然条件の影響によるものかどうかについて判断できない。また、Ｃ－恩原遺跡の８層の礫混じり粘質土が12層と近い内容を示す可能性が考えられる。

次に、丘陵頂部と異なる土層は、花崗岩の風化土が含まれているものが観察されることである。この層は、Ｇ－29とＧ－40において認められ、Ｇ－29ではＡＴ直下に存在する。その所在は、第２図の中山西遺跡Ⅰ区の谷を挟んで対面する丘陵が花崗岩であることが確認されている。

１　中山西遺跡Ⅰ区

蒜山インターチェンジ内において最も西よりに位置し、標高530ｍ前後を測る比較的平坦な丘陵部を中心としている。調査は、この丘陵頂部付近を中心とし、南西側と北東側に下がって行く地形に沿うかたちで長さ100ｍと幅30ｍほどの調査区を設定した。調査区全域は、20～30cmの黒ボコが堆積しているため、この層を排土し明黄褐色軟質火山灰土（ソフトローム）面の露出を行い遺構の検出をおこなった。この段階では、縄文時代と考えられる落ち込みが丘陵頂部近くで認められた。

蒜山地域は、遺跡のありかたからＡＴ下層における遺物の有無を確認する必要があったのである。黒ボコを排土した調査区について17か所に２ｍ×２ｍのグリットを設定し、掘り下げた。その結果、ＡＴの厚さは、頂部付近の遺存が18cm前後で斜面部に移行するに従い堆積が薄くなって行く。遺物は、頂部付近に集中して分布していることが確認されたことから、ＡＴ下層の調査はこの丘陵頂部周辺を中心として改めて設定（第13図）したのである。

岩宿時代の遺構・遺物

ブロック

環状ブロック（第14図）

ＡＴ直下の12層淡黄赤色粘質火山灰土中に認められていたのである。この遺構は、調査中において認識されていなかったが、整理作業での作図の段階にいたりその内容が明らかとなったのである。この環状ブロックには、石器と炭化粒のそれぞれが確認されているが、同様な様相で重複して存在している。ここでは、前者は環状ブロックーＡ、後者を環状ブロックーＢとして報告することにする。この他に、調査区北西よりに小ブロックが検出されており、それぞれ

ブロックーａ、ブロックーｂとした。

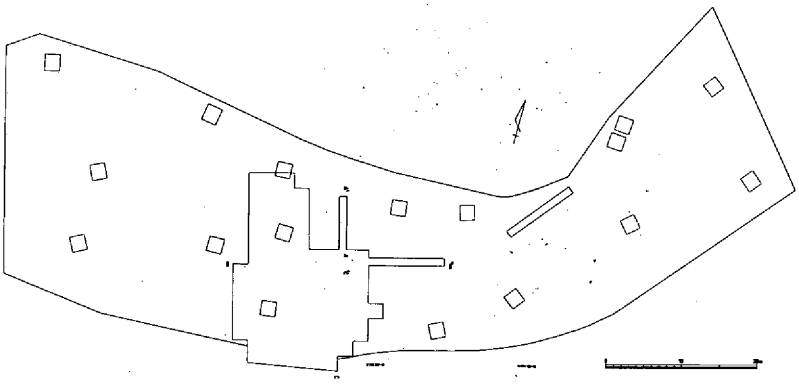
環状ブロックは、最大径14.5ｍ、遺物密集径10.5ｍを測り、その中央付近に遺物の希薄な箇所を形成させている。

環状ブロックーA（第15図）

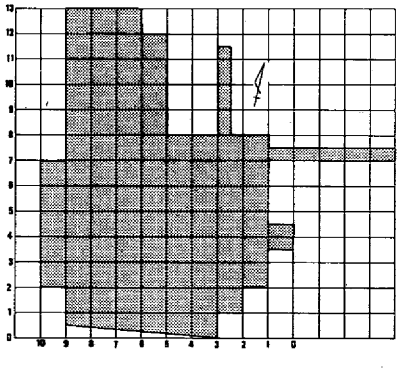
遺物の散布する最大径14.5ｍで、その密集度が濃い部分の径が10.5ｍを測る。分布の中央付近に遺物の粗な部分が認められている。このブロックは、若干の濃淡を認めるがほぼ円を描いており、その南西側に他より遺物の密集度が高い部分が認められている。遺物の出土深度は、25cm前後でありこの間に含まれている。

出土遺物（第18・19図）の石材数は、石英1063、黒曜石91、安山岩４であり、石英が全体の90％を超えている。石材による分布の差は、安山岩について出土が少なく内容を示し得ないが、黒曜石は、石英と同様な分布を示しているのである。

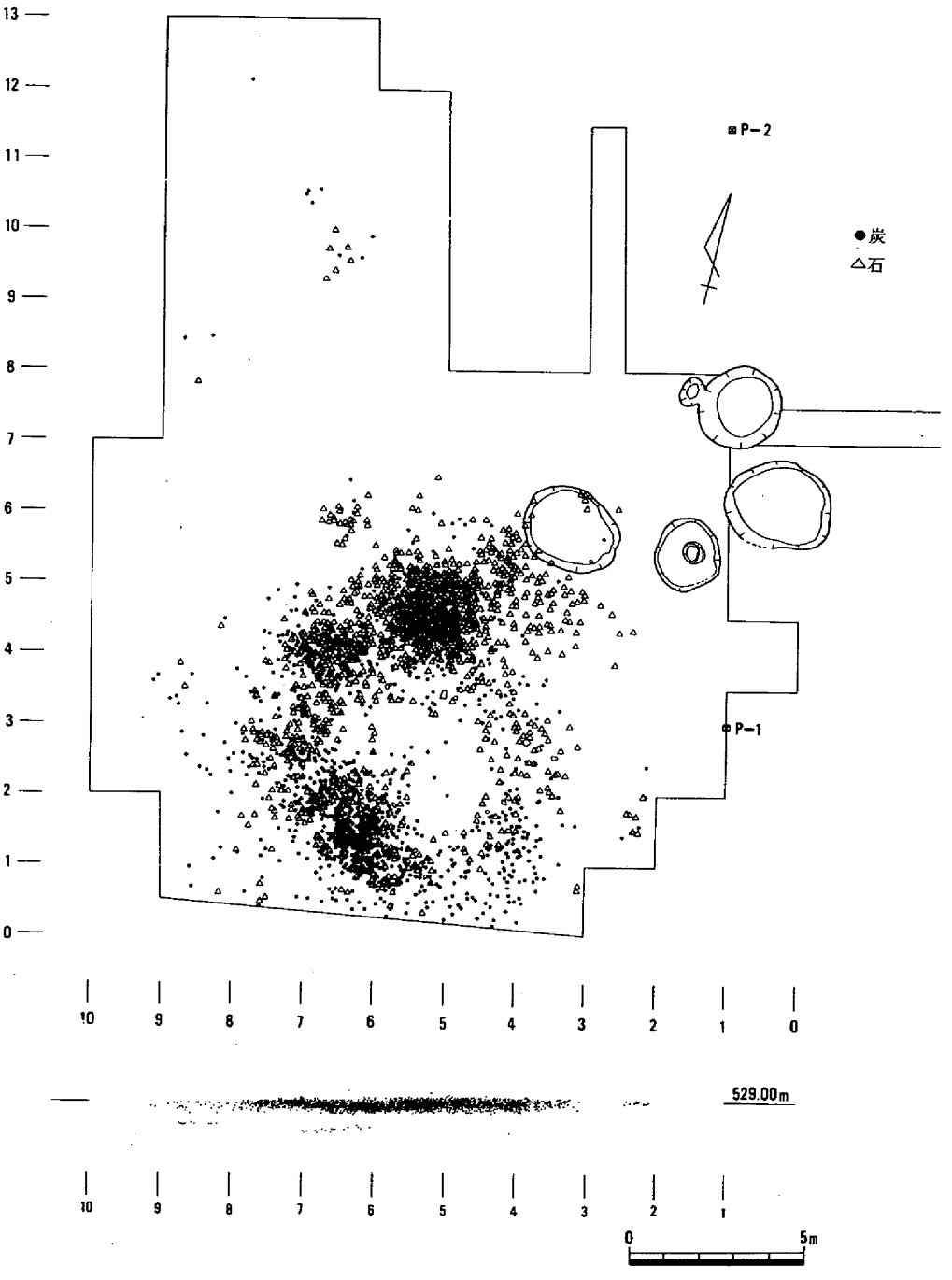
ナイフ形石器は、**393・205・225・2057**である。いずれも基部に両側面からの剝離をおこなっている。**393**と**2057**は、水晶で他は黒曜石である。楔形石器は、**216**の黒曜石のものが認められている。石刃は、サヌカイトの**575**と**1136**が出土するがいずれも表面の風化が著しい。使用痕が認められる剝片のうち水晶は**1160・2069・297・1989・1151・1913**、黒曜石が**2786・2590・623・271・430・571**である。いずれも、側面に微細な剝離が認められるものである。黒曜石については、比較的判断が容易であるが水晶は二次的に生じたのかどうか判断しかねるものが多くみとめられる。なお、**1160**は側面部分が平滑となっている。これら剝片の



第12図　調査位置図（1/1,000）



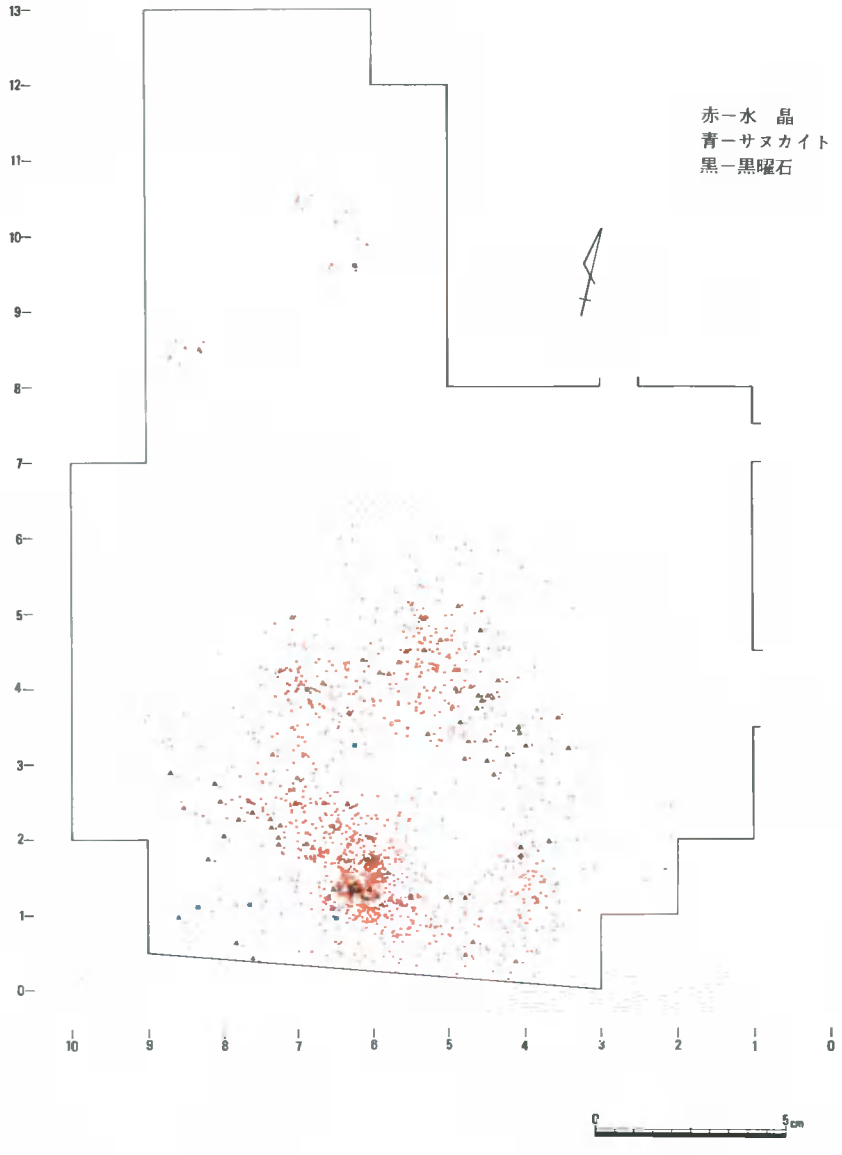
第13図　調査区設定図



第14図　石器・炭化粒分布図（1/200）

うち水晶が380－402で、接合資料である。黒曜石は、203と1923であり、203は一側面を細かく打ち割っている。石核は、水晶が553と222で黒曜石の2770と283の４点が認められている。

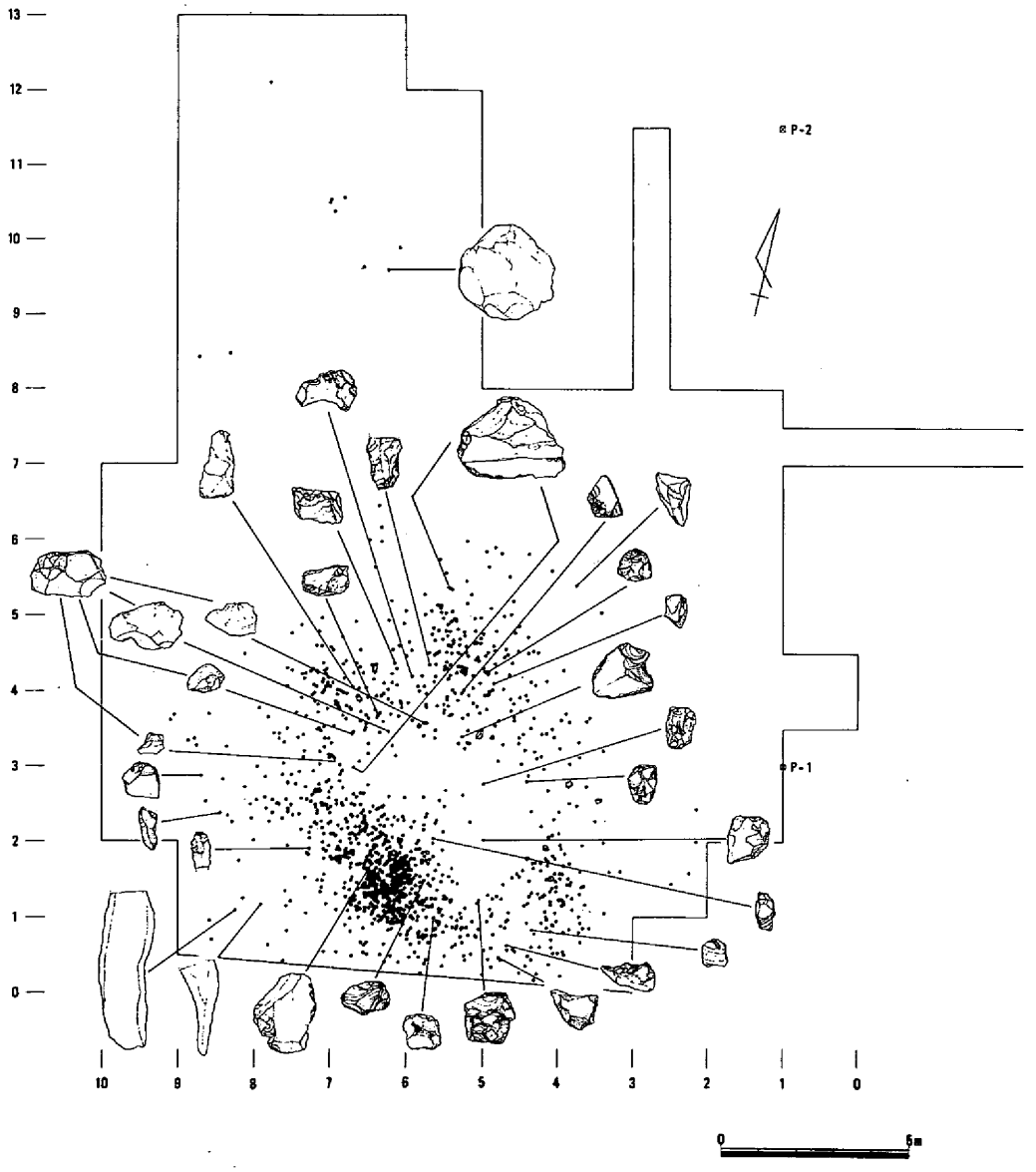
接合資料は、先の380－402と382－1943－532－384である。図化していないが、数点接合するものが認められている。



第15図　石器分布図（1/200）

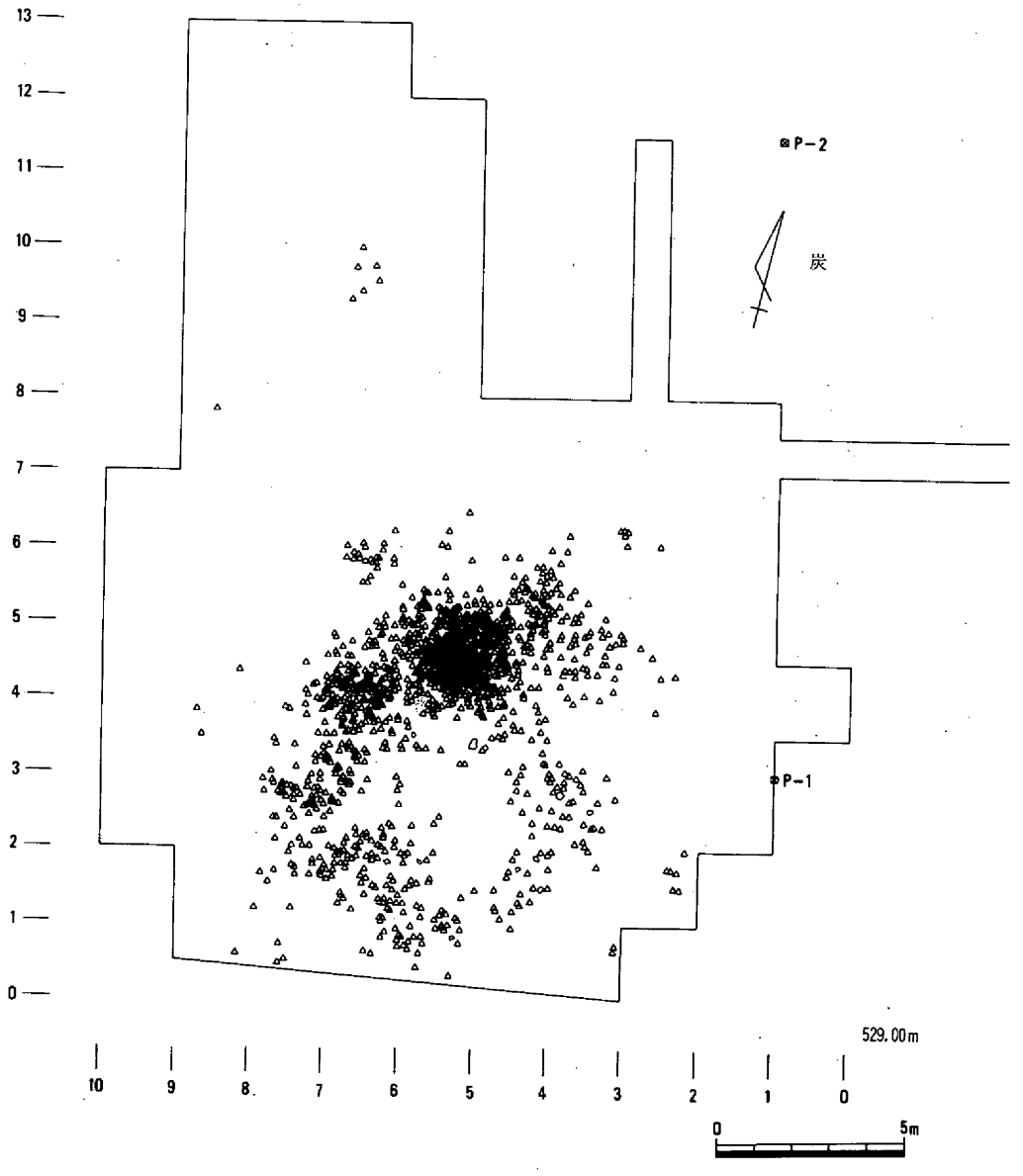
環状ブロックーB（第17図）

最大径は、14.5mで密集度の高い部分の径9.5mを測る。最大径は、環状ブロックーAと同じであるが密集度の範囲が小さくなっている。炭化粒の出土深度は、28cm前後で石器のそれよりも若干深めである。ブロックの北西側に3mと2mの炭化粒の集中する箇所が2か所認めら

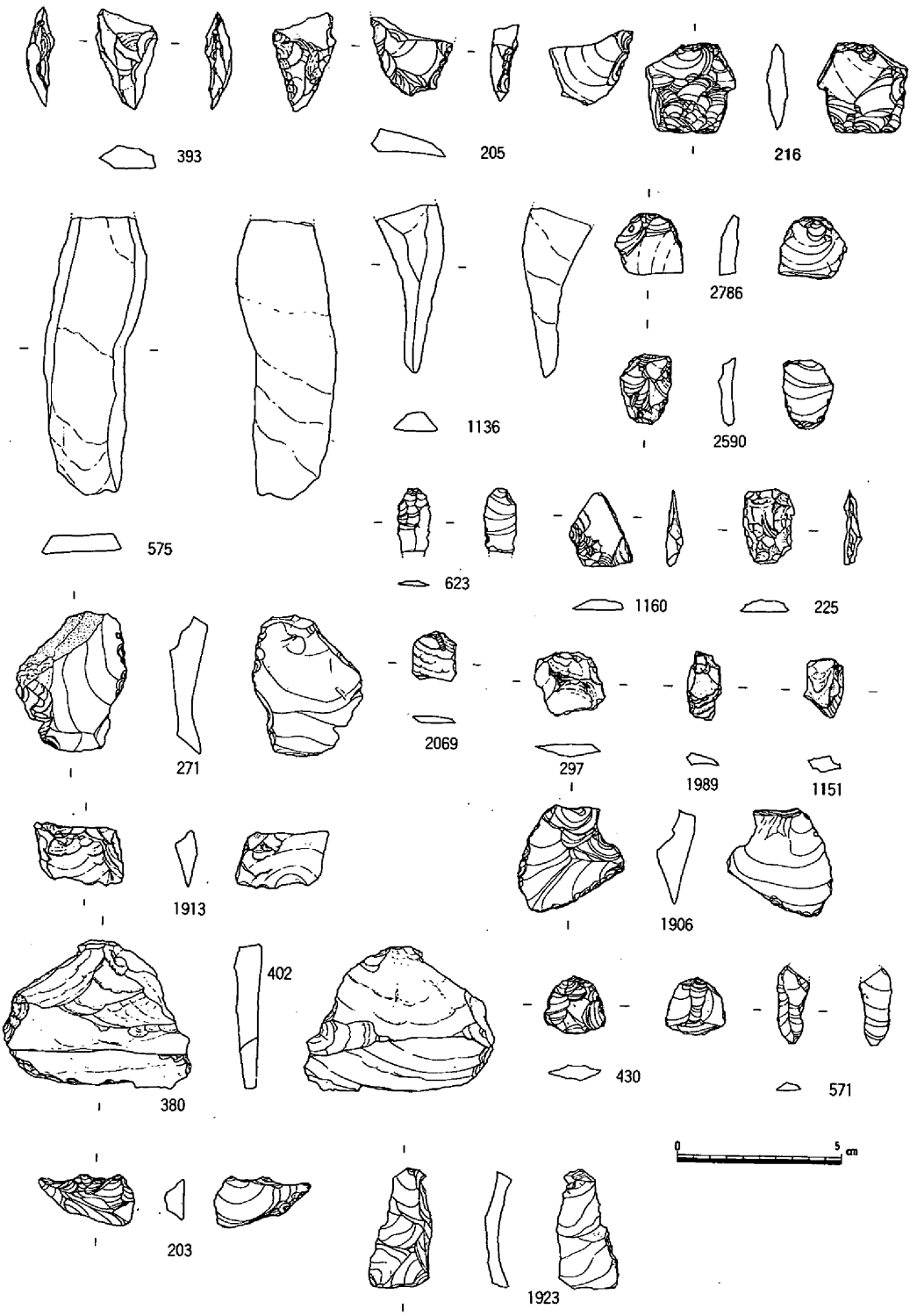


第16図　石器分布図（1/200）

れている。そして、先に指摘したように、ここにおいても環状の中央部分に炭化粒分布の粗の部分が認められている。



第17図　炭化粒分布図（1/200）

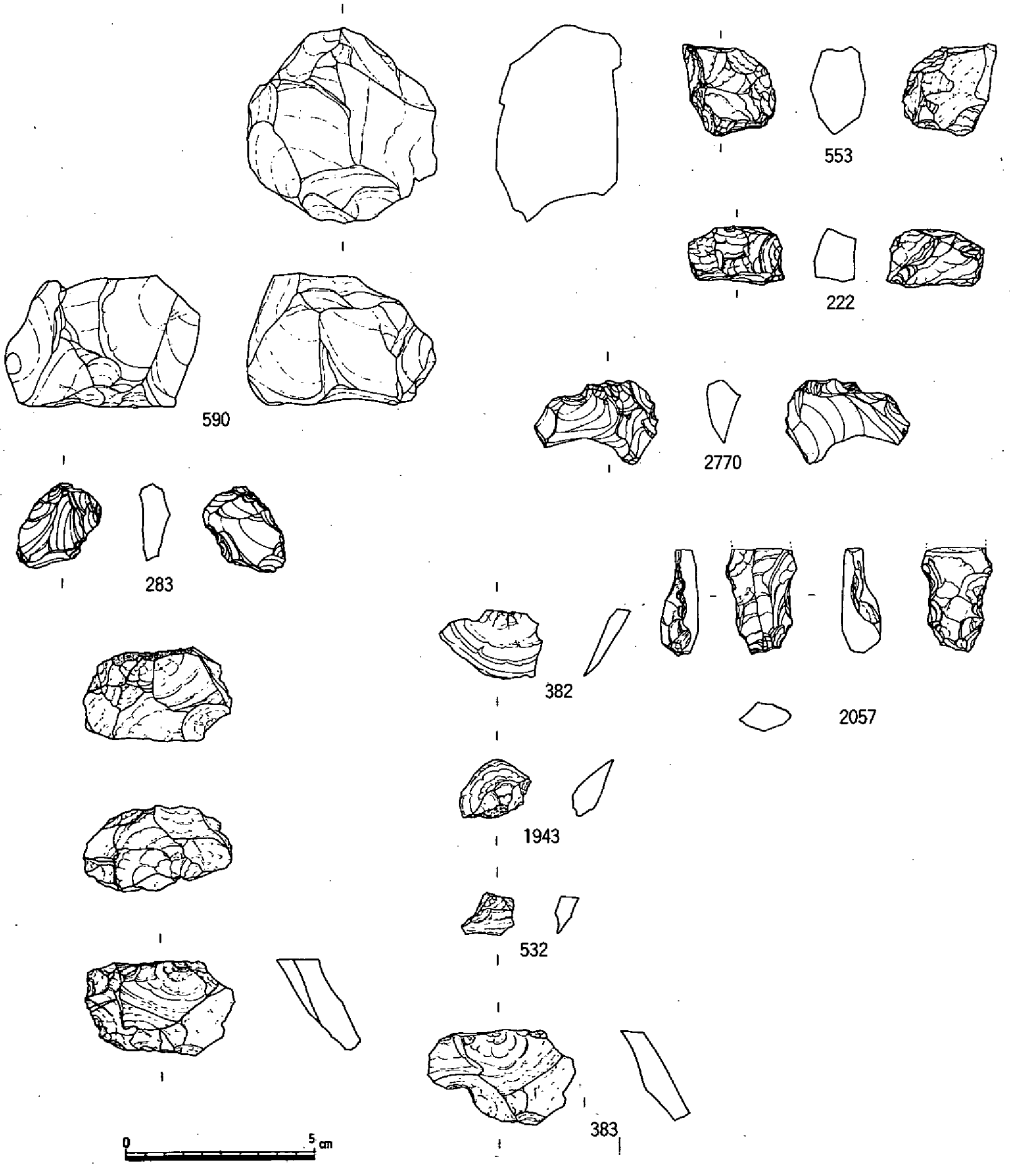


第18図　出土遺物（1）（1/2）

この炭化粒は、黒く炭化したもので炭化物という比較的大きいものを想定されるが、ここでのそれは５㎜以下で２～３㎜を主体とする極めて小さいものであることから用いた。このようなことから先の炭化粒の２か所の集中箇所は、その検出数の内容であり具体的にこれにより焼けた部分が伴うということはない。

ブロックーａ（第14図）

環状ブロックから北へ15ｍほどに位置する。７点の石器が出土し、いずれもサヌカイトであ



第19図　出土遺物（２）（1/2）

る。出土遺物は、590の石核（第19図）が検出されている。他は剝片である。

ブロックーb（第14図）

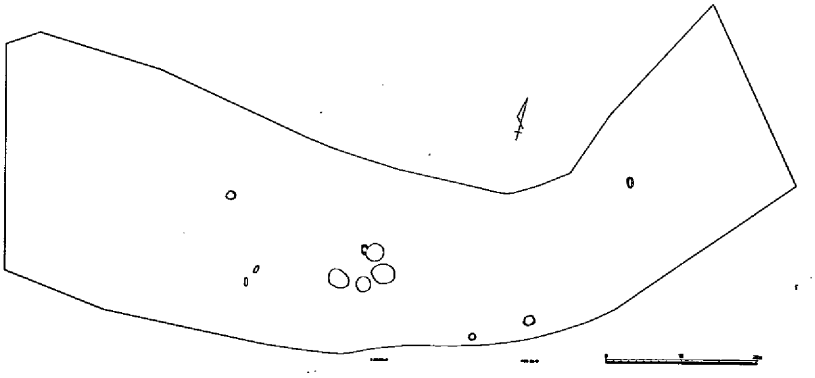
環状ブロックから北西へ13mほどの所で、ブロックーaと5mほどの南西側にあたる。出土遺物は、黒曜石の剝片が2点検出されている。

表ー2

石器番号	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g
397	水晶	30	18.5	6.7	3.05
205	〃	23	24.5	7.5	2.75
216	黒曜石	27	27	6.8	4.72
575	安山岩	84	30.5	9	
1136	〃	51	20	6.5	4.10
2786	黒曜石	19	20.5	5.5	2.01
2590	〃	20.5	15.5	5	1.33
623	〃	19	10	2	0.34
1160	水晶	20.2	10.5	5.5	1.55
225	〃	20.3	10.5	4.3	1.74
271	黒曜石	42.5	33	9.6	11.34
2096	水晶	15	14	2	0.62
297	〃	19	21	4	1.44
1989	〃	21	11	4	0.67
1151	〃	18	12	5	1.10
1913	〃	27.5	17	9.5	3.15
1906	黒曜石	32.5	31.5	9.2	
320・402	石英	44	57	8.4	21.56
430	黒曜石	17	18	4.8	1.36
571	〃	23.5	10	2.5	0.47
203	〃	28.5	15.5	6.2	2.06
1928	〃	36	18.5	6.5	3.52
590	安山岩	51	50.5	34.5	
553	水晶	15	25	11.4	6.59
222	〃	24.5	24	15	9.70
2770	黒曜石	32.5	22	9.7	4.85
283	〃	22	22	8	3.01
382・1943・532・383	水晶	39.5	25	23	14.89
2057	〃	27.5	18.5	10	4.56

縄文時代の遺構・遺物

竪穴住居

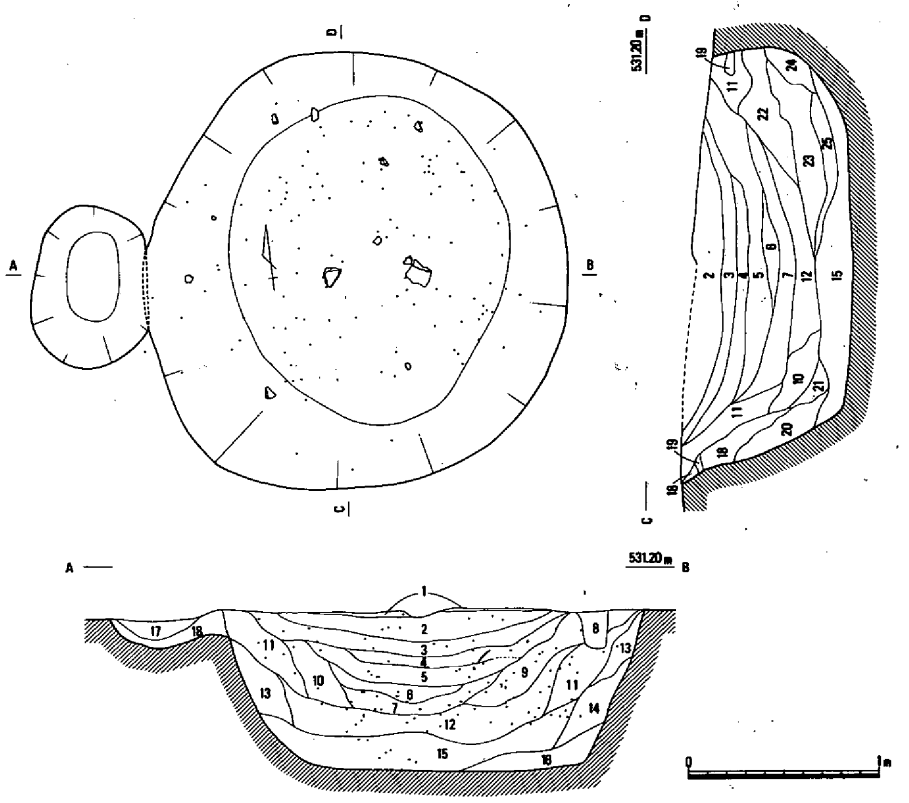


第20図　遺構位置図（1/1,000）

No. 4 －竪穴住居（第21図）

竪穴住居の確認面は、ソフトローム面であり実際の掘込み面は不明であるが、埋土中に黒色土が認められることからソフトロームの上層の堆積層からの掘下げを考えるのが妥当であろう。規模は、230×225cmでほぼ円形のプランを呈するものである。検出面からの床面の深さは、86cmを測り他の竪穴住居に比較して最も深いものである。壁の掘込みは、緩やかな傾斜を有するが、一部においては抉るような部分も認められる。壁から床面への移行は、直角にならずやや丸味を持たせている。そして、床面は平坦ではなくやや凹み気味の状態をなる。

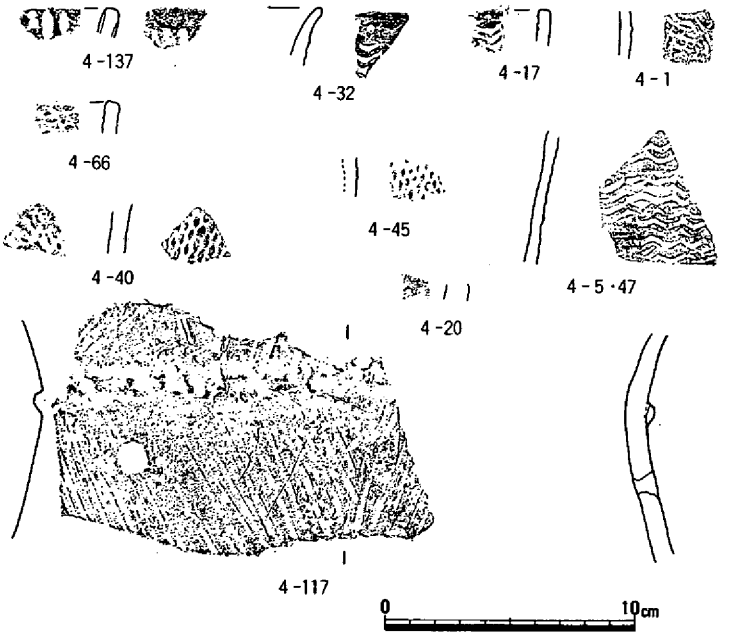
なお、この竪穴住居の西側に85×60cm、深さ15cmの土壙が存在する。時期的には、土層断面（第21図）で示した通りこの土壙が古いと考えられる。



1 黒色土　8 黒褐色土　15 淡暗褐色土（黄色ブロック多く含む）　22 暗褐色土（黄色ブロック）
2 淡黒色土　9 暗褐色土（黄色ブロックを多く含む）　16 暗褐色土（黄色ブロック若干含む）　23 淡黒褐色土（黄色ブロック）
3 淡黒褐色土（黄色・灰色ブロック）　10 暗褐色土（ブロックを多く含む）　17 暗褐色土　24 淡暗黄褐色土（ソフト）
4 黒色土（数mm大の黄色ブロック）　11 黒褐色土　18 淡暗褐色土（ソフト）　25 淡暗褐色土（黄色ブロック多）
5 暗褐色土（4層より大きめのブロック）　12 黒褐色土（黄色ブロックを多く含む）　19 黄褐色土（ソフト）
6 淡黒色土（1mm大の黄色ブロック）　13 淡暗褐色土　20 暗黄褐色土
7 黒色土（数mm大の黄色ブロック）　14 黄褐色土　21 淡暗褐色土（黄色ブロック）

第21図　No. 4 -竪穴住居（1/40）

出土遺物（第22図）は、埋土中からの出土である。**4－137**は、口縁部の小片である。やや外に開き気味の口縁になるようで、口唇部は平坦でやや丸味を有する。文様は、外面に明瞭ではないがネガティブ状の楕円文が観察される。内面は、.間隔の短い二段の押し引き文と間隔の長い押し引き文そして楕円状の押し引き文の三種類が認められる。胎土中には、角閃石を多く認める。**4－32**は、口縁部の小片である。外反気味で口縁端部近くで外反をやや強く内面口縁端部近くで稜を持つ。文様は、外面の口縁部から８㎜ほどを無文帯とし以下を横位の山形文が施文される。内面は、平滑に仕上げている。器壁の厚さは、4.8㎜を測る。**4－17**は、口縁部の小片である。直口気味の口縁を有するものと推測され、口唇部は平坦となる。文様は、内面のみに施文がみられ、口縁端直下から横位の山形文が施される。器壁の厚さは、4.9㎜を測る。**4－1**は、胴部の破片である。外面に山形文を施文し、器壁の厚さは、4.6㎜を測る。**4－66**は、口縁部の小片である。直口気味の口縁部をなすと考えられるもので、口唇部は平坦となる。文様は、内外面とも楕円押形文がみられる。外面は、施文方向が不詳であるが、内面については口縁直下から長径4.8㎜、短径2.2㎜の楕円文が横位に施文される。器壁の厚さ5.9㎜を測り、胎土中に火山ガラスが多く認められる。**4－45**は、胴部の小片である。外面に長径4.1㎜、短径2.1㎜の縦位の楕円文を施文する。内面は、剝離のため不詳である。器壁の厚さは、6.2㎜を測り、胎土中に火山ガラスを含む。**4－40**は、胴部の小片である。内外面には、長径6.4㎜短径2.7㎜の楕円文を施文する。外面は縦位に、内面は横位に施されている。器壁の厚さは、７㎜を測る。**4－5・47**は胴部の破片である。外面に山形文を施文し、内面は平滑に仕上げている。器壁の厚さは、５㎜を測る。**4－20**は、胴部または底部近くの小片である。内面に小さい刺突が認められるが、これが文様かどうか



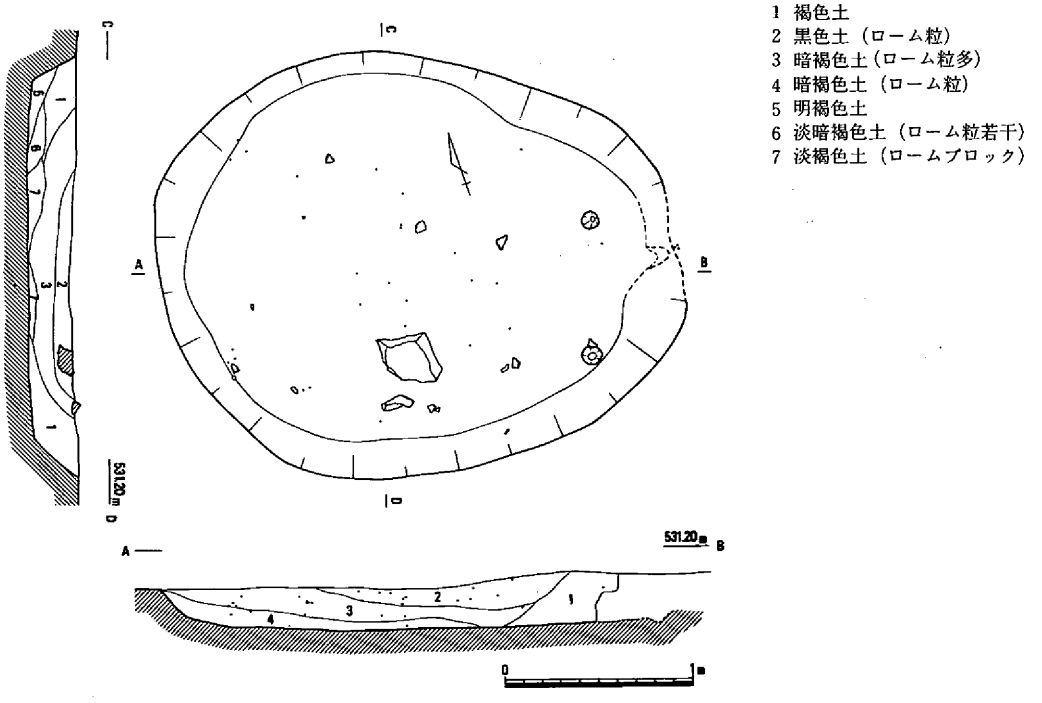
第22図　No. 4－出土遺物（1/3）

小片のため不詳である。胎土中に火山ガラスを認める。**4－117**は、頸部の破片であり、当遺跡で出土した土器では最も大きいものである。屈曲する頸部には、幅1.6cmの突帯を付し、その突帯に押圧を施している。押圧の原体は、不詳であるが突帯が完全に乾ききらないうちに施したような状態を呈している。突帯の頸部側と胴部側にハの字状の条痕が認められる。条痕の原体は、幅の広い板状のものを用いているようで、使用する部分によって条痕の内容が異なるようである。胎土中には、多くの火山ガラスが含まれている。

No. 5－竪穴住居（第23図）

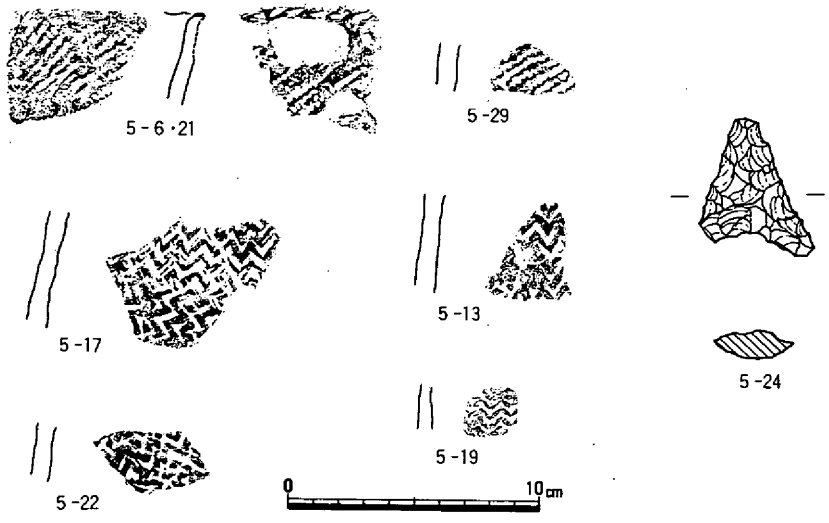
規模は、276×224cmを測り、プランは瓜形で北西側が膨れ気味となっている。検出面からの深さは、86cmを測る。プラン検出面は、ソフトローム中であるが本来の掘込みはNo 4－竪穴住居と同様に黒色土中と考えるのが妥当であろう。壁の立ち上がりは、やや開いた状態であり壁から床面への移行は、直角とならず丸味をもっている。床面は、ほぼ平坦となっているが踏み固められてはいなかった。竪穴住居の北東よりに、2か所のピットが存在する。大きさは、径9～10cmで深さ12～18cmを測り、底の状態は尖り気味となっている。

出土遺物（第24図）は、埋土中からのものである。**5－6・21**は、口縁部の破片である。口縁は、外方へ開き気味となり口縁端を屈曲させ、内面の口縁端部に稜をもたせる。文様は口唇



第23図　No. 5－竪穴住居（1/40）

部に斜めの押圧痕を施し、その単位中に深い凹のなかに押圧方向と同様の稜線が認められる。内外面とも口縁直下からＬＲの縄文を施文させている。内面の施文は、口縁直下から3.2cmの幅でみられ以下について施文されていない。器壁の厚さは、７㎜を測り胎土中に繊維を含んでいる。**５－29**は、胴部の小片である。文様は、外面にＬＲの縄文が施文され、内面は平滑に仕上げられている。器壁の厚さは、7.1㎜を測る。**５－17**は、胴部の破片である。胴部は、直線的な形態を有するようである。文様は、外面に横位と縦位の山形文が施文されている。この文様内容から口縁部に近い破片である可能性がある。**５－13**は、胴部の破片である。文様は、外面に横位の山形文を施文する。**５－22**は、胴部の破片である。文様は、外面に縦位と横位の山形文を施文する。**５－19**は、胴部の破片である。外面に横位の山形文が施文されている。**５－24**は、長さ1.8cm、幅1.5＋α、厚さ0.35cmを測るチャート製の石鏃である。



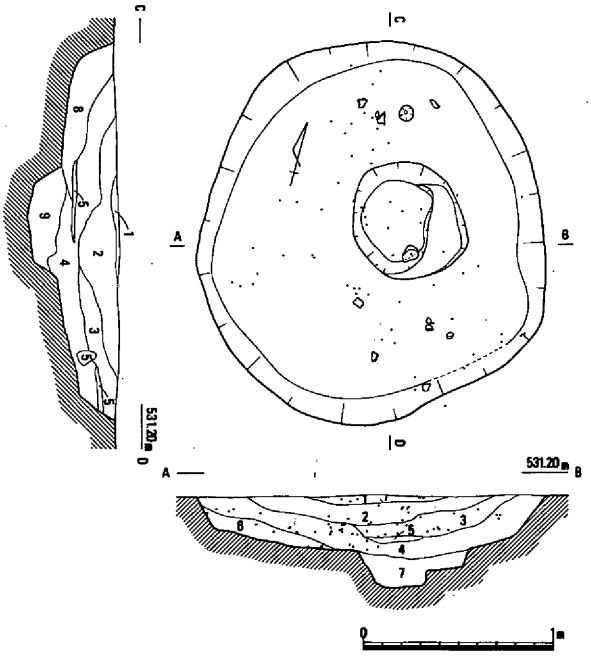
第24図　No. 5－出土遺物（1/3・1/1）

No. 6 －竪穴住居（第25図）

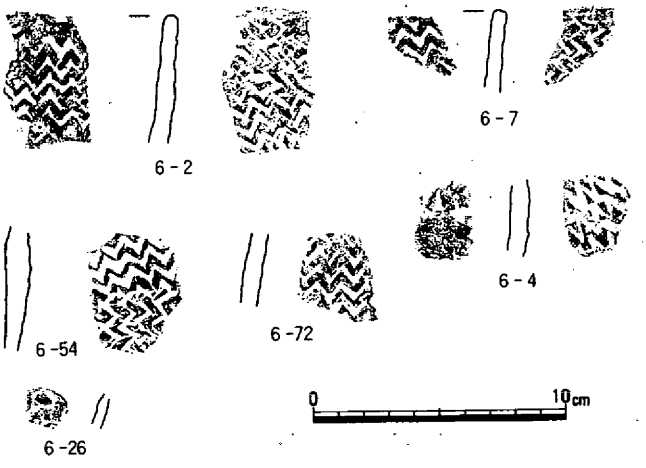
No. 7 とNo. 5 －竪穴住居の間に検出された。規模は、202×183cmで、形態は円形を呈する。検出面からの床面までの深さは、27cmを測る。住居中央やや東よりに二段掘りの小土壙が認められる。大きさは、62cmの円形を呈し、一段目の深さは11cm、二段目は20cmを測る。この他に北よりに径８cm余りで深さ10cmの底の尖ったピットが認められる。壁面から床面への移行は、直角ではなく丸味を持ち床面も平坦とはならず凹状を呈する。

出土遺物（第25図）は、埋土中の出土である。**６－２**は、口縁部の破片である。口縁は、ほぼ直口し、口唇部は丸味を有するが平坦に近い形態を示す。文様は、内外面に山形文を施文する。外面は、口縁直下から縦位の山形文が幅３cmで、以下を横位によって施されている。内面

は、口縁直下から横位の山形文を施し、以下を無文とする。6－7は、口縁部の破片である。文様は、内外面に山形文を施文する。6－72と同一個体と考えられる。6－54は、胴部の破片である。やや胴部に丸味を有するようであり、内面には稜を持っている。文様は、外面に横位と縦位の山形文が施される。後に触れるが、No５－竪穴住居からの出土のものと接合する。6－72は、胴部の破片である。文様は、外面に横位の山形文を施す。6－26は、胴部の小片である。文様は、内面に長径8.1㎜、短径4.2㎜の扁平な楕円文を施文する。器壁の厚さは、4.1㎜を測る。



1　淡黒色土（ローム粒）
2　暗褐色土
3　淡暗褐色土
4　暗明褐色土（炭化粒若干）
5　暗褐色土（炭化粒多）
6　淡茶褐色土
7　ロームブロック
8　茶褐色土（ロームブロック若干）
9　暗茶褐色土



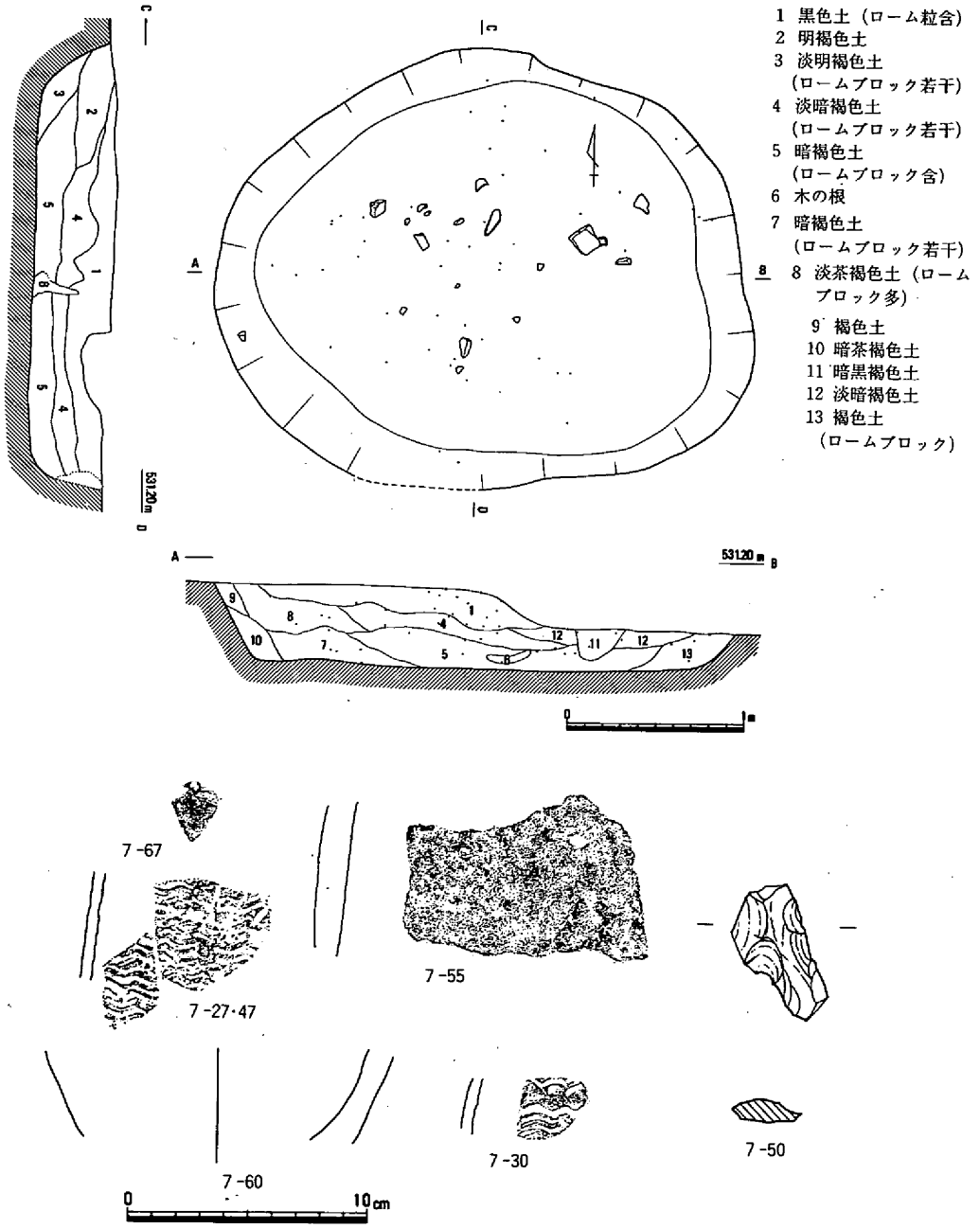
第25図　No.６－竪穴住居（１/4）・出土遺物（１/３）

No.７－竪穴住居（第26図）

No.４とNo.６－竪穴住居の間に検出された。規模は、295×245cmで、形態は竪穴住居－No.５と近い内容を示す瓜形を呈する。床面までの深さは、44cmを測る。壁面から床面への移行は、直角とはならず丸くなっている。床面は、平坦となっているが意識的に踏み固められたという状態ではない。

出土遺物（第26図）は、埋土中の出土である。7－67は、口縁部近くで外へ屈曲させ、内面ではその屈曲部からナデ

による稜をつくる。口唇部は、細く丸味を持ち、押圧を施す。押圧痕の単位中には、押圧方向に稜線が認められる。胎土中には、火山ガラスを含む。7－27・47は、胴部の破片である。胴部は、直線的となり外面に横位の山形文を施文し、内面は平滑に仕上げている。器壁の厚さは、



第26図　No. 7-竪穴住居（1/40）・出土遺物（1/3・1/1）

4.8㎜を測る。**7－55**は、厚手の胴部破片である。内外面とも細かいハケ状の条痕が認められる。器壁の厚さは、9.3～11.6㎜を測る。**7－60**は、底部に近い破片であり、内外面とも平滑に仕上げられている。胎土中は、火山ガラスが含まれている。**7－30**は、胴部の小片である。外面には、横位の帯状山形文を施文する。器壁の厚さは、4.7㎜である。**7－50**は、サヌカイトの石鏃である。風化が著しく剝離の詳細は不詳である。

落　し　穴

No. 1－落し穴（第27図）

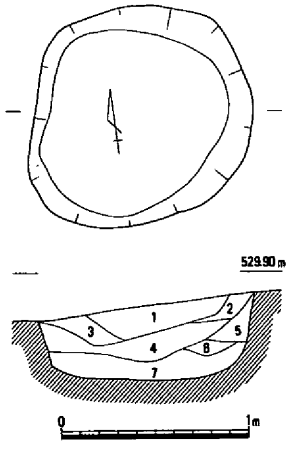
調査区中央よりの西側斜面状に検出された。規模は、116×116㎝で、形態はやや不整の円形であり、深さは40㎝を測る。遺構確認面は、ソフトローム層直上であり、落し穴とするには規模と深さが問題となるが、一応落し穴とした。壁の底面への移行は、丸味を持ち底面もやや凹を有する。埋土は、黒色土が基調となるものである。

No. 2－落し穴（第28図）

調査区中央から北東よりに検出された。規模は、148×118㎝で、形態は北と西の隅は角を持つが東は丸くなる不整方形を呈し、深さは22㎝を測る。埋土は、黒色土を基調とする。当落し穴は、落し穴－No. 1と同様の問題について、落し穴として良いかどうか問題がある。

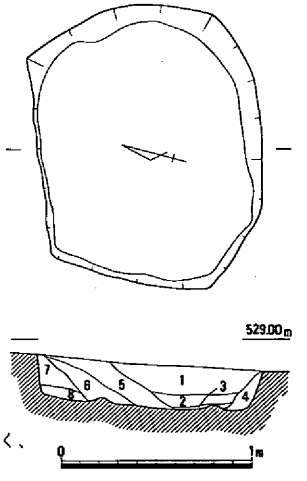
No. 3－落し穴（第29図）

調査区中央から北東隅よりに検出された規模は、100×86㎝で、形態はほぼ円形を呈し、深さは119㎝を測る。落し穴の最下層には、ロームブロックが認められるが、それより上層の埋土の基調となるものは黒色土である。断面形態は、ほぼ垂直に掘込まれ底面は平坦になっている。



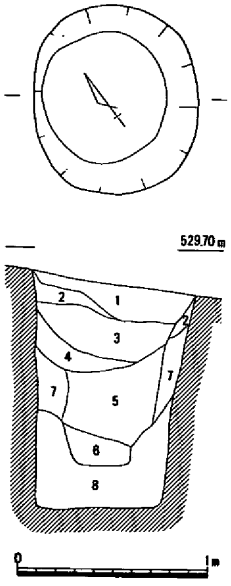
1 黒色土
2 淡黒褐色土
3 黒褐色土（ローム）
4 黒褐色土（ロームブロックを含む）
5 暗褐色土
6 黒褐色土（ロームブロック少量含む）
7 暗褐色土（1－4㎜のロームブロックを含む）

第27図　No. 1－落し穴（1/40）



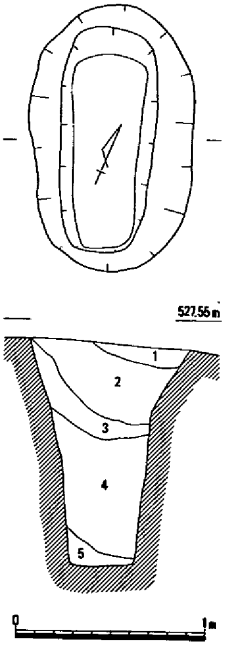
1 淡黒色土
2 黒色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土（ロームブロック含む）
5 淡黒褐色土（ロームブロック含む）
6 淡黒褐色土（5層より薄く、ブロック多く含む）
7 黄褐色土
8 黒褐色土（ロームブロックをわずかに含む）

第28図　No. 2－落し穴（1/40）



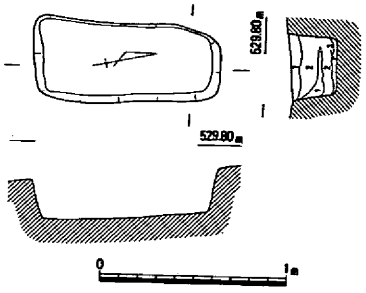
1 黒色土　　6 黒色土
2 褐色土　　（ロームブロック含む）
3 黒色土　　7 淡黒色土
4 淡黒黄色土　8 ロームブロック
5 黒色土（ロームブロックを少量含む）

第29図　No. 3-落し穴（1/40）



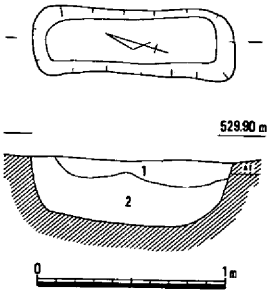
1 暗著褐色火山灰土
2 淡暗黄褐色火山灰土
3 明黄褐色火山灰土
4 淡灰黄褐色火山灰土
5 暗灰色火山灰土（細粒）
（ＡＴをブロック状に含む）

第31図　No. 12-落し穴（1/40）



1 灰色火山灰土（ＡＴをブロック状に含む）
2 黄褐色火山灰土
3 1層と2層の混入

第30図　No. 8-落し穴（1/40）



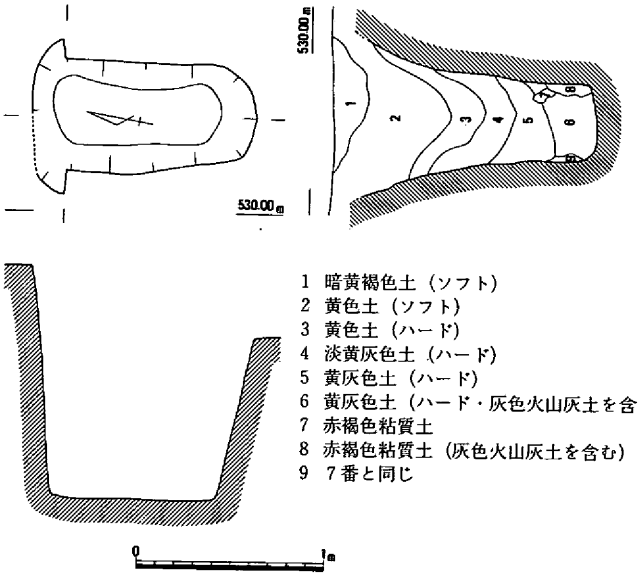
1 灰色火山灰土
2 淡褐色土（1層を含む）

第32図　No. 10-落し穴（1/40）

No. 8ー落し穴（第30図）

調査区中央やや北西よりに検出された。ソフトローム上面においてその存在に気付かなかったもので、ＡＴ上面において確認されたのである。規模は、100×42cmで、形態は長方形を呈し、深さは24cmを測る。検出面がＡＴ上面であるため、それから上層の堆積土及び断面形態は、不明である。

No. 10ー落し穴（第32図）



1 暗黄褐色土（ソフト）
2 黄色土（ソフト）
3 黄色土（ハード）
4 淡黄灰色土（ハード）
5 黄灰色土（ハード）
6 黄灰色土（ハード・灰色火山灰土を含む）
7 赤褐色粘質土
8 赤褐色粘質土（灰色火山灰土を含む）
9 7番と同じ

第33図　No. 11-落し穴（1/40）

調査区中央やや北東よりに、No.８－落し穴の北側に接している。検出面は、No.８－落し穴と同様にＡＴ上面である。規模は、107×34cmで、形態は長方形を呈し、深さは34cmを測る。壁から底面への移行は、丸味を持ち、底はやや凹状となる。

No.11－落し穴（第33図）

調査区中央部分に位置するNo.４－竪穴住居の西側に接して検出された。ＡＴ下層の石器検出のため、掘り下げ途中でその断面に認められた。従って、断面が落し穴の短辺端に接していたため上面形態は一部分した確認されなかった。規模は、118＋α×60＋αで、形態は隅丸長方形を呈するものと推測され、深さは140cmを測る。断面形態は、落し穴－No12に近い内容を持っている。埋土は、褐色土が基調となるもので黒色土は認められない。

No.12－落し穴（第31図）

調査区の北東よりの傾斜のきつい部分に検出された。規模は、140×86cmで、形態は上面で楕円状を底面においては方形を呈し、深さは118cmを測る。断面形態は、掘込みの３分の２程の所で垂直になり、底面は平坦となる。埋土は、褐色土が基調となるものであり、黒色土は認められない。

2　中山西遺跡Ⅱ区

中山西遺跡Ⅰ区から北へ80ｍほど下がった標高約513ｍの平坦地（第34図）である。遺跡地は、比較的広い畑地となり段差はないが、東西方向に走る農道から北は、３ｍ以上の段差をなしている。遺構検出は、黒ボコを排土したソフトローム面で検出された。

縄文時代の遺構

落し穴

No.４－落し穴（第35図）

調査区の東よりに検出された。検出面は、ソフトローム上面である。規模は、110×107cmで、深さは186cmを測る。平面形態は、検出面でほぼ円形を呈するが、底は方形を示す。断面は、掘込みから130cmの所までは逆ハの字状となり、以下は、垂直となる。

第34図　中山西遺跡Ⅱ区遺構配置図（1/400）

時期不明の遺構

土壙墓

No. 1 ー土壙墓（第36図）

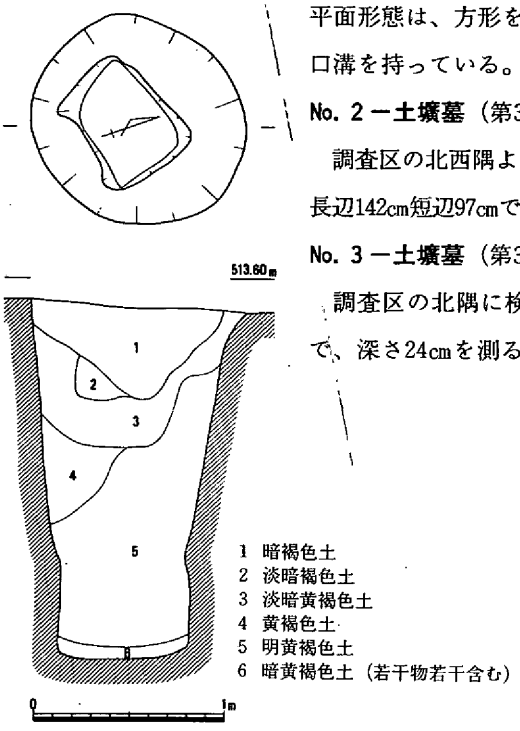
調査区の北西隅より検出された。規模は、長辺166cm、短辺58～71cmで、深さ15cmを測る。平面形態は、方形を呈し、北短辺に幅16cm、深さ２cm余りの小口溝を持っている。

No. 2 ー土壙墓（第37図）

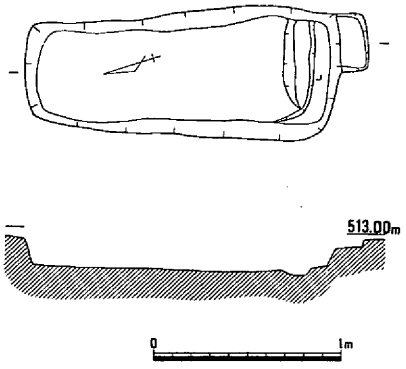
調査区の北西隅よりの土壙墓ーNo. 1 に接して検出した。規模は長辺142cm短辺97cmで、深さ18cmを測る。平面形態は、糸巻き状となる。

No. 3 ー土壙墓（第38図）

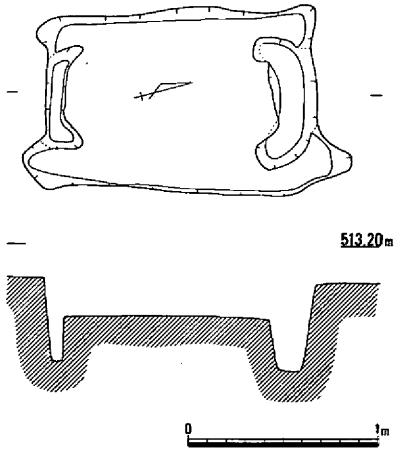
調査区の北隅に検出された。規模は、長辺134cm、短辺87cmで、深さ24cmを測る。平面形態は、方形を呈する。



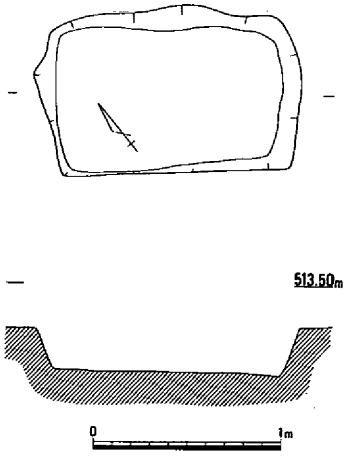
第35図　No. 4 -落し穴（1/40）



第36図　No. 1 -土壙墓（1/40）



第37図　No. 2 -土壙墓（1/40）



第38図　No. 3 -土壙墓（1/40）

第三節　城山東遺跡の調査

第一章第一節で述べたように、一次調査で認められていたのは城山東遺跡Ⅲ区であり、他は調査中の確認により検出された。Ⅰ区は、谷部に落し穴が、Ⅱ区は土壙、Ⅲ区は一次調査においてＡＴ直下より石器を出土している。Ⅳ区～Ⅵ区は住居と建物を確認した。

1　城山東遺跡Ⅰ区

この遺跡は、中山西遺跡が立地する丘陵の東側に幅30ｍほどの北にのびる谷水田の東側に位置する。北東方向へのびる丘陵に向かって幾つもの谷が形成されて、その谷の一つに位置している。遺跡地は、谷部の傾斜がそのまま残されているが、深く谷が掘り込まれていない。

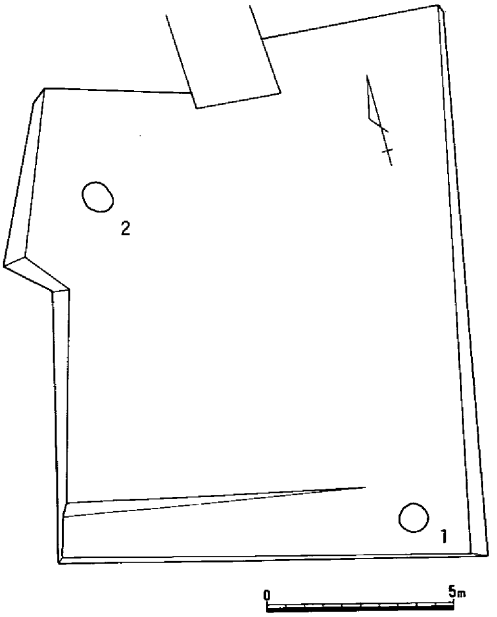
縄文時代の遺構

落し穴

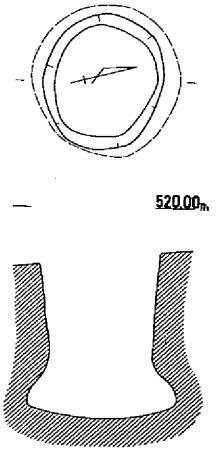
No. 1 ―落し穴（第40図）

調査区の北東端よりに検出された。規模は、72×60㎝で、深さは85㎝を測る。平面形態は、円形を呈し、底は袋状となる。埋土は、黒ボコである。

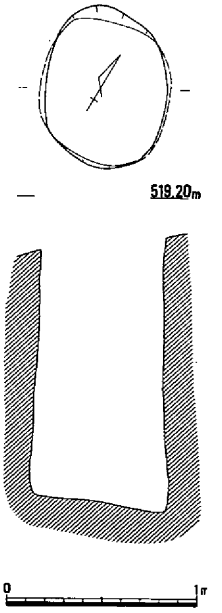
No. 2 ―落し穴（第41図）



第39図　城山東遺跡Ⅰ区遺構配置図（1／200）



第40図　No. 1 -落し穴（1／40）



第41図　No. 2 -落し穴（1／40）

調査区の北西隅よりに検出された。規模は、86×64cmで、深さ136cmを測る。平面形態は、やや楕円気味の円形を呈する。埋土は、黒ボコである。

2　城山東遺跡Ⅱ区

城山東遺跡Ⅰ区の東側100ｍほど離れた谷部に位置する。地形的には、谷状となるが深く入り込んでいない。遺構は、黒ボコを排土した直下のソフトローム面で検出された。調査区の大半は、自然流路の影響をうけており遺構は調査区の奥部分に認められる。

時期不明の遺構

土壙

No. 1 ー土壙（第43図）

調査区の北東隅に検出された。規模は、73×59cmで、深さ50cmを測る。平面形態は、やや楕円気味の円形を埋土は、黒ボコである。

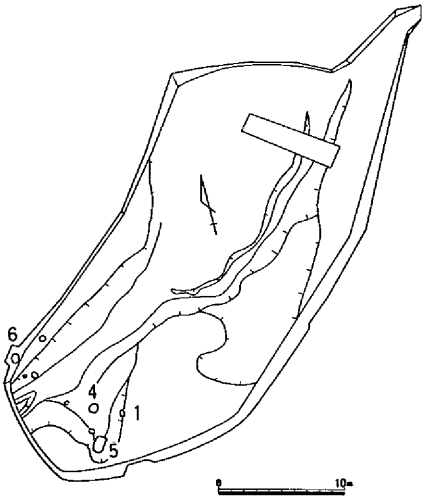
No. 4 ー土壙（第44図）

調査区の北東よりに検出された。規模は、73×63cmで、深さ26cmを測る。平面形態は、円形を呈する。埋土は、黒ボコである。

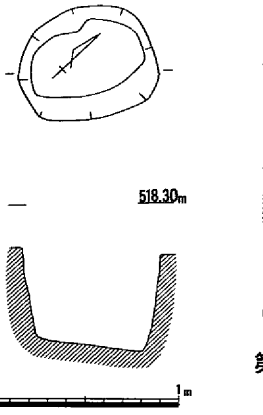
No. 5 ー土壙（第45図）

調査区南西隅よりに検出された。規模は、120×70cmで、深さ15cmを測る。

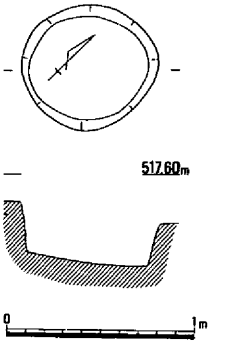
落し穴



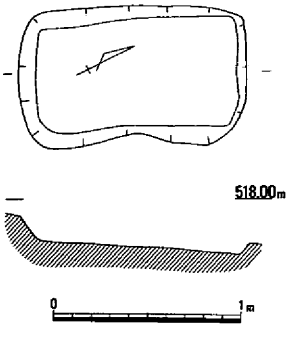
第42図　城山東遺跡Ⅱ区遺構配置図（1／600）



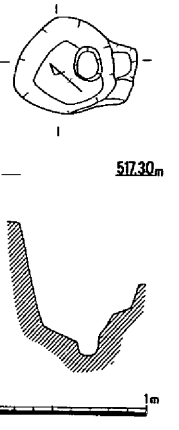
第43図　No. 1 -土壙（1／40）



第44図　No. 4 -土壙（1／40）



第45図　No. 5 -土壙（1／40）



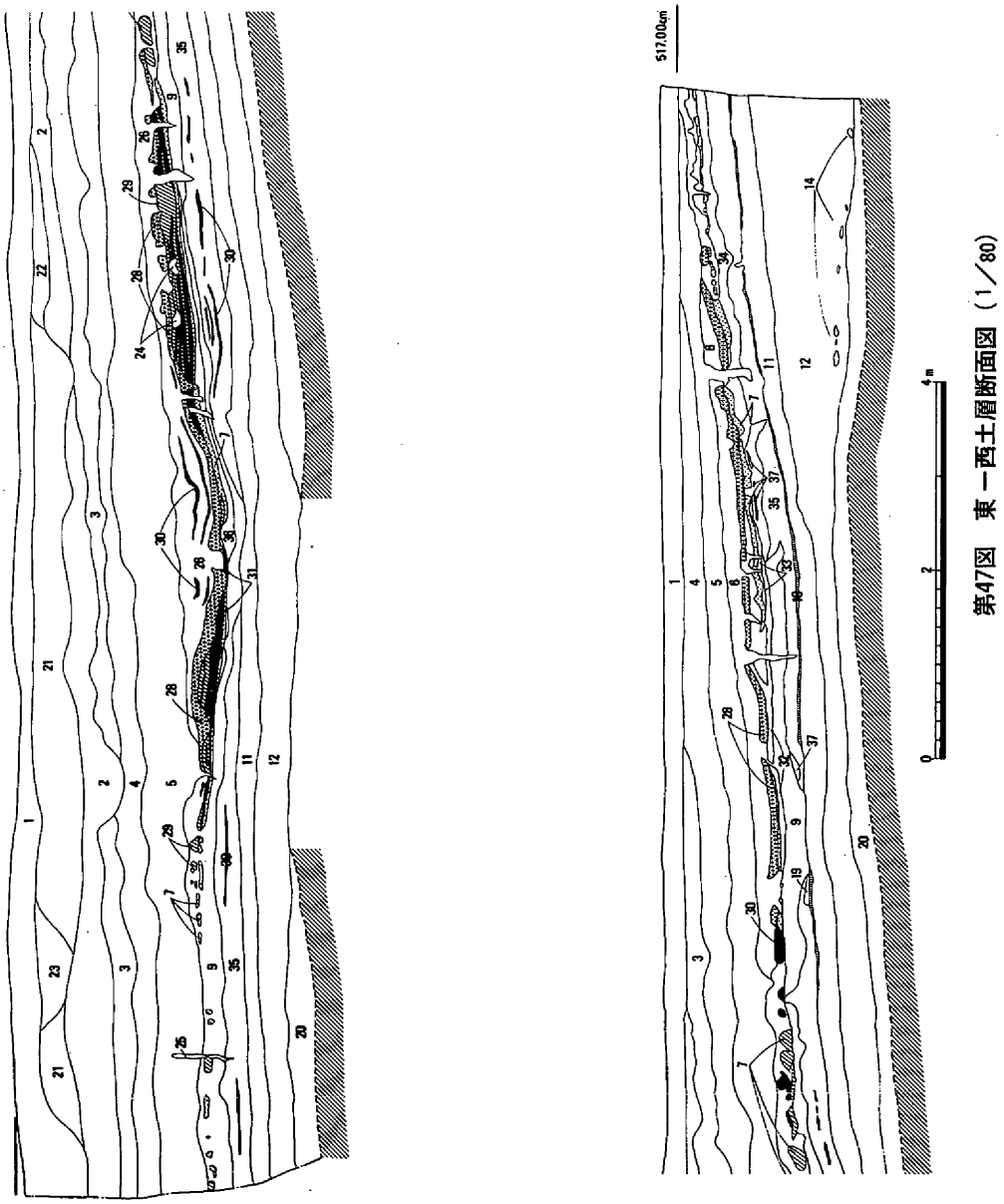
第46図　No. 6 -落し穴（1／40）

No. 6 ー落し穴（第45図）

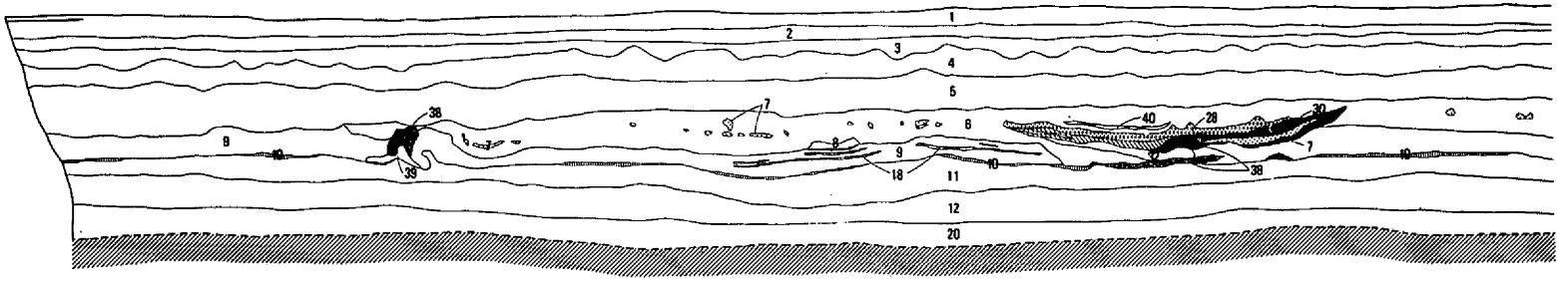
調査区の南隅よりに検出された。規模は、54×51cmで、深さ61cmを測る。平面形態は、円形を呈する。底に18×15cmで、深さ７cmのピットが認められる。埋土は、黒ボコである。

3　城山東遺跡Ⅲ区

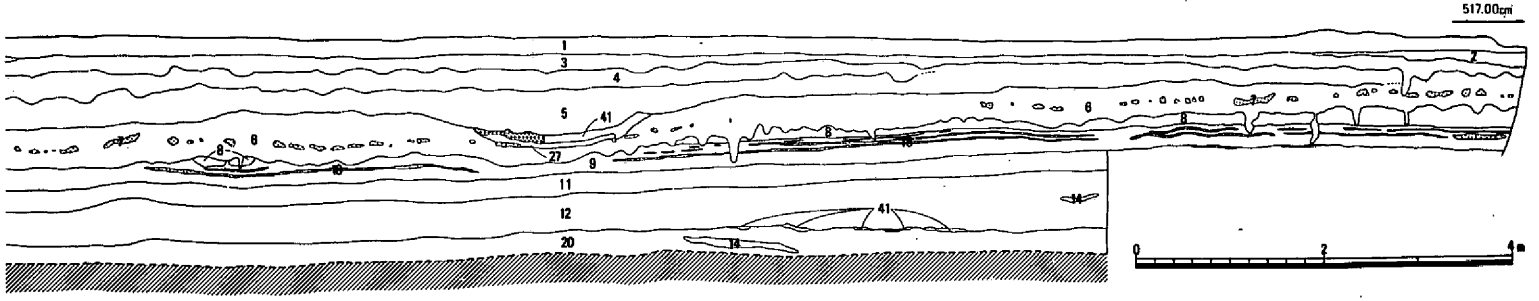
南から北へ高さを減じて行く丘陵が、さらに北東へ細長くのびて行き低い鞍部を形成してい



第47図　東ー西土層断面図（1／80）



1.黒ボコ（耕作土）
2.黒ボコ
3.漸移層
4.明黄褐色軟質火山灰土（ソフトローム）
5.明黄褐色硬質火山灰土（ハードローム）
6.淡灰褐色火山灰土（やや粘質を持つ白・黄・灰の3～4㎜、3～8㎜の軟石を多く含む）
7.灰色（微粒）火山灰土（上のホーキ）
8.7層と同じ内容を示す
9.淡茶灰色（細粒）火山灰土
10.5㎜前後の軽石
11.アイラ
12.淡黄赤色粘質土
13.淡暗黄赤色粘質土
14.7層と同じ内容を示す（下の下のホーキ）
15.明赤褐色粘質土
16.淡明黄褐色粘質土
17.淡灰橙色火山灰土
18.淡茶灰色（微砂、粘質）火山灰土
19.灰色（細粒）火山灰土
20.灰色粘質土
21.黄色土ブロック黒色土混土
22.暗褐色土（造成土）
23.淡暗褐色土（造成土）
24.淡灰褐色土
25.暗赤褐色土
26.6層と基本的には同じ砂粒が小さく少ない
27.淡灰黄色火山灰土（粗粒）
28.花崗岩風化土
29.灰色火山砂（細砂）
30.灰色火山砂（細砂）
31.淡褐色火山砂（微砂）
32.淡茶灰色火山灰土
33.淡灰色火山灰土（粗粒）
34.淡黄褐色火山灰土（微粒）
35.9層の灰色が強くない
36.9層より白色がかっている
37.灰色火山灰土
38.淡明黄褐色火山灰土
39.灰色火山灰土（粗粒）
40.6層の微粒
41.5層と風化土が混る
42.赤黄褐色（水による酸化）

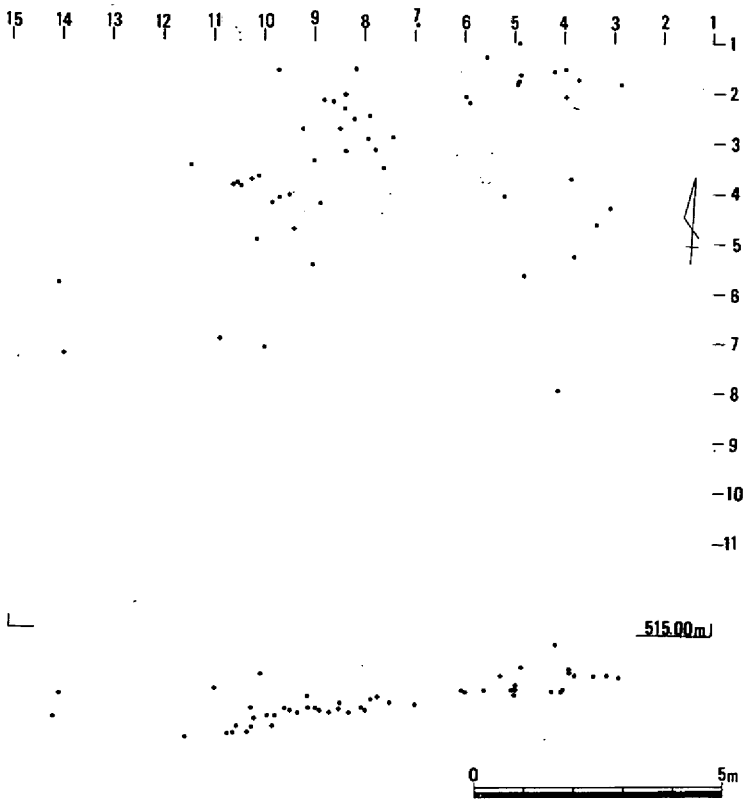


第48図　南－北土層断面図（1／80）

た部分に相当すると推測される。

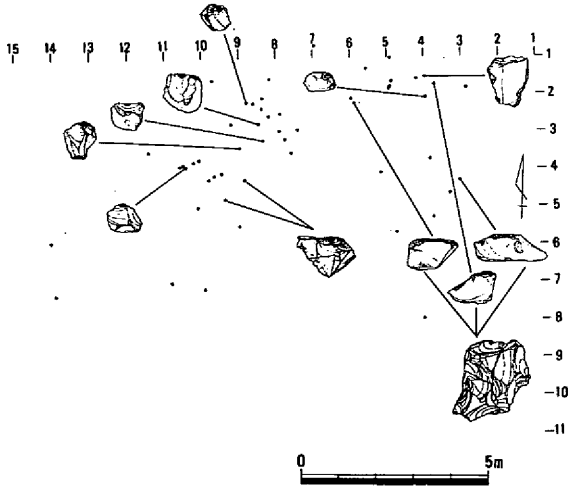
土層関係は、先に中山西遺跡において詳細に述べたが、この地点について若干触れておく。黒ボコを排土したソフトローム面においては、ほぼ平坦な地形を示している。ＡＴ上面までの堆積は、約150㎝平均でみられるが北西へ向かうにしたがいその厚さをます。この間において

第49図　石器・炭化粒分布図（1／200）



第50図　石器分布図（1／150）

は、水の影響を受けた部分（第47・48図）が認められたが、ＡＴに達するまでにいたっていない。ＡＴは、調査区全域にわたって認められ、その厚さは薄い所で15cm、最も厚い所で37cmを測る。ＡＴ直下の地形は、第49図に示した如く北西側に下がって行く地形を呈している。このＡＴ直下の地形は、調査区東隅よりが北から回り込むように高くなり、北西側に向かって下がって行く微地形を形成している。下がりは、等高線で

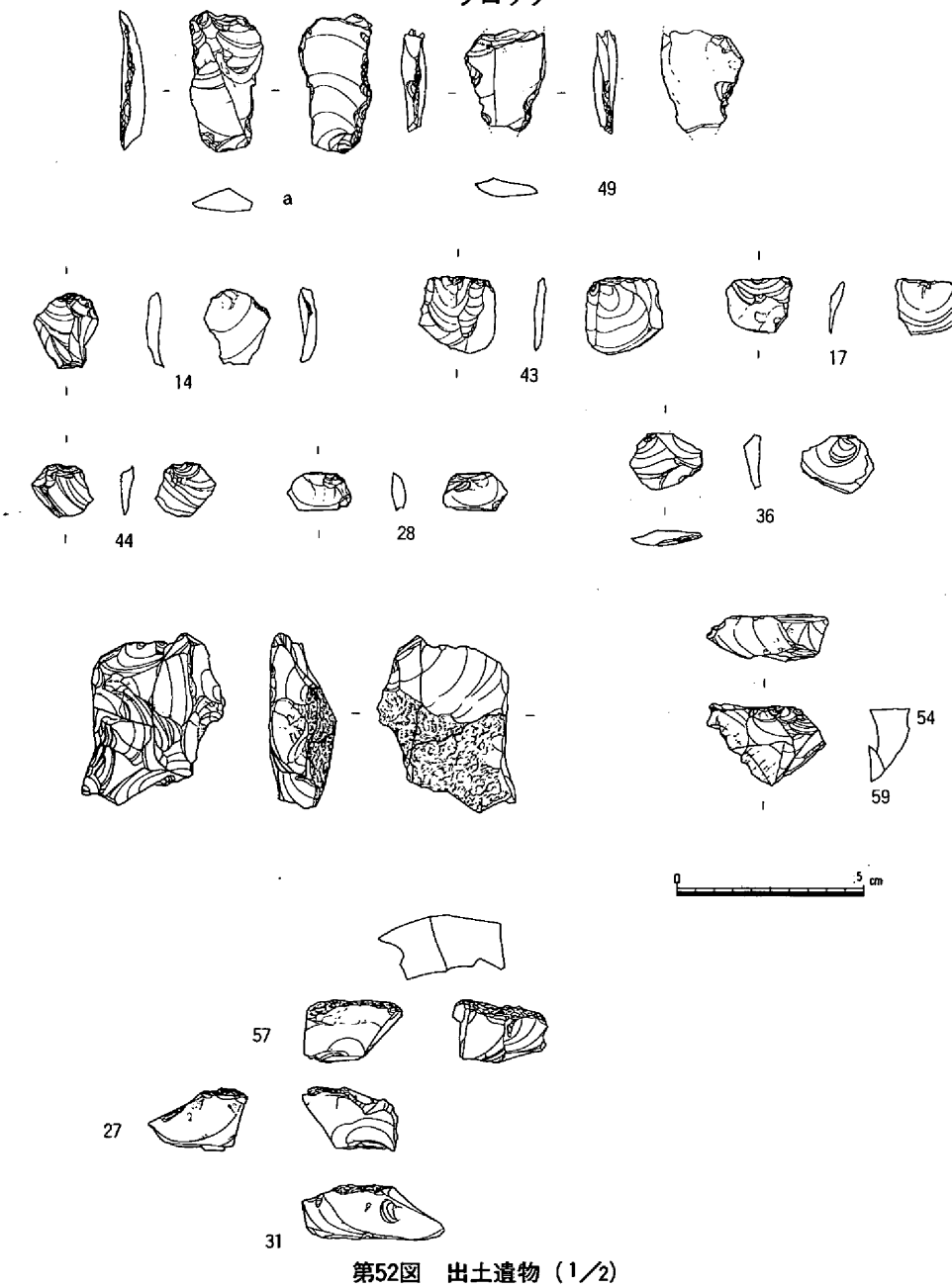


第51図　製品と接合資料分布図（1／200）

514ｍ付近までは緩やか傾斜を示すが、さらに北西側については下がりを強めて行く。遺物分布は、この傾斜の緩やか部分に認められ、分布もこの地形に沿っており出土深度は15cm前後であり、比較的浅くなっている。

岩宿時代の遺構・遺物

ブロック



第52図　出土遺物（1／2）

ブロック（第49図）

石器と炭化粒の分布（第49図）は、前述した北東方向へなだらかに下がって行く緩斜面に東西12m、南北5.8mにわたって見られる。両者の分布は、3か所のブロック状に認められ、調査区中央に一次調査時のトレンチ南端部に集中するようであるが、石器のみの分布（第50図）をみると散漫な状況が認められる。このようなことから単一のブロックとした。

出土遺物（第52図）は、すべて黒曜石である。ナイフ形石器は、**a**、**14**、**28**、**36**、**49**である。**a**は、一次調査時に出土したものである。一側面にブランティングを行なっている。**49**は、両側面にブランティングがみられ、上半と下半は欠失している。**14**、**28**、**36**は、小さい剝片を用いたもので打面を残している。使用痕が認められる剝片は、**17**、**43**、**44**である。何れも一側面

表－3

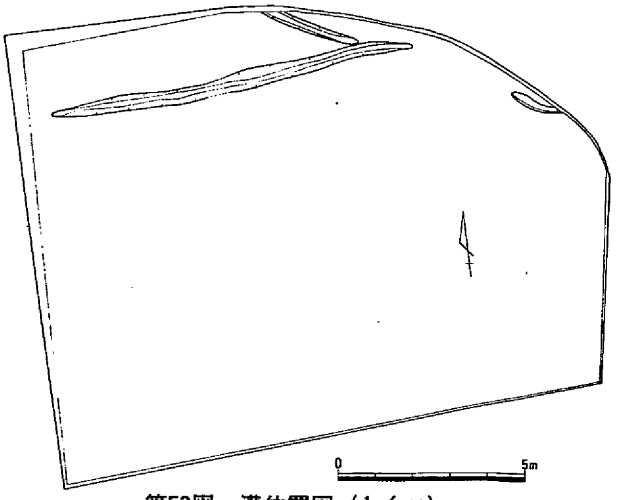
石器番号	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g
一次調査	黒曜石	37	19.5	6.5	3.36
49	〃	27.5	21.6	6	3.15
14	〃	20	17	4.5	1.05
43	〃	20.5	20.5	4.5	1.44
17	〃	15	17.5	4.1	0.50
44	〃	14	16	3,3	0.55
28	〃	10.5	17.5	3,8	0.62
36	〃	15.5	19	4	0.90
57・27・31	〃	37.5	47	18	26.63
54・59	〃	22	32	11.5	6.45

に微細な剝離痕が認められている。接合資料は、**27－31－57**と**54－59**である。

時期不明の遺構

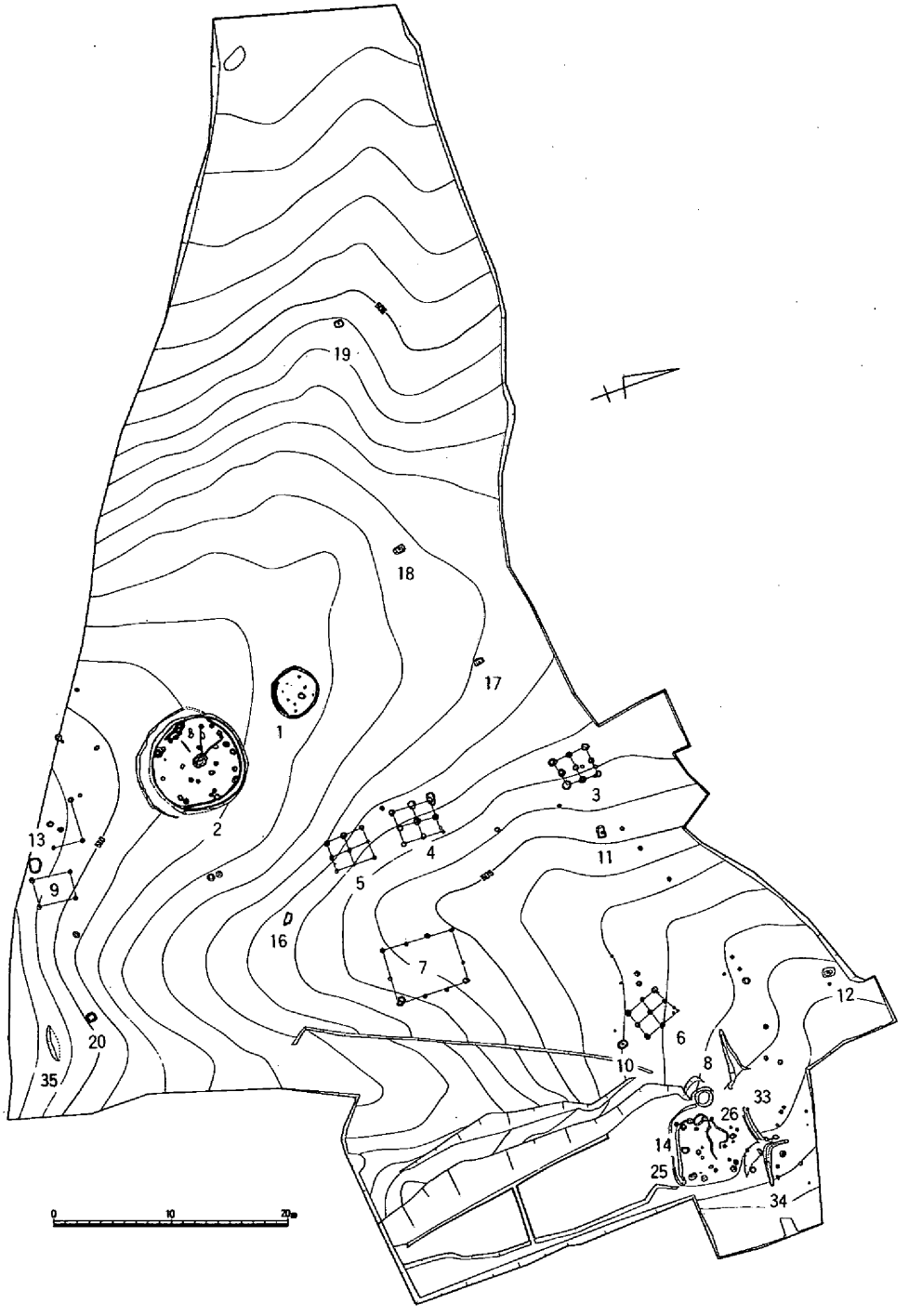
溝

調査区の北端に黒ボコ直下のソフトローム面に検出された。東西方向と北西から南東へのびる溝である。前者は、幅1m前後、深さ10cmほどのものである。調査区内で切れてしまうが本来は黒ボコ中に存在したものと推測される。後者は、中央が切れているが溝が浅くなり切れたものであり、同一のものと考えるのが妥当であろう。



第53図　溝位置図（1／200）

4　城山東遺跡Ⅳ区



第54図　城山東遺跡Ⅳ区遺構配置図（1／600）

城山東遺跡Ⅴ区を通る村道堂ノ前・延助線を境にして北側の丘陵に位置する。この村道は、遺跡地を南東から北東へ走っているためⅣ区とⅤ区が分断されている状況であるが、本来は同一丘陵である。調査区は、東に広く西に狭くなっている。地形的には、調査区中央にのびる高みがあり、その西側は緩斜面に、東側は緩やかな谷が入り込んでいる。

このⅣ区からは、縄文時代と考えられる落し穴、弥生時代の竪穴住居が検出されている。そして、この地域では初見の奈良期の遺構が確認されたのである。

縄文時代の遺構

落し穴

No.10ー落し穴（第55図）

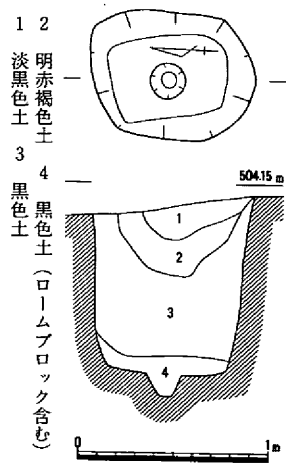
調査区東よりのNo.6ー建物の南側に位置する。規模は、85×72cm、深さ90cmを測る。平面形態は、全体が膨らみを有し、底は方形を呈する。底には、径19cm、深さ11cmのピットが認められる。埋土は、黒色土が基調となる。

No11ー落し穴（第56図）

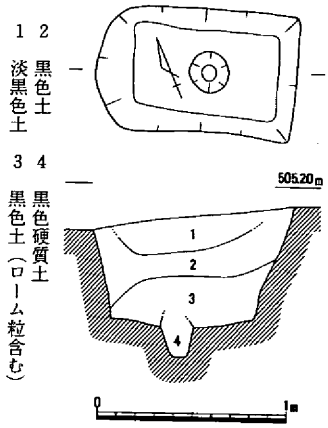
調査区中央から北東よりのNo.3ー建物の東側に位置する。規模は、106×65cm、深さ59cmを測る。平面形態は、方形を呈する。底には、22×20cm、深さ15cmのピットが認められた。埋土は、黒色土が基調となる。

No.12ー落し穴（第57図）

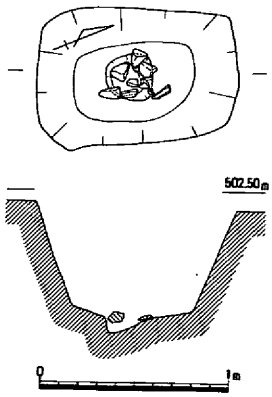
調査区北東隅に位置する。規模は、107×72cm、深さ59cmを測る。平面形態は、方形を呈し、底はやや楕円気味である。底には、径24cm、深さ9cmの不整形なピットが認められるが、ピットと言うより凹み状である。そして、その上に礫が10個ほど認められた。断面形態は、やや外方に開いている。



第55図　No.10-落し穴（1／40）



第56図　No.11-落し穴（1／40）



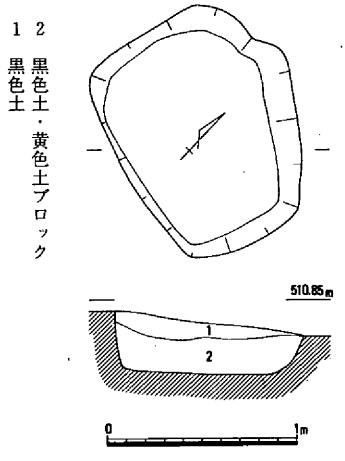
第57図　No.12-落し穴（1／40）

No.13ー落し穴（第58図）

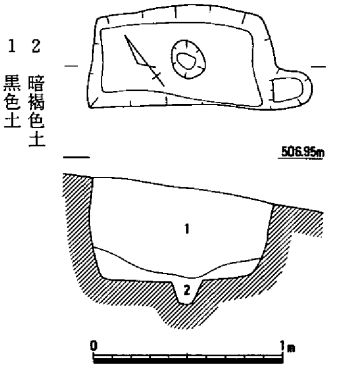
調査区中央の南端よりに位置する。規模は、125×100cm、深さ32cmを測る。平面形態は、西辺が大きく広がる不整方形を呈する。他の落し穴と様相が異なり、土壙として取り扱うのが妥当であろうか。埋土は、黒色土が基調となる。

No.16ー落し穴（第59図）

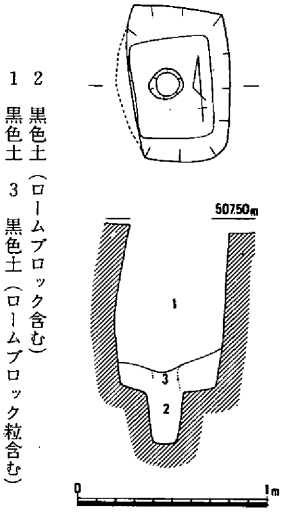
調査区中央やや北東よりに位置する。規模は、95×53cm、深さ52cmを測る。平面形態は、方



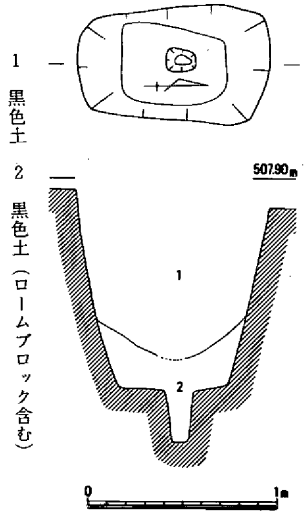
第58図　No.13-落し穴（1／20）



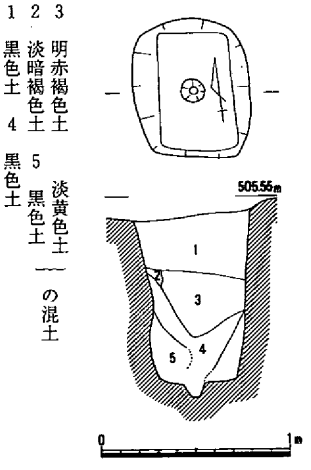
第59図　No.16-落し穴（1／40）



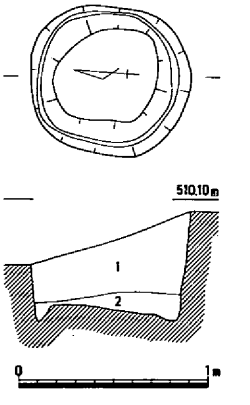
第60図　No.17-落し穴（1／40）



第61図　No.18-落し穴（1／40）



第62図　No.19-落し穴（1／40）



1.黒色土（ローム粒含む）
2.黒色土（ロームブロック含む）

第63図　No.20-落し穴（1／40）

形を呈する。底には、21×17cm、深さ12cmの円形のピットが認められる。断面形態は、垂直に立ち上がり気味となる。北東辺に認められる張り出しは、深さ２０cmほどであるがこの落し穴との関係は不明である。埋土は、黒色土が基調となる。

No.17一落し穴（第60図）

調査区中央北よりに位置する。規模は、82×52cm、深さ88cmを測る。平面形態は、方形を呈する。底には、18×16cm、深さ25cmの円形のピットが認められる。断面形態は、西辺が掘り方よりも外に入り込んでいる。埋土は、黒色土が基調となる。

No.18一落し穴（第61図）

調査区中央やや北西よりに位置する。規模は、102×60cm、深さ104cmを測る。平面形態は、長方形を呈する。底には、15×12cm、深さ28cmの不整円形のピットが認められる。埋土は、黒色土が基調となる。

No.19一落し穴（第62図）

調査区西よりの緩斜面部に位置する。規模は、72×61cm、深さ88cmを測る。平面形態は、丸味を有する方形を呈する。底には、径12cm、深さ18cmのピットが認められる。埋土は、黒色土が基調となる。

No.20一落し穴（第63図）

調査区南東隅よりに位置する。規模は、84×78cm、深さ46cmを測る。平面形態は、円形を呈する。底には、幅10cm、深さ８cmほどの溝が巡っている。形態的に落し穴として取り扱うか問題があろう。埋土は、黒色土が基調となる。

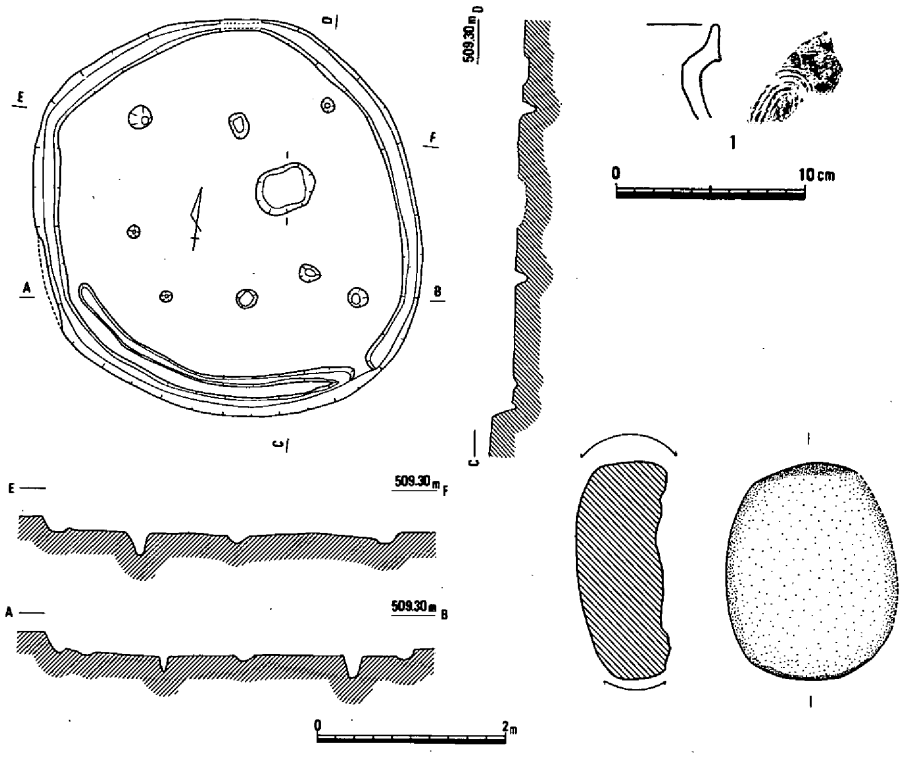
弥生時代の遺構・遺物

竪穴住居

No.１一竪穴住居（第64図）

調査区のほぼ中央のNo.２一竪穴住居北西側に位置する。規模は、425×410cm床面までの深さは残りの良い部分で20cmほどあり、壁がほとんど認められない所もある。形態は、北西部分が角を持ち他は弧を描いており、ほぼ円形を呈する。壁帯溝は、南側に二重になった部分が認められることから拡張されたと考えられる。ピットは、９個認められたがそのうち柱穴となりうるものは大きいもので25cm、小さいもので13cm前後で深さも25cmである。

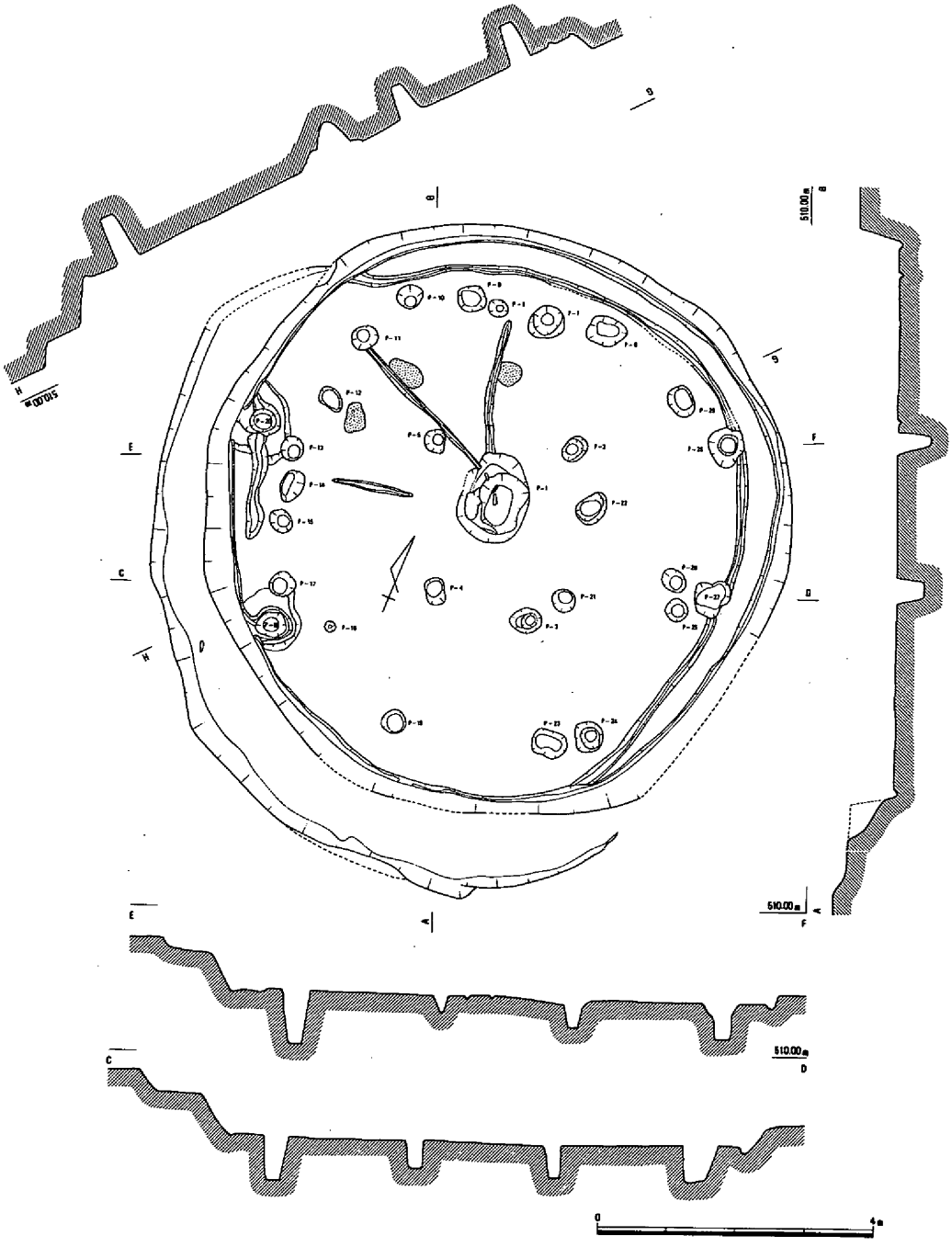
出土遺物は、石器と土器片である。１は、壺形土器の小片である。口縁部が外方へ屈曲し、端部は上方へ立ち上がる。頸部は、やや外方へ広がる器形を示すものと考えられる。口縁端部には、沈線文が５本施され頸部においては楕円状の文様を描いているが小片のため詳細は不詳である。叩き石は、壁帯溝から出土し３分の１ほど欠失している。大きさは、8.6×3.3cm＋αで、上下端に叩き痕が認められる。



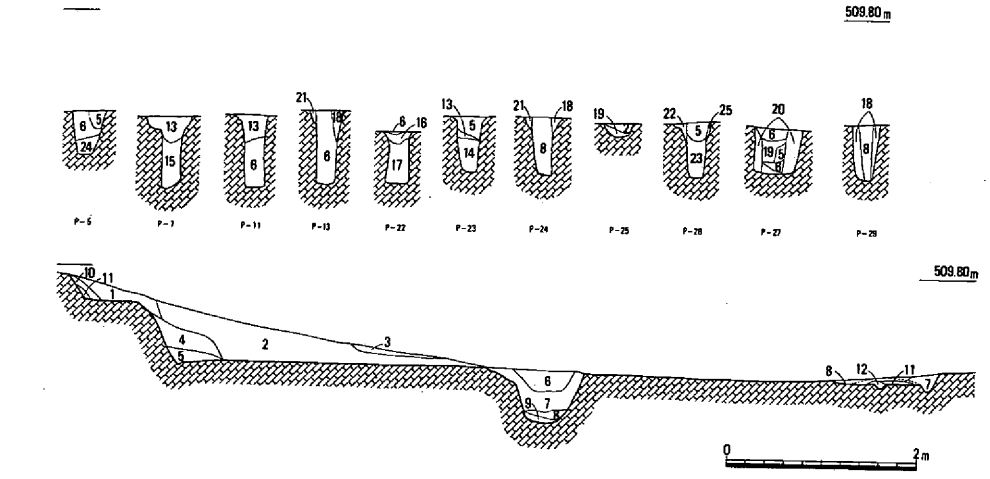
第64図　No. 1 -竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／2）

No. 2 ー竪穴住居（第65図）

調査区中央のNo. 1 ー竪穴住居の南側に位置する。規模は、880×840cm、形態は円形を呈する。住居の南西側に幅60～100cm、壁高30cm前後のテラスを設けている。このテラスは、住居の3分の2ほど巡っており当住居に伴うものである。床面には、二重に壁帯溝が認められ拡張されたことが知られる。柱穴は、壁帯溝の関係から二時期に組合せなければならない。単純に柱穴の位置関係からⅠ期は、7・10・13・17・19・23・26・29で、Ⅱ期は6・10・13・17・19・24・27・28となり両時期とも8本柱である。Ⅰ期の7・11・23・26は、黄色ブロックで床面まで埋められⅡ期においては使用されていない状態であった。そして、Ⅱ期に新たに設けられた柱穴は、6・10・24・27・28である。また、13・17・19はⅠ期とⅡ期に継続して使用されている。このような柱穴の新旧の関係は、住居の拡張に伴って生じたものであろう。拡張は、北東側のほぼ半ばほどを幅80cmについてみられる。この拡張により外側に張り出した起点となる所から23に対し24、11に対し10という如く接して認められる。この関係は拡張された側においても26と27、28と29、7と6というごとく接して認められる。このことは、拡張が済んだ段階で24・27・28・6・10を設け、上屋の一部を造り直し不要となった23・26・7・11を埋め戻

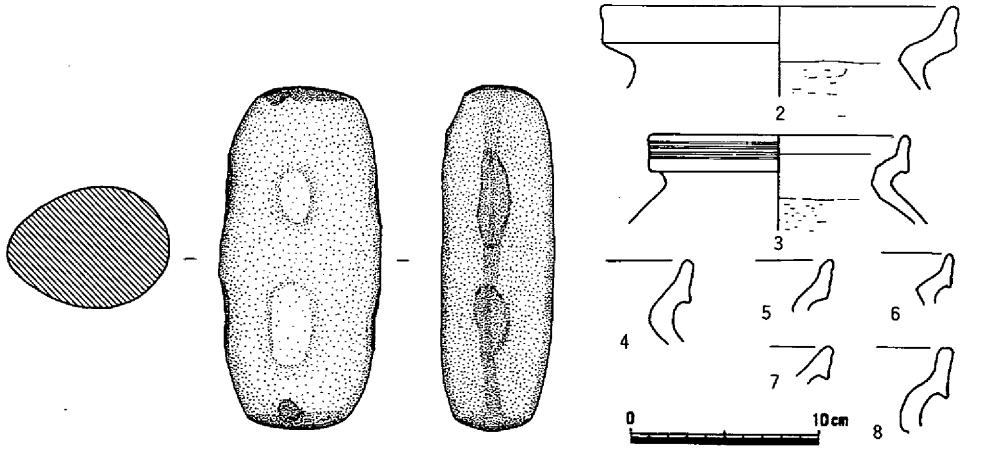


第65図　No. 2 -竪穴住居（1／100）



1 黒色土（黄色土ブロック・灰色ブロックの3～4㎜大を含む）
2 黒色土（黄色土ブロックの3～5㎜大を多く含む）
3 黒色土（黄色土ブロックの1～数㎜大を僅かに含む）
4 黒色土（黄色土ブロックの1㎜大を少量含む）
5 黄色土ブロック
6 黒色土
7 淡黒色土（黄色土ブロックの数㎜大を含む）
8 黒色土（黄色土ブロックの数㎜大を含む）
9 暗灰白褐色土（砂質）
10 ソフトロームとホーキ層のブロック
11 ソフトローム
12 黄褐色土
13 黄色土と黒色土の混土層
14 灰色土
15 暗灰色土
16 黄褐色土（ブロック）
17 暗黄褐色土
18 黄色土
19 淡暗褐色土
20 14層と同じ
21 灰白色土
22 灰色土（黄色土まじる）
23 灰白色土・黄色土・黒色土の混合層
24 灰色土（黒色土まじる）
25 黄色土・灰白色土の混合層
26 暗黄色土

第66図　No. 2-竪穴住居土層断面図（1／80）



第67図　No. 2-出土遺物（1／2・1／4）

したものと思考される。中央には、中央穴を囲むように２・４・５・21が認められる。２以外は、柱根痕が認められることから上部構造に伴うものと考えている。中央穴内には、火を用いたような痕跡はなく、北西隅から２本の溝が延びている。西側の壁沿いに、２か所のピットが認められる。何れもピットの周囲に土手状の高まりをつくる。この土手状の高まりは、床面の上に土を盛ってつくられている。深さは、35cmと20cmで柱穴よりも浅くなる。

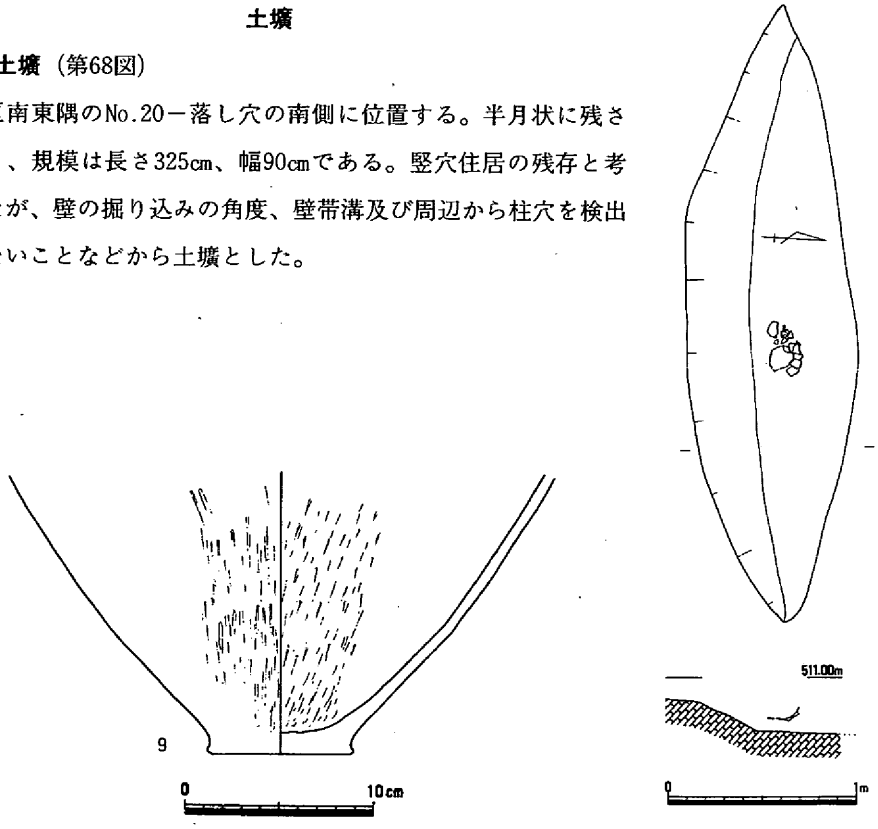
焼土面は、３か所認められその内の２か所は先述した細い溝に切られている。焼土面は、床面が若干赤色に変色しているだけで床面の下層まで影響していない。

出土遺物は、土器と石器である。**2**は、中央穴から出土し推定口径8.5cmを測る甕形土器である。くの字状に屈曲する頸部から上方に立ち上がる口縁部をつくる。**3**は、推定口径35cmの甕形土器で、口縁端面に沈線が４本施文される。**4～8**は頸部をくの字状に屈曲させ、上方に立ち上がる口縁部を持つ甕形土器の小片である。**5・6・8**は、口縁端面に沈線を、**8**はその上からナデを行なっている。石器は、両側面上下に凹みを持ち、両面には側面の凹みに対応するところに摩滅した部分を認める。この上下端は叩き痕が認められる。

土壙

No.35－土壙（第68図）

調査区南東隅のNo.20－落し穴の南側に位置する。半月状に残されており、規模は長さ325cm、幅90cmである。竪穴住居の残存と考えられたが、壁の掘り込みの角度、壁帯溝及び周辺から柱穴を検出していないことなどから土壙とした。



第68図　No.35-土壙（1／40）・出土遺物（1／4）

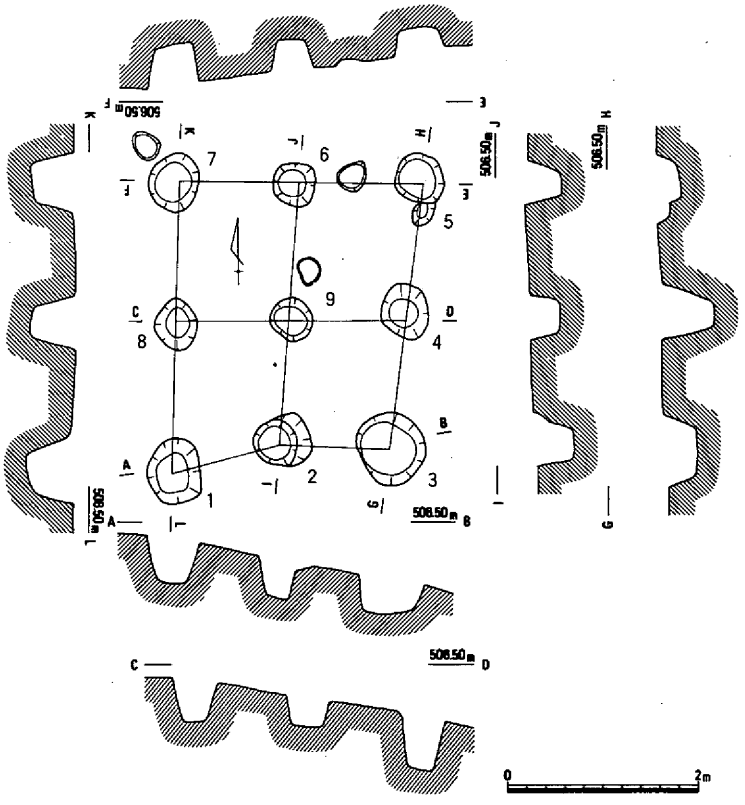
奈良時代の遺構・遺物

建物

No. 3 －建物（第69図）

調査区中央北よりに位置する。桁行２間、梁間２間の総柱建物である。規模は、北梁間260cm、南梁間230cm、東桁行270cm、西桁行300cmを測る。柱穴間の西桁行の距離が150cmと等しいものであるが、桁及び梁も等間隔にならず特に南梁間はかなり変形している。建物の立地が地形的に斜面にあるためその制約を受けたものと推量される。柱穴は、径45～75cmの円形を呈する。深さは、遺構が確認されたソフトローム面から25～55cmである。

No. 4 －建物（第70図）



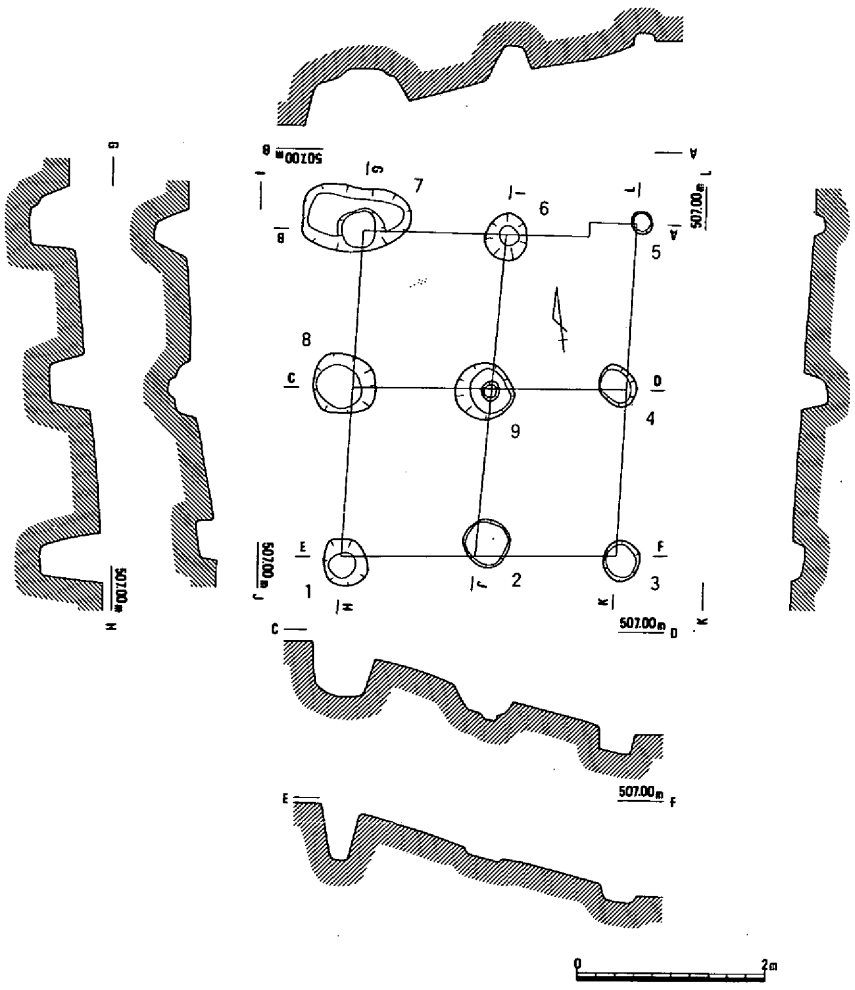
第69図　No. 3 -建物（1／80）

調査区中央のNo. 5 －建物の北側に接して位置している。南北棟で桁行２間、梁間２間の総柱建物である。規模は、北梁間300cm、南梁間290cm、東桁行360cm、西桁行350cmと若干の差異が認められる。柱穴は、径23～65cmの円形を呈している。柱穴５は、径23cmと最も小さいもので７・６・９などの底面の状態は斜めの状態を呈している。柱穴の掘り方は、９が二段掘りが

見られ深さは７～55cmというごとく極めてばらつきが大きい。棟方向は、Ｎ－９°－Ｅである。

No. 5 －建物（第71図）

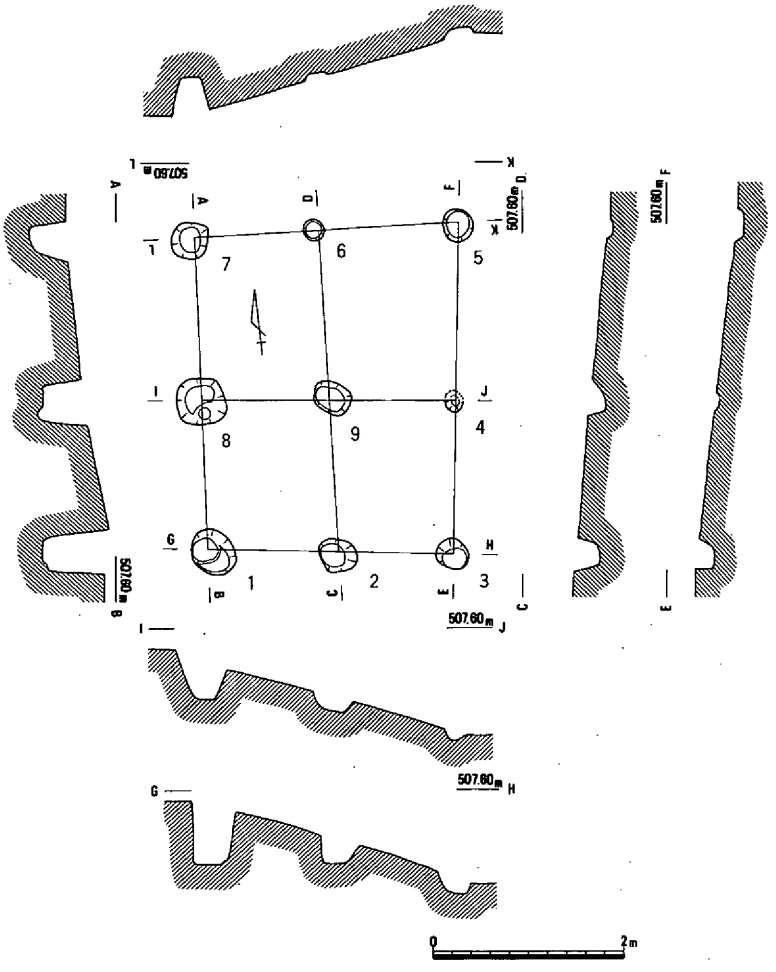
調査区ほぼ中央のNo. 4 －建物の南側に接して位置する。桁行２間、梁間２間の総柱建物で



第70図　No. 4 -建物（1／80）

ある。規模は、北梁間280cm、南梁間260cm、東桁行350cm、西桁行330cmを測る。南梁間が130cmで等間隔になるが他は、ばらつきが認められる。柱穴は、径20～50cmのもので深さ７～80cmを測る。この深さの差は、No. 3 －建物と同じように斜面に位置し、黒ボコの堆積が厚かったことに起因するものであろう。従って、柱穴４などはソフトローム面で半分ほどやっと検出できたという状況であった。棟方向は、Ｎ－７°－Ｅである。

No. 6 －建物（第72図）

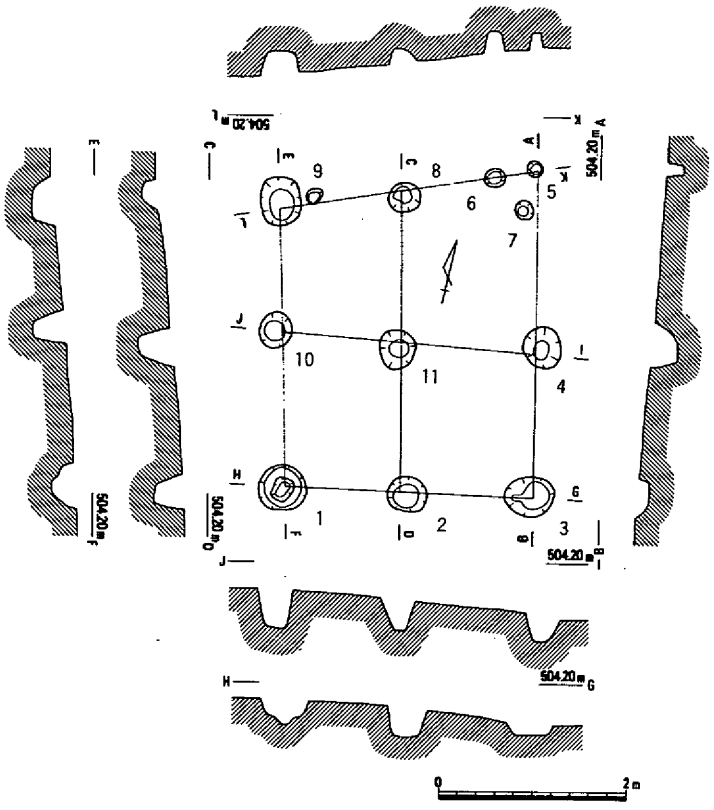


第71図　No. 5 -建物（1／80）

調査区東よりのNo.10－落し穴の北側に位置する。桁行２間、梁間２間の総柱建物である。規模は、北梁間275cm、南梁間260cm、東桁行345cm、西桁行300cmを測る。柱穴の配置は、極めて不規則であり柱穴５～７は径20cm深さ12～20cmで他と比較しても貧弱なものである。しかし、この３本の柱穴が同時に存在し、使用されたと考えた方がより妥当なことであろうか。何れにしても各柱穴間は、等間隔を示さない変形した配置をしている。やはり他の建物と同様に斜面に立地することからの要因が最も大きいのであろうか。他の柱穴の大きさは、40～50cm、深さ15～40cmを測り比較的先の３本のそれに対してより纏った内容を示す。棟方向は、N－13°－Eである。

No. 7－建物（第73図）

調査区中央のNo. 4 ・ 5－建物の東側に位置する。南北棟で桁行３間、梁行２間の建物とな



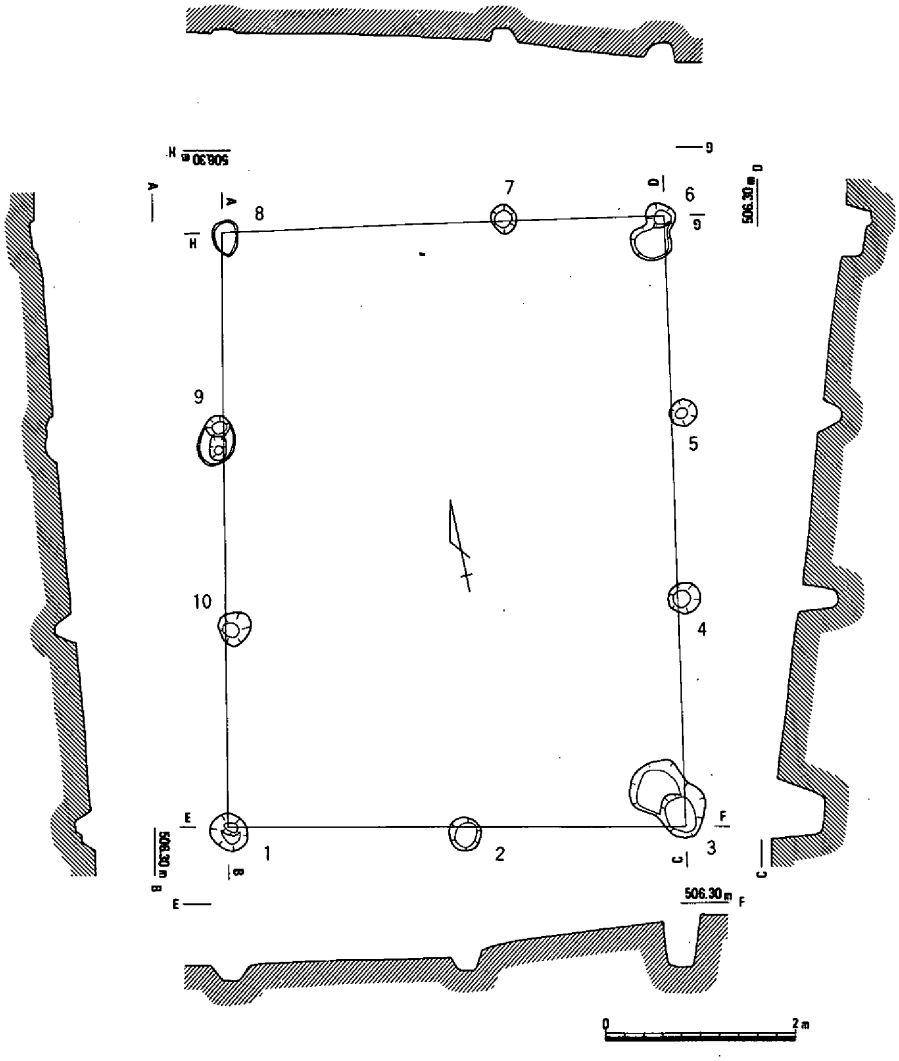
第72図　No. 6 -建物（1／80）

る。規模は、北梁間470cm、南梁間480cm、東桁行645cm、西桁行625cmを測る。梁間は、北梁間が300cm、150cmと南梁間が250cm、235cmとなり等間隔にならない。特に、柱穴7は東桁に寄っていることから極めて不規則な配置に見られる。柱穴は、径30～50cmでほぼ円形を呈するものである。柱穴3・6・9が重複がみられるが、前後関係が把握されたのは3である。これによると、柱穴埋土の黒色土を切って掘られており柱根痕の埋土である黄色土と黒色土の混土が認められた。

他の建物が総柱建物であり倉庫を想定することができることから、当然柱穴の配置と掘り方もしっかりした内容を有するはずである。しかしながら、それぞれの建物について述べたように逆の内容を少なからず示している。そして、当建物については梁間の柱穴の位置が問題となるが、建物の基本である桁行と梁間がほど直角をなし総柱建物のそれと対象を見せている。棟方向は、N－10°－Eである。

No. 9 －建物（第74図）

調査区中央南端よりのNo13－土壙の東側に位置する。桁行1間、梁間1間の建物である。規



第73図　No. 7-建物（1／80）

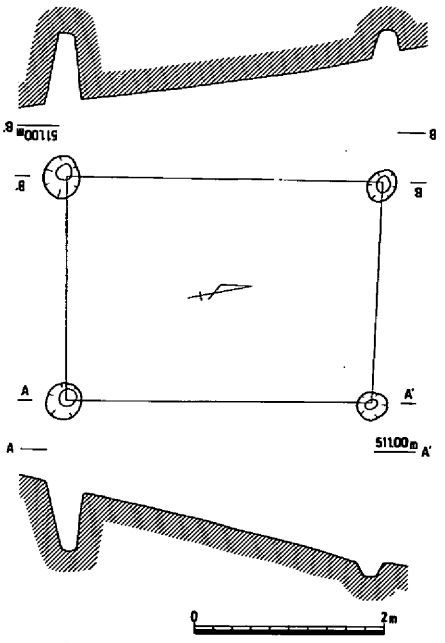
模は、南と北の梁間235cm、東桁行320cm、西桁行325cmを測る。柱穴の大きさは、30～45cm、深さ15～75cmを測る。ソフトローム面での検出は、斜面の角度がきつく建物として把握するかどうか迷った。しかしながら、柱穴間の距離と柱穴底の高さが近似することから建物とした。なお、この建物が先の一連の建物群と時期的に同じとして扱うことは、その内容から躊躇せざるをえない。

土壙

No. 25－土壙（第75図）

調査区東端の鍛冶炉の北側に接して位置する。規模は、47×45cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。柱穴とも考えられたが、土層断面の観察で黒色土を埋土としており柱痕は認められなかった。

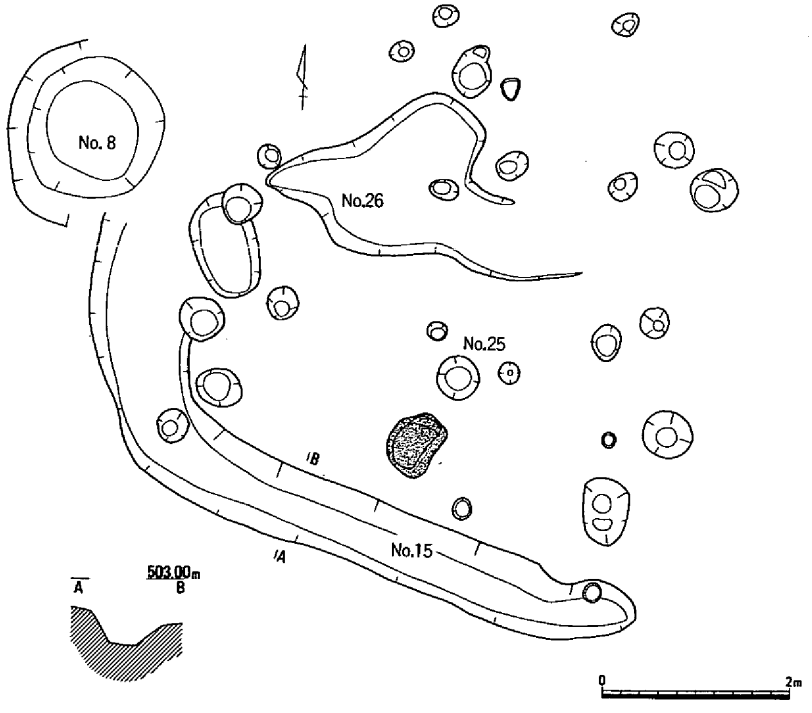
出土遺物（第76図）は、須恵器が検出されている。**10・11**は、杯蓋であり口縁端部が下方に折れ曲がるものである。**12**は、杯身の小片で外方へ向く高台を付している。**13**は、底部の小片で糸きり痕が認める。



第74図　No. 9－建物（1／80）

No. 26－土壙（第75図）

調査区東端よりに位置する。不整形な土壙であるが、凹み状としたほうが良いかもしれないものである。深さは、6～18cmで東に行くにし



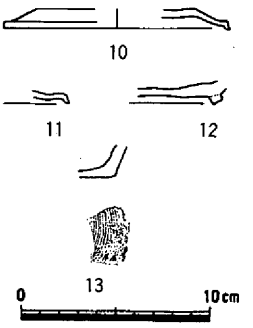
第75図　炉跡周辺遺構配置図（1／80）

たがい立ち上がってしまう。

鍛冶炉

No.14－鍛冶炉（第75・77図）

調査区東端のNo.25－土壙の南側に接して位置する。規模は、65×50cmの不整形な隅円方形を呈する。極めてよく焼けているが、鉄滓などの遺物は認められていない。

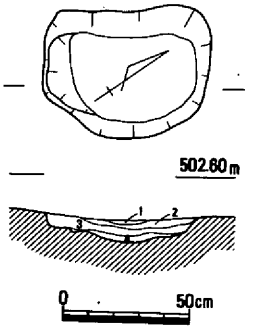


第76図　No.25-出土遺物（1／4）

溝

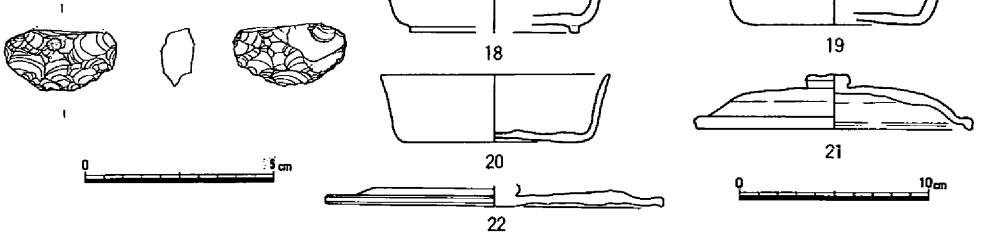
No.15－溝（第78図）

調査区北東端のNo.14－鍛冶炉の南側に位置する。溝は、南東から北西に5.50ｍほど続きさらに北へ２ｍのびて自然に立ち上がる。深さは、両端付近が３～４cm中央部で75～100cmと深くなっている。断面形態は、南西辺が垂直に近く内側は緩やかな掘込みをしている。



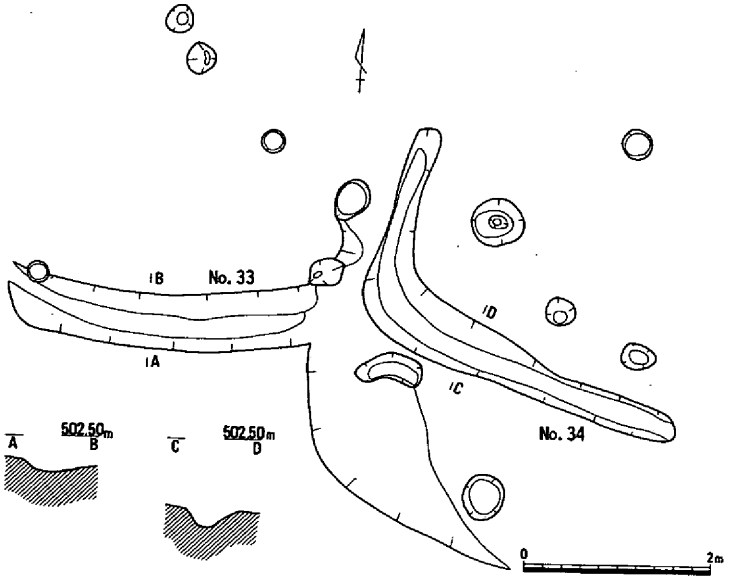
第77図　No.14-鍛冶炉（1／30）

出土遺物（第78図）は、須恵器である。**16**は、口径13.3cm、器高4.9cm、高台径4.9cmの高台付杯である。口縁は外方に広がり、高台は底部屈曲部内側に直立気味に付されている。胎土は、砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、色調は外面灰白色内面灰色を呈する。**14**は、口径12.9cm、器高3.8cm、高台径９cmの高台付杯である。口縁は底部の屈曲部から外方へ広がりさらに外へ開き気味となる。高台は、底部屈曲内側より付している。胎土は、砂粒多く焼成は良好で、色調は外面灰白色を内面灰色を示す。**18**は高台付杯の小片である。**20**は、口径

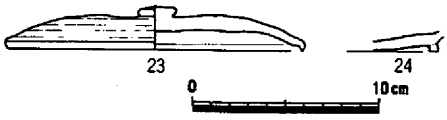


第78図　No.15-出土遺物（1／2・1／4）

12.1cm、器高3.6cm、底径9.6cmを測る杯身である。底部の屈曲は丸くなり、上げ底気味になる。胎土は、微砂を含み焼成は良好である。二次的な火を受けて器面が傷んでいる。17・18は、杯身の小片である。21は、口径14.3cm、器高3.9cmを測る杯蓋である。器高は、比較的高く口縁端部は下方に屈曲させている。胎土は、砂粒を多く焼成は良好で、色調は灰色を示す。内面に窯印を認める。22は、口径17.8cm、器高1.2cmを測る杯蓋である。器高は扁平であり、口縁部



第79図　No. 33・34-溝（1／80）



第80図　No. 33-出土遺物

は下方に屈曲させている。屈曲部端面は凹部をなしている。つまみは、扁平なものが付されているようである。胎土は、砂粒を含み色調は灰色を示す。石器は、黒曜石の石核で最大長16.5mm、幅30mm、厚さ8.5 mmを測る。

No. 33－溝（第79図）

調査区東端のNo.15－溝の北側に位置する。東西方向にのびる3.2mほどのやや丸味を持つ溝である。東西の両端とも自然に立ち上がってしまうもので、中央での深さは8cmほどである。断面形態は、外側の壁面の角度がきつく内面は緩くなっている。

出土遺物（第80図）は、須恵器である。23は、口径15.8cm、器高2.3cmを測る擬宝珠様の付く杯蓋である。胎土は、石粒を含み焼成は良好で、色調は灰色を示す。24は高台付きの杯身の小片である。

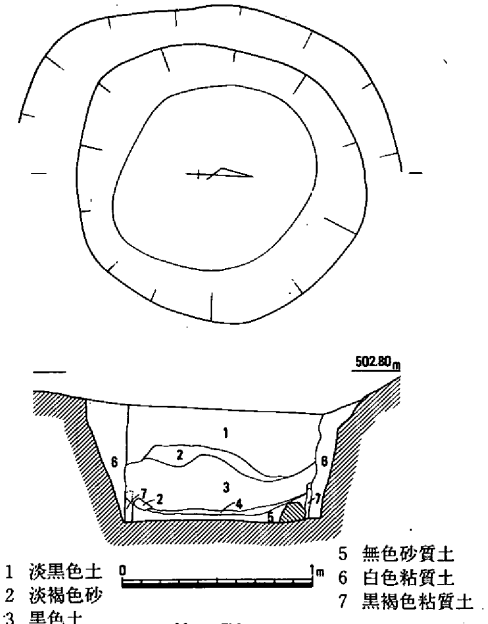
No. 34－溝（第79図）

調査区東端のNo.33－溝の東に位置する。L字状になる溝で深さ16cm前後となり、両端は自然に立ち上がり気味で先述のNo.33－溝と近い内容を示す。

井戸

No. 8－井戸（第81図）

調査区東端のNo.15－溝の西に接して位置する。規模は、二段掘りとなっているが検出面で半分ほど削平され欠失しているため推定で２ｍを超えるものと推測される。二段目は、径150cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。底までの深さは約70cmであり、底面の状態は平坦となっている。断面図に見られる７層の黒褐色粘質土は、木質部が認められ６層の白色粘質土が垂直に立ち上がっていることから囲状のものの存在が考慮される。埋土の基調となるものは黒色土であるがその中央と底に砂質系のものがみとめられる。このNo.18について井戸として取り扱ったが、断面図に示したように湧水点まで達していない。しかしながら、井戸囲状の存在及び底に堆積する砂質系の埋土などからこれに近い使用がなされたものと考えるのが妥当であろう。



第81図　No. 8-井戸（1／40）

5　城山東遺跡Ⅴ区

城山東遺跡Ⅳ区の南西端を通る村道堂ノ前・延助線を境にして南側の丘陵に位置する。城山東遺跡Ⅳ区でも述べたが、この村道は遺跡地を南東から北東へ走っているためⅣ区とⅤ区が分断されている状況であるが本来は同一丘陵である。調査区は、南東側が高くかつ広くなり北西側が低くそして狭くなっている。遺構は、この南東よりの平坦で広い部分に形成し、北西よりの斜面部においては遺構の検出はない。検出された遺構は、弥生時代と古墳時代の竪穴住居及び中世の土壙などが確認されている。

弥生時代の遺構・遺物

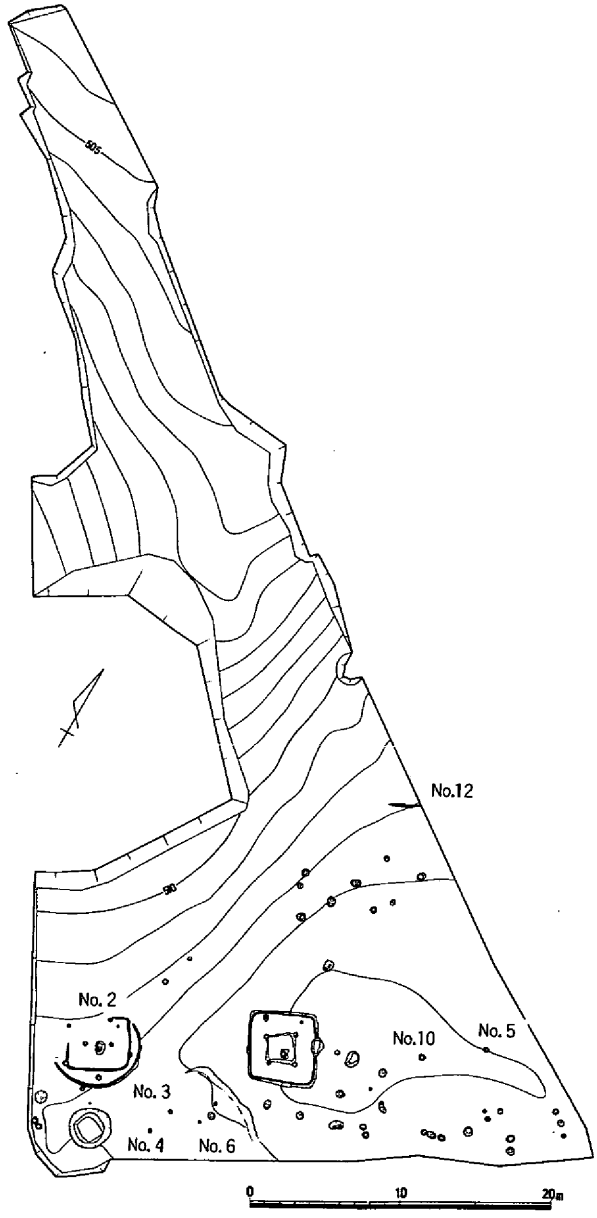
竪穴住居

No. 1－竪穴住居（第83図）

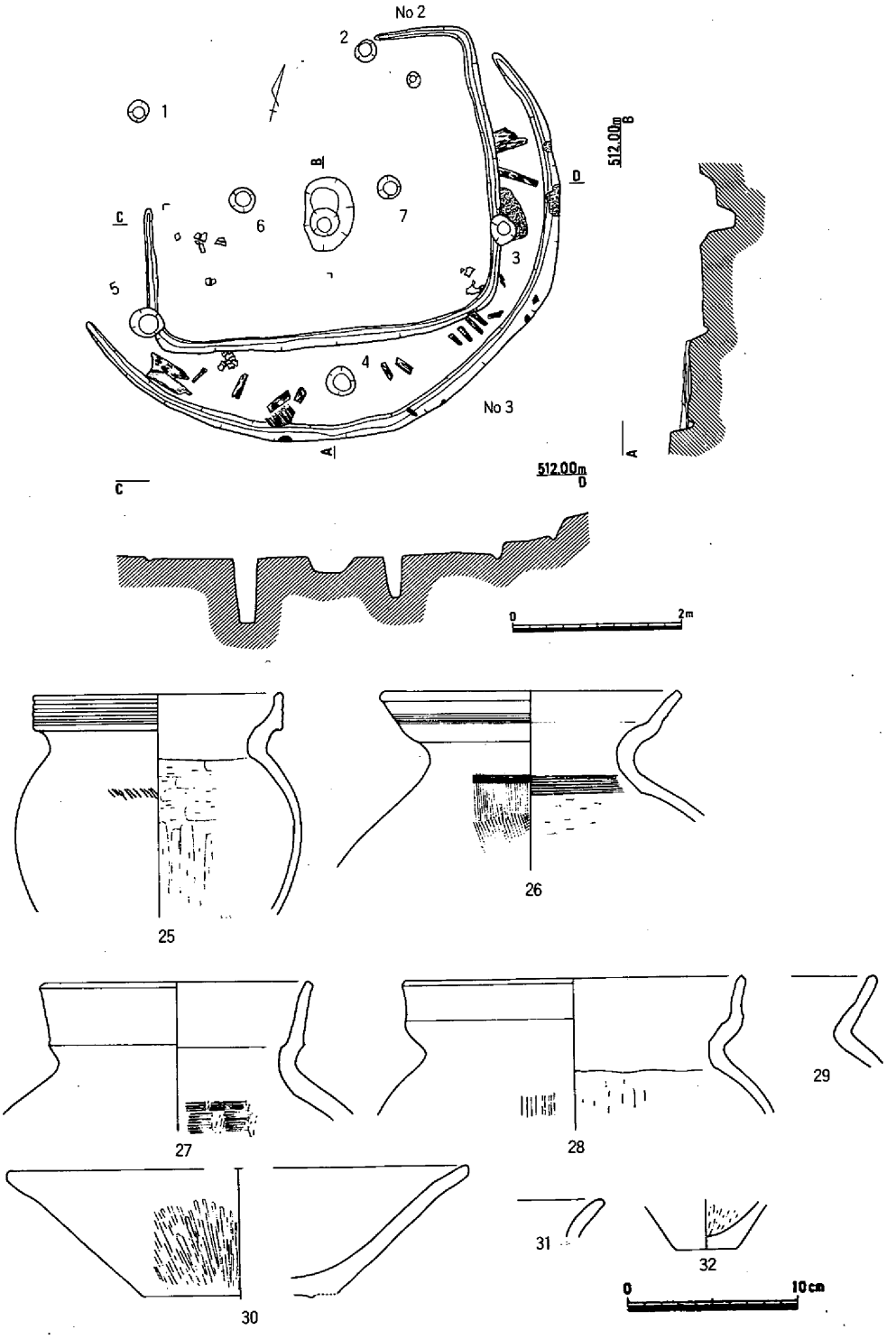
調査区南端よりNo. 4－井戸の北西に接して位置する。規模は、径595cmで平面形態は円形を呈する。遺構確認面から床面までは約23cmを測る。竪穴住居の中央には、ひとまわり小さい古墳時代の方形のNo. 2－竪穴住居が存在する。したがって、この期に属して遺存されたものは

その周辺部であるが、北西側については後世の削平のため消失している。遺存部分が面的に少ないが主要な遺構は確認された。床面には、炭化材と焼土が多く認められ、火災に遭ったものと判断される。柱穴は、1～5の5本柱で五角形の配置が認められる。規模は、1－径27cm深さ24cm、2－27×25cm深さ22cm、3－35×30cm深さ72cm、4－径35cm深さ35cm、5－40×35cm深さ75cmをそれぞれ測る。1と2以外は深く確りした掘り方であるが、1と2は対照的に浅いが先に述べたように削平されていたためと考えられる。詳細には図示できなかったが、柱穴3と4は焼土を除去した後から検出できたものである。また、土層断面図（第83図）におけるA－B間で図が小さ過ぎて判読できない嫌いがあるため若干の説明を加えておく。床面の整形段階で凹んだ部分に黄色ブロックを補充して平坦にし床面を作り、その上に火災によると見られる炭が、更に焼土が堆積した様子が確認できるのである。このことから、屋根の上に土を置いていたということが考えられるのである。

出土遺物（第83図）は、柱穴5の東南側の床面より検出された。25は口径4.5cmを測る甕形土器である。くの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁部をつくる。文様は、口縁端部に沈線4本が施文されている。施文具は、貝による可能性が考えられる。頸部下半には、貝の刺突がある。調整は、外面の胴上半から下半にかけてヘラミガキが、内面頸部下半からヨ



第82図　城山東遺跡Ⅴ区遺構配置図（1／500）



第83図　No. 1・2-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

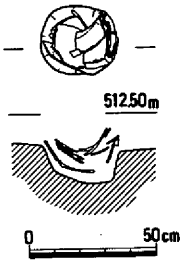
コヘラケズリ、胴下半にかけてはタテヘラケズリが見られる。

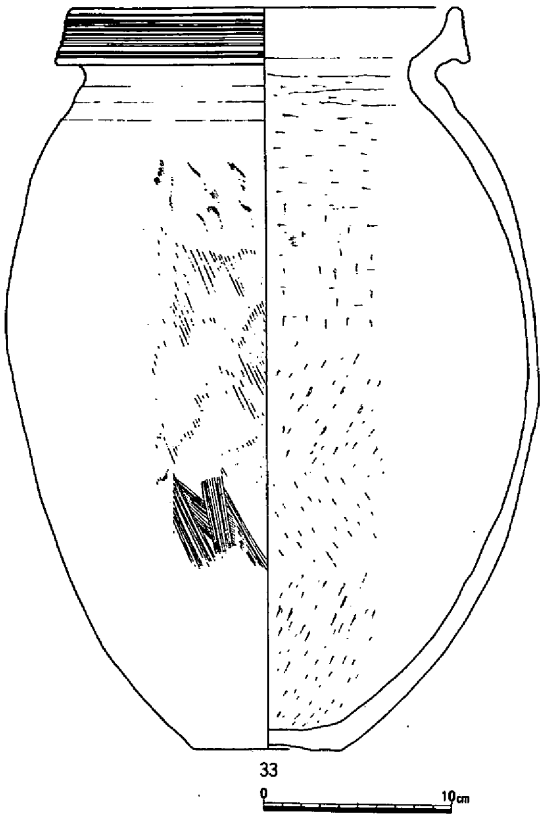
土壙

No. 5 一土壙（第84図）

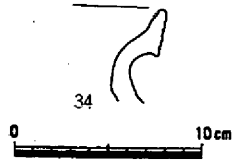
調査区東端よりに位置する。規模は、30×27cm深さ16cmを測る。平面形態は、円形を呈する。土壙内には、甕形土器が潰された状態で検出された。甕形土器の出土状態が横位に置かれたようになっていることから棺として用いられた可能性を考慮すべきであろう。

出土遺物（第84図）は、33の甕形土器である。口径20.3cm、器高39.4cm、底径7.8cmを測る。くの字状に外反する頸部から上方にやや内傾気味の口縁部を持つ。口縁端面には、貝によると見られる沈線が9本以上施文される。頸部直下には、ナデによる凹部が認められる。外面調整は、胴上半から下半にかけて細いハケ、下半にやや太めのハケを認める。内面は、胴上半から頸部にかけてヨコヘラケズリ、以下ナナメである。





第84図　No. 5 -土壙（1／30）・出土遺物（1／4）



第85図　No. 10-出土遺物（1／4）

柱穴

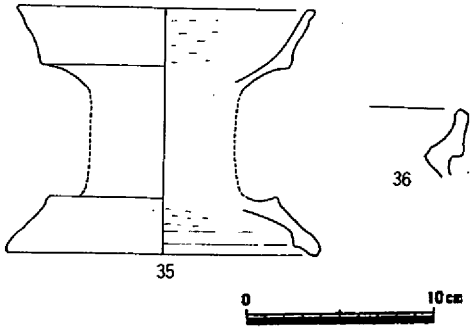
No. 10一柱穴（第82図）

調査区平坦部のNo. 3 一竪穴住居の北東側に位置する。柱痕は認められなかった。

溝

No. 12一溝（第82図）

調査区中央北端よりに位置する。長さ330cm深さ約12cmで斜面側は、消失する。出



第86図　No. 12-出土遺物（1／4）

土遺物（第86図）は、器台と甕形土器の小片である。35は、器台とするもので筒部がないが、口縁部と台部の胎土・焼成について差異が認められなかったことから同一個体として図の如く復元した。口縁部は、筒部から外反し外方へ広がり筒部は直立のものを想定する。口縁外面は、ナデによる凹部が認められ、内面はヘラミガキを認める。台部は、筒部から外方へ屈曲し、さらに下方へ広がる。内面はヘラケズリを、また丹塗りが認められる。36は甕形土器の小片で口縁端部にはヨコナデが認められる。

古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居

No. 2－竪穴住居（第83図）

調査区平坦部の北西端のNo. 1－竪穴住居と重複して位置する。規模は、460×360＋αcmを測る方形の形態を呈する。西隅部分は、後世の削平により消失している。No. 1－竪穴住居のほぼ中央に納まるように存在する。柱穴は、中央に2本認められ、規模は径28～32cm深さ50～74cmを測る。中央穴は、柱穴6と7の間に在り、二段の掘込みが見られ40cmの深さを測る。この中央穴は、No 1－竪穴住居の中央穴の位置とも考えられるが、埋土中には炭化物が認められなかったことからこの期に伴うものとした。

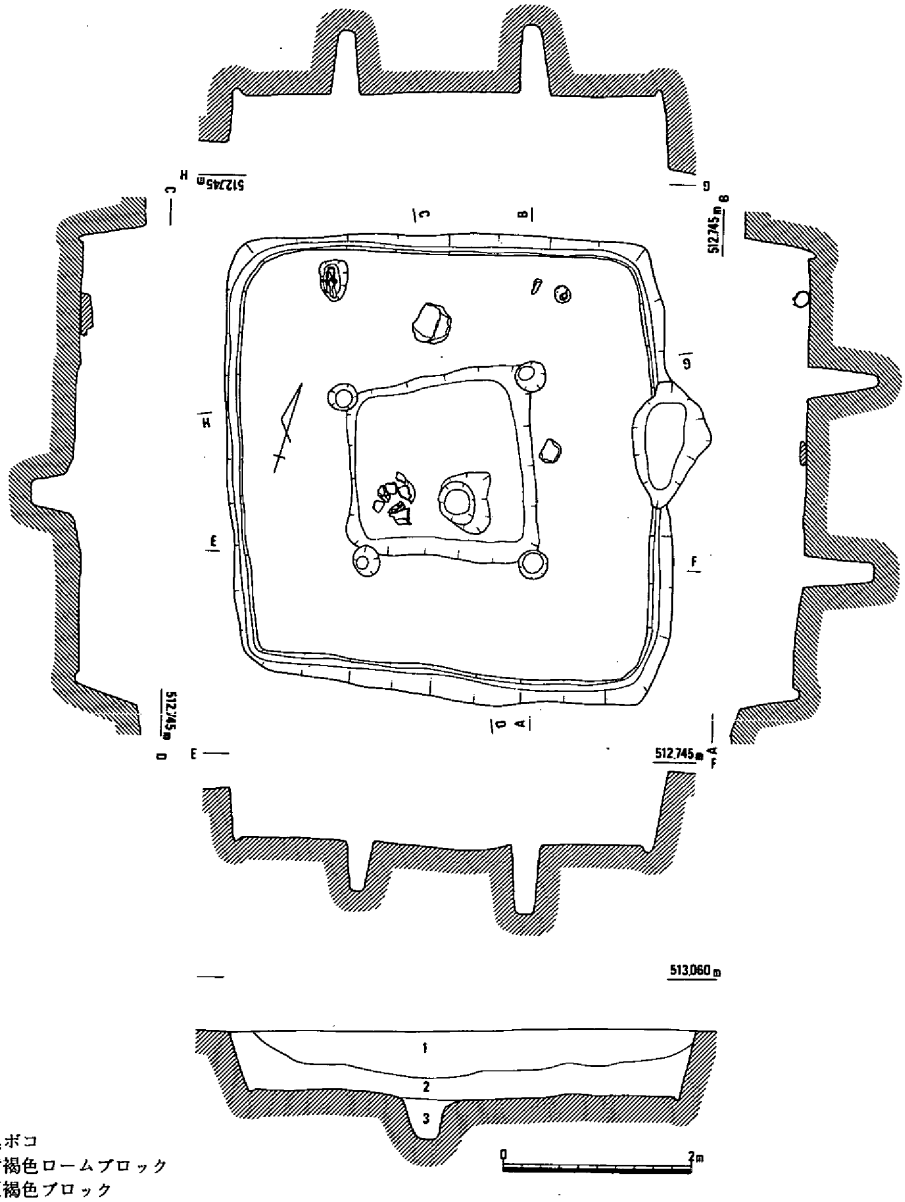
出土遺物（第83図）は、29～31が床面からの出土でほかは埋土中からである。26は、口径17.2cmを測り、屈曲する頸部から外方へ大きく広がる口縁部を持つ壺形土器である。口縁端面の中ほどに貝による沈線を施している。この貝の使用は頸部直下に直線状に、そして内面頸部下半にこれによるケズリを行なっている。27・28は、屈曲する頸部から上方へ拡張する口端を持つ甕形土器である。27は、口縁端面に貝の条痕の上からヨコナデを行なっている。この貝は、内面の頸部下半のケズリとして用いられている。29は、くの字状に屈曲する頸部を持つ甕形土器の小片である。30・31は、高杯形土器の破片で30は大きく外へ広がる杯部を持つ。32は、底部の破片である。

No. 3－竪穴住居（第87図）

調査区平坦部のほぼ中央部に位置する。規模は、南北490cm、東西465cm、遺構検出面から床面までの深さは残りの良い所で79cmを測る。平面形態は、No 2－竪穴住居と同じように隅が丸い方形を呈する。柱穴は、4本で径が27～32cm、深さ51～74cmの円形を呈する。中央穴は、柱穴2よりに二段掘で深さ44cmのものである。柱穴4本を結んだ方形の内側は、2～4cmほどの凹状となっている。6は、27×45cmで深さ26cmの楕円形のピットで、内に長方形の礫が5個置かれた状態で認められた。なお、東壁の土壙は後世のものである。

出土遺物（第88図）45～47・52は、床面からの出土で他は埋土中からである。37～42は、屈曲する頸部から上方へ拡張する口縁部を持つ。38～40は、口縁端部に沈線を施文している。44

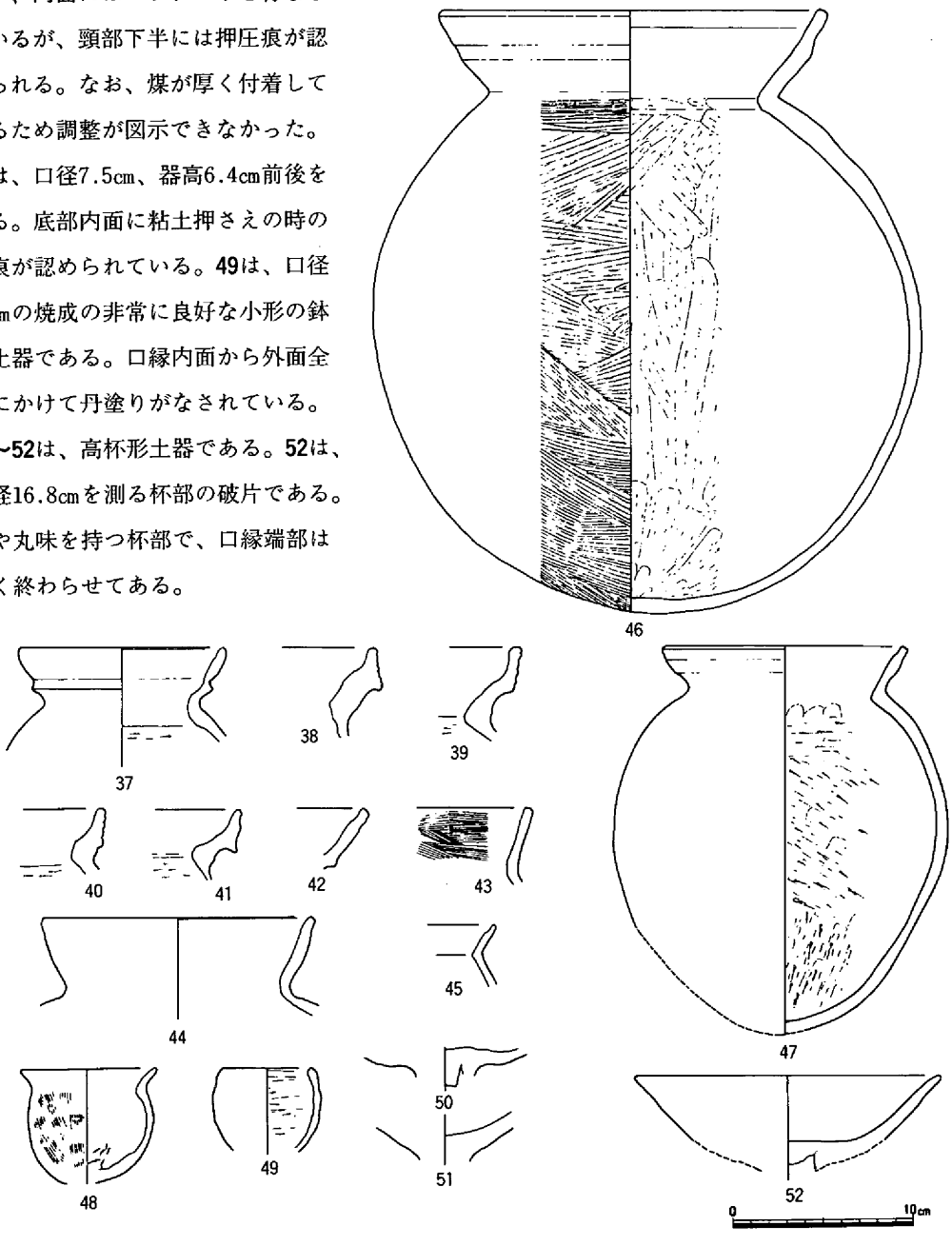
～48は、くの字状に屈曲する甕形土器である。46は、口径20.7cm、器高33.6cmを測るほぼ完形のものである。頸部は、強く外反して口縁部をつくり、口縁中ほどにナデによる凹部をつくる。胴部から底部にかけては、球形を示し丸底の底部へと移行する。外面調整は板状工具により、内面はヘラケズリによっている。口縁部の一部から胴部にかけて煤が付着している。47は、口径13.1cm、器高21＋αcmを測る。口縁端面には、ヨコナデによる凹部がみられる。外面調整は



1 黒ボコ
2 黄褐色ロームブロック
3 灰褐色ブロック

第87図　No. 3-竪穴住居（1／80）

ハケ、内面にはヘラケズリを行なっているが、頸部下半には押圧痕が認められる。なお、煤が厚く付着しているため調整が図示できなかった。**48**は、口径7.5cm、器高6.4cm前後を測る。底部内面に粘土押さえの時の爪痕が認められている。**49**は、口径5cmの焼成の非常に良好な小形の鉢形土器である。口縁内面から外面全体にかけて丹塗りがなされている。**50～52**は、高杯形土器である。**52**は、口径16.8cmを測る杯部の破片である。やや丸味を持つ杯部で、口縁端部は細く終わらせてある。



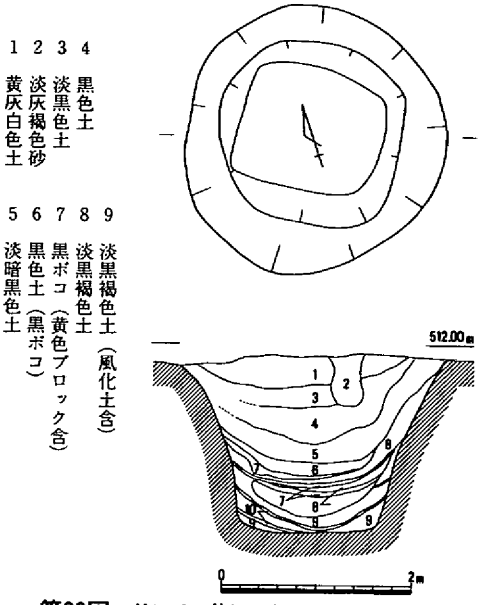
第88図　No. 3－出土遺物（1／4）

中世の遺構・遺物

井戸

No. 4 ー井戸（第89図）

調査区南隅のNo. 1 ー竪穴住居の南東側に接して位置する。規模は、270×275cm深さ183cmを測る。平面形態は、円形で底面は150×130cmの方形を呈する。埋土の基調は、黒色土であり底に堆積する9層が花崗岩の風化土を含んでいる。井戸としたが、湧水点には達していない。時期については、中世としたが遺物は伴っていないので判断しがたい。

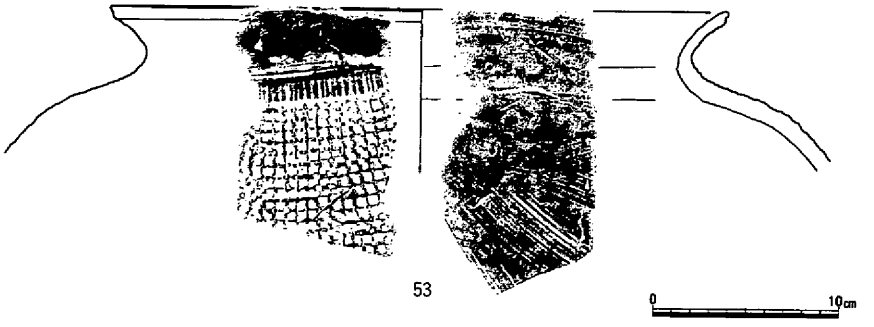


第89図　No. 4 -井戸（1／80）

段状遺構

No. 6 ー段状遺構（第82図）

調査区平坦部の北東よりのNo 3 ー竪穴住居の南に接して位置する。規模は、長さ605cmの東



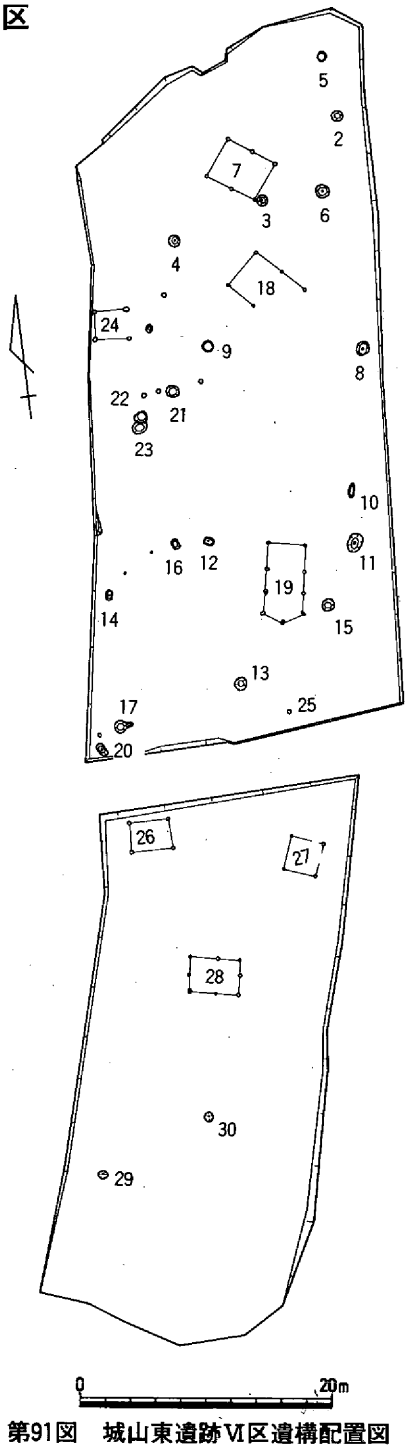
第90図　No. 6 -出土遺物（1／4）

西に延びる段状のもので両端が短く屈曲する。高さは15cm前後であり、遺物はこの段状の下端から出土している。

出土遺物（第90図）は、口径32.5cmを測る亀山焼で、外面に格子目のタタキを施す。

6 城山東遺跡Ⅵ区

城山東遺跡Ⅰ区からⅤ区については、蒜山インターチェンジ内に位置していたものであるが当Ⅵ区は主要地方道江府中村用瀬線に接続するランプ上に位置する。丘陵が北へ張り出してゆき、緩やかな斜面を形成している。緩斜面は、北側に旭川が東流する氾濫原に接し、その比高差は14ｍほどあり一見して段丘状の平坦地を形成させている。調査区は、中央付近で農道のため分断されているが、長さ105ｍ幅24ｍほどの範囲である。20～30cmに堆積する黒ボコ層（大根畑耕土）を除去するとソフトローム面となり、この面での遺構検出を行なった。



第91図　城山東遺跡Ⅵ区遺構配置図
（1／600）

縄文時代の遺構

落　し　穴

No. 2－落し穴（第92図）

調査区北東端のNo５－落し穴の南に位置する。規模は、87×83cm深さ96cmを測り、平面形態は円形を呈する。底面には、10×９cm深さ22cmのピットが認められる。断面形態は、上方部でやや内湾気味となる。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 3－落し穴（第93図）

調査区中央北よりのNo. 7－建物の南東隅に位置する。規模は、85×82cm深さ102cmを測り、平面形態はやや不整形となるが円形を呈する。底面には、15×10cm深さ36cmの楕円形のピットが認められる。断面形態は、南西側が二段掘状となるが反対の部分は垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 4－落し穴（第94図）

調査区中央北よりのNo.18－建物の北西側に位置する。規模は、92×90cm深さ125cmを測り平面形態

は、円形を呈する。底面には、二段掘のピットが認められる。上面は33×28cm深さ10cm、下段は径10cmほどのもので深さは掘過ぎのため不詳である。断面形態は、垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 5 ー落し穴（第95図）

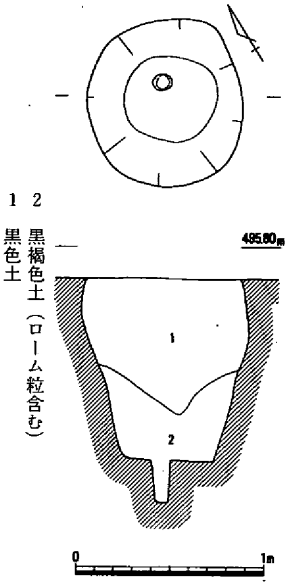
調査区北東隅のNo. 2 ー落し穴の北に位置する。規模は、72×65cm深さ160cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態は、ほぼ垂直に掘り下げられ、底部近くで掘り方よりも外側へ張り出しやや袋状となっている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 6 ー落し穴（第96図）

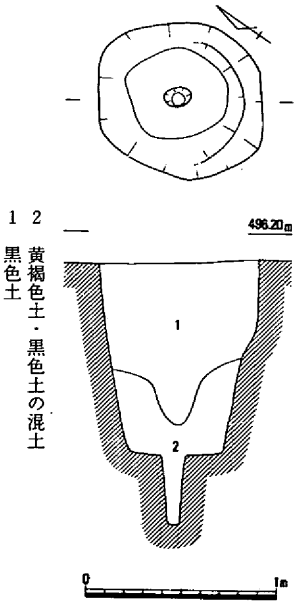
調査区北東よりのNo. 3 ー落し穴の東側に位置する。規模は、107×103cm深さ93cmを測る。上面形態は円形を、底面は不整方形を呈する。底面には、径12cm深さ44cmのピットが認められる。断面形態は、やや開き気味となる。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 8 ー落し穴（第97図）

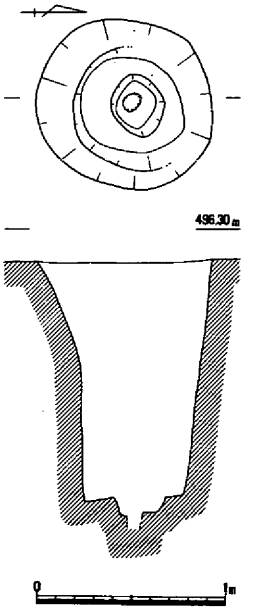
調査区東端のNo.10ー落し穴の北側に位置する。規模は、



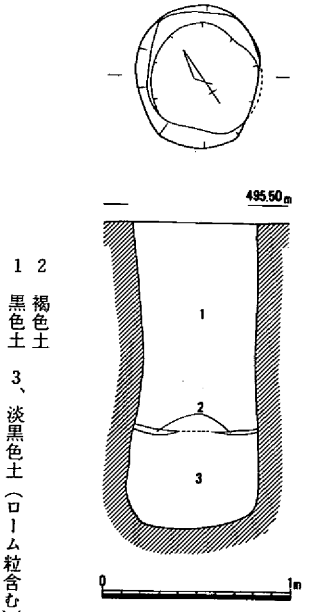
第92図　No. 2 -落し穴（1／40）



第93図　No. 3 -落し穴（1／40）



第94図　No. 4 -落し穴（1／40）



第95図　No. 5 -落し穴（1／40）

120×100cm深さ94cmを測る。上面形態は楕円形を、底面は隅丸方形を呈する。底面には、21×20cm深さ50cmの円形のピットが認められる。断面形態は、西辺が二段掘状となるが他は、若干開き気味に掘り下げている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 9－落し穴（第98図）

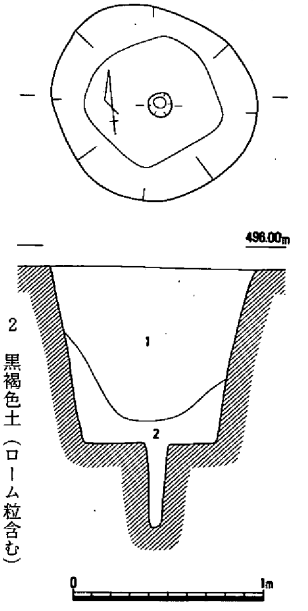
調査区中央やや北よりのNo.21－落し穴の北東側に位置する。規模は、径86cm深さ135cmを測る。断面形態は、中ほどよりやや上で内側に張り出し、底部にかけてやや膨らみ気味となる。埋土は、黒色土が基調となる。

No.10－落し穴（第99図）

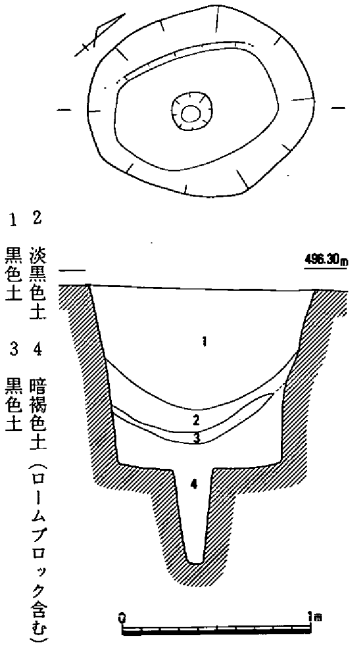
調査区東端よりのNo.11－落し穴の北側に位置する。規模は、100×45cm深さ67cmを測り、平面形態は長方形を呈する。底面には、径12cm深さ29cmのピットが認められる。断面形態は、若干開き気味に掘り下げている。埋土は、黒色土である。なお、北端に見られる円形の遺構は、断面観察においても前後関係を把握できなかったが一応別のものと考えている。

No.11－落し穴（第100図）

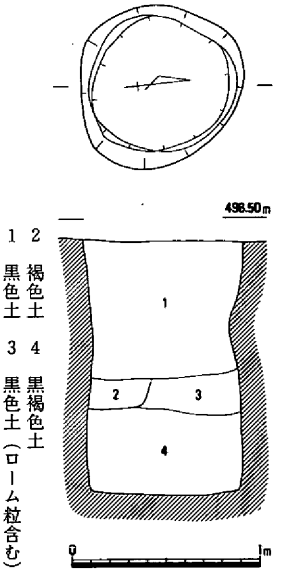
調査区中央東端よりのNo.10－落し穴の南側に位置する。



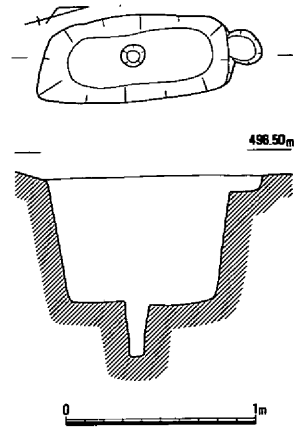
第96図　No. 6－落し穴（1／40）



第97図　No. 8－落し穴（1／40）



第98図　No. 9－落し穴（1／40）



第99図　No. 10－落し穴（1／40）

規模は、159×125cm深さ105cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。底面には、18×15cm深さ25cmの円形のピットが認められる。断面形態は、二段掘となり中ほどから外方へ広がっている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.12一落し穴（第101図）

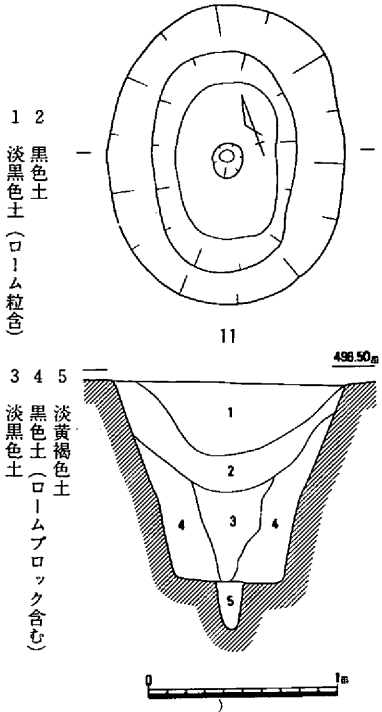
調査区中央のNo.16一落し穴の東側に接して位置する。規模は、77×58cm深さ95cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。底面には、15×13cm深さ50cmの円形のピットが認められる。断面形態は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.13一落し穴（第102図）

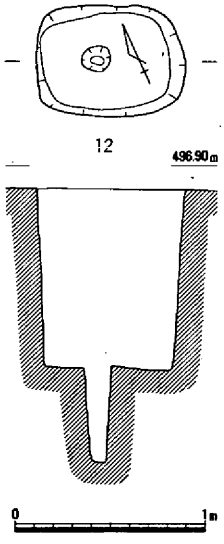
調査区中央のNo.25一落し穴の西側に位置する。規模は、103×94cm深さ145cmを測り、平面形態は不整円形を呈する。断面形態は、中ほどで外方へ広がっている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.14一落し穴（第103図）

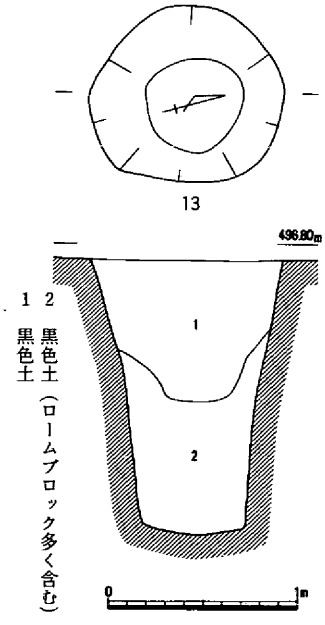
調査区西端のNo.16一落し穴の南西側に位置する。規模は、77×54cm深さ54cmを測り、平面形態は隅丸方形を



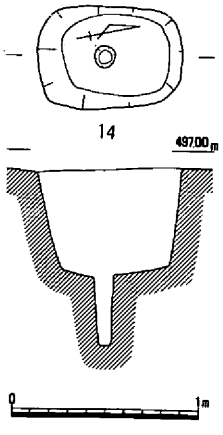
第100図　No.11-落し穴（1／40）



第101図　No.12-落し穴（1／40）



第102図　No.13-落し穴（1／40）



第103図　No.14-落し穴（1／40）

呈する。底面には、径11cm深さ37cmのピットが認められる。断面形態は、南辺がやや開き気味となる。埋土は、黒色土である。

No.15－落し穴（第104図）

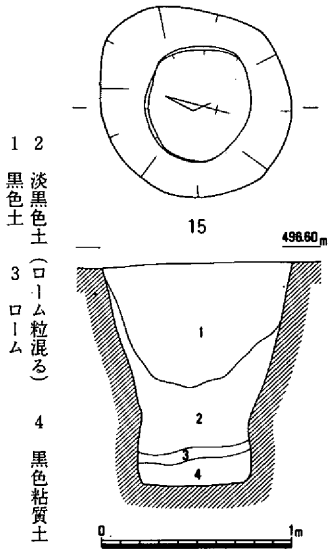
調査区中央やや西よりのNo.19－建物の西に接して位置する。規模は、径100cm深さ118cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態は、底部近くで掘り方よりも外側へ張り出し気味となり袋状を示す。埋土は、黒色土が基調となる。

No.16－落し穴（第105図）

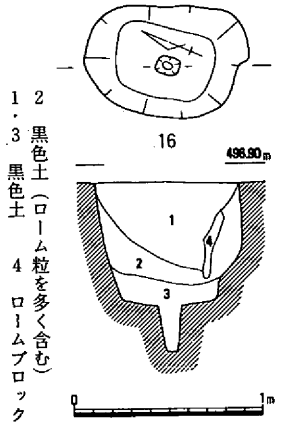
調査区中央やや西よりのNo.12－落し穴の西に接して位置する。規模は、80×58cm深さ65cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。底面には、12×9cm深さ24cmの円形のピットが認められる。断面形態は、内傾気味となり南短辺の段状は壁面の崩落によると考えられる。埋土は、黒色土が基調となる。

No.17－落し穴（第106図）

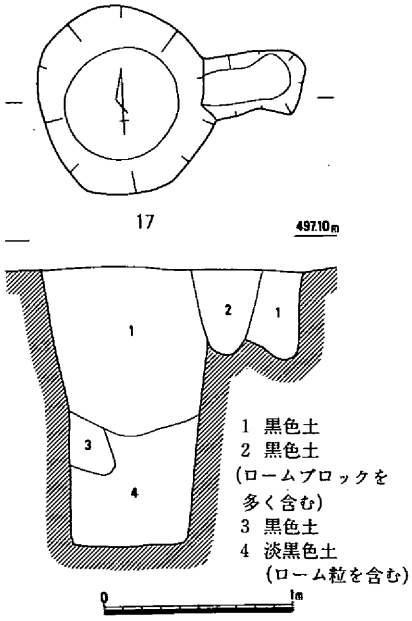
調査区南西隅のNo.20－落し穴の北東に接して位置する。規模は、99×97cm深さ147cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態は、底から中ほどまで垂直に立ち上がり、ここから外方へ広がり気味となる。埋土は、黒色土を基調とする。



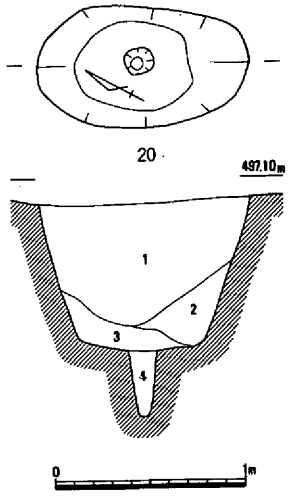
第104図　No.15-落し穴（1／40）



第105図　No.16-落し穴（1／40）



第106図　No.17-落し穴（1／40）



第107図　No.20-落し穴（1／40）

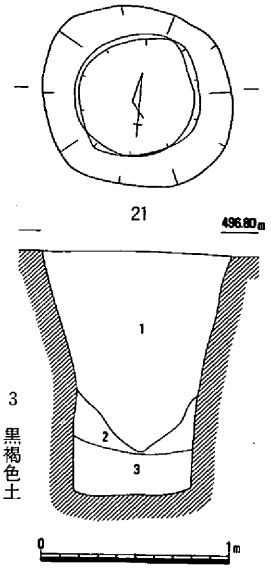
なお、東側に重複する掘込みは、この落し穴よりも新しいものである。

No.20－落し穴（第107図）

調査区南西隅でNo.17－落し穴の北東に接して位置する。規模は、106×62cm深さ76cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。底面には、15×13cm深さ35cmの円形のピットが認められる。断面形態は、底面から外方に開く。埋土は、黒色土を基調とする。

No.21－落し穴（第108図）

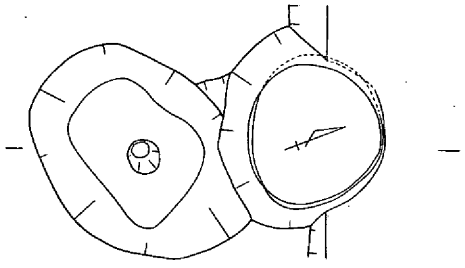
調査区中央西よりにNo.9－落し穴の南西よりに位置する。規模は、100×94cm深さ129cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態は、一部において袋状となり底面から50cmほど垂直で、そこから外方へ開いて掘込まれている。埋土は、黒色土を基調とする。

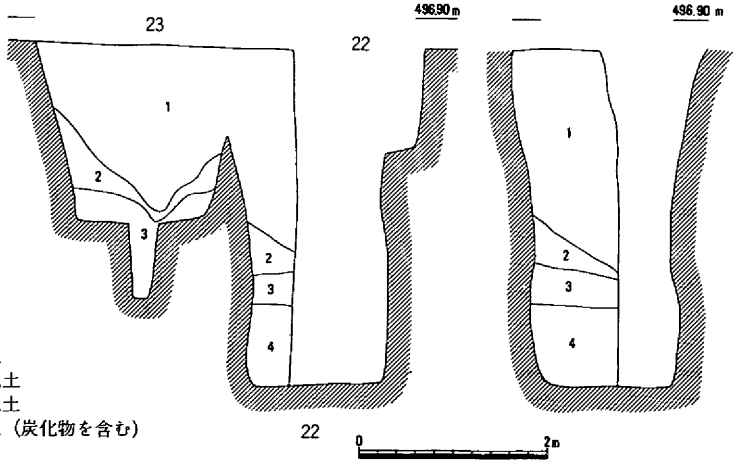


第108図　No.21-落し穴（1／40）

No.22－落し穴（第109図）

調査区中央やや西端よりのNo.21－落し穴の南西に位置する。規模は、106×90＋α cm深さ176cmを測り、平面形態は円





1 黒色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 黒色土（炭化物を含む）

第109図　No.22・23-落し穴（1／40）

形を呈する。断面形態は、袋状となり一部内傾気味に掘込まれる。北側が現代の溝により切られ、南側はNo.23－落し穴と重複している。この落し穴との前後関係は、No.22－落し穴の方が土層断面から古いことが観察された。埋土は、黒色土を基調とする。

No.23－落し穴（第109図）

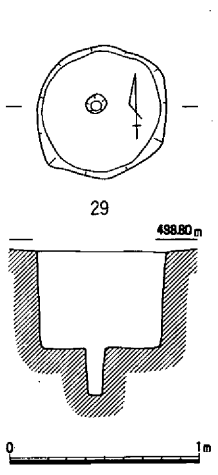
調査区中央やや西端よりのNo.21－落し穴の南西に位置する。規模は、130×95cm深さ98cmを測り、平面形態は楕円状を、底は隅丸方形を呈する。底面には、18×16cm深さ39cmの円形のピットが認められる。断面形態は、底から外方へ広がっていく。埋土は、黒色土を基調とする。

No.29－落し穴（第110図）

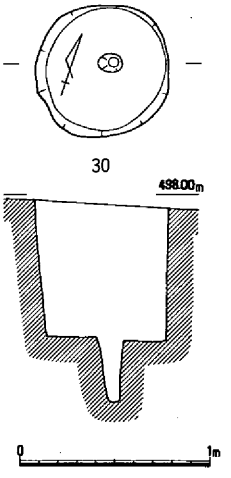
調査区の南西隅よりのNo.30－落し穴の北東に位置する。規模は、70×68cm深さ51cmを測り、平面形態は円形を呈する。底面には、11×10cm深さ26cmの円形のピットが認められる。断面形態は、ほぼ垂直に掘込まれている。埋土は、黒色土を基調とする。

No.30－落し穴（第111図）

調査区中央南よりでNo.29－落し穴の北東に位置する。規模は、径70cm深さ71cmを測る。底面には、13×10cm深さ35cmの円形のピットが認められる。断面形態は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土を基調とする。



第110図　No.29-落し穴（1／40）



第111図　No.30-落し穴（1／40）

時期不明の遺構

No.7－建物（第112図）

調査区中央よりのNo.18－建物の北側に位置する。桁行2間、梁間1間の建物である。規模は、南東梁間330cm、北西梁間340cm、南西と北東の桁行420cmを測る。柱穴は、1－径26cm深さ50cm、2－30×26cm深さ38cm、3－径26cm深さ48cm、4－径30cm深さ44cm、5－32×28cm深さ46cm、6－36×30cm深さ46cmを測り、形態は何れも円形を呈する。柱穴埋土は、黒色土である。

No.18－建物（第113図）

調査区中央北よりのNo.7－建物の南に位置する。桁行2間、梁間1間の建物であるが、南隅の柱穴は削平されたと考えられ確認することができなかった。規模は、北西梁間340cm、北東桁行500cmを測る。柱穴2と4が350cmあり南西の梁部分はさらに開いた柱穴の配置が想定される。柱穴は、1－30×28cm深さ12cm、2－28×26cm深さ18cm、3－30×28cm深さ28cm、4－

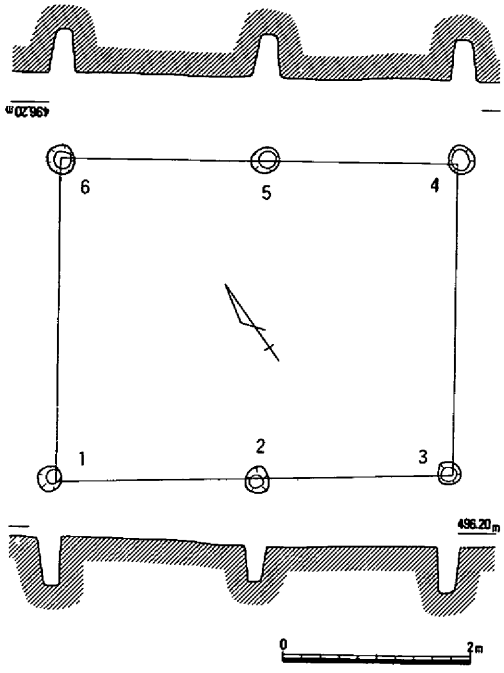
30×26cm深さ22cm、5－32×30cm深さ14cmを測り、形態は何れも円形を呈する。柱穴埋土は、黒色土である。

No.19－建物（第114図）

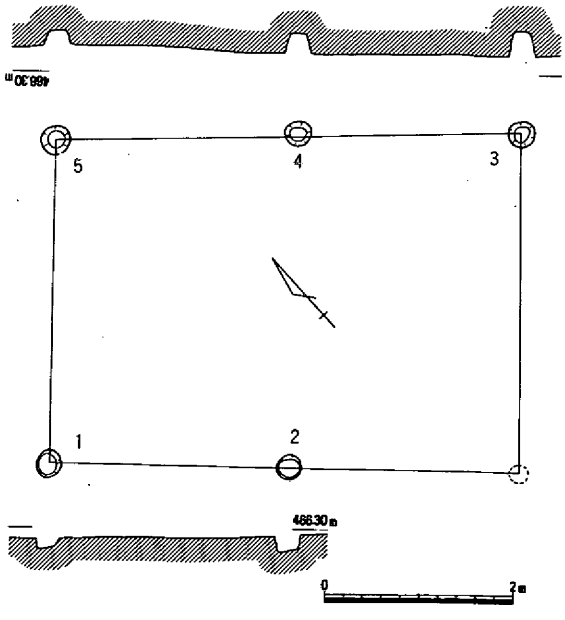
調査区中央でNo.15－落し穴の西側に接して位置する。桁行3間、梁間1間の建物であるが、南梁が外へ張り出して2間となる。規模は、北梁間300cm、東桁行540cm、西桁行565cm、を測る。柱穴は、1－23×20cm深さ26cm、2－26×20cm深さ35cm、3－26×23cm深さ35cm、4－27×25cm深さ37cm、5－31×21cm深さ40cm、6－33×25cm深さ46cm、7－30×23cm深さ48cmと径23cm深さ43cmのものが重複、8－36×22cm深さ35cmと42cmのものが重複、9－26×17cm深さ25cm、10－径21cm深さ30cm、11－21×19cm深さ21cmを測り、形態は何れも円形を呈する。南梁間は、当初の柱から柱一本分外側へ建て替えている。柱穴埋土は、黒色土である。

No.24－建物（第115図）

調査区中央西端のNo.18－建物の西側に位置する。桁行1間、梁間1間の建物である。規模は、東梁間230cm、西梁間215cm、南桁行280cm、北桁行265cmを測る。柱穴は、1－36×35cm深さ25cm、2－33×25cm深さ15cm、3－45×38cm深さ20cm、4－径32cm深さ16cmを測り、形態は何れも円形を呈する。南梁間が最も長く他は、これよりも短くなり各柱穴間は先に記したよう



第112図　No.7-建物（1／80）

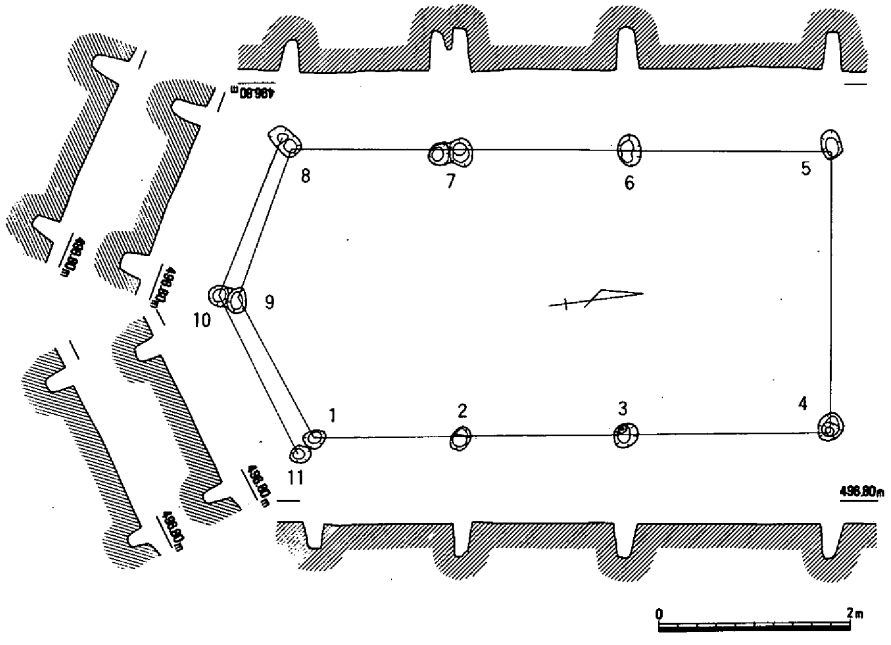


第113図　No.18-建物（1／80）

にその距離はばらばらである。柱穴の埋土は、黒色土である。

No.26－建物（第116図）

調査区西端よりのNo.28－建物の北西側に位置する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、東梁間240cm、西梁間240cm、南桁行330cm、北桁行315cmを測る。柱穴は、１－30×28cm



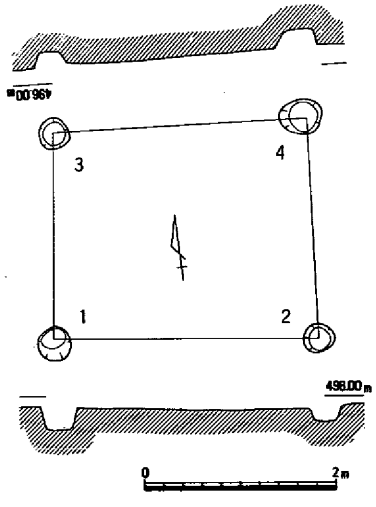
第114図　No.19-建物（1／80）

深さ55cm、２－30×25cm深さ54cm、３－28×26cm深さ48cm、４－30×28cm深さ51cmを測り、形態は何れも円形を呈する。柱穴埋土は、黒色土である。

No.27－建物（第117図）

調査区東端よりのNo.28－建物の北東側に位置する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、南北梁間260cm、東桁行270cm、西桁行275cmを測る。柱穴は、１－21×19cm深さ13cm、２－24×22cm深さ12cm、３－24×17cm深さ10cm、４－径16cmを測り、形態は何れも円形を呈する。この建物は、ほぼ正方形の配置となる。柱穴埋土は、黒色土である。

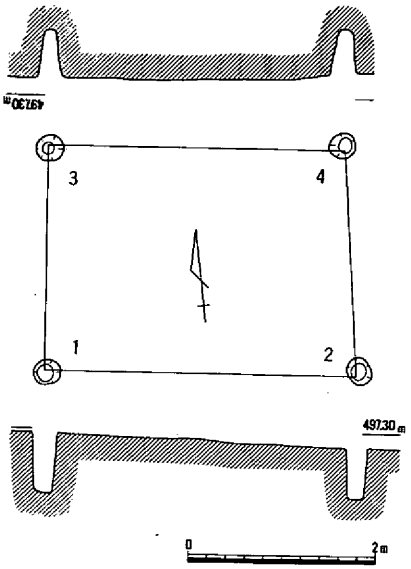
No.28－建物（第118図）



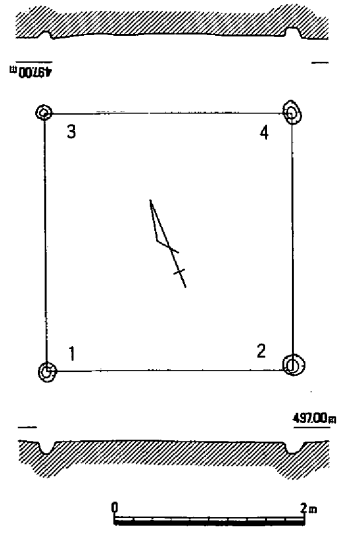
第115図　No.24-建物（1／80）

調査区中央のNo.27－建物の南西側に位置する。桁行２間、梁間２間の建物である。規模は、東梁間280cm、西梁間285cm、南桁行390cm、北桁行395cmを測る。柱穴は、１－径20cm深さ35cmと28×24cm深さ50cmが重複、２－20×19cm深さ35cm、３－24×23cm深さ56cm、４－25×24cm深さ67cm、５－径22cm深さ35cm、６－32×22cm深さ20cm、７－23×21cm深さ35cm、８－25×22cm深さ70cmを測り、形態は何れも円形を呈する。東西梁間の中柱が柱穴半個ほど外側へ張り出して掘られさらに、その柱穴の深さが他のそれよりも深くなっていることが注目される。柱穴埋土は、黒色土である。

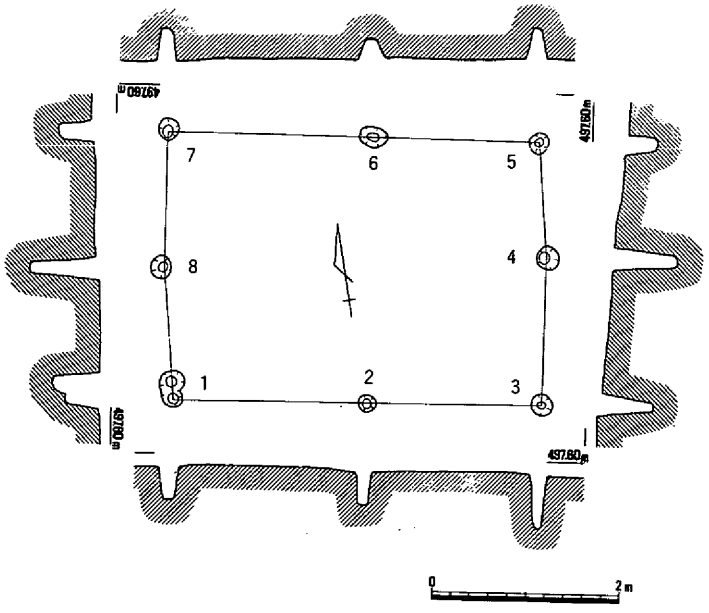
以上の建物は、出土遺物がほとんどなく時期の把握ができなかった。しかしながら、変形な梁間を南側にもつNo.19－建物の柱穴７・８・10からは土器の小片が出土している。この種の建物から遺物の出土が確認されたのはこれらのみである。この土器片は、外面にヘラミガキ、内面にはヘラケズリが見られる。胎土は、石英粒が比較的多く入り、焼成は良好である。色調は、外面黒褐色で



第116図　No.26-建物（1／80）



第117図　No.27-建物（1／80）



第118図　No.28-建物（1／80）

内面が淡褐色、内外面茶褐色のものが認められる。

これらの土器の内容から城山東遺跡で遺物の出土が見られるⅣ区及びⅤ区のものと比較すると弥生土器に近い内容を示す。しかしながら、出土遺物が確認されたのはこのNo.19－建物だけであり他の建物からは出土を見ていない。このことは、先の土器片から弥生時代に属する可能性があるのはNo.19－建物であり、他については時期を判断するものをもっていないのである。しかし、建物の配置について重複が見られない、柱間の不規則さ及び掘り方などから同一時期を想定するが、この地域の当該期のこの種の遺構の在り方がまだ充分明らかになっていないことからやはり判断をしがたいと言わざる得ない。

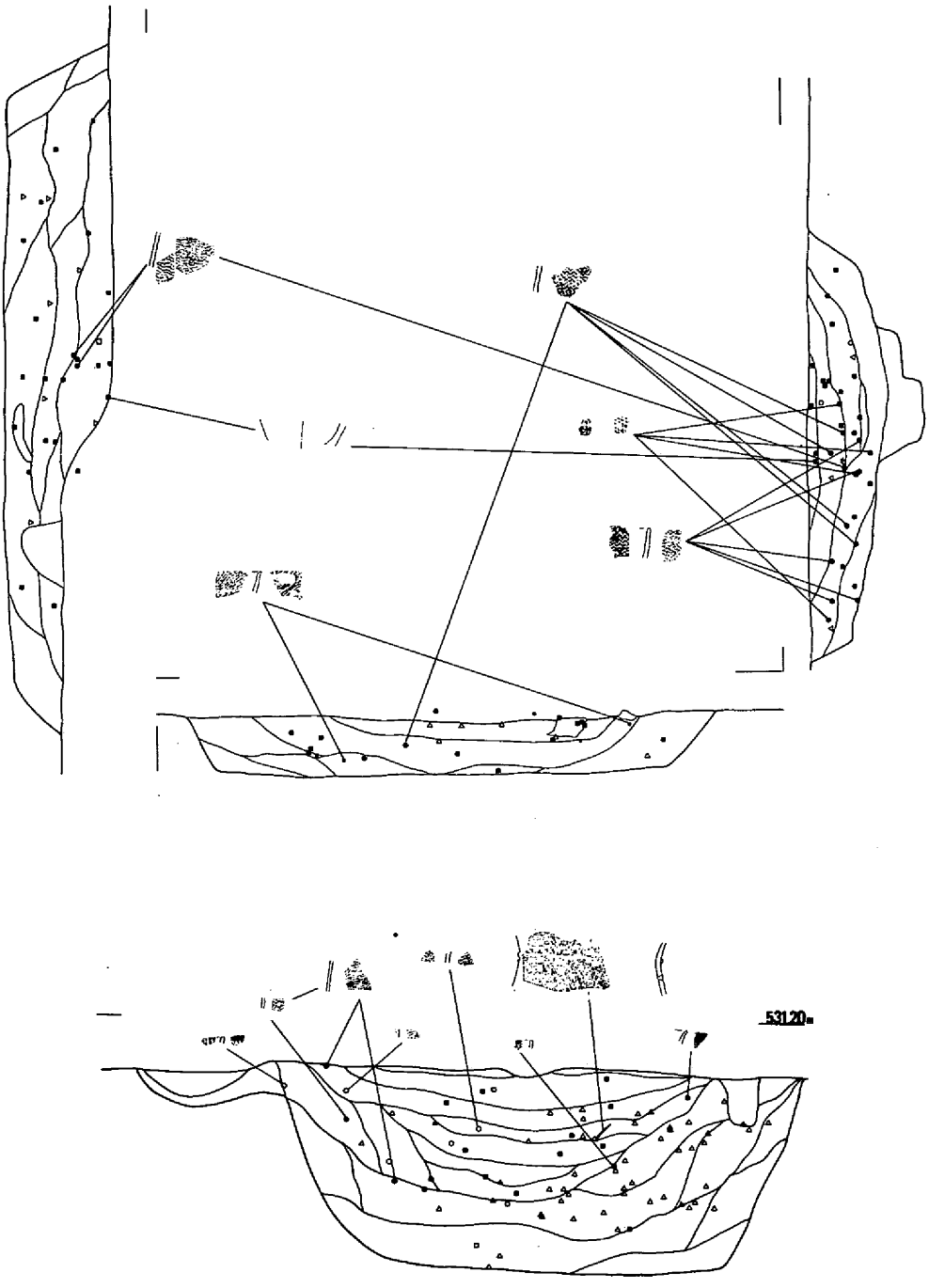
小　　結

蒜山インターチェンジ内における中山西遺跡Ⅰ区・Ⅱ区と城山東遺跡Ⅰ区～Ⅵ区について報告した。ここで、個々の遺跡の内容とは別にこれらの遺跡を通した若干のまとめをしておく。

岩宿時代のＡＴ直下の遺跡は、中山西遺跡Ⅰ区及び城山東遺跡Ⅲ区に認められた。両者とも、ＡＴの最初に堆積すると考えられる比較的粒子の粗い火山灰と接する状態で検出されている。このことからすれば同一層序内における同一レベルの同時性が考慮されよう。しかしながら、中山西遺跡Ⅰ区の場合におけるあのような分布が一時期の内に形成されたかどうか、さらには使用される石材の相違などから同時性さらに同一の人の移動と考えるのが妥当かどうか検討が必要であろう。

縄文時代は、４棟の竪穴住居と落し穴が検出されている。ここで、竪穴住居から出土する遺物の接合関係をみて行きたい。この接合関係を示したのが第119図である。No.５とNo.６、No.７とNo.６の各竪穴住居から出土する土器が接合する。No.４だけは、他の３棟から出土する土器と接合関係を持たないのであるが、出土する土器からすれば同時期としても問題がないであろう。このようなことから、これら４棟が同時に営まれていた可能性が高いことが言えるであろう。落し穴は、縄文時代の長い時間の幅の中で大略的な時期すらも、伴出遺物がなく不明である。しかし、埋土に黒色土（黒ボコ）を含むものと含まないものが認められている。前者は、城山東遺跡Ⅴ区及びⅣ区で認められるもの、後者は、中山西遺跡Ⅰ区のNo.11・12である。黒ボコの形成は、１万年以降[1]に出現するようでありこの黒ボコの有無が一つの時期判断の目安となることが可能であろう。

弥生時代は、城山東遺跡Ⅳ区とⅤ区で竪穴住居が検出されている。前者は、９ｍ近い大形のもので後者は１棟確認されている。この両地点に所在する竪穴住居の時期的な面については、伴出遺物が少なく判断しかねる。しかし、Ⅴ区のNo.１から出土する土器は、口縁外面に貝による施文がなされる沈線、肩部に同様の施文具による刺突文などの存在などからⅣ区のそれよ



第119図　中山西遺跡Ⅰ区出土遺物接合関係図

りも先行することが考えられる。なお、城山東遺跡Ⅵ区の建物がこの期に含まれるとすればより豊富な内容を提供するであろう。

古墳時代は、城山東遺跡Ⅴ区から２棟検出している。同時期で古墳時代前半期のものと考えられる。

奈良時代は、城山東遺跡Ⅳ区における建物と鍛冶炉関係の遺構である。建物からの出土遺物は、全く検出されず時期を判断するのに躊躇したが、遺構の内容から判断した次第である。遺構の内容からNo.９は、この時期よりも古くなることが考えられ城山東遺跡Ⅵ区で建物群と同じ範疇として把握したほうが妥当であろう。奈良期の建物は、主軸を南北方向に向けNo.７以外はすべて総柱建物である。位置的には、尾根の平坦部ではなく東側の斜面及び谷部の極めて不安定な場所に建てられている。このことは、自然条件である大山からの北西の季節風を意識していたことも考慮されよう。

鍛冶炉は、東の谷部に検出されNo.15－溝もこれに伴うと考えられる。また、この周囲に認められる柱穴は、東西及び南北に直線的に結ばれるものを認めるが建物として確認できなかった。鍛冶炉周辺から出土する土器は、８世紀中葉から後葉の時期を示している。したがって、建物群もこの土器が示す時期に設けられたものと考えるのである。

註１　加藤芳朗　「黒ボク土」『アーバンクボタNo13』1976年

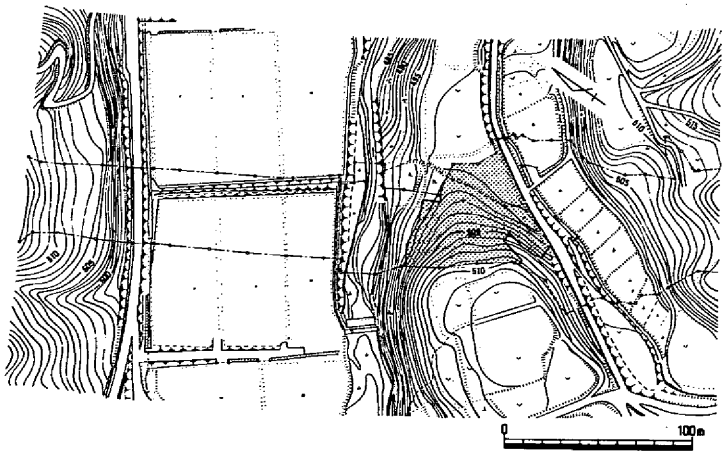
第四節　下郷原和田遺跡の調査

下郷原和田遺跡

下郷原和田遺跡は、城山東遺跡のⅣ区とⅤ区を分断する村道堂ノ前・延助線を南東に行くと左手に石造りとしては日本一大きいとされる大鳥居を見る。この大鳥居を左に曲がれば郷原宿の家並みを通ることができ、曲がらずに行けばその裏手を抜けることになる。この二つの道も家並みを抜けると一本となり、前面に比較的広い水田が広がる。水田、そして田部川に架かる橋を渡って道は登り坂となる。この短めの橋を渡りきり少し行くと村道鳥越線と交差する。村道鳥越線を曲がらずに先に進むと道はさらにきつい登りとなり、１kmほどで湯原町藤森とを結ぶ標高610ｍの鳥居峠に達する。

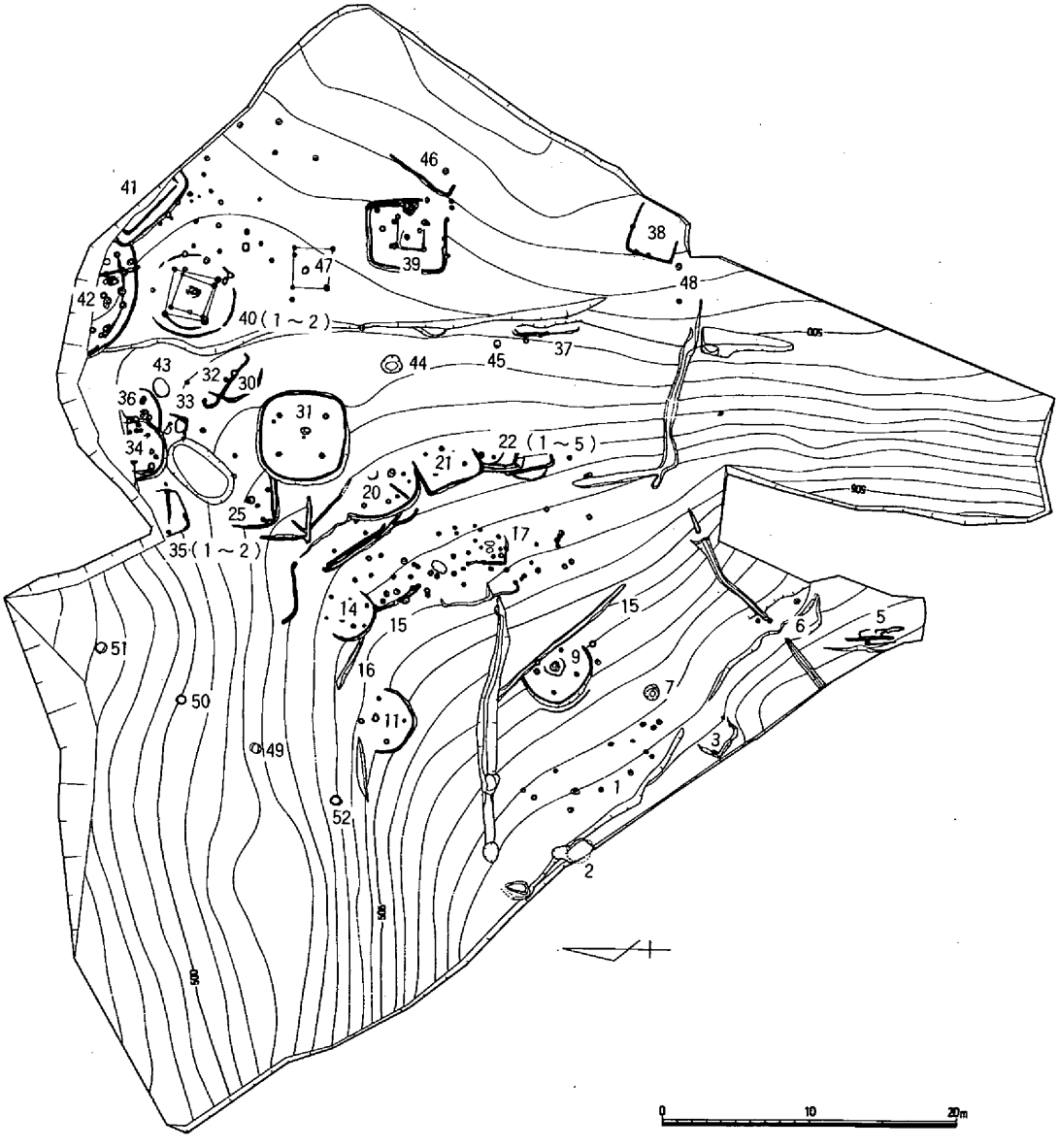
遺跡は、この交差する所の北側丘陵上に位置する。丘陵は、舌状となり100ｍを超える幅から次第にその幅を減じ末端近くになると20ｍほどとなる。丘陵の平坦部となっている所は標高512ｍで、そこから長さ50ｍほどの緩斜面、さらに現状で牧草地をなしている標高499ｍの平坦地をつくりだしている。丘陵の北西側は、先に通ってきた村道の前面に広がる幅100ｍほどの水田と田部川が北東へ流路をとっている。南東側は、幅30ｍほどの狭い水田があり比高11ｍで下郷原田代遺跡No１地点の所在する広い丘陵が迫っている。

今回調査された地点は、先に記した緩斜面に相当する。丘陵の上下の平坦地は、大根畑及び牧草地として使用されているが、春の起耕時に耕作土となっている黒ボコの堆積の浅い所で竪穴住居の輪郭が確認されている。このようなことから、遺構は丘陵全域にひろがっていること



第120図　調査位置図（1／4,000）

が予想される。検出された遺構は、主に弥生時代から古墳時代の竪穴住居である。遺跡の立地が斜面部にあたるため、遺構の残存状況は良好とはいえず、極く一部をのぞいてほとんどが削平されている。溝も認められているが、その立地条件から途中で切れてしまうものが多く全容を明らかにできたものはない。さらに、これらの溝が一部において竪穴住居の壁帯溝としての可能性も考慮されたが、やはり先のような状況から充分なる把握ができなかった。



第121図　遺構配置図（1／500）

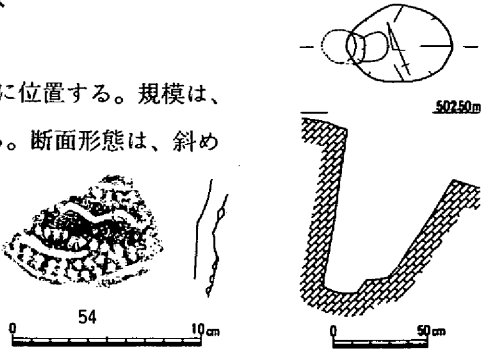
縄文時代の遺構・遺物

柱穴

No.49－柱穴（第122図）

調査区中央東側のNo.37－竪穴住居の北西近くに位置する。規模は、56×48cm深さ85cmを測り、形態は楕円形を呈する。断面形態は、斜めに掘り込まれて底近くで二段となっている。柱穴の中ほどから縄文土器片が出土している。

出土遺物（第122図）は、外面に沈線と刺突を有するものである。



第122図　No.45-柱穴（1／40）・出土遺物（1／4）

弥生時代の遺構・遺物

竪穴住居

No.9－竪穴住居（第123図）

調査区中央南西よりのNo.11－竪穴住居の南側に位置する。規模は、南北が490cm東辺が削平のため不明となっている。形態は、ほぼ円形を呈する。西側には、幅40cm深さ10cm前後の段状となっている。ピットは、5個認められ、そのうち柱穴とされるのは1～4である。柱穴は、1－30×26cm深さ45cm、2－29×28cm深さ51cm、3－26×24cm深さ59cm、4－37×37cm深さ39cm、5－33×30cm深さ61cmをそれぞれ測る。中央穴は、一部二段掘りとなり深さ54cmである。

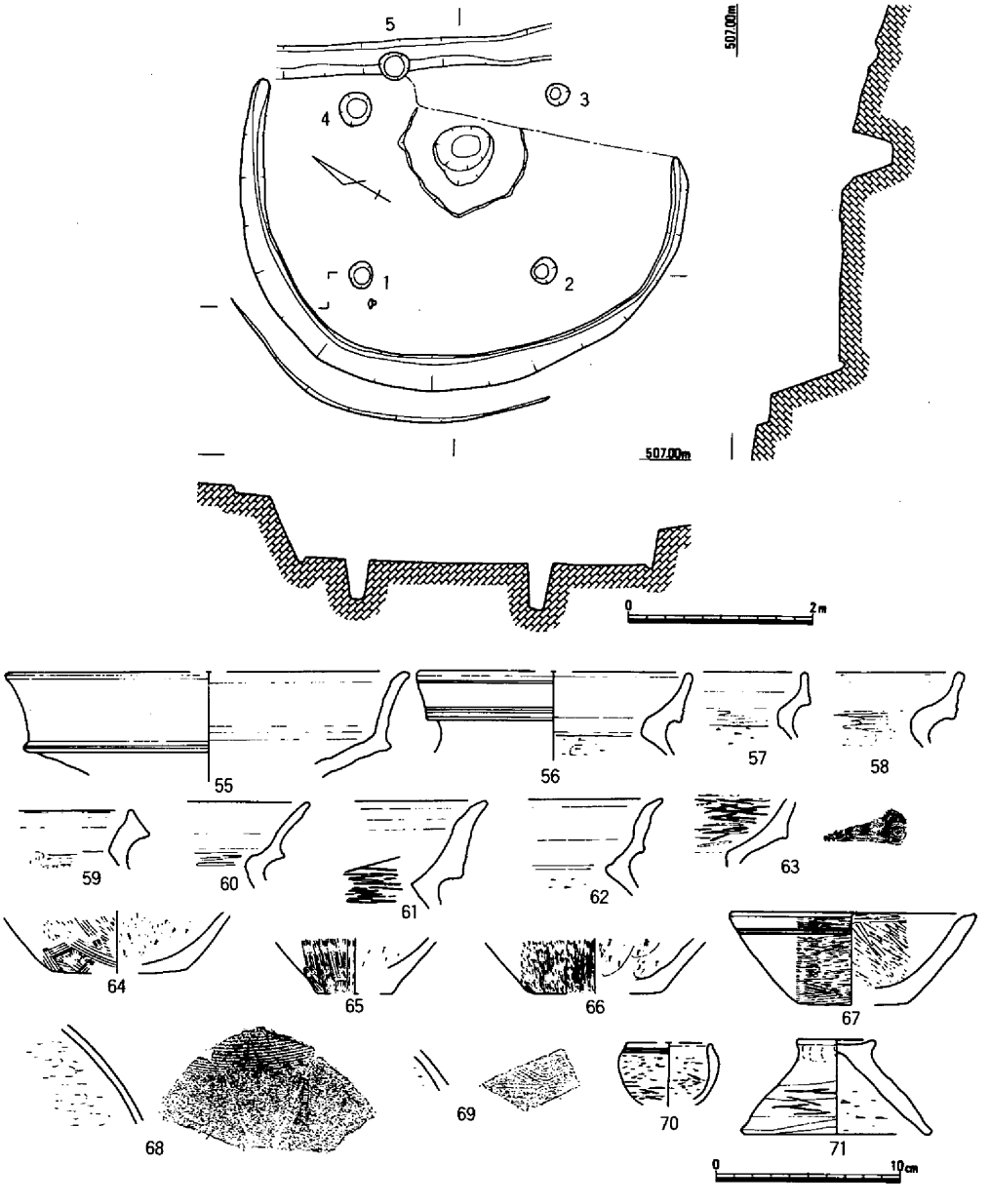
出土遺物（第123図）は**55～71**までであり、**71**以外は全て埋土中からの出土である。**55**から**63**は、屈曲する頸部から上方へ拡張する口縁部を持つものである。**56～58**は、口縁外面に沈線を施し、**63**は重弧文が認められる。**64～66**は、底部の破片でいずれも平底を呈する。**67**は外方に開き、**70**は小形の鉢形土器である。両者とも口縁下に沈線を施している。**68**と**69**は、肩部に直線文と波状文を施文している。**71**は、唯一床面から出土した蓋または杯である。口径9.8cm、器高5.2cm、台径4cmを測る。外面は、ヘラケズリの後にヘラミガキ、内面はヘラケズリを行なっている。

No.11－竪穴住居（第124図）

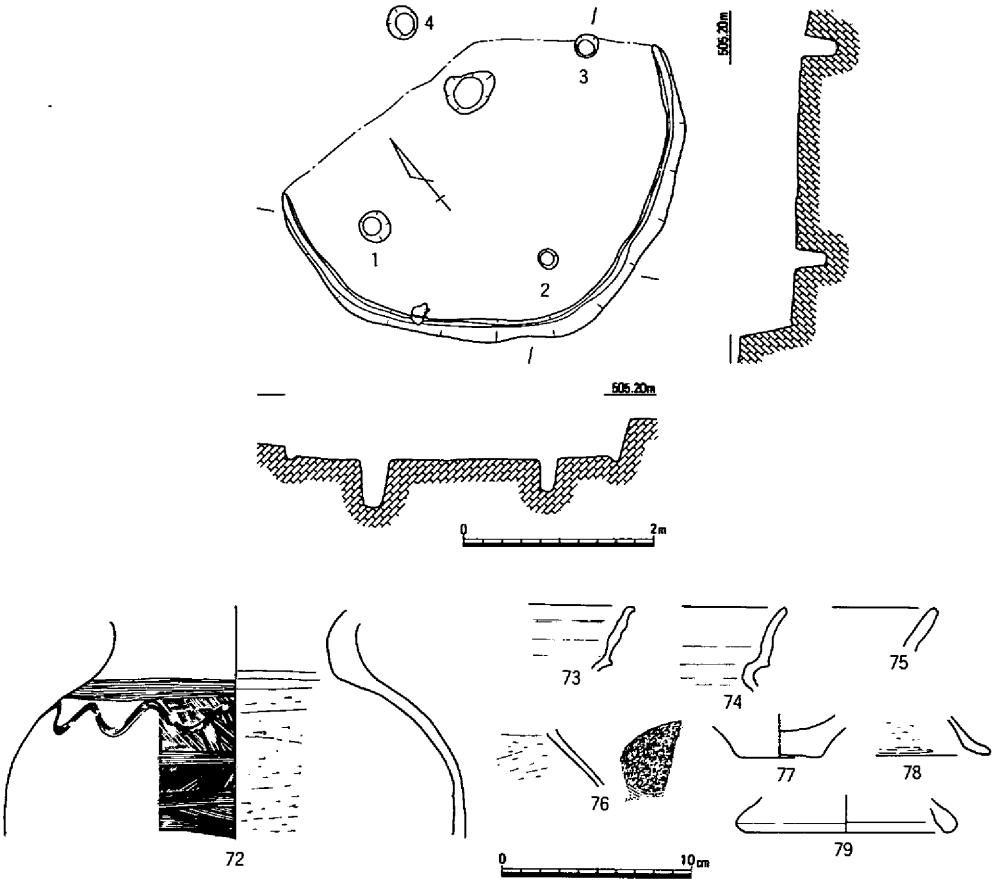
調査区中央やや西よりでNo.14－竪穴住居の西側に位置する。規模は、径4.3mほどを測り、形態は円形を呈すると考えられるが斜面に相当する北側については消失している。柱穴は、4本確認され1－33×32cm深さ49cm、2－径21cm深さ40cm、3－径25cm深さ36cm、4－36×32cm深さ24cmを測る。中央穴と考えられるのは中央よりやや北東側に53×40cm深さ32cmの規模となる。

出土遺物（第123図）は、**72**・**79**が床面で他は埋土中からの出土である。**72**は、柱穴1の南

壁に接して検出された。緩やかに屈曲する頸部を持つものであるが口縁部と胴部中位ほどから欠失している。肩部直下に直線文と波状文を施文する。**79**は、脚部の小片である。**73～75・76・78**は、土師器の小片である。



第123図　No. 9－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）



第124図　No.11-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

No.14ー竪穴住居（第125図）

調査区中央付近にNo.11ー竪穴住居の東側に位置する。規模は、北西と南東が350cmで北東側が削平されている。形態は、胴張り隅丸方形を呈する。柱穴は1と2が確認され、1ー径25cm深さ31cm、2ー36×29cm深さ27cm、を測る。この他にピットが認められるが4以外は、この住居に伴わないものと考えている。

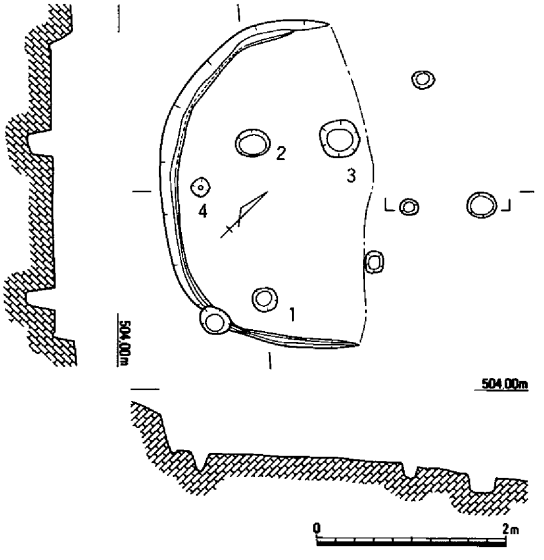
出土遺物（第125図）は、**80・82**が床面から、**81**が柱穴3からで他は埋土中からの出土である。**80**は、屈曲する頸部から上方に拡張し、外方に広がりさらに内傾気味の口縁部をつくる。文様は、口縁部外面に小さい波状の沈線が施文され、肩部には施文具を止めながら沈線を施している。内面は、ヘラケズリの後に細いハケ状のものによる不定方向のナデが見られる。**84**は、**80**と同様な器形を持つもので、頸部から肩部の文様は刺突風から直線状をなしている。内面調整は、頸部下半はヘラケズリの後に口縁部から連続したヘラミガキを行なっている。**81**は、柱

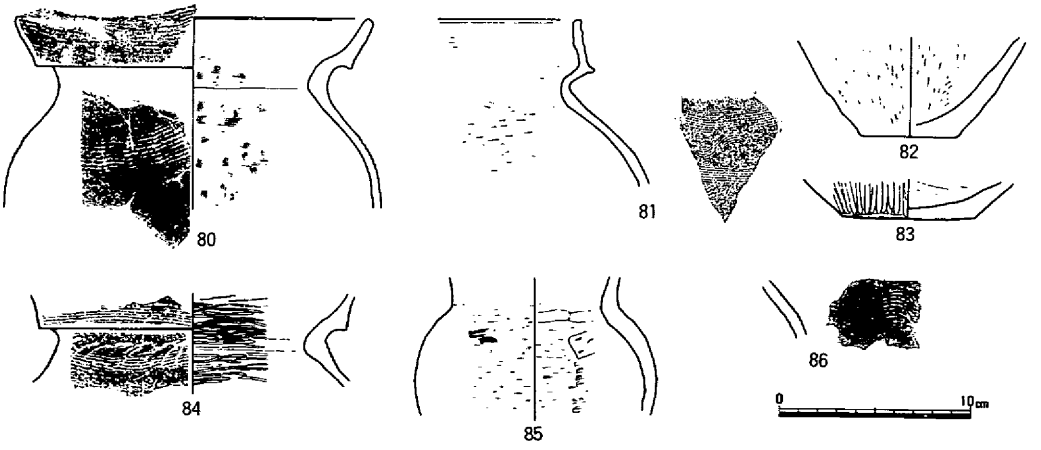
穴３から出土したもので肩部に直線文と波状文が認められる。**85**は、壺形土器の破片で胴部外面に横方向のタタキが認められる。内面は、ヘラケズリが認められる。**82・83**は、平底の破片であり**83**は外面にヘラミガキが認められる。**86**は、波状文が施文され丹塗りが認められる。

No.20－竪穴住居（第126図）

調査区ほぼ中央にNo.31－竪穴住居の南西側に位置する。この竪穴住居は、北西辺のみ確認され他の辺は削平されて不明である。柱穴は、１－径18cm深さ７cm、２－26×24cm深さ30cm、３－56×41cm深さ52cm、４－36×21cm深さ47cm、５－径30cm深さ36cm、６－25×21cm深さ45cmを測り、形態は３が楕円形で他は円形を呈する。中央穴は削平により一部不明である。径75cm深さ21cmを測るものと考えられる。なお、住居に伴う柱穴については判断できなかった。

出土遺物（第126図）は、**87**から**91**が床面、**92・93・94**が柱穴４からで他は埋土中からの出土である。**87**は、屈曲する頸部から肥厚気味に口縁部をつくる。内面頸部以下にヘラケズリが見られる。**88・92**は、くの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁部をつくる。口縁外面には沈線を施文する。**93**は、高杯形土器とも考えられる器種で、口縁外面に凹線状の沈線が認められ、内面にはヘラミガキ見られる。内外面とも丹塗りである。**96**は、この遺跡では出土の少ない壺形土





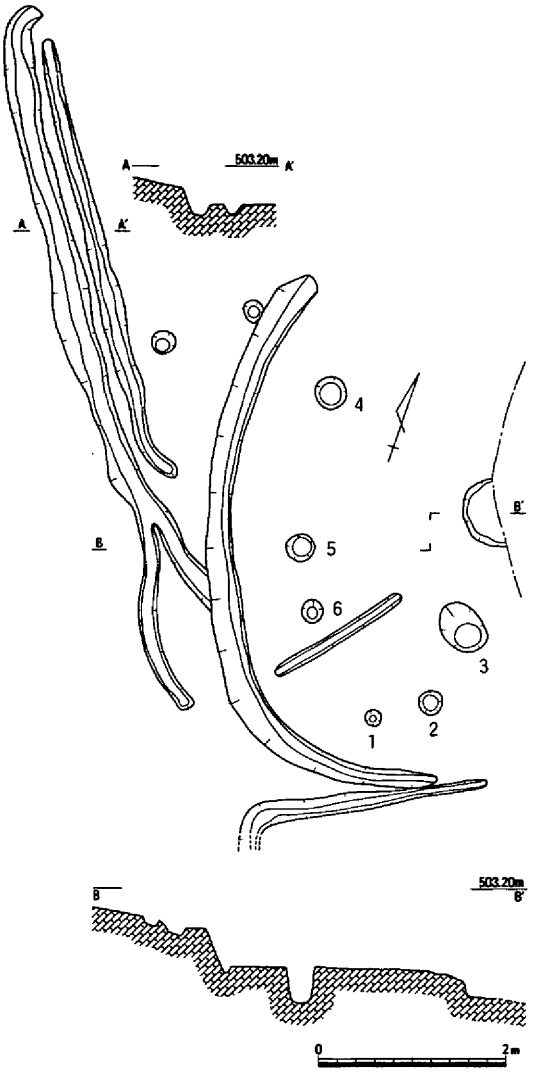
第125図　No.14-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

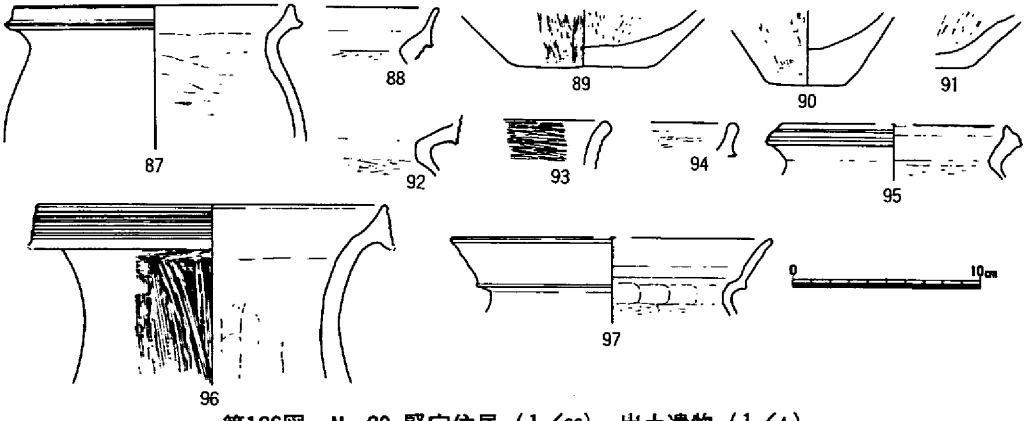
器である。口径18cmを測り緩やかに外反する頸部から上下に肥厚させる口縁をつくり、口縁外面には凹線を施文する。調整は、頸部外面がタテハケ、内面は押圧痕が認められる。

No.22－1－竪穴住居（第142図）

調査区中央にNo.21－竪穴住居の南側に接して位置する。No.21とNo.22－2竪穴住居と重複し後者の溝の内側に2m前後の円形を呈する掘込みの一部が認められた。壁帯溝などは確認できなかったが一応竪穴住居としたが判断しがたい。柱穴は、1－26×25cm深さ18cm、2－40×35cm6深さ41cmを測るが、この住居に伴うかどうか詳細は不明である。

出土遺物（第127図）は、何れも埋土中からの出土である。**98・99**は、くの字状に屈曲する頸部から上方に開きながら拡張する口縁をつくる。口縁外面には、**98**が凹線を**99**は櫛による沈線が施されている。内面頸部の屈曲部にはヘラミガキが認められている。

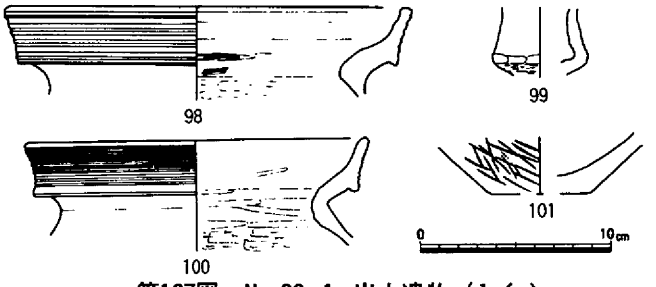




第126図　No.20-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

No.25－竪穴住居（第128図）

調査区中央北よりにNo.31－竪穴住居の北西に接して位置する。この竪穴住居は、南辺から西辺にかけて遺存する他は削平及びNo.31と重複している。南辺の壁帯溝が二重となっていることから拡張を推測されるが詳細不明である。柱穴は、5個検出されているがその規模は、1－30×29cm深さ20cm、2－28×24cm深さ50cm、3－27×24cm深さ42cm、4は二段掘りで深さ47cm、5は深さ10cmをそれぞれ測る。主柱穴については、全体の内容が不明であるため特定できなかった。

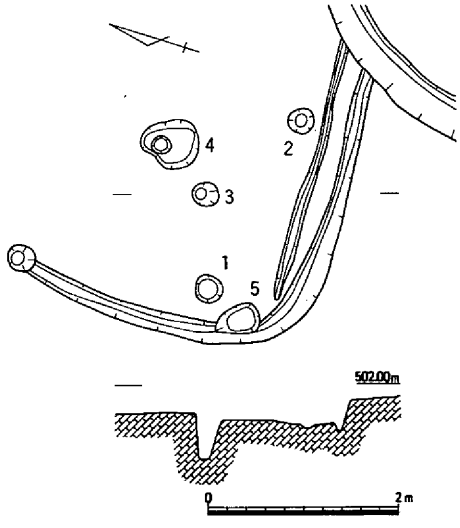


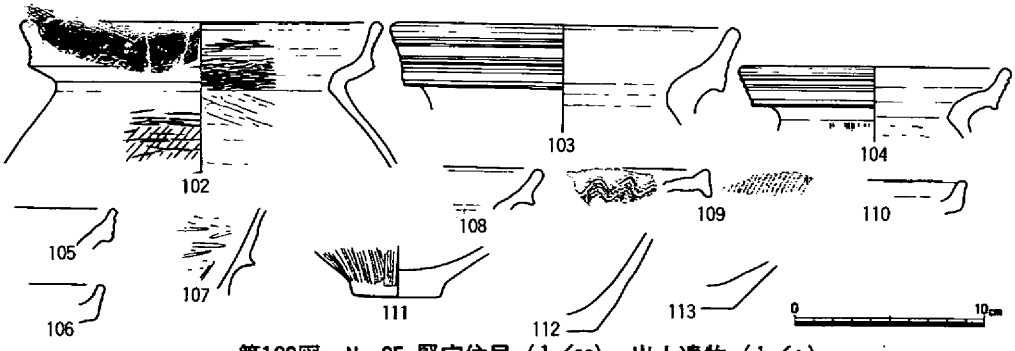
第127図　No.22-1-出土遺物（1／4）

出土遺物（第126図）は、何れも埋土中からの出土である。**102～106・108・109**は、くの字状に屈曲する頸部から上方に開きながら拡張する口縁を持つ。**108**を除き口縁外面に沈線を施す。**102**は、肩部に刺突を廻らし頸部内面の屈曲部にヘラミガキが見られる。**107**は、口縁外面に波状文を有する。**110**は、鼓形土器の小片である。

No.34－竪穴住居（第129図）

調査区北端でNo.31－竪穴住居の北側に位置する。No.36－竪穴住居と重複し、この竪穴住居の方がNo.36より新しくなる。規模は、東西約420cmを測り、北側は削平を受けている。ピットは、10個確認することができたがこれらの内どのピットが柱穴として用いられたのかど

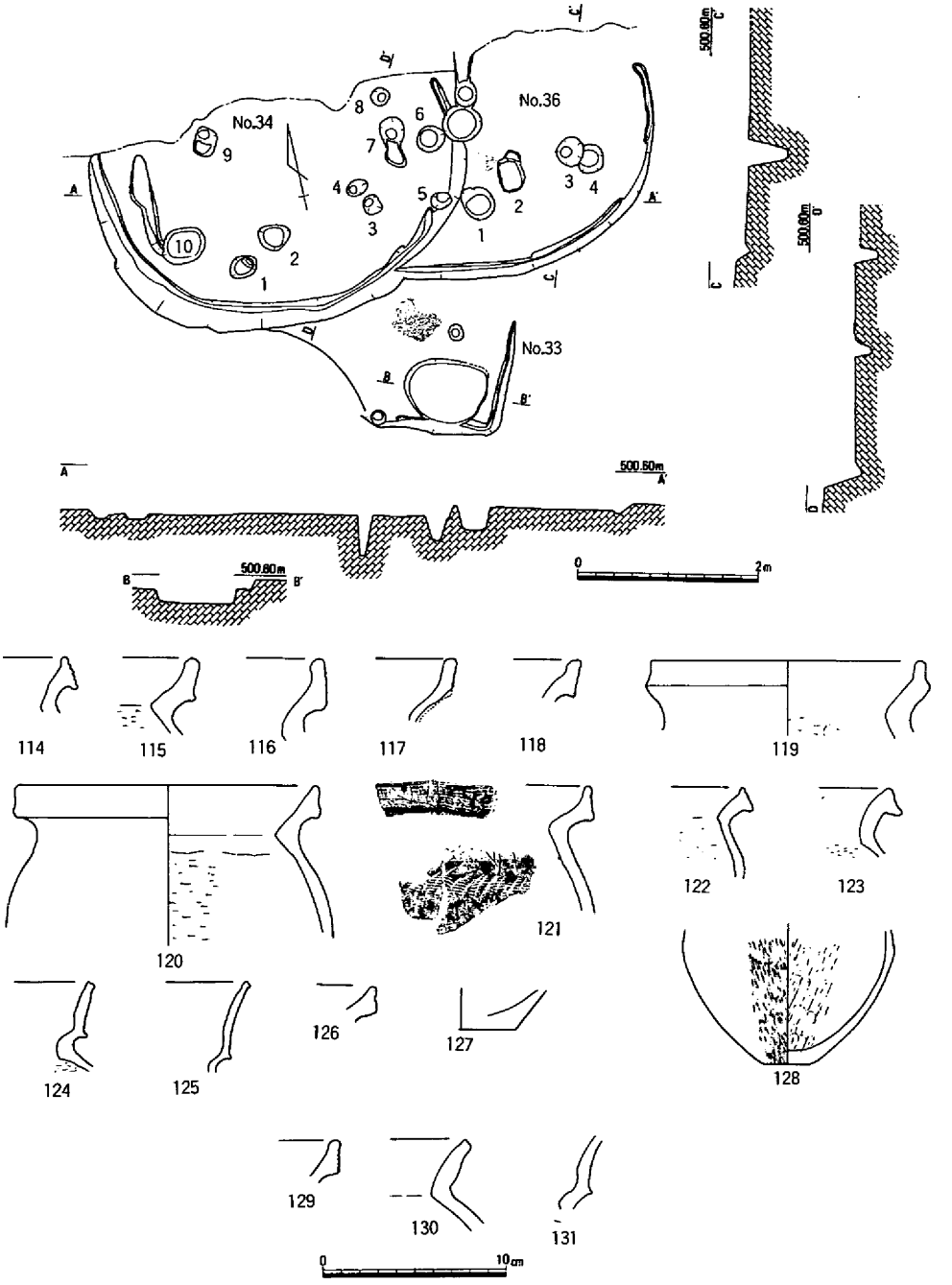




第128図　No.25-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

うかの判断はできなかった。これらの規模は、径46～18cm深さ43～11cmを測る。

出土遺物（第128図）は、**114～117**は床面から118は柱穴７で他の埋土中からの出土である。



第129図　No. 33・34・36-竪穴住居（1／80），No. 34・36-出土遺物（1／4）

114～117は、くの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁を持つ。これらのうち口縁外面には、**115**を除いて沈線を施文している。**121**は、肩部に貝による刺突文、口縁内面の頸部にかけてヘラミガキが認められる。

No.36－竪穴住居（第129図）

調査区北端でNo.31－竪穴住居の北側に位置する。No.34－竪穴住居と重複し、この竪穴住居が切られていることから古く位置付けられる。南東側だけが遺存し、他はNo.34に切られたり後世の削平により不明である。壁帯溝は、一部途切れている所が認められるがほぼ廻っている。柱穴の規模は、1－35×33cm深さ25cm、2－38×28cm深さ44cm、3－32×30cm深さ42cm、4－32×30cm深さ22cmを測る。主柱穴と考えられるのは、3とNo.34の3が位置関係と深さなどからそれと考慮される。柱穴1の北に27×25cmの範囲において床面の赤化した部分が認められる。この部分は、表面だけであり下層には全く影響を与えていなかった。

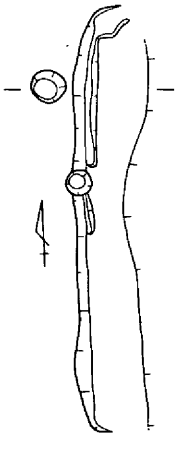
出土遺物（第128図）は、**130**が床面からで他は埋土中からの出土である。**130**は、くの字状に屈曲する頸部を有する甕形土器である。口縁端は、面取りされ平坦となっている。

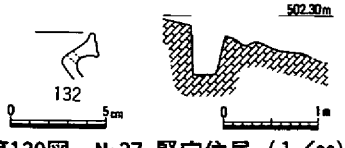
No.37－竪穴住居（第130図）

調査区中央東よりのNo.39－竪穴住居の南西側に位置する。地形的には、耕作の関係と思われる段が東に接して南北方向に延びている。このことにより西辺の長さ450cmが確認されたのみで、他の辺は削平されて不明である。形態は、方形を呈し壁帯溝は一部認められた。

出土遺物（第129図）は、**132**の甕形土器の小片である。くの字状に屈曲する頸部から上下に拡張する口縁をつくる。口縁外面には凹線を施文し、頸部には孔が認められる。内外面には、丹塗りの痕が認められる。

なお、この竪穴住居の時期は弥生時代としたが、住居の平面形態が隅部分がほぼ直角となる方形であることが推測されることから、この時期のものとして取り扱うかどうか躊躇する。





第130図　No37-竪穴住居（1／80）
出土遺物（1／4）

No.40－竪穴住居（第131図）

調査区北東端よりのNo.42－竪穴住居の南側に接して位置する。規模は、径560cmを測り、平面形態は円形を呈する。壁は、ほとんど削平されており壁帯溝のみによる確認であるが、これも削平されている箇所もある。内側にも壁帯溝が認められることから拡張が考えられる。ピットは、10個認められそのうち柱穴として用いられたのは8個である。柱穴の規模は、1－24×20cm深さ31cm、2－35×30cm深さ26cm、3－径24cm深さ22cm、4－31×30cm深さ32cm、5－47×45cm深さ56cm、6－40

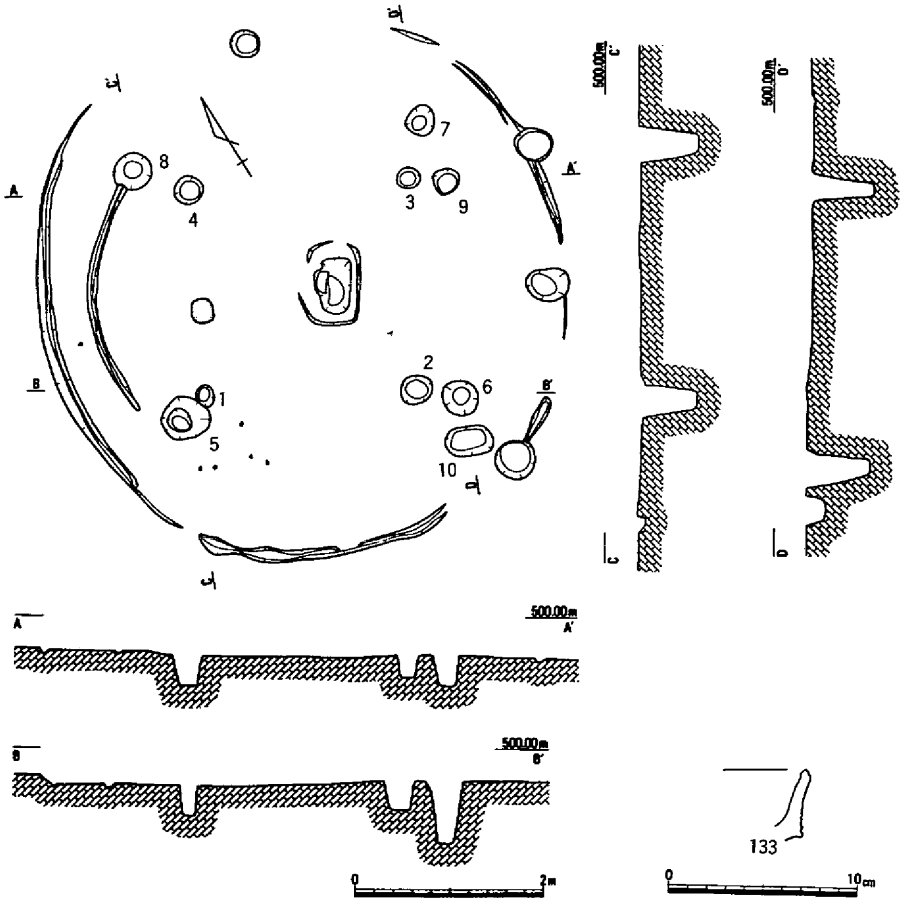
×37cm深さ62cm、7－33×30cm深さ65cm、8－42×40cm深さ55cmをそれぞれ測る。1～4は古い住居に5～8は拡張された住居に伴う。中央穴は、90×65cmを測り、形態は方形を呈する。底は、深い所が2か所認められ34cmと97cmを測る。

出土遺物（第131図）は、上方に拡張する口縁を有する小片である。口縁外面下端に沈線を施文し、内面はヘラミガキが認められる。

土器以外に、南西よりに碧玉の剝片が6点検出されている。先にも記したように床面まで削平を受け、かつまた耕作の痕が床に残されていることからこの住居に伴うものか判断しがたいのである。

No.42－竪穴住居（第132図）

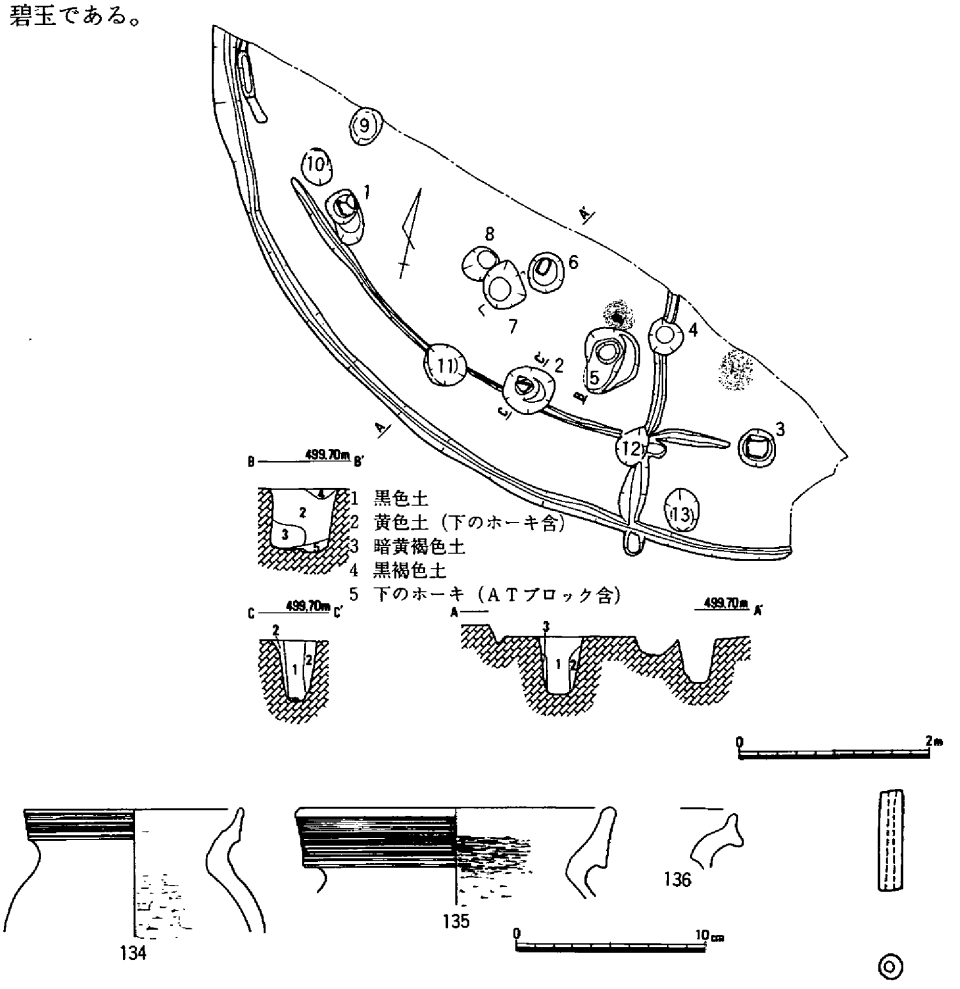
調査区北東端でNo.40－竪穴住居の北側に位置する。北側は調査区外、そして東側はNo.41－竪穴住居と重複する。調査された部分から平面形態は円形を呈するものと考えられ、内側にも



第131図　No.40-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

壁帯溝が認められていることから拡張を想定できる。柱穴は、住居内に13個認められその内の1～3が底に石を用いている。その規模は、1－37×33cm深さ58cm、2－52×50cm深さ65cm、3－径39cm深さ45cmを測るもので拡張した住居に伴うものと考えている。他の柱穴は、深さが13を除き46～69cmもあり柱穴として用いられても良いものであるが、全体的な形態が把握できないため判断できない。柱穴4の両側に径35cmほどの焼土面が認められるが下層まで影響を受けていない。

出土遺物（第132図）は、**134・135**が床面、**136**が柱穴7、管玉は外側の壁帯溝からそれぞれ出土している。**134**は、口径11.5cmを測り、口縁外面に貝による沈線及び同施文具による押し引き文が肩部に施される。**135**は、口径16.5cmを測り、口縁外面に沈線を施文する。内面は、頸部屈曲部にヨコヘラミガキが見られる。管玉は、長さ12.9mm、径3mm、重さ0.20gで石材は碧玉である。



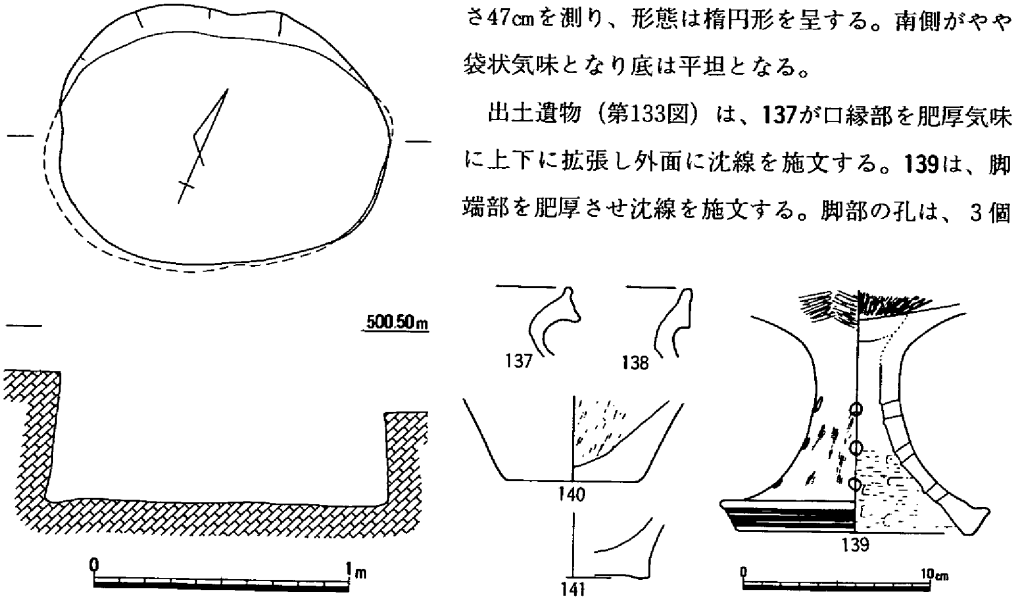
第132図　No.42-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／1）

土壙

No.43－土壙（第133図）

調査区中央北東端よりのNo.36－竪穴住居の南東に接して位置する。規模は、126×100cm深さ47cmを測り、形態は楕円形を呈する。南側がやや袋状気味となり底は平坦となる。

出土遺物（第133図）は、**137**が口縁部を肥厚気味に上下に拡張し外面に沈線を施文する。**139**は、脚端部を肥厚させ沈線を施文する。脚部の孔は、３個



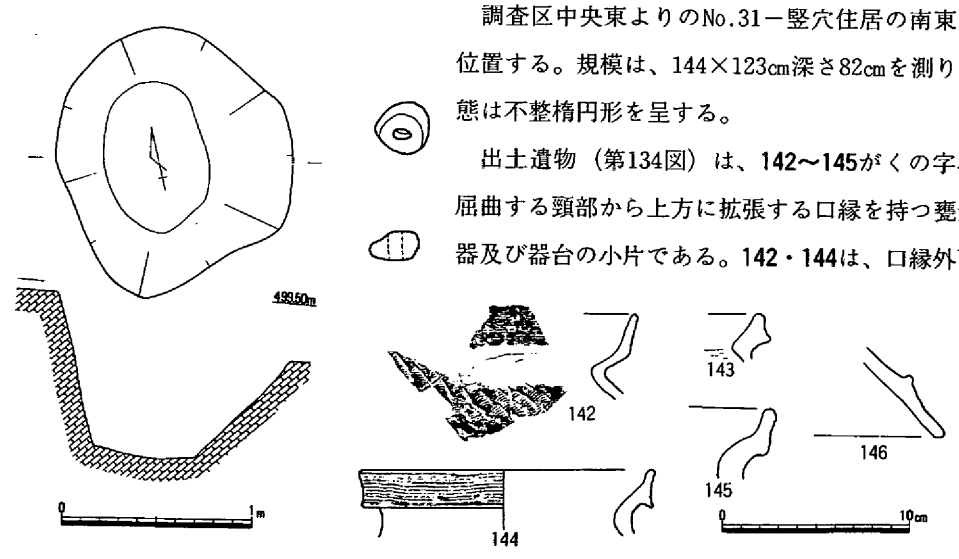
第133図　No.43-土壙（1／30）・出土遺物（1／4）

1対で3か所に設けられている。

No.44－土壙（第134図）

調査区中央東よりのNo.31－竪穴住居の南東側に位置する。規模は、144×123cm深さ82cmを測り、形態は不整楕円形を呈する。

出土遺物（第134図）は、**142～145**がくの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁を持つ甕形土器及び器台の小片である。**142・144**は、口縁外面に



第134図　No.44-土壙（1／40）・出土遺物（1／4・1／1）

沈線が142は肩部に波状文を施し、内面の頸部屈曲部にはヘラミガキが見られる。146は凸帯を付し口縁外面に凹線を施文している。外面は丹塗られている。135の土器からすれば当遺構は、古墳時代に入れたほうが妥当と考えている。

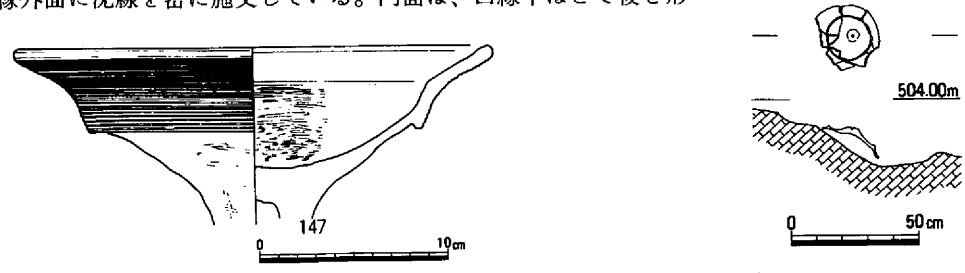
ガラス玉は、長さ3.93mm径7.1mm重さ0.23ｇを測る。

溝

No.16－溝（第135図）

調査区中央西よりのNo.14－竪穴住居と接して位置する。南東から北西にかけて長さ410cmほど確認された。規模は、幅45cm深さ13cmほどで壁帯溝とも考えたが、柱穴が認められなかった。遺物は、溝の上端に沿うように杯部を裏にして検出された。

出土遺物（第135図）は、高杯形土器の杯部である。147は、口径24.9cm深さ6.3cmで外反する杯部からさらに外方へ広がりながら拡張する口縁をつくる。口縁外面に沈線を密に施文している。内面は、口縁中ほどで稜を形成し丸みを描く底に移行する。内外面に煤が付着している。



第135図　No.16-溝（1／30）・出土遺物（1／4）

No.15－溝（第121図）

調査区中央西よりのNo.９－竪穴住居の北東側に接して位置する。斜面に沿うように南東から北西へ長さ11.50ｍほど認められる。規模は、幅45cm深さ14cm前後を測る。

出土遺物（第136図）は、甕形土器の小片である。口縁外面に沈線と肩部に波状文を施文している。

No.16－溝（121図）

調査区中央のNo.14－竪穴住居の南東に接して位置する。長さ約３ｍについて確認され幅22cm深さ13cmである。形態は、弧を描き北西側はNo.14に切られる。溝より内側に多くのピットが認められ壁帯溝の可能性もある。

出土遺物（第136図）は、149で高杯形土器の脚柱状部の破片である。

第136図　No.15・16-出土遺物（1／4）

古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居

No. 3 －竪穴住居（第137図）

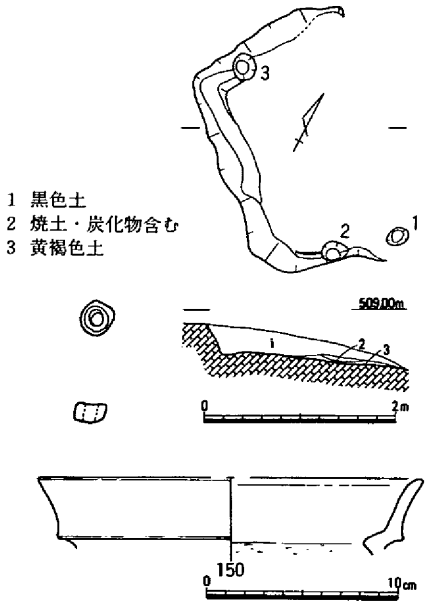
調査区南西端でNo. 2 －土壙の南側に位置する。規模は、南東と北西間が2.52ｍを測るが東側は斜面部にかかり確認できなかった。柱穴は、１－24×18cm深さ19cm、２－28×22cm深さ20cm、３－29×24cm深さ41cm、を測る。壁帯溝は、東と西の隅部分に認められるが極めて不規則なものである。

出土遺物（第136図）は、推定口径20cm前後を測る壺形土器の破片である。くの字に屈曲する頸部から上方に開きながら拡張する口縁を持つ、口縁端部は細くなって終わらせている。ガラス玉が住居外から出土し、長さ2.07mm、径4.02mm、重さ0.05ｇを測る。

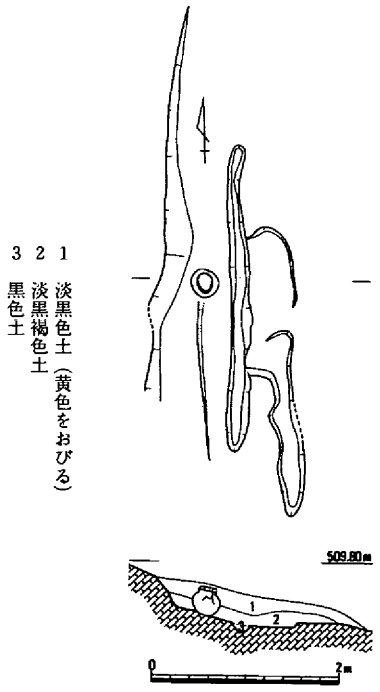
No. 5 －竪穴住居（第138図）

調査区南西隅でNo. 3 －竪穴住居の南側に位置する。西側の壁から50cmほど離れ長さ3.25ｍ、幅20cm、深さ10cm前後の溝が認められる。後世の攪乱による遺存の状態が悪く住居と判断しがたい。遺物は、**152**が床面に据えられた状態で出土している。

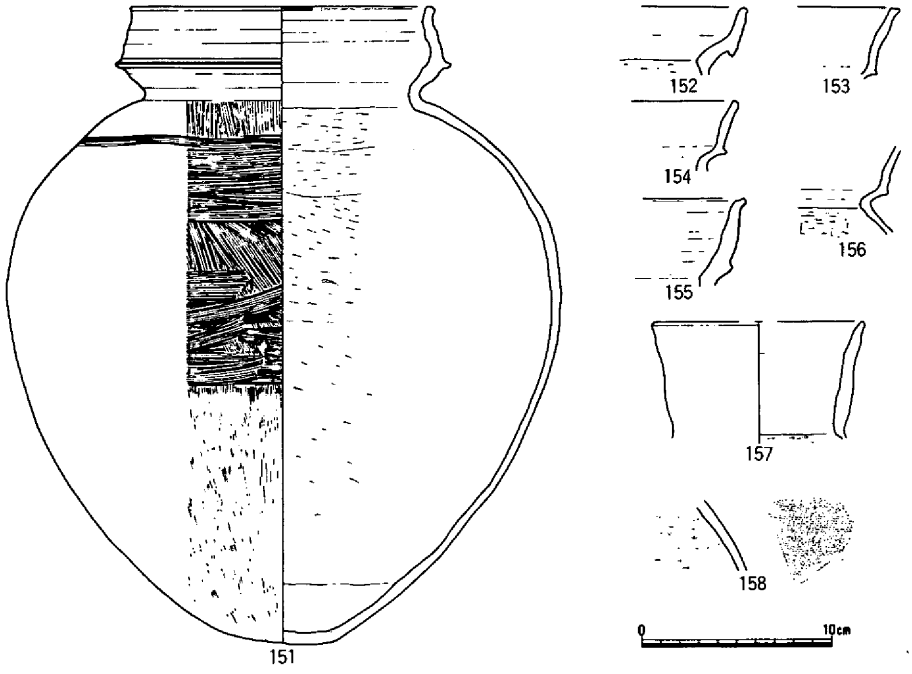
出土遺物（第139図）は、152以外は埋土中からの出土である。**152**は、口径15.4cm、器高



第137図　No. 3 -竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／1・1／4）



第138図　No. 5 -竪穴住居（1／80）



第139図　No. 5 -出土遺物（1／4）

23.6cmを測る。くの字状に屈曲する頸部から内傾して拡張する口縁を持つものである。胴部最大径は上位になり、平底風の底部となる。文様は、肩部上半に櫛描沈線文が施文される。調整は、外面が胴下半にかけて斜め、底部にかけてはタテハケを用いている。内面は頸部の屈曲部までヨコナデ、以下はヘラケズリが認められるが底部近くでは押圧痕が見られる。

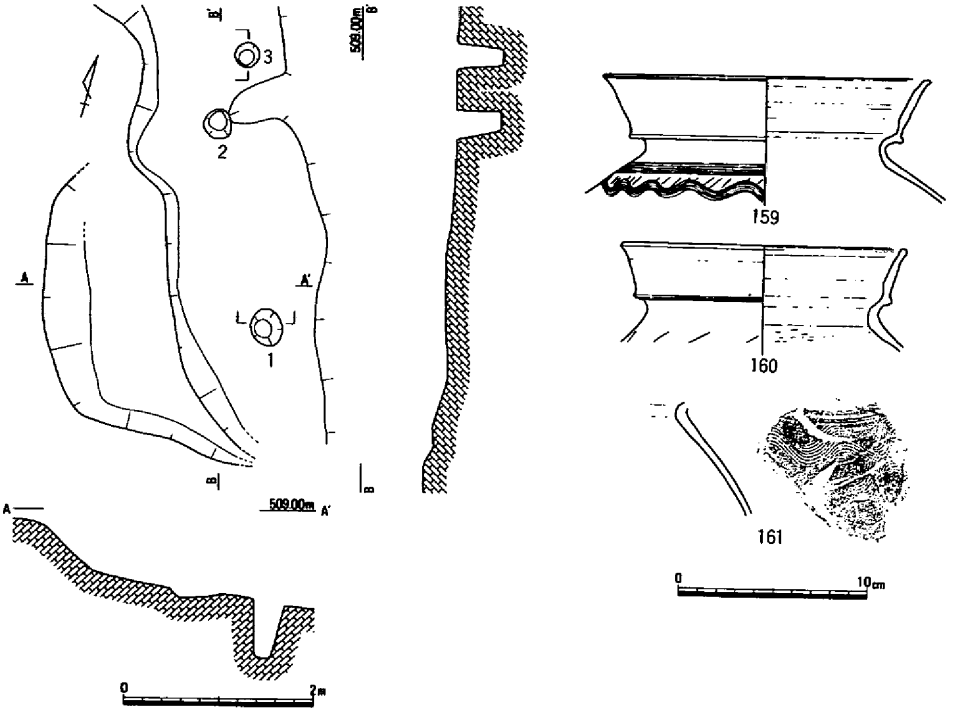
No. 6 一竪穴住居（第140図）

調査区南西端でNo. 3 一竪穴住居の南東側に位置する。丘陵の西側からの不整形なカット面が認められるが明確な壁とするには躊躇する。柱穴は、1 一40×34cm深さ62cm、2 一30×29cm深さ46cm、3 一27×26cm深さ41cm、を測る。これについても住居として取り扱うか判断しかねるが、床面の状態及び柱穴からしてその可能性も考えられる。

出土遺物（第140図）は、**159～161**である。**159・160**はくの字状に屈曲する頸部から外方へ開きながら上方へ拡張する口縁を持つ。**159**は、肩部上半に櫛描直線文と波状文を施し、波状文の施文より先に刺突文を施文している。**161**は、肩部の小片であるが波状文を施している。

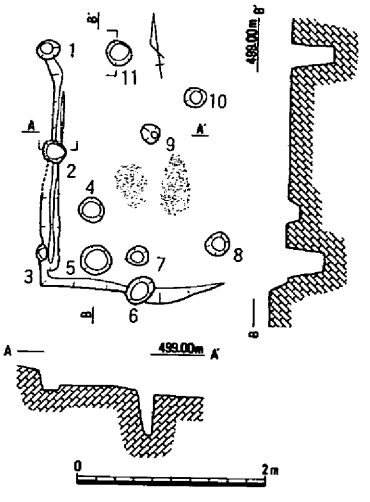
No. 17一竪穴住居（第141図）

調査区ほぼ中央でNo. 14一竪穴住居の南側に位置する。南壁と西壁が遺存するが他の壁は、削平のため確認できなかった。形態は、方形を呈するもので西壁には壁帯溝が認められている。柱穴は、11個検出されその規模は1 一24×20cm深さ41cm、2 一25×22cm深さ5 cm、3 一20×



第140図　No. 6 -竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

12cm深さ28cm、4－径27cm深さ12cm、5－33×32cm深さ40cm、6－34×26cm深さ15cm、7－24×20cm深さ33cm、8－27×24cm深さ37cm、9－径20cm深さ42cm、10－24×22cm深さ13cm、11－27×24cm深さ45cmをそれぞれ測る。柱穴1・5・9・11が深く、用を充分にはたせるがその位置関係からしてやはり無理であろうか。また、壁と重複する形で1～3・6が認められるが当住居に伴うかどうか主柱穴以外の用途など具体的には不明である。柱穴7と9の間に、48×34cmと65×31cmのいずれも楕円形の赤化して焼土面が認められる。この焼土面は、下層までその影響を受けていない。出土遺物は認められなかったが古墳時代のものとした。



第141図　No. 17-竪穴住居（1／80）

No. 21－竪穴住居（第142図）

調査区ほぼ中央でNo.20－竪穴住居の南側に接して位置する。規模は、4.2ｍの方形を呈するが、丘陵斜面の東側は消失している。当住居は、No.22－1と2

の竪穴住居と重複しているがいずれもこの住居が新しくそれらの住居を切っていることが認められている。柱穴は、1－29×26cm深さ36cm、2－31×30cm深さ30cm、3－21×20cm深さ20cm、4－40×31cm深さ32cm、5－24×20cm深さ38cmを測る。主柱穴と考えられるのは1・2・4である。なお、床面上には炭化材と焼土が認められ火災に遭ったことが想定される。

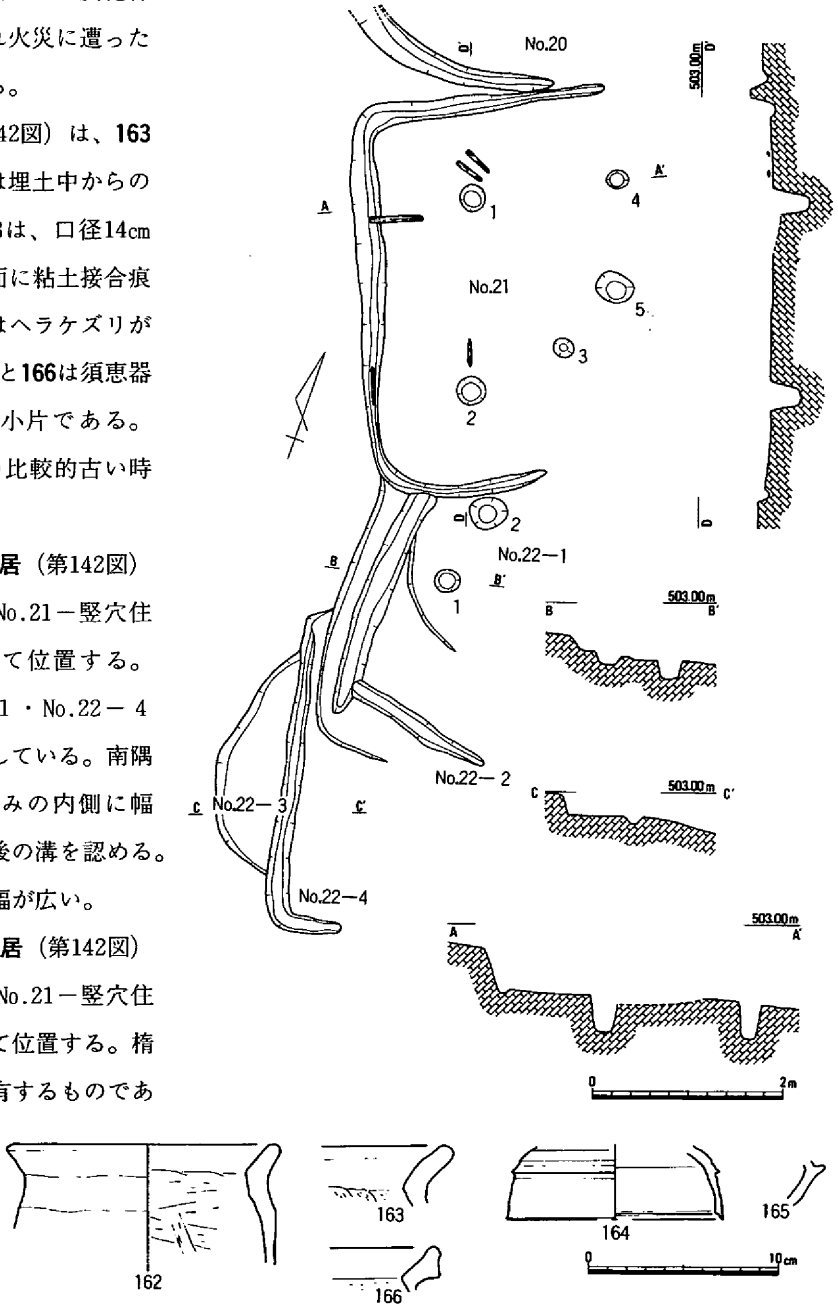
出土遺物（第142図）は、**163**が床面からで他は埋土中からの出土である。**163**は、口径14cmを測り、器壁外面に粘土接合痕を留め、内側にはヘラケズリが認められる。**165**と**166**は須恵器の杯蓋と杯身の小片である。**165**は5世紀末の比較的古い時期が考えられる。

No.22－2竪穴住居（第142図）

調査区中央でNo.21－竪穴住居の南側に接して位置する。No.21・No.22－1・No.22－4竪穴住居と重複している。南隅が屈曲する掘込みの内側に幅30cm深さ18cm前後の溝を認める。壁帯溝としては幅が広い。

No.22－3竪穴住居（第142図）

調査区中央でNo.21－竪穴住居の南側に接して位置する。楕円状の掘込みを有するものであ



第142図　No.21・22-1～22-4-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

り深さは21cmを測る。

No.22－4竪穴住居（第142図）

調査区中央でNo.21－竪穴住居の南側に接して位置する。規模は、南北方向にコの字状に3.4mほど認められる。幅20cm深さ15cm前後の壁帯溝が認められる。

以上のNo.22－2から4についてはNo.22－1を含めて、竪穴住居とする明確な内容を把握することが出来ていないので問題がのこる。

なお、No.21で埋土中として**162～166**の遺物は、検出時でNo21を含めた竪穴住居を想定していたため遺物の取り上げが特定できなかったことを記しておく。

No.30－竪穴住居（第143図）

調査区中央北東よりでNo.40－竪穴住居の南西側に位置する。胴張の隅丸方形状の幅22cm深さ11cm前後の溝である。No32と重複し、当住居が切られていることから古く位置付けられる。

No.32－竪穴住居（第143図）

調査区中央北西よりでNo.40－竪穴住居の南西側に位置する。南東と北西がコの字状に4.8mほどの溝として認められるものである。溝の幅は22cm深さ8cm前後を測る。柱穴は、3個検出したが当住居に伴うかどうか判断できなかった。

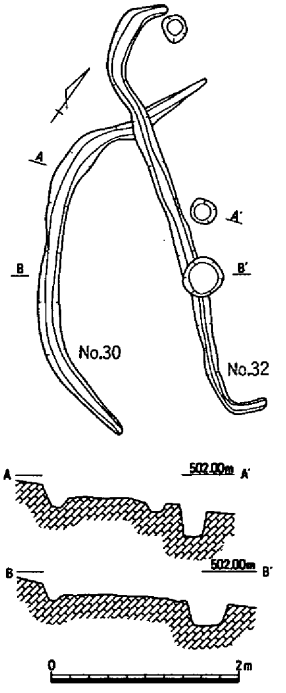
なお、No.30とNo.32の竪穴住居は、先のNo.22－1～4の竪穴住居と同じようにそれとして調査、又検出遺構からも明確な内容を把握することはできなかった。ここでは一応竪穴住居としたが時期についても同様に確定できなかった。

No.31－竪穴住居（第144図）

調査区中央やや北東よりでNo.25－竪穴住居と北西に接して位置する。規模は、一辺6.3mで形態は胴張隅丸方形を呈する。当遺跡で唯一完存していたものである。柱穴は、1－41×31cm深さ77cm、2－40×35cm深さ63cm、3－径33cm深さ67cm、4－35×3cm深さ76cm、を測る。この4本が主柱穴と考えられ、他の5～7はいずれも深さ15～30cmを測る浅いものである。中央穴は、60×47cm深さ53cmで形態は方形を呈する。

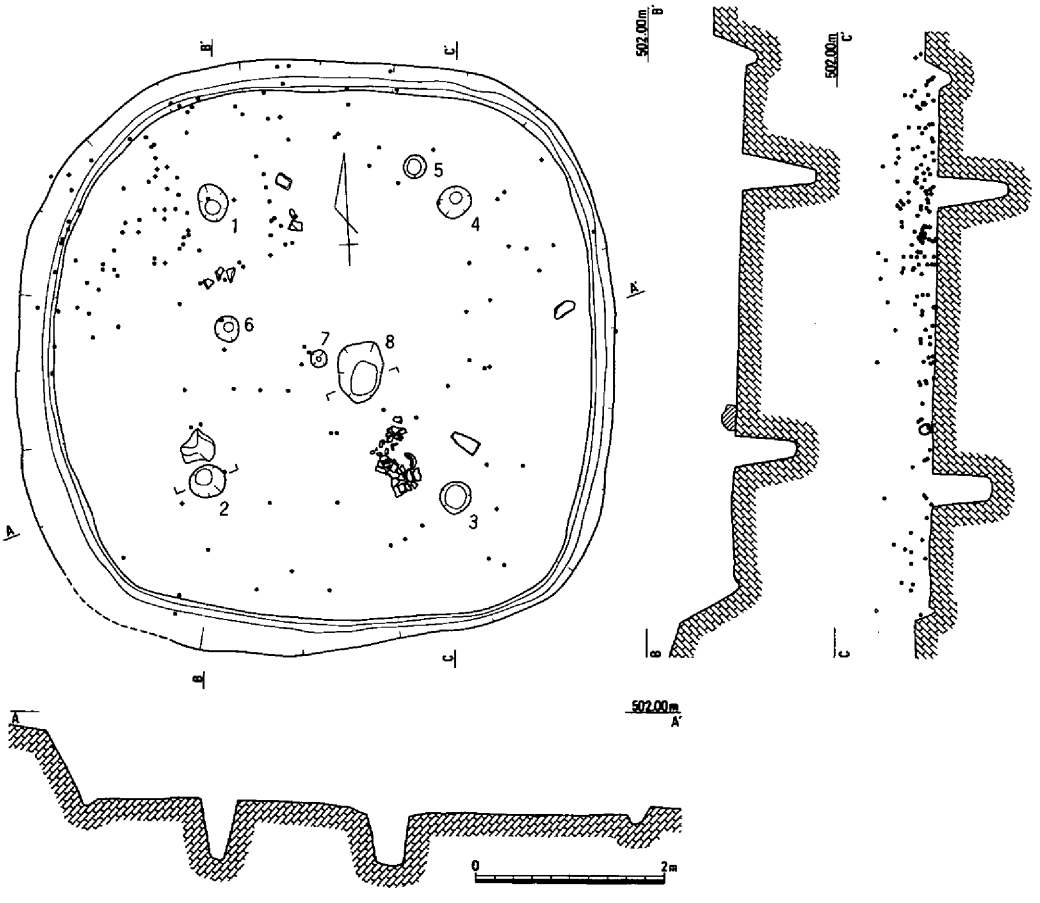
当住居の覆土及び床面から碧玉の剥片が64点検出されている。剥片は認められるが、製作の工程に関係するものは図示していないが、柱状の剥片が1点認められているのみである。

出土遺物（第145図）は、**167・172～174**が床面からで他は

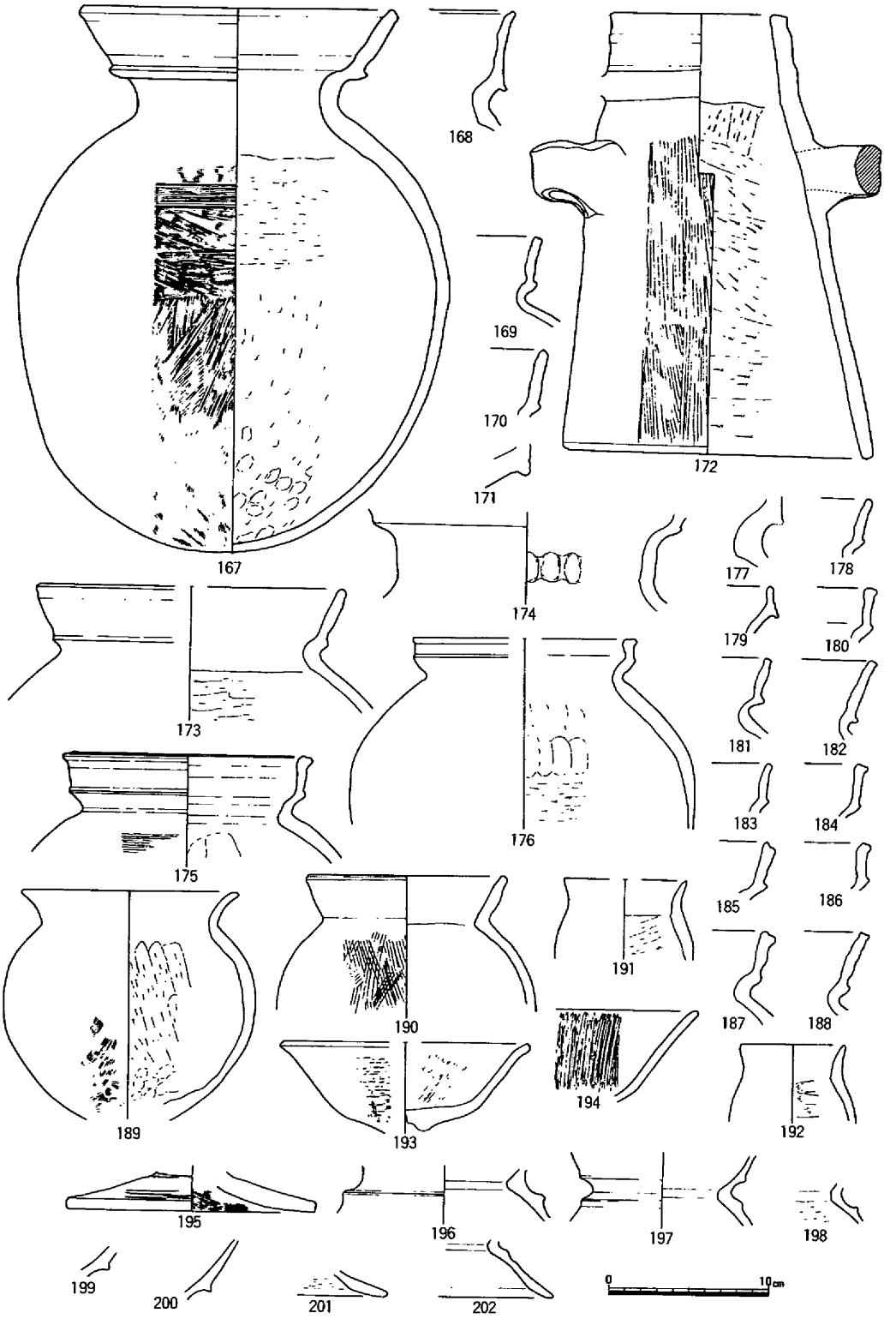


第143図　No.30・32-竪穴住居
（1／80）

全て埋土中からの出土である。**167**は、器高33.9cm、口径19cmを測る壺形土器である。緩やかに外反気味となる頸部から上方に広がりながら拡張する口縁部を持ち、胴部は球形状となり丸底の底部へ移行する。外面調整は、肩部下半から胴中位にかけて非常に細かいヨコハケ、以下タテハケが見られる。頸部内面屈曲部から口縁にかけてヘラミガキ状の調整が行なわれている。胴部内面は、上半がヨコヘラケズリで下半にタテヘラケズリが見られ底部近くでは押圧による凹凸が認められる。**175**は、くの字状に屈曲する頸部から上方に広がりながら拡張する口縁部を持つものである。口縁外面は、細い沈線を施しているようである。**174**は、直口する頸部を有する壺形土器であり、内面に押圧痕が認められる。**172**は、口径10.6cm、器高27.2cm、裾径18.4cmを測り、一部の破損部を除きほぼ全体を知り得る。口縁下に帯状の凸帯を付していたと推定される剝離痕が認められている。その下の相対する位置に把手が付されている。その把手の体部との接合は、体部に孔をあけて把手を差し込み内面からはその状態がほとんど観察でき



第144図　No.31-竪穴住居（1／80）



第145図　No.31-出土遺物（1／4）

ないほど丁寧に調整されている。外面調整は、タテハケが内面ではヘラケズリが裾部端まで認められる。

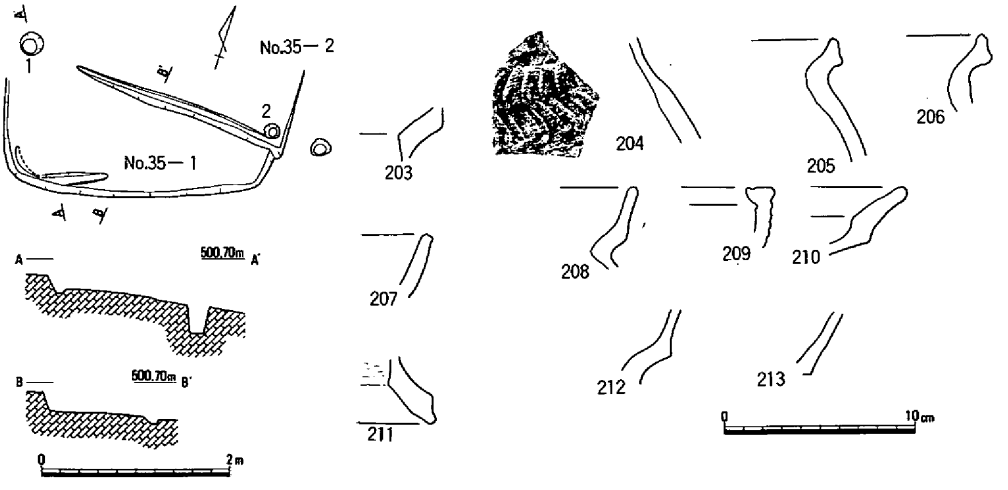
この器種は、どちらが口縁部または裾部になるかという上下の位置について問題が出されているようである。ここでは、この種の土器が一点だけで詳細に検討することはできないが、上下の位置は図の如くした。これについては、壺形土器や甕形土器等の口縁部に見られるヨコナデによる処理、また裾部端のヨコヘラケズリは器台等に見られる処理などと共通するものであることから図の如く示したのである。**168～171・175～188**は、くの字状に頸部が外反し上方に拡張する口縁を持つもので、**171**と**179**が口縁部外面に凹線を施文し他はナデによる。**189・190**は、くの字に屈曲する頸部を有するものである。**189**の底部に押圧痕を認める。**196～202**は、鼓形器台の小片である。

No.35－1・2竪穴住居（第146図）

調査区中央から北端でNo.34－竪穴住居の西側に接して位置する。No.35－1は、南壁と西壁の一部が認められ形態は隅丸方形を呈する。No.35－2は、東西方向にNo.35－1と重複しL字状の溝が一部検出されている。調査時において重複がないものとして掘り下げたが、床面検出時でそのことが確認されたのである。柱穴は、1－径25cm深さ31cm、2－17×16cm深さ46cmを測るがどの住居に伴うか判断できなかった。壁帯溝は、No.35－1は北西隅部分に一部がNo.35－2はその溝のみが遺存していた。

出土遺物（第146図）は、いずれもどの住居に伴出するか区別出来なかったため時期の判断ができない。遺物は、弥生時代後期中葉と古墳時代前半のものが出土している。

No.38－竪穴住居（第147図）



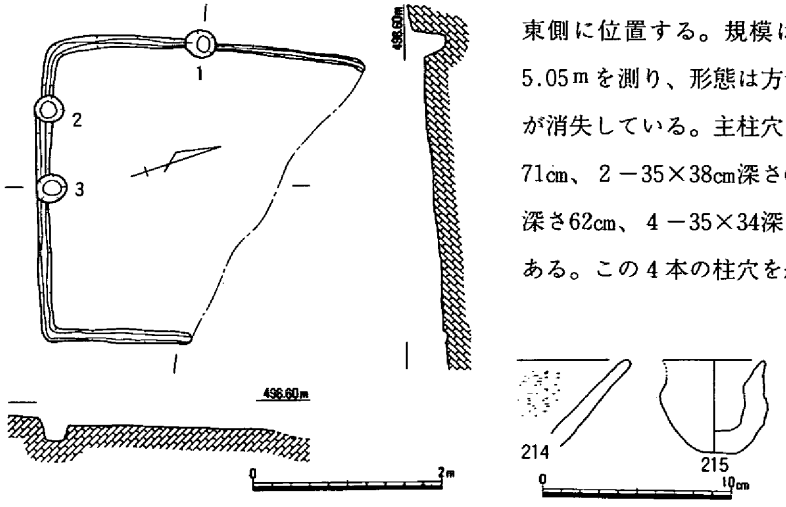
第146図　No.35-1・2-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

調査区北東端よりでNo.39－竪穴住居の北側に位置する。規模は、南北3.25ｍを測るが斜面部に相当する南から西壁にかけて消失している。柱穴は、１－32×30cm深さ22cm、２－31×28cm深さ27cm、３－31×30cm深さ14cmを測り、いずれも壁と壁帯溝が重複している。これらの柱穴が当住居に伴うかどうか不明であり、床面からは検出されなかった。

出土遺物（第147図）は、いずれも床面からの出土である。214は外方に大きく広がる杯部の小片である。内面にはヘラミガキが認められる。215は、推定口径5.5cm、器高5.1cmの手捏土器である。押圧痕は顕著ではない。

No.39－竪穴住居（第148図）

調査区中央より東でNo.47－竪穴住居の南東側に位置する。規模は、南北5.45ｍ東西5.05ｍを測り、形態は方形を呈するが南東隅が消失している。主柱穴は、１－42×36深さ71cm、２－35×38cm深さ64cm、３－43×36cm深さ62cm、４－35×34深さ66cmを測る４本である。この４本の柱穴を結ぶ内側が方形の凹



第147図　No.38-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

となっており、遺存の良い所で８cmほど低くなっている。この中に認められたピットは６－深さ54cm、７－深さ６cmを測る。東壁中央に接して広い掘込みが有りその中に、深さ49～60cmのピットが３個存在している。この11は、北東隅で壁帯溝が二重となりその内側のものがこのピットまで達している。また、12～14・17・18のピットがNo.38と同じように認められているが、やはりその内容は不明である。

なお、住居内から碧玉の剝片が６点と碧玉製管玉・滑石製臼玉・ガラス玉が各１点検出している。

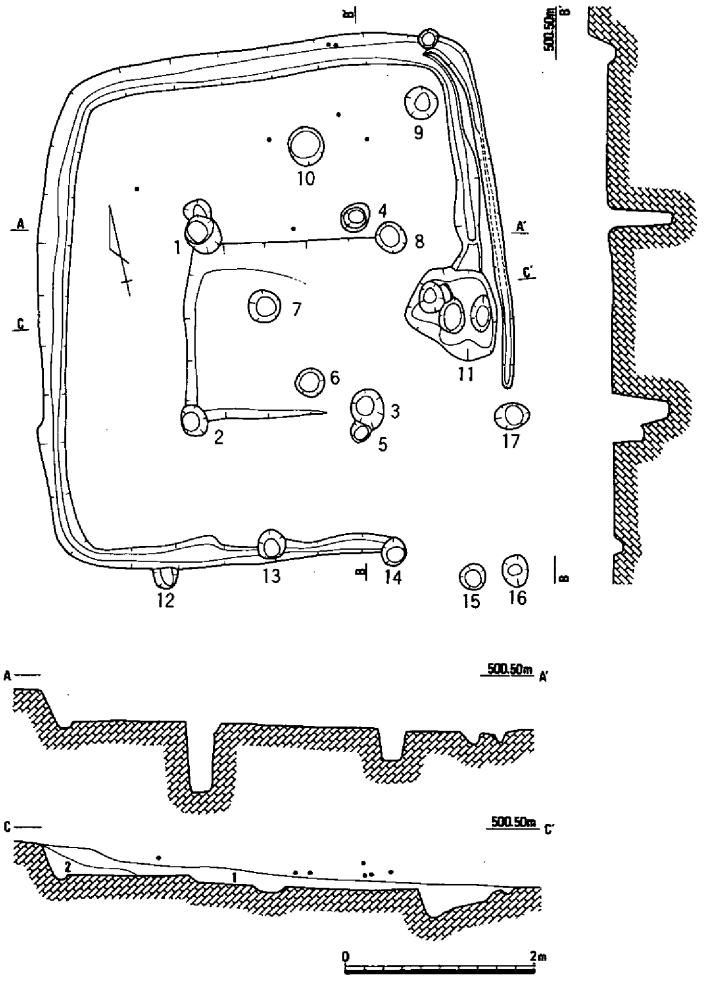
出土遺物（第149図）は、223・224が床面、215・217・225はピットからで他は埋土中からの出土である。217はくの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁部を持つ。225は、口径10.6cm、受け部径11.7cm、器高7.5cmを測る有蓋コップ形土器の須恵器である。把手を有するものと考えられるが欠失している。222は、口径12.5cm、器高15.3cm、を測る。外面調整は口

縁から胴部にかけてタテハケ、内面の口縁部にヨコハケが認められる。

ガラス玉は、北東隅よりの壁帯溝から出土したもので半折している。長さ2.7㎜を測り、色調はスカイブルーである。1の管玉は長さ14.9㎜、径4.29㎜、重さ0.51ｇを測り石材は碧玉製で排土中から検出された。2は滑石製の臼玉で、長さ3.12㎜、径4.3㎜、重さ0.09ｇを測り排土中からの出土である。

No.41－竪穴住居（第150図）

調査区北東端でNo.42－竪穴住居と接して位置する。規模は、南東－北西間が約6.5ｍを測り、形態は方形を呈するものと考えられる。北側の大半が用地外となる。壁から60cmほど内側に幅15cm、深さ７cm前後の溝が沿うように認められるが、一部の調査であるため不明である。なお、炭化材が床面近くから放射状に検出されたことから火災に遭ったことが考えられる。柱穴は、

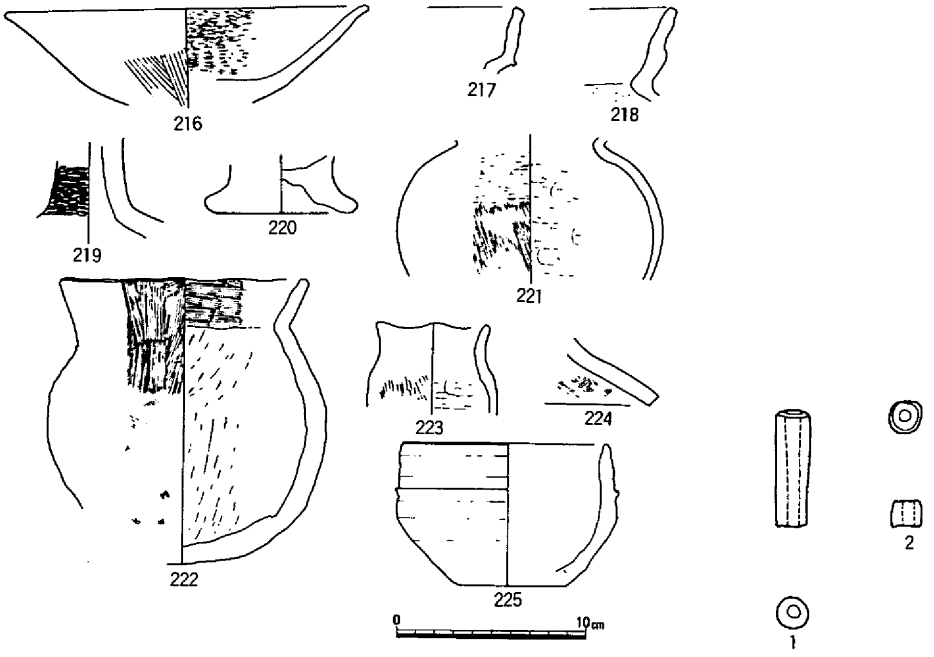


第148図　No.39-竪穴住居（1／80）

用地外にあると想定されるが一部の住居に認められている壁と重複状況でピットが存在する。ピットは3個認められ深さがいずれも37cm前後である。これらのピットは、ほかの住居と同様に伴うかどうか不詳である。なお、西隅部分でNo.42－竪穴住居を切って営まれている。

当住居からは、碧玉の剝片が6点とチャートかと考えられる剝片1点及び車輪石と考えられる小片がいずれも炭化材の下から出土している。

出土遺物（第150図）は、いずれも埋土中からの出土である。**226**は、須恵器である。227は、



第149図　No.39-出土遺物（1／4・1／1）

口径4cm、器高5cm、底径3cmを測る手捏形土器であるが押圧痕をあまり顕著に留めていない。車輪石は、グリーンタフ製であり内孔から図の如く復元した。表面の肋条表現は、1.9cmの幅ひろの凹部の両側の幅の狭いV字状を沈線を2条付しているが、これを繰り返すかどうか不明である。側面には、この幅の狭い沈線が施されている。なお、車輪石としたが石釧の可能性も考えられる。

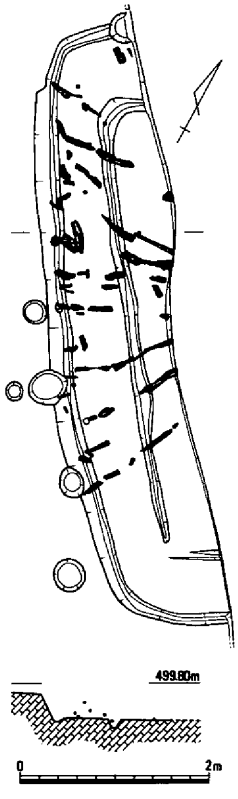
No.46－竪穴住居（第151図）

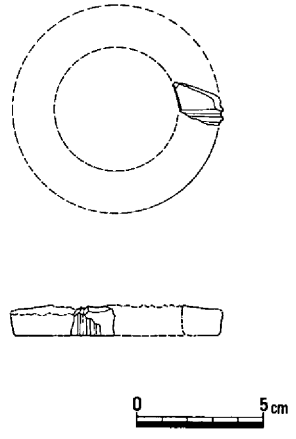
調査区東よりでNo.39－竪穴住居の西側に接して位置する。

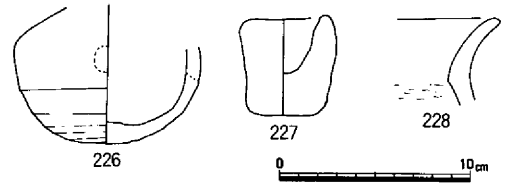
幅30cm、深さ18cm前後で長さ4.6mの溝が西隅部分にかけて認められた。柱穴は、1か所で径42cm深さ21cmを測るものだけで他には認めることができなかった。

出土遺物（第151図）は、**229・230**とも床面からの出土である。くの字状に屈曲する頸部か

ら上方に拡張する口縁を持つもので、229は口縁部外面に凹線を施文している。土器が古い様相を示しているが、遺構の遺存状態について図の如く極めて悪いことから一応古墳時代としているが、土器からすると古くなるが判断しがたい。







第150図　No.41-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／3）

No.40－竪穴住居（第152図）

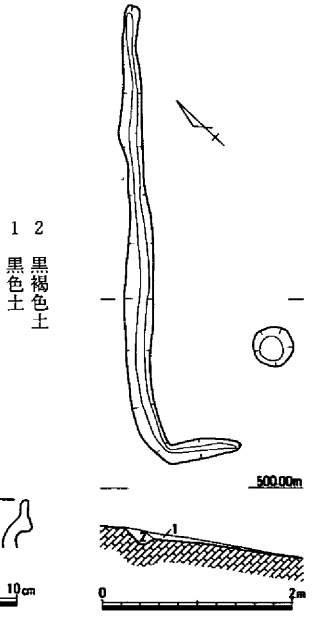
調査区北西よりでNo.40－竪穴住居の南側に位置する。柱穴は、1－28×24cm深さ64cm、2－45×39cm深さ50cm、3－34×30cm深さ57cm、4－30×24cm深さ56cm、5－24×23cm深さ27cmを測る5個が認められたが、1～4が主柱穴と考えられる。中央穴と考えられるのは、柱穴1と4と中間のやや北よりに55×45cm深さ33cmの形態が円形を呈するものが認められる。

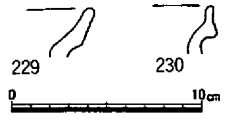
以上のように当住居は、削平により柱穴や中央穴などの深く掘り下げている遺構については遺存し確認することができた。しかしながら、壁や壁帯溝についてはその掘込みが浅く確認することができなかった。

土壙

No.2－土壙（第153図）

調査区中央西端でNo.9－竪穴住居の北西側に位置する。規模は167×125cm深さ80cmを測り、形態は楕円形を呈する。断面形態は、北東辺以外は袋状となっているが、特に南西

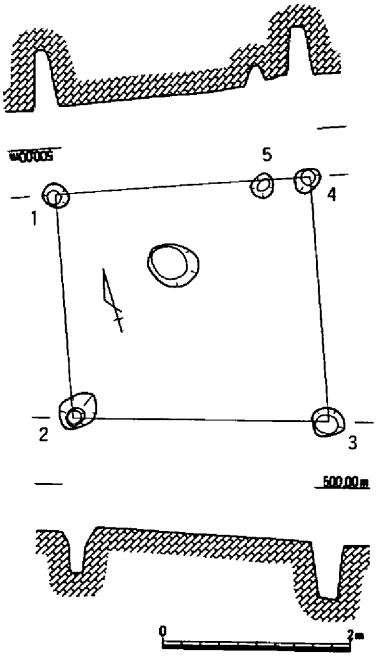




第151図　No.46-竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4）

辺は20cmほど垂直に掘り下げそこから抉るように掘り方よりも大きくそして広く掘広げている。底は凹部とはならず平坦となっている。

出土遺物（第154図）は、1層の黒色土中からの出土が多数を占めている。**231～240**は、くの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁を持つものである。**231**は、口径16cmで胴部外面にハケが認められ、**237・238**と同様に口縁端面が凹部となっている。**235**は、口縁外面に櫛描沈線文を施している。**240**は、口縁内面から頸部下にヘラミガキが認められる。**234**は、壺形土器の破片で外面に丹塗りがなされている。**241～244**は、くの字状に屈曲する頸部を持つもので**241**は口縁端が内傾する。**242**は、口径13.2cmを測る口縁から胴部下半までの破片である。胴部外面は、ハケで肩部上半に2対の刺突文が認められる。内面は、ヘラケズリ上半はヘラケズリの後押圧痕を留めている。**246**は、鼓形器台の小片である。



第152図　No. 47-竪穴住居（1／80）

ピット

No. 7－ピット（第155図）

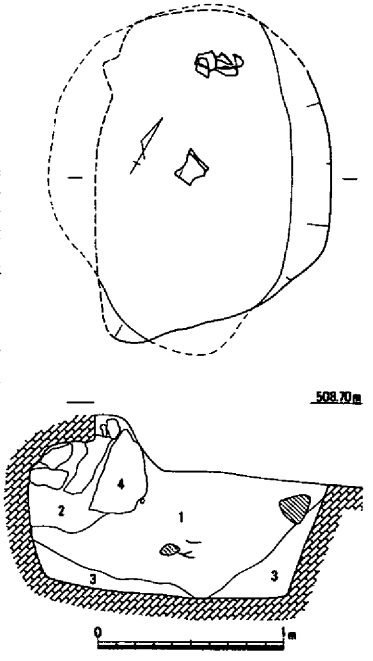
調査区南西端よりでNo. 3－竪穴住居の北西側に位置する。規模は、径1ｍ深さ130cmを測り、平面形態は円形を呈する。

出土遺物（第155図）は、**247・248**がくの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁部を持つもので、**244**は口径4cm器高2.8cmを測る手捏土器である。

No. 48－ピット（第156図）

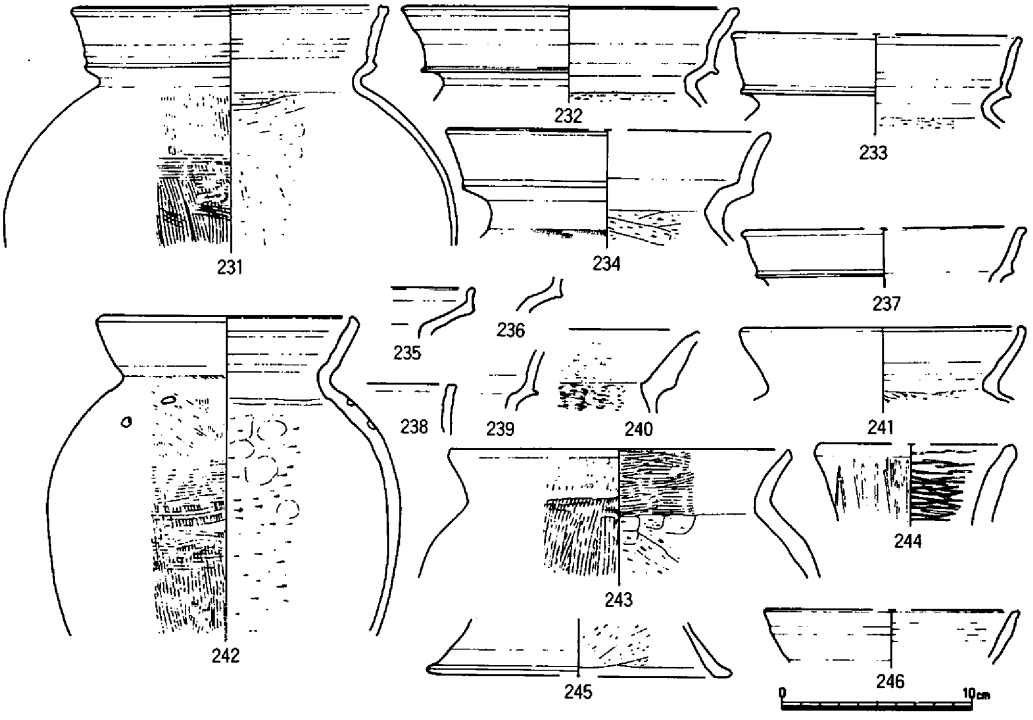
調査区中央から南西よりでNo.38－竪穴住居の北西に接して位置する。規模は、30×27cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物（第156図）は、**250**がピット検出上面、**251・252**は埋土中からである。**248**は、口径



第153図　No. 2－土壙（1／40）

17.7cmを測り、器面の風化が著しい。252は、杯身の小片である。



第154図　No. 2-出土遺物（1／4）

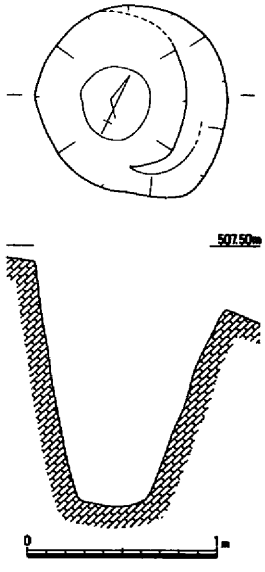
落し穴

No. 49－落し穴（第157図）

調査区北東側の斜面部でNo.11－竪穴住居の北東側に位置する。規模は、63×62cm深さ117cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態は北西側がやや内傾気味となり北東側が掘り方上方から外側に大きく抉っている。埋土は黒色土である。

No. 50－落し穴（第157図）

調査区北東側の斜面部でNo.11－竪穴住居の北東側に位置する。規模は、61×52cm深さ125cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態は、南側が垂直に掘り下げられ、北側は掘り下げ直下から掘り方よりも外側に抉って掘

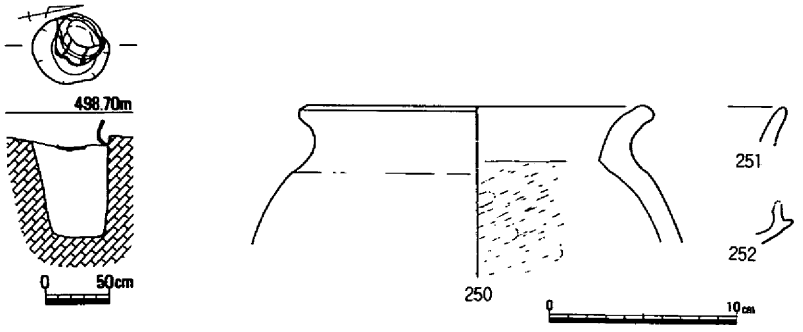


第155図　No. 7-ピット（1／40）・出土遺物（1／4）

られている。埋土は黒色土である。

No.51－落し穴（第157図）

調査区北側の斜面部でNo.14－竪穴住居の北側に位置する。規模は、75×73cm深さ143cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面形態はほぼ垂直に掘り下げられているが南側の底のやや上



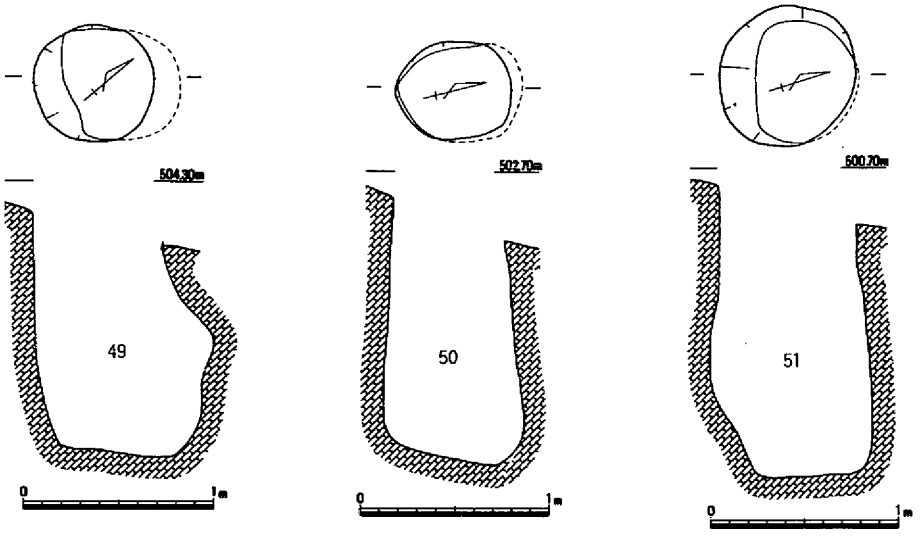
第156図　No.48-ピット（1／50）・出土遺物（1／4）

の一部が抉って掘られている。埋土は黒色土である。

No.52－落し穴（第158図）

調査区北側の斜面部でNo.35－竪穴住居の北東側に位置する。規模は、75×69cm深さ112cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。断面形態はほぼ垂直に掘り下げ、底近くで大きく袋状に抉って掘られている。

出土遺物（第158図）は、上方に拡張する口縁を有するものである。外面は剝離し、内面頸部屈曲部にはヘラミガキが認められる。

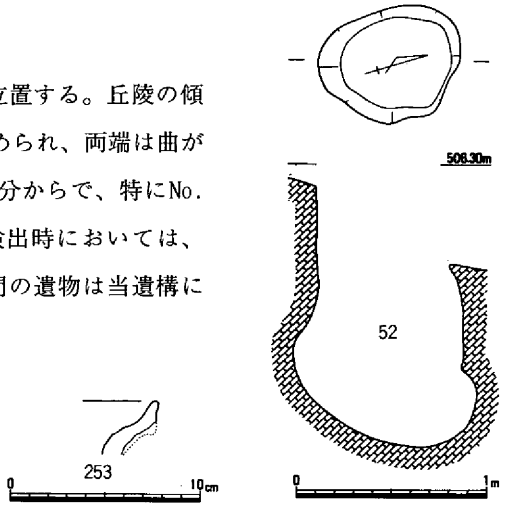


第157図　No.49・50・51-落し穴（1／40）

その他の遺構

No. 1 －段状遺構（第121図）

調査区南西端でNo. 3 －竪穴住居の北側に位置する。丘陵の傾斜に沿うように長さ16ｍで20cm前後の段が認められ、両端は曲がり気味に終わっている。遺物はこの段状の部分からで、特にNo. 2 －土壙周辺から多く出土している。段状検出時においては、No. 2の存在を確認していなかったためこの間の遺物は当遺構に伴うものとして取り上げている。



第158図　No. 52-落し穴（1／40）**・出土遺物**（1／4）

出土遺物（第159・160図）は、弥生時代後期から古墳時代前半期までの遺物を含んでいる。**254・255**は、口縁外面に貝による沈線文を施文し、頸部内面屈曲部にはヘラミガキが見られる。**256**は、口縁外面に櫛描沈線文を施文する。**257**は口縁外面にハの字を横にしたように施文、**258**は口縁と頸部の外面に櫛描状の不規則な文様を施している。**257・261・294～303**は、肩部にかけて直線文と波状文を施文するもので、**299・303**は貝で他は櫛によって施されている。**304**は、口径15.2cmを測り、肩部は張り気味となる。くの字状に屈曲する頸部から上方に拡張する口縁を有する。口縁外面は、ヨコナデによる凹凸が見られ、胴部外面は横方向の細かいハケを認め、内面は胴部中位から下位に押圧痕を留めている。

ガラス玉は、長さ4.59mm、径4.97mm、重さ0.16ｇを測るもので、色調はスカイブルーである。

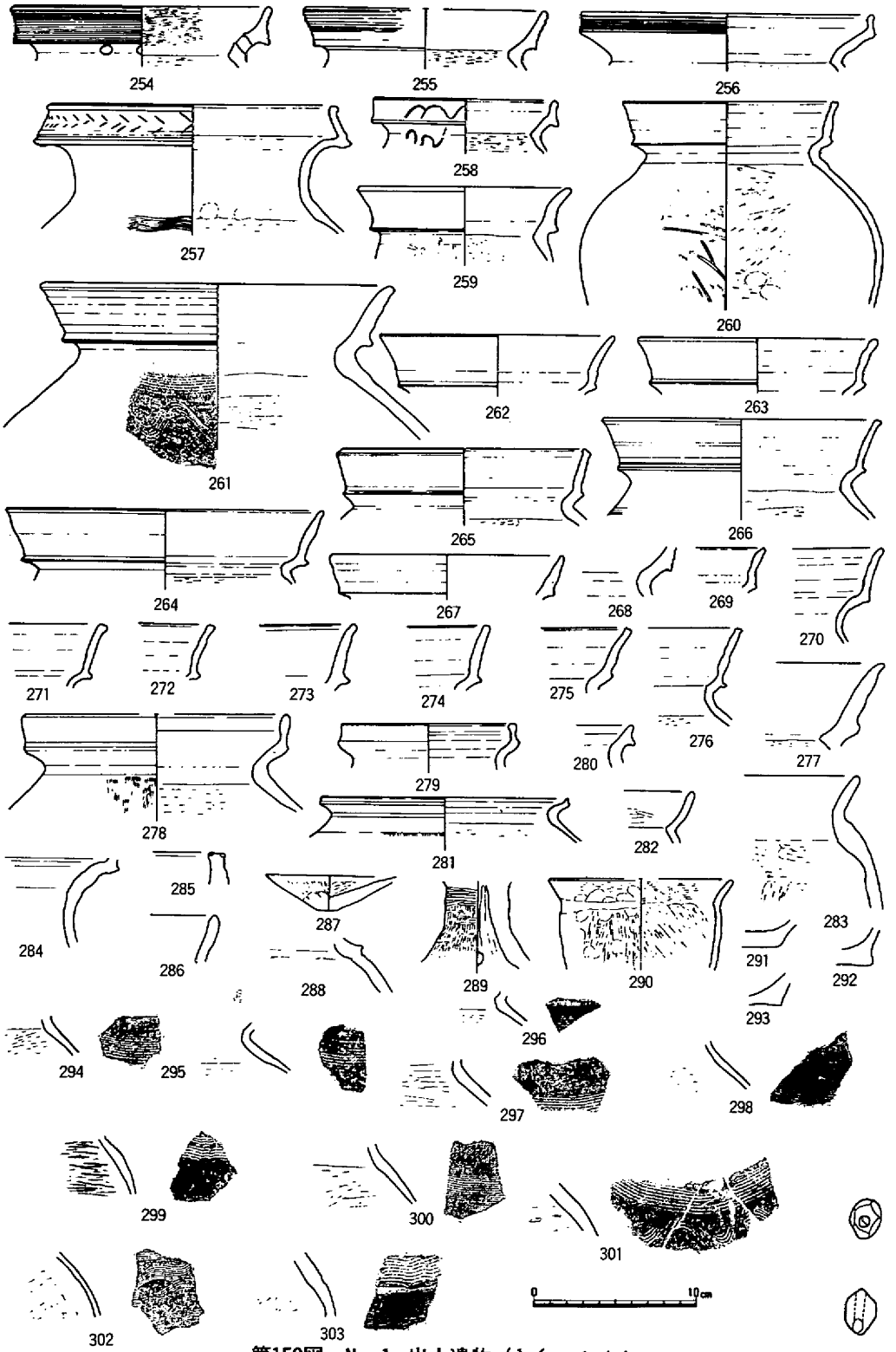
No. 18－段状遺構（第121図）

調査区中央でNo.17－竪穴住居の西側に位置する。規模は、南北5.4ｍで両端が曲がって終わるもので25cm前後の段で南側の斜面方向に認められる。

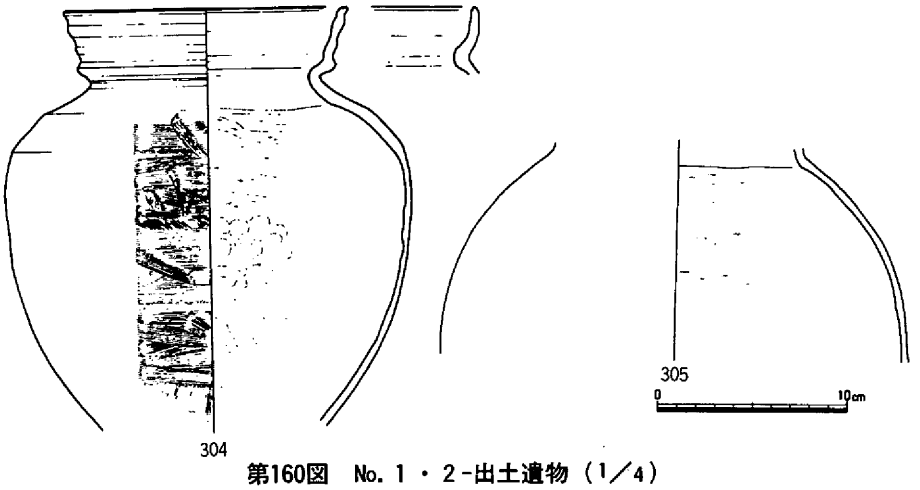
出土遺物（第161図）は、くの字状に屈曲する頸部を持つ小片である。内面頸部屈曲部に押圧痕が認められる。

包含層出土遺物（第162図）

調査区中央でNo.20とNo.25－竪穴住居の間に纏って検出したものである。検出時においては、何らかの遺構に伴うのではないかと考え精査したが把握することができなかった。したがって包含層として取り扱った。**301**は、口径15cmの壺形土器である。緩やかに頸部が外反し上方へ拡張する口縁を持つ。調整は外面頸部から胴中位までタテハケの後ヨコヘラミガキ、以下はタテヘラミガキを行なっている。内面はヘラケズリの後にヘラミガキ状の調整が認められる。**302・304**は、口縁外面に沈線、後者は内面頸部屈曲部にヘラミガキが見られる。**306**は口縁内



第159図　No. 1 -出土遺物（1／4・1／1）

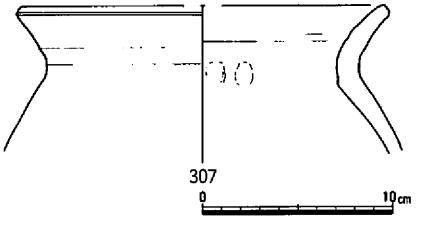


第160図　No. 1 ・ 2-出土遺物（1／4）

面にヘラミガキが見られる。

排土中出土遺物（第163図）

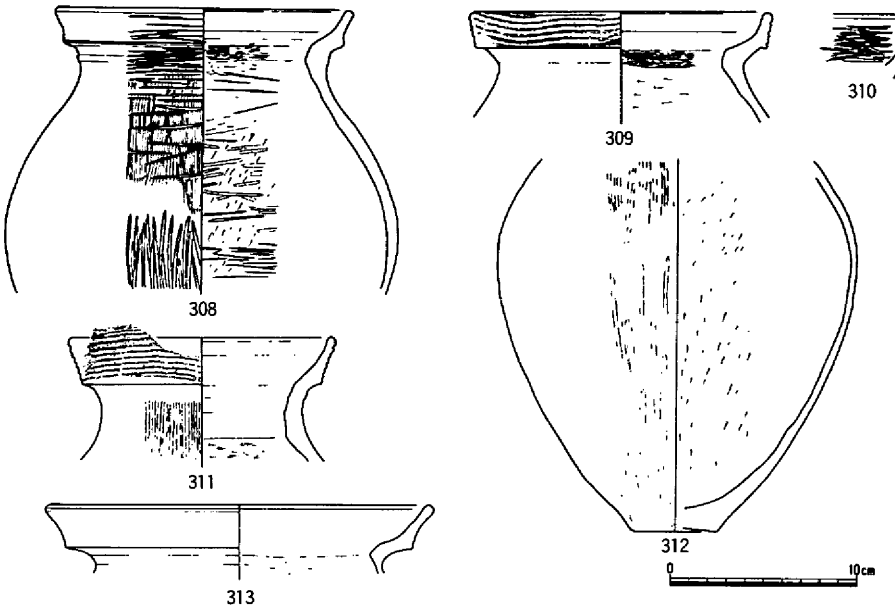
機械による表土排土中に出土したものである。時期は弥生時代後期中葉からの遺物が認められる。**330**は、須恵器の脚部の小片であり、この時期は五世紀末を示すものと考えられる。



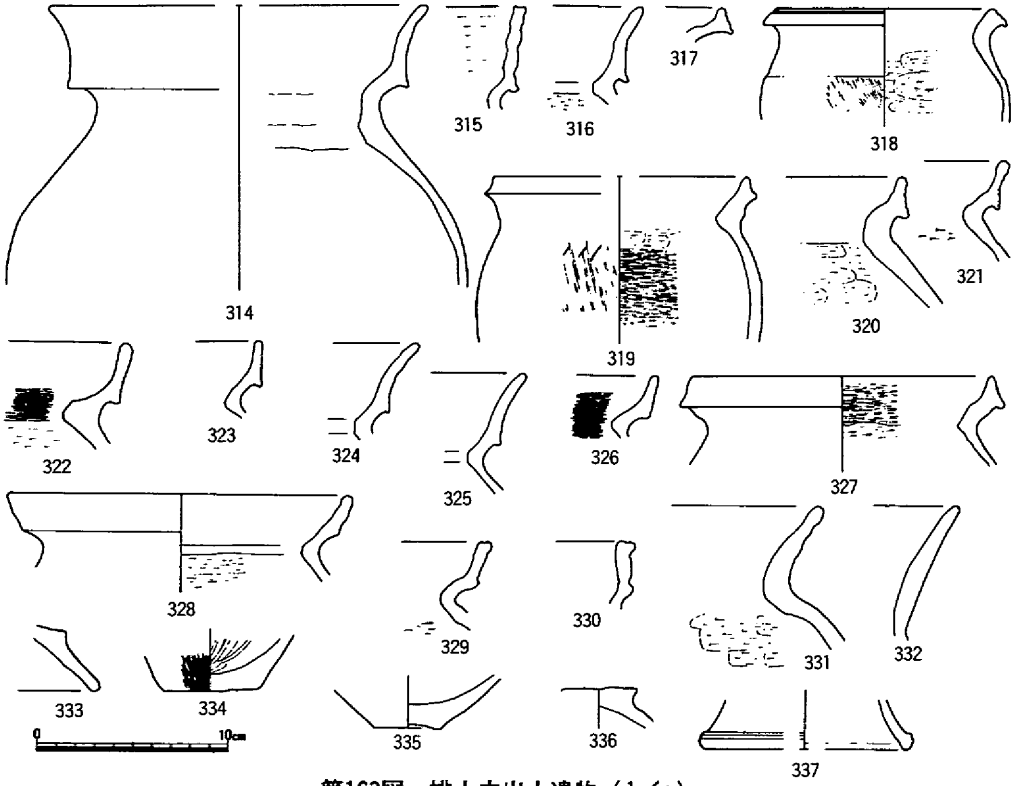
第161図　No.18-出土遺物（1／4）

小　　結

下郷原和田遺跡は、縄文時代中期と弥生時代後期中葉～古墳時代前葉そして6世紀中葉段階の遺構が確認された。弥生時代の遺構は、丘陵が北東方向へ延びて行く高みの部分に帯状に分布していることが知られる。この期に含まれる竪穴住居は、出土遺物により二期に分かれるようである。竪穴住居の遺存状態が悪く土器における時期の判断ができないでいるが、床面及び埋土中からのを含め相対的な時期区分を行なった。これによると、屈曲する頸部から上方に拡張する口縁部において下方部分が張り出していることが認められる。さらに、口縁部外面に貝によると考えられる沈線および頸部内面屈曲部へのヘラミガキなど比較的古い様相を有するものと、口縁部外面の櫛描沈線文と無文化そして口縁部の下方への張り出しが顕著でなくなるなど相対的に新しい内容を示すものとに分けることが可能と考えるのである。このようなことから古い段階に属する竪穴住居は、No.14・20・22－1・25・42で、新しい段階のものはNo. 9・11・34・40である。



第162図　包合層出土遺物（1／4）



第163図　排土中出土遺物（1／4）

古墳時代前半期の竪穴住居は、調査区南西隅と中央やや北西よりの南東から北西にかけての横方向に認められる。これらの竪穴住居のうち調査区南西隅に認められるNo.３・５・６は竪穴住居として取り扱うについては問題が残るものである。下方に認められるNo.31・35－１と２・38は竪穴住居であり、No.35－１・２が重複している。

須恵器が出土する竪穴住居は、No.21・39・41の３軒から出土している。この内No.21と39は５世紀末と考えられるものであるが、No.41から出土した須恵器は６世紀中葉のものである。当住居から石釧が出土していることからこの時期に伴うのが妥当かどうか疑問である。さらに、No.41が拡張している可能性があり，しかも埋土中からであることから最終的な時期の判断ができかねるのである。なお、No.39とNo.40からは碧玉の剝片を出土していることから時期的に離れているため、同一時期として把握することが困難であることは同様である。

この遺跡で、玉造りと関係すると想定される碧玉の剝片を出土しているのはNo.31・39・40・41の４軒の竪穴住居から検出し、時期も弥生時代後期後半から６世紀中葉である。この内No.31から64点の剝片が検出され、制作工程に関わるものとして柱状剝片が１点認められている。このことからこの竪穴住居が玉造と関係していたことが考えられる。他の住居からの伴出するものについては、住居内の遺構や調査部分からして十分なる検討ができないでいる。

第五節　下郷原田代遺跡の調査

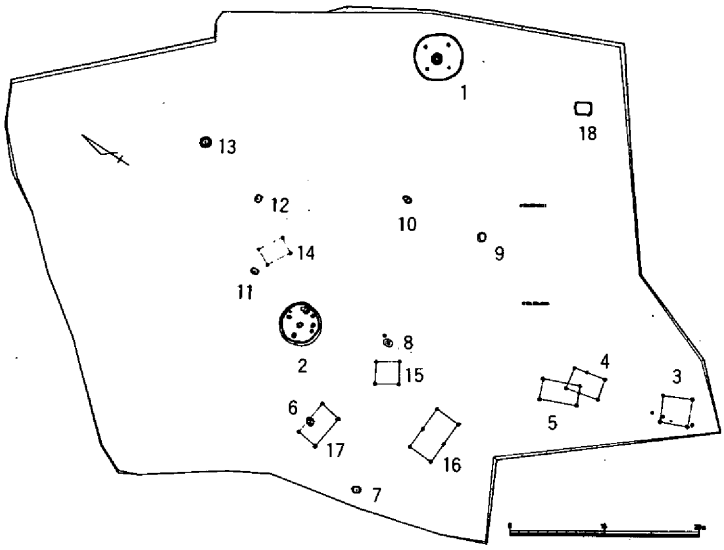
下郷原田代遺跡No.１地点及びNo.２地点（第164図）は、中山西遺跡や城山東遺跡及び下郷原和田遺跡に沿って走る村道堂ノ前・延助線が村道鳥越線と交差し北西の谷に沿い田部の家並みをたどる。この交差する地点からさらに村道堂ノ前・延助線が北へ30ｍほど行くと比較的広い平坦地を形成する丘陵をカットしてこの村道が設けられている。そして、その丘陵平坦地に行くために大きく西にまわり込んで登ってゆくとNo.１地点に、さらに村道を東へ行くと谷を隔ててNo.２地点の所在する北へのびる細長い舌状の丘陵に達する。両地点とも前面に蒜山盆地を一望の下に見渡せることができる。

No.１地点は、第１次調査において柱穴と土器片が検出されたため調査対象となった。調査は、耕作土である黒ボコを表土下30cmほど排土し、ソフトローム層での遺構検出を実施した。この面において竪穴住居と建物及び落し穴を確認した。また、ソフトローム層以下の岩宿時代の遺物の有無について７か所のグリットと３か所のトレンチを設定して掘り下げたが、ＡＴ下層においても認めることができなかった。

No.２地点は、No.１地点の南東側の細長い谷を隔てて位置する。第１次調査においてＡＴ下層に岩宿時代の遺物を確認していた。調査時において再度黒ボコ直下の遺構の有無を確認した結果、落し穴の存在を認めたのである。このことから、黒ボコ直下の多数の落し穴を検出することができたのである。ＡＴ下層の遺物は、３ブロックが認められ石材はサヌカイトと黒曜石が検出された。

１　下郷原田代遺跡No.１地点

第164図　下郷原田代遺跡No.１・No.２地点位置図（1／5,000）



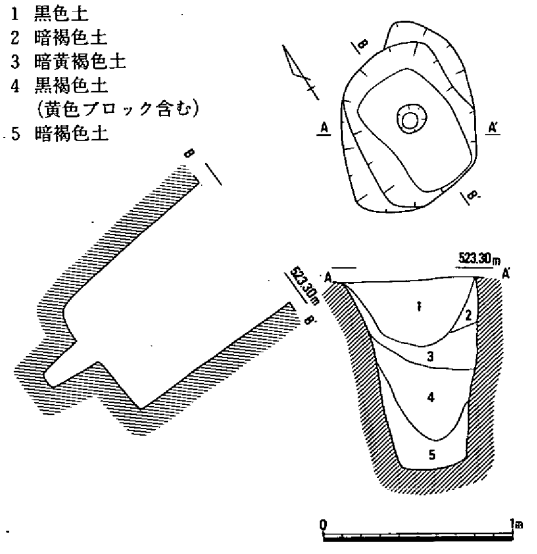
第165図　下郷原田代遺跡No. 1 地点遺構配置図（1／800）

縄文時代の遺構

落し穴

No. 6 －落し穴（第166図）

調査区西よりのNo.17－建物と重複して位置する。規模は、79×79cm、深さ100cmを測る。平面形態は、方形を呈するが東西辺は不規則な掘り方をしている。断面形態は、東西壁が垂直に掘り下げられているが、東壁でやや抉り状の部分が認められる。底には、16×15cm、深さ29cmを測る円形のピットが認められる。埋土は、黒色土が基調となる。



第166図　No. 6 -落し穴（1／40）

No. 7 －落し穴（第167図）

調査区中央から西端よりでNo.17－建物の南に位置する。規模は、97×66cm、深さ100cmを測る。平面形態は、楕円形を呈する。底には、15×13cm深さ36cmを測る円形のピットが認められる。断面形

態は、掘り方上方部分で抉り状となるが以下は垂直となっている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 8 ー落し穴（第168図）

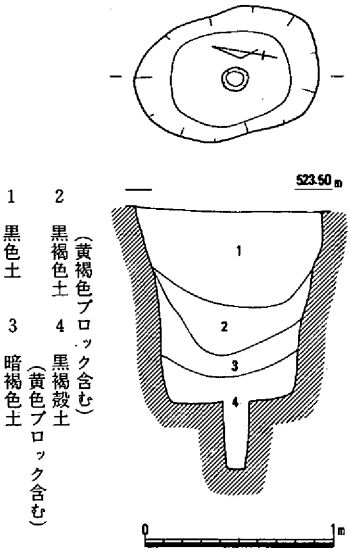
調査区中央やや北西よりでNo.15ー建物の北西近くに位置する。規模は、107×71cm深さ89cmを測り、平面形態は、楕円形を呈する。底には、14×13cm深さ36cmを測る円形のピットが認められる。断面形態は、壁が弧を描くようになり、底面の平面形態は円形となる。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 9 ー落し穴（第169図）

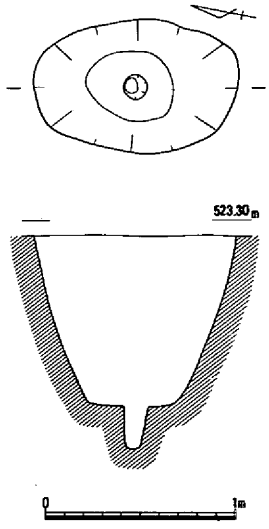
調査区中央やや南東よりでNo. 2 ー竪穴住居の東側に位置する。規模は、100×86cm、深さ116cmを測り、平面形態は、胴張り隅丸方形を呈する。断面形態は、一部掘り上げ上面で抉り状となっているのが認められ、底は平坦となっている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 10ー落し穴（第170図）

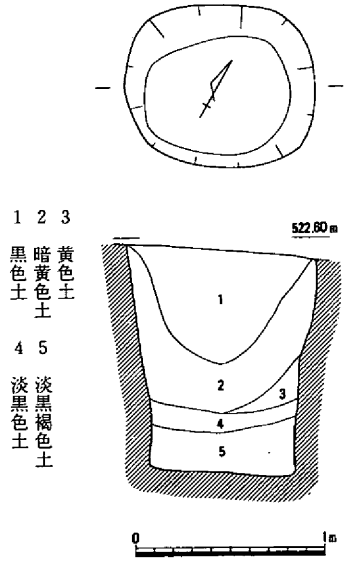
調査区中央やや東よりでNo. 1 ー竪穴住居の西側に位置する。規模は、97×66cm、深さ62cmを測り、平面形態は、無花果形を呈する。底には、17×15cm、深さ40cmのピットが認められる。断面形態は、外広に大きく開く壁をつくっ



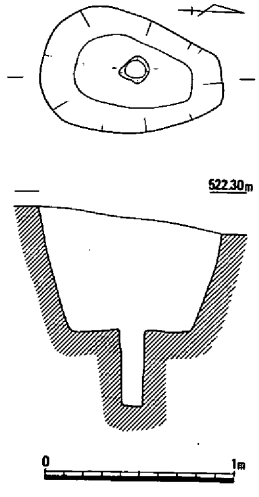
第167図　No. 7 -落し穴（1／40）



第168図　No. 8 -落し穴（1／40）



第169図　No. 9 -落し穴（1／40）



第170図　No. 10-落し穴（1／40）

ている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.11－落し穴（第171図）

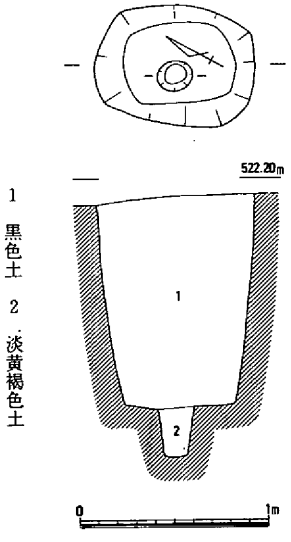
調査区中央やや北西よりでNo.14－建物の西に接して位置する。規模は、84×64cm深さ111cmを測り、平面形態は、胴張り隅丸方形を呈する。底には、17×15cm、深さ26cmのピットが認められる。断面形態は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土である。

No.12－落し穴（第172図）

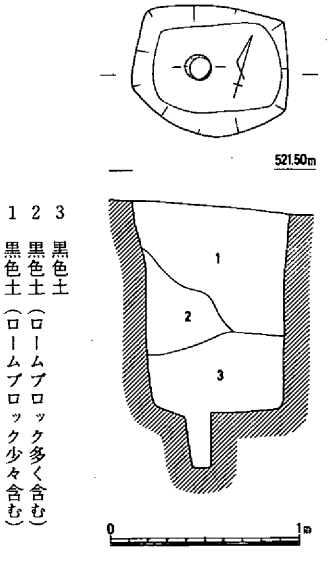
調査区中央やや北よりでNo.14－建物の北西側に位置する。規模は、82×68cm深さ108cmを測り、平面形態は、方形を呈する。底には、径14cm、深さ29cmのピットが認められる。断面形態は、垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土である。

No.13－落し穴（第173図）

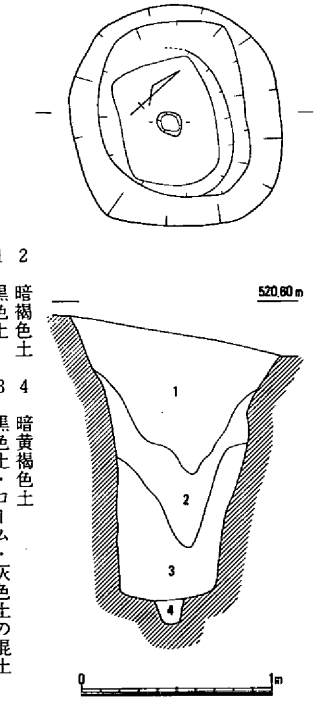
調査区中央北よりでNo.12－落し穴の北側に位置する。規模は、117×110cm深さ142cmを測り、平面形態は、胴張り隅丸方形を呈する。底には、14×12cm、深さ13cmを測るピットが認められる。断面形態は、壁上半部が外方に広がるが以下は垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。



第171図　No.11-落し穴（1／40）



第172図　No.12-落し穴（1／40）



第173図　No.13-落し穴（1／40）

弥生時代の遺構

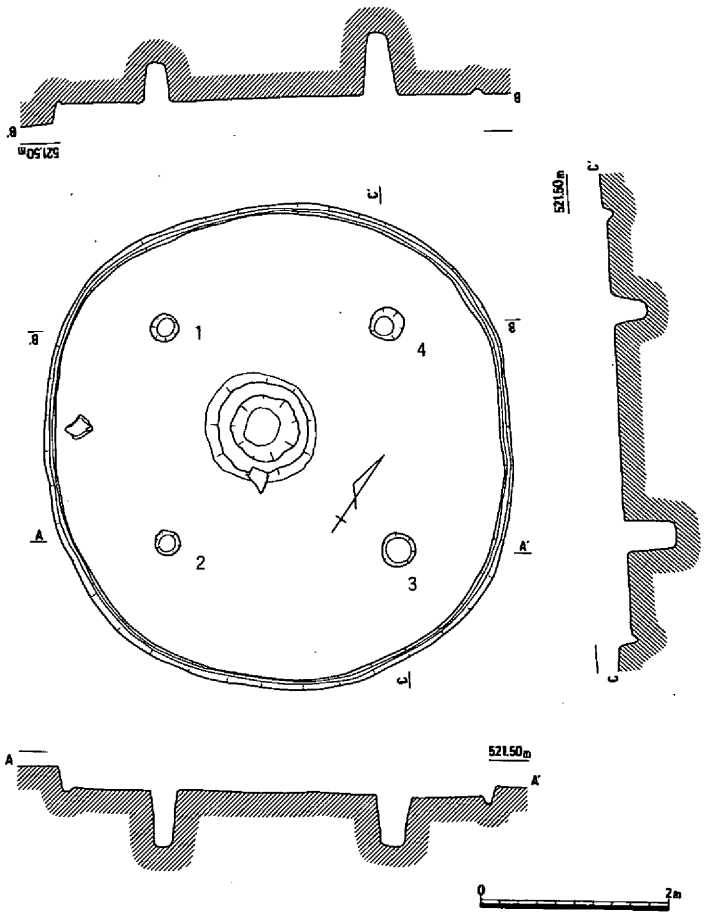
竪穴住居

No. 1 ー竪穴住居（第174図）

調査区中央より東端でNo.18ー土壙の北側に位置する。規模は、513×495cmを測り、形態はほぼ円形を呈する。柱穴は、4個検出され1ー径30cm深さ43cm、2ー径28cm深さ63cm、3ー径36cm深さ51cm、4ー38×34cm深さ67cmを測るものである。中央穴は、径117cm幅30～18cmそして高さ2cm前後に周囲に土を貼って土堤状に高まりを作り、その内側に72×60cm、深さ14cmのピットが認められる。

出土遺物（第175図）は、埋土が浅いためすべて床面からの出土である。**338**は、壺形土器の胴部片である。外面はタテハケ、内面はヘラケズリが認められる。**339**は、くの字状に頸部が屈曲し、上下に肥厚した口縁部をつくる。口縁外面に凹線を施文する。内面に丹塗りが認められる。**340**と**341**は、底部の破片で**340**は内面にハケが認められる。

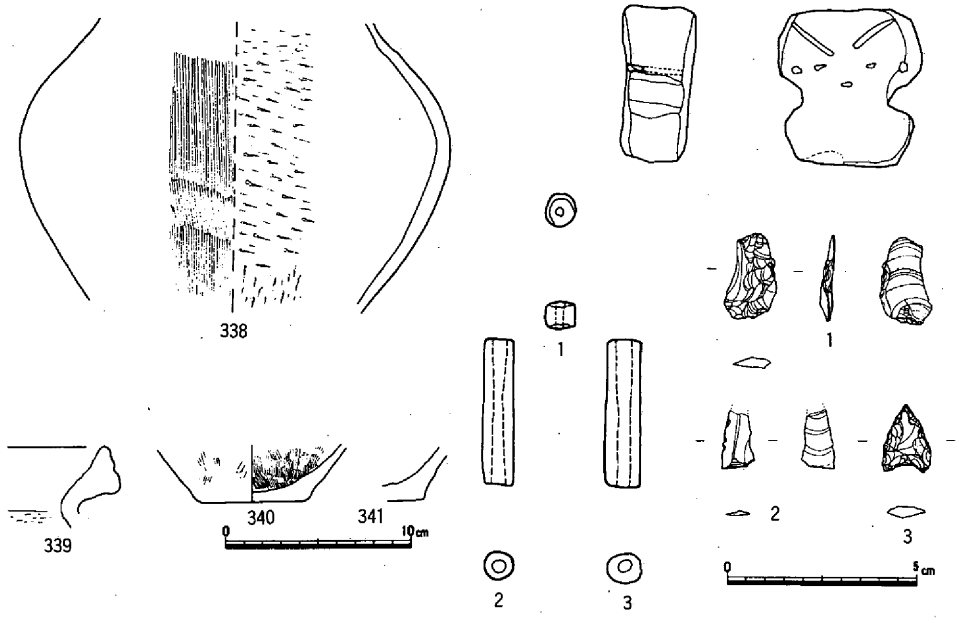
分銅形土製品は、長さ3.1cm、上半部幅2.9cm、上半部幅2.6cm、厚さ1.5cm、抉り部幅1.7cmを測る。形態は、全体的に隅丸の方形を呈し、両側の抉り部は緩やか弧を描くようになされている。上半部には、箆による眉と目そして口が描かれている。眉は、逆ハの字状に沈線とし、目と口は刺突によって表現されている。上半部抉り部下端に正面から裏面へ水平に貫



第174図　No. 1 -竪穴住居（1／80）

ける穴が認められる。

玉類は、３点出土し２以外は住居床面からである。１はガラス玉で他はグリーンタフ製の管玉である。１は、長さ3.5㎜、径3.3㎜、重さ0.07ｇ、２は長さ19.21㎜径4.5㎜、重さ0.37ｇそして３は長さ19.57㎜、径3.65㎜、重さ0.21ｇを測る。石器は、いずれも黒曜石製であるが当住居に伴うかどうか判断しがたい。

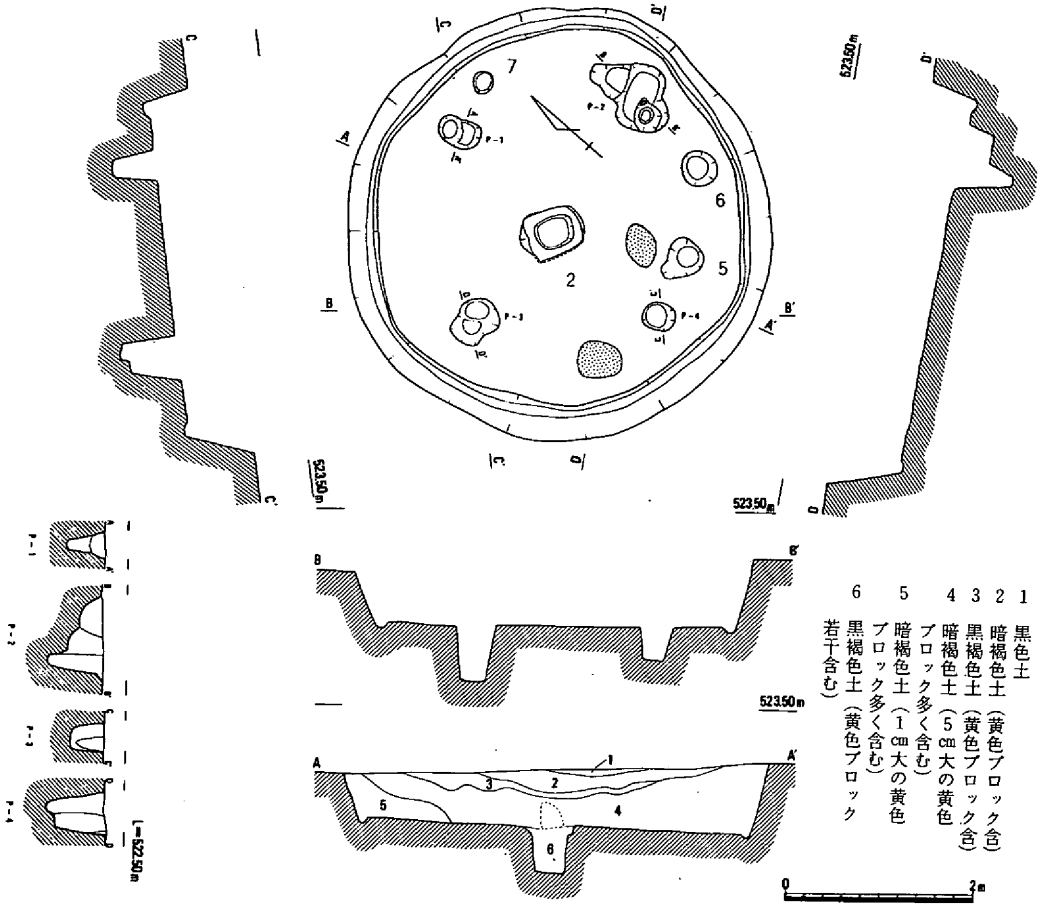


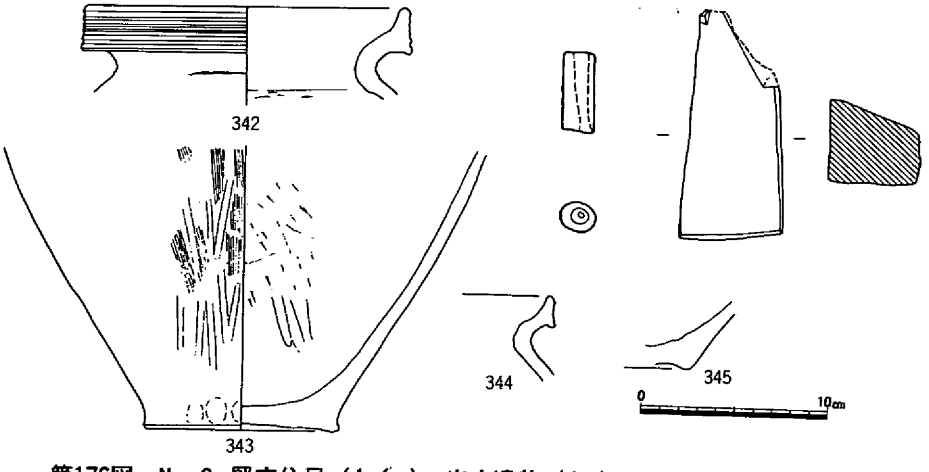
第175図　No. 1 -出土遺物（1／4・1／2・1／1）

No. 2 一竪穴住居（第176図）

調査区中央やや西よりでNo.15－建物の北側に位置する。規模は、径450cmを測る。主柱穴と考えられるのは４個で１－30×25cm深さ42cm、２－30×28cm深さ57cm、３－36×26cm深さ59cm、４－35×30cm深さ35cmを測る。この他に５－７のピットが認められており、深さは28～26cmを測る。これらのピットのうち５と２の北側に認められる掘り方は、底と壁が火を受けて焼けている状態を示し、また７は壁だけが焼けている。床面に認められる焼土面は、２か所認められいずれも表面だけ火を受けており下層には全く影響を与えていない。中央穴は、60×50cm深さ52cmで平面形態は方形を呈し、二段掘となる。

出土遺物（第176図）は、**344**と**345**以外が床面からの出土であり他は埋土中である。**342**は、くの字状に屈曲する頸部から肥厚する口縁部をつくる。口縁部外面には凹線が認められる。外面頸部下半にヘラの止まり痕が認められる。**343**は、底部径9.9cmを測る。底は上げ底となり、その調整はハケの後ヘラミガキを行なっている。砥石は、５面とも使用痕を認める。





第176図　No. 2－竪穴住居（1／80）・出土遺物（1／4・1／3・1／1）

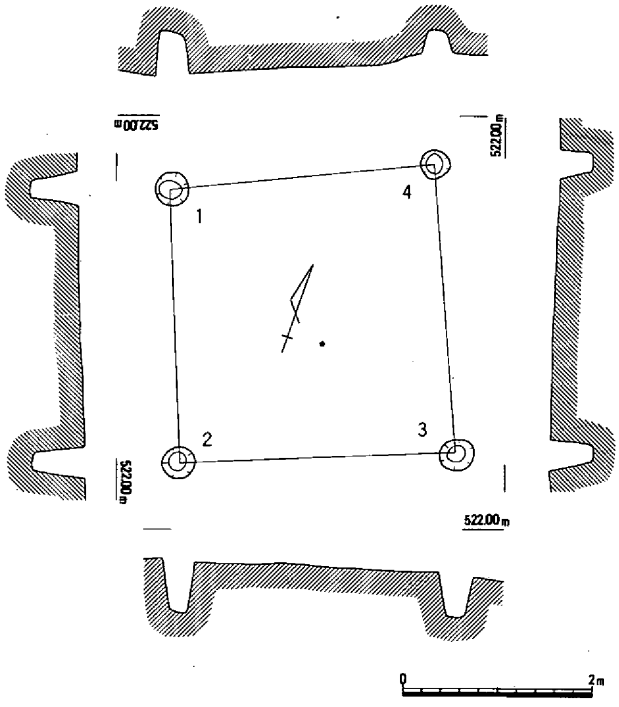
管玉は、グリーンタフで長さ10.52mm、径3.71mm、重さ0.18ｇを測る。

時期不明の遺構

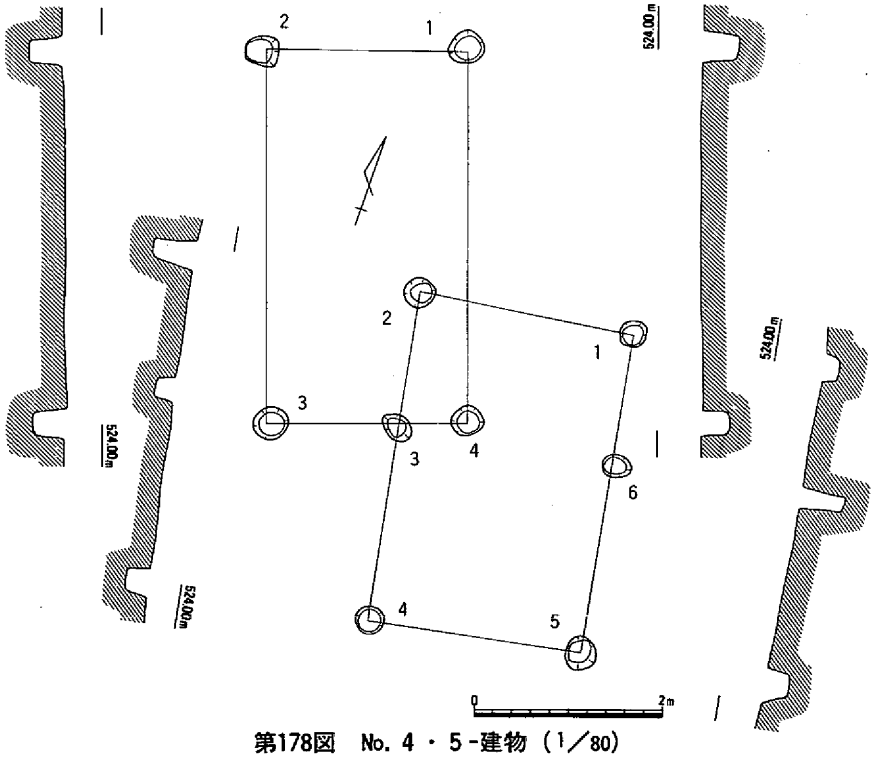
建物

No. 3－建物（第177図）

調査区南端でNo. 4－建物の北側に位置する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、北梁間280cm、南梁間290cm、東桁行310cm、西桁行295cmを測り若干いびつとなっている。柱穴は、１－36×35cm深さ48cm、２－35×34cm深さ54cm、３－36×33cm深さ42cm、４－32×31cm深さ33cmを測り、形態はいずれも円形である。埋土は、黒色土である。



第177図　No. 3-建物（1／80）



第178図　No. 4・5-建物（1／80）

No. 4 －建物（第178図）

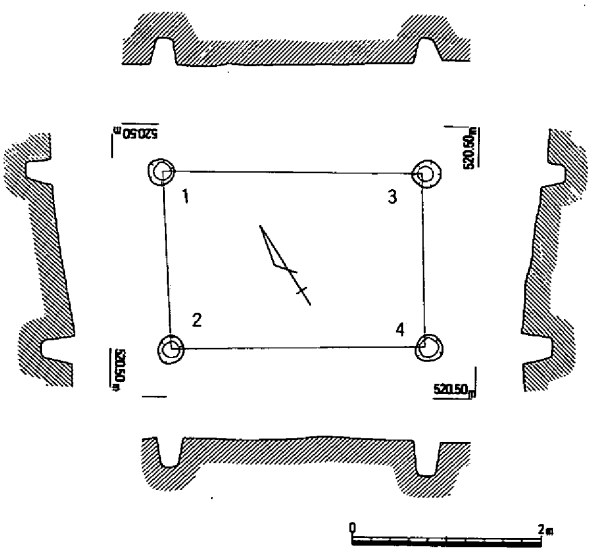
調査区南端でNo. 3 －建物の北側に位置しNo. 5 －建物と重複する。桁行２間、梁間１間の建物である。規模は、南北梁間230cm、東桁行340cm、西桁行355cmを測る。東西の桁行の柱穴３と６は北梁間によって認められその間は、東が140cm、西が150cmを測る。柱穴の規模は、１－29×28cm深さ16cm、２－33×32cm深さ44cm、３－36×26cm深さ22cm、４－31×30cm深さ25cm、５－38×32cm深さ26cm、６－31×25cm深さ25cmを測り、形態は円形を呈する。埋土は、黒色土である。

No. 5 －建物（第178図）

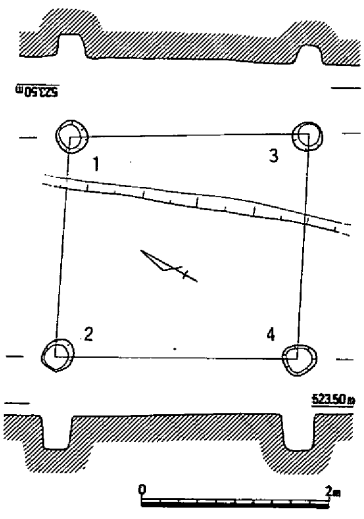
調査区南端でNo. 3 －建物の北側に位置しNo. 4 －建物と重複する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、北梁間220cm、南梁間210cm、東西桁行400cmを測る。柱穴の規模は、１－38×34cm深さ37cm、２－36×32cm深さ34cm、３－40×35cm深さ36cm、４－35×32cm深さ31cmを測る。埋土は、黒色土である。

No. 14－建物（第179図）

調査区中央北西よりでNo. 2 －竪穴住居の北側に位置する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、南東梁間185cm、北西梁間190cm、北東桁行280cm、南西桁行270cmを測る。柱穴の規模は、１－28×27cm深さ36cm、２－30×27cm深さ30cm、３－径28cm深さ38cm、４－31×28cm深さ23cmを測る。埋土は、黒色土である。



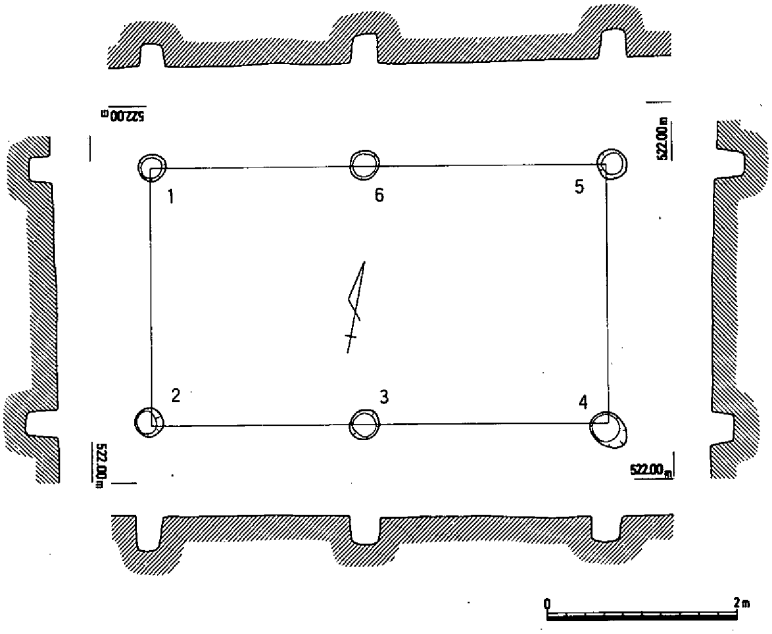
第179図　No. 14-建物（1／80）



第180図　No. 15-建物（1／80）

No.15－建物（第180図）

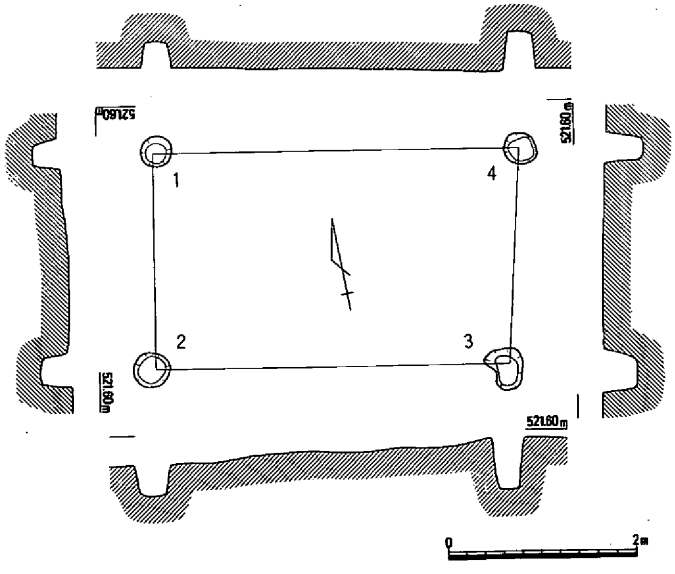
調査区中央南西よりでNo.16－建物の北側に位置する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、南東と北西の梁間240cm、北東桁行255cm、南西桁行260cmを測る。柱穴の規模は、１－34×33cm深さ25cm、２－34×33cm深さ35cm、３－35×32cm深さ39cm、４－32×30cm深さ２cmを測る。埋土は、黒色土である。



第181図　No.16-建物（1／80）

No.16－建物（第181図）

調査区南よりでNo.15－建物の南側に位置する。桁行２間、梁間１間の建物である。規模は、東梁間280cm、西梁間270cm、南北桁行490cmを測る。柱穴の規模は、１－29×26cm深さ23cm、２－32×30cm深さ36cm、３－33×28cm深さ27cm、４－41×32cm深さ25cm、５－31×30cm深さ32cm、６－径31cm深さ29cmを測る。埋土は、黒色土である。



第182図　No.17-建物（1／80）

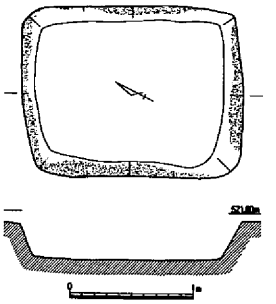
No.17－建物（第182図）

調査区中央南西よりでNo.15－建物の西に位置する。桁行１間、梁間１間の建物である。規模は、東西梁間230cm、南北桁行380cmを測る。柱穴の規模は、１－33×32cm深さ31cm、２－38×36cm深さ33cm、３－44×30cm深さ27cm、４－35×33cm深さ29cmを測る。埋土は、黒色土である。

土壙

No.18－土壙（第183図）

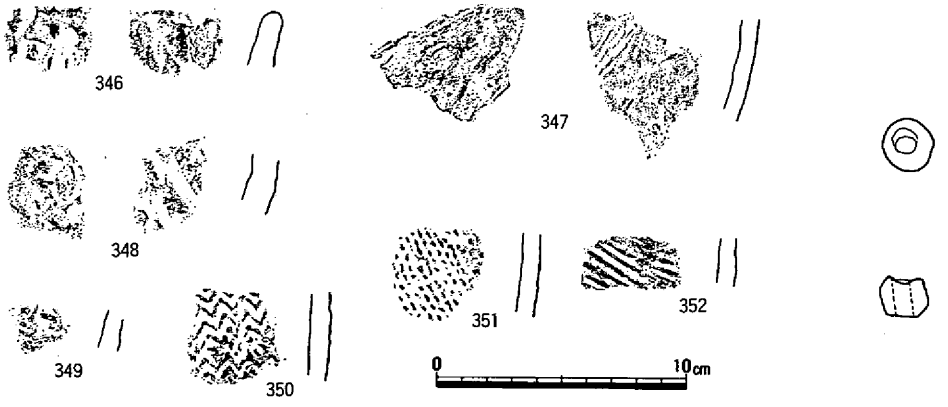
調査区南東隅よりでNo.１－竪穴住居の南側に位置する。規模は、175×138cm深さ30cmほどで形態は方形を呈するものである。壁の四辺が火を受けて焼けているが底は全く火を受けた状況は認められなかった。



第183図　No.18-土壙（1／60）

包含層出土遺物

表土の黒ボコ及び遺構検出途中で出土した。**346**は、口縁部の破片で繊維を含む。**347**は、内面に条痕が認められる。**348**は、外面に粗大楕円文が内面には斜行沈線が施文され、胎土中に繊維を含む。**349**は、外面に縦方向の山形文が、**350**には外面に横位の山形文が施文されている。**351**は、外面に小形の楕円文が施文されている。**352**は、外面に条痕文を認める。ガラス玉は長さ4.86mm、径6.28mm、重さ0.23ｇを測り、色調はスカイブルーを示す。



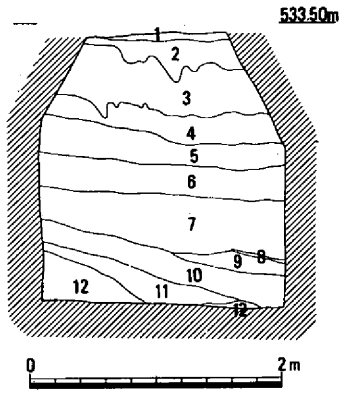
第184図　包含層出土遺物（1／3・1／1）

2　下郷原田代遺跡No. 2地点

下郷原田代遺跡No. 1地点の南東側の谷を隔て北へのびる幅約20ｍの舌状丘陵上に位置する。一次調査において、表土直下で縄文時代の土器片とＡＴ直下で黒曜石・安山岩・チャートなどの石材の剝片を出土していた。表土下から縄文時代の土器の細片を検出していたため、それに伴う遺構の追求の結果落し穴を認めたのである。そして、ＡＴ下層においては3か所の石器ブロックを検出することができた。

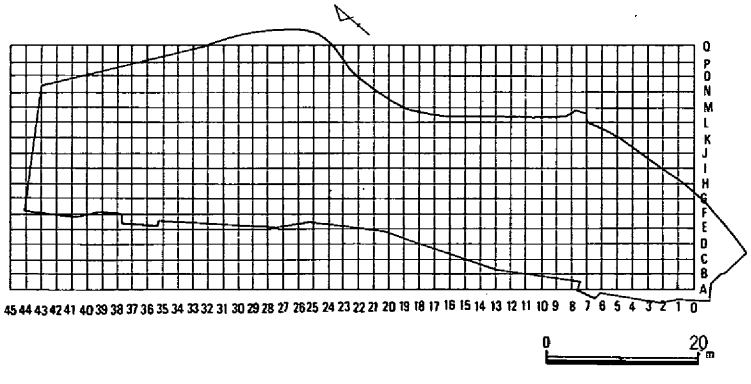
遺跡の位置する丘陵は、100ｍほどは幅20ｍ前後で北西へ張り出し、さらに先へは北へ屈曲し傾斜を強めかつ平坦部が狭くなって行く。したがって、中国横断道の路線はこの丘陵平坦部の全域、つまり、遺跡のほぼ分布域に沿うという結果になってしまったのである。

調査は、調査区全域に2ｍグリット（第186図）を設定した。遺構検出面が2面存在することが明らかになっていたため、それぞれの面において旧地形を復元するため地形測量を行なった。そして、耕作土となっている黒ボコを排土したソフトローム面（第187図）とＡＴ層を排土した淡黄色粘質土の面（第188図）において実施した。これによると、前者におけるソフトローム面では、等高線の534.75ｍから南側については東に張り出すような平坦部を形成し、それより北については下がって行く地形を示している。耕作土面での地形測量（第164図）と基本的には変化は認められない。後者のＡＴ直下の淡

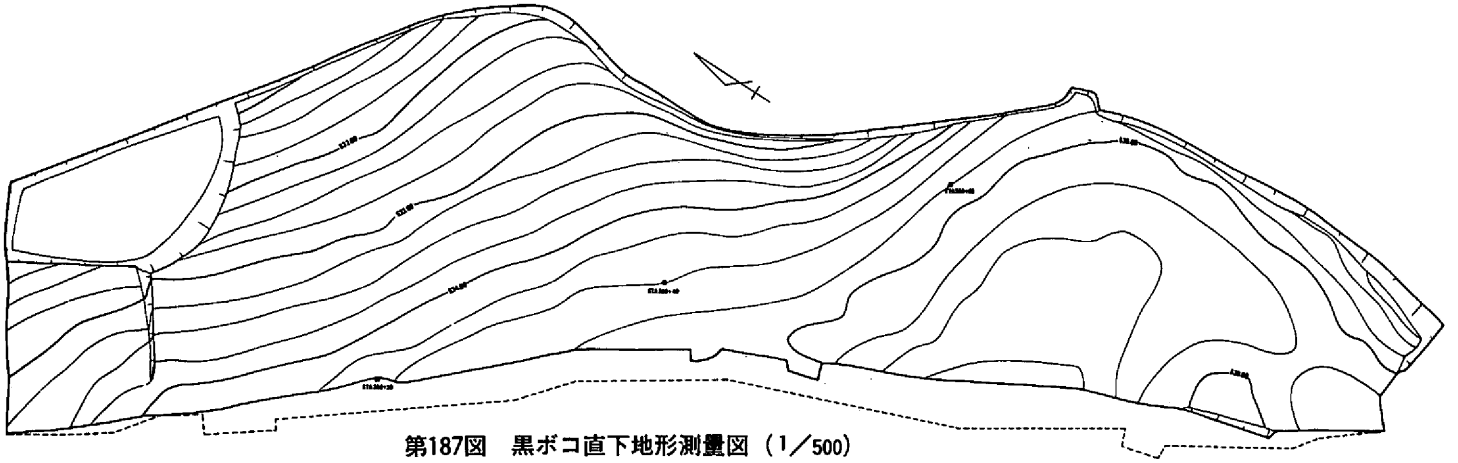


1　耕作土(黒ボコ)　　8　マンガン
2　ソフトローム　　9　灰色粘質土
3　中山西遺跡工区の5層・6層・9層の混土　　10　赤褐色粘質土
4　アイラ(ＡＴ)　　11　淡明褐色粘質土
5　淡黄色粘質土　　12　礫層
6　淡黄色砂質土　　7　淡暗褐色粘質土

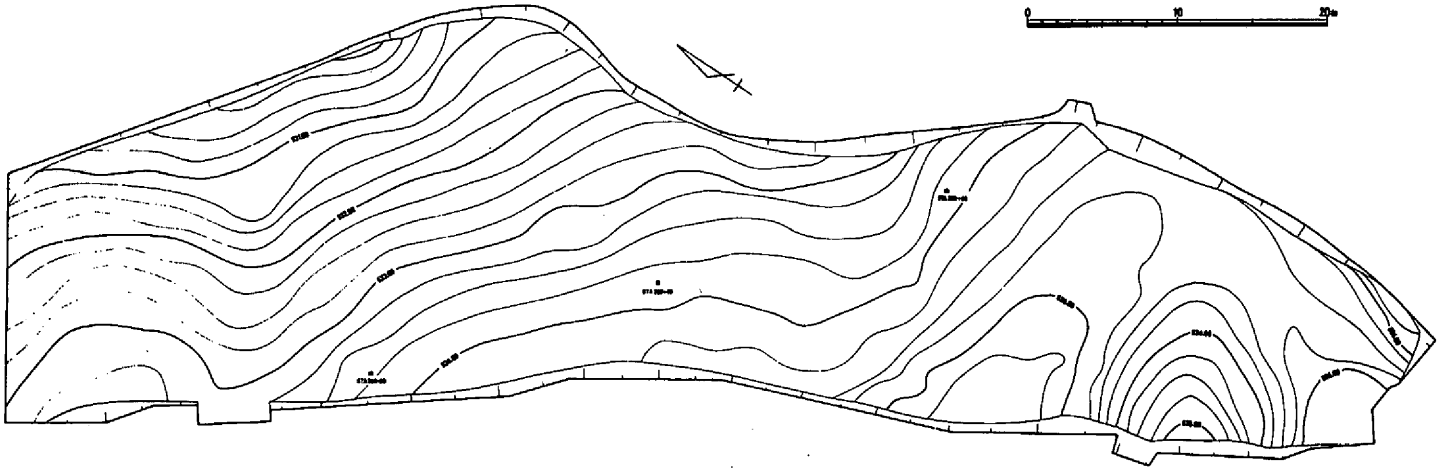
第185図　土層柱状図（1／60）



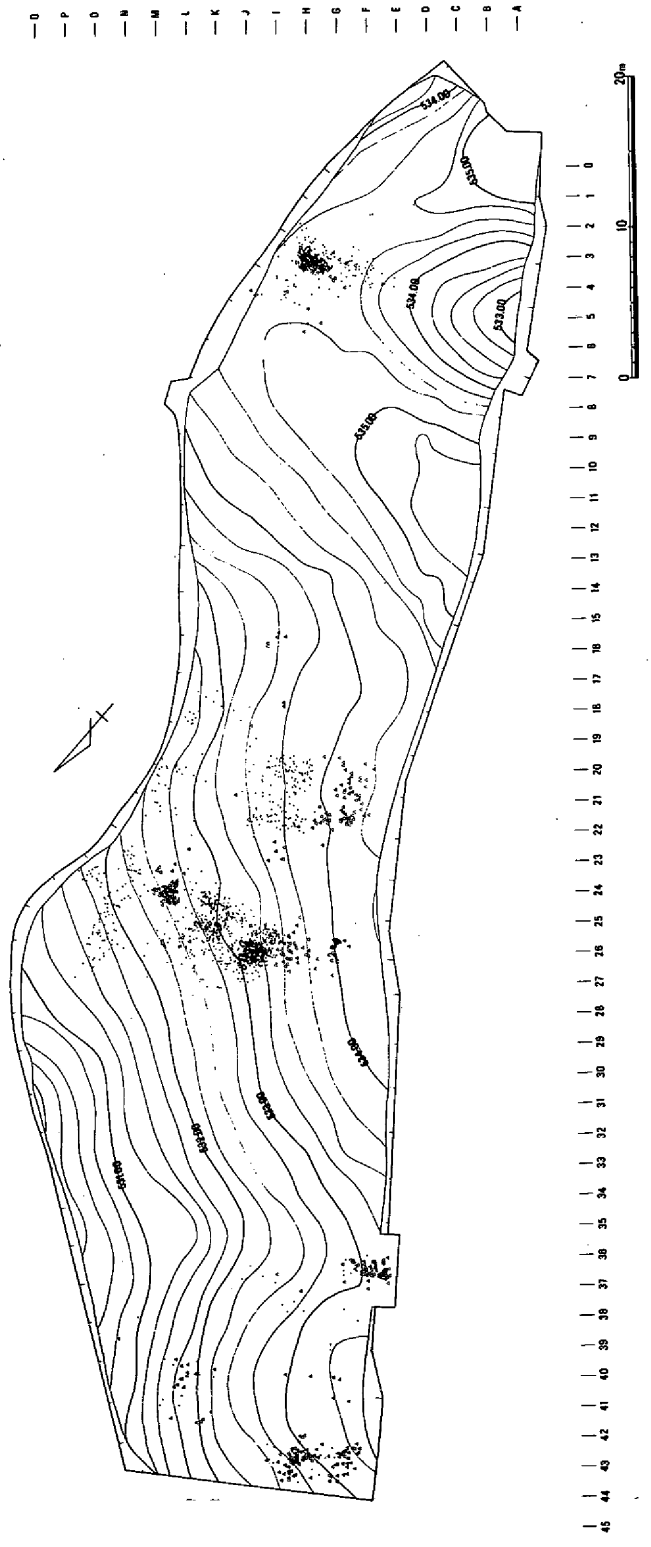
第186図　グリッド設定図（1／1,000）



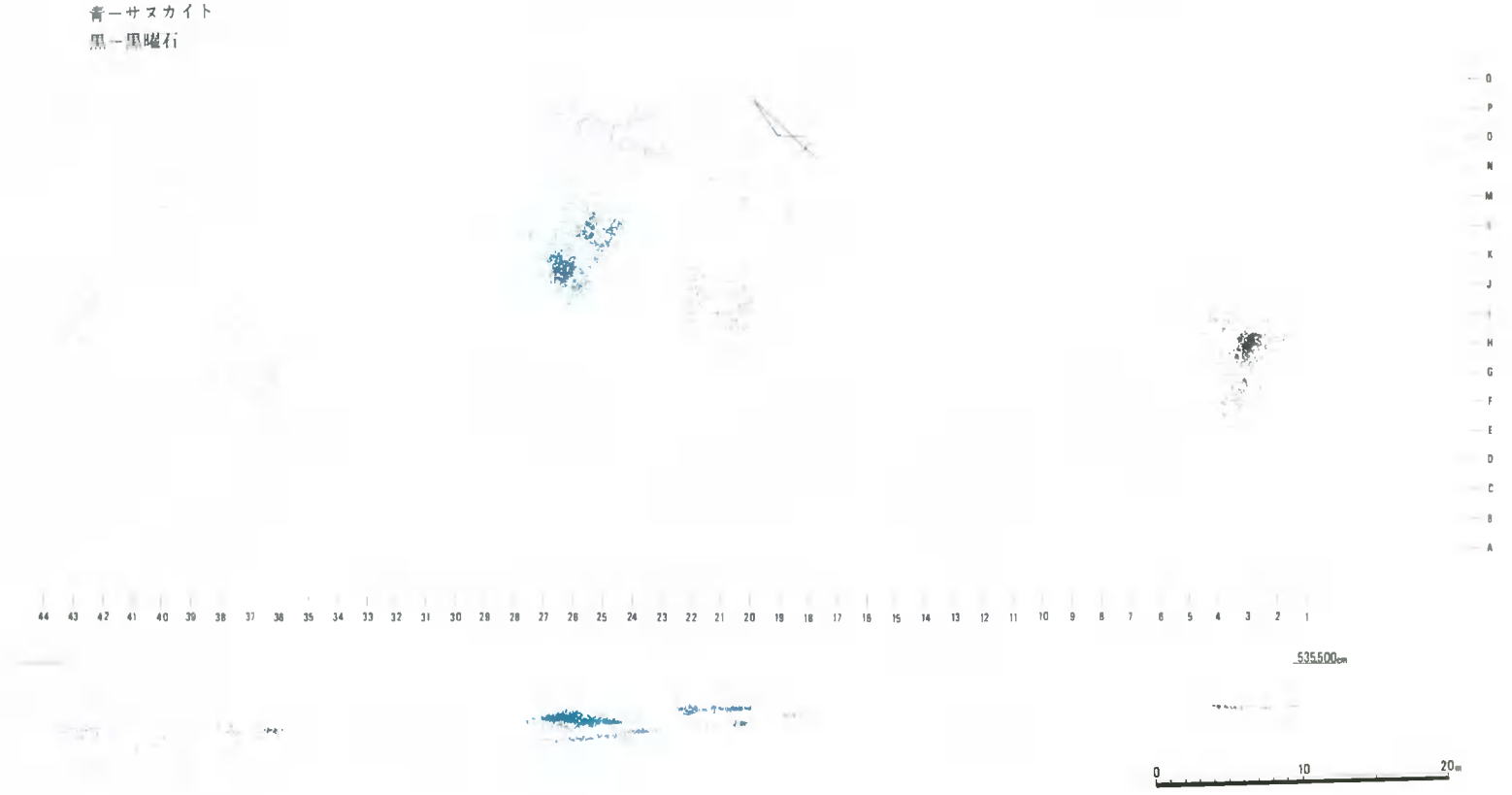
第187図　黒ボコ直下地形測量図（1／500）



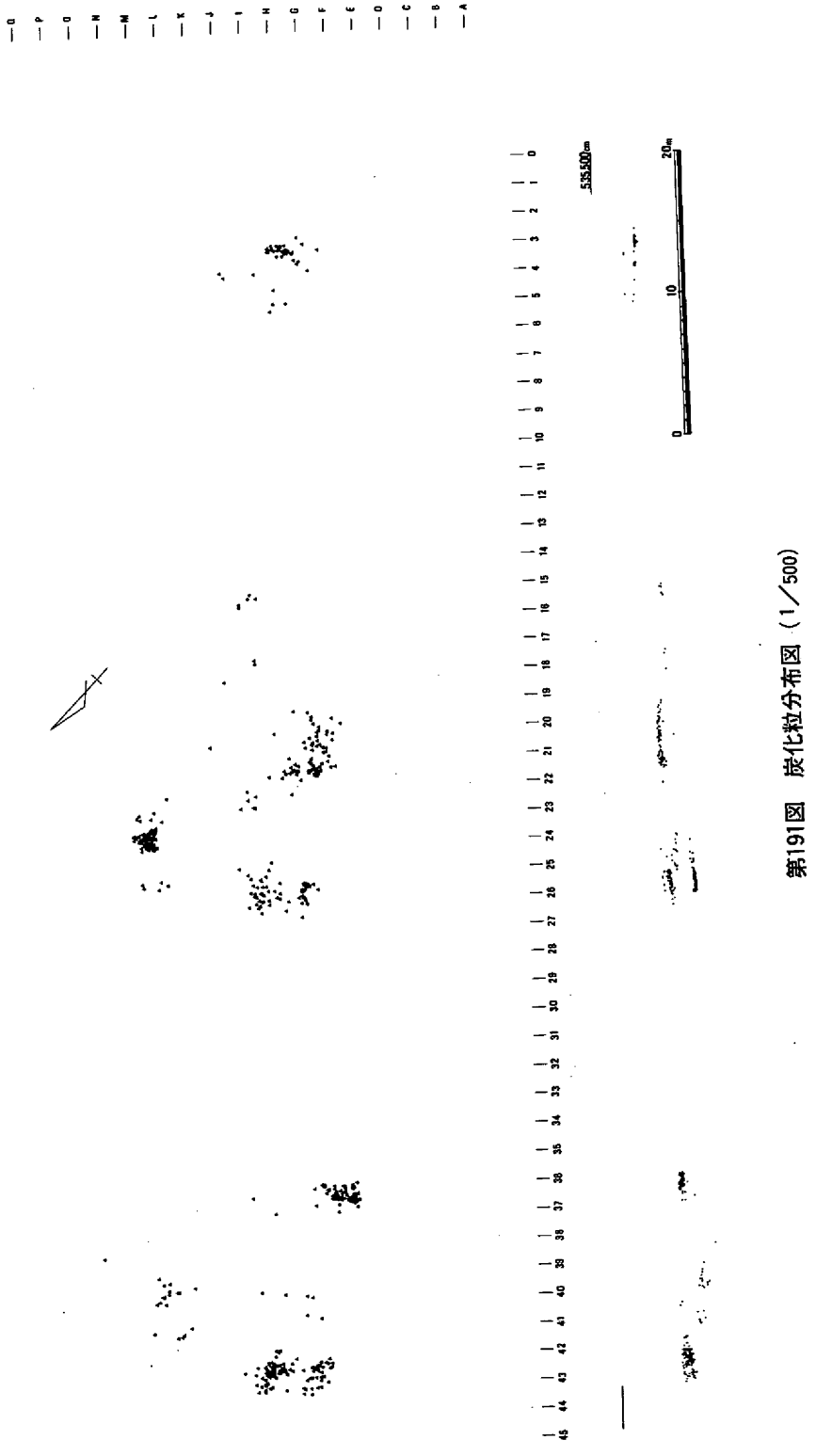
第188図　ＡＴ直下地形測量図（1／500）



第189図　石器・炭化粒分布図（1／500）



第190図　石器分布図（1/500）



第191図　炭化粒分布図（1／500）

黄色粘質土では、それまでの堆積が１～２ｍ以上に及ぶ所が認められ地形の様相が一変するのである。ソフトローム面では、平坦部であった調査区南端の等高線535.25ｍと535ｍの間の部分に深い谷が出現し、北側が尾根状に細く東へ張り出す地形を示すのである。さらに調査区北西よりのソフトローム面ではほぼ均一的に北方向へと傾斜を示していたが、この面では浅い谷が入る状況を呈しており、さらに北西側が北東方向へ傾斜する地形をそれぞれ示すことが新たに明らかにすることができた。

土層堆積状態は、調査区の北西よりの中国横断道のセンター杭であるＳＴＡ359＋20の地点における土層柱状図（第185図）である。これによると、薄く堆積する黒ボコの耕作土下にはソフトローム層が認められ、この上面から落し穴が多数検出されたのである。そして３層は、中山西遺跡Ⅰ区の土層柱状図（第４図）に認められた５・６及び９層が混入した堆積層を示している。４層がＡＴでありこの地点では厚さ22㎝前後を測り、石器はこの直下から出土し下層の淡黄色粘質土中に認められる。この５層は、先の中山西遺跡Ⅰ区でのＡＴ直下に認められている淡黄赤色粘質火山灰土と同一のものかについては、その可能性が大きいが分析を行なっていないため断定しがたい。

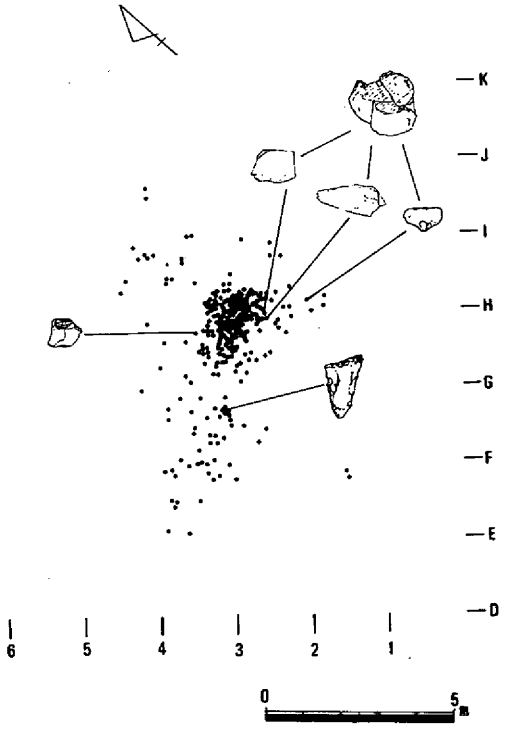
岩宿時代の遺構・遺物

ブロック

Ａブロック（第192図）

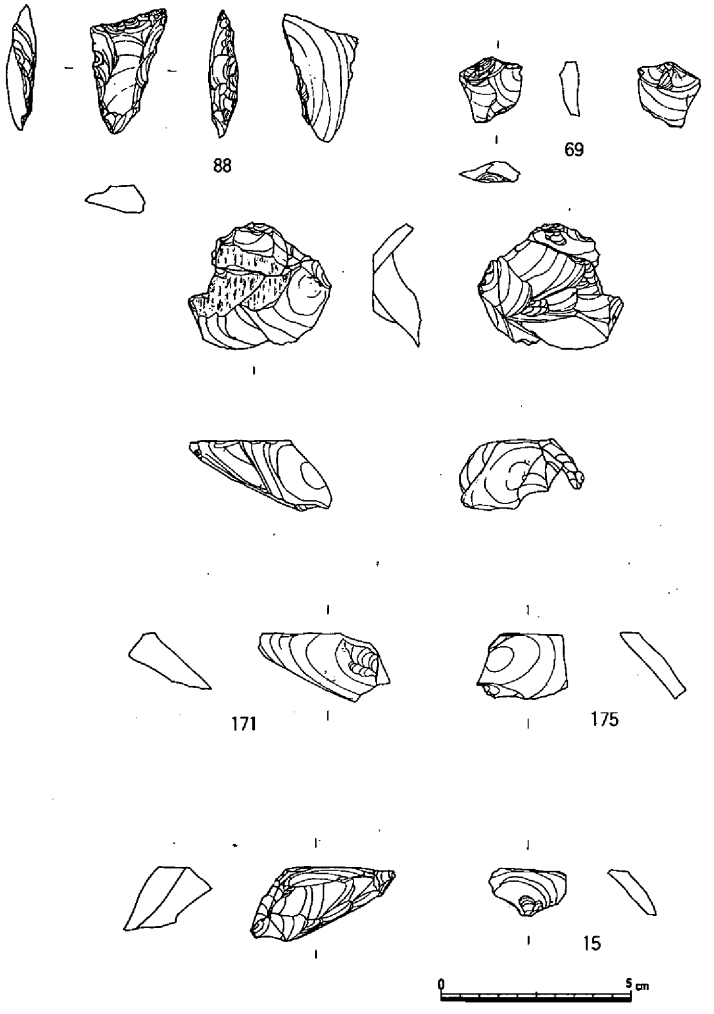
調査区南端よりで谷が下がって行く前面の平坦部に認められる。ブロックは、10×５ｍの北東から南西に細長く分布するが中央やや北東よりに集中する部分が認められる。また、炭化粒の分布（第191図）も範囲をやや狭めながらも重複して認められる。

出土遺物は、283点の黒曜石を検出している。その内、製品と認められるのは２点で他は接合資料である。88は、台形石器である。69は、小型のナイフ形石器で打面を残している。15・171・175は、接合資料である。この接合資料は、石器分布図（第192図）に示したごとく密度の高い部分から比較的接して検出されている。



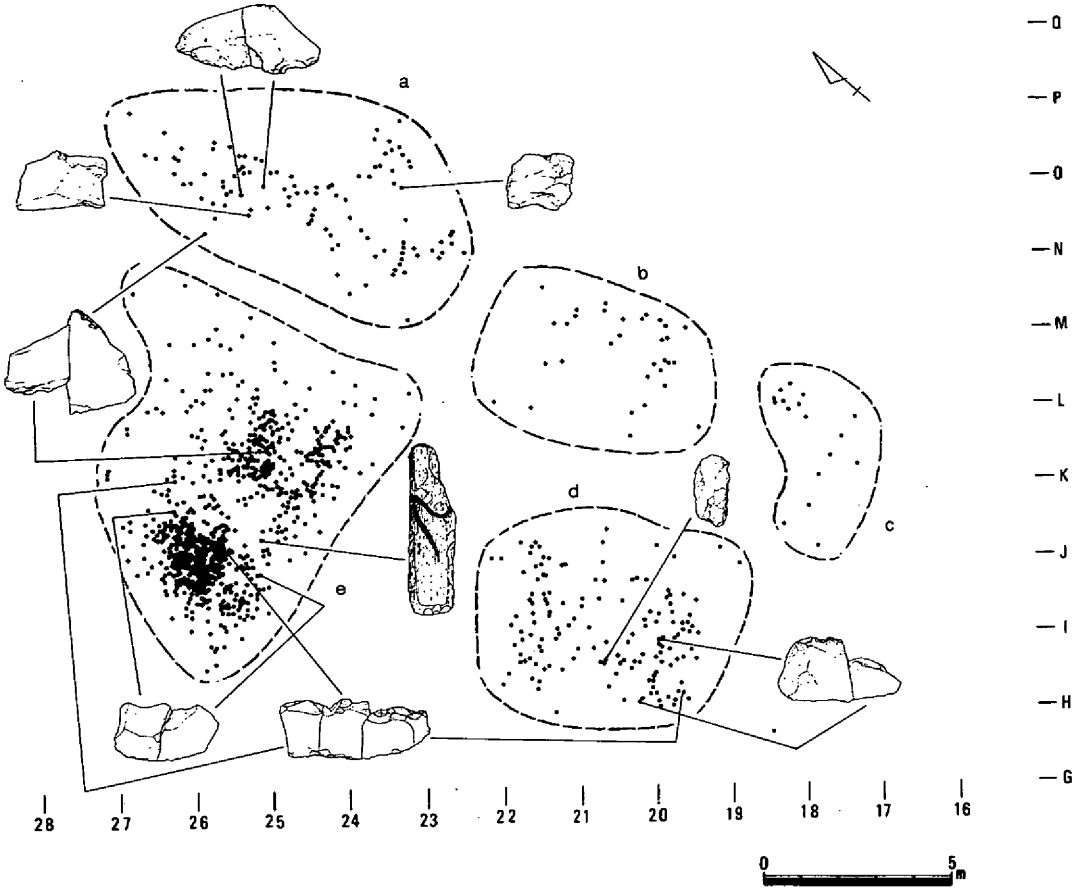
第192図　Ａブロック製品・接合資料分布図
（1／200）

Ｂブロック（第189図）



第193図　Aブロック出土遺物（1／2）

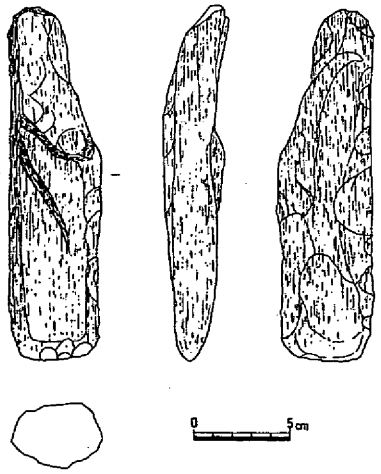
調査区のほぼ中央に25×19ｍの範囲にわたって認められる。このブロックは炭化物も同様な分布（第191図）を示している。石器の分布については第194図からみると５か所の小ブロックを把握することが可能であり、それらをａ～ｅとした。ａブロックは、Ａブロックの北側に、ｂブロックはＡブロックの東側でａ・ｃブロックの間に、ｃブロックはＡブロックの南東側に、ｄブロックはＡブロックの南西側に、ｅブロックはＡブロックの北西側にそれぞれ位置している。この内ｅブロックの石器密度が最も濃く、ａ・ｄのブロックとともに接合資料をもち、か



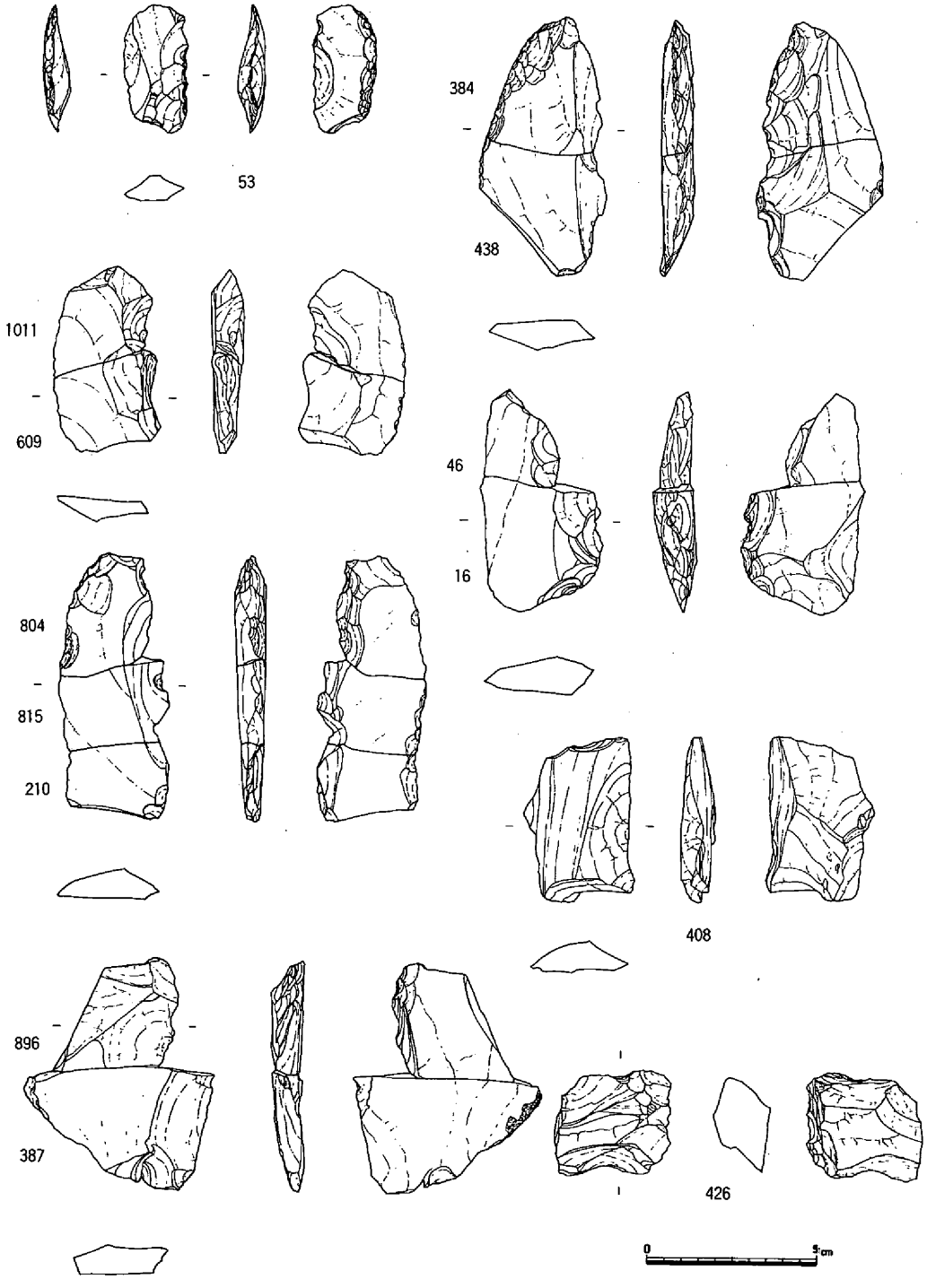
第194図　Bブロック製品・接合資料分布図（1／200）

つこの3ブロック間においけ接合関係を見出している。また、aとdのブロックにおいて各1点黒曜石が認められている。

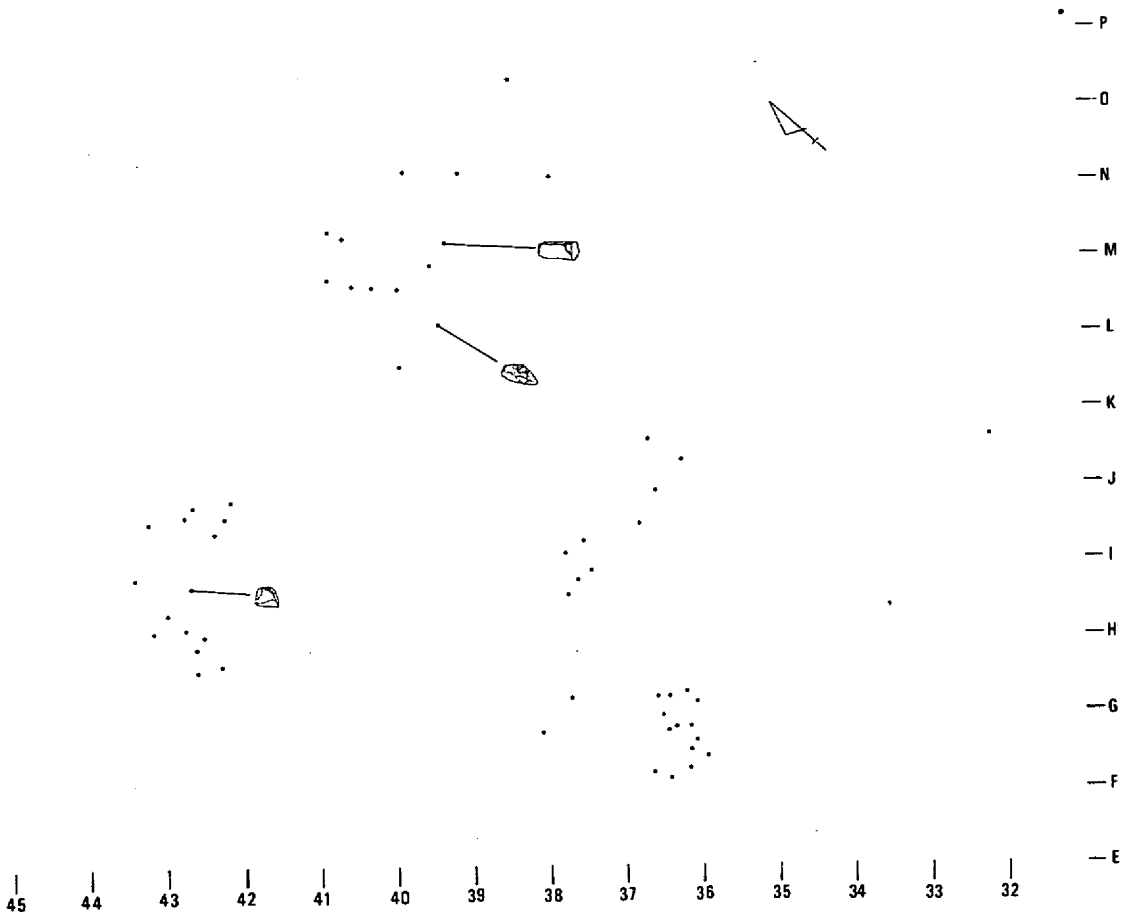
出土遺物（第195・196図）は、いずれもサヌカイト製である。53は、dブロックから横長剝片を用いたスクレイパーまたは台形様石器と考えられるものである。384と438及び210・804・815は、石核からスクレイパーを作っている。1011と609・8・46・16は、石核である。426・389と89は石核である。981は、三群変成岩製の石斧であり刃部が磨製かどうかについては風化が著しく判断しかねるものであ



第195図　Bブロック出土遺物（1）（1／4）



第196図　Bブロック出土遺物（2）（1／2）



第197図　Cブロック製品分布図（1／200）

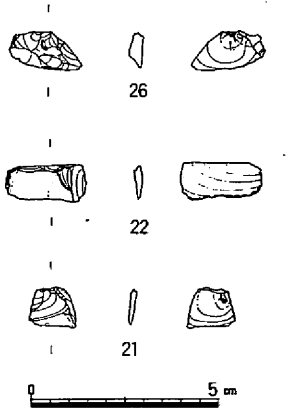
る。

石器の接合関係は、aブロック－**387**とeブロック－**896**、dブロック－**804**とaブロック－**815・210**について認められる。

Cブロック（第189図）

調査区南西端よりに17×15mの範囲にわたって黒曜石と炭化粒の分布を認めた。炭化粒の分布量（第191図）に対し、石器のそれは疎であり製品は3点認められた。

出土遺物（第198図）は、いずれも微細な剥離が認められるものであり、**21**と**26**は打瘤を残している。



第198図　Cブロック出土遺物（1／2）

表－4

No	石　材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g
A　－　88	黒曜石	33.5	20	7.3	3.51
A　－　69	〃	17.5	16.5	5.5	1.10
A－171・A－15・A－175	〃	33.5	38	19	12.44

表－5

No	石　材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g
B　－　53	安山岩	37.5	18.5	7.8	5.19
B － 384 ・ B － 438	〃	76	37	9.2	24.33
B － 1011 ・ B － 606	〃	31	54.5	9	13.91
B － 46 ・ B － 16	〃	36	65	12.3	21.27
B－804・B－815・B－210	〃	78	32	9.2	22.59
B　－　408	〃	32	48	1	13.75
B － 896 ・ B － 38	〃	56	68	10.2	28.90
B　－　426	〃	31.5	34	16.5	19.46
B　－　981	三群変成岩	183	38	31	386.94

表－4

No	石　材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g
C　－　26	黒曜石	10.5	19.5	4	0.60
C　－　32	〃	10	21.5	2.2	0.52
C　－　21	〃	11	13	2	0.21

縄文時代の遺構

落し穴

No. 1－落し穴（第200図）

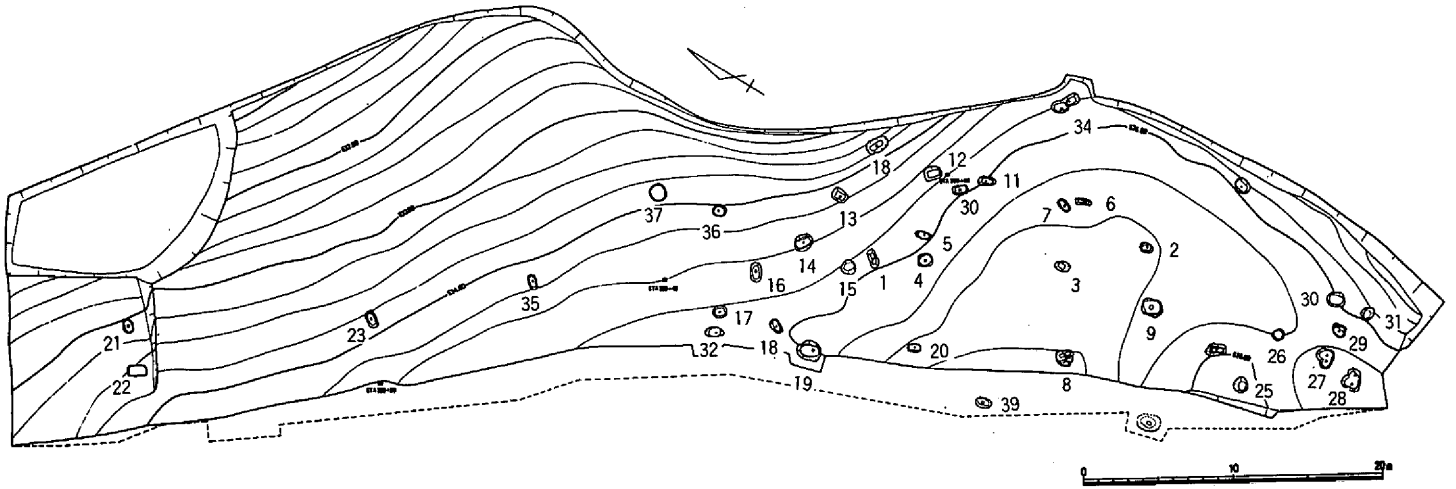
調査区中央やや南よりでNo.15－落し穴の南東近くに位置する。規模は、125×53cm深さ64cmを測り、平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。底には、17×12cm深さ24cmのピットが認められる。断面は、外方に開いた掘り方を示している。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 2－落し穴（第201図）

調査区南よりでNo. 9 －落し穴の北東側に位置する。規模は88×60cm深さ96cmを測り、平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。底には、14×13cm深さ27cmのピットが認められる。断面は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土である。

No. 3－落し穴（第202図）

調査区南よりでNo. 7 －落し穴の西よりに位置する。規模は、100×62cm深さ127cmを測り、平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。底には、18×15cm深さ24cmのピットが認められる。断面



第199図　遺構配置図（1／500）

は、上半部で外方へ開くが以下は垂直に掘り下げている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 4 ー落し穴（第203図）

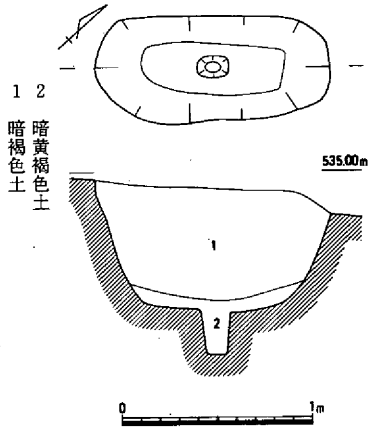
調査区中央やや南よりでNo. 5 ー落し穴の西側近くに位置する。規模は、98×82cm深さ62cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。底には、18×17cm深さ42cmのピットが認められる。断面は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。

No. 5 ー落し穴（第204図）

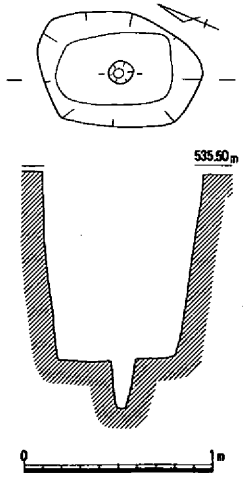
調査区中央やや南よりでNo. 4 ー落し穴の東側近くに位置する。規模は100×50cm深さ60cmを測り、平面形態は胴張り隅長丸方形で底面形態は長方形を呈する。底には、径13cm深さ35cmのピットが認められる。断面は、垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No. 6 ー落し穴（第205図）

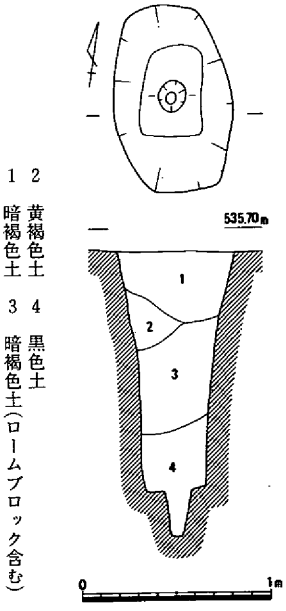
調査区南よりでNo. 7 ー落し穴の北側に接して位置する。規模は、110×38cm深さ93cmを測り、平面形態は長方形で底面は幅12cm前後と狭くなっている。底には、22×14cm深さ35cmのピットが認められ、その掘り方の中から石が検出されている。断面は、やや開き気味の掘り方となっている。埋土は、黒色土が基調となる。



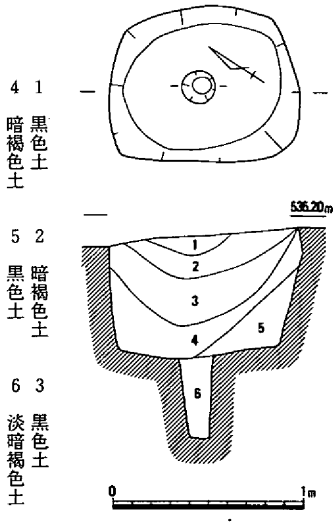
第200図　No. 1 -落し穴（1／40）



第201図　No. 2 -落し穴（1／40）



第202図　No. 3 -落し穴（1／40）



第203図　No. 4 -落し穴（1／40）

No. 7 －落し穴（第206図）

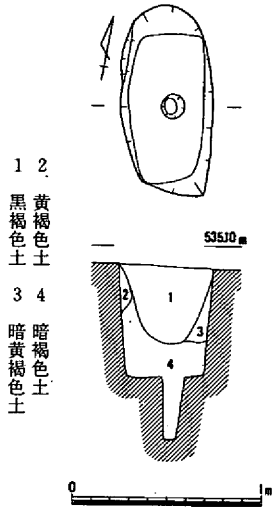
調査区中央やや南よりでNo. 6 －落し穴の北側近くに位置する。規模は、97×55cm深さ75cmを測り、平面形態は胴張り隅長丸方形を呈する。底には、18×14cm深さ31cmのピットが認められる。断面は、垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。なお、図化できなかったが底のピット付近から石を検出している。

No. 8 －落し穴（第207図）

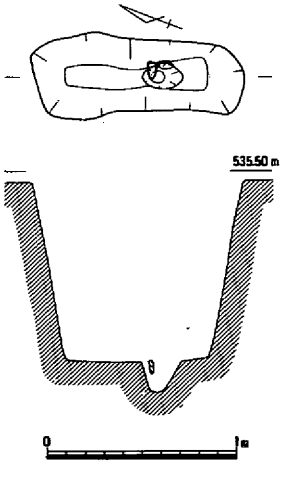
調査区西端南よりでNo.20－落し穴の北側に位置する。規模は、117×63cm深さ117cmを測り、平面形態は胴張り隅長丸方形を呈する。南西辺にみられる掘り込みは、新しいものである。底には、18×15cm深さ31cmのピットが認められる。断面は、外方に開き気味となる。埋土は、淡暗褐色土が基調となる。

No. 9 －落し穴（第208図）

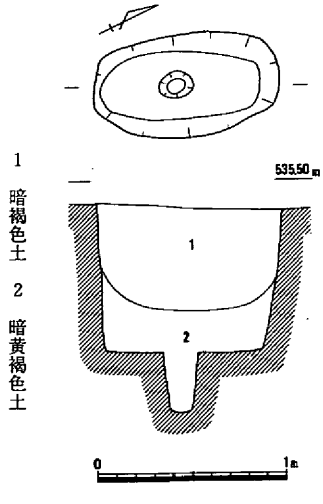
調査区中央南よりでNo. 2 －落し穴の南西に位置する。規模は、127×108cm深さ96cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。底には、30×28cm深さ53cmのピットが認められる。断面は、上半部分で内湾状となるが以下は垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。



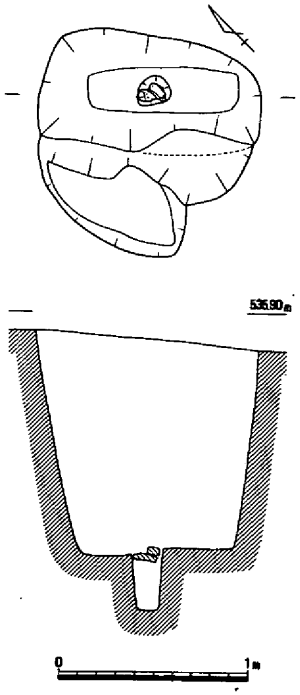
第204図　No. 5 -落し穴（1／40）



第205図　No. 6 -落し穴（1／40）



第206図　No. 7 -落し穴（1／40）



第207図　No. 8 -落し穴（1／40）

No.10－落し穴（第209図）

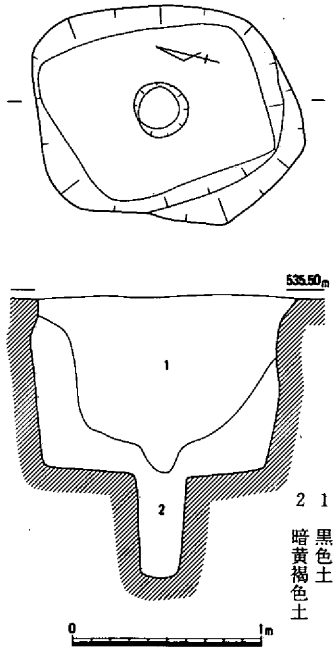
調査区中央南東よりでNo.５－落し穴の東側に位置する。規模は、102×51cm深さ90cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、19×15cm深さ40cmのピットが認められる。断面は、垂直に掘り下げられている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.11－落し穴（第210図）

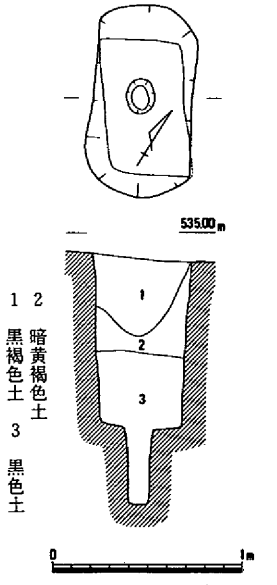
調査区中央東よりでNo.10－落し穴の南東側近くに位置する。規模は、113×58cm深さ87cmを測り、平面形態は胴張り隅丸長方形を呈する。底には、15×12cm深さ30cmのピットが認められ、その上面には５個の石が検出されている。断面は、垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No.12－落し穴（第211図）

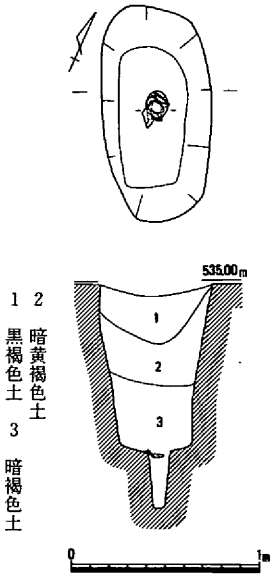
調査区中央東よりでNo.10－落し穴の北側近くに位置する。規模は、113×83cm深さ93cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈するが北西辺が長くなっている。底には、径15cm深さ45cmのピットが認められ、石も検出されている。断面は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。



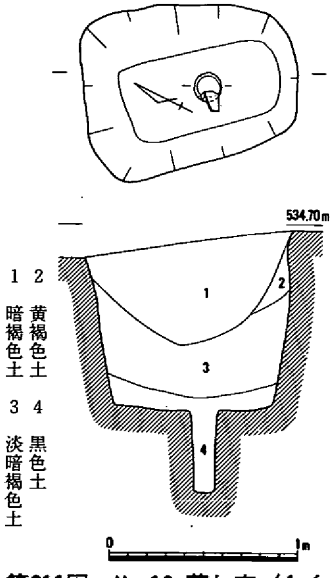
第208図　No. 9-落し穴（1／40）



第209図　No. 10-落し穴（1／40）



第210図　No. 11-落し穴（1／40）



第211図　No. 12-落し穴（1／40）

No.13一落し穴（第212図）

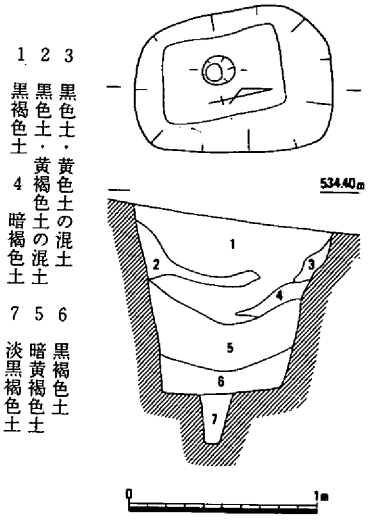
調査区中央やや東よりでNo.１一落し穴の北側に位置する。規模は、105×75cm深さ95cmを測り、平面形態は胴張り隅丸長方形で底面は方形を呈する。底には、18×16cm深さ27cmのピットが認められる。断面は、上半近くで開き気味となる。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No.14一落し穴（第213図）

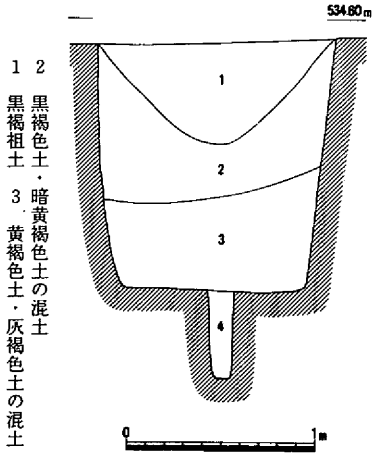
調査区中央でNo.13一落し穴の西側に位置する。規模は、125×107cm深さ130cmを測り、平面形態は不整円形で底面は長方形を呈する。底には、径14cm深さ43cmのピットが認められる。断面は、垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No.15一落し穴（第214図）

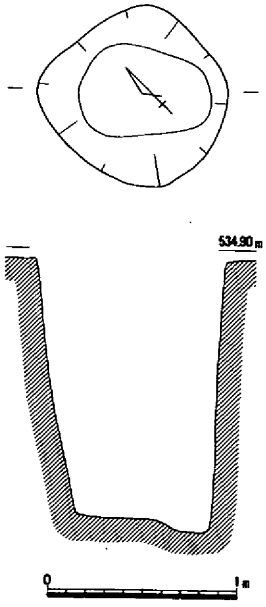
調査区中央やや西よりでNo.１一落し穴の西側近くに位置する。規模は、径90cm深さ136cmを測り、平面形態は円形に近い胴張り隅丸方形を呈する。断面は、垂直に掘り下げられている。埋土は、黄褐色土である。



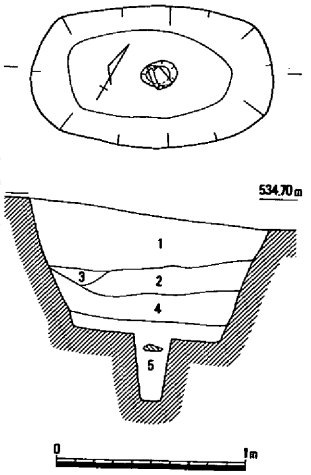
第212図　No.13-落し穴（1／40）



第213図　No.14-落し穴（1／40）



第214図　No.15-落し穴（1／40）



第215図　No.16-落し穴（1／40）

No.16－落し穴（第215図）

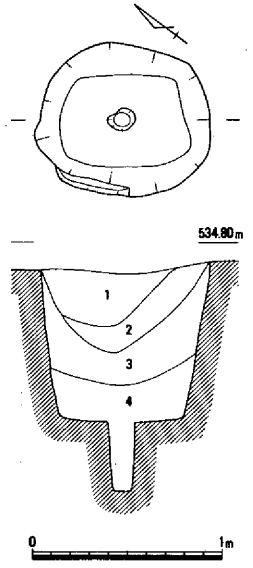
調査区中央やや西よりでNo.14－落し穴の西側に位置する。規模は、126×75cm深さ58cmを測り、平面形態は楕円を呈する。底には、20×14cm深さ35cmのピットが認められその上面に石を検出する。断面は、外方に開いて掘り下げられている。埋土は、黒褐色土が基調となる。

No.17－落し穴（第216図）

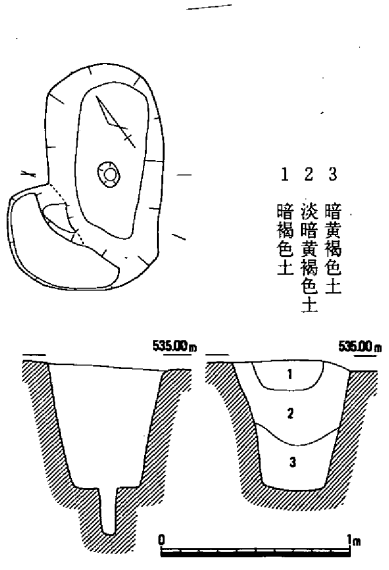
調査区中央東端よりでNo.６－落し穴の東側に位置する。規模は、88×80cm深さ79cmを測り、平面形態は円形に近い。底には、15×12cm深さ37cmのピットが認められる。断面は、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No.18－落し穴（第217図）

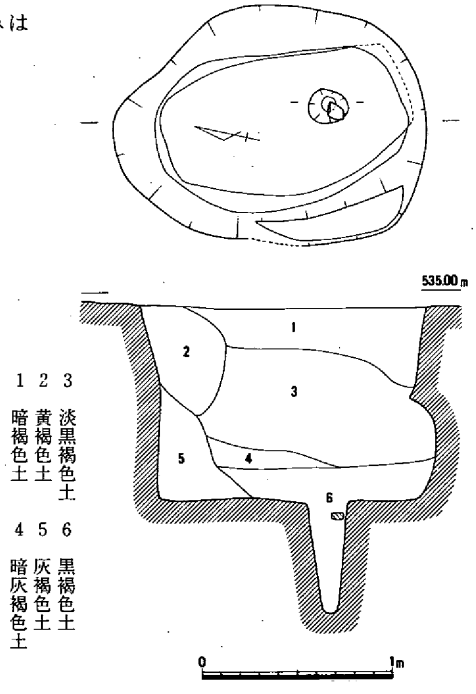
調査区中央東端よりでNo.17－落し穴の南側に位置する。規模は、100＋α×61cm深さ65cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、14×11cm深さ25cmのピットが認められる。断面は、やや開き気味に立ち上がっている。埋土は、暗黄褐色土が基調となる。なお、東隅の掘り込みは後世のものである。



第216図　No.17-落し穴（1／40）



第217図　No.18-落し穴（1／40）



第218図　No.19-落し穴（1／40）

No.19－落し穴（第218図）

調査区中央南西隅でNo.18－落し穴の南側近くに位置する。規模は、162×131cm深さ100cmを測り、平面形態は不整楕円形を呈する。底には、中央から端によって20×18cm深さ60cmのピットが認められ、その上面から石が検出されている。断面は、壁中程で外に開き気味となるが南東壁は掘り方よりも外へ掘られている。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No.20－落し穴（第219図）

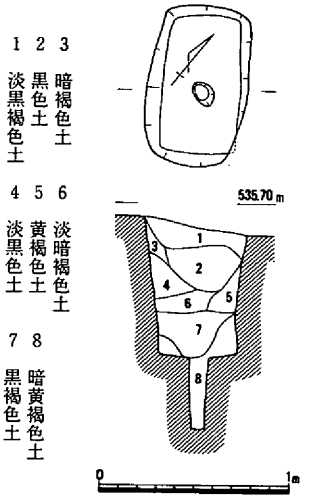
調査区中央南西隅よりでNo.19－落し穴の南側に位置する。規模は、86×53cm深さ70cmを測り、平面形態は長方形を呈する。底には、15×10cm深さ40cmのピットが認められる。断面は、上半部でやや外方へ開き気味となるが以下は垂直に掘り下げられている。埋土は、暗褐色土が基調となる。

No.21－落し穴（第220図）

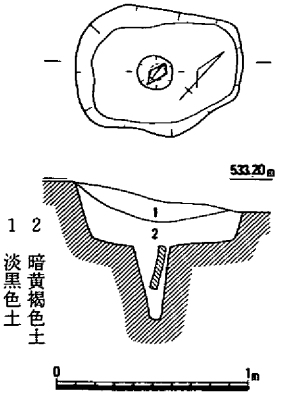
調査区北西端よりでNo.22－落し穴の北東側近くに位置する。このNo.21とNo.22は、調査区内の丘陵平坦部の最も端に認められたものである。規模は、87×65cm深さ27cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。底には、19×18cm深さ38cmのピットが認められ、中から石が検出されている。

No.22－落し穴（第221図）

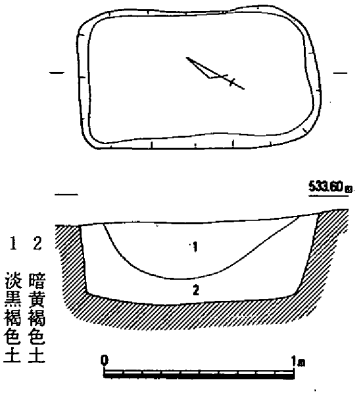
調査区西端よりでNo.21－落し穴の北西側近くに位置する。規模は、127×72cm深さ42cmを測り、平面形態は長方形を呈する。断面は、外方へ開き気味に掘られている。埋土は、黒色土が基調となる。



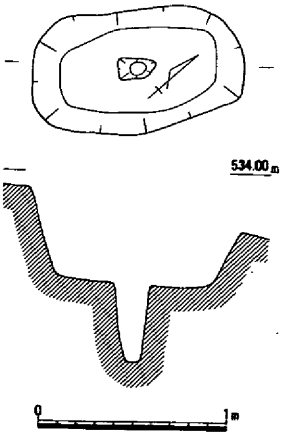
第219図　No.20-落し穴（1／40）



第220図　No.21-落し穴（1／40）



第221図　No.22-落し穴（1／40）



第222図　No.23-落し穴（1／40）

No.23－落し穴（第222図）

調査区の中央北西よりでNo.22－落し穴の南東側に位置する。規模は、112×65cm深さ48cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、20×12cm深さ43cmのピットが認められる。断面は、外方に開いて掘られている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.24－落し穴（第223図）

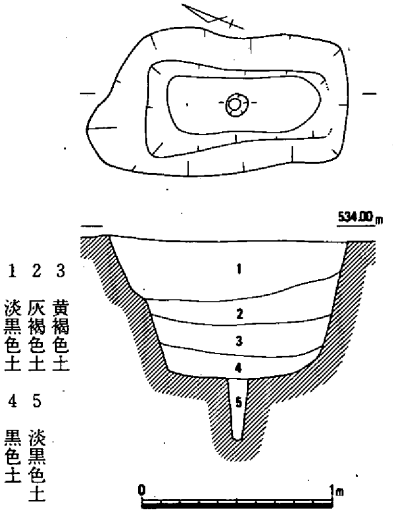
調査区北端よりでNo.9－落し穴の北側に位置する。規模は、125×70cm深さ72cmを測り、平面形態は長方形を呈する。底には、径12cm深さ33cmのピットが認められる。断面は、中程で段を有し外方に開いて掘られている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.25－落し穴（第224図）

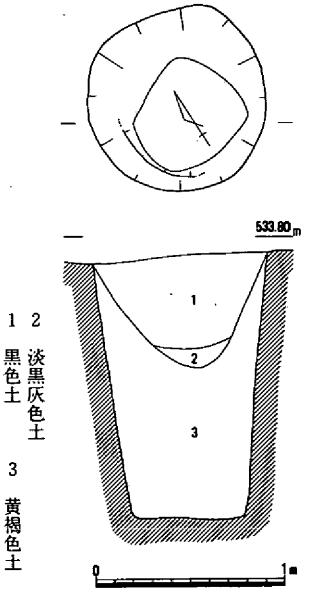
調査区南端でNo.24－落し穴の南側近くに位置する。規模は、径95cm深さ140cmを測り、平面形態は円形を呈する。断面は、垂直に掘られている。埋土は、中程までレンズ状に黒色土を認める以外は黄褐色土である。

No.26－落し穴（第225図）

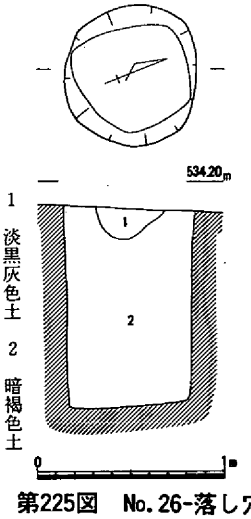
調査区南端よりでNo.24－落し穴の南東側に位置する。規模は、75×70cm深さ104cmを測り、平面形態は



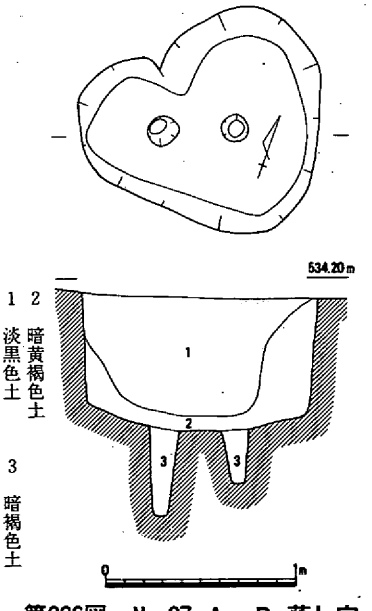
第223図　No.24-落し穴（1／40）



第224図　No.25-落し穴（1／40）



第225図　No.26-落し穴（1／40）



第226図　No.27-A・B-落し穴（1／40）

不整円形を呈する。断面は、垂直に掘られている。埋土は、暗褐色土であり上面に僅かに黒灰色土が認められる。

No.27一落し穴（第226図）

調査区南端でNo.25－落し穴の南東側近くに位置する。プラン確認時では重複していることが認められなかった。掘りあげの時点でプランが北方向に広がり底面でのピットが2か所確認されることによって明らかになったのである。従って、東西方向のものをNo.27－A、南北方向のものをNo.27－Bとする。

No.27－Aの規模は、128×65＋α深さ70cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する底には、16×15cm深さ43cmのピットが認められる。断面は、垂直に掘られている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.27－Bの規模は、重複のため不明であるが深さは63cmを測る。平面形態は、楕円形を呈するものと推定され、底には、径15cm深さ30cmのピットが認められる。No.27－AとBの前後関係は、土層断面の位置が悪く正確に判断できていない。しかしながら、No.27－BがAを切っていればそのプランからこの土層断面図に認められてもよいはずであるが、それが認められなかったことはNo.27－AがBを切って新しく作られたとするのが妥当と考えるのである。

No.28一落し穴（第227図）

調査区南隅でNo.27－落し穴の南側近くに位置する。プラン検出時で重複を確認したが新旧の判断はできなかった。

No.28－Aの規模は、125×61＋αcm深さ60cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、径18cm深さ27cmのピットが認められる。断面は、外方に開いて掘られている。

No.28－Bの規模は、125×105cm深さ57cmを測り、平面形態は楕円形を推定する。底には、15×13cm深さ32cmのピットが認められる。断面は、大きく外方へ開いている。埋土は、黒色土が基調となる。

土層断面の観察結果は、東西方向に長軸をおくNo.28－BがNo.28－Aを切っていることから新しいと判断したのである。しかしながら、土層断面における黒色土の埋土から上面のプランを復元するとかなり壁が緩やかな掘り込みとなってしまい若干の疑問を浮かべる次第である。

No.29一落し穴（第228図）

調査区南隅でNo.27－落し穴の東側近くに位置する。規模は、100×73cm深さ74cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、15×12cm深さ28cmのピットが認められる。断面は、西辺以外は段を有し、垂直に掘られている。

No.30一落し穴（第229図）

調査区南隅よりでNo.29－落し穴の北西側近くに位置する。規模は、120×92cm深さ60cmを測

り、平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。断面は、やや開き気味に掘られている。なお、底には岩石が掘りのこされている。

No.31－落し穴（第230図）

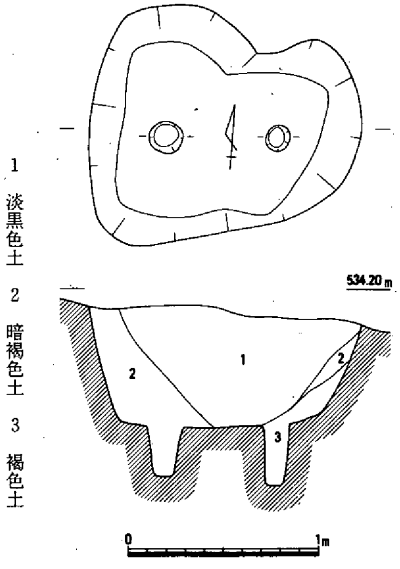
調査区南端よりでNo.29－落し穴の北西側の近くに位置する。規模は、91×76cm深さ54cmを測り、平面形態は、不整楕円形を呈する。断面は、南東側が大きく外に開いて掘られている。黒色土が基調となる。

No.32－落し穴（第231図）

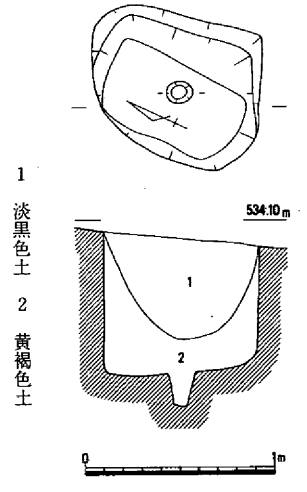
調査区中央南西隅よりでNo.17－落し穴の西側近くに位置する。規模は、116×102cm深さ98cmを測り、平面形態は楕円形に近い内容を示すが南西辺が大きく張り出すようになっている。底には、15×12cm深さ50cmのピットが認められる。断面は、一部二段掘りとなりやや外へ開き気味に掘られている。埋土は、黒色土が基調となる。

No.33－落し穴（第232図）

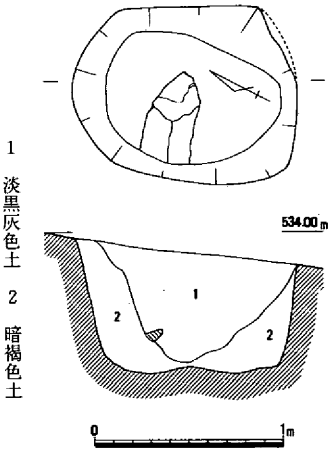
調査区南東端よりでNo.30－落し穴の北側に位置する。規模は、104×86cm深さ97cmを測り、平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。底には、15×12cm深さ20cmのピットが認められる。断面は、垂直に掘られている。



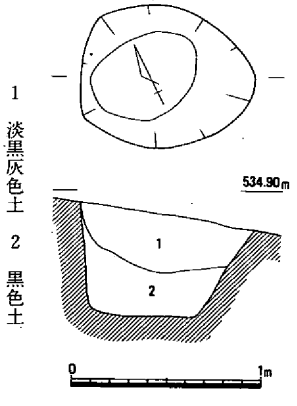
第227図　No.28-落し穴（1／40）



第228図　No.29-落し穴（1／40）



第229図　No.30-落し穴（1／40）



第230図　No.31-落し穴（1／40）

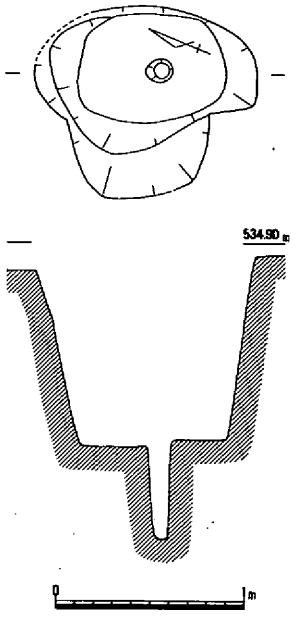
No.34－落し穴（第233図）

調査区東端よりでNo.33－落し穴の北側に位置する。プラン検出時ではなく掘り下げた結果、重複していることが明らかになったものである。No.34－Aの規模は、101×69cm深さ130cmを測り、平面形態は胴張り隅丸長方形を呈する。底には、径13cm深さ19cmのピットが認められる。断面は、ほぼ垂直に掘られている。No.34－Bの規模は、94＋αcm×79cmを測り、平面形態は楕円形を呈するものと考える。底には、18×14cm深さ24cmのピットが認められる。断面は、壁中程から底面にかけて内側に抉るように掘られている。

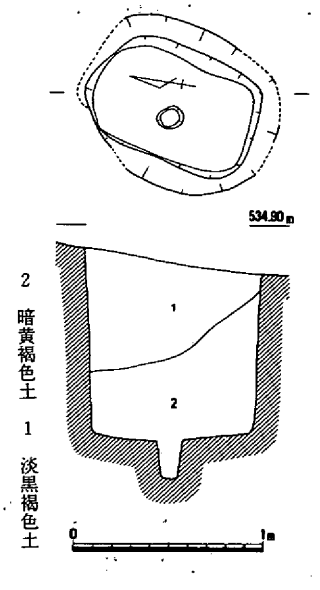
このNo.34－AとBは、先に記したようにプラン検出時ではなく掘り上げ時において重複していることが明らかになったものである。したがって、土層断面の設定が短軸方向であったため新旧の判断をする資料を得ることができなかった。

No.35－落し穴（第234図）

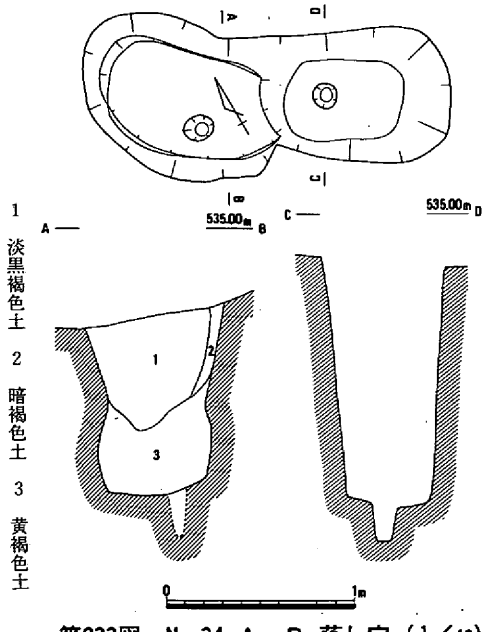
調査区中央北西よりでNo.23－落し穴の南東側に位置する。規模は、102×53cm深さ32cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、径15×14cm深さ32cmのピットが認められ、中央に石が検出されている。断面は、外に広がって掘られている。



第231図　No.32-落し穴（1／40）



第232図　No.33-落し穴（1／40）



第233図　No.34-A・B-落し穴（1／40）

埋土は、黒色土が基調となる。

No.36－落し穴（第235図）

調査区中央近くでNo.14－落し穴の北側に位置する。規模は、92×69cm深さ94cmを測り、平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。底には、径16cm深さ21cmのピットが認められ、中から石を検出している。断面は、ほぼ垂直に掘られている。

No.37－落し穴（第236図）

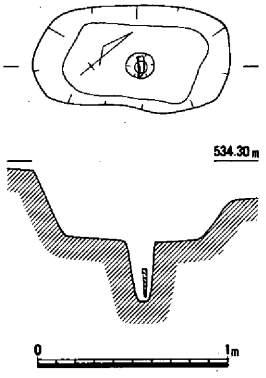
調査区南隅よりでNo.29－落し穴の北西側近くに位置する。規模は、91×76cm深さ54cmを測り、調査区中央付近でNo.36－落し穴の北側に位置する。規模は、径112cm深さ32cmを測り、平面形態は円形を呈する。底の壁に接して幅9～4cm深さ7～4cmの溝がめぐっている。断面は、ほぼ垂直に掘られている。

No.38－落し穴（第237図）

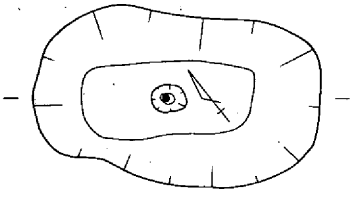
調査区中央やや南東よりでNo.13－落し穴の東側に位置する。規模は、150×90cm深さ140cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底には、18×14cm深さ36cmのピットが認められ、その上面から石が検出されている。断面は、外に開き気味に掘られている。埋土は、黒色土が基調となる。

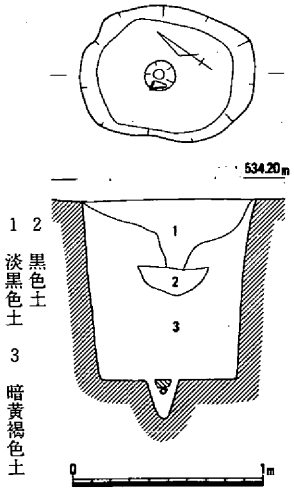
No.39－落し穴（第238図）

調査区中央南端でNo.8－落し穴の西側に位置する。規模は、101×75cm深さ83cmを測り、平面形態は胴張

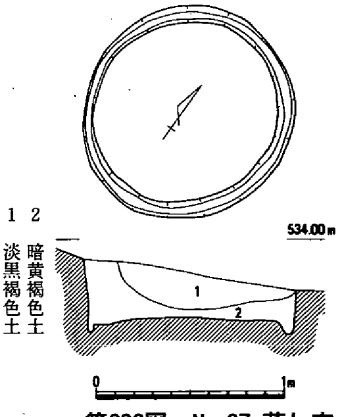


第234図　No.35-落し穴（1／40）

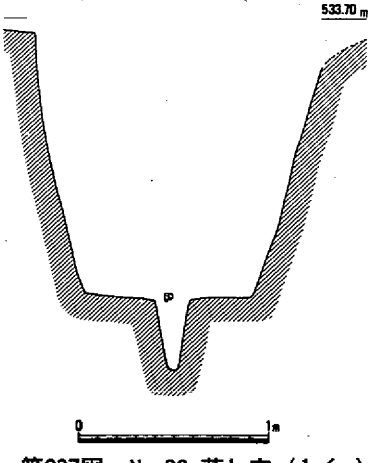




第235図　No.36-落し穴（1／40）



第236図　No.37-落し穴（1／40）

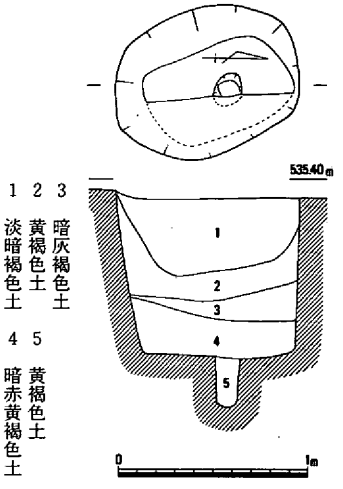


第237図　No.38-落し穴（1／40）

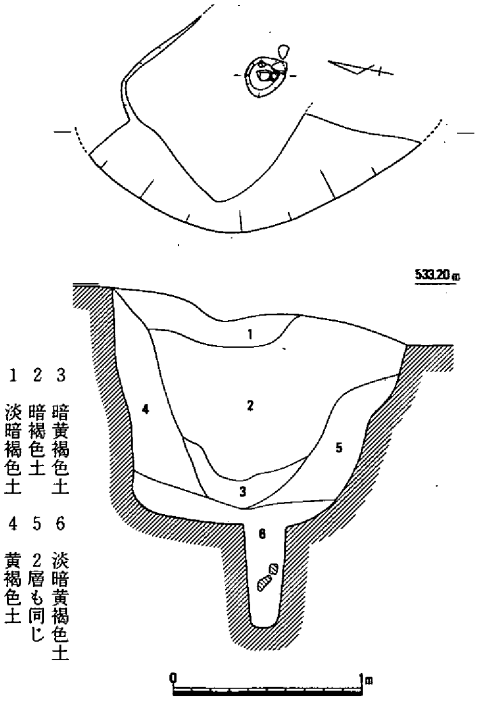
り隅丸方形を呈する。底には、15＋α×15cm深さ27cmのピットが認められる。埋土は、褐色が基調となる。

No.40－落し穴（第239図）

農道鍋ケ谷線の撤去時においてNo.39－落し穴とともに検出されたが、その関係で一部がカットされており全容を把握できなかった。規模は、深さが116cmを測ることができるが、平面形態は特定できない。底には、24×20cm深さ51cmのピットが認められ、中から6個の拳大の石を検出している。



第238図　No.39-落し穴（1／40）



第239図　No.40-落し穴（1／40）

小　　結

田代遺跡は、岩宿時代・縄文時代そして弥生時代と時期不明の建物が検出された。岩宿時代に属するものは、No.２地点のＡＴ下層から出土した石器群である。横長剝片を主体としてスクレイパーまたは台形様石器と考えられるものが出土していることから注目される内容を含んでいる。

縄文時代は、No.１及びNo.２から落し穴が多数検出されている。平面形態や断面形態及び底におけるピットの有無についても差異があり、単一時期の所産としがたいのである。また、その所属する時期についても伴出遺物が全くなく縄文時代としたがその側面からは特定しがたいのである。しかし、No.２地点のNo.26－落し穴のように上面で黒色土が若干認められる以外の埋土は暗褐色土の単純層であり、黒ボコ堆積前後の古い段階が想定される。それとは逆に、埋土が黒色土の黒ボコの単純層のものも認められており、その時期的な幅が大きいことが充分考慮される。

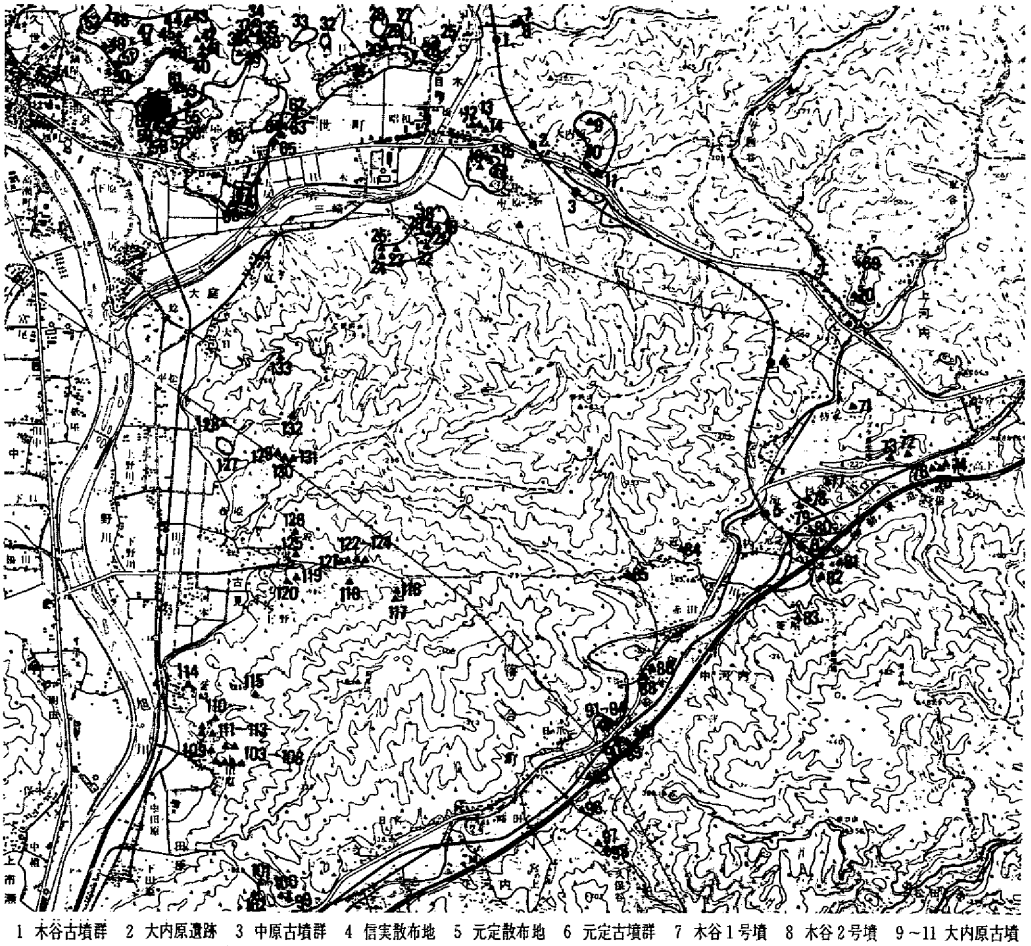
弥生時代はNo１地点で後期前半の竪穴住居２軒が確認されている。No１－竪穴住居からは、グリーンタフ製、No.２－竪穴住居からは碧玉製の管玉とまた前者からはガラス玉も出土している。さらに分銅形土製品も出土している。分銅形土製品は、岡山県南部に多くの出土例が知られているが、同じように鳥取県下においても比較的多くの出土例が認められている。県西北部についてはその出土例がほとんどなく、両者の関係を繋ぐ具体的な資料として把握される。とくに、分銅形土製品が無くなって行く時期とも近く、且つ、形も方形を示すなどその内容を知る手がかりとなろう。

建物については、伴出遺物が全くなく、その所属する時代が不明のものである。城山東遺跡Ⅵ区で確認された建物群と同じような時期とすれば竪穴住居以外にこれらの建物を主体として生活を営む人々の存在が想定される。しかしながら、その時期についての具体的な把握がなされていないため比較検討ができないのである。したがって、時期的な把握がなされたならばこの地域の集落の在り方を知る上で大きな資料となり得るであろう。

第三章　久世地域の調査

第一節　地理的・歴史的環境

1　地理的環境



1 木谷古墳群　2 大内原遺跡　3 中原古墳群　4 信実散布地　5 元定散布地　6 元定古墳群　7 木谷1号墳　8 木谷2号墳　9～11 大内原古墳群　12～14 宮ノ北古墳群　15 古墳　16 旦山古墳　17 旦山遺跡　18～25 三崎古墳群　26 引屋敷遺跡　27 上ノ山遺跡　28 戸坂遺跡　29 戸坂2号墳　30 戸坂3号墳　31 西口遺跡　32 多田須遺跡　33 細シ遺跡　34～39 新池古墳群　40～50 多田古墳群　51 稲荷神社裏山遺跡　52 平ノ上遺跡　53・54・61 蛇ノ尾古墳群　55～60 長光寺古墳群　62～65 金屋古墳群　66 五反遺跡　67 五反廃寺　68 若宮古墳　69 地蔵坊遺跡　70 地蔵坊古墳　71 持家遺跡　72・73 親谷1・2号墳　74～76 丸山古墳群　77 杉谷遺跡　78 安行古墳　79・80 杉谷1・2号墳　81・82 釜屋1・2号墳　83 釜屋遺跡　84 大ノ釜古墳　85 権現塚古墳　86 布北古墳　87 野田塚古墳　88 古墳　89・90 藤こそ1・2号墳　91～94 八幡古墳群　95 下河内遺跡　96・97 藤原遺跡　98・99 大京1・2号墳　100・102 篠向1・2号墳　103～108 日名古墳群　109 奥河内遺跡　110 桃山古墳　111～113 百毛段古墳群　114 金崎遺跡　115 渡辺塚古墳　116・117 窯跡　118・121 戸坂奥遺跡　119 天王塚古墳　120 古見遺跡　122～124・126 戸坂古墳群　125 戸坂遺跡

第1図　路線付近の遺跡分布図（1/75000）

久世は、中国山地と吉備高原との間の勝山盆地の中央に位置する。旭川が湯原町の山間部を大きく蛇行を繰り返しながら南流し、勝山町の中心部でU字状となり東に大きく流れを変える。このあたりから2kmほどで久世町に入る。この流れは、高瀬付近でまた大きく南へ流路を変え落合町に流路をとって行く。旭川は、この南西部よりに流域を形成し、その支流である目木川の合流域とあわせ比較的広い氾濫原を生じさせている。

交通は、近世の水運の主役であった高瀬舟が勝山町まで通じていたことが知られている。この水運の他に出雲往来と大山往来が陸上の主要な交通路であった。出雲往来は、古代より出雲地方から京都・奈良へ通じる官道であった。近世に入り整備され雲伯往来から現在の勝山町そして久世を通り、津山へと通じていたのである。大山往来は、横手道から蒜山そして湯原町をぬけ久世に入るのである。これらの陸路は、いずれも久世で交わり先の水運と合わせこの地が山陰・山陽への交通上の要所であったことが伺われるのである。

2　歴史的環境

久世では、縄文時代の遺跡が6か所確認されている。このうち早期の押形文を出土する遺跡も認められている。大旦遺跡からは、20点ほどの土器破片の出土が見られ、また遺構については土壙を検出している。近接地では、第一分冊で報告されている上野遺跡で落とし穴が調査されている。この他に、中期・後期・晩期に属すると考えられる土器片が数片認められている。しかし、その出土量が極めて少なく具体的内容の把握ができないのが現状である。

弥生時代になると、旭川や目木川の周辺流域深く遺跡が形成されていく。その始まりは、標高200～300mの山麓から南の旭川に行き着くまでに、160m程の緩やかな台地状をなすのが五反・台金屋・西口などの地区である。この地区は、時期的にも弥生時代を通じて生活が営まれていたことが明らかになっている。前期は、五反遺跡から壺形土器と甕形土器が出土している。この他には、この期のものと考えられる遺物などは認められていない。中期は、五反遺跡の他に旭川の対岸に所在する富尾からも壺形土器や高杯形土器が出土し、その他にも石器類をも伴っている。前期と同様に調査例が少なく、その内容の詳細について今後を待たねばならないであろう。しかし、この少ない資料からは，津山周辺に多く認められる土器と様相を近くするものが認められているのである。後期は、大旦遺跡で9か所の袋状土壙が調査されている。戸坂遺跡や細シ遺跡では、断面に竪穴住居が確認されている。このように、明確な遺構が認められるようになる。

古墳時代は、広い氾濫原を望める丘陵上や谷間に多くの古墳が造られるようになる。久世における前方後円墳は、そう惣古墳群のアタゴ山5号墳と堂ノ旦1号墳及び宮ノ叱古墳群中の1号墳の3基が知られている。これらの古墳は、何れも30mを超えない小規模のものである。当

報告書に収載されている中原古墳群は、箱式石棺を内部主体とするもので、5世紀代の当該地域の内容を把握する上で多くの資料を得ている。この時期の集落は、自然堤防上に位置する鍋屋遺跡から5世紀後半の遺物が出土しており、その立地から沖積地に安定し生活域が拡大していったことが伺われるのである。

また、上記の時期よりさかのぼると考えられる古墳時代前半期の土器が出土している。この土器は、宮芝遺跡と大旦遺跡で出土しているもので、頸部がくの字に屈曲し、口縁部が立ち上がりその端面に櫛状沈線を施文する器種である。この器種の甕形土器は、吉備南部域に普遍的に分布するものであるがこの地域で出土することはきわめて少ない。このことから、吉備南部との関係を知る上で注目される遺物である。後期になると、6世紀中葉とされる蛇ノ尾古墳群中の1・2号墳が調査されている。1号墳は、横穴式石室で2号墳が木棺直葬を内部主体とするものである。木棺直葬をするものは、時期差が考えられるが富尾古墳群中にも認められている。7世紀以降になると陶棺を有するものが認められるようになる。

古代においては、真庭郡内で1か所しか確認されていない寺跡である五反廃寺が所在し、その政治的・社会的に主要な役割を担っていた地であることが改ためて思考されるのである。五反廃寺は、調査を実施していないため詳細が不明な部分が多いが、採取遺物から白鳳期に造営された美作地方では最も古い寺跡であることが考えられている。また、この地が白猪氏の本貫地であることから、これとの関わりも考えられている。さらに、欽明天皇16年（555年）に吉備五郡に置かれた白猪屯倉の推定地の一つとされている。

中世に入ると、尼子・宇喜多・毛利の勢力関係で、この地も影響を受けたようである。これらに関係する城跡が知られるが、何れも概略的な踏査などであり充分に把握するに至っていない。

引用及び参考文献

久世町史編集委員会　「久世町史」　久世町教育委員会　S50.3
岡山県史編纂委員会　「岡山県史　第二巻　原始・古代Ⅰ」　H3.3
近藤義郎編　「岡山県の考古学」　吉川弘文館　S62.8
松本和男他　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書57」　岡山県教育委員会　1984.3
「久世町埋蔵文化財分布地図」　久世町教育委員会　1989.3

第二節　木谷古墳群

1　古墳時代の遺構と遺物

木谷古墳群は、目木川左岸の舌状に張り出した低丘陵上に所在する。『久世町埋蔵文化財分布地図』によると８基の古墳からなる古墳群であるが、中国横断自動車道の路線内に位置する３基の古墳（木谷６～８号墳）が調査の対象になった。

(1)　木谷６号墳

調査前の状況（図版34－１）

木谷６号墳が所在すると考えられていた地点は、北側に薬師堂が建立され、南側には水田が造成されていた。しかも東側は急峻な斜面が間近に迫り、周辺に比較的大きな石数個が散在するものの古墳が存在するような状況ではなかった。また地元の人々の話によると、現存する薬師堂を建立した時に巨石や土器が数多く見つかったというから、古墳はすでに破壊されて残存しないと考えられた。

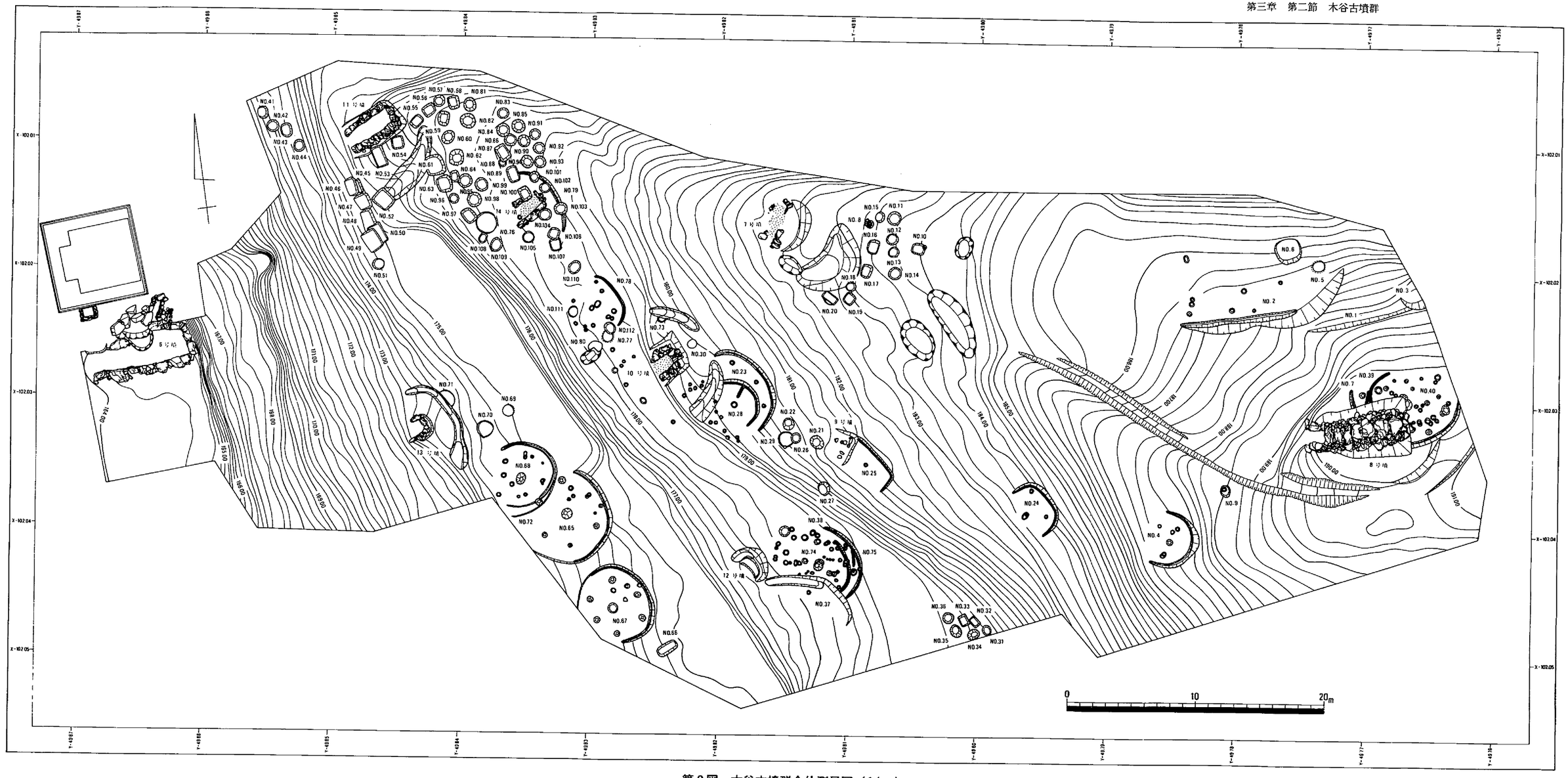
墳丘と周溝（第４図）

この木谷６号墳の墳丘は、ないのに等しい状態であった。すなわち石室の天井石が１枚も残存しないだけでなく、北側は薬師堂の建立によって削平され、南側は水田の造成が石室の側壁に接する部分まで達していた。また周溝の有無を追求したところ、東側に位置する石室の奥壁外側に存在した岩盤が丘陵斜面と直接に連なり、周溝の痕跡は何も認められなかった。

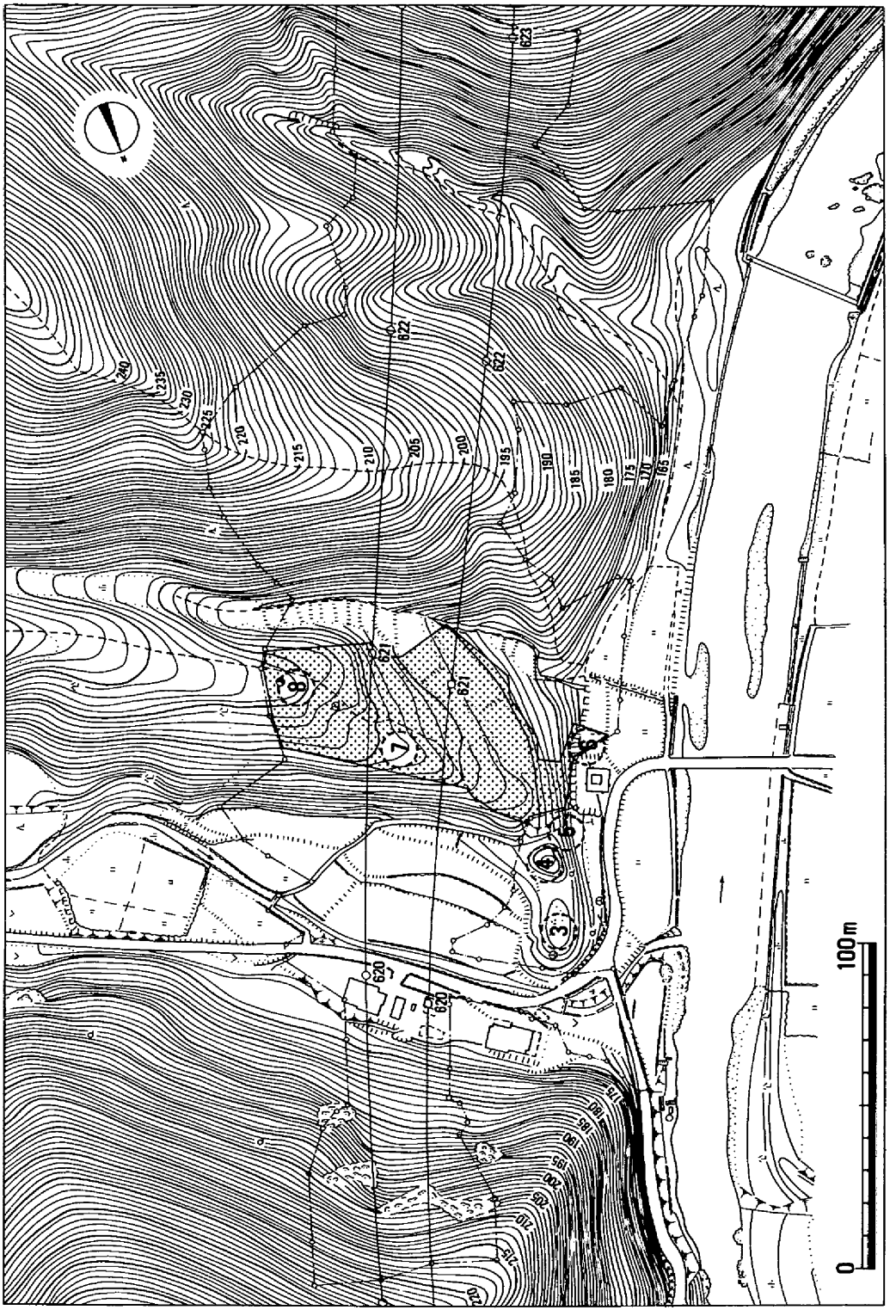
石室（第５・６図）

木谷古墳群に所在が知られている古墳では、最も地形の低い丘陵下端に位置し、近くを北から南に向かって流れる目木川の河川敷に築造されていると言っても過言ではない。石室は右片袖を有する横穴式石室と推定され、天井石は１枚も存在しなかった。奥壁と左側壁の石は辛うじて残存したが、右側壁は袖部も含めて著しく破壊されていた。薬師堂と右側壁の間に散乱していた巨石群が、石室の天井石や側壁に使われていたのであろう。

奥壁の基底部には、２個の安定した巨石を並べて立てていた。北側の右側壁に接する角の部分は、比較的小さな河原石と割石を置いて、空間を埋めていた。左側壁の基底部には６個の巨大な石を据え、その上位に基底部のものよりやや小規模の石を、横口積または小口積にしていた。基底部に据えた石の上面は揃っておらず、上に乗せた石との間に生じた空間には、小さな河原石や割石を詰めていた。右側壁が奥壁に接する基底部は、奥壁と同様に石を立てた状態に



第２図　木谷古墳群全体測量図（1/300）



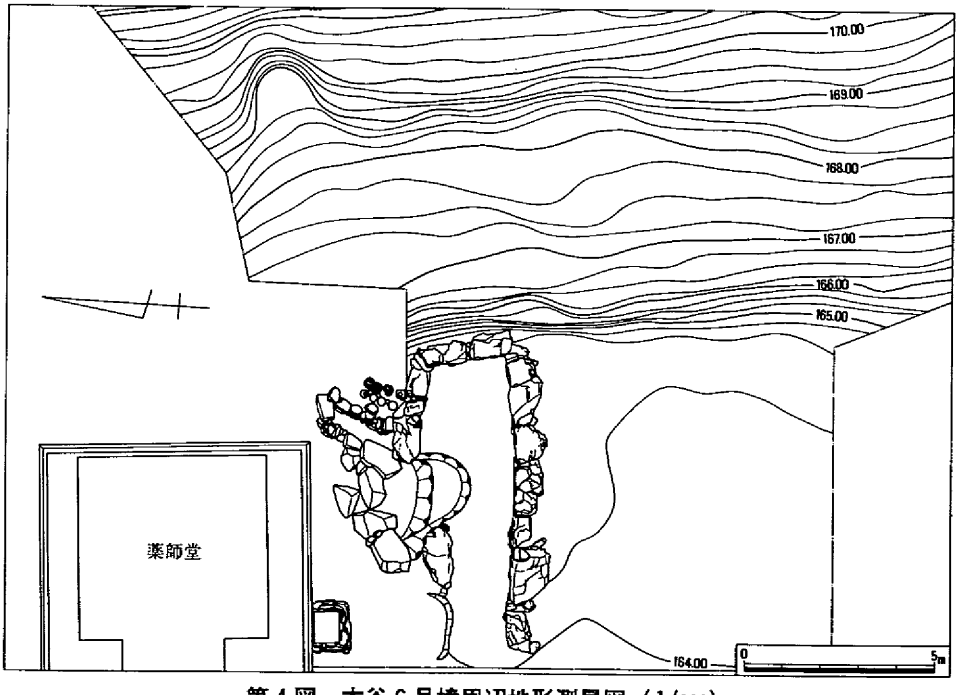
第３図　木谷古墳群周辺地形測量図（1/2000）

置いていた。石室の入口に面した羨道部分に石がないが、抜き取った痕跡を検出した。この石室の床面は、奥壁から入口に向かって緩やかに傾斜しており、奥壁と入口では約60㎝もの高低差が認められた。床面には棺台に使われた石が存在したものの、基盤層の地山面を掘り窪めただけで、砂利や板石などは敷き詰めていなかった。

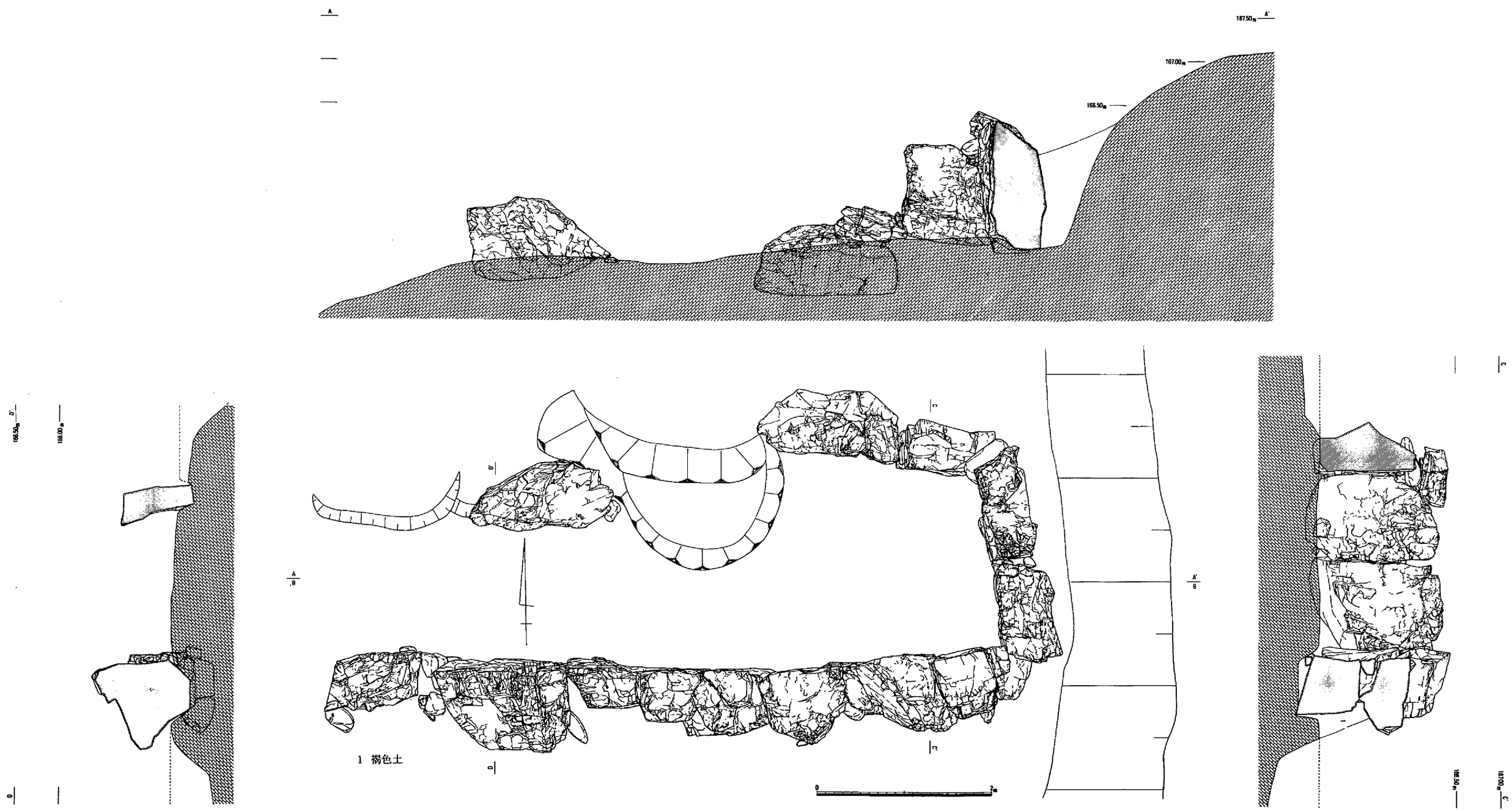
木谷６号墳の主体部である横穴式石室は、残存長7.70ｍ・玄室幅2.05～2.50ｍ・羨道幅1.55～1.75ｍを測り、玄室は中央の幅が広くなる「胴張り」を呈するであろう。また石室の床面からの高さは、奥壁や側壁に残存する最上位の石から推定して、1.50ｍ以上になるであろう。袖の部分は石がないので不明であるが、羨道に据えられた石の位置から計測して、石室の内側へ0.70～0.80ｍ張り出すであろう。

遺物出土状況（第７図、図版34－２・35）

主体部の横穴式石室には天井石が１枚もなく、右側壁は基底部まで破壊されて石がほとんど残存しなかった。石室内の床面は、袖部分を含む玄室と羨道の境と横穴式石室の入口付近が、著しく攪乱されていた。埋葬当時の様相を良好な状態で保持していたのは、奥壁に面した玄室の東側部分だけで、比較的多くの遺物が出土した。羨道の玄室に近い地点からも須恵器や鉄器が出土したが、床面より浮いた状態のものや破損したものが多く、後世に元の位置から移動していると判断した。



第４図　木谷６号墳周辺地形測量図（1/200）

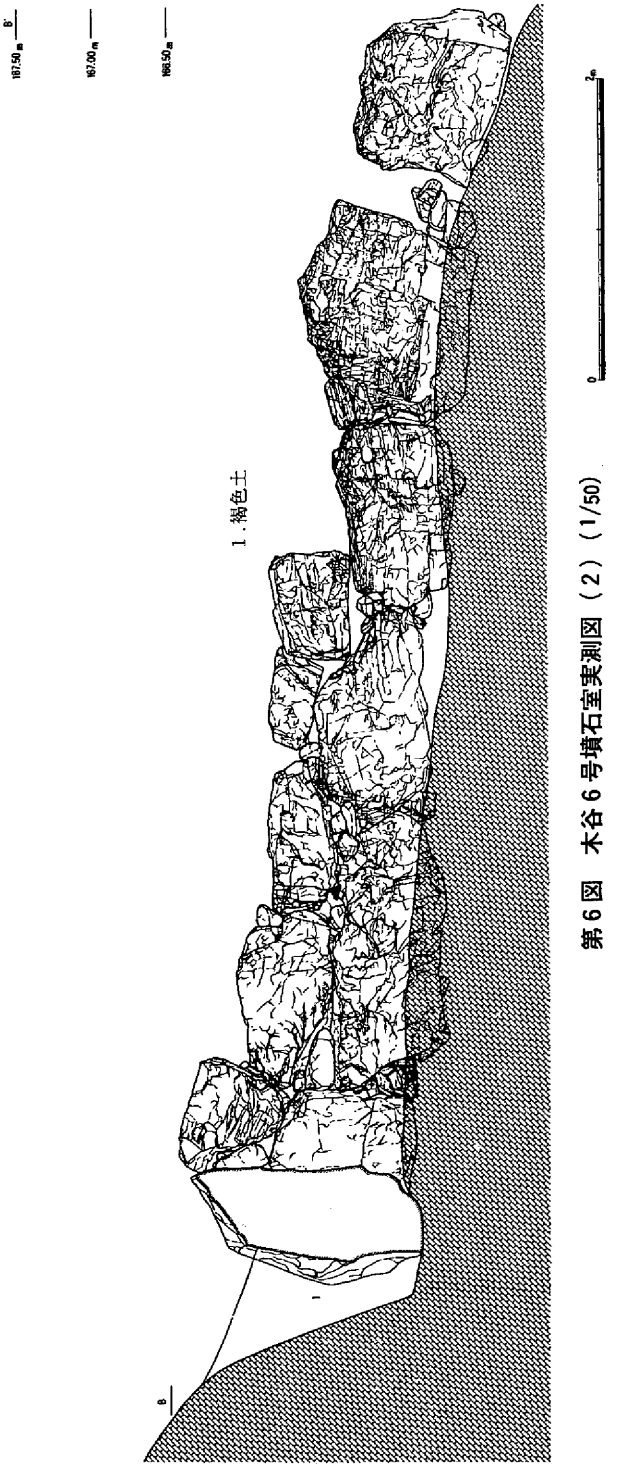


第5図　木谷6号墳石室実測図（1）（1/50）

奥壁の右側壁に寄った隅の部分には、追葬の時にかって副葬されていた遺物を片付けたと思われる多くの須恵器や土師器が、折り重なるようにして出土し、土器の間には鉄器や耳環も認められた。奥壁の左側壁に近い部分は、前述した右側壁に寄った所に比して遺物の出土量は少ないが、鉄鏃や刀子などの鉄製品が目立つ。

破壊されて石が存在しない右側壁の袖の部分は、床面が抉り取られて大きな穴になっていたが、その中から完形品を含む多量の須恵器が出土した。注目されたのは、口縁部を合せた状態で発見された杯の内部から、貝殻や魚の骨が検出されたことである。

奥壁から離れた玄室のやや中央に寄った地点には、側壁に接するようにして並べられている、棺台に使ったと考える偏平で滑らかな河原石が存在した。左側壁に近接した最も西側に位置する石は、下位から須恵器の杯蓋や鉄鏃などが出土した。これらの石の周辺からは耳環が集中して出土したが、土器や鉄器などの遺物は比較的少なかった。この棺台に使ったと考える石の配置状況から、木谷６号墳の横穴式石室に何体の遺体が追葬を繰返しながら埋葬されていたの



第６図　木谷６号墳石室実測図（２）（1/50）

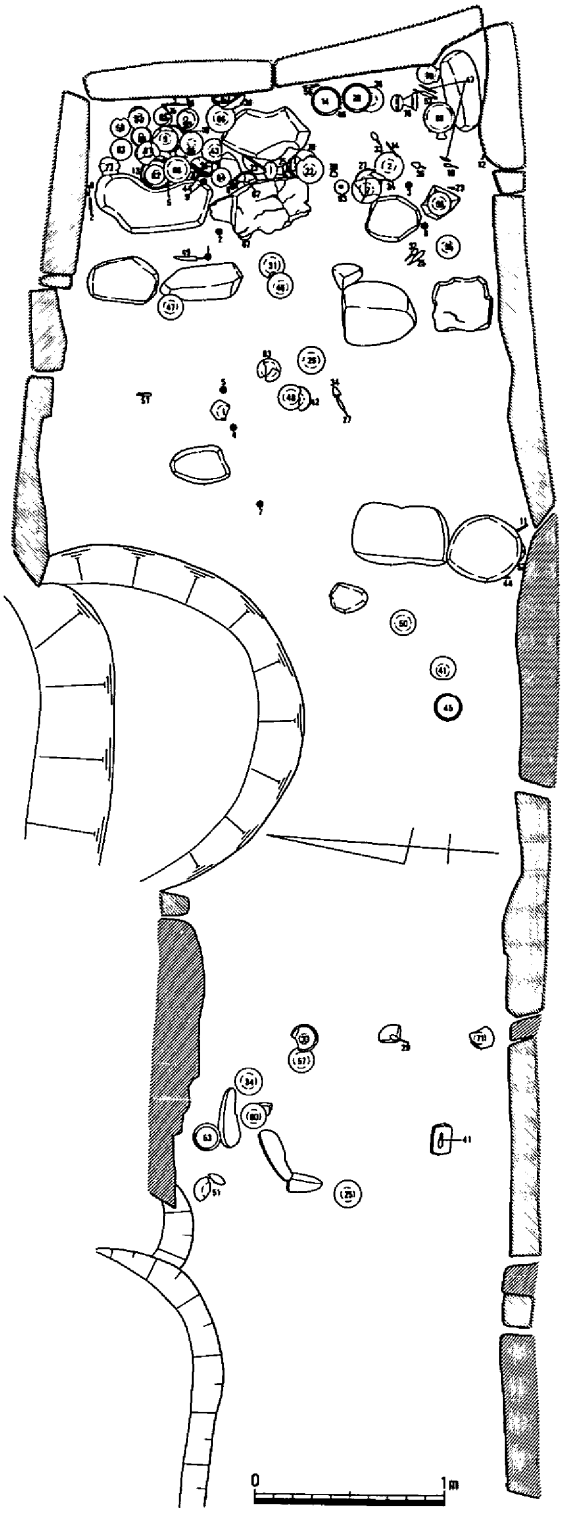
か把握することは極めて困難だが、出土した耳環（第15図）の位置や耳環そのものの形態を参考にすれば、おそらく６体以上になるであろう。

なお羨道部分から出土した須恵器の杯身と杯蓋は、奥壁付近から出土したものより法量が相対的に小さかった。

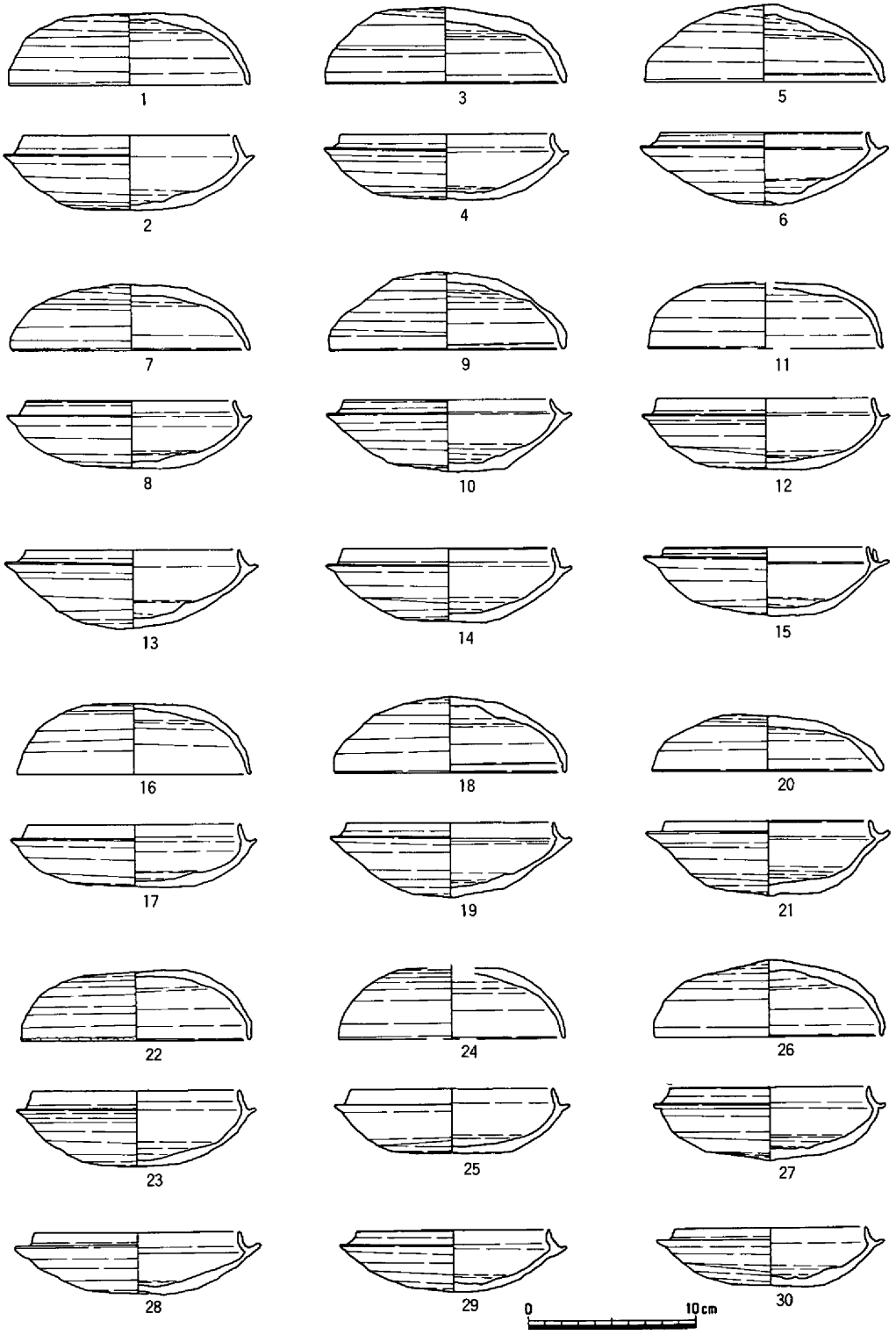
出土遺物

須恵器（第８～11図、図版55・56）

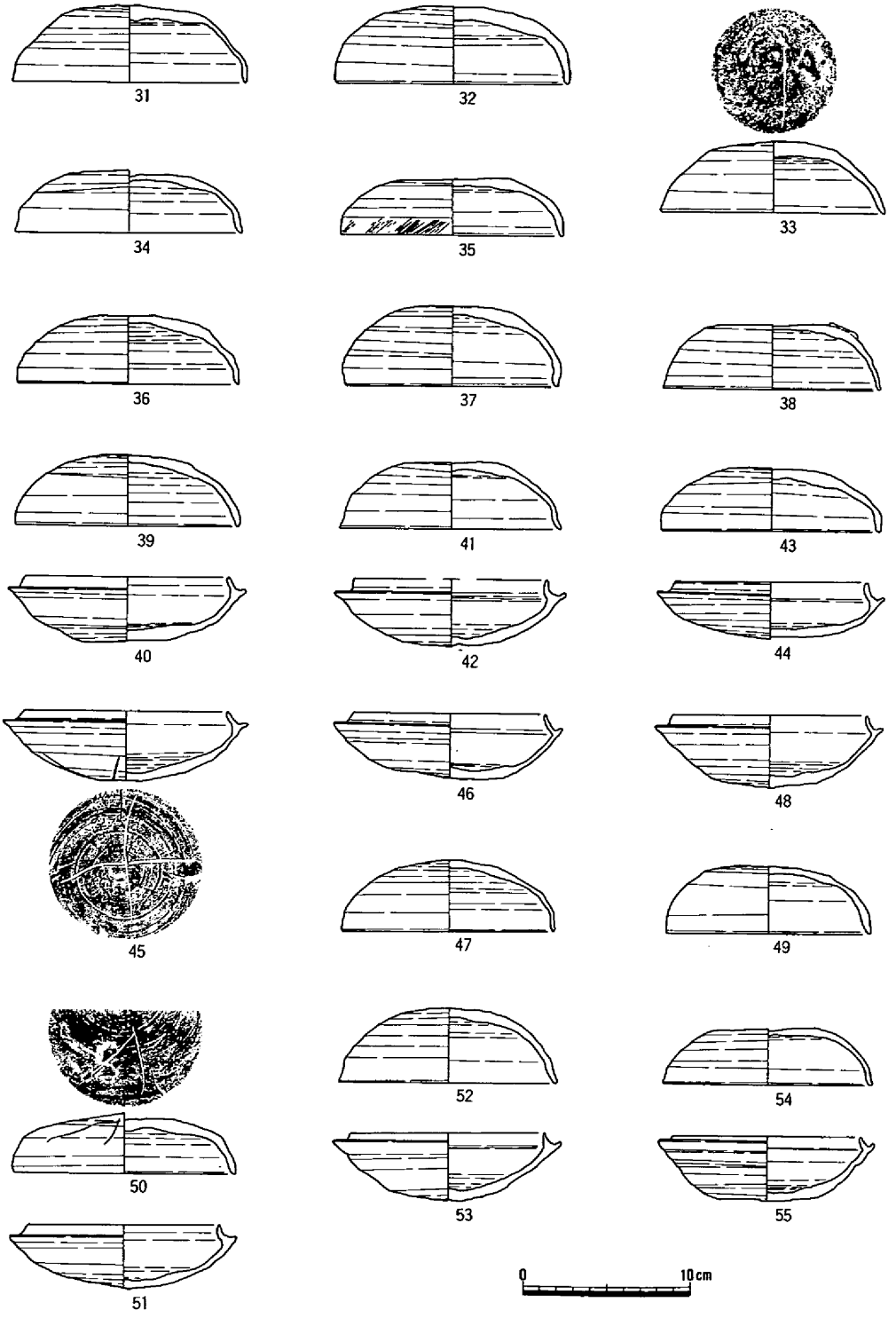
杯身・杯蓋　杯身と杯蓋の出土地点および法量や色調を精査した結果、18組36点（**1～12・16～27・39～44・50～55**）のセット関係が認められた。杯身は口径10.4～12.9cm・器高3.0～4.8cmで、口縁端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は時計と同じ右が多く、外面の底部にヘラ記号を有するもの（**45・60**）もある。また個体数は少ないが、外面の底部がヘラ切り未調整のものも認められる。杯蓋は口径10.4～14.4cm・器高3.4～4.7cmで、外面の天井部と体部の境に稜を有しているものはほとんどなく、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。ロクロの回転方向は杯身と同様に右が多く、外面の天井部と内面の天井部にヘラ記号を持つもの（**45・50・59**）や、



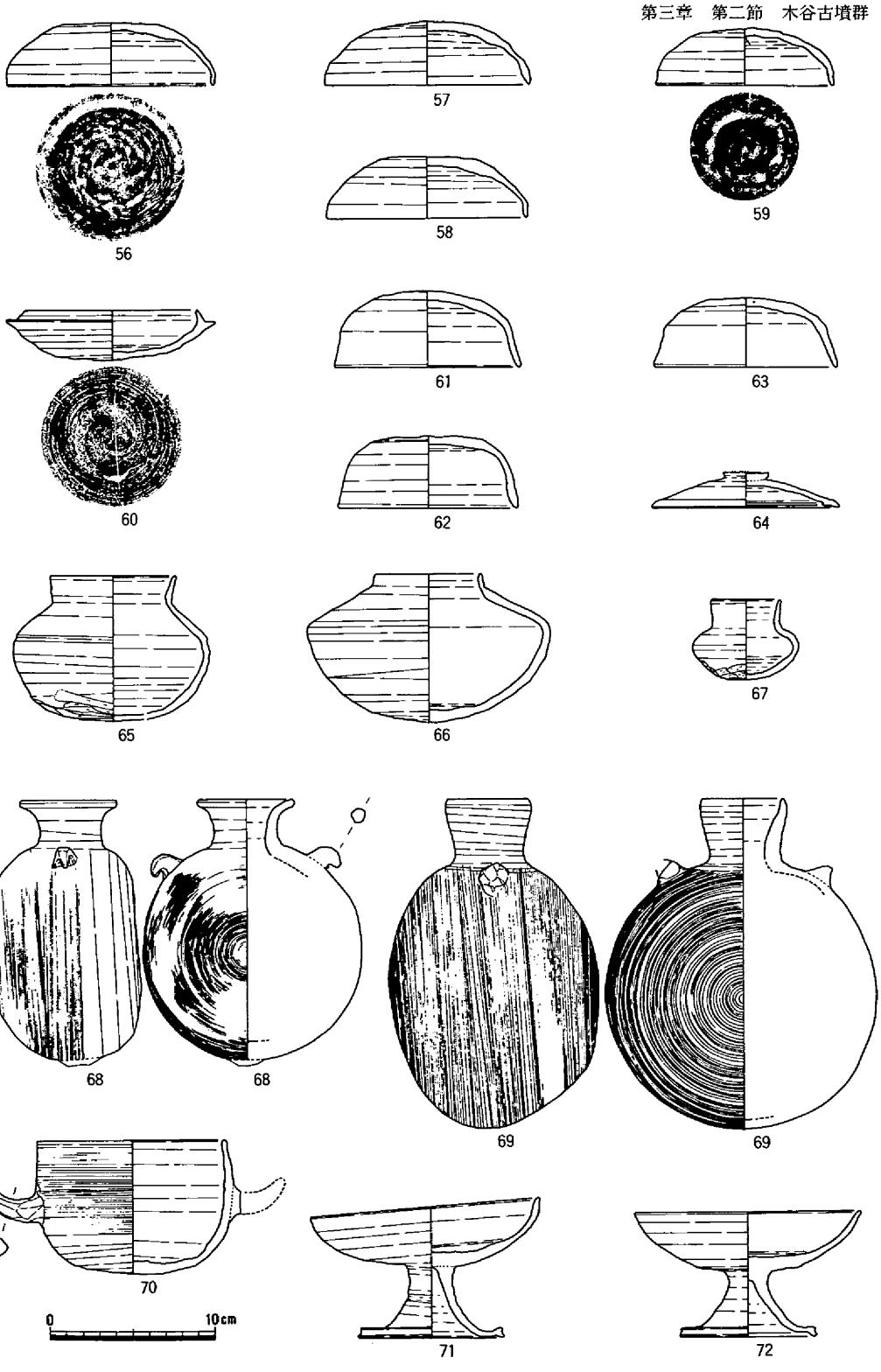
第７図　木谷６号墳遺物出土状況（1/40）



第８図　木谷６号墳出土遺物（１）（1/4）



第9図　木谷6号墳出土遺物（2）（1/4）

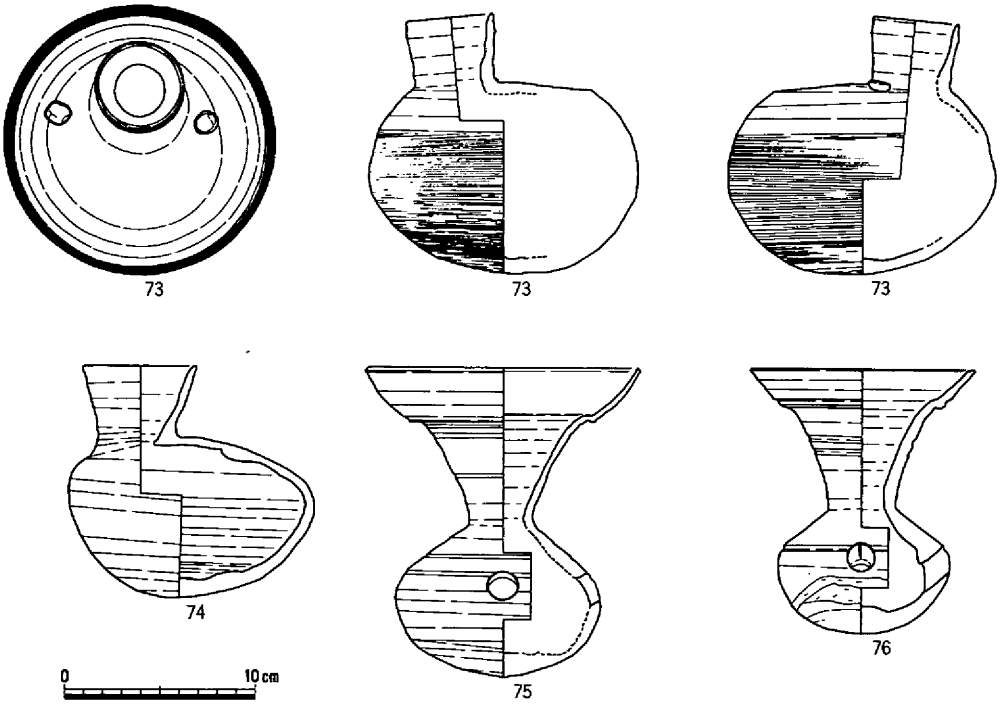


第10図　木谷６号墳出土遺物（３）（1/4）

内面の天井部に同心円のタタキ痕跡が残存しているもの（56）もある。また法量の小さい杯蓋では、外面の天井部がヘラ切り未調整のものも認められる。特異な形態をした杯蓋（64）として、外面の天井部につまみを有し、内面の口縁端部にかえりが認められるものが１点だけ出土した。内外面とも全体にヨコナデを行い、外面には全体に自然釉が付着している。

壺蓋　短頸壺の蓋が３点（61～63）出土している。天井部と体部の境は緩やかに屈曲し、口縁端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。外面の天井部はいずれもヘラ切り未調整で、内面は全体に仕上げナデを施している。

壺　口縁部が斜め上方へ短く立ち上がる小型の壺（65）は、底部をわずかに欠損している。胴部の最大径はほぼ中位に認められ、外面には１条の凹線が存在する。内外面ともヨコナデを施しているが、外面の底部は手持ちのヘラケズリを行っている。完形品の短頸壺（66）は、口径6.3cm・器高9.0cm・胴部最大径14.7cmを測り、外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行っている。外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、器表面に自然釉が付着している。内面は全体にヨコナデを行っているが、底部には仕上げナデ痕跡が認められる。67の小型の直口壺は、完形のミニチュア品である。口径4.1cm・器高4.9cm・胴部最大径6.4cmを測り、外面の底部は手持ちのヘラケズリを行っている。



第11図　木谷６号墳出土遺物（４）（1/4）

提瓶　どちらも耳の形状は鉤形である。**68**は口径5.6cm・器高15.7cm・最大径13.2cm・最大厚9.3cmを測り、外面の口縁部と内面全体はヨコナデを施している。外面胴部の正面にはカキメが認められ、背面はヨコナデを施している。この提瓶は焼成が極めて良好で、緑黄色の濃い自然釉や須恵器の小破片が付着している。**69**は口径4.8cm・器高19.9cm・最大径16.3cm・最大厚12.6cmを測り、外面の胴部には全体にカキメが認められる。

把手付椀　口径11.0～11.6cm・器高8.1cm・把手長3.0cm・把手径1.6cmを測り、片方の把手が欠損している。外面の底部はヘラケズリを行い、ヘラ記号が存在する。外面の口縁部から体部にかけてはカキメが残存し、内面は全体にヨコナデを施している。

高杯　**71**と**72**は両方とも短脚無蓋高杯である。前者は口径13.8～14.7cm・器高7.7～8.9cm・脚底径8.7～9.0cm、後者は口径13.3～14.0cm・器高7.0～7.7cm・脚底径8.2cmを測る。内外面とも全体にヨコナデを施し、どちらも器形が著しく歪んでいる。

平瓶　肩部に2個の円板を有する完形品（**73**）は，口径4.5cm・器高13.7cm・胴径14.3cmを測る。外面の底部はヘラケズリを行った後にカキメを施し、口縁部から胴部上位にかけてはヨコナデを行っている。胴部の最大径がやや上位に認められる小型の平瓶（**74**）は、口径5.8cm・器高12.3cm・胴径12.8cmを測る。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行っているが、その他の部分は全体にヨコナデを施している。

瓶　大型のもの（**75**）と小型のもの（**76**）がある。前者は口径14.2cm・器高16.4cm・胴径10.8cm・頸径3.4cm、後者は口径11.9cm・器高14.2cm・胴径9.2cm・頸径3.8cmを測る。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面の底部はヘラケズリと手持ちのヘラケズリがある。

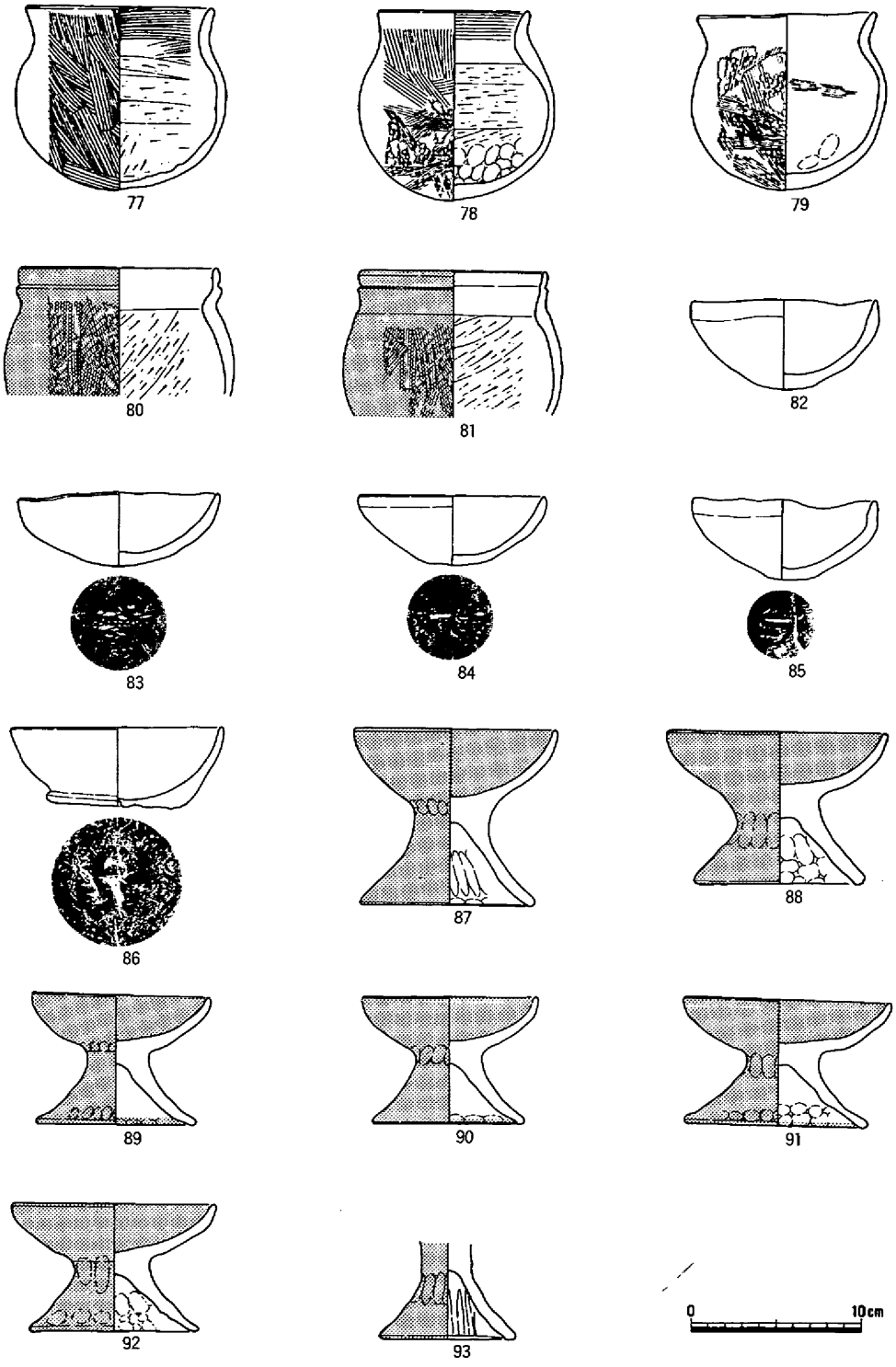
土師器（第12図、図版57）

甕　口縁部の形態が、短く外湾するもの（**77～79**）と段を有するもの（**80・81**）がある。前者は、外面にハケメが存在し、内面の胴部はヘラケズリを行っているものとハケメが存在するものがある。また内面の口縁部に横方向のハケメが存在するものや、底部に指頭圧痕が認められるものがある。後者は、外面全体に丹塗りを施し、口縁部は内外面ともヨコナデをしている。胴部の外面にはハケメが存在し、内面は斜め方向のヘラケズリを行っている。

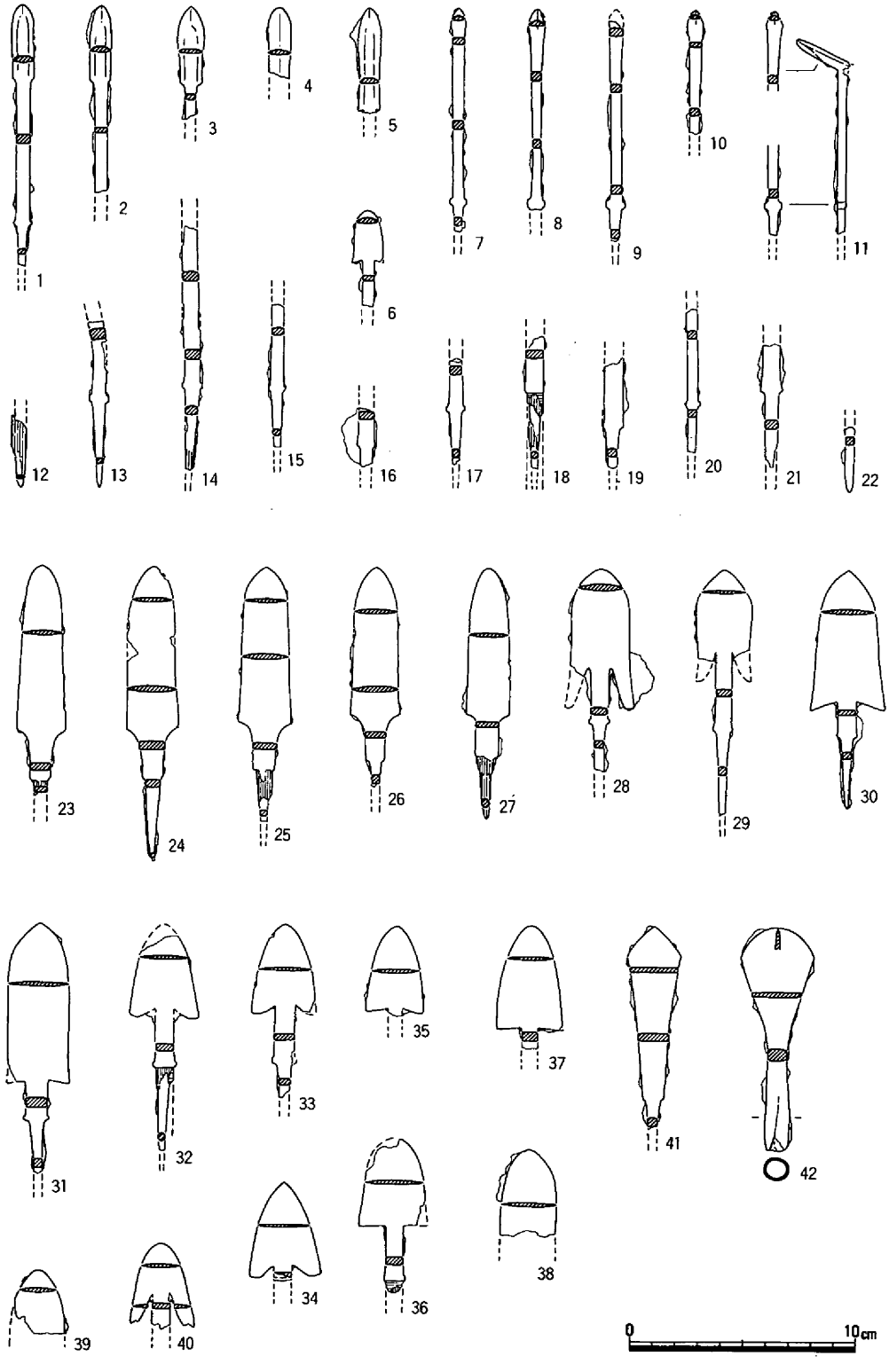
椀　底部の不安定な椀（**82～85**）は、口径10.3～11.6cm・器高3.4～5.5cmを測る。外面の底部には刺突痕跡が集中して存在し、内外面とも全体にヨコナデを施している。

杯　口径12.0～12.2cm・器高4.4～4.8cmを測り、外面の底部には木の葉の押圧痕跡が存在している。外面はハケメの上面にヨコナデを施し、内面はヨコナデと仕上げナデを行っている。

高杯　出土したすべての高杯が、丹塗りを施した小型のものである。杯部の内面は仕上げナデを行っているが、その他の部分は全体にヨコナデを施している。外面の杯部と脚部の接合部や脚の端部には、指頭圧痕が認められるものが多い。



第12図　木谷６号墳出土遺物（５）（1/4）

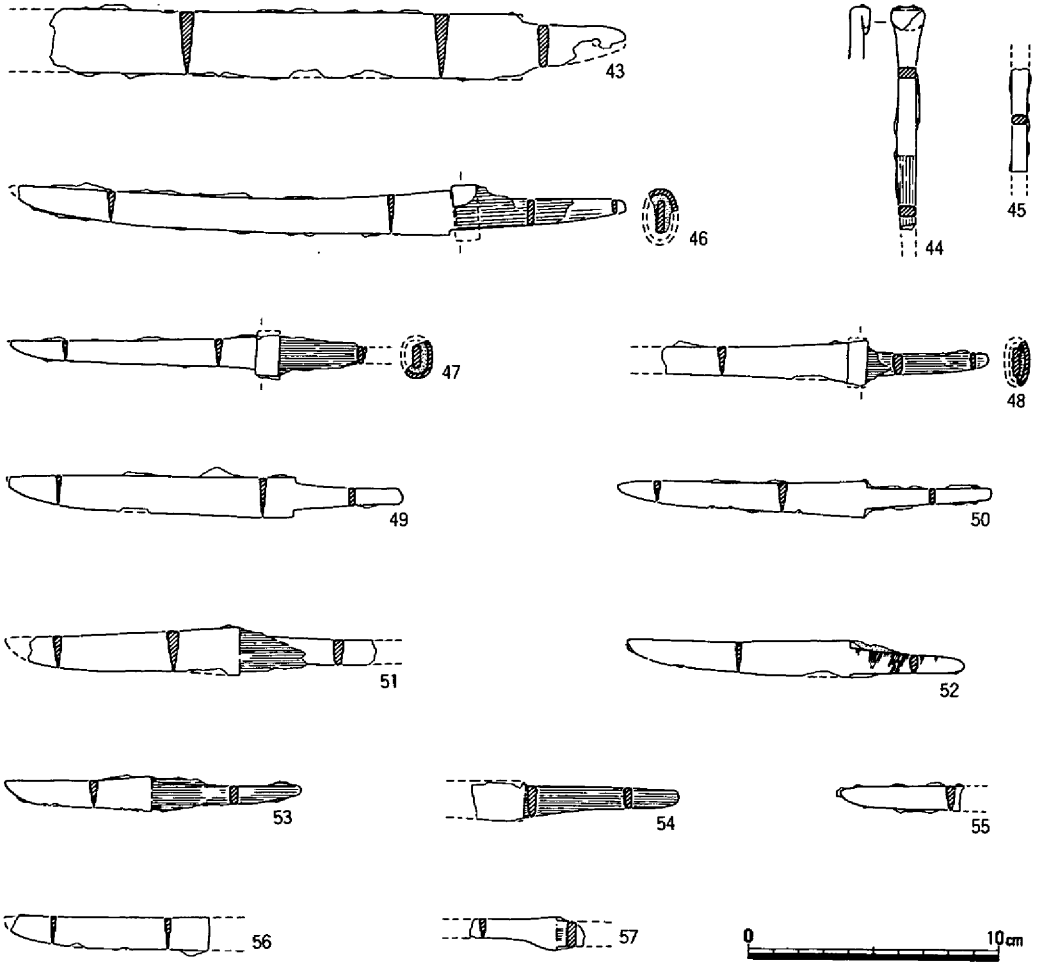


第13図　木谷６号墳出土遺物（６）（1/3）

鉄器（第13・14図、図版64・65－1）

鉄鏃　1～11は長頸式鉄鏃である。長頸柳葉式のもの（1～3）は、鏃身が細長く、片切刃造である。篦被関には棘状突起を有する。4の鏃身の形態は不明だが、片鎬造である。5は長頸腸抉柳葉式のものである。鏃身は細く、片切刃造であるが、逆刺はあまり深くない。6も長頸腸抉柳葉式鉄鏃に属するが、鏃身がやや幅広く、ずんぐりした形態を呈し、逆刺はあまり深くない。長頸鏨箭式のもの（7～11）は、全体に細く作られている。鏃身もあまり幅が広がらずに、先端部のごく狭い範囲にのみ刃が付けられている。鏃身には片面に鎬が認められ、篦被関には棘状突起を有する。この長頸鏨箭式鉄鏃はかなり新しい型式のものであり、須恵器の杯蓋で内面の口縁端部にかえりがあってつまみを有するもの（64）に共伴するのかもしれない。

23～41は有茎の平根式鉄鏃である。柳葉式のもの（23～27）は、篦被関に棘状突起は持たない。28～34・40は腸抉柳葉式に属するが、様々な形態のものがあり、篦被関にはいずれも棘状



第14図　木谷6号墳出土遺物（7）（1/3）

突起を有する。28と29は比較的深い逆刺を持つ。30と31は大型の鏃身で、逆刺は非常に浅い。32～34は鏃身の短い寸づまりの形態で、逆刺は浅い。40の逆刺は深く、その端部は二重になっている。35～37は長三角形式のもので、35は鏃身関が逆刺状の鋭角になっており、前述した32～34の形態に近い。41は圭頭式のもので、先端の山形部分のみに刃を有する。

有袋鉄鏃（42）が１点のみ出土している。鏃身は扇形に開く円頭形を呈し、茎を持たないで袋を有する。なお袋の内面には、木質が付着している。

刀　茎が非常に短く、長さ4.2cmしかない。１か所に目釘穴が認められる。

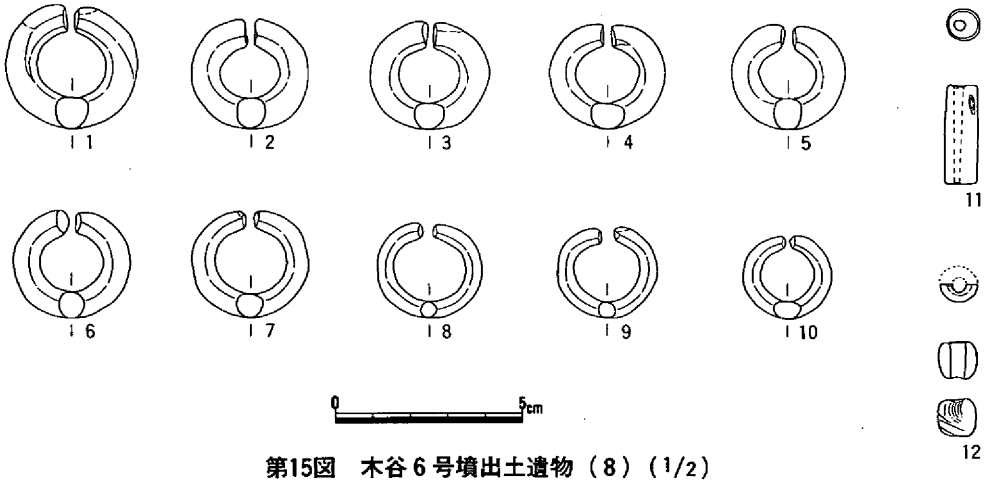
鉄釘　44と45は鉄釘である。44の下半部には、縦方向の木目が付着している。44の頭部は方形であるが、180°に折り曲げられている。

刀子　46～57は刀子である。いずれも関は両側に段を有する。46～48には、断面形が楕円形を呈する鋲が付属している。52は茎に糸巻きを行っており、その上に鹿角が付着している。おそらく鹿角の柄を持つものと考えられる。52以外は茎に木質が付着していることから、木製の柄を持つものであろう。57の刀子は、刀身から関にかけて急激に増幅する形態のものである。

装身具（第15図、図版70－１）

耳環　６号墳の石室内からいずれも鉄地金銅貼の耳環10点（１～10）が出土したが、２と３、４と５、６と７、８と９がそれぞれセットになるであろう。最大規模を有する耳環（１）は、外径3.28～3.53cm・内径1.63～1.85cm・断面径0.80～0.86cmである。最小の耳環（10）は、外径2.20～2.32cm・内径1.33～1.38cm・断面径0.46～0.47cmである。これらの耳環の表面は錆化が極度に進行し、青色の錆が付着している。

玉類　11は碧玉製の管玉で、表面に傷跡が存在する。長さ2.6cm・胴径0.9cmを測り、片面穿孔である。12は半截になったガラス製の棗玉である。高さ1.0cm・胴最大径1.0cmを測り、全体にエメラルドグリーンの色調を呈している。



第15図　木谷６号墳出土遺物（８）（1/2）

(2) 木谷７号墳

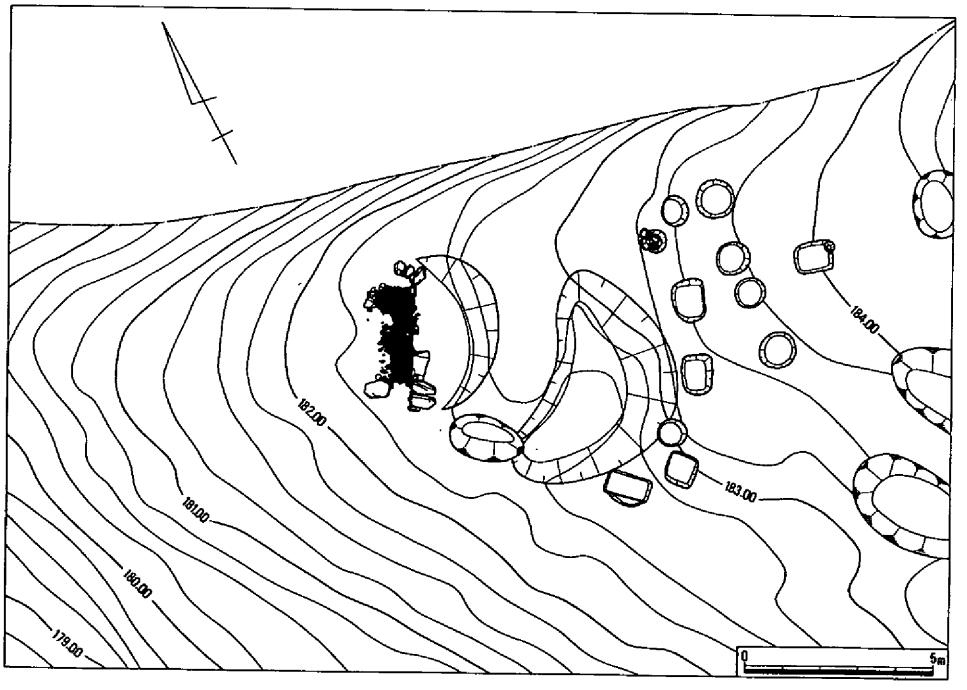
調査前の状況

発掘調査を実施する前に、木谷古墳群の所在する丘陵へ実際に行って７号墳の位置を踏査したが、確認することができなかった。それで久世町教育委員会の埋蔵文化財担当者が、木谷古墳群を熟知された地元の文化財専門委員の人に同行してもらって一緒に精査したが、ほぼこの辺にあったという不確実な情報を得ただけで、古墳そのものを見つけることはできなかった。

このような状況であったから、墳丘の盛土は認められず、ただ平坦な丘陵の尾根が続いているだけであった。また古墳の所在予想地点は現代の墓地になっており、道路建設に伴ってすでに墓地移転が行われていたため、大きな穴が掘り込まれて石材が散乱していた。これらの石が古墳に使われていたものなのか、あるいは墓地のものなのか、判断することはできなかった。

墳丘と周溝（第16図）

木谷７号墳は、主体部である横穴式石室の基底部が辛うじて残存するだけであったから、墳丘はことごとく削平されて認められなかった。発掘調査の過程で７号墳の東側に10基ほどの中近世土壙墓を検出したが、その土壙墓群と横穴式石室の間に存在した半月状の窪地は、７号墳の周溝なのかあるいは単なる後世の攪乱によるものなのか、確かめることができなかった。

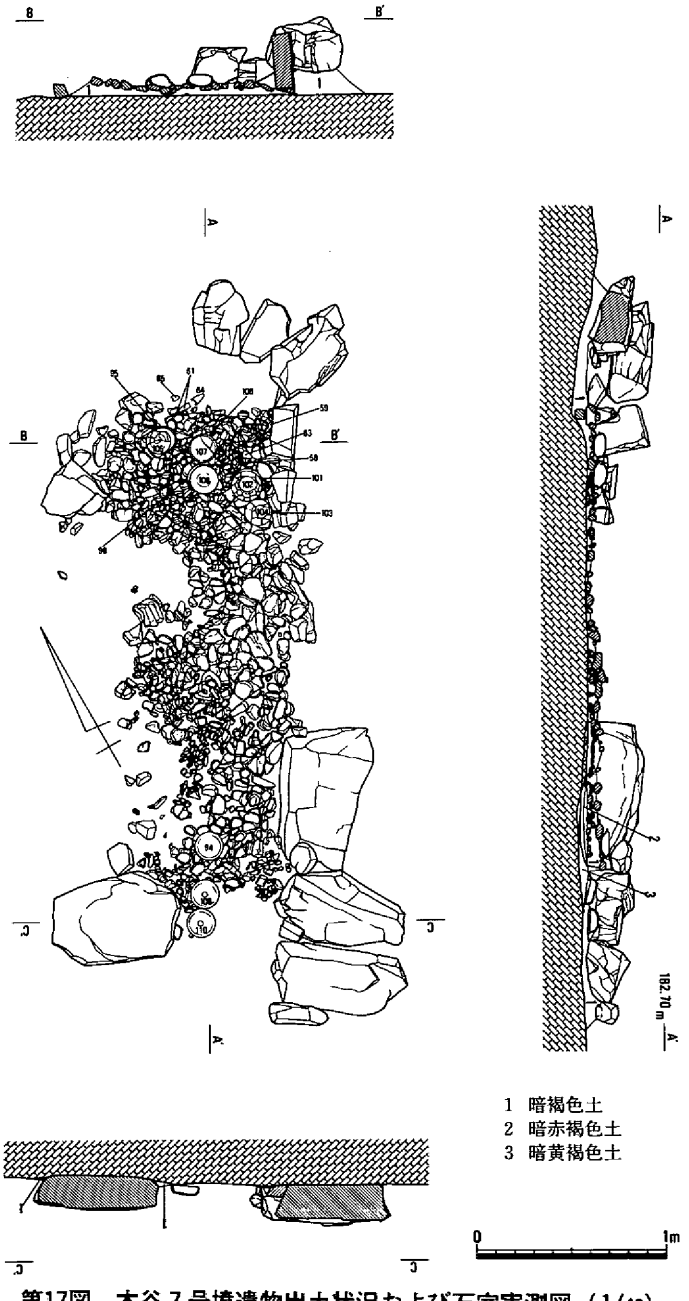


第16図　木谷７号墳周辺地形測量図（1/200）

石室（第17図、図版36－１）

木谷７号墳の主体部は、右片袖を有する横穴式石室であるが、石室の上位部分は著しく破壊され、残存するのは羨道基底部の石と床面に敷き詰められた河原石だけであった。奥壁部分に比較的大きな割石３個が存在したが、基盤層である地山面から浮いた不安定な状態であったため、石室を築造した当時のものではないと判断した。したがって奥壁に使われていた石は、すべてが持ち去られてしまって存在しないのである。奥壁に近い右側壁の位置に割石１個が存在したが、基底部に据えた大きな石の裏込石であった可能性が強い。左側壁は、床面に残存する河原石の状態より、奥壁から石室の入口まで直線的に造られていたと考える。玄室と羨道の境に位置する袖の部分は、石が抜き取られた痕跡を検出した。羨道部分の左側壁端部には、石の間に生じた空間を埋めたと思われる細長くて小さい石が存在していたから、入口に向かってさらに壁が続くであろう。

以上のような推察から７号墳の横穴式石室は、全長3.30ｍ以上・玄室長約1.80ｍ・羨道長1.50ｍ以上・玄室幅約1.00ｍ・羨道幅0.50ｍになると考えられる。



第17図　木谷７号墳遺物出土状況および石室実測図（1/40）

遺物出土状況（第17図、図版36）

木谷７号墳の主体部である横穴式石室は、羨道基底部の石と床面に敷き詰められた河原石だけが、わずかに残存する状態であった。出土した遺物で石室内のものは、副葬された当時の位置からほとんど移動せずに存在したと考える。

須恵器の杯身と杯蓋は、奥壁に近い位置から口縁部を合せた状態のセットになって出土したが、杯蓋が上で杯身が下のもの２セット、その逆の杯身が上で杯蓋が下のもの３セットであった。またセットになった杯身と杯蓋を観察すると、明らかに焼成や色調の異なるものが口縁部を合せて置かれているのもあり、土器を作った時の本来の身と蓋のセットがそのままで存在したのは、５セット副葬されていたうちの２セットだけであった。残る３セットの身と蓋を取り替えて口縁部を合せてみると、法量が合致する焼成や色調の同じ組み合せが２セットできたのである。このように７号墳の主体部である横穴式石室では、古墳に副葬される以前にセットとして生産された杯身と杯蓋が、実際に古墳の石室に副葬する時には、本来のセット関係を無視した状況が知られるのである。さらに杯身と杯蓋をセットで副葬するのに、どちらを上にしてどちらを下にするのかということは、あまりこだわっていないようである。羨道部分から杯身１点が有蓋高杯の蓋２点と並んで出土したが、杯蓋は存在しなかった。なお遺構検出の作業中に、石室西側の表土中から４点の杯身と杯蓋が出土したが、周辺に古墳が存在しないので、この７号墳の横穴式石室に副葬されていた遺物と判断した。有蓋高杯の蓋が、羨道部分と石室入口の斜面から出土したが、精査したにもかかわらず高杯そのものは発見できなかった。また比較的口縁部の短い壺は、石室から約５ｍ離れた西側斜面の表土から出土した。

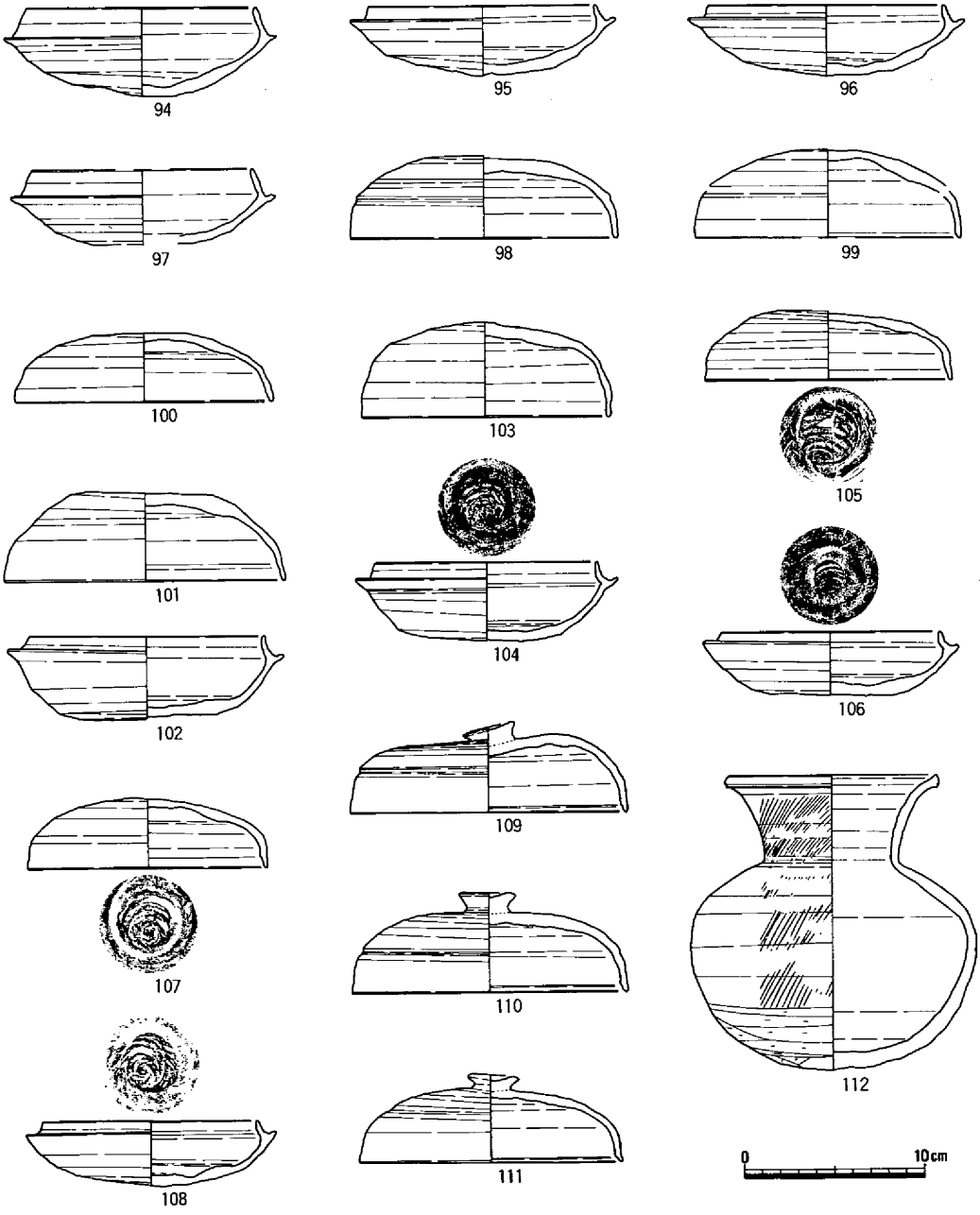
鉄鏃を主体とする鉄器は、奥壁に近い位置に存在した。これらの鉄器の出土地点は、左側壁に接する隅の部分と、正面中央の奥壁に据えられていた石を抜き取った痕跡近くとに、数点が集中していた。

出土遺物

須恵器（第18図、図版57）

杯身・杯蓋　杯身は口径11.8～13.1cm・器高3.6～5.0cmを測り、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が時計と同じ右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。器形の大きいもの（**94～97・102**）は内面の底部に仕上げナデを加え、小さいもの（**104・106・108**）には同心円のタタキ痕跡が残存している。杯蓋は口径13.1～15.5cm・器高3.9～5.6cmを測り、外面の口縁部と体部の境に稜を有するもの（**98・99**）も認められる。また内面の口縁端部に鈍い段を有するもの（**99・107**）や、内面天井部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（**105・107**）もある。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。

高杯蓋　有蓋高杯の蓋である。天井部の中心には貼り付けのつまみを有するが、器形が著しく歪んでいるもの（**109**）もある。これらの蓋の計測値は口径14.0～15.2cm・器高5.0～5.6cmで、外面の天井部と体部の境に稜を有するもの（**109・110**）となだらかに丸く仕上げているもの（**111**）がある。また内面の口縁端部には段が認められ、つまみは全体にヨコナデを施してい



第18図　木谷７号墳出土遺物（１）（1/4）

る。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施しているが、内面の天井部には仕上げナデも認められる。

壺　比較的口縁部の短い壺は、口径11.3cm・器高16.5cm・胴部最大径15.9cmの完形品である。口縁端部は緩やかに外反し、端部は肥厚して1条の凹線を有する。外面の底部は手持ちのヘラケズリを行い、内面は全体にヨコナデを施している。外面の口縁部は斜め方向の粗いナデを行った後にヨコナデを施し、外面の胴部は斜め方向のタタキの上面にヨコナデを加えている。

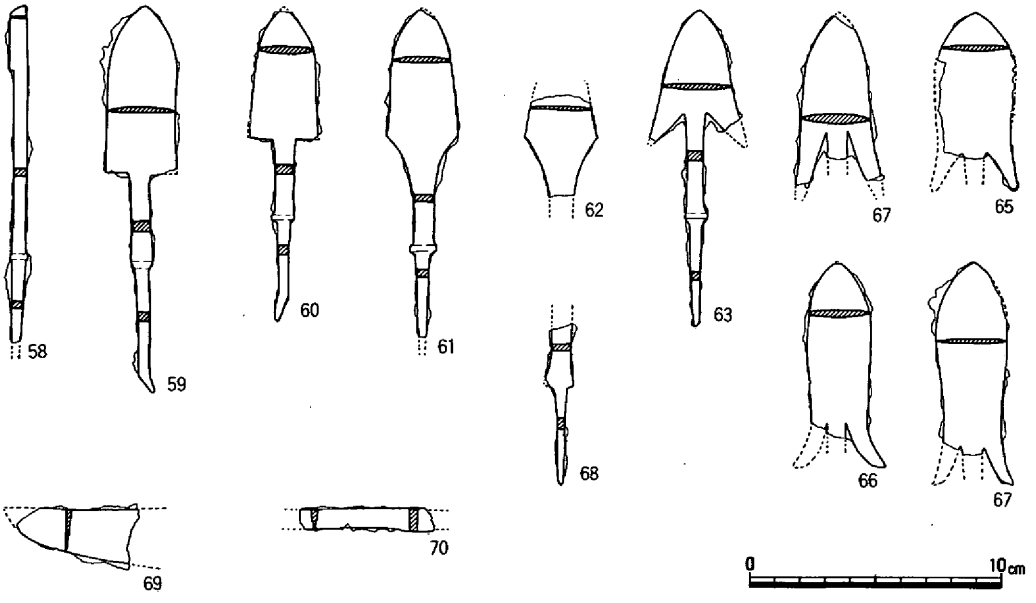
鉄器（第19図、図版66－1）

鉄鏃　58は長頸片刃箭式鉄鏃である。鏃身関にはほぼ直角の段を有する。

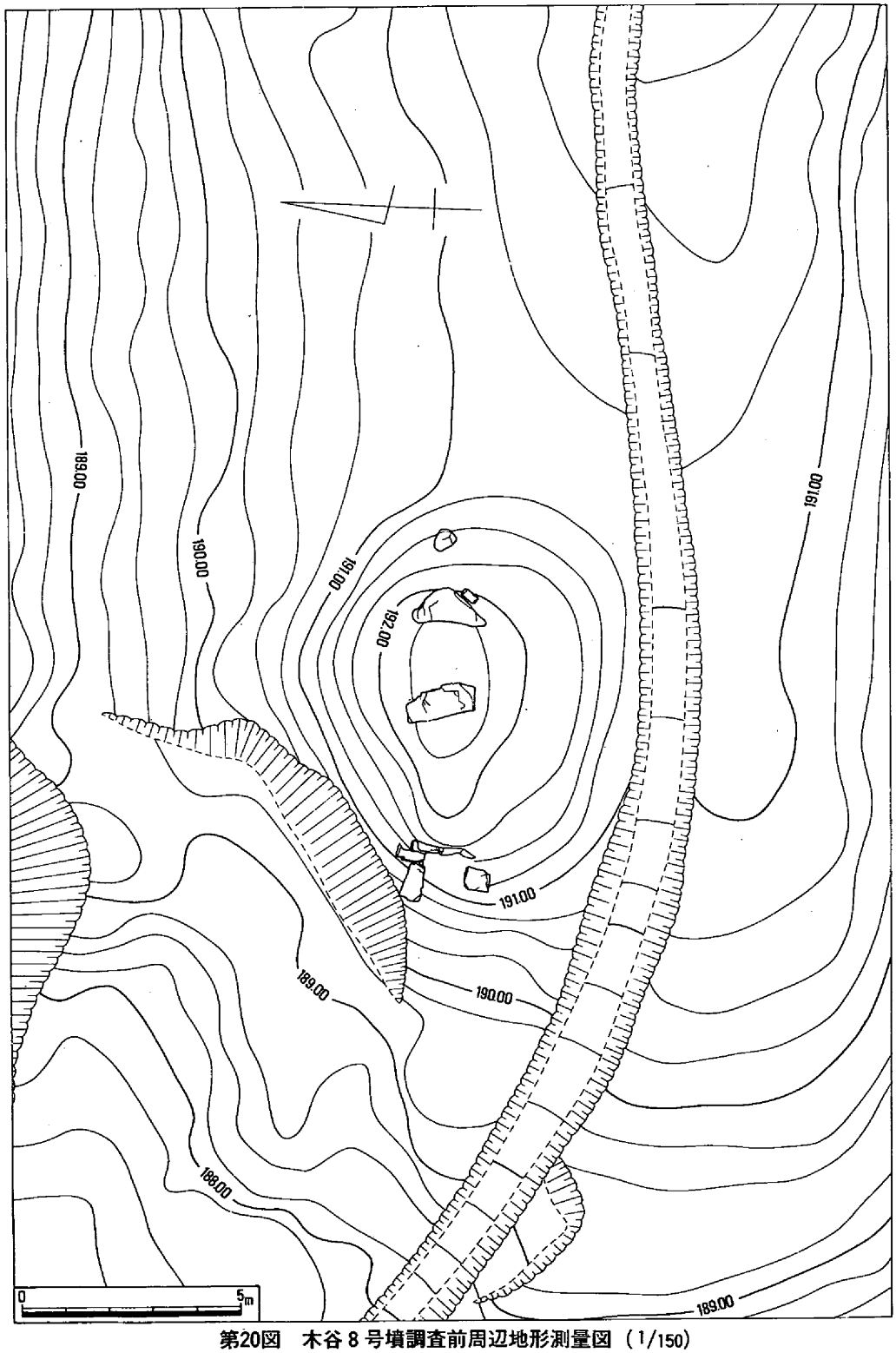
59～67は有茎の平根式鉄鏃である。そのうち59と60は長三角形式のもので、ほぼ直角の鏃身関を持っている。61と62は柳葉式のもので、鏃身関は内湾して緩やかに頸部につながる。63～67は腸抉柳葉式のものに属し、いずれも比較的深い逆刺を有する。ただし63は鏃身が三角形状になり、64～67とは若干異なっている。なおこの有茎の平根式鉄鏃には、篦被関に棘状突起を持つものが多い。

68はおそらく平根式鉄鏃の頸部から茎の破片と思われる。篦被関は台形状を呈している。

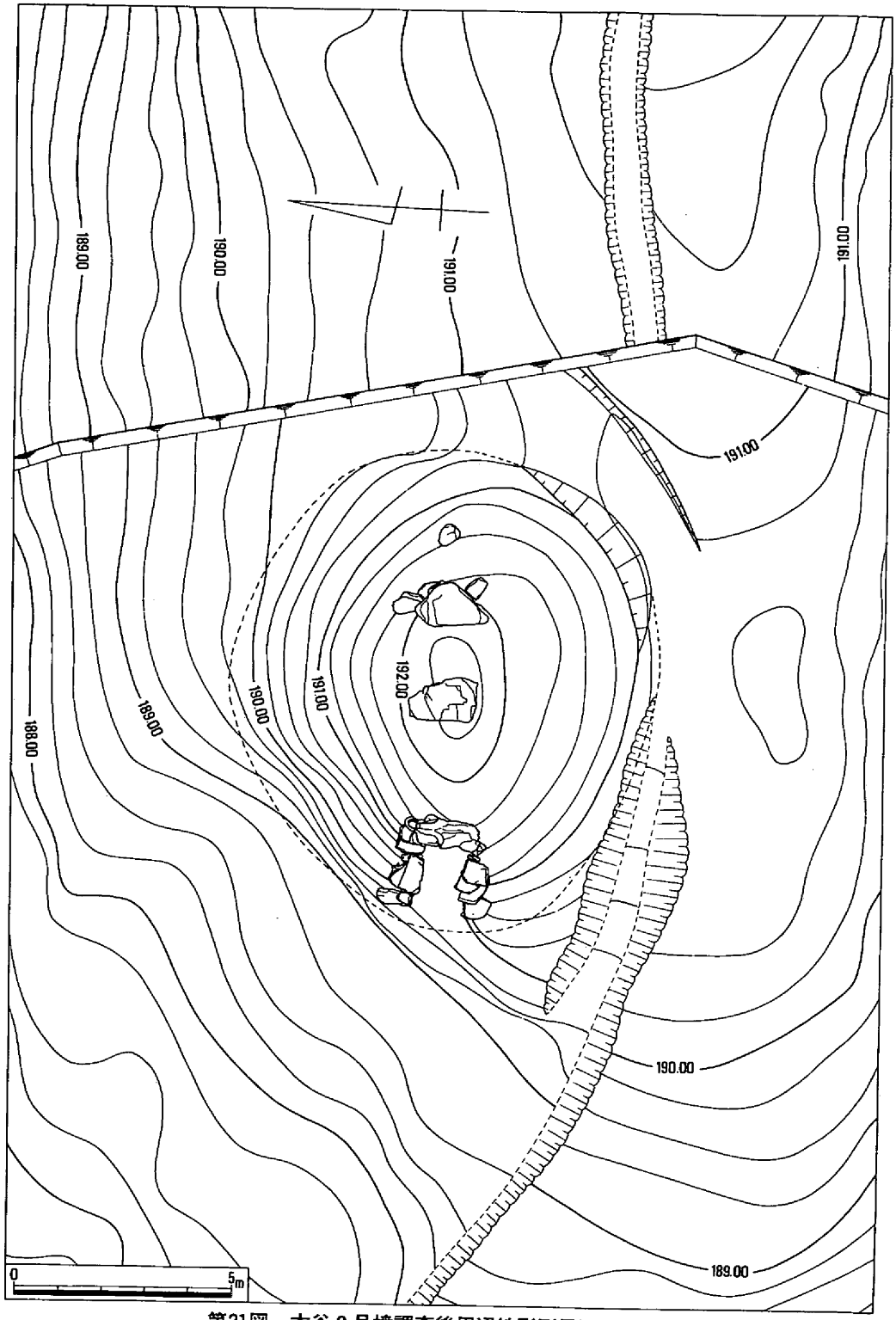
刀子　69は刀子の切先部分と考えられるが、平根式鉄鏃の鏃身かもしれない。70は刀身の非常に細いもので、関は明確ではない。図示した右側の断面が長方形になる部分が、茎に相当すると思われる。この刀子片は、刀身よりも茎の方が幅広く作られているようである。



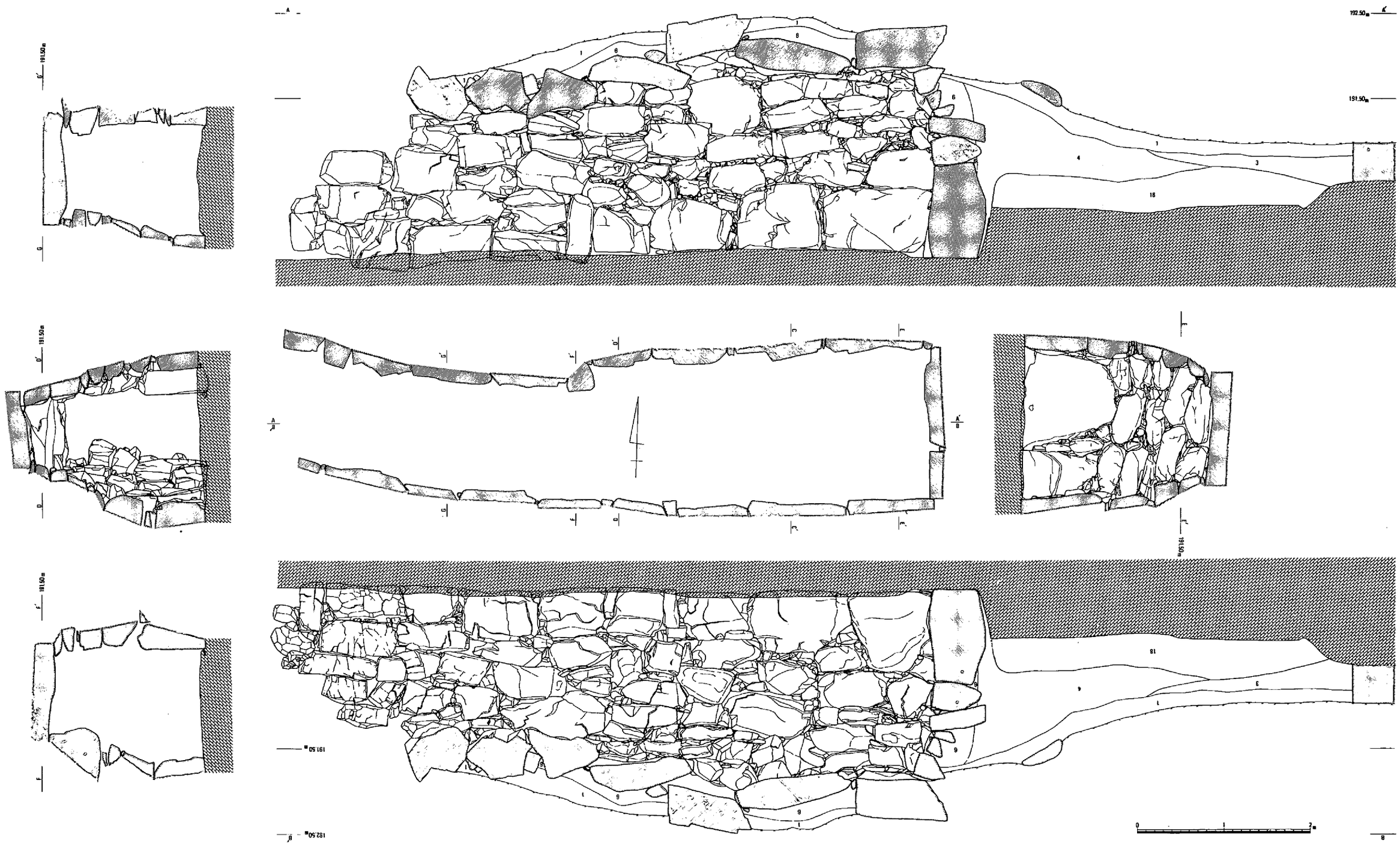
第19図　木谷7号墳出土遺物（2）（1/3）



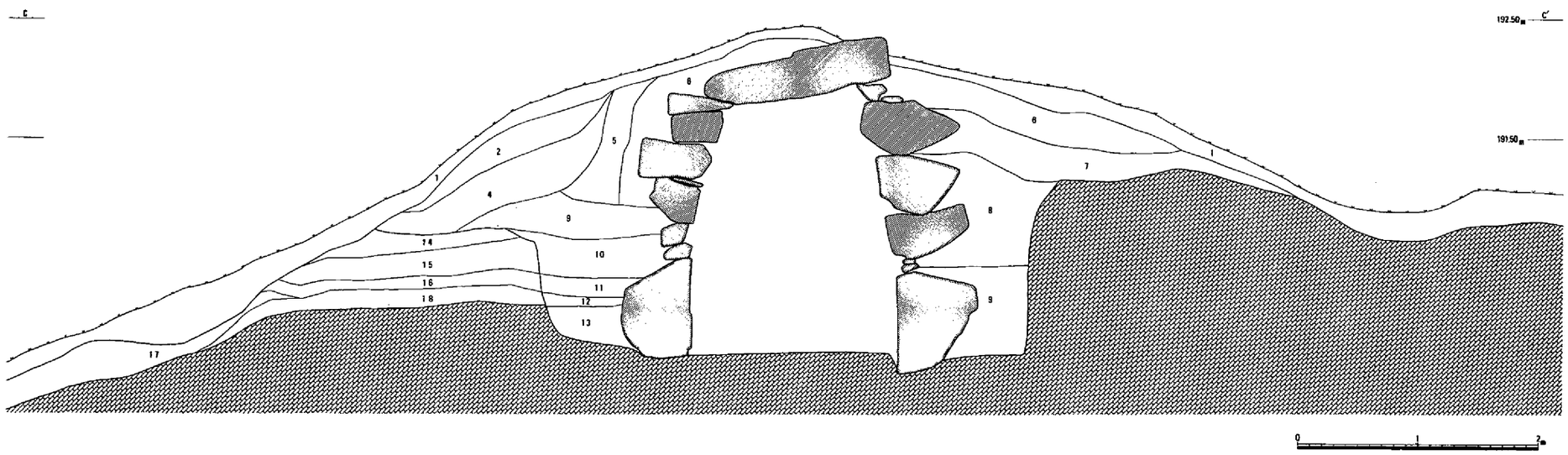
第20図　木谷８号墳調査前周辺地形測量図（1/150）



第21図　木谷８号墳調査後周辺地形測量図（1/150）



第22図　木谷８号墳石室実測図（1/50）



1 暗黒褐色土　　7 黄褐色土　　13 暗黄赤褐色土
2 淡黄褐色土　　8 暗褐色土　　14 淡黒褐色土
3 淡黒茶褐色土　　9 淡褐色土　　15 灰黒褐色土
4 暗黄褐色土　　10 淡黄赤褐色土　　16 暗茶褐色土
5 茶褐色土　　11 黄赤褐色土　　17 赤褐色土
6 褐色土　　12 黒茶褐色土　　18 黒褐色土

第23図　木谷8号墳墳丘断面実測図（1/50）

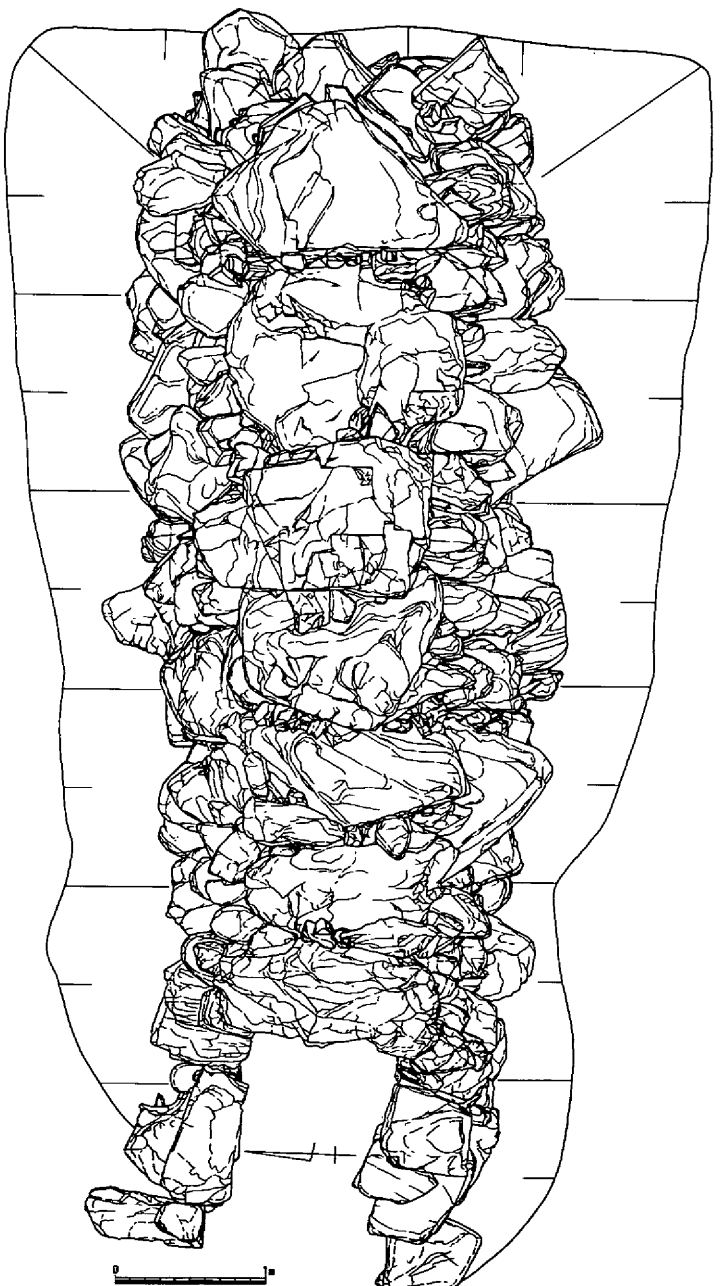
(3) 木谷８号墳

調査前の状況（第20図、図版37－１）

８号墳は、木谷古墳群の中で最も残存状態が良好な古墳であった。

北西部分の墳端が削平されているものの、墳丘の盛土は存在し、内部主体の横穴式石室は築造当時の状態のままだと思われた。この古墳は西方向の平野に向かって開口しており、人間が腹這いになってやっと入ることができた。石室内は堆積土によって入口から奥壁へ傾斜しており、盗掘や攪乱によって床面に遺物は存在しないと思われた。

なおこの木谷古墳群の発掘調査は、当初６号墳から８号墳の３基が調査対象になっていた。ところが６号墳と７号墳は、『久世町埋蔵文化財分布地図』には記載されているが、その所在が把握できなかったため、残存状態が良好な８号墳の調査を先行し、不明な２基の古墳は、トレンチによる確認調査を実施することになったのである。



第24図　木谷８号墳石室上位平面図（1/50）

墳丘と周溝（第21･24図、図版37－２）

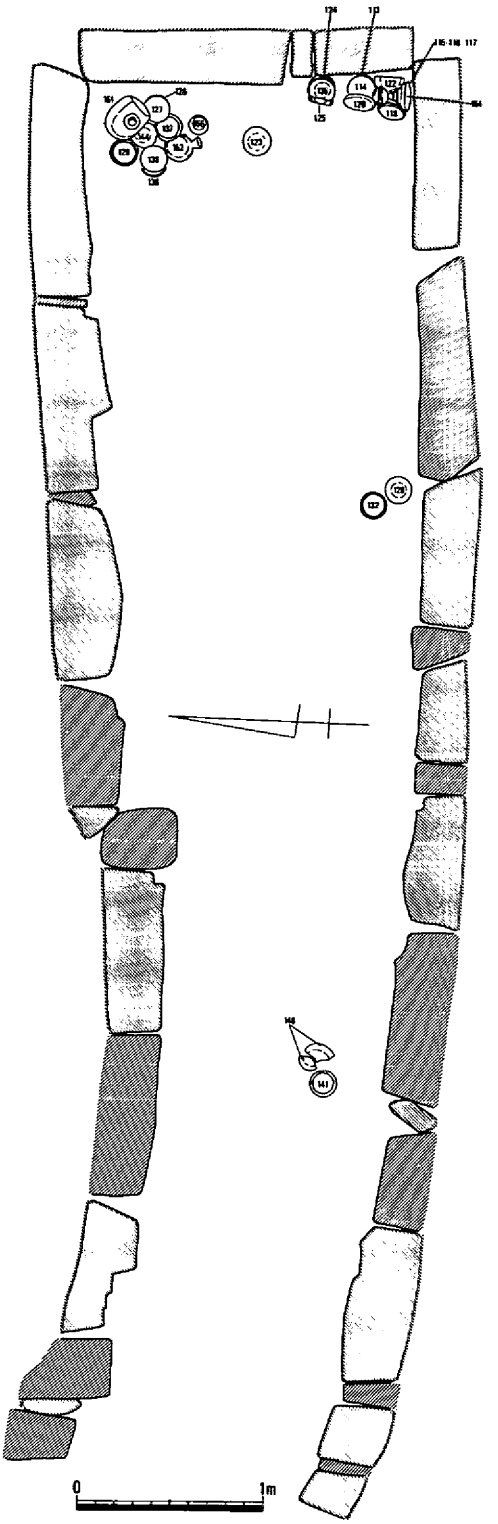
木谷８号墳の墳丘は、天井石の一部が露出するほどに削平されていたが、内部の横穴式石室がほぼ完全な姿で保持されているように、良好な状態で残存していた。墳丘の北西端部は削平され、南端部は丘陵を縦貫する細い山道によって切られていた。この８号墳の墳丘は、東西約11ｍ・南北約10ｍの規模を有し、石室の主軸方向にやや長い円墳を呈していた。墳丘の高さについては、地形の高い南側の墳端から測ると約1.80ｍ、石室入口の床面からでは約2.60ｍになっていた。

木谷８号墳の周溝は、地形の高い南から東にかけての墳端で検出した。この周溝は、地山面を浅く掘り窪めたもので、検出面での幅は1.10～2.00ｍを測り、断面形は浅い「Ｕ」字形を呈していた。周溝内を精査したが、遺物は何も出土しなかった。

石室（第22･23図、図版38－２～40－１）

この木谷８号墳の石室は、右片袖を有する横穴式石室である。

天井石は玄室に４枚、羨道に３枚存在していたが、石室の入口部分に少なくともあと２枚は乗せられていたと考える。その天井石が架構されていた状態を観察した結果、天井石を並べた順序を把握することができた。すなわちまず最初に、玄室と羨道の境に位置する袖の部分に石を据え、羨道部分はその石と同じ高さにそこから石室の入口へ向かって順々に天井石を乗せていた。玄室部分は奥壁の上にも安定した石を置き、奥壁側はその奥壁上の石に並べて次の偏平な石を乗せていた。一方羨道に面した袖に近い



第25図　木谷８号墳遺物出土状況（1/40）

玄室部分は、玄室が羨道よりも高くなるように意図して、最初に乗せた石の上へ重なるように別の天井石を据えていた。ここまで作業を進めると、玄室の中央部に天井石１枚分の空間が生じるから、それを塞ぐように大きな石を乗せていた。このようにして天井石の架構は終了したと思われるが、玄室の中央部へ最後に乗せた天井石が、最も高くなっていた。

奥壁の基底部には、石室内の表面が高さ約110㎝・底部径約120㎝の角が取れた将棋の駒に似ている安定した石と、上辺約40㎝・下辺約60㎝・高さ約90㎝の細長い台形を呈する石とを並べて据え、その間に生じた「Ｖ」字形の空間に小規模な石を詰めていた。その上位は、比較的小さな石を天井石の高さまで４～５段に小口積にしていた。

袖の部分には、高さ約80㎝を測る柱状の石１個だけを立てて据え、床面で側壁より約30㎝石室内へ張り出す玄門を形成していた。この壁面が屈曲する袖から石室入口にかけての羨道の右側壁は、左側壁や玄室部分の右側壁の石積み状況とは様相が異なっていた。すなわち袖の部分に立てた石の高さまでまず比較的大きな石を２段に積み、その上位にも基底部の石とほぼ同じ大きさの石を天井石の下まで積み上げているから、玄室の右側壁に見られた石積みによる目地の線と、この羨道の右側壁に見られる各段の目地の線が、どうしても直線的につながらないのである。このようなことから、羨道の右側壁と玄室の右側壁は、袖を境にして別個に築造された可能性が強いと考えられた。

羨道の左側壁についても同様である。玄室と羨道の境目に、石積みによって生じた縦方向を示す直線的な目地のラインが認められ、羨道の左側壁は比較的大きな石を４段に積み、各段の目地がほぼ平行する直線状を呈しており、玄室の左側壁の石組み状況とは様相が著しく異なっていた。このように途中で屈曲しないで連続する１面だけの左側壁であっても、玄室と羨道がそれぞれ独自に築造されているようである。

この木谷８号墳の横穴式石室の羨道部分が著しく右側へ湾曲していたのは、玄室と羨道の築造作業が分離して独自に進められた結果によるのかもしれない。

玄室部分の右側壁は、奥壁から袖へ向かうにしたがって基底部に据える石が小さくなっていた。奥壁と接する部分は、基底部の石の上へ台形の石を乗せ、その上面のレベルに高さが揃うように袖の方向にも小規模な石を積んでいた。天井石に近い高い部分は、奥壁側に比較的小さな石を詰め、袖に寄った位置にはやや大きな石を積んでいた。

玄室部分の左側壁は、右側壁と同様に奥壁から羨道へ向かうにしたがって基底部に据えた石が小さくなっていたが、中間部分の石積み状況は複雑で、大小雑多の石が不規則に組み合せて積まれていた。また天井石の直下には、比較的小さな石が無造作に多く詰められており、いかにも不安定な様相を呈していた。

床面は地山を掘り窪めて平坦にしていただけで、砂利や板石などは敷き詰めていなかった。

また床面のレベルは、奥壁から石室の入口に向かって緩やかに傾斜していた。さらに羨道部分の側壁は、玄室と直線的につながらないで、右側へ著しく湾曲していた。玄室の平面形は、玄門立柱が存在した羨道との境である袖部分よりも奥壁部分がわずかに広くなっていた。天井石が架構されてほぼ完全な状態で残存した8号墳の横穴式石室は、左右両側壁とも緩やかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態を示し、石室内の断面形は台形を呈していた。

木谷8号墳の主体部である横穴式石室の計測値は、玄室長3.90m・羨道長3.60mになる全長7.50m・奥壁幅1.70m・玄門での玄室幅1.50m・玄門での羨道幅1.30m・石室入口での羨道幅1.15mを測り、床面から天井石までの高さは、奥壁部分2.15m・玄室中央部分2.30m・玄室の玄門部分2.20m・羨道の玄門部分1.90m・羨道入口部分1.50mであった。

遺物出土状況（第25図、図版38－1）

木谷8号墳の横穴式石室は、調査前に石室の入口が開口しており、人間が腹這いになって進入できる状態であったから、石室内に遺物は存在しないと推定された。

ところが石室内の堆積土をフルイにかけて遺物の検出作業を行った結果、土器片や鉄器片に混在して耳環や玉類の装身具も出土した。また床面から50～80cmも上位の位置に、完形品の須恵器が多く存在したため、石室内に土層断面を観察する畦を残して作業を進めたが、奥壁と左側壁の一部を除いて、床面までことごとく攪乱されていた。

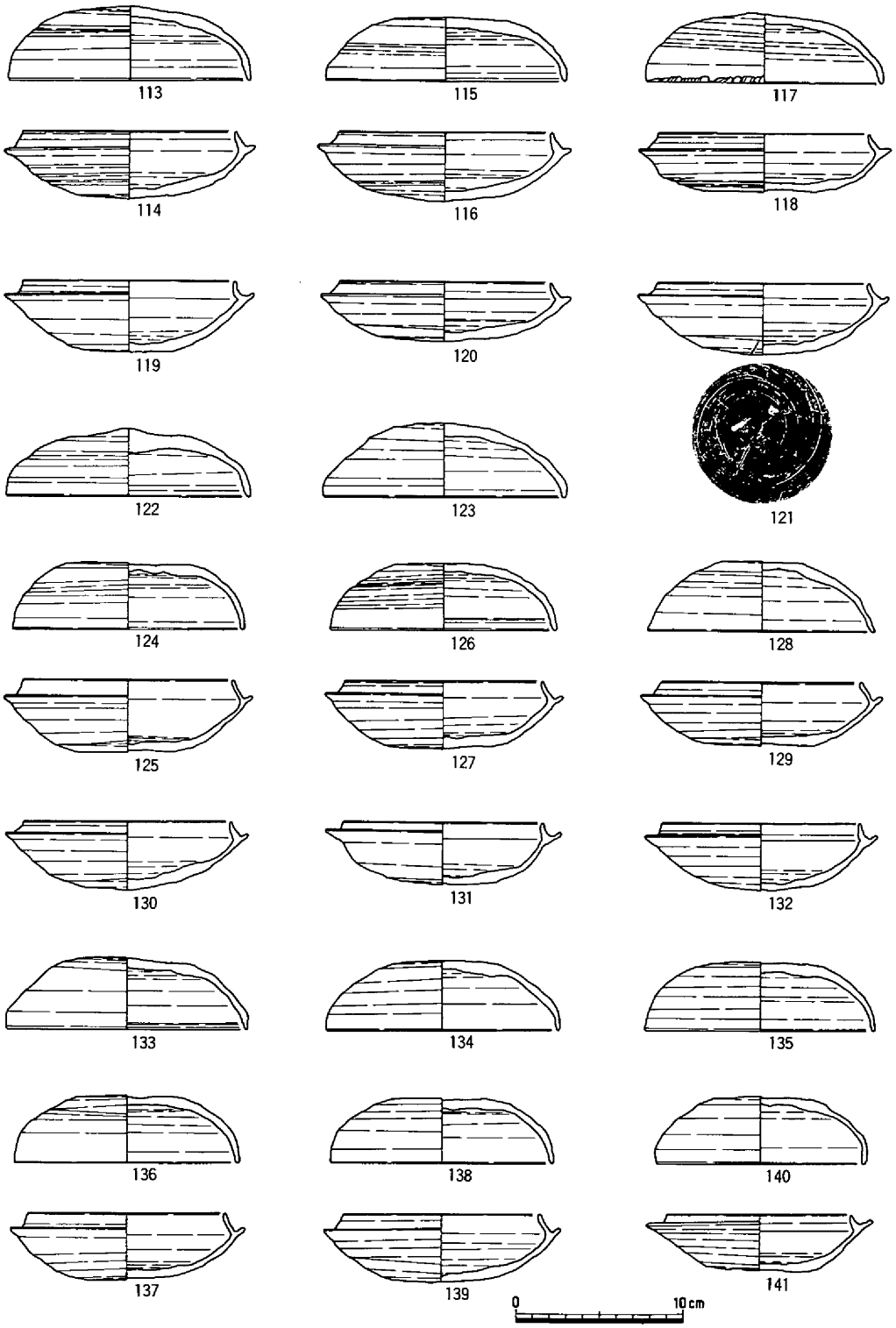
奥壁に近い部分からは、追葬の時にかつて副葬されていた遺物を片付けたと思われる多くの須恵器が、複雑に重なって出土した。玄室中央部と羨道中央部に、左側壁に近接して須恵器の杯身と杯蓋が出土したが、それぞれセットにはならなかった。

なお鉄器や装身具も出土したが、石室内の床面に密着していたものは1点もなく、すべて攪乱された堆積土中から発見されたものばかりである。

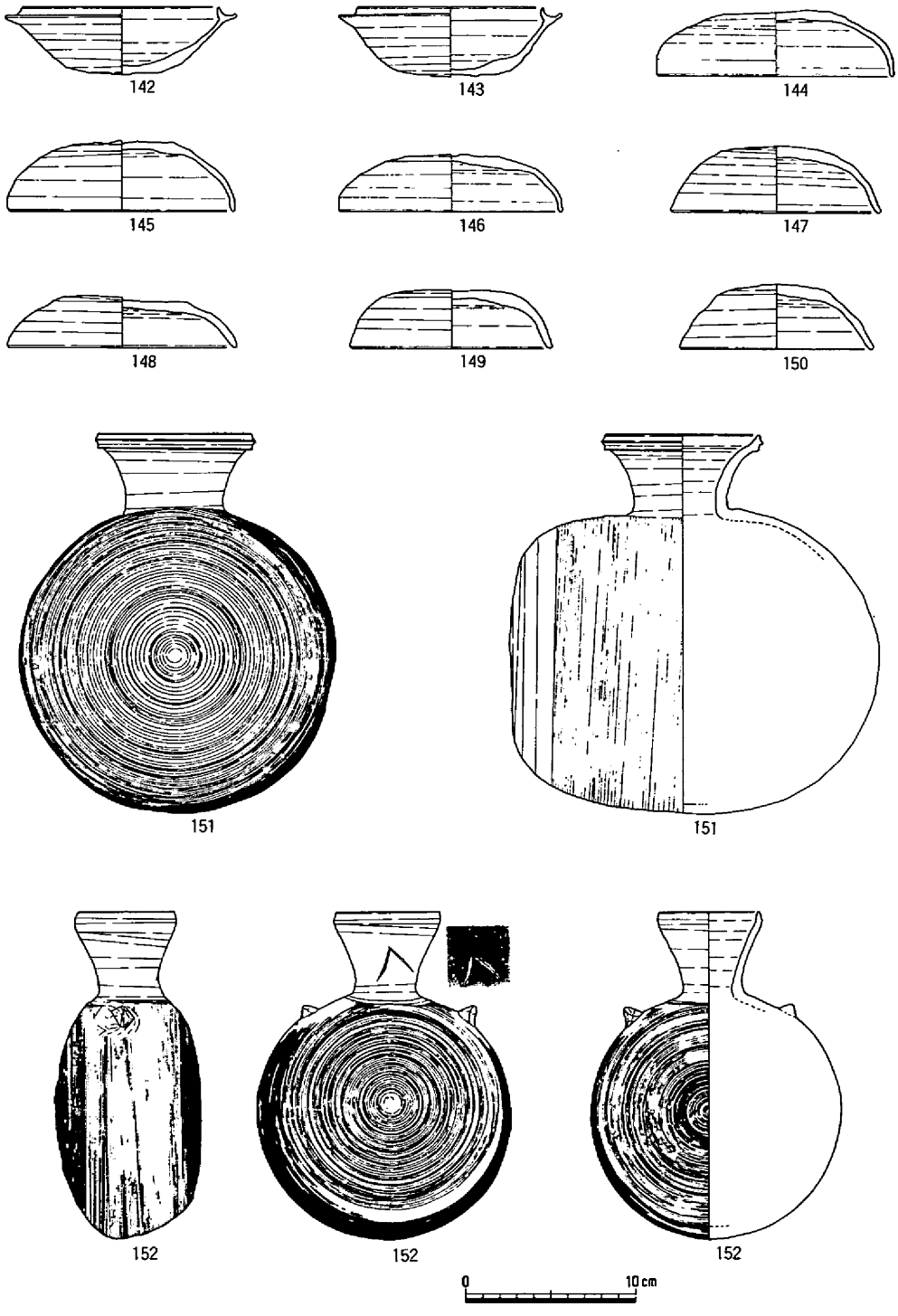
出土遺物

須恵器（第26～28図、図版57～59）

杯身・杯蓋　杯身と杯蓋の出土地点および法量や色調などを精査した結果、9組18点（**113～118・124～129・136～141**）のセット関係が認められた。杯身は口径10.5～12.8cm・器高3.1～4.4cmで、口縁端部は丸く仕上げている。法量が比較的大きい杯身の外面底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。法量が比較的小さいもの（**141～143**）の外面底部は、ヘラ切り未調整である。ロクロの回転方向はすべてが時計と同じ右で、外面の底部にヘラ記号を有するもの（**121**）も1点だけ存在する。杯蓋は口径11.4～14.4cm・器高3.9～4.5cmで、口縁端部を丸く仕上げているものが多い。法量が比較的大きい杯蓋の外面天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。法量が比較的小さいもの（**128・140・145～149**）は、外面天井部がヘラ切り未調



第26図　木谷８号墳出土遺物（１）（1/4）



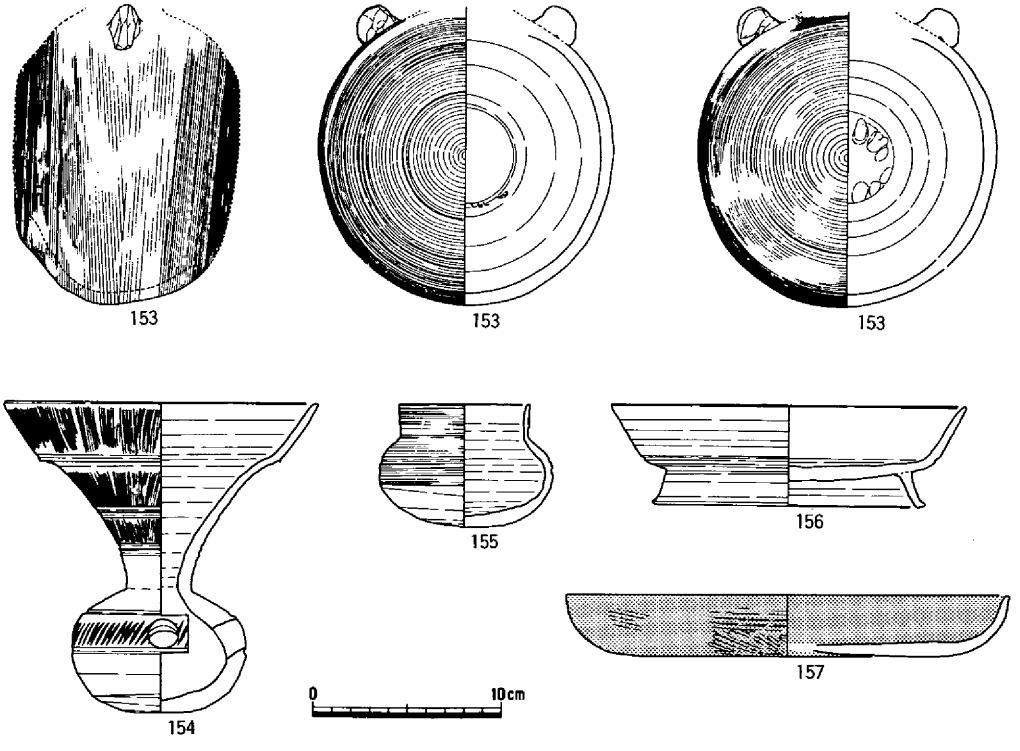
第27図　木谷８号墳出土遺物（２）（1/4）

整である。外面の口縁端部に、ヘラ状工具で押圧した痕跡が巡らされた珍らしいもの（117）もある。なお杯身の内面底部と杯蓋の内面天井部は、ヨコナデを施した後に仕上げナデを加えているものが多い。156の高台を有する杯身は、古墳廃絶後の遺物である。

蓋　150は全体の法量や器形から、短頸壺に伴う蓋と考える。口径11.0～11.4cm・器高3.9cmを測り、外面の天井部はヘラ切り未調整で、内面はヨコナデを施している。この蓋の焼成は極めて悪く、全体の器形が歪んでいる。

横瓶　奥壁に面した右側壁の隅から出土した完形品である。口径8.8cm・器高22.2cm・胴長径21.7cm・胴短径18.2cmを測り、器表面全体に濃い自然釉が付着している。斜め上方へ外反して立ち上がった口縁の端部は、上下に肥厚して稜を有する。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。外面の凸面部にはカキメが存在し、凹面部はヘラケズリを行っている。凸面部と凹面部の中間部分は、ヨコナデを行った後にカキメを施している。

提瓶　耳の形状が円錐のもの（152）と鉤形のもの（153）の2点が出土している。前者は完形品で、口縁部にヘラ記号が存在する。口径5.3～5.8cm・器高19.2cm・胴部最大径14.7cm・胴部最大厚8.4cmを測り、口縁部は内外面ともヨコナデを施している。外面の胴部は、正面も背面も全体にヘラケズリの後にカキメを施している。後者は胴部だけの破片である。内面の中心部



第28図　木谷8号墳出土遺物（3）（1/4）

分にはユビオサエ痕跡が認められ、外面はヘラケズリの後にカキメを施している。

甕　完形品である。この甕の計測値は、口径16.0～16.6cm・器高16.4cm・胴部径9.2cm・頸部径3.4cmである。頸部から口縁部にかけてラッパ状に開き、口縁端部は丸く仕上げている。外面の口縁部には、1条または2条の凹線で区画された部分にクシ状工具で縦方向の粗い痕跡を施し、内面は全体にヨコナデを行っている。外面の胴部中位には、凹線の間にクシ状工具の先端で描いた刺突文を巡らせている。外面の底部はロクロの回転方向が右のヘラケズリを行い、胴部は全体にヨコナデを施している。

壺　奥壁に近い地点から出土した小型の直口壺である。口径6.8cm・器高6.6cm・胴部最大径9.2cmを測り、外面の胴部中位に2条の浅い凹線が存在する。外面の底部はヘラケズリを行っているが、その他の部分は全体にヨコナデを施している。

土師器（第28図）

皿　推定口径23.0cm・器高3.3cmを測る。底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、口縁端部は短く外反して丸く仕上げている。内面はヨコナデの後に仕上げナデを施し、外面はヨコナデとヘラミガキを行っている。器表面の磨滅が極度に進んでいるから注意して観察しないと見落しそうだが、内外面とも全体に丹塗りを施している。この土師器の皿は、156の須恵器の杯身とほぼ同時期に属するであろう。

鉄器（第29図、図版66－2・67－1）

鉄鏃　71は長頸柳葉式鉄鏃である。鏃身は片鎬造で、片面のみに鎬が存在する。篦被関には、棘状突起を有する。

72～74は腸抉柳葉式の鏃身を持つが、鏃身の幅が狭く、尖根系の鉄鏃と考えられる。篦被関には、棘状突起を有する。鏃身の造りは、平根系の鉄鏃と共通する両丸造である。

75～80は有茎の平根式鉄鏃である。75と76は腸抉柳葉式のものである。75は逆刺が深く、逆刺の先端に抉りを伴い、二重の逆刺をなす。また76は逆刺が浅い。77は鏃身の全形が不明であるが、腸抉柳葉式あるいは長三角形式のものと思われる。78～80は鏃身関が直角をなす長三角式のものである。80は鏃身幅がやや狭いようである。

82～88は篦被関部分の破片である。82と88は直角の関であるが、それ以外は棘状突起を持っている。83は矢柄表面の樹皮巻きが残存している。84は茎の糸巻きが残存している。

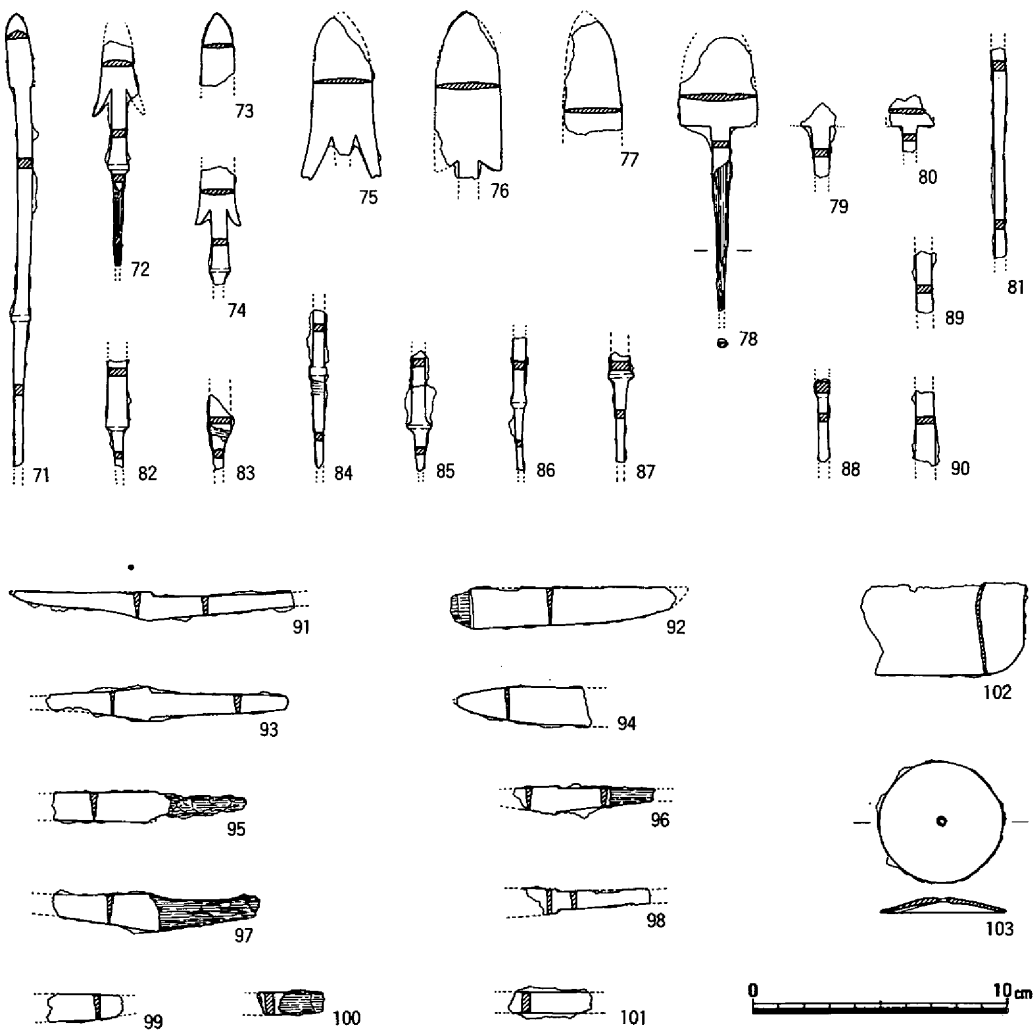
刀子　91～101は刀子である。91は関が背の側のみで段を有する。92・95～100は、柄の木質が付着している。

鉄製紡錘車　103は鉄製紡錘車である。中央に存在する孔の部分が最も高い。低円錐状に湾曲した円盤状を呈している。

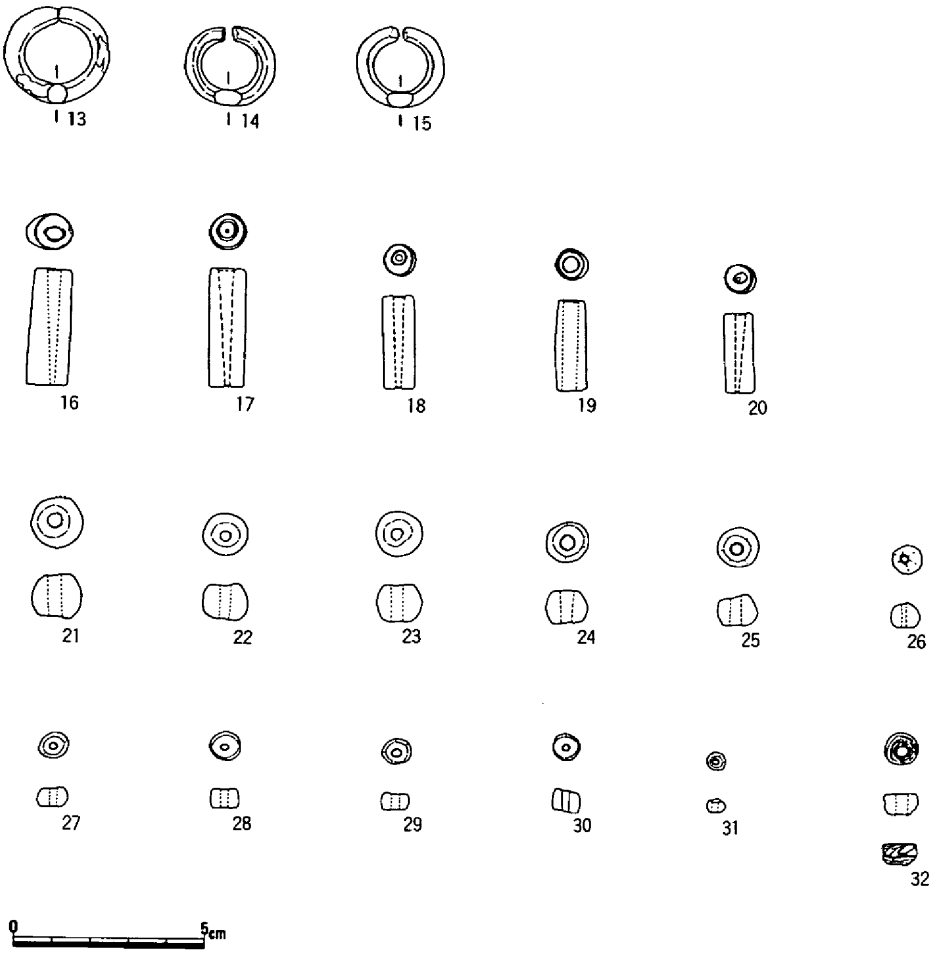
なお102は不明の鉄器である。図の上半部分がやや湾曲した板状のものである。

装身具（第30図、図版70－２）

耳環　木谷８号墳の石室内は攪乱されていたため、３点の耳環（**13～15**）は土器片や鉄器片とともに床面から浮いた状態で出土した。これらはいずれも鉄地金銅貼のもので、全体の形態や重さなどから**14**と**15**がセットになるであろう。**13**は外径2.61～2.76cm・内径1.61－1.77cm・断面径0.54cmで、表面に金箔の一部が残存している。この耳環とセットになる別のものを精力的に捜したが、努力したにもかかわらずとうとう見つけることができなかった。**14**は外径2.17～2.37cm・内径1.27～1.49cm・断面径0.45～0.70cmを測り、内側に金箔の一部が残存している。**15**は外径2.20～2.30cm・内径1.32～1.42cm・断面径0.45－0.70cmで、表面全体に青色の錆が付着している。



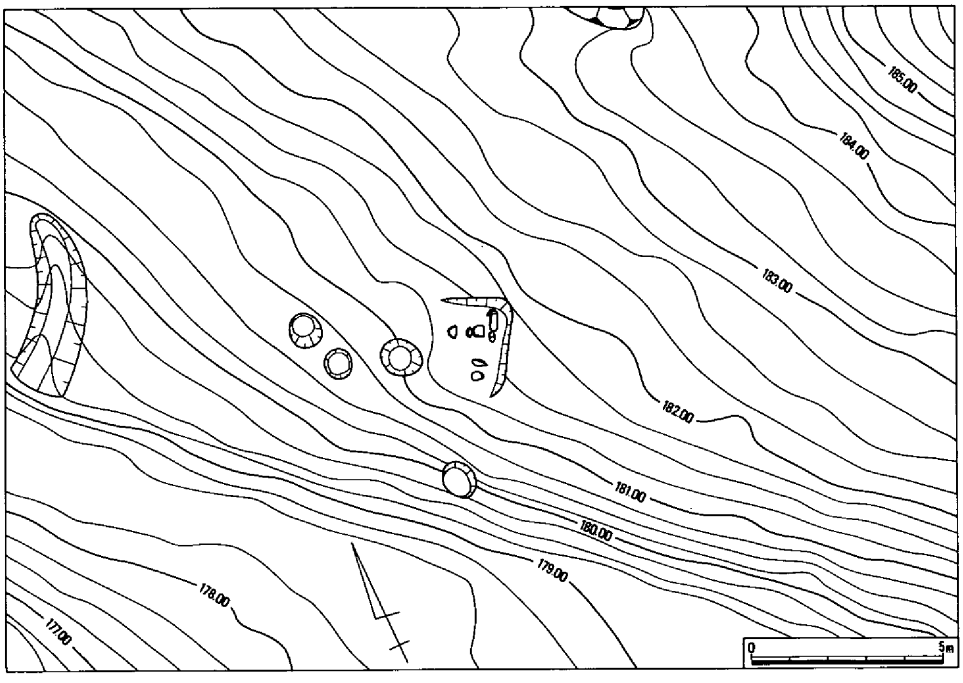
第29図　木谷８号墳出土遺物（４）（1/3）



第30図　木谷８号墳出土遺物（５）（1/2）

玉類　この玉類も、前述の鉄器や耳環などと同様に、石室内に堆積していた攪乱土をフルイにかけて発見したものである。

16～20は管玉である。**19**だけが蛇紋岩製で、長さ2.40cm・胴径0.85cm・孔径0.40～0.42cmと孔径が大きい。残る４点はいずれも碧玉製の片面穿孔に仕上げられたもので、最大規模の**16**は長さ3.12cm・胴径1.05cm、最小規模の**20**は長さ2.21cm・胴径0.80cmである。ちなみに**17**は長さ3.25cm・胴径0.97cm、**18**は長さ2.52cm・胴径0.88cmである。**21**から**25**は蛇紋岩製の丸玉で、高さ0.84～1.10cm・胴径1.11～1.32cmになっている。**26**は土製の小玉で、高さ0.68cm・胴径0.82cmである。**27**から**30**はコバルトブルーの色調を呈するガラス製小玉で、高さ0.43～0.56cm・胴径0.71～0.77になっている。**31**は高さ0.31cm・胴径0.49cmの極めて小さいガラス製小玉で、全体がグリーンの色調である。**32**は鉛ガラス製の珍らしいもので、残存規模が高さ0.58cm・胴径0.92cmとなり、全体が白濁して表面に縞模様が認められる。



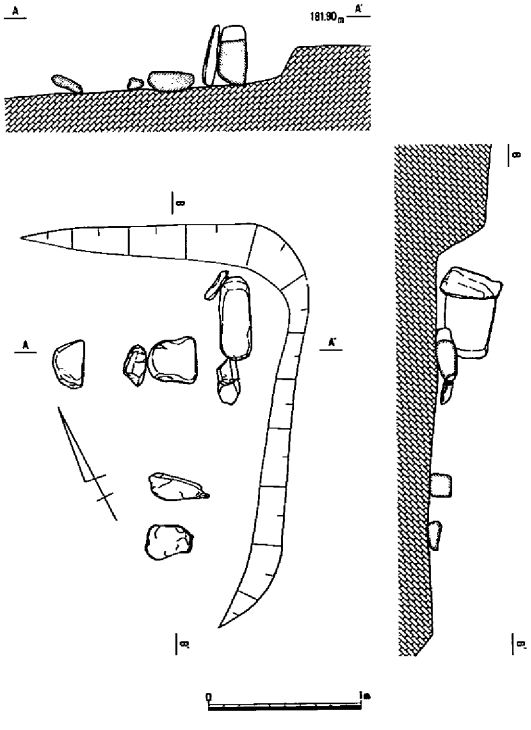
第31図　木谷９号墳周辺地形測量図（1/200）

(4)　木谷９号墳

この９号墳は、『久世町埋蔵文化財分布地図』には記載されていない古墳で、発掘調査中に新しく発見したのである。

木谷古墳群で調査を実施した範囲のほぼ中央に位置し、10号墳から東側へ約15ｍ寄った海抜高181ｍと182ｍの中間地点に所在した。遺構として残存するのは埋葬施設のほんの一部で、墳丘や周溝などは検出できなかった。

低く掘り窪めた平坦面に側壁の石を立てて置き、床面に棺台が認められた簡単なものだが、崩壊が著しく遺物は出土しなかったので、詳細は不明である。

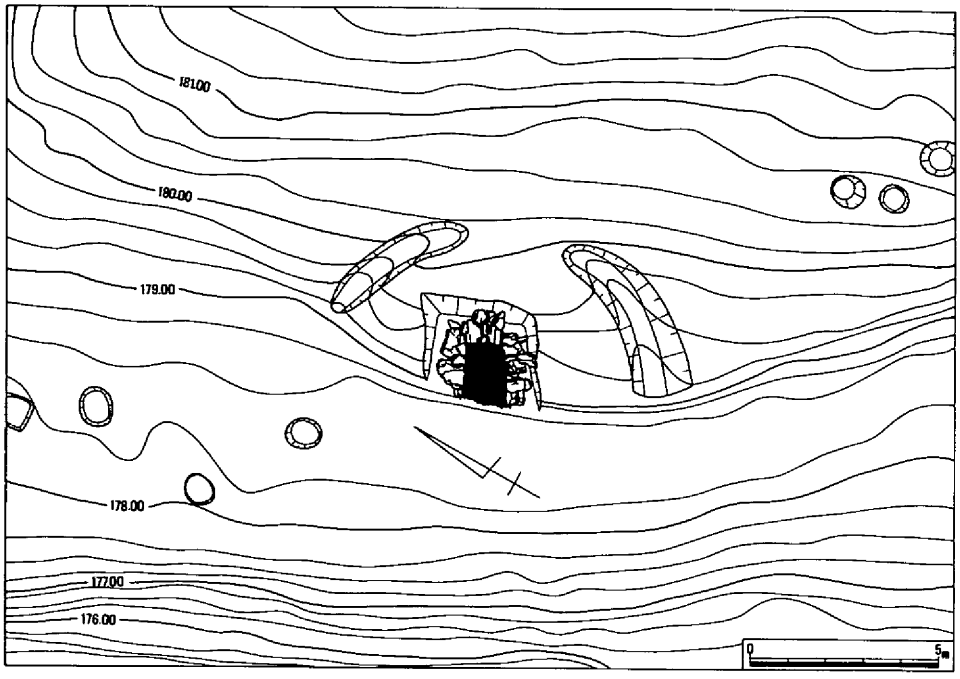


第32図　木谷９号墳石室実測図（1/50）

(5) 木谷10号墳

調査前の状況

この木谷10号墳が所在した地点は、地権者との用地買収の交渉が最終段階まで難行し、調査

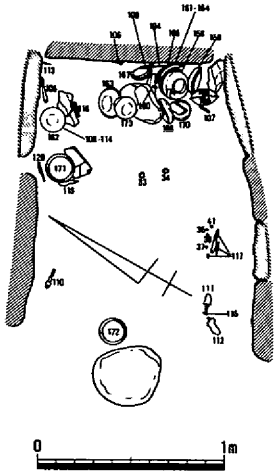


第33図　木谷10号墳周辺地形測量図（1/200）

に着手するのが他の部分よりも遅くなった経緯がある。

調査前は雑木の生茂る傾斜地で、割石が散在していたものの古墳が存在する気配は感じられなかった。また発掘調査中に新しい古墳が発見されたこともあって、今後の調査計画を再検討するために、未調査部分も複数の調査員で念入りに事前調査したが、誰もこの10号墳の所在は指摘できなかった。やっと用地買収の交渉が成立し、調査前の地形測量を行ったが、墳丘や周溝はなく、埋葬施設の石室に依然として気付かなかった。

調査終了後の今になって、その所在が想定できるような現象がなかったかというと、10号墳と13号墳の中間に位置する平坦地点に、比較的多くの割石に混在して須恵器の破片も採集されたことがある。



第34図　木谷10号墳
遺物出土状況（1/40）

墳丘と周溝（第33図）

木谷10号墳の墳丘は、調査前に削平されて存在しなかった。

この古墳の西側に位置する地形の低い部分は、かつて水田に造成された時に、石室の床面も残存しないまでに著しく破壊されていた。

石室から４～５ｍ離れた地形の高い部分に、「ハ」字状を呈して湾曲する周溝の痕跡を検出した。検出面からの深さは最大で約20cmと浅く、最大幅は1.60ｍであった。この周溝の痕跡から10号墳が築造された当時の規模を推定すると、径が９～10ｍの円墳になるであろう。

石室（第35図、図版41－１）

この古墳の石室は、表土除去作業を行っていた時に、比較的大きな石が「コ」字状に並べられていたのを発見し、その所在が明らかになったのである。

南西側に位置する地形の低い部分が削平され、辛うじて残存した部分も上面が破壊されて天井石が存在しなかったから、明確に断定はできないが、木谷10号墳の石室はおそらく横穴式石室になるであろう。

奥壁の基底部には、側壁に使われているような割石を１個だけ据えていた。その上位には、小さな割石２個を小口積にしていた。右側壁の奥壁から２番目に据えた基底部の石は、丸みを持った河原石であった。その上位には、偏平な割石を積んでいた。左側壁は３段目まで残存していたが、右側壁と同様に基底部には河原石も認められ、大きい石の間に生じた空間は、小さい割石を詰めていた。また石を積み上げた各段の目地は、ほぼ平行で直線的に揃っていた。

この石室の掘り方は奥壁部分で地山面を約１ｍも掘り下げ、石を積んだ壁面との間に広い余地があったにもかかわらず裏込めの石はなく、ただ簡単に褐色土を踏み固めていただけであった。石室内の床面は、掘り方底部の地山面に黄褐色土と褐色土を置いて高くし、その上面に小さな河原石を敷き詰めていた。その床面のレベルは、奥壁から削平された部分に向かって、緩やかに傾斜していた。

残存する木谷10号墳の石室床面の計測値は、残存長1.70ｍ・奥壁幅0.97ｍ・南西端幅1.23ｍで、玄室の平面形は中央部の幅が広くなった「胴張り」の形態を呈していた。

遺物出土状況（第34図、図版41）

奥壁に面した中央から左側壁に寄った部分には、追葬の時にかつて副葬されていた遺物を片付けたと思われる須恵器が、棺台に使われていた偏平な河原石と一緒に、複雑に重なり合って存在した。また右側壁に近接した地点では、割石に接して須恵器の杯身と杯蓋が出土した。石室のほぼ中央では、棺台の近くに完形品の杯身が存在した。

長頸式の鉄鏃は、奥壁部分に存在した須恵器の下から出土した。また有茎の平根式鉄鏃は、中央部の左側壁に近い地点に存在した。刀子は、奥壁近くの右側壁に接する部分と、有茎の平

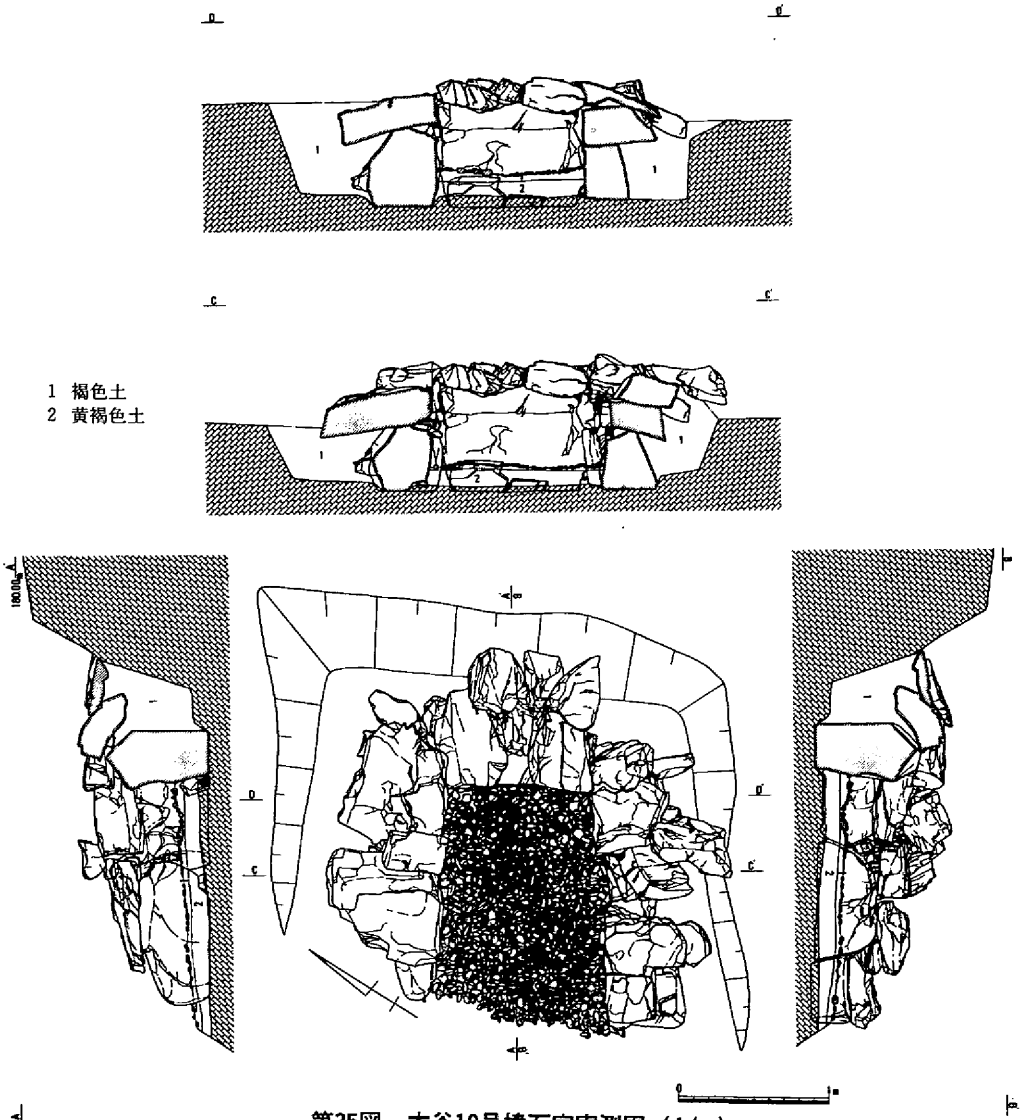
根式鉄鏃が存在した位置から約30cm奥壁に寄った地点から出土した。

装身具の耳環２点は、床面から浮いた状態であったが、出土地点の間隔が13cmと近いだけでなく材質や形態が同じであるから、セットになると判断した。玉類は、中央部の左側壁に近い刀子が存在した地点から、４点が集中して出土した。

出土遺物

須恵器（第36図、図版59）

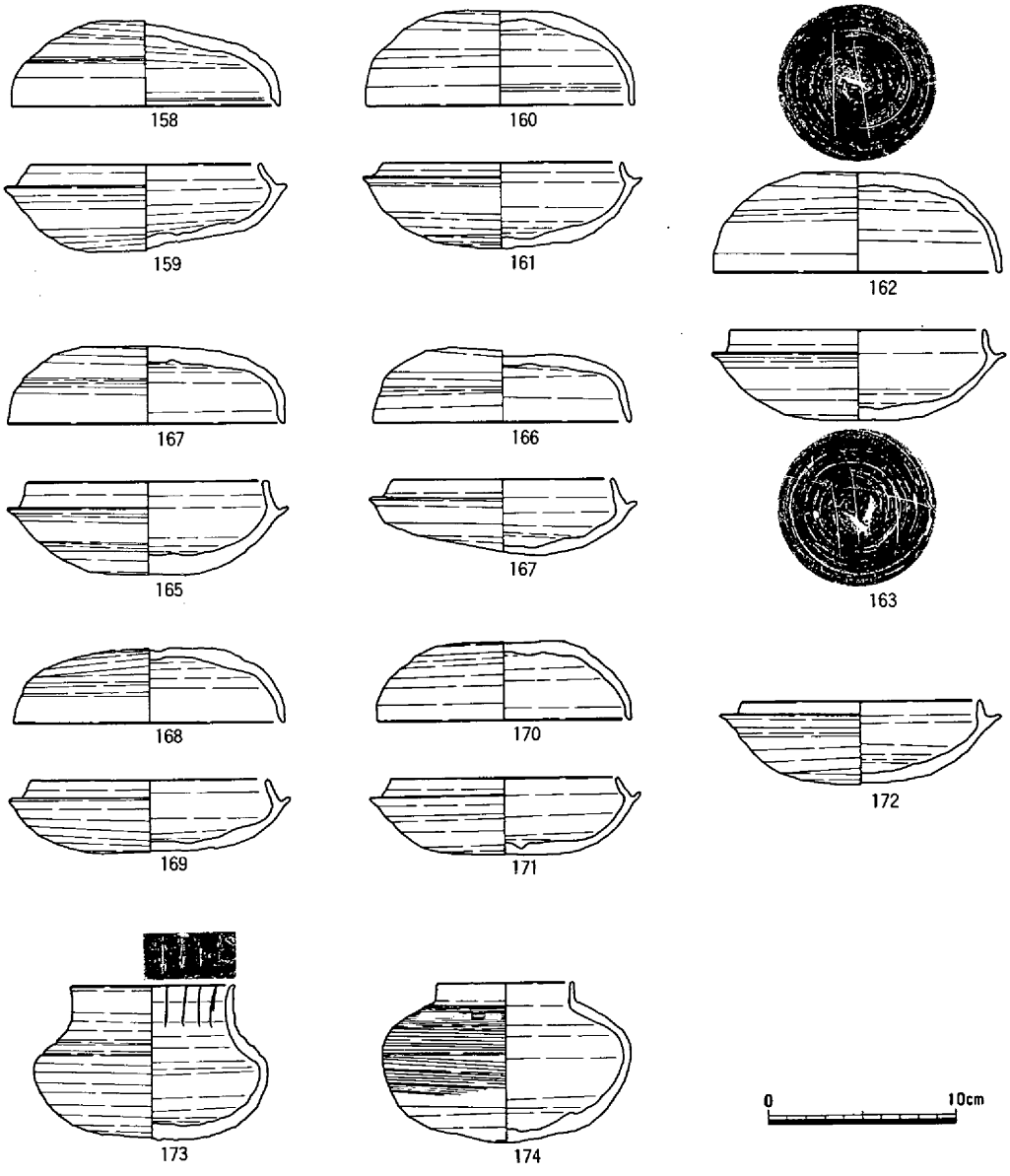
杯身・杯蓋　10号墳の石室から出土した杯身と杯蓋は、口縁部を合せた状態のセットになった



第35図　木谷10号墳石室実測図（1/50）

まま奥壁に寄せ集められたものや、棺台の近くに単独で存在したものなどが認められた。その出土地点および法量や色調を精査した結果、７組14点のセット関係が判明した。セットにならなかったのは、奥壁から最も離れた地点で出土した杯身（172）の１点だけであった。

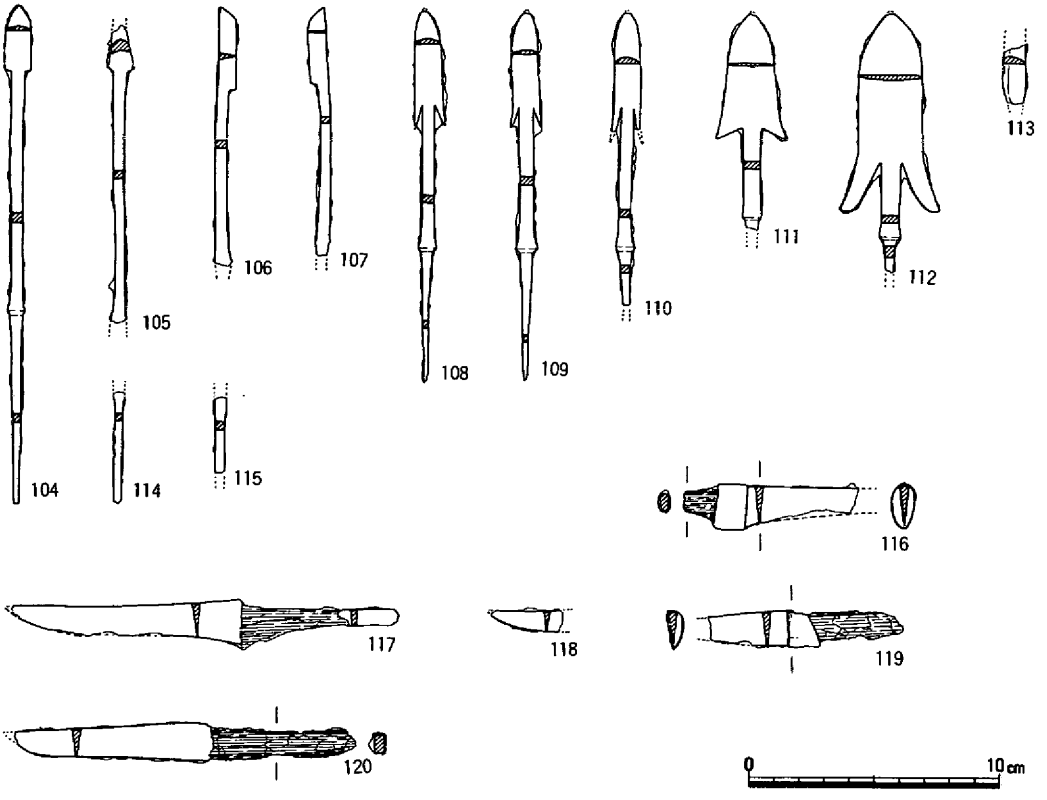
杯身は口径11.7～13.6cm・器高4.0～5.1cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はすべて回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の底部には仕上げナデを加えている。外面の底部にヘラ記号を有するも



第36図　木谷10号墳出土遺物（１）（1/4）

の（163）や、外面に自然釉が付着したもの（165）がある。杯蓋は口径13.5～15.2cm・器高4.1～5.5cmで、外面の天井部と体部の境に稜が認められるもの（158・164・168）や、内面の口縁端部に段を有するもの（158）がある。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部には仕上げナデを加えている。外面の天井部にヘラ記号を有するもの（162）や、全体の器形が著しく歪んでいるもの（164・168）がある。

壺　173は口径8.6cm・器高8.3cm・胴部最大径12.6cmを測る完形品の直口壺である。上方へ立ち上がった口縁端部は、短く外反して丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から胴部にかけてはヨコナデを施している。外面の胴部上位には浅い2条の凹線が存在し、内面の口縁部にはヘラ記号が認められる。この直口壺は焼成が良好だが、内外面とも全体に赤褐色の珍らしい色調を呈している。174は口径7.3cm・器高8.6cm・胴部最大径13.3cmを測る完形品の短頸壺である。短く上方へ立ち上がった口縁の端部は、全体に丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、胴部にはカキメが認められる。外面の口縁部と内面全体はヨコナデを施し、外面の器表面には自然釉が付着している。



第37図　木谷10号墳出土遺物（2）（1/3）

鉄器（第37図、図版67－２）

鉄鏃　**104～110**は長頸式鉄鏃である。**104**と**105**は長頸柳葉式のもので、鏃身は片鎬造になっている。篦被関の形状は不明だが、棘状突起を有すると思われる。**106**と**107**は長頸片刃箭式のもので、鏃身は平造で、鏃身関はほぼ直角の明確な段をなしている。**108～110**は長頸腸抉柳葉式のもので、鏃身が長く、頸部が短い。逆刺は深く、鏃身の造りは片鎬造である。篦被関には、棘状突起を有する。

111と**112**は有茎の平根式鉄鏃で、どちらも腸抉柳葉式のものである。**111**はやや小型で、逆刺が浅い。**112**は逆刺が深く、逆刺の先端はほぼ水平に切り落されたような形状をなしている。**113**は不明だが、おそらく長頸式鉄鏃の鏃身部破片と思われる。また**114**と**115**は、茎の破片である。

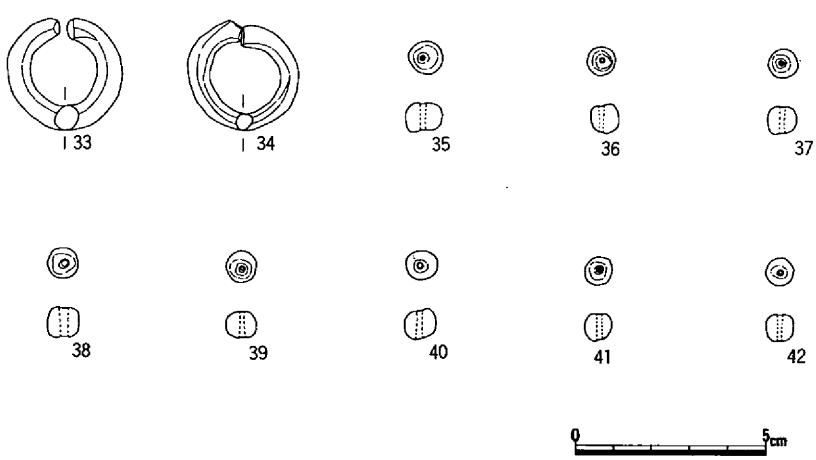
刀子　**116～120**は刀子である。**116**と**119**は、断面倒卵形の鎺を持っている。これらの関には、いずれも両側に段が認められる。また茎には、柄の木質が付着している。

装身具（第38図、図版71－１）

耳環　２点とも石室の床面から浮いた状態で出土したが、出土地点の間隔が13cmと近いだけでなく、材質や形態も同じであるから、セットになると判断した。

33と**34**は材質が鉛の珍らしい耳環で、表面に凹凸が認められるまでにぼろぼろになって、全体が白色を呈している。**33**の計測値は、外径2.9～3.1cm・内径1.8～1.9cm・断面径0.7cm・重さ17.3ｇである。**34**の計測値は、外径2.7～2.9cm・内径1.8～2.0cm・断面径0.4～0.9cm・重さ10.7ｇである。

玉類　**35～42**は練玉とも呼ばれる土製の小玉で、いずれも全体に黒褐色を呈している。その計測値は、高さ0.65～0.80cm・胴径0.72～0.91cmとなり、重さは0.4～0.6ｇである。



第38図　木谷10号墳出土遺物（３）（1/2）

(6) 木谷11号墳

調査前の状況

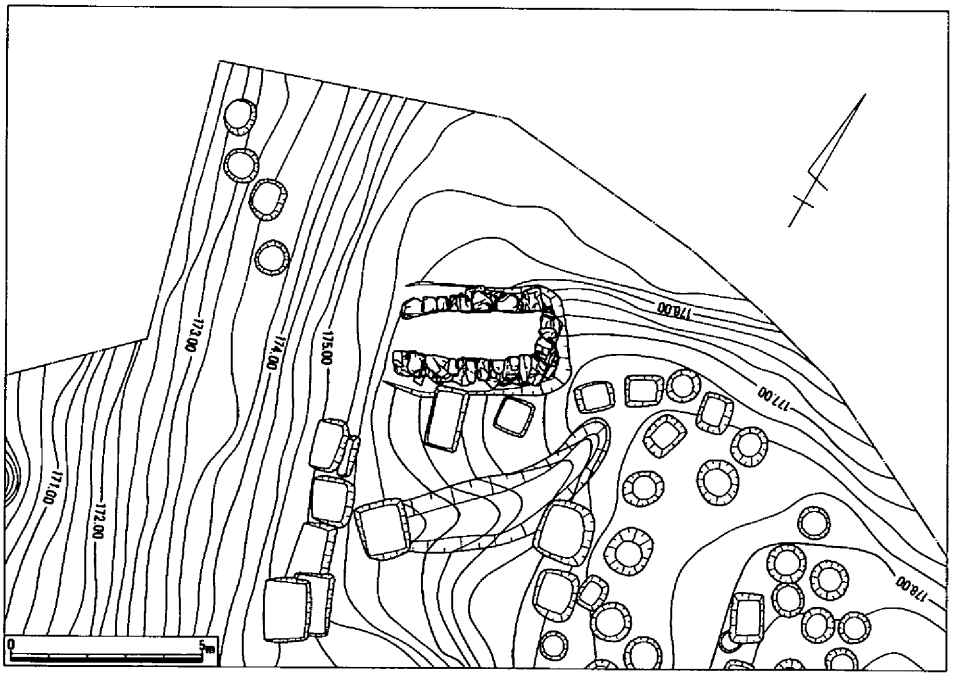
この木谷11号墳は、調査範囲の北西端部で中近世土壙墓群の発掘作業をしていて偶然に発見したもので、調査前にはその所在が全く予測できない状態であった。

木谷11号墳を発見した地点は、眼下に流れる目木川にほぼ直交するように張り出した７号墳や８号墳の所在した丘陵が、３号墳や４号墳の方向へ屈曲する変換点に位置し、その尾根上の平坦面は極端に狭くなって、古墳が築造できる地形ではないと考えられた。調査前に墳丘を想起させる地形の高まりはなく、丘陵斜面に堆積した土砂の除去作業中に、石が「コ」字状に連続して並べられていたのを検出して、古墳の石室が存在することが明らかになったのである。

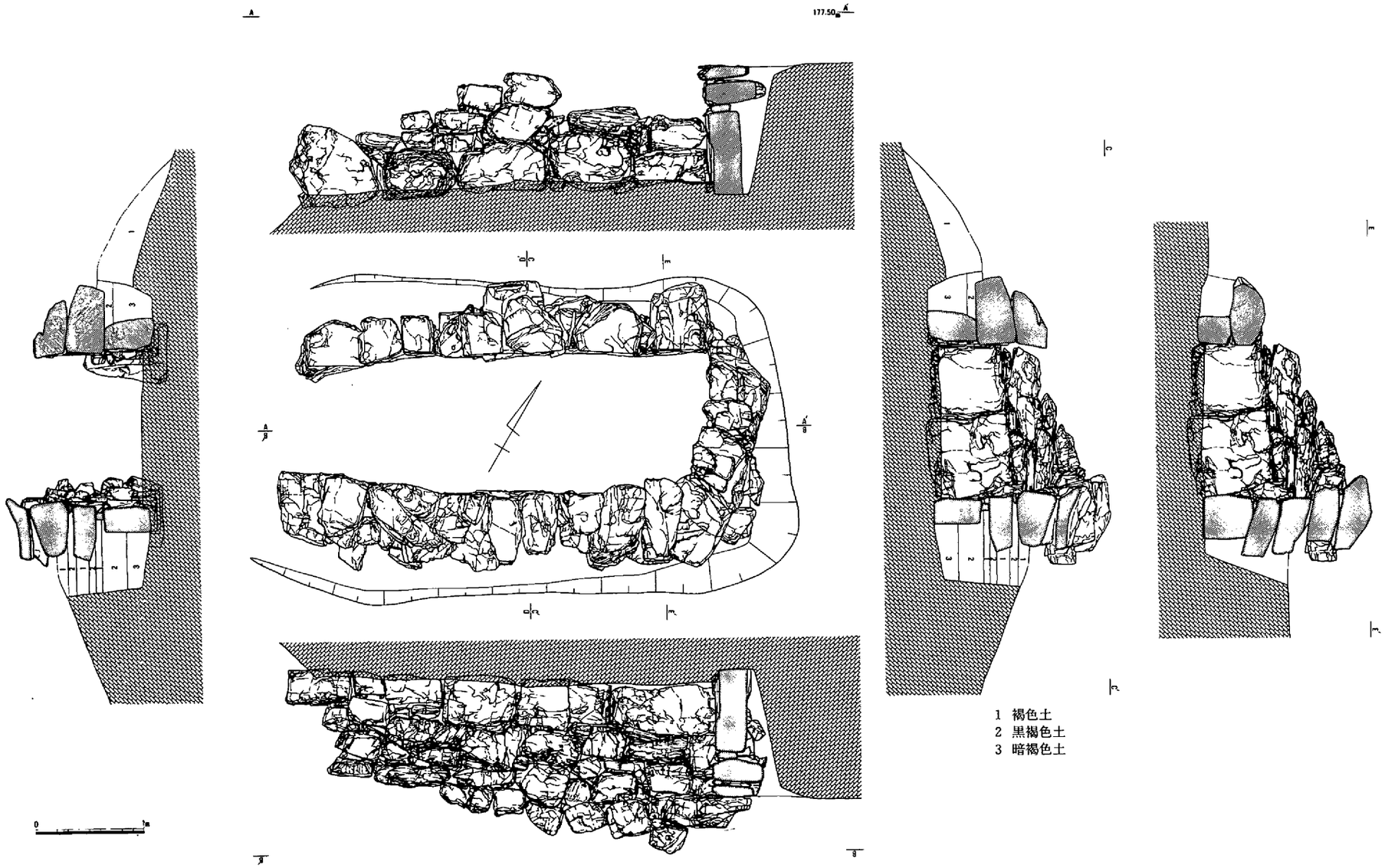
墳丘と周溝（第39図）

木谷11号墳は、近世の墓地造成によって石室の北側部分が右側壁に近接した地点まで大きく削平され、石室の入口は急勾配の斜面に面して床面の一部が崩壊していた。また埋葬施設の石室は、天井石が１枚も残存しなかっただけでなく、側壁までも破壊されて上位の石が認められなかった。このような状態であったから、木谷11号墳の墳丘は全く存在しなかった。

石室の左側壁に面した南側斜面に、部分的に中近世土壙墓に切られた周溝の痕跡を地山面に



第39図　木谷11号墳周辺地形測量図（1/200）



第40図　木谷11号墳石室実測図（1/50）

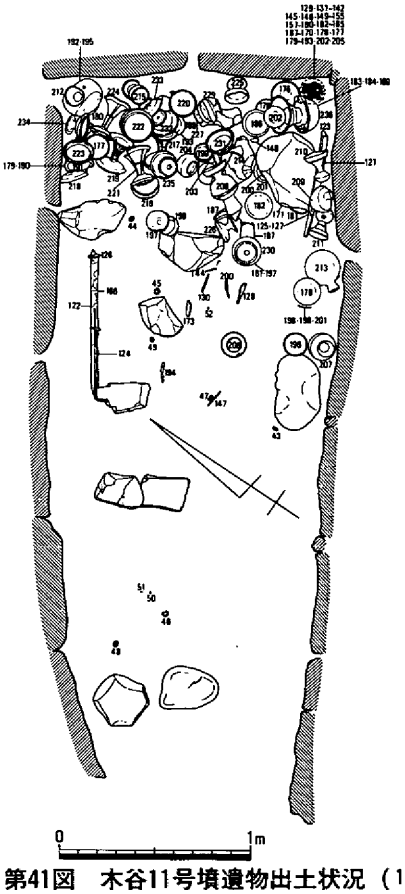
検出した。検出面での最大幅は約1.80ｍを測り、地形の高い奥壁に面した部分には、痕跡そのものが存在しなかった。この部分的に残存した周溝から木谷11号墳が築造された当時の規模を推定すると、径が約10ｍの円墳になるであろう。

石室（第40図、図版42）

木谷11号墳の石室は、袖のない横穴式石室である。天井石はすでに１枚もなく、奥壁や側壁も上位が破壊されて石が存在しなかった。

その石室を発見した地点は、丘陵の尾根が極端に狭くなり、石室入口の前面が目木川の河川敷に連なる急斜面で、古墳を築造するのはとても困難な地形だと考えられた。

奥壁の基底部には、石室内の計測値が約65×65cmのほぼ正方形を呈する多くの裏込石に支えられた石と、やや規模が大きくて約75×75cmを測る正方形の石とを並べて据え、左側壁との間に生じた空間には小さな割石を詰めていた。その上位の左側壁に寄った部分には比較的小さな石を多く乗せ、中央より右側壁側には石室内の表面が約25×80cmを測る偏平な板石を小口積にしていた。さらにその上位は２段まで確認できたが、天井石に近い部分はすでに破壊されて残存しなかった。奥壁部分に積み上げられた石の各段の目地は、横方向にほぼ平行する直線状になっていた。残存した奥壁の床面からの高さは、左側壁に接する地点で約1.30ｍであった。



第41図　木谷11号墳遺物出土状況（1/40）

左側壁は奥壁や右側壁よりも残存状態が良好であったが、石室入口部分は基底部の石が残存しただけで、上位の石は認められなかった。左側壁の基底部には、入口から２番目のものを除いて大規模で安定した石を据えていた。それらの石はいずれも角張った割石ばかりで、合計６石が存在した。壁面の石の積み方は、奥壁に面した部分と石室入口に面した部分の両端部が、比較的丁寧に作業が行われていたが、中央部分の広い範囲は、使っていた石の大きさや形が不揃いで多くの空間が認められ、なんとなく不安定な様相になっていた。残存した左側壁の床面からの最高値は約1.55ｍで、奥壁から約40cm入口方向へ寄った地点であった。

右側壁は崩壊が著しくて、残存した石の数は少なかった。基底部には５個の巨石が据えられていたが、左側壁の基底部に使われていた石に比して丸みを持った大規模

なものが多く、石を安定させるために裏込石が詰められていたのが認められた。残存する床面からの高さは、中央部分で約1.00ｍであった。石室の入口部分は基底部の石だけであったが、中央部分には３～４段の石が認められた。この右側壁には、奥壁に接して残存した２段目の石の上面レベルで、石を積んだ段の目地が横一直線に存在した可能性が強い。

この石室の掘り方は、奥壁部分で地山面を約1.20ｍも掘り下げ、壁面の裏側は褐色土と黒褐色土が交互になるように踏み固めていた。また床面には棺台に使われた石が存在したものの、基盤層の地山面を掘り窪めただけで、砂利や板石などは敷き詰めていなかった。床面のレベルは奥壁から石室の入口に向かって緩やかに傾斜し、石室の入口部分は床面そのものの一部が削平されていた。

木谷11号墳の主体部である横穴式石室の残存した部分の計測値は、残存長約3.95ｍ・奥壁幅1.40ｍ・石室最大幅1.50ｍ・石室入口幅0.95ｍを測り、石室の平面形が撥形に近い形になっていた。左側壁の壁面は、わずかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態を呈していた。

遺物出土状況（第41図、図版42・43）

木谷11号墳の横穴式石室は、天井石が１枚も残存しなかったが、石室内は盗掘や攪乱を受けた形跡はなく、追葬が繰り返し行われた当時の状況を良好な状態で留めていた。

木棺痕跡を追求するために、石室内に土層断面観察用の畦を残して調査を進めたが、棺台に使った偏平な河原石や割石を検出したにもかかわらず、木棺痕跡そのものは全く確認できなかった。また全体の形や重さなどからセットになると考えられた耳環が、いずれも遠く離れて出土し、奥壁に面した左側壁に近い地点には、棺台の河原石が須恵器群の上に無造作に寄せて置かれていたから、繰り返し行われた追葬の時に、かつて埋葬されていた遺体やそれに伴う副葬品は、ことごとく奥壁部分に片付けられたのではなかろうか。

石室内から出土した遺物は、中央から奥壁に面した部分に片寄って存在した。土師器を１点も伴わない須恵器だけの大量の土器類は、奥壁付近に複雑に重なり合って置かれていた。珍らしい器種である脚部と装飾群の一部を欠損した装飾付脚付子持壺は、奥壁と左側壁の隅から出土した。大型で肩部に円板の耳を有する完形品の提瓶は、奥壁と右側壁の隅から口縁部を上にして存在した。４振の鉄刀のうち２振は、石室の中央部に近い右側壁に寄った地点から、上下に重なった状態で検出された。残る２振は、左側壁に近接した位置の踵や平瓶の下と、棺台に使った河原石の下部になった床面とから出土した。大多数の鉄鏃は、装飾付脚付子持壺に近い奥壁と左側壁の隅から集中して発見されたので、矢筒のような容器に入れられていた可能性が強い。装身具の玉類は、石室の中央部分と入口に近い部分とに分散していた。なお極めて特殊なトンボ玉は、石室の入口に近い位置と石室中央部にそれぞれ２個の石が並んで置かれた棺台の間から、１個だけ出土した。

出土遺物

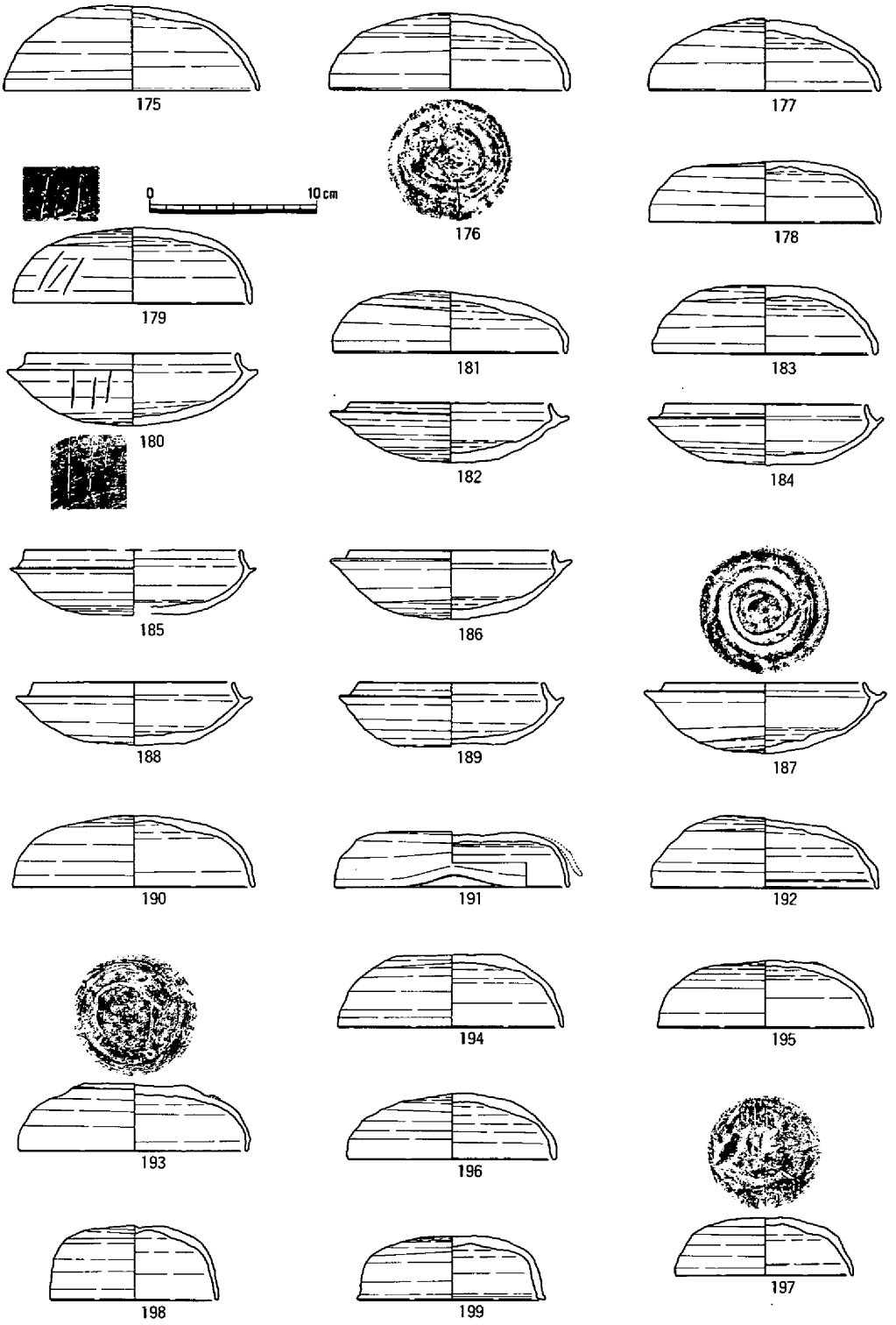
須恵器（第42～45図、図版59～61）

杯身・杯蓋　杯身と杯蓋の法量や色調を精査した結果、３組６点（**179～184**）のセット関係が認められた。杯身は口径11.9～12.6cm・器高3.7～4.5cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部に仕上げナデを加えているものが多い。外面の体部にヘラ記号を有するもの（**180**）や、内面の底部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（**187**）もある。杯蓋は口径10.6～15.1cm・器高3.4～5.2cmで、口縁端部はすべてのものが丸く仕上げている。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行っているものが多いが、ヘラ切り未調整のもの（**177・197**）も認められる。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の天井部に仕上げナデを加えているものが多い。外面の天井部や体部にヘラ記号を有するもの（**179・193・197**）や、内面の天井部に同心円のタタキ痕跡が残存しているもの（**176**）もある。また全体の器形が著しく歪んだもの（**191**）や、外面に須恵器片が付着しているもの（**195**）も存在する。

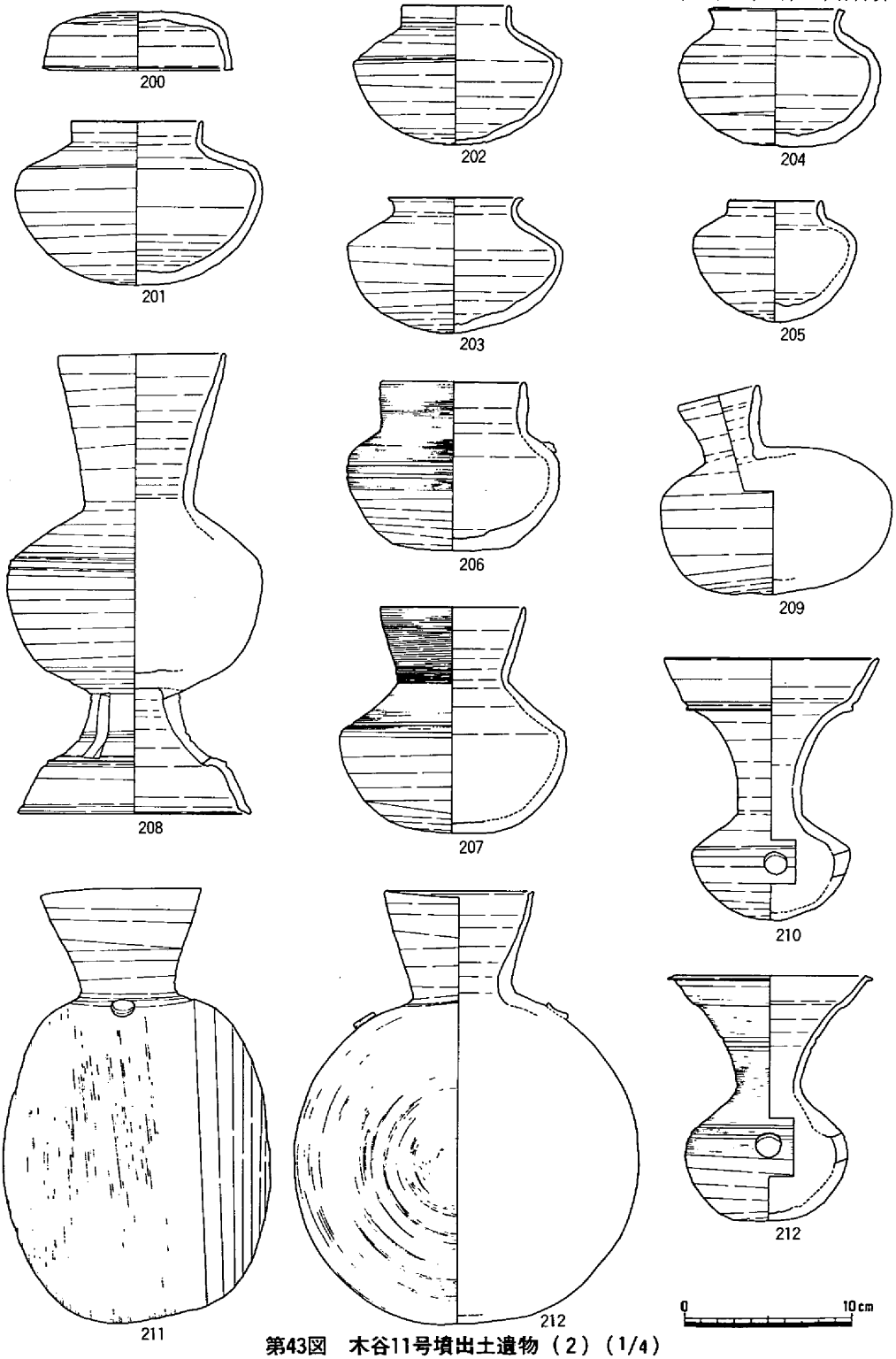
壺蓋　短頸壺の蓋が３点（**198～200**）出土している。そのうち**200**の蓋は、棺台に使った河原石の下に**201**の短頸壺とセットになって存在した。口径10.6cm・器高3.6cmを測り、外面の天井部はヘラケズリを行っている。**198**は口径9.4～10.0cm・器高4.6cmで、外面の天井部はヘラ切り未調整である。**199**は口径11.6cm・器高3.9cmを測り、外面の底部はヘラケズリを行っているが、焼成は不良で灰白色を呈している。

壺　完形品またはほぼ完形に近い短頸壺が５点（**201～205**）出土している。口縁端部の形態は短く上方へ立ち上がって丸く仕上げているもの（**201・202**）、斜め上方へ外反して端部に面を有するもの（**203**）、短く外湾して丸く仕上げているもの（**204**）、短く内傾するもの（**205**）がある。胴部の最大径は中位よりやや上方に有し、外面の胴部に１条の凹線が存在するもの（**201・202**）も認められる。外面の底部はいずれも回転方向が時計と同じ右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から胴部にかけてはヨコナデを施している。蓋（**200**）とセットになって出土した最も大きな短頸壺（**201**）の計測値は、口径7.7cm・器高9.8cm・胴部最大径14.8cmである。最も小さな短頸壺（**205**）の計測値は、口径5.5cm・器高7.3cm・胴部最大径9.8cmを測り、底部の器壁が厚くなっている。

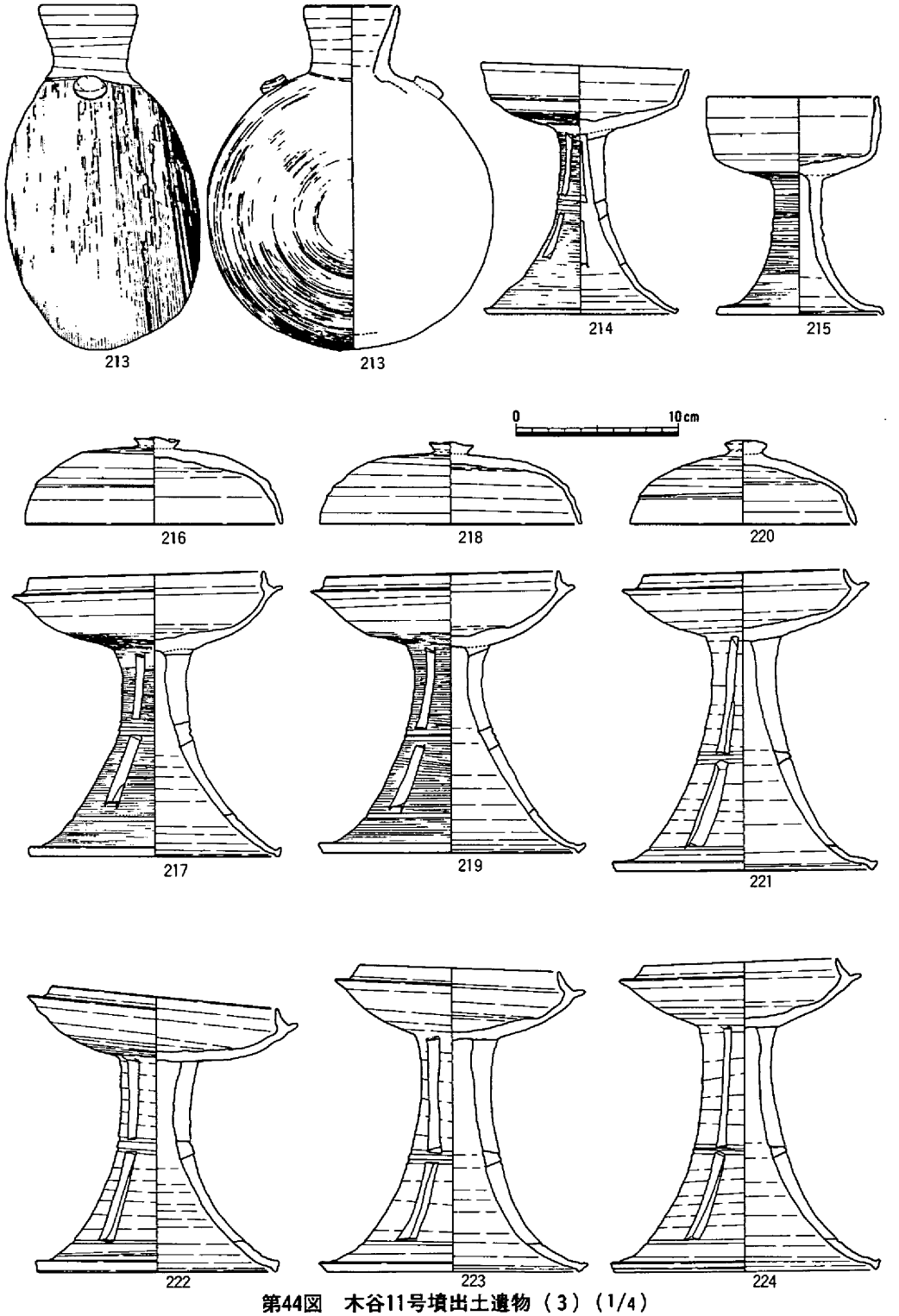
完形品の直口壺が２点（**206・207**）出土している。口縁部が直立するもの（**206**）と斜め上方へ立ち上がるもの（**207**）で、端部はどちらも丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、外面の口縁部から胴部にかけてはカキメが残存している。内面は全体にヨコナデを施し、外面の胴部には２条の凹線が認められる。**206**の計測値は、口径8.5cm・器高10.2cm・胴部



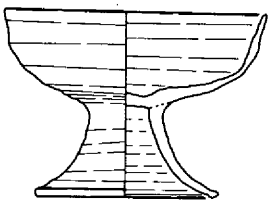
第42図　木谷11号墳出土遺物（1）（1/4）

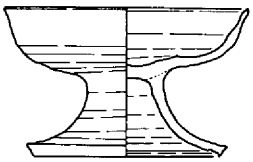


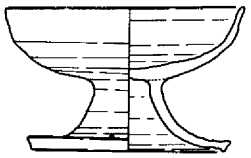
第43図　木谷11号墳出土遺物（2）（1/4）

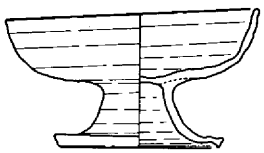


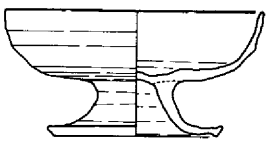
第44図　木谷11号墳出土遺物（3）（1/4）

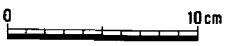

225

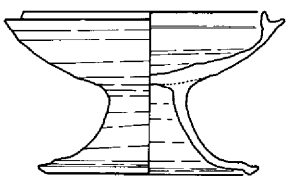

226

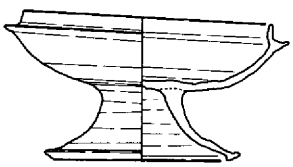

227

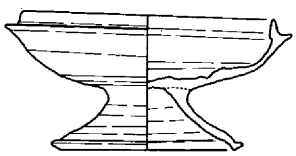

228

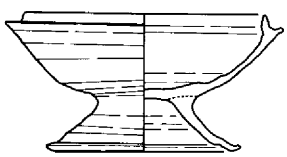

229

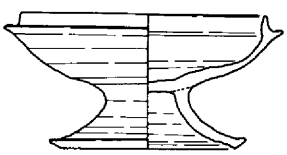


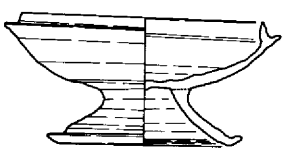

230

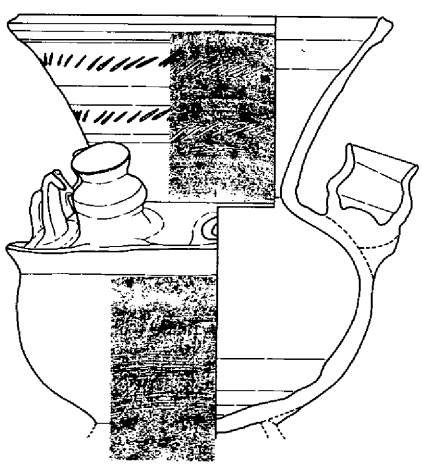

231


232

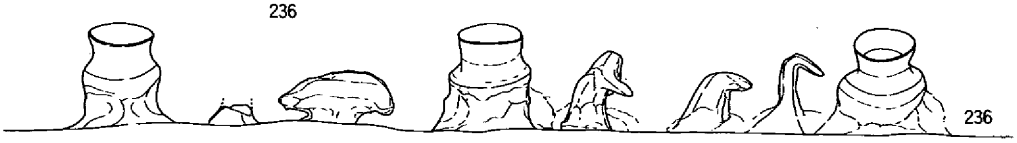

233


234


235


236

236


236

第45図　木谷11号墳出土遺物（4）（1/4）

最大径12.2cmで、外面に土器片や自然釉が付着している。207の法量は、口径7.9～8.6cm・器高13.6cm・胴部最大径13.6cmである。

奥壁に面した石室のほぼ中央から出土した完形品である脚付長頸壺（208）の計測値は、口径9.1～9.9cm・器高27.6cm・胴部最大径15.3cm・脚底径13.8cm・脚部高7.2cmである。斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、器壁が薄くなって丸く仕上げている。胴部の最大径は中位よりやや上方に存在し、外面には2条の浅い凹線が認められる。脚部には3方向に長方形の透しを有し、外面には凹線が存在する。外面の胴部下半から底部にかけてはヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から胴部上半部分にかけてはヨコナデを施している。また貼り付けた脚部は、内外面とも全体にヨコナデを施している。

脚部と装飾群の一部を欠損した装飾付脚付子持壺（236）は、口径19.1cm・胴部最大径20.5cmである。斜め上方へラッパ状に開いた口縁の端部は、器壁が肥厚して上端に中央が浅く窪んだ面を有する。外面の口縁部には、クシ状工具の先端で施した刺突文を2段に巡らせている。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面にはカキメが残存している。装飾の小器である壺はすべて存在するが、小像の3点は欠損している。残存する小像は、人間が2羽の水鳥を追っているように見えるが、いかがなものであろうか。また小器の壺を挟んだ別の位置に描かれた動物は、猪ではないかと思われるが、確実なことは不明である。なおこの壺の欠損した脚部や小像を精力的に捜したが、とうとう見つからなかった。

平瓶　口径4.8cm・器高12.7cm・胴径13.7cmを測る平瓶（209）は、口縁端部をわずかに欠損している。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、外面の口縁部から胴部上位と内面全体はヨコナデを施している。この平瓶は焼成が良好で、外面に自然釉が付着している。

甕　2点の甕（210・211）は、左側壁に接する位置で、平瓶（209）を挟んで鉄刀の上から出土した。210は口径12.7cm・器高15.7cm・胴径9.5cm・頸径3.8cmを測り、口縁端部をわずかに欠損している。211は完形品で、口径11.4cm・器高14.7cm・胴径9.7cm・頸径3.8cmである。2点の甕とも外面の底部はヘラケズリを行い、その他の部分は全体にヨコナデを施している。211の外面の頸部と胴部にはカキメが残存し、それぞれ2条の凹線が認められる。

提瓶　どちらも完形品で、肩部の耳は円板である。212は口径8.8～9.6cm・器高26.0cm・胴部最大径20.5cm・胴部最大厚16.0cmを測る大型品で、胴部の正面はカキメの上面にヨコナデを施し、背面はヘラケズリを行っている。213は口径5.6cm・器高21.3cm・胴部最大径17.4cm・胴部最大厚11.9cmを測り、胴部の両面には全体にカキメが存在する。2点とも口縁部は内外面にヨコナデを施し、外面には自然釉が付着している。

高杯蓋　天井部につまみを有する高杯の蓋が、3点（216・218・220）出土している。法量や色調などを精査した結果、いずれも長脚有蓋高杯とセットになることが判明した。3点の計測

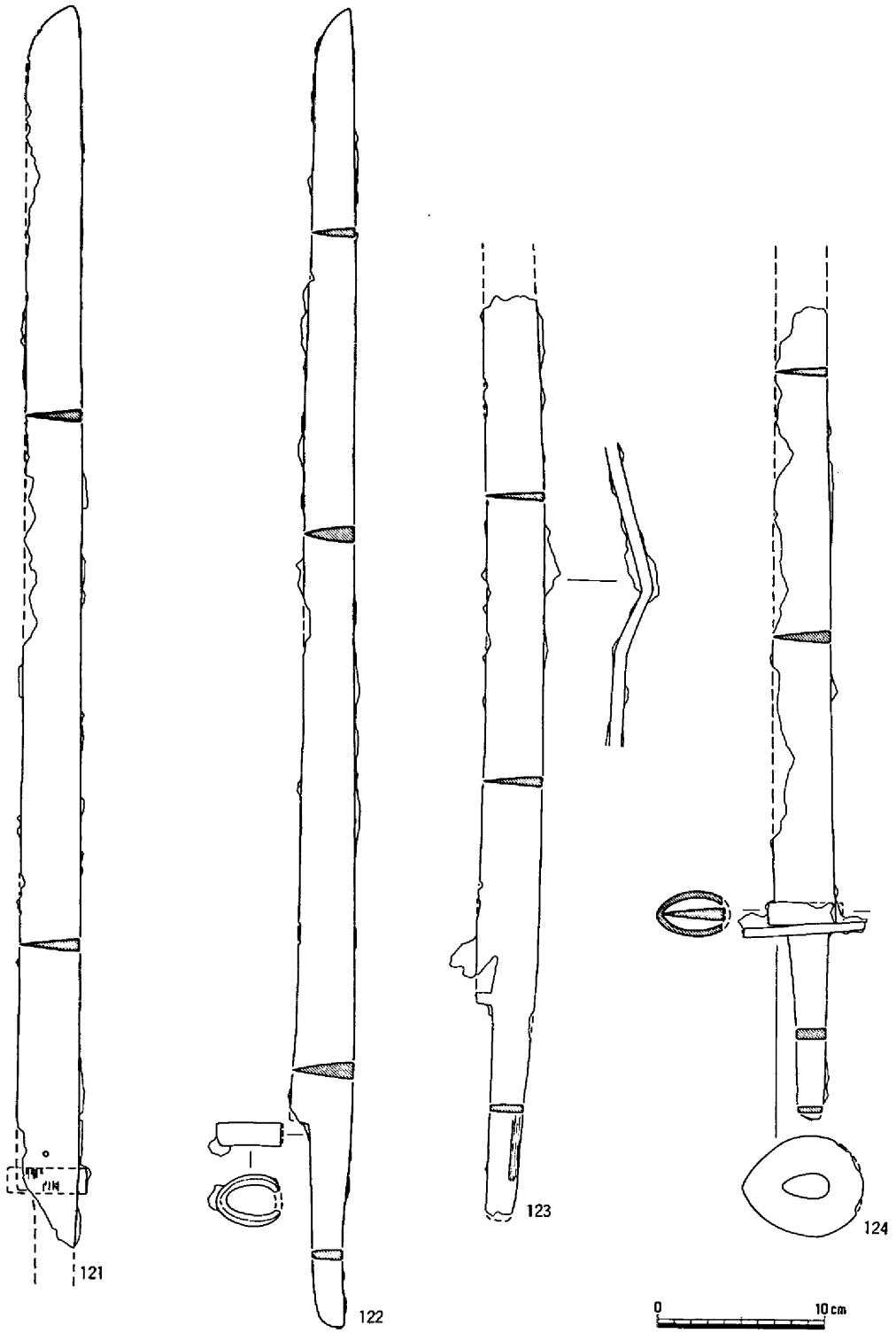
値は、口径13.9～15.9cm・器高5.3～5.6cmを測り、口縁端部は丸く仕上げている。外面の口縁部と体部の境には、鈍い稜が認められる。外面の天井部はヘラケズリを行い、貼り付けのつまみは全体にヨコナデを施している。外面の口縁部から体部にかけてと内面全体はヨコナデを施しているが、内面の天井部はいずれも仕上げナデを加えている。

高杯　2点の長脚無蓋高杯は、杯部が浅くて脚部に透しを有するもの（**214**）と、杯部が深くて脚部に透しがないもの（**215**）である。前者は口径12.1～12.7cm・器高15.5cm・脚底径11.3～11.9cmを測り、脚部には3方向で2段の長方形を呈する透しが存在する。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面の杯部下半から脚部にかけてカキメが認められる。また脚部の中位には、2条の凹線が存在する。後者は口径10.5cm・器高13.5cm・脚底径10.2cmを測り、脚部には透しがない。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面の杯部下半から脚部にかけてカキメが認められる。杯部の内面底部には仕上げナデが加えられ、脚部内面にはシボリ痕跡が残存している。また脚部の中位には、2条の浅い凹線が存在する。

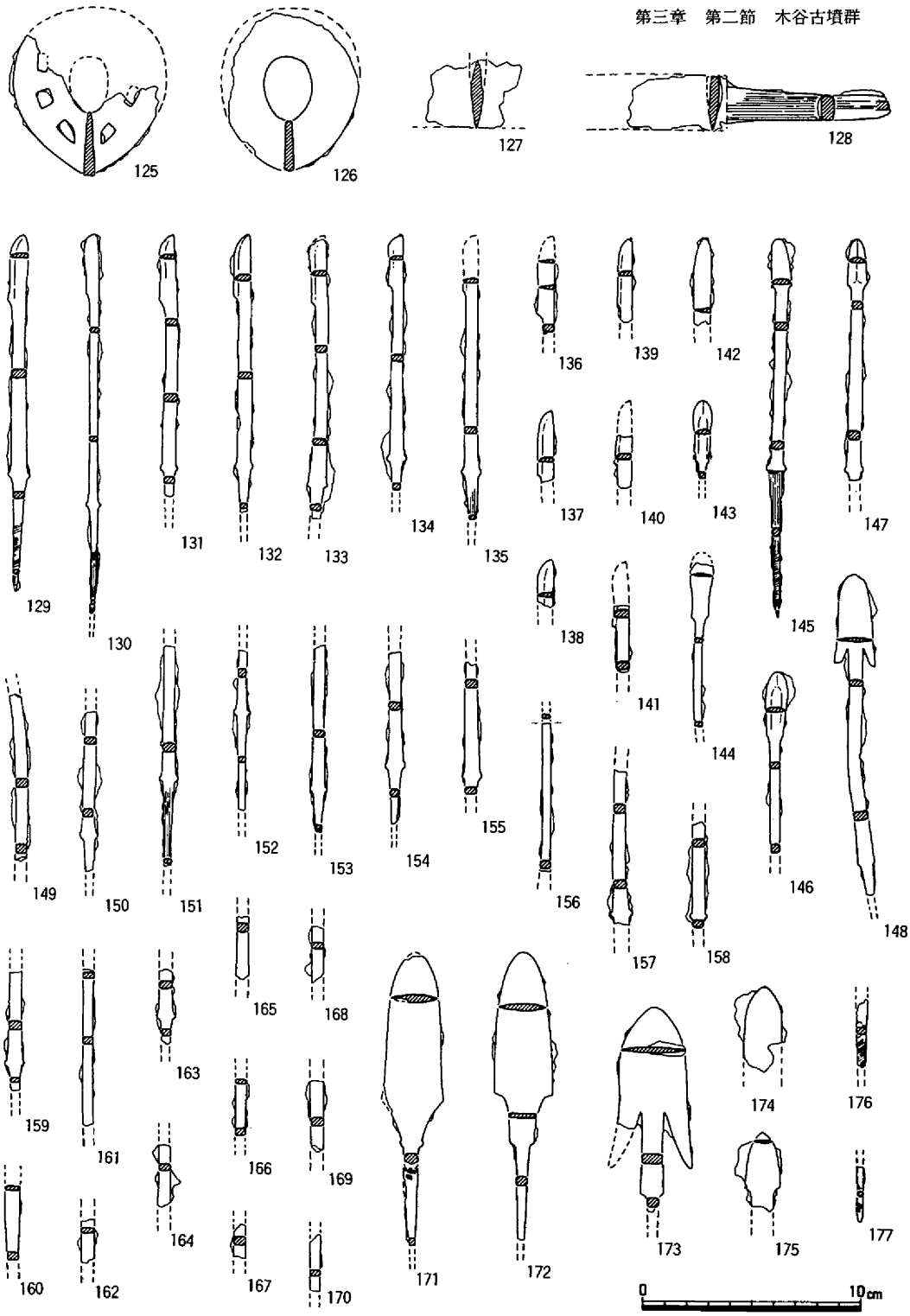
脚部に3方向で2段の長方形を呈する透しが存在する長脚有蓋高杯が、6点（**217・219・221・222～224**）も出土している。そのうち3点は、前述のように蓋とセットになる。**222**はやや小型のもので、全体の器計が蓋しく歪んでいる。その計測値は、口径13.3～13.7cm・器高17.0～17.8cm・脚底径14.4cmである。残る5点の長脚有蓋高杯は、口径12.0～14.2cm・器高17.0～19.5cm・脚底径14.8～16.2cmを測り、ほぼ似た法量と形態になっている。これらはいずれも内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面の杯部下半から脚部にかけてカキメが認められるもの（**217・219**）や、外面の杯部下半がヘラケズリのままであるもの（**221**）が存在する。杯部の内面底部にはすべてのものが仕上げナデを加え、外面の脚部中位には2条の凹線が認められる。

短脚無蓋高杯が5点（**225～229**）出土している。そのうち全体の器形が大きい**225**は、口径13.6cm・器高9.9cm・脚底径9.1cmである。ほぼ同じ法量を有する残りの4点は、口径12.0～13.9cm・器高7.7～7.8cm・脚底径8.3～10.0cmを測る。これらすべてのものが内外面とも全体にヨコナデを施し、脚外面にシボリ痕跡が認められるもの（**226・228**）や、全体に自然釉が付着しているもの（**227・229**）がある。

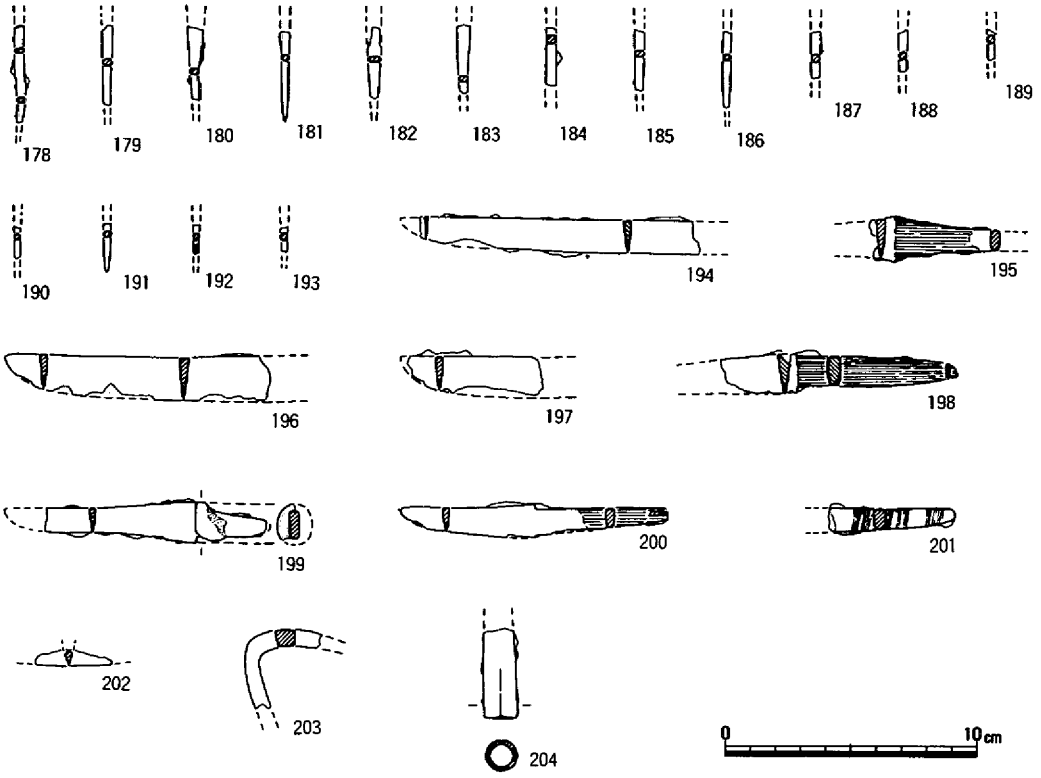
短脚有蓋高杯が6点（**230～235**）も出土しているが、その蓋は1点も発見されていない。最大規模を有する**230**の計測値は、口径12.3～13.3cm・器高8.6cm・脚底径10.2cmである。残る5点は、口径11.9～13.3cm・器高6.8～8.6cm・脚底径8.9～10.2cmを測り、法量や全体の器形が似ている。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面の杯部下半にヘラケズリが認められるものや、杯部の内面底部に仕上げナデを加えているものが多い。また脚の外面にシボリ痕跡が存在するものや、全体に自然釉が付着しているものがある。



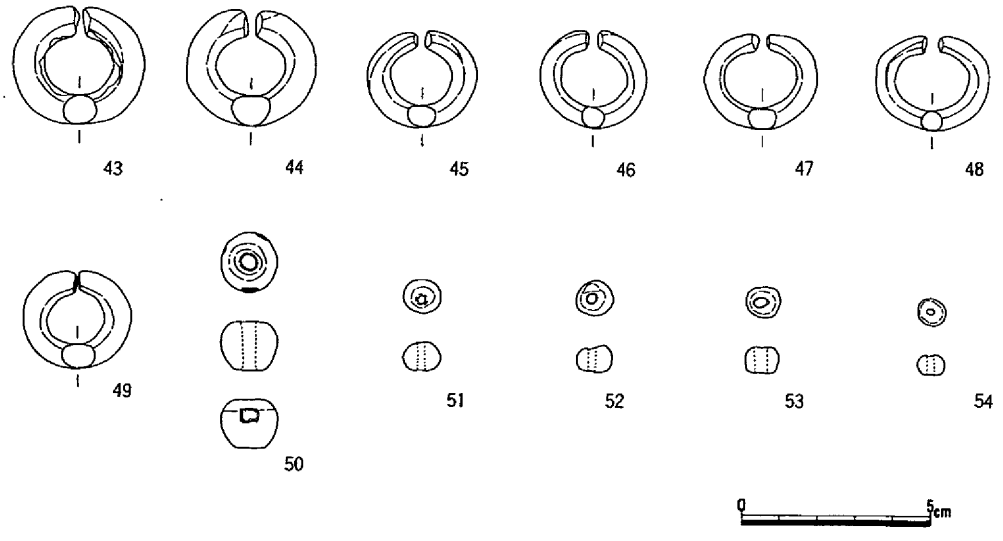
第46図　木谷11号墳出土遺物（5）（1/4）



第47図　木谷11号墳出土遺物（6）（1/3）



第48図　木谷11号墳出土遺物（7）（1/3）



第49図　木谷11号墳出土遺物（8）（1/2）

鉄器（第46～48図、図版68・69）

大刀　121は刀身の茎に近い部分中央に、円形の小孔がある。また鋒が付けられていた痕跡が認められ、関は片側のみに段を有する。122はほぼ完形品で、全長78.3cm・刀身長66.1cm・茎長12.2cmを測る。倒卵形の鋒が付属し、関は片側のみに段を有する。123の刀身はやや内反りで、刀身中央部分が屈曲している。茎には柄の木質が残存しており、関は片側のみに段を有する。124は他のものに比して茎が短く、茎長11.6cmである。関は両側に段を有し、鍔は倒卵形で透しは持たない。また断面が倒卵形の鋒が付属している。この大刀は、121～123に比してやや新しい型式と考える。

鍔　125と126は刀の鍔である。125は倒卵形で、８窓の透しを持つ。断面は外側が厚く、内側が薄く造られている。126は倒卵形で、透しは持たない。

刀　127は刀身の破片である。128は刀の刀身から茎にかけての部分である。関は両側に段を持ち、茎は短い。

鉄鏃　129～193は鉄鏃である。

129～170は長頸式鉄鏃である。129～142は長頸片刃箭式のものである。鏃身の刃部は、「Ｓ」字状に湾曲するものが多い。鏃身の造りは、136と142が平造で、他は片面に鎬を有する片切刃造である。すべての篦被関には、棘状突起が認められる。129は茎に糸巻きの痕跡が残存している。143～147は長頸柳葉式のものである。鏃身側縁の刃部が、「Ｓ」字状に湾曲するものが多い。鏃身の造りは、143と146が片切刃造、147が片鎬造であるが、144と145は不明である。145は茎に糸巻きの痕跡が残存している。すべての篦被関には、刺状突起が認められる。148は長頸腸抉柳葉式のもので、鏃身がやや大きく作られた型式である。鏃身は平造で、逆刺の先端はほぼ水平に切り落された形状をなしている。篦被関には棘状突起が認められない。山陰系の鉄鏃である。140～170は長頸式鉄鏃の頸部または茎の破片である。篦被関の残存するものについては、すべて棘状突起が認められる。

171～173は有茎の平根式鉄鏃である。171は柳葉式のもので、鏃身関は内湾して緩やかに頸部につながる。篦被関には棘状突起が認められる。茎には糸巻きの痕跡が残っている。172も柳葉式のものだが、鏃身関にほぼ水平の切り込みを持ち、関が明確に形成されている。篦被関には棘状突起が認められない。173は腸抉柳葉式のものである。逆刺は比較的深く、逆刺の先端は尖る形態をなしている。篦被関には棘状突起が認められない。

174と175は錆の著しい破片で明確ではないが、尖根系鉄鏃の鏃身かと思われる。

176～193は茎の破片である。176と177には、表面に糸巻きの痕跡が見られる。

なお204は有袋鉄鏃の袋部と思われる。前述した６号墳から出土した鉄鏃（42）と同様のもので、一端に合せ目が観察できる。

刀子　194～202は刀子である。いずれも関は、両側に段を有する型式のものである。茎には基本的に木質が付着しているが、199のみ鹿角が付着しているのが認められ、柄の材質の違いがうかがえる。199は一部に柄の表面も残っているようである。201は茎に糸巻きの痕跡が残存している。

不明鉄器　203は不明鉄器である。全体が「く」字状に曲がり、断面が方形を呈する鉄棒であるが、断片で何になるのか判断できない。

装身具（第49図、図版71－2）

耳環　木谷11号墳から出土した7点の耳環は、大量の土器類を検出した奥壁周辺より離れた石室中央部分と入口付近の棺台に使われた石近くに存在したが、遺体とともに石室内へ副葬された当時の位置ではなく、繰り返し追葬が行われたために場所を移動していると考えられた。

これらの耳環は、全体の形態や重さなどから、43と44、45と46、47と48がセットになると判断でき、49は精査したにもかかわらず片方が見つからなかった。遺体の両耳に耳環を着装して埋葬されたと考えるならば、この木谷11号墳の石室には少なくとも4体は入れられていたことになる。

43と44は外径3.07～3.42cm・内径1.50～1.78cm・断面径0.81～0.89cmを測り、どちらも鉄地金銅貼で重さは30.77ｇと30.71ｇである。45と46は外径2.57～2.92cm・内径1.44～1.73cm・断面径0.58～0.75cmを測り、どちらも鉄地金銅貼で重さは16.21ｇと13.26ｇである。47と48は外径2.45～3.06cm・内径1.50～1.92cm・断面径0.49～0.66cmを測り、どちらも鉄地金銅貼で重さは9.16ｇと8.81ｇである。49は重さ4.32ｇと極めて軽い中空の珍らしい耳環である。全体の計測値は、外径2.60～2.74cm・内径1.31～1.39cm・断面径0.65～0.88cmを測り、鉄地金銅貼になっている。

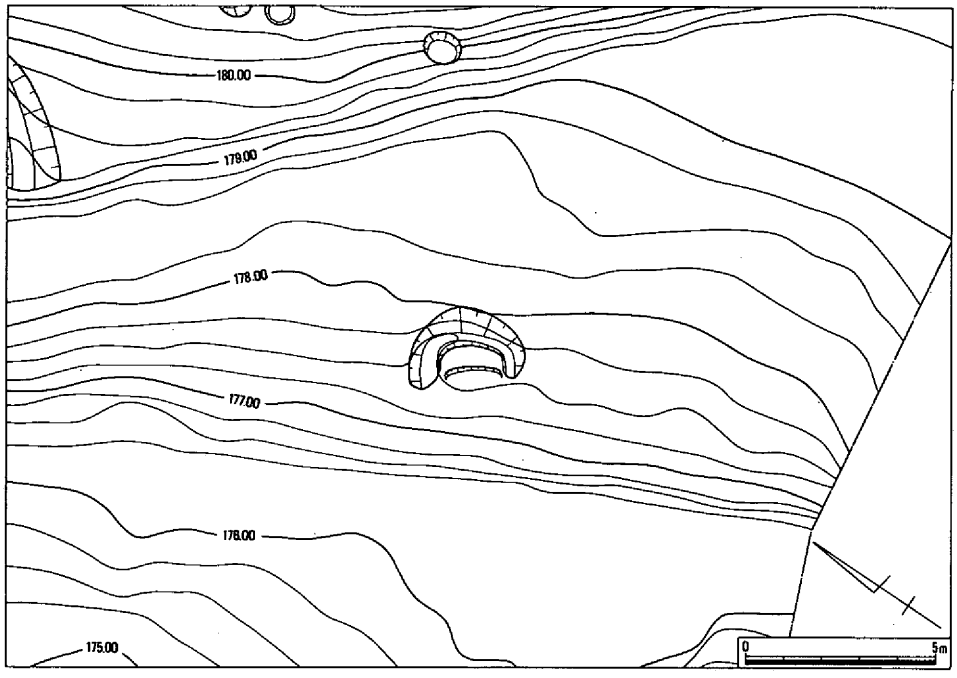
玉類　この玉類も耳環と同様に、石室の中央部分と入口付近の棺台の間から出土した。

50はトンボ玉で、木谷11号墳のように小規模な古墳から出土するのは珍らしい貴重な遺物である。高さ1.25cm・胴径1.45cmを測るガラス製の濃いブルーを呈する本体の胴部に、黄色のガラス粒3個を埋め込んでいる。中央の円孔は両面から穿孔され、上下の両端は丁寧に面取りが施されている。ちなみにこのトンボ玉の重さは3.84ｇである。

51～53は練玉とも呼ばれる土製の小玉で、いずれも黒褐色を呈している。51は高さ0.80cm・胴径0.98cmで、重さは0.61ｇである。52は高さ0.71cm・胴径0.97cmで、重さは0.58ｇである。53は高さ0.71cm・胴径0.91cmで、重さは0.57ｇである。

54はガラス製の小玉である。高さ0.48cm・胴径0.75cm・重さ0.38ｇで、全体にコバルトブルーの色調を呈している。

なお玉類の数量は、須恵器や鉄器の出土量に比して極めて少ないと感じられた。

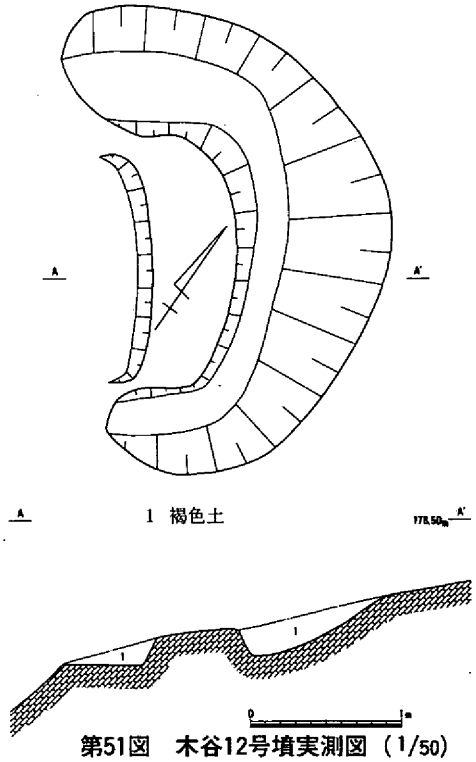


第50図　木谷12号墳周辺地形測量図（1/200）

(7)　木谷12号墳

この12号墳は、古墳が破壊された痕跡ではないかと推定したNo.37段状遺構の西側に接して存在したが、「コ」字状を呈する溝が認められただけで、石組の遺構は何も検出できなかった。また地形の低い南西側の部分は、後世の水田造成によって削平され、溝の痕跡も残存しなかった。

溝に囲まれた内側には、石の抜き取り痕跡が認められた。それによると、小規模な石室を築造し、その周囲に周溝を巡らせていたようで、埋葬施設だけの簡単な古墳であったと推定される。周溝内や周辺を精査したが、遺物は何も出土しなかった。



第51図　木谷12号墳実測図（1/50）

(8) 木谷13号墳

調査前の状況

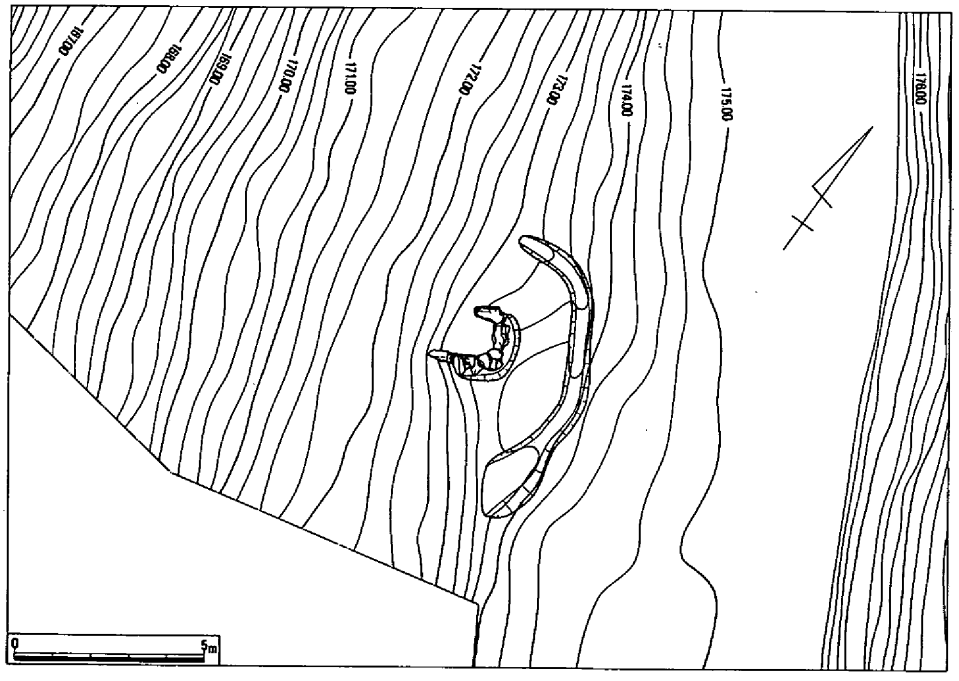
木谷古墳群で発掘調査を実施した範囲の南西端部に新しく発見した古墳で、周溝と石室の一部がわずかに残存していた。この古墳が所在したのは、目木川に向かって急勾配に下がっていた斜面で、こんな所に古墳があったのかと不思議に思うような地点であった。

発掘調査範囲のほぼ全域にわたって遺構が検出されたため、排土置場の確保が極めて困難になった。それでこの急斜面を利用すれば、多量の土砂が捨てられると考え、下草や雑木を刈り取ったところ、比較的大きな石が存在するのを確認した。この石は上方から転落したのか、人工的にその位置に持って来て置かれているのか判断できなかったため、幅の狭いトレンチを設定して調査した。その結果、この石は古墳の奥壁に据えられた鏡石であることが判明し、奥壁に面した左右両側壁の一部も検出した。

墳丘と周溝（第52図、図版44－1）

この古墳は天井石がすでに1枚もなく、奥壁と両側壁の一部がわずかに残存していただけだったから、墳丘は認められなかった。

奥壁から約2m離れた地形の高い北東部分に、周溝の一部を検出した。検出面での幅は0.60



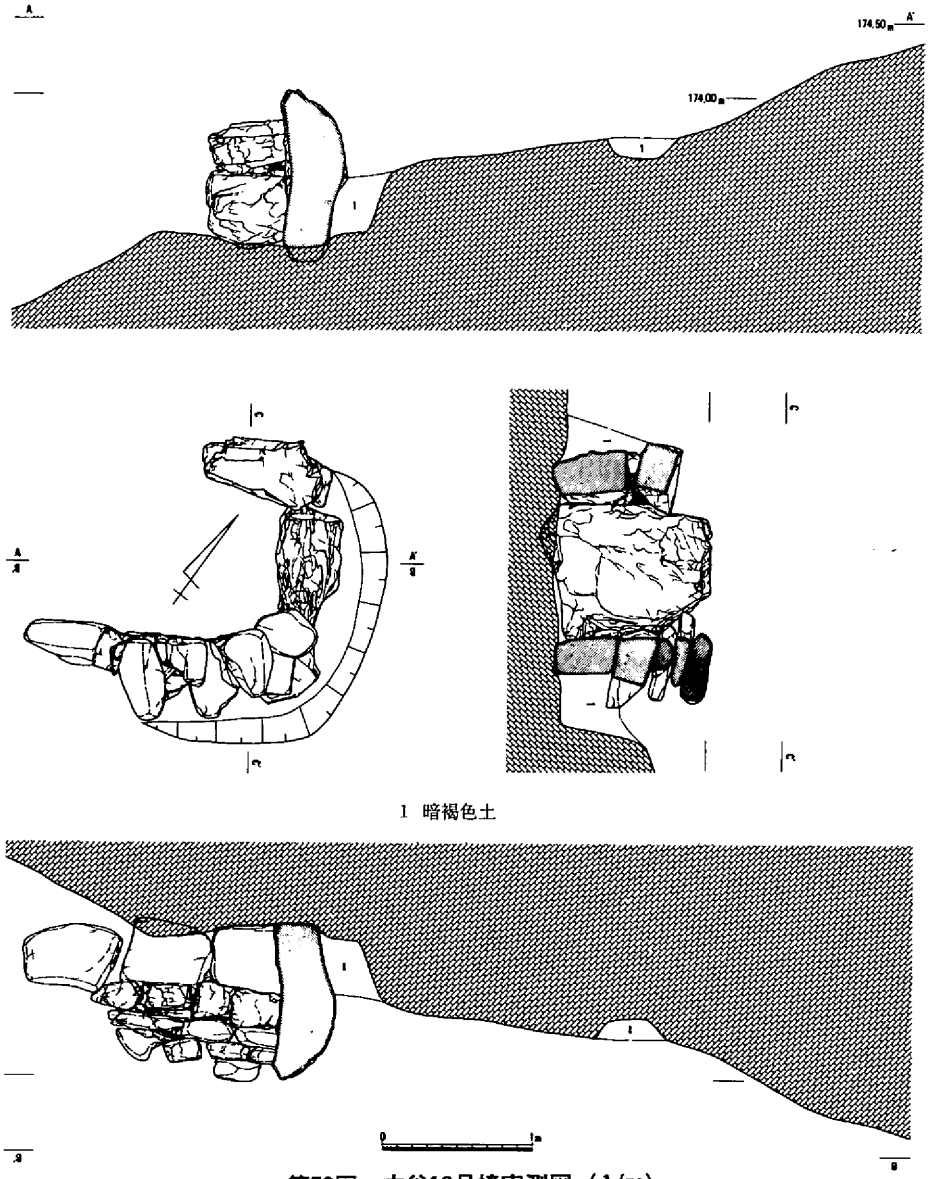
第52図　木谷13号墳周辺地形測量図（1/200）

～1.50ｍを測り、最大の深さは14cmであった。この周溝の痕跡から13号墳が築造された当時の規模を推定すると、径が７～８ｍの地形に規制されて歪んだ円墳になるであろう。

石室（第53図、図版44）

この石室は横穴式石室であるが、急斜面に所在したから南西側に位置する地形の低い部分が削平され、奥壁と奥壁に面した両側壁の一部がわずかに残存していただけだった。

奥壁には高さ約110cm・幅約90cm・厚さ約35cmの安定した巨石を１個だけ据え、左側壁との



第53図　木谷13号墳実測図（1/50）

接点には小さな河原石を詰めていた。残存する左側壁の基底部には、いずれも角が取れて丸くなった3個の河原石が認められ、その上位の2段目には4個の割石を小口積にしていた。さらにその上位の3段目以上になると、小規模な河原石を主体に積み上げ、割石は極端に少くなっていた。この左側壁の壁面は、石組みによる横方向の目地が平行線を呈して揃っていた。右側壁については、奥壁に接した2段だけが残存していた。基底部の石は風化が著しい丸みを有するもので、上位の割石との間に小さな河原石や割石を充填していた。

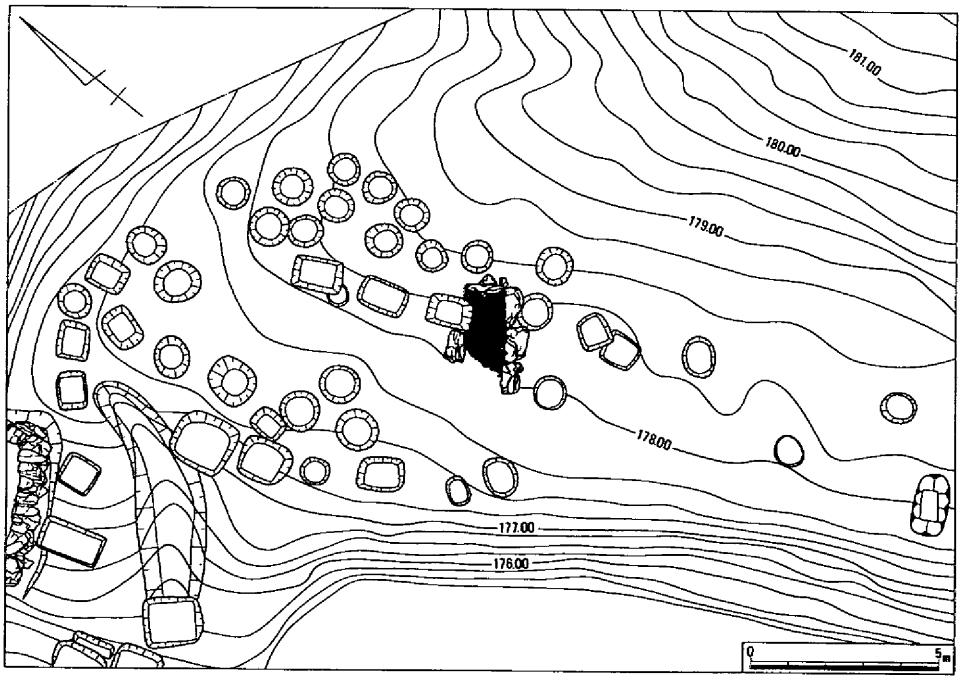
木谷13号墳の残存した石室の計測値は、奥壁幅0.95m・高さ1.05m以上になるであろう。

なお精査したにもかかわらず、遺物は存在しなかった。

(9) 木谷14号墳

調査前の状況

調査範囲の北西部で検出した古墳である。中近世の土壙墓群を調査していた時に、比較的大きな石が「コ」字状に並び、内部から須恵器の壺や高杯などが出土して、その所在が明らかになったのである。このような状況であったから、調査前の段階では、墳丘状の高まりや石室に使われた石が露出しているような様相は認められなかった。



第54図　木谷14号墳周辺地形測量図（1/200）

墳丘と周溝（第54図）

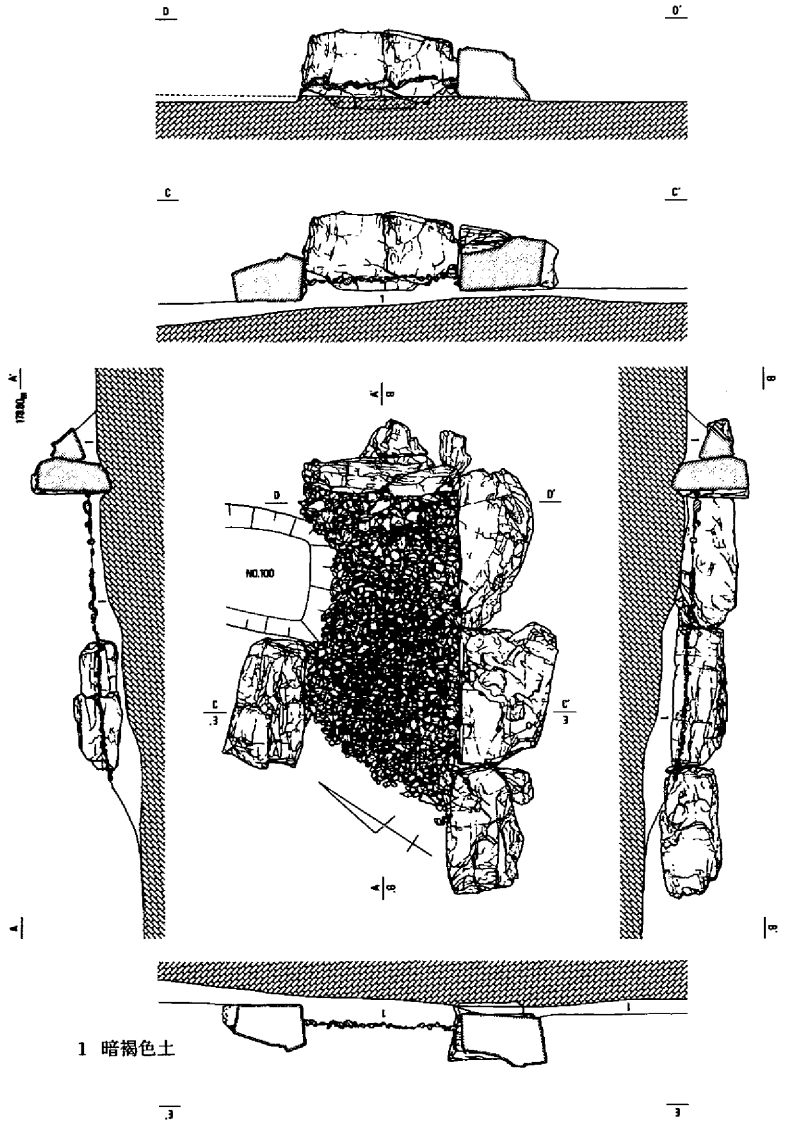
調査前の状況のところでも記したように、古墳の調査だけに限定することなく、丘陵上の全面調査を実施して偶然に発見した古墳であるから、墳丘は存在しなかった。周溝を精力的に追求したが、全く検出できなかった。

石室（第55図、図版45－1）

木谷14号墳は埋葬施設の一部だけが辛うじて残存した古墳で、横穴式石室だったと考える。地形の低い南西側の部分は、削平されて基底部の石も存在しなかった。

奥壁に残存した基底部の石は1個だけで、高さ約50cm・幅約100cm・厚さ約20cmで、ひび割れが生じていた。左側壁の基底部には3個の石が存在し、上面のレベルはほぼ一定の高さに揃えられていた。右側壁は後世の中近世土壙墓で破壊され、残存したのは中央で割れた石が1個だけであった。

この石室の基底部に据えられた石は、奥壁のものが地山面をわずかに掘り窪めていただけで、それ以外の側壁のものは旧表土である暗褐色土



第55図　木谷14号墳石室実測図（1/50）

の上に置いていた。石室内の床面は、旧表土の上に小さな河原石を密集して敷きつめていた。その床面のレベルは、奥壁から削平された部分に向かって、緩やかに傾斜していた。

この石室の幅は約１ｍで、袖の有無や高さなどは不明であった。

遺物出土状況（第56図、図版45-2）

木谷14号墳の石室は、５個の基底部の石と床面に敷き詰められた河原石がわずかに残存する状態であったが、石室内から出土した遺物は、副葬された当時の位置からほとんど移動していないと考えられた。

須恵器は奥壁に面した位置から出土した。壺は横倒しになった上面が半截されており、高杯は杯部の口縁部から胴部にかけて破損していた。杯身と杯蓋が、口縁部を合せてセットになった状態で存在したが、個々の法量や色調を調べた結果、２点の身と蓋がぴったり合致しないことが判明した。なおこの古墳の近くに別の古墳は存在しなかったので、石室周辺の表土中より採集した須恵器も、14号墳に本来は伴っていた遺物と判断した。

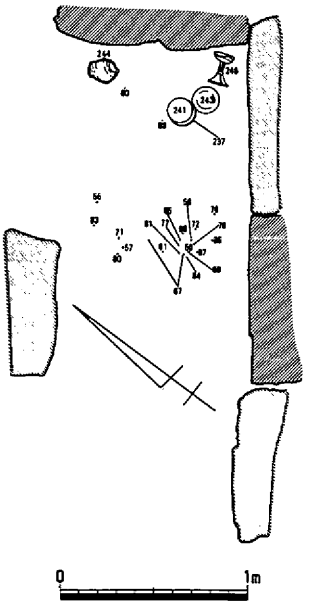
玉類の装身具は、須恵器の出土地点から南西方向へ約80cm寄った石室中央部に近い位置に集中して存在し、２点だけが奥壁に面した場所から発見された。この出土状態から推定して、遺体の頭位は、須恵器と玉類が集中して出土した奥壁に近い中間の空白部分になると考えた。

出土遺物

須恵器（第57図、図版62）

杯身・杯蓋　杯身が４点（**237～240**）と杯蓋が３点（**241～243**）を図示することが可能であった。杯身は口径12.2～12.4cm・器高4.1～4.8cmを測り、口縁端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。内面の底部には、いずれも仕上げナデを加えている。杯蓋は口径13.9～14.2cm・器高3.8～4.5cmを測り、外面の口縁部と体部の境に稜を有するもの（**241・242**）も存在する。また内面の口縁端部にはいずれも段が認められ、内面の天井部に同心円のタタキ痕跡が残存しているもの（**243**）もある。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。内面の天井部には、いずれも仕上げナデを加えている。

壺　頸部から口縁部にかけての形態が不明である。外面の底部にはユビオサエの痕跡が認められ、外面の体部下位は



第56図　木谷14号墳
遺物出土状況（1/40）

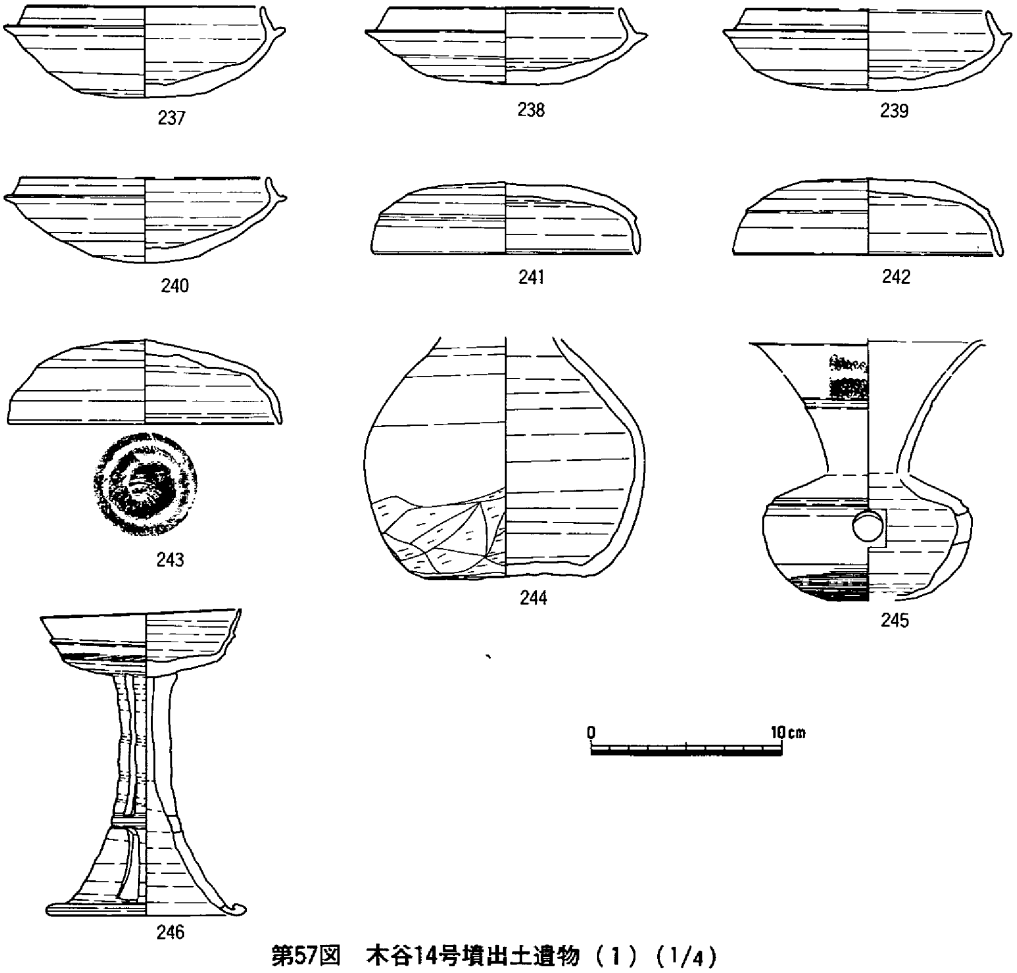
手持ちのヘラケズリを行っている。内面全体と外面の体部上位は、ヨコナデを施している。

甕　6片の小破片を接合して図化したものである。頸部から口縁部にかけてラッパ状に開き、外面の口縁部にクシ描波状文と1条の凹線が認められる。外面の底部にはカキメが存在し、頸部から胴部上位にかけてヨコナデを施している。

高杯　口径10.5～10.8cm・器高16.0～16.8cm・脚底径10.5～10.7cmを測る長脚無蓋高杯で、脚部には3方向で2段の長方形を呈する透しが存在する。脚の端部は、器壁が薄くなって折れ曲がっている。内外面ともヨコナデを施し、全体の器形が歪んでいる。

装身具（第57図、図版71－3）

玉類　**55～87**は練玉とも呼ばれる土製の小玉で、高さ0.56～0.76cm・胴径0.74～0.86cmの大きさを有し、全体に黒褐色を呈している。**88～90**はガラス製の小玉で、高さ0.21～0.42cm・胴径0.33～0.39cmを測り、全体にコバルトブルーの色調を呈している。

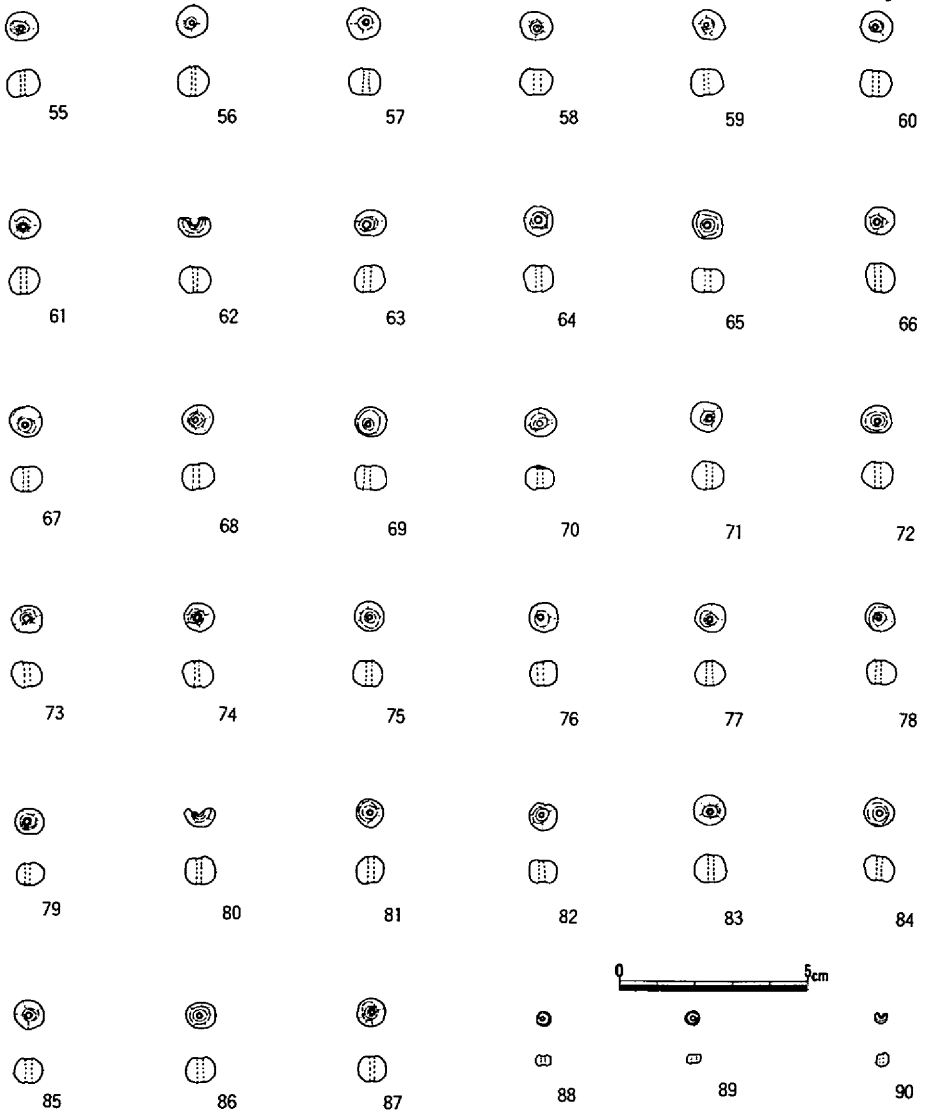


第57図　木谷14号墳出土遺物（1）（1/4）

(10) No.66土壙墓

木谷古墳群で発掘調査を実施した範囲の南端部に位置したが、周辺には古墳時代の遺構が存在しなかった。平面形は隅丸長方形を呈し、床面から浮いた状態で須恵器の杯蓋２点が出土した。検出面での計測値は、長径168cm・短径70～80cm・深さ22～30cmを測り、断面形は「U」字形を呈し、床面のレベルが地形の低い方向へ著しく傾斜していた。

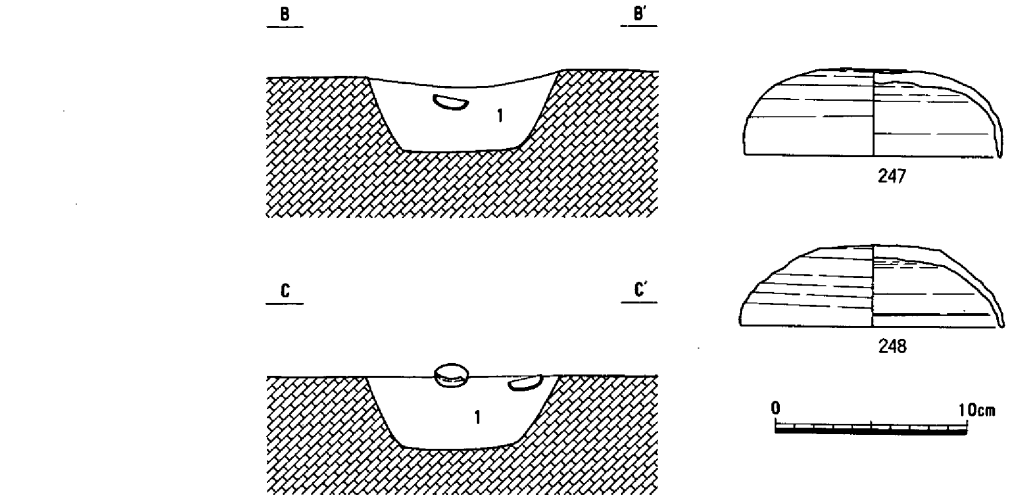
２点の杯蓋（**247・248**）は、口径13.3～13.6cm・器高4.3～4.6cmを測り、外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。

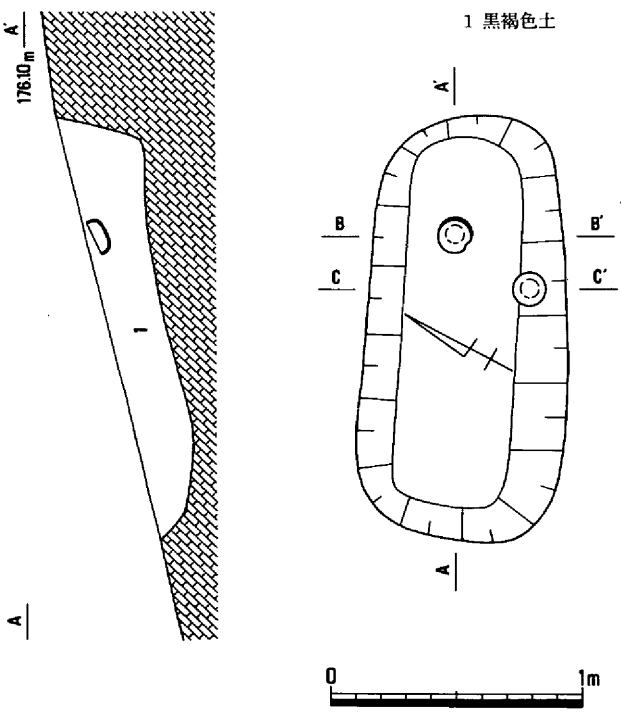


第58図　木谷14号墳出土遺物（２）（1/2）

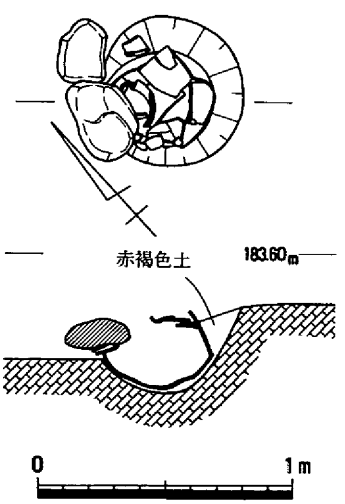
(11)　No. 8 壺棺

木谷７号墳から東方向へ約７ｍの地点に検出した遺構で、１点の大型壺が径約55cmの土壙内に埋納されていたため、壺棺と推定した。壺の口縁部付近には、角の取れた偏平な河原石２個が存在した。この壺の中や土壙内を精査したが、遺物は何も存在しなかった。



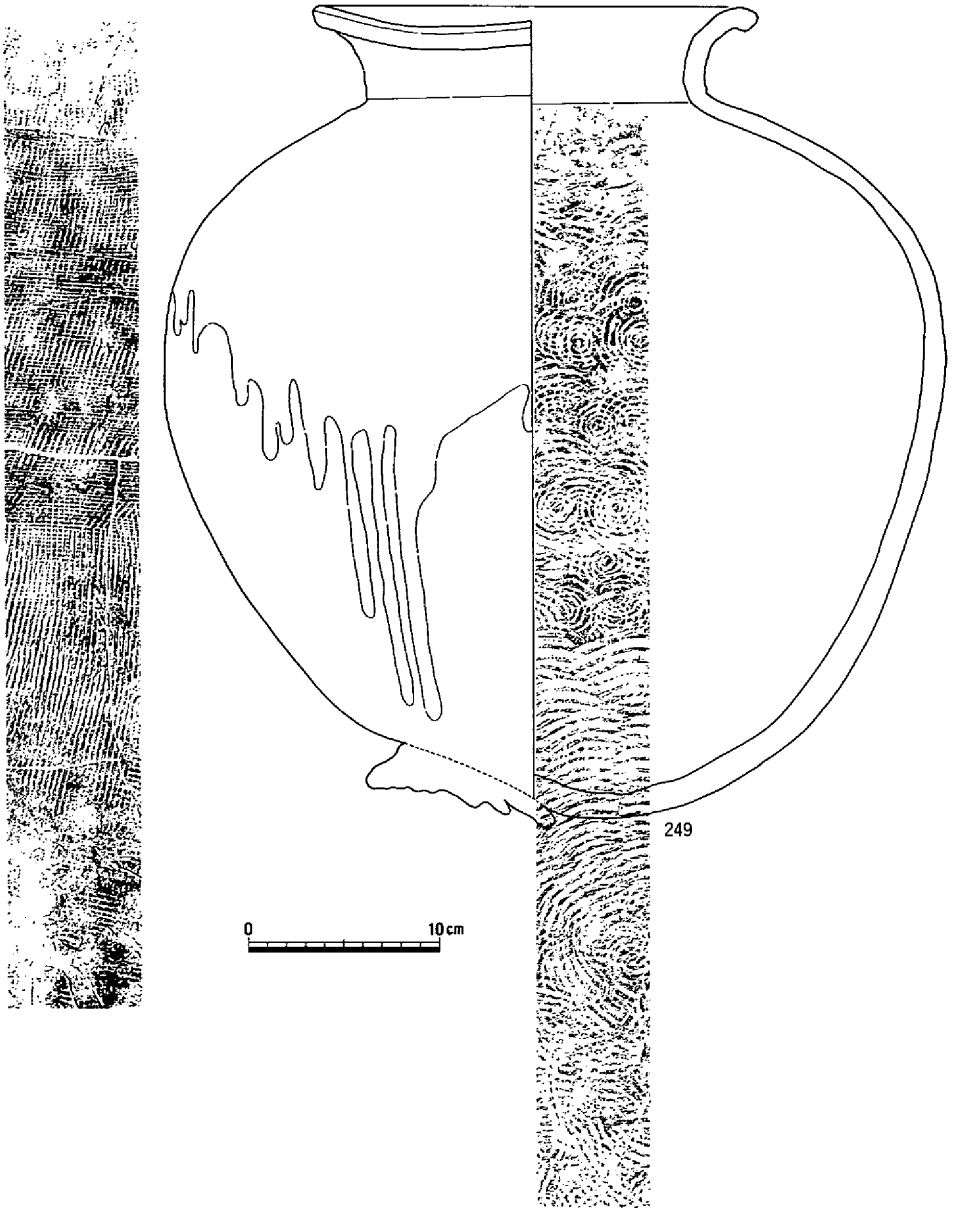


第59図　No. 66土壙墓（1/30）と出土遺物（1/4）



第60図　No. 8 壺棺（1/30）

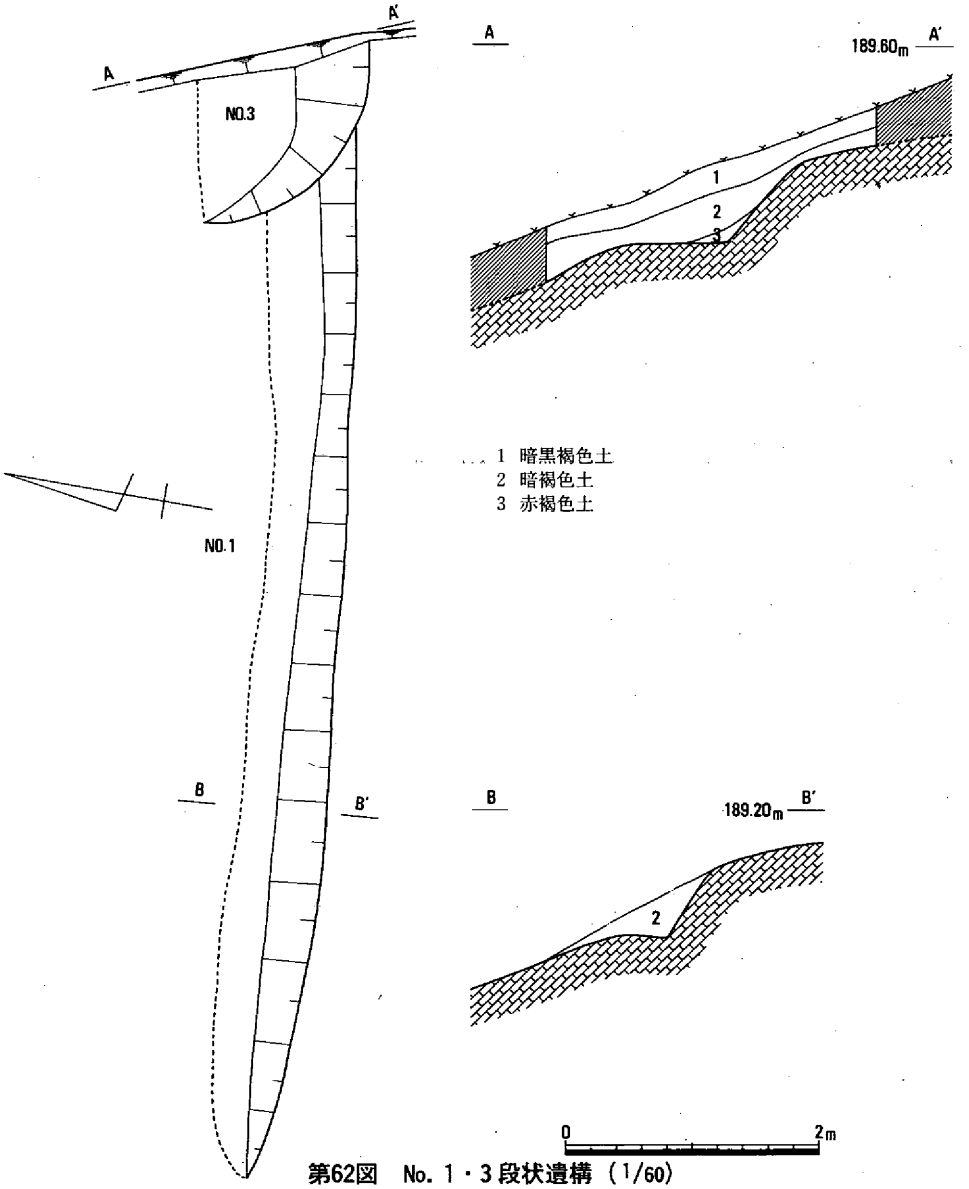
この壺棺に使われていた土器は、口径22.1cm・器高41.8～43.0cm・胴部最大径41.0cmで、全体の器形が歪んでいる。外湾した口縁の端部は、わずかに肥厚して丸く仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部から底部にかけては同心円のタタキ痕跡が顕著に認められる。外面の胴部から底部にかけては、縦方向のタタキ痕跡の上面に横方向のカキメを施している。外面の底部には須恵器片が付着し、胴部には濃い自然釉が垂れ下がっている。



第61図　No. 8 壺棺に使われていた土器（1/4）

2．弥生時代の遺構と遺物

木谷８号墳の発掘作業で墳丘盛土を除去した時に、土砂の中に比較的多くの弥生土器片が含まれていた。さらに作業を進めた結果、木谷８号墳の築造によって削平された住居址３軒を検出し、壁体溝や中央穴が認められた。このような状況から、木谷古墳群が所在した丘陵には、古墳以外に弥生時代の住居址も存在することが判明したため、調査期間を延長して道路建設予定地内に位置する丘陵の全面調査を実施することにしたのである。



第62図　No. 1・3 段状遺構（1/60）

(1) 段状遺構・住居址

発掘調査によって検出した段状遺構は4遺構にすぎないが、No.37段状遺構は形態が同じ16本の鉄鏃が出土しているため、弥生時代の遺構ではなく古墳が破壊された痕跡かもしれない。

木谷古墳群が所在した丘陵上の住居址は、比較的平坦な地点で検出したものは建て替えが行われていたものが多く、急斜面に存在したものは規模が小さかった。なお火災を受けて床面に炭化物や焼土が散乱していた住居址は、No.68住居址の1軒だけだった。

1) No. 1段状遺構

遺構（第62図、図版47-1）

木谷8号墳の北側に位置する斜面で検出した遺構で、東側部分をNo.3段状遺構に新しく切られていた。等高線に平行して延長約4.20mの長さに段が認められただけで、壁に沿う溝や柱穴は存在しなかった。極めて狭い床面には暗褐色土が堆積し、弥生土器片が出土した。

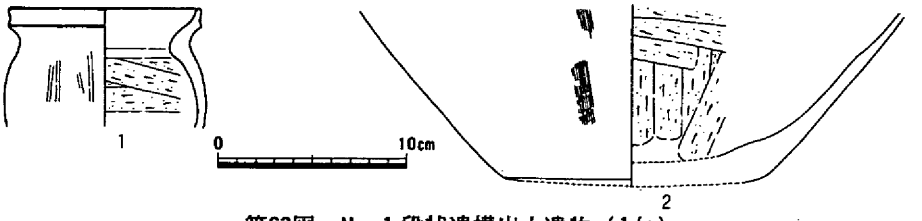
出土遺物（第63図）

1は口径約10cmを測る頸部の器壁が厚い小型の甕で、口縁は屈曲して斜め上方へ短く立ち上がり、端部を丸く仕上げている。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施し、胴部の内面は横または斜め方向のヘラケズリを行っている。外面の胴部は磨滅して調整手法の把握が困難であるが、縦方向の粗いヘラミガキを施しているのではなかろうか。2は壺または甕の底部破片である。内面はヘラケズリ痕跡が顕著で、外面は縦方向のヘラミガキを施しているようである。

2) No. 2段状遺構

遺構（第64図、図版47-2）

木谷8号墳の北側斜面に位置し、前述したNo.1段状遺構と接する状態で存在した。No.1段状遺構に平行して段が直線的に認められ、その下部には溝が存在した。この溝の検出面における幅は15～25cmを測り、深さは6～9cmであった。平坦な床面や段から離れた斜面に不規則に存在した柱穴を検出したが、この遺構に伴うと考えられるものはP－1とP－2であろう。



第63図　No. 1段状遺構出土遺物（1/4）

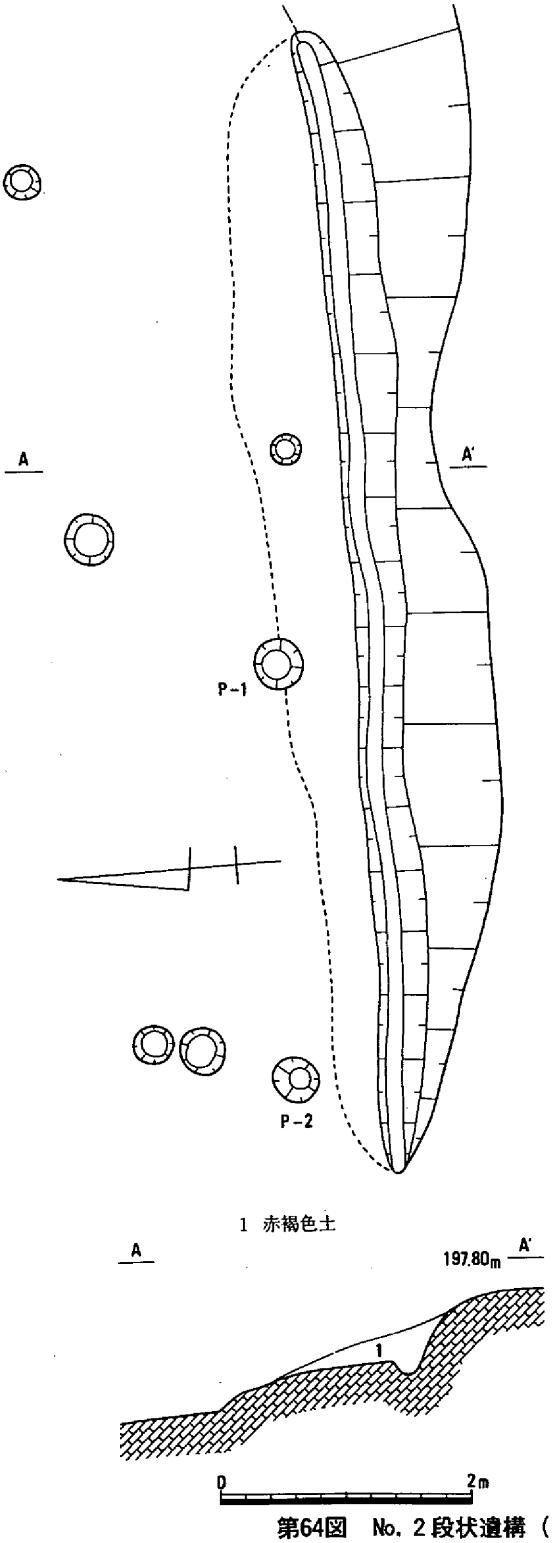
出土遺物（第64図）

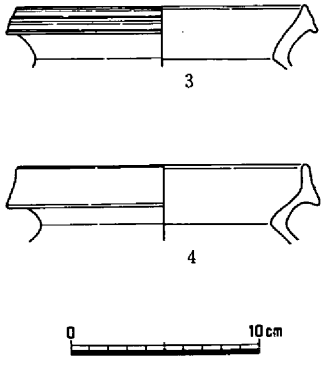
2点を図示することができたが、どちらも甕の口縁部の小破片である。**3**は斜め上方へわずかに外反して立ち上がった口縁の端部が、上下に拡張して2条の浅い凹線を有する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを施し、焼成は良好である。**4**は斜め上方へ張り出した口縁部が、屈曲して上方へ大きく立ち上がり、外側に広い面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを施し、口縁端部は丸く仕上げている。

3）No. 3段状遺構

遺構（第62図、図版47-1）

発掘調査を実施した範囲の北東端部に位置し、西側にはNo. 1段状遺構が存在した。この遺構の東側は調査範囲外になるため、発掘調査をすることができなかった。遺構が切り合っているNo. 1段状遺構との新旧関係は、No. 1段状遺構が古くこのNo. 3段状遺構が新しいことが判明した。遺構内には暗黒褐色土、暗褐色土、赤褐色土が堆積していたが、遺物は存在しなかった。



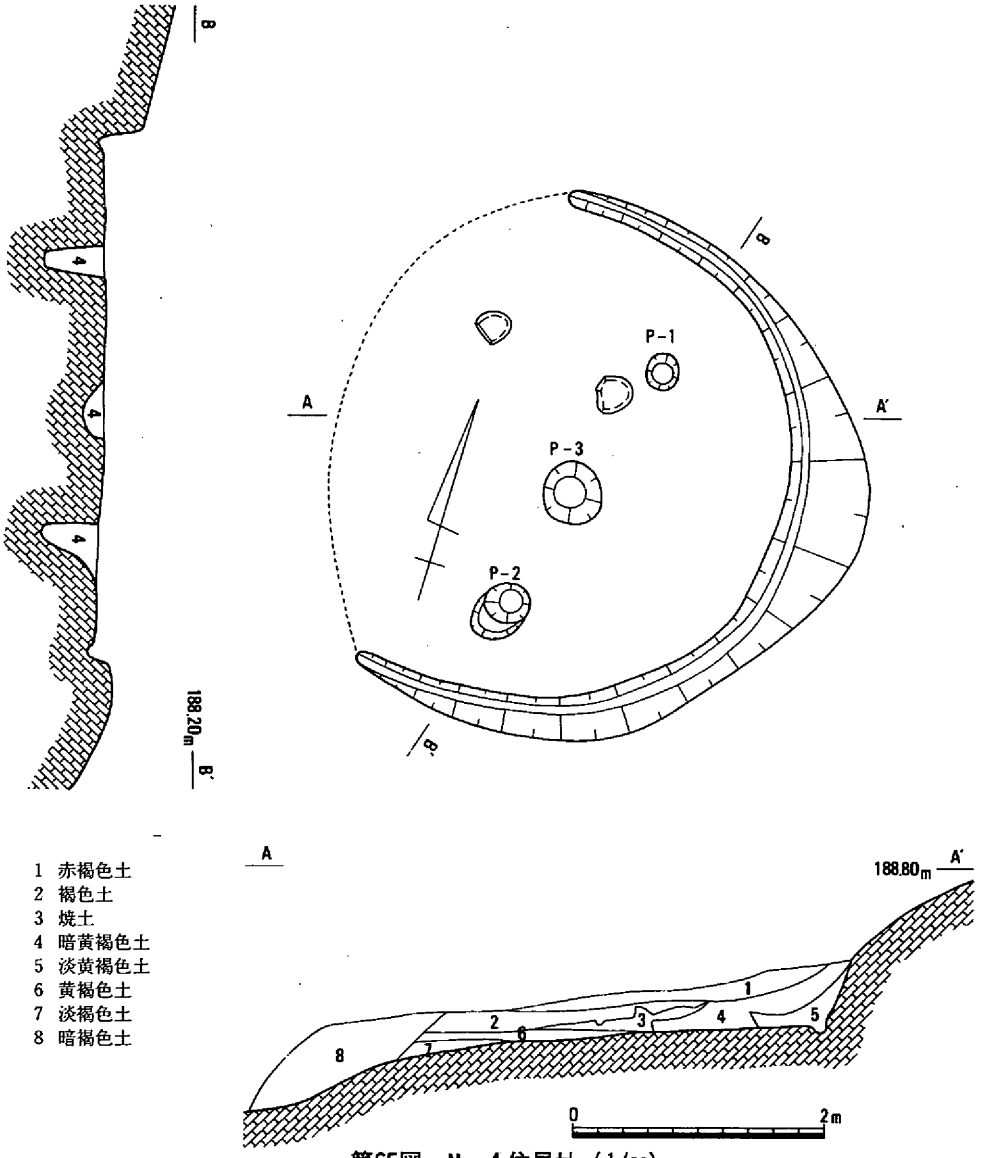


第64図　No. 2段状遺構（1/60）と出土遺物（1/4）

4）No. 4 住居址

遺構（第65図、図版47-3）

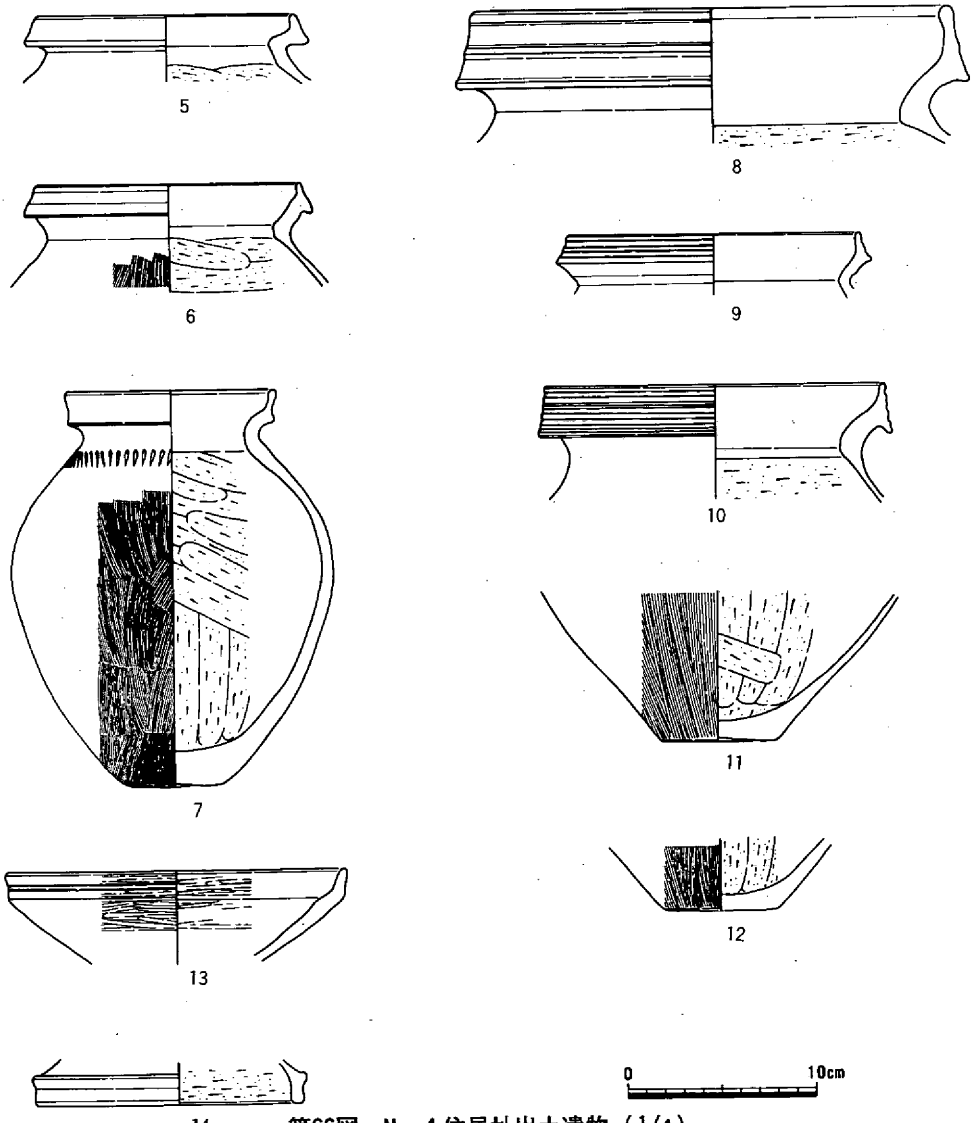
調査範囲の南東端部に位置する比較的急な斜面で検出した住居址で、周辺には遺構が存在しなかった。平面形は径約2.20mを測る小規模な円形を呈し、柱穴はP－1とP－2の2か所であった。P－3は中央穴で、床面には偏平な河原石2個が認められた。住居址内の覆土は複雑な堆積状態を呈し、床面から浮いて焼土も存在した。



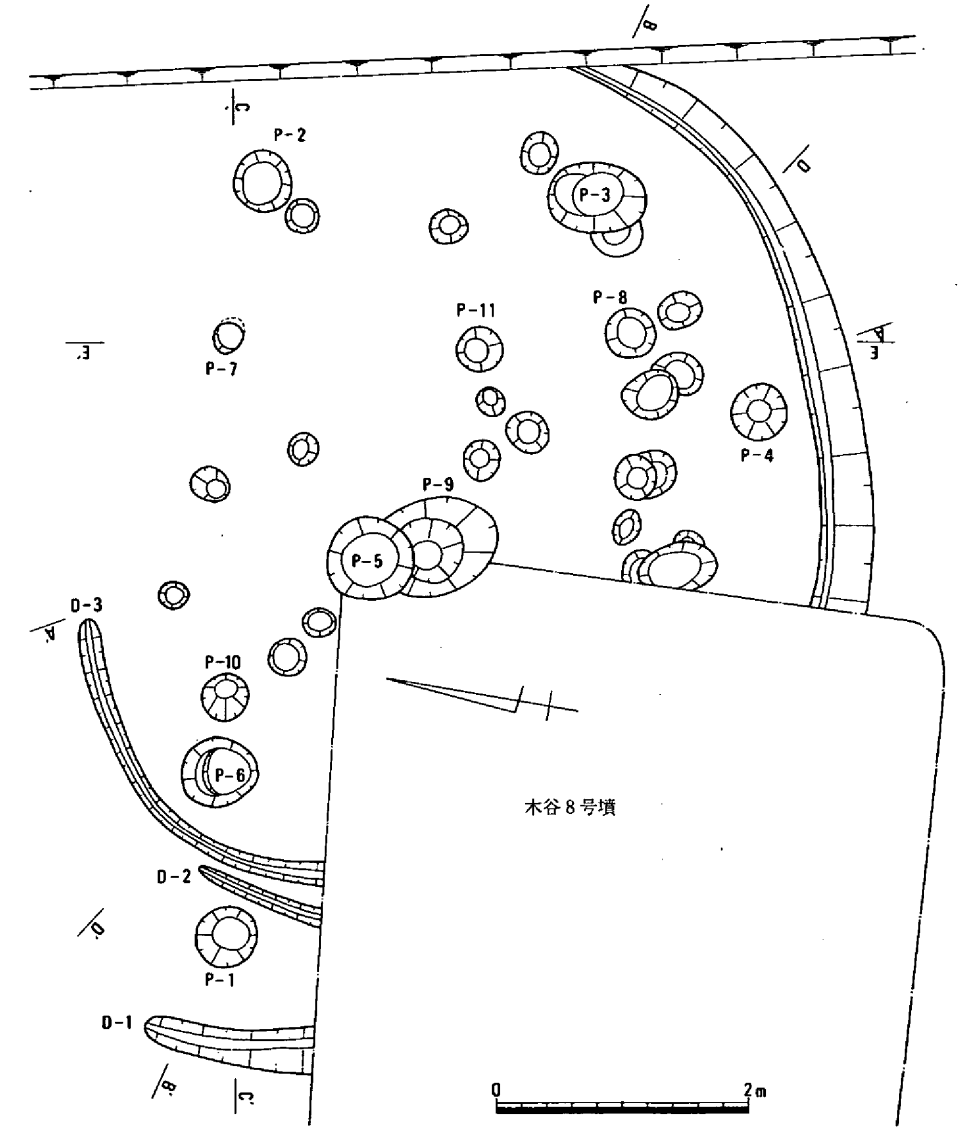
第65図　No. 4 住居址（1/60）

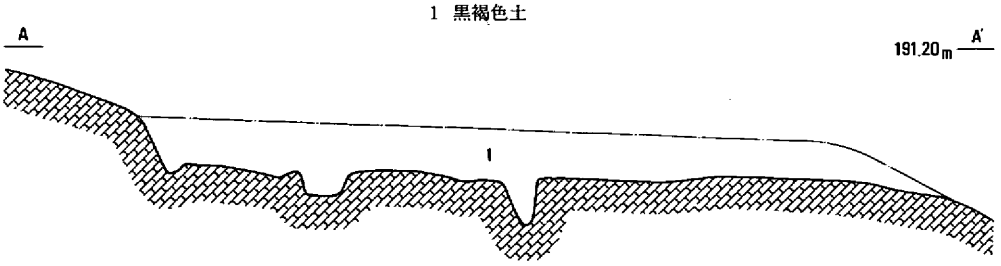
出土遺物（第66図、図版62）

甕（**5・6・8～10**）はいずれも口縁部の破片で、屈曲して短く立ち上がるもの（**5**）や外面に浅い凹線を有するもの（**6・8～10**）が存在する。**7**は全体の器形が明らかな底部の器壁の厚い壺で、口径10.9cm・器高21.1cmを測る。外面の頸部には刺突文が巡らされ、胴部にはハケメが認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、内面の胴部はヘラケズリを行っている。壺または甕の底部破片（**11・12**）は、内面にヘラケズリを行い、外面にハケメを施している。鉢（**13**）の破片は、内外面とも横方向のヘラミガキが認められる。高杯の脚端部と思われる破片（**14**）は、内面にヘラケズリを行い、外面にヨコナデを施している。



第66図　No. 4 住居址出土遺物（1/4）

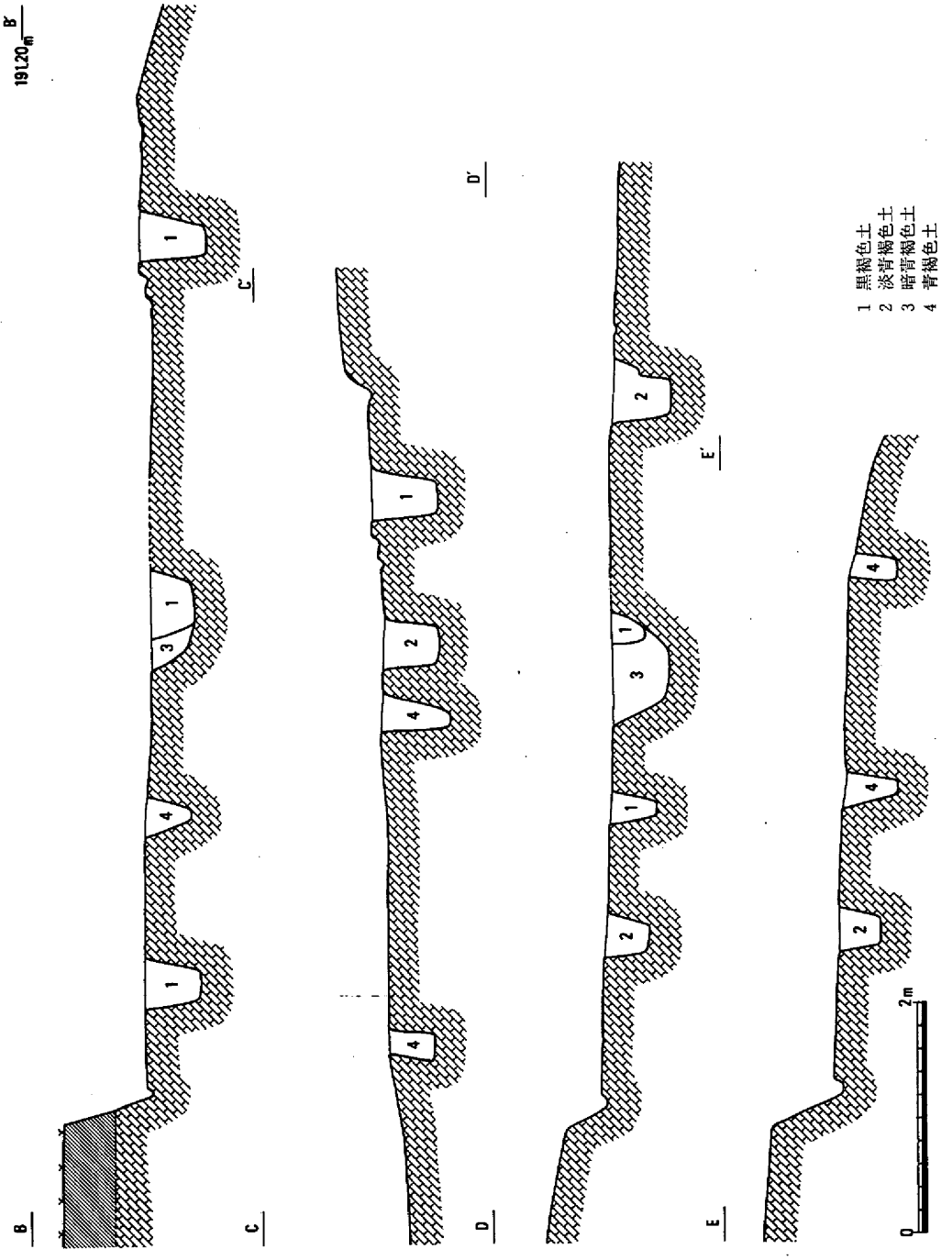




第67図　No. 7・39・40住居址（1）（1/60）

5）No. 7住居址

遺構（第67・68図）



第68図　No. 7・39・40住居址（2）（1/60）

木谷８号墳に切られた状態で検出した住居址で、発掘調査範囲の東端部である地形の最も高い位置に存在した。北西部分には３条の壁体溝が認められ、平坦な面にも多くの柱穴が存在することから、建て替えによって重複した３軒の住居址が所在することを把握した。８号墳によって削平された部分と東側の調査範囲外になる部分は不明であるが、南側の地形の高い部分は２軒の住居址が同一の壁体溝を踏襲していた。柱穴や壁体溝の中に堆積した土砂を比較検討したところ、柱穴と壁体溝の相互関係が判明し、規模の小さいものから大きいものへと拡張し、それに伴って柱穴の数も増加していた。それぞれの住居址の平面形は、いずれも楕円形に近い円形を呈していたが、これは丘陵上に立地したためであろう。

このNo.７住居址は床面積が最も広く、３軒の住居址のうちで最後に造られた遺構である。壁体溝は外側で検出したＤ－１で、北側は丘陵の斜面に位置して確認できなかった。柱穴はＰ－１からＰ－４の４か所で検出したが、それぞれの柱間隔から推定して本来は７本柱であったと考える。なお古墳の掘り方の隅に位置するＰ－５が、この住居址の中央穴と推定される。

出土遺物（第69図、図版30）

２点とも甕の口縁部の破片で、外面に浅い凹線があるもの（16）とないもの（15）がある。内面の胴部はヘラケズリを行っているが、それ以外は全体にヨコナデを施している。

６）No.39住居址

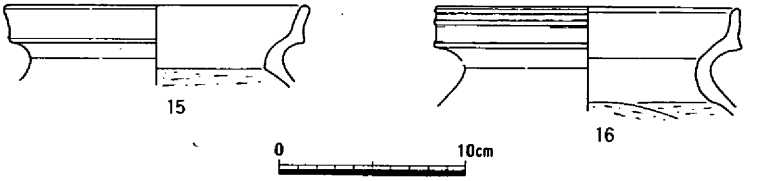
遺構（第67・68図）

この住居址の壁体溝はＤ－２である。柱穴はＰ－６からＰ－８の３か所まで検出したが、８号墳に削平された部分にさらに１か所あったようで、４本柱の住居址と考える。この住居址の中央穴はＰ－９で、No.７住居址の中央穴（Ｐ－５）に切られていた。

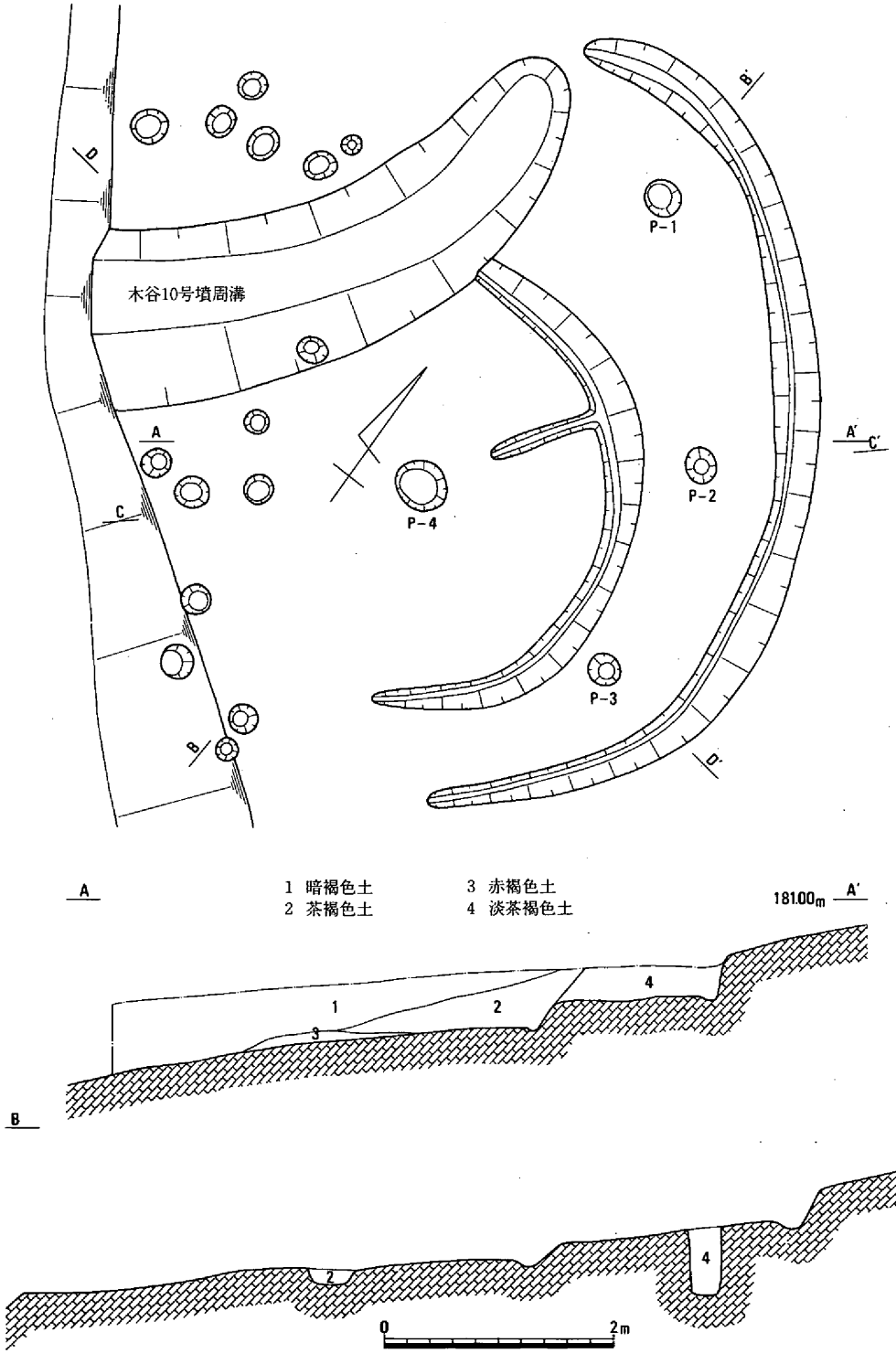
７）No.40住居址

遺構（第67・68図）

No.40住居址は木谷８号墳の下位で検出した３軒の住居址では最も古いもので、床面積は著しく狭かった。壁体溝はＤ－３で、南側に位置するNo.７住居址やNo.39住居址の床面に相当する部分は、削平されて残存しなかった。柱穴は４本柱となるＰ－10、Ｐ－７、Ｐ－11で、中央穴は検出できなかった。No.７住居址の中央穴（Ｐ－５）に削平されたのかもしれない。



第69図　No.７・39・40住居址出土遺物（1/4）

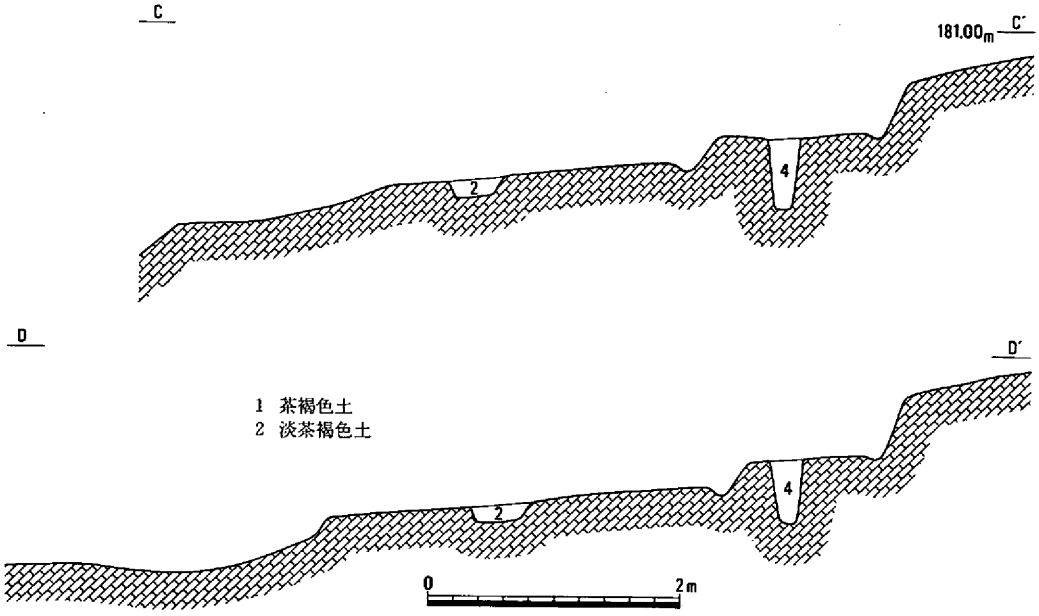


第70図　No.23・28住居址（1）（1/60）

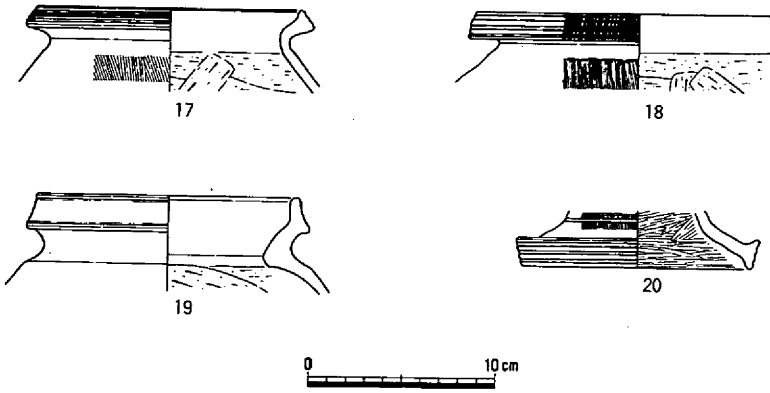
8） No.23住居址

遺構（第70・71図）

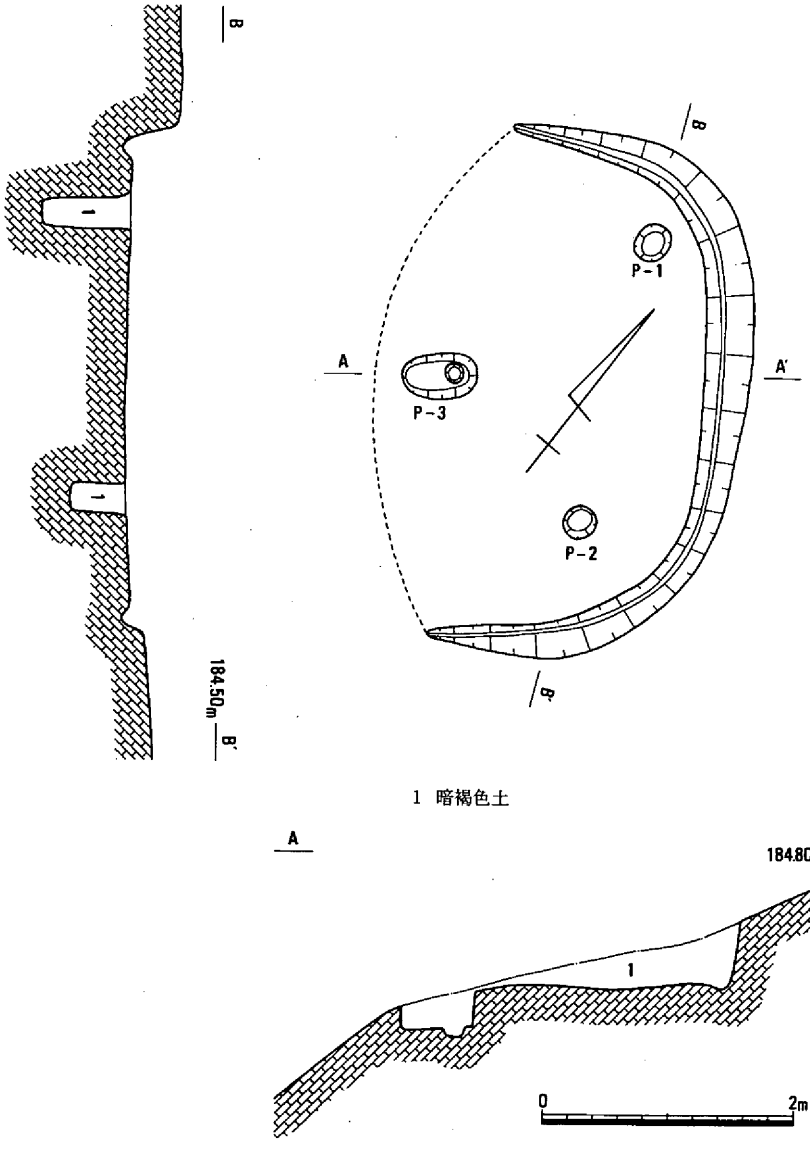
木谷古墳群で発掘調査を実施した範囲のほぼ中央に位置し、西側部分は木谷10号墳の周溝によって削平されていた。この住居址は小規模なNo.28住居址と重複していたが、土層断面観察用の畦を残して精査したところ、この大きいNo.23住居址が古くて小規模なNo.28住居址が新しいことが判明した。平面形は円形に近い形態を呈し、内部に淡茶褐色土が堆積していた。この住居址に伴う柱穴は、Ｐ－１からＰ－３までの３か所を確認したにすぎない。



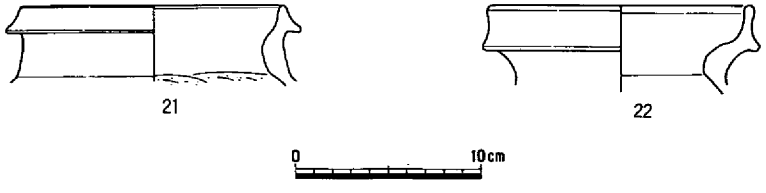
第71図　No.23・28住居址（２）（1/60）



第72図　No.23・28住居址出土遺物（1/4）



第73図　No. 24住居址（1/60）



第74図　No. 24住居址出土遺物（1/4）

出土遺物（第72図）

発掘調査の初期の段階では、２軒の住居址が重複していることがわからずに遺物を取り上げたため、後述するNo.28住居址に伴うものも混在した可能性もある。

17と18は甕の口縁部の破片である。頸部から斜め上方へ短く外湾した口縁の端部は、肥厚して浅い凹線が存在する面が認められる。18の口縁端部の外面には、さらに細い刺突文も巡らされている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面にはハケメが認められる。19は壺の口縁部の破片であろう。器壁の厚い頸部から短く外湾した口縁部は、さらに上方へ大きく拡張して端部を丸く仕上げている。内面の胴部はヘラケズリを行っているが、それ以外はヨコナデを施している。20は壺または甕の台と考える。端部は上下に拡張して、浅い凹線を有する面が認められる。内面はヘラミガキを行い、外面の端部は全体にヨコナデを施している。外面の中位には凹線が認められ、縦方向のハケメが存在する。

9）No.28住居址

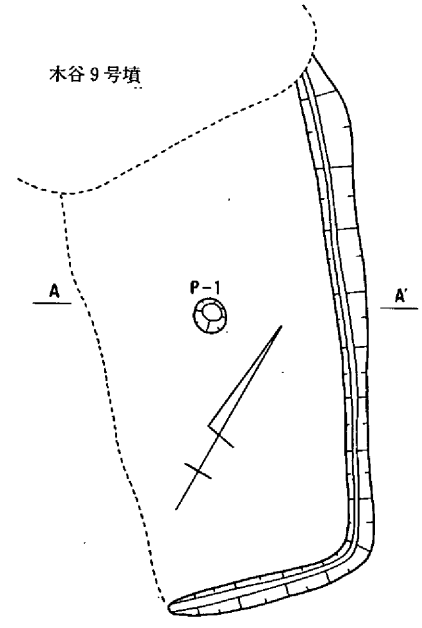
遺構（第70・71図）

径約４ｍの円形に近い形態を呈する住居址で、西側は木谷10号墳の周溝に削平されていた。Ｐ－４が中央穴で、壁体溝から直線的に間仕切の溝が延びるが、柱穴は精査したにもかかわらず検出できなかった。

10）No.24住居址

遺構（第73図）

No.４住居址とNo.25住居址の中間に検出した住居址である。急斜面から緩斜面へ移行する地点に存在したため、平面形が１辺約４ｍの隅丸方形に近い形態を呈していた。地形の低い床面積が約半分の南西側が削平され、壁体溝や柱穴が残存しなかった。この住居址は４本柱で、Ｐ－１とＰ－２が柱穴、Ｐ－３が中央穴であった。



第75図　No.25住居址（1/60）

出土遺物（第74図）

２点とも壺の口縁部の破片と考える。21は頸部の器壁が厚くて直立し、口縁端部は上下に短く張り出している。22の口縁端部は上方へ大きく立ち上がり、端部は丸く仕上げている。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを施し、21の内面胴部はヘラケズリを行っている。

11）No.25住居址

遺構（第75図）

発掘調査を実施した範囲のほぼ中央に位置し、南西側は木谷９号墳の石室によって削平されていた。隅丸方形または隅丸長方形を呈する「Ｌ」字状の壁体溝を検出したが、床面にはＰ－１の柱穴が存在しただけであった。

12）No.38住居址

遺構（第76・77図、図版48-1）

発掘調査範囲の南端部分に位置し、西側に近接して木谷12号墳の石室痕跡が残存していた。この住居址が存在した緩斜面には、３軒の住居址とそれらを後に削平した状態で段状遺構が認められた。それぞれの住居址の壁体溝と柱穴の切り合い関係を精査した結果、壁体溝の幅が狭くて短いNo.75住居址が古く、壁体溝が外側で大規模なこのNo.38住居址が最も新しいことが判明した。壁体溝が内側に位置したNo.74住居址は、その中間の時期と考えられた。

この住居址に伴う壁体溝はＤ－１で、Ｐ－４が中央穴である。Ｐ－１からＰ－３が柱穴で、本来は５本柱または６本柱と考える。

出土遺物（第78図、図版63）

３軒の住居址が重複していたこともあって、時期の異なる多器種の土器が混在している。

23～25は壺または甕の口縁部破片である。斜め上方へ短く外反した口縁部は、さらに上方に拡張して端部を丸く仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、端部の外面には凹線が存在しない。内面の胴部は、横方向のヘラケズリを行っている。26の口縁部は、器壁が肥厚しながら斜め上方へ外湾して立ち上がり、端部は上下に張り出して外側に広い面が存在する。27は甕の口縁部破片である。頸部で「く」字状に屈曲して斜め上方へ短く立ち上がった口縁の端部は、上方へ大きく立ち上がって端部は丸く仕上げている。胴部の内面はヘラケズリを行っているが、外面には縦方向のハケメが認められる。28の口縁部は、著しく肥厚して斜め上方へ大きく張り出し、端部は断面が三角形を呈して上方へ立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、外面の中央部は浅く窪んでいる。29の口縁端部は、断面が三角形になって上下に拡張し、２条の浅い凹線が存在する面が認められる。30は口径が小さい甕の口縁部破片である。

頸部から短く外反した口縁の端部は、器壁が薄くなって斜め上下に拡張し、２条の凹線が存在する面が認められる。31と32は口縁端部が内傾して斜め上方へ大きく立ち上がり、外面に数条の浅い凹線を有する面が認められる。33の壺の口縁部破片は、全体の器壁が厚い。頸部で短く外反した口縁の端部は、内傾して斜め上方へ大きく張り出している。口縁端部の外側には、２条の浅くて広い凹線が存在する面が認められる。34は壺の口縁部破片である。ほぼ直立する状態に立ち上がった頸部は、斜め上方へ外反して口縁部へ移行し、端部は外湾して上方へ大きく立ち上がる。外面の頸部と口縁部には凹線が認められ、内面の口縁部には横方向の丁寧なヘラミガキ痕跡が存在する。35は大型の甕である。緩やかに内湾して立ち上がった胴部は、頸部で「く」字状に短く屈曲して口縁部に至り、さらに折り返して口縁部へ移行する。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面は磨滅が著しくて調整が不明である。口縁部から頸部にかけては、内外面ともヨコナデを施している。36は特異な形態を呈する壺である。胴部から頸部にかけては緩やかに内湾して立ち上がり、頸部で器壁が薄くなって口縁部へ移行する。口縁端部は横方向に肥厚して、上端に３条の浅い凹線を有する面が存在する。内面の胴部は、頸部に近い上位に指頭圧痕の上面に横または縦方向の粗いハケメが認められ、下位に横方向のヘラケズリを全体に行っている。外面の胴部は、頸部に近い上位に縦または斜め方向のハケメが認められ、中位から下位にかけてはハケメの上面に横または縦方向の丁寧なヘラミガキを行っている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。またこの壺の外面には、全体に丹塗りを施している。37は台である。38～40は高杯の破片である。40は内外面とも全体に丹塗りを施し、丁寧なヘラミガキが行われている。41は鼓形器台の破片で、内外面とも丹塗りが施されている。外反して斜め上方へ大きく張り出した端部は、全体に丸く仕上げている。42は器台の脚端部破片である。ラッパ状に開いた脚端部には、中央部が浅く窪んだ面が存在する。内面は全体にヘラケズリを行い、外面には短い単位の縦方向のハケメが認められる。

13) No.74住居址

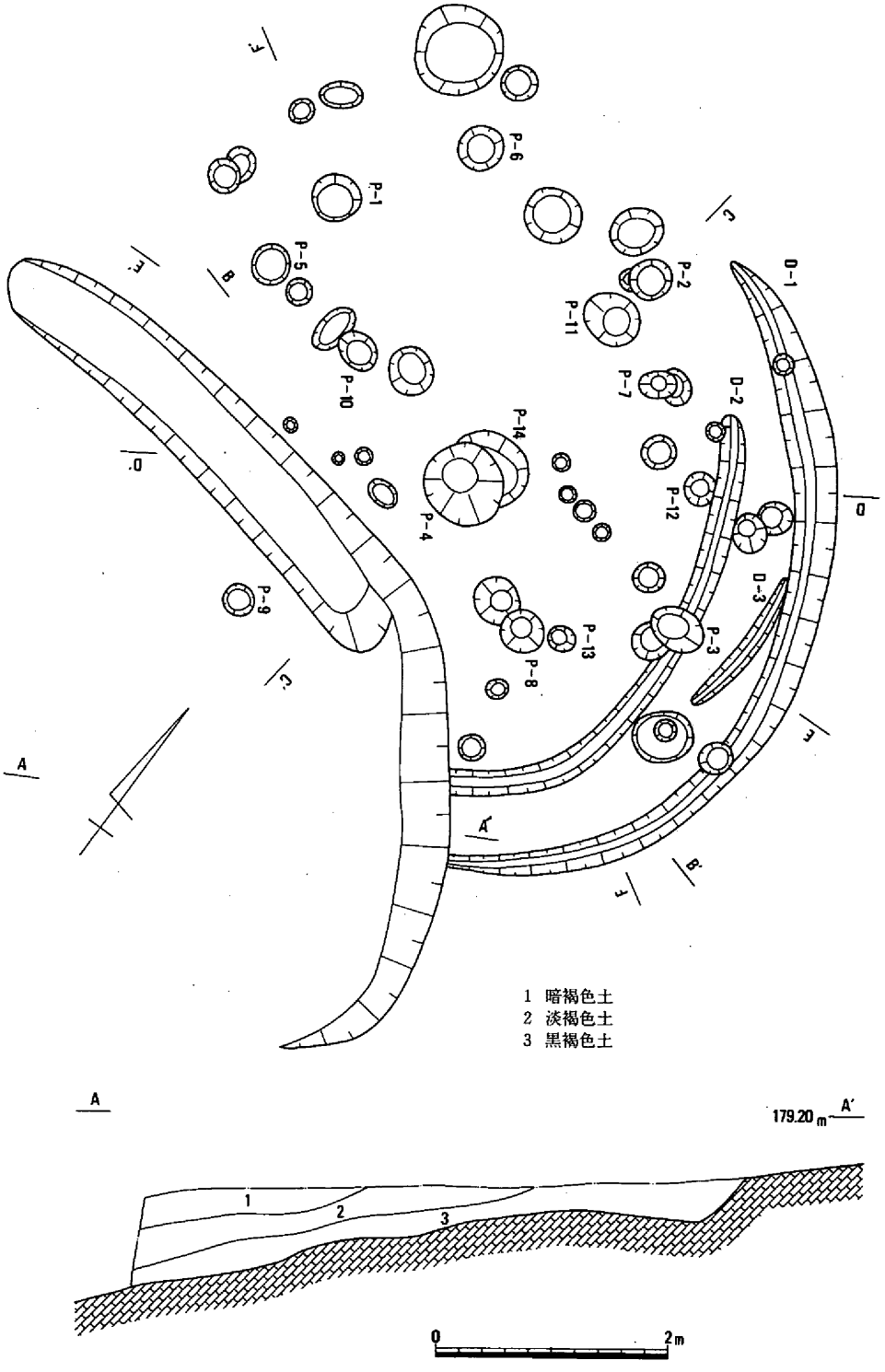
遺構（第76・77図、図版48-1）

この住居址に伴う壁体溝はＤ－２で、中央穴は検出できなかった。Ｐ－５からＰ－９が柱穴で、５本柱であった。柱穴の配置から推定して、径約６ｍの円形に近い形態になるであろう。

14) No.75住居址

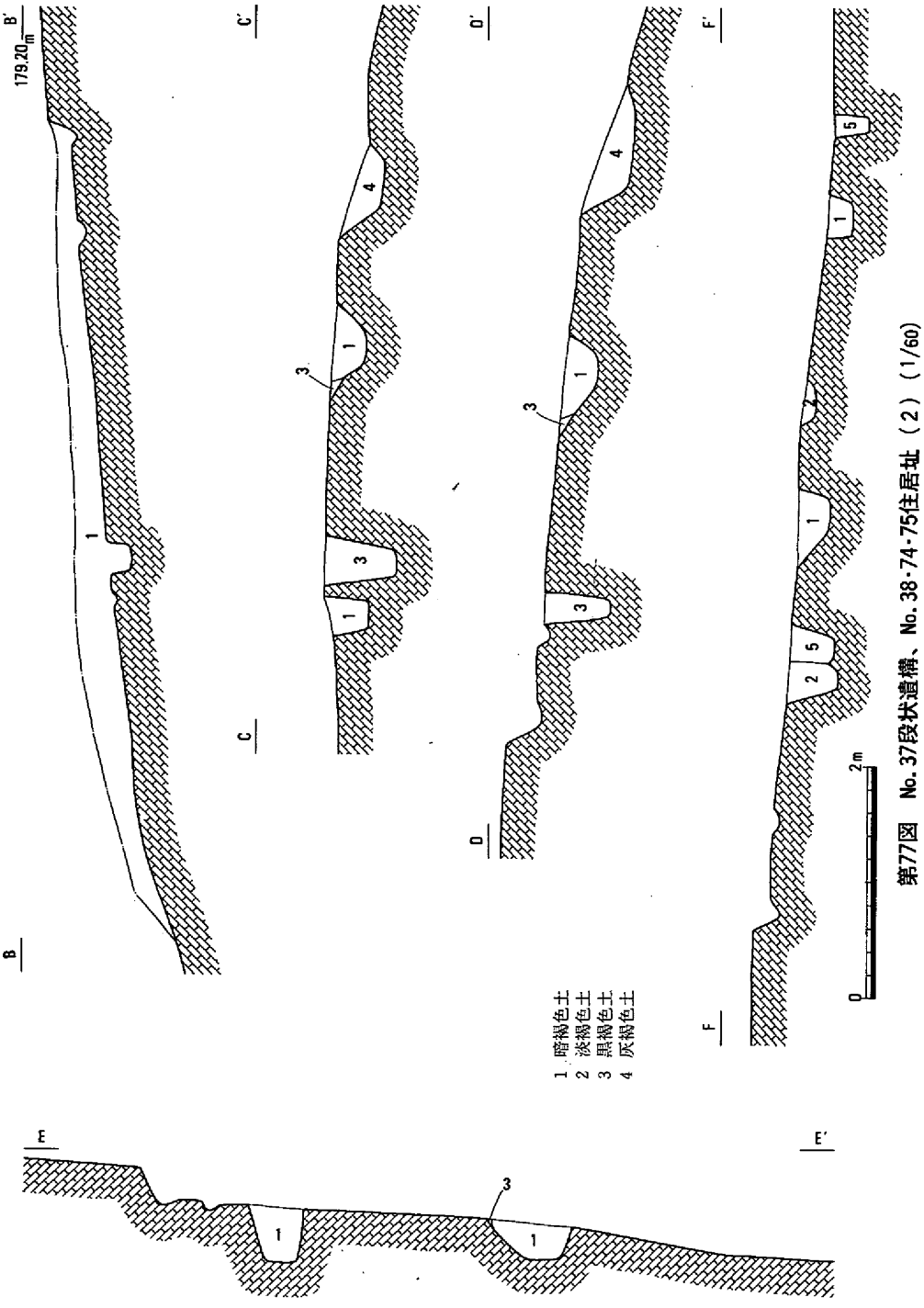
遺構（第76・77図、図版48-1）

この住居址に伴う壁体溝はＤ－３で、Ｐ－14が中央穴である。Ｐ－10からＰ－13が柱穴で、本来は５本柱の住居址と考える。この住居址の壁体溝の残存状態は極めて悪く、造られた当時

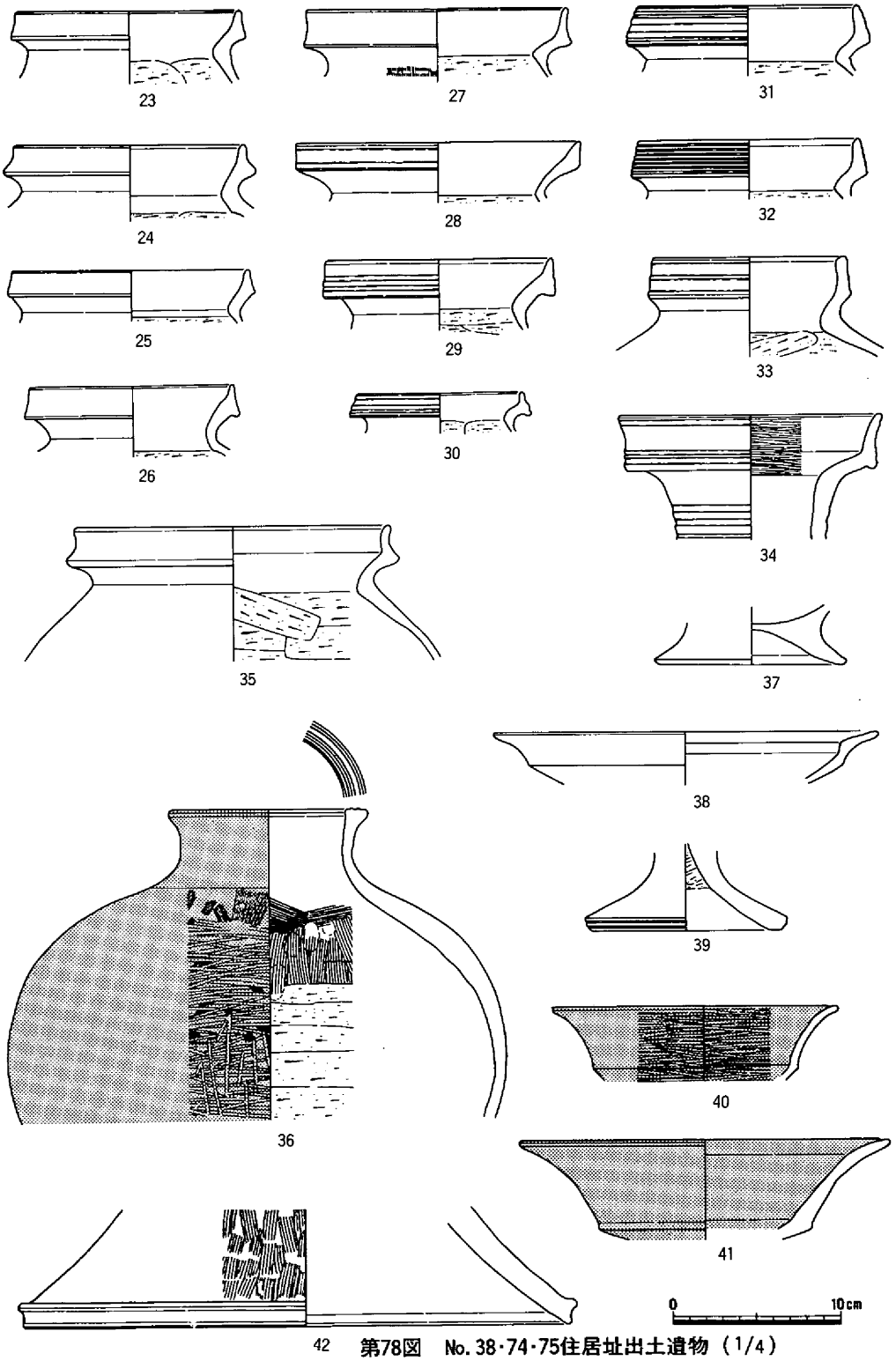


第76図　No.37段状遺構、No.38・74・75住居址（1）（1/60）

の規模や形態を推定するのは困難であるが、おそらく径約5.50mを測る円形に近い形態のもので、重複した3軒の住居址の中では最も小規模な住居址になるであろう。



第77図　No.37段状遺構、No.38・74・75住居址（2）（1/60）



第78図　No.38·74·75住居址出土遺物（1/4）

15) No.37段状遺構

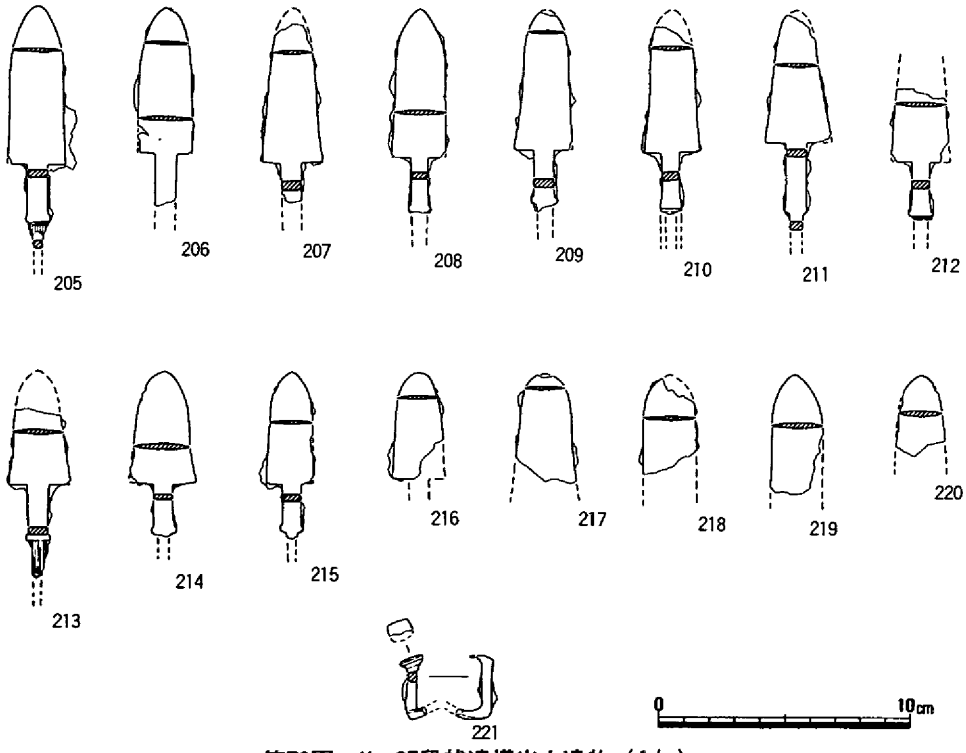
遺構（第76・77図、図版48-1）

この遺構は、前述したNo.38住居址、No.74住居址、No.75住居址を後に新しく削平していた。扇形を呈する低い段が認められ、北側に検出面での幅が70～80cmを測る溝が存在した。内部の平坦面にはこの遺構に伴う柱穴がなく、平坦面そのものも地形の低い南方向へ傾斜していた。

この遺構のほぼ中央付近から、同一の型式と思われる鉄鏃（第79図）が16本もまとまって出土した。それ以外の遺物としては鉄釘があるだけで、弥生土器は1片も認められない。したがってこの段状遺構は、弥生時代の遺構ではなく古墳が破壊された痕跡かもしれない。

出土遺物（第79図、図版33-2）

205～220の鉄鏃は、すべて同一型式である有茎平根式のもので、鏃身の形態から長三角形式に分類される。鏃身の側縁にはふくらみを持つが、緩い「S」字状の曲線を描くものが多い。鏃身関はほぼ直角で、箆被関には棘状突起を有する。205・210・212には、わずかながら矢柄表面の樹皮巻が残存している。221は鉄釘である。「L」字状に折り曲げられた方形の頭部を持つもので、途中で破損している。



第79図　No.37段状遺構出土遺物（1/3）

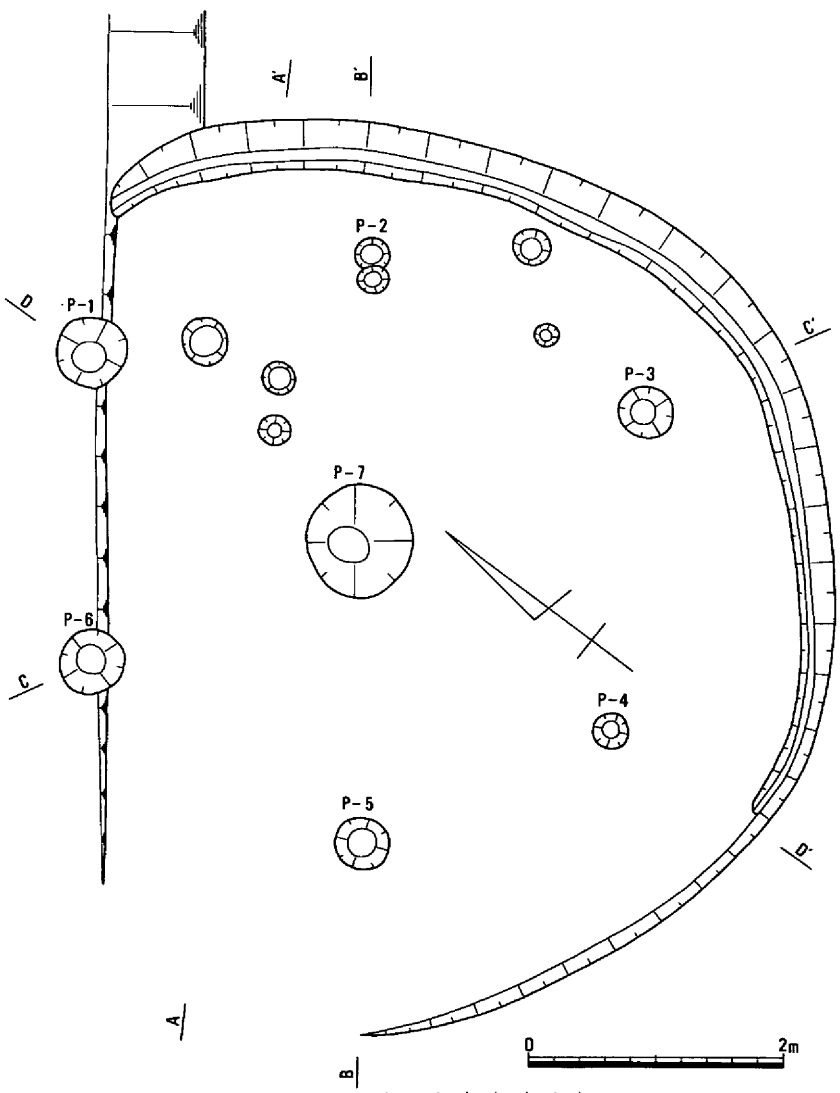
16）No.65住居址

遺構（第80・81図、図版48-2・49-1）

発掘調査を実施した範囲の南西端部である緩斜面に位置し、No.67住居址とNo.68住居址の中間に存在した。西側部分がNo.68住居址やNo.72住居址と重複していたが、No.68住居址よりも古く、No.72住居址よりも新しいことが判明した。平面形は径約７ｍを測る円形に近い形態を呈し、Ｐ－１からＰ－６が柱穴で、Ｐ－７が中央穴である。

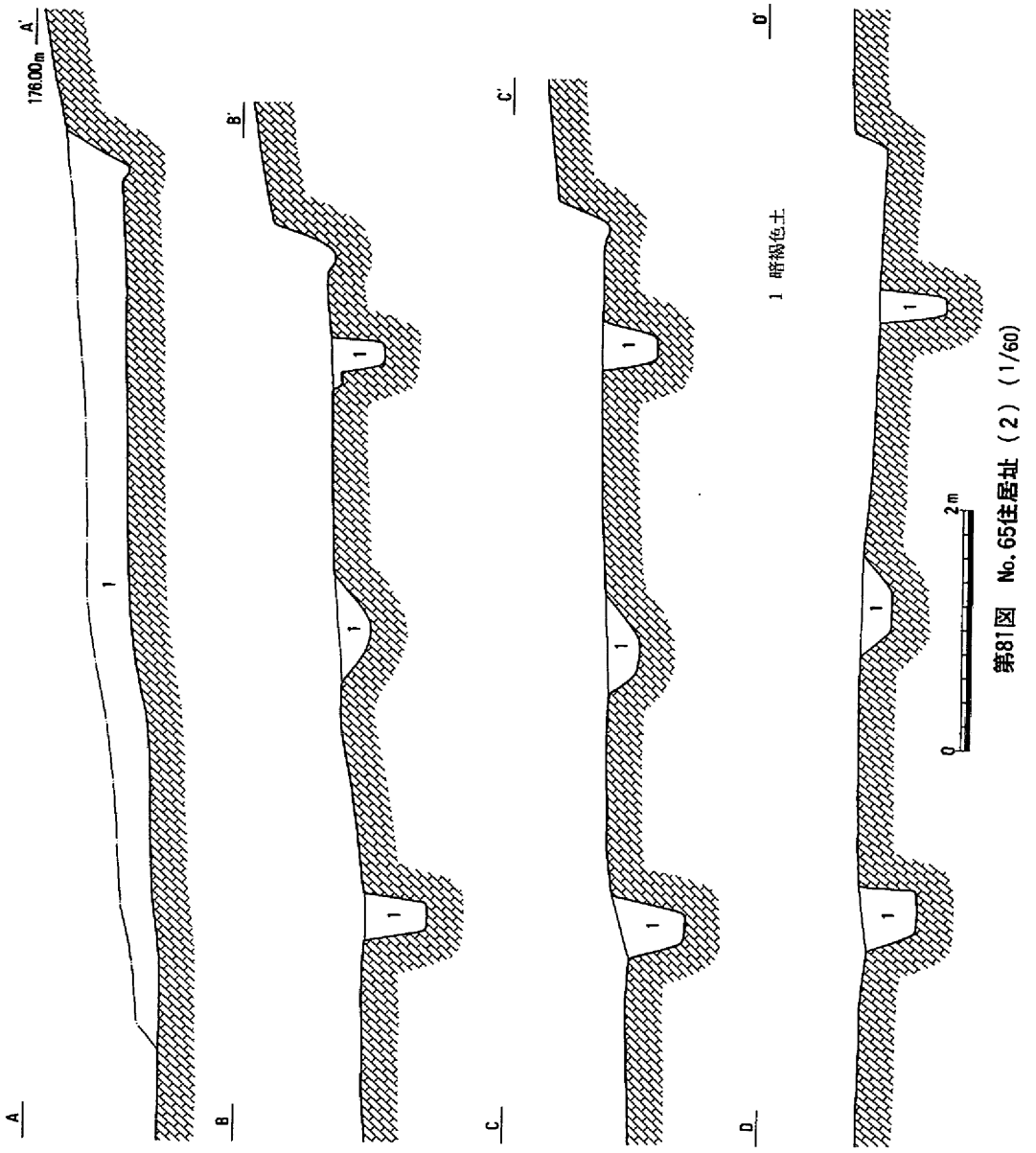
出土遺物（第82図）

壺の口縁部と底部の破片である。**43**の口縁部は肥厚しながら外湾し、端部が上方へ短く拡張している。**44**は口径の小さいもので、口縁部は上方へ大きく立ち上がり、端部は丸く仕上げている。**45～47**の口縁端部は上下に張り出し、浅い凹線を有する面が認められる。**48**の胴部から口縁部にかけては「く」字状に短く外反



第80図　No.65住居址（１）（1/60）

し、口縁端部は肥厚して中央部の浅く窪んだ面が存在する。49の口縁部は外反して斜め上方へ大きく立ち上がり、端部は肥厚して丸く仕上げている。これらの口縁部は内外面ともヨコナデを施しているものが多いが、内面にヘラミガキを行っているもの（43）もある。内面胴部の調整が観察できるものは、いずれもヘラケズリを行っている。50は壺の底部の破片である。外面底部は丸みを持った平底で、器壁が厚くなっている。内面には指頭圧痕やヘラケズリ痕跡が認められ、外面には縦方向のヘラミガキを行っている。



第81図　No.65住居址（2）（1/60）

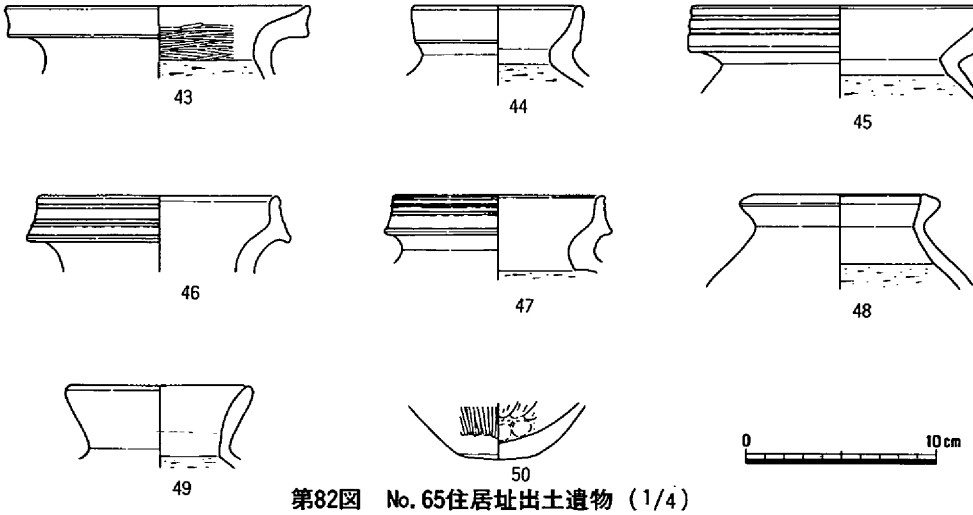
17）No.67住居址

遺構（第83図、図版48-2・49-2）

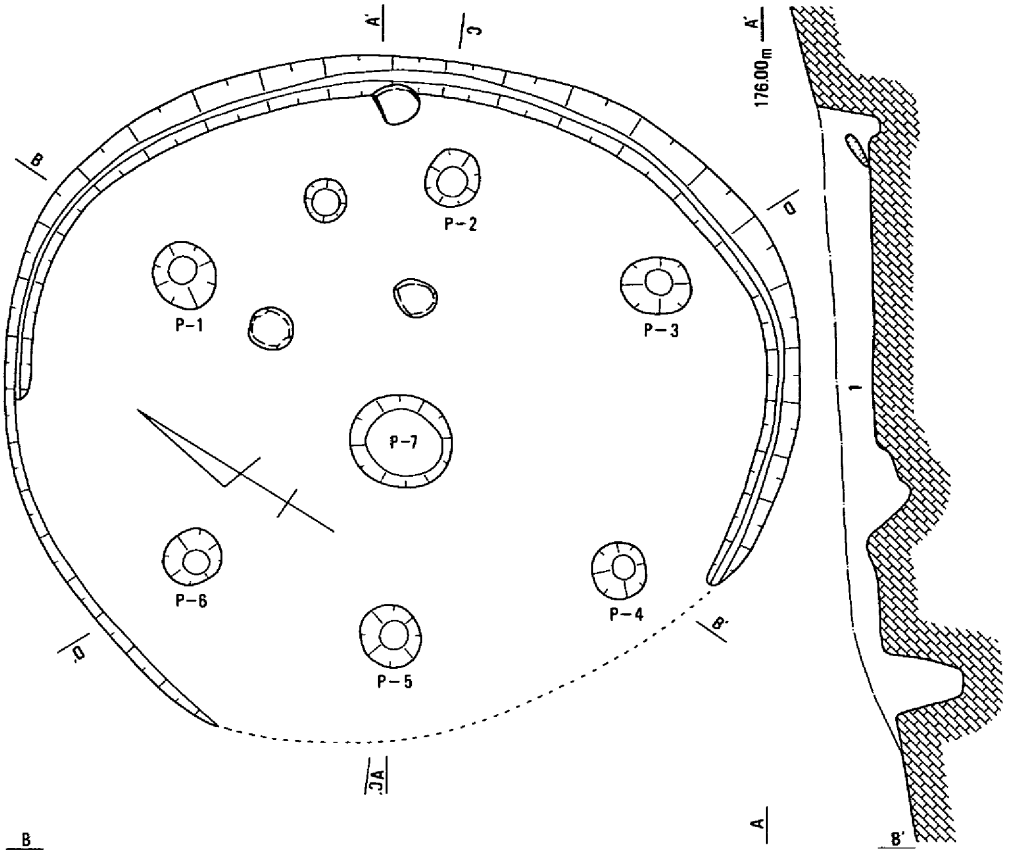
発掘調査範囲の南西端部に位置する緩斜面に検出した住居址で、No.65住居址とNo.66土壙墓の中間に１軒だけ単独で存在した。平面形は径約６ｍを測る円形に近い形態を呈し、床面には３個の偏平な河原石が認められた。地形の低い西側部分は、壁体や壁体溝が残存しなかった。この住居址はＰ－１からＰ－６の６本柱で、Ｐ－７が中央穴である。

出土遺物（第84～86図、図版62・63）

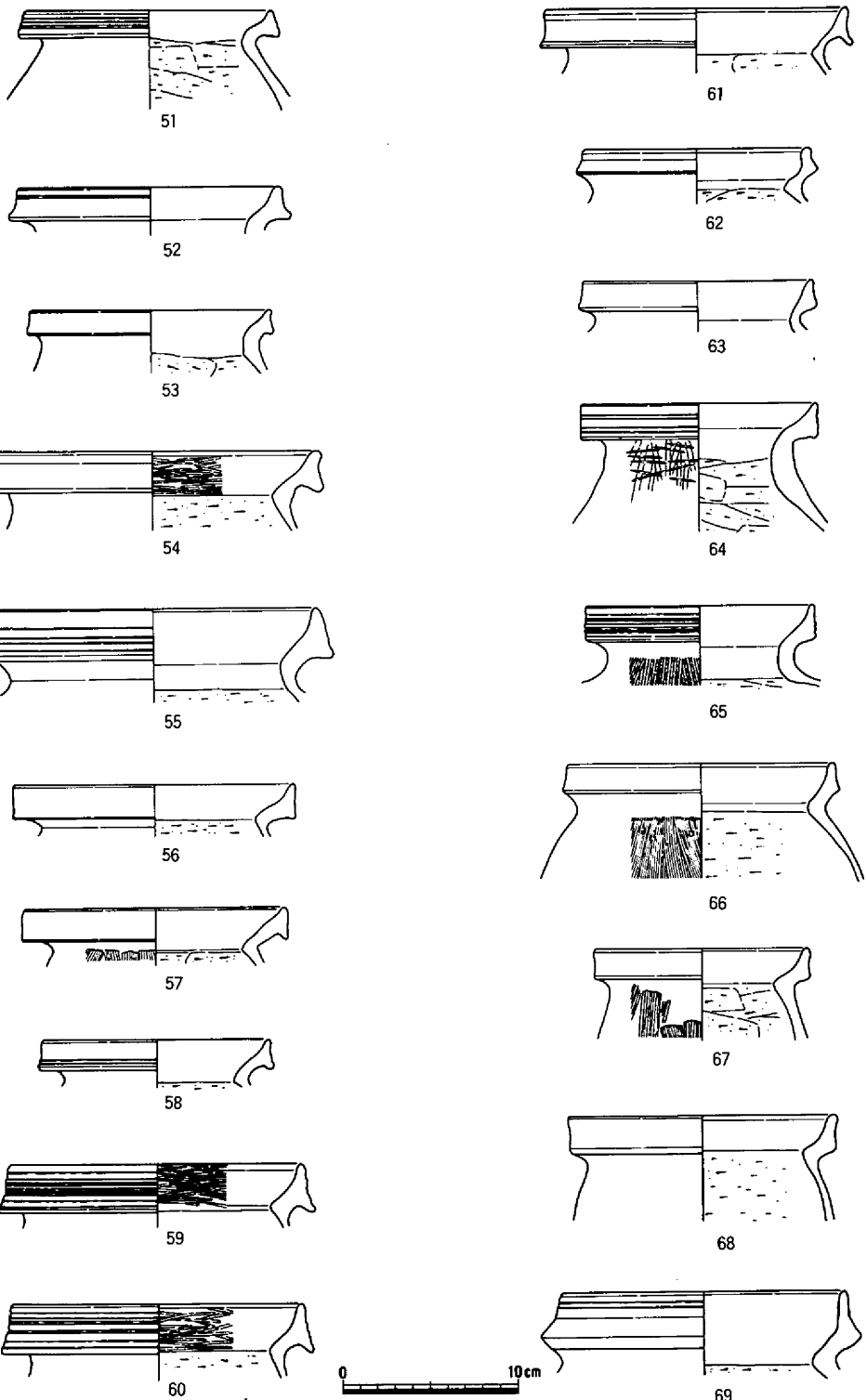
51から**58**は壺または甕の口縁部破片である。頸部から短く屈曲した口縁端部はあまり拡張せず、外面に浅い凹線を有するもの（**51・52・55・58**）と存在しないもの（**53・54・56・57**）がある。**59～61**は口径が大きくて口縁端部が上下に著しく拡張した甕の破片で、外面には凹線が認められる。**62**から**80**は口縁部が上方に張り出した壺または甕の破片で、端部は丸く仕上げている。外面に凹線を有するもの（**64・65・69～74**）と、凹線が存在しないもの（**62・63・66～68・75～80**）がある。以上の壺や甕の口縁部は、内外面ともヨコナデを施しているものが多いが、内面にヘラミガキが認められるもの（**54・59・60・75**）もある。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面にハケメが存在するもの（**57・64～67・73・75・79**）や刺突文を巡らせているもの（**71**）がある。**82**の壺の口縁部は、斜め上方へ緩やかに外湾して端部を丸く仕上げ、内外面にヘラミガキを行っている。**83**は台である。内面はヘラケズリを行い、外面はヘラミガキを施している。壺または甕の底部（**84～91**）は平底である。内面にはヘラケズリ痕跡や指頭圧痕が認められ、外面にはヘラミガキ痕跡やハケメが存在する。**92**は鋸歯文や螺旋状の凹線を施した壺の口縁で、内面はヘラミガキを施している。**93**と**94**は高杯の杯部と脚部である。**95**は器台の



第82図　No.65住居址出土遺物（1/4）

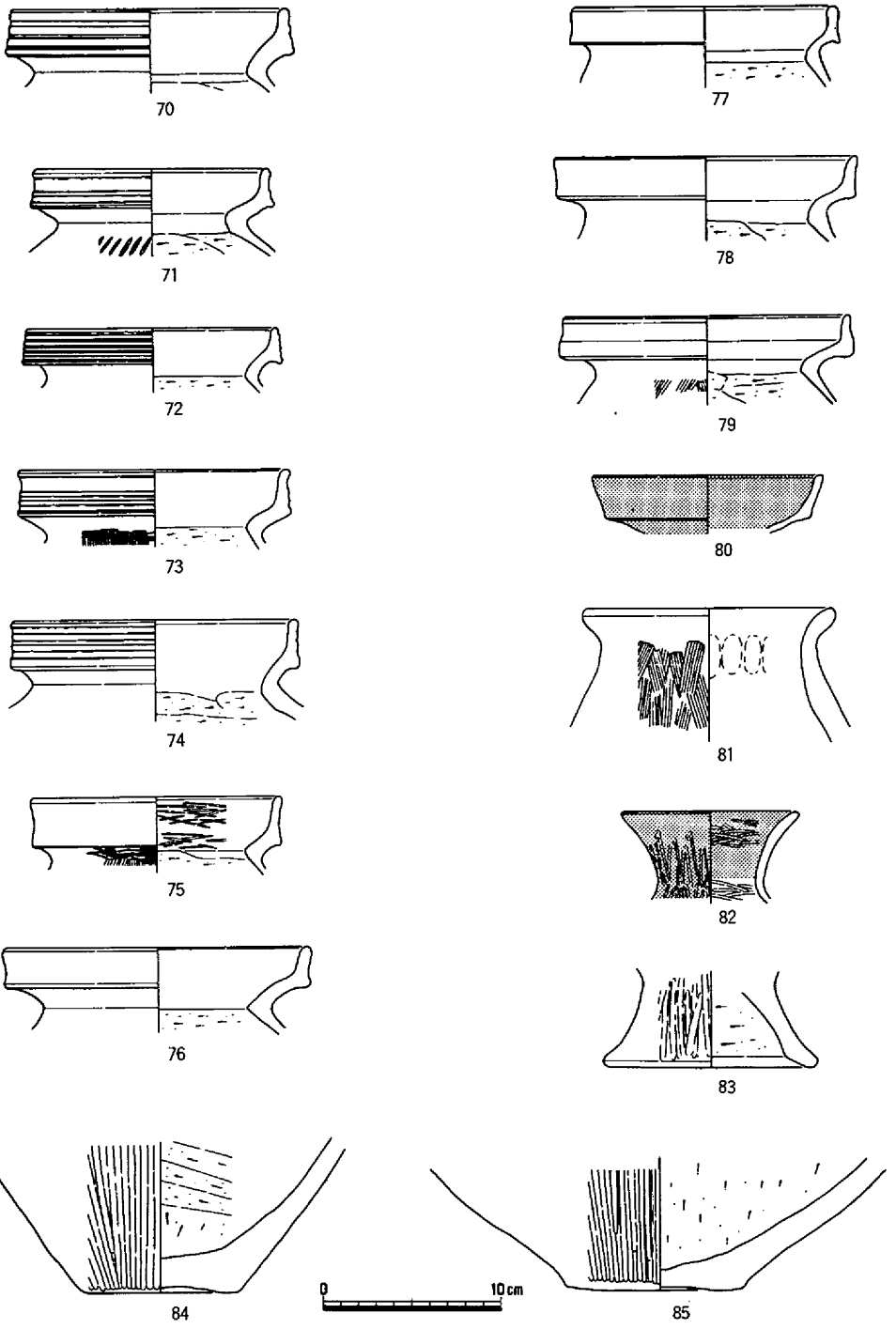


第83図　No.67住居址（1/60）



第84図　No.67住居址出土遺物（1）（1/4）

脚部で、内面にはヘラケズリの上面にハケメが認められ、外面にはハケメとヨコナデを施している。なお80と82は、内外面とも丹塗りを行っていることが判明した。

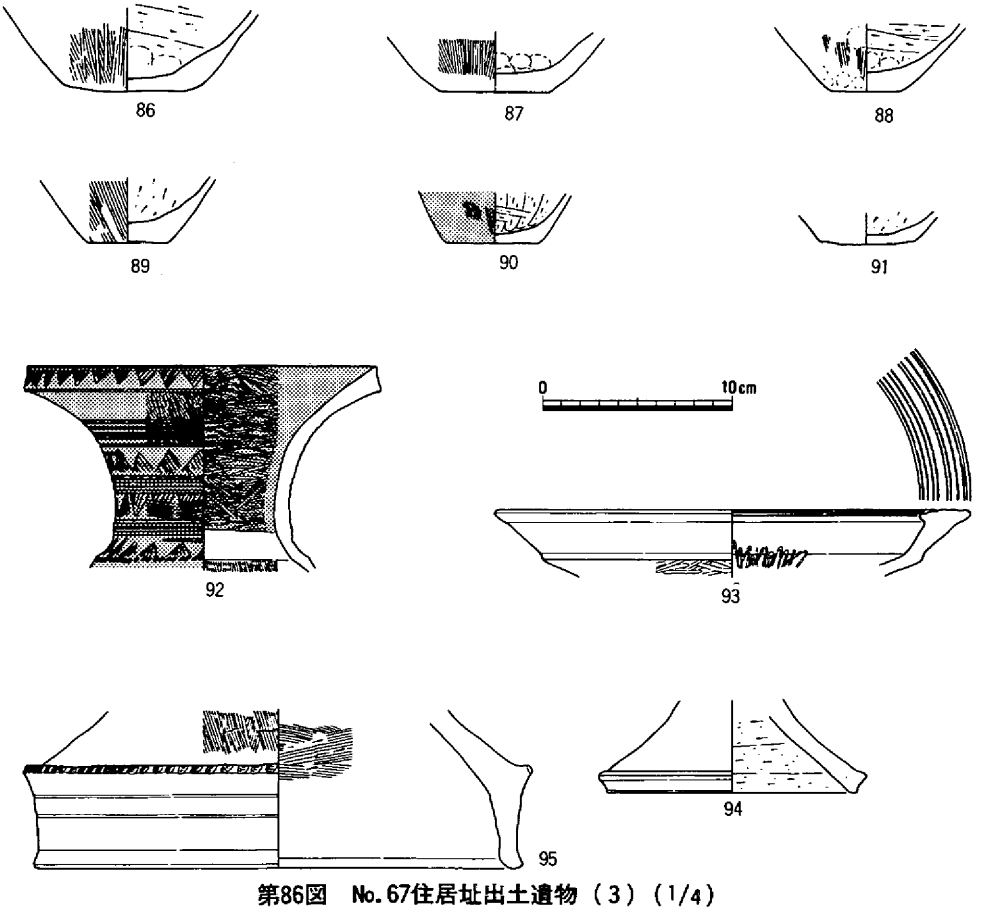


第85図　No.67住居址出土遺物（2）（1/4）

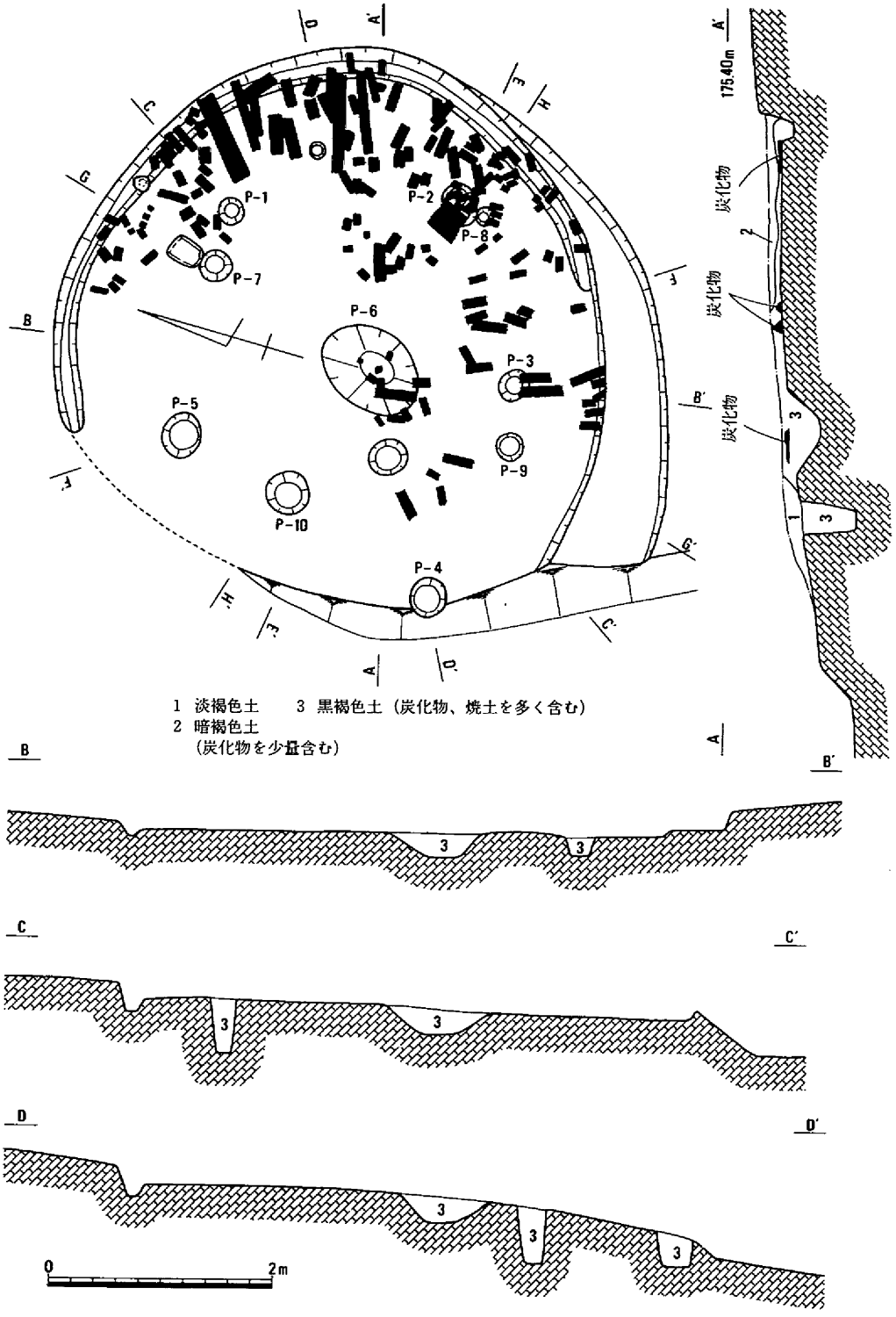
18）No.68住居址

遺構（第87・88図、図版48-2・50）

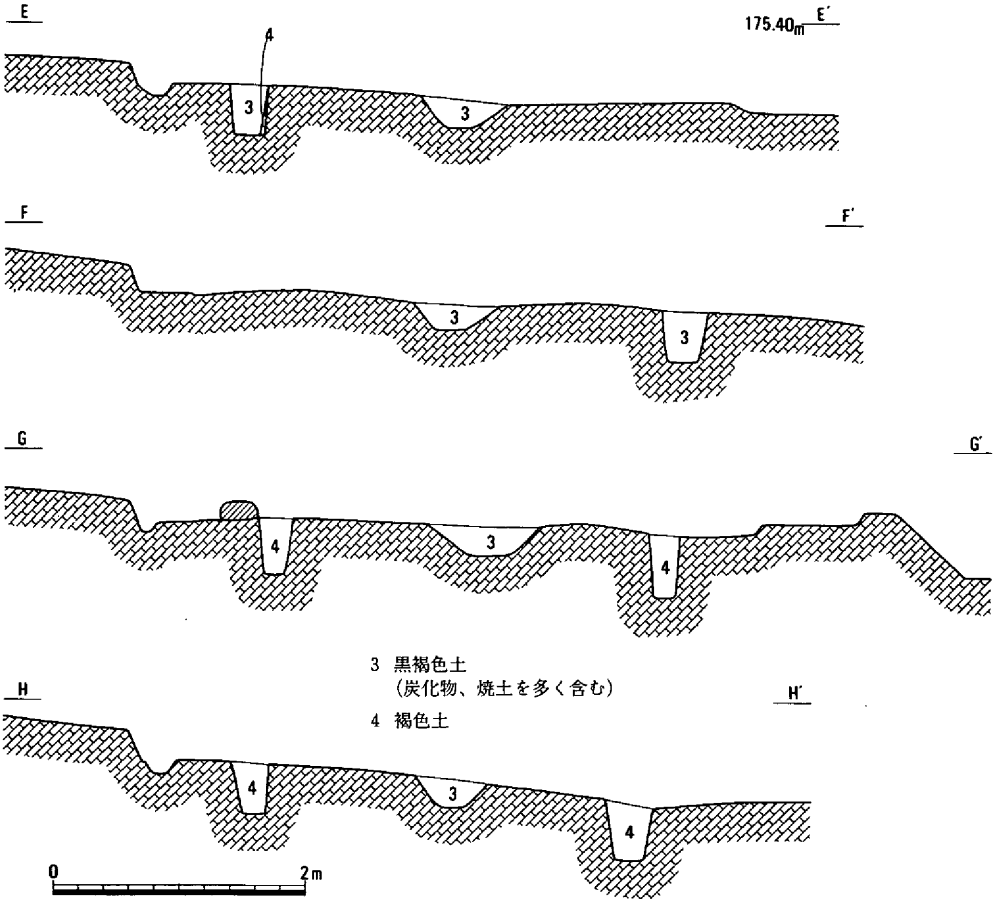
発掘調査を実施した範囲の南西端部に位置する緩斜面に検出した住居址で、木谷13号墳とNo.65住居址の中間に存在した。この住居址は火災を受けていたため、床面に炭化物や焼土が散乱していた。平面形は短径約4.80m・長径約5.60mを測る円形に近い形態を呈し、床面に1個の偏平な河原石が存在した。西側部分の床面は削平され、壁体や壁体溝が残存しなかった。地形の高い東側に集中して炭化物が多く認められたが、住居址の中心から放射状を呈して規則的に並んでいた。この住居址はNo.65住居址やNo.72住居址と切り合っていたが、住居址内に炭化物や焼土が認められたこともあって、このNo.68住居址がNo.65住居址やNo.72住居址よりも新しいことを、容易に把握することができた。柱穴はP－1からP－5の5か所で、P－6が中央穴である。これらの柱穴や中央穴については、内部に炭化物や焼土が多く含まれていたから、No.72住居址に伴うものと区別するのは簡単であった。



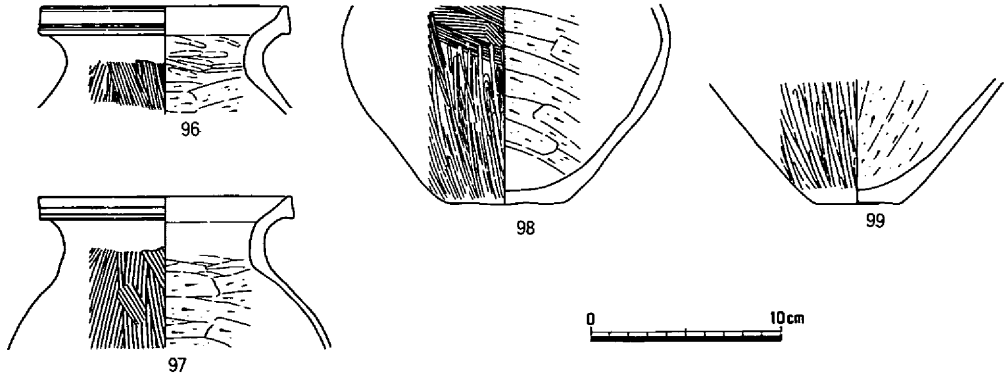
第86図　No.67住居址出土遺物（3）（1/4）



第87図　No.68·72住居址（1）（1/60）



第88図　No.68･72住居址（2）（1/60）



第89図　No.68住居址出土遺物（1/4）

出土遺物（第89図、図版63）

これらの土器は、いずれも炭化物や焼土の中から出土したのである。

96の壺と思われる口縁部の破片は、胴部から口縁部にかけて緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、端部は上下に短く張り出して浅い凹線を有する面が存在する。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面には縦または斜め方向のハケメが認められる。口縁端部から外面の頸部にかけてはヨコナデを施し、内面の頸部はヘラミガキを行っている。**97**も**96**に似た形態を呈して短い頸部が存在するから、器形は壺になると考える。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面は縦または斜め方向のハケメが認められる。**98**の壺または甕の底部は平底で、内面は斜め方向の粗いヘラケズリを行っている。外面の上位はハケメを施し、下位は縦方向のヘラミガキを行っている。**99**の底部も平底である。内面はヘラケズリを行い、外面はヘラミガキ痕跡が認められる。

19）No.72住居址

遺構（第87・88図、図版48-2・50-2）

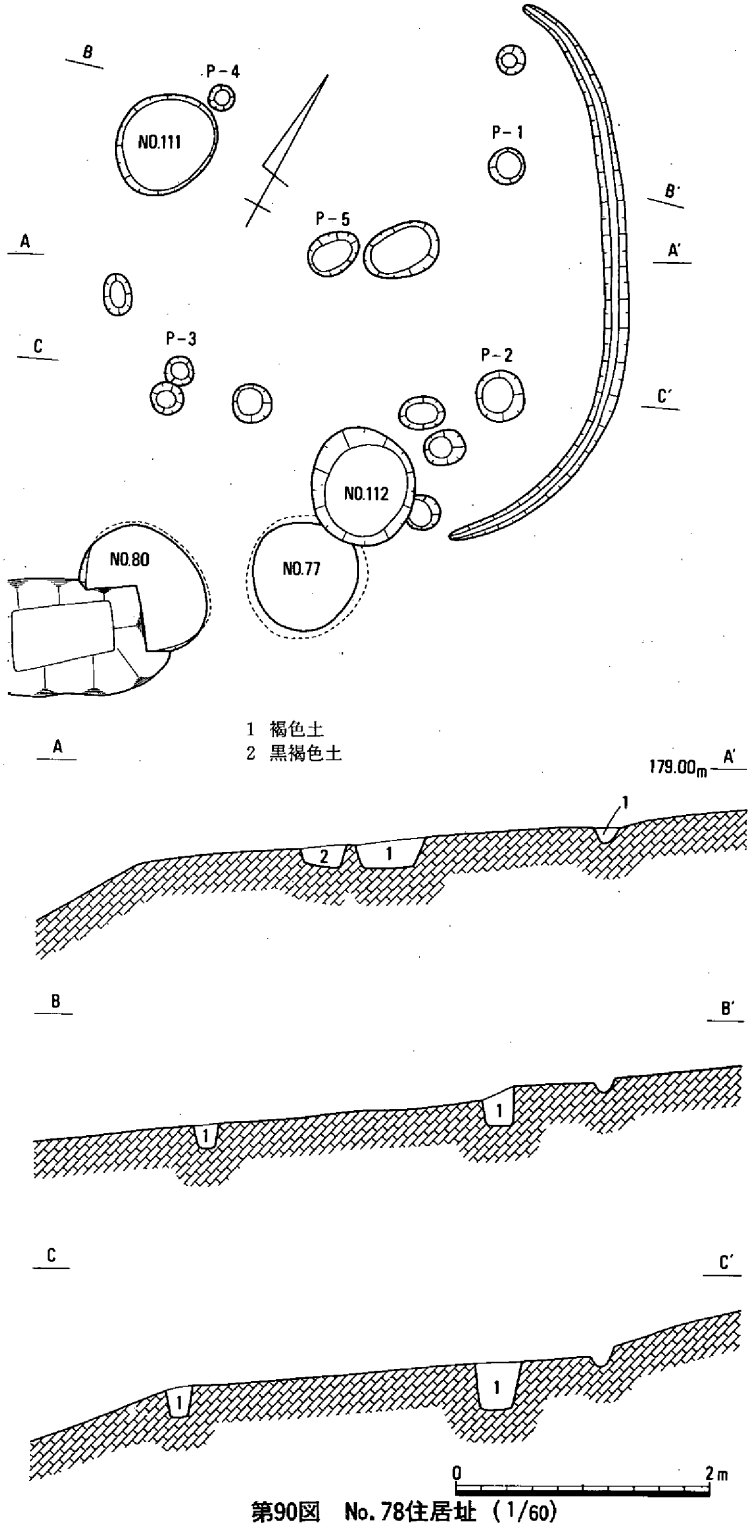
前述の火災を受けたNo.68住居址の床面を調査していたところ、内部に炭化物や焼土を含まない柱穴群が存在することが判明したため、調査がすでに完了していた隣接するNo.65住居址の西側部分の床面を精査したところ、No.68住居址のものではない別の壁体を検出した。この壁面の下位を丹念に調査したが、溝はなぜか存在しなかった。この新しく発見した住居址は、２軒の住居址と重複していたが、No.65住居址やNo.68住居址よりも古いことを確認した。地形の低い西側は、No.68住居址と同様に床面が削平されていた。平面形は径約4.50ｍを測る円形に近い形態になると推定されるが、残存状態が悪いために本来の規模を把握することができなかった。柱穴はＰ－７からＰ－10の４か所で、中央穴は検出できなかった。新しく造られたNo.68住居址の中央穴（Ｐ－６）によって、破壊されてしまったのではなかろうか。

20）No.78住居址

遺構（第90図）

木谷古墳群で発掘調査を実施した範囲の中央よりやや西側へ寄った緩斜面で検出した住居址で、木谷10号墳と木谷14号墳の中間に存在した。地形の高くなった北西部分に、検出面での最大幅20㎝・深さ12㎝を測る壁体溝の一部が認められた。溝の断面形は浅い「Ｕ」字形を呈し、内部には褐色土が堆積していた。地形の低い南西部分は、床面が削平されて壁体溝も残存しなかった。この壁体溝の痕跡から本来の住居址の規模を推定すると、径約４ｍを測る円形に近い形態を呈するであろう。そして北西方向の壁面は、壁体溝の痕跡のように丸くならずにやや直

線的になると思われる。壁体溝内に堆積した土の色調を頼りにして、床面で検出した柱穴を精査したところ、このNo.78住居址に伴う柱穴はＰ－１からＰ－４の４か所で、中央にあった楕円形のＰ－５が中央穴である。壁体溝の一部がほんのわずかに残存したにすぎないほどに床面が著しく削平されていたため、精査したにもかかわらず遺物は何も出土しなかった。なおこの住居址の南側には、ほぼ同時期と考える２基の土壙（No.77土壙とNo.80土壙）が極めて近接した地点に存在していた。



第90図　No.78住居址（1/60）

21）No. 79住居址

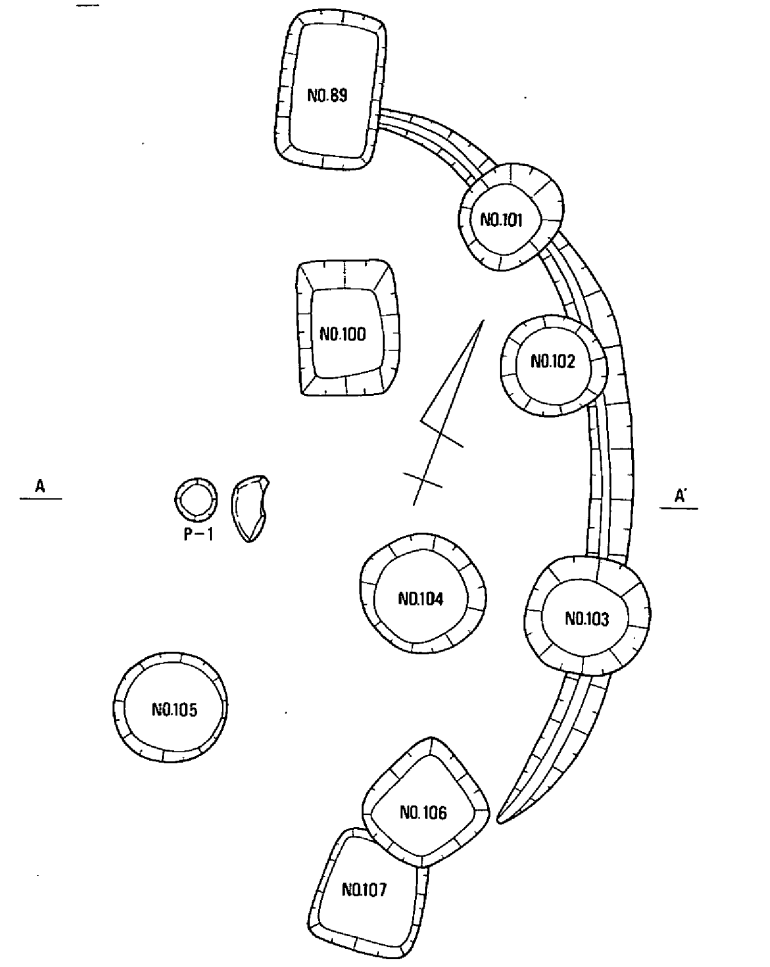
遺構（第91図）

調査範囲の北西部に位置する緩斜面で検出した住居址で、床面には木谷14号墳の石室が存在した。地形の高い北東方向に４基の中近世土壙墓に切られた壁体溝の一部が残存しただけで、詳細については不明であった。

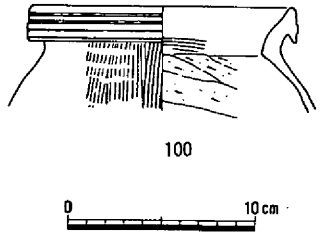
出土遺物

（第92図、図版63）

甕の口縁部破片を１点だけ採集している。内湾して立ち上がった器壁の薄い胴部は、頸部で屈曲して斜め上方へ張り出している。口縁の端部は上下に拡張し、３条の浅い凹線を有する面が存在する。胴部の内面はヘラケズリを行い、外面にはハケメが認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを施しているが、内面の頸部に横方向のハケメがかすかに残存している。



第91図　No. 79住居址（1/60）



第92図　No. 79住居址出土遺物（1/4）

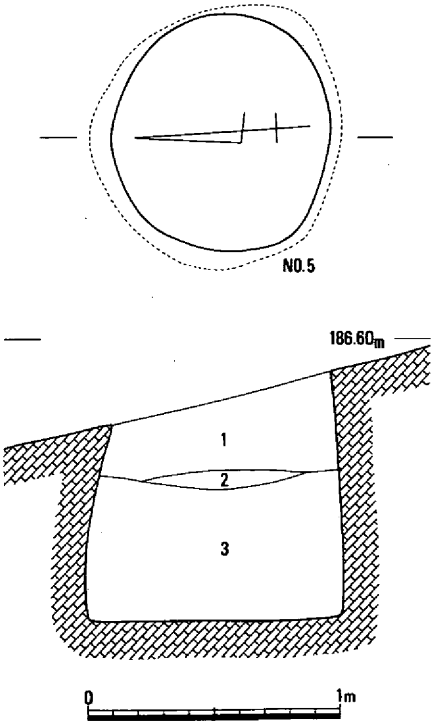
(2) 土壙

木谷古墳群が所在した丘陵上で検出した弥生時代の土壙は、いわゆる貯蔵穴と考えられている袋状を呈した形態が一般的なもので、規模の異なる11基を発見した。この土壙はその形状が後述する中近世土壙墓に極めて酷似していたが、土壙内に堆積していた覆土が全く相違しているのが明白で、峻別の混乱はなかった。またこれらの土壙が確認されたのはいずれも住居址周辺の緩斜面の地点で、中近世土壙墓のように比較的急勾配の斜面に数基が密集して存在したのとは、立地状況も明らかに異なっていた。

1）No. 5 土壙

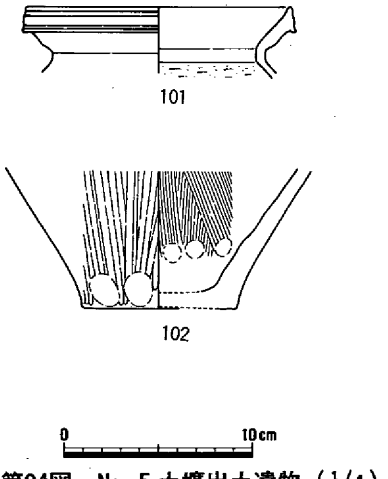
遺構（第93図、図版51-1）

発掘調査範囲の北東端部に位置するNo. 2 段状遺構の平坦面で検出した土壙で、北西方向約3 mの近接した地点は後述するNo. 6 土壙が存在した。検出面での計測値は、短径88cm・長径94cmを測る楕円形を呈し、深さは77～97cmであった。土壙内には黄褐色土、暗黄褐色土、淡黄褐色土が堆積し、炭化物が多く認められた。底部はほぼ水平で、全体が袋状になっていた。



第93図　No. 5 土壙（1/30）

1　淡黄褐色土
（炭化物と焼土を含む）
2　暗黄褐色土
（炭化物を多く含む）
3　黄褐色土



第94図　No. 5 土壙出土遺物（1/4）

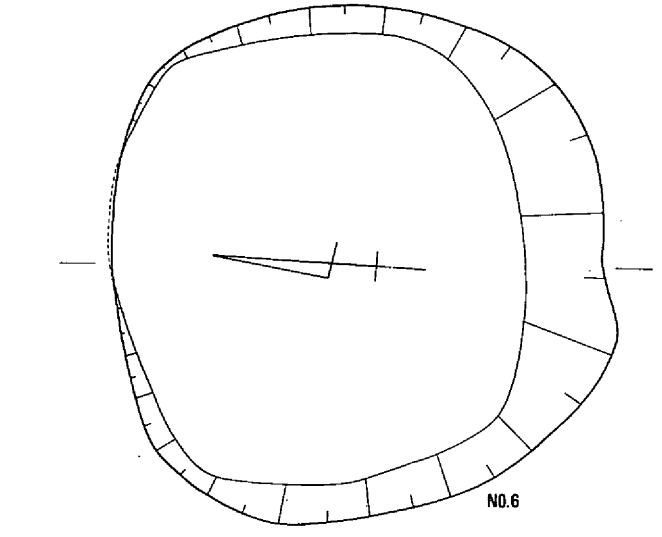
出土遺物（第94図）

101の甕の口縁部破片は、斜め上方へ肥厚して立ち上がった端部が、上下に拡張して２条の凹線を有する面が認められる。胴部の内面はヘラケズリを行っているが、口縁部は内外面ともヨコナデを施している。102は平底を呈する壺の底部破片である。内面には縦方向のハケメが認められ、外面にはヘラミガキ痕跡が存在する。底部の下端部には内外面とも指頭圧痕が認められ、外面には黒斑が存在する。

２）No. 6 土壙

遺構（第95図、図版51-2）

No. ２段状遺構の平坦面で検出した土壙である。平面形は短径195cm・長径205cmを測る大規模な円形に近い形態で、検出面からの深さは30～85cmであった。底部はほぼ水平になり、部分的に袋状を呈していた。土壙内には黄褐色土、赤褐色土、炭化物を含む暗黄褐色土が認められ、実測不可能な弥生土器の小破片も出土した。



第95図　No. 6 土壙（1/30）

３）No. 29土壙

遺構（第96図）

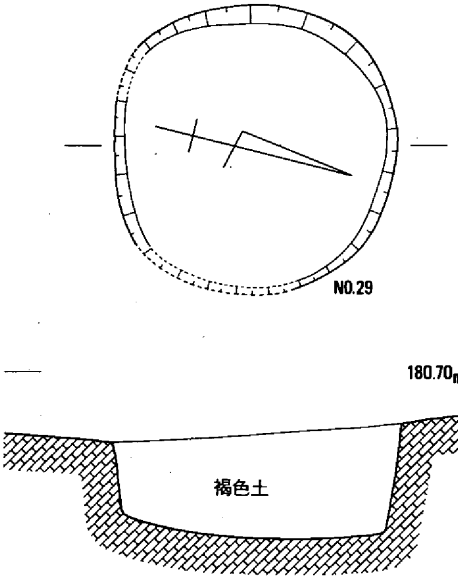
No.23住居址とNo.28住居址の東側に検出した土壙である。径115cmの円形に近い形態を呈し、深さは30～45cmであった。土壙内には褐色土が堆積していたが、遺物は存在しなかった。

４）No. 30土壙

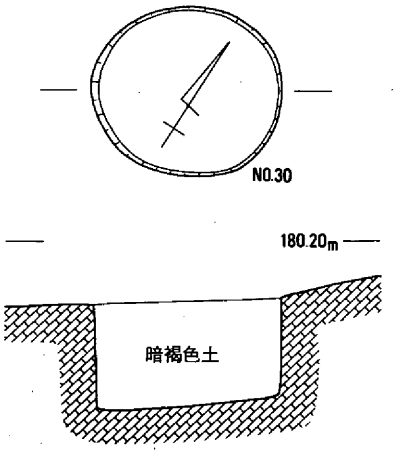
遺構（第97図）

木谷古墳群で発掘調査

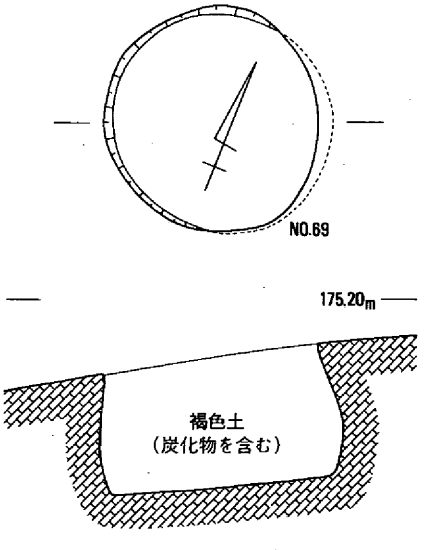
を実施した範囲のほぼ中央部に位置する、木谷10号墳の石室と周溝の間で検出した土壙で、南東方向にはNo.23住居址やNo.28住居址が存在した。また北西方向約３ｍの地点には、木谷10号墳の周溝に約半分が削平されたNo.73土壙が確認されている。平面形は短径67cm・長径76cmの



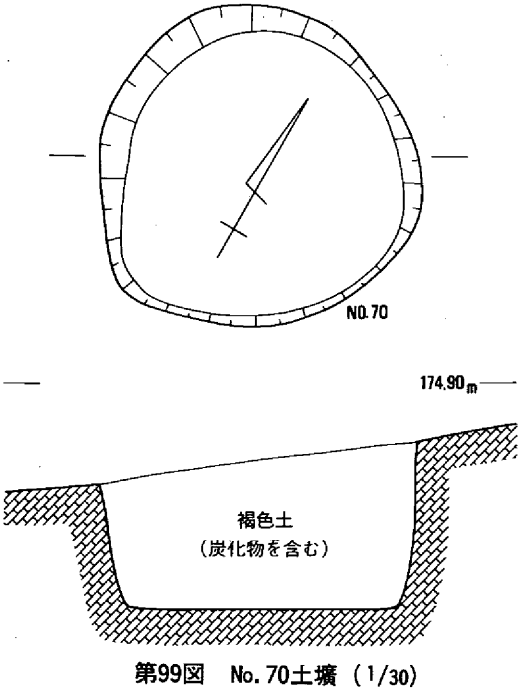
第96図　No.29土壙（1/30）



第97図　No.30土壙（1/30）

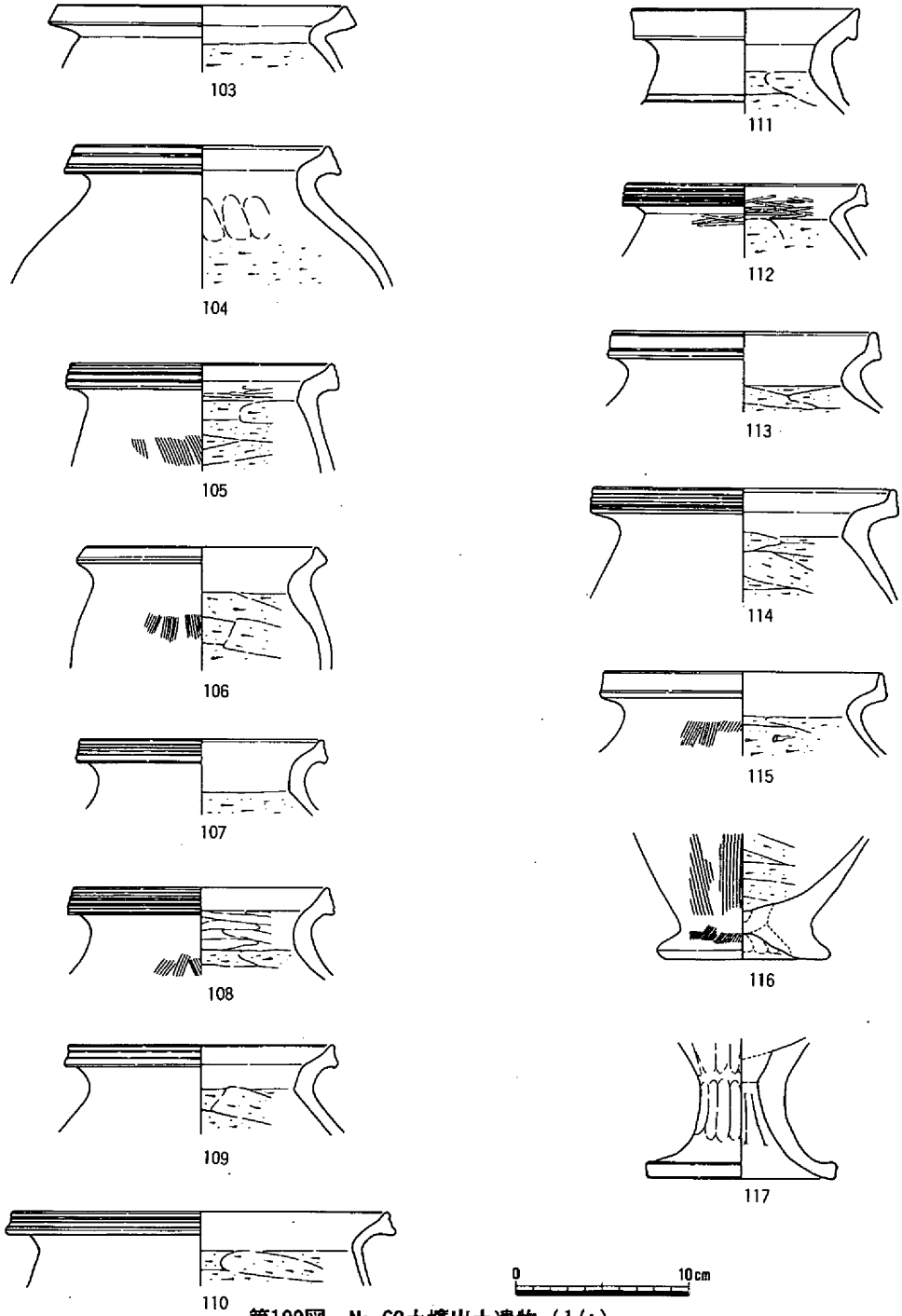


第98図　No.69土壙（1/30）



第99図　No.70土壙（1/30）

円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは38～42cmであった。底部は南西方向へ傾斜し、内部には暗褐色土が堆積していた。



第100図　No.69土壙出土遺物（1/4）

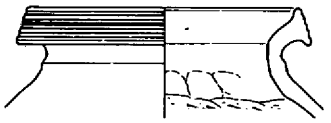
5）No.69土壙

遺構（第98図）

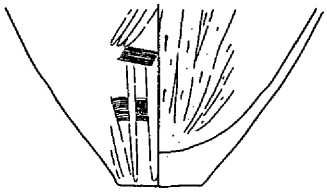
発掘調査を実施した範囲の南西端部に位置する緩斜面で検出した土壙で、南西方向約２ｍの地点には後述するNo.70土壙が存在した。また西方向約５ｍの地点には、木谷13号墳の周溝に約半分が削平されたNo.71土壙も確認された。これら３基の土壙が検出された緩斜面には、ほぼ同時期の遺構と考える極めて近接したNo.68住居址、No.72住居址、No.65住居址、No.67住居址が存在した。この土壙の平面形は、短径85cm・長径90cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは48～52cmであった。底部は地形の低い西側に傾斜し、東側の壁が袋状になっていた。土壙内には炭化物を含む褐色土が堆積し、比較的多くの土器が出土した。

出土遺物（第100図、図版63）

103～110の壺または甕の口縁部破片は、端部があまり拡張しないものである。頸部から口縁部にかけて「く」字状に短く外反するもの（**103～106**）と、緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がるもの（**107～110**）とがある。口縁端部に浅い凹線が存在するものがほとんどであるが、存在しないもの（**103・106**）もある。胴部の内面はいずれもヘラケズリを行っているが、外面については簡単なナデによって仕上げているもの（**103・104・107・109・110**）と、縦方向のハケメが認められるもの（**105・106・108**）とがある。口縁部は内外面ともヨコナデを施しているが、内面の頸部にヘラミガキを行っているもの（**105・108**）や、指頭圧痕が存在するもの（**104**）もある。**111**は器壁の厚い壺の口縁部から頸部にかけての破片である。斜め上方へ直線的に立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して断面が三角形を呈している。頸部は口縁部や胴部よりも器壁が厚くなって内傾しながら立ち上がり、胴部に近い下端部に凹線状の浅い窪みが認められる。内面の胴部はヘラケズリを行い、口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデを施している。**112**は器壁の薄い甕の口縁部破片である。頸部で短く外反した口縁部は、上下に拡張して端部を丸く仕上げ、外側に３条の凹線を有する面が認められる。内面の口縁部と外面の頸部は、横方向のヘラミガキを行っている。**113～115**は口縁端部が上方へ張り出している。内面の胴部はいずれもヘラケズリを行っているが、外面はナデ仕上げを行っているもの（**113・114**）と縦方向のハケメが認められるもの（**115**）とがある。低い台を有する底部（**116**）は、円盤充填が行われている。底部の内面は全体に粗いヘラケズリを施し、台の内面には指頭圧痕が認められる。外面の底部から台端部にかけては、簡単なナデを行っているものの、縦方向のハケメが残存している。**117**の脚の破片は、上位の底部に充填された円盤が剝離している。脚の内面にはシボリ痕跡が認められ、外面にはヘラ状工具で面取りを施した痕跡が存在する。脚の端部は、内外面とも全体にヨコナデを施している。



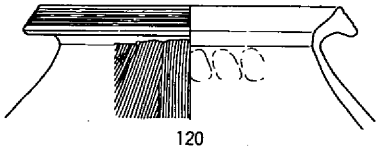
118



119

0　10cm

第101図　No.70土壙出土遺物（1/4）



120

0　10cm

第102図　No.71土壙出土遺物（1/4）

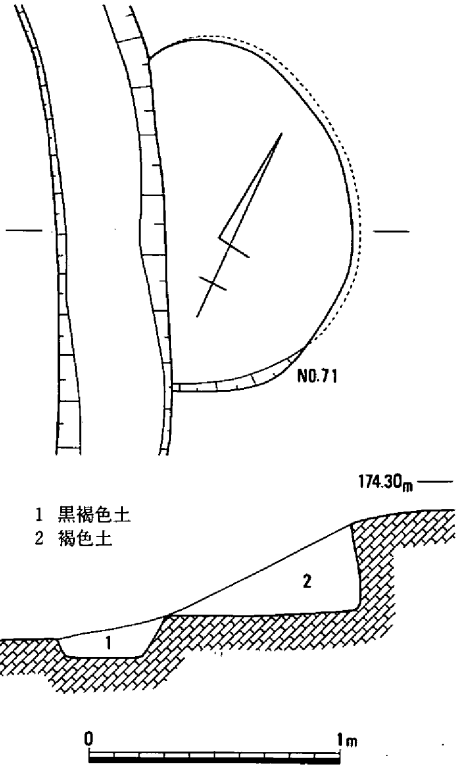
6）No.70土壙

遺構（第99図）

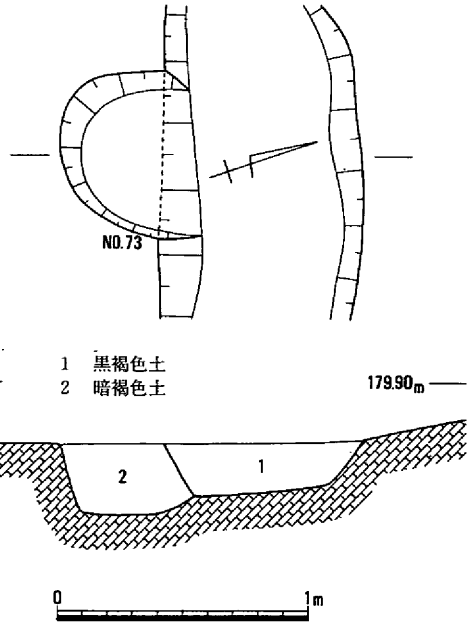
No.68住居址の北側に近接して検出した土壙で、No.69土壙と木谷13号墳の中間に存在した。平面形は径約130cmを測る歪んだ円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは50－70cmであった。底部はほぼ水平で、内部に少量の炭化物を含む褐色土が堆積していた。

出土遺物（第101図、図版63）

118は口径14.2cmを測る壺の口縁部から頸部にかけての破片である。内傾しながら立ち上がった頸部は、短く外反して

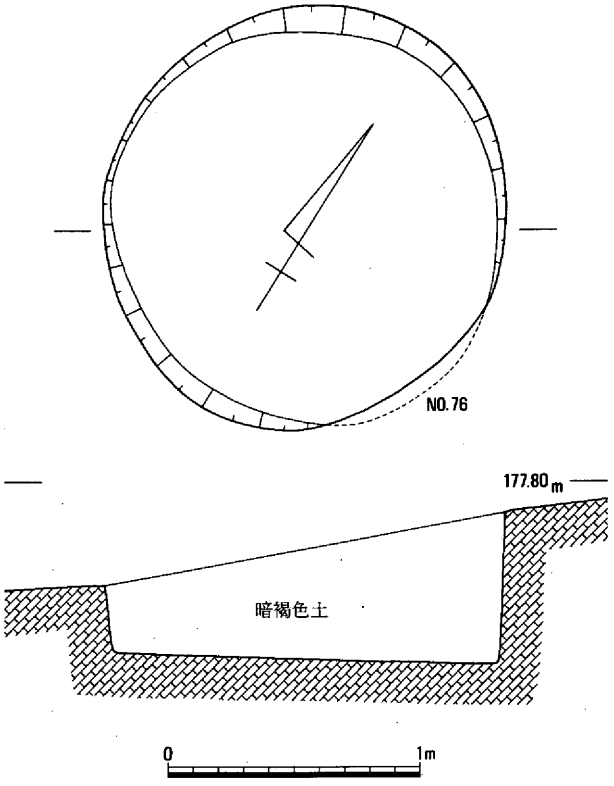


第103図　No.71土壙（1/30）

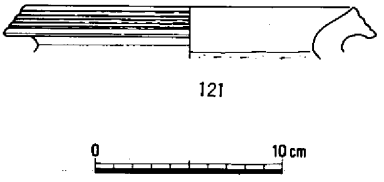


第104図　No.73土壙（1/30）

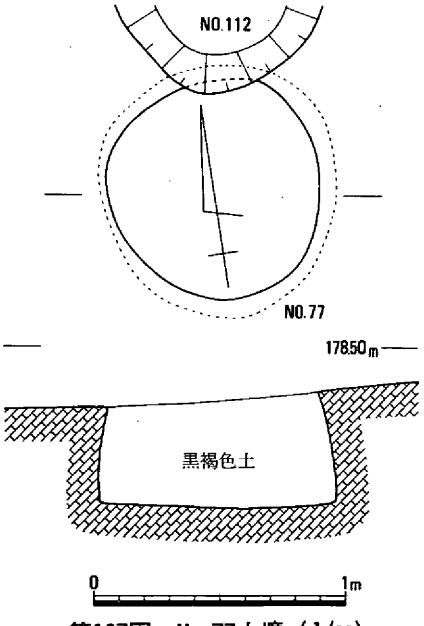
口縁部に至り、端部は斜め上下に拡張して4条の凹線を有する面が存在する。内面の脚部はヘラケズリを行い、頸部には指頭圧痕が認められる。口縁部の内外面と頸部の外面は、全体にヨコナデを施している。119は平底を呈する壺または甕の底部である。内面は縦方向のヘラケズリを行い、外面は横または斜め方向のハケメの上面に縦または斜め方向の粗いヘラミガキを加えている。



第105図　No.76土壙（1/30）



第106図　No.76土壙出土遺物（1/4）

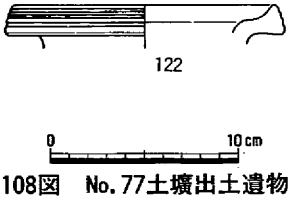


第107図　No.77土壙（1/30）

7）No.71土壙

遺構（第103図）

発掘調査範囲の南西端部に位置する木谷13号墳の周溝によって約半分が削平された状態で検出した土壙で、南東方向には前述したNo.69土壙やNo.70土壙が存在



第108図　No.77土壙出土遺物（1/4）

した。平面形は長径約140cmを測る楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは35cmと浅くなっていた。この土壙の底部はほぼ水平で、東側の壁が袋状を呈していた。土壙内には褐色土が堆積し、少量の弥生土器片が出土した。

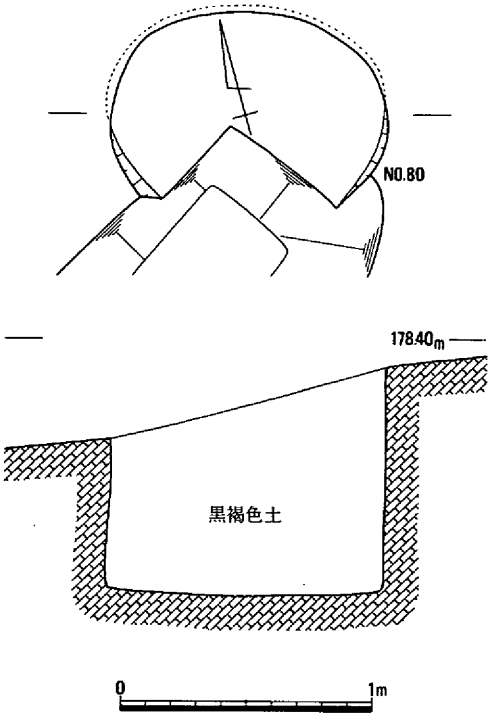
出土遺物（第102図、図版63）

口径15.8cmを測る甕の口縁部から頸部をかけての破片である。斜め上方へ内傾して立ち上がった胴部は、頸部で器壁が著しく薄くなって「く」字状に短く外反し、口縁部へ移行する。口縁部の端部は、肥厚して4条の凹線が認められる面が存在する。頸部直下の内面には指頭圧痕が認められ、外面の胴部には縦方向の粗いハケメが存在する。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施し、黒斑が認められる。

8）No.73土壙

遺構（第104図）

発掘調査範囲のほぼ中央部分に位置する緩斜面で検出した土壙で、約半分が木谷10号墳の周溝によって削平されていた。平面形は径約70cmを測る円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは約30cmであった。この土壙の底部はほぼ水平で、暗褐色土が堆積していた。

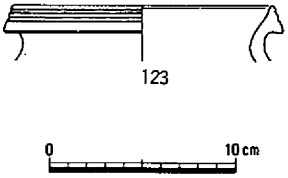


第109図　No.80土壙（1/30）

9）No.76土壙

遺構（第105図）

木谷古墳群で発掘調査を実施した範囲の北西端部に位置する緩斜面で検出した土壙で、地形の高い東方向にはNo.79住居址が存在した。この土壙の周辺には数多くの中近世土壙墓が存在したが、土壙内の堆積土が中近世土壙墓のものと著しく異なっているのが明白であった。平面形は短径約160cm・長径約170cmの円形に



第110図　No.80土壙出土遺物（1/4）

近い形態を呈し、検出面からの深さは27～60cmであった。底部はわずかに東側へ傾斜し、南西側の壁が袋状になっていた。土壙内には暗褐色土が堆積し、少量の土器片が出土した。

出土遺物（第106図）

器壁が厚い口径17.4cmを測る壺の口縁部破片である。「く」字状に短く外反した口縁の端部は、斜め下方へ張り出して3条の凹線を有する面が認められる。内面の頸部より下位はヘラケズリを行い、口縁部の内外面と頸部の外面はヨコナデを施している。胎土中には砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で橙色を呈している。

10）No.77土壙

遺構（第107図）

発掘調査範囲の中央よりやや西側へ寄った位置の緩斜面で検出した土壙で、南西方向約1.50mの近接した地点にはNo.80土壙が存在した。この土壙はNo.78住居址に接する状態で確認されたが、北側の一部をNo.112中近世土壙墓によって削平されていた。平面形は短径約85cm・長径約90cmを測る楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは33～45cmになっていた。この土壙の底部はほぼ水平であるが中央部がわずかに窪み、周囲の壁は内湾して立ち上がる袋状を呈していた。土壙内には黒褐色土が堆積し、少量ではあるが土器片が出土した。

出土遺物（第108図）

器壁の厚い壺と思われる口縁部の小破片である。短く外反した口縁の端部は、肥厚して上方へ拡張している。口縁端部の外側には、3条の浅い凹線を有する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを施し、焼成は良好で浅黄色を呈している。

11）No.80土壙

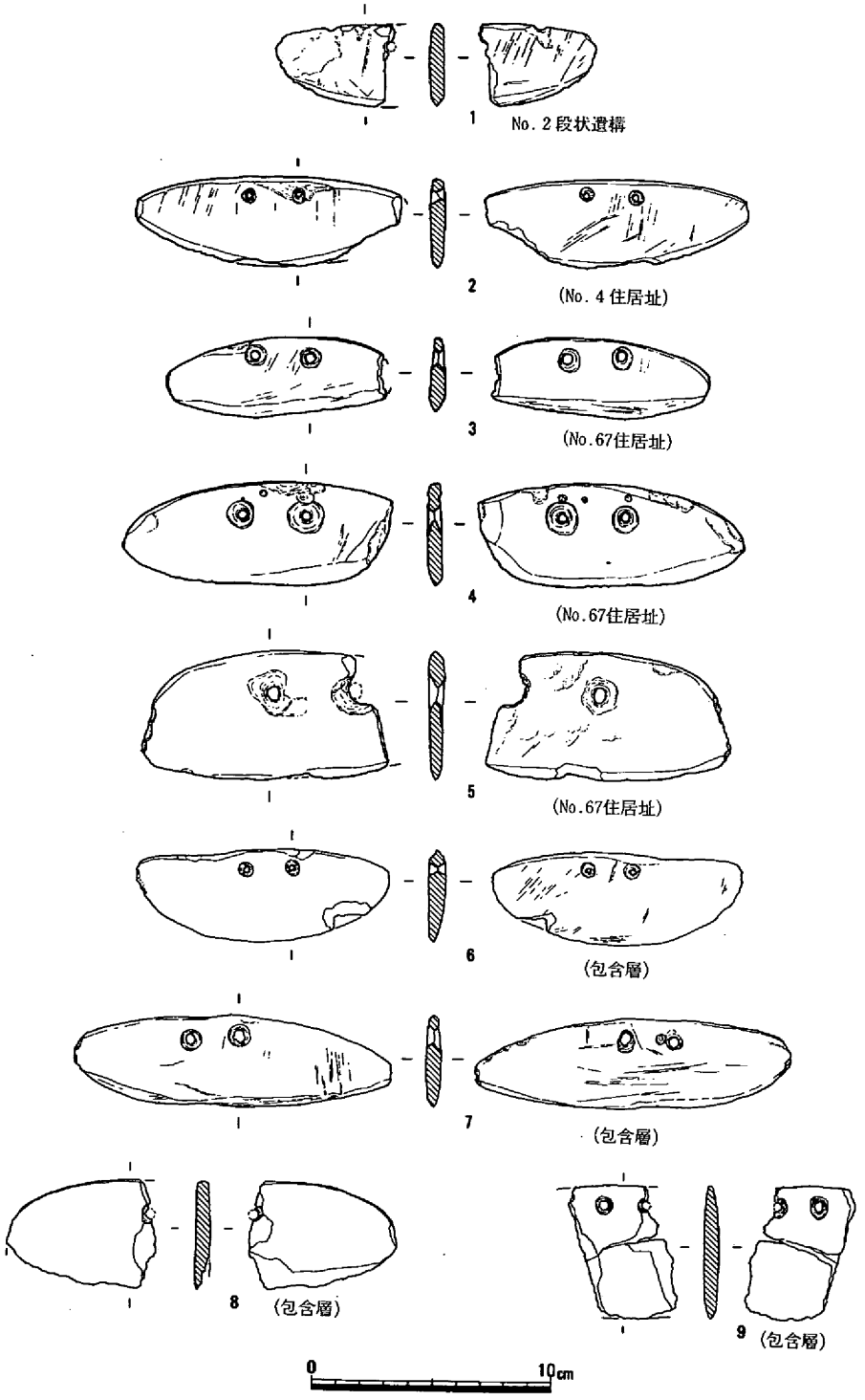
遺構（第109図）

No.78住居址やNo.77土壙を検出した中央よりやや西側の緩斜面に存在した。南から西にかけての壁面は、電柱の掘り方によって破壊されていた。平面形は短径約85cm・長径約110cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは60～90cmであった。この土壙の底部はほぼ水平で、北側の壁が袋状になっていた。土壙内には黒褐色土が堆積し、少量の土器片が出土した。

出土遺物（第110図）

壺の口縁部と推定する。緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、斜め上下に拡張して外側に2条の凹線を有する面が認められる。内外面とも全体にヨコナデを施し、焼成は良好で明るい赤褐色を呈している。

なお土器以外の出土遺物として、住居址や包含層から出土した磨製石包丁がある。



第111図　住居址および包含層出土石包丁（1/3）

3．中近世の遺構と遺物

木谷７号墳の存在地点が不明であったこともあって、発掘調査を実施する前に木谷古墳群の所在する丘陵へ実際に行って事前踏査をした。その結果、丘陵の到る所に墓石が認められ、五輪塔の残骸や備前焼の破片が散乱していた。また丘陵の一部には、階段状に造成した現代の墓地も認められた。このような状況であったから、丘陵全体が古くから墓地として利用されており、中世または近世の墓も少なからず存在することが推定された。

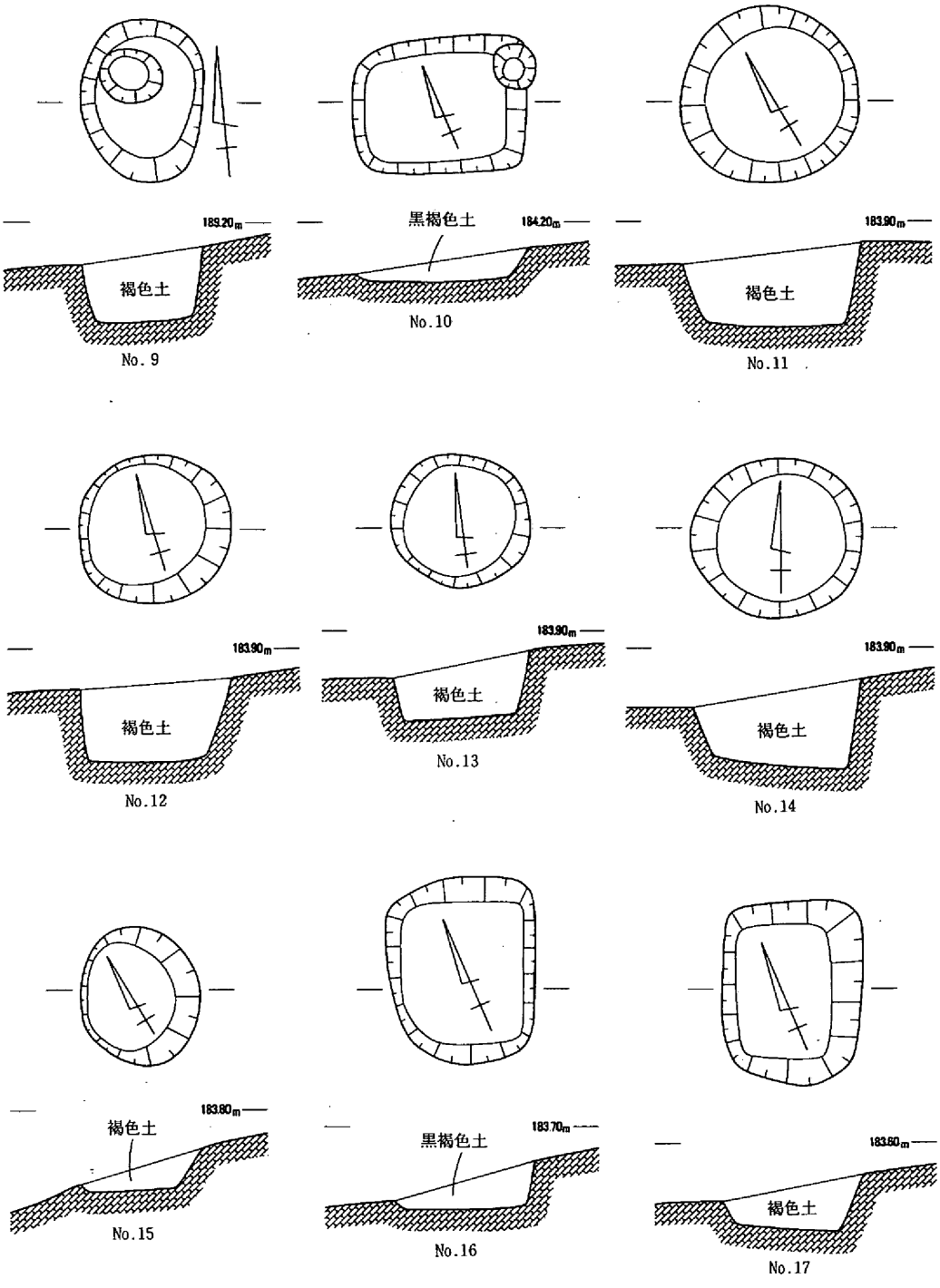
(1)　中近世土壙墓

中世または近世に属する土壙墓を78基も検出したが、特定の土壙墓に確実に伴う遺物は１点も確認されなかった。採集した遺物は、発掘調査の作業中に土壙墓周辺の表土から出土したものばかりで、中世のものと近世のものが混在していた。また発掘調査を実施した範囲には現代の墓地が存在して、その墓地の所有者が判明していたから、発掘作業を伴う以前に墓地移転をすでに完了させており、現代の墓のみならず中世や近世のものも掘り返して、広い範囲に多数の穴が認められた。このようなことから、それぞれの土壙墓の時期が明らかでないから、中世と近世を一緒にした「中近世土壙墓」という曖昧な表現にしたのである。

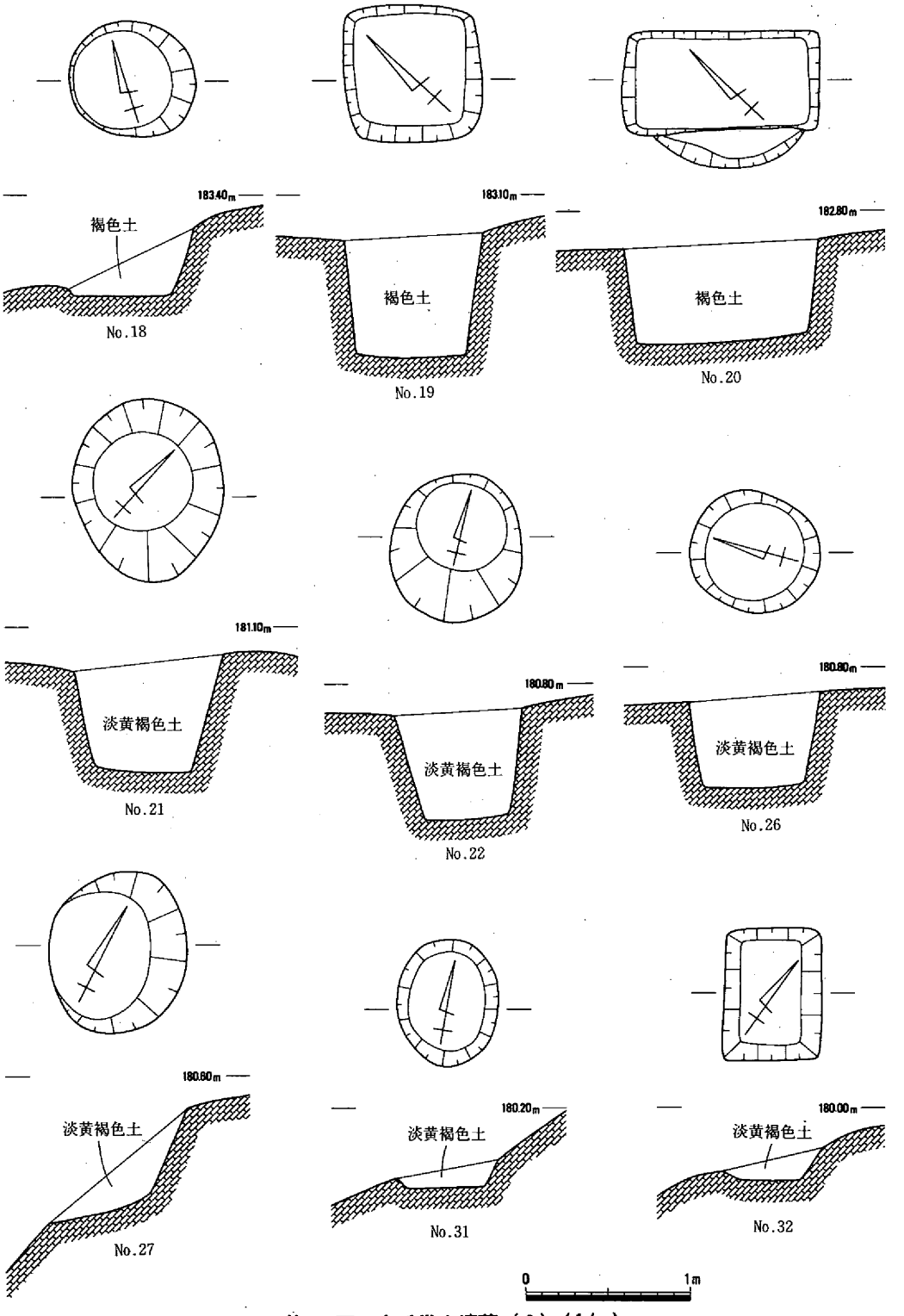
これらの中近世土壙墓は、No．９中近世土壙墓のように離れた地点に単独で存在したのは特異な例で、ほとんどが狭い範囲に密集した状態で検出された。

調査範囲の北端部に位置する木谷７号墳の東側には、No.10からNo.20の11基の中近世土壙墓が存在した。円形または楕円形を呈するものが多いが、No.19やNo.20のように底部まで深くて方形または長方形のものもある。ほぼ中央部に位置するNo.23住居址とNo.25住居址の中間には、No.21とNo.22、No.26とNo.27の４基の中近世土壙墓が存在した。いずれも円形または楕円形である。南端部に位置するNo.37段状遺構の東方向約８ｍの急斜面には、No.31からNo.36の６基の中近世土壙墓が存在した。そのうちNo.32とNo.33は、小規模な長方形を呈していた。北西端部に位置する木谷11号墳の北西側には、No.41からNo.44の４基の中近世土壙墓が存在した。いずれも円形または楕円形である。木谷11号墳の南側に位置する急斜面には、No.45からNo.54の10基の中近世土壙墓が存在した。ほとんどが長方形または方形で、円形のものはNo.51の１基だけであった。No.78住居址と木谷11号墳の間に位置する丘陵尾根上には、No.55からNo.64とNo.81からNo.112の42基におよぶ中近世土壙墓が存在した。検出した数が多いこともあって、No.61のように大きくて方形に近い形を呈するものからNo.88の小円形のものまで、規模や形態が多種多様であったが、円形または楕円形に近いものが多いようであった。

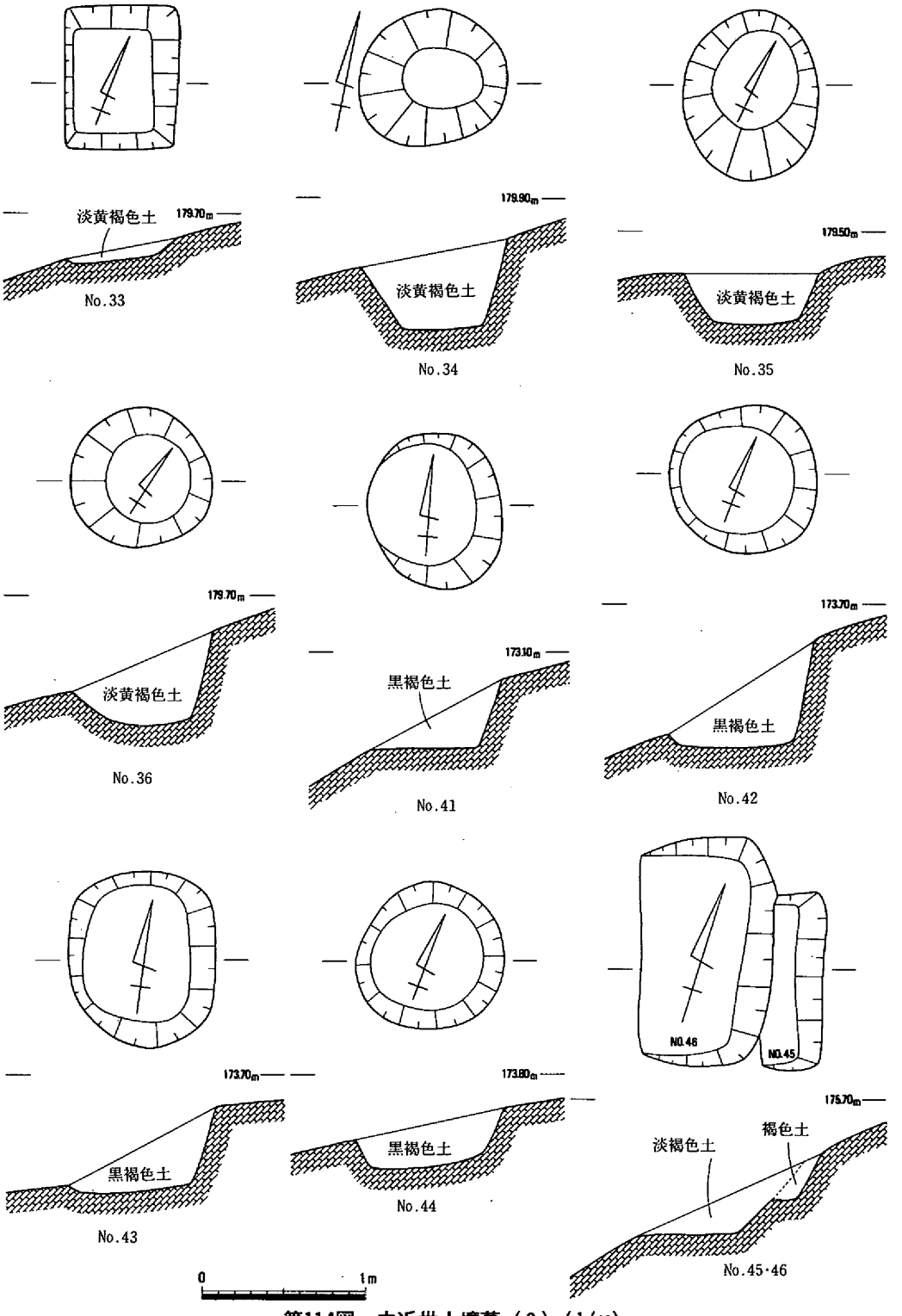
なお中近世の遺構としては、土壙墓以外には存在しなかった。



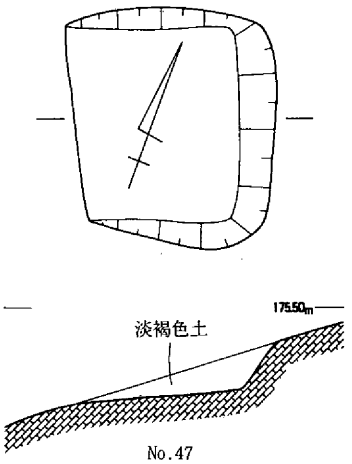
第112図　中近世土壙墓（1）（1/40）



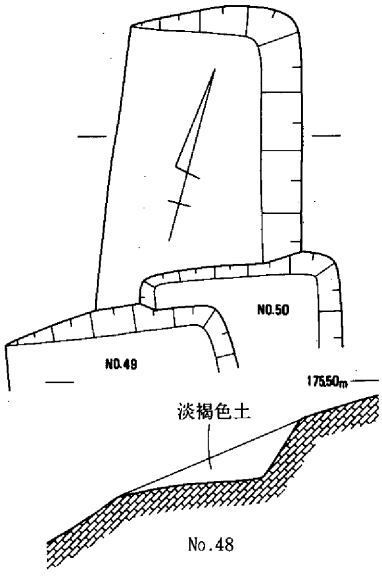
第113図　中近世土壙墓（2）（1/40）



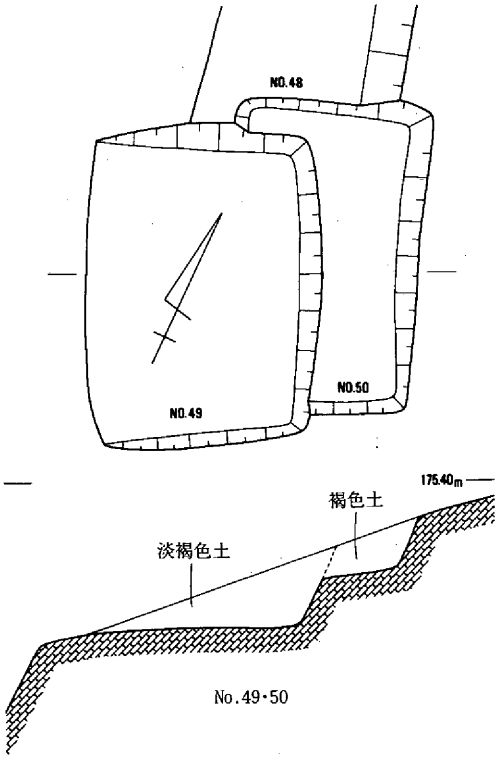
第114図　中近世土壙墓（3）（1/40）



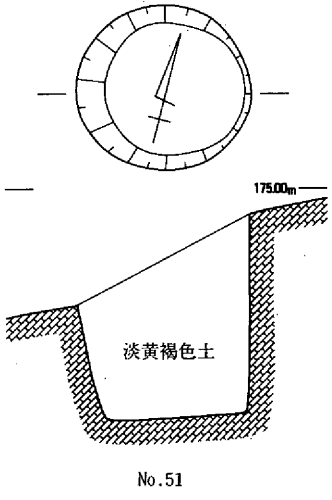
No.47



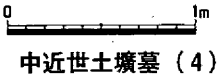
No.48



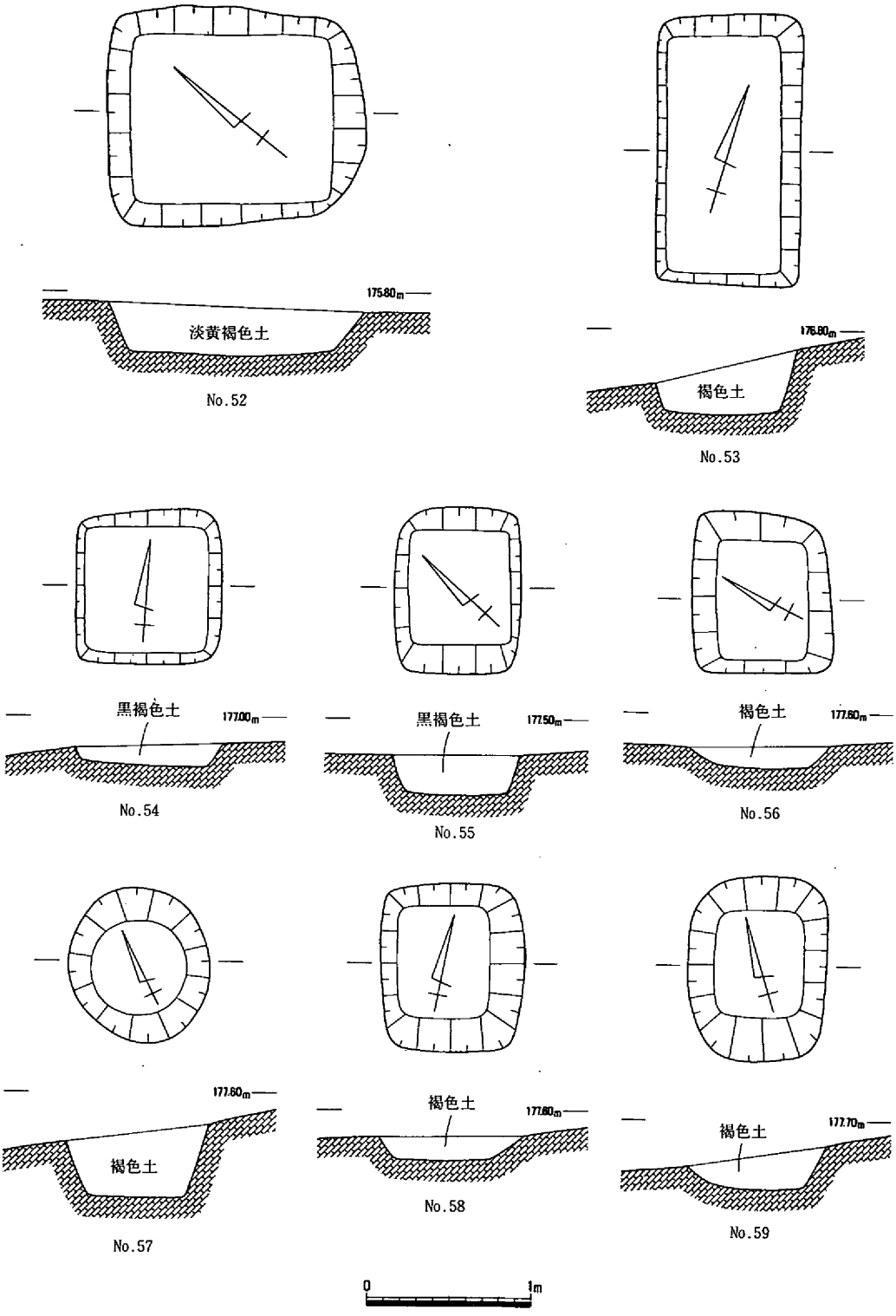
No.49・50



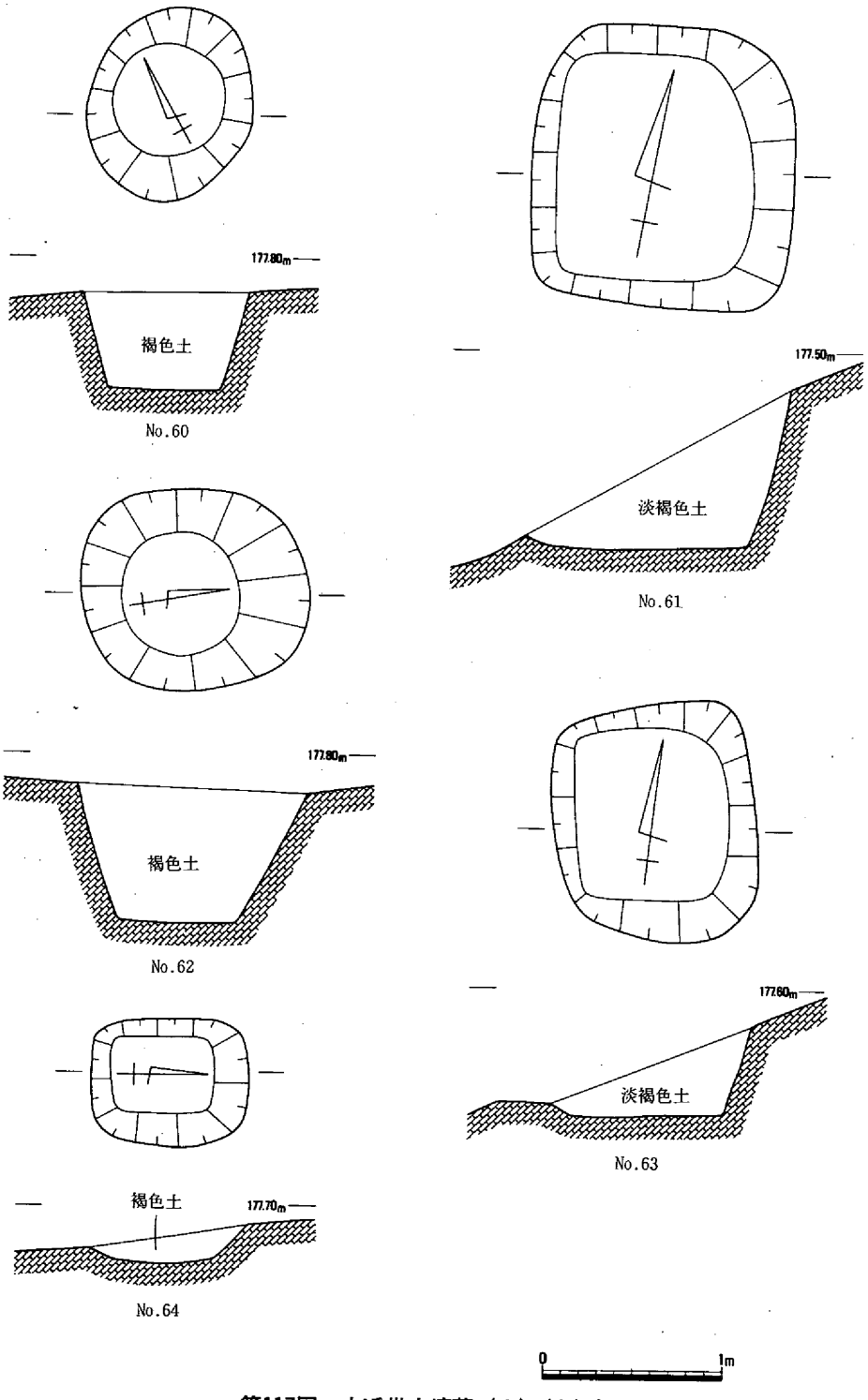
No.51



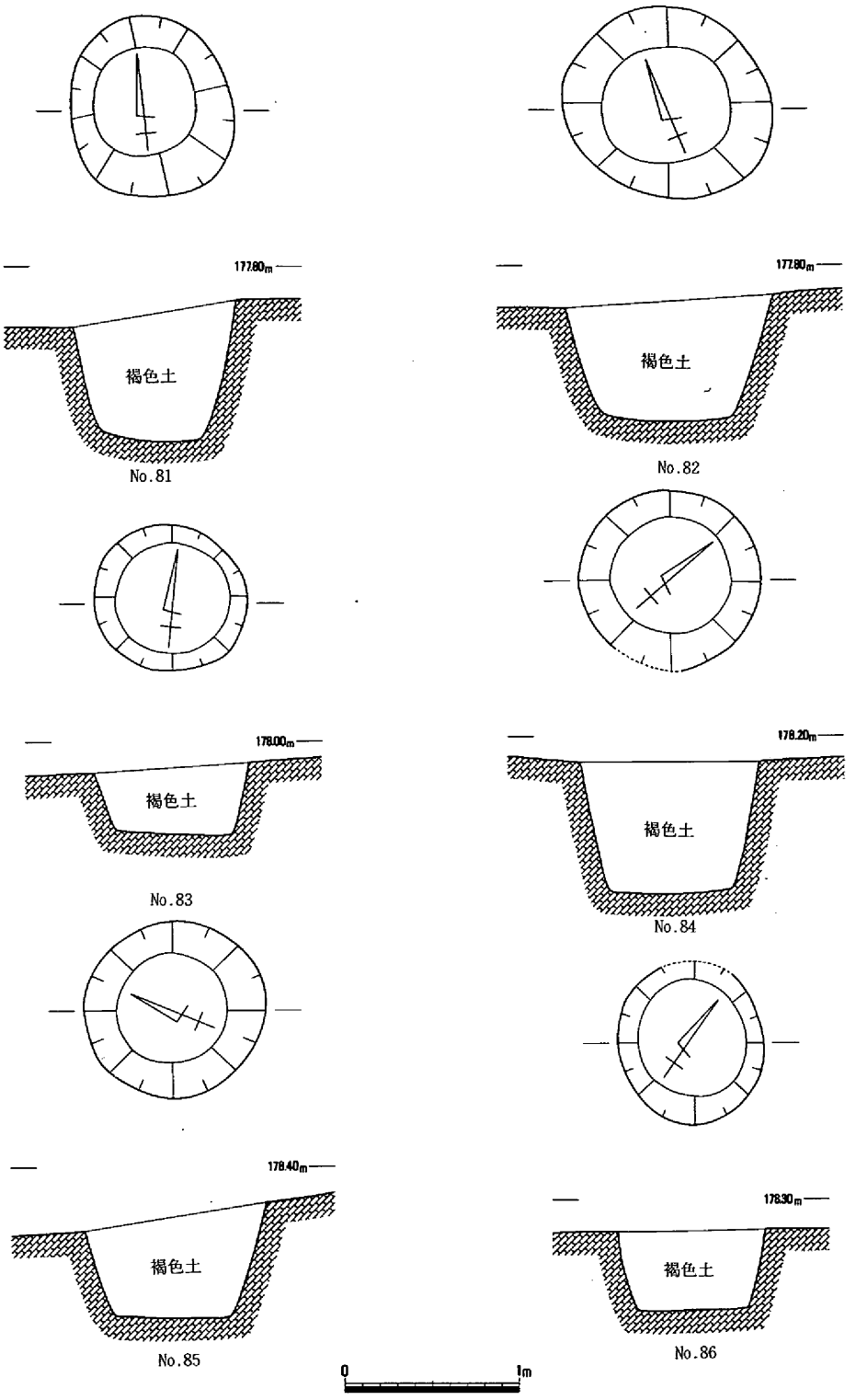
第115図　中近世土壙墓（4）（1/40）



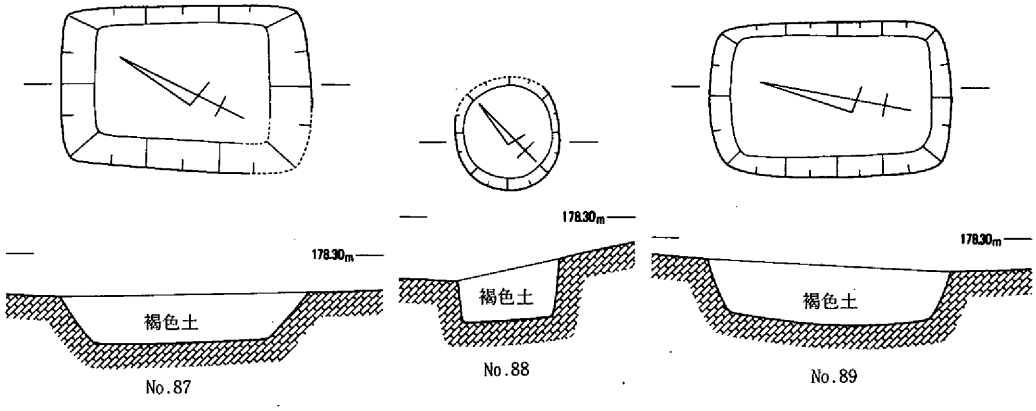
第116図　中近世土壙墓（5）（1/40）

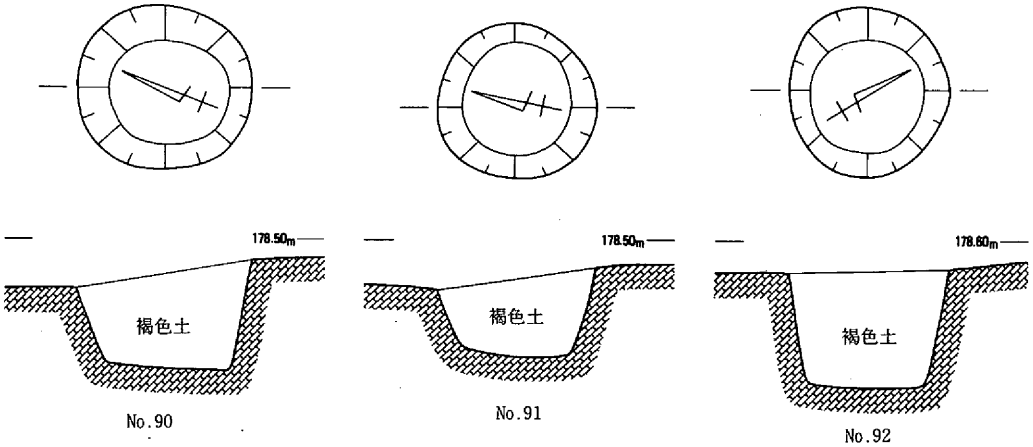


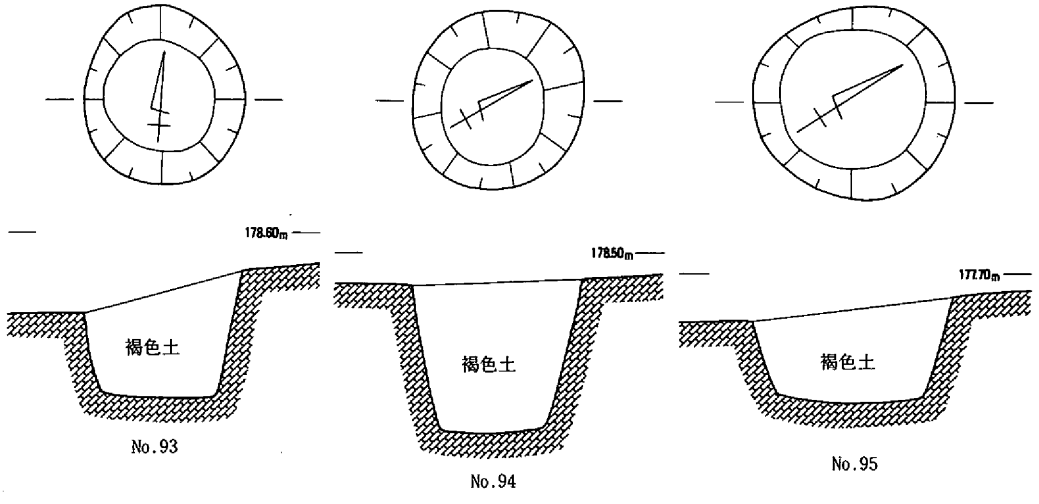
第117図　中近世土壙墓（6）（1/40）



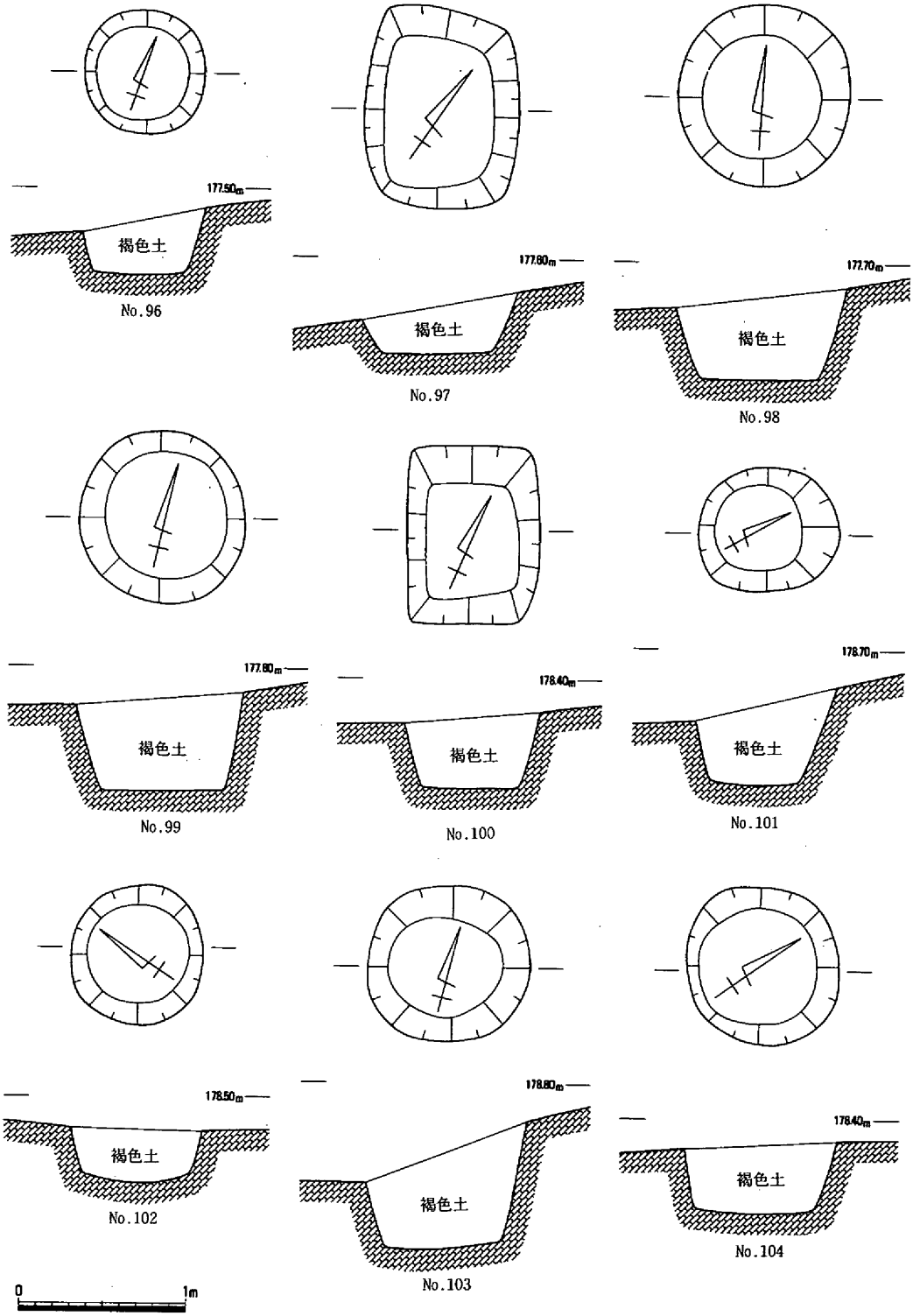
第118図　中近世土壙墓（7）（1/40）



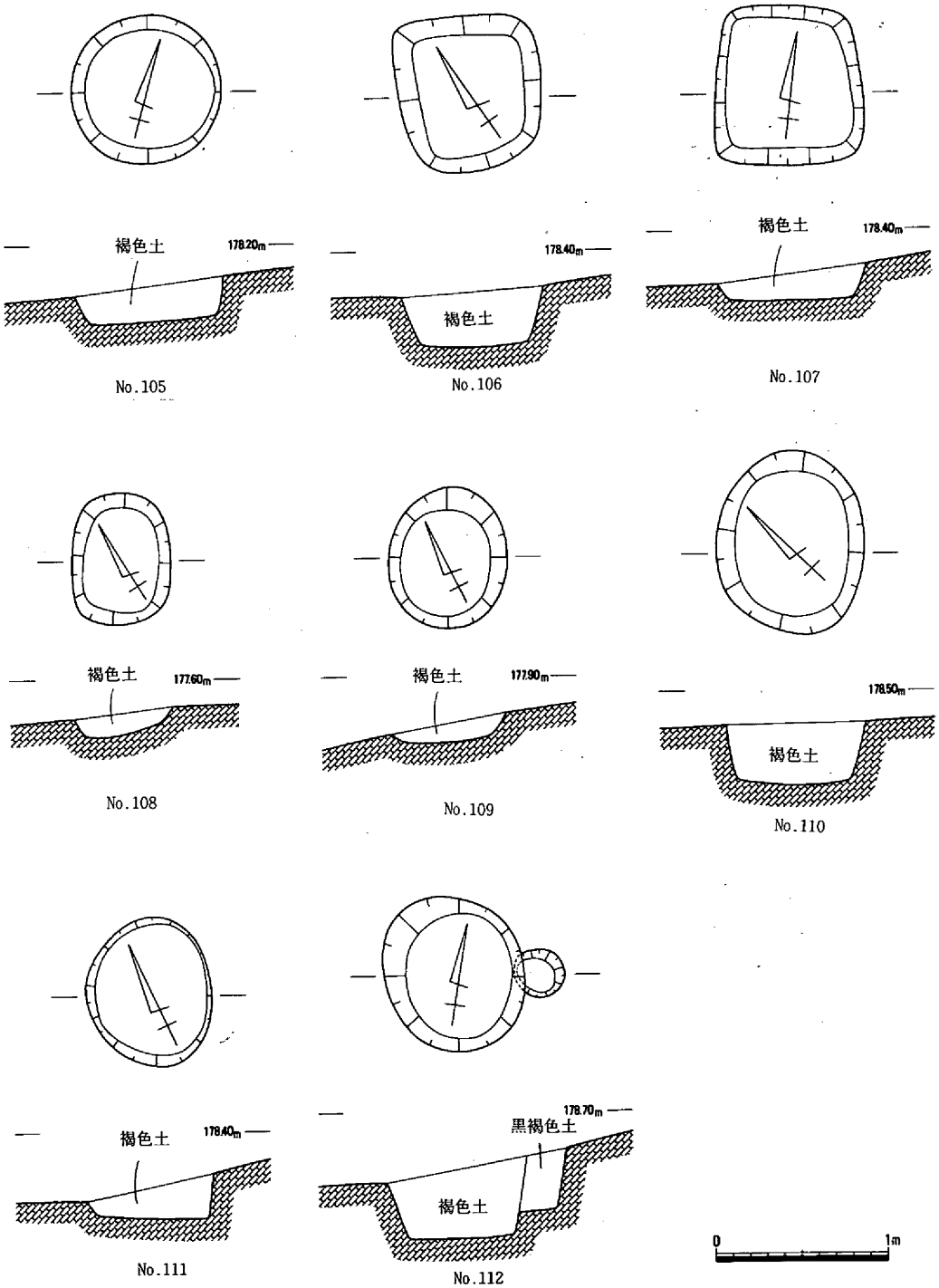




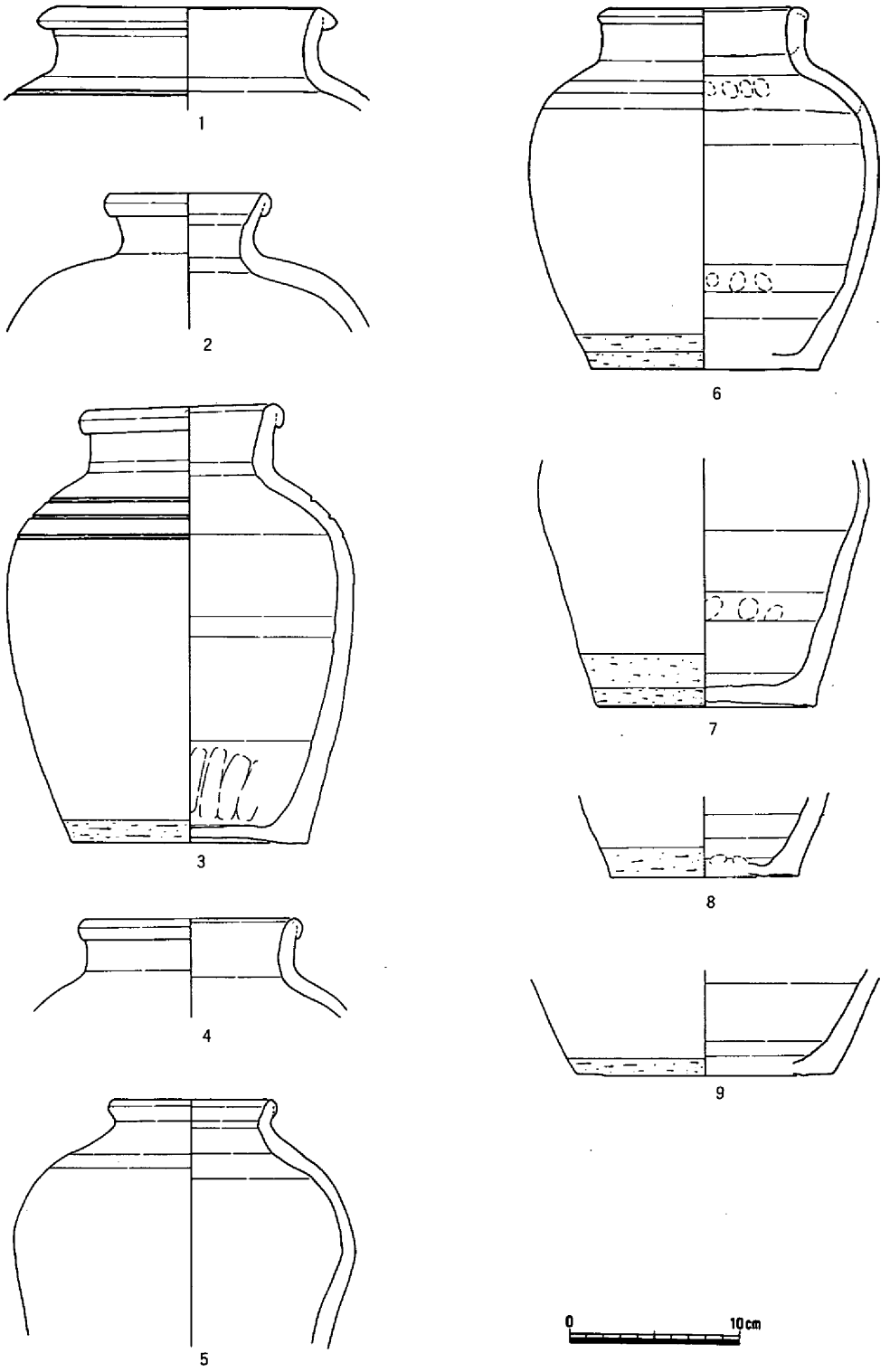
第119図　中近世土壙墓（8）（1/40）



第120図　中近世土壙墓（9）（1/40）



第121図　中近世土壙墓（10）（1/40）

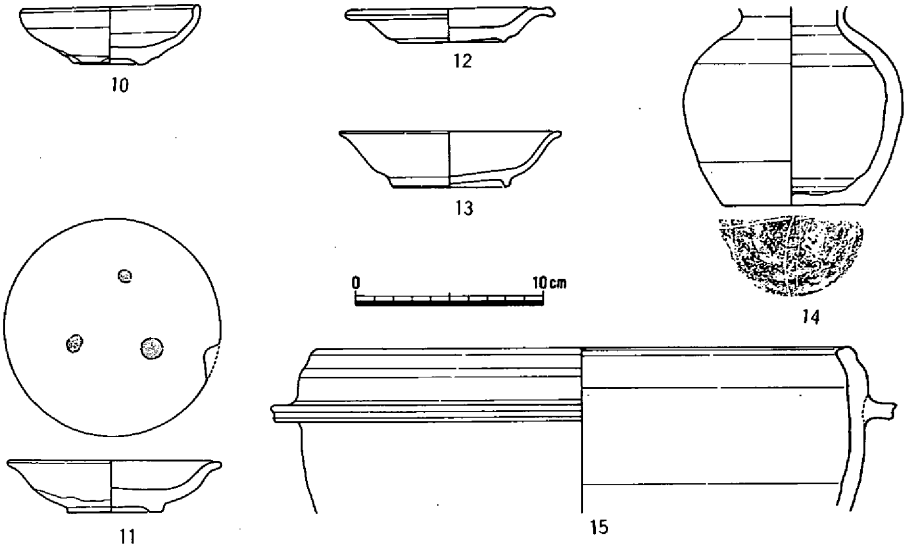


第122図　中近世土壙墓周辺出土遺物（1）（1/4）

(2)　中近世土壙墓の周辺から出土した遺物

図化するのが可能であったのは、備前陶器の壺（1～9）、肥前陶器の皿（10・11）、瀬戸美濃陶器の皿（12）、中国製白磁の皿（13）、須恵質の壺（14）、瓦質の羽釜（15）である。

備前陶器の壺は、口縁部の形態が外湾して立ち上がるもの（1）、斜め上方へ直線的に張り出すもの（2）、器壁が厚くて高く直立するもの（3・4）、短く外湾するもの（5）、直立した口縁端部が肥厚するもの（6）がある。また口縁端部の玉縁は、断面が三角形を呈して横に拡張するもの（1）、幅が比較的広いもの（2～4）、折り返しが極めて小さいもの（5・6）がある。胴部は倒卵形を呈し、底部は平底である。外面の胴部下端はいずれもヘラケズリを行い、肩部に凹線を有するもの（1・3）がある。内面はヨコナデを施しているが、指頭圧痕が残存するもの（3・6～8）もある。1～3は茶褐色がかった灰色を呈し、4～9の色調は赤褐色である。10の肥前陶器の皿は、内湾して立ち上がった口縁端部を丸く仕上げて、鈍い橙色の露胎にオリーブ色の釉薬を施している。11の口縁端部は端反り状に短く外傾し、黄橙色の露胎にオリーブ色の釉薬を施している。内面の底部には、重ね焼きによる3か所の胎土目が認められる。12の瀬戸美濃陶器の皿は、斜め上方へ立ち上がった口縁の端部がさらに横方向に大きく拡張し、底部には削り出しによる台が存在する。この皿は完形品で、内外面とも全体に薄いオリーブ色の釉薬が認められる。13は中国製白磁の皿で、端反りの端正な製品である。14は須恵質の壺で、口縁部は欠損して不明である。外面にオリーブ色の釉薬が施され、外面底部にはヘラ記号が存在する。15の瓦質の羽釜は、口縁部から胴部にかけての小破片である。



第123図　中近世土壙墓周辺出土遺物（2）（1/4）

小　　結

木谷古墳群が所在した地点は、旭川に合流する目木川左岸の舌状に張り出した低丘陵上で、眼下には久世町の沖積平野を望むことができる。この地理的な立地条件に恵まれた環境を考慮しながら、発掘調査によって得られた結果に基づき、若干の説明を加えて小結にしたい。

検出した遺構とその時代

木谷古墳群が所在した丘陵上へ、人間が最初に足を踏み入れたのは、弥生時代の後期と考えられる。検出した遺構は、段状遺構、住居址、土壙である。

弥生時代に属する段状遺構は、発掘調査を実施した範囲の北東端部である木谷８号墳の北側に位置する比較的急勾配の斜面に存在し、近接して２基の土壙も確認された。丘陵上で検出した住居址は、平坦な地点に存在したものは建て替えが行われていたものが多く、急斜面のものは全体の規模が小さかった。弥生時代後期と推定される土壙は、いわゆる貯蔵穴と考えられている袋状を呈した形態が一般的なもので、規模の異なる11基を発見した。この土壙はその形状が中近世土壙墓に極めて酷似していたが、内部に堆積していた覆土が全く相違していたため、峻別するのは簡単であった。これらの土壙が検出されたのは、いずれも段状遺構や住居址の存在した近くの緩斜面で、２基が近接して発見されたものが多かった。

古墳時代の後半になると、丘陵上や丘陵の斜面に埋葬施設が横穴式石室である古墳が数多く築造され、壺棺や土壙墓も検出した。

木谷古墳群は、『久世町埋蔵文化財分布地図』によると８基の古墳からなる古墳群で、中国横断自動車道の路線内には３基の古墳（木谷６～８号墳）が知られていたが、築造当時の姿を良好な状態で保持していたのは、地形の最も高い位置に所在した８号墳であり、残る古墳は墳丘のみならず天井石や壁面の石なども存在しなかった。発掘調査対象の範囲を全面調査したこともあって、全く周知されていなかった６基の古墳（木谷９～14号墳）以外に新しく壺棺（No.８壺棺）と土壙墓（No.66土壙墓）を検出した。すべての古墳に墳丘は認められず、埋葬施設の残存状態も極めて悪かった。なかでも11号墳は天井石が１枚も認められず、側壁の一部も欠損していたが、石室内は盗掘や攪乱を受けた形跡はなく、追葬が繰り返し行われた当時の状況を良好な状態で留めていた。なお出土遺物の装飾付脚付子持壺やトンボ玉は、このような小規模な古墳から出土するのが珍らしい貴重なものである。

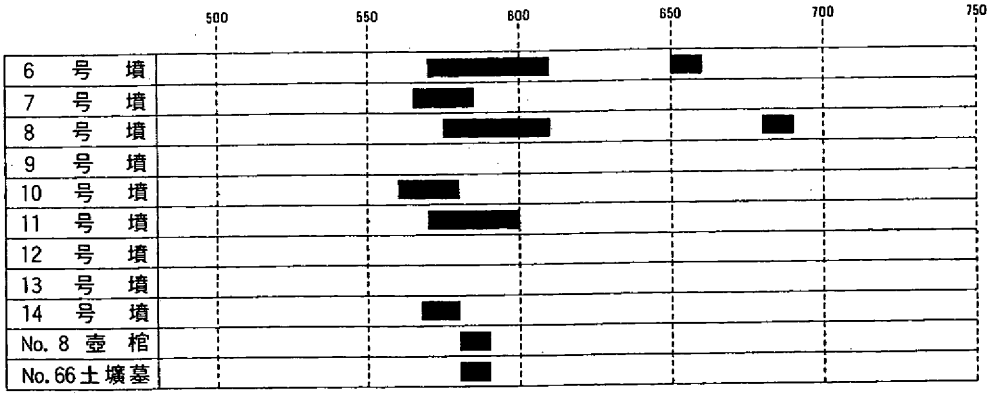
鎌倉時代以降の中世や近世になると、78基にもおよぶ土壙墓が造られていた。これらの中近世土壙墓は、ほとんどが狭い範囲に密集して検出され、単独で存在したものは少ない。平面形は円形または楕円形を呈するものが多く、方形や長方形のものも認められた。特定の土壙墓に伴う遺物は１点もなく、作業中に土壙墓周辺の表土から採集したものばかりである。

各古墳や墳墓の築造と追葬時期について

ここで遺物が出土した古墳や墳墓に関して、築造された時期や追葬の状況を考えてみたい。

木谷古墳群が所在する丘陵の発掘調査を実施した範囲で、最初に古墳が築造されたのは10号墳であろう。南西側に位置する地形の低い部分が削平され、辛うじて残存した部分も上面が破壊されて天井石が存在しなかったが、埋葬施設は横穴式石室と推定される。この古墳から出土した須恵器の杯身と杯蓋には、７組14点のセット関係が判明した。杯身は口径11.7～13.6cm・器高4.0～5.1cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はすべて回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の底部には仕上げナデを加えている。杯蓋は口径13.5～15.2cm・器高4.1～5.5cmで、外面の天井部と体部の境に稜が認められるものや、内面の口縁端部に段を有するものがある。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部には仕上げナデを加えている。これらの杯身や杯蓋の形態的特徴や成形手法を陶邑古窯址群における須恵器の編年[(1)]と比較検討するならば、木谷10号墳から出土した古い様相を呈する個体は、ＴＫ43の古い段階のものでＭＴ85に近いものに酷似し、６世紀後葉の時期に属するのではなかろうか。

10号墳に続いて築造されたのは、右片袖を有する小規模な横穴式石室の７号墳であろう。出土した須恵器を概観すると、外面の天井部に貼り付けのつまみを有する３点の有蓋高杯の蓋には古い形態が残存しているものの、杯身や杯蓋は10号墳から出土したものに比して口径や器高の法量がやや小さくなり、内面の底部や天井部に仕上げナデを加えないものが出現して、同心円のタタキ痕跡が残存しているものもある。また杯身の外面底部に施されたヘラケズリの面積は狭くなり、杯蓋外面の天井部と体部の境に稜が認められるものはほとんどなく、内面の口縁端部に段を有するものも存在しなくなる。このような観察結果を陶邑編年と対照するならば、



木谷古墳群築造・追葬期変遷一覧表

ＴＫ43の中でもやや古い形態の特徴や成形手法を有する６世紀後葉の須恵器に類似している。

ところで14号墳は、床面に小さな河原石を敷き詰めた埋葬施設の一部が辛うじて残存した古墳である。出土遺物の須恵器には、杯身や杯蓋以外に壺、甕、長脚無蓋高杯が認められる。そのうち甕は６片の小破片を接合したものだが、頸部から口縁部にかけてラッパ状に上方へ緩やかに開き、外面の口縁部にクシ描波状文と１条の凹線が存在する。外面の底部にはカキメが認められ、頸部から胴部上位にかけてヨコナデを施している。この甕の形態や成形の手法は、比較的古い様相を呈していると思われる。それに対して復元完形品の長脚無蓋高杯は、口径10.5～10.8cm・器高16.0～16.8cm・脚底径10.5～10.7cmを測り、脚部に３方向で２段の長方形の透しが存在し、脚の端部は器壁が薄くなって折れ曲がっているから、高杯としては新しい時期の形態であろう。また２点の杯蓋は、外面の天井部と体部の境に稜が認められ、内面の口縁端部に段の残存痕跡を有する古い形態的特徴があるものの、器形全体の法量の縮小が進行しているので、７号墳から出土した杯蓋よりも後出のものと考えたい。このようなことから14号墳から出土した須恵器は、甕や杯蓋の形態に古い特徴をわずかに残すが、陶邑編年のＴＫ43のものに酷似し、６世紀後葉の時期になろであろう。なお14号墳は、７号墳からわずかに遅れて築造され、ほんの短期間だけ使用されただけで、７号墳よりも早い段階に廃絶されたと推定される。

６号墳と11号墳は、石室内から出土した比較的多くの須恵器を観察した限りでは、ほぼ同時期に築造されたと推定する。６号墳の杯身は口径10.4～12.9cm・器高3.0～4.8cm、杯蓋は口径10.4～14.4cm・器高3.4～3.7cmである。11号墳の杯身は口径11.9～12.6cm・器高3.7～4.5cm、杯蓋は口径10.6～15.1cm・器高3.4～5.2cmである。これらの杯身や杯蓋は、前述した14号墳のものよりも法量が小さくなり、器形の小型化が進んでいる。外面の器表面に施されたヘラケズリの面積は極度に狭くなり、ヘラ切りを行っただけで調整を加えないものも認められる。ヘラケズリの回転方向は右が依然として多いが、左のものも少数ではあるが存在する。内面の底部や天井部に仕上げナデを加えるものは少なくなり、全体に施すヨコナデも粗雑になっている。杯身の口縁端部の立ち上がりは低く、内傾の度合が大きくなっている。底部は浅いものが多くなり、中央部が尖った感じになるものも出現している。なおこの６号墳と11号墳から出土した須恵器の種類には、１点か２点の平瓶が初めて登場しており、11号墳には様々の器形の高杯が認められる。６号墳と11号墳から出土した多量の須恵器を陶邑編年に対照すれば、ＴＫ43からＴＫ209の古相に相当するであろう。なお６号墳から出土した外面の天井部につまみを有し、内面の口縁端部にかえりが認められる特異な形態を呈する１点の杯蓋は、ＴＫ217の新相に属するであろう。須恵器と一緒に出土した耳環のセット関係から推定して、６号墳には少なくとも６遺体、11号墳には４遺体が埋葬されていたと考えられるが、11号墳に追葬が行われたのは６世紀末葉までで、７世紀になった段階にはすでに石室が使用されなくなっていたであろう。

6号墳は7世紀の前葉まで継続して追葬が行われ、一旦廃絶した後に7世紀中葉になって再び石室が使用されている。

8号墳の墳丘は天井石の一部が露出するほどに削平されていたが、内部の右片袖を有する横穴式石室がほぼ築造された当時の状態で存在していた。調査に着手する以前にはすでに石室の入口が開口しており、人間が腹這いになって進入できたから、石室内には遺物は残存しないであろうと推定された。ところが発掘調査の作業が進行すると、奥壁に近い部分から追葬の時にかって副葬されていた遺物を片付けたと思われる多く須恵器が出土しただけでなく、攪乱された石室内の堆積土中にも比較的多くの遺物が存在した。須恵器の器種としては杯身と杯蓋が多数を占め、横瓶、堤瓶、甕、壺などがわずかに認められた。8号墳の石室内から出土した杯身は口径10.5～12.8cm・器高3.1～4.4cmで、杯蓋は口径11.4～14.4cm・器高3.9～4.5cmである。これらの杯身と杯蓋は、前述した6号墳や11号墳から出土したものに比して法量の小さいものが多く、杯身の口縁端部の立ち上がりは極めて低い。外面のヘラケズリの回転方向はすべて右であるが、ヘラ切りを行っただけで器表面に調整を施さないものが多く認められる。これらの8号墳から出土した須恵器は、陶邑編年のＴＫ43の新相からＴＫ209の古相のものに酷似しており、6世紀後葉から7世紀前葉の時期に属するであろう。したがってこの8号墳は、6号墳や11号墳よりもやや遅れて築造され、追葬は6号墳と同様に7世紀前葉まで継続して行われたと考えられる。なお貼り付け高台を有する杯身と内外面とも全体に丹塗りを施した土師器の皿は、7世紀後葉[(2)]になってすでに古墳が廃絶してしまった後に、石室内へ何らかの事情で搬入された遺物と考える。

No.8壺棺に使用された須恵器の壺は、口径22.1cm・器高41.8～43.0cm・胴部最大径41.0cmを測り、全体の器形が歪んでいる。外湾した口縁の端部は、わずかに肥厚して全体に丸く仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデを行い、内面の胴部から底部にかけては同心円のタタキ痕跡が顕著に認められる。外面の胴部から底部にかけては、縦方向のタタキ痕跡の上面に横方向のカキメを施している。外面の底部には須恵器片が付着し、胴部には濃い自然釉が垂れ下がっている。この須恵器の壺は、作られた時期を特定する形態的特徴が極めて少ないが、陶邑編年のＴＫ209の古相のものに類例が多く、7世紀に近い6世紀後葉になるのではなかろうか。

平面形が隅丸長方形を呈するNo.66土壙墓では、床面から浮いた状態で須恵器の杯蓋2点が出土している。口径13.3cm・器高4.6cmで天井部が丸く湾曲しているものと、口径13.6cm・器高4.3cmで天井部はヘラケズリ部分が狭くて尖った感じになるもので、2点とも外面に自然釉が付着しているほぼ完形品である。前者の器形は古い様相を想起させ、後者は新しい時期のものではないかと思われるが、同じ遺構から共伴して出土したのはまぎれもない事実である。この2点の杯蓋は、陶邑編年のＴＫ43かＴＫ209の古様のものである6世紀後葉の時期であろう。

住居址や土壙から出土した弥生土器について

特にNo.４住居址、No.67住居址、No.69土壙からは、同時期の一括土器として良好な資料を得たため、今後の岡山県北部地方における弥生時代の遺構を理解するのに役立つであろう。

これらの弥生土器を、真庭郡美甘村大字美甘に所在する堂の前遺跡[3]と津山市瓜生原に所在する小原遺跡[4]の出土土器と比較検討し、高橋護氏の土器編年[5]と藤田憲司氏の土器編年[6]に対照することにした。その結果、堂の前遺跡の２号住居跡下層出土の土器や、小原遺跡住居址２・３・５・６・７・９出土の資料を指標としたⅡ期の土器に類似し、高橋氏のⅦ－ｂ～ｃ期、藤田氏のⅠ期のうちの新相に相当すると考えられ、弥生時代後期初頭～前葉の時期に属するのではなかろうか。なおNo.38・74・75住居址から出土した遺物には、弥生時代後期後葉～末葉の土器も混在している。

中近世土壙墓の周辺から出土した遺物について

特定の中近世土壙墓に伴う遺物は１点も確認されていないが、周辺から備前焼陶器の壺、肥前陶器の皿、瀬戸美濃陶器の皿、中国製白磁の皿、須恵質の壺、瓦質の羽釜が出土している。

備前焼陶器の壺は、間壁忠彦氏の備前焼編年[7]によるとⅣ期のもので、古いものから新しいものまで15世紀代におさまるであろう。肥前陶器の皿で口縁部が内湾するものは、天正13年以後に出現する17世紀前後の製品である。端反り状に短く外傾して３か所に胎土目が認められるものも、17世紀前後の製品である[8]。瀬戸美濃陶器の皿は、大窯の製品で16世紀の第３四半期のものである[9]。中国製白磁の皿は、白磁Ｃ類と呼ばれて15世紀末葉から17世紀頃に属する。須恵器の壺と瓦質の羽釜は、時期を特定することができない。（福田）

註

1　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

2　西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　奈良国立文化財研究所　1978年

3　平井泰男『堂の前遺跡』美甘村教育委員会　1989年

4　木村祐子・行田裕美・小郷利幸『小原遺跡』津山市土地開発公社・津山市教育委員会　1991年

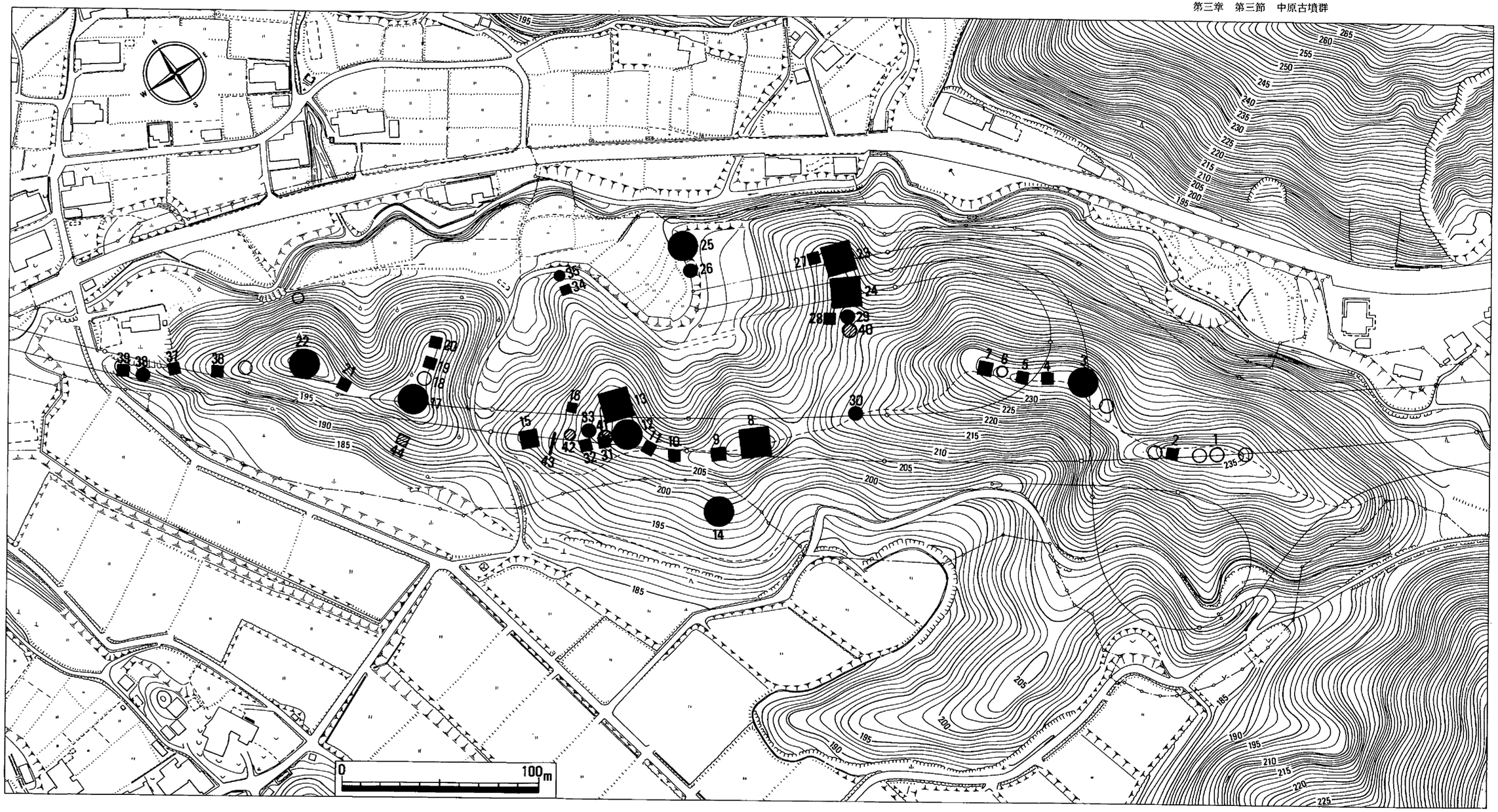
5　高橋護「弥生土器－山陽－」『考古学ジャーナル』173・175・179・181　ニュー・サイエンス社　1980年

6　藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64巻４号　日本考古学会　1979年

7　間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社　1991年

8　佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の御教示による。

9　愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏の御教示による。



第124図　中原古墳群全体図（1／2000）

第三節　中原古墳群

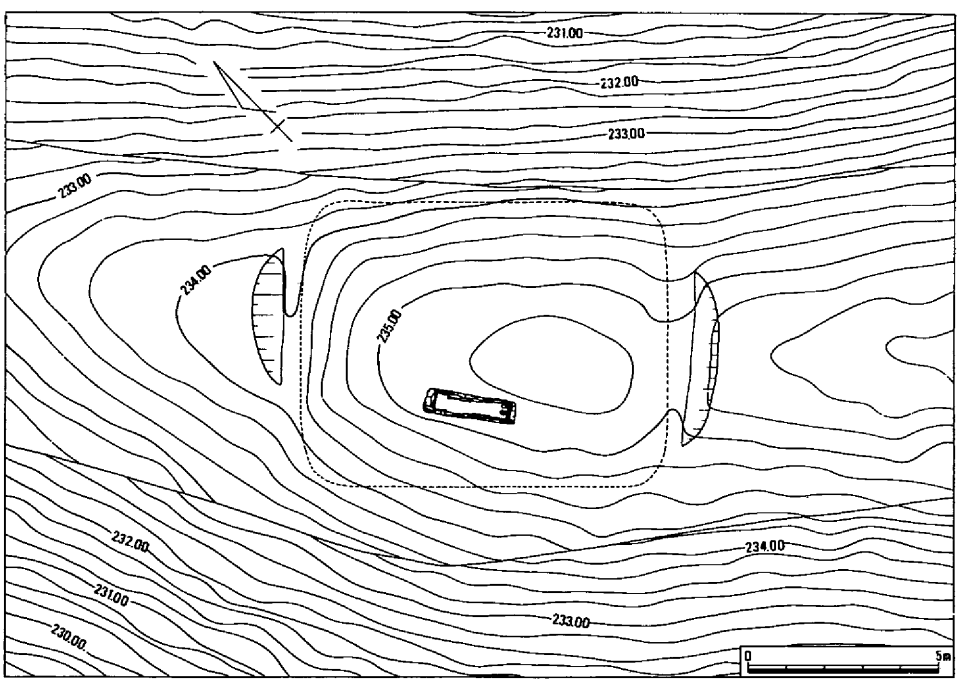
1．古墳時代の遺構と遺物

中原古墳群は、久世町の市街地から東方向へ遠く外れた、落合町との町境に面する一般国道181号沿いの丘陵に所在する。『久世町埋蔵文化財分布地図』によると25基の古墳からなる古墳群であるが、そのうち1基の横穴式石室を有する古墳（中原14号墳）を除いた、中国横断自動車道の久世インター建設予定地内に位置する24基の古墳が、発掘調査の対象になった。

(1)　1号墳

『久世町埋蔵文化財分布地図』によると、中原古墳群が所在する丘陵の最も南東端部に古墳のマークが記入され、径約9.5m・高さ約1.0mの円墳で主体部は不明となっていた。

この地点は丘陵尾根上の頂部に位置したため、周辺よりも地形が高かったが、古墳の有無については不明であった。調査前の地形測量を実施してから表土除去作業を行ったが、墳丘の盛土や主体部は認められず、古墳ではなくて単なる自然の高まりであることが判明した。



第125図　2号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

(2) 2号墳

調査前の状況

1号墳の所在推定地であった標高239ｍを測る尾根の頂部から、北西方向へ約22ｍ寄った丘陵上の位置が、2号墳の所在した地点である。尾根上の平坦面が急激に狭くなり、北東と南西の両斜面が極端に傾斜していた標高236ｍの部分が、周辺よりもわずかに高くなっていた。

墳丘と周溝（第125図、図版74－1）

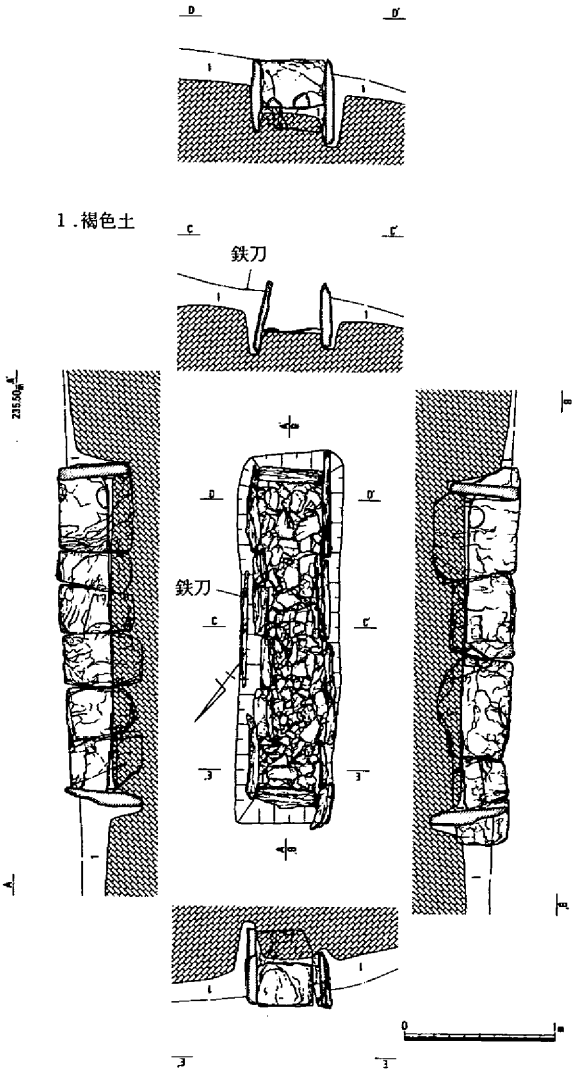
この2号墳の墳丘形態は、古墳が存在した丘陵の地形に著しく制約されていたこともあり、長径9.60ｍ・短径7.50ｍを測る隅丸長方形を呈していた。周溝は丘陵の尾根に直交して両墳端に認められ、断面が「U」字形を呈して暗褐色土が堆積していた。

主体部（第126図、図版75）

2号墳の主体部は箱式石棺で、墳丘の中央から外れた南西斜面に造られ、天井石が存在しなかった。地山を長方形に掘り窪め、内法が長径209cm・短径39cmであった。両小口部分は1枚だけの石であったが、南西側壁は4枚、北東側壁は6枚の石が使われていた。床面には小さな板石が敷き詰められ、南東側の小口部分には2個の河原石による枕石が認められた。北東側に面した主体部掘り方の肩部には、刃部を石棺に向けた1振の鉄刀が出土した。

出土遺物（第157図1、図版108）

刀身長63.4cm・刀身最大幅3.3cm・茎長14.2cm・茎幅2.0cmを測る。刀身は平造で、断面二等辺三角形である。茎に3か所の目釘穴が認められ、茎尻は斜めに切り落した隅切尻である。関は片側に段を有する片関である。刀身の一部に鞘の木質が付着している。



第126図　2号墳主体部実測図（1／50）

(3)　3号墳

調査前の状況

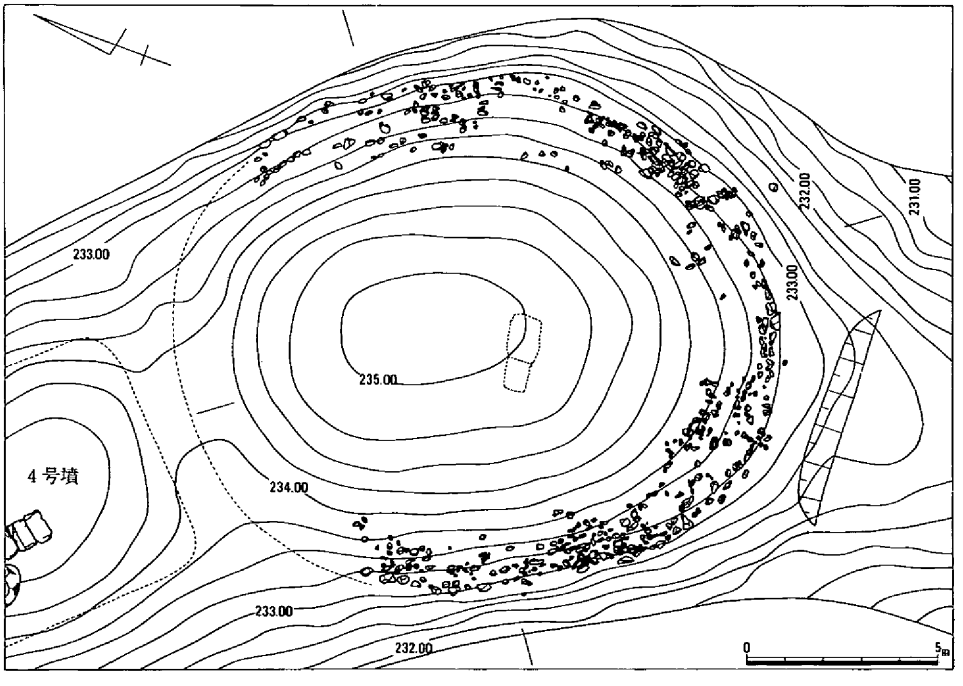
前述した2号墳の所在した地点とは別の丘陵で、2号墳から北方向へ約60ｍ離れた標高235ｍを測る尾根の頂部に存在した。この3号墳の位置は、尾根が北から北西の方向に変換する部分で、斜面は急勾配に傾斜して急峻になっていたものの、頂部には比較的広い平坦面が認められ、調査に着手する以前から中原古墳群の中でも大きい円墳が所在するのが周知されていた。

墳丘と周溝（第127・128図、図版76）

この3号墳の墳丘は、尾根の方向にやや長くなる長径16.10ｍ・短径13.80ｍの楕円形に近い形態を呈し、4号墳に面した北西部分を除いて墳丘端部に葺石が認められた。4号墳との境界部分には、尾根方向に直交する断面が浅い「U」字形の周溝が存在した。

主体部（第130図、図版77～79）

3号墳の箱式石棺は、天井石が2枚で上面に黄褐色の粘土を施していた。地山と旧表土面を隅丸方形状に浅く掘り窪め、その中央をさらに長方形に深く下げて、内法が長径178㎝・短径42～44㎝・高さ23～27㎝の石棺を造っていた。両小口は1枚の石であったが、両側壁は3枚の石を使っていた。床面には小さな板石が敷き詰められ、東小口部分に割石の枕石が存在した。



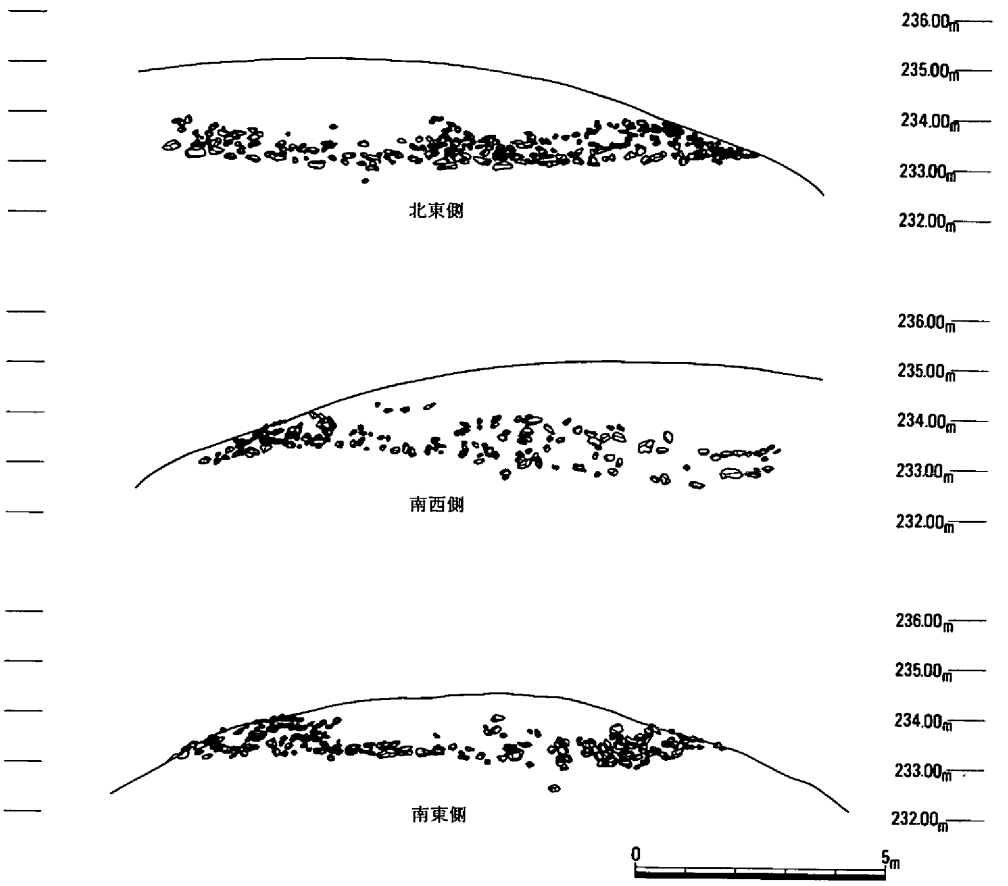
第127図　3号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

人骨・遺物出土状況（第129図、図版78－２）

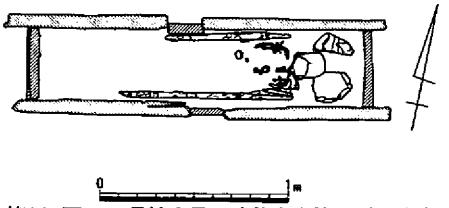
２個の枕石の間に頭蓋骨が存在したが、下顎骨は外れて右上腕骨の近くにあり、骨盤以下は残存しなかった。右上腕骨と北側壁の間に鉄剣が、左上腕骨と南側壁の間に鉄刀が出土した。

出土遺物（第157図２・３、図版108）

鉄剣（２）は、剣身長53.0cm・剣身最大幅3.5cm・茎長13.6cm・茎幅2.0～2.8cmである。剣身の断面は凸レンズ形で、明確な鍋を造り出していない。茎に目釘穴は確認できず、茎尻はほぼ直角におさめる一文字尻である。剣身には鞘の木質、茎には柄の木質がそれぞれ付着しているが、両者の間に約0.5cm幅で木質の付かない部分がある。鉄刀（３）は、刀身長74.6cm・刀身最大幅3.0cm・茎長17.5cm・茎幅2.2～2.5cmを測る。刀身は平造で、断面は二等辺三角形を呈し、茎断面は台形である。茎の目釘穴は、確認できていな

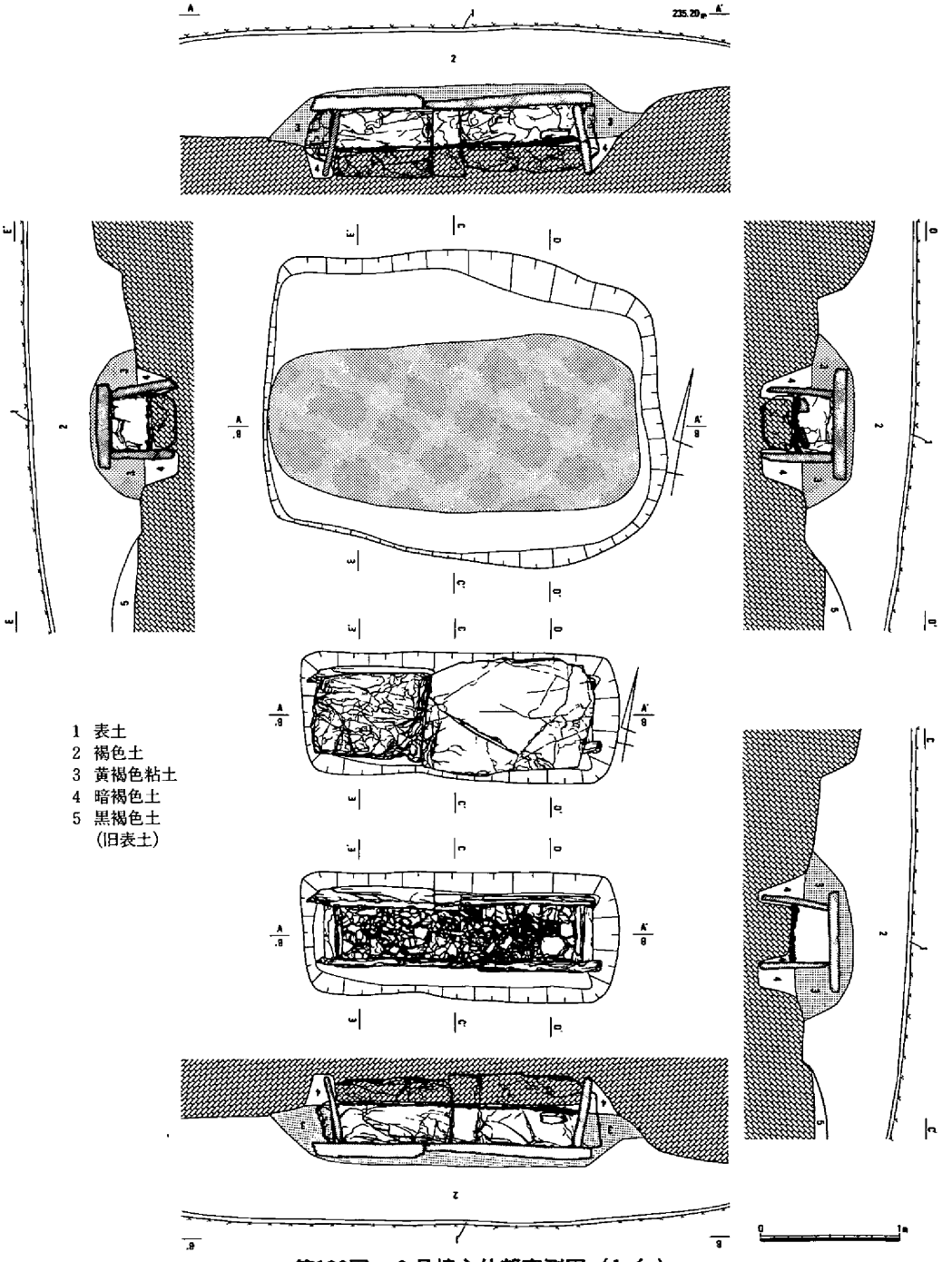


第128図　３号墳葺石側面図（1／150）



第129図　３号墳人骨・遺物出土状況（1／40）

い。茎尻は隅を弧状に抉り落した隅抉尻で、関は片関である。刀身と茎には、鞘および柄の木質が付着している。



第130図　3号墳主体部実測図（1／50）

(4)　4号墳

調査前の状況

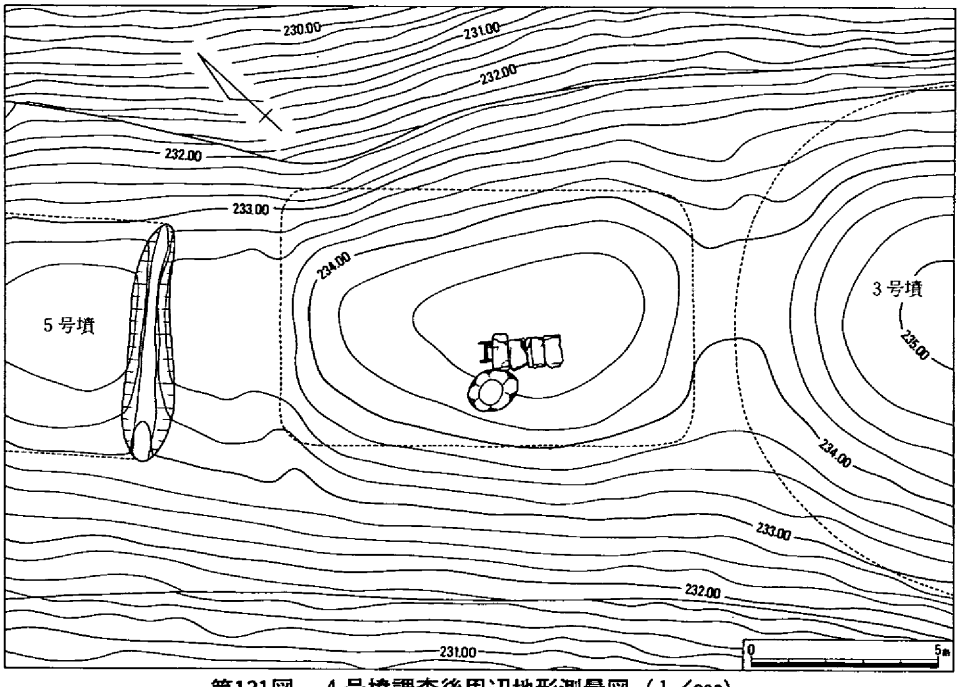
3号墳の南西方向に接する状態で検出した古墳である。3号墳は中原古墳群の中では最大級の円墳で、径が大きいのみならず墳丘も高く目立っていたが、隣接するこの4号墳は、墳丘の盛土と思われる尾根上の高まりはほとんどなく、調査を実施する前には古墳ではないかもしれないと考えられていた。

墳丘と周溝（第131図、図版80－1）

この4号墳が存在した位置は、丘陵尾根上の平坦面が急激に狭くなった地点で、円墳を造るのは極めて困難な地形であると考えられた。墳形は長径10.80ｍ・短径6.70ｍの隅丸長方形を呈し、3号墳に面した周溝は3号墳と共有していた。5号墳に面した北西側の周溝は、尾根に直交して浅く掘り窪められていた。なおこの4号墳は、主体部に近接した墳丘盛土中より1振の鉄刀が出土した。また北東斜面の墳端からは、鉄鏃がまとまって検出された。

主体部（第132図、図版80－2・81－1）

墳丘の中央からやや外れた南西方向に寄った斜面に造られていたが、天井石1枚が残存しなかった。地山を長方形に掘り窪め、内法が長径182cm・短径38～46cm・高さ32～35cmの石棺を

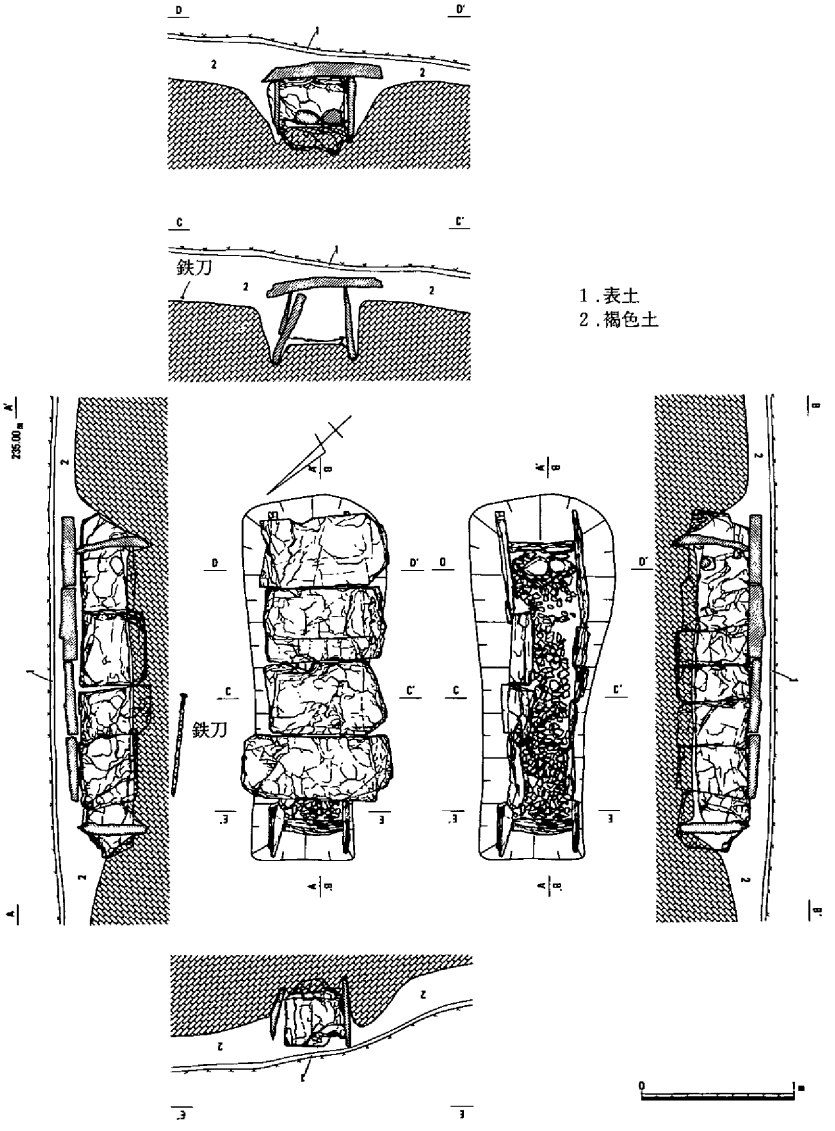


第131図　4号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

造っていた。両小口は１枚の石であったが、南西側壁は６枚、北東側壁は５枚の石が使われていた。床面には小さな板石が敷き詰められ、南東小口部分に河原石による枕石が存在した。

出土遺物（第157図**4**、第158図**6**～**12**、図版108･109）

鉄刀（**4**）は、刀身長62.1cm・刀身最大幅2.9cm・茎最大幅2.4cmを測る。刀身は平造で、断面二等辺三角形を呈するが、茎は両側縁で厚さが変らず、断面長方形になっている。茎の目釘穴は、確認できていない。関は片関である。刀身と茎には、鞘および柄の木質が部分的に付着している。**6**～**8**は有茎の尖根系鉄鏃で、長頸式鉄鏃出現以前のものと考える。鏃身は比較的幅広く、ずんぐりした形態をなす。鏃身関は段階状に２段関となっている。**6**は明確ではないが、**7**と**8**は頸部を緩く捩って１/４ないしは１/２回転させている。箆被関はほぼ直角の段をなしており、その直下の部分に**6**と**8**は矢柄表面の口巻（樹皮巻）が認められる。**9**～**12**は茎の破片で**6**～**8**の一部と考える。**9**と**10**には矢柄表面の口巻が認められ、**11**は茎に糸を巻いている。



第132図　4号墳主体部実測図（1／50）

(5) 5号墳

調査前の状況

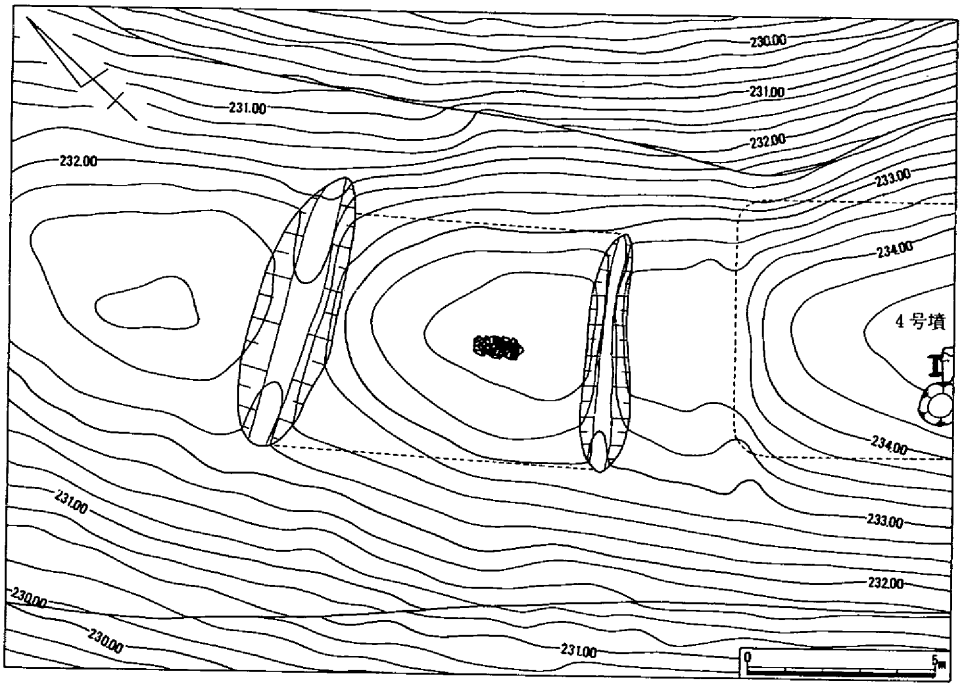
3号墳から7号墳が存在した丘陵のほぼ中央に位置し、尾根上の平坦面が極端に狭くなっていた。北東側と南西側の斜面の墳端は把握することができなかったが、尾根に直交する周溝は調査前の段階でも確認することができた。

墳丘と周溝（第133図、図版82－1）

この5号墳は、両端に尾根方向と直交する比較的深い溝を掘り窪め、その土砂を盛土に用いていた。長径7.80－9.00m・短径6.20mを測り、長方形に似た形態を呈していた。4号墳に面した南東側の周溝は、検出面での最大幅130cm・深さ45cmであった。6号墳の所在推定地に面した北西側の周溝は、検出面での最大幅220cm・深さ65cmであった。

主体部（第134図、図版83）

5号墳の主体部である箱式石棺は、規模が小さいだけでなく形態や構造も他の古墳のものと異なっていた。長径175cm・短径95cmの隅丸長方形に地山を2段に掘り窪め、両側壁にそれぞれ2枚の板石を立てて据え、それを挟むようにして両小口を造っていた。天井石は3枚で、上面に黄褐色の粘土が認められた。天井石の上面は墳丘の地山面よりも深く、人頭大から拳大の



第133図　5号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

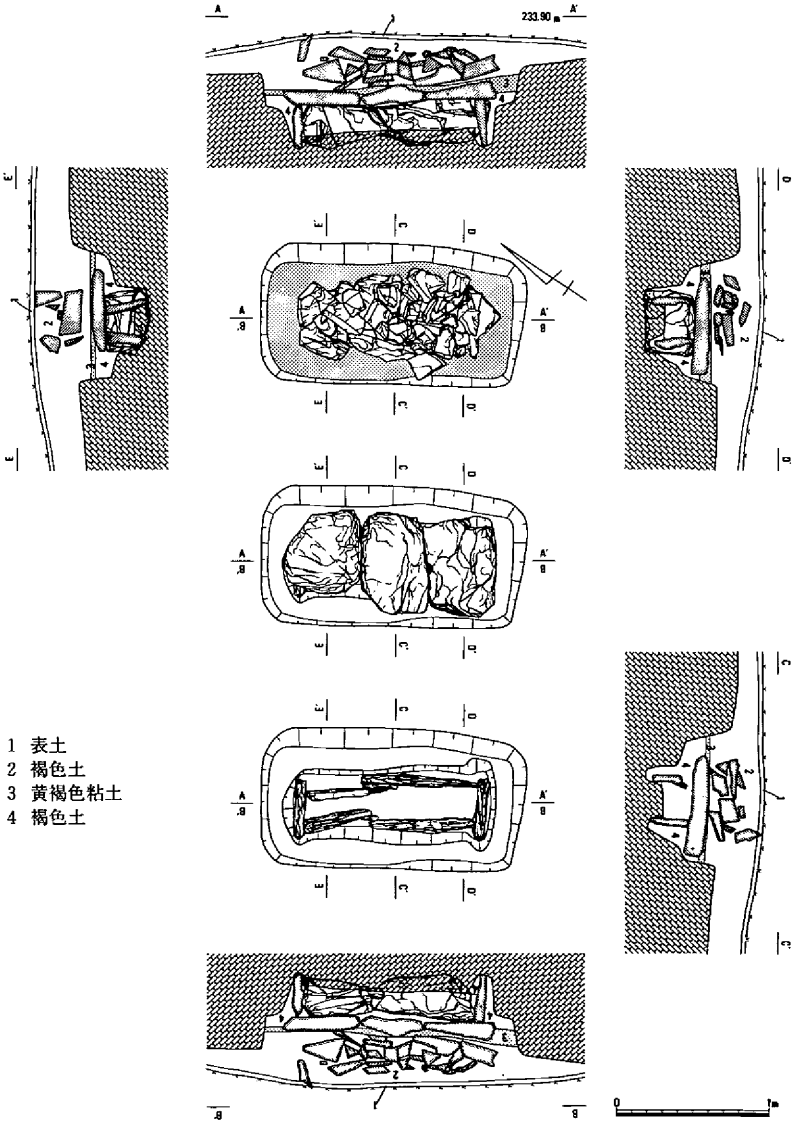
割石を並べていた。この石棺の内法は、長径113cm・短径10～22cm・高さ18～22cmを測り、床面は地山を削平しただけで板石や砂利などは存在しなかった。

(6)　6号墳

『久世町埋蔵文化財分布地図』によると、中原古墳群が所在する丘陵の北東部分に、No.25の番号を付した古墳のマークが記入され、径約10.0m・高さ1.5mの保存状態が完存である円墳で、主体部は不明となっていた。

この位置は5号墳と7号墳に挟まれた地点で、南東端部には5号墳の周溝が、北西端部には7号墳の周溝がそれぞれ存在した。この両端部に検出した周溝は、地山面を比較的深く掘り窪めていたため、その間の尾根部分が墳丘の高まりのように見えたのであろう。

調査の結果、尾根上に連続して造った古墳の間に存在した残丘で、古墳ではなく自然の高まりであることが判明した。したがって盛土は全くなく、表土直下に岩盤が存在した。



第134図　5号墳主体部実測図（1／50）

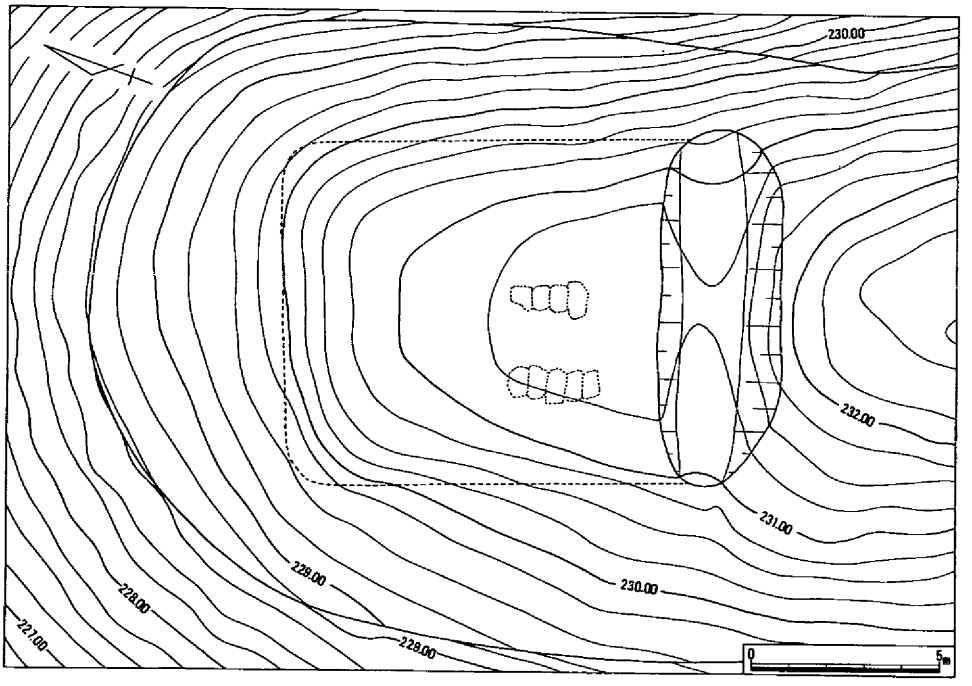
(7) 7号墳

調査前の状況

6号墳の所在推定地から北西方向へ約17m寄った標高231.50mの地点で検出した古墳で、3号墳から7号墳までの古墳が所在した丘陵の北西端部に位置したこともあって、眼下の北方向には23号墳や24号墳が、西方向には30号墳や8号墳をそれぞれ望むことができた。調査によって自然の高まりであることが判明した6号墳の所在推定地から約1.50mも急激に下がった北西方向の尾根は、平坦面が広くなって北から西にかけて緩やかに張り出していたので、比較的規模の大きな方形または長方形の古墳が存在することが推測された。

墳丘と周溝（第135図）

この7号墳が所在した地点は高い丘陵の先端部分で、眼下には目木川や旭川が流れる久世の市街地を望むことができた。7号墳の平面形は、長径11.30m・短径9.10mを測る隅丸長方形を呈していたが、北西側の墳端は容易に把握することができたが、北東側と南西側の墳端は盛土の流失が著しかったこともあって確認するのが困難であった。地形の高い6号墳の所在推定地に面した南東側の墳端には、丘陵の尾根に直交した周溝を検出した。検出面での最大幅320cm・深さ45cmを測り、断面は浅い「U」字形を呈し、内部に淡黒褐色土が堆積していた。

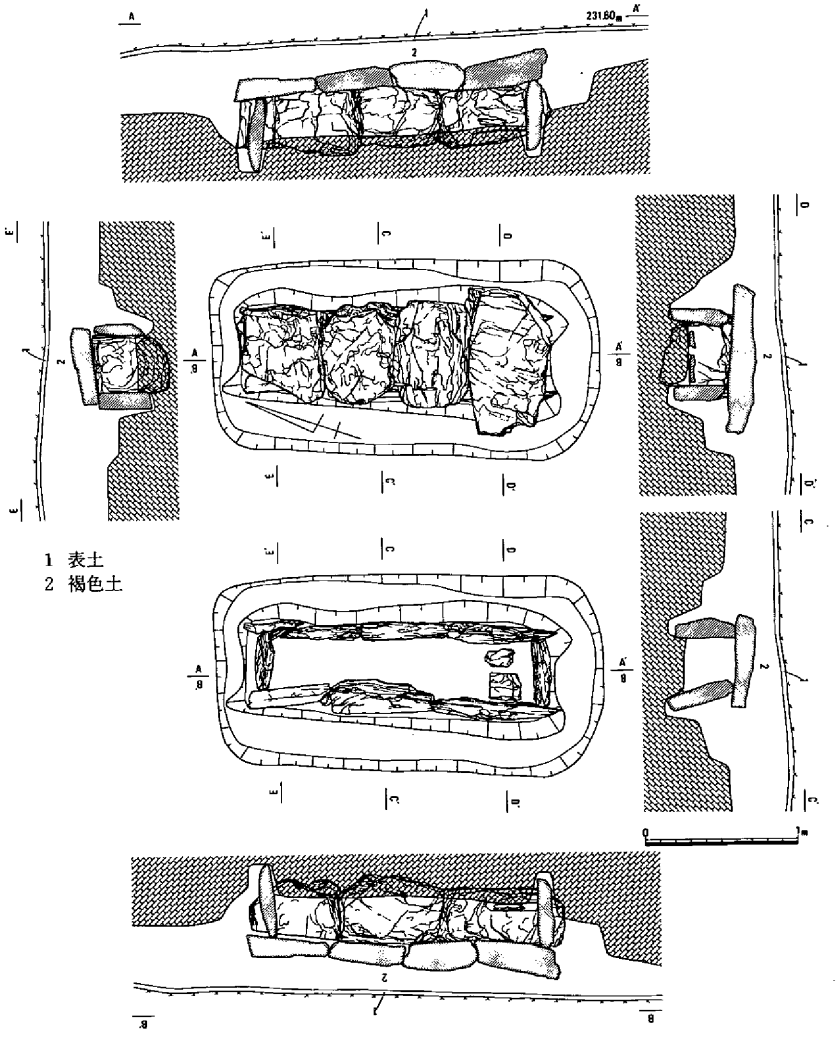


第135図　7号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

主体部（第136・138図、図版84～86）

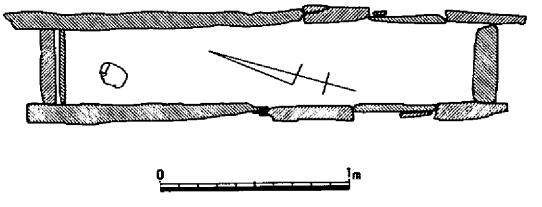
7号墳の墳丘内には、約2.30ｍの距離を保って尾根方向に平行に並んだ2基の主体部を検出した。どちらも箱式石棺であるが、天井石や側壁に使われている石の数が異なって規模が著しく相違するだけでなく、床面に小さな板石の有無の違いも認められた。

第1主体部は規模が小さくて床面に板石が存在しない。地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径174cm・短径33～42cm・高さ27～32cmの石棺を造っていた。天井石には4枚、両側壁には3枚の石を使い、南東側小口部分に割石の枕石が存在した。

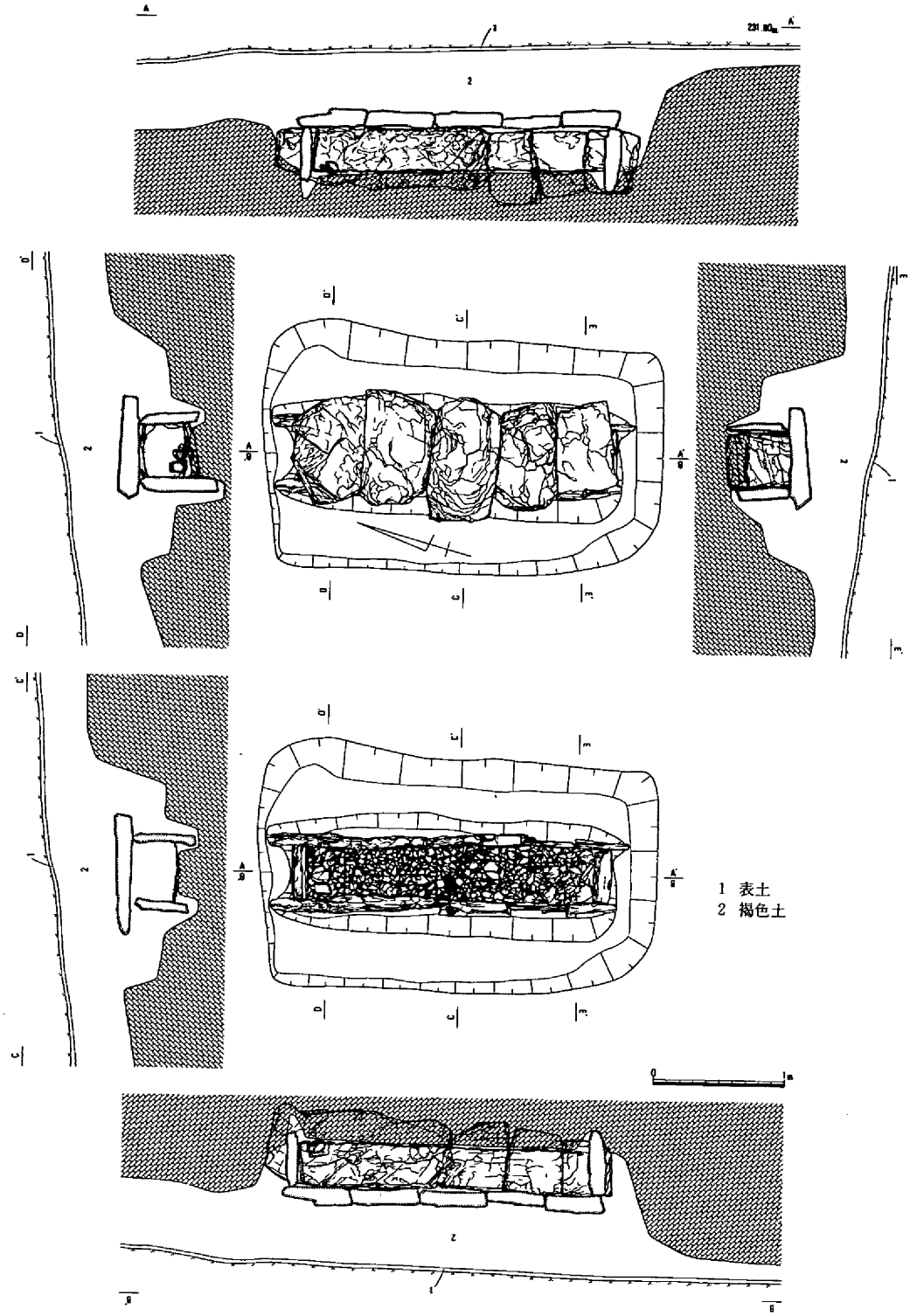


第136図　7号墳第1主体部実測図（1／50）

第2主体部は規模が大きくて床面に板石が存在した。地山を長方形に掘り窪め、内法が長径218cm・短径40～42cm・高さ31～33cmのやや大きな石棺を造っていた。天井石には5枚、両側壁には4枚の石を使い、北西側小口部分に枕石が存在し、頭蓋骨だけを検出した。



第137図　7号墳第2主体部人骨出土状況（1／40）



第138図　7号墳第2主体部実測図（1／50）

(8)　30号墳

調査前の状況

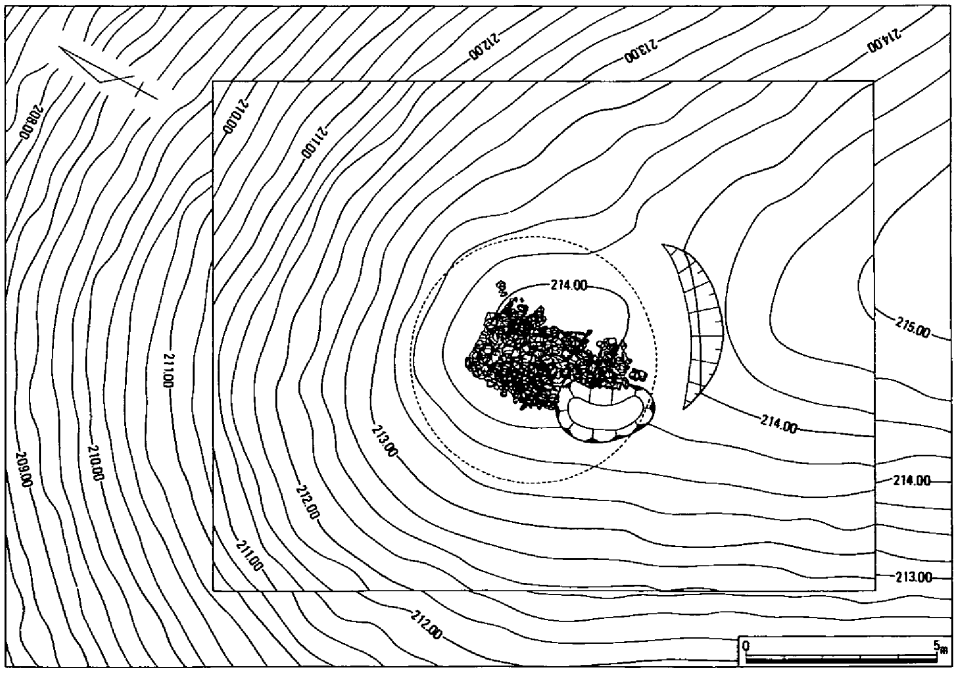
7号墳と8号墳の中間部分で、7号墳から西方向へ約70mも離れた標高214.25mを測る尾根上が、瘤状に高くなって30号墳が存在した。この地点は、3号墳から7号墳が存在した丘陵から約17mも地形が下がった急峻な場所で、30号墳の1基だけが単独に発見された。調査を実施する前に雑木や下草を刈り取った段階では、わずかに高まりが認められるものの、古墳と考えるにはあまりにも規模が小さいと感じられた。

墳丘と周溝（第139図、図版87－2）

この30号墳の墳丘は径約6.50mの極めて小規模な円形で、地形の高い南東側の尾根を断面が「U」字形になるように浅く削平して周溝を造り、その土砂を墳丘の盛土に利用していた。急斜面に位置した北から西にかけての墳端は、正確に把握するのが困難であった。墳丘の中心部分である約2.50×約4.50mの範囲に、人頭大から拳大の割石が数多く認められた。調査した結果、これらの割石は、主体部の天井石上面を包み込むように置かれていたのである。

主体部（第140・141図、図版88）

30号墳の主体部は箱式石棺であるが、天井石の上面に数多くの割石を置いていた。墳丘の中



第139図　30号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

心部分に長径355cm・短径180－195cmの長方形に近い形態に地山を２段に掘り窪め、両小口部分は１枚だけの石であったが、両側壁にはそれぞれ４枚の板石を立てて据え、主軸方向がほぼ南北を示すように石棺を造っていた。天井石は４枚で、床面には小さな板石を敷き詰め、南側小口部分には割石の枕石が認められた。この石棺の内法は、長径185cm・短径33cm・高さ29～32cmであった。30号墳の墳丘は極めて小規模であったが、主体部の石棺は中原古墳群で調査したものの中でも比較的大型の部類に属するであろう。

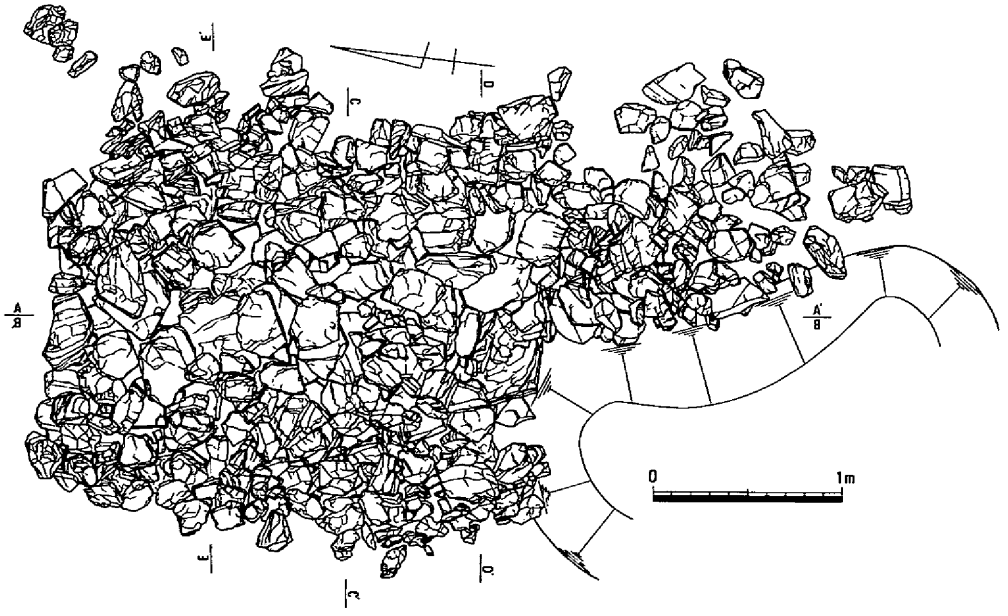
(9)　8号墳

調査前の状況

８号墳から16号墳と31号墳から33号墳が所在した、中原古墳群の中央部分である丘陵の南東端部に位置し、東方約50ｍの地点には前述した30号墳が存在した。この部分の標高は211.50ｍを測り、丘陵上の平坦面が広くて周辺の斜面が緩やかな地形になっていた。このような地形における古墳の立地状況から考えて、中原古墳群の古墳の中でも比較的大規模なものが存在することが推察された。

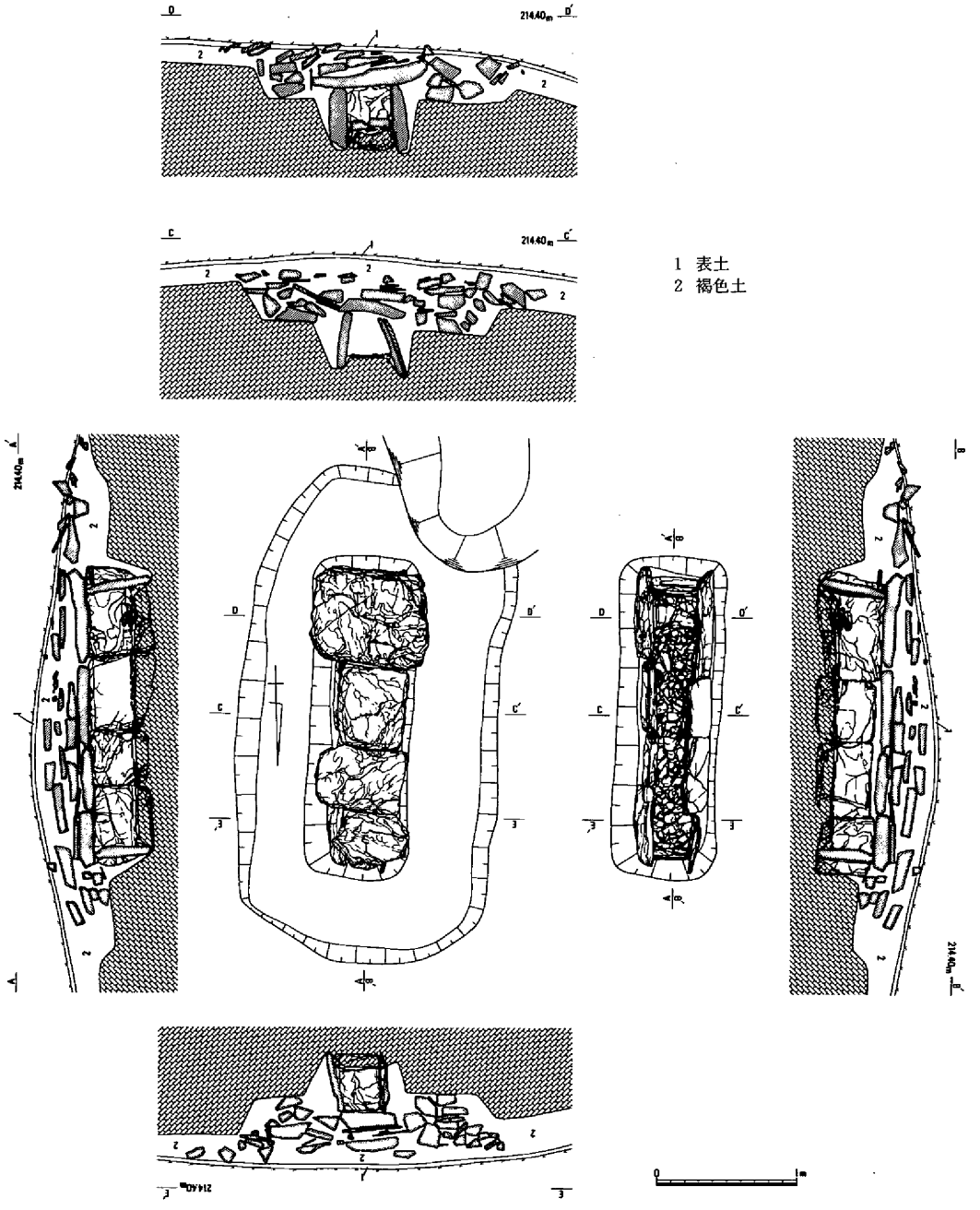
墳丘と周溝（第142図、図版89）

この８号墳が所在した地点は丘陵の先端部分で、東方向の30号墳のみならず北東方向に位置した23号墳や24号墳も望むことができた。一方西から北西方向に目を転じると、同じ丘陵の尾根上に存在した９号墳から13号墳を正面に見ることができた。８号墳の平面形は、長径15.00



第140図　30号墳主体部上面集石（1／40）

m・短径12.00mの隅丸長方形を呈していたが、9号墳に面した西側の墳端は、尾根方向に直交する溝が存在して容易に把握することができたが、北側と南側の墳端は、確認するのが困難であった。墳丘の中央部分からやや西側へ寄った地点に2基の主体部を検出したが、主軸方向は直交するようになっていた。なお西側の墳端からは、5点の鉄器が出土した。



第141図　30号墳主体部実測図（1／50）

主体部（第143・144図、図版90～94）

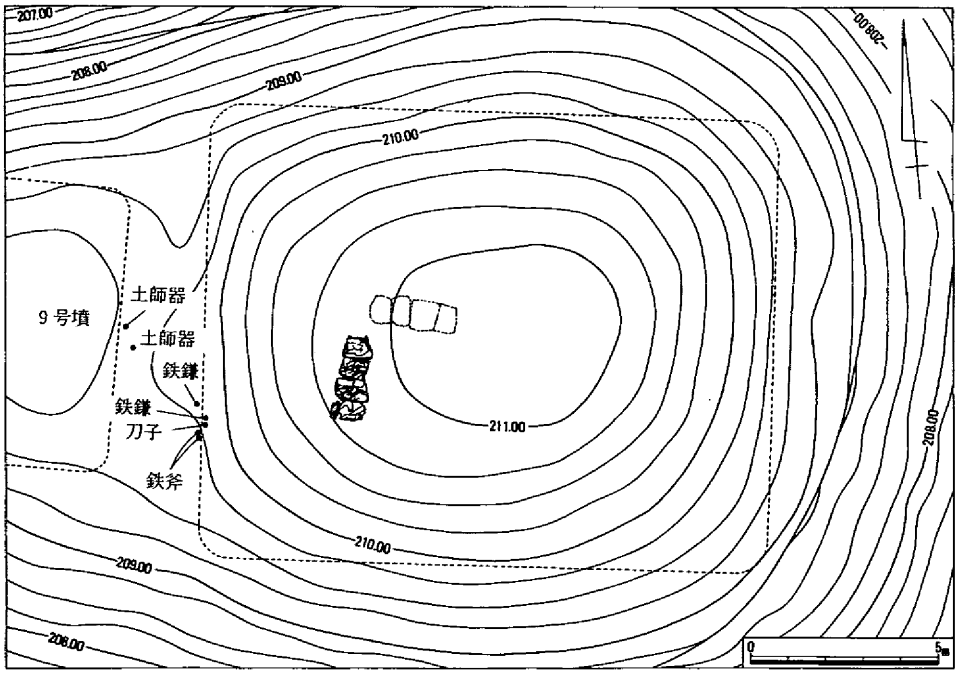
2基の主体部はどちらも箱式石棺であるが、主軸方向がほぼ南北を示すものを第1主体部、それに直交する東西方向のものを第2主体部とした。

第1主体部は地山を隅丸長方形に似た形に掘り窪め、内法が長径188cm・短径28～34cm・高さ20～30cmの石棺を造っていた。天井石には4枚、両側壁には4枚の石を使い、床面には砂利が認められた。また北側小口部分には、2個の河原石と1個の割石による枕石が存在した。

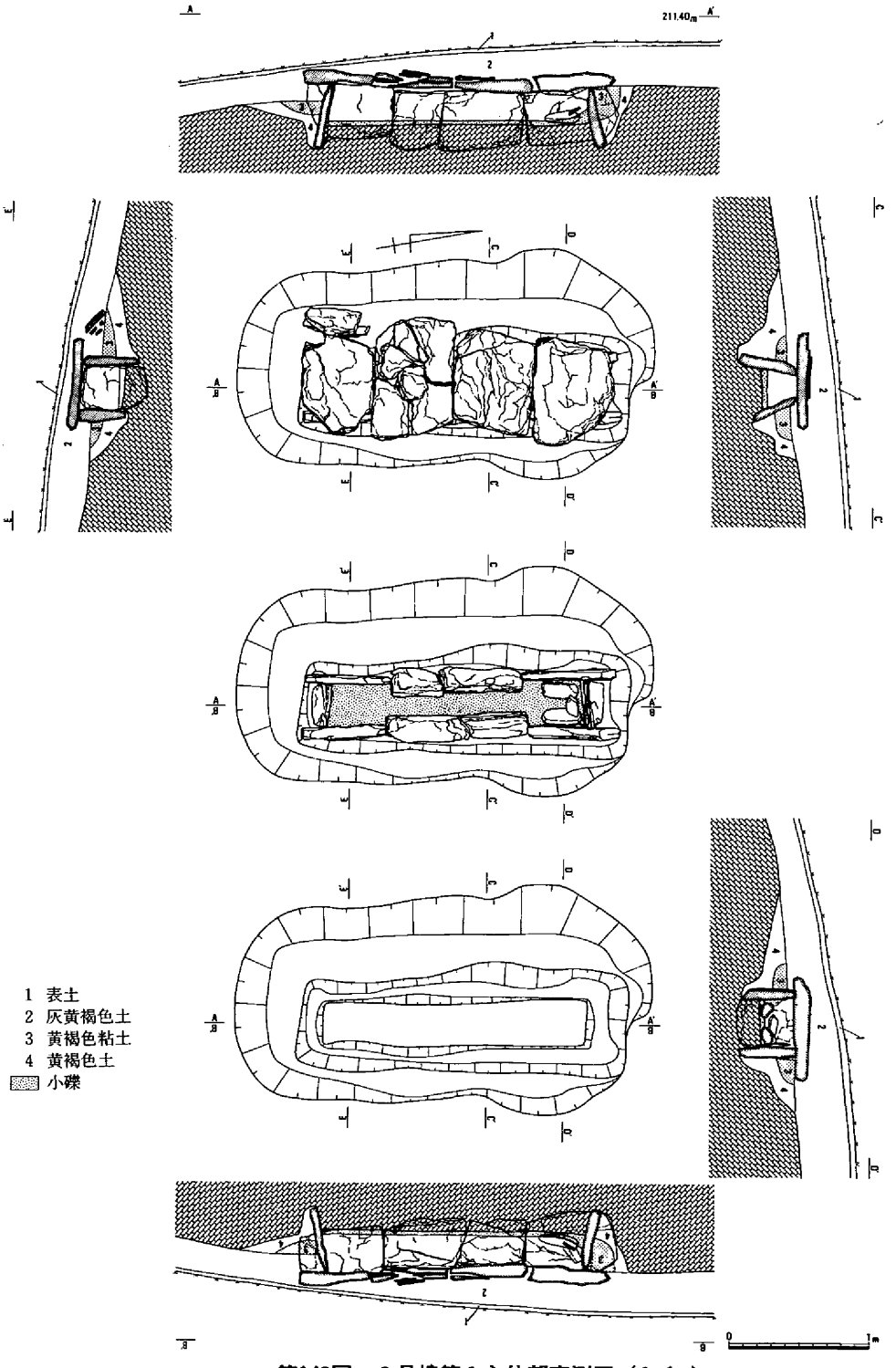
第2主体部は地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径198cm・短径36～43cm・高さ31～33cmの石棺を造っていた。黄褐色の粘土に包まれた天井石には4枚、両側壁には3枚の石を使用し、床面には小さな割石が敷き詰められていた。この石棺には両小口部分ともに枕石が認められ、人骨の一部が残存していた。

出土遺物（第158図13～17、図版109）

13と14は無茎の平根式鉄鏃で、根挟みによって鏃身を挟み込んで装着している。13は根挟みの表面に糸を巻いて固定した痕跡が認められる。鏃身の形態は、丸みを持った三角形を呈し、深い逆刺を有している。刀子（15）は、刀身長推定9.0cm・刀身最大幅1.7cmを測る。刀身は平造で、断面二等辺三角形を呈している。関は片関で、茎には柄の木質が付着している。16と17は有袋の鉄斧である。16は袋部と身部との境に肩を持つが、17は両者の幅が変らない。16は全

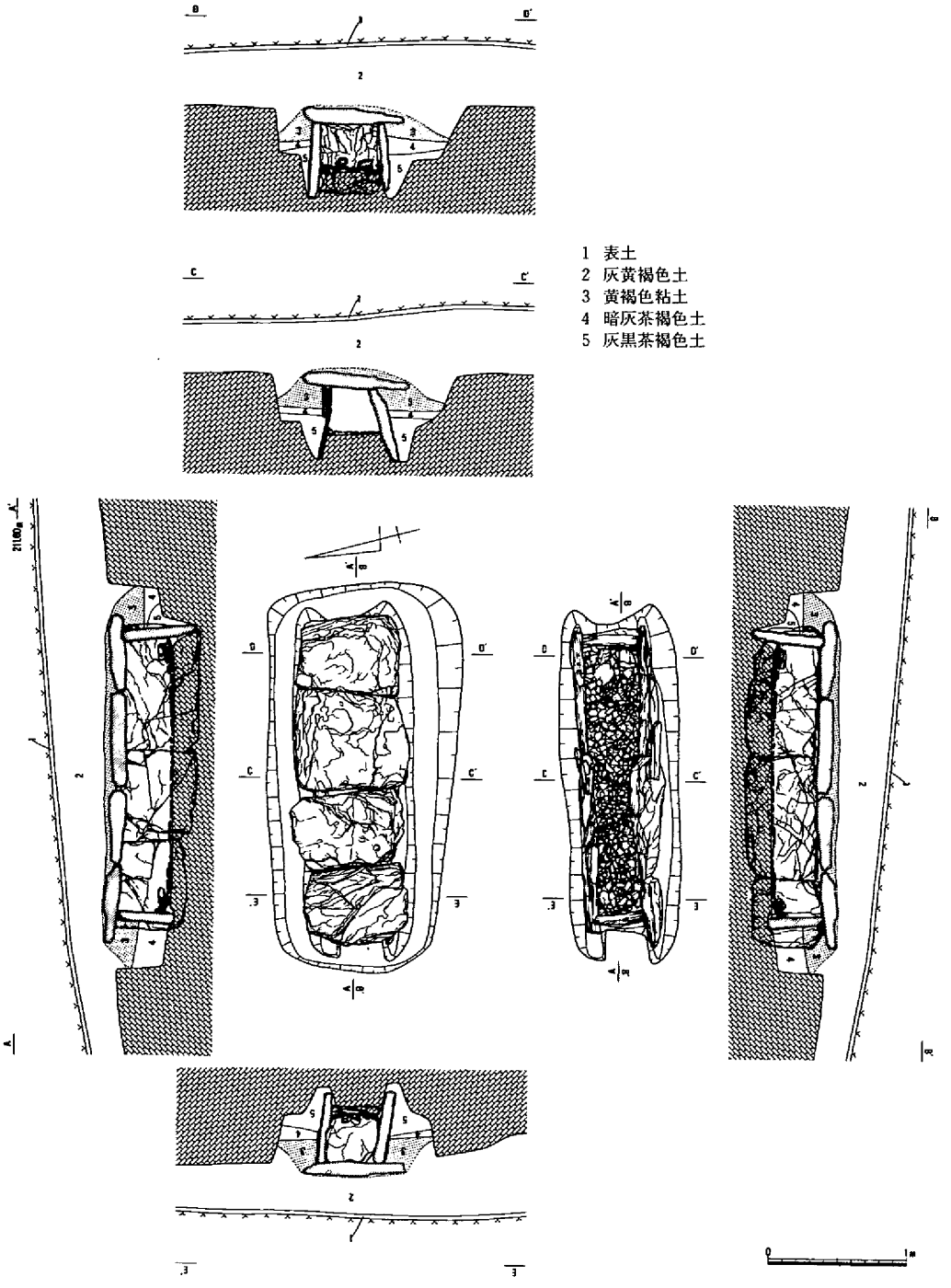


第142図　8号墳調査後周辺地形測量図（1／200）



第143図　8号墳第1主体部実測図（1／50）

長7.2cm・袋部幅2.7～2.9cm・身部幅4.1～4.5cm・身部長3.2cmを測る。17は全長10.5cm・袋部幅3.9～4.3cm・身部幅4.0～4.1cm・身部長3.8cmを測る。



第144図　8号墳第2主体部実測図（1／50）

(10)　9号墳

調査前の状況

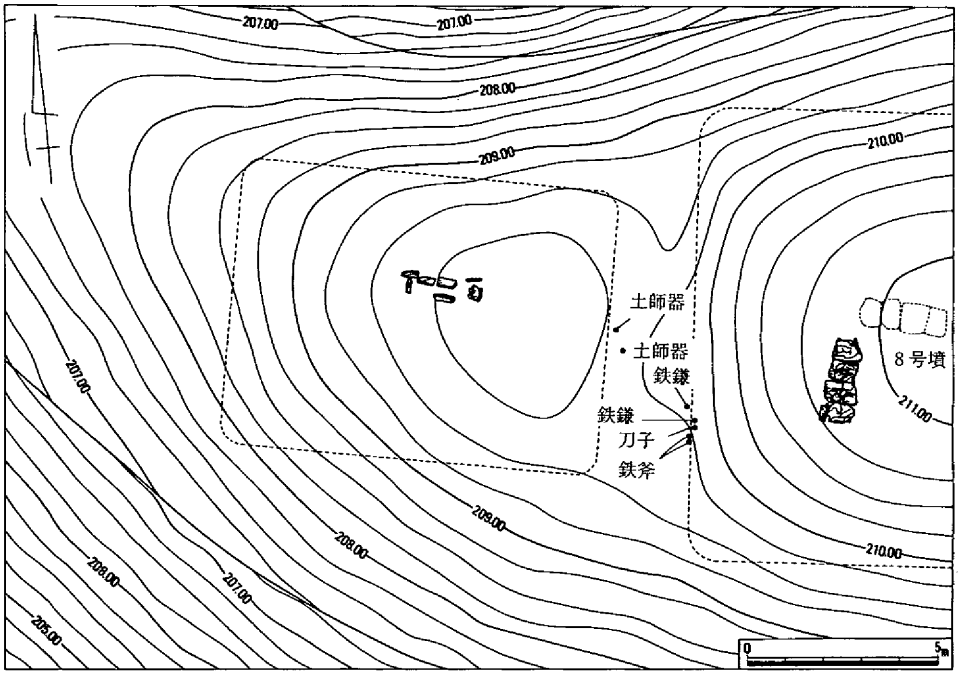
8号墳の西側に接して存在した古墳である。この地点は、丘陵の尾根が西から北方向へ緩やかに湾曲し、尾根上の平坦面が極端に狭くなる場所であったから、わずかに高まりが認められるものの、古墳の有無については即断できなかった。

墳丘と周溝（第145図、図版89－1）

この古墳の主体部は、表土直下の浅い所で検出したこともあって、墳丘の盛土はほとんど認められなかった。墳丘の平面形は、長径10.00ｍ・短径7.50ｍの隅丸長方形を呈していた。8号墳に面した地形の高い東側に、尾根と直交する周溝を検出し、土師器の小破片が出土した。北側の丘陵斜面は急勾配に傾斜していたため、この古墳の墳端を識別するのが困難であった。

主体部（第146図、図版95）

墳丘の中央よりやや北側に寄った地点に検出した主体部の箱式石棺は、表土直下の浅い所で検出されたため、すべての天井石と側壁の一部が残存しなかった。わずかに残っていた石材も傾いたり上面を破損したりしていたので、造られた当時の状態から多少は動いていると考えられた。この石棺の内法は、長径185cm・短径37～53cmを測り、高さは約30cmになるであろう。



第145図　9号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

東から西方向へ緩やかに傾斜していた床面には砂利を敷き詰め、東側の小口部分には２個の河原石による枕石が存在した。両小口部分には１枚の板石を立てていたが、石材の一部が抜き取られた両側壁には４枚の板石が使われていたのではなかろうか。

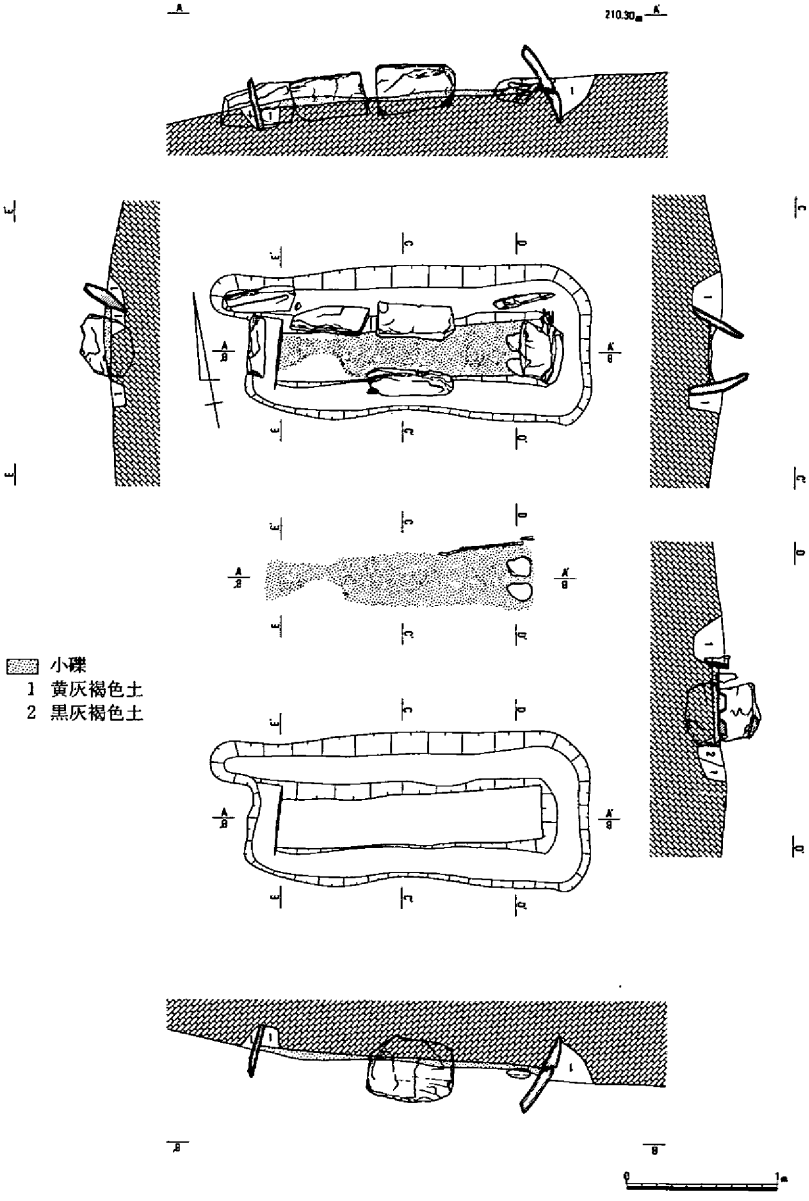
遺物出土状況（第146図、図版95－３）

９号墳の主体部から検出した遺物は、鉄剣と刀子である。これらの遺物は、枕石が存在した東側小口部分に近接した地点に、北側壁に接して発見された。鉄剣は片方の刃部が上になるように立った状態で出土し、刀子は鉄剣の茎部近くに置かれていた。

出土遺物

（第157図５、第158図18）

鉄剣（５）は、剣身長52.8cm・剣身最大幅3.2cmを測る。剣身の断面は凸レンズ形を呈し、明確な鎬を造り出していない。茎に目釘穴は確認できていない。刀子（18）は、刀身長推定約12.1cm・刀身最大幅1.5cmを測り、茎長4.2cm・茎幅1.0cmである。刀身は平造で、断面二等辺三角形を呈する。茎尻はやや細くなる形態である。



第146図　９号墳主体部実測図（1／50）

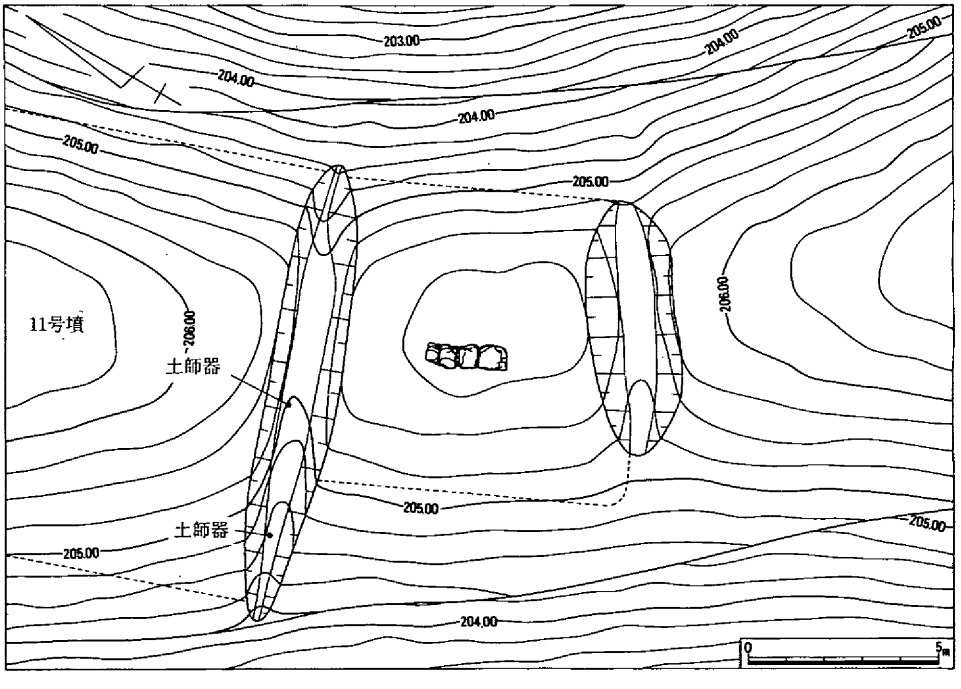
(11)　10号墳

調査前の状況

中原古墳群で発掘調査を実施した範囲のほぼ中央に位置し、11号墳の南東側に接した状態で存在した。この地点は、８号墳や９号墳が所在した丘陵と12号墳や13号墳が所在した丘陵の中間部分で、尾根上の平坦面が極端に狭くなり、地形の高さもその位置が最も低くなっていた。調査前の状態では、中央部分がわずかに高くなっていたが、尾根上の幅が著しく狭いために、古墳を造るのは無理ではないかと考えられた。

墳丘と周溝（第147図、図版96－１）

10号墳の墳丘は、長径7.80～9.00ｍ・短径8.00ｍの方形に近い形態を呈していた。南東側の端部には、検出面での最大幅230㎝・深さ60㎝を測る尾根に直交する周溝を検出した。北西側の端部には、11号墳と共有した尾根に直交する周溝を検出した。この周溝の計測値は、検出面での最大幅190㎝・深さ80㎝であった。内部には暗灰黄褐色土と淡灰黒褐色土が堆積し、底部から土師器の破片が出土した。墳丘の盛土には両端の周溝を掘削して生じた土砂を用いたと考えるが、地山の上面にほんの少量だけ認められたにすぎない。北東側と南西側の墳端は、丘陵の斜面が急勾配だったこともあって、確認するのが極めて困難であった。

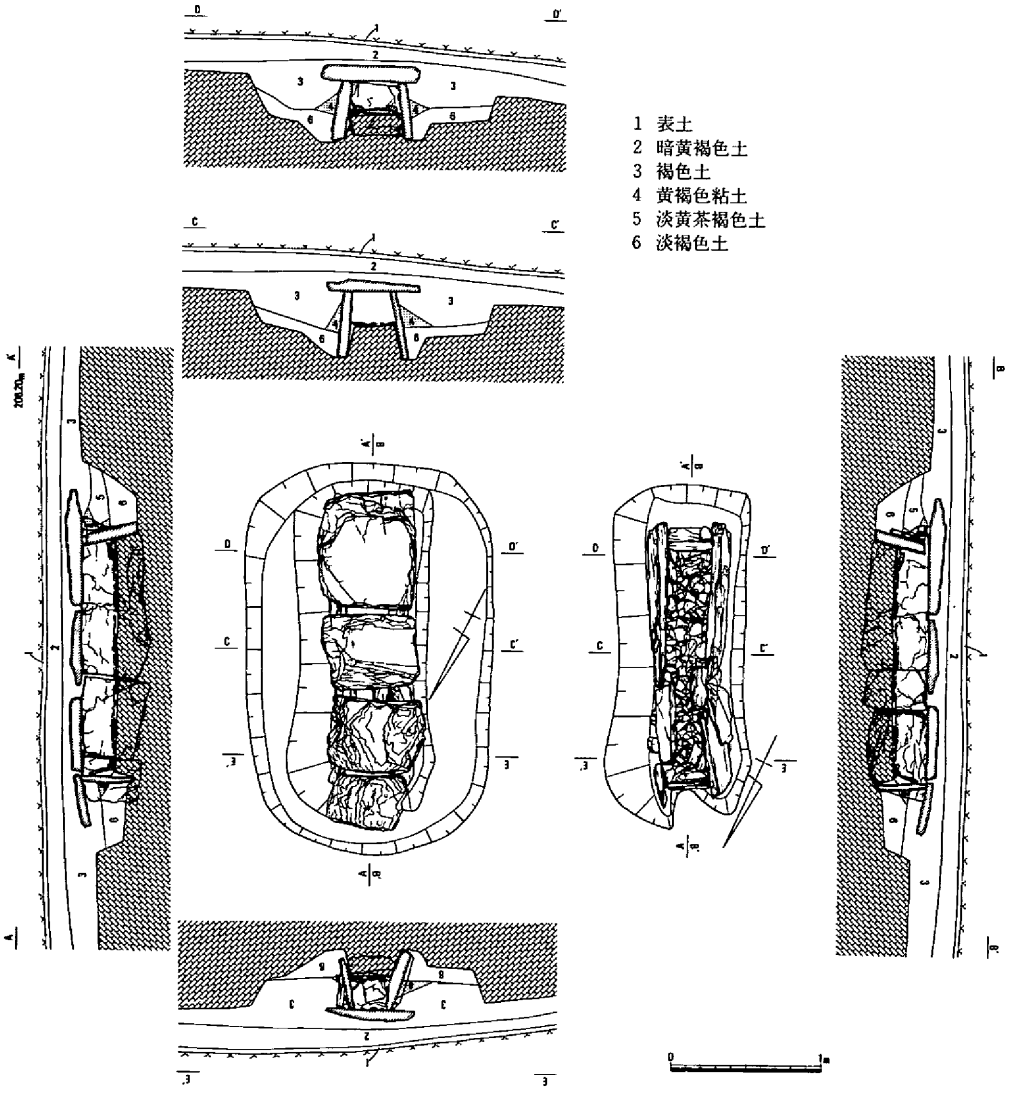


第147図　10号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

主体部（第148図、図版96・97）

10号墳の主体部である箱式石棺は、墳丘の中央に尾根方向と平行して存在した。隅丸長方形に墳丘中央の地山を２段に掘り窪め、内法が長径158cm・短径26～35cm・高さ20～24cmの石棺を造っていた。天井石には４枚、両側壁には３枚、両小口には１枚の板石を使っていた。床面には比較的大きな割石を敷き詰め、両小口部分には割石による枕石が存在した。北西側の小口部分で検出した枕石は、偏平な板石を小口の壁面にもたせ掛けていた。両側壁の外側に位置する石棺の掘り方には、黄褐色の粘土が部分的に認められた。

なおこの10号墳の北東側墳端からは、鉄鏃の茎部断片（第158図19）が出土した。



第148図　10号墳主体部実測図（1／50）

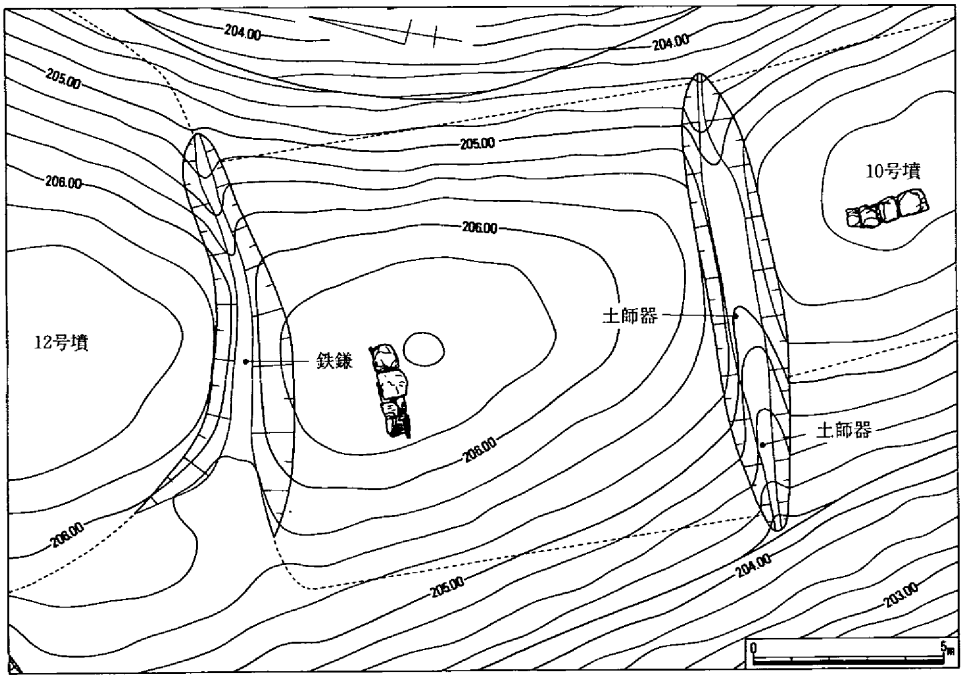
(12)　11号墳

調査前の状況

中原古墳群が所在した丘陵の中でも、尾根上の平坦面が最も広くて数多くの古墳が検出された地点の南端部に位置し、両脇には10号墳と12号墳が接して存在した。この場所は、８号墳から10号墳の３基の古墳が所在した丘陵に続く接点に相当したため、前述の10号墳の所在地と同様に、尾根上の平坦面が著しく狭くなっていた。調査前の段階で、12号墳に面した部分がくびれた状態になり、尾根方向に直交する周溝が存在することが推察された。また南東側の10号墳に面した地点も、尾根上の平坦面が極端に狭くなり、表土面が窪んでいた。

墳丘と周溝（第149図、図版99－１）

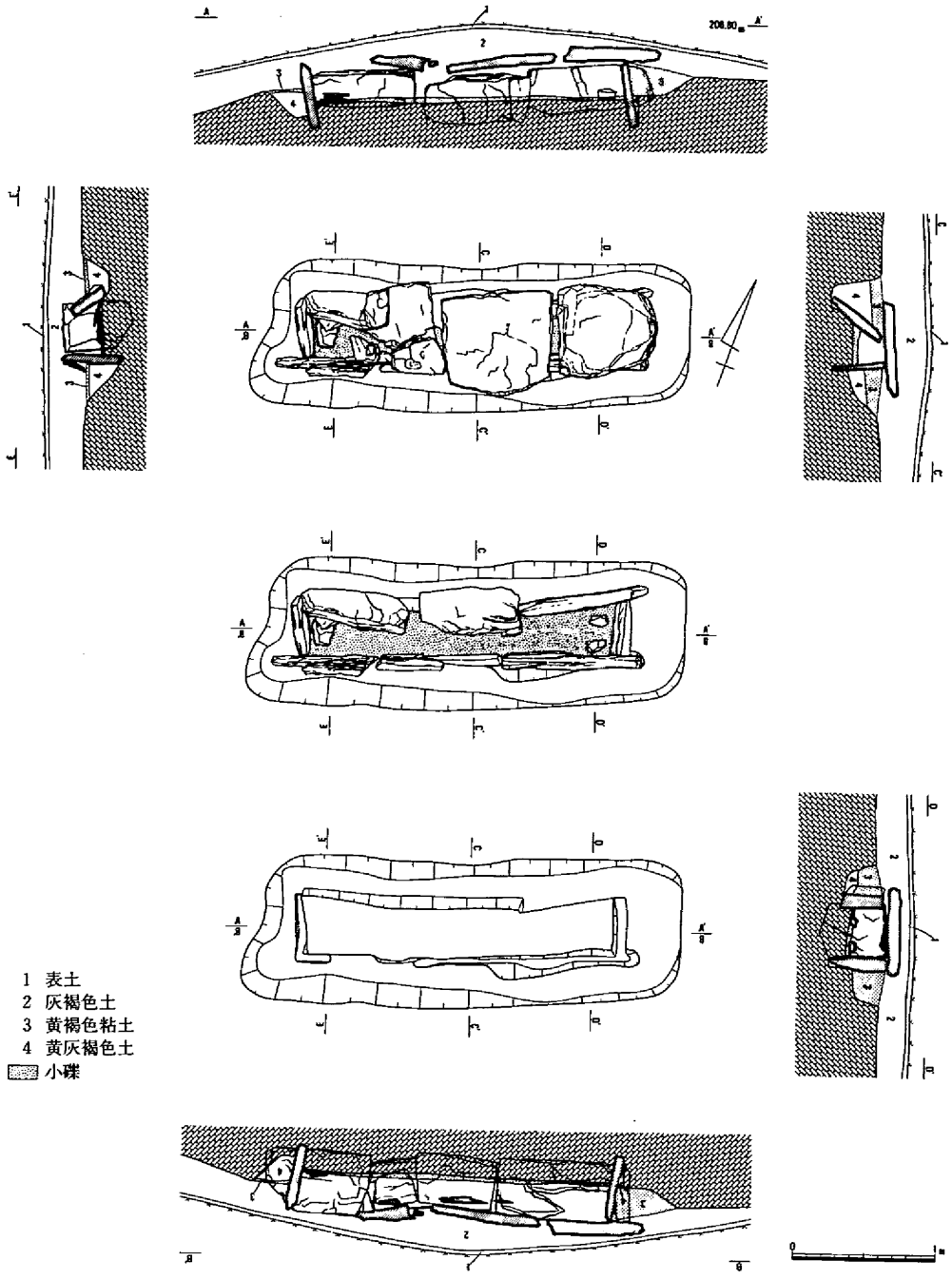
10号墳と12号墳の中間に存在した古墳である。墳丘の両端部に検出した周溝は、隣接した古墳と共有する状態になっていた。12号墳との境に存在した周溝は、12号墳の墳端に沿って緩やかに湾曲していた。墳丘の平面形は、長径13.00～13.50ｍ・短径11.50ｍの隅丸長方形を呈していた。北東側と南西側の墳端は、急斜面に位置したこともあって、確認するのが困難であった。この11号墳の墳丘は、最も高くなっていたのが12号墳に面した北西側へ寄った位置で、その部分に主軸方向が尾根に直交した箱式石棺の主体部を検出した。



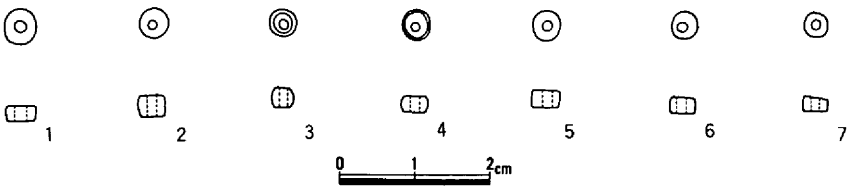
第149図　11号墳調査後周辺地形測量図（1/200）

主体部（第150図、図版100・101）

やや北西側に寄った地点の地山を隅丸長方形に似た形に掘り窪め、内法が長径214cm・短径25－37cm・高さ17～25cmの石棺を造っていた。天井石は南西側小口部分が存在しなかったが、



第150図　11号墳主体部実測図（1／50）



第151図　11号墳出土遺物（1／1）

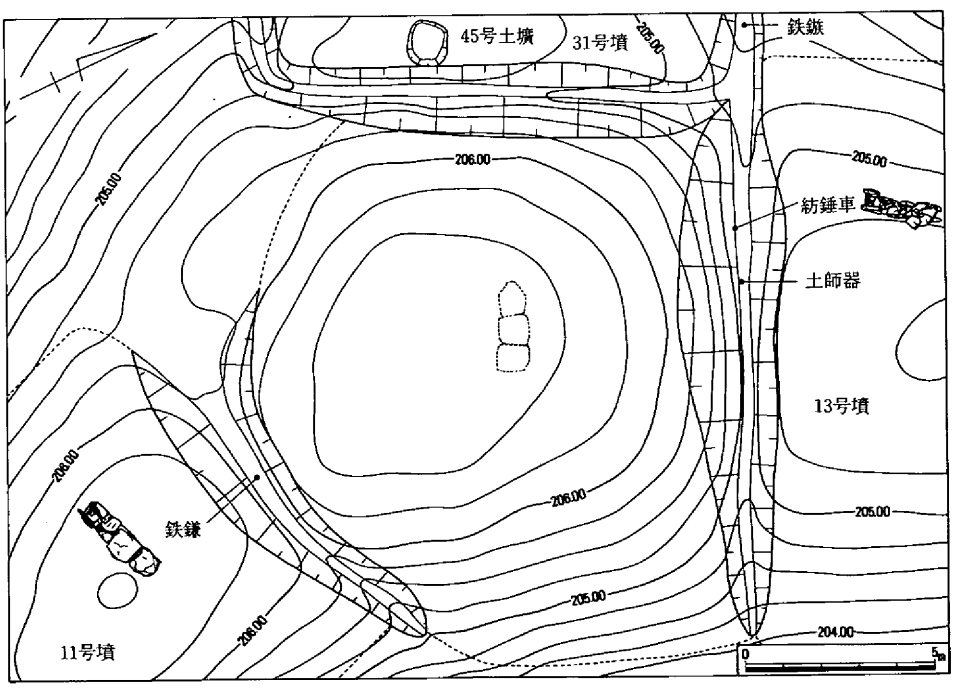
造られた当時はおそらく4枚の板石を使っていたと考える。また両側壁には4枚、両小口には1枚の板石を、それぞれ立てていた。地形の高い北東側から地形の低い南西側へ緩やかに傾斜していた床面には、全体に砂利を敷き詰めていた。両小口部分には、どちらも割石による枕石が存在した。石棺の外側に位置する壁面の掘り方には、黄褐色の粘土が部分的に認められた。

遺物出土状況

石棺内の土砂をフルイに掛けて発見したものばかりで、副葬地点を確実に押えていない。しかしながら、北東側枕石周辺の床面で集めた土砂に含まれていたのは確かである。

出土遺物（第151図、図版162－2）

11号墳の主体部から出土した遺物は、7点の滑石製の臼玉（**1～7**）だけである。いずれも全体に明緑灰色を呈し、胴径0.35～0.47cm・高さ0.19～0.26cmを測る。



第152図　12号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

(13) 12号墳

調査前の状況

中原古墳群が所在した丘陵のほぼ中央部分に位置し、尾根上の平坦面が広くて数多くの古墳が検出された地点の頂部に存在した。この部分は、8号墳から15号墳にかけて直線的に延びる尾根が、13号墳や35号墳の所在した方向へ枝分かれする分岐点となっていた。隣接して存在した13号墳と31号墳の墳丘が低かったこともあって、12号墳の墳丘の高さがひときわ目立ち、調査に着手する以前から中原古墳群の中でも大規模な古墳が所在するのは明らかであった。

墳丘と周溝（第152図、図版99－1・102－1）

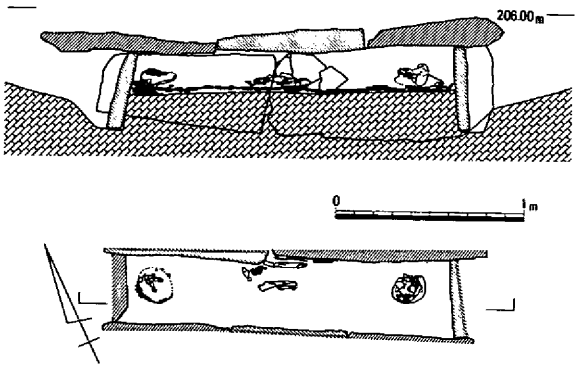
発掘調査に着手する以前の段階では、11号墳に面した南側の墳端は弧を描き、13号墳や31号墳との境になる北東側と北西側の墳端は直線状になっていたから、この12号墳の形態が円墳なのか方墳なのか断定することができなかった。調査を実施して追求した結果、13号墳と31号墳は、12号墳の墳丘の一部を削平して、12号墳の築造よりも後になって造られたことを確認したから、12号墳の本来の形態は円墳であったことが判明した。南側の墳端に存在した11号墳と共有する周溝の痕跡や主体部が造られていた位置などから推察して、12号墳の墳丘は径約14～16mの規模になるであろう。なお11号墳との境に存在した周溝の底部から、曲刃鎌が出土した。

主体部（第154図、図版103～105）

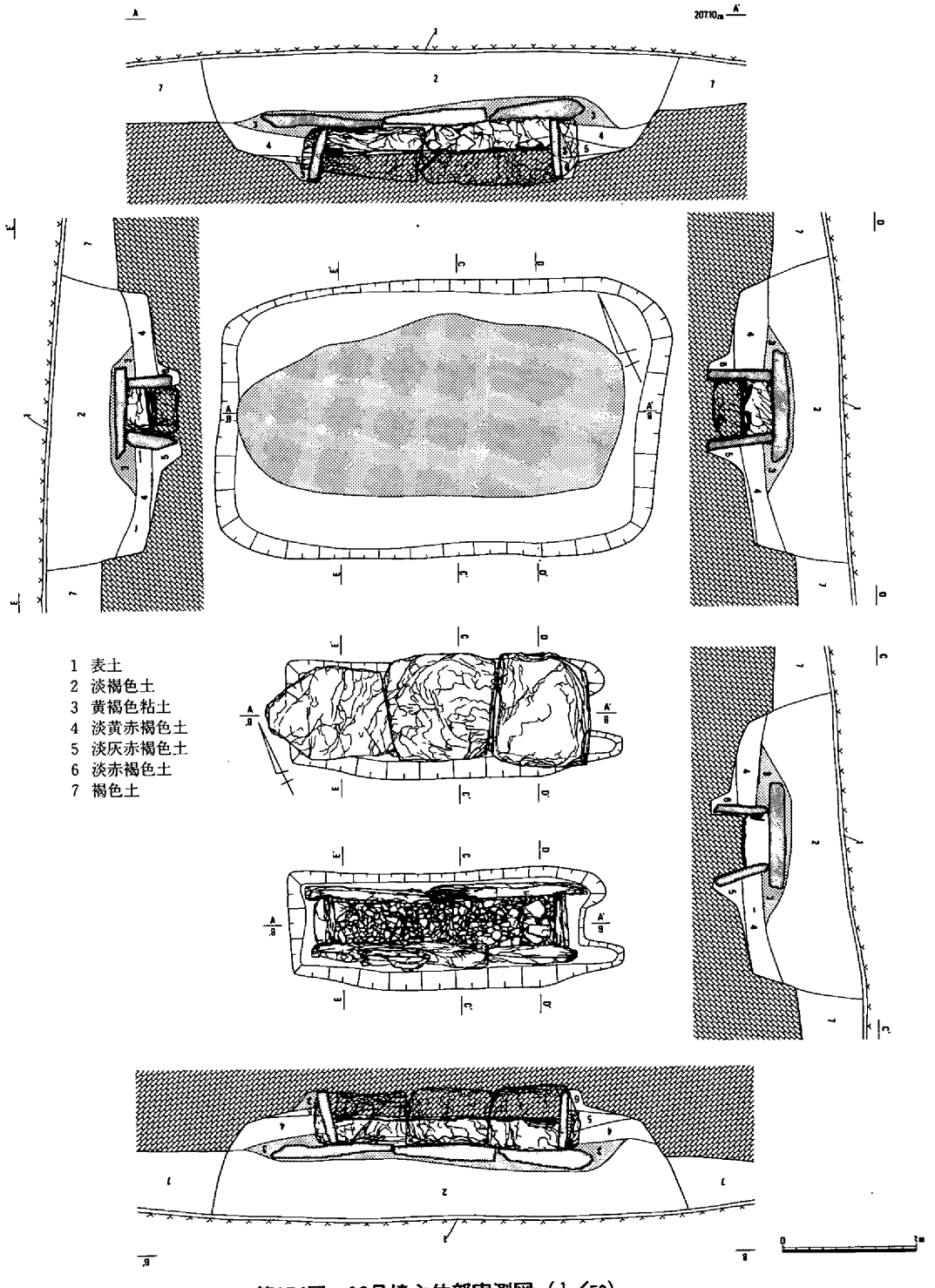
中原古墳群で検出した数多くの箱式石棺の中で、墳丘の盛土を行った後に石棺を築造していたのは、この12号墳だけであった。盛土と地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径173cm・短径34～43cm・高さ18～23cmの石棺を造っていた。天井石には3枚、南西側壁には3枚、北東側壁には2枚の板石を使っていた。床面には小さな割石を敷き詰め、両小口部分に割石による枕石が存在して、それぞれに頭蓋骨が出土した。さらに石棺中央部分の床面には、大腿骨の一部も認められた。石棺内部の壁面や天井石には、赤色顔料の付着がかすかに認められた。なお石棺の天井石は黄褐色の粘土に包み込まれ、蒲鉾のようになっていた。

出土遺物（第158図20、図版109）

やや幅の広い曲刃鎌であるが、刃部の先端を欠損している。長さ11.0cm・幅2.6～3.5cm・背の厚さ0.2cmを測り、断面は細長い二等辺三角形を呈している。基部は着装のため、若干折り返されている。



第153図　12号墳人骨出土状況（1／40）



第154図　12号墳主体部実測図（1／50）

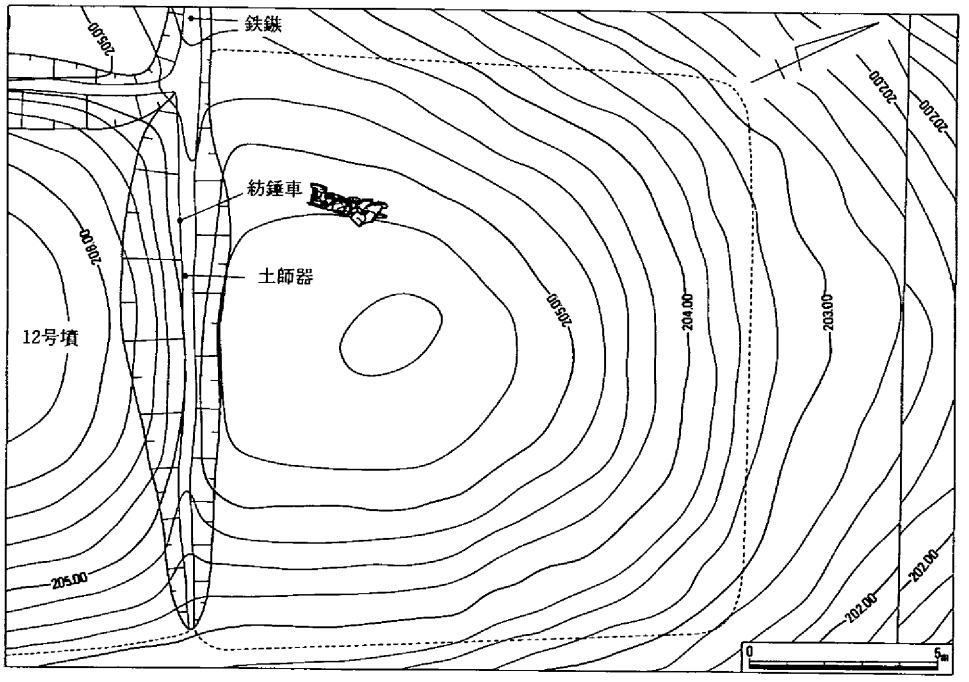
(14) 13号墳

調査前の状況

中原古墳群で発掘調査を実施した範囲のほぼ中央部分に位置し、８号墳から15号墳にかけて直線的に延びた尾根が、12号墳の所在地点で北方向に短く枝分かれしたその先端に検出された古墳である。眼下には34号墳や35号墳が望まれ、東方向約130ｍの地点には23号墳や24号墳を見渡すことができた。さらに北西方向約100ｍには17号墳から20号墳が所在した丘陵が正面に存在し、南東方向約70ｍの地点には８号墳を確認することができた。この13号墳の地点は、墳丘の盛土が高かった12号墳の所在した位置から北側へ１段下がった部分で、尾根上に比較的広い平坦面が認められるものの、古墳の墳丘と断定できるほどの高まりは存在しなかった。

墳丘と周溝（第155図、図版99－１・106－１）

この13号墳の墳丘は、地形の高い南西側に位置した部分が、先に築造されていた12号墳の墳丘の一部を削平して造っていた。墳丘の平面形は、長径14.50～15.80ｍ・短径14.50ｍの隅丸長方形に近い形態を呈し、丘陵の先端に位置した部分の幅が狭くなっていた。北西側と南東側の墳端は、斜面に存在して確認するのが困難であった。この古墳の墳丘中央部には、暗黄褐色土や褐色土の盛土が認められただけで、主体部は検出できなかった。土層断面観察用の畦を残

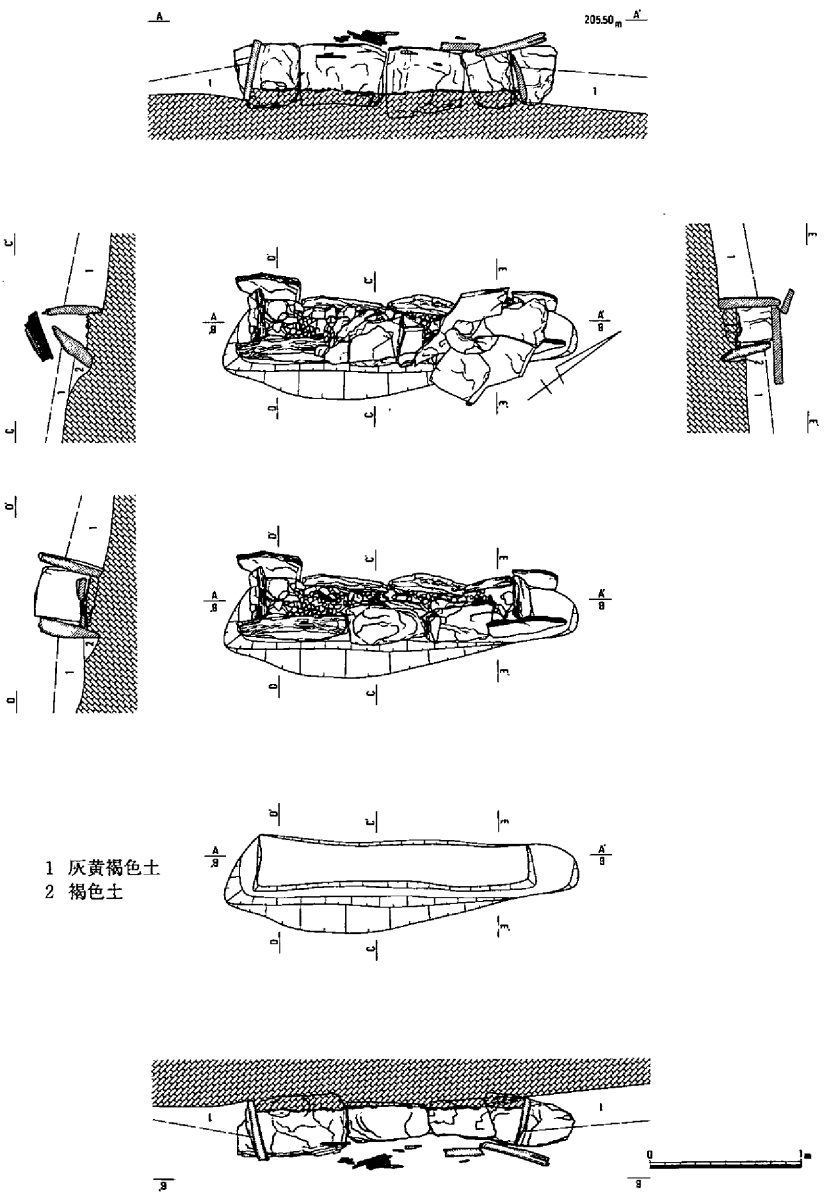


第155図　13号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

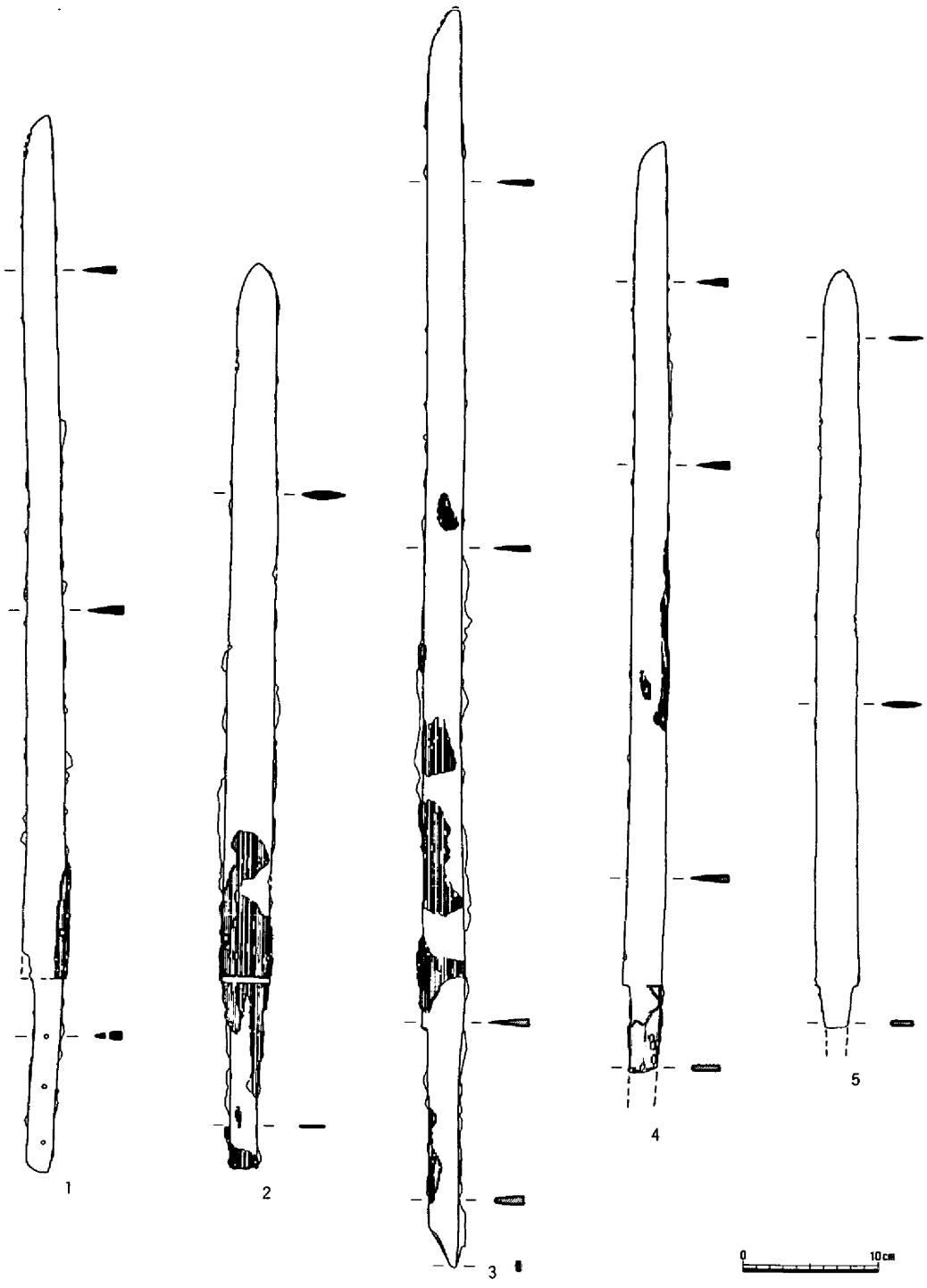
して精査したが、主体部が造られていた形跡は全く認められなかった。12号墳との境には直線状の周溝が存在し、底部から土師器の破片と紡錘車形石製品が出土した。

主体部（第156図、図版107）

13号墳の主体部は、墳丘の中央部には精査したにもかかわらず検出できなかった。12号墳や31号墳に面した西端部で、表土直下の浅い位置に箱式石棺が存在した。主軸は尾根方向にほぼ平行し、わずかに残存した天井石は細かく破損していた。地山を板石が立てて据えられるだけの深さに浅く掘り窪め、内法が長径172cm・短径27～36cm・高さ24～30cmを測る石棺を造っていた。天井石は細かく破損していたが、おそらく4枚の板石を使っていたと考える。両小口には1枚、北西側壁には5枚、南東側壁には4枚の板石を、それぞれ立てて据えていた。南西側から北東側へ緩やかに傾斜した床面には小規模の板石を敷き詰め、南西側小口部分には河原石2個を使った枕石が存在した。



第156図　13号墳主体部実測図（1／50）

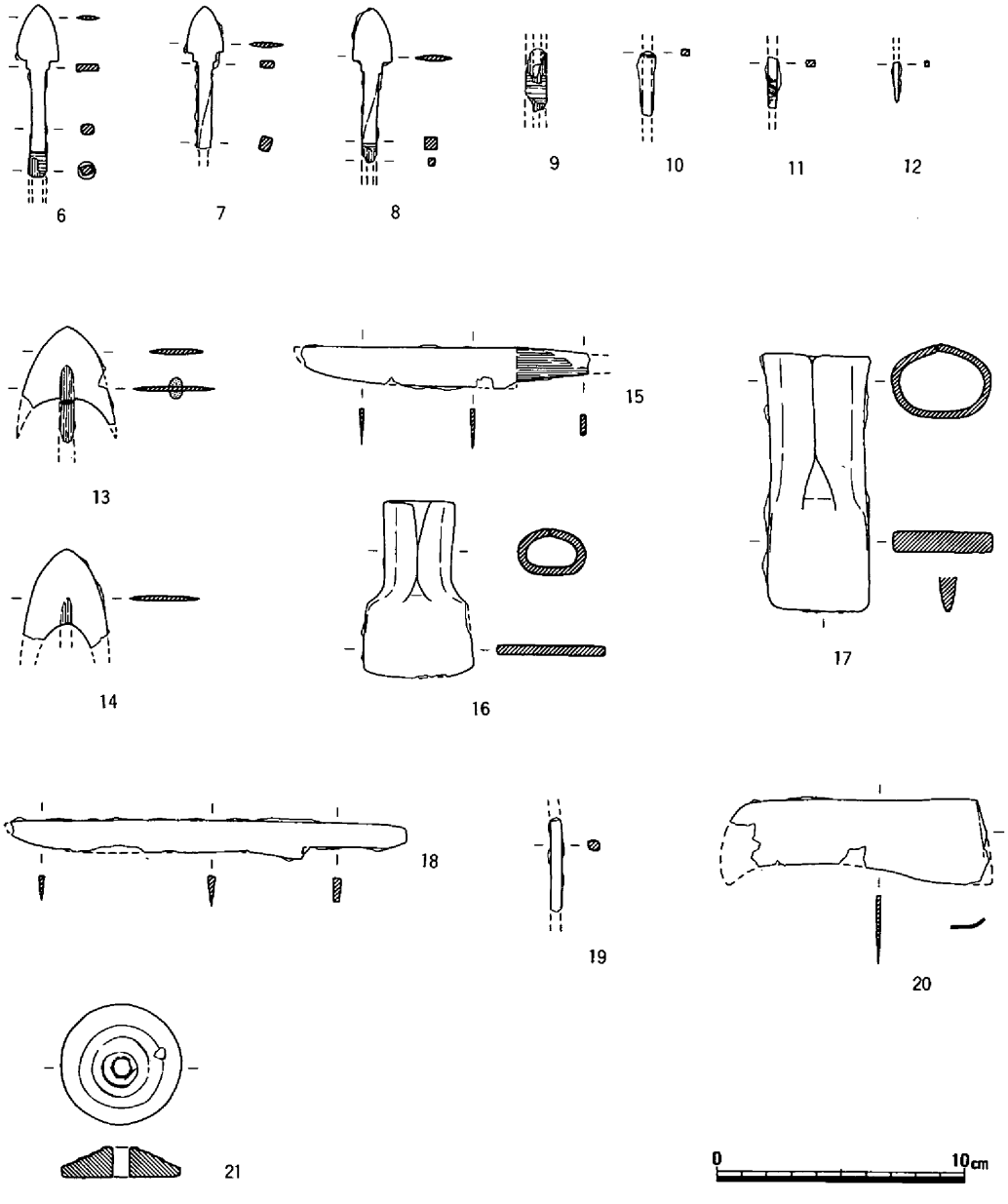


第157図　2～9号墳出土遺物（1／5）

出土遺物（第158図、図版109）

図化するのが可能であったのは、紡錘車形石製品だけである。

この紡錘車形石製品（第158図**21**）は、全体に明緑灰色を呈する滑石製である。長径4.8cm・短径1.5cm・高さ1.3cmを測り、斜面には3段に匙面取りが施され、中央に径0.7cmの円孔が貫通している。中央孔の周囲には、七角形の刻線が認められる。



第158図　4～13号墳出土遺物（1／3）

(15) 31号墳

調査前の状況

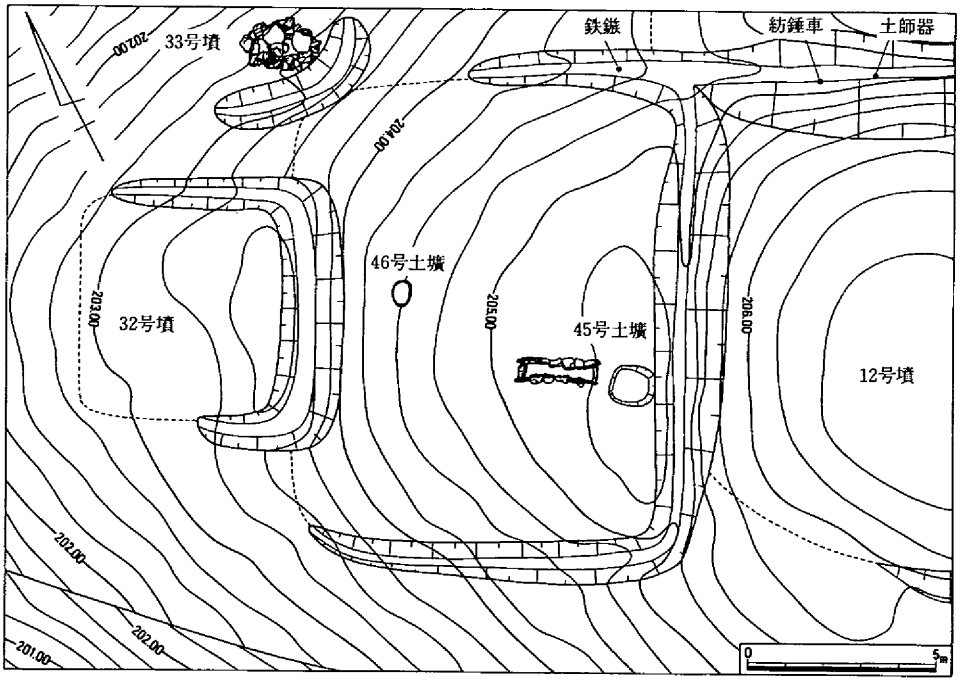
中原古墳群が所在した丘陵のほぼ中央部分に位置し、尾根の分岐点となる頂部に存在した12号墳の北西側に隣接して発見された古墳である。この31号墳の所在した地点は、12号墳から北西側へ1段下がった低い部分で、尾根上に比較的広い平坦面が認められるものの、古墳の墳丘と断定できるほどの高まりは存在しなかった。

墳丘と周溝（第159図、図版110－1）

この31号墳の墳丘は、地形の高い南東側に位置した部分が、先に築造されていた12号墳の墳丘の一部を削平して造っていた。墳丘の平面形は、長径13.00m・短径10.00mの隅丸長方形となり、周囲には「コ」字状を呈する周溝が存在した。この古墳の墳丘は、尾根方向が短い特異な形態になっていた。周辺には切り合い関係が認められる4基の古墳が存在したが、この31号墳は12号墳や13号墳よりも新しく、地形の低い北側の32号墳や33号墳よりも古いことが判明した。なお北東側の墳端に検出した周溝の底部から、鉄鏃が1点だけ出土した。

主体部（第160図、図版110－2・3）

墳丘の中心部よりやや南側へ寄った地点に存在したが、天井石は1枚も残存しなかった。地

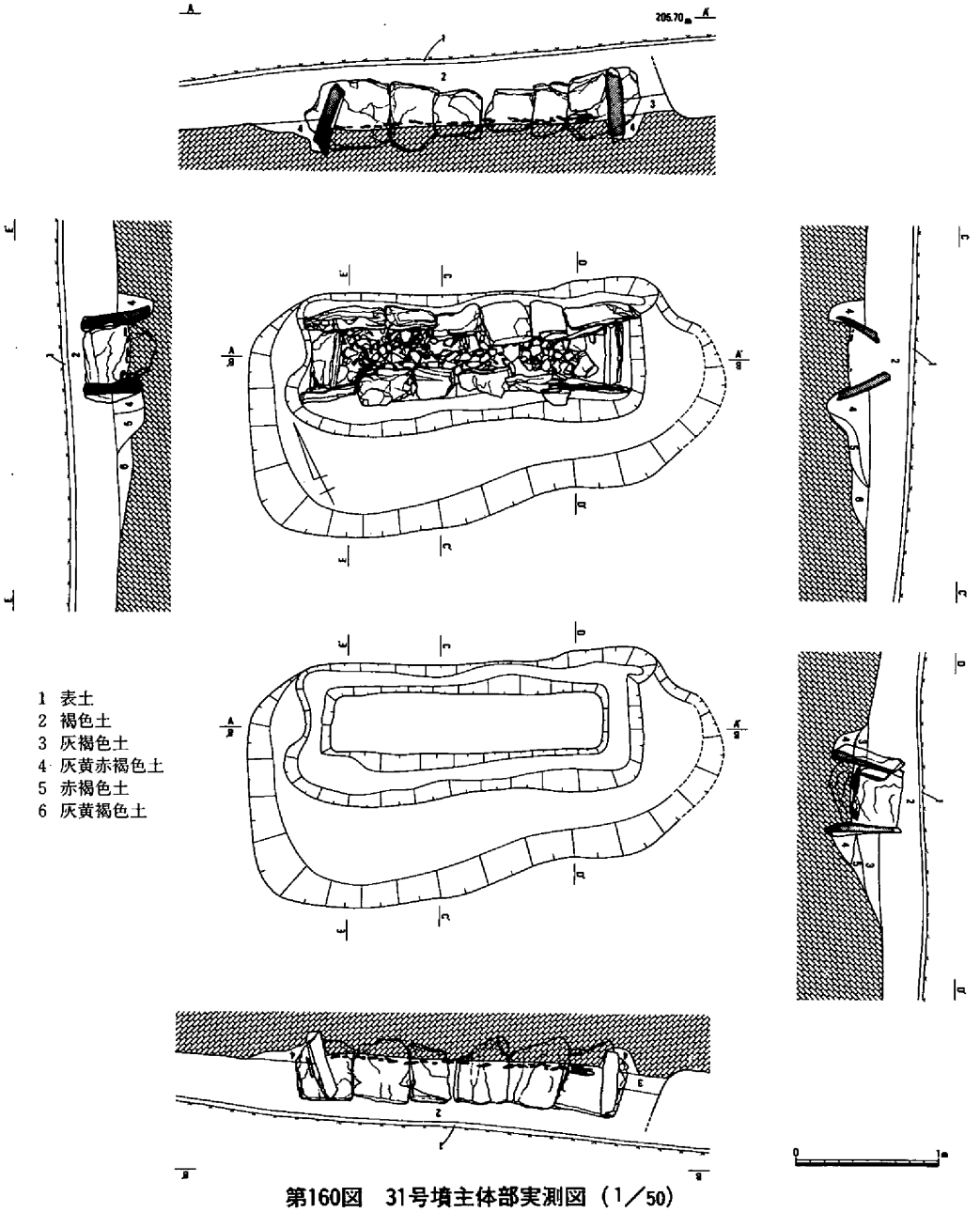


第159図　31号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

山を２段に掘り窪め、内法が長径195㎝・短径42㎝の石棺を造っていた。両側壁には６枚の板石を使い、床面には小さな割石を敷き詰め、南東側小口部分に割石による枕石が存在した。

出土遺物（第269図１、図版165）

短茎の平根式鉄鏃で、短い板状の茎が付いており、根挟みで茎ないし鉄身を挟み込んで着装する型式のものである。鉄身の形態は腸抉柳葉式である。茎には糸が巻かれている。



第160図　31号墳主体部実測図（1／50）

(16) 32号墳

調査前の状況

地形が低くなった31号墳の北西側に接して存在した古墳で、北東方向約８ｍの近い位置には33号墳が検出された。この地点は、丘陵の頂部に所在した12号墳から丘陵の先端に位置した15号墳にかけて北西方向に延びた尾根の中間部分で、古墳が存在すると思われる墳丘の高まりは全く認められなかった。

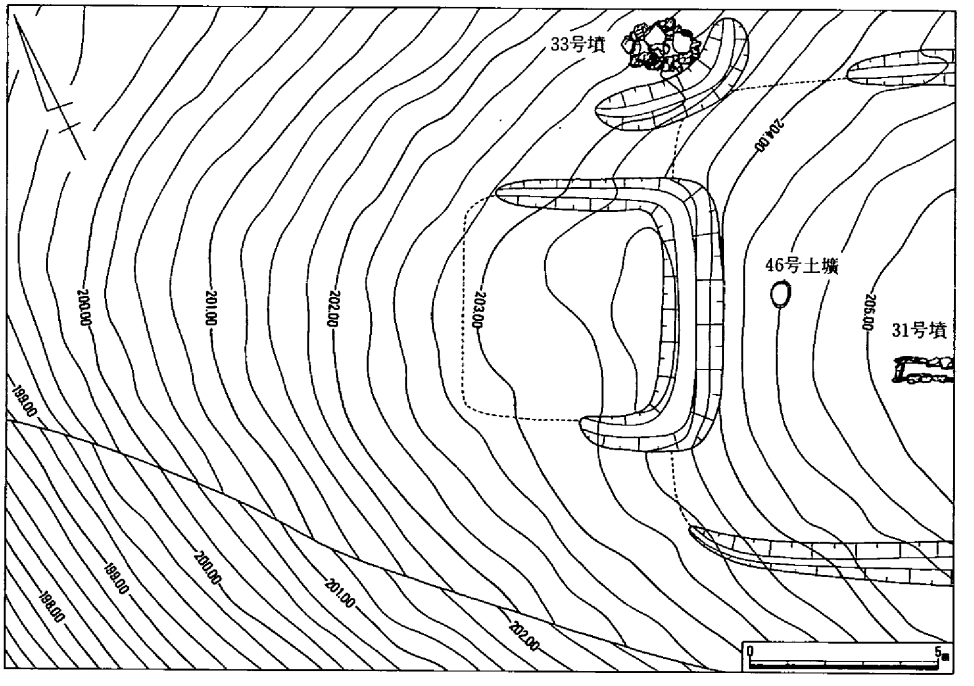
墳丘と周溝（第161図、図版110－１）

この33号墳には、地山の上面に暗褐色土の薄い盛土が認められただけで、主体部は検出できなかった。南東側の墳丘は、先に築造されていた31号墳の墳丘の一部を削平して造っていた。墳丘の平面形は１辺６ｍの隅丸方形を呈し、地形の高い部分に「コ」字状の周溝が存在した。

(17) 33号墳

調査前の状況

31号墳と32号墳の北側に面した緩斜面に位置し、墳丘の高まりがなかったので、周溝の一部や主体部の天井石を検出するまで、その所在が不明であった。



第161図　32号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

墳丘と周溝（第162図、図版110－１・111－１）

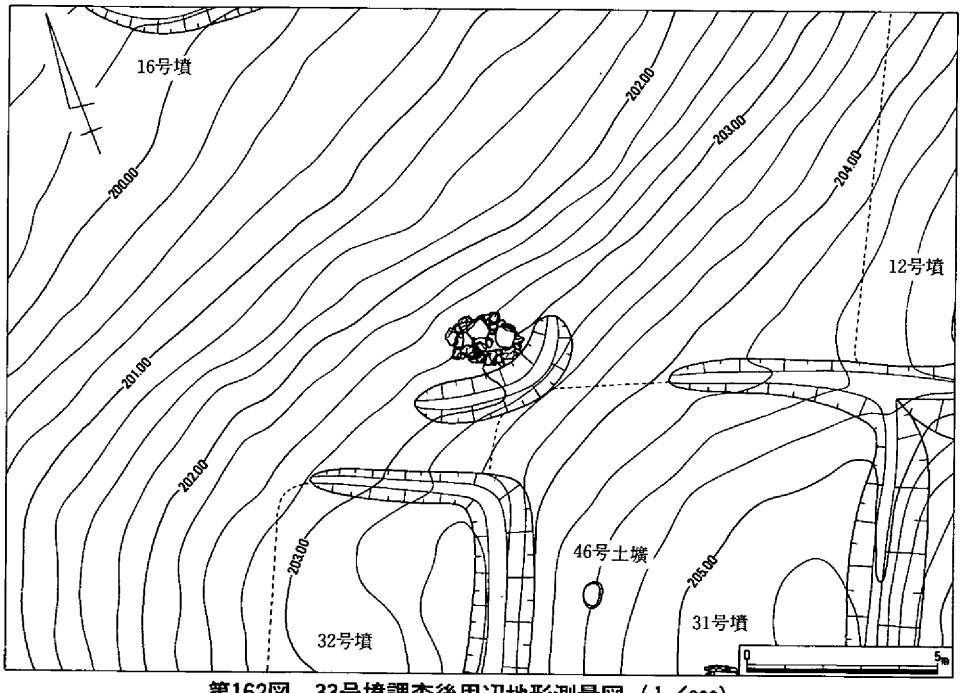
墳丘は残存しなかった。地形の高い31号墳や32号墳に面した所に、周溝の一部を検出した。

主体部（第165図、図版111・112）

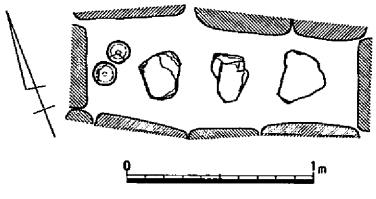
33号墳の主体部は、２枚の天井石が残存した小竪穴式石室である。地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径142cm・短径39～55cm・高さ27～43cmの石室を造っていた。両小口部分には１個の石を立て、両側壁には不揃いの石を２段または３段に積んでいた。床面には棺台と思われる３枚の板石をほぼ等間隔に並べ、北西側小口部分から２点の須恵器が出土した。

出土遺物（第164図、図版168－２）

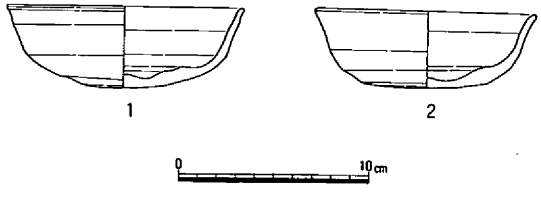
２点とも須恵器の杯身である。口径11.5～12.4cm・器高4.1～4.3cmを測り、口縁部がわずかに外湾して斜め上方へ立ち上がる。外面の底部はヘラ切り未調整であるが、内面全体と外面の口縁部はヨコナデを施している。焼成はともに悪く、灰色または灰白色を呈している。



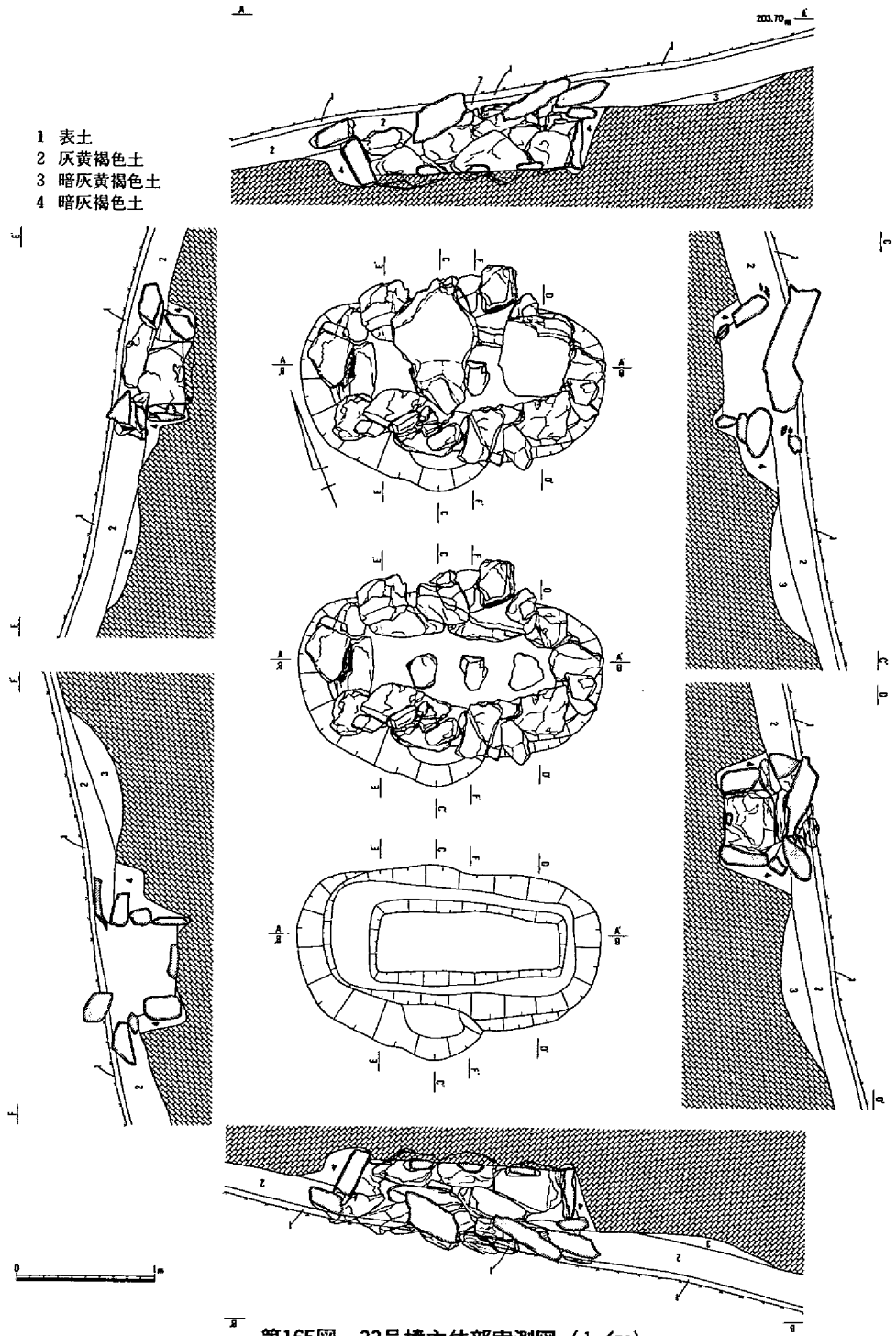
第162図　33号墳調査後周辺地形測量図（1／200）



第163図　33号墳遺物出土状況（1／40）



第164図　33号墳出土遺物（1／4）



第165図　33号墳主体部実測図（1／50）

(18)　16号墳

調査前の状況

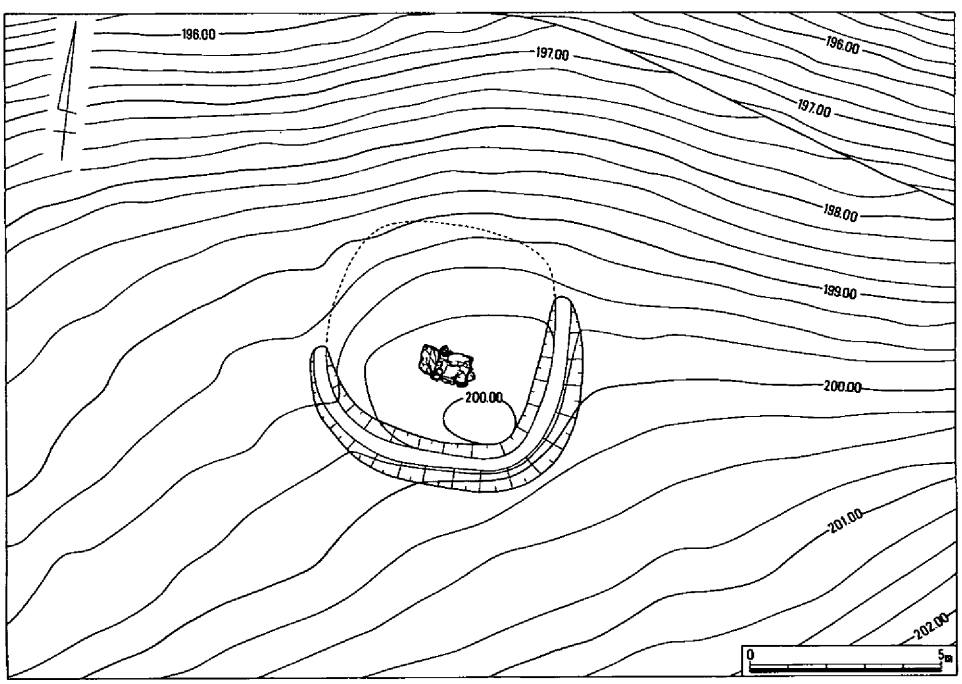
尾根上の平坦面が広くて数多くの古墳が存在した地点の北端部分に位置し、北西方向の正面には17号墳から20号墳の古墳が所在した丘陵が展開する。西側約30ｍの所には15号墳が単独で存在し、南東側約20ｍの近い所には13号墳が認められた。この16号墳の所在地は、谷を望む丘陵の先端部分に小規模な高まりが存在し、古墳が所在するのは誰の目にも明白であった。

墳丘と周溝（第166図、図版113－１）

この古墳の主体部は、表土直下の浅い所で検出したこともあって、墳丘の盛土はほとんど認められなかった。墳丘の平面形は１辺6.30ｍの小規模な隅丸方形を呈し、地形の高い部分に墳端に沿って周溝が存在した。

主体部（第167図、図版113・114）

地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径109㎝・短径24～35㎝・高さ23～27㎝の石棺を造っていた。天井石には２枚の板石を用いていたが、接点は小さな石を補充していた。両小口には１枚、両側壁には４枚の板石を使っていた。床面には小さな割石を敷き詰め、東側小口部分に割石の枕石が存在した。この石棺の小口は、側壁の内側のものと外側のものが認められた。



第166図　16号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

⑲ 15号墳

調査前の状況（図版115－１）

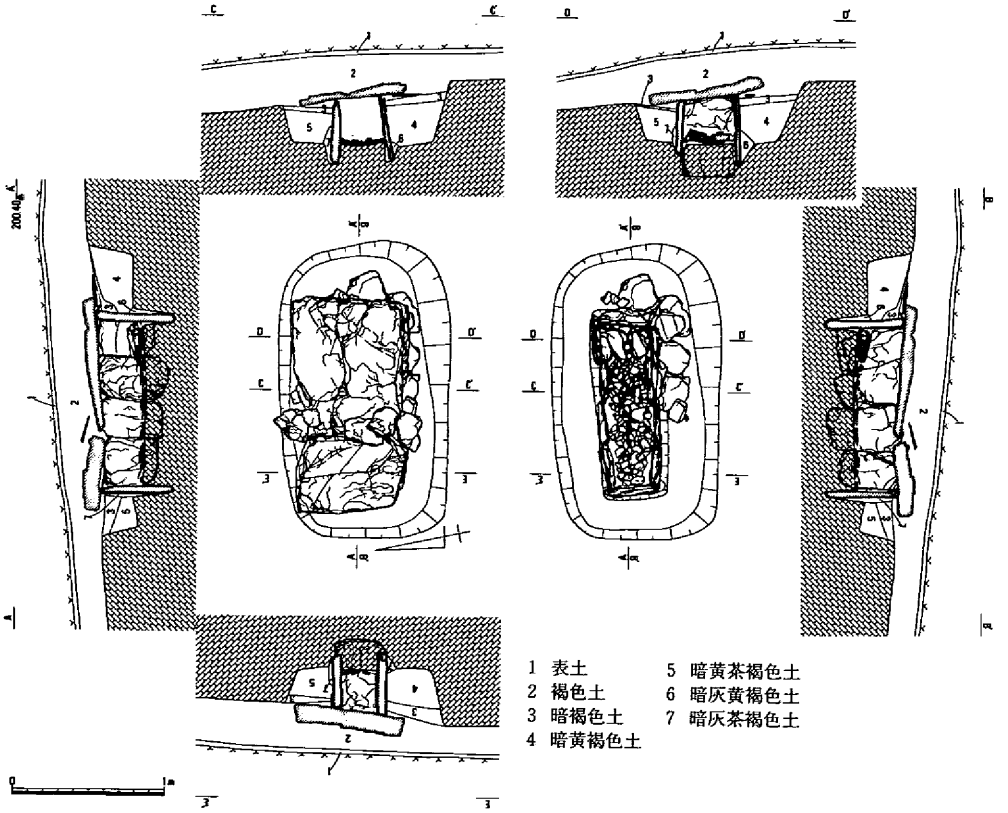
中原古墳群が所在した丘陵の中央よりやや北西方向に寄った地点に存在し、北側の正面には17号墳から20号墳が所在した丘陵を望むことができた。この15号墳が単独で存在した地点は、地形が低くなった丘陵の先端部分で、墳丘が異常に高くなっていた。

墳丘と周溝（第168図、図版110－１・115－２）

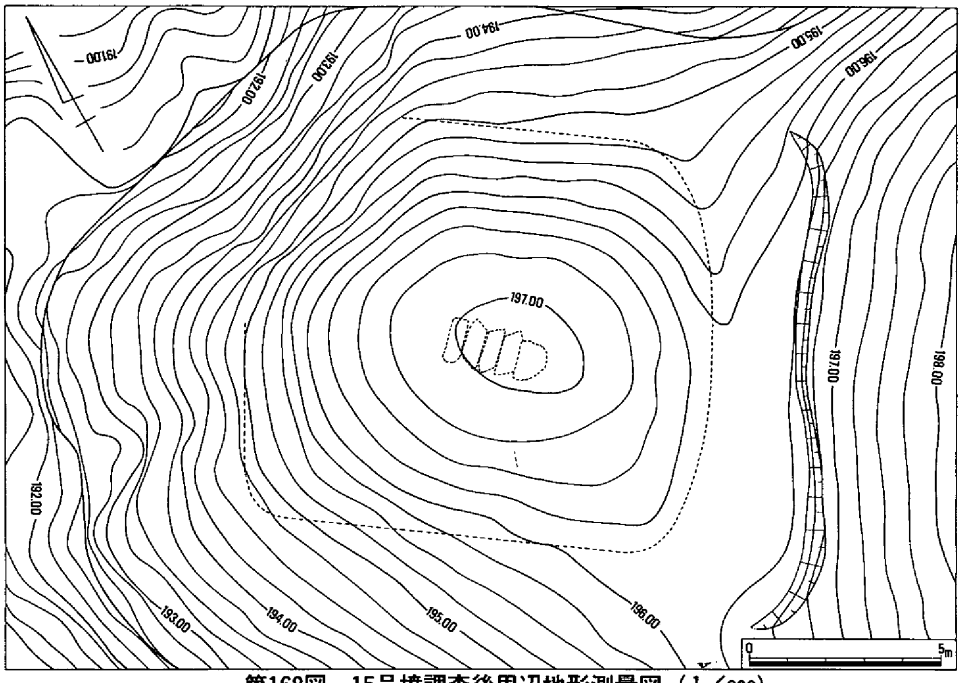
この15号墳は、南東側の地形の高い部分を尾根と直交する方向に深く掘り下げて周溝とし、その土砂を墳丘の盛土に使っていた。墳丘の平面形は長径12.20ｍ・短径10.80ｍの隅丸長方形を呈し、残存する墳丘の高さは約1.20ｍを測り、北側の墳端が削平されていた。なお南西側墳端の表土中から、須恵器の大型壷と思われる口縁の小破片（第169図）が出土した。

主体部（第171図、図版116）

15号墳の主体部である箱式石棺は、黒褐色を呈する旧表土を浅く掘り窪め、内法が長径213cm・短径57～62cm・高さ18～32cmの規模に造っていた。天井石には５枚、両小口には１枚、

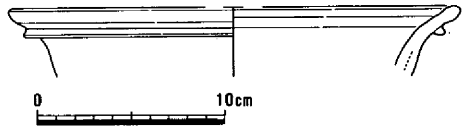


第167図　16号墳主体部実測図（1／50）



第168図　15号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

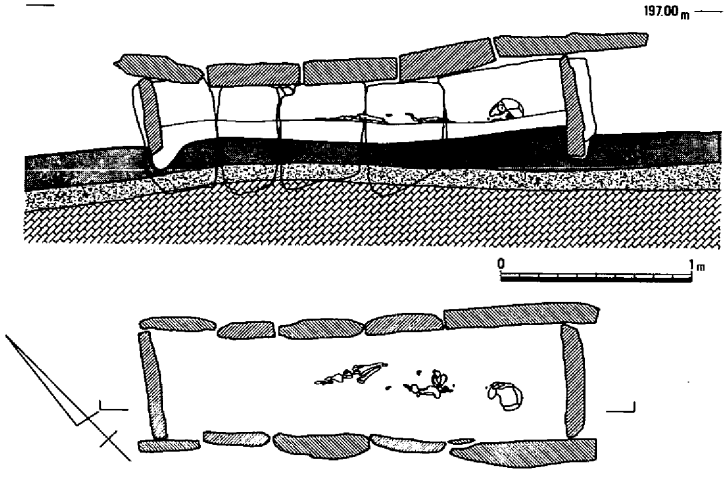
両側壁には5枚の板石を使っていた。床面には小さな割石を敷き詰め、南東側小口部分に割石の枕石が存在した。



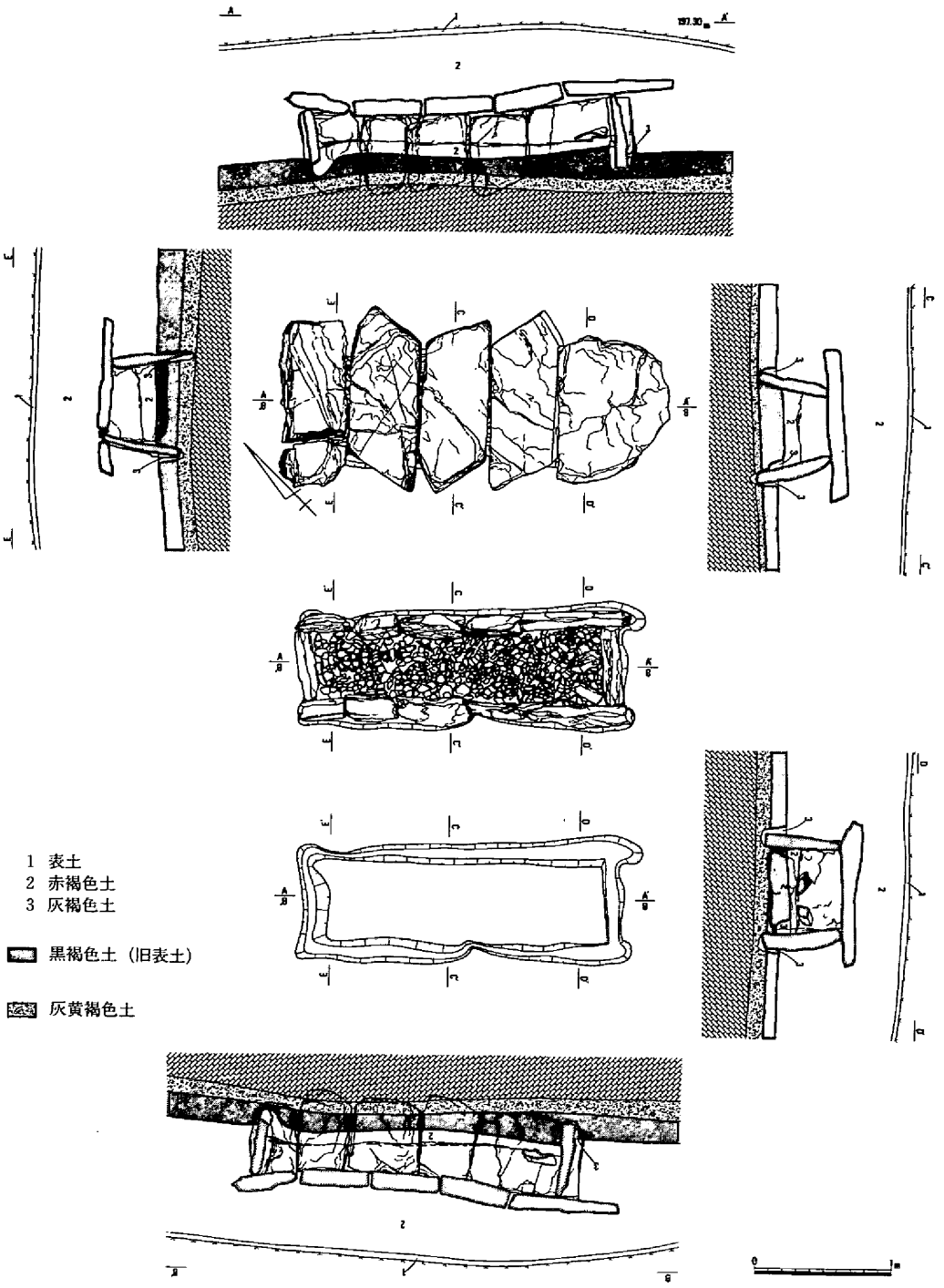
第169図　15号墳出土遺物（1／4）

人骨出土状況（第170図、図版116－2・117）

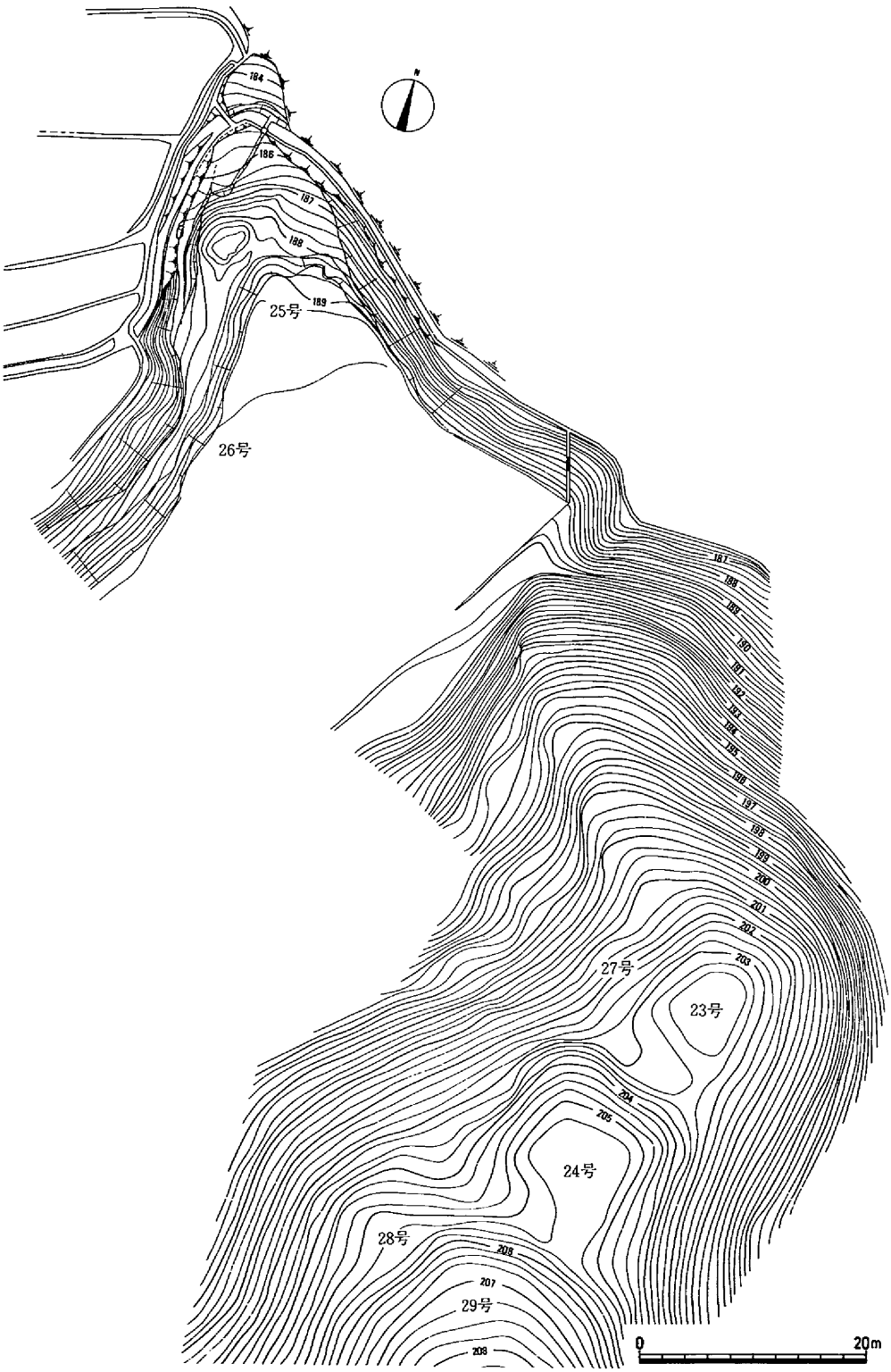
15号墳の主体部には、1体分の人骨が残存していた。頭蓋骨は枕石から外れていたが、右半分が残って歯も認められた。その他には胴骨や下肢骨の一部も存在したが、足の先端部分は確認できなかった。　（福田）



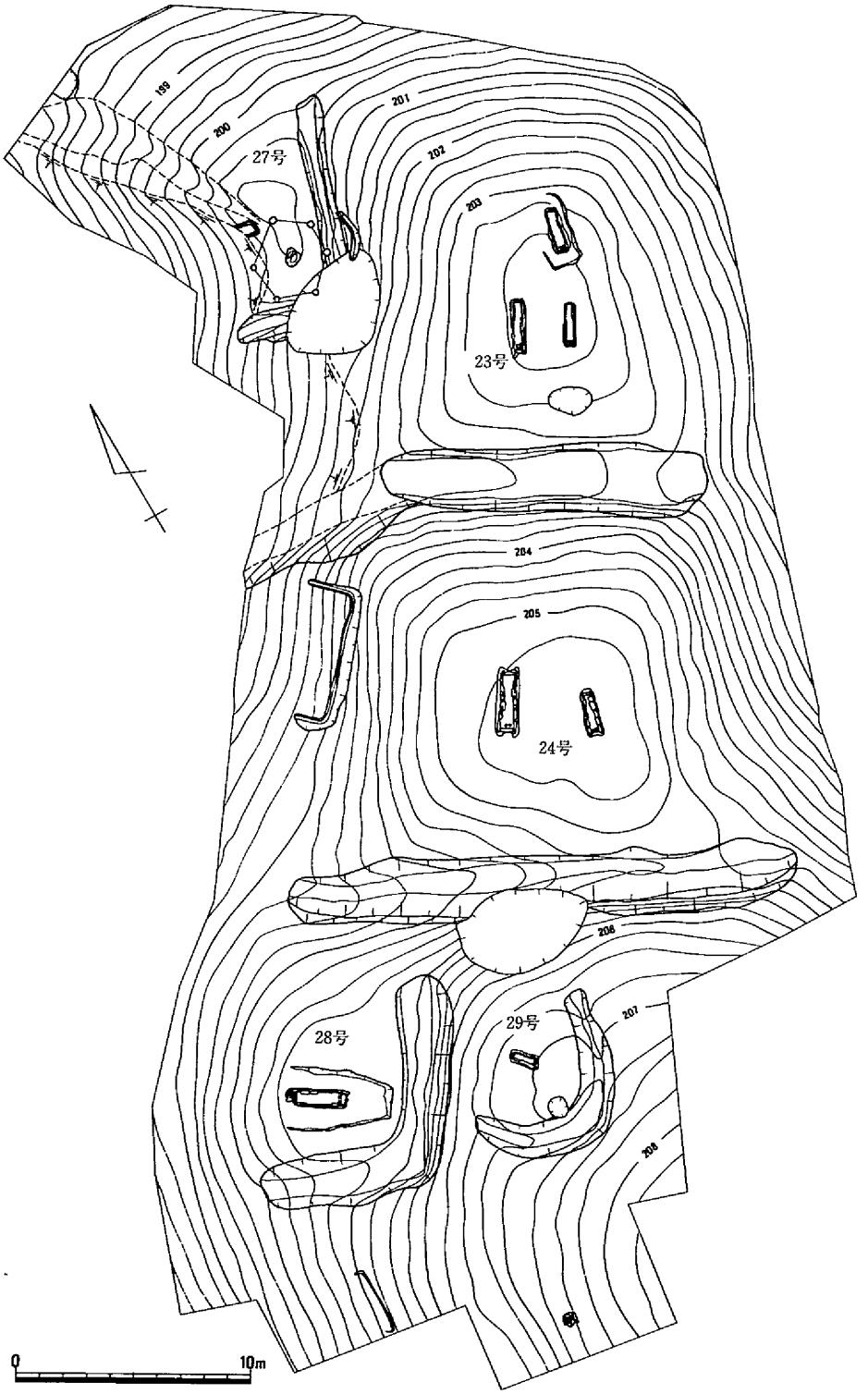
第170図　15号墳人骨出土状況（1/40）



第171図　15号墳主体部実測図（1／50）



第172図　23～29号墳調査前測量図（1／600）

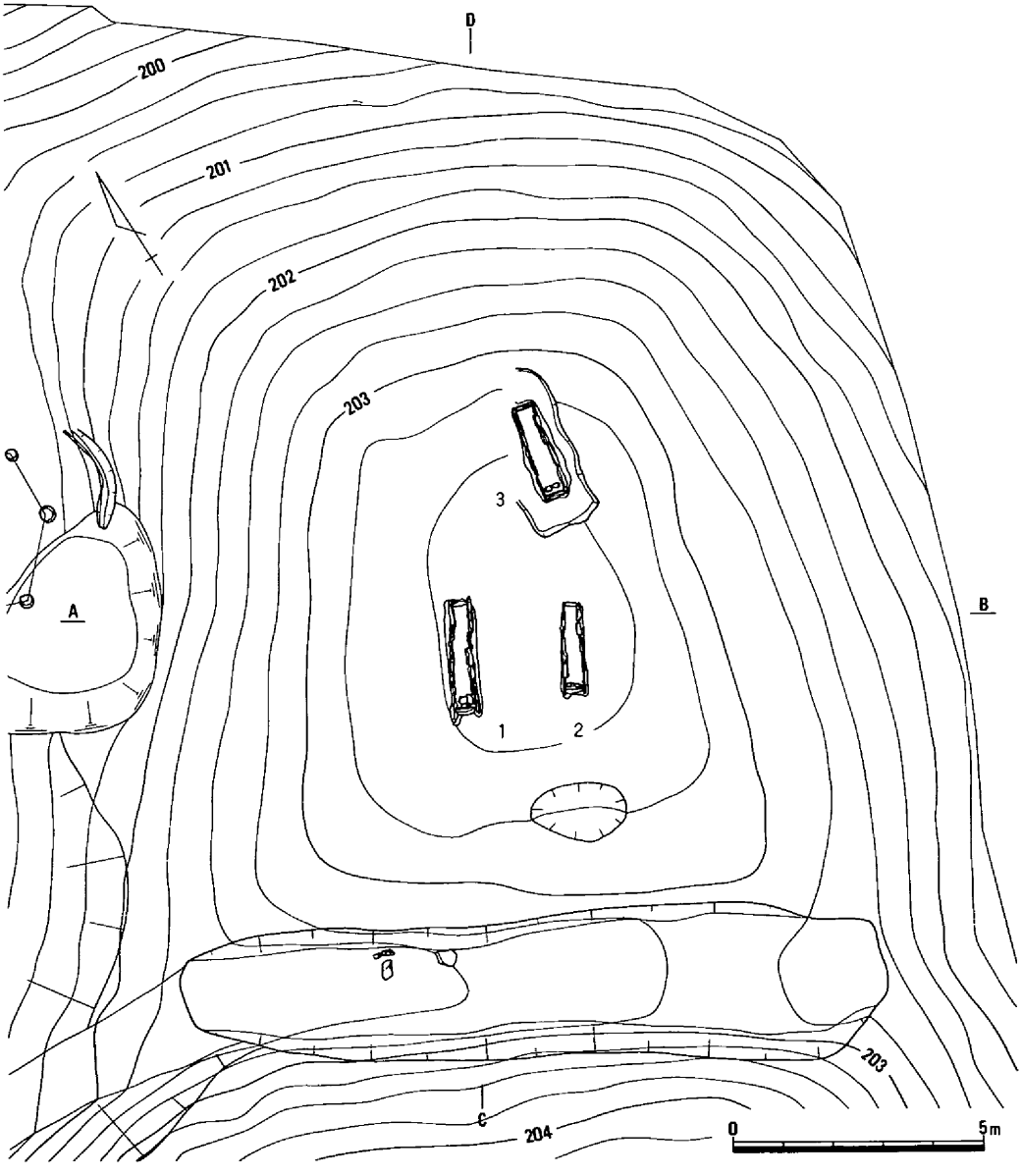


第173図　23・24・27～29号墳墳丘測量図(1／300)

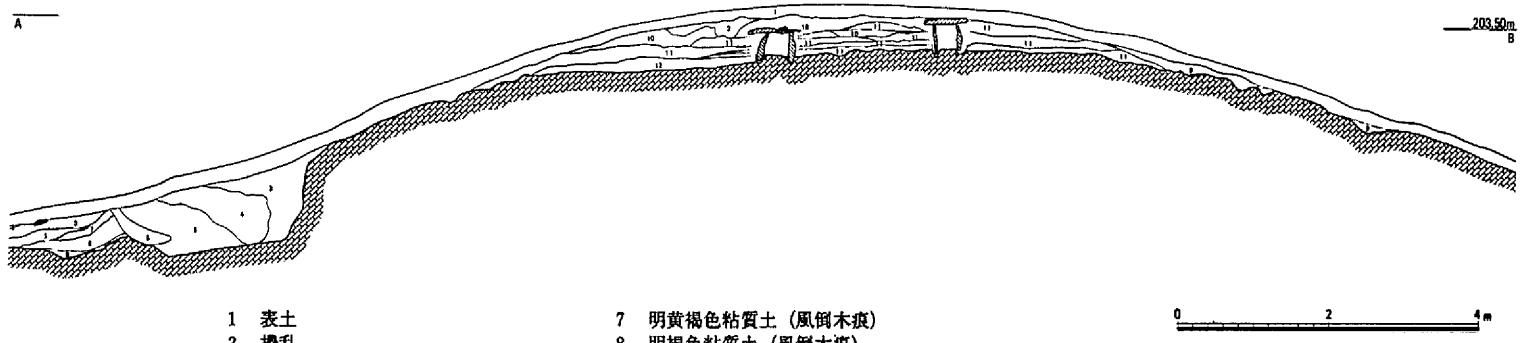
(20)　23号墳

立地と調査前の状況

中原古墳群の所在する丘陵のほぼ中央付近より北東方向に派生した小尾根上に位置する５基

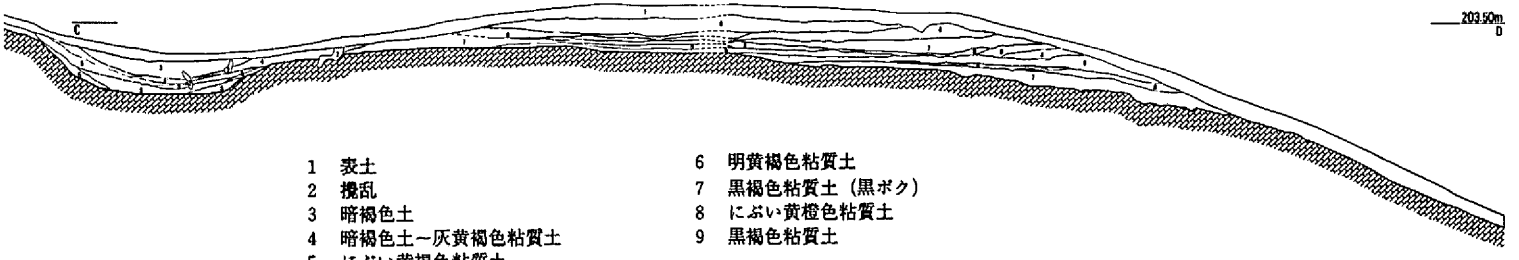


第174図　23号墳墳丘測量図(1／150)



1 表土
2 攪乱
3 にぶい黄褐色土（風倒木痕）
4 にぶい黄褐色粘質土（風倒木痕）
5 黄褐色粘質土（風倒木痕）
6 にぶい黄褐色粘質土（風倒木痕）
7 明黄褐色粘質土（風倒木痕）
8 明褐色粘質土（風倒木痕）
9 にぶい黄褐色土（流土）
10 明黄褐色粘質土
11 にぶい黄褐色土
12 黒褐色粘質土（黒ボク、一部旧表土）

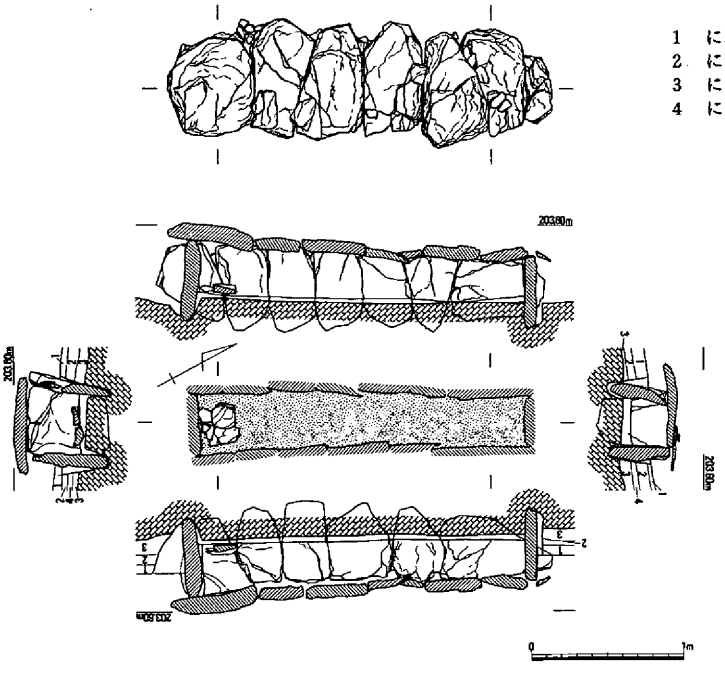
0 2 4m



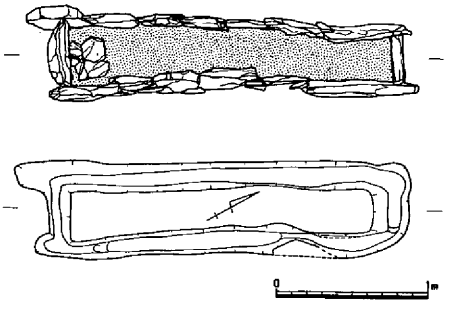
1 表土
2 攪乱
3 暗褐色土
4 暗褐色土ー灰黄褐色粘質土
5 にぶい黄褐色粘質土
6 明黄褐色粘質土
7 黒褐色粘質土（黒ボク）
8 にぶい黄橙色粘質土
9 黒褐色粘質土

0 2 4m

第175図 23号墳墳丘断面図（1／100）



第176図　23号墳第１主体部実測図（１）（1／50）



第177図　23号墳第１主体部実測図（２）（1／50）

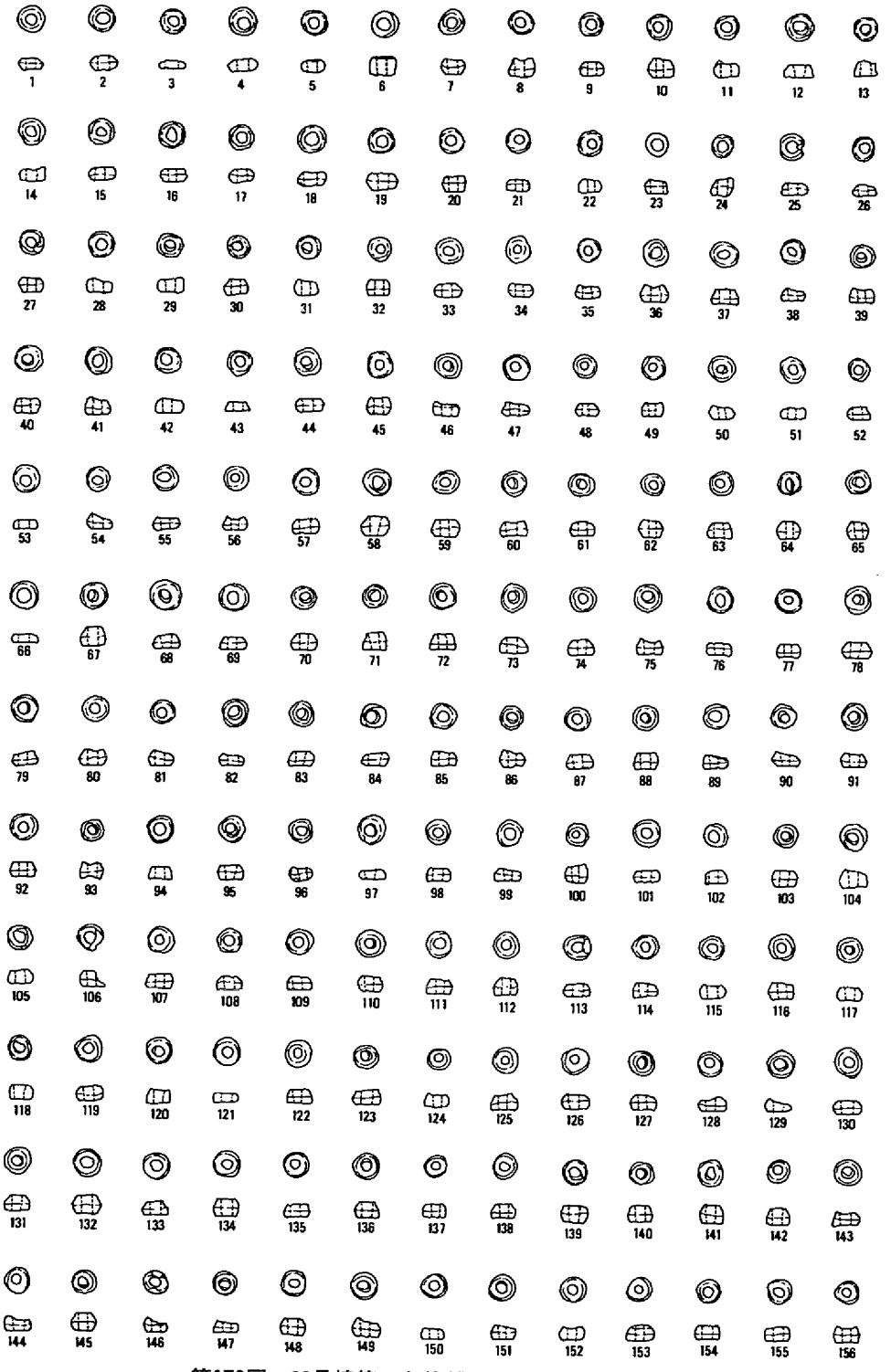
の古墳のうちの１基である。樹木の伐採前には、23号墳と24号墳の２基が確認されていたのみで他の古墳については伐採後の地形観察と踏査により新たに発見したものである。地表観察の結果では、墳頂のやや南側に若干の窪みが認められた程度で大きな盗掘痕もなく石材等も認められなかった。

なお、23、24号墳については、同一の墳丘とみなし前方後方墳とする見方もあった。

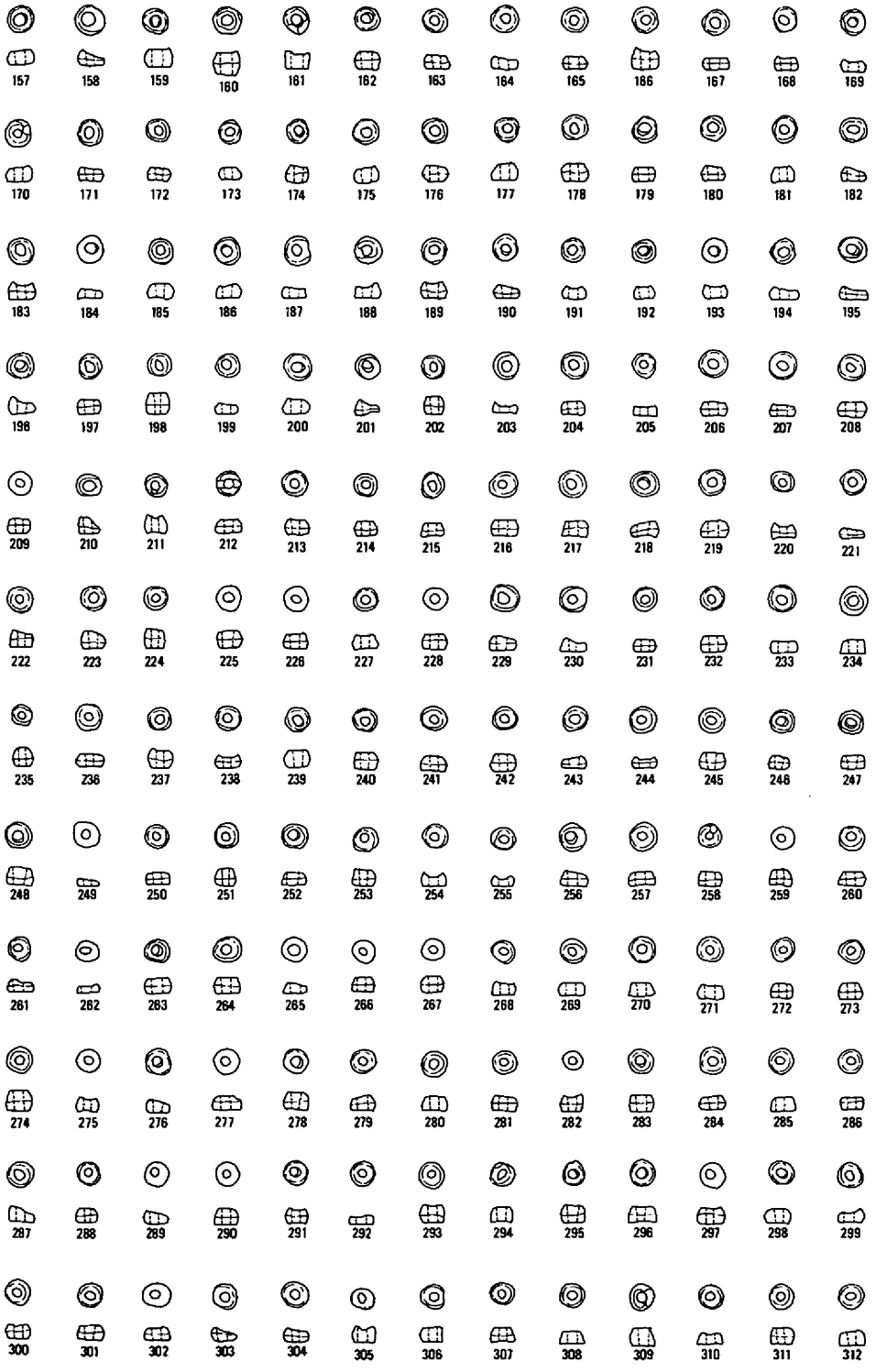
墳丘（第174・175図）

調査の結果、南北14ｍ、東西10ｍの方墳であることが判明した。24号墳との境には、両墳に共有の幅2.5ｍ～３ｍ、検出長14ｍ、深さ40cmの尾根を切断する溝を設けているが、断面観察の結果では23、24号墳の新旧については判然としない。古墳の築造は、丘陵尾根の旧地表を若干整形し、北側及び西側の地形の低い部分に厚手に盛り土を行い墳丘を構築したものと考えられる。盛り土は、墳丘中軸の南北断面では、北に向かうほど厚く最大1.4ｍを測り、東西断面では、西側が厚く1.1ｍほどが認められた。ただ、表土層直下に第２主体部の石棺の蓋石を検出したことから判断するとかなりの盛り土が流失していると考えられる。なお、墳丘部に葺石等の外表施設は何等認められなかった。

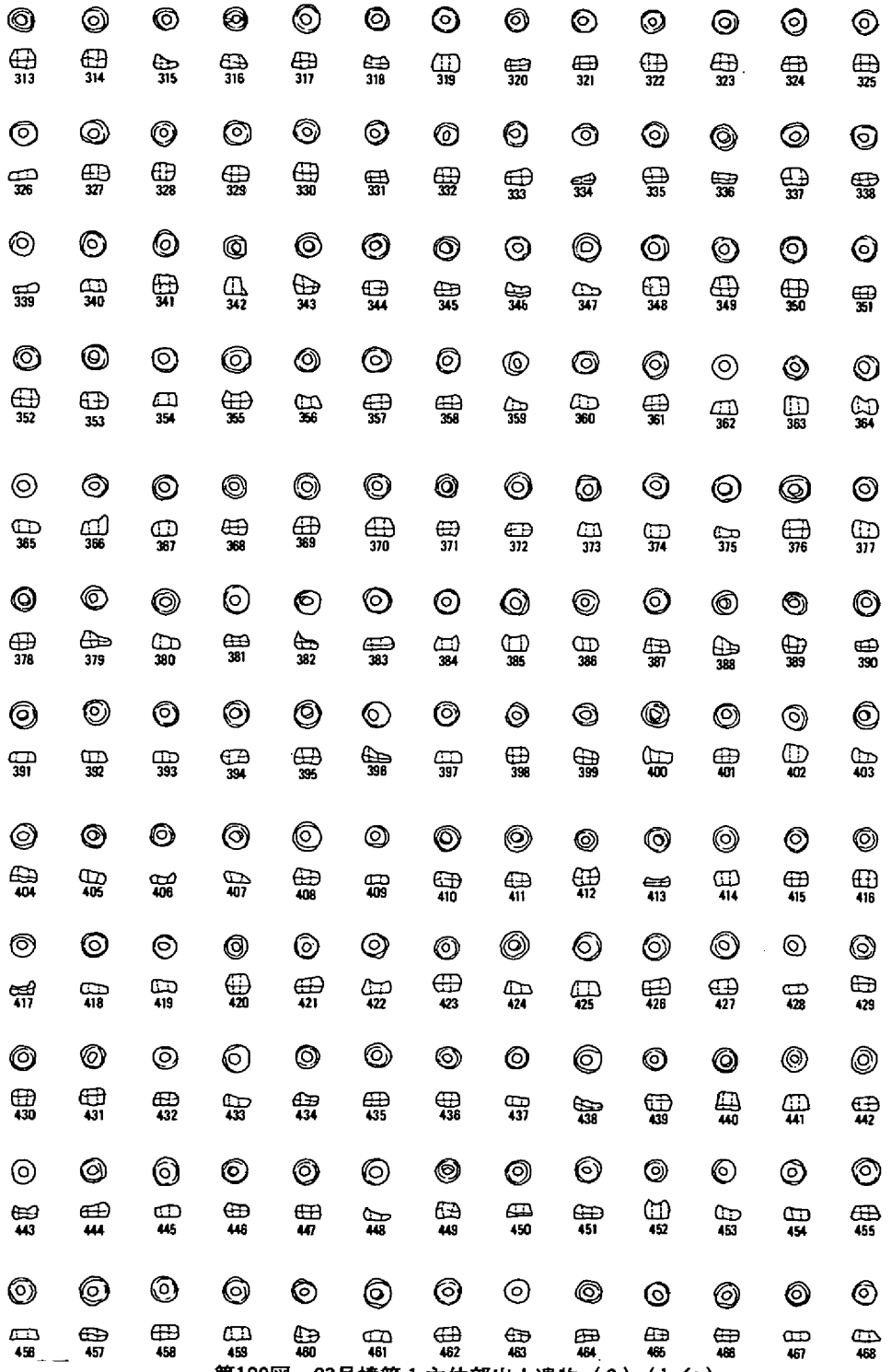
出土遺物は、24号墳との境をなす東西の区画溝の西半から第197図に記載の須恵器**33**の破片７点が出土しているが、いずれの古墳に伴うものか不明である。



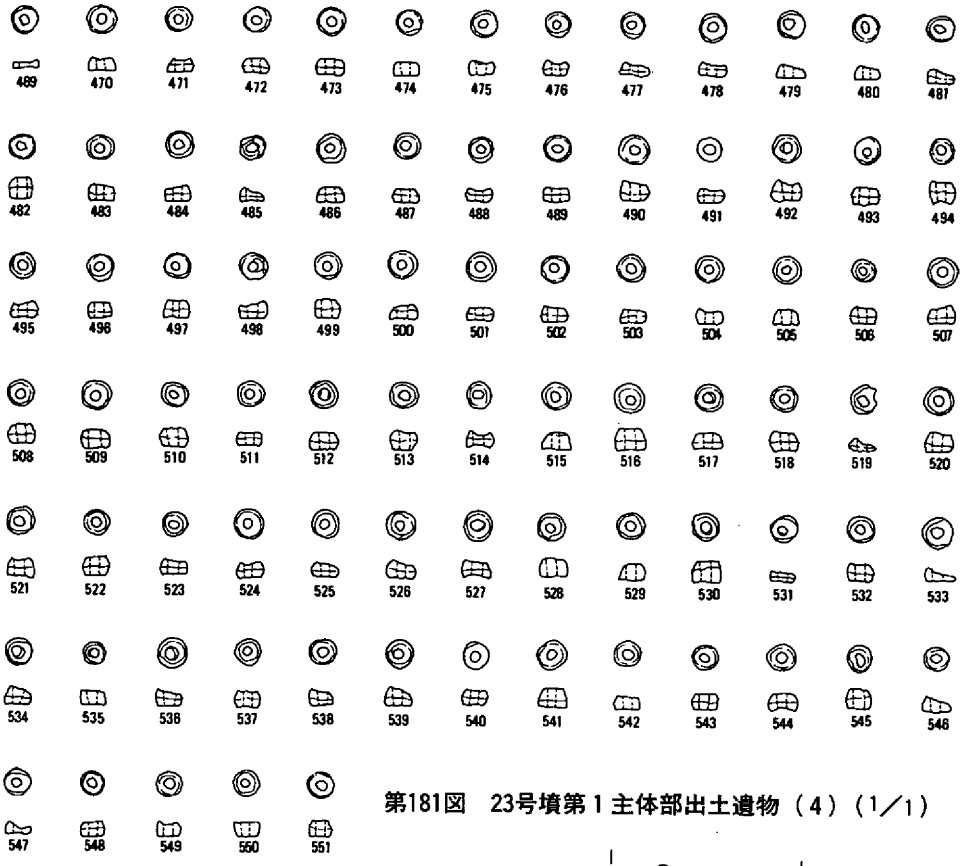
第178図　23号墳第１主体部出土遺物（１）（1／1）



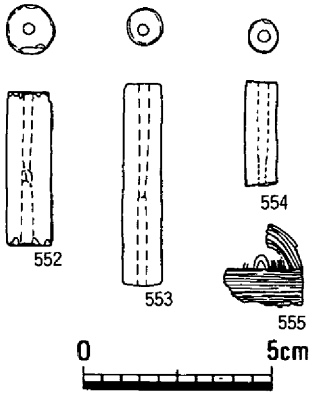
第179図　23号墳第１主体部出土遺物（２）（1／1）



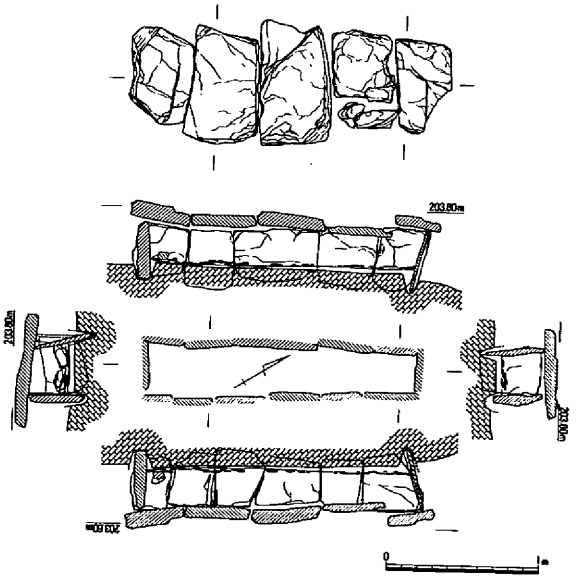
第180図　23号墳第１主体部出土遺物（３）（1／1）



第181図　23号墳第１主体部出土遺物（４）（1／1）



第182図　23号墳第１主体部出土遺物（５）（1／2）



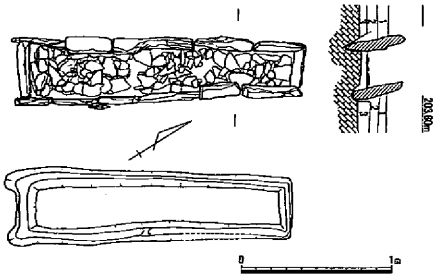
第183図　23号墳第２主体部実測図（１）（1／50）

玉類計測表

(mm)

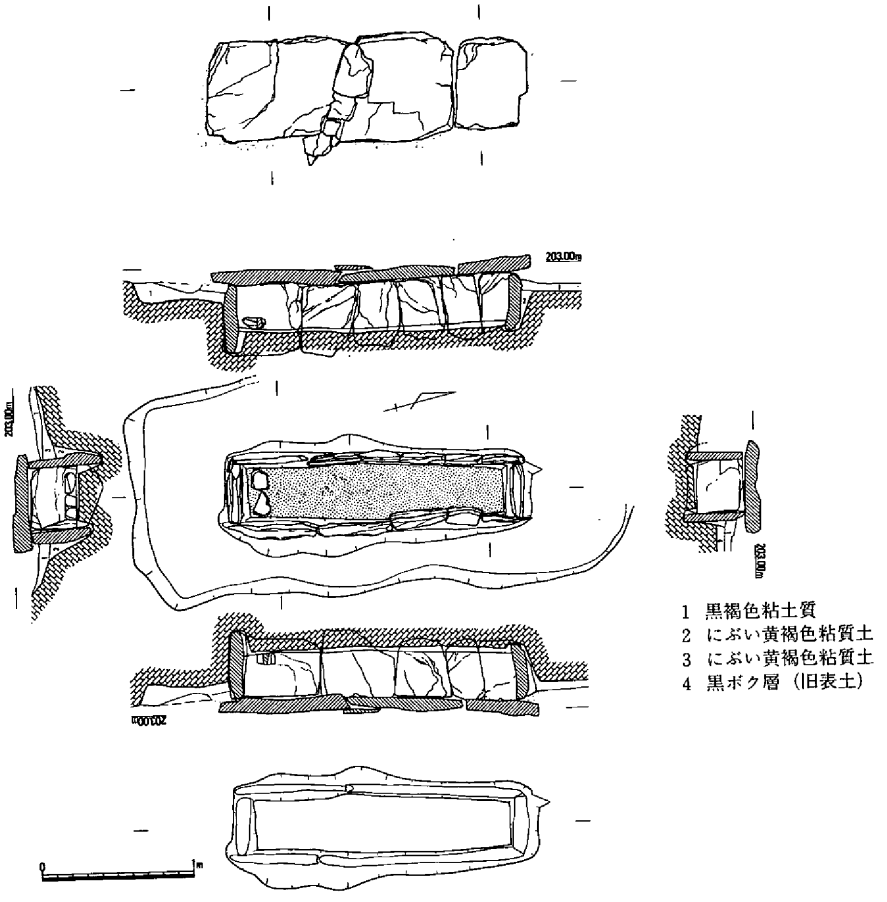
No	長さ	径	孔径	重さ	No	長さ	径	孔径	重さ	No	長さ	径	孔径	重さ	No	長さ	径	孔径	重さ
1	1.92	3.63	1.09	0.03	75	2.15	3.5	0.8	0.05	149	2	3.5	1.28	0.03	223	2.19	3.3	1.21	0.04
2	2.29	3.5	1.11	0.04	76	1.7	3.45	1.48	0.04	150	1.48	3.32	1.09	0.03	224	2.85	3.25	1.1	0.05
3	1.49	3.4	1.61	0.02	77	1.85	3.39	1.09	0.05	151	1.69	3.6	1.18	0.04	225	1.9	3.52	1.33	0.04
4	2.1	3.81	1.49	0.05	78	2.16	3.82	1	0.05	152	1.98	3.61	1.39	0.04	226	2	3.37	1.1	0.04
5	1.87	3.4	1.09	0.04	79	2.11	3.78	1.18	0.04	153	2.02	3.48	1.1	0.05	227	1.95	3.2	1.07	0.03
6	2.58	3.6	1.5	0.06	80	2.4	3.5	1.01	0.05	154	1.72	3.3	1.12	0.03	228	2.1	3.21	1.12	0.04
7	2.41	3.31	1.61	0.05	81	2	3.21	0.9	0.03	155	1.89	3.51	1.1	0.03	229	1.7	3.99	1.38	0.04
8	2.5	3.3	1.51	0.04	82	1.53	3.9	1.22	0.04	156	2.1	3.21	1.41	0.03	230	1.8	3.51	1.09	0.03
9	2.18	3.71	2.29	0.03	83	2.1	3.41	1.4	0.04	157	1.9	3.51	1.2	0.04	231	1.72	3.3	1.21	0.04
10	2.45	3.6	1.43	0.05	84	1.98	3.2	1.19	0.04	158	1.6	3.5	1.3	0.04	232	2.19	3.32	1.1	0.05
11	2.15	3.18	1.85	0.04	85	2.01	3.49	1.15	0.04	159	2.18	3.6	1.2	0.04	233	1.5	3.51	1	0.03
12	1.89	3.7	1.4	0.05	86	1.89	3.1	1.56	0.03	160	2.95	3.78	1.4	0.07	234	1.5	3.69	1.38	0.04
13	2.27	3.31	2.29	0.05	87	2	3.3	1.19	0.04	161	2.2	3.46	1.2	0.04	235	2.29	3.19	1.12	0.04
14	1.8	3.71	2.28	0.05	88	2.58	3.41	1.13	0.04	162	2.19	3.48	1.01	0.05	236	1.4	3.52	1.1	0.03
15	1.95	3.62	1.51	0.04	89	1.99	3.45	1.49	0.04	163	1.8	3.4	1.02	0.04	237	2.26	3.42	1.1	0.03
16	1.8	3.88	1.3	0.04	90	2.45	3.42	1.51	0.05	164	1.3	3.48	1.09	0.04	238	1.78	3.43	1.2	0.04
17	1.8	3.6	1.4	0.04	91	2.05	3.5	1.3	0.03	165	1.63	3.3	1.09	0.03	239	2.4	3.58	1.19	0.06
18	2.28	3.89	1.3	0.05	92	1.99	3.38	1.22	0.03	166	3.01	3.51	1	0.06	240	2.6	3.37	1.2	0.05
19	2.4	3.61	1.58	0.04	93	2.21	3.19	1.59	0.04	167	1.48	3.25	1.32	0.03	241	1.99	3.65	1.21	0.05
20	2.05	3.45	1.19	0.04	94	1.7	3.6	1.58	0.04	168	1.69	3.29	1.33	0.04	242	2.47	3.29	1.3	0.05
21	1.67	3.48	1.49	0.03	95	2.46	3.52	1.5	0.06	169	1.24	3.51	1.13	0.04	243	1.69	3.32	1.07	0.03
22	1.8	3.49	1.61	0.04	96	1.69	3.29	1.58	0.03	170	2.5	3.6	1.18	0.05	244	1.38	3.4	1.09	0.03
23	1.98	3.12	1.5	0.03	97	1.59	3.81	1.05	0.05	171	1.89	3.62	1.45	0.03	245	2.4	3.49	1.04	0.06
24	2.52	3.19	1.62	0.04	98	2.1	3.5	1.53	0.05	172	1.52	3.31	1.18	0.03	246	2.01	3.4	1	0.04
25	1.68	3.78	1.65	0.04	99	1.89	3.65	1.39	0.05	173	1.69	3.28	1.35	0.03	247	2.11	3.38	0.96	0.04
26	1.79	3.4	1.28	0.04	100	2.05	3.31	1.4	0.03	174	2.12	3.4	1.4	0.03	248	2.27	3.7	1.22	0.05
27	2.3	3.46	1.25	0.04	101	1.69	3.59	1.65	0.04	175	1.83	3.63	1.21	0.04	249	0.81	3.7	1	0.03
28	1.8	3.61	1.52	0.04	102	1.5	3.1	1.49	0.03	176	2.2	3.6	1.3	0.04	250	1.59	3.35	1.05	0.03
29	1.78	3.58	1.19	0.04	103	2.2	3.21	1.4	0.04	177	2.31	3.6	1.3	0.05	251	2.02	3.28	1.18	0.04
30	1.88	3.3	1.7	0.04	104	2.85	3.6	1.42	0.06	178	2.21	3.51	1	0.04	252	1.5	3.29	1.05	0.03
31	2.19	3.31	1.4	0.04	105	1.51	3.28	1.5	0.03	179	2.11	3.32	1.13	0.04	253	2.38	3.45	0.99	0.04
32	2.45	3.2	1.29	0.04	106	1.93	3.21	1.21	0.03	180	2.4	3.57	1.04	0.06	254	1.85	3.31	1.21	0.04
33	2.11	3.6	1.4	0.04	107	2.21	3.39	1.38	0.06	181	1.98	3.66	1.25	0.04	255	1.31	3.29	1.01	0.02
34	1.9	3.49	1.18	0.04	108	1.89	3.41	1.19	0.04	182	1.95	3.51	1.21	0.04	256	2.09	3.81	1.48	0.04
35	1.89	3.28	1.25	0.03	109	1.82	3.31	1.31	0.04	183	2.31	3.51	0.92	0.05	257	1.68	3.7	0.93	0.05
36	2.41	3.69	1.1	0.05	110	2.3	3.61	1.18	0.06	184	1.29	3.51	1	0.02	258	2.23	3.28	0.92	0.04
37	2.1	3.51	1.45	0.04	111	2.18	3.51	1.21	0.04	185	2.2	3.87	1.02	0.04	259	2.1	3.21	1.28	0.03
38	1.93	3.25	1.45	0.04	112	2.51	3.35	1.43	0.03	186	2.21	3.75	1.39	0.04	260	1.89	3.5	1.01	0.04
39	1.92	3.25	1.55	0.03	113	2.1	3.42	1.09	0.04	187	1.7	3.86	1.28	0.04	261	1.52	3.18	1	0.03
40	1.89	3.7	1.26	0.04	114	2.38	3.1	1.42	0.04	188	2.1	3.7	1.03	0.03	262	1.32	3.11	1.18	0.02
41	2.27	3.81	1.21	0.05	115	2	3.39	1.48	0.03	189	2.31	3.4	1.08	0.04	263	1.91	3.51	0.95	0.03
42	2.2	3.69	1.12	0.03	116	2	3.38	1.44	0.04	190	1.9	3.59	1.32	0.05	264	2.3	3.79	1.02	0.06
43	1.31	3.31	1.11	0.03	117	2.15	3.41	1.18	0.04	191	1.71	3.3	1.3	0.04	265	1.11	3.05	1.21	0.02
44	1.89	4	1.64	0.05	118	1.91	3.11	1.26	0.03	192	1.89	3.09	1.09	0.03	266	2.38	3.09	0.09	0.04
45	2.07	3.55	1.31	0.05	119	2.08	3.62	1.28	0.04	193	1.83	3.21	1.01	0.03	267	2.41	3.2	1.21	0.03
46	2	3.51	1.32	0.05	120	1.99	3.38	1.49	0.03	194	1.48	3.61	1.29	0.03	268	1.86	3.18	1.19	0.03
47	1.8	3.68	1.51	0.03	121	1.42	3.72	1.15	0.03	195	1.51	3.79	1.22	0.04	269	1.72	3.3	1.18	0.03
48	1.93	3.49	1.25	0.03	122	2.21	3.45	1.3	0.03	196	2.08	3.62	1.31	0.05	270	1.91	3.69	1.11	0.03
49	2.2	3.55	1.12	0.04	123	2.19	3.31	1.09	0.04	197	2	3.36	1.18	0.05	271	2.02	3.38	0.94	0.05
50	1.91	3.65	1.55	0.05	124	1.9	3.12	1.31	0.03	198	2.78	3.13	1.08	0.05	272	1.71	3.38	1	0.03
51	1.51	3.19	1.59	0.02	125	2.35	3.5	1.1	0.04	199	1.69	3.29	1	0.03	273	2.08	3.4	1	0.05
52	2	3.3	1.31	0.03	126	1.9	3.49	1.12	0.04	200	1.97	3.95	1.08	0.05	274	2.51	3.72	1.03	0.07
53	1.5	3.8	1.18	0.03	127	2.28	3.51	1.02	0.04	201	1.89	3.4	1.08	0.03	275	1.83	3.28	0.97	0.02
54	2.1	3.49	1.25	0.03	128	1.91	3.43	1.37	0.03	202	2.4	3.49	1.03	0.04	276	1.51	3.3	0.99	0.03
55	1.62	3.53	1.15	0.04	129	1.61	3.65	1.18	0.03	203	1.39	3.5	1.12	0.03	277	1.89	3.39	0.94	0.04
56	2	3.6	1.25	0.04	130	1.89	3.7	1.23	0.04	204	2	3.62	0.99	0.04	278	2.49	3.19	0.96	0.06
57	1.8	3.65	1.48	0.04	131	2.4	3.85	1.18	0.05	205	1.52	3.3	1.08	0.03	279	2.32	3.51	0.98	0.03
58	2.5	3.65	1.34	0.05	132	2.4	3.5	1.18	0.06	206	2.18	3.69	1.28	0.05	280	2.51	3.31	0.98	0.05
59	2.4	3.3	1.13	0.04	133	1.92	3.39	0.98	0.05	207	1.48	3.68	1.19	0.03	281	2.31	3.42	0.96	0.04
60	2.19	3.45	1.21	0.03	134	2.21	3.71	2.28	0.05	208	2.09	3.71	1	0.05	282	2.52	3	1.05	0.03
61	2.09	3.39	1.41	0.03	135	1.7	3.45	1	0.04	209	2.03	3.31	1.01	0.04	283	2.65	3.5	1.59	0.05
62	2.08	3.3	1.13	0.04	136	2.31	3.5	1.51	0.05	210	2.1	3.29	0.95	0.04	284	1.71	3.58	1.25	0.04
63	2.18	3.31	1.2	0.04	137	1.7	3.01	1.09	0.04	211	2.68	3.19	1.04	0.04	285	1.75	3.28	0.92	0.03
64	2.51	3.41	1.28	0.05	138	1.98	3.5	1.32	0.04	212	1.79	3.58	1.38	0.04	286	1.48	3.22	1.16	0.02
65	2.55	3.18	1.21	0.05	139	2.38	3.5	1.52	0.03	213	1.61	3.41	1.09	0.04	287	1.9	3.44	1.48	0.03
66	1.48	3.89	1.21	0.03	140	2.02	3.5	1.4	0.04	214	2.03	3.19	1.4	0.04	288	1.82	3.09	1.09	0.03
67	2.52	3.51	1.12	0.04	141	2.4	3.65	1.21	0.06	215	1.58	3.2	1.22	0.03	289	1.52	3.44	1.27	0.03
68	2.4	3.72	1.09	0.04	142	1.92	3.23	1.21	0.03	216	2.28	3.6	1.04	0.05	290	2.11	3.29	1.28	0.04
69	2.25	3.59	1.18	0.05	143	2.21	3.4	1.69	0.05	217	2.25	3.58	0.96	0.05	291	2.01	3.31	1.31	0.03
70	2.1	3.19	1.11	0.03	144	1.7	3.48	1.3	0.03	218	2.29	3.68	0.98	0.04	292	1.17	3.31	1.39	0.04
71	2.3	3.2	1.18	0.04	145	2.5	3.23	1.48	0.04	219	2.2	3.5	1.36	0.04	293	2.18	3.52	1.11	0.05
72	2.36	3.5	1.41	0.04	146	1.9	3.25	1.25	0.03	220	2.35	3.21	1.22	0.03	294	1.72	3.18	1.18	0.03
73	2.1	3.71	1.35	0.04	147	1.6	3.2	1.03	0.03	221	1.27	3.38	1.01	0.03	295	1.99	3.13	1.39	0.04
74	2.18	3.49	0.98	0.05	148	1.88	3.45	1.27	0.04	222	2.02	3.2	1.14	0.04	296	2.08	3.58	1.36	0.04

No	長さ	径	孔径	重さ	No	長さ	径	孔径	重さ	No	長さ	径	孔径	重さ	No	長さ	径	孔径	重さ
297	1.97	3.5	1.32	0.04	361	2.29	3.53	1.38	0.05	425	2.1	3.69	1.21	0.04	489	1.61	3.32	1.28	0.03
298	2.11	3.58	1.39	0.03	362	1.89	3.51	1.39	0.04	426	1.73	3.31	1.32	0.03	490	1.31	3.2	1.32	0.02
299	1.77	3.56	1.21	0.03	363	2.18	3.29	1.58	0.04	427	2	3.19	1.11	0.03	491	1.81	3.41	1.21	0.03
300	2.09	3.58	1.29	0.05	364	2.18	3.81	1.33	0.04	428	2.1	3.49	1.01	0.03	492	2.39	3.11	1.31	0.06
301	2.15	3.39	1.19	0.04	365	1.43	3.2	1.31	0.03	429	2.49	3.15	1.29	0.05	493	1.81	3.52	1.11	0.04
302	1.95	3.59	1.08	0.05	366	2.21	3.41	1.39	0.04	430	1.87	3.08	1.21	0.02	494	1.81	3.71	1.32	0.05
303	1.68	3.7	1.39	0.04	367	1.71	3.28	1.38	0.02	431	1.64	3.39	1.19	0.03	495	1.61	3.11	1.29	0.02
304	1.58	3.61	1.19	0.03	368	2.11	3.36	1.06	0.04	432	1.89	3.29	1.09	0.03	496	2.01	3.54	1.19	0.05
305	2.21	3.18	1.12	0.03	369	2	3.59	1.42	0.04	433	1.39	3.11	1.19	0.03	497	1.79	3.35	1.22	0.04
306	2	3.5	1.12	0.04	370	2	3.44	1.28	0.04	434	2.11	3.2	1.11	0.03	498	1.9	3.42	1.43	0.04
307	1.62	3.19	1.45	0.04	371	2.04	3.09	1.39	0.03	435	2.11	3.32	1.31	0.03	499	1.89	3.27	1.29	0.03
308	1.72	3.33	1.41	0.03	372	1.67	3.6	1.49	0.05	436	2.39	3.8	1.18	0.04	500	2.4	3.49	1.09	0.04
309	2.31	3.25	1.32	0.04	373	1.84	3.32	1.29	0.04	437	1.81	3.79	1.09	0.05	501	1.7	3.11	1.5	0.03
310	1.44	3.2	1.28	0.01	374	1.71	3.49	1.21	0.04	438	1.22	3.17	1.08	0.02	502	2.52	3.7	1.37	0.05
311	2.13	3.45	1.29	0.04	375	1.39	3.7	1.29	0.03	439	2.11	3.33	1.04	0.03	503	2.25	3.75	1.19	0.05
312	1.89	3.58	1.08	0.04	376	2.29	3.89	1.29	0.05	440	1.82	3.29	1.22	0.04	504	2.9	3.21	1.55	0.04
313	2.46	3.29	0.98	0.04	377	2.03	3.45	1.49	0.04	441	2.11	3.19	1.42	0.03	505	2.19	3.41	1.5	0.05
314	2.37	3.77	1.33	0.05	378	2.12	3.2	1.48	0.04	442	1.71	3.3	1.39	0.03	506	1.89	3.4	1.22	0.03
315	1.95	3.21	1.09	0.02	379	2.19	3.29	1.18	0.04	443	1.69	3.69	1.12	0.03	507	2.45	3.2	1.15	0.03
316	1.82	3.3	1.13	0.03	380	2.02	3.69	1.27	0.04	444	1.71	3.1	1.18	0.02	508	2	3.72	1.47	0.04
317	1.89	3.88	1.27	0.05	381	1.52	3.69	1.19	0.04	445	1.96	3.45	1.35	0.05	509	2.39	3.41	1.39	0.04
318	1.68	3.15	1.19	0.03	382	2.02	3.21	1.05	0.03	446	1.86	3.42	1.03	0.03	510	1.5	3.51	1.5	0.04
319	2.25	3.49	1.38	0.04	383	1.62	3.79	1.45	0.03	447	1.29	3.31	1.29	0.02	511	1.71	3.8	1.39	0.04
320	1.69	3.21	1.31	0.01	384	1.75	3.41	1.19	0.03	448	1.78	3.88	1.18	0.03	512	2.3	3.54	1.23	0.05
321	1.91	3.54	1.06	0.03	385	2.11	3.61	1.11	0.05	449	2.13	3.24	0.99	0.05	513	1.6	3.59	1.21	0.03
322	2.28	3.31	1.38	0.04	386	1.61	3.52	1.43	0.03	450	2.21	3.23	1.22	0.04	514	1.79	3.35	1.11	0.04
323	2.28	3.34	1.49	0.04	387	1.95	3.59	1.49	0.04	451	2.24	3.38	1.49	0.04	515	1.99	3.53	1.09	0.04
324	2.08	3.59	0.99	0.05	388	2.6	3.25	1.25	0.03	452	1.61	3.7	1.39	0.04	516	2.01	3.09	1.06	0.04
325	2.49	3.4	1.51	0.04	389	2.31	3.31	1.28	0.03	453	1.89	3.31	1.11	0.03	517	2.4	3.8	1.01	0.05
326	1.39	3.42	1.02	0.03	390	1.6	3.21	1.25	0.03	454	1.98	3.61	1.36	0.03	518	2.31	3.52	1.49	0.05
327	1.96	3.43	1.29	0.03	391	1.23	3.69	1.18	0.03	455	1.67	3.49	1.19	0.03	519	2	3.87	1.21	0.05
328	2.1	3.4	1.11	0.04	392	1.49	3.39	1.01	0.03	456	1.56	3.44	1.27	0.04	520	2.11	3.11	1.39	0.04
329	2.28	3.69	1.08	0.06	393	1.43	3.41	1.12	0.02	457	1.67	3.49	1.31	0.04	521	1.69	3.29	1.09	0.03
330	2.51	3.42	1.23	0.04	394	1.52	3.68	1.09	0.03	458	1.43	3.54	1.37	0.02	522	1.97	3.51	1.28	0.04
331	1.92	3.41	1.25	0.03	395	2.15	3.69	1.24	0.04	459	2.29	3.39	1.21	0.04	523	2.41	3.7	1.39	0.06
332	1.82	3.46	1.43	0.04	396	1.59	3.6	1.32	0.03	460	1.83	3.5	1.38	0.03	524	2.29	3.35	1.29	0.04
333	1.99	3.56	1.35	0.05	397	1.62	3.39	1.22	0.02	461	1.73	3.68	1.07	0.03	525	1.9	3.4	1.31	0.04
334	1.38	3.29	1.09	0.03	398	1.96	3.36	1.09	0.03	462	2.5	2.98	1.39	0.03	526	2.41	3.75	1.42	0.06
335	2.27	3.64	1.69	0.04	399	1.81	3.28	1.22	0.03	463	1.7	3.29	1.01	0.02	527	2.1	3.55	1.19	0.04
336	1.39	3.8	1.32	0.03	400	1.88	3.79	1.19	0.04	464	1.18	3.42	1.32	0.03	528	2.36	3.68	1.19	0.05
337	2.45	3.65	1.22	0.05	401	1.93	3.29	1.49	0.04	465	1.69	3.81	1.29	0.05	529	1.49	3.35	1.26	0.03
338	1.41	3.52	1.41	0.03	402	2.4	3.62	1.19	0.05	466	1.19	3.51	0.85	0.02	530	2.45	3.72	1.32	0.05
339	1.31	3.12	1.11	0.02	403	1.69	3.75	1.2	0.03	467	1.6	3.7	1.31	0.03	531	2.29	3.25	1.19	0.04
340	1.59	3.25	1.49	0.02	404	1.71	3.51	0.83	0.04	468	1.71	3.43	1.45	0.04	532	2.19	3.3	1.19	0.04
341	2.48	3.51	1.19	0.05	405	1.59	3.27	1.29	0.03	469	1.86	3.52	1.32	0.04	533	1.94	3.19	1.21	0.03
342	2.5	3.54	1.04	0.04	406	1.2	3.2	1.05	0.02	470	2.1	3.28	1.25	0.03	534	1.49	3.55	1.2	0.02
343	2.39	3.28	1.29	0.03	407	1.41	3.52	1.28	0.03	471	1.29	3.71	1.09	0.04	535	1.77	3.41	1.11	0.03
344	1.81	3.39	1.08	0.04	408	2.21	3.89	1.19	0.05	472	2	3.6	1.09	0.05	536	2	3.81	1.34	0.05
345	1.69	3.22	1.44	0.02	409	1.39	3.2	1.2	0.02	473	1.13	3.21	1.09	0.03	537	2.21	3.82	1.39	0.05
346	1.51	3.34	1.41	0.03	410	1.78	3.71	1.31	0.04	474	1.49	3.22	1.19	0.02	538	2.3	3.51	1.39	0.05
347	1.39	3.69	1.13	0.03	411	1.87	3.55	1.17	0.03	475	1.69	3.28	1.09	0.02	539	1.99	3.31	1.33	0.04
348	2.41	3.62	1.11	0.06	412	2.4	3.22	1.11	0.04	476	1.81	3.7	1.09	0.03	540	2.69	3.79	1.45	0.05
349	2.51	3.92	1.48	0.06	413	1.54	3.59	1.32	0.03	477	1.28	3.18	1.15	0.02	541	1.19	3.39	1.19	0.02
350	2.09	3.6	1.39	0.04	414	2.1	3.42	1.28	0.04	478	1.48	3.3	1.29	0.02	542	2.6	3.55	1.28	0.05
351	1.69	3.5	1.29	0.03	415	1.91	3.48	1.29	0.03	479	1.15	3.49	1.07	0.03	543	1.51	3.77	1.12	0.03
352	2.4	3.49	1.39	0.04	416	2.38	3.39	1.29	0.04	480	1.48	3.45	1.21	0.03	544	2.14	3.48	1.59	0.04
353	1.79	3.31	1.78	0.04	417	1.69	3.35	1.09	0.03	481	1.92	3.31	1.08	0.03	545	1.91	3.08	1.29	0.04
354	1.79	3.38	1.3	0.03	418	1.28	3.34	1.09	0.03	482	1.82	3.22	1.01	0.04	546	2.23	3.52	1.36	0.04
355	2.25	3.72	1.61	0.05	419	1.59	3.38	1.43	0.03	483	2	3.63	1.42	0.04	547	1.98	3.41	1.19	0.04
356	1.71	3.2	1.5	0.03	420	2.43	3.39	1.07	0.05	484	1.98	3.41	0.99	0.04	548	1.9	3.31	1.21	0.04
357	1.85	3.67	1.44	0.04	421	2.4	3.39	1.18	0.05	485	1.69	3.15	1.32	0.03	549	2.2	3.39	1.04	0.05
358	1.71	3.41	1.21	0.04	422	1.82	3.48	1.3	0.02	486	1.76	3.36	1.09	0.03	550	1.8	3.29	1.49	0.03
359	2.18	3.6	1.11	0.04	423	2.41	3.29	1.5	0.04	487	1.58	3.34	1.21	0.03	551	2.48	3.61	1.19	0.06
360	1.81	3.51	1.44	0.04	424	1.59	3.75	1.39	0.03	488	1.29	3.31	1.11	0.02					

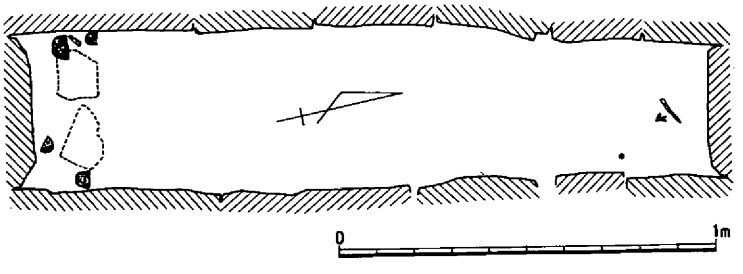


1　にぶい黄橙色粘質土
2　にぶい黄橙色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質土

第184図　23号墳第２主体部実測図（２）（1／50）



第185図　23号墳第３主体部実測図（1／50）



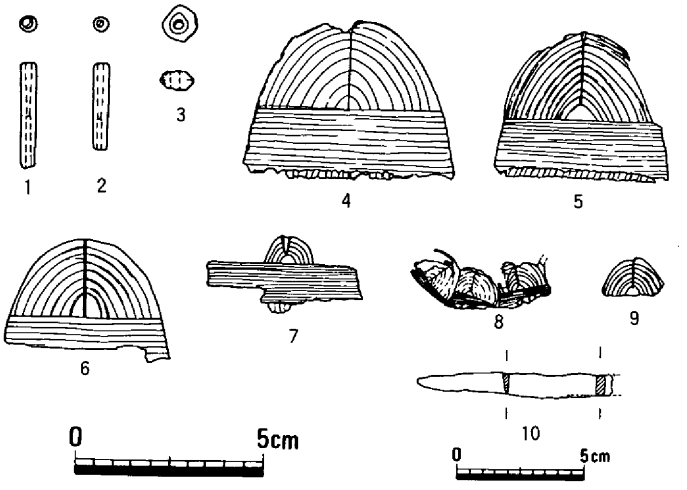
第186図　23号墳第３主体部遺物出土状況（1／20）

埋葬施設（第176・177・183・185・186図）

本古墳の主体部は、墳丘部のほぼ中央に並列する２基と北西側にやや向きを異にする１基の合計３基の箱式石棺である。いずれも結晶片岩を棺材に使用している。

第１主体部　墳丘の長軸方向に平行する２基の箱式石棺のうちの西側のもので完存している。

石棺長軸方向は、N－29度Eを測る。墓壙は、南側の両側壁部が若干長く掘り込まれた長方形の形状を呈し、長辺2.4m、短辺65cmを測る。墓壙内に設けた箱式石棺は、内法で全長2.14m、北端幅33cm、南端幅40cmを測り、幅の広い側の南端に15cm大の扁平な石材を2個配し枕石としている。また、底面の全面には、大は10cmから小は3cm程度の片岩の剝片を敷き詰めている。蓋石は、長辺が70cmほどの偏平な石材を六枚使用し、その間に小振りの石を充て密閉している。



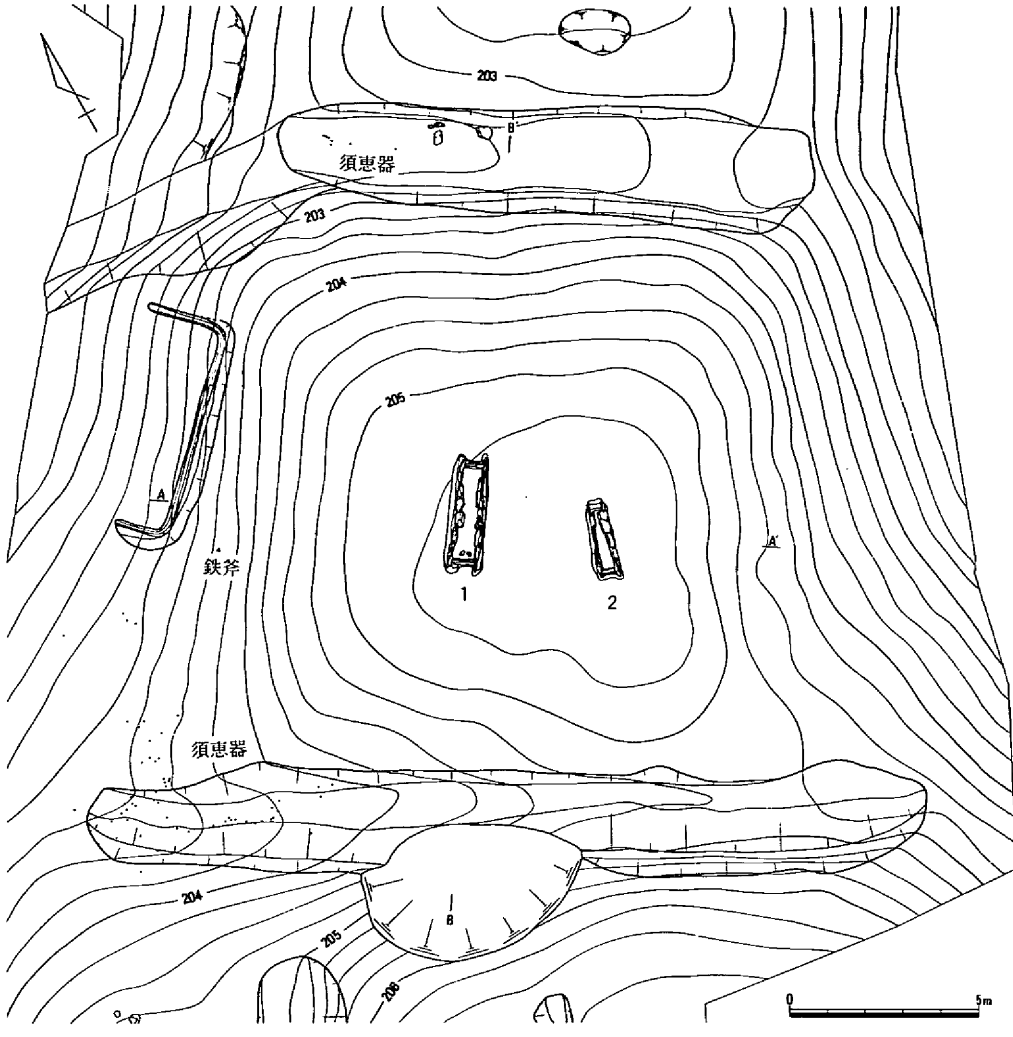
第187図　23号墳第3主体部出土遺物(1／3，1／2)

出土遺物は、臼玉、管玉、竪櫛である。蛇紋石製とみられる臼玉は、555点以上出土し、そのうち図化できたもの551点を掲載している。大半が石室内埋土の選別中からの採集であるが、石室内で検出したものは、西側の枕石から北西隅あたりの床面から出土している。大きさは、平均で長さ2.0mm、重さ0.04gである。管玉は3点が臼玉と同様に西側の枕石から北西隅の床面から出土している。材質は不明瞭である。竪櫛も3点（1点図化）が玉類と同様に北西隅の床面からの出土である。

第2主体部　第1主体部と1.6mの間隔を置き並列する東側の箱式石棺である。石棺長軸方向は、N－31度Eを測る。墓壙は、南側の壁部が若干長く掘り込まれた長方形の形状を呈し、長辺1.85m、短辺最大54cmを測る。墓壙内に設けた箱式石棺は、内法で全長1.74m、北端幅25cm、南端幅35cmを測り、第1主体部と同様に幅の広い側の南端に一辺16cm大の偏平な石材を2個配し枕石としている。また、底面の全面にも大は17cmから小は2cmの片岩の剝片を敷き詰めている。蓋石は、長辺が60～80cmほどの偏平な石材を5枚使用している。このうち北側から2枚目の石材が、土圧により割れ目が入り石室内に若干落ち込んでいた。出土遺物は皆無である。

第3主体部　第2主体部の北側に2mの間隔を置き検出した2段掘りの墓壙を持つ箱式石棺である。石室長軸方向は、N－14度Eを測る。

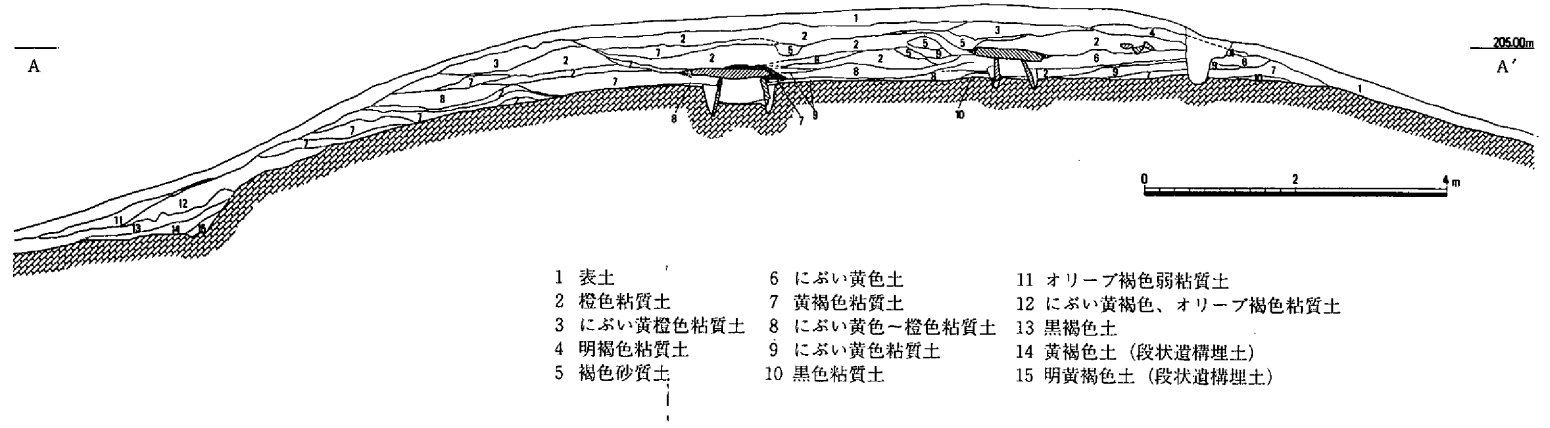
外側の掘り方の墓壙は、北西側が不明瞭であるが残存部の形状から長方形の掘り方が想定され長辺3.3m、短辺1.4m、南端で深さ15cmを測る。下段の掘り方は、長辺2.05m、短辺最大75cmを測る。下段の墓壙内に設けた箱式石棺は、内法で全長1.79m、北端幅35cm、南端幅41cm

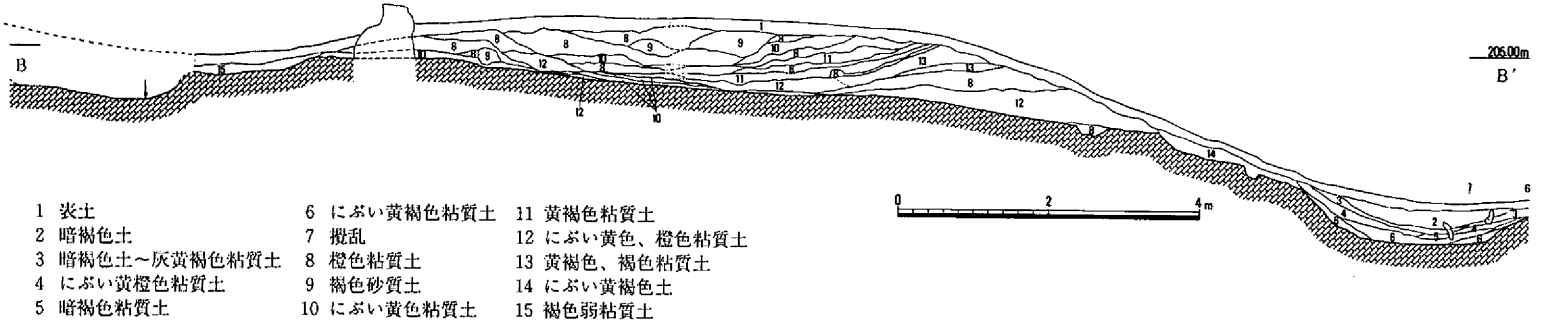


第188図　24号墳墳丘測量図(1／200)

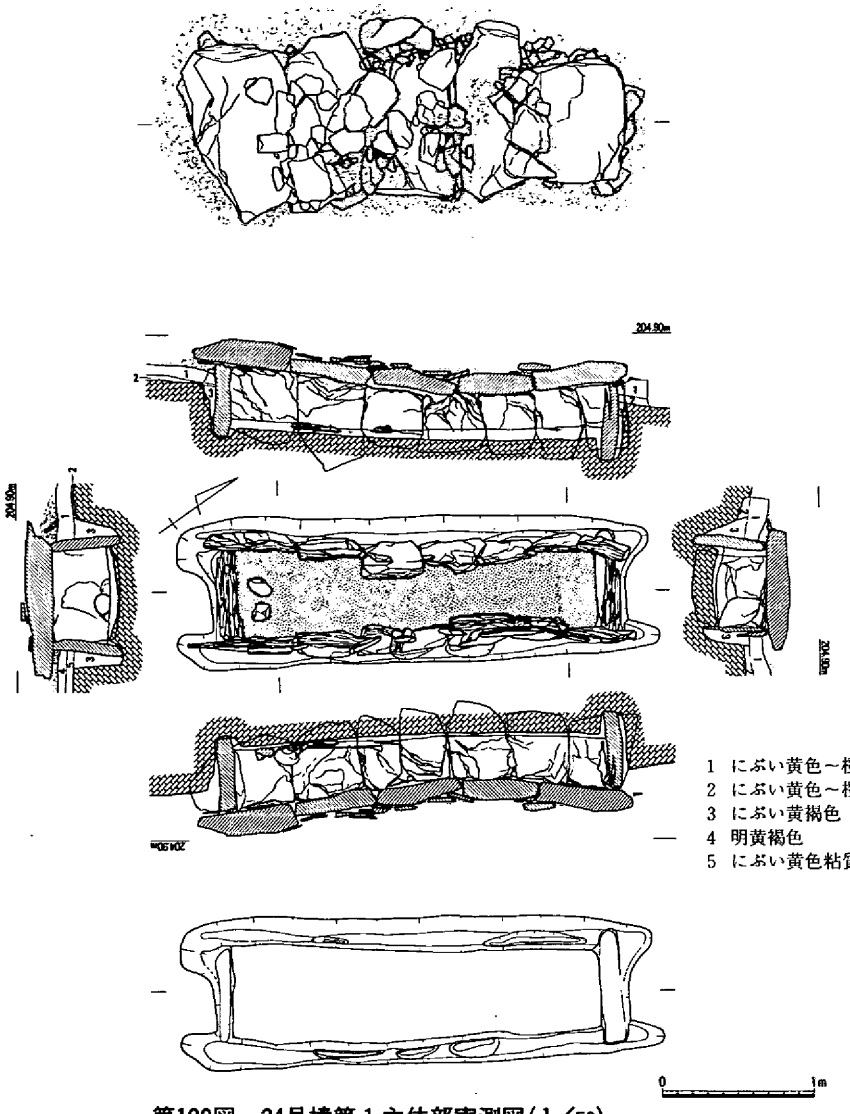
を測り、第１、第２主体部と同様に幅の広い側の南端に偏平な一辺13～15cm大の結晶片岩とは異なる石材を２個配し枕石としている。また、底面の全面にも第１、２主体部と同様に、大は15cmから小は２cmの片岩の剝片を敷き詰めている。蓋石は、一辺60～80cmの偏平な石材を３枚使用し、蓋石の隙間には、小振りの石材を充填している。さらに蓋石の周囲と蓋石の継ぎ目には、黄白色の粘土を使用して目張りを行っている。天井石、側石の内面には赤色顔料の塗布が認められた。

出土遺物は、管玉２、小玉１、刀子１、竪櫛９である。竪櫛は北端の１点**9**と中央付近から１点を除きいずれも枕石周辺からの出土で図化できた５点を掲載している。その外の遺物は枕石の配置からすれば脚部にあたる北端から一カ所にまとまっての出土である。





第189図　24号墳墳丘断面図（1／100）

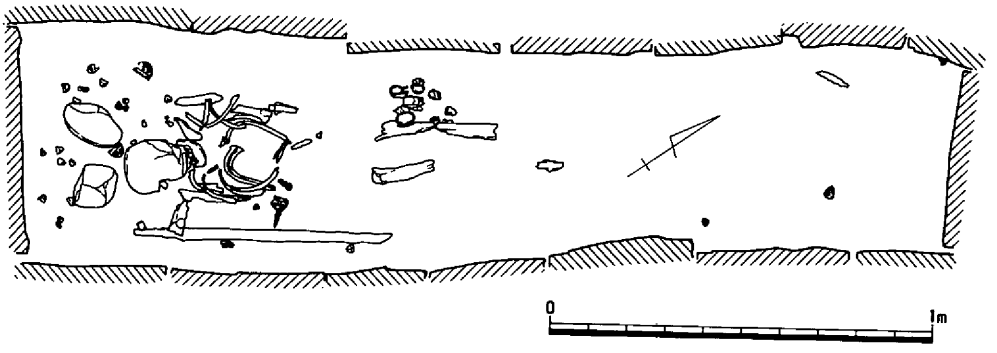


第190図　24号墳第１主体部実測図(１／50)

(21)　24号墳

立地と調査前の状況

23号墳と接し同一の丘陵尾根上に位置する５基の古墳群のうちの１基である。標高205ｍ付近に位置し、眼下の水田面との比高差が20ｍ程である。樹木伐採後の観察では、23号墳と共有する墳丘北側の溝と墳丘南側の尾根を切断する溝がほぼ平行し明瞭に確認でき、この２本の溝に囲まれた墳丘部が方墳であることが明らかであった。墳頂部には、盗掘の痕跡もなく未掘墳の可能性が強かった。



第191図　24号墳第１主体部遺物出土状況（1／20）

墳丘（第188・189図）

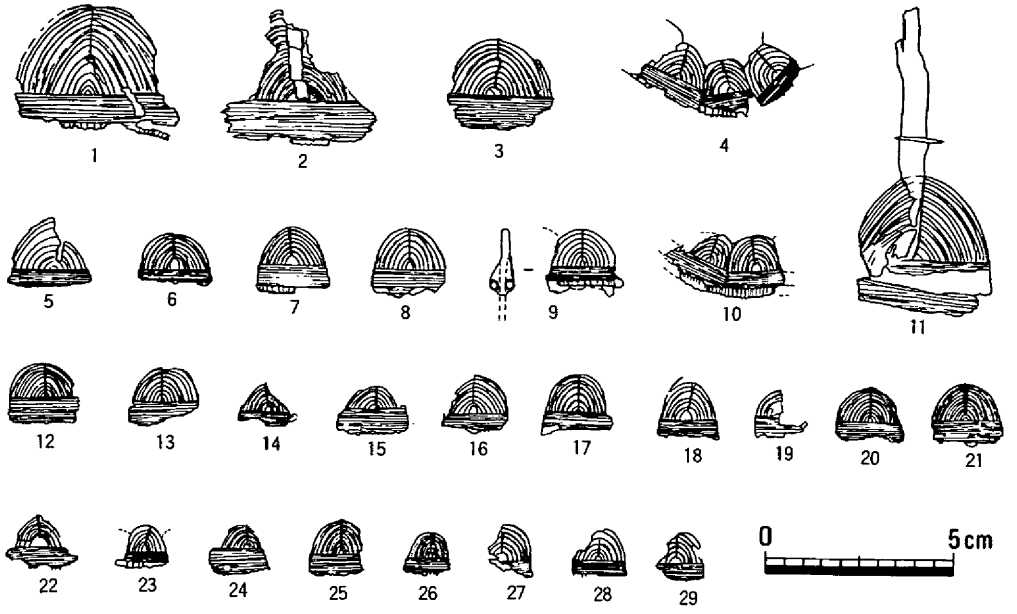
調査の結果、南北16.5ｍ、東西17.5ｍの方墳であることが判明した。古墳は、北方に延びる丘陵の小尾根上の自然地形を利用し、尾根を切断する東西方向の２本の溝により墳形を区画し、掘削土による盛り土を行い墳丘を構築したものと考えられる。墳丘北側の溝は、23号墳と共有し、南側の区画溝は、全長22ｍ、平均幅2.6ｍ、深さ１ｍ程でほぼ一直線である。墳丘中軸の南北断面では、盛り土が北にいくほど厚く最大で80cmを測り、東西断面では、平均70cmの盛り土が認められた。また、土層断面の観察から墳丘の構築は、まず墳端を区画した後に地形の低い北側から西側にかけての周辺部に馬蹄形もしくはすり鉢状に盛り土を行い、墳頂部平坦部に近い高さまで盛り上げた後に当墳の中心主体である第１主体の石棺を配し、中央部を盛り上げ墳丘を整え構築したものと考えられる。ただ、第２主体の埋葬については、土層断面の観察のみでは、同時埋葬か複次の埋葬か判断できなかった。しかし、第２主体の埋葬レベルが高いことや、方位が異なることから見ると同時埋葬の可能性は薄い。なお、墳丘部には、葺石等の外表施設は認められない。

墳丘外表の遺物としては、前述した23号墳との共有溝出土遺物以外に南側の区画溝の西端から南西隅の墳丘斜面にかけて第197図に記載の須恵器**34**、**36**と土師器**35**が出土している。とくに甕**36**については、かなり広範囲に細片となり散布していた。また、墳丘の西側斜面から鉄斧**２**が出土している。

埋葬施設（第190・191・194図）

本古墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に並列する２基の箱式石棺である。いずれも結晶片岩を棺材に使用している。

第１主体部　墳丘の中央やや西側に位置する当墳の中心主体と考えられる箱式石棺である。石棺の長軸方向は、Ｎ－33度Ｅを測る。墓壙は、両側壁の端が小口より若干広く掘り込まれた形状を呈し、小口までの全長2.75ｍ、幅１ｍを測る。墓壙内に設けた箱式石棺は、内法で全長2.46ｍ、北端幅52cm、南端幅64cmを測り、幅の広い南端の床面に拳大の円礫２個を使用し枕石



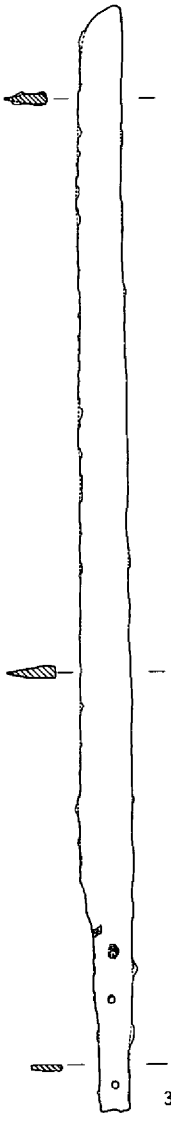
第192図　24号墳第１主体部出土遺物（１）（1／2）

としている。また、底面の全面には、大は15cmから小は２cm程度の片岩の剝片を敷きつめている。蓋石は、一辺80cm～1.2mの偏平な石材を５枚使用し、蓋石の隙間には、小振りの石材を充て、さらに、黄白色の粘土で覆い丁寧に密封している。また、石棺内面には、赤色顔料の塗布が認められた。

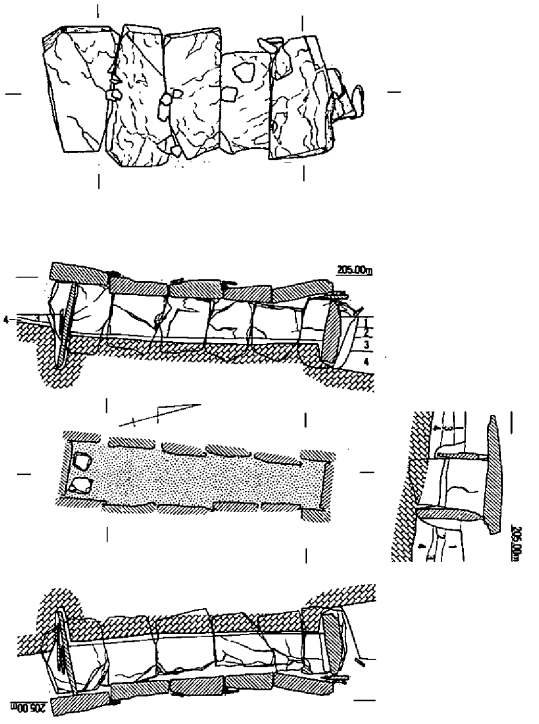
棺内の出土遺物は、人骨一体と鉄刀、刀子、竪櫛である。出土人骨は、南端に配置された枕石に頭部が接するような状態で検出した仰臥伸展位をとる成人の男性人骨である。頭部及び上半部は、かなり良好な遺存状態であったが大腿骨より下半は、残りが悪く欠損している。椎骨は、埋葬時か埋葬後の移動か判然としないが、石室中央の西側壁に近いところにまとまって出土している。

鉄刀は、東側壁と人骨の間に埋葬遺体に沿うように、柄部を頭位に置き切先を北に向け、刃部が側壁側を向く状態で検出した。全長59cm、身幅2.4～2.6cm、重量316ｇを測るやや細身の直刀である。茎は、尻に向かって徐々に幅を狭め、茎尻は、シャープに納めている。茎には、２ヵ所に目釘穴がある。刀子は、石室内の北端からの出土で全長９cmを測る。

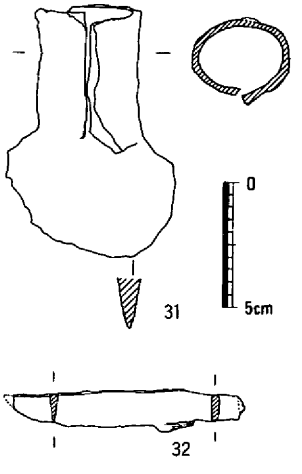
竪櫛は、石室内より総数37点以上出土しそのうち実測可能な30点を掲載した。ただ、小形の櫛については、（４）の如く連結の櫛も認められることから、実数については不明瞭である。出土状態の位置図に記載可能であった総数は、33点である。これらの出土位置は、脚部下半からが３点で残りは、頭部を中心に遺体の上半部に集中している。着装状態の痕跡は認められなかったが、頭骨の下と枕石の間に大型品が３点出土している。頭部近くのものは、髪に着装し



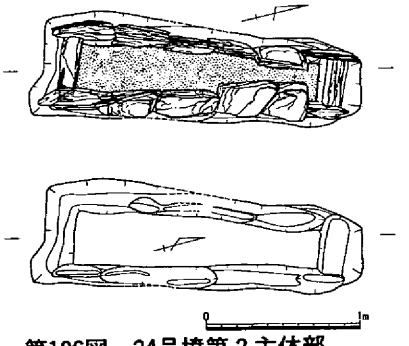
第193図　24号墳第１主体部
出土遺物（２）（1／4）



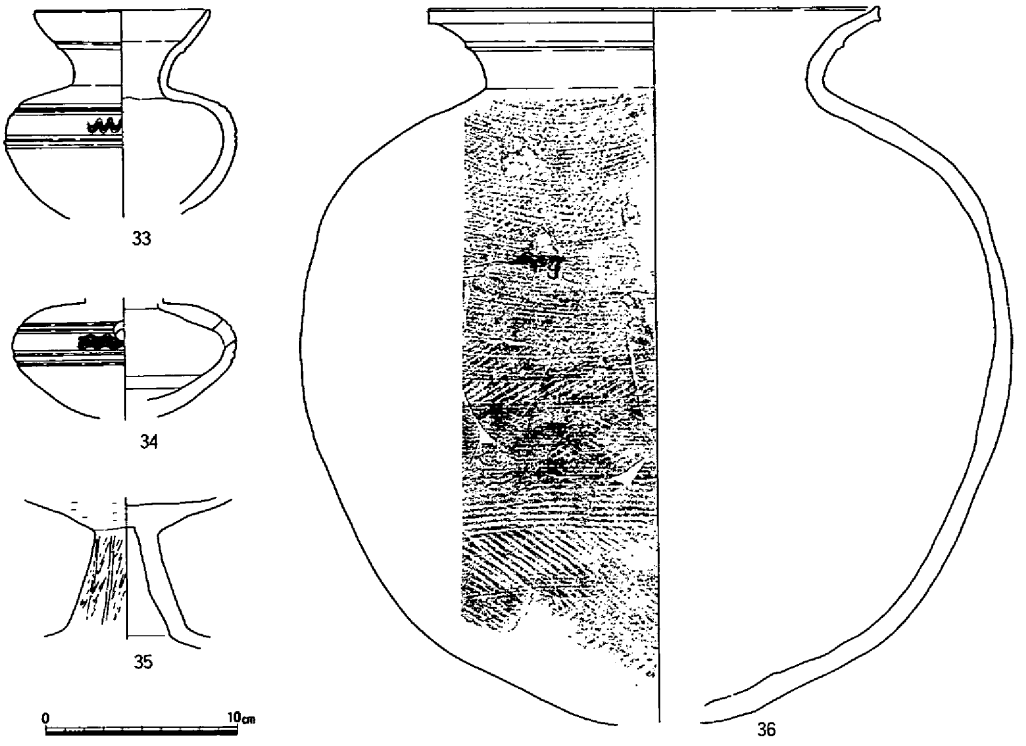
第195図　24号墳第２主体部実測図（１）（1／50）



第194図　24号墳第１主体部
出土遺物（３）（1／3）



第196図　24号墳第２主体部
実測図（２）（1／50）



第197図　24号墳周溝出土遺物(1／4)

た可能性が考えられるが、大半が人体に着装したものでなく体部の上半部にばらまいた状況と判断される。大きさは、頭部（ムネ）幅が4㎝以上と1㎝強から2㎝前後のものに2分できる。大形のものは、11の如くムネの中央に棒状の突起をはさみ取付たものもある。現存長8㎝で途中に糸を縛り付け突起状に細工したものである。**2**も同様のものとみられムネ中央に軸の痕跡が残っている。

小形の櫛は、**8**、**9**の如く数個の櫛を連結したものがある。連結の櫛の構造は、ムネ下端の帯状の巻き縛りまでは、個々に制作し横棒の糸縛りを利用し連結している。さらに連結の方法もカーブした横棒を使用しムネ部分が弧状に連結できるようにして黒漆で固定している。**9**は、横棒を表裏より充てた断面の状況である。

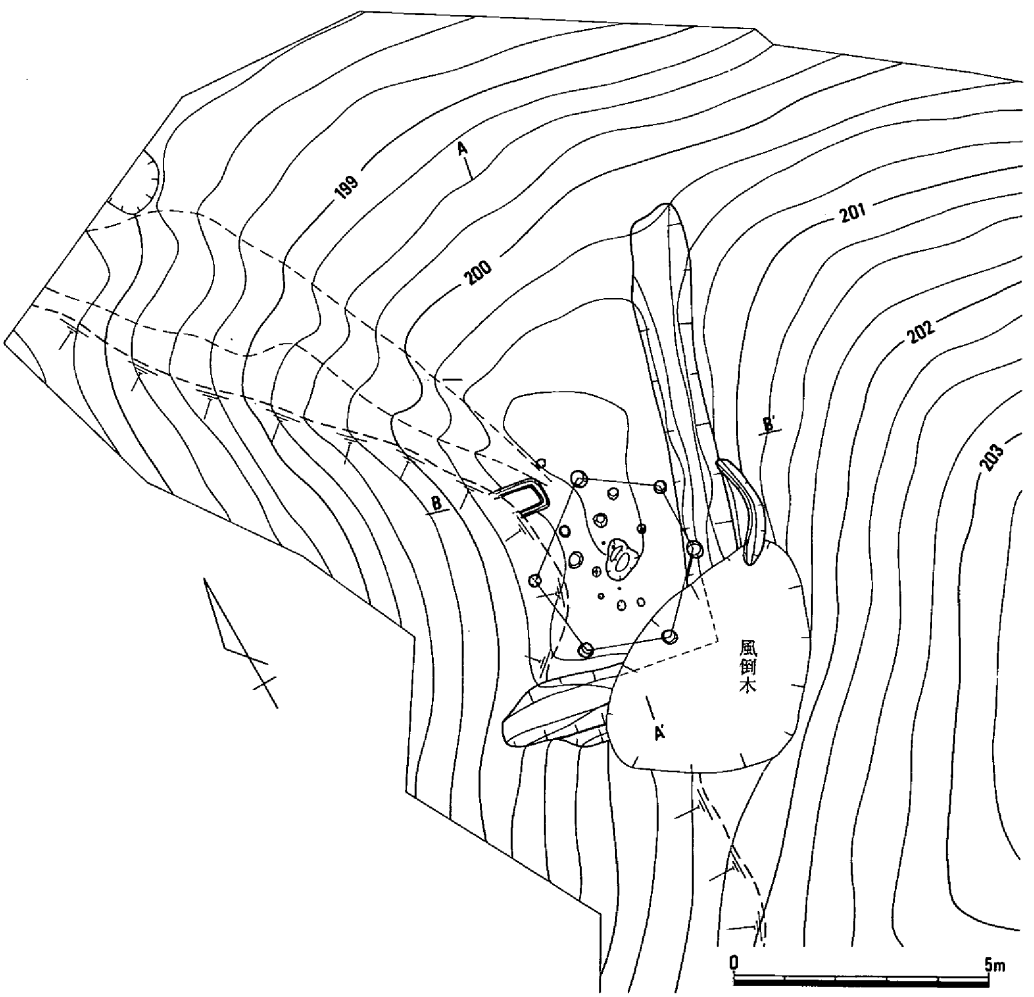
第2主体部　第1主体部の東側に2.5ｍの間隔を置き検出した箱式石棺である。石室長軸方向は、N－19度Eを測る。墓壙は、東側壁の南端が若干長く掘り込まれているが、長方形の形状を呈し、長辺2.1ｍ、南端幅70㎝、北端幅58㎝を測る。墓壙内に設けた箱式石棺は、内法で全長1.67ｍ、北端幅32㎝、南端幅38㎝を測り、第1主体部と同様に幅の広い側の南端に一辺13㎝大の片岩の角礫を2個配し枕石としている。また、底面の全面にも大は、15㎝から小は、2㎝の片岩の剝片を敷き詰めている。蓋石は、長辺が65～90㎝の偏平な石材を5枚使用している。

蓋石の隙間には、小振りの石材を使用し充填している。さらに蓋石の周囲と蓋石の継ぎ目に黄白色の粘土を使用し目張りを行っている。出土遺物は皆無であった。

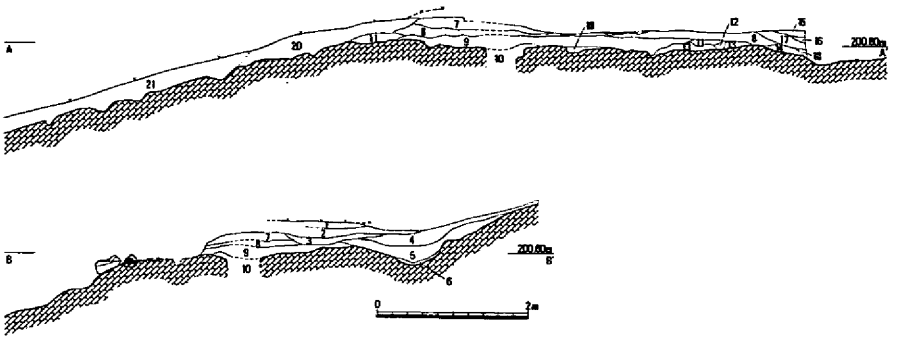
(22)　27号墳

立地と調査前の状況

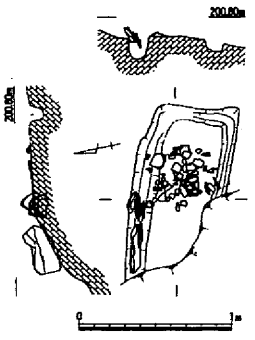
中原古墳群の所在する丘陵のほぼ中央より北東方向に派生した小尾根上に立地する５基の古墳のうちの23号墳の西側墳端にほぼ接するように位置する１基である。調査前には、周知されてなく樹木伐採後の地表観察によりわずかな高まりと石棺材の散布が認められたために古墳と想定したものである。



第198図　27号墳墳丘測量図および墳丘下竪穴住居(1／150)



第199図　27号墳墳丘断面図(1／100)



第200図　27号墳主体部
実測図(1／50)

1　表土（流入土）
2　灰黄褐色土（流入土）
3　にぶい黄褐色粘質土（流入土）
4　にぶい黄褐色粘質土
5　灰黄褐色粘質土
6　明黄褐色粘質土
7　橙色粘質土（盛り土）
8　にぶい黄褐色粘質土（盛り土）
9　黒褐色粘質土（住居埋土）
10　黒褐色粘質土（中央ピット埋土）
11　にぶい黄褐色粘質土
12　にぶい黄褐色粘質土
13　黄褐色粘質土
14　にぶい黄褐色粘質土
15　にぶい黄褐色粘質土（周溝埋土）
16　灰黄褐色粘質土（周溝埋土）
17　にぶい黄褐色粘質土（周溝埋土）
18　黒褐色粘質土（周溝埋土）
19　黄褐色粘質土
20　にぶい黄褐色粘質土
21　にぶい黄褐色粘質土

墳丘（第198・199図）

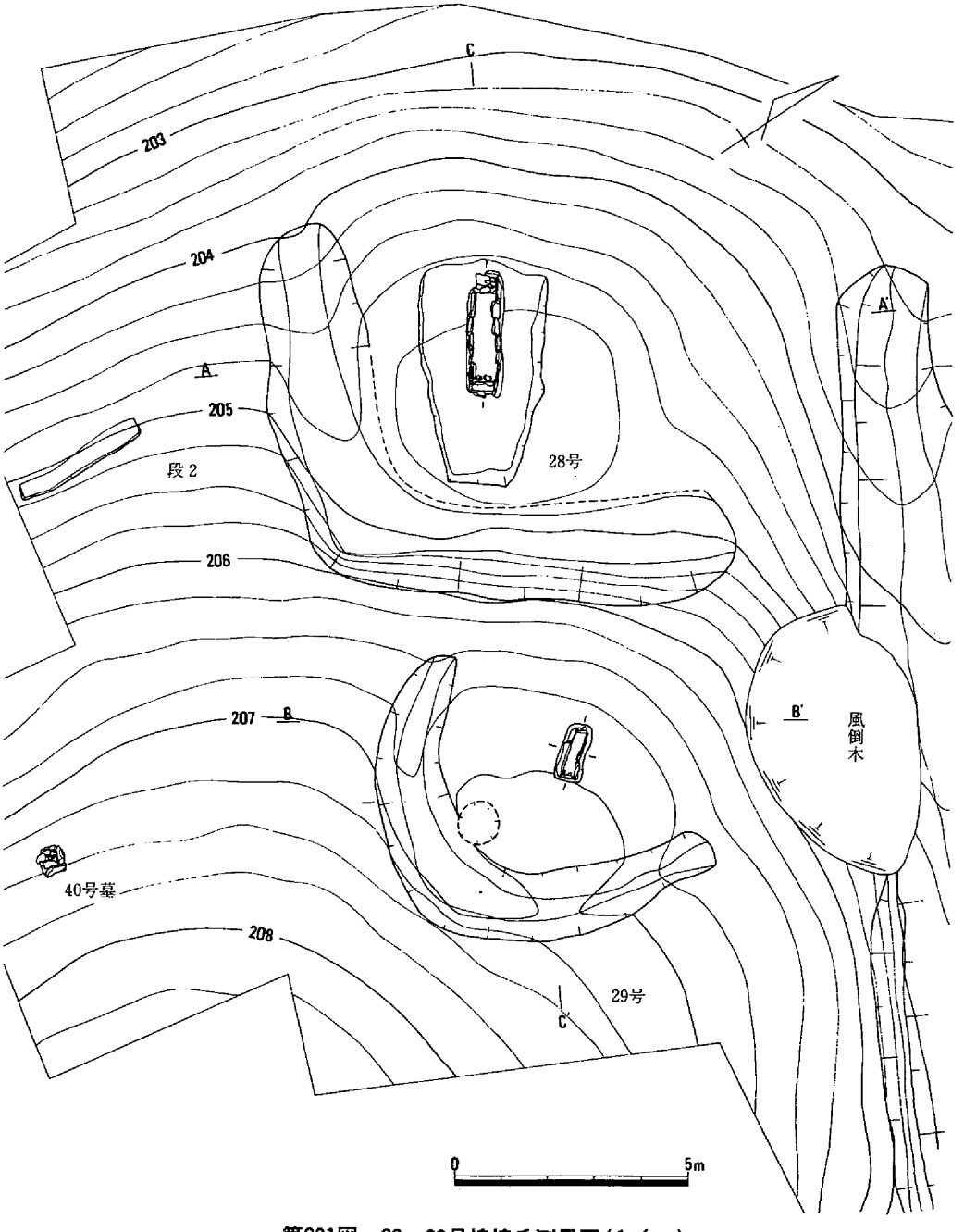
調査の結果、後世の削平により墳丘の大半は失われているが東側から南側にかけてＬ字形に区画する溝の検出から南北一辺８ｍ、東西方向も推定７ｍ程を測る方墳であることが判明した。

なお、墳丘下には、弥生時代の竪穴住居を検出した状況からこの付近が竪穴住居の造成により尾根稜線が若干平坦部をなしていたために古墳の立地には好条件の場所であったものと見られる。

検出した南北方向の区画溝は、検出長7.3ｍ、幅１ｍ、深さ50cmを測る。東西に区画する溝は、検出長2.7ｍ、最大幅1.5ｍ、深さ50cmである。ただ、東側と南側を区画する溝のコーナー付近は、後世の風倒木痕により攪乱を受け不明瞭である。墳丘盛り土は、墳丘中軸の断面観察から最高20cmほど認められた。主体部の残存状況や周溝内の埋土等から盛り土のかなりの流失が考えられる。墳丘外表部の施設は、認められなかった。

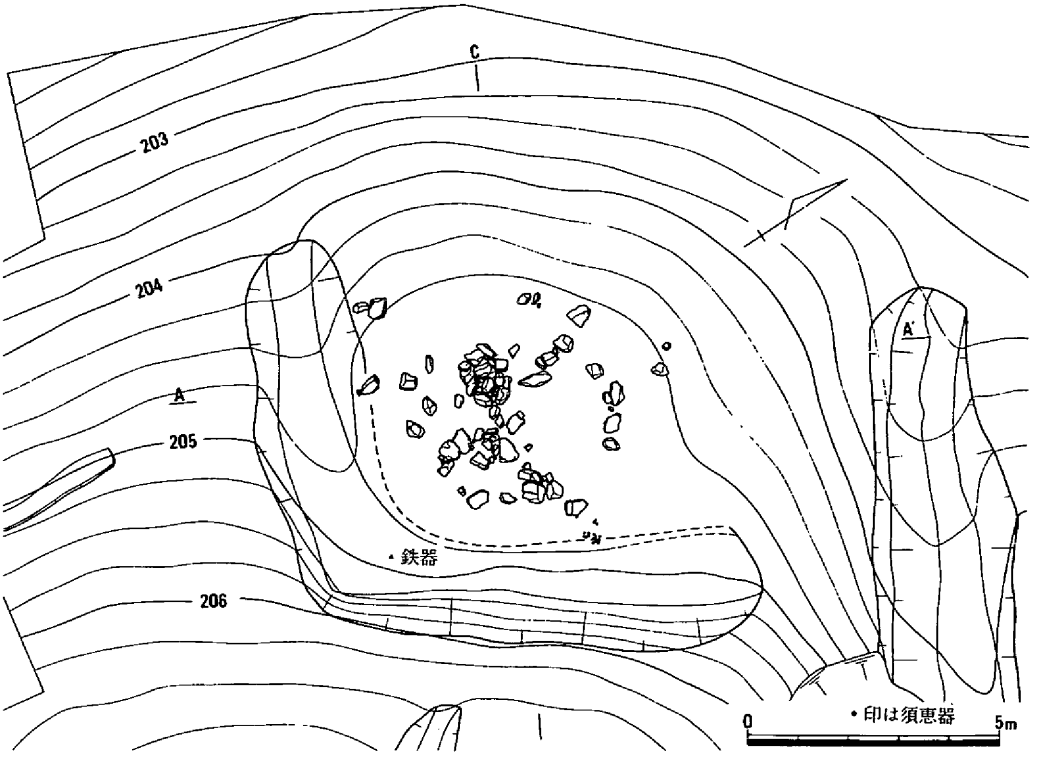
埋葬施設（第200図）

主体部は、墳丘部のほぼ中央に位置する箱式石棺である。残存状況は、非常に悪く北側の側壁の一部と石敷きの床面がわずかに残存していたのみである。墓壙の掘り方は、現存長1.2ｍ、



第201図　28・29号墳墳丘測量図(1／150)

幅60cmを測り半分程度の残存である。側壁の一部と掘り方から石室内法幅が45cm程と想定される。石棺長軸方向は、墓壙の掘り方から想定してN－100度Eを測るほぼ東西方向である。床面には、2cm～10cmの大きさの片岩の剝片を敷き詰めている。出土遺物は、皆無である。



第202図　28号墳墳丘測量図および上面石材出土状況(1／150)

(22) 28号墳

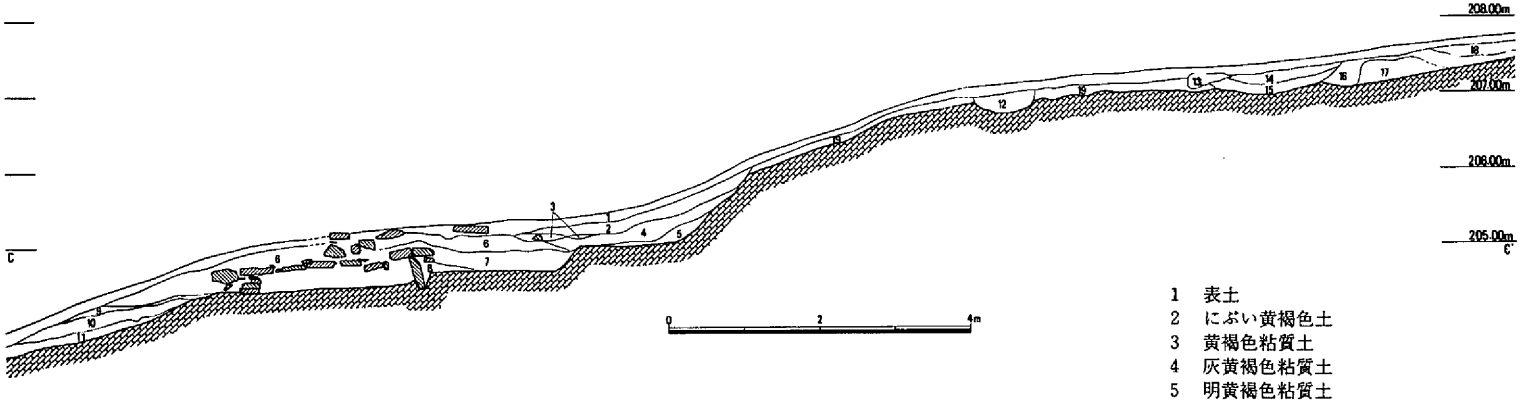
立地と調査前の状況

中原古墳群の所在する丘陵のほぼ中央より北東方向に派生した小尾根上に立地する５基の古墳のうち24、29号墳に接して南西端に位置する古墳である。当墳は、27、29号墳と共に調査前には周知されてなく樹木伐採後の地表観察により墳丘のわずかな高まりと石材が認められたために古墳と認定したものである。

墳丘（第202・203図）

調査の結果、東側から南側にかけてＬ字形に区画する溝の検出から南北８ｍ、東西8.5ｍを測る方墳であることが判明した。検出した区画溝は、丘陵の尾根筋より西側斜面に若干下った東側と南側に掘削されており、全長14.5ｍ、幅２ｍ前後、深さ最大１ｍを測る。墳丘盛り土は、墳丘中軸の土層断面の観察から北から西側の斜面にかけて、黒ボコの旧表土上に厚さ最大40㎝が認められた。

墳丘外表部には、墳頂平坦部一帯に平均30～40㎝大の角礫が認められた。配置の状況は、判



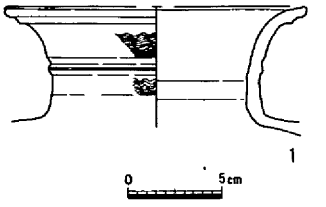
1　表土
2　にぶい黄褐色土
3　黄褐色粘質土
4　灰黄褐色粘質土
5　明黄褐色粘質土
6　黒褐色粘質土
7　黄褐色～暗灰黄色粘質土
8　黄褐色粘質土
9　橙色粘質土
10　黒褐色粘質土
11　黒褐色粘質土
12　灰黄褐色土（攪乱）
13　木の根痕
14　にぶい黄褐色粘質土（周溝埋土）
15　灰黄褐色粘質土（周溝埋土）
16　にぶい黄色土（風倒木痕）
17　黄橙色粘質土（風倒木痕）
18　黄褐色土（風倒木痕）
19　灰黄褐色土

1　表土
2　黄褐色土（風倒木痕）
3　黒褐色粘質土（風倒木痕）
4　黄褐色粘質土（風倒木痕）
5　黒褐色粘質土
6　にぶい黄褐色粘質土

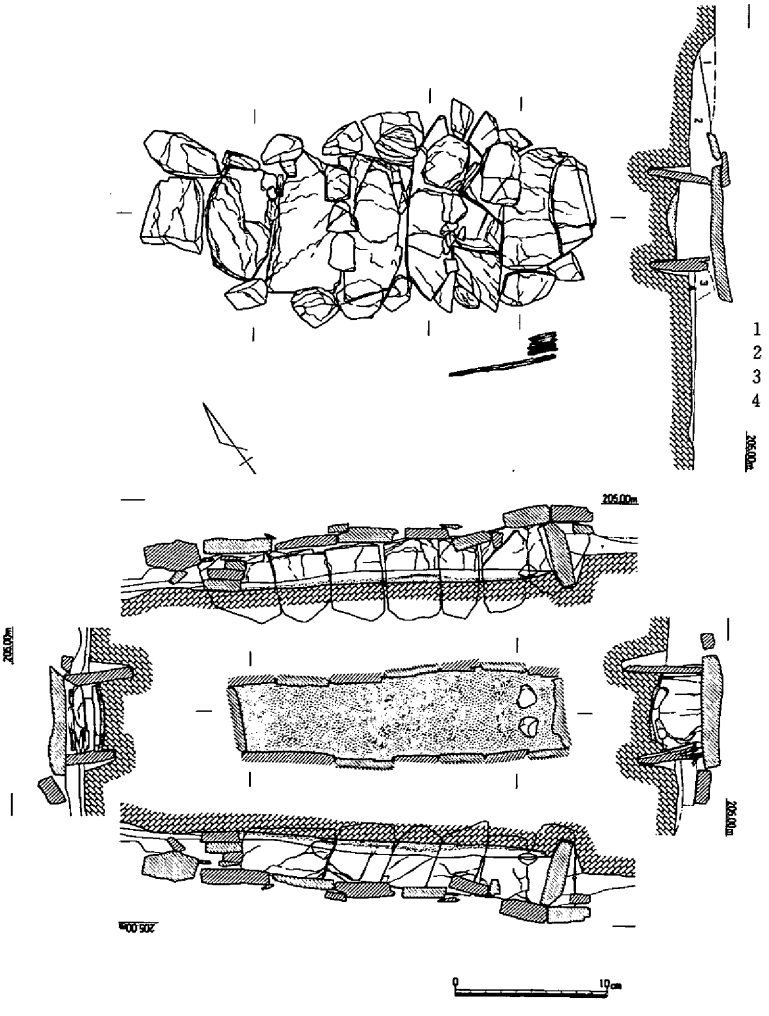
第203図　28・29号墳墳丘断面図（1／100）　第204図　29号墳墳丘断面図（1／80）

28号墳墳丘A-A′土層名

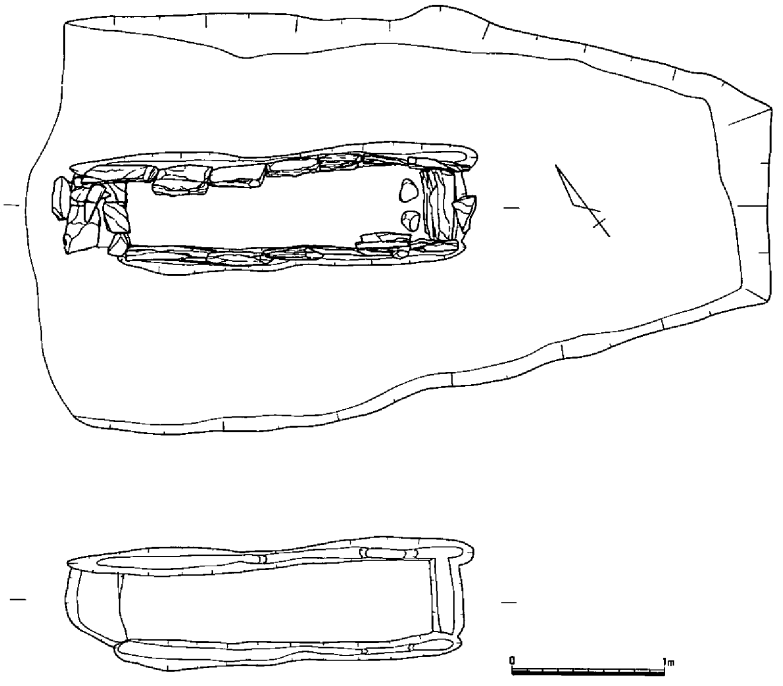
1	表土	5、	にぶい黄色粘質土
2	にぶい黄褐色粘質土	6、	にぶい黄褐色粘質土
3	にぶい黄褐色粘質土	7、	オリーブ褐色粘質土
4	橙色粘質土	8、	橙色粘質土



第205図　28号墳周溝出土遺物
（1／4）



第206図　28号墳主体部実測図（1）（1／50）



第207図　28号墳主体部実測図（２）（1／50）

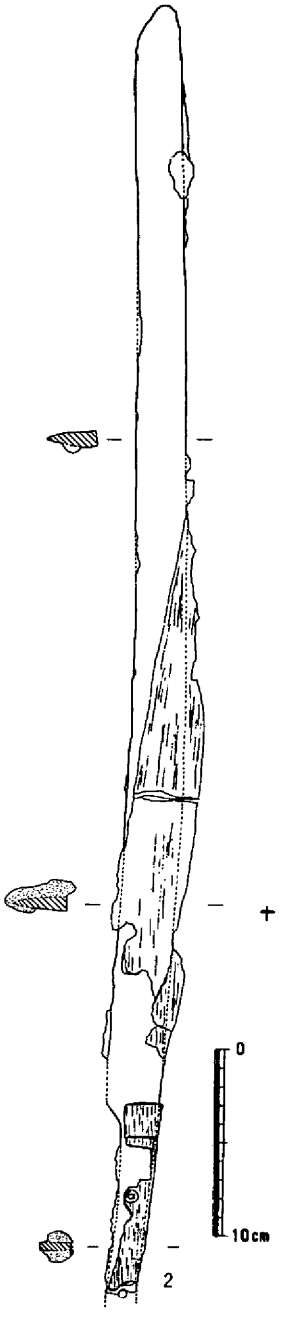
然としないが北側及び東側の一部では、数個の石材が墳丘上面に一列に並んで認められたことから、あるいは墳頂部を区画していた可能性もある。また、墳頂平坦部の中央には、長さ1.2ｍ、幅１ｍの範囲に石材が石組状に集中していた。明瞭な石組ではないが、一部では主体部である石棺の蓋石までおよぶ数段の積み重ねが認められた。なお、これらの石材が、古墳築造時の葺石もしくは配石状のものか、あるいは墳丘を利用した後世の遺構か不明瞭である。

出土遺物は、Ｌ字状区画溝のコーナー付近の溝下層より鉄斧17と北東のコーナーから北側の墳端にかけて古式の須恵器の甕の細片が出土している。

埋葬施設（第206・207図）

方墳の東西方向の一辺にほぼ平行する向きで墳丘の中央に検出した２段の掘り方の墓壙を持つ箱式石棺である。外側の墓壙は、北西側の斜面下方では床面のみで掘り込みの肩は判明できなかったが、検出平面形は台形状をなし現存長5.05ｍ、西端幅2.75ｍ、東端幅1.35ｍ、深さ30cmを測る。中央の墓壙の掘り込みは、第１段の墓壙のほぼ中央に掘り込まれており、長辺2.8ｍ、短辺85cmを測る。

中央の墓壙内に設けた箱式石棺は、墳丘の東西方向の一辺にほぼ平行し、石棺長軸がＮ－55



第208図　28号墳墓壙出土遺物（1）（1／4）

度Wを測る。石棺の内法は、全長2.05m、北端幅44cm、南端幅49cmを測り、尾根側にあたる南西端に13cm大の角礫を2個配し枕石としている。棺内の床面には、両側壁と南側小口に接する幅10cm前後を除き2～10cm大の片岩の剝片を敷き詰めている。この石敷きされた下部の床面は、長軸方向に中央が深さ5cm程浅く皿状にくぼんでいる。石敷は、この浅くくぼんだ形状に沿うように敷かれているため、枕石も中央に向かって落ち込んだ状態であった。また、石棺床面の両端の高低差は、枕石付近が最も高く北西端で10cm程下降している。

両小口の石材の積み方は、枕石の位置する南東端の小口が幅48cm、高さ45cmの厚さ12cmの偏平の石材を立てて両側壁と同様の広口積みにしているのに対し北西端の小口は、厚さ6cm程の石材3枚を小口積みにしている。

蓋石は、長辺が75cm～1.3mほどの偏平な石材6枚を使用し、さらに周囲をやや大きめの石で囲い、蓋石の隙間に小振りの石を充填している。

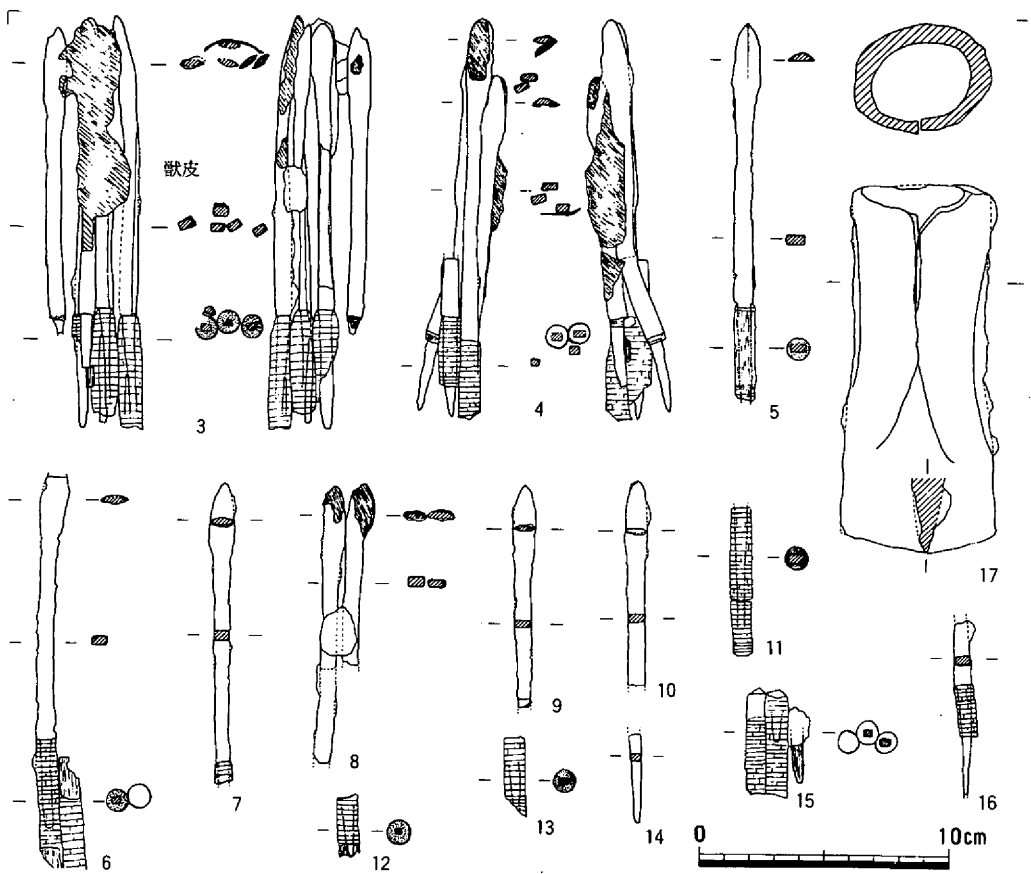
出土遺物は、棺内は認められなかったが、棺外の墓壙内から鉄鏃15点と内反りの太刀一振りが石棺の南側に埋葬時の状態でまとまって出土した。鉄鏃は、尖根系の長頸式で矢柄に桜皮が残存している。出土の状態や鉄鏃の表面に獣皮の付着が認められることから靫に納められていたと考えられる。なお、5点の鉄鏃が付着している3のX線撮影の結果、桜皮で覆われた茎部の先端部が補強している状態が見られた。

太刀は、現存長69cm、身幅2.5cm、重量417gを測るやや内ぞりの太刀である。茎部の2ヵ所の目釘穴のうち1ヵ所目釘が残存している。把には、直径1.6cmを測る木製の把が一部残存している。身にも木質が残存している状況から鞘に装着していたと考えられる。

(23)　29号墳

立地と調査前の状況

中原古墳群の所在する丘陵のほぼ中央より北東方向に派生



第209図　28号墳墓壙・周溝出土遺物（2）（1／3）

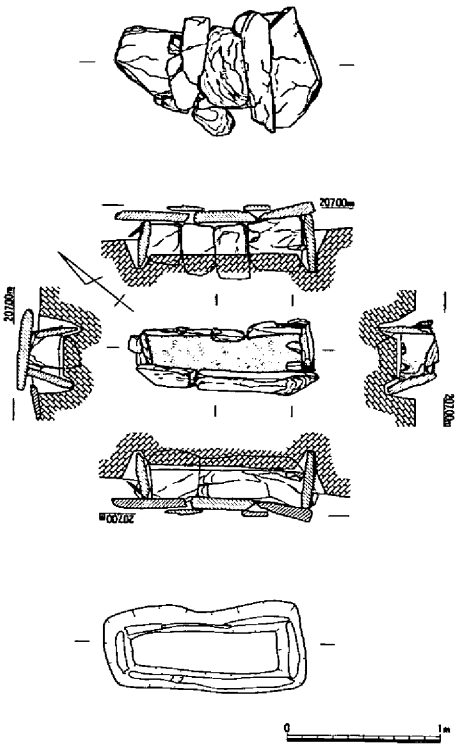
した小尾根上に立地する5基の古墳のうち24、28号墳に接して南端に位置する古墳である。当墳は、27、28号墳と共に調査前には周知されてなく樹木伐採後の地表観察により墳丘のわずかな高まりが認められたために古墳に認定したものである。

墳丘（第201・204図）

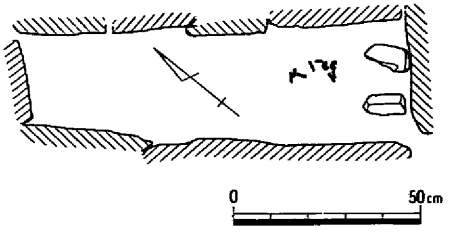
調査の結果、南側から東側にかけて半円形に巡る溝の検出により直径6ｍの円墳であることが判明した。検出した区画溝は、尾根の斜面の東側から南側に掘削されており、全長11ｍ、幅1～1.5ｍ、深さ30～50cmである。墳丘盛り土は、墳丘中軸の土層断面の観察から10cm程と浅く、主体部である石棺の蓋石が表土直下で露出するほどで、盛り土のかなりの流失が考えられる。

埋葬施設（第210・211図）

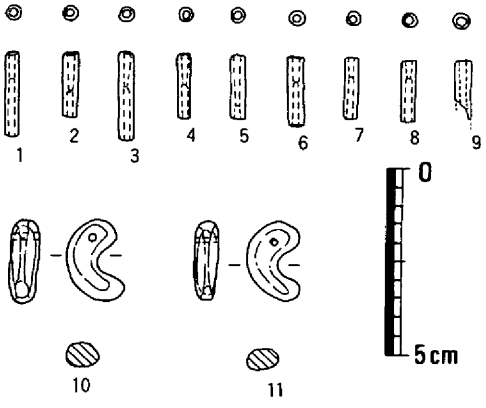
墳丘部のほぼ中央に検出した小形の箱式石棺である。墓壙の掘り方は、長方形を呈し全長1.3ｍ、北端幅45cm、南端幅60cmを測る。石棺の長軸は、丘陵の傾斜に直交するＮ－40度Ｗの



第210図　29号墳主体部実測図(1／50)



第211図　29号墳主体部遺物出土状況(1／20)



第212図　29号墳主体部出土遺物(1／2)

方向である。石棺の内法は、全長1.02ｍ、北端幅24cm、南端幅32cmを測る。棺内の底面は、2～15cm大の片岩の剝片を敷き詰めた礫床で、尾根側にあたる南東端の礫床面に10cm大の角礫を2個配し枕石としている。

蓋石は、長辺が50～60cm程度の偏平な石材を3枚使用し、さらにその間を幅、20～25cm、長さ65～80cmの細長い石材2枚を使用し塞いでいる。

出土遺物は、棺内の床面の南側から管玉9点、勾玉2点が出土している。枕石の配置場所から埋葬者の頸部から胸部の上半部にあたる位置が想定され装着されていた可能性が強い。材質は、いずれも蛇紋岩である。

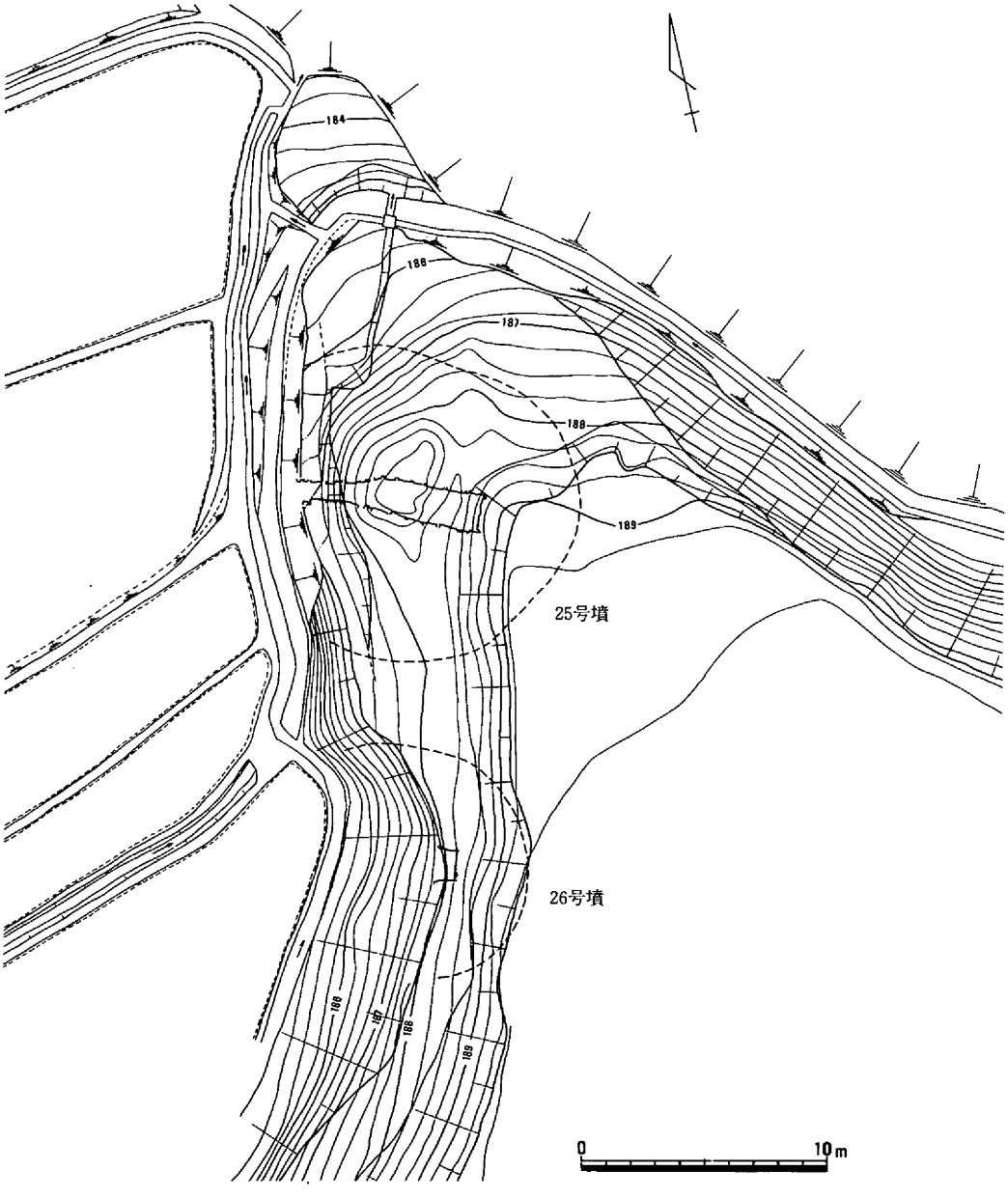
玉類計測表

No	種類	計測最大値		重量	材質、色調	No	種類	計測最大値		重量	材質、色調
		長(mm)	直径(mm)	(g)				長(mm)	直径(mm)	(g)	
1	管玉	22.7	3.6	0.42	蛇紋石、暗青灰色	7	管玉	16.3	3.9	0.37	蛇紋石、暗青灰色
2	管玉	17.6	3.6	0.4	〃	8	管玉	16.7	3.7	0.34	〃
3	管玉	24	3.7	0.55	〃	9	管玉	16.9	3.9	0.29	〃
4	管玉	17.7	3.6	0.36	〃	10	勾玉	21.6	14.3	2.72	〃
5	管玉	17	3.8	0.38	〃	11	勾玉	21.3	14.3	2.45	〃
6	管玉	18.6	3.9	0.46	〃						

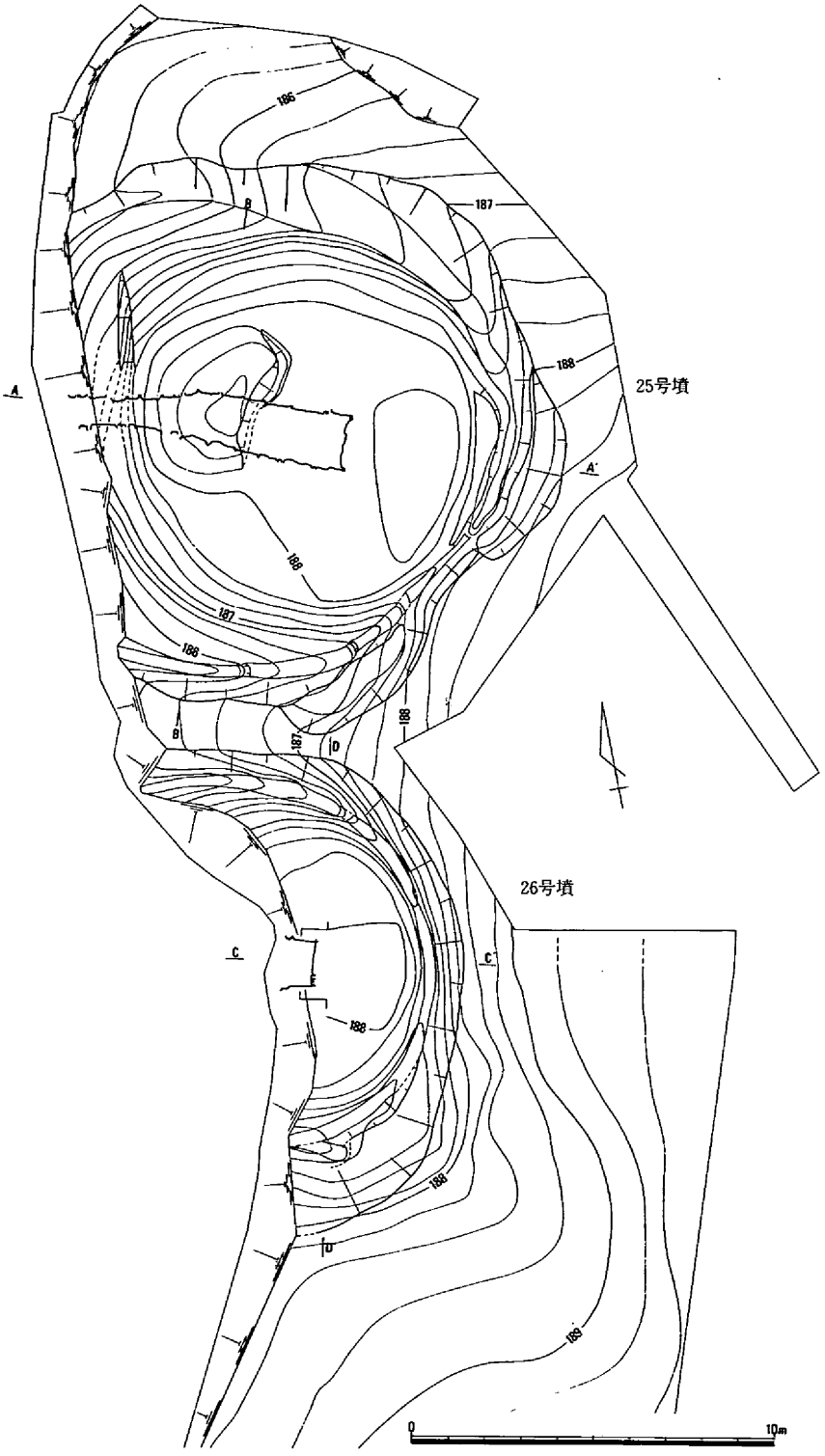
(25)　25号墳

立地と調査前の状況

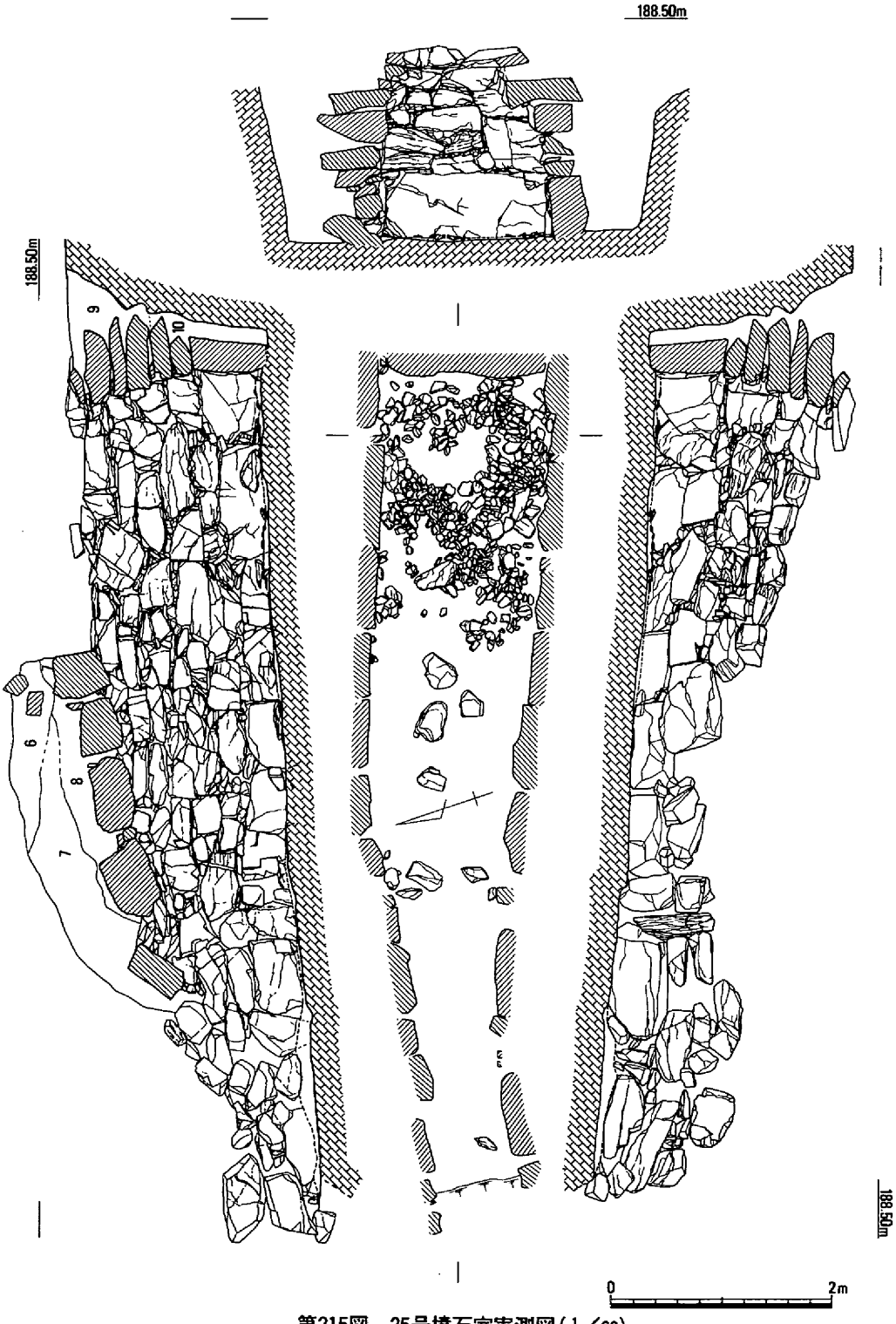
1～7号墳の所在する標高230～235mの丘陵尾根の最高所より北西方向に派生した小尾根先端の標高180m付近に位置する。横穴式石室を内蔵する円墳で、26号墳（横穴式石室）とは1.5



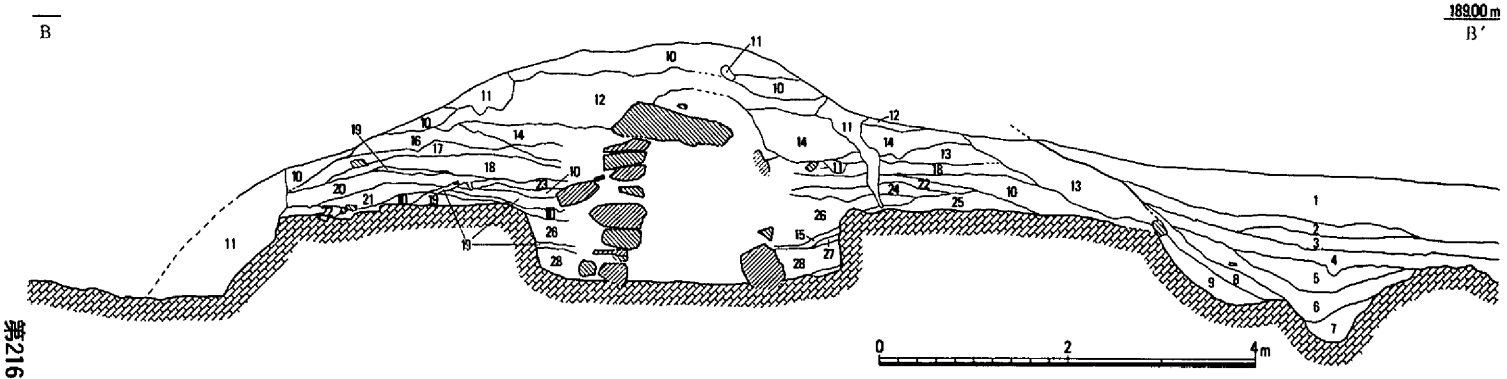
第213図　25・26号墳調査前測量図(1／300)



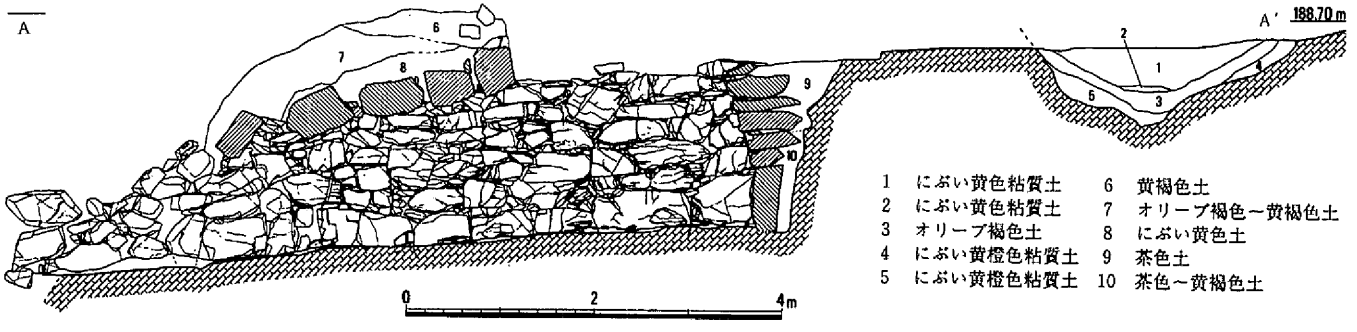
第214図　25・26号墳墳丘測量図(1／200)



第215図　25号墳石室実測図(1／60)



1 黄褐色微砂質土（流入土）
2 明黄褐色微砂質土（流入土）
3 オリーブ褐色微砂質土（流入土）
4 暗灰褐色～黒褐色微砂質土（流入土）
5 オリーブ褐色微砂質土（流入土）
6 暗灰黄色～黒褐色微砂質土（流入土）
7 暗灰黄色粘質土（流入土）
8 オリーブ褐色土（流入土）
9 暗灰黄色土（盛り土）
10 黄褐色土
11 攪乱土
12 オリーブ褐色～黄褐色土
13 黄褐色土～オリーブ褐色土
14 オリーブ褐色～明黄褐色土
15 にぶい黄色土
16 にぶい黄色～明黄褐色土
17 オリーブ褐色～黒褐色土
18 オリーブ褐色砂質土
19 オリーブ褐色粘質土
20 明黄褐色土
21 暗灰黄色粘質土
22 浅黄色～明黄褐色土
23 暗灰黄褐色粘質土
24 黒褐色～黄褐色土
25 黒褐色～暗灰黄色土
26 黄褐色土、黒ボク土（互層）
27 黒褐色土
28 黄褐色土（黒ボク混）



1 にぶい黄色粘質土
2 にぶい黄色粘質土
3 オリーブ褐色土
4 にぶい黄橙色粘質土
5 にぶい黄橙色粘質土
6 黄褐色土
7 オリーブ褐色～黄褐色土
8 にぶい黄色土
9 茶色土
10 茶色～黄褐色土

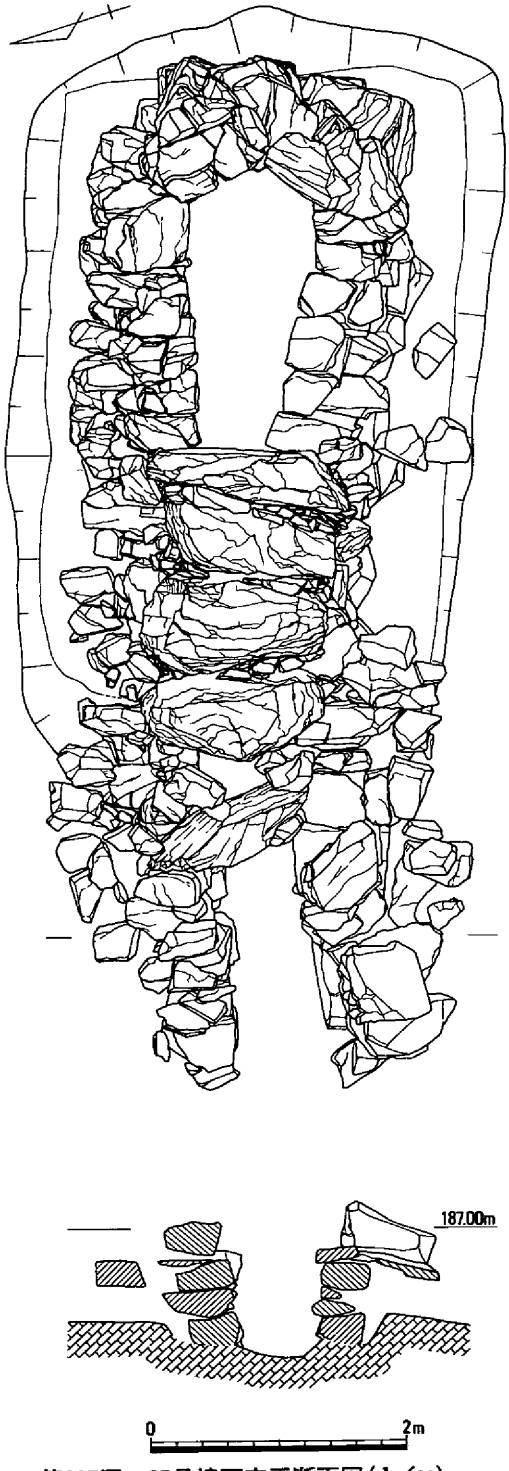
第216図 25号墳墳丘断面図（1／80）

mの間隔を置き同一の斜面に並列する。水田面との比高差が5m程とかなり低い位置に築造されているものの前方の眺望はかなりよく中原古墳群北側の狭小な谷地形は一望できる。

当古墳の調査前の状況は、古墳の東側にあたる尾根先端付近が宅地造成によりかなり削平整地され、墳丘にも造成土が押し出され墳頂付近にまで及んでいたために、墳丘東側の形状については不明瞭であった。内部構造については、水田に面する墳丘西側の急斜面の一角に大形の石材が露出していたことから横穴式石室の可能性が強いと思われた。

墳丘（第214図）

調査の結果、石室前面にあたる西側の墳端は、水田の造成と山道による削平を受けているものの、それ以外の場所では周溝が残存し墳端はおおむね確認できた。規模は、南北12.5m、東西推定13.5m程の円墳である。ただ、墳丘盛り土は、宅地造成時の整地で東側半分が削平を受け、天井石とともに完全に消失していた。天井石の残る石室前半の石室長軸方向に直交する南北方向の断面観察では、天井石上面に最高60cmの盛り土が確認できた。墳丘は、南西側墳端の最下部の周溝底より計測して高さ3mを測る。なお、墳丘部には、外護列石等の外表施設は認められな



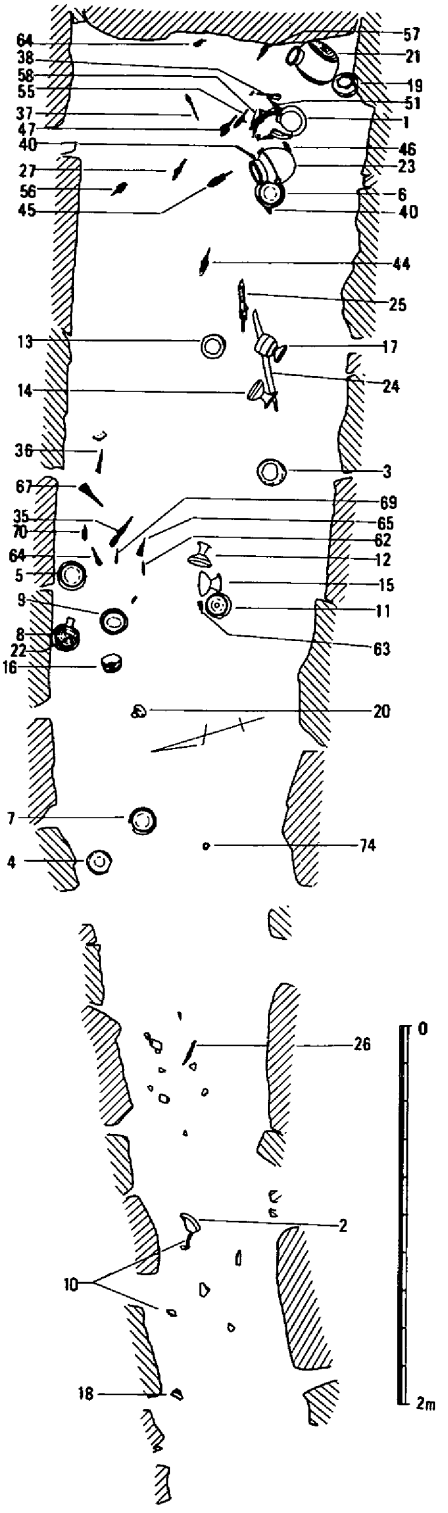
第217図　25号墳石室平断面図（1／60）

かった。

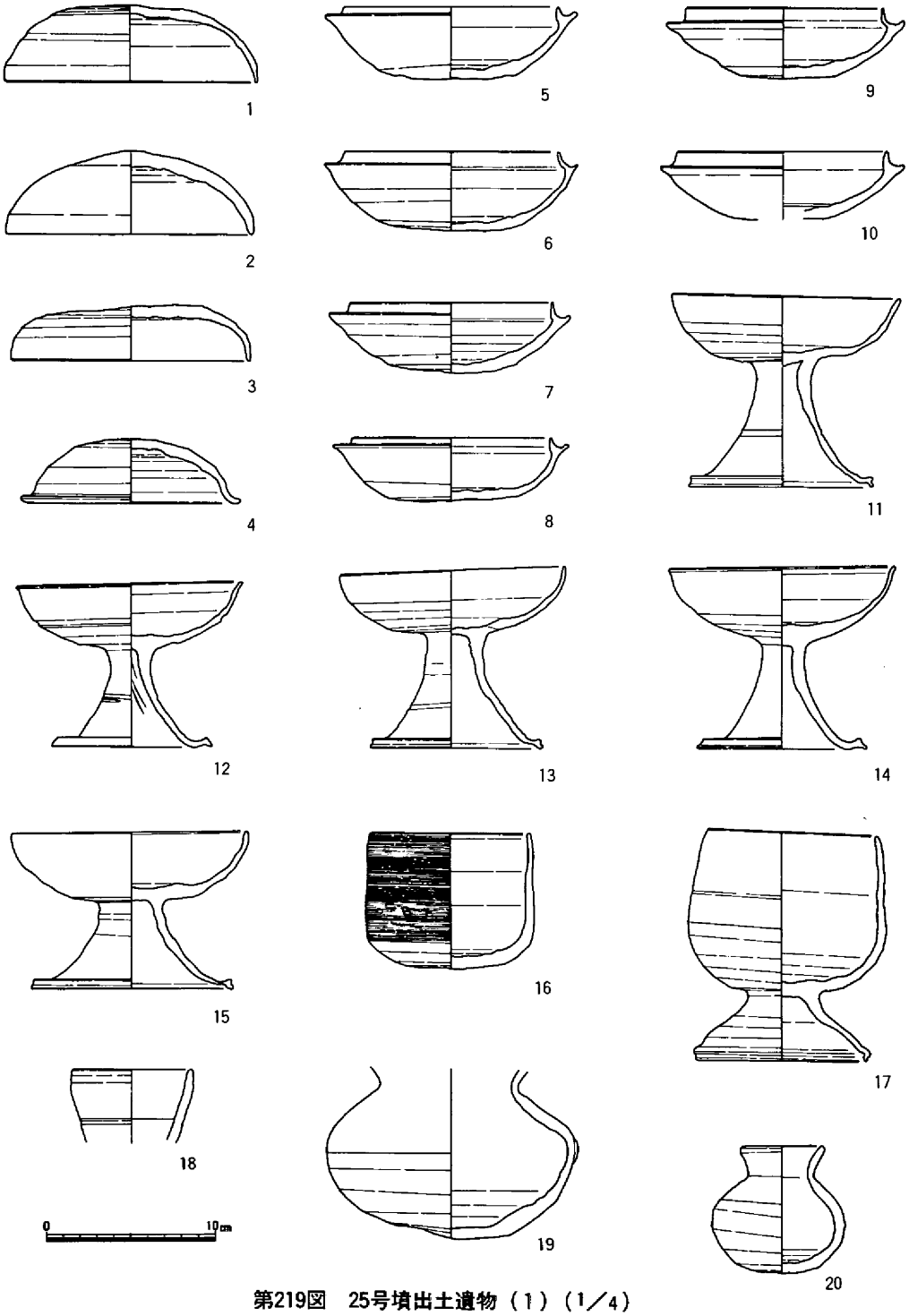
周溝は、石室の入り口にあたる西側斜面を除き馬蹄形に巡っている。周溝底のレベルは、丘陵尾根筋にあたる南西付近の底面が最も高くここを境に南北に下降している。南側を巡る溝は、南西端の崖面まででで2.2m低下している。一方北側を巡る溝も、北東端で2.2m程低下している。溝底部の形状は北側が徐々に下降するのに対し南側を巡る溝は、底面の3ヵ所に2－2.5mの間隔で深さ20cm程の段差を設けている。この段差は、南側を巡る溝が北側より高低差がきつかったために急激な下降を防ぐような構造を設けたものと考えられる。なお、南西部の周溝底面レベルの最も高い場所を境に南北それぞれの周溝の幅が長さ5mの間、最大幅1.3m程幅広く掘り込まれて、南側では底面がテラス状をなしている。

内部構造（第215・216・217図）

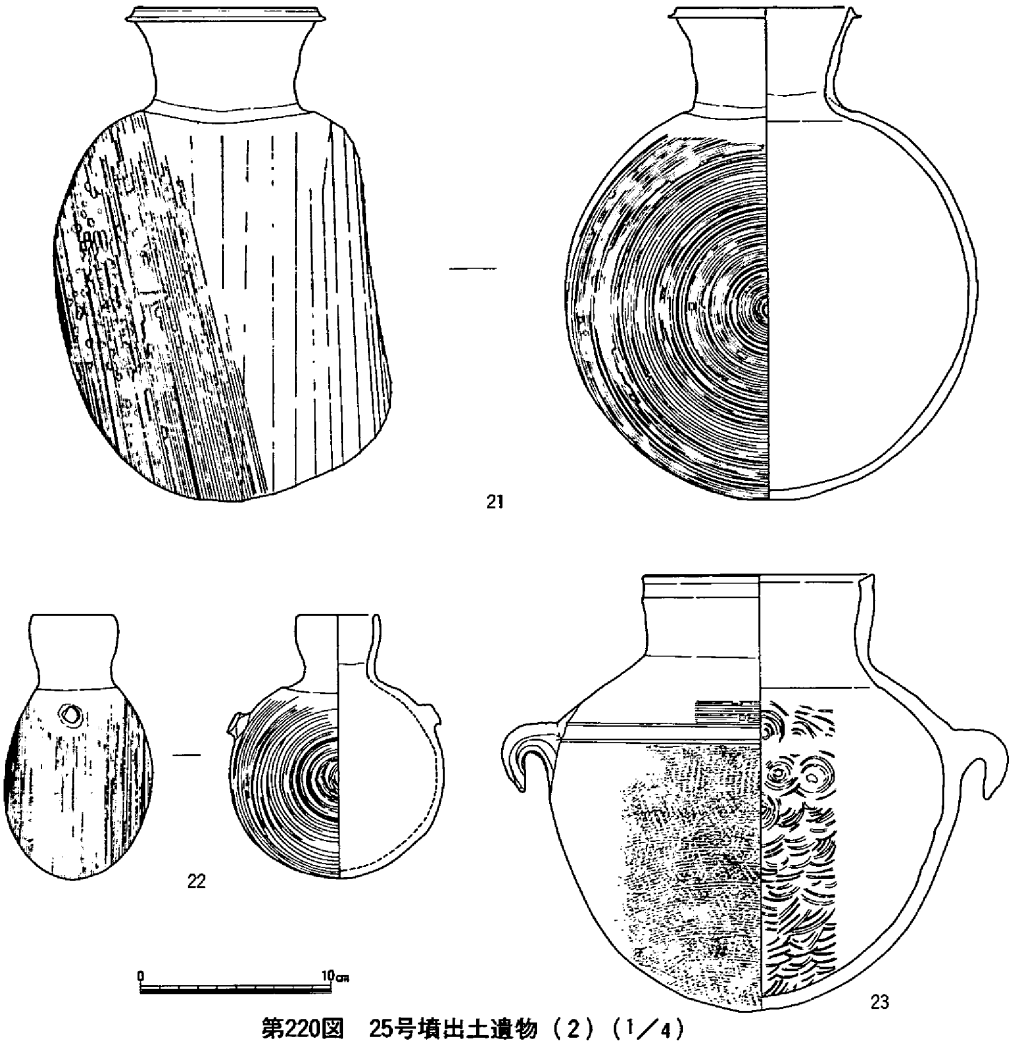
石室の長軸を北西方向の谷水田に向ける無袖の横穴式石室である。石室床面の計測値は、全長7.8m、奥壁幅1.5m、断面位置BB′で幅1.3m、入り口付近で幅70cmを測る。石室の平面形は、奥壁から4.2m付近で長軸の角度が10度程南に向き、この付近より入り口に向かって石室幅が徐々に狭まることからこの角度の変換付近が羨道と玄室の境と見られる。ただ天井石については、玄室部より徐々に下降はしているが急激な変化はない。石室高は、玄室の残存最高部で1.6m、羨道最奥付近で1.4mを測る。天井石は、玄室の奥半分と羨道部入り口付近が消失している。使用石材は、付近より産する緑泥片岩系の石材である。



第218図　25号墳遺物出土状況（1／40）



第219図　25号墳出土遺物（1）（1／4）



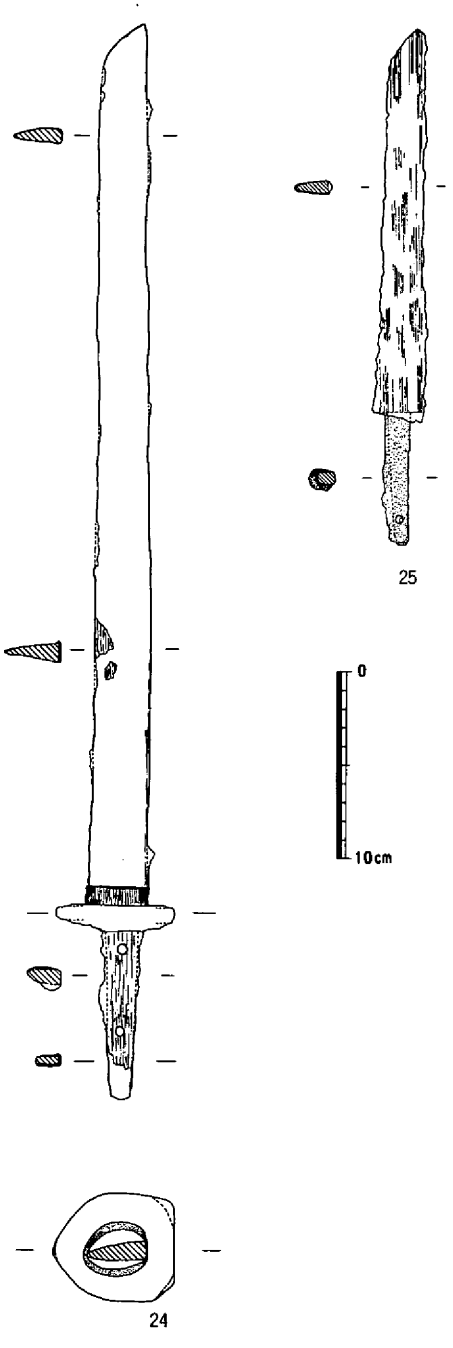
第220図　25号墳出土遺物（2）（1／4）

奥壁は、基底部に幅1.5ｍ、高さ70cmの石材を広口積みに立ててその上部に、側壁に使用している程度の石材を小口積みにしている。高さは、天井石のみが除去されたものと推定すると1.7ｍを測る。

両側壁は、基底部にやや大形の石材を広口積みとし、上部には基底部より概して小形の石材を５、６段に小口積みにしている。ただ、南側の玄室付近は土圧によりかなり内側に迫り出し崩壊の危険があったために実測が不可能であった。

遺物の出土状況（第218図）

出土遺物は、須恵器、鉄器、装身具である。出土場所は、石室内がほとんどである。



第221図　25号墳出土遺物（3）（1／4）

石室内の埋土状況は、玄室部の天井石が消失していたため完全に埋没し、羨道から入り口にかけても空間は、ほとんど認められなかった。

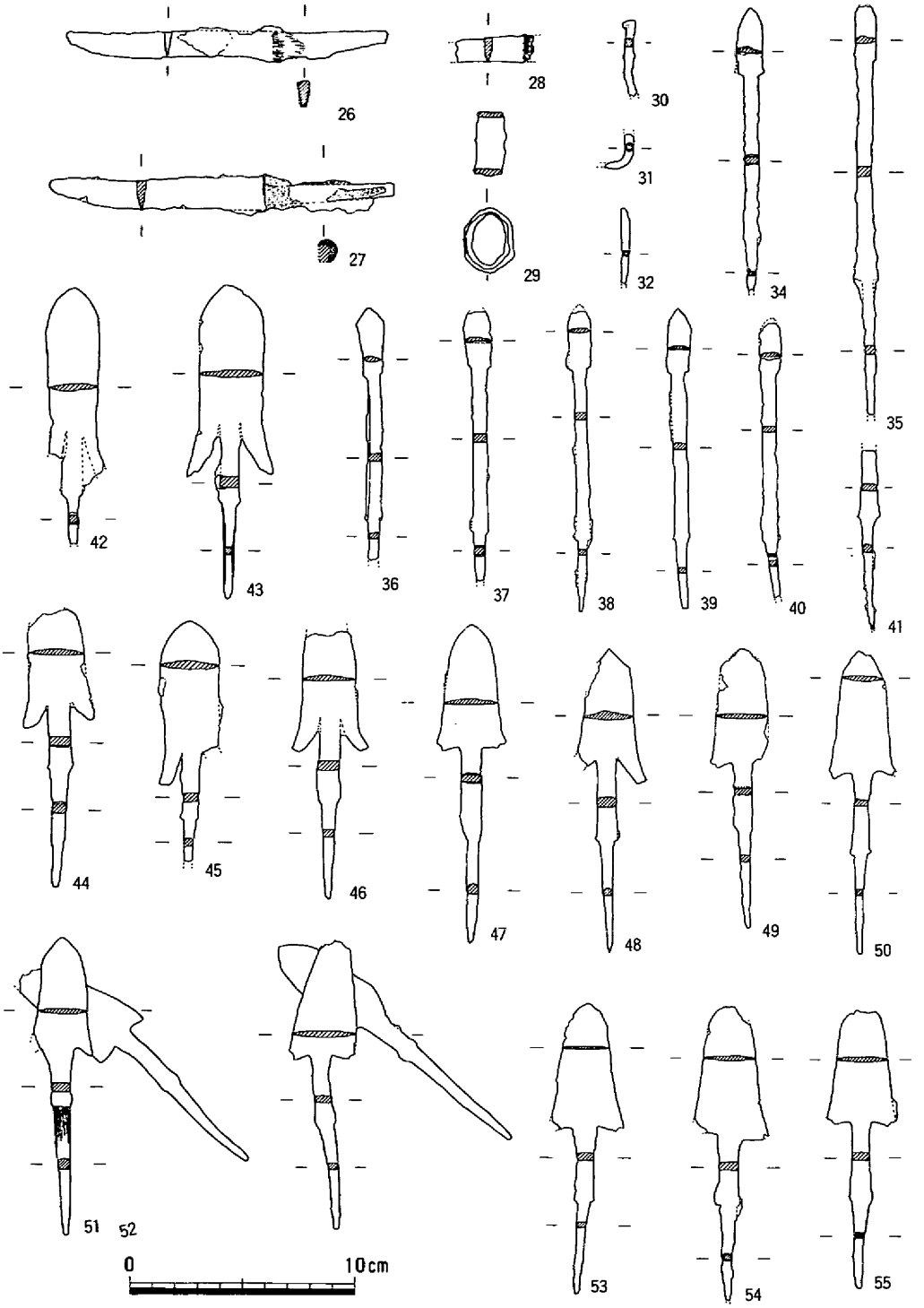
遺物は、石室のほぼ全面に認められたが、羨道部の遺物は、細片が多く原位置を保っているものは少なくかなり攪乱を受けているようであった。玄室は、天井石が宅地造成により半分程度消失していたにもかかわらず床面付近の遺物の遺存状態は良好であった。玄室底面には、奥壁から2.5m付近までの間に石室と同様の石材である片岩の剝片を床面に敷き詰めている。この石敷き面の奥壁に近い南東隅からやや大形の須恵器**21**、**23**と出土鉄器のうちの約6割にあたるものが集中し出土している。なお、石室の長軸方向に向いた刀**24**と小刀**25**が原位置を保っているとするとこのあたりに主体部が想定される。

出土遺物（第219～224図）

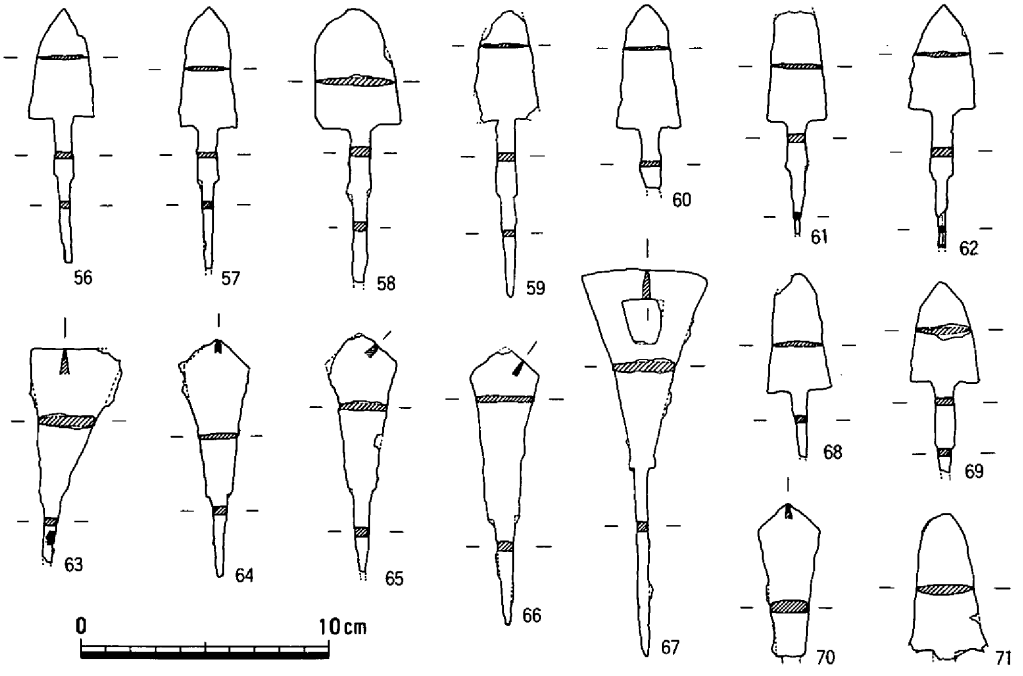
土器

須恵器　杯身、杯蓋、壺、高杯、椀、提瓶の器種が認められる。蓋は、口径14.2～15.0cm、身は口径11.5～12.7cmを測り、いずれも外面ヘラ削り調整を行っている。**4**は、口縁端部が大きく外反する器形で身の可能性もある。高杯は、いずれも無蓋で長脚気味の脚に1本の沈線を施すものと無いものがある。口径は13.2～14.0cmである。提瓶**21**はやや大型の器種で口縁端を外側に大きく引き出し断面三角形状に拡張している。**23**は、直口壺の肩部2ヵ所に取手を設けている。

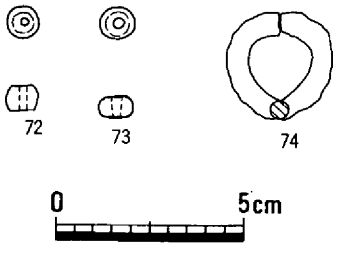
須恵器の出土状態は、玄室部での石敷きを施した部分と玄室前半部の石敷きの無い場所と羨道部との大きく3ヵ所に区分できる。このうち蓋杯は、奥壁出土の**1**、**6**が焼成、胎土や大きさを同じく



第222図　25号墳出土遺物（4）（1／3）



第223図　25号墳出土遺物（5）（1／3）



第224図　25号墳出土遺物（6）（1／2）

しセットである。羨道部出土の**2**、**5**、**10**は、焼成が軟質で白色をなし明瞭に他と識別できる。玄室出土の**14**高杯も同様の軟質である。これらは、奥壁出土の**1**、**6**より若干口径が小さい。玄室の前半部から出土の蓋杯**3**、**7**、**8**、**9**は当墳では最も小形の部類にはいる。

鉄器

刀　玄室内の石敷き部分より2点出土している。**24**は、全長56.7cm、身幅2.7cm、重量439.7ｇを測る直刀である。鍔が残るため関は不明である。茎は、尻に向かって徐々に幅を狭め茎尻はまるく納めている。茎には、2ヵ所に目釘穴がありともに目釘が残存している。茎部には、木質がかなり残存している。

鍔は倒卵形をなし長径6.5cm、短径5.8cm、厚さ0.5cmで透かしはない。はばきは、幅1.2cmの鉄製である。**25**は全長27.8cm、身幅2.3cm、重量90.1ｇである。茎に目釘穴が1ヵ所残り、目釘が残存している。茎は鹿角装である。

刀子　3点出土し、2点が完存している。茎部には、**26**は木質が、**27**は鹿角が残存している。

26は、全長14cm、27は、全長15cmである。

鉄鏃　最も数が多く変化に富む。(35－41) は、尖根系の長頸鏃で38、39はほぼ完存のもので全長13.6cm、26は、最も長く18.5cmである。先端の形状は、34、35のように柳葉形のものと36のやや三角形のものがある。平根系の鏃は、42～62、68、69、71が、有勅柳葉形と三角形有茎鏃である。63、67は、方頭式有茎鏃であり、67には、中央に透かしがある。64～66、70は、圭頭式の有茎鏃である。

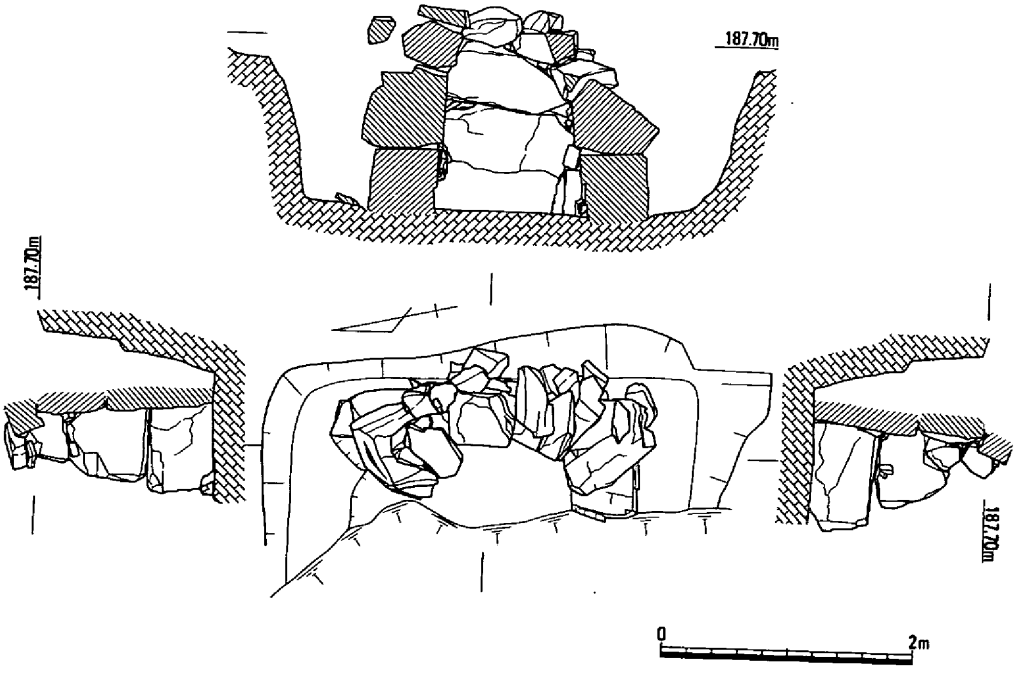
その他　30～32は釘で30は頭部がのこる。29は、鉄製の金具で長径2.8cm、短径2.2cm、幅1.2cmを測る。

装身具　ガラス玉２点と耳環が出土した。耳環74は、芯のみで直径2.8cm、外表は不明である。分析の結果（附編）材質が鉛であることが判明した。

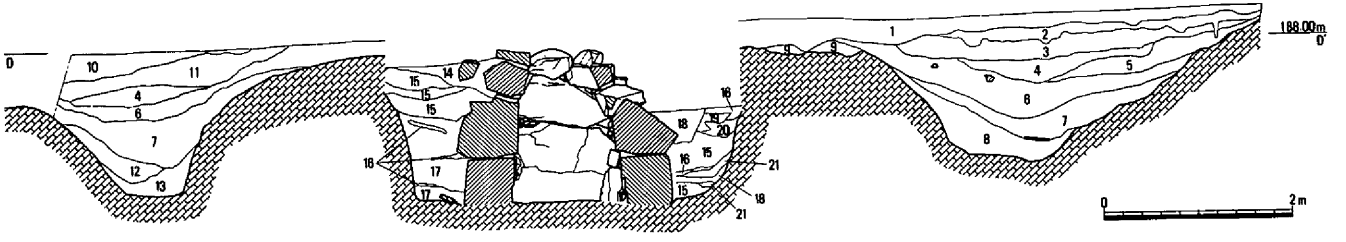
(26)26号墳

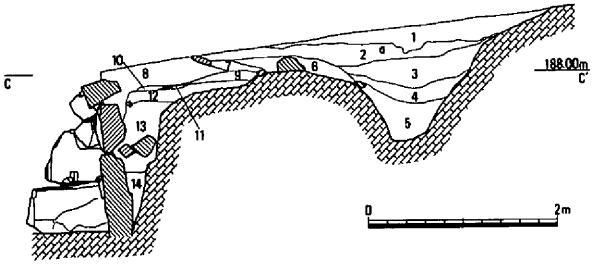
立地と調査前の状況

25号墳の調査中に南端にて古墳の周溝の一部とみられる溝を確認したために、新たに調査区の拡張を行い新規に発見した横穴式石室を内蔵する円墳である。古墳所在地の調査前の状況は、尾根稜線側が25号墳と同様に宅地造成の整地が行われてその一部が墳丘想定の一部にかかって



第225図　26号墳石室実測図(1／60)

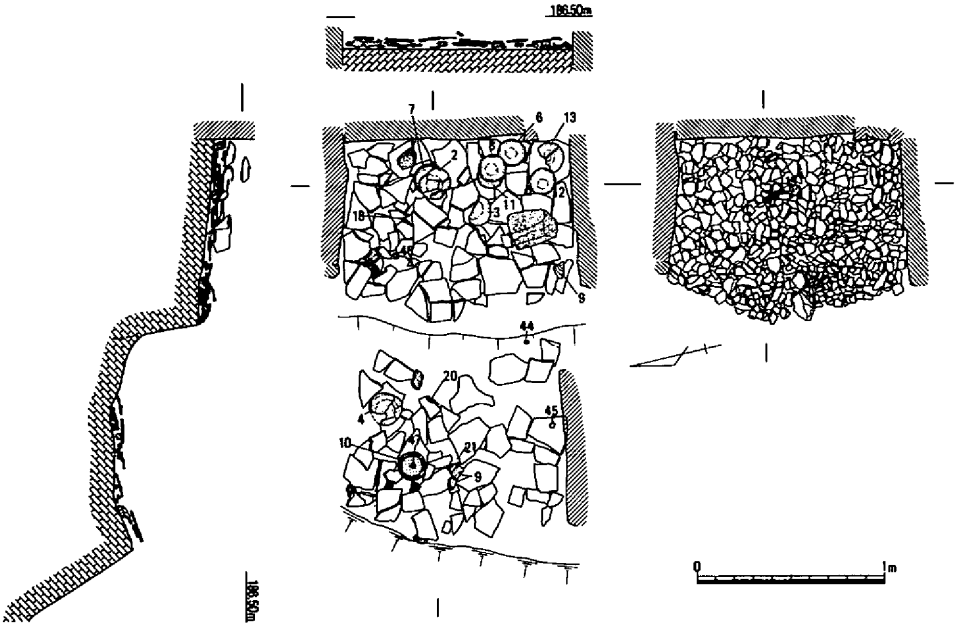




1　にぶい黄橙色土（攪乱）
2　黒褐色土
3　明黄褐色土（土器、炭含む）
4　明黄褐色土
5　黄褐色土（礫多い）
6　黄褐色土
7　暗褐色土
8　にぶい黄褐色土
9　黄褐色土
10　明黄褐色土
11　灰黄褐色土（炭含む）
12　黄橙色土
13　明黄褐色砂質土
14　にぶい黄橙色土
15　黒、茶、黄色混じり土
16　黒色土
17　黄、茶色混じり土
18　褐色土
19　茶色土
20　黒、黄色混じり土
21　黄色土

1　にぶい黄橙色土
2　明黄褐色土
3　にぶい黄橙色土（礫含む）
4　黒褐色土
5　暗褐色土
6　にぶい黄橙色土
7　黄橙色土
8　にぶい黄橙色土
9　黒、茶、黄色混じり土
10　黒、茶色混じり土
11　黄色土
12　黒、茶、黄色混じり土
13　黄、茶色混じり土
14　黄色土

第226図　26号墳墳丘断面図（1／80）



第227図　26号墳遺物出土状況（左：土器床、右：礫床）（1／40）

いたために墳丘全体は不明瞭であり、西側の水田に向かって急斜面の地形を成していたのみであった。

墳丘（第214図）

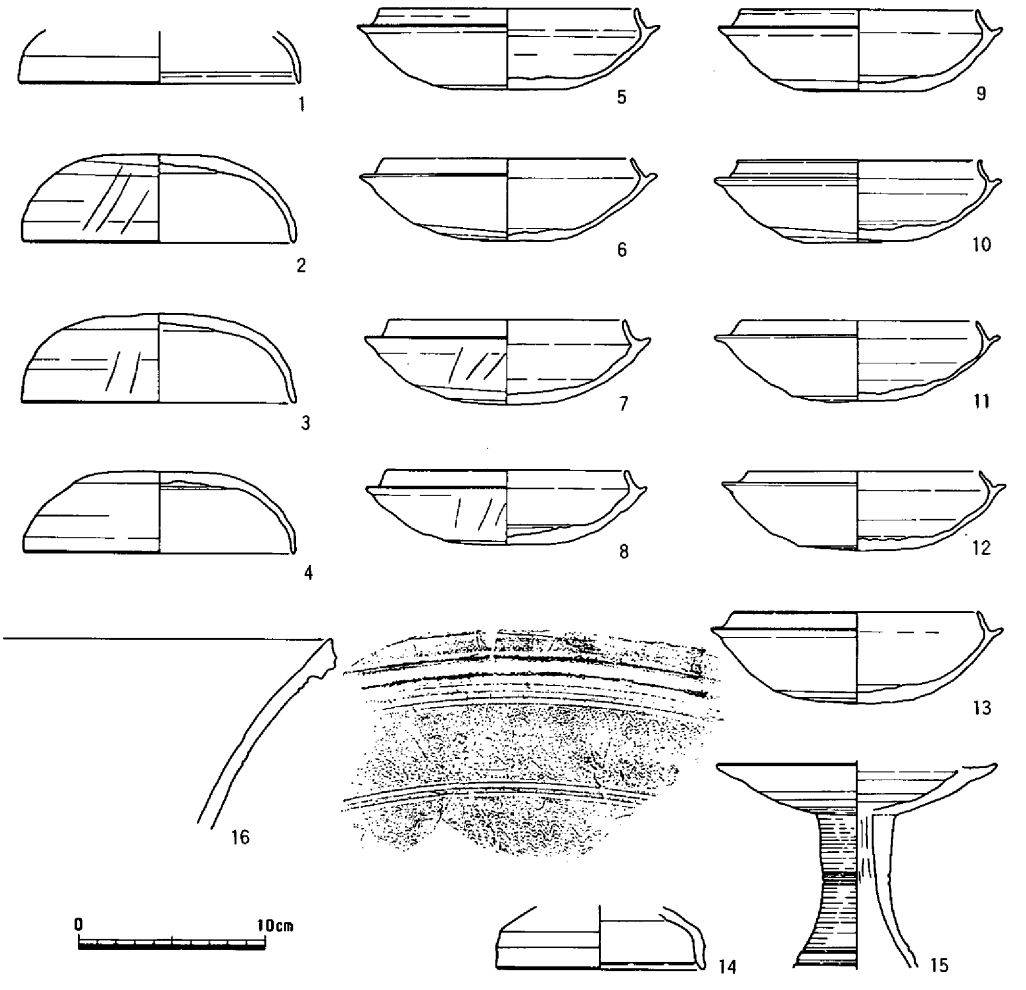
調査の結果、墳丘は、西側の半分が、完全に破壊され、東側の残存部も盛り土は大半が流失していた。丘陵尾根側にあたる墳丘東半部を巡る溝は、明瞭に残り南北方向（D－D′）の土層断面位置では、深さ1.2～1.3ｍを測る。周溝の底部レベルは、石室の長軸方向にあたる東側を最高所として南北に徐々に下降し、北端では最高所より1.6ｍ程下降している。墳丘規模は、残存周溝から推定して直径10ｍの円墳と考えられる。

内部構造（第226・227図）

石室の入り口を25号墳と同様に北西方向の谷水田に向ける横穴式石室である。石室は、天井石はすでになく側壁も完存するものは、奥壁に接する石材の長さ80㎝のみである。玄室の一部は、側壁の１枚目と２枚目の間が地滑りにより40㎝ほど石室もろともに落下した状況であった。落下部分は、長さ90㎝程が石室の床面もほぼ埋葬時の状態に近いかたちで残存していた。

石室床面の計測値は、奥壁幅、1.2ｍ、地滑りした石室を含めると現存長1.7ｍ、完存部80㎝である。使用石材は、25号墳と同様の緑泥片岩系の石材である。

奥壁は、基底部に幅1.2ｍ、高さ１ｍと幅1.1ｍ、高さ60㎝程の石材を広口積みにして、その



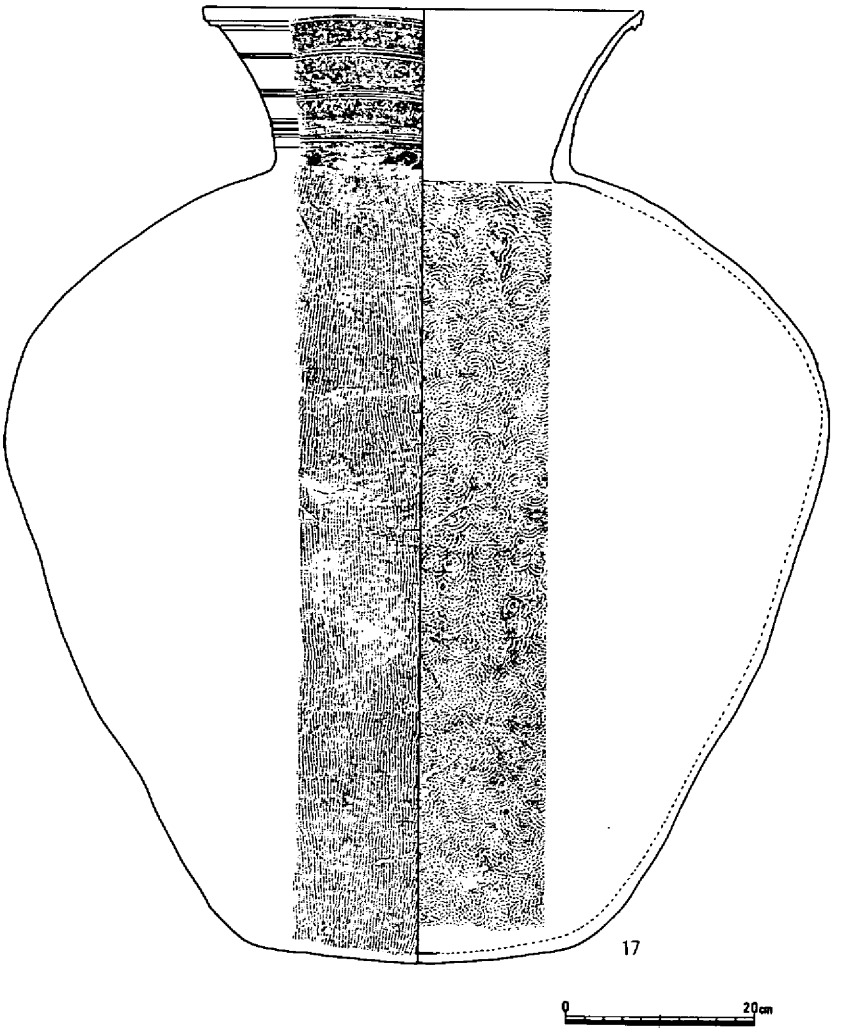
第228図　26号墳出土遺物（1）（1／4）

上にもう一段小形の石材を小口に積みあげた3段目まで残存している。両側壁は、2段目までは、大形の石材を積みあげている。石室高は、天井石を欠くものの残存部の形状等から現存高1.6m程度と推定される。

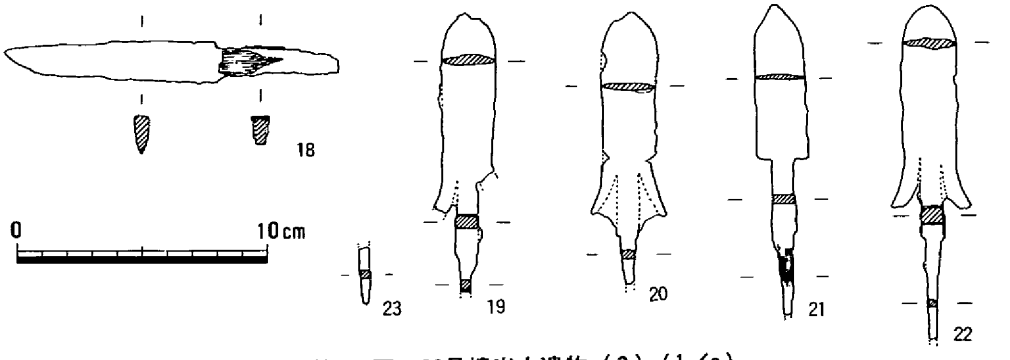
石室床面と遺物の出土状況（第227図）

出土遺物は、須恵器、鉄器、装身具である。出土場所は、玄室内と石室の前面である。

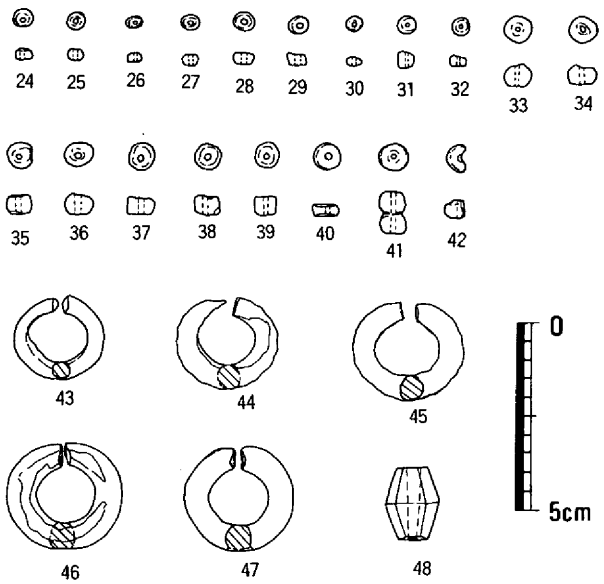
石室床面は、前述のように地滑りにより残存床面が玄室内で切断されているが、落下部分も遺存状況はかなり良好であった。床面は、下層に5～10cm程度の大きさの片岩の礫を敷き詰めた上面に甕の破砕片を一面に敷き詰めている。上層の甕床面から大半の遺物が出土しているが、甕破片除去後の礫面からも鉄器**19**、**22**が出土している。破砕甕は、一辺が10～20cmの大きさの破片が多く床面に良好にのこるものは、外面を上に向けて敷き詰めている。同一個体のほぼ一



第229図　26号墳出土遺物（2）（1／8）



第230図　26号墳出土遺物（3）（1／3）



第231図　26号墳出土遺物（4）（1／2）

個体分17を使用しており、出土破片による復元がほぼ可能であった。

床面の遺物のうち奥壁付近にややまとまって出土している須恵器は、ほぼ原位置に近い状況と見られる。棺痕跡は、確認できなかったが崩壊部分をふくめて5個の耳環が出土していることから複数の埋葬主体が考えられる。

出土遺物（第228～231図）

土器

須恵器　杯身、杯蓋、高杯、甕等の器種が認められる。蓋は、口径14.3～14.5cm、身は、口径12.2～13.5cmを測り、いずれもヘラけずり調整を行っている。杯**2**、**3**、**4**、**7**、**8**は、浅い黄橙色を呈し、軟質の焼成で**4**をのぞき外面にヘラ記号を施している。剝離が著しいが、**4**にも刻まれていて可能性が強く同一制作であろう。**5**は、口縁端部、及び脚端を欠くが、有蓋の高杯である。なお、**5**は、灰色をなしやや軟質の焼成で類似の製品として**9**の杯身がある。**17**は、床面に敷き詰めていた甕である。口縁部外面にヘラによる沈線を3ヵ所に施しその間に櫛描きの波状文を施している。器高108cm、口径46.5cm、体部最大径86cmである。

鉄器　刀子、鉄鏃が出土している。鉄鏃は、平根系の有茎柳葉式と三角形式である。刀子**18**は、全長13.1cmで茎に木質が残る。

装身具　ガラス玉**24**～**32**、練り玉**33**～**42**、切り子玉**48**、耳環**43**～**47**が出土している。耳環の**46**と**47**は対となる。**43**は、金貼りの残りが非常に良好で光沢を放っている。他は、さび化が著しいがいずれも銅地に金貼りの金環とみられる。

（山磨）

(27) 34号墳

調査前の状況

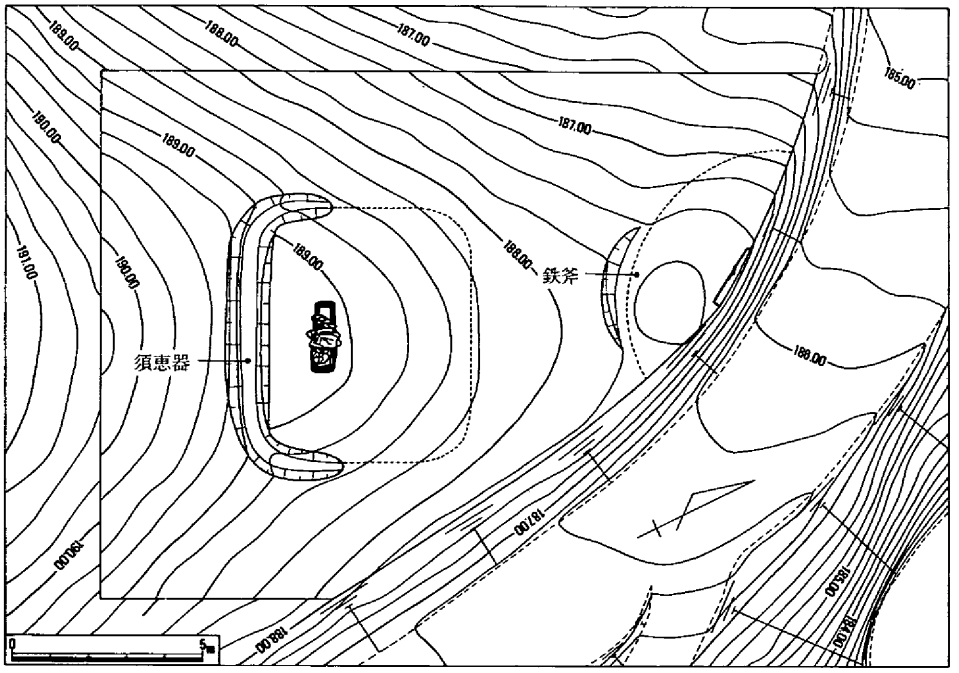
8号墳から15号墳にかけて直線的に延びた尾根が、12号墳の所在地点で北方向に枝分かれしたその先端部分に存在した古墳である。この古墳の所在地点は、東西に走る国道181号が貫通した谷部分に面しており、東方向約140mに位置する23号墳や24号墳を正面に望むことができた。発掘調査に着手する以前の段階では、尾根上の平坦面は極めて狭く、古墳が所在するような高まりは認められなかった。

墳丘と周溝（第232図、図版141－1）

この古墳の墳丘盛土は極めて薄かった。墳丘の平面形は長径6.70m・短径5.80mの隅丸長方形を呈し、地形の高い部分に「コ」字状の周溝か存在した。周溝内から須恵器の甕が出土し、墳丘の表土中より刀子の断片を採集した。

主体部（第233図、図版142）

地山を長方形に掘り窪め、内法が長径170cm・短径33～43cm・高さ18～24cmの石棺を造っていた。天井石は3枚が残存したが、両小口には1枚、両側壁には4枚の板石を使っていた。床面には部分的に小さな割石が敷き詰められ、南東側小口部分に割石による枕石が存在した。



第232図　34・35号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

出土遺物（第234図、第269図２、図版165・168－１）

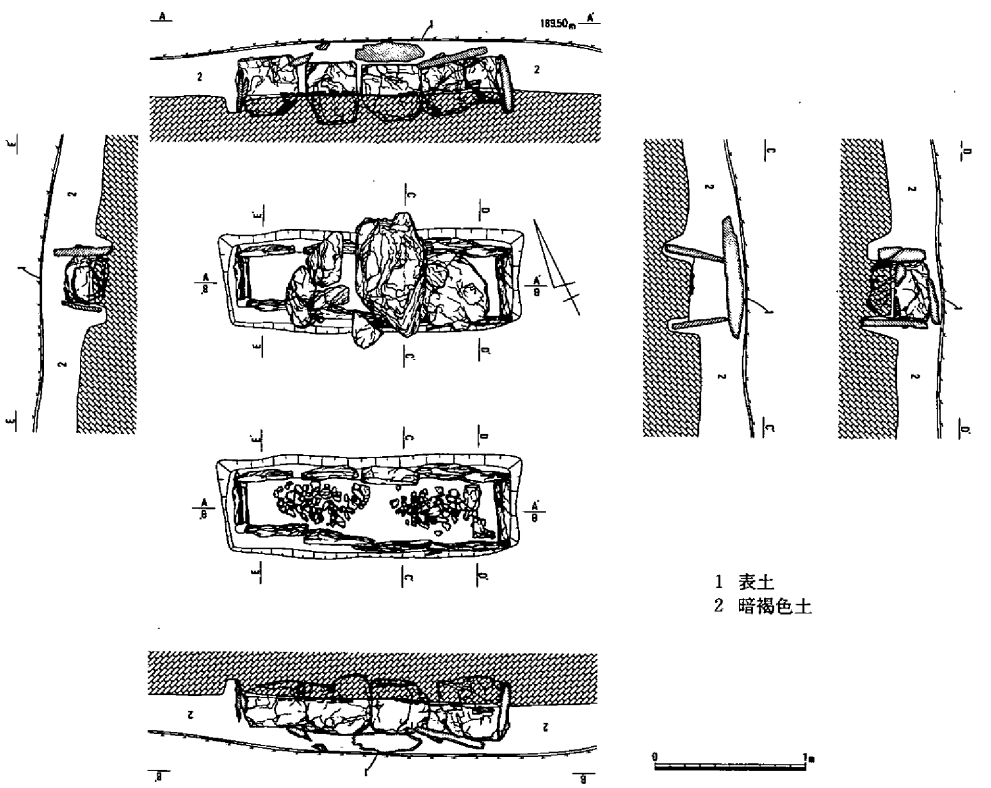
周溝から出土した須恵器の甕は、口径24.8cm・器高32.6cmを測る復元完形品である。口縁部は朝顔形に外反し、端部の外側に稜が認められる。外面には断面三角形の凸帯を巡らせ、その間にクシ描波状文を施している。外面の胴部には縦方向の平行タタキ痕跡が存在し、底部には横方向の平行タタキ痕跡が認められる。内面の口縁部と外面の頸部はヨコナデを施し、内面の胴部は平行タタキ痕跡の上面にヨコナデを行っている。胎土中には細かい砂粒が多く、焼成は良好で灰オリーブ色を呈している。

墳丘の表土中から出土した刀子の断片は、刀身最大幅1.8cm・茎長3.5cm・茎最大幅1.3cmを測り、茎尻は若干細くなる。関は両関で、茎には柄の木質が付着している。

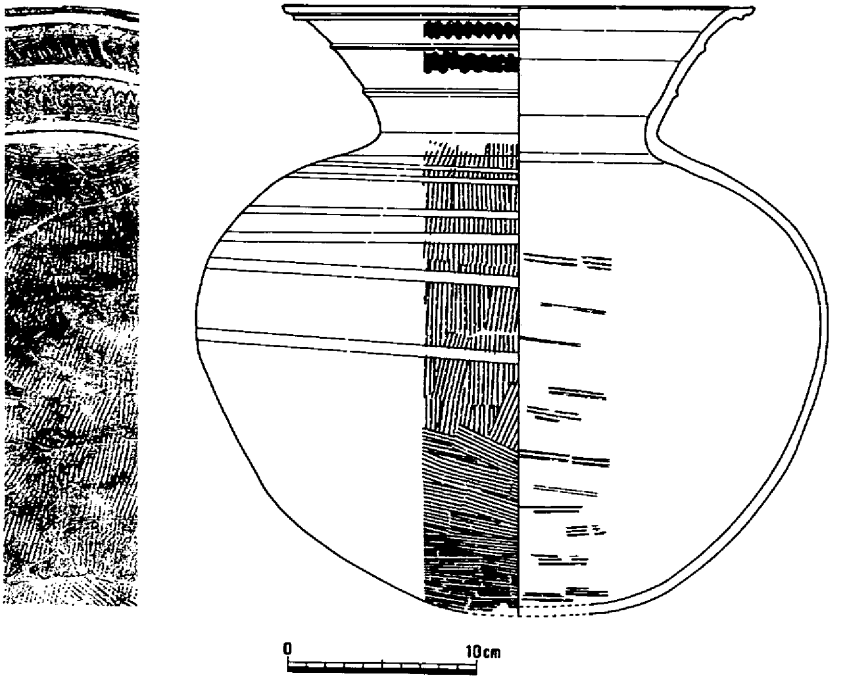
(28)　35号墳

調査前の状況

34号墳の北東方向約10ｍの地点に存在した古墳である。墳丘の約半分は、後世に造られた山道によって削平されていた。調査を実施する前には、墳丘上にブルドーザーやバックホーなどの建設機械によって運ばれた土砂が置かれており、その中から完形に近い鉄剣を採集した。



第233図　34号墳主体部実測図（1／50）



第234図　34号墳周溝内出土遺物(1／4)

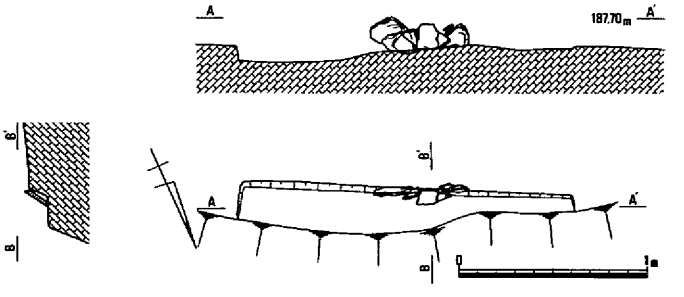
墳丘と周溝（第232図、図版143－1）

この古墳の墳丘は、径6～8mの円形になるであろう。34号墳に面した地形の高い部分に周溝を検出し、鉄斧が出土した。主体部は山道によって破壊され、掘り方の一部が認められた。

出土遺物（第269図**3・4**、図版165）

鉄剣の計測値は、剣身長59.4cm・剣身最大幅3.9cm・茎長13.1cm・茎幅1.6～2.7cmになっている。剣身は、上半部では断面が菱形で、中央に鎬が見られるが、下半部では断面が凸レンズ形で、鎬は不明瞭である。剣身の茎に近い部分には、左右一対の小孔が認められる。茎の目釘穴は2か所に存在し、茎尻は一文字尻である。剣身には鞘の木質が、茎には柄の木質がそれぞれ付着しているが、両者の間に約0.3cm幅で木質の付かない部分がある。

鉄斧は有袋鉄斧で、袋部と身部の間に肩を有する。全長9.9cm・身部長6.0cm・袋部幅3.9～4.6cm・身部幅6.4～7.0cmを測る。



第235図　35号墳主体部実測図(1／40)

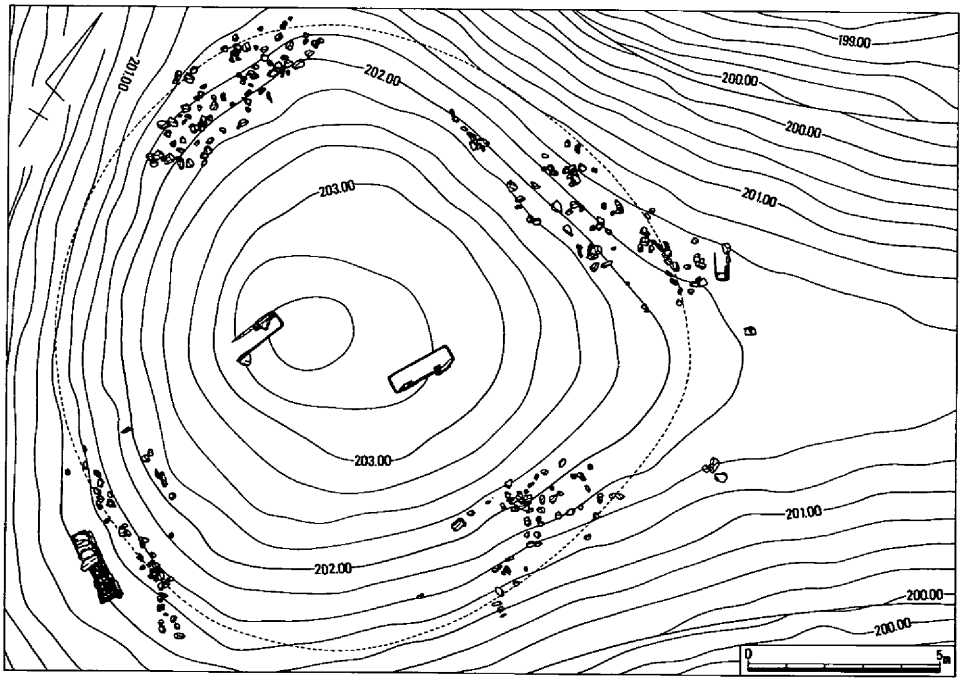
(29)　17号墳

調査前の状況

中原古墳群が所在した丘陵には、大別して５か所の山塊が認められたが、17号墳は久世町の平野に最も近い北西側端部に位置する山塊の頂部に存在した。この地点は、22号墳や39号墳が所在した地点に向かって直線的に延びる尾根が、19号墳や20号墳の所在した尾根へ短く枝分かれする分岐点になっていたので、尾根上の平坦面が広くなっていた。発掘調査に着手する以前から、中原古墳群の中でも規模の大きな古墳が存在するのは明らかで、高く盛り上がった墳丘が認められ、葺石と思われる人頭大から拳大の石が丘陵の斜面に数多く存在した。

墳丘と周溝（第236図、図版144－１）

この17号墳の墳丘は、径16.00～16.70ｍの円形の近い形態を呈していたが、所在した地点の地形に制約され、尾根が延びる方向の墳端は長く、斜面に位置する部分は短くなっていた。墳丘の盛土は極めて薄く、表土直下に破壊された２基の主体部が存在した。この古墳には葺石が認められたが、墳丘全体に石が存在したわけではなく、裾部の４か所に限られていた。４基の主体部を検出したが、そのうち２基は墳丘の外側に存在した。この古墳は丘陵の頂部に造られていたこともあって、周溝は存在しなかった。



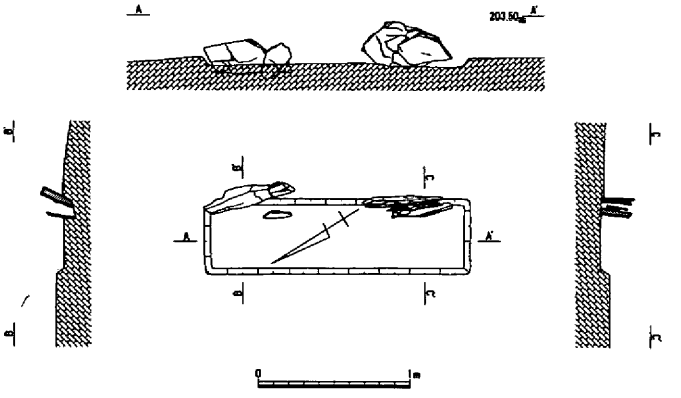
第236図　17号墳調査後周辺地形測量図(1／200)

主体部（第237～240図、図版144～146）

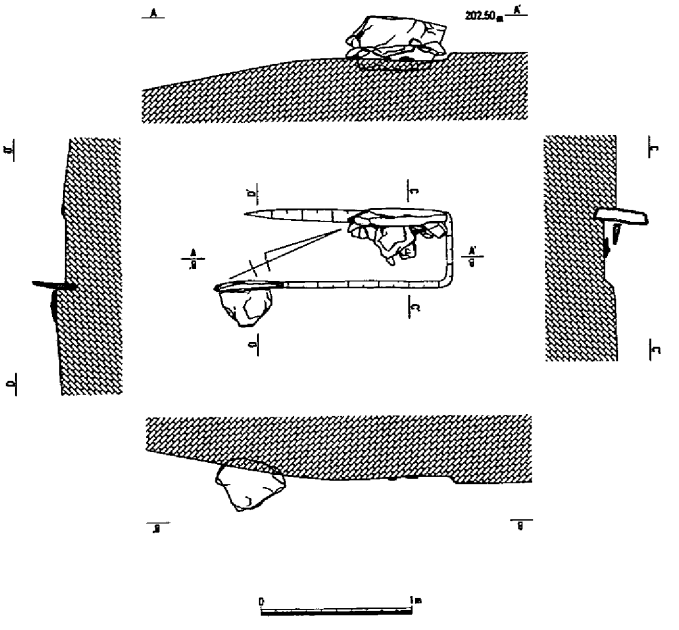
第１主体部は、墳丘の中央よりやや東側に寄った地点で検出した箱式石棺で、著しく破壊されていた。長径175cm・短径50cmの長方形を呈する石棺の掘り方と側壁の一部が残存しただけで、天井石や小口部分の石材は認められなかった。

第２主体部は、墳丘の中央よりやや西側に寄った地点で検出した箱式石棺で、第１主体部と約4.50ｍ離れていた。この主体部も第１主体部と同様に著しく破壊され、天井石や小口部分の石材は認められなかった。長径16.0cm以上・短径50～52cmの長方形になると思われる石棺の掘り方と、側壁の一部が残存したにすぎない。

第３主体部は、墳丘の南側に位置する墳端の外側に存在し、主軸は尾根方向に直交していた。地山を石材が据えられるだけに隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径177cm・短径28～42cm・高さ12～20cmの石棺を造っていた。３枚の天井石が残存したが、石の間に生じた空間には、小さくて偏平な板石を補充していた。表土から浅い所で発見されたこともあって、中央より南東側の天井石は存在しなかった。両側壁には４枚の板石をそれぞれ立てて据えていたが、石材の継目には外側から小規模な板石を添えていた。両小口には１枚の板石を使い、幅の広くなった南東側小口部分には、板石を斜めに立てた枕石



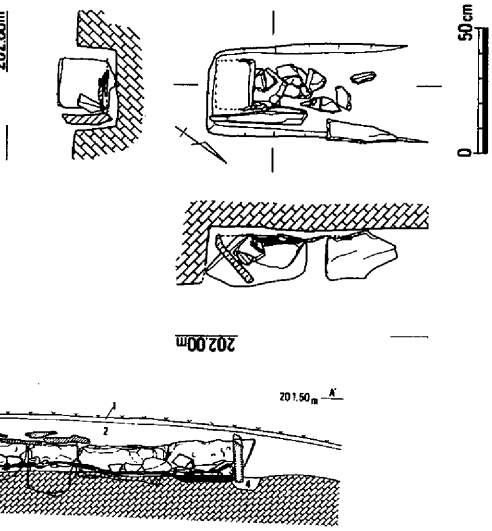
第237図　17号墳第１主体部実測図（1／50）



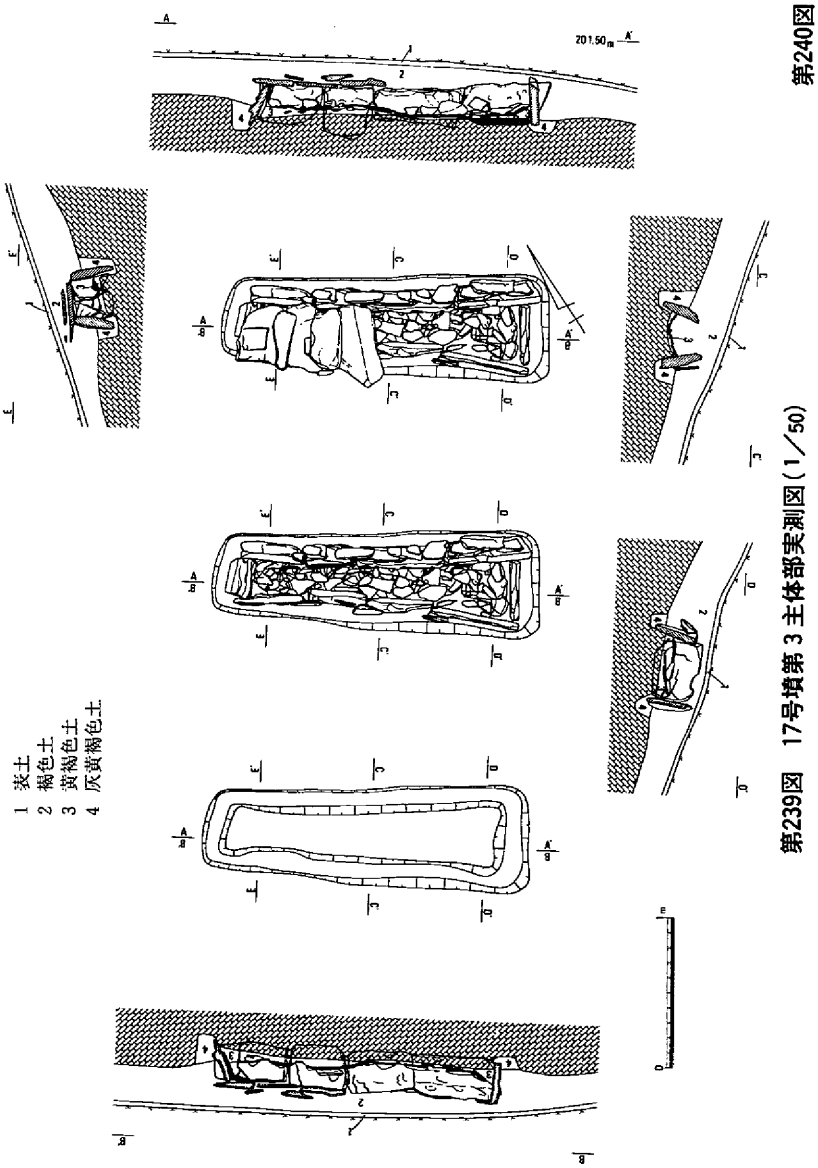
第238図　17号墳第２主体部実測図（1／50）

が認められた。石棺の床面には小さな割石を敷き詰めていたが、他の石棺のように水平ではなく、全体に起伏が存在した。この第３主体部は、後述する第４主体部と同様に17号墳の主体部として取り扱ったが、墳丘の外側に造られていたこともあって、単独の主体部かもしれない。　（福田）

第４主体部は、18号墳の調査中に17号墳の北東側の墳端に検出した小型の箱式石棺である。石棺は蓋石がすでになく、側壁も攪乱を受けてかなりの石材を消失しており、わずかに南東側小口と北東側の２枚の側壁が残存していた。内法は、現存長60cm・幅20cm・高さ20cmであった。石室内の底面には10cm大の礫を敷き詰めていた。墓壙の計測値は、現存長85cm・幅38cm・最大深さ20cmになっていた。石室内を精査したが、遺物は皆無であった。



第240図　17号墳第４主体部実測図（1／30）

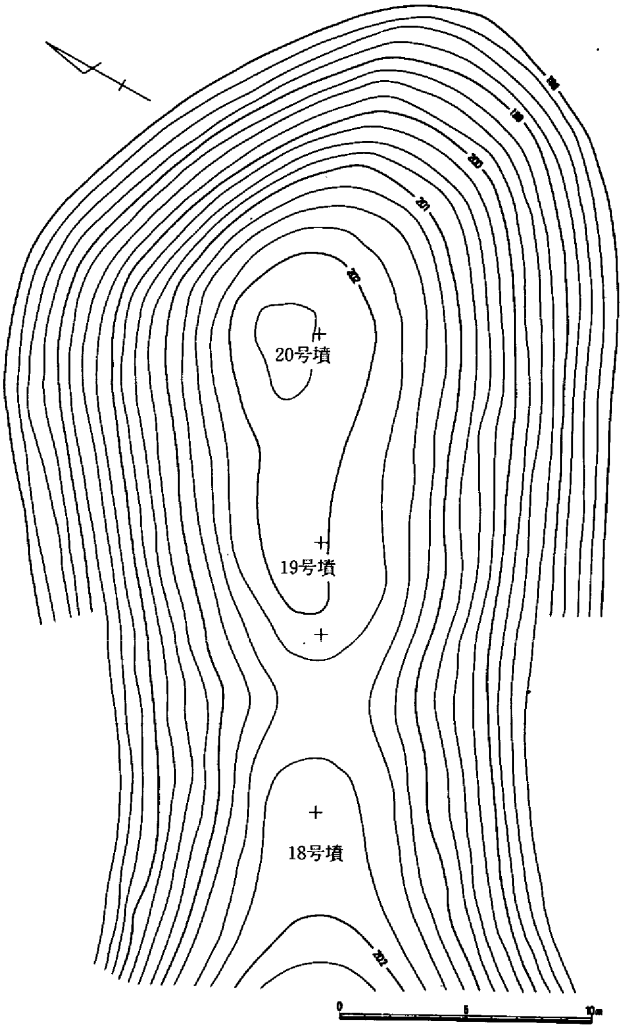


第239図　17号墳第３主体部実測図（1／50）

(30) 18号墳

1990年の２月より発掘調査を開始した中原古墳群のうち最初にとりかかった古墳である。当古墳は、17号墳の立地する尾根頂部より北東に派生する小尾根上に17号墳も含めて17～20号墳の４基の周知されていた古墳のうちの１基である。ただ18号墳は、独立した古墳ではなく17号墳を前方後円墳と想定してその前方部とする意見もあった。

調査の結果は、17号墳と18号墳の境に区画をなす溝等の施設はなかったものの18号墳が前方部と考えられるような墳丘の整形もなく、墳丘部に盛り土、主体部とも認められなかった。したがって、18号墳推定位置は、17号墳の一部でもなく、独立した１基の古墳とも確定し難く17、19号墳間の残丘部と判断した。なお、17号墳の墳端にあたる北西部で、17号墳に伴う小形の箱式石棺（第４主体部）を検出した。(17号墳の項で記載)

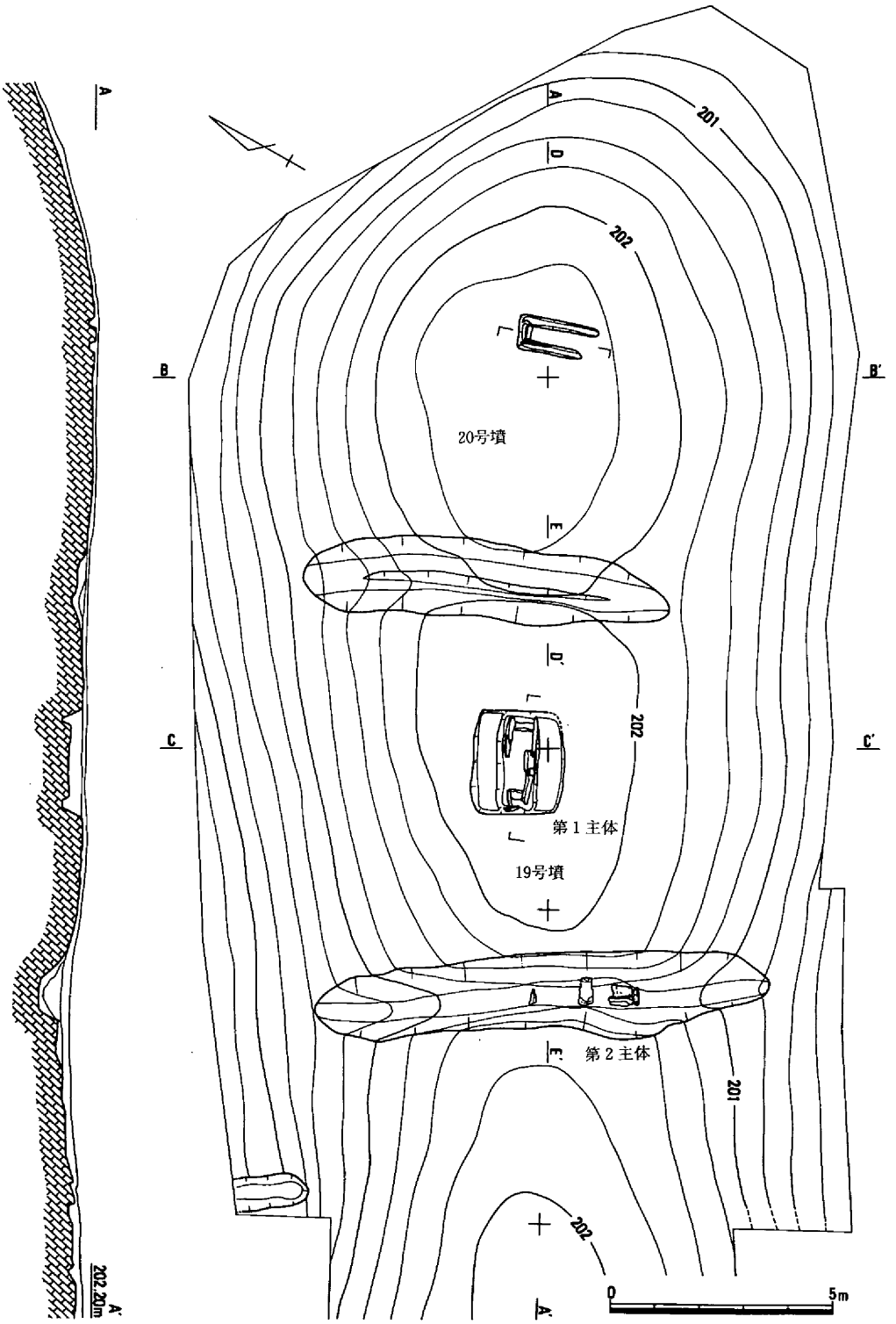


第241図　18～20号墳調査前測量図(1／300)

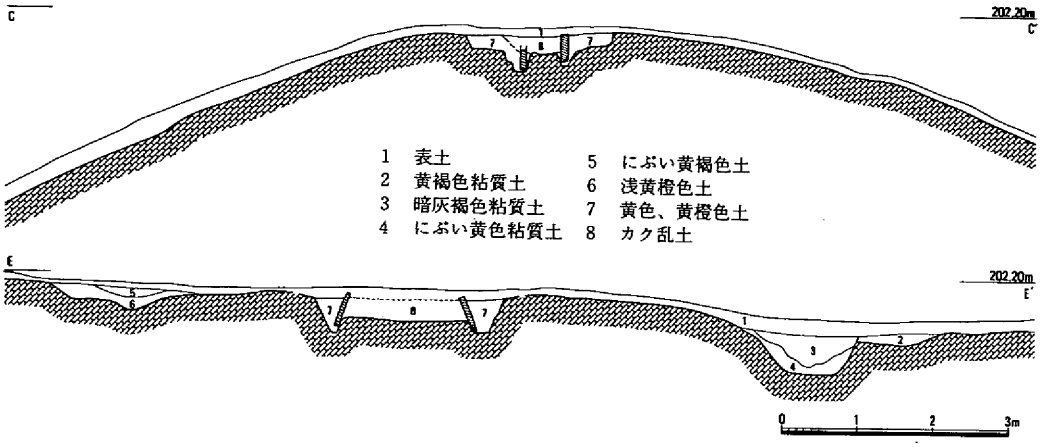
(31)19号墳

立地と調査前の状況

北東方向に延びる小尾根上の標高202ｍ付近に位置する17～20号墳の４基の古墳の１基である。調査前の周囲の状況は、17号墳の中央の尾根を境に南東側は雑木林で見通しが悪かったものの19号墳の位置する北東側は栗林で手入れが行き届いていたために踏査が比較的容易であった。伐採後の墳丘観察では、丘陵先端の20号墳がわずかに高く盛り上がっていたのと18、19号墳の境に若干のくぼみが認めら



第242図　19・20号墳墳丘測量図(1／150)



第243図　19号墳墳丘断面図(1／100)

れる程度で、19号墳想定位置の高まりはほとんどなく平坦であった。ただ、墳丘中央付近は、石材の小片が散在し、ボーリング棒による探査にも中央付近に主体部らしき反応が認められていた。

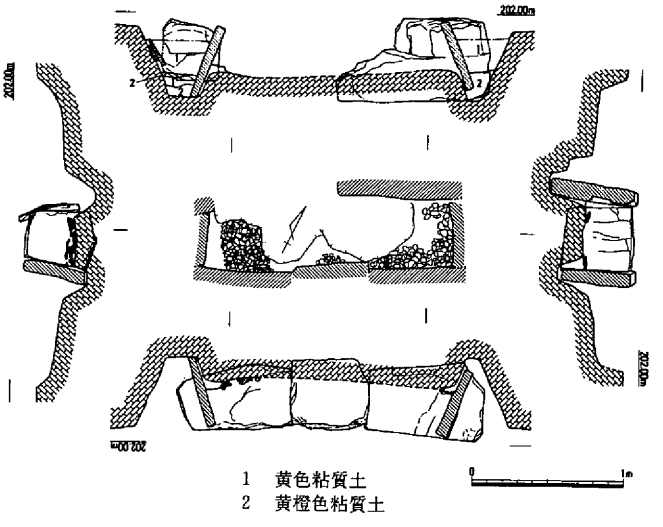
墳丘（第242・243図）

18号墳調査時に尾根切断の西側の区画溝を、当初18号墳に伴う溝と想定して周溝内に検出の第２主体部もこれに併せて墳丘部や中心主体部の調査に先行して行ったためやや変則的な調査となった。西側を区画する溝は、検出長10.3ｍ、幅1.5ｍ、深さ50㎝を測るが、溝内のやや南よりの第２主体部を設けている場所は、幅2.0ｍとやや広い。19号墳の東側の区画溝は、20号墳と共有したもので検出長8.3ｍ、最大幅1.8ｍ、深さ最大30㎝を測り、20号墳側の底面がテラス状に一段高くなっている。土層断面の観察からは、判明できなかったものの19、20号墳築造時のそれぞれの区画溝の一部が重複している可能性も考えられる。墳丘盛り土は、すでに削平され確認できなかった。墳丘規模は、尾根切断の溝から想定して東西10ｍ、南北11ｍ、現存高さ１ｍ程度を測る方墳であったと考えられる。

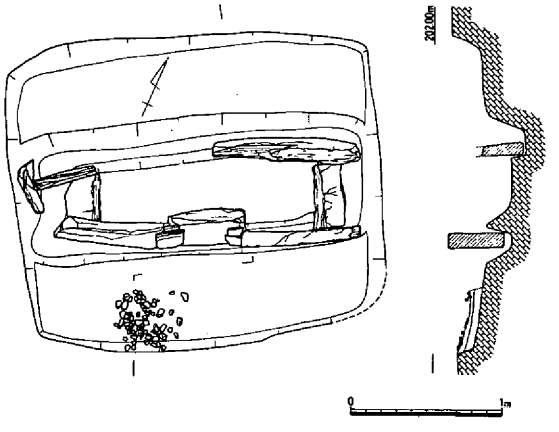
埋葬施設（第244・245図）

第１主体部　尾根に平行する方位で墳丘中央に検出した二段掘りの墓壙を持つ箱式石棺である。石棺は、蓋石がすでになくしかも中央に栗の木が植えられていたため、側壁の一部や石室底面が攪乱を受けていた。内法は、全長1.68ｍ、最大幅49㎝、高さ30㎝を測り、直径２～５㎝程の円礫を敷き詰めた礫底面である。

石室内の埋土は、円礫や石棺の剝離片混じりの攪乱土であったために底面の確認が容易でなかったが、石室中央の底面の下部まで大きく攪乱を受けていた周囲にわずかに円礫面が残って



第244図　19号墳第１主体部実測図（１）（1／50）



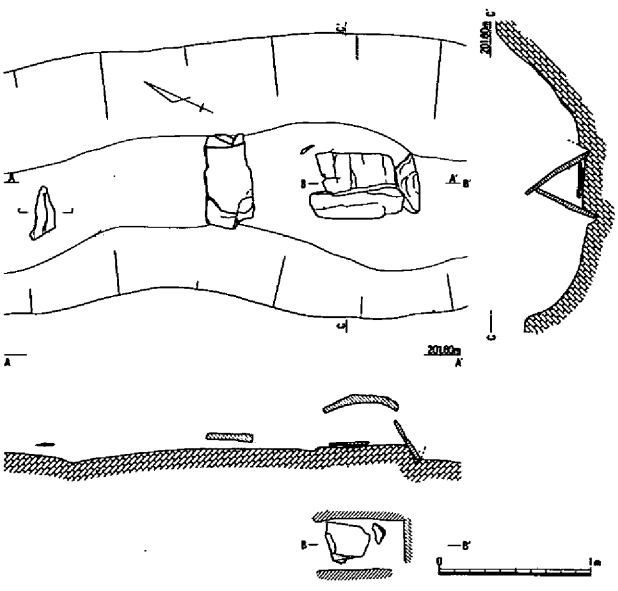
第245図　19号墳第１主体部実測図（２）（1／50）

いた。なお、南西端の小口と接する幅10cm程は、わずかに底面が高く、この面のみに片岩の剝片を敷いていた。両小口の板石は、土圧によりかなり内側に傾いている。埋葬主体の頭部位置は枕石が未検出のため明瞭でないが、石室の東側小口板石が西側より７cm程広いことや、石室幅が徐々に西に向かって狭まる形状等からも東枕と推定される。

石室内の出土遺物は、石室西よりの礫敷き面と攪乱部の境付近から図化できなかったが鉄器の小片が出土している。

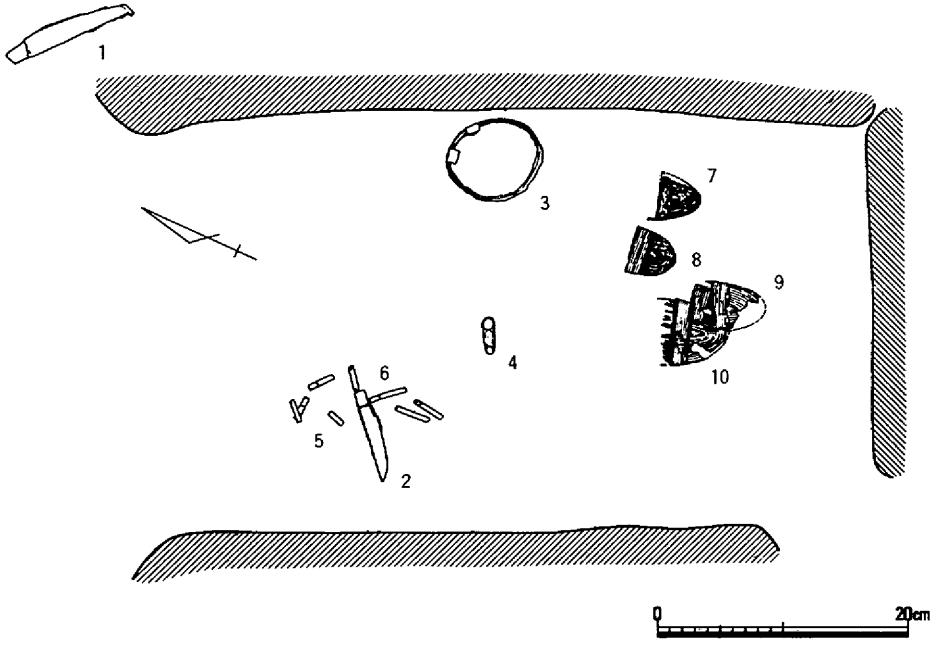
墓壙は、外側の掘り方が、長辺2.5ｍ、短辺2.1ｍ、深さ20cmを測り、中央の掘り方が長辺2.5ｍ、短辺95cm、深さ25cmを測る。なお、南側の墓壙掘り方の一部に掘り方の肩口から中央の石棺に向かって円礫を敷き詰めた面が一部認められた。

第２主体部　19号墳の西側を区画する溝内に検出した組み合わせ石棺状の主体部である。当初、この溝は18号墳の北側を区画する溝と想定して調査中に溝南半の底部に偏平な板石を三方向より組み合わせた主体部を検出した。その後、主体部内の埋土を除去すると床面近くにもう一枚の偏平な板石が床面に接するように出土した。この板石の下部より副葬品が出土したことから、組み合わせ状石棺の設置時には四方から組み合わせていたものが埋葬後早い時期に倒れ込んだものと考えられた。底面の内法は、長さ58cm、幅33.5cm、最大高さ30cmである。

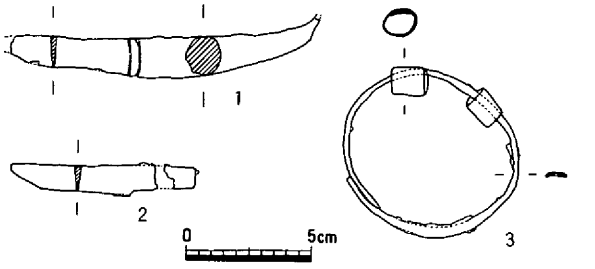


第246図　19号墳第２主体部実測図（1／50）

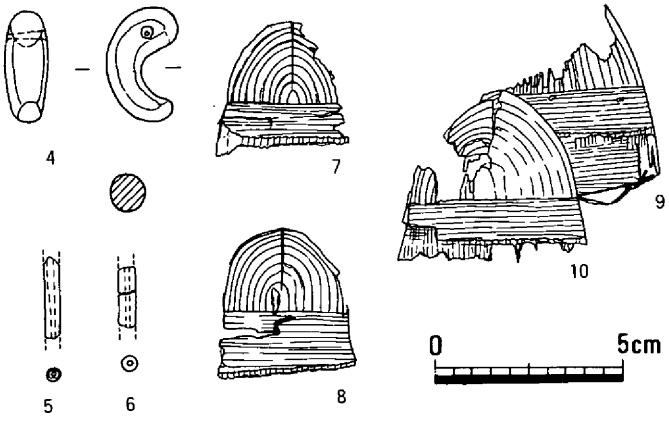
墓壙の掘り方は、明瞭でないものの区画溝がこの付近で若干西側に膨らんで幅2.0ｍと最大の数値を示しているのが掘り方の一部の可能性がある。なお、組み合わせ石棺の北側に40㎝間隔を置きほぼ同一レベルで長さ60㎝、幅30㎝の偏平な板石と棺外の北側に鉄器を検出した。この板石を含めたまでの全長1.5ｍ程を主体部と考えることもできるが、石組部分が本来は、四方から囲ってあったものとすると北側の板石までを主体部とは考えにくい。ただ、長さ60㎝にも達しない小石室から異常に多い副葬品の出土状態は、埋葬施設以



第247図　19号墳第２主体部遺物出土状況（1／6）



第248図　19号墳第２主体部出土遺物（１）（1／3）



第249図　19号墳第２主体部出土遺物（２）（1／2）

外の可能性も考えられる。

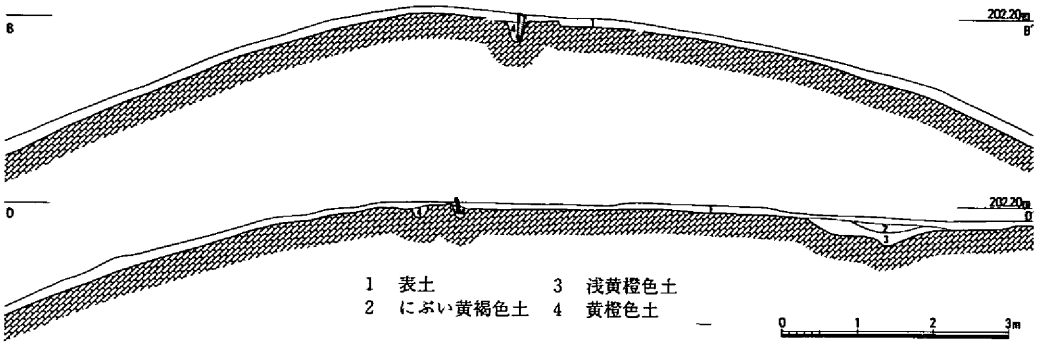
出土遺物は、第２主体部の底面と棺外の２ヵ所からである。主体部内出土のものは底面南よりに４点の竪櫛と東側壁に接し鉄製の釧、中央に勾玉、やや西よりに管玉７点と鉄製刀子が床面に接し、また、棺外より鉄製刀子が同一レベルで出土している。

出土遺物（第２主体部）

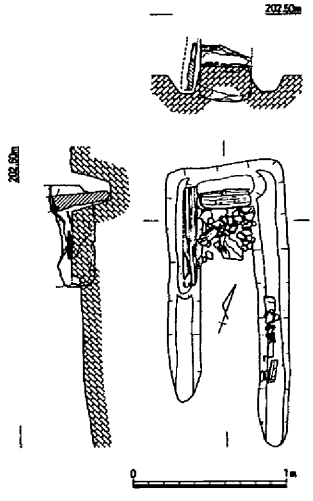
竪櫛　４点が歯を北に向け出土している。いずれも櫛頭部の漆塗りの被膜部分のみの遺存である。このうち９、10は重複してしかも脆弱なため石膏を使用し取り上げたため、裏面を図化している。特に９は、紐が一部剝離し移動している。規模は、10がやや大きく幅5.0cm、他が3.5cm程である。

玉類　勾玉１点と管玉７点が中央付近にまとまって出土している。勾玉**4**は、硬玉製で長さ3.0cm、直径９mmである。管玉は、蛇紋岩製で残りが悪く図化可能であったものは２点でいずれも長さは３cm程度と推定される。

鉄製品　刀子２点と、２個の遊環を設けた釧が出土している。底面出土の刀子**2**は、推定全長7.5cm、刃部長4.8cm、棺外のもの**1**は、現存長12.3cmで柄部が円形でエックス線で撮影の結果全て鉄製で最大径が1.5cmを測る特異な刀子である。釧**3**は、幅8.5mm、最大厚さ1.5mmのやや丸味を持つ薄い板状の鉄を円形に加工し、両端を1.8cmほど重複させて接合している。この釧部に幅1.2～1.3cm、厚さ0.5mmほどの板を筒状に加工し、接合部を釧部と同様に３mmほど重複させたものを２個通している。計測値は釧部が、最大径7.2cm、最小径6.3cmのやや楕円形である。また、遊環は、いずれも楕円形で最大径1.2と1.3cm、最小径1.0cmである。



第250図　20号墳墳丘断面図(1／100)



第251図　20号墳主体部(1／50)

(32)　20号墳

立地と調査前の状況

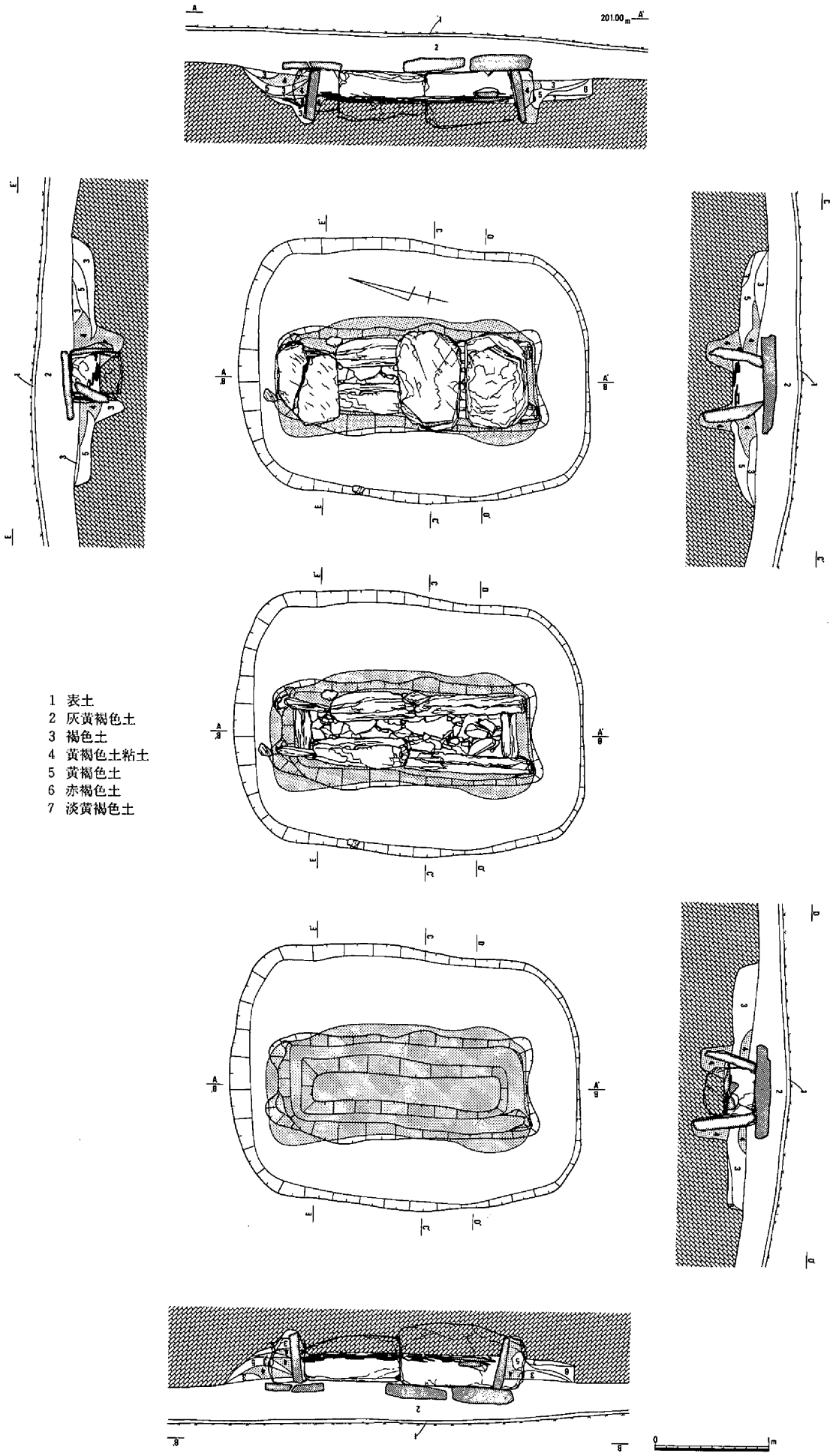
17号墳より北東に派生した小尾根に立地する4基の古墳のうちの先端のもので中原20号墳と周知されていた古墳である。19号墳と同様に墳頂部は、栗林となり、丘陵先端付近は雑木林となっていたものの大きくは改変を受けていないようであった。伐採後の地表観察では、丘陵先端がわずかに高まりをなしていた。

墳丘（第242・250図）

墳丘盛り土は、土層断面の観察結果ではすでに消失して認められなく、古墳の東側にあたる丘陵先端付近では、墳端の整形の痕跡も認められなく墳形は不明瞭である。規模は、19号墳との境をなす長さ8.3m、最大幅1.8m、深さ30cmの区画溝の形状から推察すると一辺9m程の方墳であろう。

埋葬施設（第251図）

主体部は墳頂部のやや東よりに尾根に直行する方位で検出した箱式石棺である。区画の溝と4.5mの間隔を置きほぼ平行する。ただ残存状況は、非常に悪く北側の小口板石と西側の側壁の一枚の下半部がかろうじて残っているのみで東側の側壁にいたっては、側壁の一部が剝離し残存しているのみである。底面は、北端の30cm程度に石棺材と同様の片岩の剝片を敷き詰めた礫面が残存していたのみで南半は、削平され底面も石棺の南側小口の掘り方も認められなかった。石室内法規模は、北側小口で幅約40cm、掘り方から現存長1.6m程である。出土遺物は、皆無である。　（山磨）



第252図　21号墳主体部実測図(1／50)

(33)　21号墳

調査前の状況

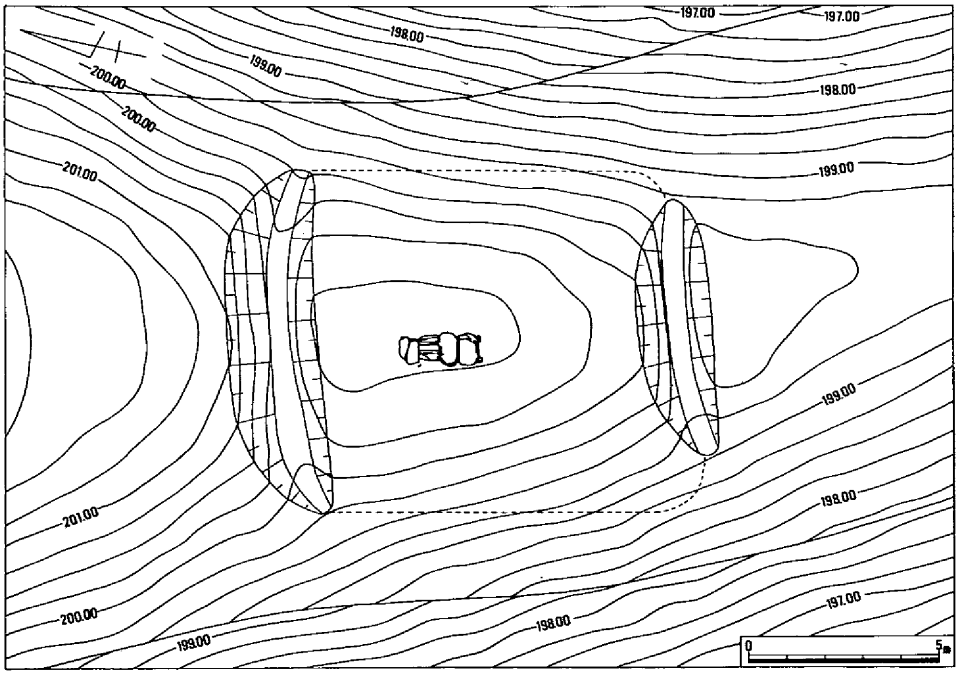
17号墳と22号墳の中間に存在した古墳である。この地点は尾根上の平坦面が極端に狭くなっており、東側と西側は急勾配の斜面に面していた。調査前の状態では、古墳が所在すると思われる高まりは、全く認められなかった。

墳丘と周溝（第253図、図版150－１）

この古墳の墳丘は、長径10.50ｍ・短径9.00cmの隅丸長方形を呈し、南北両端部に尾根方向と直交した周溝が認められた。墳丘の盛土は極めて薄く、表土直下に主体部の天井石が存在した。東側と西側は急斜面に面していたから、墳端を確認するのが困難であった。

主体部（第252図、図版151・152）

21号墳の主体部である箱式石棺は、やや北側に寄った地点に尾根方向と平行して存在した。地山を隅丸長方形に２段に掘り窪め、内法が長径174cm・短径37－48cm・高さ20－24cmの石棺を造っていた。天井石は４枚と推定されるが、３枚だけ残存して１枚は欠損していた。両小口には１枚、両側壁には３枚の板石を使っていた。床面には割石を敷き詰め、南側小口部分には２個の河原石による枕石が存在し、その周辺の床面には赤色顔料が付着していた。



第253図　21号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

(34)22号墳

調査前の状況

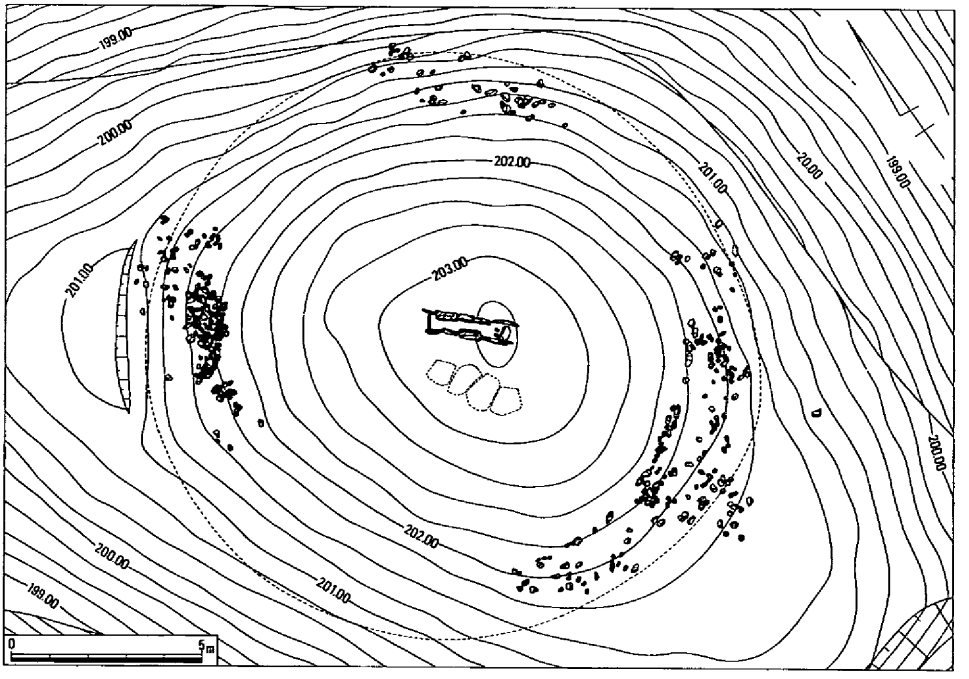
中原古墳群が所在した丘陵の北西部分に位置し、久世町の平野に最も近接した山塊の頂部に存在した。この22号墳が所在した地点は、丘陵の尾根が北から北西方向に変換する部分で、頂部には比較的広い平坦面が認められ、調査に着手する以前から中原古墳群の中でも大きい円墳が所在することが周知されていた。墳丘の端部と推定される部分には、葺石と思われる人頭大から拳大の石が数多く存在した。

墳丘と周溝（第254図、図版153）

この22号墳の墳丘は、径15.50－16.20ｍの円形に近い形態を呈していたが、所在した地点の地形に制約されて、尾根が延びる方向の墳端は長く、斜面に位置する部分は短くなっていた。墳丘の盛土は極めて薄く、検出した２基の主体部のうち１基は、天井石が１枚も残存しなかった。この古墳には葺石が認められたが、墳丘全体に石が存在したわけではなく、裾部の３か所に限られていた。36号墳に面した北西側の墳端には、尾根方向に直交した浅い溝が存在した。

主体部（第256・258図、図版154～157）

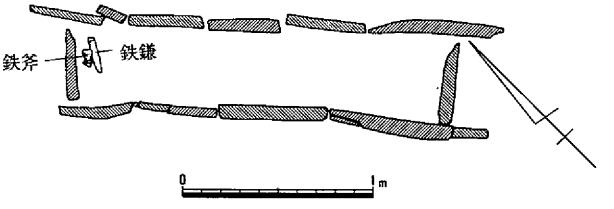
第１主体部は、表土直下の浅い所で検出されたこともあって、天井石が１枚も残存しなかっ



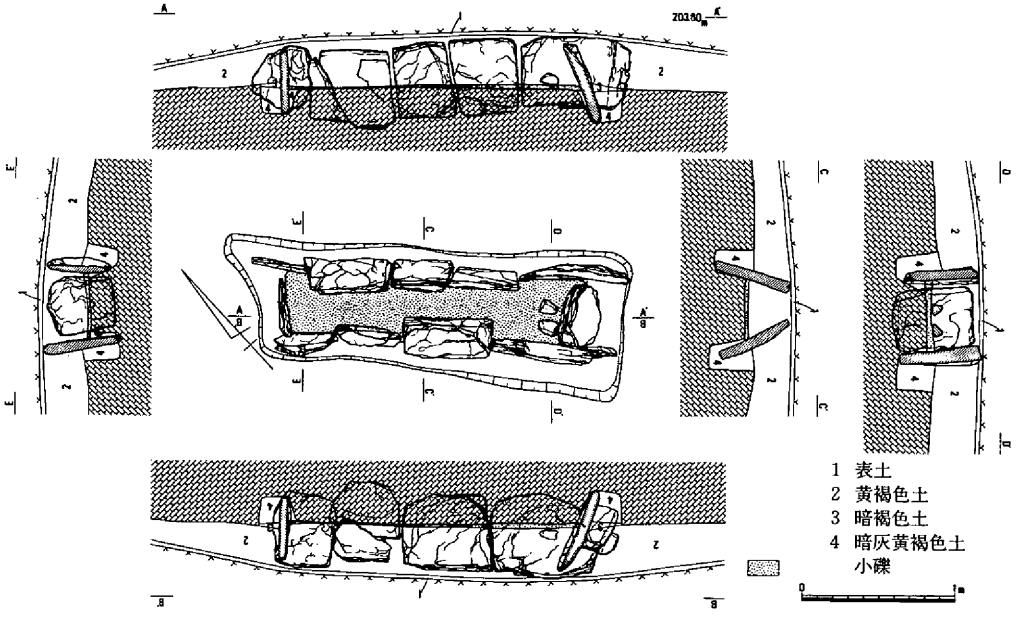
第254図　22号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

た。地山を隅丸長方形に近い形態に掘り窪め、内法が長径193cm・短径40～48cmの箱式石棺を造っていた。両小口には１枚、北東側壁には５枚、南西側壁には４枚を板石をそれぞれ立てて据えていた。床面には砂利を敷き詰め、南東側小口部分には割石による枕石が存在した。

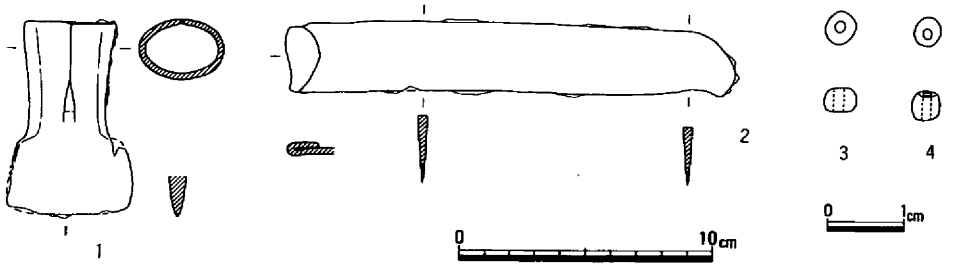
第２主体部は、第１主体部の西側約1.50ｍの地点に存在した箱式石棺である。地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径172cm・短径31～37cm・高さ21～28cmの第１主体部よりやや小さい石棺を造っていた。天井石には４枚、両小口には１枚、両側壁には４枚の板石



第255図　22号墳第１主体部遺物出土状況（1／40）



第256図　22号墳第１主体部実測図（1／50）



第257図　22号墳第１主体部出土遺物（1/3、1/1）

を使っていた。床面には第１主体部と同様に砂利を敷き詰め、両小口部分に枕石が存在した。南東側小口部分の枕石には、河原石と割石を使っていた。北西側は割石だけを使っていた。

遺物出土状況（第255図、図版156－２）

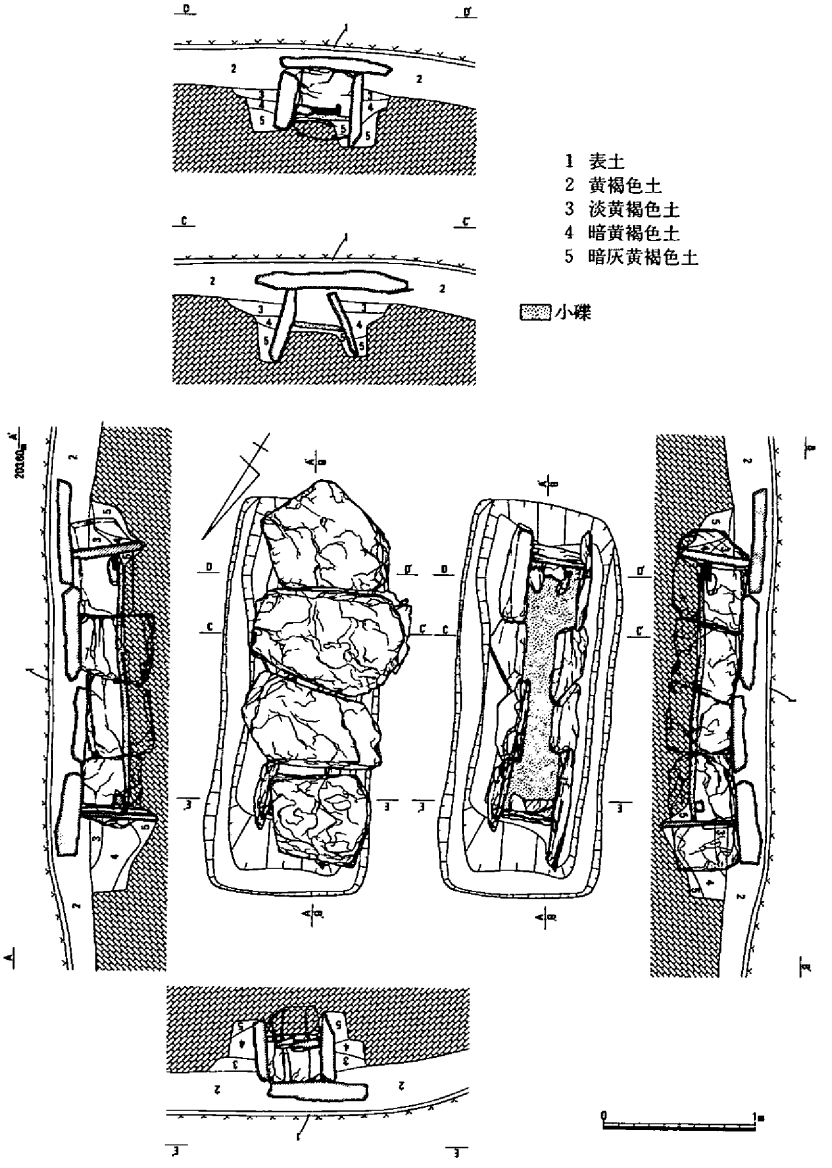
天井石が１枚も残存しなかった第１主体部から遺物が出土した。鉄斧と鉄鎌は、北西側小口部分の床面から小口の壁と平行するように並べて置いていた。２点のガラス製小玉は、南東側小口部分に存在した枕石の周辺から出土した。

出土遺物（第257図、図版162－3）

1は有袋鉄斧で、袋部と身部の間に肩を有する。全長7.6cmで、袋部幅3.0～3.6cm・身部幅4.2～5.0cmとなり、身部長3.1cmである。

2は細長い形態の曲刃鎌である。基部を大きく折り返し、全長17.8cm・刃部最大幅2.7cmである。

3と**4**はコバルトブルーの色調を呈するガラス製の小玉である。胴径は0.34～0.40cm・高さは0.27～0.37cmで、２点とも完形品である。



第258図　22号墳第２主体部実測図（1／50）

(35)　36号墳

調査前の状況

22号墳の北西方向約45ｍの地点に存在した古墳である。尾根上の平坦面が狭く、地形の高まりがほとんど認められなかったので、古墳の有無が判断できなかった。

墳丘と周溝（第259図、図版158）

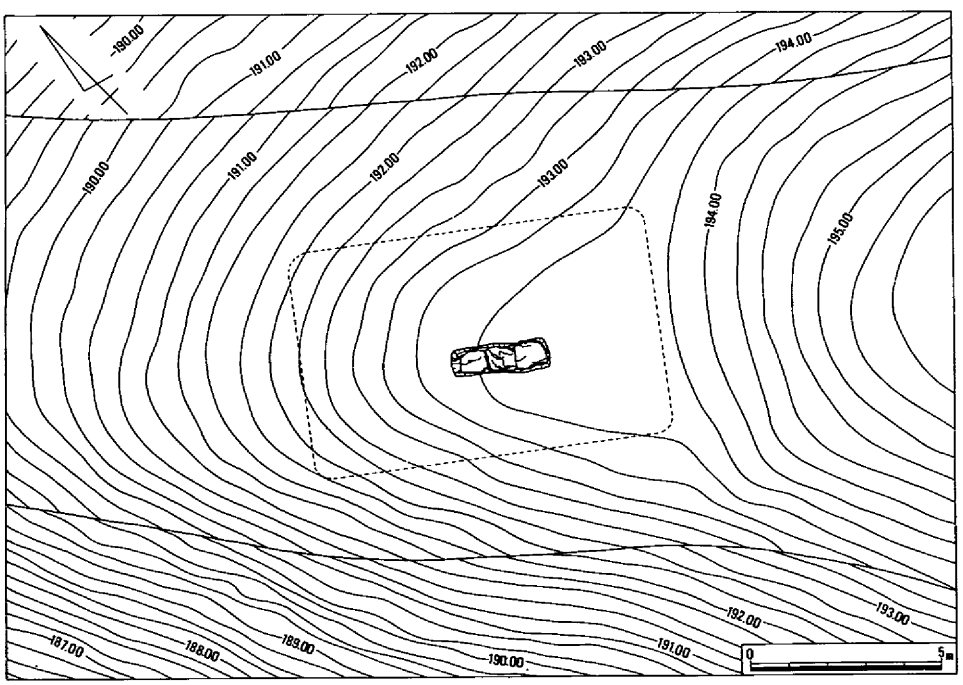
36号墳の墳丘は、長径9.50ｍ・短径6.00ｍの隅丸長方形を呈し、盛土は極めて薄かった。地形の高い22号墳に面した南東側の墳端には、尾根方向に直交する浅い溝が認められた。

主体部（第261図、図版160）

地山を隅丸長方形に掘り窪め、内法が長径192cm・短径30～38cm・高さ20～26cmの箱式石棺を造っていた。天井石には３枚、両小口には１枚、北東側壁には５枚、南西側壁には３枚の板石を使っていた。床面には小さな割石を敷き詰め、南東側小口部分には河原石と割石による枕石が存在した。この主体部の床面からは、刀子１点と鉄剣２点の遺物が出土した。

出土遺物（第269図 **5**～**7**、図版165）

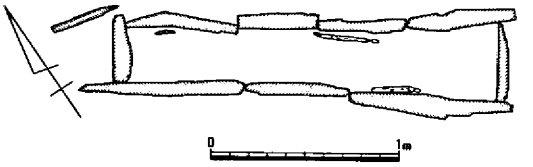
5 の刀子は、刀身長推定7.4cm・刀身最大幅1.7cm・茎最大幅1.3cmである。関は両関で、茎には柄の木質が付着している。



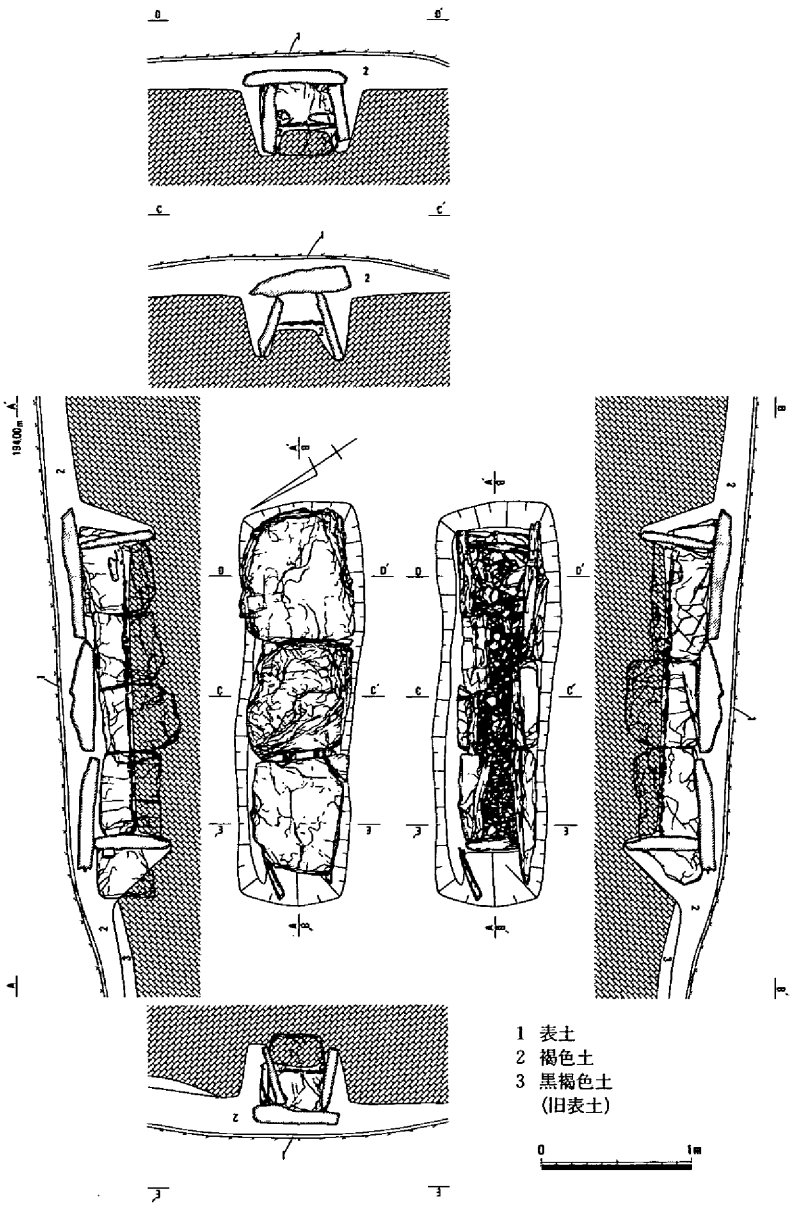
第259図　36号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

6は剣身長26.8cm・茎長9.0cm・剣身最大幅2.6cmを測る。剣身は断面菱形で、中央に鎬が見られる。茎の目釘穴は2か所存在し、茎尻は一文字尻である。

7の鉄剣は、剣身長20.5cm・剣身最大幅2.7cm・茎長5.7cmを測る。剣身は断面凸レンズ形で、明確な鎬は認められない。茎の目釘穴は、確認できていない。茎尻は、丸みを帯びた栗尻である。剣身には鞘の木質が、茎には柄の木質が付着しているが、両者の間に約1.8cm幅で木質の付かない部分があり、そのうち下位1.5cmには鹿角が付着している。鹿角製の鎺状のものが付属していたと思われる。



第260図　36号墳遺物出土状況(1／40)



第261図　36号墳主体部実測図(1／50)

(36)　37号墳

調査前の状況

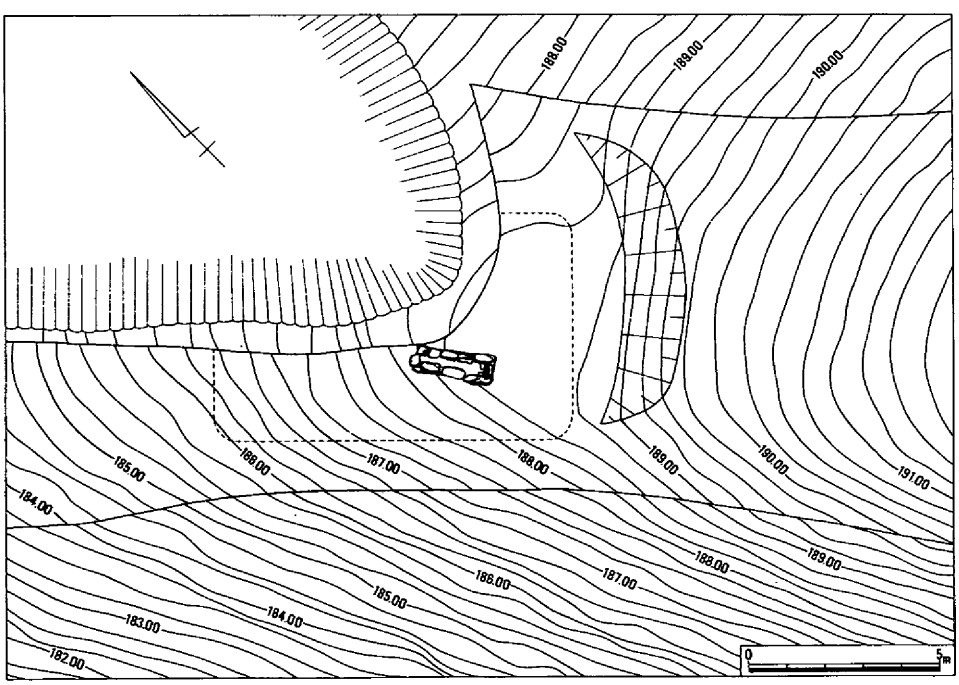
中原古墳群で発掘調査を実施した範囲の北西端部に位置し、前述した36号墳より約20ｍ離れて存在した。北側部分の墳丘は、宅地造成工事によってすでに削平されていた。その削平された断面を精査した結果、墳丘の盛土が認められたため、発掘調査に着手する以前の段階で、古墳の所在が明らかになったのである。

墳丘と周溝（第262図、図版161－1）

この古墳の墳丘盛土は極めて薄く、表土直下に主体部を検出したが、天井石は１枚も存在していなかった。墳丘の平面形は、長径9.50ｍ・短径6.00ｍの隅丸長方形を呈していた。地形の高い南東側の墳端に、尾根方向に直交する周溝が存在した。

主体部（第264図、図版161－2）

墳丘の中心よりやや南側へ寄った地点に、主軸が尾根方向に平行する状態で存在した箱式石棺で、天井石は１枚も残存しなかった。地山を長方形に掘り窪め、内法が長径192㎝・短径30～48㎝の石棺を造っていた。両小口には１枚、両側壁には５枚の板石を立てて据えていたが、土圧によっていずれも斜めに倒れていた。床面には小さな板石を敷き詰め、南東側小口部分に



第262図　37号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

は割石による枕石が認められた。

遺物出土状況

（第263図）

南東側の墳端で検出した周溝の底部から、鍬鋤先が出土した。また南東側壁に存在した枕石周辺の床面から、２点の勾玉と120点以上の臼玉が集中して出土した。

出土遺物

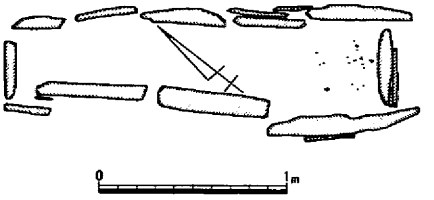
（第265・269図）

鍬鋤先（第269図８）はU字形で、約半分を欠損している。断面は側縁部分がY字形、刃部がV字形を呈している。

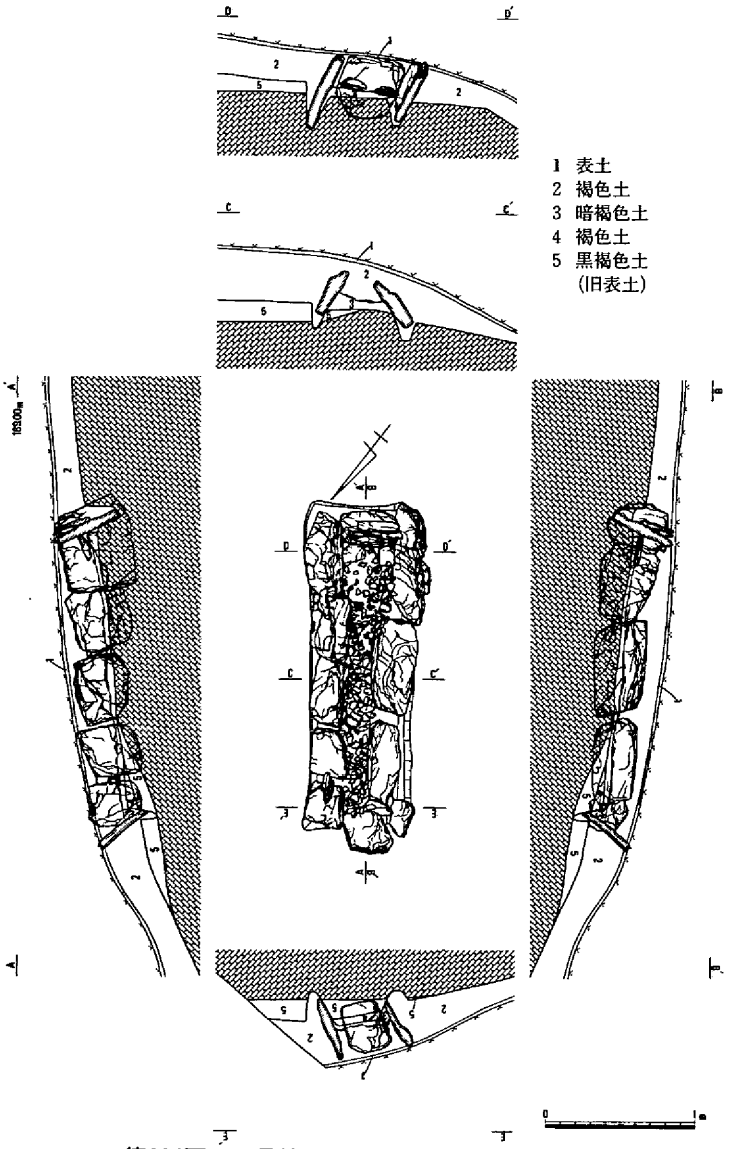
玉類（第265図）は、２点の勾玉と120点以上の臼玉で、どちらも明緑灰色を呈する滑石製のものである。

１の勾玉の計測値は、最大長2.33cm・胴最大径0.97cmである。２の勾玉の計測値は、最大長2.35cm・胴最大径0.96cmとなっている。

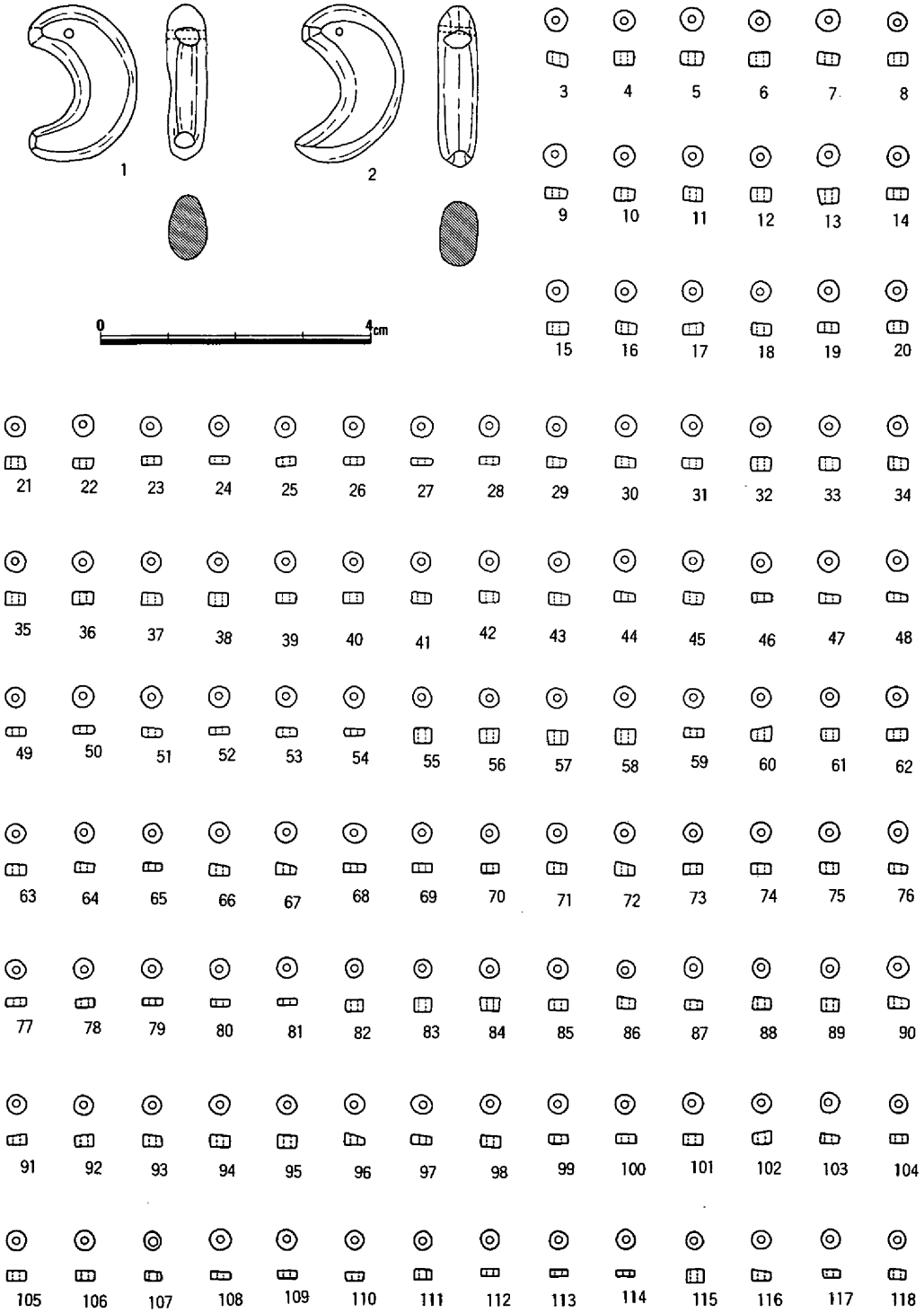
臼玉（３～118）は、胴径0.26～0.31cm・高さ0.10～0.22cmを測る。



第263図　37号墳玉類出土状況（1／40）



第264図　37号墳主体部実測図（1／50）



第265図　37号墳出土遺物(1／1)

(37) 38号墳

調査前の状況

37号墳と39号墳の中間に存在した古墳である。北側部分の墳丘は、宅地造成工事によってすでに削平され、主体部は存在しなかった。発掘調査に着手する以前の段階では、地形の高まりがほとんど認められなかったので、古墳が所在するとは思われなかった。

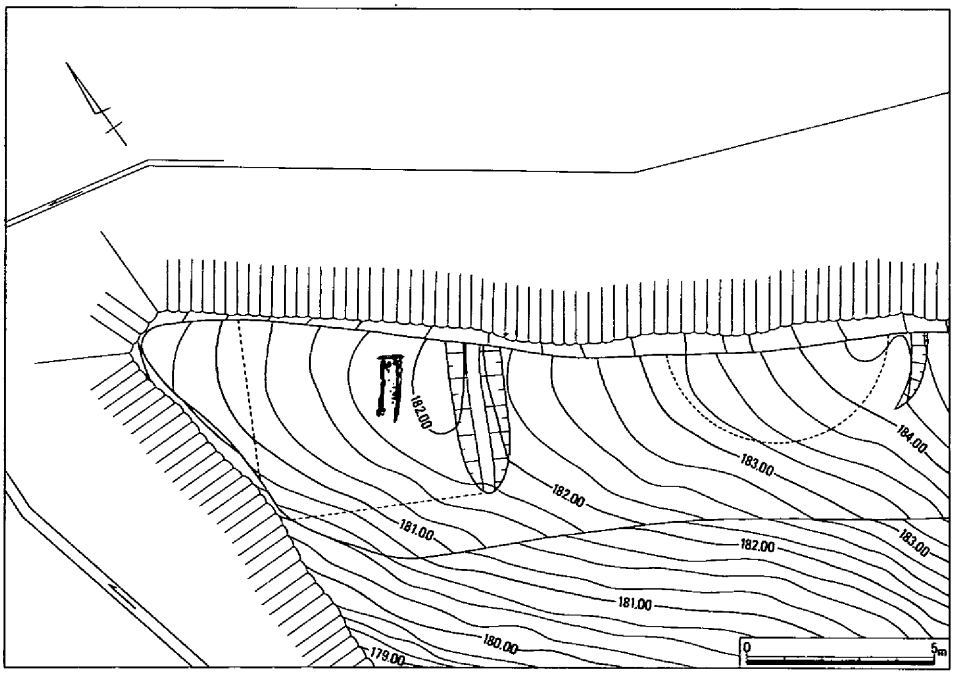
墳丘と周溝（第266図、図版163－１）

墳丘の半分以上が削平されて全容を知ることができないが、径約６ｍの小規模な円墳になるであろう。37号墳に面した地形の高い南東側部分に、周溝の一部を検出した。この古墳には主体部が存在しなかったが、尾根方向に平行した箱式石棺が造られていた可能性が強い。

(38) 39号墳

調査前の状況

中原古墳群で発掘調査を実施した範囲の最も北西端部に位置し、前述した37号墳や38号墳と同様に、北側部分の墳丘が宅地造成工事によって削平されていた。丘陵の先端部分に高まりが認められたので、削平された断面を精査した結果、墳丘の盛土を検出した。



第266図　38・39号墳調査後周辺地形測量図（1／200）

墳丘と周溝（第266図、図版163－2）

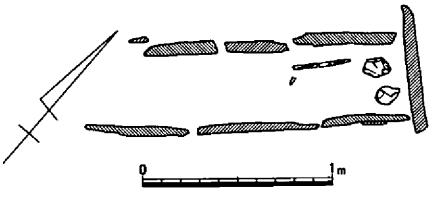
この39号墳の墳丘は、１辺が約6.00ｍの方墳になるであろう。墳丘の盛土は極めて薄く、38号墳に面した地形の高い南東側の墳端には、尾根方向に直交する周溝を検出した。南西側の墳端は、丘陵の斜面に位置したため、確認するのが困難であった。

主体部（第268図、図版164－1）

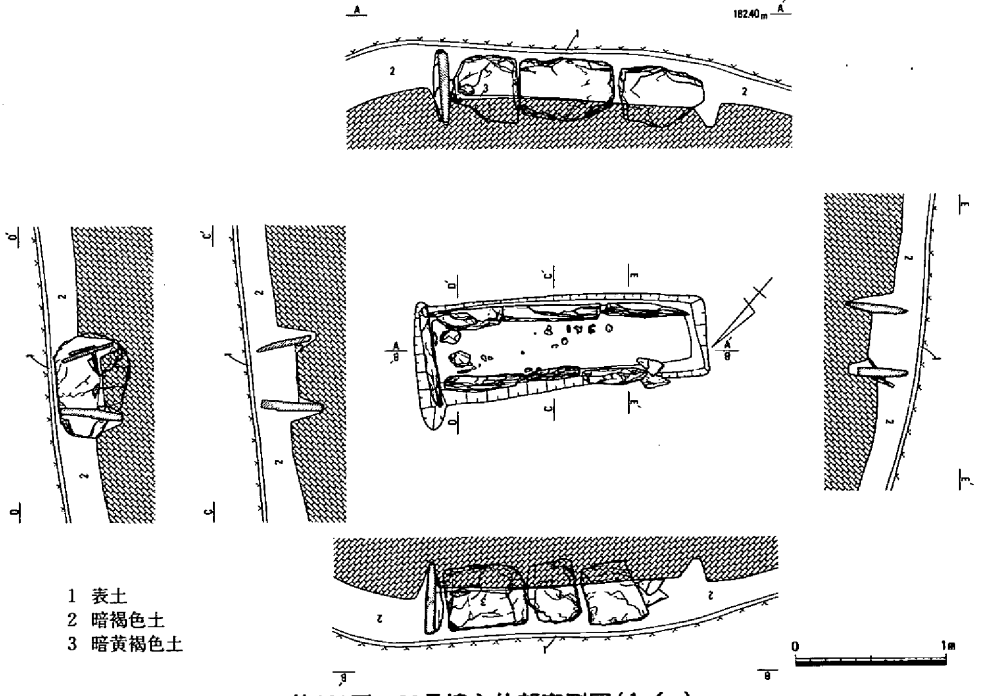
この古墳の主体部は、表土直下の浅い所で検出されたこともあって、天井石や片方の小口が残存しなかった。地山を長方形に掘り窪め、内法が推定長径約170㎝・短径37～40㎝の箱式石棺を造っていた。南東側壁には３枚、北西側壁には４枚の板石が使われていた。北東側小口は１枚の板石を両側壁の外側に立てており、他のすべての箱式石棺が両側壁で小口を挟む形態であるのとは異なっていた。北東側小口部分には割石の枕石が認められ、鉄剣が出土した。

出土遺物（第269図**9**、図版165）

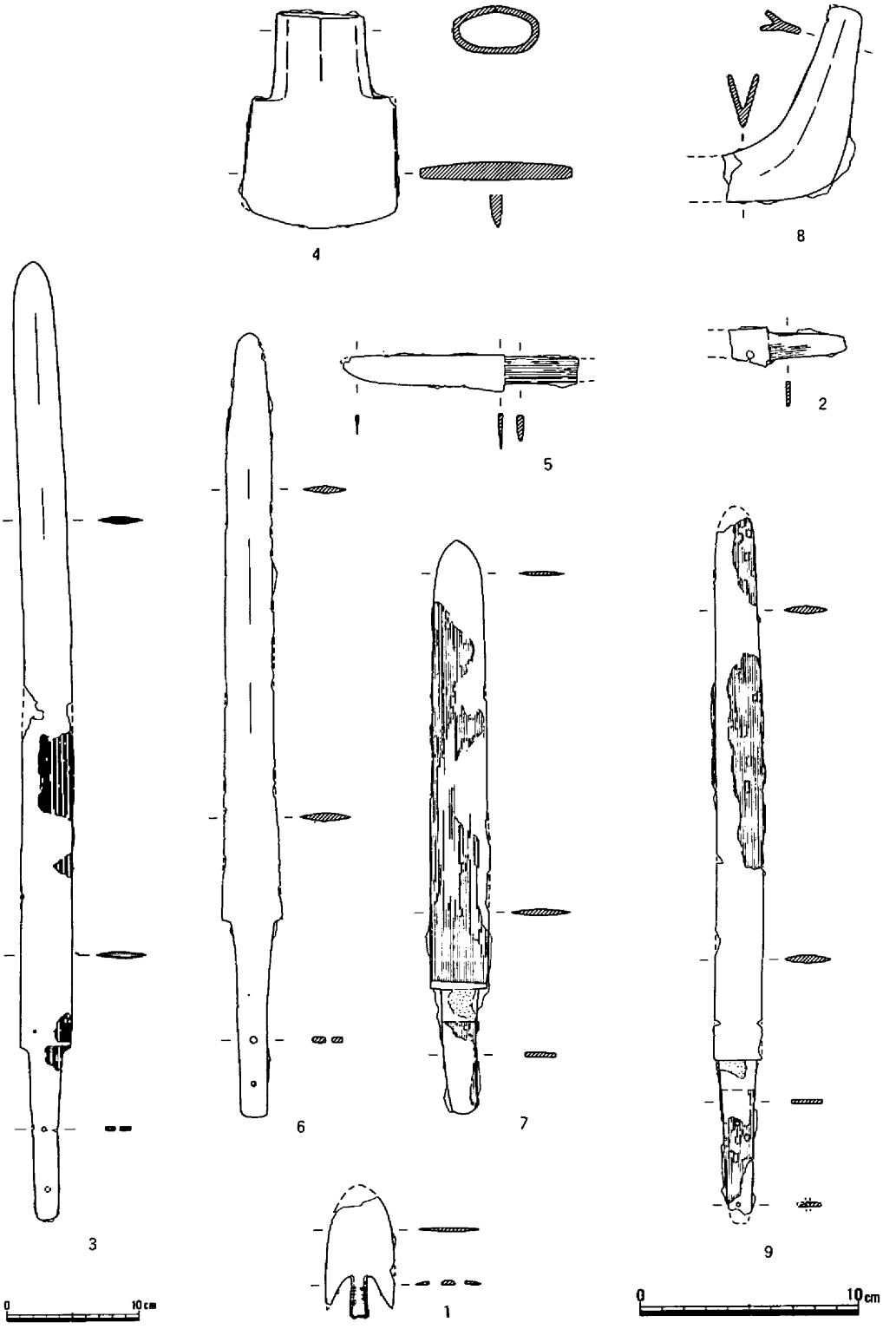
この鉄剣の計測値は、剣身長推定25.3㎝・剣身最大幅2.2㎝を測る。剣身は断面凸レンズ形で、明確な鎬は認められない。茎の目釘穴は２か所に存在し、茎尻の形態は不明である。剣身には鞘の茎には柄の木質が付着し、関から下位0.8㎝の部分には鹿角が認められる。（福田）



第267図　39号墳遺物出土状況（1／40）



第268図　39号墳主体部実測図（1／50）



第269図　31～39号墳出土遺物(1／5、1／3)

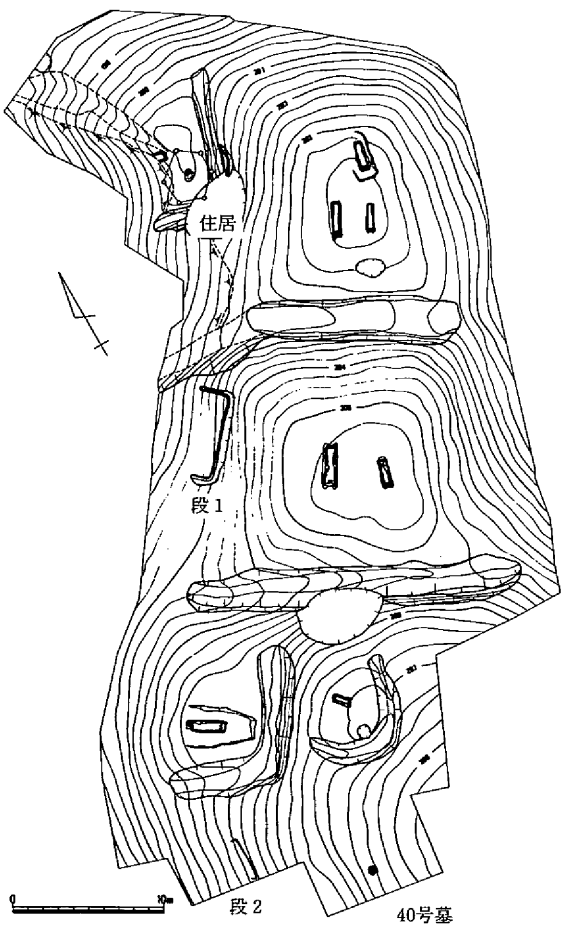
2．弥生時代の遺構、遺物

中原古墳群の所在する丘陵には、当初この時期の遺構、遺物は確認されてなく検出した遺構は、いずれも古墳群の調査中に新たに確認したものである。検出遺構は、27号墳の墳丘下に竪穴住居を24号墳西端と28号墳の南側で段状遺構をそれぞれ検出した。

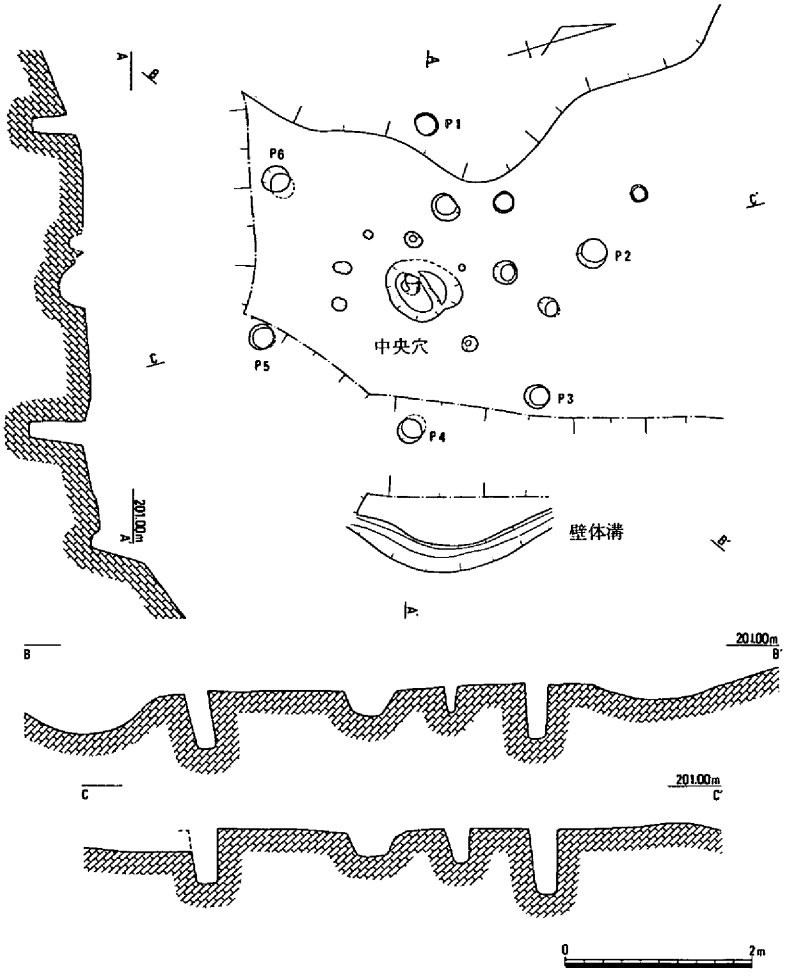
これらの遺構の検出状況から上記の古墳の調査区以外にも遺構の存在する可能性が考えられたために、23、24号墳の所在する尾根上と西側斜面を中心として周辺部も含めた確認調査と一部面的な表土剥ぎを重機を使用して行ったがこれ以外の遺構は確認されなかった。

(1)　竪穴住居（第271図）

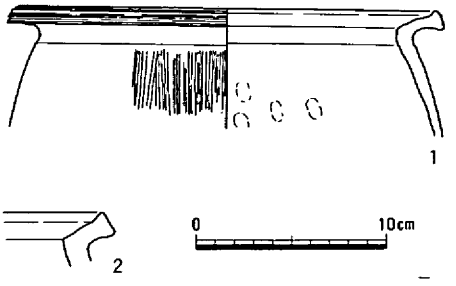
23～29号墳の所在する北方向に延びる小尾根の稜線より若干西に下った標高200ｍ付近の斜面に位置する竪穴住居である。住居の掘り方は、27号墳の周溝と風倒木痕によりかなりの削平を受けており23号墳の墳端付近にかろうじて掘り方と壁体溝の一部が残存している状況である。したがって床面も墳丘下にあたる中央ピット周辺がわずかに残っているのみであった。柱穴は、中央ピット周囲に検出した直径25～30cm、深さ50～70cmの６本が主柱穴と考えられる。この主柱穴のうちＰ４とＰ６の２本は、掘り方が下方にいくに従って中央ピットの方向に向かってかなり斜めに掘り込



第270図　竪穴住居・段状遺構位置図（1／500）



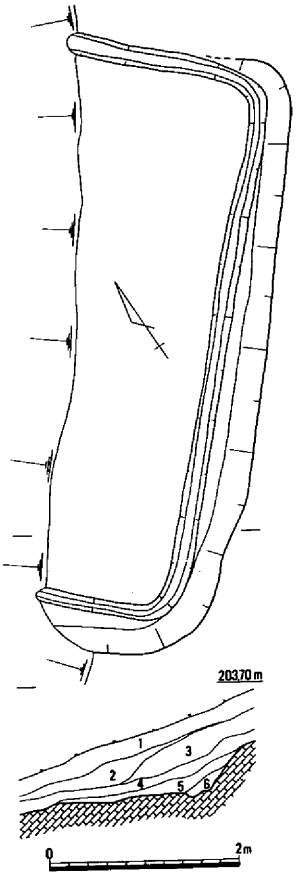
第271図　竪穴住居実測図(1／80)



第272図　竪穴住居出土遺物(1／4)

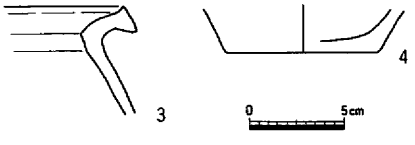
まれていた。中央ピットは、27号墳の調査中のトレンチにより若干上部を削平したもののよく原形を保っており直径70cmのやや不定形な円形をなし北側に浅い段を設けている。断面は、やや逆台形気味で最大深さ30cmを測る。

なお、中央ピットは、埋土に炭を多く含んで甕1が落ち込んだ状態で出土した。時期は、出土遺物から弥生時代の中期後半期であろう。

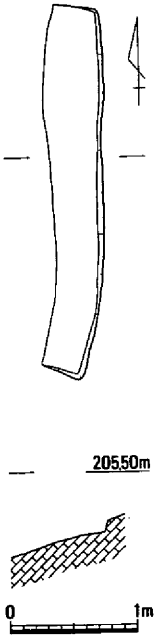


1　表土
2　オリーブ褐色弱粘質土
3　にぶい黄褐色オリーブ褐色粘質土
4　黒褐色土
5　黄褐色土
6　明黄褐色土

第273図　段状遺構１（1／80）



第275図　段状遺構１出土遺物（1／4）



第274図　段状遺構２（1／60）

(2)　段状遺構

段状遺構１　24号墳の北西側墳端の墳丘盛り土の下部に検出した段状遺構である。掘り方は、海抜203ｍ前後の等高線に沿い長さ6.4ｍ、深さ45cmのコ字形の区画を設けている。掘り方平坦部は、最大幅1.6ｍほど残存しほぼ水平面をなす。掘り方の周囲には、幅20cm、深さ５cmの竪穴住居に設置されているものと同様の壁体の溝が巡っている。

埋土は、旧表土４の下層に黄褐色を主体とする粘質土５、６層が堆積している。時期は、床面や壁体の溝の出土遺物から弥生時代の中期後半であろう。

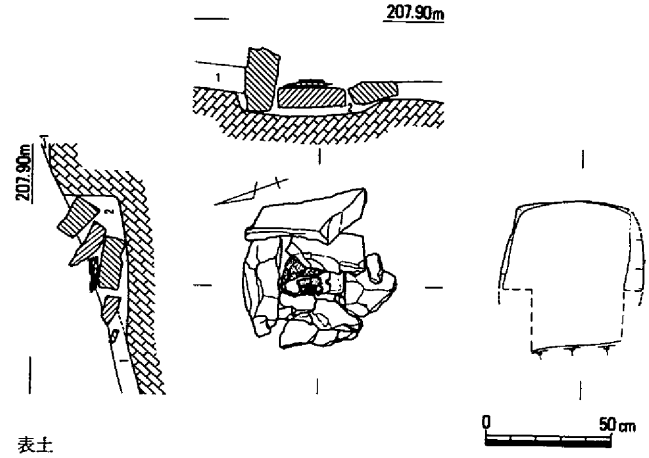
段状遺構２　28号墳の南側に段状遺構１と同一斜面に位置する段状の遺構である。掘り方は、海抜205ｍの等高線に沿い、全長2.95ｍ、深さ10cmを測るコ字形の区画をなす。平坦部は、最大40cm残存している。

掘り方内には、柱穴等の遺構は何等無く出土遺物も皆無で時期の確定がしがたいが竪穴住居や段状遺構１と同時期の可能性が強い。　（山磨）

3．中世の遺構と遺物

(1) 40号墓

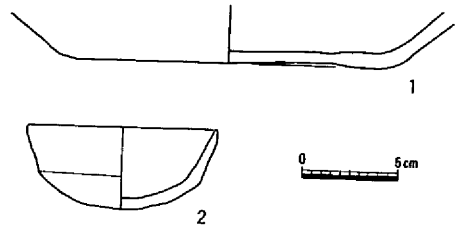
29号墳の南側７ｍの丘陵西斜面の標高207.5ｍ付近に単独で検出した石組みを持つ墳墓状の遺構である。削平が著しいために石組の一部と埋納容器と考えられる土器片が残存しているのみであった。



1　表土
2　明黄褐色粘質土

第276図　40号墓(1／30)

埋納容器は、石組のほぼ中央の一辺25cm、厚さ８cmの偏平な石材の上に設置したように出土した土師質の土器である。底径17cmを測る底部片のみの出土で器種は確定できない。なお、石組の前面の流土中より同様の焼成と胎土をなす椀形の土器が出土している。



第277図　40号墓出土遺物(1／4)

石組は、南北55cmを測る浅いコ字形の掘り方の中央に方形の石材を置きその周囲を石材で囲ったものと考えられる。周囲の石材は残りが悪く東側と南側では倒壊し、西側では既に消失している。石組みの規模は元位置を保つ北側の石材の形状や設置から内法30cm程の埋納容器が納まる大きさであったと考えられる。

火葬墓等の埋葬遺構と考えられるが、二点の土師質土器以外に出土遺物がなく、時期や遺構の性格の確定がしがたい。

(山磨)

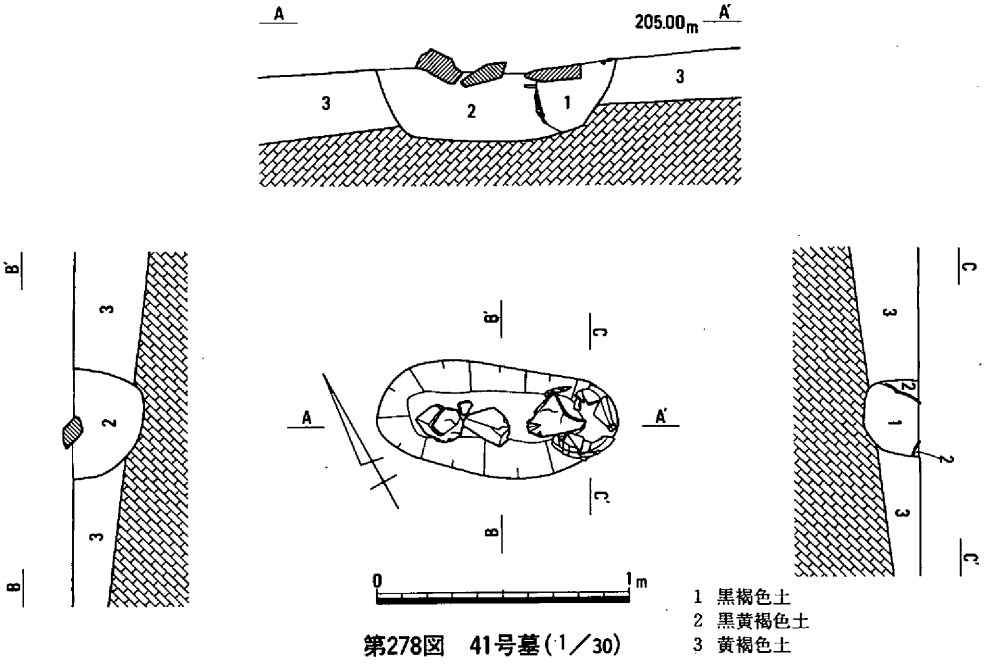
(2) 41号墓

中原古墳群で発掘調査を実施した範囲のほぼ中央部に位置し、31号墳の墳丘内に存在した。31号墳の主体部である箱式石棺や45号土壙の北東方向で、地形の高い部分に存在した周溝よりも内側の地点に検出した。調査に着手する以前の段階ではこの遺構の所在は不明であったが、31号墳の墳丘検出作業を行っていて土器が出土したため、はじめて確認されたのである。

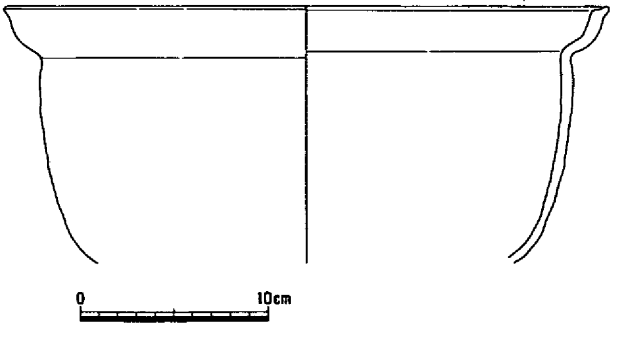
31号墳の墳丘盛土である黄褐色土を、長径92cm・短径42cmの楕円形に近い形態に約30cmの深さまで掘り窪めて土壙を造り、その南東隅に土師質の土鍋を口縁が下になるように伏せて入れていた。さらに土鍋の上には、厚さ約5cmの板石を検出した。この石以外にも土壙の上面には2個の割石が存在したから、後世に流入したものかもしれない。土壙内には暗黄褐色土が堆積していたが、土鍋以外には遺物は認められなかった。

土壙内から出土した土鍋は、底部を欠損している。口径31.8～32.1cm・頸部径27.9～28.3cmである。底部から胴部にかけて緩やかに内湾して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁端部に連なっている。口縁部は端部へ移行するにしたがって器壁が厚くなり、上面には浅い窪みが認められる。内外面とも器表面全体が剝落しているため、調整手法を観察することができないが、おそらくナデを施していると考える。外面の胴部から底部にかけて凹凸が見られるから、指頭圧痕が残存しているのであろう。

なお外面の器表面には部分的に煤の付着が認められるから、日常生活に使っていたものかもしれない。



第278図　41号墓(1／30)



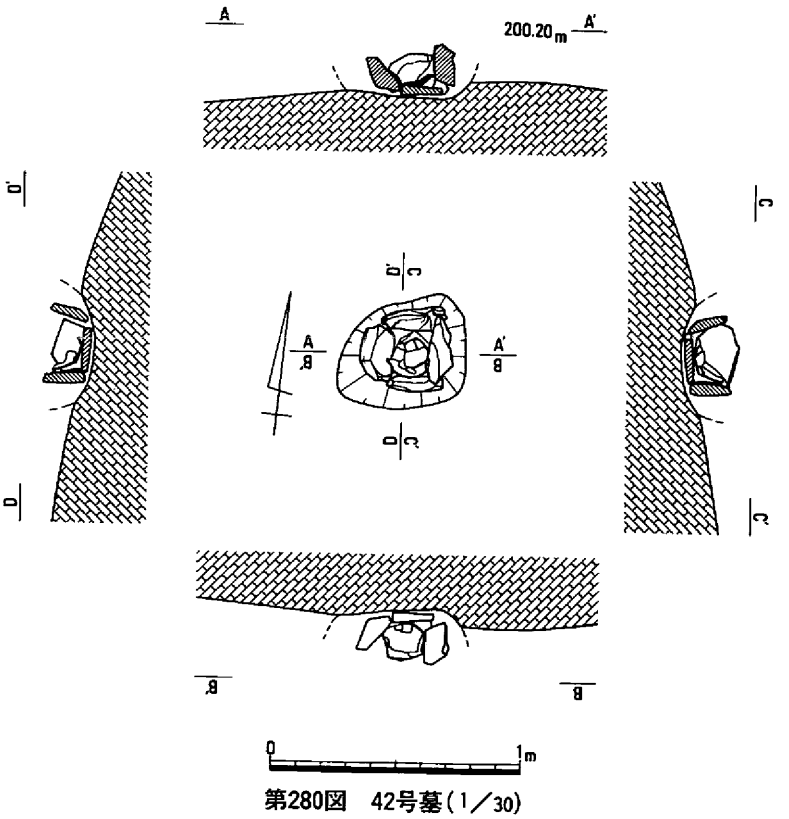
第279図　41号墓出土遺物(1／4)

(3) 42号墓

中原古墳群で発掘調査を実施した範囲のほぼ中央部に位置し、尾根上の平坦面が最も広くて数多くの古墳が検出された地点の北西側に存在した。この場所は33号墳と43号石列の中間部分で、丘陵の尾根から北方向へ少し下った緩斜面になっていた。発掘調査に着手する以前の段階では地形の高まりはなく、丘陵上の全面調査を実施してその所在が明らかになったのである。

地山を長径約50cm・短径約45cmの不整形な形態に浅く掘り窪め、その掘り方の内部に厚さ約3cmの偏平な1枚の板石を敷いていた。さらにその板石を上方から見て「ロ」字形に囲むように4個の割石を据え、床面の内法が長径20cm・短径14cmになるようにしていた。北側と南側に存在した石は板状を呈して薄かったが、東側と西側の石は平坦な面の少ない不整形で全体が厚いものになっていた。内面の床面からの高さは、東側の壁面で17cmであった。この石囲いの上面には石がなく、上方へやや開く形態になっていた。内部には土師質土器である甕の胴部から底部にかけての破片が存在し、人骨の一部と思われる骨片が認められた。この遺構は、前述した40号墓と所在した地点は遠く離れていたものの、石の使われた状態が告示していたため、ほぼ同時期の遺構になると考えた。

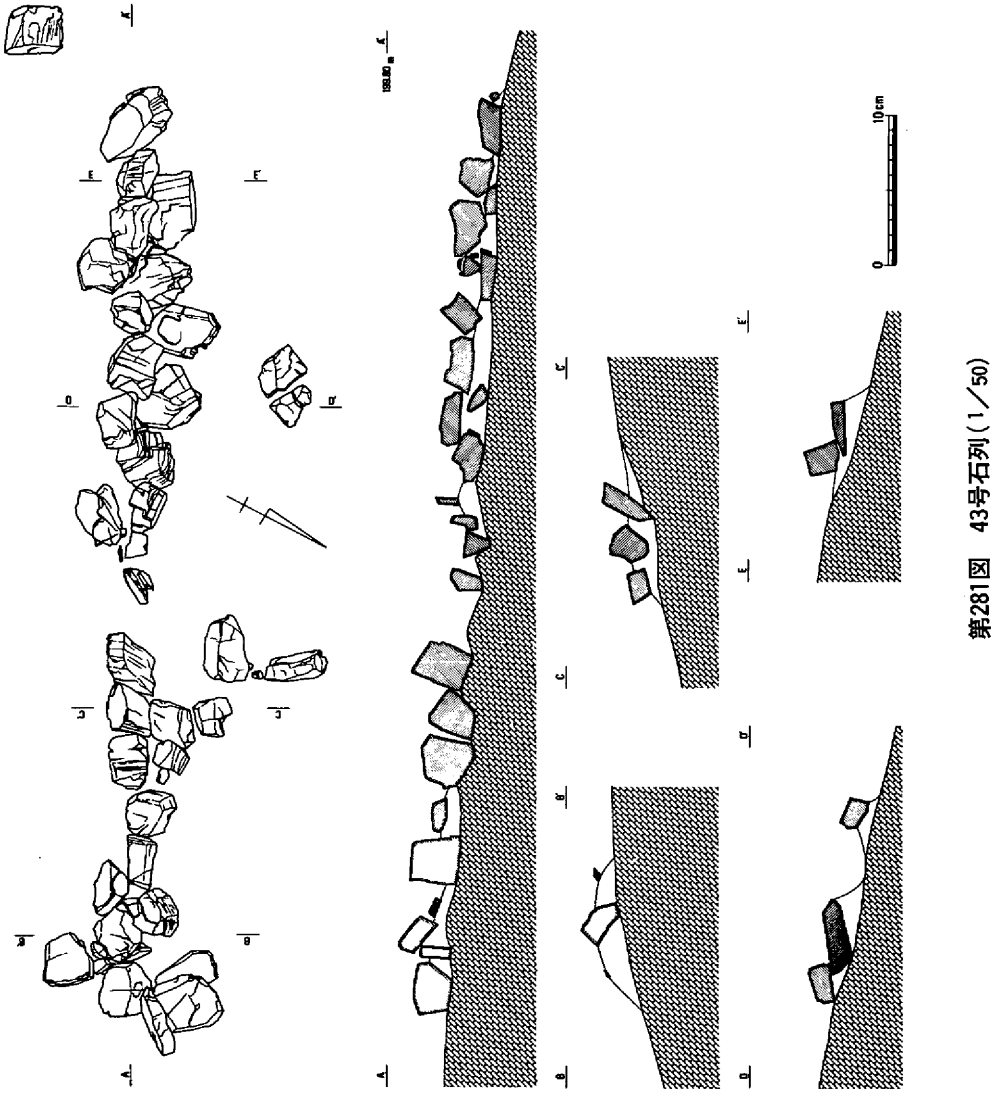
石囲いの内部から出土した土器は、人骨を入れる容器として使われていたと推定する。器形の特徴を如実に提示する口縁部を欠損しているため、確実に断定することは不可能であるが、内面の底部周辺に指頭圧痕が顕著に認められ、外面の胴部にクシ状工具による縦方向の痕跡が存在するから、中世の土師質土器であろうと考えた。



第280図　42号墓(1／30)

(4) 43号石列

中原古墳群で発掘調査を実施した範囲の中央よりやや北西側へ寄った地点に位置し、15号墳と42号墓との中間に存在した。この場所は丘陵の尾根上に位置し、延長約７ｍにわたって人頭大の割石が直線的に並んでいたが、部分的には複数の石が存在する所も認められた。これらの割石のほとんどが、地山に接する状態か旧表土の上面に置かれており、それらの割石を除去して地山面を精査したが、遺構は何も検出できなかった。割石の間から勝間田焼の椀と推定される小破片を採集したが、図化することは不可能であった。この石列は中世の遺構として提示したが、遺構の性格については判断することができなかった。



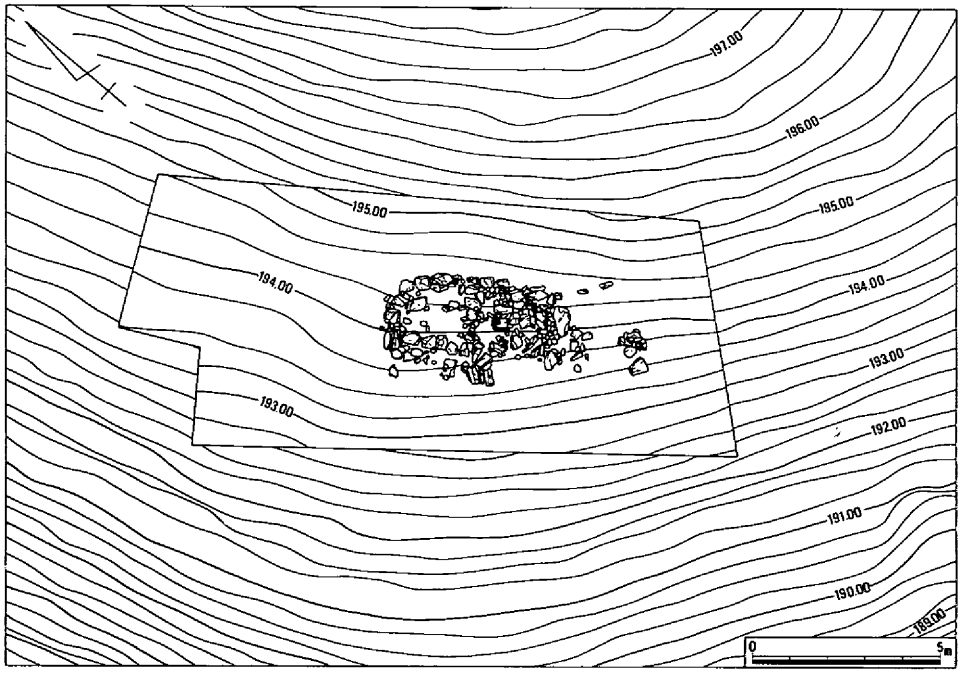
第281図　43号石列(1／50)

(5) 44号墓

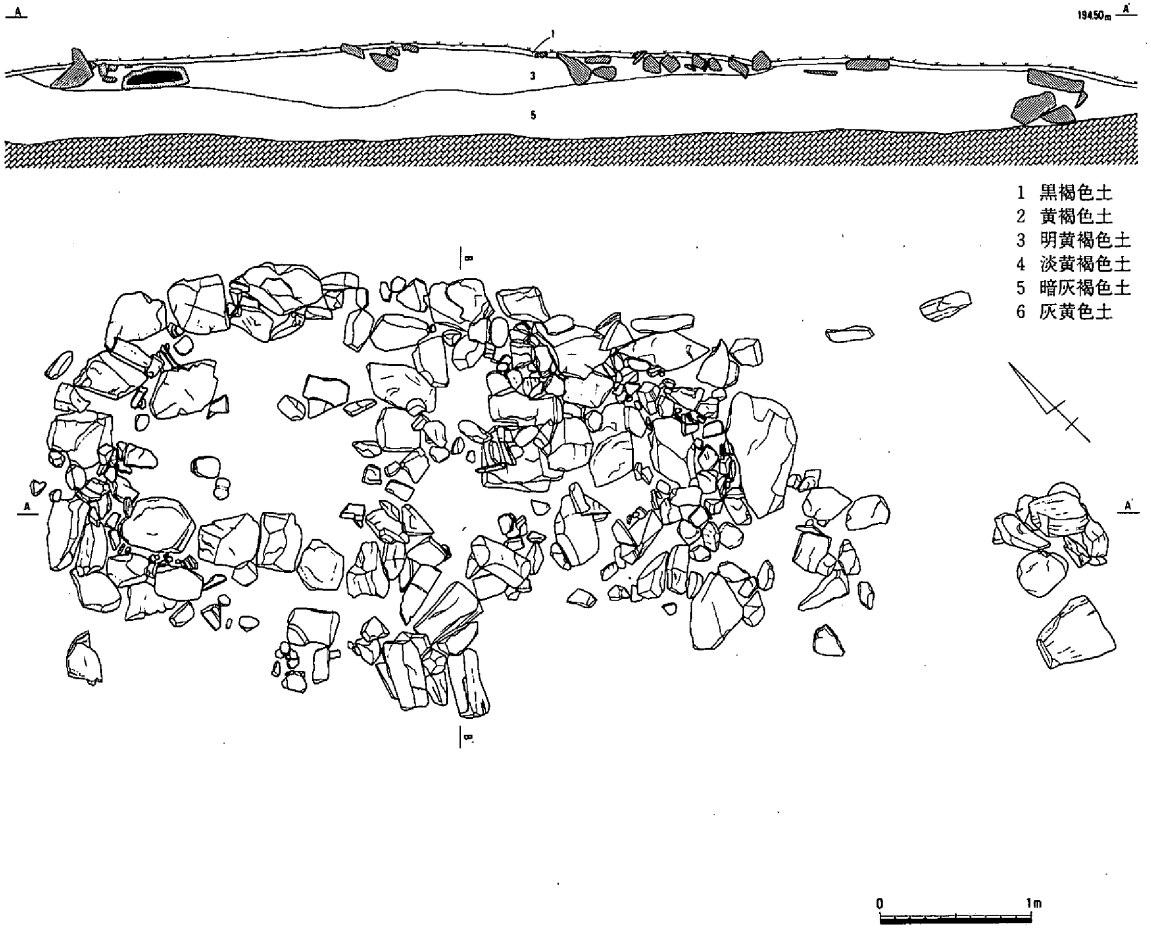
中原古墳群で発掘調査を実施した範囲の北西部分に位置し、17号墳の南西方向約20ｍの地点に存在した。17号墳から連なる斜面の傾斜がわずかに緩くなって平坦部分を形成し、人頭大から拳大の割石が散乱していた。当初は古墳が存在するものと考えて調査を進めていたが、備前焼壺の破片や五輪塔の断片が出土したため、中世墓であることが判明した。

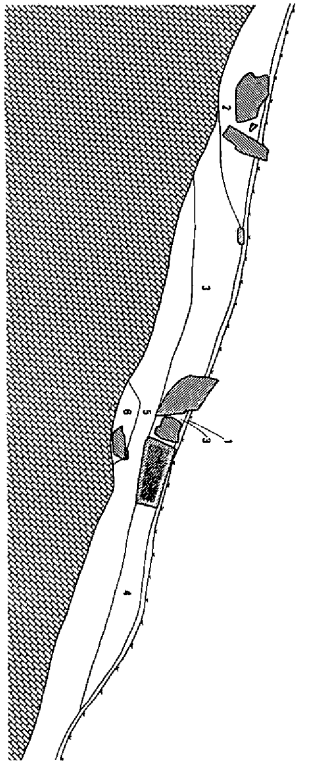
約３×７ｍの長方形の範囲に割石が敷き詰められ、土器片や鉄釘が出土した。割石を除去して地山面を精査したが、炭化物が少量だけ認められたものの、土壙などの施設はなかった。

出土した遺物には、備前焼壺と鉄釘がある。**1**は備前焼壺の口縁部から胴部にかけての破片である。口径約12cm・高さ約３cmの円筒形の口頸部を有し、口縁端部は半球形に折り返された「玉縁」状になっている。胴部は倒卵形で、最大径の約19.5cmは中央よりやや上位に存在するようである。内面の胴部には粘土紐を巻き上げた痕跡が認められ、ヨコナデを施している。口頸部は全体にヨコナデを施している。焼成は良好で、赤褐色を呈している。**2～8**の鉄釘は、いずれも先端を打ちのばしてＬ字形に折り曲げ、頭部を形成している。頭部の形態は、長方形ないし台形である。**2**と**3**は木質が付着しており、**2**は全体に横方向、**3**は下半部のみに縦方向の木目が認められる。これらは木棺に使用されたものと考える。

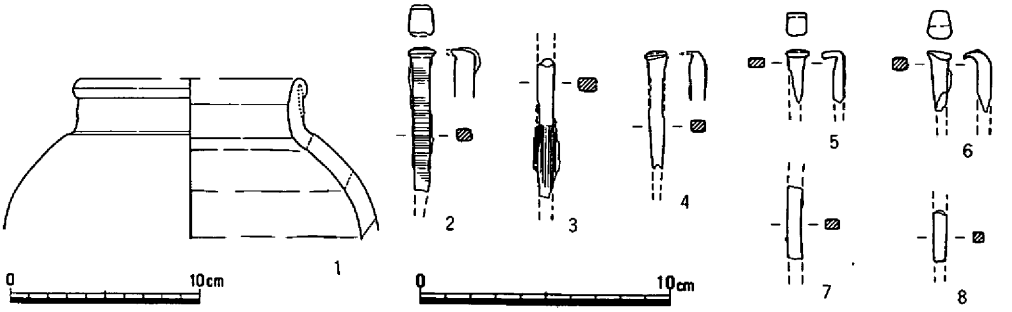


第282図　44号墓調査後周辺地形測量図（1／200）





第283図　44号墓（1／50）



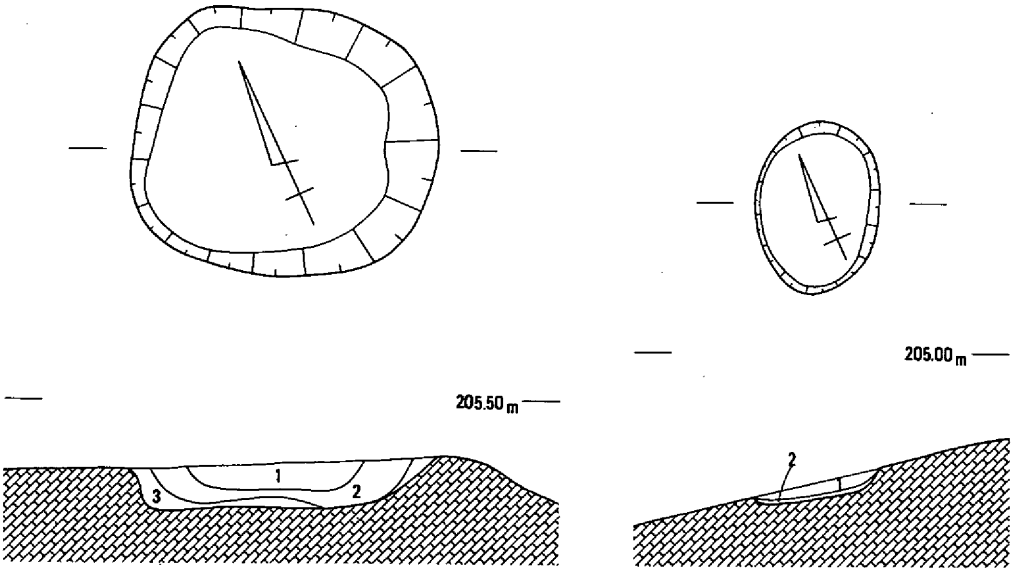
第284図　44号出土遺物(1／4、1／3)

(6)　45号土壙

31号墳の墳丘内に検出した土壙で、主体部と周溝の間に存在した。平面形は長径120cm・短径107cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは18cmであった。内部には炭化物を多く含む黒褐色土、下位に焼土が認められる暗褐色土、黄褐色土が堆積し、遺物は存在しなかった。

(7)　46号土壙

31号墳の墳丘に存在した土壙で、長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは6cmであった。内面には黒褐色土と黄褐色土が堆積し、遺物は何も存在しなかった。　(福田)



第285図　45号土壙(1／30)　　第286図　46号土壙(1／30)

4．小　　結

中原古墳群は、久世町の市街地から東方向へ遠く外れた落合町との町境に面している一般国道181号沿いの丘陵上に所在し、眼下には目木川が旭川に流入する肥沃な沖積平野を望むことができる。この恵まれた立地状況を考慮しながら、発掘調査によって得られた知見に基づき、若干の説明を加えてみたい。

検出した遺構とその時代

中原古墳群が所在した丘陵上へ人間が最初に足を踏み入れたのは、弥生時代中期後半の時期と考えられる。27号墳の墳丘下に縦穴住居を検出し、24号墳の西端と28号墳の南側で段状遺構を検出した。これらの遺構は、一般国道181号に面して北側へ向かって舌状に張り出した丘陵の一部分に限られていた。

古墳時代の中頃になると丘陵上は最盛期となり、32基にもおよぶ多くの古墳が築造されていた。古墳の形態には円墳と方墳が混在しており、規模も大小様々であった。

古墳時代の後半になると、丘陵の北側に位置する尾根の先端部分に、25号墳と26号墳の横穴式石室を埋葬施設とする古墳が存在した。また丘陵上の平坦部分にも、小竪穴式石室を埋葬施設とする33号墳が築造されていた。発掘調査を行わなかった14号墳も横穴式石室を有する古墳であるから、この古墳時代後半の時期に属するであろう。

鎌倉時代以降の時代になると、41号墓や44号墓のような中世墓が確認されている。これらは火葬墓に関係のある埋葬遺構と考えられるが、詳細については不明な点が多い。

古墳時代中頃の古墳について

中原古墳群に所在した古墳の大多数を占める古墳時代中頃の古墳に関して、発掘調査によって得られた知見を簡単に述べてみたい。

これらの古墳の形態には円墳と方墳が認められたが、円墳は丘陵の尾根が枝分かれした部分や丘陵頂部に比較的広い平坦部分が存在した地点に造られ、比較的大規模な古墳に限って葺石が施されていた。方墳は尾根方向と直交するように両端部分を掘削して周溝を設置したため、必然的に生じた古墳の形態である。このことはできるだけ省力化に努めることで、最大限の規模を有する墳形を求めた結果によると考える。したがって当然のことながら、墳丘の盛土は極めて少ない。

埋葬施設は、例外なくすべて箱式石棺であった。1基の古墳に埋葬施設が1基だけのものがほとんどであったが、規模の大きな古墳になると2基または3基の埋葬施設が存在したものも認められた。特異な例として、墳丘の端部や周溝内に埋葬施設を検出したものや、精査したにもかかわらず埋葬施設を発見できなかった古墳もあった。これらの埋葬施設は、地山面を深く

掘り窪めて設置したものが一般的で、天井石の上面に多くの割石を無造作に置いたものや、粘土で全体を包み込んだものも存在した。埋葬施設の床面は、地山を掘り窪めただけのもの、小さな割石を敷き詰めていたもの、河原石の砂利を置いていたものがあった。小口部分に枕石が設置されていたが、多くは片方だけにあったが、両小口部分に存在して2体の遺体が埋葬されていたと推定されるものも認められた。また少数ではあるが、内面全体に赤色顔料を塗布していたものもあった。

埋葬施設内の遺物は、何もないものがほとんどであったが、数点の鉄器が副葬されていたものも存在した。特殊な埋葬施設として大量の遺物が出土したものがあり、555点以上の臼玉や37点以上の竪櫛が確認された。

周溝や墳丘端部から須恵器が出土した。15号墳、24号墳、28号墳、34号墳に伴うもので、これらの須恵器を陶邑古窯址群の編年[1]と対照するならば、ＯＮ46の土器群に酷似し、5世紀後半の時期に相当すると推定される。

中原古墳群で大多数を占めるこれらの古墳は、墳丘や周溝だけでなく埋葬施設や出土遺物などあらゆる面で共通点が認められることから、中原古墳群は5世紀後半の大古墳群であることが理解される。

古墳時代後半の古墳について

無袖の横穴式石室を内部構造とする25号墳は、石室内から出土した須恵器を陶邑編年と比較検討するならば、ＴＫ209のものに類似しており、7世紀初頭の時期になるであろう。

奥壁部分がわずかに残存した26号墳は、玄室内と石室の前面から出土した須恵器を陶邑編年と対照するならば、ＴＫ43のものに共通点があり、6世紀後半の時期に属すると考える。

小竪穴式石室を埋葬施設とする33号墳は、石室内から2点の杯身が出土している。これらの須恵器は陶邑編年のＴＫ217でも古相のものに類似しており、7世紀中頃に近い7世紀前半の時期に相当するであろう。（福田）

註

1　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

第四章　結　　語

1　蒜山地区の調査

蒜山地区の調査において認められたＡＴ火山灰降下前の岩宿時代から鎌倉・室町時代にいたる遺構・遺物が検出された。ここであらためて、時代を通じての遺跡の内容について触れて今回の調査のまとめとしたい。

ＡＴ火山灰降下前における遺構及び遺物が認められたのは、中山西遺跡Ⅰ区・城山東遺跡Ⅲ区・下郷原田代遺跡No.２地点からである。このうち、中山西遺跡からは環状ブロック（第14図）が認められた。このブロックは、遺物の認められる最大の径を測ると14.5ｍで、その密集度の濃い部分の径が10.5ｍを測る。そして、中央部には遺物の分布が疎となる所が認められ、その範囲は径4.5ｍを測る。調査区の位置関係からして、これ以外にこの丘陵上に関係する同種の遺構が存在する可能性がほとんどないと思考される。また、立地する地点も（第２図）に示した通り、丘陵のやや高まりとなる平坦部に形成されている。このようなことから、第１回岩宿フォーラム[(1)]で検討されていた『環状ブロック群』として認識することに躊躇せざるを得ない。このことは、当環状ブロックが単独で認められることからこれらに伴う諸々の性格付けの方向性が異なり、より多様性のある認識が思考される。

環状ブロックは、第15図の石器分布図と第17図の炭化粒分布の密集部分が北と南にそれぞれ分かれて認められる。そして、いずれにおいても中央部に4.5ｍほどの分布の疎なる部分を形成させている。このことからすれば、この空白部が居住の場として用いられた可能性が思考される。しかし、出土する石器については、制作工程を知る資料が石材の性質とも合わせてあまり認められず、剝離あるいは微細な使用痕のあるもので主に小形の道具を作っていたことが知られる。このようなことから一般的な居住の場としてとらえるに躊躇する。しかし、当環状ブロックはその在り方から狩猟時における小屋の性格を備えていたことが考えられる。このことは、立地が主に東に広がる丘陵緩斜面及び旭川の流域を臨むことができ、水場も南谷に接して認められるなど恵まれた条件を備えている。狩猟時に使用する小屋であるため用いる狩猟具は、集落から携帯してくるのが当然でありその他には近場で手に入る石材により道具を補ったと思考される。中央の遺物の疎なる部分を中心として何らかの上屋が存在し、その周りで必要な道具を補った結果としてこのような環状ブロックを形成させたと思考するものである。そして、この形態の形成の主体となったのは、この地域を猟場とする集団の狩猟チームの移動結果によると判断される。

環状ブロックが存在する地点から直線距離で北東へ220ｍの所にＡＴ直下に黒曜石の分布が見られる城山東遺跡Ⅲ区が存在する。

下郷原田代遺跡No．２地点は、長さ100ｍ幅20ｍほどの細長い丘陵上のＡＴ直下からＡ～Ｃの３か所の石器と炭化粒のブロックが認められた。Ａブロックは、黒曜石で構成されここから北西方向へ40ｍの地点にサヌカイトのＢブロック、さらにここから35ｍの地点に黒曜石のＣブロックの黒曜石が確認された。この３地点のブロックが同時に形成されたか否かについて判断しえない。先に述べたように出土層は、いずれもＡＴ直下から確認されており、出土層が相違するということはない。石材は、各ブロックとも単一のもので構成されているが、Ｂブロックで黒曜石の剥片が１点認められているだけである。

Ｂブロックは、先に報告したようにその分布内容からａ～ｅのブロックが推定され、それぞれ接合資料が存在することから有機的関係を有していたことが知られる。この石器のうち石核と剥片が主であり、出土数の割合は石核が3.9％でほかは剥片で占められている。その剥片の重さは、１ｇまでのものが全体の80％を占めている。このようなことから、このブロックは剥片と石核によって構成されていることが認められる。さらに、石核は第196図に示したように意識的に折られていることが観察された。折られた後も調整を加えているものが認められる。このことから、石核の再利用とも考えられるが、それ自身スクレイパーとしたものをさらに折るということは、何らかの目的意識をもって行なったことが思考される。

しかしながら、このような内容を有する出土例は管見において見いだしていない。主に横長剥片が多く認められ、瀬戸内技法との関連を想定することができる。ただ、その特徴的な内容である横長剥片を連続して得ているということは確認できていない。したがって、まだその技法の確立していない段階と想定されるが、伴出した台形様石器の可能性のある資料そして石核の折るという行為を含めた内容をおいて他の遺跡との比較検討が必要であろう。

以上のＡＴ直下で石器が認められた地点について検討してきたが、それぞれの地点の前後関係は全く不明である。何れの地点も、ＡＴの降下の際に最初に地表面に達すると見られる５㎜前後の軽石と接して出土が認められている。このことからは、同一地表面に露呈していたことが理解できるが時間的幅はやはり不明である。

地表面に明確に掘り込まれた遺構として最も古くなると考えられるのは、落し穴である。落し穴は、中山西遺跡Ⅰ・Ⅱ区、城山東遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区、下郷原和田遺跡、下郷原田代遺跡No１．２地点において認められた。これら検出されたものが全て岩宿時代に属するかについては、何れも出土遺物がなく時期の判断ができ得ないでいる。しかしながら、その埋土から

Ⅰ　全く黒ボコを含まないもの。

Ⅱ　上層に黒ボコを含みローム層を埋土とするもの。

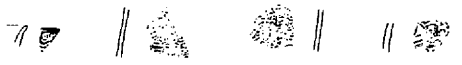
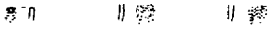
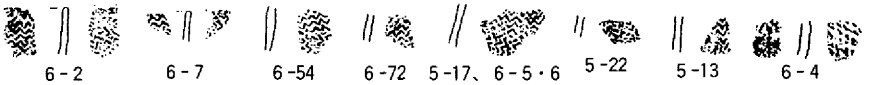
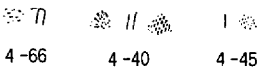
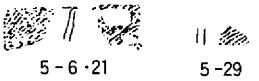
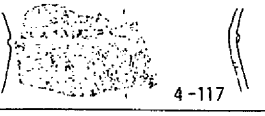
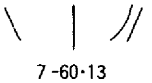
Ⅲ　下層に黒ボコを含み黒ボコとロームブロックを混入するもの。

Ⅳ　黒ボコの単純層とするもの。

以上が各地点で認められた基本的な埋土の内容である。第二章第三節において記したように黒ボコの形成は、１万年以降に出現したということから埋土中に黒ボコを含まないⅠが時期的に最も古い段階に位置すると考えられる。その時期が、縄文時代の枠のなかに止まるのかあるいは、さかのぼって岩宿時代になるのかについては判断しがたいのである。

Ⅰと考えられるのは、中山西遺跡Ⅰ区No.11. 12、Ⅱ区No.４と下郷原田代遺跡No.２地点No.26である。Ⅱは、下郷原田代遺跡No.２地点No.25がその典型的なものである。Ⅲは、調査された落し穴の大半がこのような埋土となっている。Ⅳは、城山東遺跡Ⅰ区No.１・２、下郷原和田遺跡のNo.49～52がこれである。このうち後者のNo.52の埋土中から弥生時代後期後半の土器が出土しているのが遺物を伴う唯一の例である。このようなことから、落し穴の属する時代は岩宿時代から弥生時代ということになる。しかし、Ⅳについては弥生時代に入る可能性を考慮しても妥当とされよう。

次に、これらの在り方について検討を加えておきたい。Ⅰは、中山西遺跡Ⅰ区において数個まとまって設けられている可能性があるが、他は比較的広い地域を単発的に認められる。形態も方形と円形のものが認められるが逆茂木を用いたと考えられる底のピットは認められていない。前者は、幅が狭く後者は円の径が小さく、狩猟対象が填まり込むと身動きがとれず、小形のものについては抜け出せないように深くかつ垂直に掘り下げられている。Ⅱについても、Ⅰと同様な内容を示している。Ⅲは、他のものとの比較検討から縄文時代に属するものとして考えて相違ないものと判断している。この種のものは、丘陵上にまとまってあるものと計画的に設けられたことが判断されるものが認められる。前者は、城山東遺跡Ⅵ区、下郷原田代遺跡No.１地点とNo.２地点である。これらの落し穴は、形態・逆茂木の有無などから時間を接してかつ集中する姿で設けられていることから恒常的猟場として営まれていたことが思考されるのである。一方後者については、城山東遺跡Ⅳ区におけるNo.11・12・17～19の５個の落し穴が丘陵の谷から高みを通てやや弧状を描きながら設けられている。これらは、上面及び底面形態そして逆茂木の存在などほぼ同一の内容を示していることから同時計画的に配置されていたことが伺い知れるのである。このことは、前者のような多人数による追込み的な集団的狩猟でなく、かなり広い範囲を猟場とした小人数の狩りの姿が想定されるのである。この両者の狩猟形態が同時に営まれていたかどうかについての判断はしかねるのである。Ⅳは、城山東遺跡Ⅰ区のNo.１とNo.２そして下郷原和田遺跡のNo.49～52である。これらは、埋土中にロームブロックをほとんど含まないものである。下郷原和田遺跡からの出土遺物から弥生時代に属する可能性が考えられるものである。

I		 4-32　4-5・47　7-27・47　7-30
		 5-17　5-19　4-1
		 6-2　6-7　6-54　6-72　5-17、6-5・6　5-22　5-13　6-4
II		 4-66　4-40　4-45
		6-26
III		4-137
IV		 5-6・21　5-29
V		7-67
VI		4-20
VII		 4-117
VIII		7-55
IX		 7-60・13

第1図　分類表

縄文時代早期の竪穴住居は、４軒検出されている。その各住居の相互関係については第二章第三節の小結で述べているのでここでは、その出土土器について見て行きたい。施文内容によって以下のように分類した。

Ⅰ類　山形文を施文するものである。これをさらにａ～ｃに細分した。

Ⅰａ　口縁部は、やや外反し端部近くでさらに屈曲気味となり、端部を丸くしている。外面に鈍角の横位密接施文と帯状施文が認められ、凸部は平坦となる。器壁は、4.7～５㎜の厚さを測る。

Ⅰｂ　口縁部は、直立し、端部は平坦となる。文様は、外面および内面に横位密接施文をし、凸部は平坦となる。

Ⅰｃ　口縁部は、直口気味で端部は丸みを有する平坦となす。内外面に縦位と横位の密接施文が認められ、凸部が丸くなりカマボコ状を呈すが波頂部は鋭角となる。器壁の厚さは、7.1～7.8㎜を測る。繊維が僅かに含まれている。

Ⅱ類　楕円文を有するものである。これをさらにａ～ｂに分けた。

Ⅱａ　口縁部は、外反気味となり端部は平坦となる。文様は、内面に横位の外面には縦位の施文が認められる。原体は、長径6.4～4.4㎜短径2.7～2.1㎜で器壁の厚さは７～5.9㎜を測る。

Ⅱｂ　内面に長径8.1㎜短径4.2㎜の偏平な楕円文である。器壁の厚さは4.1㎜を測る。

Ⅲ類　ネガテイブな楕円状の施文を内外面に施文するものである。外面には、凹み状の楕円文となり内面は、明瞭な楕円文となる。しかし、内面の一部の文様において小片であるため詳細は不明であるが、押し引き状となる部分が認められる。

Ⅳ類　縄文を有するものである。

Ⅴ類　口縁部に押圧痕を有するもの。

Ⅵ類　内面に刺突文を有するもの。

Ⅶ類　突帯文と条痕を有するもの。

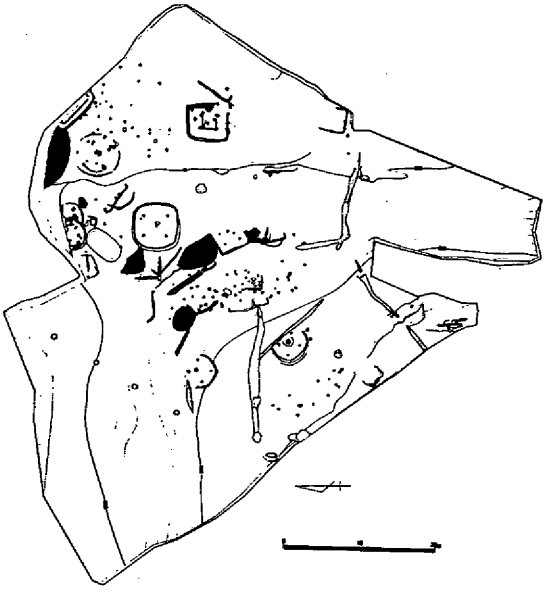
Ⅷ類　無文土器である。

Ⅸ類　底部である。

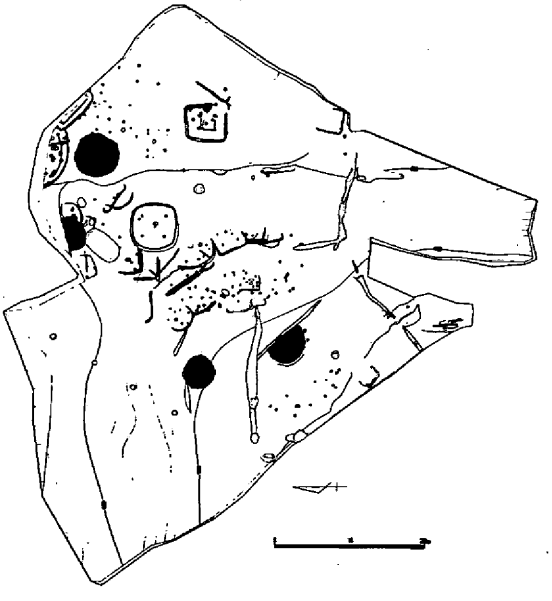
ⅠからⅨ類の土器は、何れも竪穴住居から出土したものであり、先にその出土状況を記したように時期的な差は見いだし得ないのである。この時期は、明瞭な遺構から出土することの類例が乏しい現状から小片ながら明確な遺構に伴って検出されたことは注目される。この時期の目安となるのがⅠ類とⅡ類である。Ⅰ類の鈍角の山形文を有する周辺地域での出土は、鳥取県上福万遺跡[2]、岡山県黄島遺跡[3]で認められる。鋭角となるものは、同遺跡と鳥取県表山馬籠遺跡[4]で認められている。Ⅱ類の楕円文は、小粒のもので広島県帝釈観音堂洞窟遺跡[5]の19層中層から出

土した楕円文の一群がこれに相当するであろう。

このようなことから、Ⅰ類とⅡ類に示された土器の様相は、黄島式に相当する内容を含んでいる。Ⅲ類は、外面に僅かに凹状のネガテイブと判断してよいか躊躇するような楕円文が、内面には押圧でなく押し引き状と見られる組合せが見られる。この押し引き文の内容の一部に近いものが鹿児島県石峰遺跡[6]出土の口縁部文様に認められる。Ⅳ類は、表裏縄文で口縁部にキザミを付している。この種の土器が、黄島式に伴うかどうかまだ知られていない。しかし、その施文内容は内面の口縁部直下から3.2cmほどの帯状に施文し以下は、無文とする手法はⅠ類あるいはⅡ類の内面文様帯と同様な手法である。また、口縁端部の処理もⅠaに見られた内容と近いものである。Ⅵ類は、極めて小さい破片であるが内面に刺突文が認められるもので、外面ではあるが先の上福万遺跡から出土が見られる。Ⅶ類は、突帯とハの字状の条痕文を有するものである。このような突帯を有する土器は、この周辺地域では出土例はなく鹿児島県の平栫式[7]や宮崎県の手向式[8]に認められている。これらの突帯文は、丁寧な文様構成をしており当遺跡のものと内容が大きく異なり単純に比較でき得ない。またこの突帯の上下に認められる条痕は、板状の幅の広いもので貝殻は用いていない。Ⅷ類は、厚手無文土器としたもので吉備考古[9]のなかにおいて『第二類で述べたが条痕の付されているものが可成あり、薄い刷毛目条痕を残すものも存在』としたものに相当するであろうか。また、広島県上殿遺跡[10]からⅠ類とⅡ類のものに伴っている。このように中山西遺跡Ⅰ区竪穴住居から出土した土器は、その出土状態及び土器の個々の検討からほぼ同一時期の範疇に含まれる可能性が大きいことが認識される。その時期



第2図　弥生時代後期中頃

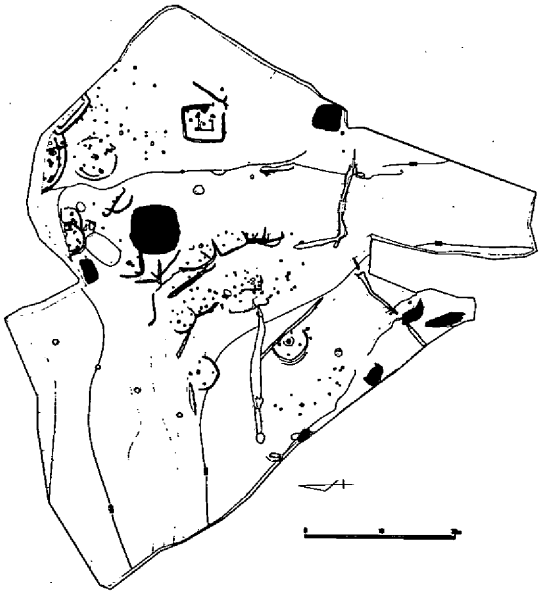


第3図　弥生時代後期後半

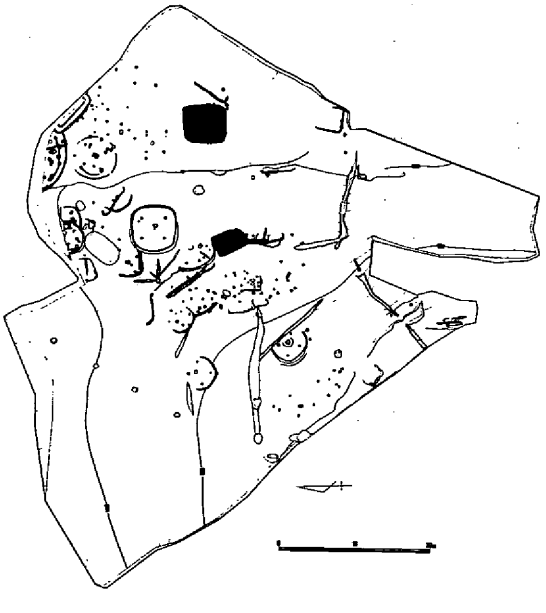
は、早期の黄島式の内容を含んだものであることが言えよう。しかし、これらの土器が黄島式のバリエーションなのか、全く異なるそれぞれの差なのか判断しかねる。ここでは、その出土状態からこれらの土器群が同一時期の所産の可能性が思考されることを記しておく。

弥生時代から古墳時代については、下郷原和田遺跡で玉造りに関係すると考えられる集落が認められた。第２・３図は、後期中頃と後半期の遺構のあり方である。何れも北東から南西に緩やかな丘陵上に位置し、No.42－竪穴住居から碧玉製管玉がNo.44－土壙からは、ガラス玉が出土している。前者から出土した管玉は、完成品である。この期において玉造を想定させるのは、No.40－竪穴住居からでその出土状態に問題があるが伴うことになればこの時期から玉造に関わっていたことが思考される。

古墳時代の前半期で須恵器が伴わない遺構が第４図に示した。前述した弥生時代後期後半の住居のあり方のように数軒がまとまる傾向が見られる。No.31－竪穴住居の覆土及び床面から碧玉の剝片64点が検出された。また、報文中でも触れたが柱状剝片が１点であるが認められたことから玉造に関わった住居と考えてもよいであろう。須恵器出現以降で５世紀末と考えられるのが第５図に示したが丘陵の低位部に営まれている。No.39－竪穴住居からは、製品と剝片が出土しておりこの段階まで玉造に関わっていたことが知られる。しかし、No.39－竪穴住居から出土した石釧は、この種のものが住居から検出された例はほとんど知られていない。下郷原和田遺跡の小結で触れたようにこの住居の時期の問題が残されている。



第４図　古墳時代須恵器伴出前



第５図　古墳時代須恵器伴出以降

なお、下郷原和田遺跡で玉造に関わるより先に下郷原田代遺跡No.1地点の弥生時代後期中頃の竪穴住居からグリーンタフ製の管玉が検出している。これらは、いずれも完成品であり玉造に関わる遺物は認められていない。下郷原和田遺跡で玉造に関わる前段階に碧玉より質の悪い管玉であるが持ち得ていたことは注目されるのである。

奈良時代は、城山東遺跡Ⅳ区において建物5棟と鍛冶炉関係の遺構が検出されている。この地域は、和名抄で大庭郡布施郷に比定されており、遺構の内容からこれらに関係する公的な施設であることが思考される。備中国の最も奥の北西部に位置する地に早くから律令体制の枠が入っていたことが知られる。

この種の公的な施設と考えられる遺構が存在するには、比較的地形条件の良い平坦面に展開するのが一般的である。したがって、当遺跡のようなあり方は、他の同種の遺構からすれば様相を異にすることが知られる。これは、第二章第三節の小結で述べたようにその気候条件が大きく影響した結果であることが判断される。

註

1 岩宿フォーラム実行委員会 『環状ブロック群』－岩宿時代の集落の実像にせまる－資料集 笠懸野 岩宿文化資料館 1993年10月

2 鳥取県教育文化財団 『上福万遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書17 1885.10 鳥取県教育文化財団 『上福万遺跡Ⅱ』 鳥取県教育文化財団調査報告書22 1986.12

3 鎌木義昌 「備前黄島貝塚の研究」 『吉備考古第77号』 1949年

4 鳥取県溝口町教育委員会 「長山馬籠遺跡」 『溝口町埋蔵文化財調査報告書第5集』 1989年

5 帝釈峡遺跡群発掘調査団 『帝釈峡遺跡群』 亜紀書房 1976年 中越利夫 「中国地方の押型文土器について－帝釈峡遺跡群を中心として－」 『縄文早期を考える－押型文文化の諸問題－』 帝塚山考古学研究所 1988年

6 岡本勇編 『縄文土器大成1早・前期』 講談社 1982年発行の94ページ掲載の土器である。

7 註6と同じ

8 茂山護 「児湯郡高鍋町の縄文土器」 『宮崎考古2』 1976年

9 註3と同じ

10 河瀬正利 「広島県山県郡戸河内町上殿の縄文早期遺物の研究」 『広島大学文学部紀要第46巻』 1987年

2　久世地区の調査

久世地区の木谷古墳群や中原古墳群で検出した遺構や遺物から、弥生時代の集落と古墳時代の墳墓について言及し、今回の調査のまとめにかえたい。

弥生時代の集落について

弥生時代の人々が久世町内で最も早く住みはじめた地域は、五反地区であったという。久世町大字三崎字五反の五反遺跡は、旭川と目木川が合流することによって形成された広大な沖積平野を眼下に望む台地上の恵まれた地点に所在し、縄文時代晩期初頭の鉢形土器から歴史時代の五反廃寺に伴う瓦や土器まで、長期間にわたって人々が使用した遺物が数多く採集されている。この地域で本格的に定住生活を開始したのは、弥生時代前期後葉になってからで、中期中葉の頃まで集落が継続して形成されている。ところが中期後葉になると、大旦地区一帯、富尾地区、江森地区、樫東の善住寺周辺、樫邑小学校周辺など、旭川や目木川を望む段丘上や傾斜面にも遺跡の存在するのが確認されることから、人口の増加に対応するだけの食糧増産が不可能となり、集落の分散が行われるようになったのではないかと考えられている。後期になると中期から継続する遺跡以外に、西口地区一帯、余野・三坂・小谷・久世・草加部・中原・三崎地区など、久世町内各地の広い範囲で土器片などの遺物が出土しているから、集落がこれまで以上に分散し、規模が拡大していったと推定される。しかし現在までに出土した土器や石器の遺物と検出された遺構を検討すれば、これらの地域は五反や大旦地区以上に集落を拡大するだけの立地条件を有しないのである。すなわち久世町での有力な地域集団は、やはり旭川と目木川によって形成された沖積平野を背景として成長した五反や大旦地区の集団が最も強力で、政治的にも権力を保持した盟主的な存在の集団であると指摘されている[1]。

このような久世町内における弥生時代遺跡の展開に対する見解は、地元で以前から分布調査を継続して行い、採集された土器や石器などの遺物を丹念に検討し、地理的または歴史的環境を知りつくした人でなくては考えられないもので、高く評価したい。

木谷古墳群が所在した丘陵で検出した住居址や土壙が存在した集落は、弥生時代後期初頭から前葉にかけての短い期間に営まれたもので、まさしく五反や大旦地区から分散した集落の一つであると推定する。

また中国横断自動車道の建設に伴って発掘調査が実施された久世町大字樫西の丘陵上に所在する上野遺跡[2]も、久世町内でも調査によって集落の全貌が明らかになった数少ない遺跡であるが、弥生時代の遺構として住居址11軒、掘立柱建物９棟、貯蔵用土壙59基などが検出された。この遺跡は弥生時代後期後葉から末葉にかけての比較的短期間の集落で、木谷古墳群が所在した丘陵で検した集落よりも後出の時期に属する。遺跡を検出したのが木谷古墳群の所在する丘

陵の地点よりもらさに目木川を上流へ遡った山間部で、この上野遺跡も五反や大旦地区から分散した集落の一つであると考えたい。

このように木谷古墳群が所在した丘陵上で検出した集落や上野遺跡の集落は、旭川と目木川によって形成された沖積平野に面する立地条件が卓越した五反や大旦地区の集落から分散して新しく造られた比較的小規模なもので、短期間だけ生活が営まれて、住居や土壙などが密集するようになると、別の地点へ集落が移転しているのである。

古墳時代の墳墓について

中原古墳群が所在した丘陵上には、平面形態が円墳または方墳を呈する32基にもおよぶ多くの古墳が築されていた。埋葬施設はいずれも箱式石棺で、地山面を深く掘り窪めて設置していた。これらの古墳は、墳丘や周溝だけでなく出土遺物などのあらゆる面で共通点が認められ、出土した須恵器の形態的特徴や成形手法から５世紀後葉の時期と考えられる。

久世町内でこの時期の遺跡を求めるならば、集落遺跡と推定される鍋屋遺跡[3]が知られており、古式の須恵器が出土している。この鍋屋遺跡は中原古墳群の西方向に望むことができ、鍋屋遺跡の周辺で生活していた人々の短期間の墓地が、中原古墳群であったのではなかろうか。なお中原古墳群から出土した遺物は少ないものの、鉄斧や鉄鎌などの農工具が目立つことから、埋葬された人々の生前は鉄生産に関わっていた可能性がある。

６世紀後葉以降になると木谷古墳群や中原古墳群を含む広い範囲に、横穴式石室を埋葬施設とする小規模な古墳が数多く築造されている。現在のところ発掘調査を実施したものは極めて少なく、大部分が盗掘によって破壊されているのが実情である。

なかでも今回の調査で明らかになった木谷11号墳は、天井石が１枚も残存しなかったのみならず側壁の一部も欠損していたが、石室内は盗掘や攪乱を受けた形跡がなく、追葬が繰り返し行われた当時の状況を良好な状態で留めていた。なお出土遺物のうちでも装飾付脚付子持壺やトンボ玉は、このような小規模な古墳から出土するのは珍らしい貴重なものである。（福田）

註

1　松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』久世町教育委員会　1975年

2　山磨康平・池上博「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91　日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会　1994年

3　註１に同じ。

報告書抄録（1）

ふりがな	なかやまにしいせき　しろやまひがしいせき　しもごうばらわだいせき　しもごうばらたしろいせき　きたにこふんぐん　なかばらこふんぐん
書名	中山西遺跡・城山東遺跡・下郷原和田遺跡・下郷原田代遺跡・木谷古墳群・中原古墳群
副書名	中国横断道自動車道建設に伴う発掘調査
巻次	2
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	93
編著者名	下澤公明・山磨康平・福田正継
編集機関	岡山県古代吉備文化センター
所在地	〒701－01　岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL086－293－3211
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかやまにし 中山西遺跡	まにわぐん かわかみそん 真庭郡川上村 おおあざにしかやべ 大字西茅部			35 16 10	133 37 10	Ⅰ区 1988414～ 198892 Ⅱ区 1989418～ 1989426	 2700 700	中国横断道建設に伴う事前調査
しろやまひがし 城山東遺跡	まにわぐん かわかみそん 真庭郡川上村 おおあざにしかやべ 大字西茅部			35 16 8	133 37 36	Ⅰ区 1988830～ 198898 Ⅱ区 198892 ～ 1988921 Ⅲ区 1988919～ 1988103 1989412～ 1989530 Ⅳ区 1988926～ 19881024 Ⅴ区 19881024 19881213 Ⅵ区 1989103～ 19891024	 150 620 260 400 4400 1300 2100	
しもごうばらわだ 下郷原和田 遺跡	まにわぐん かわかみそん 真庭郡川上村 おおあざにしかやべ 大字西茅部			35 15 50	133 38 30	198961 ～ 198989	 2800	
しもごうばらたしろ 下郷原田代 遺跡	まにわぐん かわかみそん 真庭郡川上村 おおあざにしかやべ 大字西茅部			35 15 40 35 15 35	133 38 35 133 38 40	No.1地点 198981 ～ 198995 No.2地点	 3100	

報告書抄録 (2)

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下郷原田代遺跡	真庭郡川上村 大字西茅部					198995 ～ 1989128	1850	中国横断道建設に伴う事前調査
木谷古墳群	真庭郡久世町 大字目木			35 4 40	133 47 15	198991 ～ 1990531	3900	
中原古墳群	真庭郡久世町 大字中原			35 4 15	133 47 35	199022 ～ 1991930	14965	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中山西遺跡	石器製作 集落	岩宿時代	環状分布	ナイフ形石器，押型文土器	
		縄文時代	落し穴 8基 竪穴住居址 4軒		
城山東遺跡	石器製作 集落 官衙	岩宿時代	石器分布	ナイフ形石器，弥生土器，土師器，須恵器	
		縄文時代	落し穴 35基		
		弥生時代	竪穴住居址 3軒		
		古墳時代	竪穴住居址 2軒		
		奈良時代	掘立柱建物 5棟		
		不明	掘立柱建物 9棟		
下郷原和田遺跡	集落 生産遺跡	弥生時代	竪穴住居址 10軒	弥生土器，土師器，グリーンタフ製車輪石，碧玉製管玉，ガラス小玉	碧玉の剝片を出土
		古墳時代	竪穴住居址 15軒		
		不明	落し穴 4軒		
下郷原田代遺跡	石器製作 集落	岩宿時代	石器分布 3	台形様石器，ナイフ形石器，石斧，グリーンタフ製管玉，ガラス小玉，分銅形土製品，弥生土器	
		縄文時代	落し穴 42基		
		弥生時代	竪穴住居址 2軒		
		不明	掘立柱建物 6棟		
木谷古墳群		弥生時代	竪穴住居址 16軒	弥生土器，石包丁，須恵器，土師器，鉄鏃，鉄刀，刀子，耳環，管玉，ガラス小玉，鍔	
		古墳時代	横穴式石室 9基		
		中近世	墓 103基		
中原古墳群		弥生時代	竪穴住居址 1軒	弥生土器，須恵器，土師器，鉄刀，鉄鏃，刀子，鉄斧，鉄鎌，紡錘車，ガラス小玉，管玉，竪櫛，勾玉，耳環	主体部は，箱式石棺
		古墳時代	方墳 24基 円墳 12基 横穴式石室 2基		
		中世	墓 4基 石列 1基 土壙 2基		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　93
中国横断自動車道建設に伴う発掘調査
2
(本　　文)

１９９５年３月20日 印 刷
１９９５年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　日本道路公団広島建設局津山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印刷　岡山県農協印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　93

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査 2

中山西遺跡
城山東遺跡
下郷原和田遺跡
下郷原田代遺跡
木谷古墳群
中原古墳群

(付編・図版)

1995・3

日本道路公団広島建設局津山工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　93

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査 2

中山西遺跡
城山東遺跡
下郷原和田遺跡
下郷原田代遺跡
木谷古墳群
中原古墳群

（付編・図版）

1995・3

日本道路公団広島建設局津山工事事務所
岡山県教育委員会

第五章　付　　編

中国横断道関係遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の原材産分析

（京都大学原子炉実験所）　藁科哲男、東村武信

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探るという目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている[(1)]。

サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

中国横断道関係遺跡から出土した遺物のうち、旧石器時代の黒曜石遺物９個、サヌカイト遺物３個、石材不明の３個、縄文時代早期～早期以前の黒曜石２個、縄文時代早期のサヌカイト、黒曜石遺物各１個、時代不詳の黒曜石遺物１個の合計20個について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト、黒曜石原石の分析

サヌカイト、黒曜石両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産

地を特定する指標とした。サヌカイトではK/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srを、また黒曜石ではCa/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて28ケ所の調査を終えている。図1にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ケの群に分かれる。

これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると39個の原石群に分類できる。その結果を表1に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西（城山）群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ケの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2／3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92％および88％と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表3に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1％であるが金山東群に一致する原石が採取される。表4に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表2、3のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6％の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表3のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州、の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図2に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると表5に示すように95個の原石群に分かれる。佐賀県の腰岳地域および大分県の姫島地域の観音崎、両瀬の両地区は黒曜石の有名な原産地で、姫島地域ではガラス質安山岩もみられ、これについ

ても分析を行なった。隠岐島、壱岐島、青森県、和田峠の一部の黒曜石には、Srの含有量が非常に少なく、この特徴が産地分析を行う際に他の原産地と区別する、有用な指標となっている。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果を表６、７に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため一変量で考え、K/Caの値を0.480であると仮定して客観的判定を行うと、金山東群の［平均値］±［標準偏差値］は、0.486±0.011である。遺物と原石群の差を標準偏差値（σ）を基準にして考えると遺物は原石群から0.5σ離れている。ところで金山原産地から100ケの原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.5σのずれより大きいものが61ケある。すなわち、この遺物が、金山東群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を二上山群に比較すると、二上山群の平均値からの隔たりは、約19σである。これを確率の言葉で表現すると、二上山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から19σ以上離れている確率は、一兆の千万倍分の一であると言える。このように、一兆の千万倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、二上山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は金山東群に61％、二上山群に一兆の十万倍分の一％の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表１のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、金山東群の原産地だけとなり、金山産地または岩屋原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯１ケの変量だけでなく、前述した６ケの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばＡ原産地のＡ群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、Ａ群の石材で作られた遺物であれば、Ａ群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はＡ群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する[(2)]。中国横断道

関係遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を表８に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径３㎝以上であるが、小さな遺物試料の測定から原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、１個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、測定の信頼限界としている0.1％に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離D^2の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1％の確率に達しなかった遺物でこのD^2の値が原石群の中で最も小さなD^2値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。

中国横断道関係遺跡出土の分析した黒曜石遺物にはSr元素の含有量が極端に少なく、Srの含有量の少ない原石産地で、本遺跡から最も近い原産地は隠岐産地である。隠岐産黒曜石と同定できたＡＴ下層出土の遺物は５個で、D^2値で原石産地を推測した遺物は２個で、分析値から推測して定性的に隠岐産ではないかと考えたものが２個である。また、サヌカイト遺物３個は、白峰（岩屋第２）群に同定された。白峰群と同定された遺物と相互に似た組成の原石は五色台原産地以外に岩屋原産地から33％、和和泉・岸和田原産地から８％の頻度でそれぞれ出現している。同定された３個の全てが、岩屋原産地から採取される確率は３％となり、この遺物が岩屋産でないとは言い切れない。しかし、和泉・岸和田原産地から採取される確率は、0.005％の頻度で確率は非常に低くなり、和泉・岸和田原産地から採取された可能性は否定されたであろう。本遺跡から距離的に近い、白峰産地には旧石器時代の国分台遺跡があり、白峰原産地から伝播した原石と推測しても蛍光Ｘ線分析の結果と矛盾しない。縄文時代早期～早期以前の黒曜石遺物２個は久見産原石と同定され、縄文時代早期のサヌカイト遺物１個は金山西群に一致した金山西群の原石は金山産地以外に隣の城山産地からも採取されることから、この両産地のいずれかの産地と推定された。また、黒曜石遺物１個は久見産地の原石と同定された。時代不詳の黒曜石遺物１個は加茂産地の原石であると同定された。分析は完全な非破壊で行うため遺物が異常に風化したり、汚染した場合は分析が異常値となり判定できなくなる。または、原石産地が同定できなかった遺物に一致する未調査の小規模な原石産地が隠岐島に存在するなどが考えられる。

産地分析ができた結果から推考して、中国横断道関係遺跡では、香川県五色台原産地地域の情報及び隠岐島の加茂、久見原産地地方の情報を日常的に入手していたと考えても産地分析の

結果と矛盾しない。

参考文献

1）藁科哲男・東村武信（1975）、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅱ）。考古学と自然科学、8：61－69

2）藁科哲男・東村武信・鎌木義昌（1977）、（1978）、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅲ）。（Ⅳ）。考古学と自然科学、10、11：53－81：33－47

3）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59－89

4）東村武信（1976）、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77－90

5）東村武信（1980）、考古学と物理科学。学生社

表1　中国横断道関係遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製遺物の原材産地推定結果

試料番号	遺物番号	出土区	層	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名（備考）
33146	1,	下郷原田代, No.2	A区	-AT下	旧石器時代	加茂(0.2%)	加茂	剥片
33147	2,	〃	〃		〃	久見(11%)	久見	〃
33148	3,	〃	〃		〃	Sr元素が微量、隠岐、壱岐産黒曜石の特徴	隠岐系	〃
33149	4,	〃	〃		〃	久見(D^2=84)	久見	(風化ﾊｶﾞｼ)〃
33150	5,	〃	〃		〃	津井(D^2=78)	津井	(〃)〃
33151	6,	〃	〃		〃			黄色, 碧玉？〃
33152	7,	〃	C区	-AT下	〃		隠岐系	(風化ﾊｶﾞｼ)〃
33153	8,	〃	〃		〃	久見(0.1%)	久見	〃
33154	9,	城山東, Ⅲ区		AT下	〃	〃 (20%)	〃	〃
33170	10,	中山西, Ⅰ区		〃	〃			砂岩？剥片
33171	11,	〃	〃		〃			ｻﾇｷﾄｲﾄﾞ〃
33155	12,	〃	〃		〃	久見(13%)	久見	〃
33156	13,	下郷原田代, No1			時代不詳	加茂(3%)	加茂	〃
33157	17,	〃	,No2	落穴No8	縄文時代早期or早期以前	久見(42%)	久見	〃
33158	18,	〃		落穴No23	〃	〃 (0.6%)	〃	〃
33172	19,	〃		AT下	旧石器時代	岩屋第二群(81%), 白峰(54%), 国分寺(18%)	白峰	〃
33173	20,	〃	〃		〃	〃 (14%), 国分寺(5%), 白峰(2%)	〃	〃
33174	21,	〃	〃		〃	白峰(67%), 岩屋第二群(51%), 蓮光寺(2%)	〃	〃
33172	22,	中山西, Ⅰ区	縦穴住居跡		縄文時代早期	金山西(57%)	金山・城山	〃
33159	23,	〃	〃		〃	久見(18%)	久見	〃

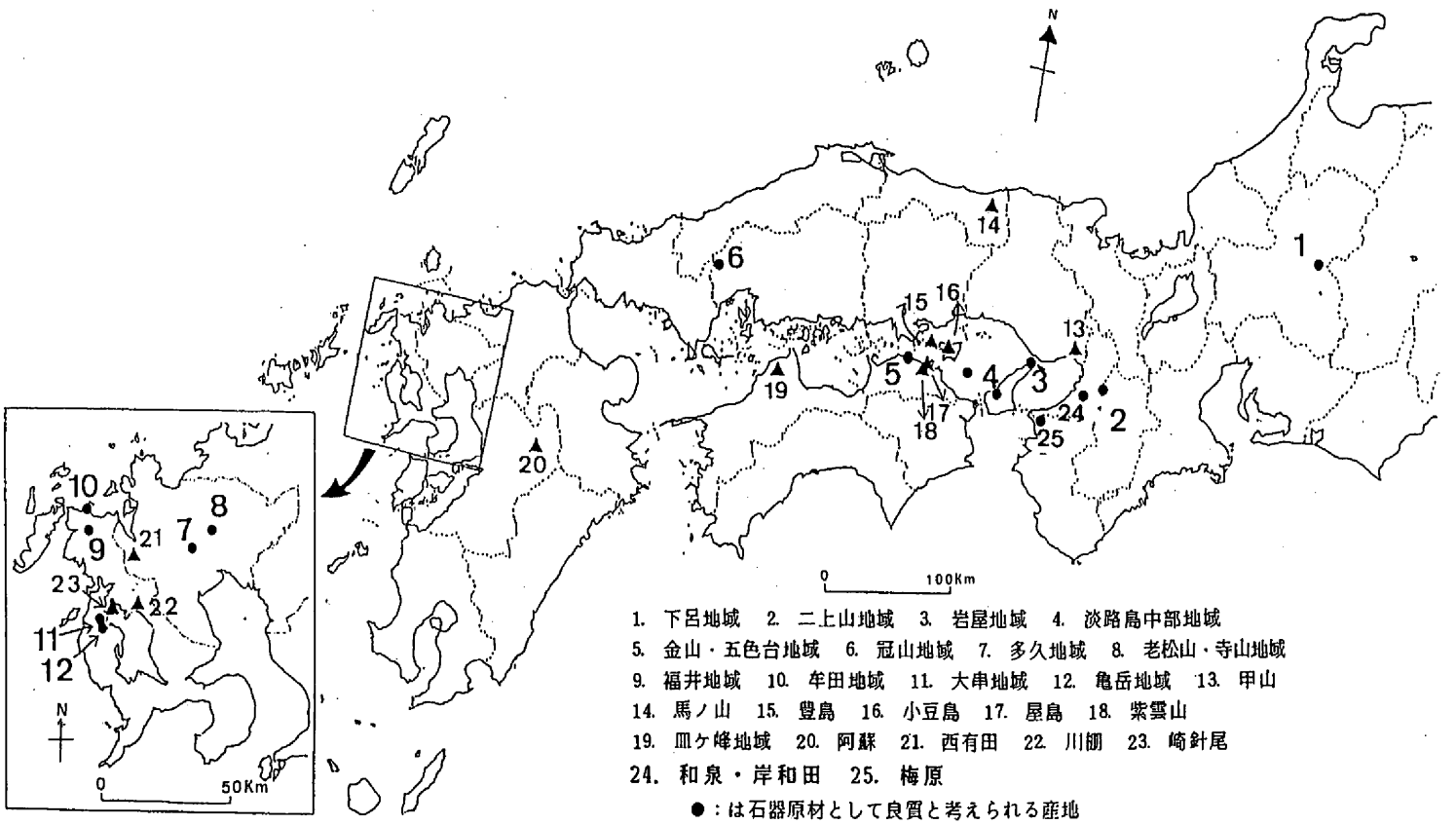
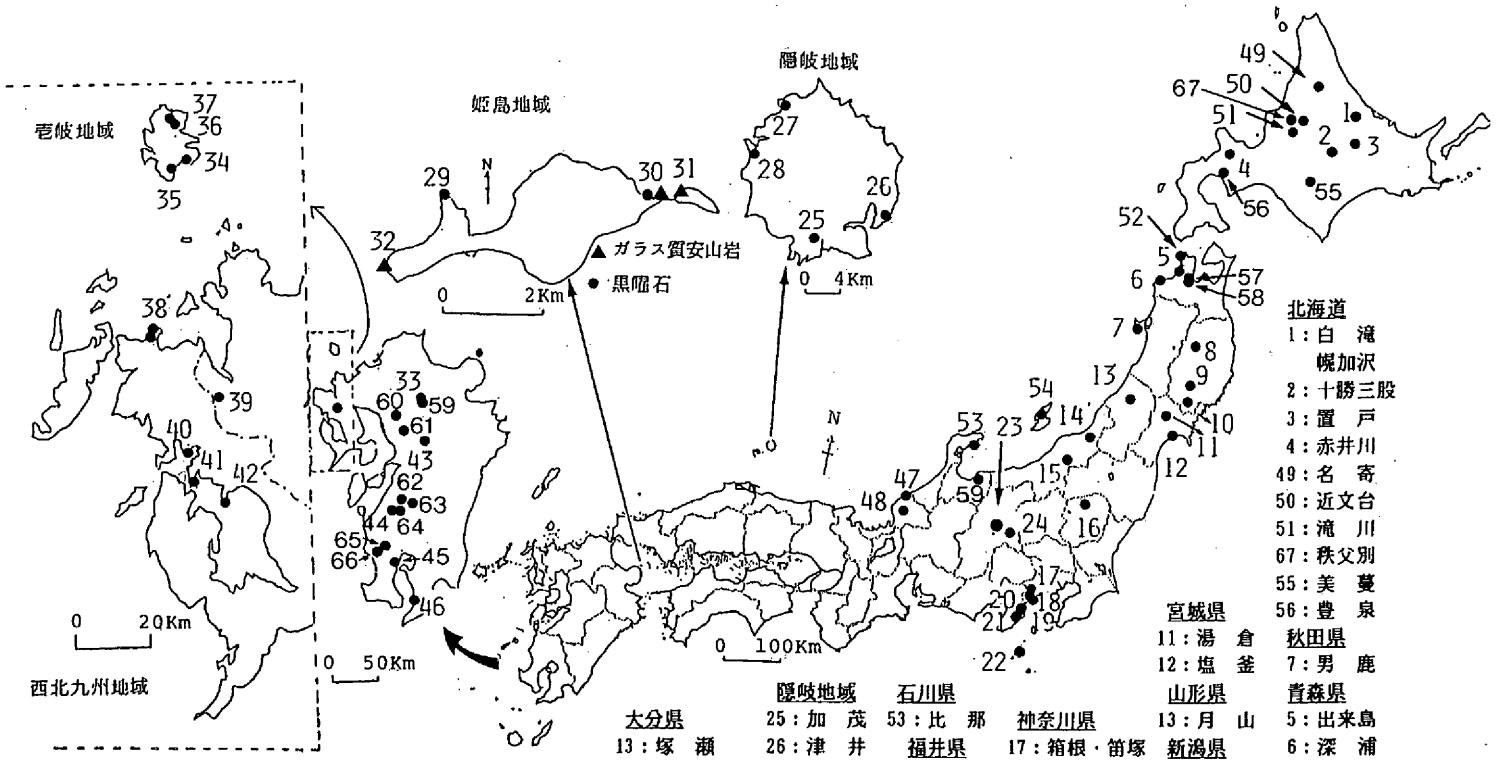


図1　サヌカイトの原産地



西北九州地域
長崎県
38：松　浦
40：淀　姫
41：中町、古里
42：大　崎

佐賀県
39：腰　岳
壱岐地域
34：久喜ノ辻
35：君ケ浦
36：角　川
37：貝　畑

鹿児島県
44：日　東
64：五女木
65：上牛鼻
66：平木場
45：竜ケ水
46：長　谷

熊本県
59：小　国
60：南　関
61：　轟
43：冠ケ岳
62：白　浜
63：桑ノ木津留

大分県
13：塚　瀬

姫島地域
29：観音崎
30：両　瀬
31：稲　積
32：オイ崎

隠岐地域
25：加　茂
26：津　井
27：久　見
28：福　浦

石川県
53：比　那

福井県
47：安　島
48：三里山

長野県
23：霧ケ峰
　男女倉
　和田峠

富山県
24：麦草峠
59：魚　津

神奈川県
17：箱根・笛塚
18：〃　・畑宿
19：鍛冶屋

静岡県
20：上多賀
21：柏峠西

栃木県
16：高原山

東京都
22：神津島

宮城県
11：湯　倉
12：塩　釜

山形県
13：月　山

新潟県
54：佐　渡
14：板　山
15：大白川

秋田県
7：男　鹿

青森県
5：出来島
6：深　浦
52：折腰内
57：戸　門
58：鶴ケ坂

岩手県
8：雫　石
9：折　居
10：花　泉

北海道
1：白　滝
　幌加沢
2：十勝三股
3：置　戸
4：赤井川
49：名　寄
50：近文台
51：滝　川
67：秩父別
55：美　蔓
56：豊　泉

図２　黒曜石原産地

表2　岩屋原産地からサヌカイト原石66個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	２０個	３０％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	２２	３３	白峰群に一致
第三群	６	９	法印谷群に一致
〃	５	８	国分寺群に一致
〃	４	６	蓮光寺群に一致
〃	３	５	金山東群に一致
〃	２	３	和泉群に一致
〃	４	６	不明（どこの原石群にも属さない）

表3　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	１２個	１７％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和　泉　群	９	１３	〃　　〃　　〃
岩屋第二群	６	８	白峰群に一致
	４	６	二上山群に一致
	１	１	法印谷群に一致
	１	１	金山東群に一致
	３９	５４	不明（どこの原石群にも属さない）

表4　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
和　泉　群	１０個	４８％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	１	５	〃　　〃　　〃
	１０	４８	不明（どこの原石群にも属さない）

表５－１　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	K/Ca X±σ	Ti/Ca X±σ	Mn/Sr X±σ	Fe/Sr X±σ	Rb/Sr X±σ	Y/Sr X±σ	Zr/Sr X±σ	Nb/Sr X±σ	Al/Ca X±σ	Si/Ca X±σ
群馬県	荒船山	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	八風山	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	下呂	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	二上山	51	0.268±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	和泉	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.036±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	岩屋第一	29	0.615±0.021	0.246±0.011	0.056±0.006	3.778±0.198	0.363±0.019	0.059±0.013	0.830±0.039	0.043±0.013	0.028±0.002	0.247±0.010
	〃 第二	24	0.530±0.018	0.255±0.006	0.056±0.006	3.542±0.200	0.332±0.018	0.046±0.018	1.066±0.027	0.042±0.014	0.026±0.001	0.227±0.009
	甲山	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	五色台 国分寺	29	0.450±0.030	0.244±0.008	0.057±0.004	3.842±0.310	0.298±0.023	0.043±0.012	0.951±0.037	0.046±0.012	0.023±0.001	0.194±0.011
	五色台 通光寺	18	0.455±0.011	0.244±0.004	0.057±0.003	3.762±0.136	0.298±0.018	0.043±0.015	0.989±0.038	0.048±0.008	0.023±0.002	0.195±0.007
	五色台 白峰	38	0.526±0.015	0.255±0.005	0.057±0.004	3.599±0.101	0.325±0.015	0.040±0.016	1.054±0.037	0.047±0.010	0.026±0.002	0.226±0.007
	五色台 法印谷	25	0.396±0.009	0.235±0.003	0.076±0.006	4.892±0.143	0.272±0.016	0.057±0.013	1.145±0.034	0.041±0.010	0.022±0.001	0.172±0.004
	金山 金山東	25	0.486±0.011	0.215±0.005	0.083±0.004	4.811±0.119	0.308±0.015	0.059±0.015	1.170±0.028	0.032±0.012	0.026±0.001	0.203±0.005
	金山 〃 西	19	0.401±0.008	0.209±0.004	0.086±0.005	5.165±0.167	0.277±0.015	0.064±0.011	1.058±0.028	0.033±0.011	0.022±0.001	0.176±0.004
	*五色台	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
鳥取県	馬ノ山	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.009	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005
広島県	冠山 冠高原	60	0.651±0.021	0.485±0.014	0.046±0.004	3.322±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.017	0.185±0.010	0.025±0.002	0.241±0.008
	冠山 冠山東	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006
	冠山 飯山	25	1.116±0.061	0.472±0.022	0.037±0.005	2.228±0.080	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021
佐賀県	多久第一	53	0.834±0.053	0.385±0.010	0.060±0.008	5.075±0.284	0.507±0.036	0.060±0.017	0.851±0.036	0.237±0.019	0.030±0.002	0.307±0.018
	〃 第二	23	0.849±0.062	0.381±0.016	0.070±0.009	5.728±0.310	0.559±0.052	0.061±0.018	0.854±0.035	0.254±0.025	0.030±0.003	0.313±0.022
	〃 第三	8	1.109±0.220	0.335±0.029	0.068±0.009	4.784±0.981	0.702±0.091	0.082±0.024	0.811±0.031	0.260±0.025	0.036±0.006	0.401±0.063
	老松山	62	0.718±0.029	0.304±0.010	0.074±0.007	5.780±0.241	0.539±0.036	0.068±0.019	0.693±0.033	0.211±0.020	0.025±0.002	0.263±0.010
	寺山・岡本	30	0.633±0.045	0.299±0.011	0.079±0.005	6.119±0.295	0.478±0.035	0.071±0.018	0.638±0.033	0.192±0.013	0.023±0.002	0.237±0.016
	西有田	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.098±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.568±0.023	0.106±0.010	0.023±0.002	0.237±0.016
長崎県	大串	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.020	1.850±0.236	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.082±0.022	0.050±0.006	0.607±0.059
	亀岳	19	1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.152	0.233±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.065±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
	牟田第一	30	0.794±0.094	0.335±0.024	0.072±0.009	4.938±0.251	0.872±0.132	0.223±0.036	0.720±0.053	0.301±0.042	0.026±0.003	0.284±0.033
	〃 第二	13	0.601±0.044	0.316±0.010	0.102±0.015	8.390±0.541	1.114±0.102	0.329±0.034	0.976±0.065	0.479±0.039	0.021±0.002	0.218±0.015
	川棚第一	59	0.509±0.022	0.294±0.008	0.072±0.006	4.539±0.157	0.211±0.016	0.072±0.015	0.823±0.046	0.044±0.010	0.022±0.002	0.201±0.009
	〃 第二	8	0.389±0.042	0.245±0.022	0.073±0.005	5.373±0.332	0.193±0.032	0.068±0.013	0.721±0.041	0.045±0.011	0.018±0.002	0.157±0.013
	福井第一	15	0.639±0.015	0.317±0.006	0.098±0.009	8.284±0.312	1.242±0.050	0.352±0.031	1.021±0.032	0.519±0.033	0.022±0.002	0.230±0.007
	〃 第二	25	0.519±0.015	0.305±0.007	0.090±0.008	7.729±0.227	0.954±0.038	0.274±0.027	0.871±0.041	0.407±0.019	0.020±0.001	0.190±0.006
	崎針尾第一	71	0.388±0.029	0.242±0.019	0.057±0.005	4.371±0.218	0.158±0.019	0.055±0.009	0.450±0.039	0.062±0.008	0.017±0.001	0.161±0.011
	〃 第二	14	0.608±0.125	0.360±0.046	0.081±0.013	5.625±0.884	0.316±0.055	0.071±0.016	0.659±0.097	0.098±0.023	0.024±0.004	0.246±0.050
熊本県	阿蘇第一	15	2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.063±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099
	〃 第二	14	0.993±0.198	0.514±0.070	0.061±0.008	3.087±0.441	0.299±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.293±0.041
	菊池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015
	JG－1 a)	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011

X：平均値、　σ：標準偏差値、　*：ガラス質安山岩

a)：Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8 175-192.

表５－２　黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	Ca／K $\bar{x}\pm\sigma$	Ti／K $\bar{x}\pm\sigma$	Mn／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Fe／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Rb／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Sr／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Y／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Nb／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Al／K $\bar{x}\pm\sigma$	Si／K $\bar{x}\pm\sigma$
北海道	名寄第一	114	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.032	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
	〃　第二	12	0.315±0.011	0.106±0.003	0.023±0.005	1.796±0.070	0.692±0.043	0.264±0.017	0.293±0.018	0.039±0.020	0.029±0.002	0.401±0.010
	白滝第一	130	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.142	1.340±0.059	0.283±0.019	0.341±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010
	幌加沢	23	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007
	白滝第二	27	0.138±0.004	0.021±0.002	0.102±0.015	3.049±0.181	1.855±0.088	0.097±0.016	0.492±0.039	0.107±0.019	0.027±0.002	0.368±0.006
	近文台第一	30	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.266±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.165±0.020	0.039±0.016	0.039±0.002	0.457±0.008
	〃　第二	107	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.090	2.773±0.097	0.812±0.037	0.818±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.035±0.002	0.442±0.009
	〃　第三	17	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.014	2.765±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
	秩父別第一	51	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.068	0.995±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	〃　第二	25	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.026	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
	滝川第一	31	0.253±0.018	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.023
	〃　第二	15	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.019	0.812±0.019	0.192±0.026	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031
	置戸	65	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.824±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
	十勝三股	60	0.256±0.018	0.074±0.005	0.068±0.010	2.281±0.087	1.097±0.055	0.434±0.023	0.334±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.396±0.013
	美蔓第一	41	0.499±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
	〃　第二	28	0.593±0.036	0.144±0.012	0.056±0.010	3.028±0.251	0.762±0.040	0.764±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009
	赤井川	50	0.254±0.029	0.070±0.004	0.086±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.428±0.021	0.249±0.024	0.058±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
	豊泉	75	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.025±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
青森県	折腰内	35	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.066	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010
	出来島	27	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.085	0.865±0.044	1.106±0.056	0.399±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.498±0.013
	深浦	36	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.008	0.002±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	戸門第一	28	0.250±0.024	0.069±0.003	0.068±0.012	2.358±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.065	0.076±0.025	0.026±0.002	0.362±0.015
	〃　第二	28	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	0.123±0.006	0.002±0.002	0.069±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007
	鷲ケ坂	33	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.060	0.390±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.496±0.018
秋田県	男鹿	43	0.293±0.007	0.087±0.004	0.223±0.015	1.637±0.072	1.512±0.082	0.920±0.054	0.287±0.042	0.125±0.031	0.027±0.002	0.362±0.006
岩手県	宇石	25	0.636±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
	折居	22	0.615±0.055	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.306±0.033	0.421±0.051	0.228±0.079	0.045±0.011	0.041±0.005	0.594±0.055
	花泉	30	0.596±0.046	0.177±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.420±0.025	0.220±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.586±0.030
宮城県	湯倉	21	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040
	塩釜	37	4.828±0.395	1.630±0.104	0.178±0.017	11.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.155±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032
山形県	月山	44	0.285±0.021	0.123±0.007	0.182±0.016	1.906±0.096	0.966±0.069	1.022±0.071	0.276±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014
新潟県	佐渡第一	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.013
	〃　第二	12	0.263±0.032	0.097±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.338±0.009
	板山	44	0.232±0.011	0.068±0.003	0.169±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.772±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.027±0.002	0.359±0.009
	大白川	22	0.569±0.012	0.142±0.007	0.033±0.005	1.608±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.150±0.015	0.033±0.011	0.036±0.003	0.491±0.014
栃木県	高原山	40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
東京都	神津島第一	56	0.381±0.014	0.136±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.689±0.037	0.247±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.012
	〃　第二	23	0.317±0.016	0.120±0.008	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.009
神奈川県	箱根・笹塚	30	6.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.252±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046
	〃・畑宿	41	2.056±0.064	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.680±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.128±0.031
	鍛冶屋	31	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
静岡県	上多賀	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.551±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.018
	柏峠西	35	1.213±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.663±0.020
富山県	魚津	12	0.278±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
石川県	比那	17	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.052±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
福井県	安島	21	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
	三里山	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008

$\bar{x}$：平均値、　σ：標準偏差値

表５－３　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	Ca／K $\bar{x}\pm\sigma$	Ti／K $\bar{x}\pm\sigma$	Mn／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Fe／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Rb／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Sr／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Y／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Nb／Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Al／K $\bar{x}\pm\sigma$	Si／K $\bar{x}\pm\sigma$
長野県	霧ケ峰	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
	和田峠第一	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.085	1.853±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016
	〃 第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007
	〃 第三	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017
	〃 第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.206±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019
	〃 第五	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.196	0.275±0.058	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.306±0.013
	〃 第六	53	0.156±0.011	0.055±0.005	0.095±0.012	1.333±0.064	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
	鷹山・和田	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.010	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.360±0.010
	男女倉	119	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	0.701±0.109	0.409±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008
	麦草峠	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017
島根県	加茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.018±0.003	0.943±0.029	0.289±0.016	0.006±0.003	0.047±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017
	津井	30	0.150±0.008	0.100±0.003	0.015±0.002	0.919±0.033	0.305±0.010	0.013±0.003	0.046±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006
	久見	31	0.142±0.004	0.061±0.002	0.020±0.003	0.981±0.048	0.398±0.013	0.001±0.002	0.093±0.015	0.229±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006
大分県	観音崎	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
	両潮第一	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.669±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009
	＊〃第二	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	0.614±0.077	3.162±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
	＊〃第三	10	1.013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017
	＊オイ崎	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014
	＊稲積	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	0.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.448±0.015
	塚瀬	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	0.600±0.051	0.686±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.009
佐賀県	腰岳	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.694±0.110	1.686±0.085	0.441±0.030	0.293±0.039	0.257±0.029	0.027±0.002	0.356±0.008
長崎県	久喜ノ辻	37	0.165±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
	君ケ浦	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.405±0.008	0.005±0.004	0.119±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.294±0.006
	角川	29	0.138±0.010	0.037±0.002	0.056±0.007	1.741±0.083	1.680±0.076	0.012±0.012	0.303±0.038	0.652±0.036	0.028±0.002	0.358±0.010
	松浦第一	23	0.218±0.010	0.029±0.002	0.085±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.266±0.028	0.027±0.002	0.359±0.012
	〃 第二	17	0.176±0.016	0.030±0.004	0.062±0.022	2.364±0.389	1.607±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.361±0.010
	〃 第三	16	0.245±0.019	0.060±0.006	0.045±0.012	1.975±0.240	0.878±0.099	0.421±0.081	0.130±0.030	0.145±0.023	0.026±0.002	0.358±0.013
	〃 第四	22	0.287±0.019	0.067±0.004	0.044±0.007	1.906±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.115±0.023	0.117±0.018	0.028±0.001	0.367±0.007
	淀姫	44	0.329±0.014	0.080±0.005	0.042±0.007	1.804±0.065	0.539±0.022	0.504±0.035	0.077±0.018	0.117±0.014	0.029±0.002	0.374±0.009
	中町第一	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.057±0.007	1.884±0.085	0.832±0.092	0.403±0.028	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.363±0.007
	〃 第二	17	0.327±0.030	0.080±0.017	0.045±0.007	1.832±0.074	0.653±0.068	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.012
	古里第一	40	0.192±0.020	0.027±0.003	0.080±0.016	2.699±0.215	1.780±0.164	0.413±0.065	0.312±0.056	0.259±0.040	0.027±0.002	0.358±0.008
	〃 第二	22	0.414±0.012	0.073±0.006	0.102±0.015	2.808±0.204	1.221±0.094	1.951±0.124	0.133±0.047	0.261±0.034	0.031±0.002	0.383±0.010
	〃 第三	19	0.257±0.035	0.062±0.009	0.054±0.009	1.939±0.131	0.812±0.113	0.436±0.052	0.101±0.029	0.145±0.037	0.028±0.002	0.364±0.011
	大崎	25	0.161±0.011	0.051±0.002	0.037±0.006	1.718±0.056	0.948±0.030	0.179±0.018	0.191±0.026	0.137±0.019	0.024±0.002	0.340±0.006
熊本県	小国	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.083±0.007	1.441±0.070	0.611±0.032	0.703±0.044	0.175±0.233	0.097±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007
	南関	30	0.261±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.326±0.012	0.278±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.008
	轟	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.784±0.078	0.329±0.017	0.275±0.010	0.066±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008
	冠ケ岳	21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.780±0.038	0.324±0.011	0.279±0.017	0.064±0.011	0.037±0.008	0.025±0.002	0.277±0.009
	白浜	40	0.197±0.020	0.104±0.008	0.025±0.006	1.405±0.073	1.048±0.087	0.348±0.028	0.163±0.023	0.033±0.017	0.019±0.001	0.273±0.007
	桑ノ木津留 第一群	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	0.418±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011
	桑ノ木津留 第二群	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019
鹿児島県	出水(日東)	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.712±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	五女木	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	0.705±0.027	0.405±0.021	0.108±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	上牛鼻	41	1.829±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	0.188±0.013	1.105±0.056	0.087±0.009	0.022±0.009	0.036±0.002	0.391±0.011
	平木場	34	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	0.184±0.011	1.266±0.049	0.093±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010
	竜ケ水	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.619±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
	長谷	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.815±0.062	0.644±0.028	0.553±0.029	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
	JG－1 a)	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

$\bar{x}$：平均値、　σ：標準偏差値、　＊：ガラス質安山岩

a)：Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8, 175-192.

表6　中国横断道関係遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果

試料番号	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	元素比 Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
33146	.148	.086	.016	.830	.262	.000	.085	.172	.020	.233
33147	.133	.062	.017	.867	.384	.000	.121	.253	.019	.272
33148	.081	.066	.008	.615	.319	.000	.130	.269	.019	.296
33149	.118	.059	.018	.899	.377	.003	.130	.260	.019	.270
33150	.118	.108	.013	.810	.285	.011	.069	.154	.020	.224
33151	.366	.870	.000123	.340	.509	.321	.768	.607	.000	67.859
33152	.105	.060	.022	.970	.393	.004	.102	.236	.019	.277
33153	.121	.062	.018	.873	.380	.000	.128	.259	.021	.272
33154	.134	.065	.018	.912	.370	.003	.094	.238	.017	.264
33155	.128	.061	.021	.957	.391	.000	.099	.216	.018	.276
33156	.141	.097	.016	1.039	.309	.011	.036	.143	.020	.236
33157	.150	.058	.024	.997	.402	.003	.085	.240	.019	.275
33158	.130	.067	.019	.966	.409	.003	.126	.231	.019	.255
33159	.152	.066	.015	1.008	.414	.004	.094	.227	.018	.250

表7　中国横断道関係遺跡出土のサヌカイト製遺物分析結果

試料番号	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	元素比 Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
33170	20.646	29.748	.894	93.522	2.725	.604	16.718	.737	.544	9.535
33171	.317	.523	.070	4.514	.055	.060	.780	.063	.018	.160
33172	.511	.259	.051	3.533	.319	.038	1.039	.031	.018	.183
33173	.512	.258	.063	3.477	.334	.045	1.097	.037	.020	.184
33174	.518	.252	.063	3.742	.333	.042	1.128	.046	.023	.189
33175	.395	.213	.083	4.899	.279	.082	1.056	.039	.018	.140

中国横断道関係遺跡出土の玉類、玉材石片の産地分析

（京都大学原子炉実験所）　藁科哲男、東村武信

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[(1)]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法[(2)]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例[(3)]が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣をもつ文化圏が考えられ、玉類の原材産地分析でしか得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類、玉材石片は弥生時代の下郷原田代No１遺跡出土の管玉３個（管玉１－No.１－竪穴住居出土、２－No.１－竪穴住居附近出土、３－No.２－竪穴住居出土)、下郷原和田遺跡出土の管玉２個（管玉４－No.39－竪穴住居出土、５－No.42－竪穴住居出土)、車輪石（６)、玉材５個（石片、７～11）の合計11個で、これら遺物の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合

わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多く含まれ非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[5]非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県花仙山産原石を図1に示す。猿八、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1でしめされるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉原石の原産地を図2に示す。猿八原産地は、(1) 新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は、地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ケ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約7㎝幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧

玉も２個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)　島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は７個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は３個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)　兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は４個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は(4)　石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した４個の原石の中で３個は、同一塊から３分割したもので、１個は別の塊からのもので、前者の３個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この４個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は(5)、富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した８個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は(6)、愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地(7)、北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標

として重要である。石戸の産地は(8)、兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

中国横断道関係遺跡出土の玉類、玉材石片と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原材産地の同定をするために、(1) 蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ＥＳＲ分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら遺物の蛍光X線分析の結果（図3～13）および比重（表2）から原材料の岩石を蛇紋系、碧玉系、グリーンタフ系の3個に分類した。(1) 蛇紋系岩と分類した遺物は管玉4で相対的にMg元素の含有量が非常に多く、源岩のカンラン岩が蛇紋岩化し、多量に含有するFeとかAlはMgを置換し、またSiの一部もAlで置換されていることが考えられる。蛇紋岩に共伴する副成分鉱物としての鉄鉱鉱物からのCr、Tiが観測されていることも考えられ、遺物の比重は2.76で、蛇紋石の約2.6の値より少し重い理由として副成分鉱物の影響の可能性が推測される。また、微量ではあるがZr、Mn、Niの含有が確認された。(2) 碧玉系と分類した遺物は管玉26、石片7、8、9、10、11である。これら遺物は緻密で比重が2.5以上あること、蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。(3) 緻密でなく、比重

が2.4以下の管玉１、２、３、車輪石６の遺物をグリーンタフ系として分類した。これら遺物の元素組成比および比重の結果を表２に示した。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT²検定[8]により同定を行い結果を表３に示した。土岐、二俣、細入、石戸原産地は統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成からこれら産地の原石でないと推定された。また奥部産地でないことは鉄の含有量から証明できる。蛍光X線分析の結果から原石産地を特定された遺物は、管玉５が豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている女代南遺物群に一致し、石片８、９は花仙山産原石の可能性が示され、石片７、10は花仙山産と決定するには帰属確率は低いが、分析した原石群の中で確率は最も高い。これらの遺物を女代南遺物群、花仙山産原石と同じ原産地であると結論するには以下に述べる電子スピン共鳴（ＥＳＲ）法による結果も女代南遺跡群に、花仙山群に一致すればより確実な結果となる。

ＥＳＲ法による産地分析

ＥＳＲ分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ＥＳＲの測定は、Varian社のＥ－４型Ｘ－バンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図14－１のＥＳＲのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、ｇ値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、ｇ値が２付近の幅の広い信号（Ⅱ）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されている。図14－１では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高く、図14－２、－３の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した玉類の中で信号（Ⅱ）が信号（Ⅲ）より小さい場合は、二俣、細入産でないと言える。各原産地の原石の信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図15－１に花仙山、猿八、玉谷、土岐および図15－２に奥部、石戸、八代谷－４、女代（Ｂ）遺物群、八代谷の各原石の代表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。蛇紋系岩製と分類した管玉４のＥＳＲ信号はMnイオンと同じ磁気分裂幅をもつ信号（Mnイオン系と仮称）を示す（図16）。グリーンタフ系とした管玉１、２、３の信号（Ⅲ）（図17）に一致する原石産地の信号（Ⅲ）はない。しかし、これらグリーンタフ製管玉同士は同じ原石産地の可能性を推測してもＥＳＲの結果と矛盾しない。碧玉系と分類した管玉５は女代（Ｂ）群の信号（Ⅲ）に、石片７、８、９、10、11では花仙山の信号（Ⅲ）（図17）にそれぞれ非常によく似ている。このことは、ＥＳＲ分析から見ると分析した遺物の原石産地がそれぞれ似た信号を示す原石の産地

の可能性が大きいことを示唆している。さらに正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ、総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、そこの原産地の原石で作られた玉であると決定する（表3）。

結　　論

中国横断道関係遺跡の古墳時代の中で、下郷原田代No 1 遺跡出土のグリーンタフ製管玉1、2、3に使用された原材料の原産地は特定できなかったが、蛍光X線分析、ＥＳＲの両結果が一致するところから、不明の共通の原産地からの原石で作られた可能性が推測される。下郷原和田遺跡出土の管玉4の原石産地は不明で、管玉5は女代南遺物群と一致することから、共通の不明原産地の原石が使用されていると推論できる。車輪石6のグリーンタフ原材は管玉1、2、3の原材料と異なる蛍光X線分析結果であった。また石片7、8、9、10、11のＥＳＲ信号は花仙山に一致する。石片8、9の蛍光X線分析結果は花仙山産原石の可能性が示され、この2個の遺物は花仙山産原石が使用されていると推定できる。また、石片7、10は花仙山産と決定するには帰属確率が少し低いが、本遺跡で花仙山産原石が使用されていることを考慮すると、この2個の遺物も花仙山産の可能性は高いと思われる。石片11の花仙山群への帰属確率は低く、この遺物の原石産地は特定できなかった。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63－73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要　6：1－18.

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14：95－109

4）Tetsuo Warashina（1992）、Alloction of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science　19：357－373

5）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59－89

6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　No18：11－15

7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22：195－201

8）東村武信（1976）、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77－90

表1　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Al／Si X̄±σ	K／Si X̄±σ	Ca／K X̄±σ	Ti／K X̄±σ	K／Fe X̄±σ
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南遺物群	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析個数	Rb／Fe X̄±σ	Fe／Zr X̄±σ	Rb／Zr X̄±σ	Sr／Zr X̄±σ	Y／Zr X̄±σ
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南遺物群	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原石群名	分析個数	Mn／Fe X̄±σ	Ti／Fe X̄±σ	Nb／Zr X̄±σ	比重 X̄±σ
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

X̄：平均値、　σ：標準偏差値
女代南遺物群：女代南遺跡（豊岡市）で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

表2　中国横断道関係遺跡出土の玉類、玉材石片の分析結果

分析番号	元素比 Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
33210	.058	2.921	.092	.632	.130	.150	1.190	.178
33211	.081	4.253	.059	.498	.070	.135	1.859	.251
33212	.077	4.355	.065	.479	.104	.196	1.669	.327
33162	.050	.807	1.490	.873	.051	.271	2.852	.773
33213	.189	.082	7.725	116.457	.003	.000	56.094	.010
33214	.041	3.022	.017	.086	.340	.304	1.750	.532
33163	.023	1.307	.063	.116	.111	.222	8.863	1.964
33164	.023	1.360	.072	.111	.096	.185	11.749	2.171
33165	.024	1.472	.044	.096	.094	.215	12.575	2.704
33166	.026	1.280	.049	.125	.102	.190	11.683	2.219
33167	.020	1.407	.064	.112	.144	.240	6.835	1.638
JG-1[a)]	.081	3.433	.757	.207	.132	.258	3.942	1.017

分析番号	元素比 Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	重量 gr	比重
33210	2.118	.039	.006	.064	.016	0.346	2.176
33211	.733	.024	.010	.030	.026	0.207	2.029
33212	1.932	.013	.009	.041	.020	0.173	2.163
33162	10.914	.168	.011	.034	.000	3.136	----
33213	.027	.127	.022	.019	.000	0.491	2.728
33214	.053	.164	.006	.025	.020	0.196	2.579
33163	.495	.130	.000	.009	.000	0.464	2.592
33164	.332	.034	.001	.008	.043	1.427	2.548
33165	.428	.073	.000	.008	.000	4.857	2.550
33166	.321	.112	.001	.009	.056	0.470	2.582
33167	.405	.000	.002	.013	.000	1.400	2.559
JG-1	1.319	.218	.023	.022	.087		

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

表3　中国横断道関係の古墳時代遺跡出土の玉類、玉材石片の原石産地結果（岡山県真庭郡川上村）

遺物番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率 興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群	ESR信号形	総合判定原石産地
管玉1	33210	$1X10^{-15}$%	$1X10^{-9}$ %	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	不明1形	同じ原産地の原石？
〃 2	33211	$1X10^{-12}$%	$1X10^{-13}$%	$<10^{-25}$%	$1X10^{-24}$%	$<10^{-25}$%	〃	
〃 3	33212	$1X10^{-12}$%	$1X10^{-13}$%	$1X10^{-23}$%	$1X10^{-23}$%	$<10^{-25}$%	〃	
車輪石	33162	$<10^{-25}$%	$1X10^{-20}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	不明	不明
管玉4	33213	蛇紋系岩					Mnイオン様形	
〃 5	33214	$<10^{-20}$%	$1X10^{-15}$%	$<10^{-25}$%	4.6 %	76.0 %	女代(B)形	女代南遺物群
石片7	33163	$1X10^{-11}$%	$1X10^{-5}$ %	0.02 %	$1X10^{-9}$ %	$<10^{-20}$%	花仙山形	花仙山？
〃 8	33164	$1X10^{-10}$%	$1X10^{-4}$ %	5.1 %	$1X10^{-11}$%	$<10^{-22}$%	〃	花仙山
〃 9	33165	$1X10^{-9}$ %	$1X10^{-10}$%	35.8 %	$1X10^{-13}$%	$<10^{-13}$%	〃	〃
〃 10	33166	$1X10^{-10}$%	$1X10^{-6}$ %	0.01 %	$1X10^{-11}$%	$<10^{-25}$%	〃	花仙山？
〃 11	33167	$1X10^{-15}$%	0.001 %	$1X10^{-5}$ %	$1X10^{-6}$ %	$1X10^{-23}$%	〃	

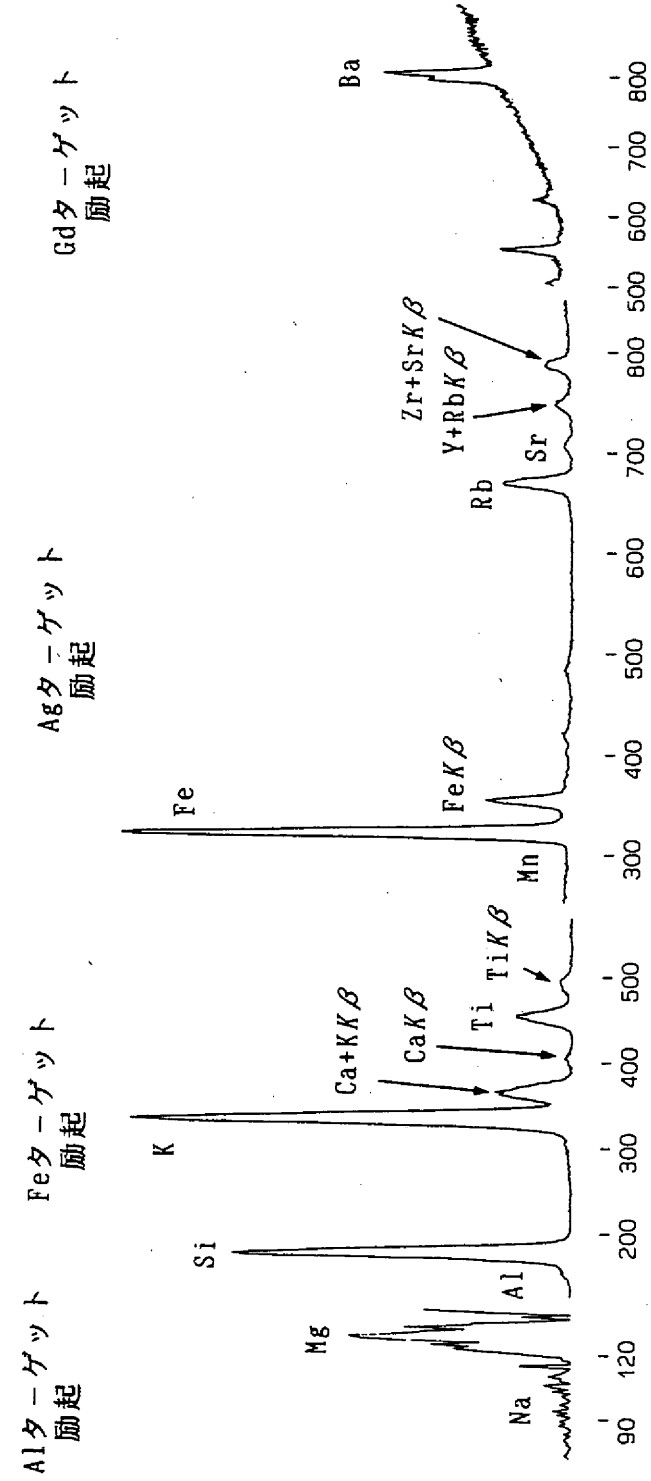


図1　花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

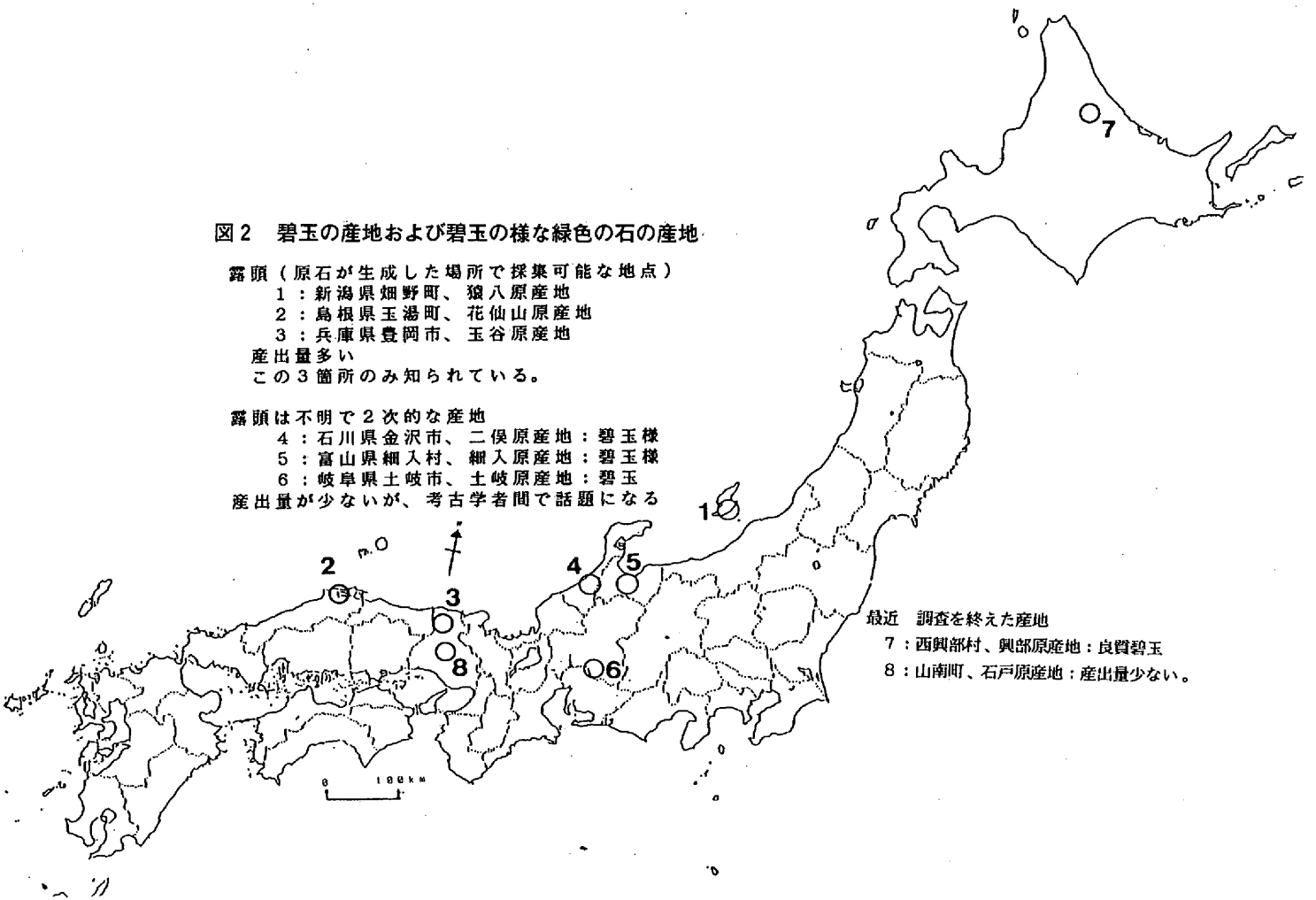


図２　碧玉の産地および碧玉の様な緑色の石の産地
露頭（原石が生成した場所で採集可能な地点）
１：新潟県畑野町、猿八原産地
２：島根県玉湯町、花仙山原産地
３：兵庫県豊岡市、玉谷原産地
産出量多い
この３箇所のみ知られている。
露頭は不明で２次的な産地
４：石川県金沢市、二俣原産地：碧玉様
５：富山県細入村、細入原産地：碧玉様
６：岐阜県土岐市、土岐原産地：碧玉
産出量が少ないが、考古学者間で話題になる
最近　調査を終えた産地
７：西興部村、興部原産地：良質碧玉
８：山南町、石戸原産地：産出量少ない。
0　100km

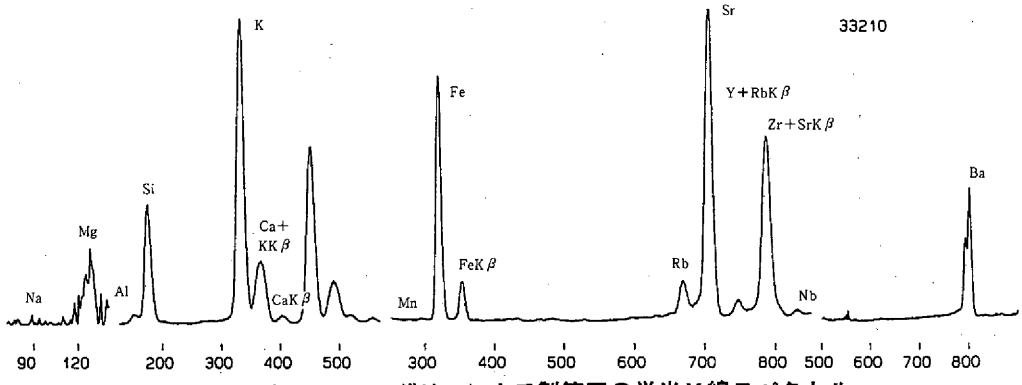


図３　下郷原田代No１－１、グリーンタフ製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル

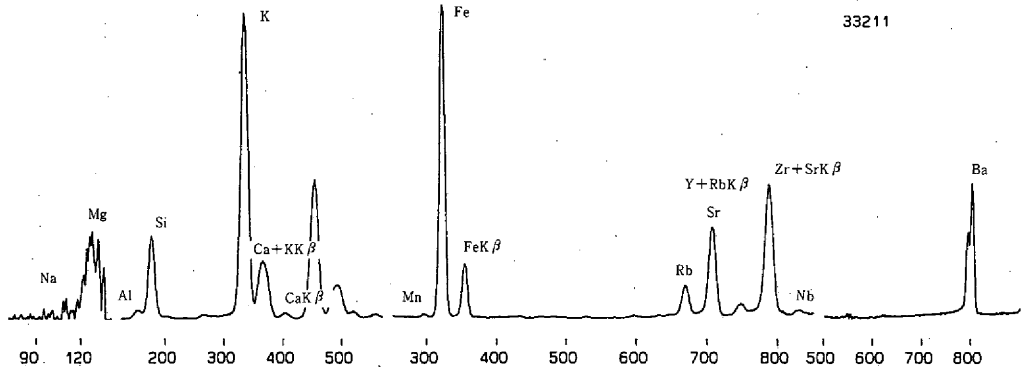


図４　下郷原田代No１－２、グリーンタフ製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル

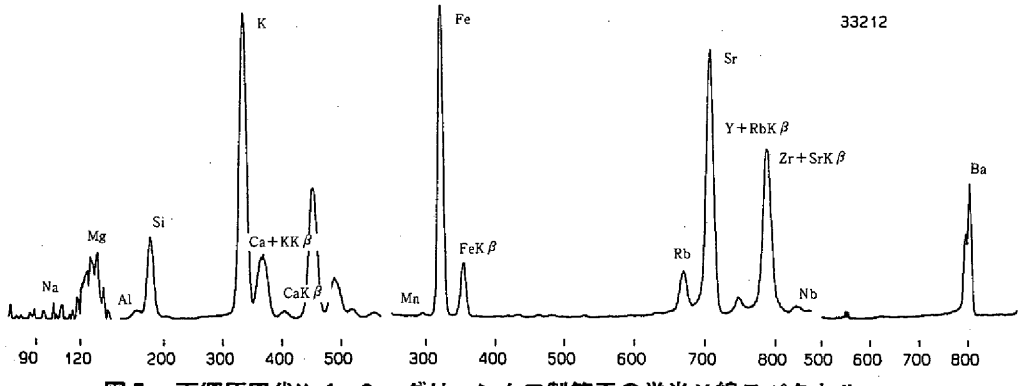


図５　下郷原田代No１－３、グリーンタフ製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル

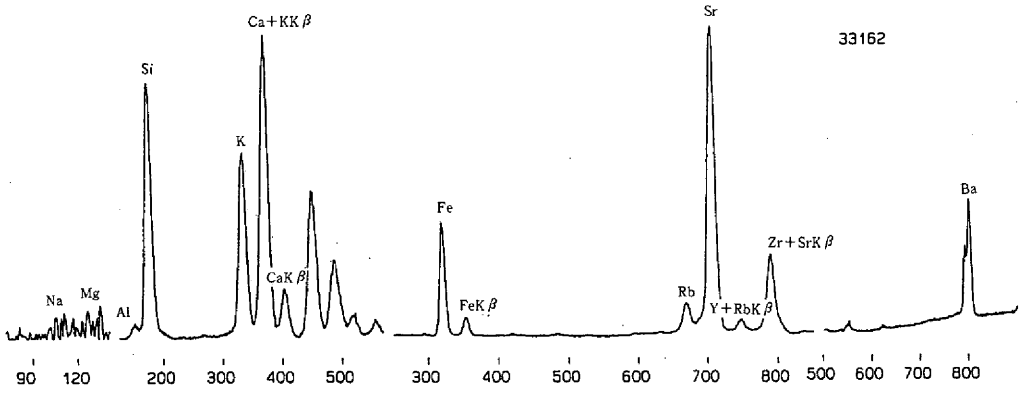


図6　下郷原和田-6、グリーンタフ製車輪石？の蛍光X線スペクトル

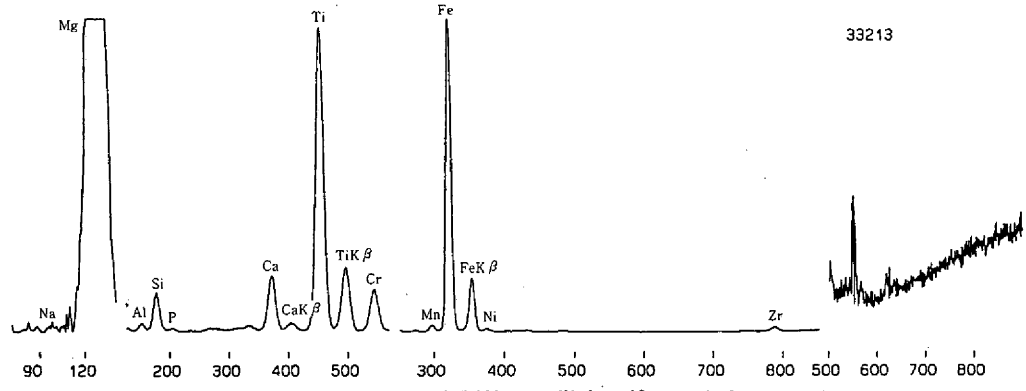


図7　下郷原和田-4、蛇紋系岩製管玉の蛍光X線スペクトル

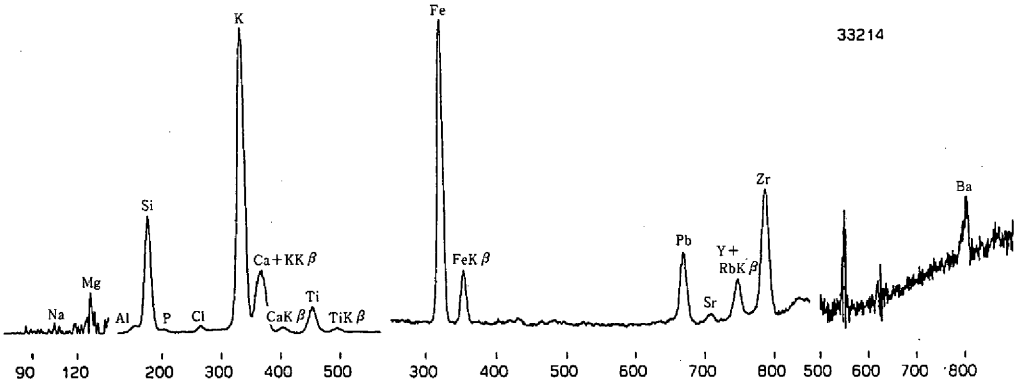


図8　下郷原和田-5、碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

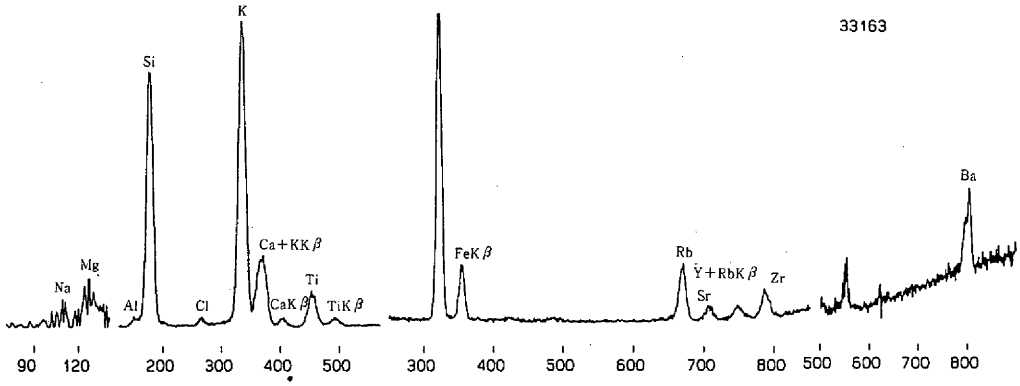


図9　下郷原和田-7、碧玉製玉材の蛍光X線スペクトル

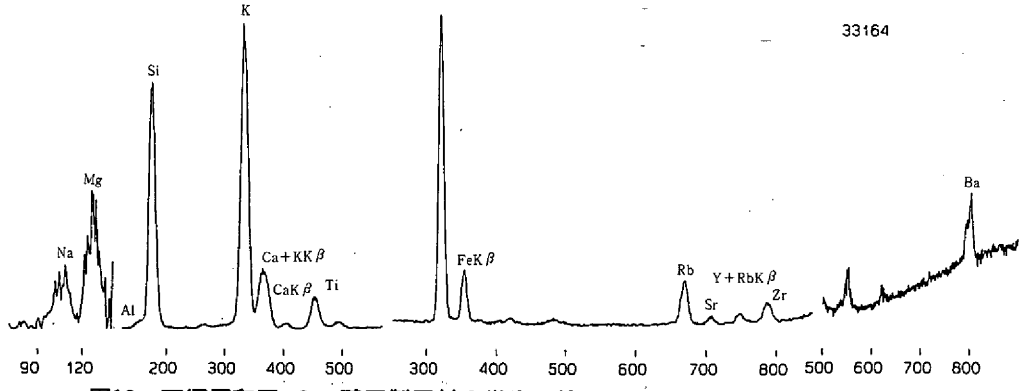


図10　下郷原和田-8、碧玉製玉材の蛍光X線スペクトル

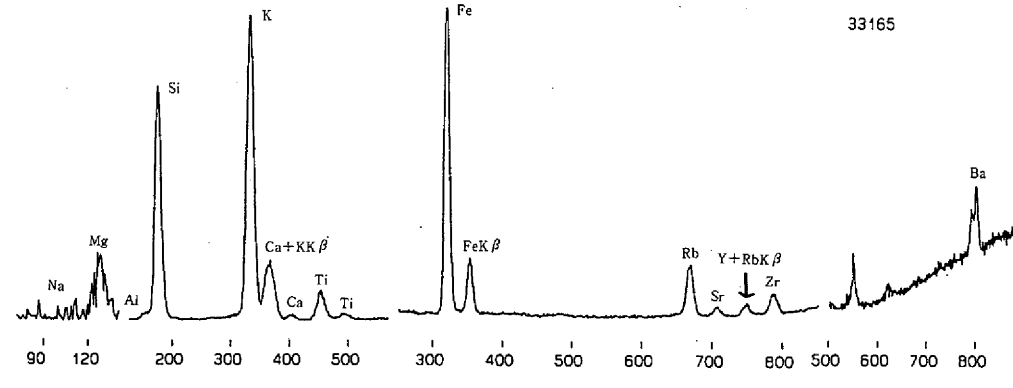


図11　下郷原和田-9、碧玉製玉材の蛍光X線スペクトル

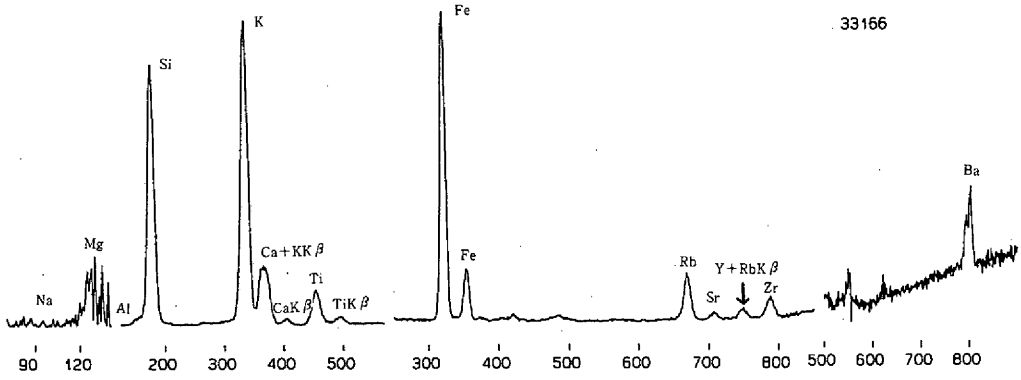


図12　下郷原和田-10、碧玉製玉材の蛍光X線スペクトル

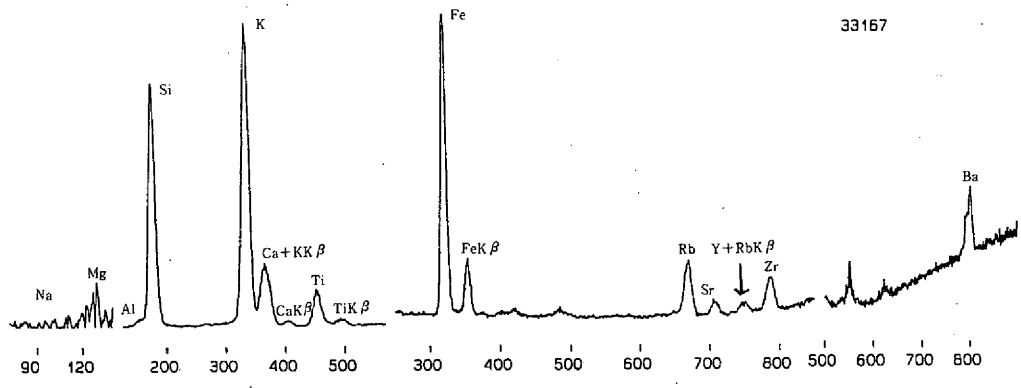


図13　下郷原和田-11、碧玉製玉材の蛍光X線スペクトル

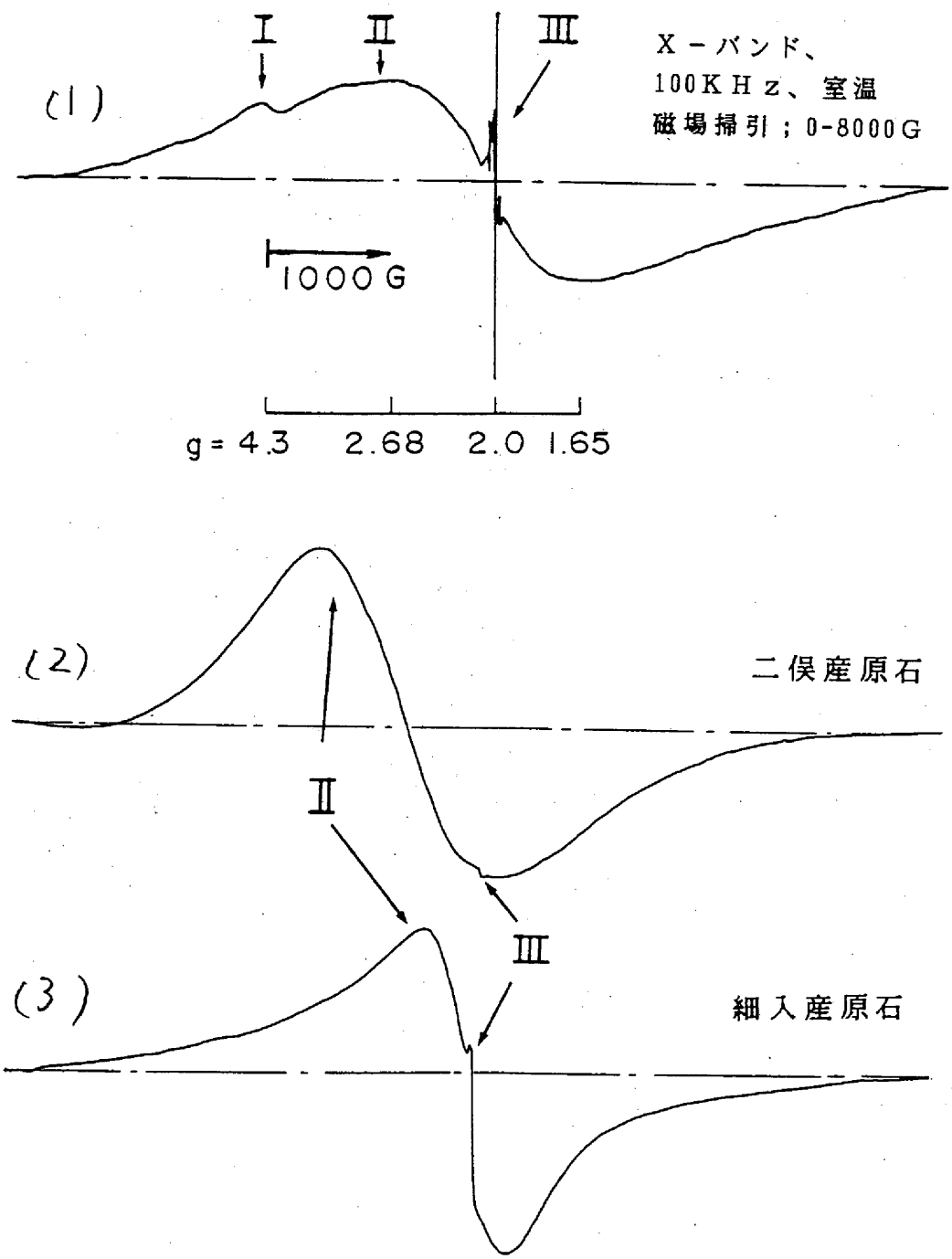


図14　碧玉原石のＥＳＲスペクトル
（花仙山、玉谷、猿八、土岐）

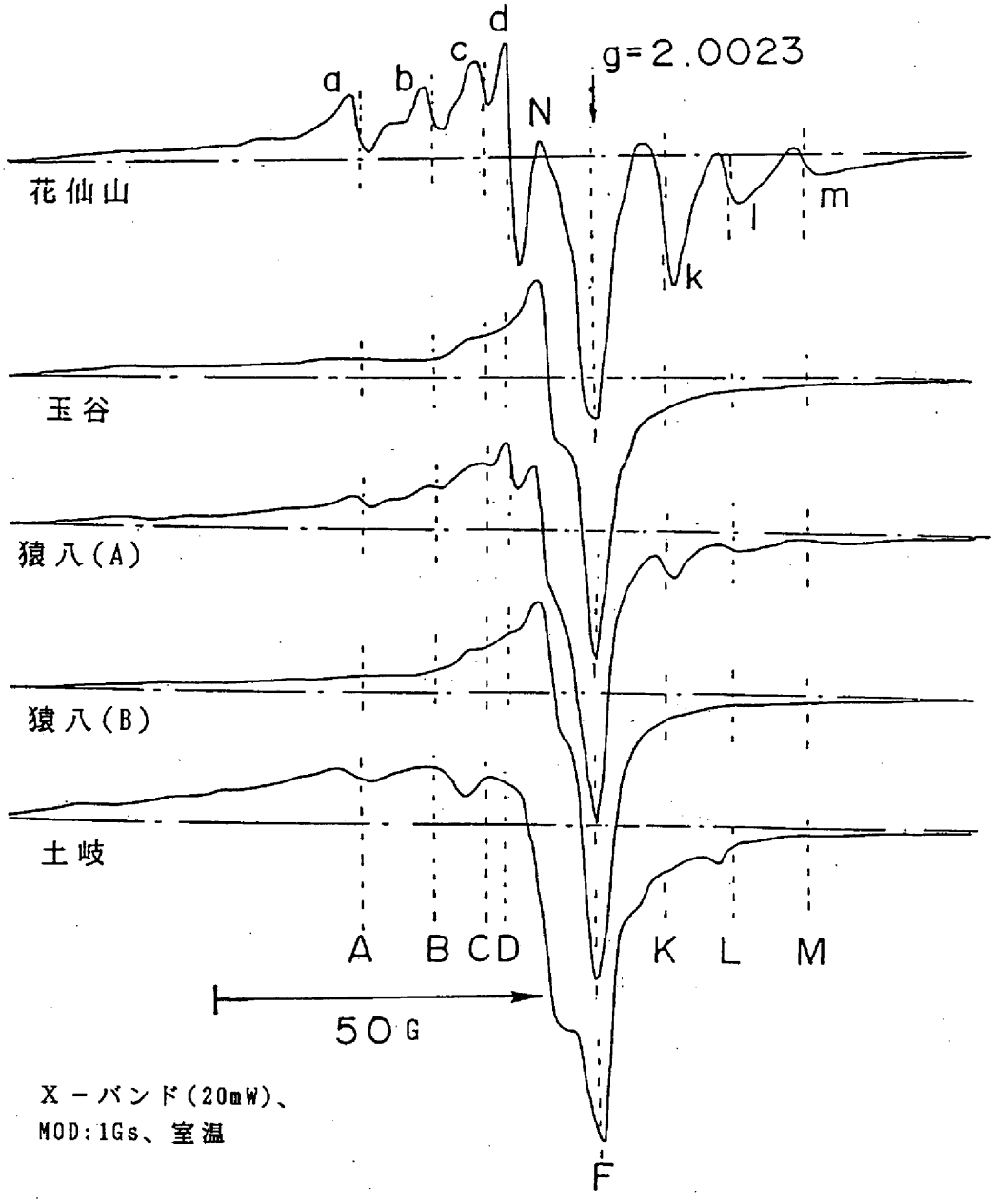


図15-(1)　碧玉原石の信号ⅢのＥＳＲのスペクトル

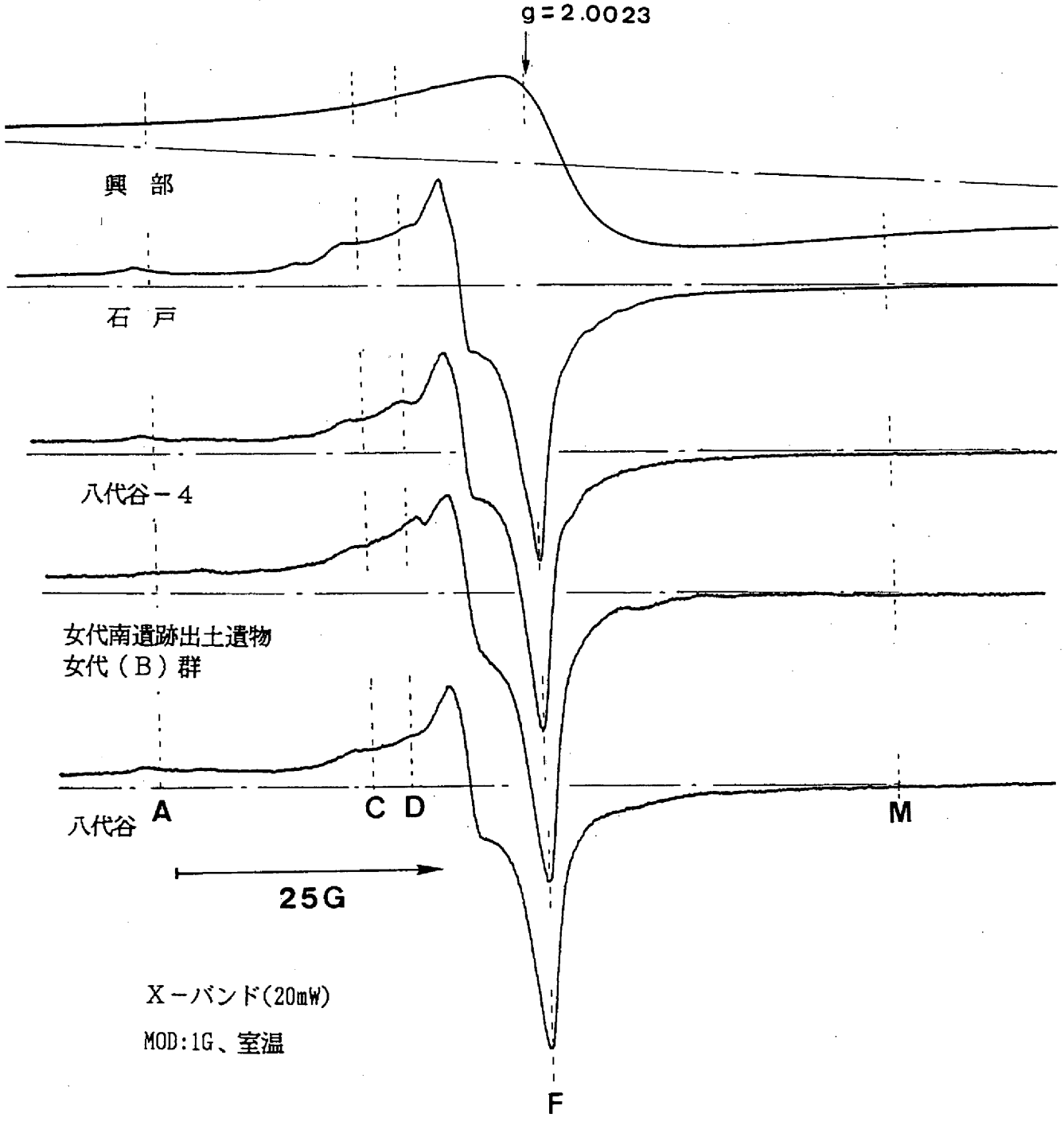


図15-(2)　碧玉原石の信号ⅢのＥＳＲベクトル

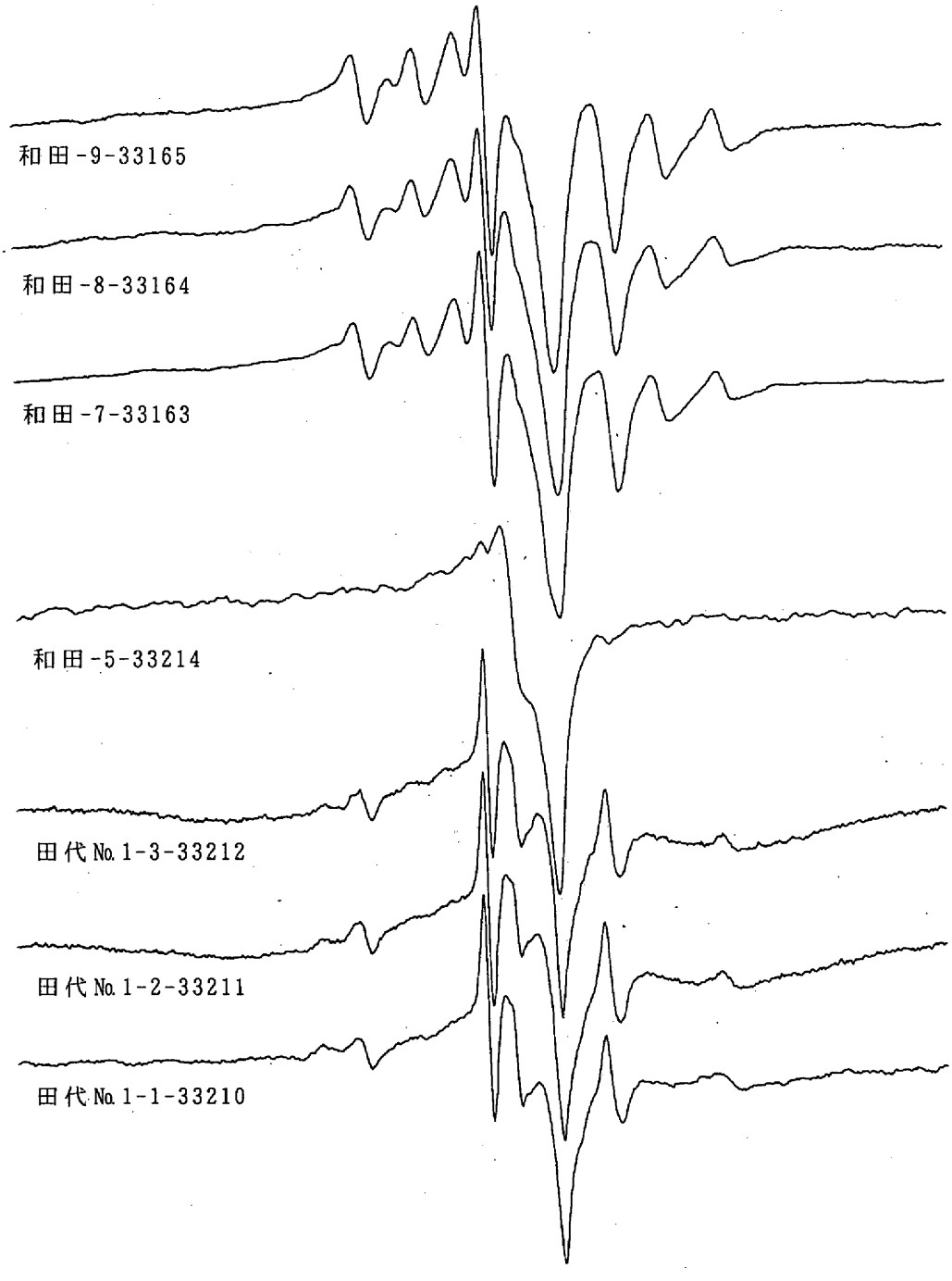


図17-1　中国横断道関係遺跡出土玉類の信号ⅢのＥＳＲスペクトル

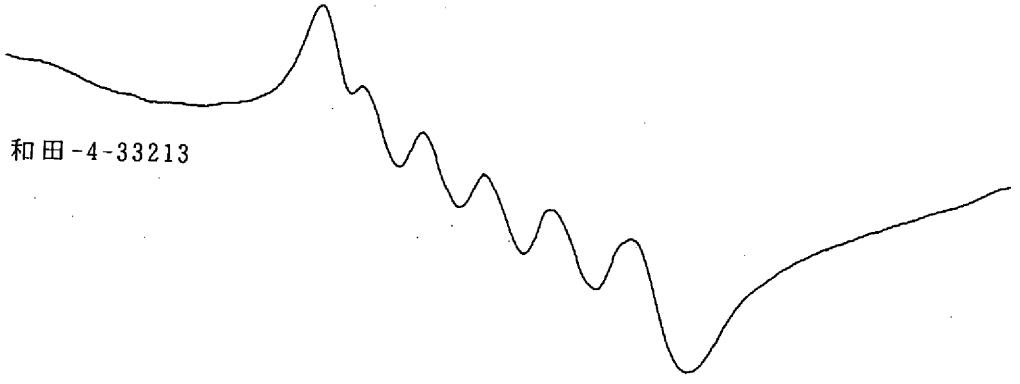


図16　中国横断道関係遺跡出土玉類のＥＳＲスペクトル

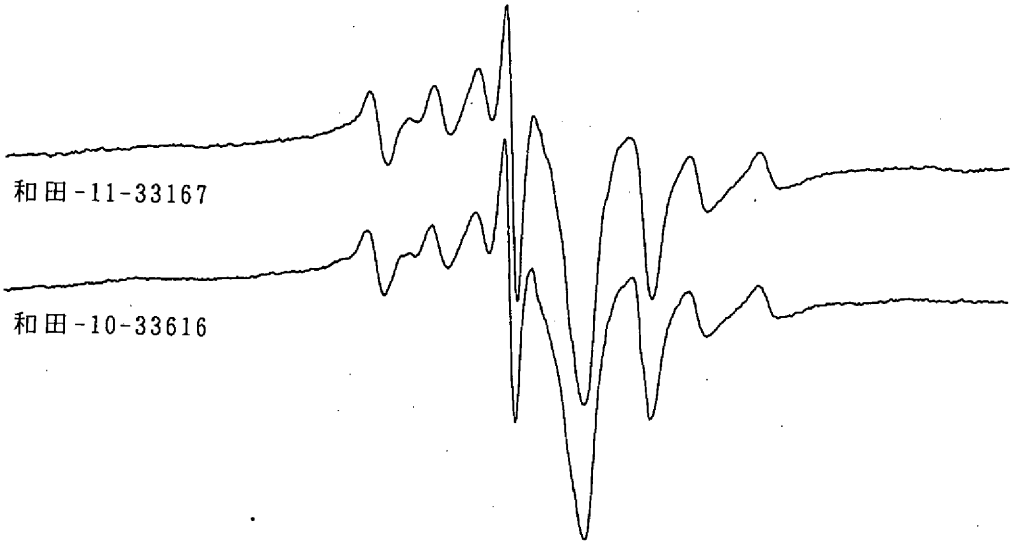


図17-２　中国横断道関係遺跡出土玉類の信号ⅢのＥＳＲスペクトル

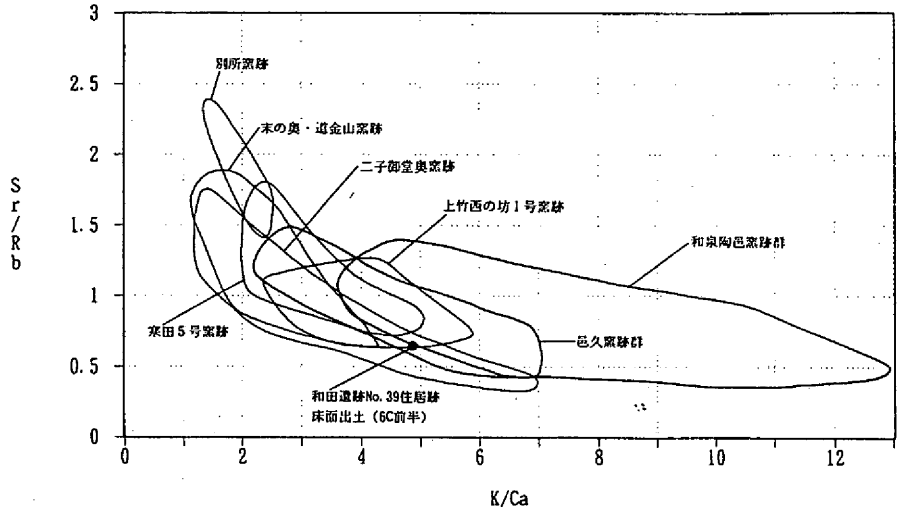
下郷原和田遺跡No. 39住居跡出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

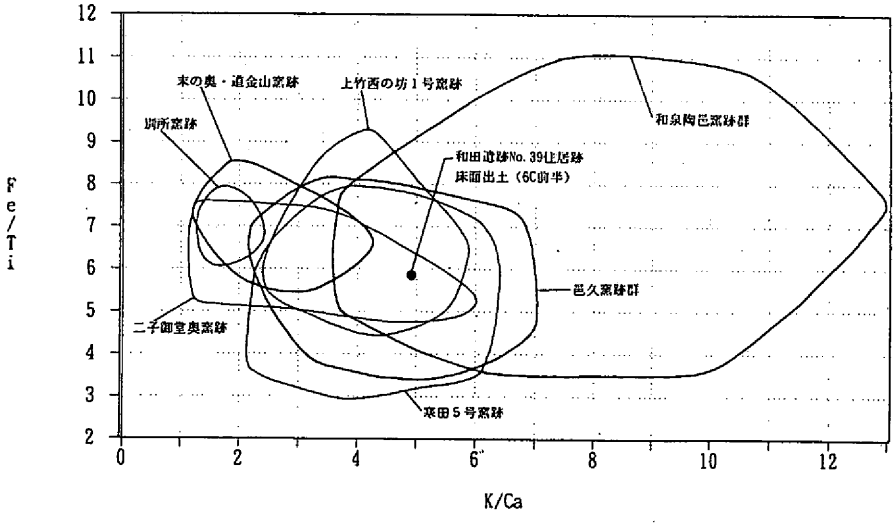
この胎土分析では、下郷原和田遺跡住居跡（No39）床面出土の須恵器片（6世紀前半）1点と現在まで筆者が蓄積している岡山県南部（6世紀～7世紀）および大阪和泉陶邑（5世紀～7世紀）の須恵器窯跡資料との比較をおこなった。

この結果、第1図K/Ca-Sr/Rb、第2図K/Ca-Fe/Tiの窯跡群の分布範囲に下郷原和田遺跡の須恵器をプロットした。第4図では岡山県邑久、二子御堂奥、上竹西の坊1号および和泉陶邑が重なる部分に、また第5図でも同様の結果となり、窯跡推定が不可能な結果となった。

以上のように、分析資料がわずか1点という制約もあり、この分析ではこれ以上の検討はできない結果となった。



第1図　K/Ca-Sr/Rb散布図　岡山県内・大阪和泉陶邑須恵器窯跡群分布図



第2図　K/Ca-Fe/Ti散布図　岡山県内・大阪和泉陶邑須恵器窯跡群分布図

岡山県中原古墳群出土の人骨
付・元定遺跡近世土壙墓の埋葬人骨

池田次郎　川中健二

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査の一環として、岡山県古代吉備文化財センターが1990年～1991年に実施した岡山県真庭郡久世町の中原古墳群の調査で、７基の古墳から人骨が検出された。人骨が遺存していた古墳の内部主体はすべて組合せ式石棺で、その年代は５世紀中葉から後半と推定されている。

３号墳

頭を東に向け、仰臥伸展位で埋葬された１体分の人骨が遺存する。

保存状態

頭蓋骨、胴骨、上肢骨が残存するが、頭蓋骨以外は破損が著しく、下肢骨はまったく見られない。顔面頭蓋の前面および前頭骨、頭頂骨の前方に赤色顔料が付着している。

頭蓋骨　後頭部が大きく欠損し、右の頬骨弓の一部、左右の乳様突起などが破損しているが、顔面頭蓋はほぼ完全である。下顎骨は、左右の第１大臼歯の間の骨体を残すだけである。上顎骨には左の犬歯と第１小臼歯、右の第１・第２小臼歯、下顎骨には左右の犬歯、右の第１・第２小臼歯と第１大臼歯が釘植しており、上顎左の第２小臼歯と大臼歯、右の大臼歯の歯槽は閉鎖している。

胴骨　第１、第３～第６胸椎、第１腰椎のほか、頸椎、胸椎、腰椎の破片７点が残存する。第３～第５胸椎は埋葬時の位置にある。

上肢骨　残存する上肢帯骨は左肩甲骨の棘上窩の一部だけである。左右の上腕骨、橈骨、尺骨のうち、頭、小結節を含む近位部破片を残す左上腕骨以外は骨体の破片である。

性、年齢の推定

眉弓の隆起は強く、男性骨と推定される。歯の磨耗は著しく、上顎左の犬歯と第１小臼歯、右の第１小臼歯は歯根を残すだけで、上顎大臼歯の歯槽はすべて閉鎖している。矢状縫合と冠状縫合は癒合を完了しており、矢状縫合の中央部は消失している。歯牙、頭蓋縫合の状態から熟年と推定される。

形態特徴

脳頭蓋の最大長は正確には測定できないが、180㎜程度とみられ、これと最大幅（136㎜）は

山陽古墳人[1]の平均値（最大長180.8㎜、最大幅141.6㎜）に近いが、バジオン・ブレグマ高（125㎜）はきわめて低い。したがって、長幅示数は中頭に属すが、長高示数と幅高示数（91.9）は低頭もしくはそれに近い。頭頂孔は両側に存在する。

顔面頭蓋の幅径は、頬骨弓幅（128㎜）、中顔幅（95㎜）とも著しく狭く、上顔高（68㎜）は山陽古墳人の平均値（68.8㎜）と一致する。コルマンの上顔示数（53.1）は中上顔、ウィルヒョーの上顔示数（71.6）は低上顔に属し、ともに山陽古墳人の上顔示数（コルマン50.7、ウィルヒョー67.5）より大きい。眼窩示数（左80.5）、鼻示数（48.0）はそれぞれ中眼窩と中鼻である。鼻根部はやや狭いが、鼻根湾曲示数（89.5）は山陽古墳人（88.7）とほぼ同じで、歯槽側面角（68°）は山陽古墳人（66.1°）よりやや大きい。眼窩上孔が右側に存在する。

7号墳第2主体

1体分の頭蓋骨が遺存するが、それは前頭骨、左右の頭頂骨、後頭骨のそれぞれ一部からなる頭蓋冠で、それ以外に左右側頭骨の椎体破片が存在する。

冠状縫合と矢状縫合は消失しており、人字縫合も癒合を完了している。熟年後半もしくは老年の骨と推定されるが、性別は不明である。

矢状頭頂弧長と弦長が計測できただけで、頭頂孔は左右とも欠如している。

8号墳第2主体

保存状態

破損が著しく、残存する骨はほとんどすべて小破片であるが、下肢骨は比較的よく残っている。

頭蓋骨　右頭頂骨と後頭骨の一部、左右側頭骨の椎体などいずれも小破片である。上下左右の第2小臼歯、第1～第3大臼歯、上顎右の犬歯、第1小臼歯、下顎左の中切歯、右の第1小臼歯が遺存する。

胴骨　第2頸椎の歯突起と第2仙椎以下を欠く仙骨破片だけである。

上肢骨　左右の橈骨と左尺骨の骨体破片が残存する。

下肢骨　左寛骨は、耳状面、大坐骨切痕の一部を含む腸骨の破片であるが、右寛骨の破片はそれより大きく、耳状面、大坐骨切痕、寛骨臼上部から恥骨上肢までを残している。左大腿骨は骨体上部約三分の一の破片であるが、後面を欠損し、右大腿骨は頸とそれに続く骨体上部の内側面の破片である。左右脛骨は骨体中央約三分の二を残しているが、左は内側面だけで、左腓骨は骨体近位のほぼ半分の破片である。

性、年齢の推定

寛骨の形状から女性と判定される。大臼歯の磨耗度はブロカの３度で、右の人字縫合は癒合している。壮年後半ないし熟年前半と推定される。

形態特徴

脛骨と腓骨はやや太く、脛骨、腓骨の骨体中央横断示数は大きく、西日本古墳人[2]の平均値（脛骨70.8、腓骨66.8）より畿内現代人[3]（脛骨77.0、腓骨71.5）に近い。

12号墳

２体分の遺骨が検出された。石棺の東西両小口近くに頭蓋骨があり、中央部には頭を西に向ける２号人骨の下肢骨破片が残存する。東小口より頭蓋骨だけを残す１号人骨が先葬者、２号人骨が追葬者の遺骨である。

１号人骨

後頭鱗と左右の頭頂骨が接続する比較的大きな破片のほか、左右の側頭骨と前頭骨の破片が存在する。

全般的に大きく、外後頭隆起は強い。冠状、矢状、人字縫合は明瞭に認められる。壮年男性骨と推定されるが、確かではない。

２号人骨

頭蓋骨、第１頸椎、寛骨臼、腸骨など寛骨の小破片、左右大腿骨の骨体近位部の破片が残存する。

頭蓋骨は、後頭骨から左側頭骨を経て蝶形骨左大翼に至る左側頭部の破片のほか、右側頭骨、前頭骨、左上顎骨骨体の破片である。上顎左の第２小臼歯と第１大臼歯、下顎左右の第１・第２大臼歯が残っている。

大腿骨の粗線が著しく強く、大臼歯の磨耗度はブロカの３度ないし４度で、熟年男性骨と推定されるが、確かではない。

15号墳

保存状態

１体分の頭蓋骨、胴骨、下肢骨の破片が遺存する。

頭蓋骨　右半分がよく残っているが、後頭鱗から頭蓋底を欠き、顔面も上顎骨骨体上部と頬骨を残すだけである。この破片以外に左側頭骨錐体、蝶形骨の小破片、下顎右の第１・第２小臼歯、第１大臼歯が遺存する。

胴骨　仙骨の上部小破片である。

下肢骨　左寛骨の耳状面から大坐骨切痕にかけての破片のほか寛骨の小破片と左右大腿骨、

右脛骨、左右不明の腓骨の骨体の破片が残存する。

性、年齢の推定

寛骨の形状から女性と判定される。大臼歯の磨耗度はブロカの３度で、矢状縫合、人字縫合とも癒合を完了しており、壮年後半と推定される。

形態特徴

計測できた項目は側顔長と右眼窩高だけであるが、全般的に小さく、きゃしゃである。頭頂孔は右側だけにあり、眼窩上孔は観察できた右には存在しない。

24号墳第１主体

保存状態

上半身の骨が比較的よく残っている。

頭蓋骨　右半分の大部分と頭蓋底を欠損し、顔面は左上顎骨体上部と頬骨を残すだけである。下顎骨も左は下顎枝の一部を欠くだけであるが、右はオトガイ孔より遠位を破損する。下顎骨には左の側切歯、犬歯、第１・第２大臼歯、右の側切歯、犬歯、第１小臼歯が釘植しているが、左の第１・第２小臼歯と右の第２小臼歯、第１大臼歯の歯槽は閉鎖している。また、上顎左右の中切歯、側切歯、左の犬歯、第１小臼歯が遊離歯として遺存する。

胴骨　第９～第12胸椎、第１腰椎と左右の中位肋骨数本の破片が残存する。

上肢骨　左上腕骨の遠位約三分の一、右上腕骨の骨体内側面、左尺骨の近位端と骨体の破片である。

下肢骨　左右大腿骨の骨体前面の破片だけが残っている。

性、年齢の推定

頭蓋骨には隆起の強い眉間と眉弓、強大な乳様突起と茎状突起など男性骨の特徴が明瞭に認められる。大臼歯の磨耗度はブロカの３度で、下顎の小臼歯、第１大臼歯の歯槽は閉鎖しており、冠状縫合と矢状縫合はほとんど消失している。また第１胸椎の椎体下縁前面には軽度の骨増殖が発達している。壮年後半から熟年前半と推定される。

形態特徴

脳頭蓋の最大長（174㎜）は小さく、最大幅（139㎜）は山陽古墳人と大差ない。長幅示数（79.9）は中頭の上限に入る。頭頂孔は左右に存在し、左のアステリオンに大きな縫合骨が認められる。

頬骨弓幅（128㎜）は著しく狭く、眼窩示数（75.0）は低眼窩に属す。眼窩上孔は左に見られるが、右は観察できない。下顎骨の骨体は高く、頑丈である。

右大腿骨の骨体上部は計測できないが、その断面は扁平である。

註

(1) 池田次郎　1993　古墳人.『古墳時代の研究　1　総論・研究史』　pp. 27－95. 雄山閣、東京.

(2) 城　一郎　1938　古墳時代人人骨の人類学的研究. 第三部　下肢骨. 人類学雑報、1：245－324.

(3) 平井　隆・田幡丈夫　1928　現代日本人人骨の人類学的研究. 第四部　下肢骨の研究. 其一　大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て. 人類学雑誌、43、第1附録.

付・元定遺跡近世土壙墓の埋葬人骨

資料は、中原古墳群に近接する真庭郡落合町上河内の元定遺跡の発掘調査に先立ち、元定Ⅲ区の第13号近世土壙墓から地元の旧地権者により掘り出され、岡山県古代吉備文化財センターに研究用として提供された一体分の人骨である。

保存状態

胴骨、手骨、膝蓋骨、足骨など小形の骨はほとんどなく、残存する肩甲骨、鎖骨、寛骨も小破片にすぎない。これに対して頭蓋骨は顔面の破損が著しく、主要な四肢長骨は長端を欠損するが、保存状態は比較的良好である。

頭蓋骨　前頭骨、蝶形骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨の一部を接合し、頭蓋冠を復元することができたが、頭蓋底と顔面は欠損部が多く、後頭骨底部、頬骨、上顎骨などが破片として残っている。下顎骨は左右の下顎頭、下顎枝後縁と切歯部の歯槽を欠く。下顎右の犬歯以外の歯が顎骨に釘植している。

胴骨　第1・第2頸椎と肋骨破片1点。

四肢骨　左鎖骨は胸骨端を欠くだけであるが、右鎖骨、左右の肩甲骨と寛骨は小破片で、手骨としては中節骨破片3点が残存する。上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨は骨体の大部分を残しているが、腓骨は左右とも骨体の破片である。

性、年齢の推定

頭蓋骨では眉弓の隆起が顕著で、乳突上稜も強い。四肢長骨は太く、上腕骨の大・小結節稜、尺骨の尺骨粗面、大腿骨の粗線、殿筋粗面、脛骨のヒラメ筋線など筋付着部の粗糙性が強いなど男性骨の特徴が明瞭に認められる。大臼歯の磨耗度はブロカの1度で、主要な頭蓋縫合の癒合は進んでいない。壮年前半の骨と推定される。

形態特徴

頭蓋最大長（178㎜）は岡山県粒江[1]の近世人（186.5㎜）よりはるかに大きく、熊本県桑島[2]の近世人（180.1㎜）よりやや小さく、頭蓋最大幅（134㎜）は粒江人（137.6㎜）と桑島人（131.0㎜）の中間に入る。長幅示数（75.3）は中頭に属し、長頭の粒江人（73.9）、桑島人（72.9）より大きいが、湯島無縁坂[3]（77.0）、雲光院[4]（76.9）、吉原墓地[5]（79.2）など東京や大阪の江戸時代人より小さい。

頭頂孔、眼窩上孔とも両側に存在する。上下左右とも第1小臼歯と第2小臼歯の間に歯列不整が見られるが、その程度は上顎より下顎で、また右より左で著しく、上顎右ではきわめて軽微である。上顎左の第1大臼歯と下顎右の第3大臼歯がムシ歯である。

四肢骨はすべて骨端を破損しているが、骨体の長さから推定される最大長は短い。骨体の周径は、各地の現代人や桑島近世人よりはるかに太く、土井ケ浜弥生人や津雲縄文人の平均値に匹敵するか、それを上まわるが、大腿骨中央周（左99㎜）と脛骨栄養孔部周径（左97㎜）が特に太い。大腿骨の中央横断示数（左121.4）は著しく大きく、津雲縄文人[6]の平均値（111.8）さえ及ばないが、骨体上部横断示数（右78.1）は関東[7]の古墳人（右78.9）や現代人（右77.7）と大差ない。脛骨の骨体横断示数は左右差が著しく、右の中央横断示数（73.3）は桑島近世人（74.9）、東京・天徳寺近世人[8]（75.6）、関東古墳人（73.8）と大差なく、左の中央横断示数（79.3）は関東現代人の平均値（78.7）に近い。同様に栄養孔部横断示数も左（75.0）は大きく、各地の現代人の変異内に入るが、右（69.4）は津雲縄文人（64.0）よりは大きいが、土井ケ浜弥生人、各地の中世人、近世人と大差なく、すべての現代人より小さい。

江戸時代の農村在住者は、都市生活者とは異なり、中世人的特徴を多分に残しており、一般に低身長、長頭であったといわれる[9]が、元定近世人の特徴もこれに該当する。

註

(1) 渡辺聰子・和田　洋・欠田早苗　1982　倉敷市粒江遺跡出土の江戸時代人頭蓋の研究．人類学雑誌、90：61－72.

(2) 脇　達也　1970　熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究．熊本医学会雑誌、44：1031－1091
立志悟朗　1969　熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究．第2　下腿骨について．熊本医学会雑誌、44：1116－1129.

(3) 河越逸行　1957　湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究．慈恵会医科大学解剖学教室業績、16：1－18.
森田　茂・河越逸行　1960　湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺．人類学雑誌、67：278－294.

(4) 鈴木　尚・佐倉　朔・江原昭善　1957　深川雲光院出土の江戸時代人頭骨について（会）・日本人類学会・日本民族学会連合大会記事、12：72－73.

(5) 欠田早苗　1959　畿内人頭蓋骨の人類学的研究．現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について．人類学輯報、25：53－83.

(6) 池田次郎　1988　吉備地方海岸部の縄文時代人骨――時代差と地域性の成立――．『考古学と関連科学』pp. 333－

371. 鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会、岡山.

(7) Yamaguchi B. 1986 Metric characters of the femora and tibiae from protohistoric sites in eastern Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D, 12:11-23.

(8) 竹内修一　1992　天徳寺寺域第3遺跡出土江戸時代人骨. 2. 四肢骨.『天徳寺寺域第3遺跡発掘調査報告書　浄品院跡の考古学的調査』　pp. 329－336. 天徳寺寺域第3遺跡調査会、東京.

(9) 池田次郎　1981　異説「弥生人考」. 季刊人類学、12（4）：3－59.

付表1　脳頭蓋計測値

		中原古墳群			元定Ⅲ区
		3号墳	7号墳第2主体	24号墳第1主体	土壙墓13
		熟年男性	熟年	壮年男性	壮年男性
1	頭蓋最大長			174	178
2a	ナジオン・イニオン長			(162)	171
3	グラベラ・ラムダ長	175		167	(174)
5	基底長	98			
8	頭蓋最大幅	136		139	134
9	最小前頭幅	91		(98)	102
10	最大前頭幅	120			123
11	両耳幅	(124)			120
12	最大後頭幅				105
17	バジオン・ブレグマ高	125			
20	耳ブレグマ高	114			
24	横弧長	303			
25	正中矢状弧長				362
26	正中矢状前頭弧長	122		123	123
27	正中矢状頭頂弧長	130	125	120	126
28	正中矢状後頭弧長				113
29	正中矢状前頭弦長	106		108	109
30	正中矢状頭頂弦長	114	111	107	
32(5)	前頭弯曲角	128			
8/1	頭蓋長幅示数			79.9	75.3
17/8	頭蓋幅高示数	91.9			
20/8	幅耳ブレグマ高示数	83.8			
9/10	横前頭示数	75.8			82.9
9/8	横前頭頭頂示数	66.9		(70.5)	76.1
27/26	矢状前頭頭頂示数	106.6		97.6	102.4
29/26	矢状前頭示数	86.9		87.8	88.6
30/27	矢状頭頂示数	87.7	88.8	89.2	

付表２　　顔面頭蓋計測値

			中原古墳群		
			３号墳	15号墳	24号墳第１主体
			熟年男性	壮年女性	壮年男性
40	顔長		97		
41	側顔長		68	70	70
43	上顔幅		100		(104)
43(1)	内眼窩間幅		92		
44	両眼窩幅		92		(92)
44(1)	鼻頬幅		98		
45	頬骨弓幅		(128)		(128)
46	中顔高		95		
48	上顔高		68		
49	後眼窩間幅		21		
50	前眼窩間幅		17		
F	鼻根横弧長		19		
51	眼窩幅	右	42		
		左	41		44
52	眼窩幅	右	34	33	
		左	33		33
54	鼻幅		24		
55	鼻高		50		
57	鼻骨最小幅		6		
57(1)	鼻骨最大幅		14		
57(2)	鼻骨上幅		6		
60	上顎歯槽長		51		
61	上顎歯槽幅		(56)		
62	口蓋長		44		
72	全側面角		84		
73	鼻側面角		88		

74	歯槽側面角		68	
75	鼻骨側面角		66	
75(1)	鼻背角		18	
44(1)/44	鼻頬示数		106.5	
48/45	上顔示数（K）		(53.1)	
48/46	上顔示数（V）		71.6	
50/44	前眼窩間示数		18.5	
50/F	鼻根弯曲示数		89.5	
52/51	眼窩示数	右	81.0	
		左	80.5	75.0
54/55	鼻示数		48.0	
57/57(1)	横鼻骨示数		42.9	
61/60	上顎歯槽示数		109.8	
45/8	横頭顔示数		(94.1)	
9/43	前頭両眼窩示数		91.0	
9/45	頬前頭示数		(71.1)	

付表３　下顎骨計測値

			中原古墳群		元定Ⅲ区
			３号墳	24号墳第１主体	土壙墓13
			熟年男性	壮年男性	壮年男性
67	前下顎幅		44	44	46
69	オトガイ高			33	
69(1)	下顎体高	右			34
		左	31	(32)	36
69(2)	下顎体高	右			27
		左			29
69(3)	下顎体厚	右	12	13	11
		左	12	13	10

付表４　　四肢骨計測値

		中原古墳群 8号墳第2主体 壮年～熟年女性		元定Ⅲ区 土壙墓13 壮年男性	
鎖骨		右	左	右	左
4	中央垂直径				10
5	中央矢状径				14
6	中央周				20
4/5	中央横断示数				71.4
上腕骨					
4	中央最大径			24	24
5	中央最小径			18	17
7	最小周			65	63
7a	中央周			70	69
6/5	骨体横断示数			75.0	70.8
橈骨					
3	最小周			44	44
4	骨体横径			17	17
5	骨体矢状径			12	12
5(5)	中央周			47	47
5/4	骨体横断示数			70.6	70.6
尺骨					
3	最小周			38	
11	前後径			13	14
12	横径			15	17
11/12	骨体横断示数			86.7	82.4
大腿骨					
6	中央矢状径			33	34
7	中央横径			28	28
8	中央周			98	99
9'	骨体上部最大径			32	33
10'	骨体上部最小径			25	26

6/7	中央横断示数			117.9	121.4
10'/9'	骨体上部横断示数			78.1	78.8
	脛骨				
8	中央最大径	29		30	29
8a	栄養孔部最大径			36	36
9	中央横径	22		22	23
9a	栄養孔部横径			25	27
10	骨体周	80		83	83
10a	栄養孔部周径			96	97
10b	最小周			74	74
9/8	中央横断示数	75.9		73.3	79.3
9a/8a	栄養孔部横断示数			69.4	75.0
	腓骨				
2	中央最大径		14		
3	中央最小径		10		
4	中央周		42		
3/2	中央横断示数		71.4		

中原古墳群中の数基の古墳の箱式石棺の石材等に付着の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部　安田博幸　森　眞由美

岡山県真庭郡久世町の中原古墳群が、中国横断自動車道建設に伴い発掘調査され、大部分が5世紀代の箱式石棺を内部主体とする方墳・円墳群であることが明らかになった。出土したこれらの箱式石棺の石材には、赤色顔料が付着残存していた。今回、これらの赤色顔料物質について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法[(1)]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、所見を得たので報告する。

試料に関する考古学資料

試料の考古学的な資料については、後出の表1に微量化学分析結果とともに一括掲載する。

分析用試料の採取

試料1～4は発掘調査担当者によって、現地の付着箇所で削り取って保管されていたものから各3㎎を分析用試料として用いた。試料5～7は、調査担当者が保管されていたそれぞれの石材片に付着の赤色顔料を、筆者らが鋼針を用いて注意深く削り取り、それぞれ3㎎を分析用試料として用いた。

試料検液の作製

上記の分析用試料のそれぞれをガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加えて加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は、試料番号にそれぞれ対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B（2㎝×40㎝）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1％ジフェニル

カルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記の各試料検液（すなわち各試料）ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表１のとおりである。

表１　中原古墳群中の数基の古墳の箱式石棺石材に付着の赤色顔料の化学分析結果ならびに考古学的資料一覧

試料	古墳　遺構名	出土状況と試料採取箇所	ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値（色調）*1	ジチゾンによる呈色スポットのRf値（色調）*2	判　定	共伴遺物
1	3号墳(円墳) 箱式石棺	石棺石材に付着	0.10(紫褐色)	呈色スポット発現せず	ベンガラ	鉄剣1　鉄刀1　人骨1
2	12号墳(円墳) 箱式石棺	石棺石材天井裏側付着	0.08(紫褐色)	呈色スポット発現せず	〃	人骨2
3	15号墳(方墳) 箱式石棺	石棺石材側壁、枕石に付着	0.07(紫褐色)	呈色スポット発現せず	〃	人骨1
4	21号墳(方墳) 箱式石棺	枕石下床石付着	0.09(紫褐色)	呈色スポット発現せず	〃	
5	23号墳(方墳) 第3主体箱式石棺	石棺石材側壁に付着	0.10(紫褐色)	呈色スポット発現せず	〃	管玉2　ガラス小玉1　刀子1　竪櫛4
6	24号墳(方墳) 第1主体箱式石棺	北小口石棺石材に付着	0.09(紫褐色)	呈色スポット発現せず	〃	刀1　刀子1　竪櫛37
7	24号墳(方墳) 〃	西側石棺石材南2枚目に付着	0.09(紫褐色)	呈色スポット発現せず	〃	
$Fe3^+$標準液 $Hg2^+$標準液			0.12(紫褐色) 0.89(紫色)	呈色スポット発現せず 0.89(橙色)		

*1 ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：$Hg2^+$は紫色、$Fe3^+$は紫褐色のスポットとして検出される。
*2 ジチゾンによる検出：$Hg2^+$は橙色スポットとして検出され、$Fe3^+$は反応陰性のため呈色せず。

結果と判定

表１の分析結果のとおり、今回微量化学分析を行なった。中原古墳群中の数基の古墳から出土した箱式石棺の石材等に塗布されたとみられる赤色顔料からは、Hg^{2+}は全く検出されず、すべてFe^{3+}のみであることが明かとなった。したがって、５世紀代の本古墳群の葬送儀礼においては、仙薬としての呪的意味をもったとされる水銀朱（辰砂 HgS）は使用されることがなく、赤色顔料はすべてベンガラ系（Fe_2O_3）のものが利用されていたと判定される。

（1991年10月分析）

註

1　安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤　忠編集日本考古学論集１　考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp.389-407（1986）

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならび技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集　第七』吉川弘文館 pp.449-471（1984）

岡山県久世町中原25号墳から出土した耳環の自然科学的研究

東京国立文化財研究所保存科学部　平尾　良光
東京学芸大学文化財科学　瀬川冨美子

1　はじめに

岡山県古代吉備文化財センターの依頼により久世町中原25号墳出土の耳環について、蛍光X線分析法による化学組成の測定と鉛同位体比法による材料の産地推定を行なった。

2　分析法

化学組成の測定は非破壊で分析できる蛍光X線分析法で行なった[1]。蛍光X線分析法を利用した化学組成の測定にはフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSを用いた。機器の使用条件はモリブデン管球を用い、60kV、30mAで一次X線を発生させて、資料に照射した。資料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でX線を角度毎に分散させ、分散角度におけるX線強度を測定した。

産地推定のためには鉛同位体比法を利用した[2]。鉛同位体比の測定はVG社製全自動表面電離型質量分析計Sector-Jで行なった。資料の錆の一部を採取し、溶解し、含まれている鉛を電気分解法で精製分離した。この鉛の一定量を質量分析計に装着し、鉛の同位体比を測定した。値はNBS-SRM-981で規格化した[2]。

3　資　料

資料を写真1で示した。白い粉錆で覆われている完形品の耳環が1点であった。中原25号墳は岡山県真庭郡久世町大字目本と大字中原の境に位置した東西に長く伸びている低い丘陵に築造された中原古墳群の中の一つである。直径12mの円墳で、6世紀後半の横穴式石室を内部主体としている。副葬品として、各種須恵器、鉄刀、刀子などが出土した。

4　蛍光X線分析および結果

蛍光X線分析法では、測定部表面から約10マイクロメートルまでの深さの化学元素組成に関

する情報が得られる。それ故、表面に錆などがあれば影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。本測定に供された資料は真白な錆で厚く覆われていたので、その化学組成を定量的に表現しにくい。そこで定性的な結果を次にまとめた。

測定部分を写真２で示した。また測定部分の拡大写真を写真３で示した。

測定された蛍光Ｘ線スペクトル図を図１ａ、ｂで示した。図１の横軸は資料から発生したＸ線の分散された角度である。Ｘ線は元素毎に異なった角度に分散されるので、特定の波長は特定の元素を意味する。縦軸はＸ線の強度、即ち元素の量である。図１ａは全体の様子であり、図１ｂは小さなピークを縦に拡大している。すなわち図１ａと図１ｂとでは横軸の角度は同じであるが、縦軸は図１ａが全幅で10,000カウント／秒であり、図１ｂでは500カウント／秒と１／20倍となっている。それ故、図１ｂでは小さなピークを検出できるようになっている。図１ａから判断すると、鉛（28.2°、34.0°に現われたＬα、Ｌβ線）が主成分である。他元素はほとんど見えない。図１ｂから、その他の元素として微量の銅、ニッケル、鉄が見える。アンチモン、スズ、銀、亜鉛などの元素は見えない。

この化学組成から、鉄は埋蔵中に土壌から混入してきたとも考えられるので、この濃度はあまり問題にできない。それ故、本製品はかなり純度の高い鉛で作られていると判断できる。各元素の強度比を表１でまとめた。

類似例として、他の古墳から出土した鉛製耳環と比較した。栃木県下都賀郡壬生町の上原古墳群の中の５号墳から出土した資料で、鉛製耳環がある[3]。この古墳の年代は７世紀初頭と推定される。この資料も鉛以外の他の元素をほとんど含んでいなかった。即ち、アンチモン、銀、ヒ素などの元素は分析装置の検出限界以下であった。それ故、これらの時代にはかなり純度の高い鉛を生産することが普通にできるようになっていたと判断される。

5　鉛同位体比の測定結果と考察

１）鉛同位体比の測定

蛍光Ｘ線分析の結果、主成分は鉛なので、表面の白色錆は塩基性塩化鉛、あるいは塩基性炭酸鉛と推定される。それ故、この白色錆の微少量（１mg以下）を採取して、鉛同位体比の測定試料とした。試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて加熱、溶解し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金電極を用いて２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.2μｇの鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、ＶＧ社製の全自動表面電離型質量分析形Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

2）鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表2で示した。参考として今までに報告されている福島県上原古墳出土の鉛製耳環の値[3]を載せた。鉛同位体比による産地推定の原理および応用については「都田地区発掘報告書」[4][5]など、今までに幾つかの報告で述べているので省略する。得られた値を今までに測定された値と比較してみると、図2と3のようになった[6-10]。

図2は縦軸が$^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が$^{207}Pb/^{206}Pb$の値である。この図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち図2の表現方法を用いると、日本の弥生時代における東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域。Dは朝鮮半島産の多紐細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示されることが判っている。この図の中で中原25号墳出土の耳環を「■」で示し、上原古墳から出土した耳環の値を「●」で示した。

中原25号墳から出土した鉛製耳環はA、B、C、Dのどの領域にも含まれず、大きく右上へ外れた。これだけ大きく外れる例は今までの測定において非常に少ない。一方、上原古墳の耳環はD線の下に位置し、外れてはいるがほぼD線の資料、即ち朝鮮半島産の鉛と見ることができる。

このことを確かめるためにもう一つの鉛同位体比の図を調べた。これを図3で表わした。この図では縦軸が$^{207}Pb/^{204}Pb$の値、横軸が$^{206}Pb/^{204}Pb$の値である。この図をB式図と呼ぶこととする。この図3の中で、A', B', C', D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。ここでも本資料である中原古墳出土耳環「■」は左方に大きく外れた。上原古墳の耳環は「●」の印で表されるが、D'線に近いことが分かった。それ故、上原古墳出土のこの資料は今までに測定された朝鮮半島の鉛と類似の資料であることが分かった。しかしながら、A式図（図2）とB式図（図3）から分かることは中原25号墳出土の鉛製耳環が示す値は従来の分布領域には当てはまらないということである。つまり、本資料の原料産地を求めるにはこれまでの比較資料をそのまま利用するだけでは難しいことが分かった。これらの図において、A・B・Cなどで示される領域は、元来日本の弥生時代に対応した中国の漢式鏡が示す同位体比の分布領域を基本としている。さらに、朝鮮半島の場合は、半島産の鉛領域の値として採用しているのは、半島産と推定されている多紐細文鏡だけでなく細形銅剣など主として朝鮮半島の南部と推定される資料が示す領域である。日本産の鉛領域は当時の日本産鉛がないので、現代の鉛鉱山と和同開珎などが示す領域を利用している。そのためこれらの領域に含まれない種類の鉛があってもおかしくはないし、そのような鉛鉱山が中国で六朝時代以降になって開発された

としても良い。そこでA～D領域以外の産地推定の目安となる可能性を持つ資料として、東アジア各地鉛鉱山から産出された鉛鉱石を取り上げ、これらの鉛同位体比の分布図を作成し、本耳環資料の産地推定を試みた。

東アジア各地の鉛鉱石の鉛同位体比の分布図[9]に耳環資料を載せてみると、図4と図5となった。図4は朝鮮および中国の鉱山資料の分布をA式図で示している。この図からすると中原25号墳の耳環は朝鮮半島北部の鉱山鉛の領域に含まれていると示唆される。また上原5号墳の耳環は朝鮮半島南部の鉱山鉛と比定される。この分布をB式図で示したのが図5である。図5からも同様に、各々の資料が朝鮮半島北部産および南部産の鉛と理解できるので、両資料は朝鮮半島からもたらされた鉛を利用しているが、産地の系統はまったく異なっていると判断される。

鉛製資料は弥生時代、古墳時代でそれほど多くはなく、むしろ珍しい材質という部類に含まれる。その中でも製品が耳環であること、および材料が朝鮮半島北部産の鉛と推定されたことは、今後、古墳時代に於ける物資の流通あるいは人間の移動とも絡んで、考古学的に新しい局面を示唆する可能性を含んでいる。

6　引用文献

(1) 平尾良光、三浦定俊：法隆寺献納宝物竜首水瓶の科学的調査：ＭＵＳＥＵＭ：No457 27-34 (1989)

(2) 平尾良光、馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sectorの規格化について：保存科学：28、17-24 (1989)

(3) 平尾良光：上原5号墳出土耳環の科学的調査：栃木県壬生町上原古墳、日本窯業史研究所報告第29冊、日本窯業史研究所、大川清 p46 (1989)

(4) 平尾良光、馬淵久夫：東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査：都田地区発掘調査報告書（下巻）、浜松市・浜松市教育委員会・(財)浜松市文化協会編 p590-620 (1990)

(5) 平尾良光：古代日本の青銅器：ＭＡＣサイエンス：4、22-33 (1990)

(6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究：ＭＵＳＥＵＭ：No370、4-10 (1982ａ)

(7) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料：考古学雑誌：68、42-62 (1982ｂ)

(8) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）：ＭＵＳＥＵＭ：No382、16-26 (1983)

(9) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の同位体比－青銅器との関連を中心に－：考古学雑誌：73、199-210 (1987)

(10) 馬淵久夫、平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比：考古学雑誌：75、385-404 (1991)

表1　中原25号古墳出土耳環の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比

角度※2)	アンチモン (13.5)	スズ (14.0)	銀 (16.0)	鉛※3 (28.3)	ヒ素※3 (34.0)	亜鉛 (41.8)	銅 (45.0)	ニッケル (48.7)	鉄 (57.5)	銅強度 (cpm)
耳環(FLM037)※4	−	−	−	100	−	−	+	+	4.0	5700

※1）数値は角度45.0度におけるX線強度を100としたときの各元素の強度比
※2）2θで表わされた各元素の励起X線の位置
※3）鉛のピークはスズの影響を、ヒ素のピークは鉛の影響を補正した値
※4）FLMは当研究室の蛍光X線測定番号

表2　中原25号古墳および上原5号古墳出土の鉛製耳環の鉛同位体比

資料名	$\frac{^{206}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{206}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{206}Pb}$	備　考
中原25号墳 耳環(SG-90)※1)	16.936	15.635	38.371	0.9232	2.2657	本測定
上原5号墳 耳環(CP006)※1)	19.072	15.830	39.490	0.8300	2.0706	文献(3)
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

※1）CPおよびSG番号は当研究室における鉛同位体比測定番号

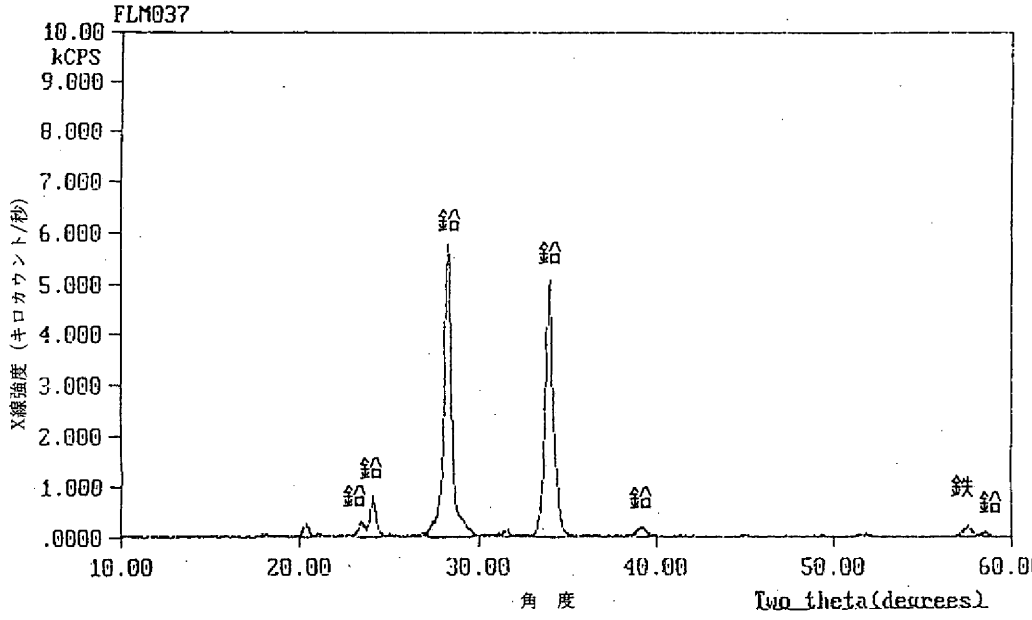


図１－ａ　中原25号古墳出土耳環の蛍光Ｘ線スペクトル図

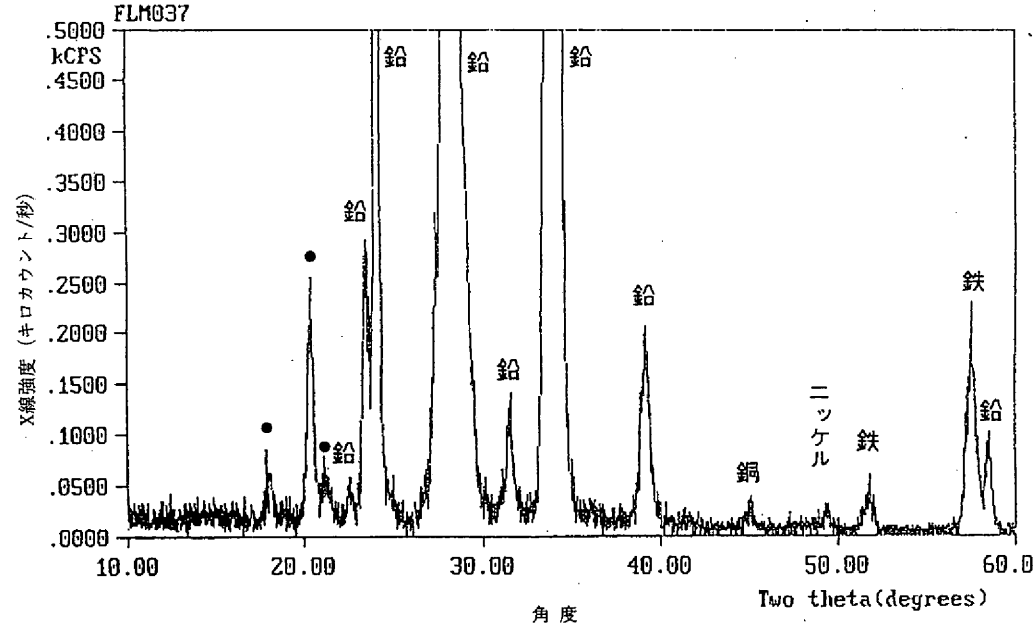


図１－ｂ　中原25号古墳出土耳環の蛍光Ｘ線スペクトル（図１－ａ）の拡大図

●印はX線管球に由来するモリブデンのピーク

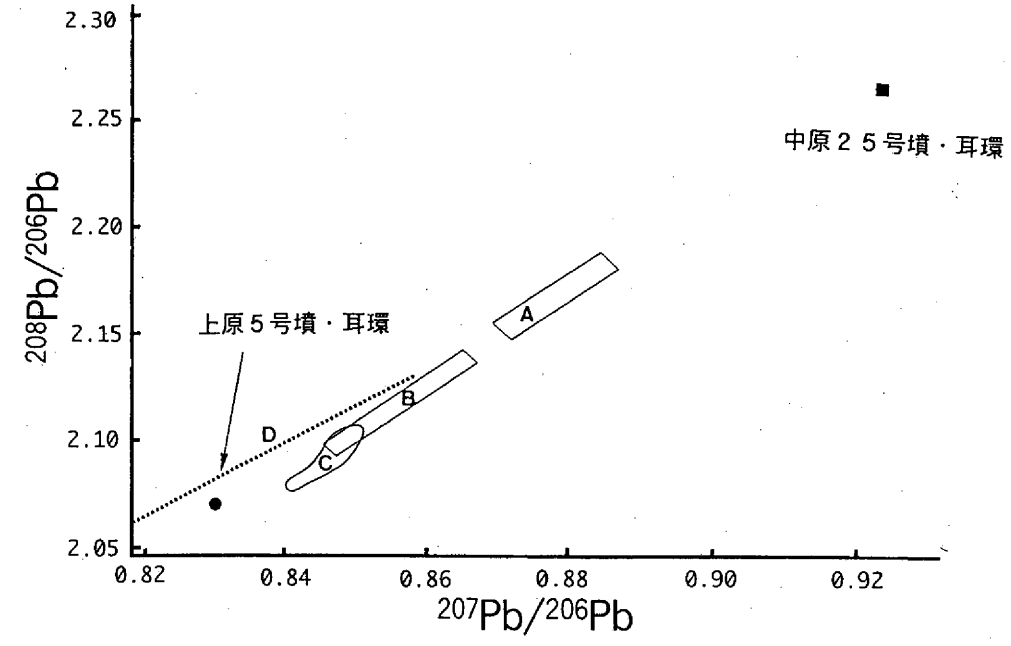


図２　鉛製耳環が示す鉛同位体比の図（Ａ式図）

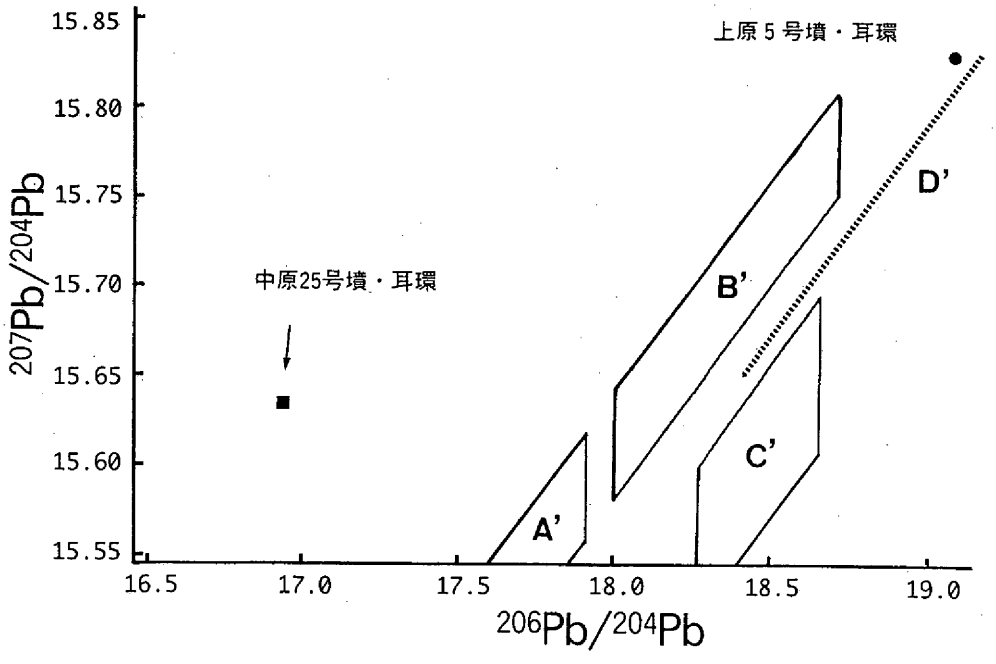


図３　鉛製耳環が示す鉛同位体比の図（Ｂ式図）

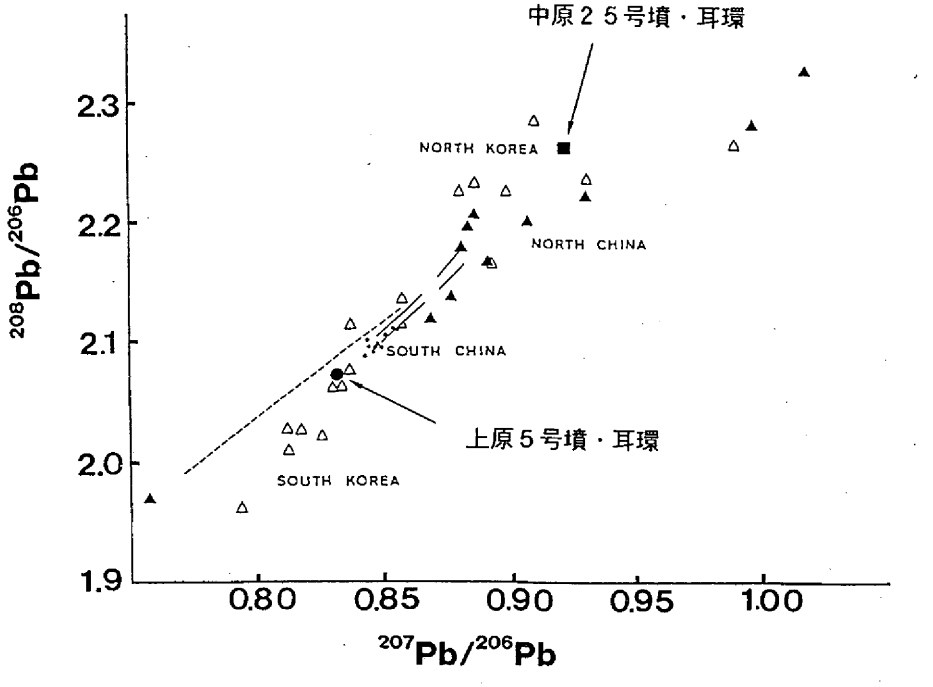


図４　東アジア地域の鉛鉱石が示す同位体比の分布図（A式図）

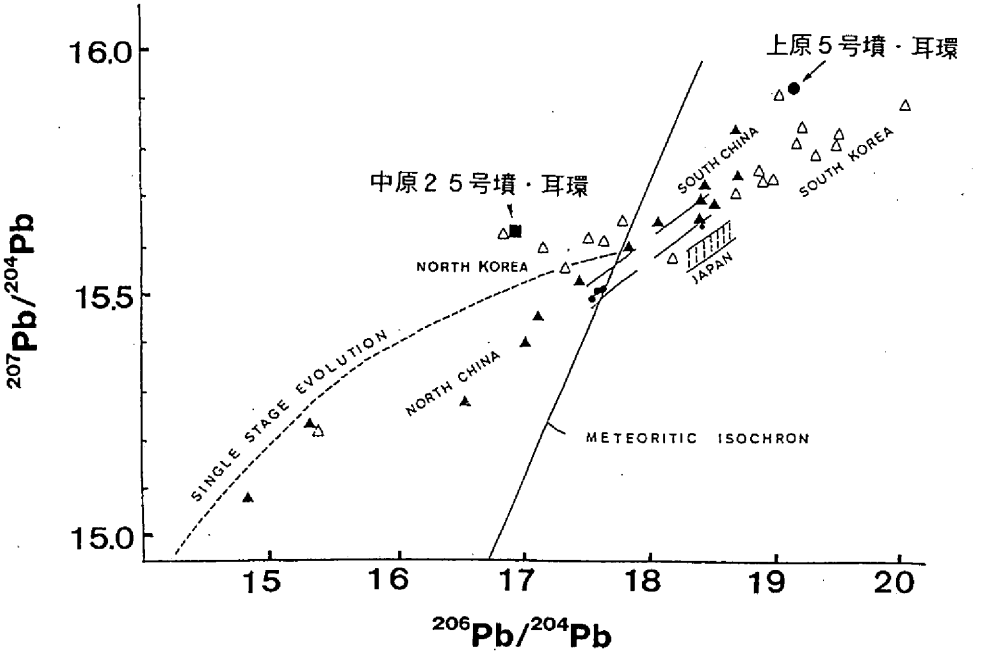


図５　東アジア地域の鉛鉱石が示す同位体比の分布図（B式図）

中原25号古墳出土耳環

蛍光X線測定箇所

中原古墳群の箱式石棺に使用されている石材について

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

はじめに

ここでは、中原古墳群の埋葬主体部に使われている箱式石棺および石列の石材鑑定、産出地の推定をおこなった。観察した石棺石材は、表１に掲載した29点の石材である。石棺、石列の石材は肉眼と偏光顕微鏡観察により、個々の石材の岩石学的特徴を調べた。

石棺の石材について

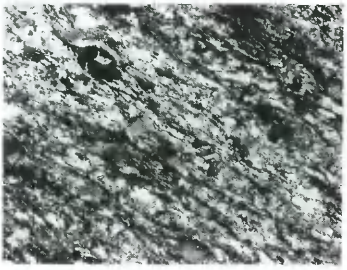
石棺石材を観察した結果、これら石材は大きく二種類の岩石に分かれた。一つは、肉眼観察で乳灰黄色を呈し、板状に薄く剝がれる性質で、鏡下では砕屑性の石英・長石・雲母の各鉱物が観察されることから砂質片岩である（図版No.１）。もう一つは、前者同様に板状に薄く剝がれる性質であるが、白・黒色の縞模様が肉眼観察でみられ、鏡下では白雲母と石英の層がみられる泥質片岩である（図版No.２）。そして、前者の砂質片岩を使用している古墳の箱式石棺は、２号、３号、４号、５号、７号、８号、９号、10号、11号、12号、15号、16号、17号、21号、22号の各箱式石棺である。また、後者の泥質片岩の石材を使用している古墳は13号、30号、36号、37号、34号、39号、31号、33号の古墳の箱式石棺と43号の石列である。次に、これら石材の産出地は、この古墳群が立地する丘陵および周辺の地質基盤が泥質・砂質片岩であり[1]、古墳群および周辺の基盤岩から採取した片岩類を観察したところ、砂質片岩（図版No.３）・泥質片岩（図版No.４）からなっており、この結果からも、これら古墳群の箱式石棺に使用されている石材は古墳群周辺で産出する砂質・泥質片岩を使用しているようである。

なお、この岩石の観察では、自然科学研究所の板谷徹丸先生にお世話になった。記して感謝の意を表します。

註１　光野千春・杉田宗満「岡山県地質図　10分の１」内外地図株式会社

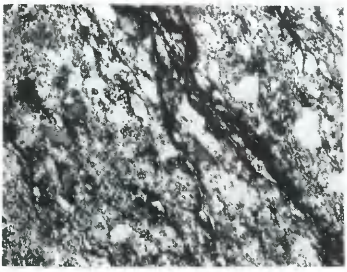
表1　中原古墳群箱式石棺、石列観察一覧表

番号	遺　構　名	番号	遺　構　名
1	2号墳　主体部	16	16号墳　主体部
2	3号墳　主体部	17	17号墳　第1主体部
3	4号墳　主体部	18	〃　第2主体部
4	5号墳　主体部	19	〃　第3主体部
5	7号墳　第1主体部	20	21号墳　主体部
6	〃　第2主体部	21	22号墳　第1主体部
7	7号墳　第1主体部	22	〃　第2主体部
8	〃　第2主体部	23	30号墳　主体部
9	9号墳　主体部	24	36号墳　主体部
10	10号墳　主体部	25	37号墳　主体部
11	11号墳　主体部	26	39号墳　主体部
12	12号墳　主体部	27	31号墳　主体部
13	13号墳　主体部	28	33号墳　主体部
14	15号墳　主体部	29	43号　石列
15	16号墳　主体部		

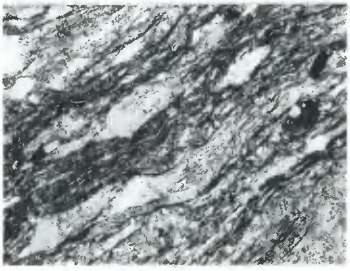


No. 1　22号墳第１主体部箱式石棺石材

No. 2　13号墳主体部箱式石棺石材



No. 3　中原古墳群基盤層



No. 4　中原古墳群基盤層

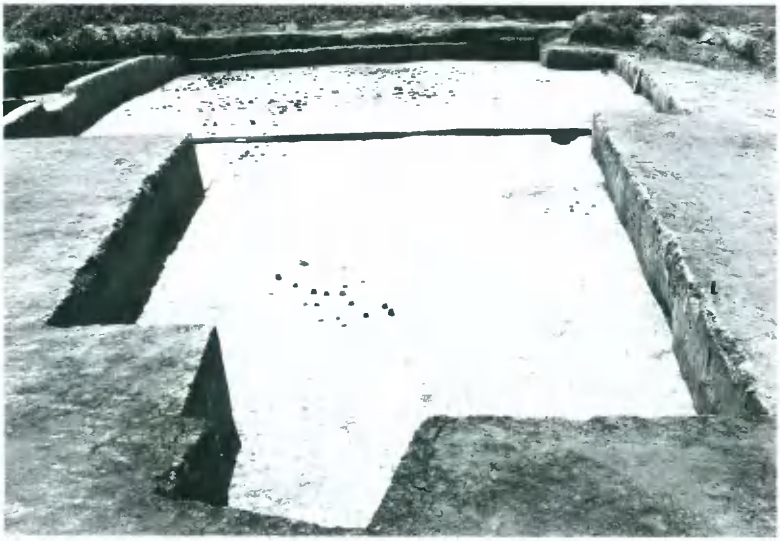
いずれもクロスニコル

図版1

1.中山西遺跡Ⅰ区全景（北西から）

2.中山西遺跡Ⅰ区土層断面（南から）

図版2



1.中山西遺跡Ⅰ区AT下石器群（北から）

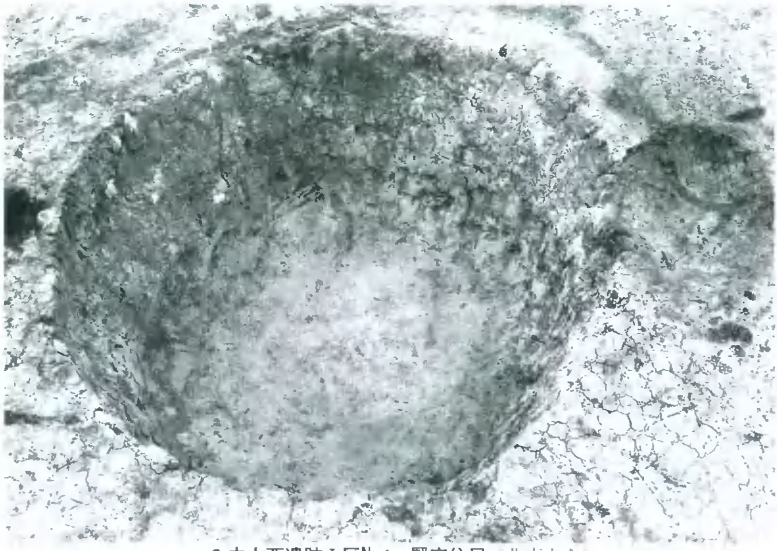
2.中山西遺跡Ⅰ区AT下石器群（西から）

1.中山西遺跡Ⅰ区№12－落とし穴（西から）

2.中山西遺跡Ⅰ区竪穴住居全景（北東から）

図版4

1.中山西遺跡Ⅰ区No.4－竪穴住居土層断面（北東から）

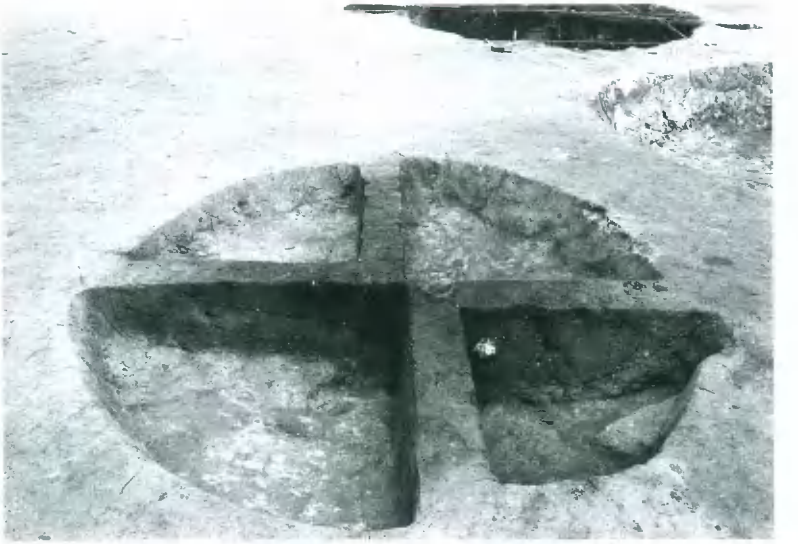


2.中山西遺跡Ⅰ区No.4－竪穴住居（北東から）

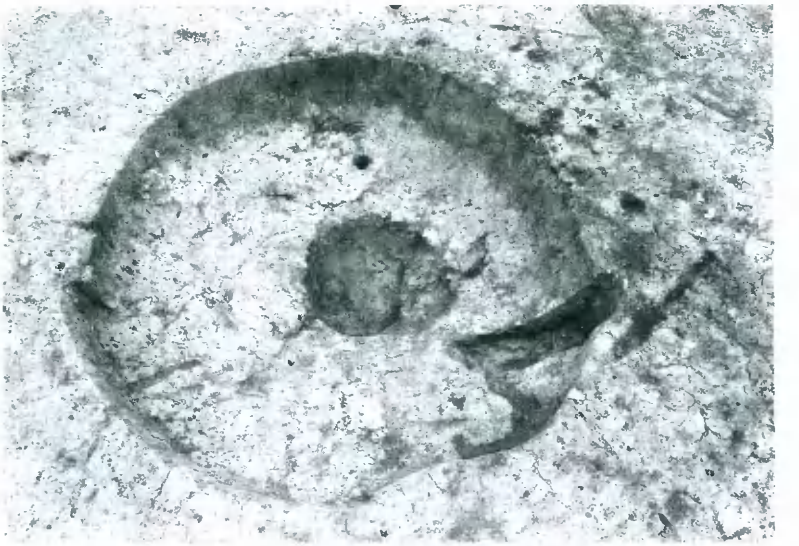
1.中山西遺跡Ⅰ区No.5一竪穴住居土層断面（南から）

2.中山西遺跡Ⅰ区No.5一竪穴住居（南から）

図版6

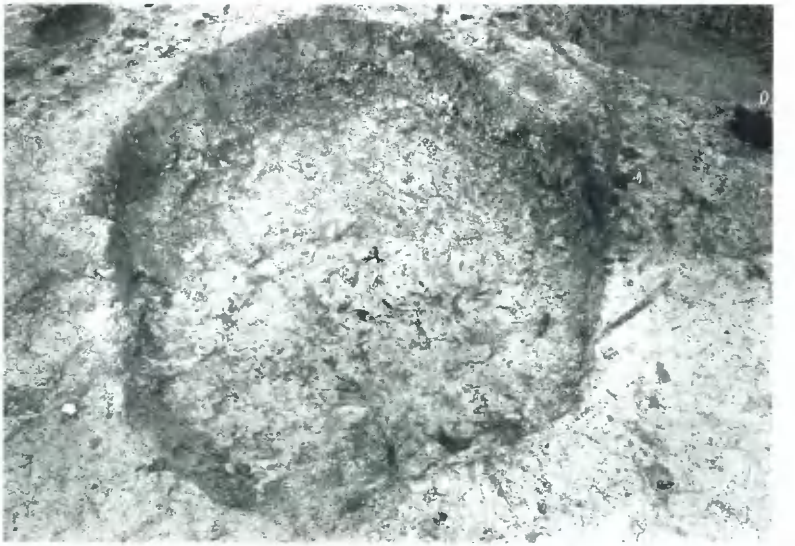


1.中山西遺跡Ⅰ区No.6一竪穴住居土層断面（南から）



2.中山西遺跡Ⅰ区No.6一竪穴住居（南から）

1.中山西遺跡Ⅰ区No.7一竪穴住居土層断面（東から）

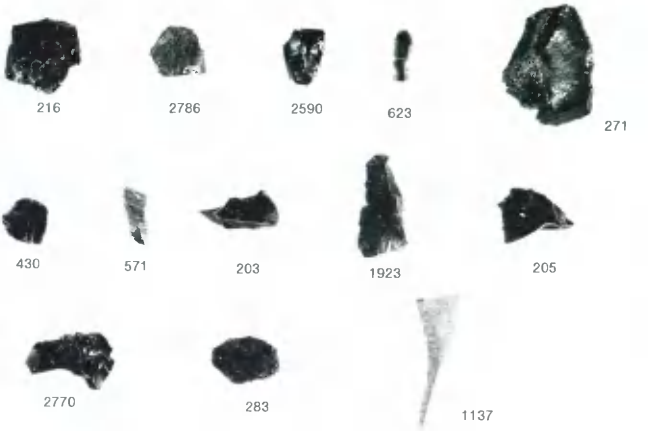


2.中山西遺跡Ⅰ区No.7一竪穴住居（東から）

図版8

1.中山西遺跡Ⅰ区AT下出土石器（表・1/2）

2.中山西遺跡Ⅰ区AT下出土石器（裏・1/2）

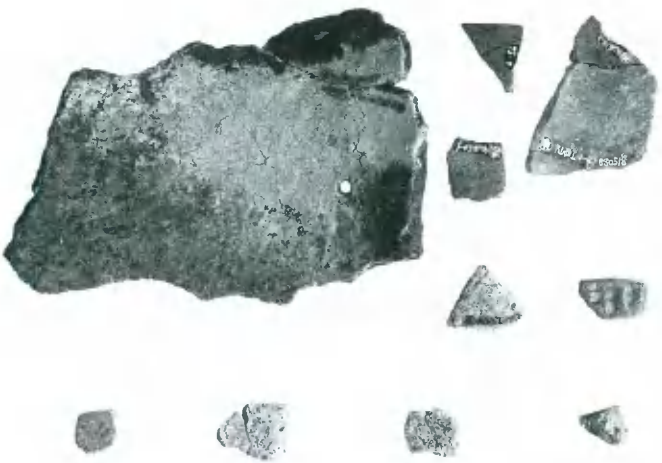


1.中山西遺跡Ⅰ区AT下石器（表・1/2）

2.中山西遺跡Ⅰ区AT下石器（裏・1/2）

図版10

1.中山西遺跡Ⅰ区No.4一竪穴住居出土遺物（表・1/2）



2.中山西遺跡Ⅰ区No.4一竪穴住居出土遺物（裏・1/2）

1.中山西遺跡Ⅰ区No.5一竪穴住居遺物（表・1/2）

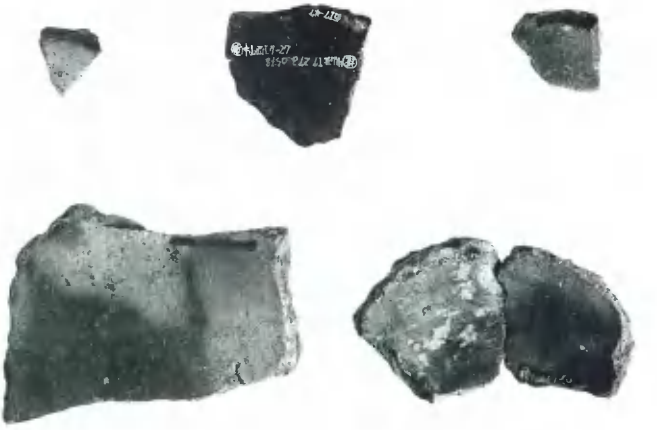
2.中山西遺跡Ⅰ区No.5一竪穴住居遺物（裏・1/2）

図版12

1.中山西遺跡Ⅰ区No.6一竪穴住居遺物（表・1/2）

2.中山西遺跡Ⅰ区No.6一竪穴住居遺物（裏・1/2）

1.中山西遺跡Ⅰ区No.7ー 竪穴住居出土遺物（表・1/2）



2.中山西遺跡Ⅰ区No.7ー竪穴住居出土遺物（裏・1/2）

図版14

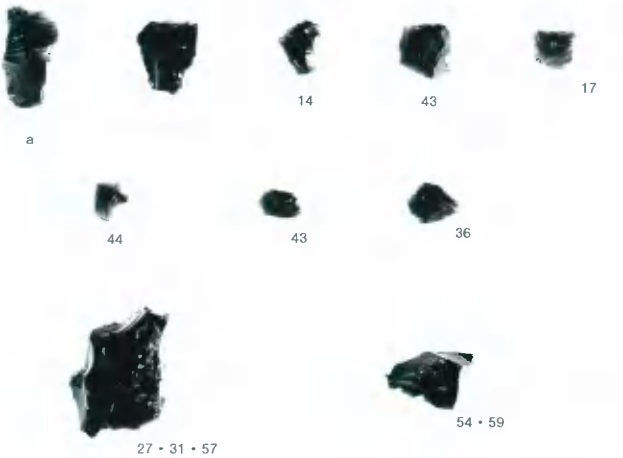
1.中山西遺跡Ⅱ区全景（東から）

2.城山東遺跡Ⅰ区全景（北から）

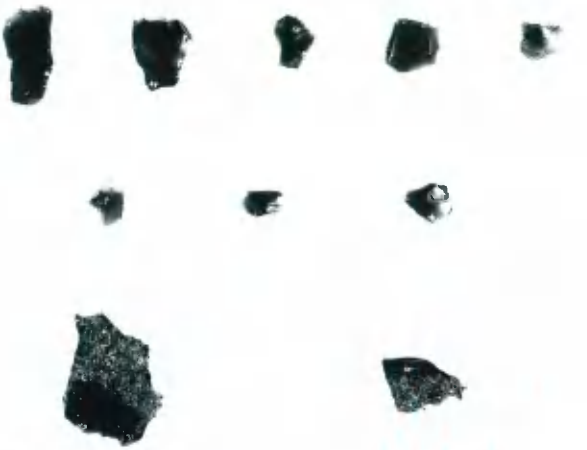
1.城山東遺跡Ⅱ区全景（北から）

2.城山東遺跡Ⅲ区AT下石器群（西から）

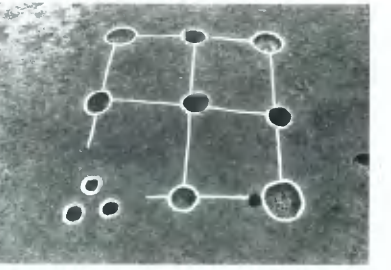
図版16

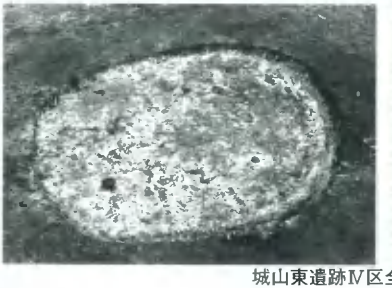


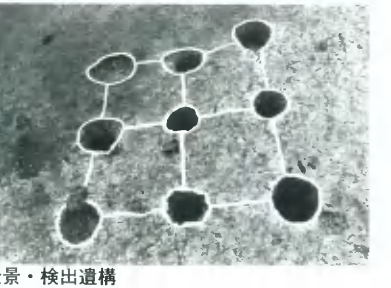
1.城山東遺跡Ⅲ区AT下石器（表・1/2）



2.城山東遺跡Ⅲ区AT下石器（裏・1/2）



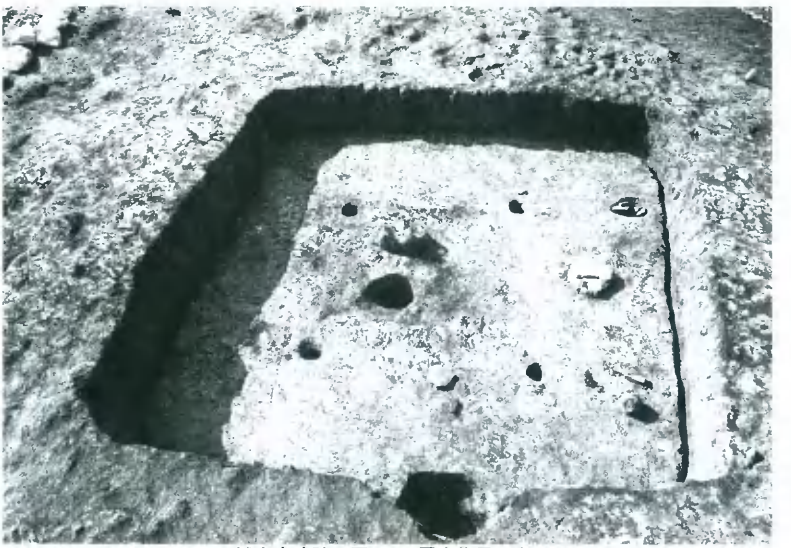




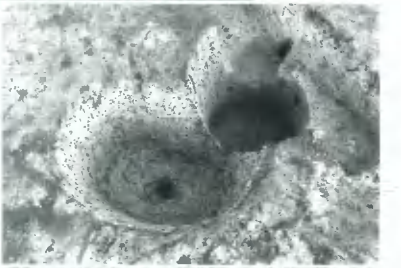
城山東遺跡Ⅳ区全景・検出遺構

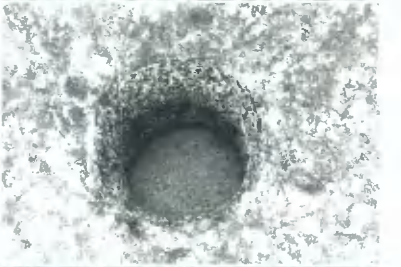
図版18

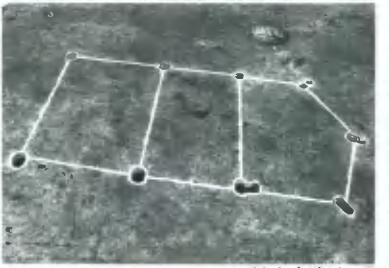
1.城山東遺跡Ⅴ区全景（南西から）

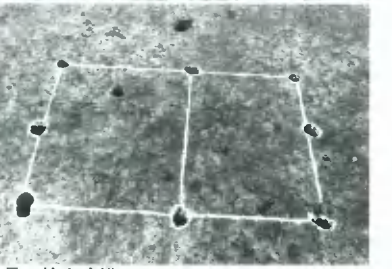


2.城山東遺跡Ⅴ区No.3－竪穴住居（東から）









城山東遺跡Ⅵ区全景・検出遺構

図版20

9

14

16

20

21

22

23

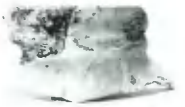
26

25

城山東遺跡Ⅳ区・Ⅴ区出土遺物（1/4）

33

47



137

48

53

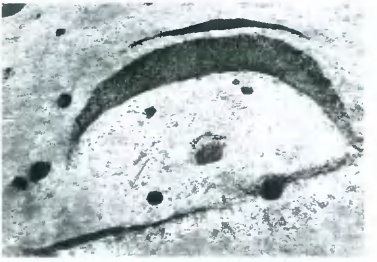
71

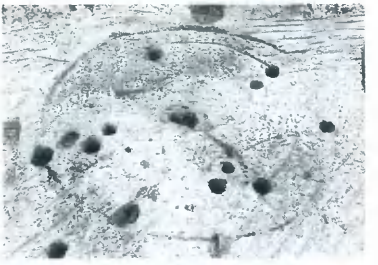
72

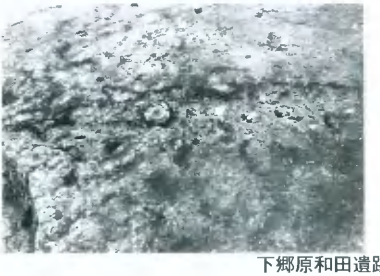
80

城山東遺跡Ⅳ区・下郷原和田遺跡出土遺物（1/4）

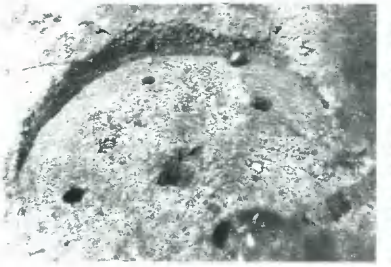
図版22

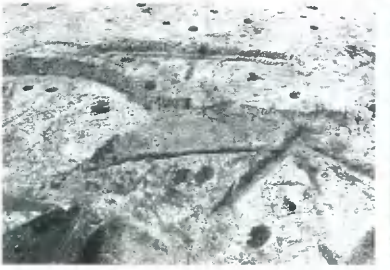
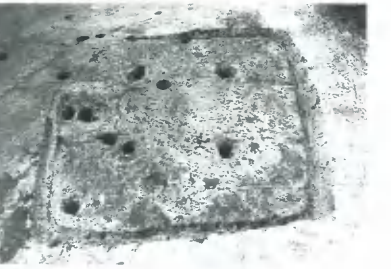
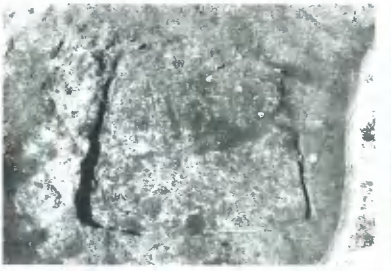






下郷原和田遺跡全景・検出遺構



下郷原和田遺跡検出遺構

図版24

139

147

151

160

162

167

下郷原和田遺跡出土遺物 (1/4)

172

272

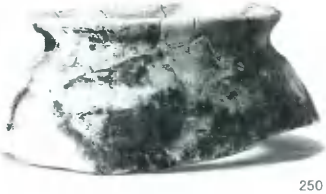
225

231

242

243

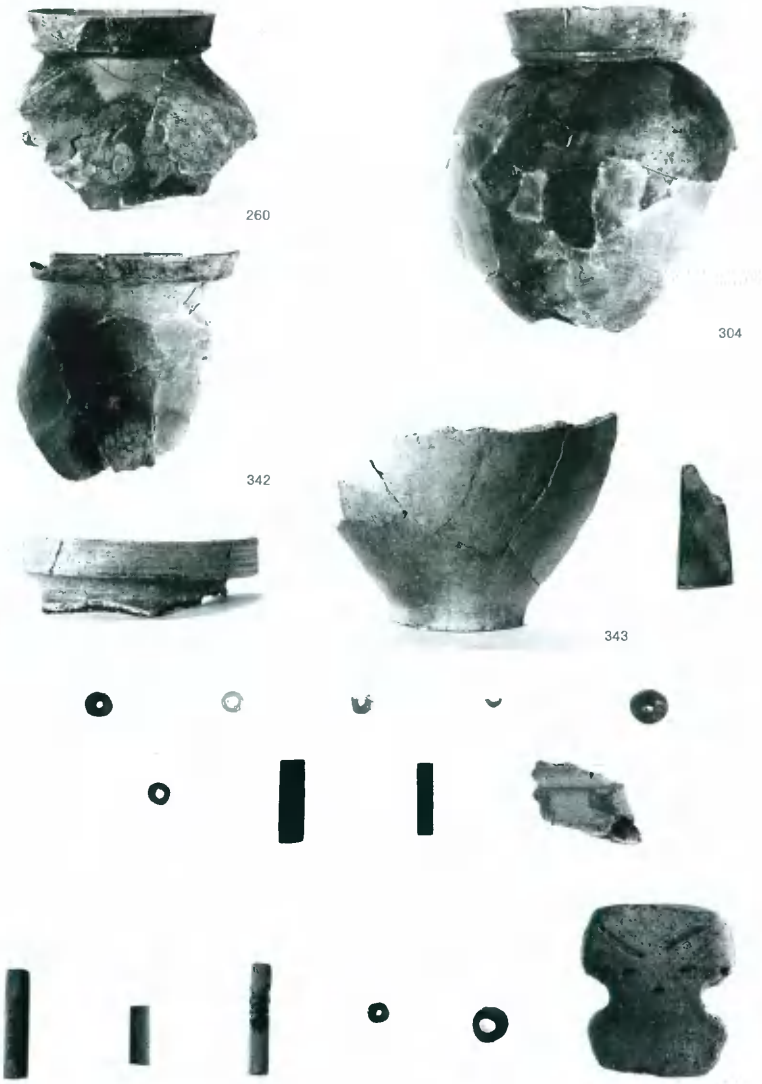
257


250

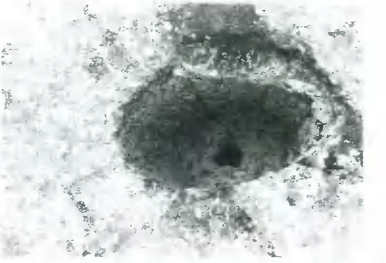
261

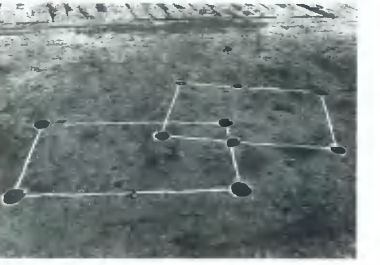
下郷原和田遺跡出土遺物（1/4）

図版26



下郷原和田遺跡・下郷原田代遺跡No.1地点出土遺物（1/4・1/1）





下郷原田代遺跡No.1地点検出遺構

図版28

下郷原田代遺跡№2地点全景・検出遺構

1.下郷原田代遺跡№2地点土層断面（南東から）

2.下郷原田代遺跡№2地点AT下石器Aブロック（南西から）

図版30

1.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器Bブロック（南から）

2.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器Cブロック（南東から）

図版31

1.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器（表・1/2）

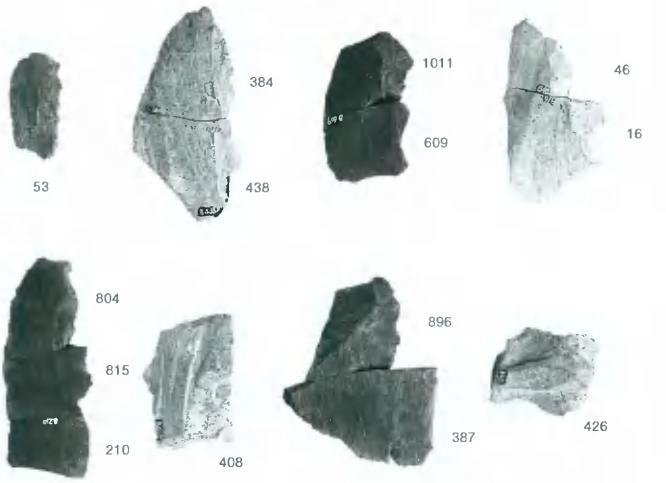
2.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器（裏・1/2）

3.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器（表・1/2）

4.下郷原田代遺跡No.2地点AT下遺物（裏・1/2）

5.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器（表裏・1/2）

図版32



1.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器（表・1/2）

2.下郷原田代遺跡No.2地点AT下石器（裏・1/2）

1. 木谷古墳群遠景（北から）

2. 木谷古墳群全景（南から）

図版34

1. 木谷6号墳調査前状況（西から）

2. 木谷6号墳石室内遺物出土状況（西から）

1. 木谷6号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）

2. 木谷6号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）

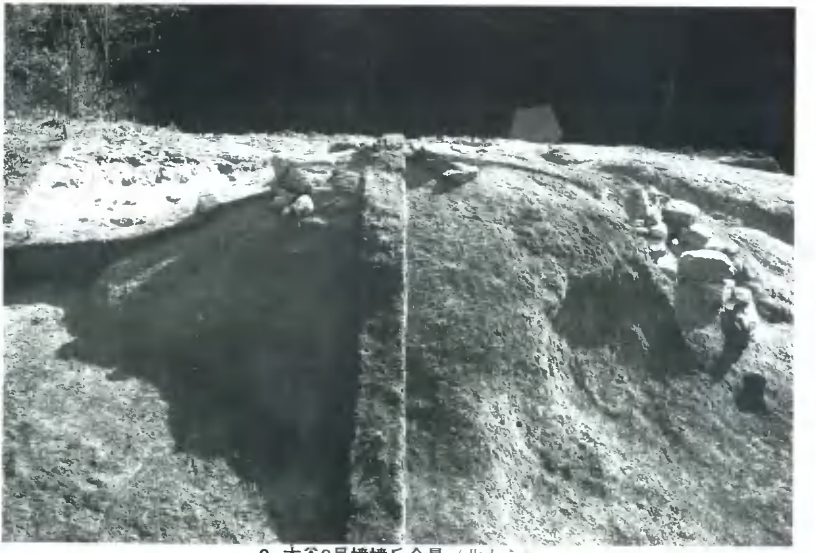
図版36

1. 木谷7号墳石室残存状況（北西から）

2. 木谷7号墳奥壁部分遺物出土状況（北から）

3. 木谷7号墳石室入口部分遺物出土状況（北西から）

1. 木谷8号墳調査前墳丘全景（西から）



2. 木谷8号墳墳丘全景（北から）

図版38

1. 木谷8号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）

2. 木谷8号墳石室入口部分（西から）

3. 木谷8号墳天井石上面石組状況（西から）

1. 木谷8号墳石室内奥壁石組状況（西から）

2. 木谷8号墳石室内玄室入口部分石組状況（東から）

図版40

1. 木谷8号墳石室外側石組状況（北から）

2. 木谷9号墳石室残存状況（西から）

1. 木谷10号墳石室内遺物出土状況（西から）

2. 木谷10号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）

図版42

1. 木谷11号墳石室内遺物出土状況（西から）

2. 木谷11号墳石室内遺物出土状況（北から）

1. 木谷11号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）

2. 木谷11号墳奥壁部分遺物出土状況（北から）

図版44

1. 木谷13号墳全景（西から）

2. 木谷13号墳石室石組状況（西から）

1. 木谷14号墳石室全景（北から）

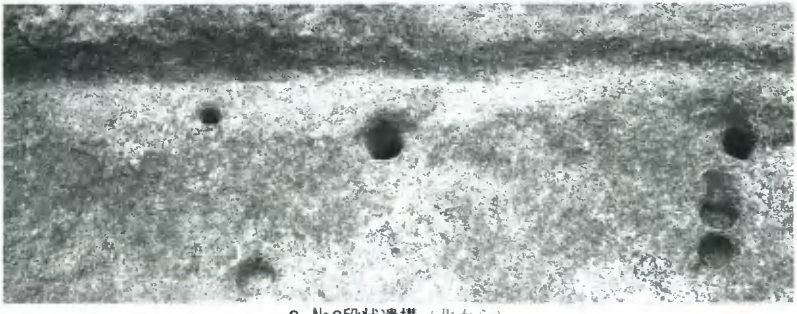
2. 木谷14号墳石室内遺物出土状況（北から）

図版46

1. No.66土壙墓遺物出土状況（北から）

2. No.8壺棺検出状況（東から）

1. No1・3段状遺構（北から）



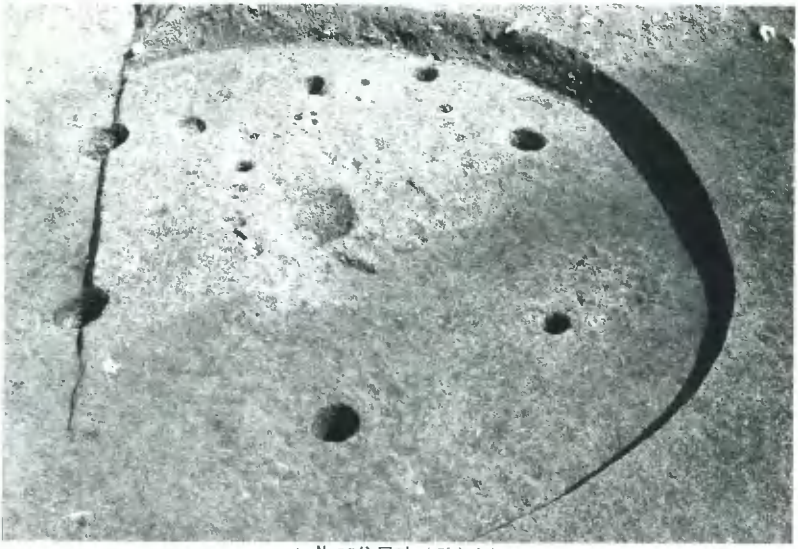
2. No2段状遺構（北から）

3. No4住居址（北西から）

図版48

1. No.37段状遺構，No.38・74・75住居址（西から）

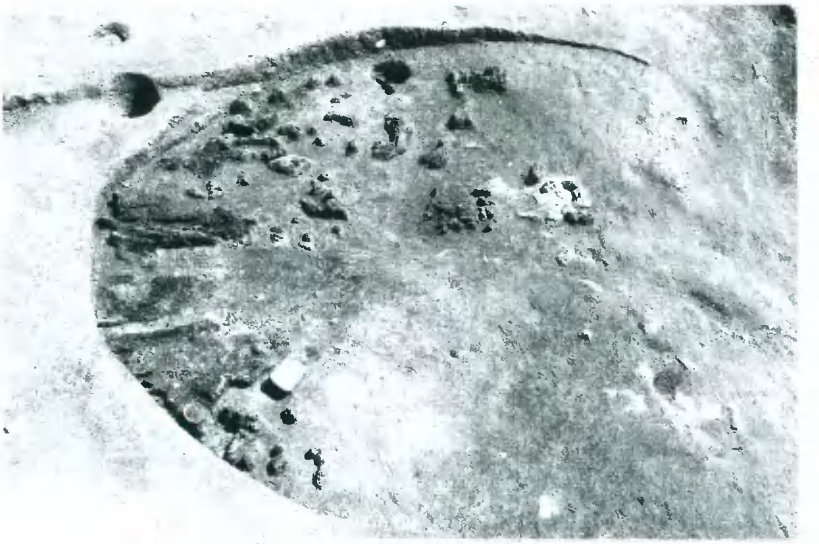
2. No.65・67・68・72住居址（北から）



1. No.65住居址（西から）

2. No.67住居址（西から）

図版50



1. No.68住居址炭化物検出状況（北から）

2. No.68・72住居址（北から）

1. No.5土壙（北から）

2. No.6土壙（北から）

図版52

1. 中近世土壙墓群検出状況（西から）

2. 中近世土壙墓群検出状況（北から）

1. No.19土壙墓（南西から）

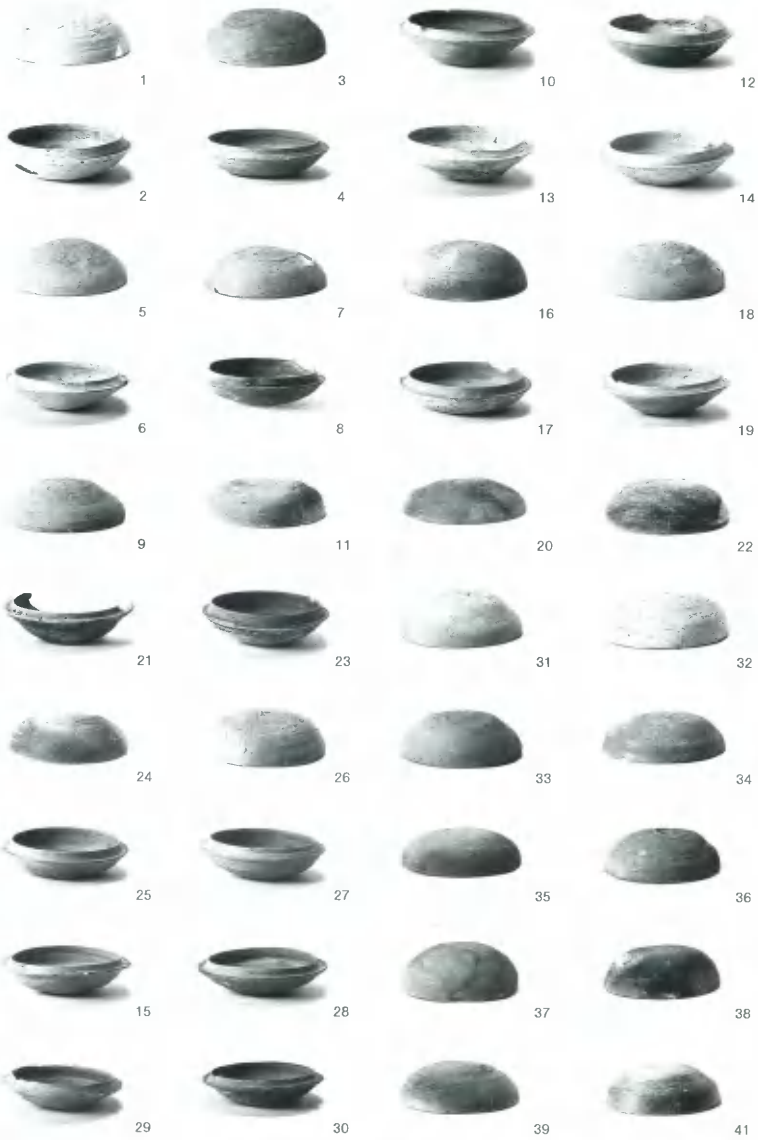
2. No.26土壙墓（西から）

図版54

1. 木谷8号墳墳丘盛土除去作業風景（東から）

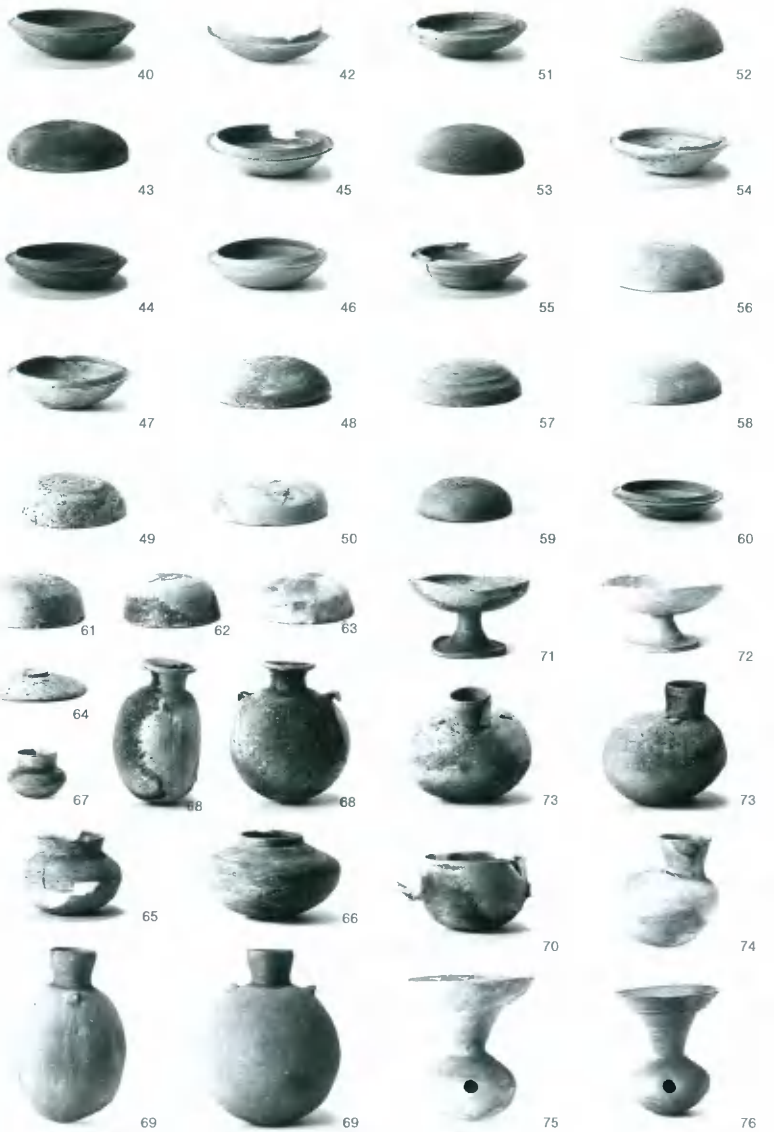
2. 木谷11号墳周辺作業風景（北から）

図版55



木谷古墳群出土遺物（1）

図版56



木谷古墳群出土遺物（2）

77

78

85

86

79

80

87

88

81

82

89

90

83

84

91

92

94

95

105

107

96

98

106

108

100

109

110

111

101

103

112

113

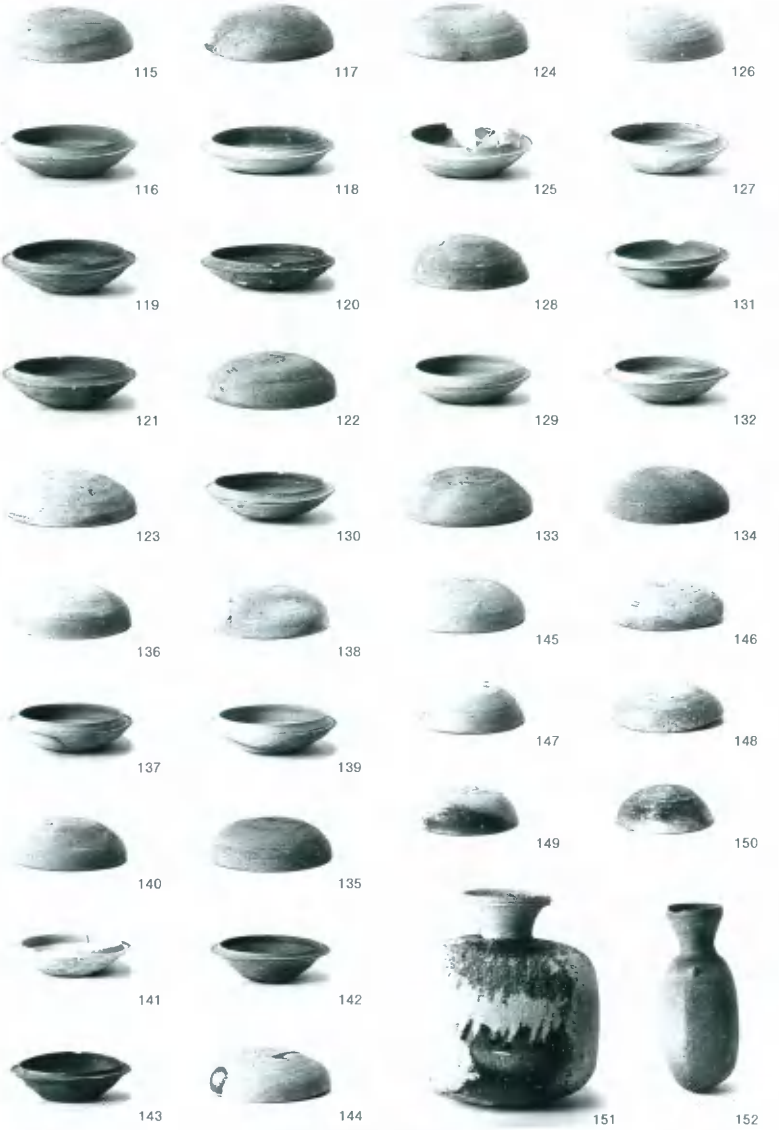
102

104

114

木谷古墳群出土遺物 (3)

図版58



木谷古墳群出土遺物（4）

151

152

158

160

159

161

154

152

162

164

163

165

155

156

166

168

167

169

179

181

170

172

180

182

171

175

183

178

173

176

184

185

174

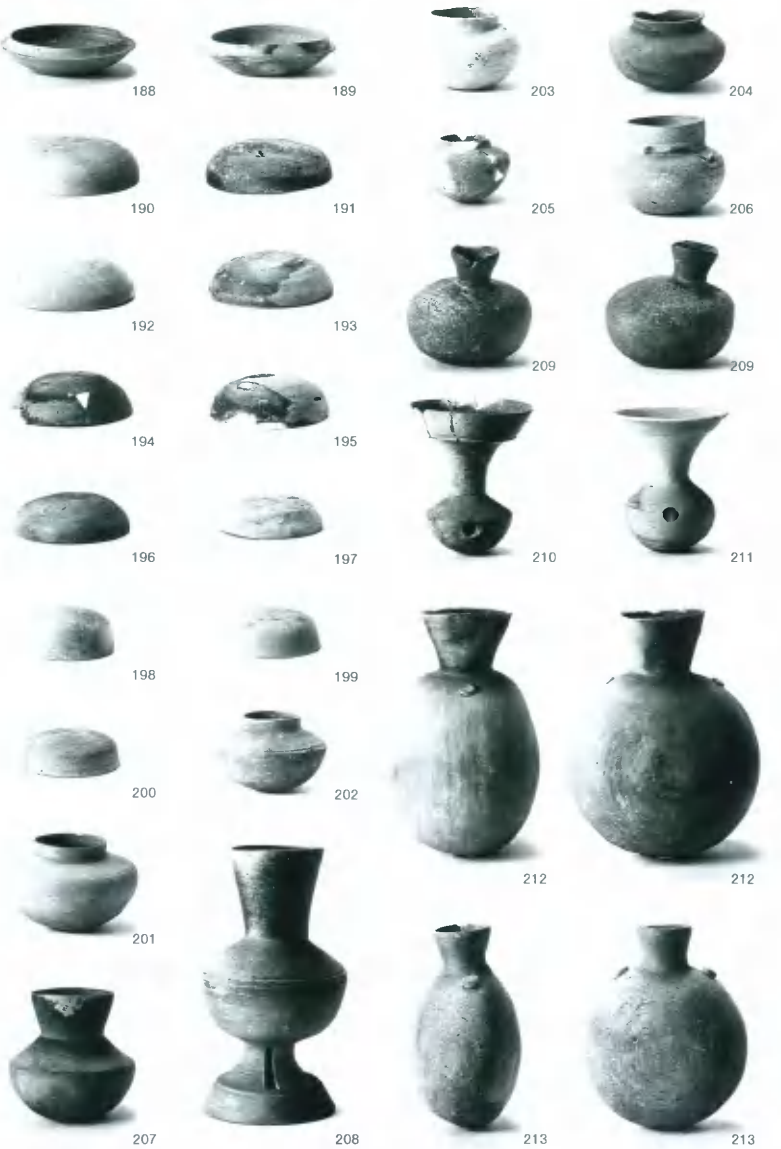
177

186

187

木谷古墳群出土遺物（5）

図版60



木谷古墳群出土遺物（6）

214

215

220

221

225

226

227

216

218

217

219

222

228

229

223

224

236

230

231

232

233

234

235

236

木谷古墳群出土遺物（7）

図版62

249

249

木谷古墳群出土遺物 (8)

図版63

36

54

76

69

79

92

97

3

5

6

7

98

104

106

111

115

1

2

4

10

11

100

108

113

118

119

120

12

13

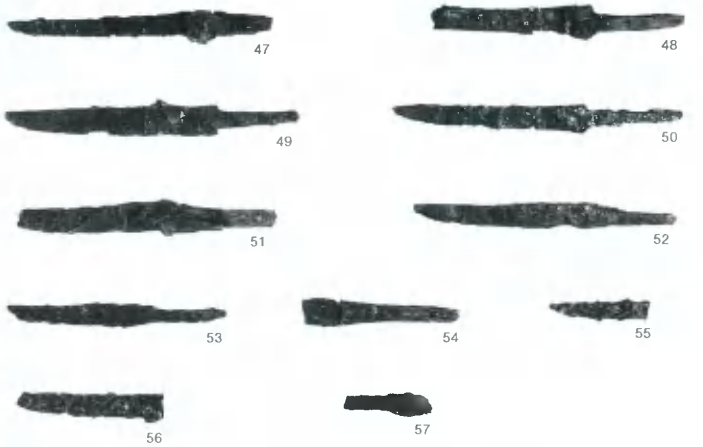
14

15

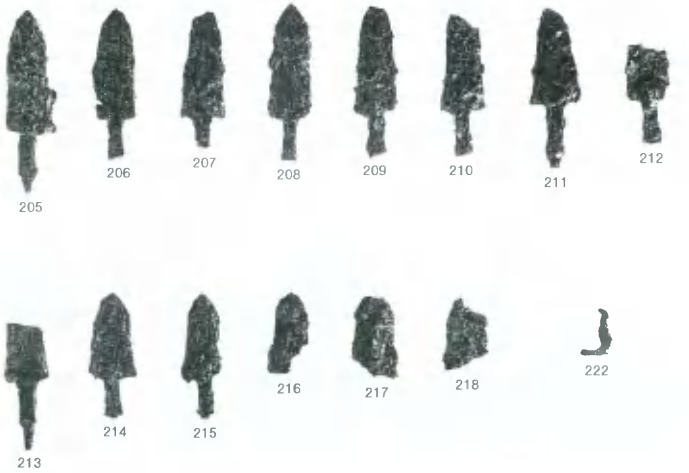
木谷古墳群出土遺物（9）

図版64

木谷6号墳出土鉄器（1）

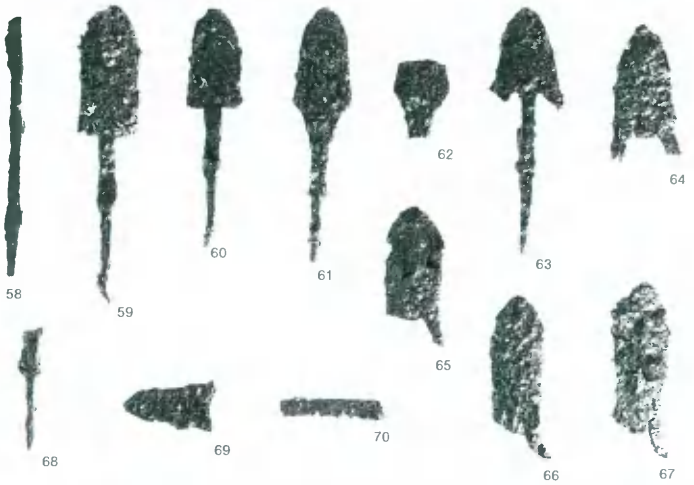


1. 木谷6号墳出土鉄器 (2)

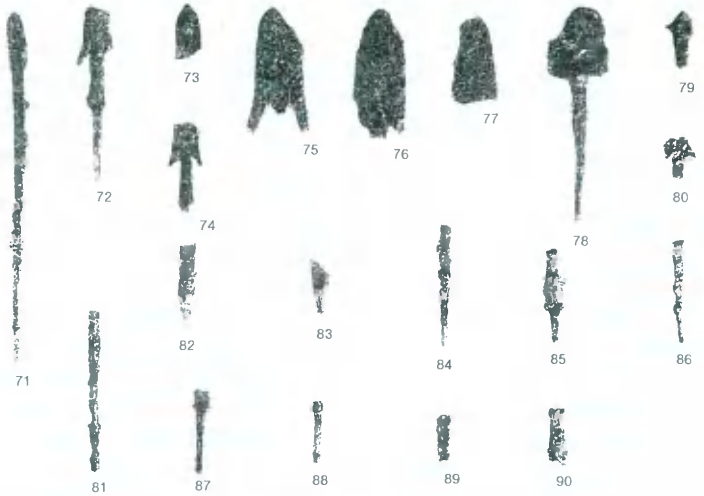


2. №37段状遺構出土鉄器

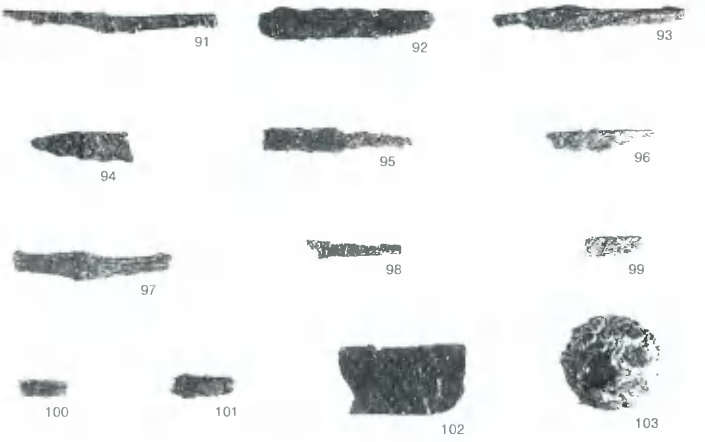
図版66



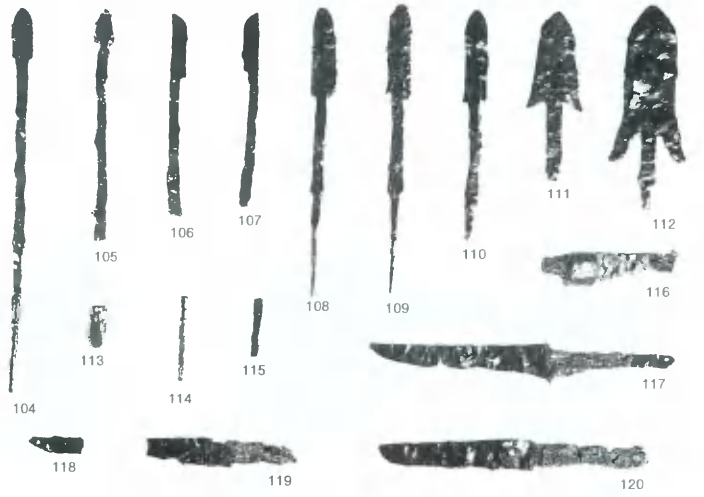
1. 木谷7号墳出土鉄器



1. 木谷8号墳出土鉄器（1）



1. 木谷8号墳出土鉄器 (2)



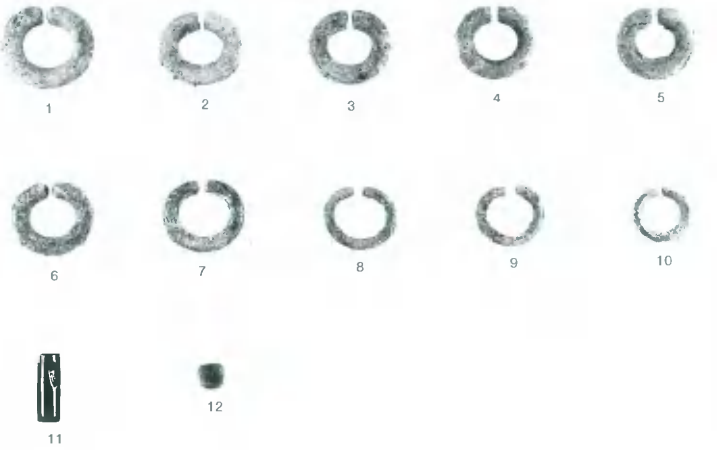
2. 木谷10号墳出土鉄器

図版68

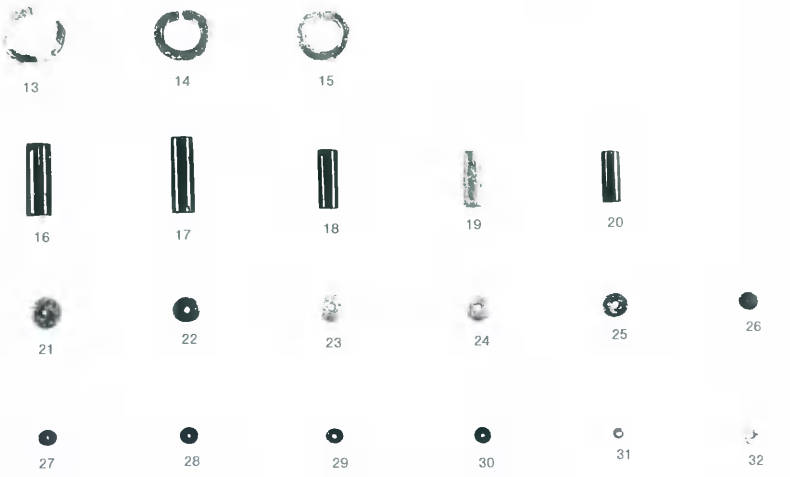
木谷11号墳出土鉄器（1）

木谷11号墳出土鉄器（2）

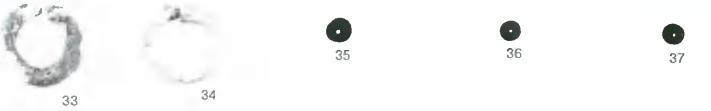
図版70



1. 木谷6号墳出土装身具

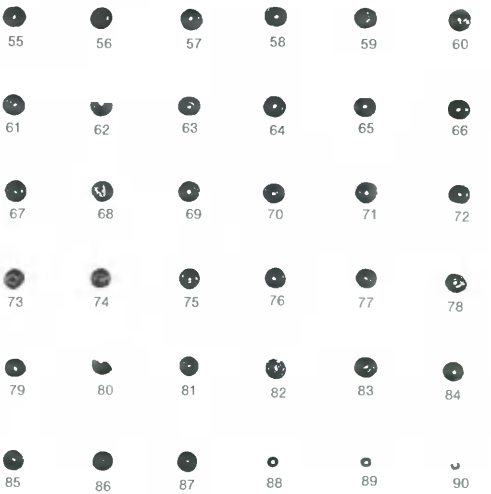


2. 木谷8号墳出土装身具



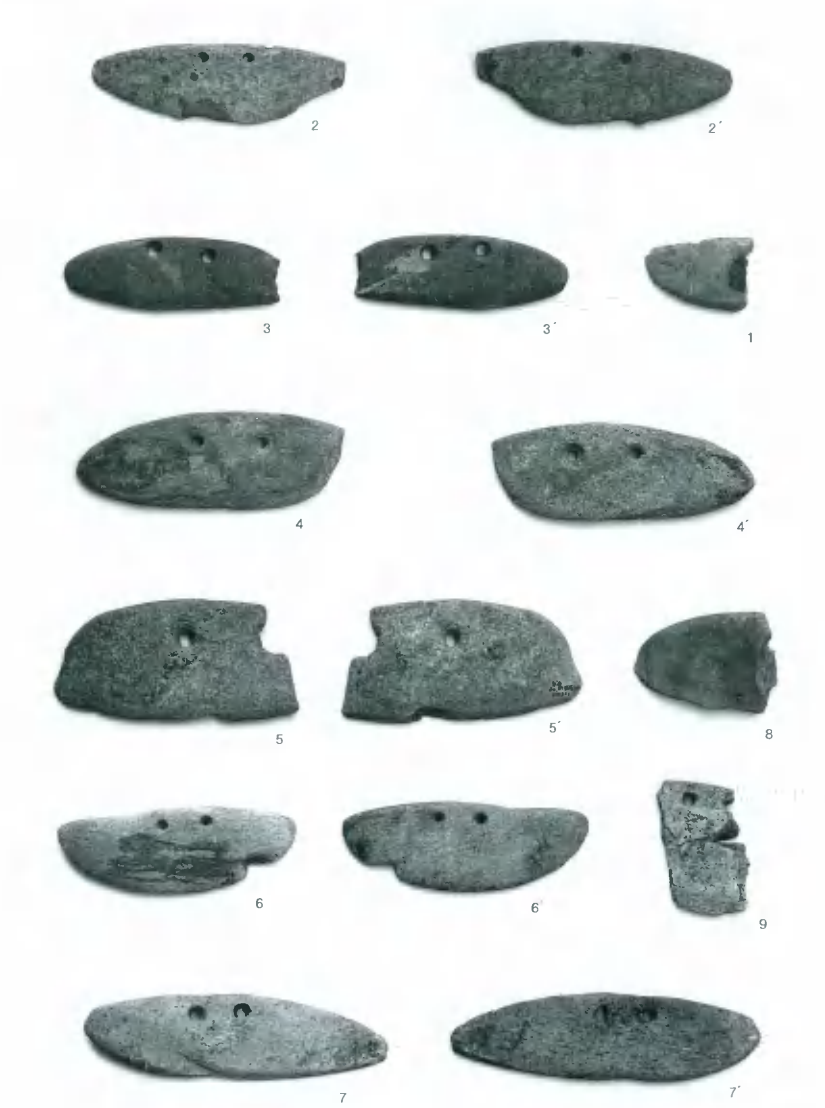
1. 木谷10号墳出土装身具

2. 木谷11号墳出土装身具



3. 木谷14号墳出土装身具

図版72



住居址および包含層出土石包丁

1. 中原8号墳より西側に存在する古墳の調査前状況（東から）

2. 中原22号墳より東側に存在する古墳の調査前状況（西から）

図版74

1. 中原2号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）

2. 中原2号墳主体部外遺物出土状況（北東から）

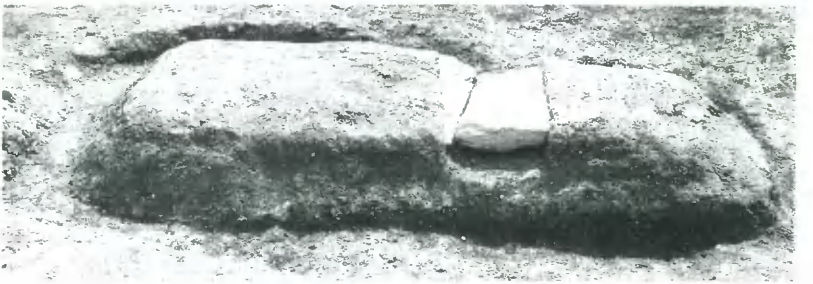
1. 中原2号墳主体部調査後全景（北東から）

2. 中原2号墳主体部枕石検出状況（北西から）

図版76

1. 中原3号墳墳丘・葺石検出状況（南から）

2. 中原3号墳主体部検出状況（南から）



1. 中原3号墳主体部上面粘土検出状況（北から）

2. 中原3号墳主体部粘土除去後天井石検出状況（北から）

3. 中原3号墳主体部内人骨・遺物検出状況（北から）

図版78

1. 中原3号墳主体部天井石・小口部分検出状況（西から）

2. 中原3号墳主体部内人骨・遺物検出状況（西から）

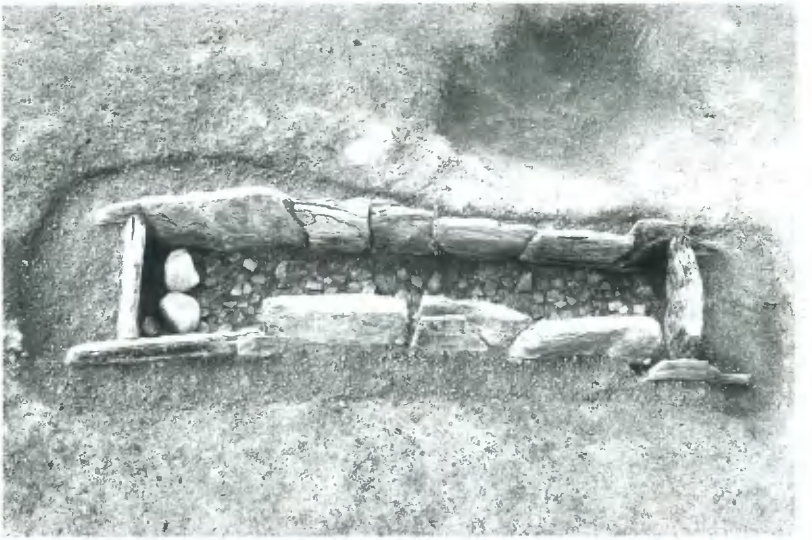
1. 中原3号墳主体部枕石検出状況（西から）

2. 中原3号墳主体部西側小口部分（東から）

図版80

1. 中原4号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）

2. 中原4号墳主体部天井石と遺物出土状況（北東から）



1. 中原4号墳主体部内検出状況（北東から）

2. 中原4号墳主体部掘り方検出状況（北東から）

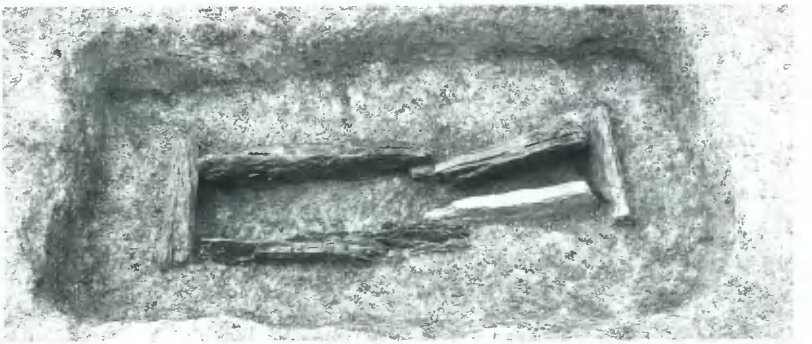
図版82

1. 中原5号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）

2. 中原5号墳主体部上面集石検出状況（北東から）

1. 中原5号墳主体部天井石上面粘土検出状況（北東から）

2. 中原5号墳主体部天井石検出状況（北東から）



3. 中原5号墳主体部内検出状況（北東から）

図版84

1. 中原7号墳主体部天井石検出状況（北西から）

2. 中原7号墳主体部内検出状況（北西から）

1. 中原7号墳第1主体部内検出状況（北東から）

2. 中原7号墳第1主体部枕石検出状況（北西から）

図版86

1. 中原7号墳第2主体部内検出状況（南西から）

2. 中原7号墳第2主体部内人骨・枕石検出状況（南東から）

1. 中原30号墳主体部上面集石検出状況（西から）

2. 中原30号墳の墳丘と主体部検出状況（東から）

図版88

1. 中原30号墳主体部天井石検出状況（南から）

2. 中原30号墳主体部内検出状況（北から）

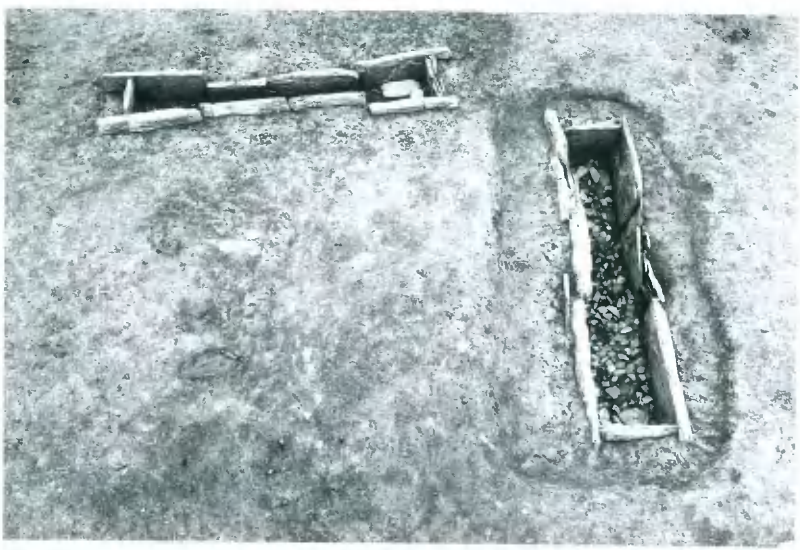
3. 中原30号墳主体部掘り方検出状況（西から）

1. 中原8・9号墳の墳丘と主体部検出状況（西から）

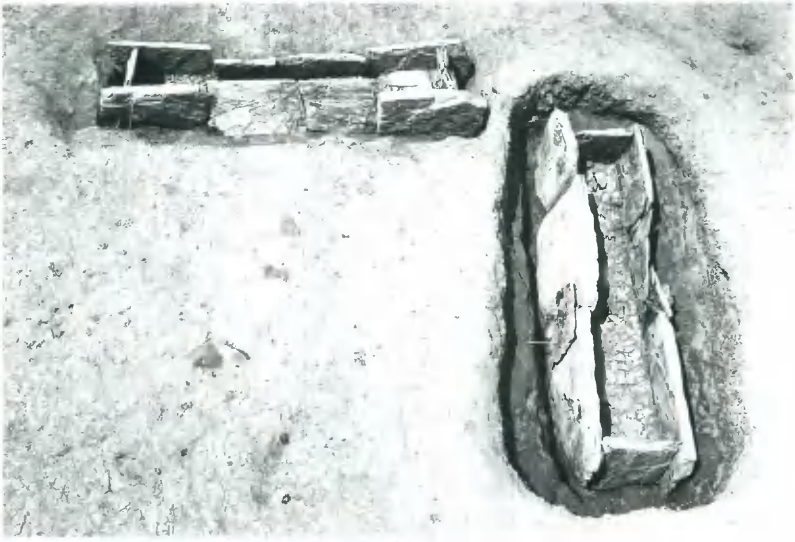
2. 中原8号墳の墳丘と主体部検出状況（東から）

図版90

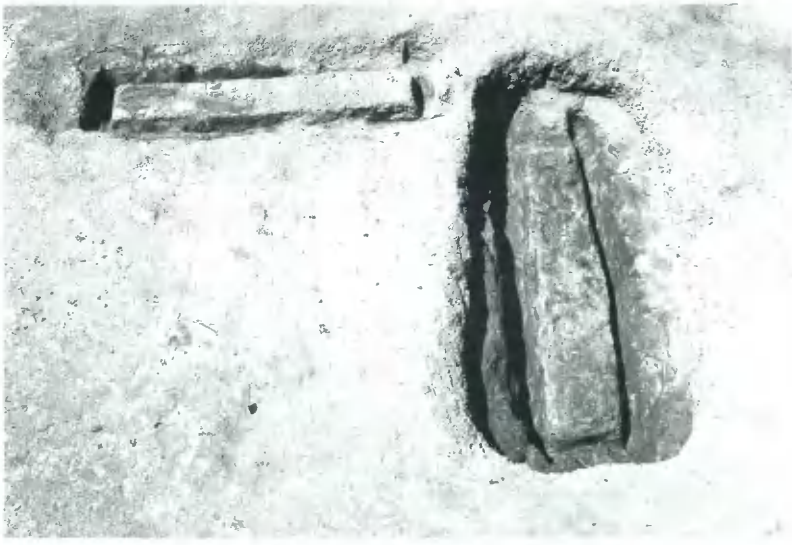
1. 中原8号墳主体部天井石検出状況（東から）



2. 中原8号墳主体部内検出状況（東から）

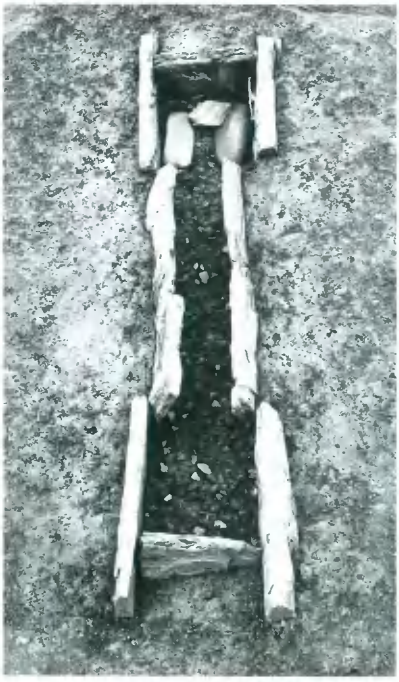


1. 中原8号墳主体部調査後全景（東から）

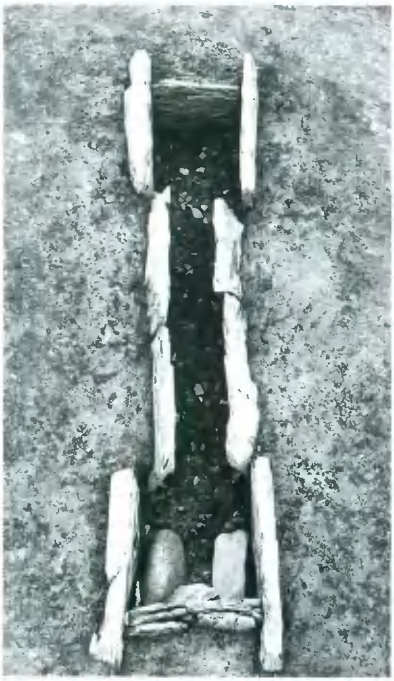


2. 中原8号墳主体部掘り方検出状況（東から）

図版92



1. 中原8号墳第1主体部内検出状況（南から）



2. 中原8号墳第1主体部内検出状況（北から）

3. 中原8号墳第1主体部枕石検出状況（南から）

1. 中原8号墳第2主体部内検出状況（南から）

2. 中原8号墳第2主体部内検出状況（東から）

3. 中原8号墳第2主体部内検出状況（西から）

図版94

1. 中原8号墳第2主体部西側枕石検出状況（東から）

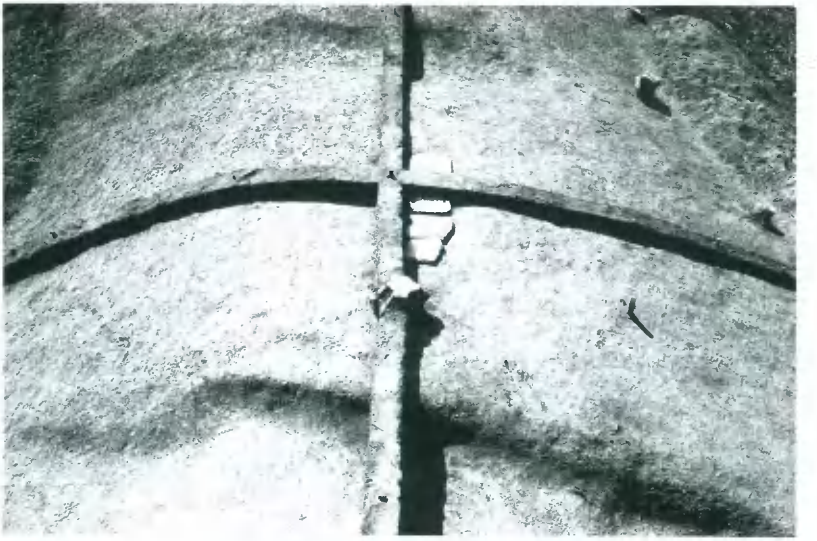
2. 中原8号墳第2主体部東側枕石検出状況（西から）

1. 中原9号墳主体部内検出状況（北から）

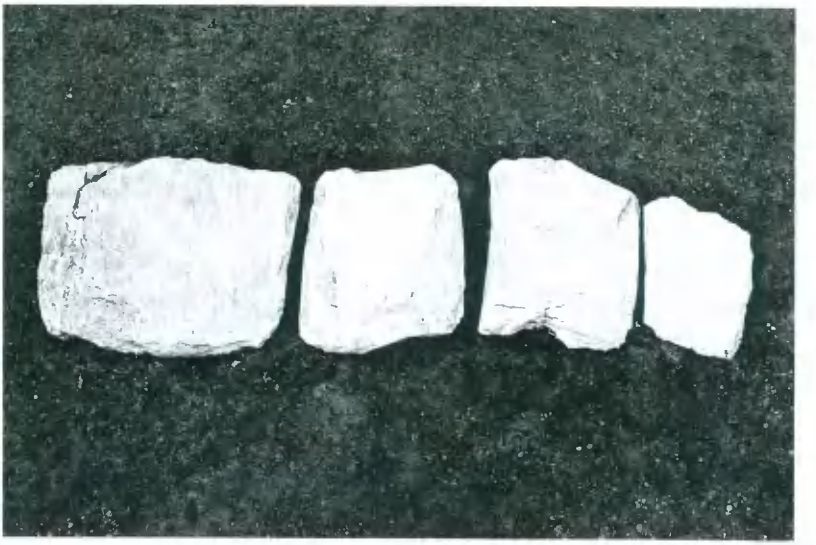
2. 中原9号墳主体部内検出状況（南から）

3. 中原9号墳主体部内遺物出土状況（西から）

図版96



1. 中原10号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）



2. 中原10号墳主体部天井石検出状況（北東から）

1. 中原10号墳主体部内検出状況（北東から）

2. 中原10号墳主体部内検出状況（北西から）

3. 中原10号墳主体部内検出状況（南東から）

図版98

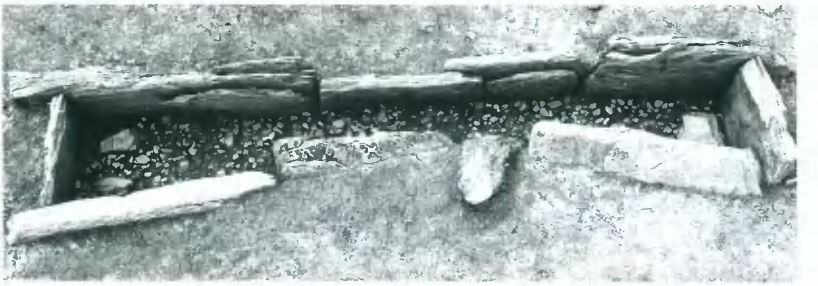
1. 中原10号墳主体部南東側枕石検出状況（北西から）

2. 中原10号墳主体部北西側枕石検出状況（南東から）

1. 中原11・12・13号墳の墳丘と主体部検出状況（北東から）

2. 中原11号墳主体部天井石検出状況（北から）

図版100



1. 中原11号墳主体部内検出状況（北から）

2. 中原11号墳主体部内検出状況（東から）

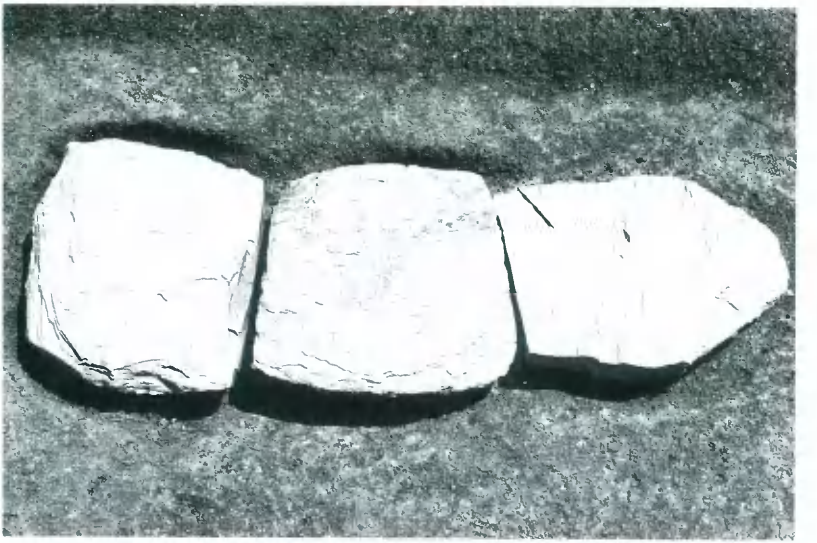
3. 中原11号墳主体部内検出状況（西から）

1. 中原11号墳主体部東側枕石検出状況（西から）

2. 中原11号墳主体部西側枕石検出状況（東から）

図版102

1. 中原12号墳の墳丘と主体部検出状況（西から）



2. 中原12号墳主体部天井石検出状況（北から）

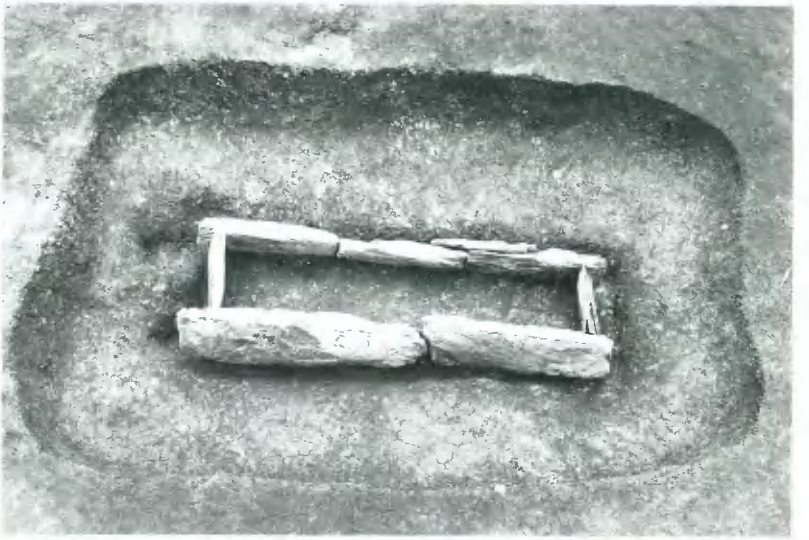
1. 中原12号墳主体部内検出状況（北から）

2. 中原12号墳主体部内人骨検出状況（南から）

図版104

1. 中原12号墳主体部内人骨検出状況（西から）

2. 中原12号墳主体部内人骨検出状況（東から）

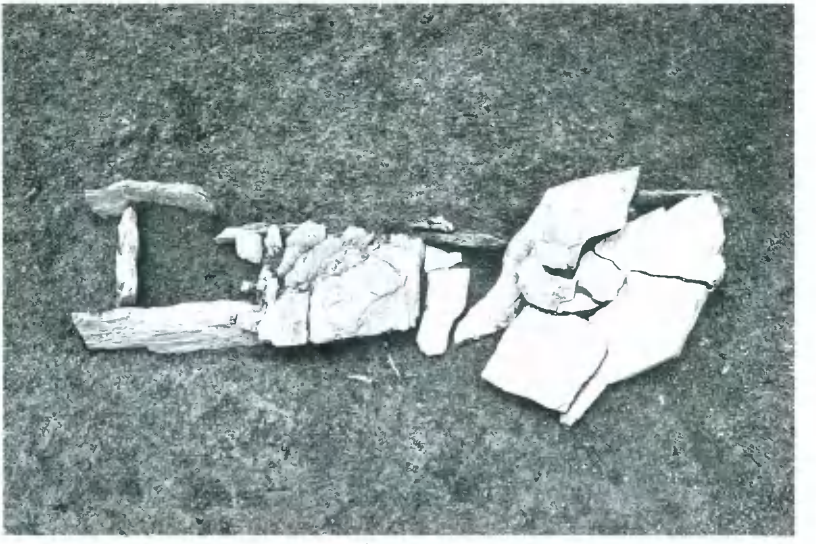


1. 中原12号墳主体部調査後全景（北から）

2. 中原12号墳主体部掘り方検出状況（北から）

図版106

1. 中原13号墳の墳丘と主体部検出状況（西から）



2. 中原13号墳主体部天井石検出状況（東から）

1. 中原13号墳主体部内検出状況（東から）

2. 中原13号墳主体部枕石検出状況（北から）

図版108

中原2～9号墳出土遺物

中原4～13号墳出土遺物

図版110

1. 中原15・31・32・33号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）

2. 中原31号墳主体部内検出状況（北西から）

3. 中原31号墳主体部内検出状況（南東から）

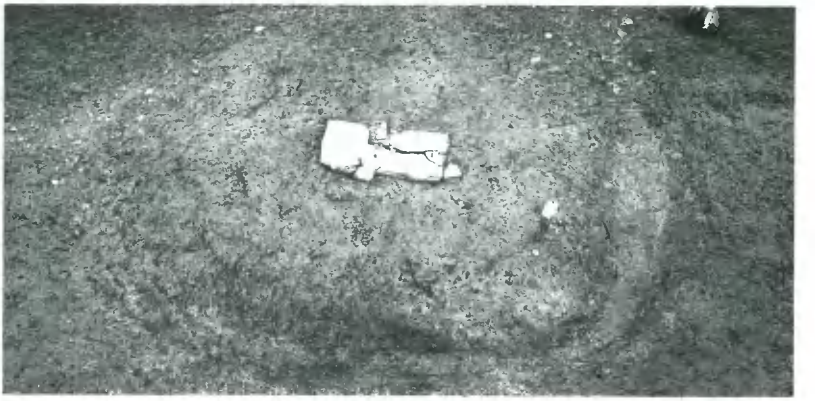
1. 中原33号墳主体部・周溝検出状況（北東から）

2. 中原33号墳天井石除去後内部検出状況（北東から）

図版112

1. 中原33号墳主体部内遺物出土状況（南東から）

2. 中原33号墳主体部南東側小口部分石組状況（北西から）



1. 中原16号墳の墳丘と主体部検出状況（南から）

2. 中原16号墳主体部天井石検出状況（南から）

3. 中原16号墳主体部内検出状況（南から）

図版114

1. 中原16号墳主体部枕石検出状況（西から）

2. 中原16号墳主体部調査後全景（南から）

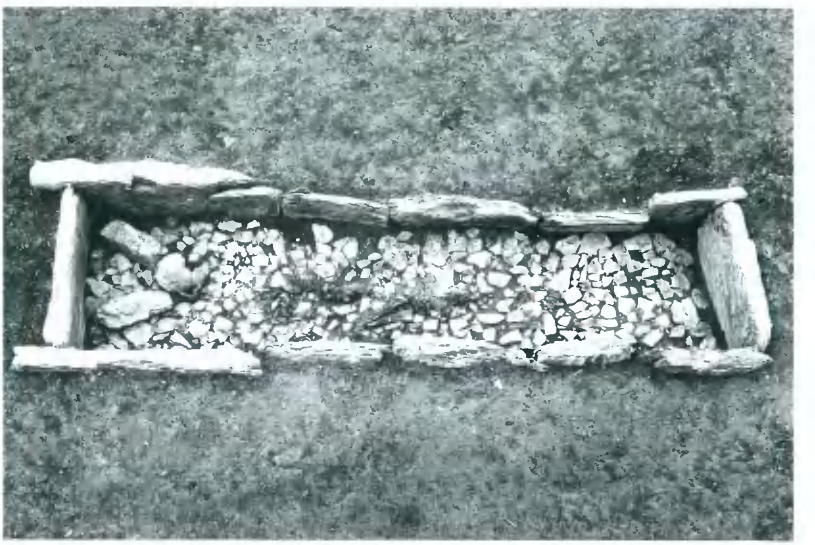
図版115

1. 中原15号墳調査前墳丘全景（東から）

2. 中原15号墳の墳丘と主体部検出状況（南から）

図版116

1. 中原15号墳主体部天井石検出状況（北東から）



2. 中原15号墳主体部内検出状況（北東から）

1. 中原15号墳主体部内人骨検出状況（北東から）

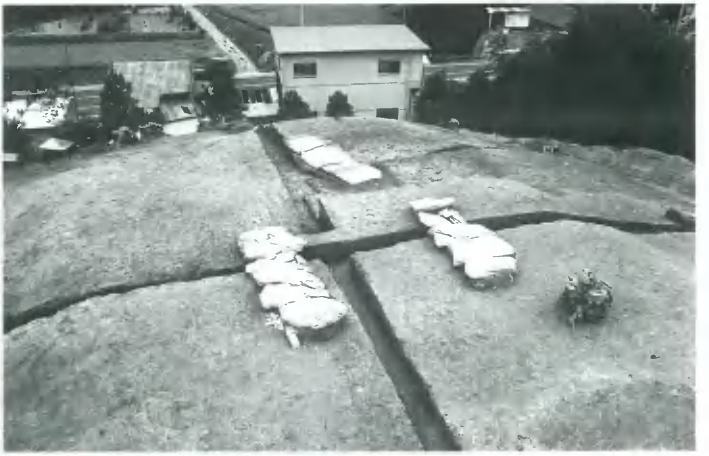
2. 中原15号墳主体部内人骨検出状況（北西から）

図版118

1. 中原23・24号墳全景（東から）

2. 中原23号墳全景（南東から）

図版119



1. 中原23号墳第1～3主体部検出状況（南から）

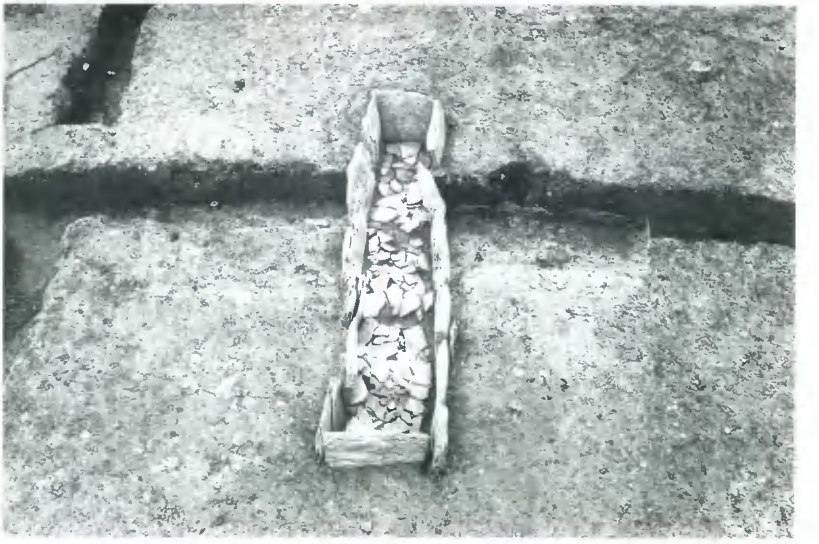
2. 中原23号墳第1～3主体部内検出状況（北から）

図版120

1. 中原23号墳第1主体部内検出状況（北から）

2. 中原23号墳第1主体部内遺物出土状況（北から）

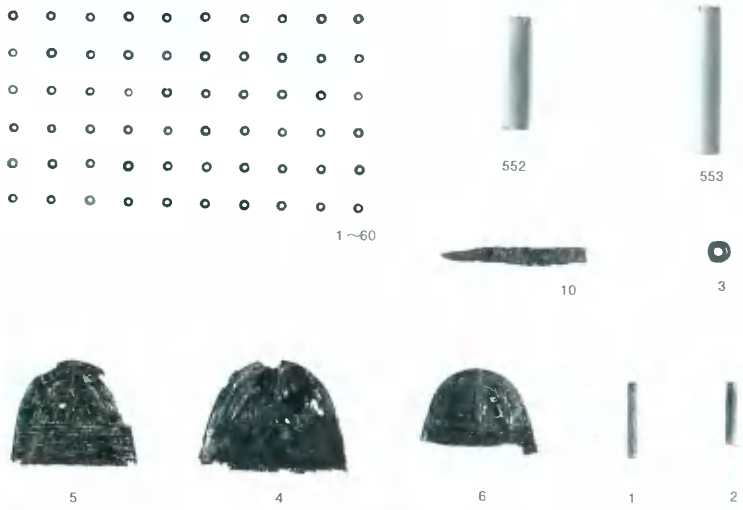
1. 中原23号墳第2主体部天井石検出状況（南から）



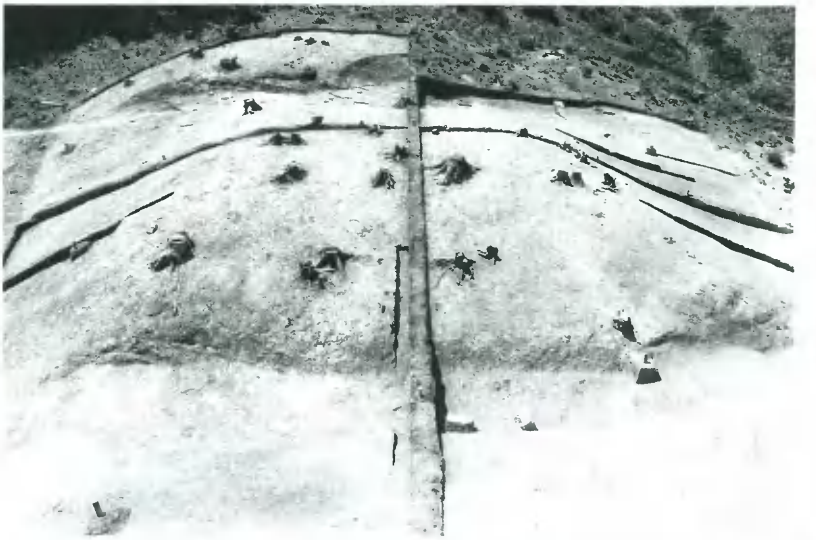
2. 中原23号墳第2主体部内検出状況（南から）

図版122

1. 中原23号墳第3主体部内検出状況（東から）



2. 中原23号墳第1・3主体部出土遺物

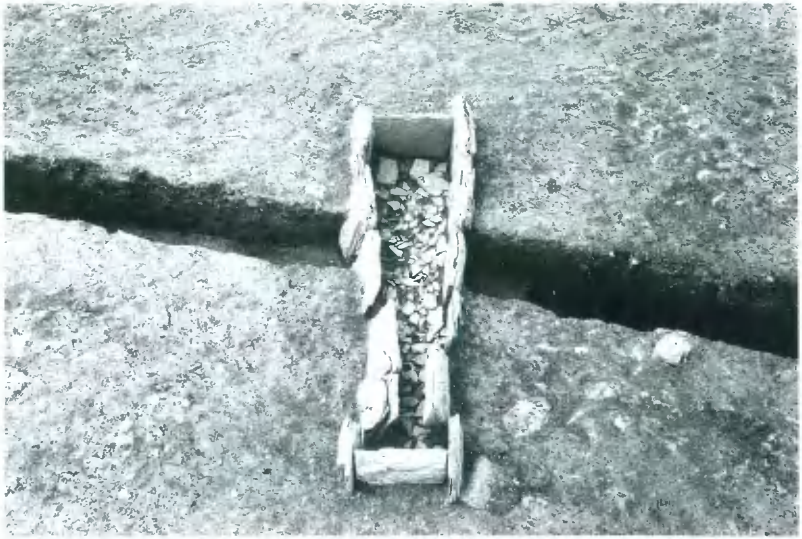


1. 中原24号墳全景（北から）

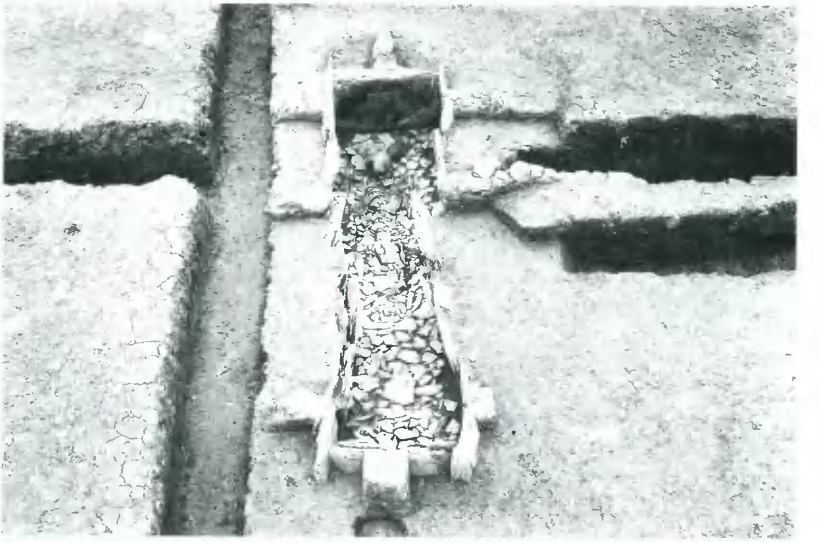
2. 中原23・24号墳間周溝土層断面（東から）

図版124

1. 中原24号墳第1・2主体部検出状況（南東から）



2. 中原24号墳第2主体部内検出状況（北西から）



1. 中原24号墳第1主体部内人骨・遺物検出状況（南から）

2. 中原24号墳第1主体部内人骨・遺物検出状況（南から）

図版126

36 32

30

33

31

10

11

4

12

16

13

8

17

21

26

25

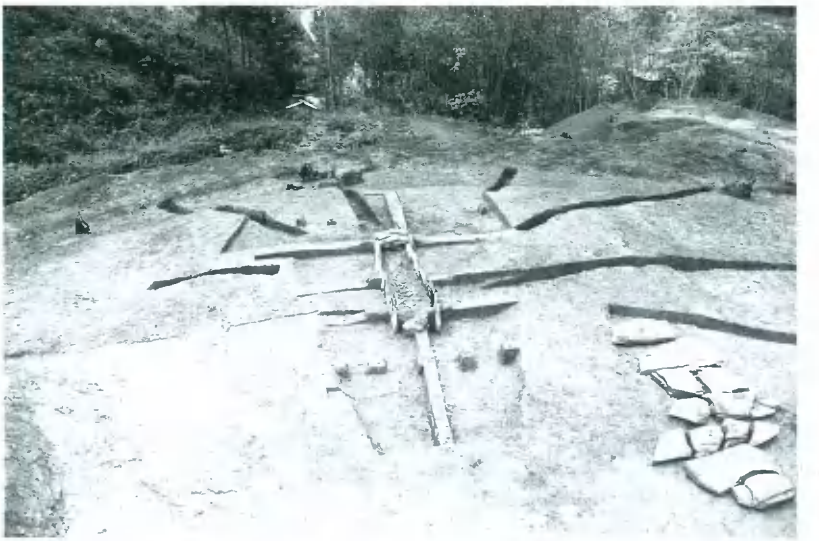
1. 中原24号墳出土遺物

1. 中原27号墳全景（南から）

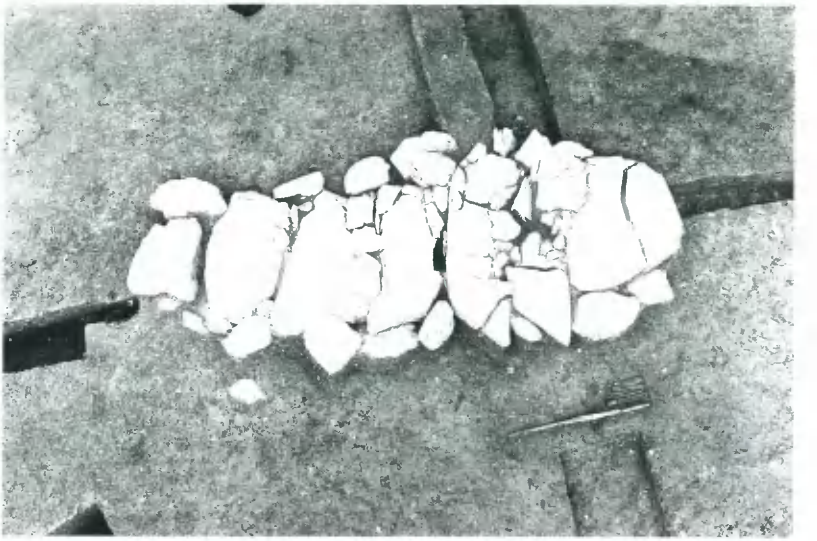
2. 中原27号墳主体部検出状況（南から）

図版128

1. 中原28号墳全景（東から）



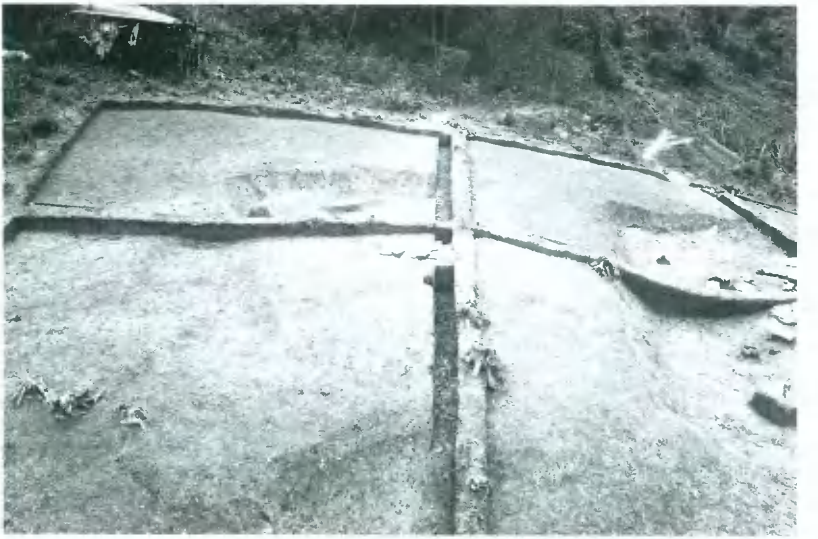
2. 中原28号墳の墳丘と主体部内検出状況（東から）



1. 中原28号墳主体部天井石・遺物検出状況（南から）

2. 中原28号墳出土遺物

図版130

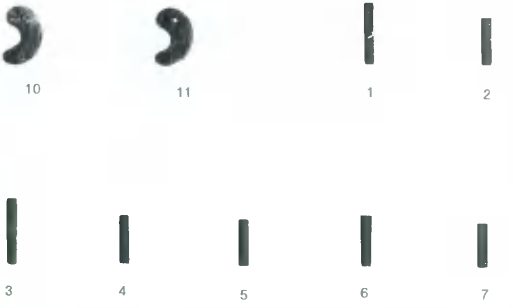


1. 中原29号墳全景（北から）

2. 中原29号墳主体部天井石検出状況（南東から）

1. 中原29号墳主体部内検出状況（西から）

2. 中原29号墳主体部内遺物出土状況（西から）



3. 中原29号墳出土遺物

図版132

1. 中原25号墳調査前全景（西から）

2. 中原25・26号墳全景（西から）

1. 中原25号墳全景（南東から）

2. 中原25号墳南北墳丘土層断面（西から）

図版134

1. 中原25号墳石室天井石検出状況（北から）

2. 中原25号墳石室内奥壁（西から）

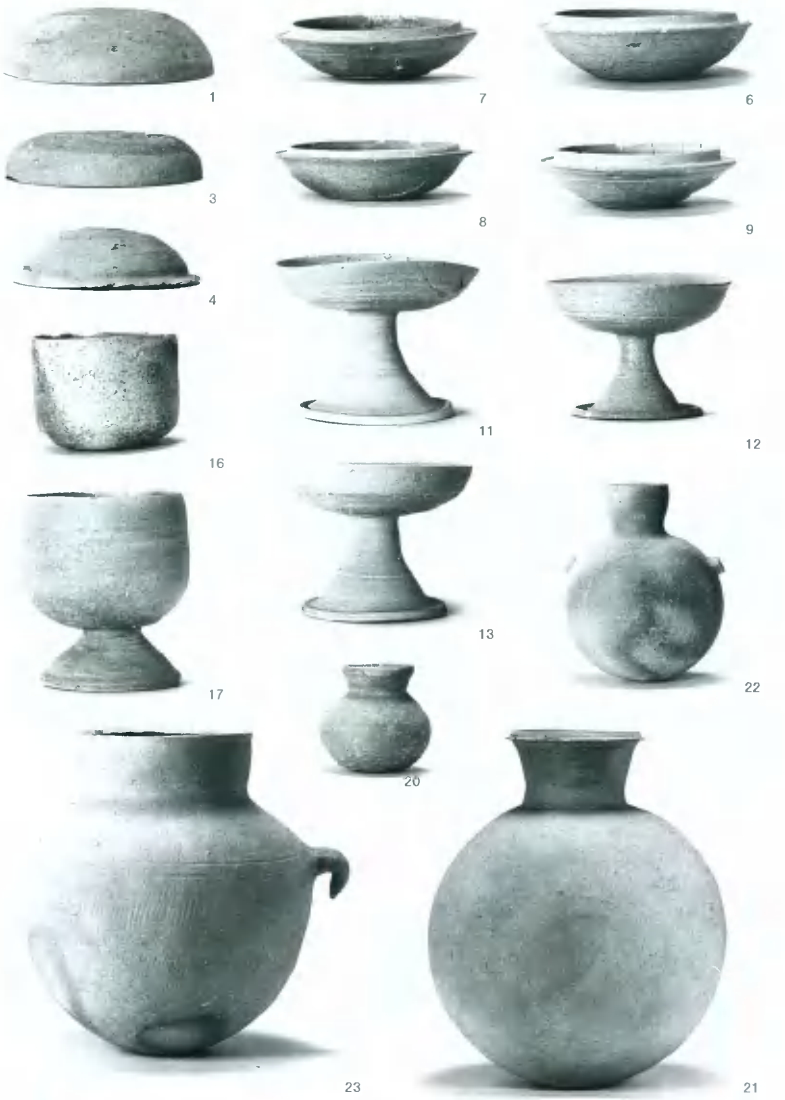
図版135

1.
中原25号墳
南側周溝土層断面
（西から）

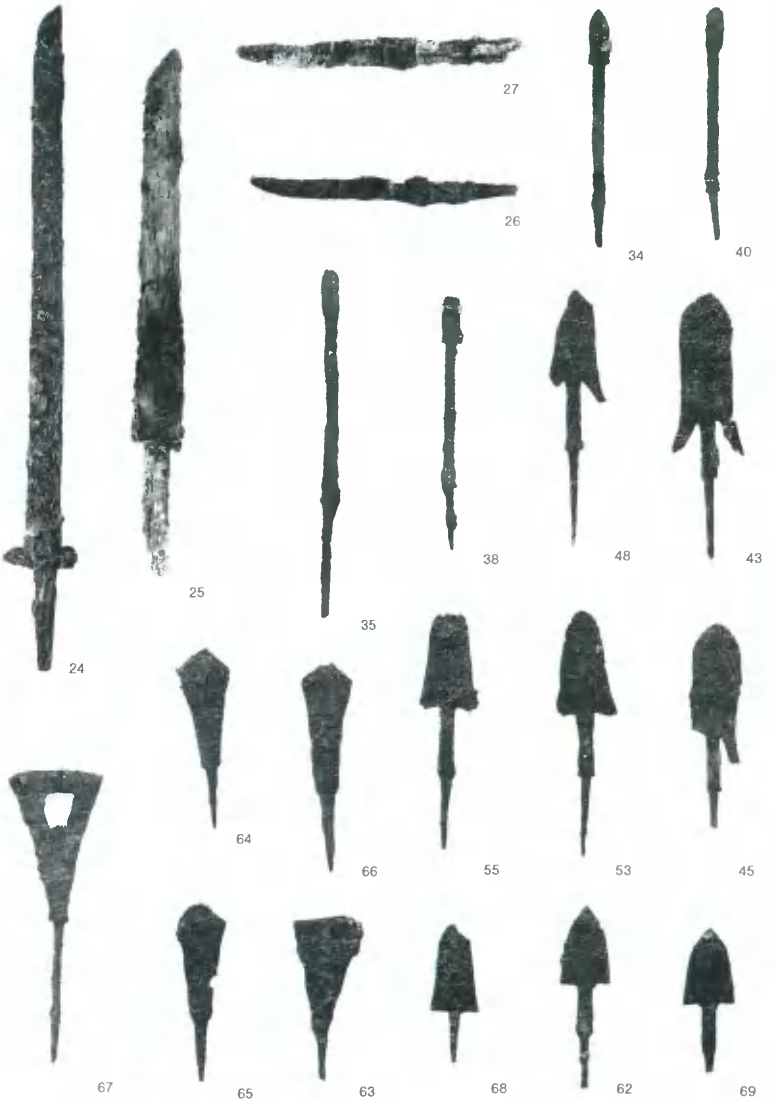
2.
中原25号墳石室内
遺物出土状況（1）
（北から）

3.
中原25号墳石室内
遺物出土状況（2）
（北から）

図版136



1．中原25号墳出土遺物（1）



1. 中原25号墳出土遺物（2）

図版138

1. 中原26号墳全景（南東から）

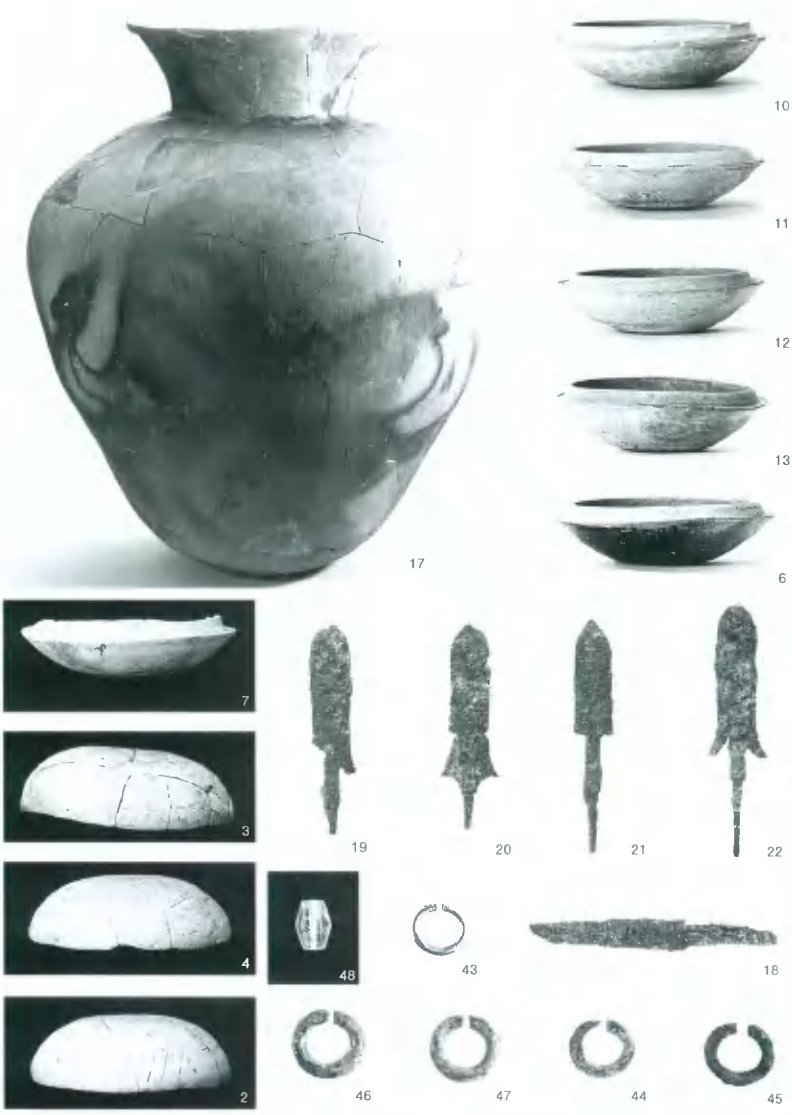
2. 中原26号墳全景（西から）

図版139

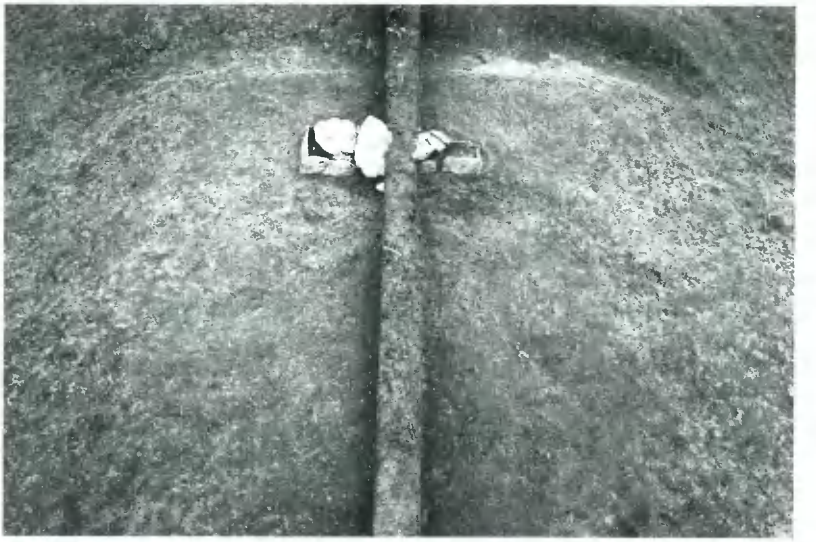
1. 中原26号墳土器床検出状況（西から）

2. 中原26号墳礫床検出状況（西から）

図版140



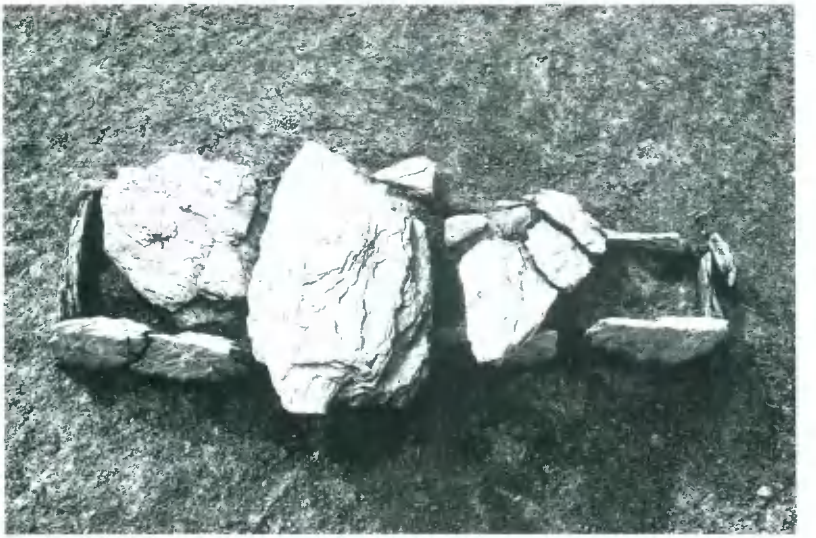
1. 中原26号墳出土遺物



1. 中原34号墳の墳丘と主体部検出状況（北東から）

2. 中原34号墳周溝内遺物出土状況（北東から）

図版142



1. 中原34号墳主体部天井石検出状況（北東から）

2. 中原34号墳主体部内検出状況（北東から）

1. 中原35号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）

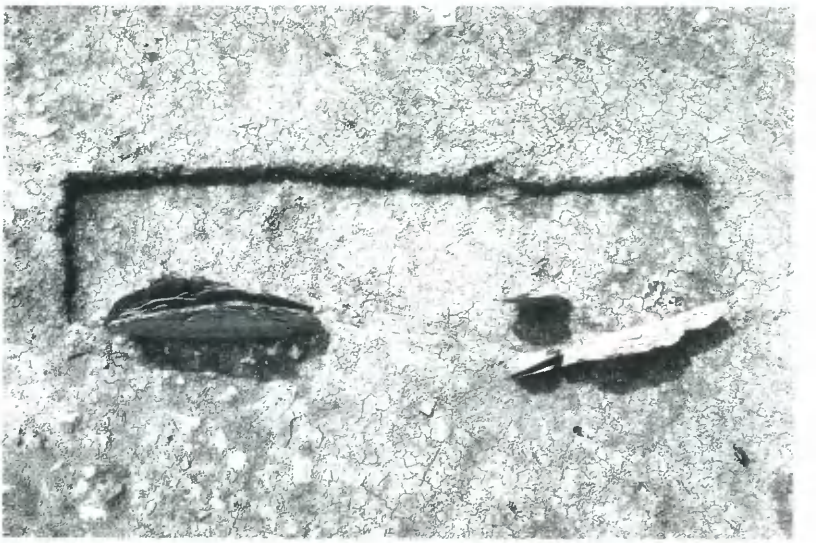
2. 中原35号墳主体部残存状況（北から）

3. 中原35号墳墳端部分遺物出土状況（南から）

図版144

1. 中原17号墳墳丘・葺石・第3主体部検出状況（南から）

2. 中原17号墳第1主体部・第2主体部検出状況（北東から）



1. 中原17号墳第1主体部残存状況（南東から）

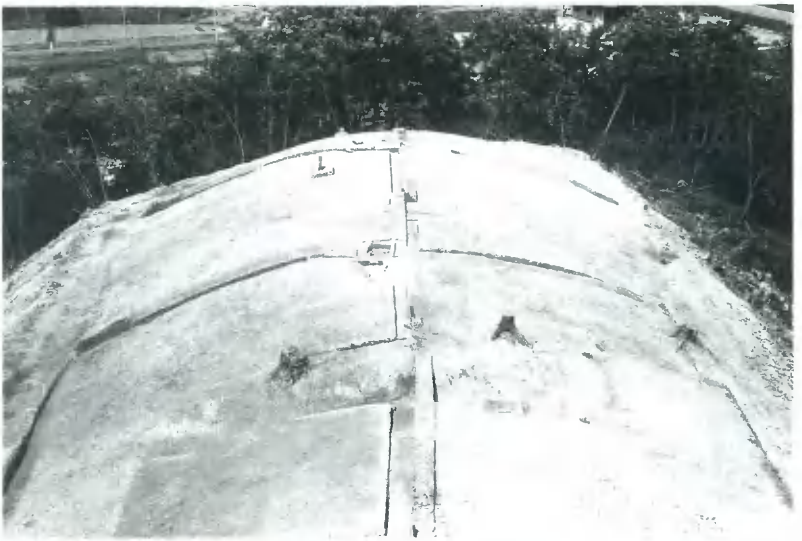
2. 中原17号墳第2主体部残存状況（南東から）

図版146

1. 中原17号墳第3主体部天井石検出状況（南西から）

2. 中原17号墳第3主体部内検出状況（南西から）

3. 中原17号墳第4主体部検出状況（南西から）



1. 中原19・20号墳全景（北東から）

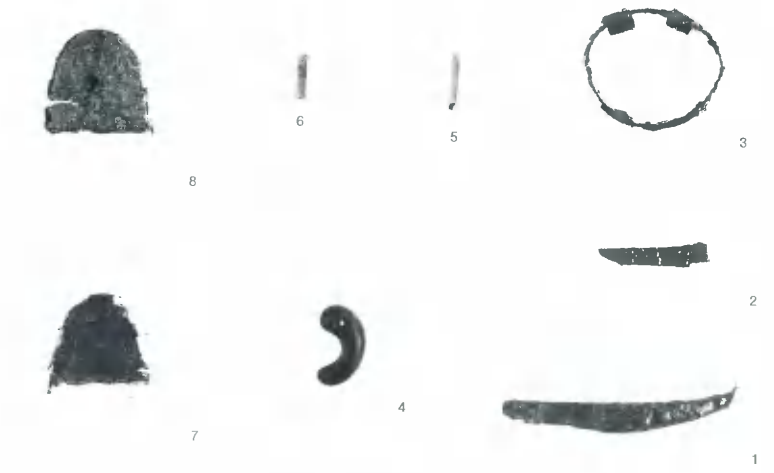
2. 中原19号墳第1主体部内検出状況（南西から）

図版148

1. 中原19号墳第2主体部検出状況（南東から）

2. 中原19号墳第2主体部内遺物出土状況（北東から）

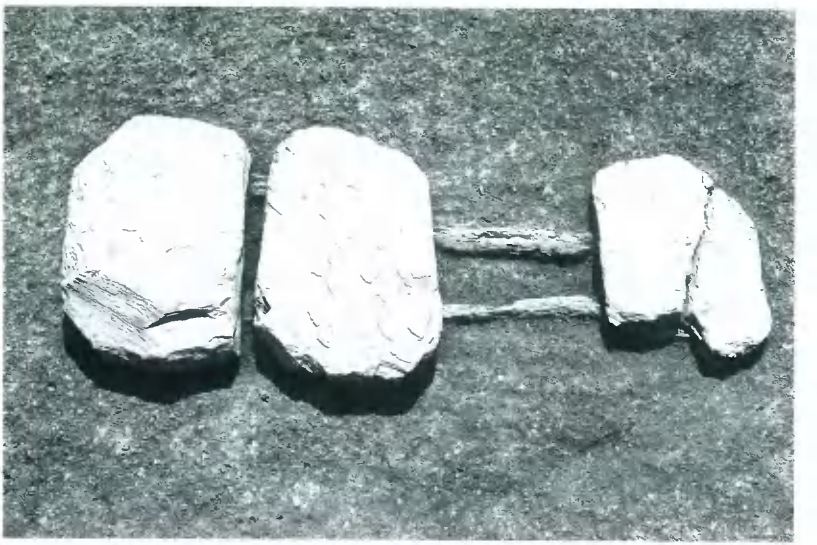
1. 中原20号墳主体部検出状況（東から）



2. 中原19号墳第2主体部出土遺物

図版150

1. 中原21号墳の墳丘と主体部検出状況（北から）



2. 中原21号墳主体部天井石検出状況（東から）

1. 中原21号墳主体部内検出状況（東から）

2. 中原21号墳主体部枕石検出状況（北から）

図版152

1. 中原21号墳主体部調査後全景（東から）

2. 中原21号墳主体部掘り方検出状況（東から）

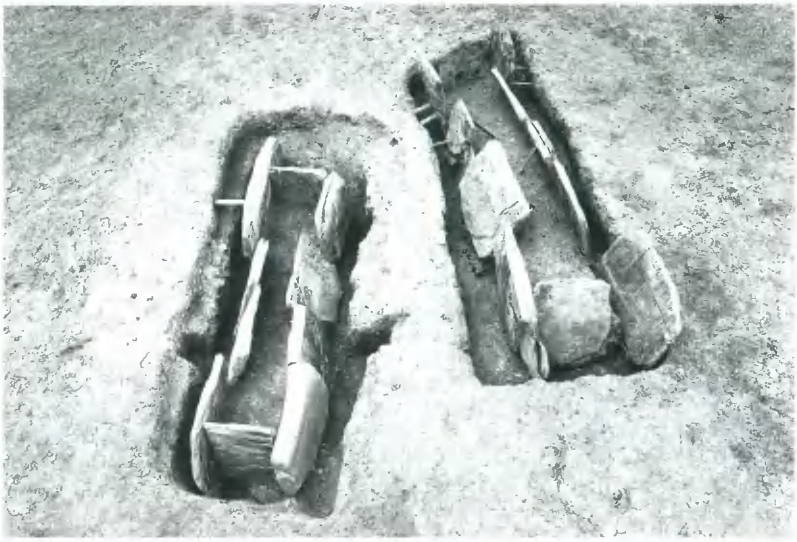
1. 中原22号墳墳丘・主体部・葺石検出状況（西から）

2. 中原22号墳葺石検出状況（北から）

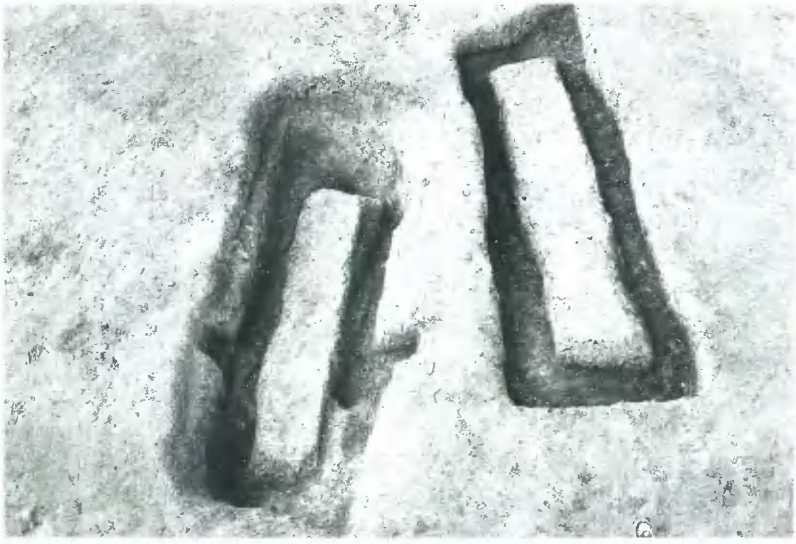
図版154

1. 中原22号墳主体部検出状況（南東から）

2. 中原22号墳主体部内検出状況（南東から）



1. 中原22号墳主体部調査後全景（南東から）



2. 中原22号墳主体部掘り方検出状況（南東から）

図版156

1. 中原22号墳第1主体部内検出状況（北東から）

2. 中原22号墳第1主体部内遺物出土状況（南東から）

3. 中原22号墳第1主体部枕石検出状況（北西から）

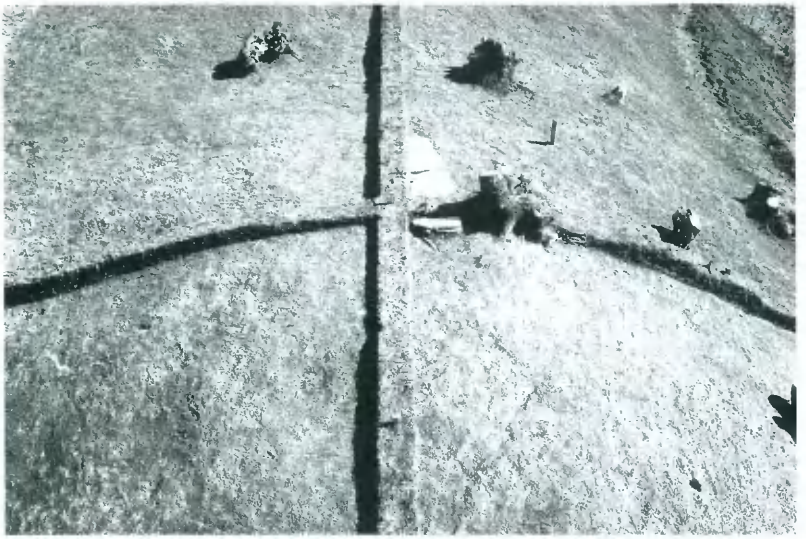
図版157

1. 中原22号墳第2主体部内検出状況（北西から）

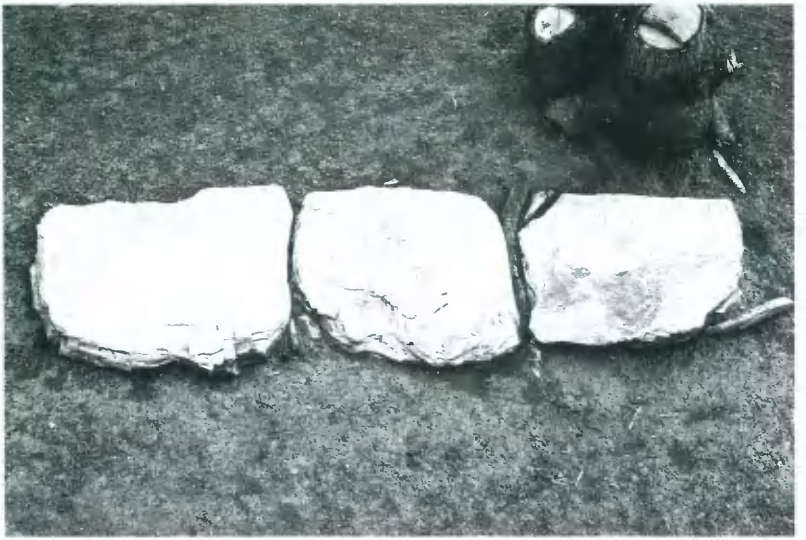
2. 中原22号墳第2主体部南東側枕石検出状況（北西から）

3. 中原22号墳第2主体部北西側枕石検出状況（南東から）

図版158



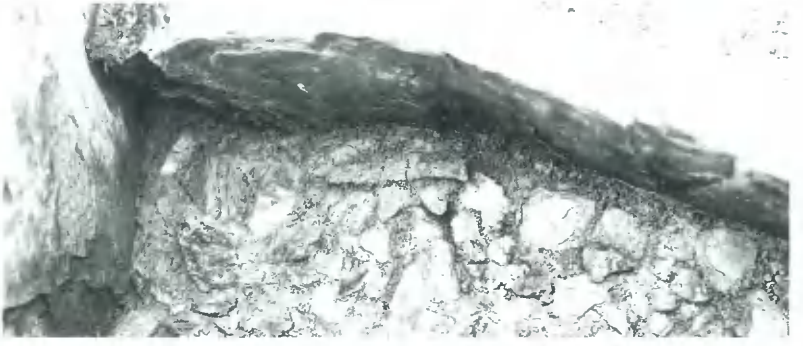
1. 中原36号墳の墳丘と主体部検出状況（北西から）



2. 中原36号墳主体部天井石検出状況（北東から）

1. 中原36号墳主体部内遺物出土状況 (1)（北東から）

2. 中原36号墳主体部内遺物出土状況 (2)（南西から）



3. 中原36号墳主体部内遺物出土状況 (3)（南西から）

図版160

1. 中原36号墳主体部内検出状況（北東から）

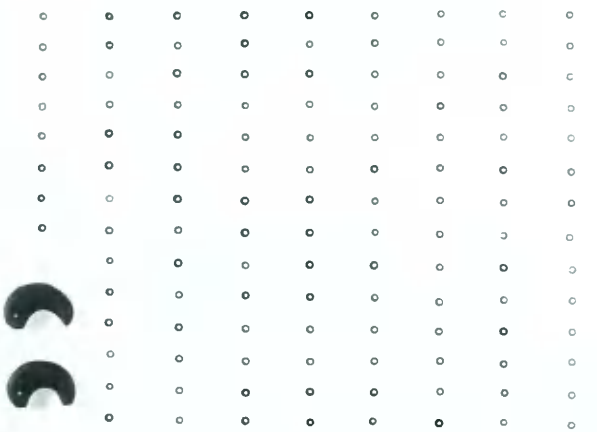
2. 中原36号墳主体部枕石検出状況（北西から）

3. 中原36号墳主体部掘り方検出状況（北東から）

1. 中原37号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）

2. 中原37号墳主体部内検出状況（南西から）

図版162



1. 中原37号墳出土遺物

2. 中原11号墳出土遺物

3. 中原22号墳第1主体部出土遺物

1. 中原38号墳墳丘検出状況（南東から）

2. 中原39号墳の墳丘と主体部検出状況（南東から）

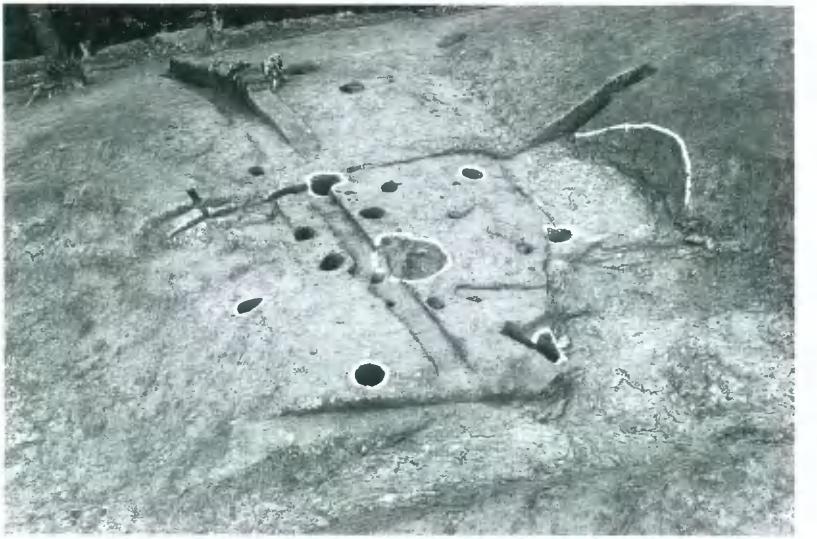
図版164

1. 中原39号墳主体部内検出状況（南西から）

2. 中原39号墳主体部内遺物出土状況（南東から）

中原31～39号墳出土遺物

図版166



1. 中原27号墳墳丘下竪穴住居検出状況（南から）

2. 中原24号墳墳丘下段状遺構1検出状況（南から）

1. 中原42号墓検出状況（北から）

2. 中原44号墓集石検出状況（南西から）

図版168

1. 中原34号墳出土遺物

1

2

2. 中原33号墳出土遺物

3. 中原41号墓出土遺物

4. 中原44号墓出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　93
中国横断自動車道建設に伴う発掘調査
2
（付編・図版）

１９９５年３月20日 印 刷
１９９５年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　日本道路公団広島建設局津山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印刷　岡山県農協印刷株式会社